魔法少女リリカルなのは　～とある兄妹の転生物語～

リィーン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
魔法少女リリカルなのは　～とある兄妹の転生物語～

【Ｎコード】
Ｎ６３８１Ｌ

【作者名】
リィーン

【あらすじ】
――――そして、とある兄妹の新たな人生が、始まった……
……――――――
ある日、交通事故で死んでしまった二人の兄妹。死後の世界（？）で神様に出会い、チート能力をもらってリリなの世界に転☆生！！　ゲームが趣味（だが卒業した）の真人間な兄と、アニゲーマンガオタクで変態で厨二病で腐女子の妹が織りなす、原作介入アンドブレイク物語である！！　※注意※　この小説には、“オリ主”“転生”“チート”“原作介入”“原作ブレイク”“残酷描写”。そして“百合描写”と“性転換”が含まれております。

それらが苦手、または毛嫌いしている方は見ない事を推奨します。
より良い作品になるよう頑張りますので、どうかよろしくお願いします　――――――さぁ、物語を描こうか……――――――

#0　プロローグ（前書き）

はじめましての方は、初めまして
お久しぶりの方は、長らくお待たせいたしました、リィーンです
調子に乗って新作予告して、其れをようやく実現する事ができました。たびたび、掲載日を変更してしまって、大変もうしわけございませんでした
いよいよ、本編の開始です。初めてのことなので、皆様方には、どうか温かい目で見て下さることを切に願います……

#0　プロローグ

……西暦２０１０年４月４日。この日、ある二人の兄妹が、死亡した……

原因は転落死。しかも、崖からのだった……

□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■

「――――ッ、うん……？」

ある一人のよれよれの黒いスーツ姿の男性――――見た目は２２歳ぐらいで、身長は１８７センチはある体をして、丸刈りの頭に、不細工な顔、手足は細長く、ガリガリにやせ細った……例えて言うなら、骨と皮だけの体をした青年――――が目を覚まし、自分がいる場所を見た。そこは美しい青空が広がる、荒野だった……周りには、人の形をした黒い物体が、鎖にグルグル巻きにされて地面に置かれており、それがこの無限に続くと思われる荒野に、無数に散らばっていた……

「（どこ？　ここ……？）」

青年は、自分が何故こんな場所にいるのかが分らなかった……が、直ぐに思い出した

「あぁ……たしか、車で山道を走ってて、そんで対向者のトラックが急に車線からずれてこっちの道に乗り出して、そんで思わずハンドル切ったら……」

崖から、落ちたのであった……

「……なんだ、俺死んだのか……ってことは、ここはあの世、か……」

えらく冷静にいられる自分に呆れ、そして死後の世界にいる自分に驚いていた。しかし、その表情は暗く、落ち込んでいた

ふと、視線を下の方に落とすと……

「――――」

一人の小学校用のセーラー服を着た女子――――――見た目は１０歳ぐらいで、身長は１４３センチ。普通に可愛い顔立ちだが、手足はやせ細っている……近くにいる青年と同じ、骨と皮だけのような体をした少女――――――が倒れている。意識がなく、気絶しているようだ……

「（……こいつも、死んだのか……はぁ、兄妹そろって死んだとはな。よりにもよって、こんな妹なんかと……）」

などと、そう思っている時

「哀れだな、青年よ」

後ろから、声が聞こえた。そして、声がした後ろに振り返ってみると……

「いきなり出てきた対向車を避けたら、運悪く道を外れ、あわや転落死。いやいや、可哀想だ。あぁーあ、カワイソウカワイソウｗ」

ニヒルな笑みを浮かべた男――――――見た目は２５歳ぐらいで、黒いＴシャツに黒いジーンズ、そして黒い茨のようなラインが入った白いコートを着ており、痩せてはいるが、体の肉付きは良く（言わば痩せマッチョ）、手足は彼同様長い。赤いボサボサの髪に、顔はイケメンと呼ばれるくらい華奢な青年――――――が、岩の上に座っていた……

彼は、何時の間にかいた青年の事に驚いた。だが、彼はそんな事よりも、彼の周りの事に

驚愕した……

男が座っている岩に、九人の女性――――――全員、美人美女美少女

と呼ばれるくらいに美しく、スタイルも抜群、おまけに可愛らしい顔をしており、大人な女性から、１０歳ぐらいの少女まで、より取り見取りな女性達――――――が、その男にすがりつくように横たわっていた。だが、驚く事はソコじゃない。彼女達は皆、黒い布切れで大切な部分を隠しているだけで、それ以外はほぼ裸。そして周りの黒い物体同様、鎖でグルグル巻きに縛られており、彼女達の綺麗な肌に傷を付けていた……まるで魔王に捕らわれた姫君達と言った所だが、彼女達のその喜悦の表情からどうもそういう事ではないようだが

「（悪趣味だな……）」

「そう思わないでくれ。彼女達は皆、望んでこの姿をしているのだからな。クックックッ」

「！！？」

ニヒルな笑みを崩さず、男は彼の思考を読んだ

「おいおい、そんなに驚かないでくれよ。“神様”なんだから、相手の思考を読むことぐらい、ただの挨拶と同じくらい簡単なんだから」

彼は、男の言葉の中の単語に、耳を疑った

「……“神様”？」

「あぁ、そうさ。俺は神様。んで、こいつ等は女神にして、全員俺の妻だ」

彼の、私は神だ宣言にわずかでも驚いたが、一夫九妻宣言の方が驚いた

「まぁ、それはさておき……いやいや、君たちは本当に可哀想だ。若くして命を落とすとは、実に可哀想。あぁ、親御さんや親族の方々、そして君達の友人や知人に、深く同情するよ。クックックッ」

「（全然同情している風には見えんな……）」

だが、彼の言葉で、自分は死んだのだと確信した。しかし、彼はそれでも普通でいた

「なんだ？　悲しくないのか？　あまりの事に思考が着いていけなく、茫然としているのか？」

「別に。俺は死んだ。ただそれだけだろ？」

「えらく冷静、いや、これは無関心と言った方がいいか」

クックックッと、未だにニヒルな笑みを浮かべて、男は彼を見据えていた

「（なんか、ムカつくな……）あんた、ホントに神様か？」

男の態度に、彼は疑問をぶつけた。その時

「――――う～ん……はれ？　ここどこ？」

彼の後ろから、間延びした少女の声が聞こえた。それが面白かったのか、男とその周りの女性達は、クスクスと笑っていた

「……あれ？　お兄ちゃん？」

「……なんだ、クソ妹」

彼は彼女に、冷たい態度を取った。しかし、彼女はそれを気にすることなく言葉を続けた

「ここ、どこ？　それと、なんで“ネギま！”の“ナギ・スプリングフィールド”と、“エア・ギア”の“ベンケイ”、“真・恋姫？無双”の“孫策”、“周瑜”、“馬超”。そして、“ＳＨＵＦＦＬＥ！”の“時雨亜紗”先輩に“メル・ヘブン”の“スノウ”、“天空のユミナ”の“黒河雲母”に“神楽那由他”、“ＵＭＡ大戦ククルとナギ”の“ヤーヤ・トーカーズ”がいるの？　しかも、際どい恰好で」

コイツ何言ってんの？　的な表情で、彼は妹を侮蔑の視線で見たが、その言葉に応えたのは、神様と名乗った男だった

「ハッハッハッハッハッ！！　確かに、俺達はその物語のそのキャラだが、同一人物ではない。ただそっくりなだけさ。それに、際どい恰好をしているのは、仕様だｗ」

笑いながら言ったが、仕様って何だ？　それにんな事言わんでもいいだろう

「そーなのかー」

納得すんな

「そーなのだー」

返すな！　このクソ神！

「まぁ、お兄さんが今にもキレそうだから、少し、お話しようか」

「Ｏ☆ＨＡ☆ＮＡ☆ＳＩじゃなくて？」

「なんでローマ字に、星マークが付いてるんだ？」

「そっちのお話じゃなくて、普通のお話だよ」

意味分ってんのか？　この神様

そして、このクソ妹に、“君は死んだんだよ”的な話をすると、コイツは泣き叫んだ

「うぇーん！！！　せっかく“キングダムハーツｂｂｓ”のアルティマニア買ったのにぃ！！　ッて言うか、“．ｈａｃｋ／Ｌｉｎｋ”も全然クリアしてないし！！　“ＧＯＤ　ＥＡＴＥＲ　－救世主の帰還－”も、“おおかみかくし　滅紫の章”も今日買おうと思ってたのに！！　っていうか、春からの“Ａｎｇｅｌ　Ｂｅａｔｓ！”に“会長はメイド様”とかｅｔｃ！！　楽しみにしてたのに～～～ッ！！！！！　ｏｒｚ！！！　こんなの認めない！！　異議有り！！！　私は悪くない！！　悪くないんだぁぁぁーーーッ！！！！」

テメェはんな事しか頭にないんかい！！！　つか、アニメやゲーム、それにマンガばっかだな！！

はぁ、こんな妹を持った事に呆れ、そんでこんな妹と一緒に死んだ事に驚くわ

「“匂坂節”だね！　さすがお兄ちゃん！　下手だね～ｗ」

心を読むな、バカ妹。つか、“匂坂節”ってなんだ？　つーか、下手とか言うな！！

「まぁ、そう悲しむな。そんな哀れな兄妹に、俺が救いの手を差し

出してあげるのだからな」

は？　それってどういう事だ？

「君達の元の肉体は、そりゃもうエグイ事になっちゃってるから、蘇生したくてもできない。ってか、蘇生なんてしたくない。だから、君達には異世界に転生して、第二の人生をリスタートさせてあげるよ。言っておくけど、今の年齢のままでね」

と、男が話した途端……

「それって……まさか！！　ＳＳ（サイドストーリー）とか、ＦＦ（ファンフィクション）とか！　転生した先がアニメや漫画の世界で、そこで原作介入！　みたいな事が出来ちゃうあれですか～！！？」

「そうそう。まさにそれだよ！」

「やったぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁッ！！！！　お願いします！！」

「フザケンナァァァァァァァァァァッ！！！！！」

このクソ妹は何を言ってんだ！！　んな現実離れした話に乗んな！！！

「まぁまぁ押さえたまえ。何、地獄や天国に逝くよりかはマシだろう？」

「そのままそっちに行った方がよっぽどマシだ！！！」

彼は怒りを込めて言ったが、男は聞く耳持たずと言った表情をした。

そこへ、この妹が訪ねた

「あの～、もしかしてもしかしたらですよ？　こういうのにある“ステータスＭａｘ”とか、“チートな能力上げちゃうよ”的なモノ

もあるんですか？」

は？　ステータスＭａｘ？　特殊能力？

「もちろんだとも。ちなみに、制限は付けないけど、一人に付き八個までねｗ」

「えぇ～、ケチ（－３－メ）」

いらん！！　そんなのいらねぇから！！！　頼むから普通に地獄に連れて逝ってくれ！！！！　つか、その顔文字はなんだ！！？

「まぁまぁ、そう嘆くな。これでも上げ過ぎだと思うのだぞ。で、どうする？」

「えっと～……紙とペンありますか？」

「あるよ。おい、紙とペンを」

そう言って、彼にすがりついていた女性の一人（“真・恋姫？無双”の“周瑜”）が、妹に渡し……

おい、真剣に悩むな……

「う～～～～～～～～～ん……やっぱ、ステータスＭａｘ系はいるよね。あと、コレとアレとソレと……」

「……なぁ、クソ神」

「なんだい？」

「転生コイツだけにして、俺だけ地獄はダメなのか？」

「無理だな。既に転生の準備は完了しているし、君達の魂も、それに適応させてしまったし、送りたくても出来ないし……後は彼女が能力を考えて其れを追加してやるだけだ。諦めたまえ」

「はぁ……」

盛大な溜息をついて、この神さんを睨んだ

「つか、なんで俺達を転生させるんだ。ソレをして、アンタになんの得がある」

そう、今疑問に思っている事を、この神に告げた

「いや、ただの気まぐれさ」

「は？」

「神と言うのは傲慢で自分勝手なのさ。だから、ただの気まぐれで人を生かしたり、殺したりもする。君達が実際に思っている神と、本物の神とは違うのだよ」

絶句した。確かに、コイツのこの格好を見て、「この人神様です」なんて、言っても誰も信用しないだろう。実際にあの妹だって……

…ってか、まだうんうん唸ってなんか考えているし……アイツだって、コイツが神様って知った時は、そうは見えないって言ってたし……つか、ただの気まぐれで人を助けるとか、どうかしている

「そういうものさ。神なんて生き物は、な……っていうより、神様をコイツ呼ばわりにするとは、なかなか図太い根性してるねぇ、気に入ったよw」

「はぁ……」

また溜息をついた時

「出来た～～～～～～！！！！！！！！」

高らかな声を上げて、紙をコイツに渡し

「これ、出来ますか？」
「……」

一時の沈黙が流れた……

「ふむ……オッケイ、全部組み込んでやろう」
「ほんとですか！！？」

いったいどんな事を考えたんだ？

「色々！」

もう知らん

「じゃぁ、楽しんでいきな……せいぜい、楽しませてくれよ」
［パチンッ］

そう言った瞬間、男は指を鳴らし

「「！！！！！！！！！！！？？？？」」

俺たちの意識は、落ちて行った……

□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■

……行ったか

「良かったん？　これで」

自分に縋りつく女性の一人が訊ねてきた

「あぁ。後は、彼らがどんな物語を紡いでくれるか、だ」

さっきから続けているニヒルな笑みを崩さず、自分の愛おしき女性の質問に答えた

「にしても、面白い能力を考えるもんだ。面白すぎて、つい全てを叶えてしまったよｗ」

ハッハッハッハッ、と笑って、男は答えた

「……さて、ここからは彼らの物語だ。その読者には、楽しんでってもらいたいものだよ。まぁ、俺達もだけど、な。クックックックッ」

男の笑いに、女性達は皆妖絶な微笑を浮かべた

「さぁ、始めようか……“とある兄妹の転生物語”を」

男は、虚空を仰ぎながら、静かに言った……

#0　プロローグ（後書き）

えぇ、いかがだったでしょうか？　文才がなくてこんな駄文しか書けない自分をお許しください
感想、質問、お待ちしておりますので、今後ともどうかよろしくお願いします

では、次回にまた会いましょう。では、失礼します

#1　神の力はなんでもアリらしい……はぁ～（前書き）

第一話、更新です。どうぞ、ごゆっくりご鑑賞ください

#1　神の力はなんでもアリらしい……はぁ～

――――――そして、とある兄妹は、転生した――――――

［ドサッ！！！］

「グッ！！？　ってて……あぁ？」

彼らは、神と名乗る男に転生され、ビルの屋上のような場所に降りて……否、落ちていた

「クソ、結局転生って奴をされたのか……」

彼は周りを見渡したが、そこはどう見ても近代的な日本の街並みだった。ビルが立ち並び、道路はちゃんと整備されており、そこには車や通行者、そしてコンビニなど……平成の日本の姿だった。看板も見え、日本語圏だと分かった。日の位置や気温、道路に行き交う人の量から、朝方だと分かった

「……異世界ってんだから、どんな場所かと思ったが……割と普通だな……」

そう安堵した直後

「ヒャアアアアアアアアアアッ！！！？」

［ズドーーーーンッ！！！］

……彼の背後に、一人の女が落下してきた

「ッ～～～～～！！！！！　さっすが転生モノ。まさか落下して異世界に来るとは……（＜＿＞；）」

……誰？　と言っても、言動で把握した。コイツは、あのクソ妹だ。そうだ、そうに違いない

妹の容姿は、前世（？）と明らかに違っていた。太股位まで伸びた銀髪をストレートにし、金色と蒼色の虹彩異色の瞳をし、顔立ちはさっきいたあの女神達と変わらない位美しく整っていた。身長は変わらないが、痩せすぎでは無く、逆に無駄な部分も無く、スタイル抜群と言ってもいい。言うなら、美少女と呼ばれるだろう。ま、興味ないけど

「イタタタ（＜＿＞）……はれ？　まさか、お兄ちゃん？」

だから、その顔文字をやｍ……まて、まさか？　まさかって、まさかっつったなコイツ……まさか自分の容姿も変わってんのか！？

［キィィンッ……］

「「？」」

自分の容姿を確認しようとした瞬間、なにかの気配を感じた……つか、なんなんだ？　この感覚は。なんでこんなモンが感じるんだ？　だが、そう考える暇も無く、俺たちは変な感じがした方向を向いた……

その方角に、光の柱が立っていた。そして、それが伸びている場所

の地面に……

「人が、光の中から出てきた……」

あり得ない展開だった。まさに常識はずれな現象が、目の先に……

……

「……つーか、なんでこんな遠くの場所がはっきり見える！？　明らかに2キロメートルぐらいはあるだろ！！？　なんでそんな遠い場所が！？」

「あぁ、それ？　神様に頼んで貰ったチート能力の一つ！　“魔神の瞳（デモンズ・アイ）”！　見た事無い文字でも瞬時に理解できたり、どんなに遠い場所でも見えたり、障害物ですら透かして見えたり……あとあと！」

「もういい！！！」

なんだそれは！！？　明らかにおかしい目は！！　そんな目をしていれば、私生活に支障が出るだろ！！

「大丈夫！　任意でｏｎ・ｏｆｆ出来るし、見たいモノも選べるようになってるから！」

……めんどくせぇ

「……っていうか、なんでいきなり人が光の中から……ってかアイツら、どこかで見た事あるような……」

なんか、見た事ある連中だった。しかし、会った事は無い。なのに、知っている。そう、最近だ。最近見た事ある。だいたい、二か月ぐらい前に、だ。そう考えていたら

「“フェイト”ちゃん？」

は？　“フェイト”って……まさか！？

「てめぇが前、映画館に連れてけと脅迫して見た、あの“魔法少女リリカルなのはＴｈｅ　ＭＯＶＩＥ　１ｓｔ”って奴の……あの登場キャラクターの一人の、あの？」

まさか、な……んな訳あるはず……

「そのまさかだよ。隣にいるのは、“アルフ”に、ＫＹで有名な“クロノ”君……あの姿にこの背景、間違いない！」

マジかよ……マジでアニメの世界に来ちまったって言うのか！！！！？？

「最悪だ……」

「やったあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁッ！！！！！　リリなの世界に私、転☆生！！！！　ばんざぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁいッ！！！！！！！」

なんでそんなに喜んでるんだ！！！

「ハッ！！！！（。д。！）　まさか、この展開……無印の最終場面！　交換リボンのシーンジャマイカ！！！！！　よし！！！！　決定的な瞬間をぜひこの目に！！！！」

「もう知らん……」

だが、自分も（このクソ妹に強制的に見せられてだが）このシーン

は印象深かったから、見ることにした。内容は知っているが……
……
つか、このアニメは何がしたかったんだ？　明らかにタイトルと内容が一致していない。ガキが見るようなモノかと思ったが、魔法が明らかに兵器だった。魔法の威力がそこらのゲームの必殺技の演出よりも派手で、戦闘の部分が熱血バトル（と言えばいいのか？）ぐらいの演出が為されていた。色々と、ツッコミ所が多かったモノだったのは間違いない

「さぁ、あともう少しで魔王の登場のはず……あ！　来た！！」

その言葉に反応し、このバカみたいな目を使ってそのシーンの再現を見た……

□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■

本来なら、出会うはずもない因果を持った二人が、こうして出会った……
“災厄の種、ジュエルシード”。それによって出会った二人
ソレを巡り、二人の少女はぶつかり合った
彼女達は、互いにぶつかり合った……互いに、譲れないモノがあ

ったが故に……

その二人の少女は、互いにぶつかり合う道を歩み、その道の中で互いの事を知った

そして、ソレをめぐる戦いは、幕を閉じた……

そして、互いにぶつかり合った少女達は今、話しをするために、出会っていた……

ようやく始まった、二人の絆を、確かめるかのように……

会いたいと言ったのは、金色の少女……“フェイト・テスタロッサ”

それに答えたのは、＞友達になりたい＜と言った桜色の少女……“高町なのは”

何のために会いたいと言ったのか……それは、暫くの別れと、あの時の返事の答えを言うため……

ようやく、本当の自分を始められる。そのきっかけを与えてくれた少女に、自分の意思を伝えるため……

しかし、金色の少女はそれに答えられずにいた

「どうすれば、友達になれるのか……」

少女は、何も知らなかった。いままで、母親だった人の人形として育てられた故に、友達の作り方など、知るわけがなかった……

しかし、そんな少女に、何度も語りかけた少女の言葉で、それを知った

「名前を呼んで」

始めはそれだけでいい。君とか、アナタとかじゃなくて、ちゃんとした名前で呼び合うのが友達なんだと……

「私、高町なのは、なのはだよ」
「……なのは……」
「うん……」

二人は、互いに呼びあった。金色の少女が名前を呼び、桜色の少女はそれに何度も応えた……お互いの目には、涙が零れた……いつしか、二人は手を握り合っていた……互いの絆を、確認するかのように……二人の“契り”が、しっかりと結ばれるように……

「少しわかったことがある。友達が泣いてると、同じように自分も悲しいんだ……」
「フェイトちゃん！」

桜色の少女は、金色の少女に抱きついた……
離れ離れになる友達の存在を、慈しむように……しっかりとその存在を、確認するかのように……

「ありがとう、なのは。今は離れてしまうけど、きっとまた会える……そうしたら、また、君の名前を呼んでもいい？」

「うん！　うん！！」

そうして、互いは暫く抱き合ったまま、時を流した……

そうして、時間は過ぎ去った……

別れを告げる声の後、抱き合っていた二人は離れ……

［シュルっ］

桜色の少女は、自分の髪を結んでいる白いリボンを取った

「思い出に出来るの、こんなのしかないけど……」

「じゃぁ、私も……」

そう言って、金色の少女は自分の黒いリボンを外し、桜色の少女の前に出した

そして、互いのリボンを……交換した……

□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■

……こうして、友達となった二人を、遠くから見ていたある二人は……

「ううううう……やっぱり、やっぱり……！　このシーンは神だよぅ……うっ、うぐっ……感動だよぅ……（T＿T）」

まぁ、確かに、感動はするな……

「しかし、なんで二人とも頬を染めてたんだ？　あれじゃぁ、恋人同士にしか見えねぇじゃねぇか……つか、女同士であんな顔になったら、同性愛者に間違われんぞ……？」

「あの二人は恋人同士だよ？　まぁ、近い未来に何だけどね」

「レズビアンか？」

「百合って言ってよ、レズなんて生々しいから（；一　一）」

「あっそ」

はぁ……とため息と吐いて、下を向いた

……ら……

［ついんッ］

「……？」

なにやら、見慣れないモノが……目の前に……自分の胸に有った……

「……ナンダコレ？」

そう、それは男にとっては甘美なるモノ。ええ、その通りです。かつて私達はその意味すら知らない言葉群の響きに心ときめかせ、街中で連呼したモノです

例えば……そう、フェラーリやら、オマーン国債、π？、ちんすこう……そして、肉まん……

ならば時代はやはり肉マンはイムラヤ。イムラヤの下に世界の平和は訪れると確信するでしょう

おお、ハラショー、イムラヤ

うむ、モチモチ、モチモチ……

ああ、素晴らしきかな私は知っている。この二つのもちもちスライム肉まんを、私は知っている……！！！！

「なんで胸が膨らんでんのォォォ

ちょっと待て!!　なんなんだコレは!!?　なんで?　なんで俺こんな良い父もってんの!!?　つか、今変じゃなかった!!?

「漢字間違えてるよ?　しかもさっき壊れてたよ」

黙らっしゃい!!!!　つーか、今思い出した。確かコイツ、俺の事を始め認識してなかったな。つか、まさかとか言ってたよな!!　姿が変わってるってことだよな、それって!!!　それが、なんでこうなってるの!!?

「ちょっと待てよ、オイ……」

自分の体を触ってみたら、明らかに違っていた。丸刈りにしていた髪は、腰の位置まで伸びており、腰辺りの間接が明らかに男のそれとは違っていた

「ッッ!!!!!!!!!!!!!!???　まさか……」

恐る恐る、股の所に手を伸ばし……

「!!!!!!!!!!!!!!

なんで俺“女”になってんのォォォ

#1　神の力はなんでもアリらしい……はぁ～（後書き）

第一話、いかがでしたか？　初日から１０００以上のアクセス、ありがとうございました！！
今後も頑張ってまいりますので、どうかよろしくお願いします！！

#2　性転換　それは異常な人には甘美なるモノだが……（前書き）

本日二回目の更新。とりあえず、今日はこれだけの予定です

#2　性転換　それは異常な人には甘美なるモノだが……

――――そして、とある兄妹は、姉妹になった――――

な、なんてこった……まさか、まさか……女に、なっているなんて……

「なんでこんな事になってんだ!!!!!!!??　説明しやがれこのクソ妹ォ!!!!!!」

「お、お～ち～つ～い～て～（＊＿＊；」

この状況で落ち着ける奴がいるか!!!!!　性別がまるっきり変わってしまって、落ち着いていられる程、俺は冷静じゃねぇよ!!!!!

「声は前の男声のままだが、服はいつの間にか女モノになってるし……し、下着、も……」

とにかく、自分が元男だと言えるのは声だけで、それ以外はすべて女になっていた……

「テメェのせいだろ!!!!!　どう考えてもお前以外に考えられんのだが!!!!!??」

「わ、私、知らないよ～～～～～!!!　だって、お願いしたチート

能力に、“性転換”なんて書いてないし～～～（―　―；）」

じゃぁなんでこん事態が起きてんだ！！！

「多分、神様の気まぐれ？」

もしそうだったらあのクソ神、いつかブッコロス！！！

「クソッ！！　なんてこった……」

最悪だ。第二の人生が、まさかこんな形になるとは……

「ナンテコッタイ／（＾∀＾）＼」

笑ってんじゃねぇ！！！！！

［ゴチンッ！！！］

「イッターーーーーーーイ！！！！？（＜＿＞）」

まったく、どうしようもない妹だな、毎度毎度……

つーか、今後俺はどうすればいいんだ？　このまま女として生きていくのか？

「そうなんじゃない？」

嫌だ！！！　絶対にんな事はご免だ！！！　何としても、男として……

「……無理、だな……」

こんな大きな胸（見た感じ、Eカップは有るぞ……）じゃぁ、隠そうにも隠せんし、便所だって、男用のは無理あるし……つか、もし銭湯とか行った時には……

「諦めたら～？」

……くっそぅ……

「しかし、なんで俺が女なんかに？」

いったい何があったんだ？　考えられるのは、あのクソ神の仕業か……もしくは、コイツの考えた能力に関係しているのか……いったい、なにｇ

「ぐぅぅぅ～～～っ」

「あ（　。ｏ　。）」

……腹減った

「しょうがない、腹ごしらえでもするか」

「んじゃ、ファミレスにゴー！！！」

なんでファミレス？

「こういう時は、しっかりと食べた方がいいんだよ。ほら、言うじゃん、“腹が減っては戦は出来ぬ”って」

あっそ。んじゃ、適当に行くか

んで、ファミレス（２４時間営業の）に着き、注文して、飯を食っていたのは良いが……

「金、あんのか？」

「＼（◎ｏ◎）／！」

おい……

「だ、大丈夫だよ！　きっとなんとかなるよ！……多分（＾―＾；）」

多分かよ！！！！

「前途多難だな……」

「妙に冷静だね。犯罪を犯しそうな所まで来てるってのに」

「知らねーよ」

まぁ、この無一文の事態は何とかなりそうだと感が訴えている……

…ので、とりあえず現状確認をしておこう

「“敵を知り、己を知れば百戦危うからず”、だね（＾＾）」

五月蠅い、黙れ、そして死ね

「……まずは、テメェが考えたっていう特殊能力って奴がどんなのか、教えてもらおうか」

まずは、自分達がどんな力を持っているかを知るのがいいだろう。もしかしたら、その中に俺が女化した理由があるはず……

「えっと……あ、紙があるから、それに書くね」
「どうでもいいから、さっさとしろ……」
「はぁーい（＾－＾）カリカリカリカリっと♪」

キメェ……

「カリカリカリ……でけた！！」
「貸せ」

キモい妹からそれを引っ手繰って紙を見てみる……

「……なんなんだ、コレは」

内容はかなり異常なモノだった。“膨大なエネルギー”？　なんか明らかに変なモノだし……“魔導の心得”と“武道の心得”ってなんだ？　いったいなんの心得だよ。んで……

「……コレ、か」
「なにが？」
「俺が女になった理由。多分これが原因だ」

俺は、紙に書かれた（バカみたいな）能力の一覧の一つを指差した

「ん？……あぁ！！！　なるほど！！」

「なるほどじゃねぇよ、おい……」

そこにある一つの能力……俺の記憶が正しければ、それは確かあるゲームの能力で、女性限定の力だったはず。故に、女でなければ都合が悪いのだろうと思ったあのクソ神は、俺を女にしたのだろう。迷惑な話だ

「はぁ、不幸だ……」

「上条さんマジぱねぇッス！」

訳分からん事をほざくな。しかも会話になってねぇし……しかし、今自分にある能力は分かったが、どれもこれも生活に役に立たないモノばかり。もっとマシな能力考えろ、ったく……

「まぁまぁ。色々すれば、多分使えるようなモノも出てくるよ、きっと（＾－＾）」

「その前に、この飯代をどうするのかを考えないとな」

「あ……」

忘れてたなコイツ……

「はぁ、さて、どうしよう……」

頬杖をして考えている所を

「へっへっへ、姉ちゃん達？　こんな時間にお食事かい？」

「つか、一人はお子ちゃまみたいッスよ、アニキ」

チンピラが４名、絡んできた

「（こんな朝っぱらにも、こんな人間はいるんだな……）」

ちなみに、現時刻は８時１６分。しかも平日。だから客も少ないし、周りを見たら俺達とこのチンピラ組と、あと一組の男女（多分カップル）がいるだけだった

「姉妹かな？　二人揃って綺麗でいいねぇ……」

「なぁ、お兄ちゃん達と遊ばない？　仕事で疲れてしょうがないんだよー」

こんな時間にナンパかよ。さすが異世界、普通とは全然違うのな

「　（はぁ、めんどくせぇ……）」

「（ど、どうしよどうしよ！！　どうすればいいのお兄ちゃん！！？）／（。ロ。）／」

とりあえず、どうするべきか……ん？　そういや、体が女なんだから、アレも女なのか？　いっちょ試すか

「なぁなぁ、いいだろう？　姉ちゃん」

「（お、お兄～ちゃ～ん！！！）（Ｔ＿Ｔ）」

さて、やってみますか

「……いいわね、とっても素敵なお誘いだわ」

「え？（◎＿◎）」

「「「うほ／／／」」」

……出た、女声……まさかと思ってやってみたが、やはり声帯も女になっていたようだ。だが、何故女の声帯で前の男声が言える？　まぁ、それはどうでもいいか。つーか、キメェ……仕方ないとはいえ、コレはキツイ……まぁ、やるか……

「いいわよ、遊んであげても。でも、それにはそれなりのモノがあるでしょう……？」

と言って、チンピラのリーダーらしき奴にあるモノを突き付けた

「へっへ、これぐらい安いもんよ」

そういって、男はソレを受け取った。バカでよかった

□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■

そして、チンピラ四人に囲まれながら、店を後にした（ちなみに分かっているとは思うが、食事代はこのチンピラ共に……キモクて嫌だったが……色仕掛けして奢らせた）

《ね、ねぇ……だ、大丈夫なの？》

例によって、このクソ妹が話しかけてきた。しかし、その言葉は頭に響くモノで、このチンピラ共には聞こえていないようである

《あ、コレ念話ってやつね。“魔導の心得”のおかげで、どんな魔法も使えるんだよ。簡単だから、お兄ちゃんもやってみれば？》

なんだそのファンタジーな能力。まぁ、そんなモノがあるなら好都合だった

《いいか。こいつ等を路地裏に連れていく。そしたら……》

《ま、まさか……（一＿一；）》

まぁ、これも生きるためだ。こいつ等には悪いが、俺達が生きる為の糧になってもらおう

□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■

そんで、路地裏に来て、数秒後……

「「「「きゅ～～～～～……」」」」

あの時のチンピラ共は、伸びていた。コイツが考えた“武道の心得”って奴を使い、こいつ等をどこぞの格闘術でブッ飛ばして、気絶させたのだ
まぁ、身体能力も強化されているため、かなり呆気なく倒れたけどな

「……ねぇ、お兄ちゃん」
「なんだ」
「“お姉様”って、呼んでいいですか？」

……好きにしろ

「さてと、今のうちにコイツらの財布から金をふんだくるとするか」

そして、チンピラ共から金を巻き上げていった。犯罪をしているというのは自覚しているが、生きるためにはしょうがない。無一文なんだからな

「さすがお姉様！！　私には想像もつかない事を平然とやってのける！！　そこに痺れる憧れる～！！！」

……もうコイツ無視しよう、うん……

＃２　性転換　それは異常な人には甘美なるモノだが……（後書き）

まずは、読んで下さった皆様方に感謝の言葉を……

開始してわずか一日足らずで２０００アクセスに４８０ユニークを突破しました！！　これは早いのかどうなのかよくわかりませんが、本当にありがとうございます！！

次回は主人公である二人の兄妹の設定を座談会形式で行いたいと思います

お楽しみに！！

主人公の設定を発表、アンド座談会的なモノ（前書き）

タイトル通りです、ある程度ネタばれを含みますので、見たくない方は次話に飛んでください

主人公の設定を発表、アンド座談会的なモノ

妹「おはこんばんにちわぁ～！！！　“魔法少女リリカルなのは～とある兄妹の転生物語～”を見てくれた大きなお友達のみんなぁ～～！！　いつも読んでくれて、ありがと～～～ッ！！！ヽ（＾ｏ＾）ノ」

作者（以後、作）「えぇ、このような場でもう一度ご挨拶を……今作を執筆させて頂いております、リィーンです。えぇ～、今作を読んでくださいました読者様方に、無上の感謝を送りたいと思います。本当にこのような駄文を読んでいただき、真にありがとうございます。つきましては、このｂ」妹「チェリオ～～～ッ！！！」

［ボゴンッ！！！］

作「グホォッ！！？」

妹「長ったらしいわ！！　まったく、ガッチガチに固くなりすぎだっつの！！！」

作「いやいや、初めての事なので、つい……」

妹「もう……まず言いたい事があるんでしょう？」

作「あぁ、はい、そうでした……コホン、えぇ、この度、アクセス件数が５０００ＰＶを超え、ユニークも９００人に達成しました。

これは良い調子なのかどうか、まったく分からないのですが、本当にありがとうございます！　感謝してもしきれないくらいです！！！」

妹「凄いんじゃないかな？　私もよくわかんないけど……（；一＿一）」

作「できる事ならば、感想の方に＞それはすごい事だ！！＜とか、＞普通はそんな程度＜とか、＞まだまだ、全然＜といった具合に乗せていただけたらありがたいです」

妹「まぁ、人気なのは確かかな？」

作「はぁ。ですが、リリなののネームバリューも有りますし……それに、予告なんて事をしてしまいましたから……それらが功を為したのかも……？」

妹「知らないｗ」

作「何はともあれ、本当に数多くの方が読んで下さった事に、大変うれしく思います！！」

兄（あね）「……おい」

妹「あ、お姉様」

兄（あね）「どうでもいいがな、さっさとやる事やれ。早く帰りたいんだよ……つか！！　なんで俺の名前の所のルビが変なことになってんだ！？」

妹「仕様だよw」

［ゴチンッ！！！］

妹「イッターーーーーーーイ！！！！？（＜＿＞）」

兄（あね）「五月蠅い、黙れ、そんで早くしろ」

作「まぁ、そうですね。それでは、始めますか。妹ちゃん、よろしく～」

妹「うぅ、はいはい～……えぇ今回は、今作の主人公であるお兄ちゃんと、私達兄妹（しまい）の設定を、現段階で公開できる程度に発表したいと思います！！　題して！！“ドキ☆　見せちゃうよ、コレが私達のヒミツ？”！！！　か～いさ～い！！！！」

作「いえ～い！！！」

兄（あね）「アホか……」

作「まずは、兄（あね）の方から参りたいと思います！　ちなみに、ここで名前の方も公表します。ではどうぞ！」

名前：グレイ・スティン

性別：女（元男）

ＣＶ：男声　鳥海浩輔
　　女声　冬馬由美
年齢：２０歳（Ａ、ｓ本編開始時）
一人称：男声時　俺
　　女声時　私
血液型：Ｏ型
身長：１８７？
体重：７０？
スリーサイズ：８８・５６・８７
魔力光：暗い虹色
総合ランク：　Ｕｎｋｎｏｗｎ（ＥＸ）

【特記事項】

事故で死んでそのままあの世に行くはずだったが、神の気まぐれにより転生されることになり、強引に妹のリリなの世界介入作戦に巻き込まれた挙句、性転換されてしまった不遇な兄

女になったことで男としての全てを失い、残ったのは前の男声（と、男としてのプライド）のみ（だが、プライドも段々とズタズタになっていき、いずれ消えるｗ）

性格はかなり現実的で普通。ファンタジーを信じない人。世間を理解し、身の周りの目を気にしている常識人。しかし、非常識な環境に放り込まれてからは常識を失いかけ始めている。それにより、計算高く、思考が悪者化していき、最初は戸惑いながらもやっていた

犯罪紛いの事を平然とやるようになっていった。恋愛沙汰には興味無しの枯れている人間

女なのに男みたいな事をすると変人に見えると判断した神により、普段は女を演じるようにしている（女神様の教育の賜物により、完璧に女性としての所作をこなす）

あまりの美人でありスタイル抜群な為、男からの猛烈なアピールを受けるが、元男なためうれしくも無く、本人からしてみればキモイだけである（だが、それを利用する時もある為、悪女と言われる事も……）

犯罪行為をしている事は自覚しているが、本人いわく、バレなきゃ問題ないとの事

見た目は、“天元突破グレンラガン”の“ヨーコ・リットナー”を黒髪ストレートにし、右目が赤、左目が金色のオッドアイになっている感じ

神様から貰ったチート能力

1）“膨大なエネルギー”

名前の通り、膨大な力を保有している。数値に表せば、リンカーコアもＳＳＳ＋以上に持ち、ネギま!の魔力をネギ・スプリングフィールドやこのかを凌駕する量で、Ｆａｔｅの魔術回路を１００本も刻まれ、ＦＦやドラクエでいうＭＰも限界突破して９９９９９９位

保有し、ペルソナ3や4のSPも９９９９９も持っている。枯渇なんて無いだろう

2）“最強体質”
Ｆａｔｅ表記で行くと筋力、敏捷、耐久、幸運、宝具（能力）の全てがＥＸ（だが、彼(かのじょ)の場合は、幸運のみＥ－である）ランクになっている

3）“魔神の瞳”
“千里眼（遠くのモノでもはっきりと見えるようになる）”、“透視眼（障害物があっても透かして見える）”、“理解眼（難解な文字や説明文を瞬時に理解する）”、“遅延眼（事象をスローペースで見る事が出来る）”、“予知眼（未来の事象を残像のように見る事が出来る＞ただし、数秒後の＜）”、“直死眼（対象の死を線で見る事が出来、その線を切ればいかなる防御をしていても切断される、‘直死の魔眼’の劣化品）”……の、六つの瞳を使えるようになる。しかし、同時に二つまでしか発動出来ない。任意でｏｎ．ｏｆｆと切り替えが出来る

4）“魔導の心得”
魔法、魔術、法術を自在に使えるようになる。思えばいかなる現象すら再現可能なのである

5）“武術の心得”
上記の“魔導の心得”の武術版。中国拳法から合気柔術、ガン＝カタから想像上の剣術（例えば“飛天御剣流”）などが自在に出来るようになれる

6）“？？？”
現段階では公表しません

7）“兵装錬製「ウェポン」”
武器や兵器を自在に造りだす能力。Ｆａｔｅの新旧アーチャ―とは違い、引き出すのではなく“作り出す”。よって自分が考えた能力を付随させた兵器を作り出す事が可能（例えば、突き穿つ死翔の槍の能力を持ったガトリング砲を作る事が出来る）。更に、武器や武装、兵器としての概念さえあればどんなモノも創造可能（鈍器としての概念を持たせたタンスや、投擲武器としての概念を持たせた食器など……理屈さえあれば何でも作れる）

8）“驚異的なカリスマ”
いかなる人物（聖職者だろうが犯罪者だろうが、果ては何かの異信仰者）だろうと、引きつけてしまう体質。彼の不幸の元。神様が勝手に付けてあげた能力

作「以上、兄、グレイ・スティンの設定でした！」

兄（以後、グ）「……確かに、不遇な兄だな、俺は……」

妹「あぁ、お兄ちゃんがしずんでいく～」

作「続いては、妹の設定です！！　どうぞ！！！」

名前：ビビ・スティン
性別：女
ＣＶ：川澄綾子
年齢：１１歳（Ａ、ｓ本編開始時）
一人称：私
血液型：Ｏ型
身長：１４２？
体重：ヒ・ミ・ツ？
スリーサイズ：これも、ネ？
魔力光：明るい虹色
総合ランク：　Ｕｎｋｎｏｗｎ（ＥＸ）

【特記事項】

事故で死んでそのままあの世に行くはずだったが、神の気まぐれにより転生されることになり、兄を強引に引っ張ってリリなの世界への介入をし、原作ブレイクを目論む妹

女になったこと兄を人前では“お姉様”と呼び慕う。なお、二人だけの時は昔通りに“お兄ちゃん”と呼ぶ

性格はかなりのオタクで変態、百合好き、厨二という性格と趣味を持つ腐女子。１８禁ゲームを普通にやる（購入方法は、兄を説得し

て買って貰ってきていた）、可愛い女の子を見ると発情する、二次元の女キャラに本気で恋をする等、精神がイカレている。言葉に顔文字を使うなど、厨二っぷりは半端ない

無類の百合好きであるから、女の子に恋をしてみたいと思っており、今回の介入の中には、その世界のヒロインを我がモノにしようと目論んでいた（ちなみに、“リリなの”は彼女の一番大好きな作品であり、なのフェイはやアリすずの五人娘は彼女の二次元キャラの初恋の相手達だったとか……つまり、今回の介入は彼女の欲望を叶える結果となっているｗ）

兄（あね）であるグレイより少し劣るが、彼女もまた美少女でスタイルは抜群に良い。しかし、男には興味無しなので告白されてもシカトする

最終目標は、なのは、フェイト、はやて、アリサ、すずかの五人娘を我がモノにし、百合ハーレムを完成させる事（余裕があれば、ヴォルケンズに、スバル、ティアナ、ギンガ、ナンバーズも加えようと目論むｗ）

見た目は、“Ａｎｇｅｌ　Ｂｅａｔｓ！”の“ユイ”を長髪ストレートに変え、右目が蒼、左目が銀色のオッドアイにした感じ

神様から貰ったチート能力

１）“膨大なエネルギー”

2）“最強体質”

3）“魔神の瞳”

4）“魔導の心得”

5）“武術の心得”

6）“？？？”
現段階では公表しません

7）“神魔招来「アバター」”
あらゆる神獣、魔獣、幻想種、果ては架空の人物や動物を召喚する事が出来る（例えば、Ｆａｔｅのサーヴァント。ＦＦシリーズの召喚獣。メガテンシリーズの悪魔やペルソナシリーズのペルソナ。天元突破グレンラガンのシモンやカミナ、魔法先生ネギま！のネギや明日菜等々……）。ようは、召喚主が知っているモノは何でも召喚できる。ただし、生物である事が最低条件

8）“魅了の笑み”
いかなる人物（聖職者だろうが犯罪者だろうが、果ては何かの異信仰者）だろうと、“同性”ならば、その笑みを見ただけで一発で一目惚れし、恋人や心に決めた人がいなければ、確実に我がモノに出来てしまう呪い級の能力。これで彼女は、歪んだ欲望を叶えようとする

作「以上が、現段階における二人の設定になります」

グ「つか、なんだこのクソ妹の変な願望は……」

作「気が付いたらこんな設定になっていた……無意識で作っていたからかな？」

グ「こんなクソ重要な事を無意識で作るな！！！」

妹（以後、ビ）「っていうか、なんだか、かなりのチートッぷりだねぇ」

作「はい。これでもかと言うほど詰め込みましたから」

グ「アホだろ、お前……」

作「自重したら、負けかなと思いまして……」

グ「まぁ、別に良いが……このクソ妹の願望だけはどうにかしろ」

作「無理です、ごめんなさい」

グ「はぁ～……」

ビ「っていうか、名前の由来とかあるの？」

作「はい。兄の方は“スズキのステイングレー”を二つに分けて、反対にして、さらにグレーの部分を“グレイ”にしたモノになってます。妹の方は、“トヨタのｂＢ（ビービー）”をビビにしたものになってお

ます」

ビ「車の名前だね」

作「原作でのキャラが車の名前使ってますから……ちなみに、転生前は違う名前ですが」

グ「だろうな。こんな名前の日本人いたらたまったもんじゃない」

ビ「んで、神様から貰ったチート能力の中に、現段階では公表しませんって書かれた欄があるんだけど……何これ？」

作「そのままの意味です。今の段階ではまだ隠していたい能力、という事です」

グ「なぜ隠していたい？　まさか、まだ決めてないとか？」

作「いやいや、決めてはいますよ。現に、それが君を女にさせた能力なんだから」

グ「そう、か……」

ビ「あぁぁ、またもお兄ちゃんが沈んでいく～……ってか、なんで性転換モノなんて考えたのさ？」

作「まぁ、斬新さを求めた結果ですよ。数ある作品の中で、最初から性転換された作品と言うのが無いから……それに更に言うと、ほとんど転生させる対象がアニオタっていうのがアレだから、真面目な人を転生させたかったわけです」

ビ「なるほろなるほろ」

作「でも、それだと話がうまく作れないと判断したから、君が誕生したわけです」

ビ「なるほどね☆やっぱりアニオタを入れなきゃ、転生モノなんて出来ないからね」

作「それに、さらなる斬新さを求めて言ったら、兄妹で転生っての も有りかと思ってね。ほら、ほとんど友人達と転生するモノばかりでしょ？」

ビ「まぁ、確かに……いやでも、探せばあると思うよ？」

作「このサイトを見た限りでは、無かったと思いますので……それに、ここ以外で、ネット小説を見ませんから」

ビ「見ろよ（一“一）」

作「暇があった時にでも……」

グ「はぁ、どうでもいいから早く終われ、やる事やったんだからな」

作「あ、そうですね。では、今日はこの辺りでお暇させて頂きます」

ビ「これからも、今作をごひいきに（＾＾♪」

グ「駄文かもしれないが、コイツは頑張るようだから、まぁ過度な期待はすんなよ」

作「それから、今回の設定の中で何か質問がある方は何でも聞いて来てください。答えられる範囲内でお答えしていきますので」

ビ「それでは！！」

作・ビ「「さよなら～～～！！！」」

グ「じゃあな」

主人公の設定を発表、アンド座談会的なモノ（後書き）

作「あ、そうだ。このあとがきでも色々な事をしたいと思いますので、よろしくお願いします」

神「ここでは俺が一暴れさせてもらうからな、覚悟しときな！！！」

作「それでは、また次回にお会いしましょう」

#3　やはりアニメの世界にきたなら介入をしよう！！（前書き）

連続更新です。今日はあと一話更新予定です

#3　やはりアニメの世界にきたなら介入をしよう！！

――――――そして、とある兄妹（しまい）は、今後の事を話し合った――――――

場所は、海鳴市の隣町、遠見市にあるとあるマンション。無印でフェイト・テスタロッサが拠点としていた部屋に、新たな二人の住人がいる

「わぁ……やっぱり良いよねぇ、このマンション！　すっごく快適～（＾ー＾）さすがフェイトちゃんが使っていただけはあるね」

「あっそ」

俺はいつもの男声で冷たく答えたが、コイツは反論してこない。もはやこれがこの二人の“普段”になったのだ

「はぁ～、このベッドイイに～お～い～……これが、フェイトちゃんの匂いなのか！？」

腐ってる妹は放っておこう

「にしても、お姉様の力でお金をポンポン作り出して、さらに管理人を魔法でだましてこのマンションに住むとは……越後屋、そちも悪よのうｗ」

「さてと、まずは家具をそろえねぇとな……」

さて、ここでいくつか気になった事があるだろう……

まず俺らはあのチンピラ共から金を巻き上げた後、今後住む場所を探していた。そしたらコイツは

《アースラスタッフが使うマンションに先回りしてご近所になるか……廃ビルを利用して住んじゃうか……ハッ（。ロ。）　フェイトちゃんが使っていたマンション！！》

という事で、フェイト・テスタロッサが使っていたマンションに住む事になった

どうやらまだ契約が切れていなかったので、そのまま自分達がその名義で居座ろうとおもってたが……管理人が俺達を怪しみ、警察を呼ばれそうになった所を、俺が精神操作（いわゆる洗脳）魔法を使って強引に黙らせた。しかし、タダで住むのは気が引けた為、チンピラから巻き上げた金全てを献上し、入居費にしたのだ

それから無一文状態に戻ってしまったが、俺の能力を使えば金を作れるのでは？　という考えが生まれ、やってみた結果見事お金を作りだす事が出来た。犯罪だが、ばれなきゃ問題ない（ちなみに、出来た金を自販機に通してみたら、使えました）……

そうして、生活の場と、食べ物、衣服を買う金……衣食住の確保は難なく終えた。それらを整えるのに、なんとたった一日で済ませてしまった。便利だな、魔法って

「後は、何して過ごすか、か……」

「もちろん、介入行動に決まってんじゃん！」

はいはい、アイツらと関わるんですね……

「えっと～……あのシーンが今朝だったから、無印が終わった直後ってことだよね。そいで～、今からA，sが始まるまでの空白の半年間、か……う～ん……」

勝手にやってろ。俺は関わらんからな

「ダメだよ！　お兄ちゃんもキッチリ介入行動に参加してもらうからね！！」

「なんで？」

「だって、面白いじゃん！！！　アニメのキャラクター達とドンパチ出来るんだよ！！！　話せるんだよ！！！　触れられるんだよ！！！　こんな機会、絶対に無いんだよ！！！　オタク共やマニア共も経験したがる行為が出来る可能性を持ってるんだよ！！！　トキメクような体験が出来るんだよ！！！？」

「興味ねぇし」

はっきり言って、アニメなんか興味ないしな……あるのはゲームのみ

「枯れてるなぁ……一般人でも喜ぶような内容なのに（；一_一）」

知らん、んな事……

「う～ん……やっぱり、この時期からの介入だと、はやてちゃん達ヴォルケンズに味方するべきかなぁ……でもでも、なのはちゃん達に敵対するのはなんか嫌だなぁ……なんかいい案無い？」

俺に聞くな。と言いたいが、実は俺はこの“魔法少女リリカルなのは”を‘知っている’

理由は簡単、ここにいるクソ妹がそういう話をいつも無理やりに聞かされ続けていたので、嫌でも覚えてしまったのであった。そして、極めつけには劇場版を一緒に見た。それによって俺はオタクの道に踏み出す寸前に陥ったのである

「（あん時にいた連中、キモ過ぎたな……思い出しただけで怖気が……）」

……もう、思い出すのすら嫌になったわ。さて、思考を変えよう

「自分の好きにすればいいだろ。ったく、頼んなバカ」

いつも通りに、冷たく突き放すのであったが

「お兄ちゃんの意見が欲しいの。私だけじゃどういう風にしていくか、全然決まんないから（一＿一；）」

はぁ……しょうがねぇな

「ならこうすればいいだろうよ。お前がアレ……“A、s”だったか？　それを見てお前は何が不満に思ったのか、何が気に食わなかったのか、改善したいと思った所は何だ……それをまず上げてみろ」

「う～ん……色々ありすぎる（；一＿一）」

おい……

「まずは、リィンフォースの救済。あれは悲しすぎるから……リィンフォース。彼女には、はやてちゃんの傍にいて欲しい」

あれか……アレはアレで重要なシーンだ。だが、アレが無ければ、後に生まれてくるリィンフォース・ツヴァイの存在が消える事になるぞ

「そこはなんとかするよ」

はいはい

「次は、五話のあの戦いの時のヴォルケンズ。あの時、はやてちゃんを一人ぼっちにさせていたのを後悔してた……ううん、その時だけじゃない。あの時もあの時も……ようやく訪れた幸せが、あんな風になるのは嫌だよね……」

「……」

なんだ、考えて無いようで、色々考えてあんだな……家族、ねぇ……

「そして、あのクッソ忌々しいリーゼ姉妹!!! アイツらの介入はマジあり得ない！ ＫＹ過ぎる!!! さすがクロノ君の師匠、あのＫＹさは師匠譲りだったんだね（―｜―メ）」

……くだらねぇ……

「アイツらはＫＩＬＬする!!! ＫＩＬＬしないと気が済まない!!!」

「……んじゃ、それらを回避させるにはどうするべきか、考えな」

ここまでヒントを言ったんだ。いくら馬鹿でも、ここまで伝えれば

妙案の一つや二――――

「となると、ヴォルケンズサイドに決定だね。まずは、はやてちゃんに接触。そして、私がはやてちゃんの住み込み介護ヘルパーになるっと」

ドンガラガッシャーン！！！

「は？？？」

なにいってんのこのイカレ娘、頭の螺子ちゃんとしまってんのか？つーか、何故にどうして介護ヘルパー？　何故に住み込み？

「“ギル・グレアム”は確か、はやてちゃんへ生活援助をしている。アイツの名前を使えば一発で信用してくれると思うし。それに、はやてちゃんは揉み魔。こんな上等な胸を見せつければ、絶対に……グッフッフッフ（＊＾―＾＊）」

……そういや、コイツも胸デケェな、１１歳のくせに

「そうすれば、第五話のあの悲劇は回避可能！　それに、ヴォルケンズとも早い段階で接触出来る。まさに一石二鳥！　いや、はやてちゃんと友達になれるから三鳥！！　いや！！　はやてちゃんに胸をもまれるから、四鳥！！？　やばい、鼻血出そう（＊＜―＞＊）」

マジで出てるって、おい……どんだけ興奮してんだ？　つーか、キモイ。そんなことでいちいちんな事すんな……知ってはいるが、やっぱ変態だよコイツ

「あー、はいはい、分かりました。んで、その猫姉妹はどうすんだ

？」

「私がグレアムの名前を出せば、多分即座に行動する。その時に潰す。それでも行動を起こさなかった場合は、アイツらが行動を起こした時に潰す！！！　オメェーらの出番ねぇから～ｗ　って（＊＾―＾＊）」

なんだそれ……んで、救済については？

「結局、そこだね……防衛プログラムを何とかすればいいんだけど、無限再生プログラムの削除か……まぁ、コレは今はいいかも（・―・）」

「そうだな、確か……あと半年近くあるのか？　それまでに考えておけ」

しかし、その間までに打開策を考えられるのかが、勝負だな……

「うっし！！　じゃぁ今日は準備して、明日ははやてちゃんに接触して、いきなり住み込む！！！　作戦名、“私とはやてちゃんのドキドキ同妻生活！？”作戦、開始～！！！＼（＾ｏ＾）／」

アホここに極まれり……もう知らん、と言いつつも、つい構ってしまうのは兄としての悲しい性か……

「鬱だ……」

まぁ、暫くは好き勝手させとくか

#3　やはりアニメの世界にきたなら介入をしよう！！（後書き）

作「さて、前回何かしようという事にしたのですが……」

神「なんも決めてないなw」

作「どうしましょう、神様」

神「クックックッ、俺にホイホイ頼っちゃっていいのかなぁ？」

作「えぇ、ここでは、感想が来たときに其れにお答えしようというお便りコーナーにする事に“今”決めました」

神「妥当だな。チッ、つまらん」

作「それではみなさんまた次回にーーー！！！！！（汗）」

＃４　ふぁーすとこんたくと！！　百合ハーレムへの第一歩！（前書き）

感想が、いまだに一件しか……

感想、または質問、気になった点、待ってます

＃４　ふぁーすとこんたくと！！　百合ハーレムへの第一歩！

――――――そして、とある兄妹（しまい）の妹は、介入を開始した――――――

「えっと……ここか（。＿。）」

風芽丘図書館。Ａ、ｓでの重要人物である“八神はやて”が通っている図書館で、ほとんどの二次創作で彼女に出会える場所ナンバー１の場所である！

「はぁ～……どんな子なんだろう……原作通りなのかなぁ？まさか、全然違ってたりして……（；一＿一）」

まぁ、会ってみなけりゃ分からない！！　という事で、いざ突撃～！！！

□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■

さて、中に入ったは良いけど……

「（どこにいるんだろう……）」

周りの目を気にしつつ、車いすの少女を探しているのだが……なかなかいない

人に聞こうにも、それでは後々面倒が起ると判断し（さらには、起こすとお兄ちゃんから何言われるか分かんないし……（；一一））、自力で探してます

「（って言うか、ここの図書館以外と大きいなぁ。さすが、はやてちゃんが通っているだけはあるってことか……って、いた？）」

車いすに乗っている少女……茶色の髪をショートにし、黄色い髪留めをしている九歳の女の子……闇の書の主、八神はやてがいた……

彼女は、ある本棚の上を凝視しており、必死に手を伸ばしていた

「（うっは、ＦＦやらＳＳと同じ展開！　よっし！！）」

威を決し、少女に近付いた。これが、原作ブレイクの始まりを告げる、鐘の音であった

□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■

所変わり、フェイト・テスタロッサが使っていた（今はある兄妹（しまい）が使っている）マンションの一室……

「……暇だ」

転生者の兄（あね）は、何もすることがなかった……

「（ゲームでもやろうと思ったが、正直こっちにはどんなタイトルがあるのか分からないし……）」

転生前は“ゴッドイーター”や“ゴッドオブウォー”、“モンスターハンター”、“ベヨネッタ”などのアクション系と、“ファイナルファンタジー？・？・？？・？？”、“．ｈａｃｋ／／Ｇ．Ｕ．”“テイルズオブヴェスペリア”などのロールプレイングゲームを中心にやってきたが……こっちの世界にはどんなゲームがあるのか分からない。故にゲームをしようにも興味が無いようなモノばかりなのでやる気は無い

「（この際だ、いっそゲーム離れでもするか……）」

何時までもゲームばかりしているわけにもいかんと判断し、趣味にしていたゲームを切り捨てた

「……さって、なにして過ごそうかな……」

一応、俺も原作介入をする羽目になってしまったが、それは本編が始まってからの介入である。まったく、なんで俺がこんな事を……

……

「まぁ、やること無いし、丁度いいかな。ってか、アニメのキャラを間近で見られるって、よく考えてみたら、凄いよな……まぁ、興味無いけど」

そう呟いた。しかし、それが始まるのは半年後。それまで一体何をしていればいいのか……

働くのもいいが、金はいくらでも作れるので働いた所で無意味だし、何よりめんどくさい

「……確か、この能力がちゃんと使えるのか、確認してなかったな……」

これらの能力は今までに何回か日常的に使った（ほとんどが犯罪紛いだ）が、どこまで出来るのか見当がつかない。というわけで、今から検証しようというのだ

「……もうファンタジーに慣れちまったな、はぁ……ま、いっか……」

□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■

その頃、転生者の妹は……

「へぇ～、それほんまなん？」

「ほんまほんま♪　それでねぇ～……」

計画通り、“闇の書の主、八神はやて”と接触し、他の二次製作と同じく、いきなり家に上がりこんだ（正確に言うなら、二次製作と同じように、はやてからお誘いを受け、少し抵抗したが、その次には簡単に了承した）

「（原作通りの、優しくて、かわゆくて、人見知りしないイイ子だなぁ～（＾－＾）やばい、鼻血が……（＊_＊））」

まさしく、想像、いやそれ以上の可愛子ちゃんに、変態で腐女子たる妹のご機嫌は上々だった

「ん？　どないしたんですか？　“ビビ”さん」

“ビビ”とは、彼女が名乗った名前である

「ん？　なんでもないよ～♪」

満面の笑顔。しかしそれは、“同姓に対して”は意外かつ抜群の効果を出すのだ！！！

「／／／／／／」

「（おお！！？（＊＜＿＞＊））」

少女（はやて）の頬が紅潮し、それを見た彼女（ビビ）は確信の笑みを浮かべた

これこそ、彼女の歪みに歪みきった願望を叶える悪魔の能力（チート）。“魅了の笑み”！！　その笑みを見た相手はその笑みを浮かべた相手に一目惚れしてしまうという呪いのような笑みだ！！　しかし！！！“同姓限定”！！！！！　つまり……

「（これで我が念願の“百合ハーレム”への道を開いた！！　後は、なのはちゃんにフェイトちゃん……そして、アリサちゃんにすずかちゃんも……グッフッフッフ（／／／＜人＞／／／）」

……変態魂全開である。そんな腐女子を無視して少女（はやて）はというと……

「（はぅわぁ……い、今の笑った顔、は、反則や……あかん、なんや胸が、ドキドキしてきてもうた……あ、あかん、女の子同士で、そないなの、あかんてぇ～……／／／／／／）」

どっぷりと悪魔の誘惑にハマっていた……ｗ

コレが、後々に自分の命運を決めてしまう事態になるとは、この時はまだ、まったくもって全然完璧に予想していなかった少女（はやて）であった……

「あ、そだそだ。忘れてたっと♪」

［ガサガサッ］

「？」

彼女がとりだしたのは、一枚の手紙。差出人は……

「あ、“グレアムおじさん”からの……あれ？　なんでおじさんの手紙をもっとるん？」

刹那

［ゾクッ！！！！！］

「（う……やっぱ反応してきたか、クソ猫姉妹！！！）」

“グレアム”の名が出た途端、今まで警戒していただけの気配が一気に殺気に変わったので、原作知識と二次創作知識をフル動員させてこの気配が誰なのかを特定した

「（とりあえず、今は襲ってこないと思うかもだけど、一応、荷物を既にこっちに届けるように言っておいてよかった～……戻ろうとしてたら確実に狙われるし（；一＿一）　今暫くは、様子見だけしててくれれば良いんだけど……）」

意外な冷静的分析を済ませ、次の行動に移すことにした

そして物語は、大きく歪み始める……

#4　ふぁーすとこんたくと!!　百合ハーレムへの第一歩!（後書き）

神「なんだこの前書きは？　キサマふざけておるのか、雑種」

作「なぜにギル様……？　まぁ、欲しいんです、はい……」

神「フンッ!!　こんなに早くポンポンと更新しているのだ……感想が来ないのは当たり前だ!!」

作「まぁ、確かに早いペースだと思いますが……」

神「とにかく!!　感想は十話まで更新しなければ来ないと思っておくことだな」

作「は、は～い……」

#5　検証のつもりが何故か修行に。テメェの所為だクソ神！！（前書き）

今日はこれから知人たちと出かける予定なので、今日の更新はここまでとします

神「今回は俺様が大暴走するからな！！！　楽しみにしろよ！！！！」

あ……

#5　検証のつもりが何故か修行に。テメェの所為だクソ神！！

――――――そして、とある兄妹（しまい）の兄（あね）は、修行をやらされた――――――

ある兄妹（しまい）が使っているマンションの屋上

「遅いわよ。まったく、男って皆揃いも揃って愚図で鈍間ばかり。少しはお兄様を見習ってほしいわね」

見知らぬ少女が立っていた。口ぶりからして、どうやら自分を待っていたようだ

「いきなり会って初めの台詞がそれか？」

自分の能力がどのようなモノか検証しに、誰もいないはずの屋上に上がったのはいいが……そこには先客がいて……

「さて……アンタ、私（わたくし）を知らないなんて言わせないわよ。説明するの面倒だから」

どうやら顔見知りのようだが、彼（かのじょ）は知らな……

「あぁ、あのクソ神にへ」

［ズガンッ！！！！］

ばり付いてた女の一人か、と続こうとした瞬間、彼（かのじょ）の横に刀剣が突き刺さった

「……お兄様に向かって、クソですって？」

どうやら、逆鱗に触れたみたいだ……

「……分かった、訂正しよう。あの崇高なる神様の女神、だったな」

命の危険性があったため、すぐさま取り繕う言葉を贈った。こういう時は先に折れた方が楽なのだ

「ふんッ。分かっているなら、こんな手間をかけさせないで」

［シュンッ！！］

「！？」

少女の言葉が終わると同時に、彼（かのじょ）の横にあった刀剣が消え、少女の手元に戻っていた

「いいこと？　一度しか言わないから、よく聞きなさい」

なんだ？　何をいうんだ？

「今から、アンタを鍛えてあげる。でも、教えるのは戦闘とかじゃなくて“女としての仕草”よ」

……は？

「あんな妹から学べるモノなんて何も無いわ。皆無よ。あんなのを女の手本にするなんて在ってはいけないわ」
「いや、ハナからんな事やるつもりないから……」
とりあえず反論してみた……
「まったく、いくら公平なくじ引きで決めたとはいえ、やっぱり嫌よこんなの。お兄様と過ごす時間が減って行くじゃない。クッ、なんでこんな元ブ男現捻くれ女の面倒を見なきゃならないのよ……こういうのは“アサ”とか“メイリン”の仕事でしょう？　なんで私が……」
なにやらブツブツ独り言を言ってるが……なにやら空気がヤバいので触れるのは止めよう
「まぁ、時間があったら、ついでに実践的な訓練もしてあげるわ。私のお兄様との貴重な時間を割いているのだから、感謝なさい」
おいおい、そんなに嫌なら別に良いじゃねぇか
「そういうわけにもいかんのでな」
……って、おい
「……クソ、神」
「やぁ、元気にしてるかい？」
［ブンッ！！！］
とりあえずブン殴る！！！　が、上手く上体を逸らし回避していた

「おいおい、神様に向かっていきなり殴りかかるたぁ、信仰心と言うモノが無いのかい？」
「しらばくれやがって……」
とりあえず、今はコイツに言いたい事がある
「俺をなんでこんな体にした！！！！」
「なんとなくw」
［ブンッッ！！！！！！］
「おっと」
コロス！！！　このクソヤロウ！！！
「おいおい、俺を攻撃するの別に構わんが……後ろに気をつけろ？」
はぁ？　後ろ？
［シュッ！！！］
「ッ！！！？」
ちょ、危な……
「キサマ、何度言わせれば気が済むのかしら……」
「……」
修羅になった何かがいた……
「ま、長生きしたけりゃ、クソ呼ばわりせん事だなw」

……

「それよりもお兄様！！　なぜこの世界に降りて来なさったのです！！？　このような下郎の相手、お兄様には無意味と想いますわ！！！　時間の無駄ですわ！」

人を勝手に下郎呼ばわりすな！！！

「下郎で充分よ！！　キサマなんか！！！」

……もう、どうでもいいわ

「なに、愛しき義妹でもある妻を心配して、様子を見に来たのだ。他の女達には、ちゃんと言ってきたからな。それに今日一日は、お前の可愛い教える姿を見ながら過ごそうと思って……そういう理由だ」

「お、お兄様ぁ～～～？／／／／／／」

何このバカップル。よし、ほっとこう

「んで、なんで神様や女神様がこの様な所に？」

まぁ、前回と同じく、質問をぶつけてみる

「さっき“ヤーヤ”が言った通り、お前に女としての仕草を覚えてもらう」

「フザケルナ」

「なら、女の姿で男として過ごすのか？　変人に思われるぞ」

……

「諦めなさい、キサマに選択しなどありませんわ」
「ま、神様に逆らおうとは、思わぬ事だなw」

なんか、無性に腹立つ……しかし、言ってる事は正しいかもな。
こんな姿で男として生活するのはキツイ。はぁ、男に戻れたら……
……って、待てよ？

「おい神さん」
「なんだ？」
「多分アンタの事だから、あれだと思うが……」
「当然、戻す気など無い＞（、＾、）＜」

威張るな！！！　つか、あのクソ妹と一緒な事するな！！

「ちなみに、性別を変換させる魔法や薬物を使っても男にならんようになってるから、何やっても無駄だ☆ＺＥ」

……一生女として生きろって言いてぇのか、アンタは

「そうだ。だから諦めろｗ」

くっそぅ……

「さ、グズグズしている暇はありませんわ。さっそく始めるわよ」
「……はぁ～……」

盛大な溜息と共に、俺の完全女化計画が始められた……

「……さて、と」

その時、あの神さんがなんか誰かと話していたようだったが、気が付かなかった

□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■

所変わり、今現在殺気を放っているクソ猫姉妹共がいる場所

「（どういう事!?　なぜお父様の名を!?）」

困惑しきっていた。いきなり現れた女が自分達の父の名を出し、父から介護ヘルパーを頼まれてここに来ましたと言い放った小娘……

……

“闇の書”を狙う組織の人間か？　だとしたら危険だ。すぐに排除しなければならない。だが、小娘は一向に目標（はやて）から離れる気が無い

「（……暫くは、様子見かしら……お父様に報告しなければ！）」

そうして、今後予定外な事態に翻弄されていく、リーゼ姉妹だった

……

□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■

ある兄（あね）が講義を受けているマンションの屋上

「……ふむ、合格ね」

はぁ、やっとか……

あれから十時間、ずっと女としての仕草を叩きこまされて、ようやく全過程合格を貰った（飯は神様が作ったと言っていたモノ【どう見ても“たこ焼き”】が出た）

「飲み込みが早くて助かったわ。明日もやる羽目にならずに済んでよかった」

まぁ、高評価だった。ふぅ、こんなの簡単じゃねぇか……女のフリをするだけだからな

「いやいや、君はなかなかな逸材だよ。まさかこんなに早く女姓になったんだからなw」

「……アナタの所為でこんな事をする羽目になったのですが

ね」

こう鋭く睨んでも、コイツは

「おー、コワいコワい。クックックック」

この反応だ。もういいや、諦めよう

「そうそう、人間諦めが肝心だ」

……

「さて、素晴らしい教導だったぞ、ヤーヤ。帰ったらうんと可愛がってやるから、楽しみにしておけ」

「はい！！！」

恍惚な満面の笑み。なるほど、ベタ惚れなのか

「さて、今日はお疲れだったな。御褒美を用意させたから、明日の朝を楽しみにするんだな。じゃねぇ♪」

［フッ……］

「……消えた？」

まるで霧のように、あの二人の姿が無くなった。そして、屋上には彼一人だけになった……

「ったく、結局検証出来なかったし……」

本来の目的が達成できなくて不機嫌だったが、まぁ今後の事を考えれば身になる事になったなと思いこむことにした。そうでもしない

と、今にも人を殺しかねないからである

「さてと、もう遅いし、寝るか……」

しかし、今後もまた、あの神やあの腐痛の妹に翻弄され続ける、不遇な兄(あね)であった……

#5　検証のつもりが何故か修行に。テメェの所為だクソ神！！（後書き）

作「あの、神様……」

神「なんだ？」

作「前書きに出るのは、止めて頂きたいのですが……あの場だけは、真面目に行っていきたいと思いますので……」

神「む、そうであったか。っていうか～、それなら早めに言って欲しいんですけどぉ～ｗ」

作「今回は、ギャル風ですか……」

神「言ったろ？　暴れまくるって♪」

作「出来たら、本編ではそのノリでいかないようにお願いします」

神「一応、善処する」

作「……はぁ～」

#6　朝起きたら人体改造されてた……はぁ、俺って不幸だな（前書き）

早朝に更新させてもらいます

未土井無視様、幻想の箱庭様、ＪＡＭ様、ご感想、ありがとうございます！！！　これからも、よろしくお願いします！！

#6　朝起きたら人体改造されてた……はぁ、俺って不幸だな

――――――そして、とある兄妹（しまい）の兄（あね）の絶望は、まだ続く……
――――――

転生してから、二度目の朝を迎えた……

「……ん、ふあぁ～……あれ？　私、何時の間に寝たのかしら……」

……すぐに嫌悪感が襲ってきた

「（不味い、完全に女になりかけてしまっている……）」

それはいかんと心に何度も言い聞かせ、直ぐにベッドから降りた

「はぁ、冷蔵庫の中、何残ってたっけ？」

『生卵が四つ、キャベツが一玉、そして未開封のベーコンが一つ、あと、棚に厚めのトーストが四枚あります』

「なら、簡単にサンドイッチでも作るか……」

そう言って、俺はキッチンに向かった……

□■□■□■

んで、シャワーを浴びた後……

「……さて、説明してもらおうか？　クソ神」

「おぉ、気付かれたか」

アンタの気配は読みやすいんだよ。つか！！　残しておいたサンドイッチ勝手に食ってんじゃねぇ！！！

「にしても、中々美味いじゃないか。ま、俺の嫁たちが作る料理の方が断然美味いがな」

「んなもん聞いてねぇ。つか、テメェ俺になんて事を……」

それは、シャワーを浴びている最中に気付いた事だった……

～～～数分前～～～

シャワーを浴びている時、ふと右腕に妙なモノがあった……

「……ナンダコレ？」

右腕の甲に、血のように赤い宝石のようなモノが“埋め込まれて”いた

『目が覚めましたか？　主』

その宝石が明滅し、声を発した……

「……」

絶句したさ、うん。いきなり腕に変なモノが付いていたら誰でも言葉を失うはずだ。俺はそれを取ろうとしたが……

「なんで取れんの？」

それは腕の甲にしっかりと喰い込まれており、引き剥がす事が出来なかった。無理に取ろうとすると、マジで痛かった

『私を引き剥がそうとなさっているのだと思いますが……申し訳ありません。主と私は神経や血管の一部が繋がっており、それらが脳に直結している為、無理に引き剥がしたら脳死してしまう可能性があります』

なにそれ？

『ちなみに、私のデータと、こうなってしまった経緯を含め、主の脳に直接送りいたします』

そう言った直後、急な目眩と吐き気、頭痛が起きた。しかし、それは直ぐに止んだ。その後には、コイツの事と、なんでコイツが俺の腕に嵌まっているのかが直ぐに分かった……

そして、真っ先に叫んだ

「あんのクソ神ィィィィィィィィッ！！！！！！」

～～～回想終了～～～

「なんでこんな事しやがった！！！　ちゃんとした理由言わねぇとブッ飛ばすぞ！！！」

「まぁまぁ、落ち着きたまえ。というか、怒ってばっかだなお前。カルシウムちゃんと取ってるか？」

誰の所為だ誰の……！！！！

「まぁ、それは俺からのプレゼントだよ。なにしろ、この世界にはデバイスという魔導端末があってな。それ無しでも魔法は使えるが、高威力の魔法を使うとなると、それなりのデバイスが必要でねぇ……だからだ。それに、もし高威力魔法をデバイス無しでやったら、実験台に寝そべる事になるぞ？」

……まぁ、そう言う事なら仕方ない、か……

「まぁ、色々使える設定は入れておいたから、まぁガンバレや。じゃ、バイバ～イw」

［フッ……］

またも、風が吹いたかのように、彼の姿が消えた

「神様は何でもアリってか？　ったく、だったら俺を男に戻して欲しいわ……」

まぁ、もうほとんど諦めてるけど

「さて……おい」
『何でしょうか、主』
「シャワー浴びた後、何するって言ってたっけ？」
『朝食の片付けです』
うし、ならさっさと終わらすか

□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■

海鳴大学病院

さてさて、お姉様がなんか振りまわされているような気がするけどそんなの関係ねぇ！！　的な勢いで、私は今、はやてちゃんと病院にいます！！
とりあえず、はやてちゃんの主治医である石田先生との信頼関係を築こうと思ったの。その方が、後々の事がやりやすいと思うからね（＾―＾）

「そんじゃ、ちょっと先生とお話するから、先に廊下の方で待っててね♪」
「はいはーい♪」

そういってちょっと渋々出ていくはやてちゃん……クッ、早く戻らねば！！　はやてちゃんが淋しがって死んでしまう！！！

＞私兎ちゃうわ！！＜と、はやてのツッコミが飛びそうな妄想であった

「あの、ビビさん？」
「あ、ごめんなさい。それで、お話というのは？」

まぁ、予想は出来てるけどね……

「えと、はやてちゃんの親戚の、グレアムおじさんの使いで来た方、ですよね」
「はい」
「それなら、はやてちゃんの容体の事は……」
「……はい、グレアム様から、お伺いしております」

一応、グレアムの使いできたヘルパーってことになってるから、不本意だけど、様付けしてやんよ

「ごめんなさい。今の医療技術では、あの子の足は、治らないのです……精神的なモノなのかもしれません。その線が、最も高いと診断しています」
「私も、そう思います」

実際は、闇の書によるリンカーコアの浸食だけどね……

「出来る事なら、はやてちゃんと」
「分かっております。あの子の事は、任せてください」

「では、よろしくお願いします」

そう言って、私は素早く部屋を出て、はやてちゃんと一緒に帰りました

そして、帰る道中……

「さてさて、はやてちゃん、今日のお昼ご飯は何にしよっか♪」
「せやなぁ……ちょっとあつなってきたから、うんと冷やしたざるそばがええかな」
「お、いいねぇ！　じゃぁ、スーパーに寄って行こ♪」
「うん♪」

くぅ……かわゆい……（＊＜＿＞＊）
さぁ、この調子ではやてちゃんとの仲を深め、そして、そして……
…クッフッフッフッフ！！！

とことん変態度が増していく、腐った妹であった……

□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■

ある兄妹（しまい）が使っているマンションの一室

なんか、あの腐った妹がまたなにやらやらかしたみたいだが……
……

「で、物置部屋になんでこんなファンタジーなモノがあるんだ？」

物置部屋（にする予定だった部屋）に行ってみれば、なにやら変な機械が置いてあった

『時空転送装置です。この転送装置は、時空管理局が管理、観測、または発見している世界以外の世界へも行く事が出来ます。更には、この転移装置での移動は、現在管理局が使用している探知魔法、並びに索敵魔法に感知されない仕組みになっております』

なにやら、便利なモノってわけだな

『この装置を使い、管理局が観測しきれない世界に参りましょう。そうすれば、例え大規模魔法を起こしても、管理局に見つからずに済みます。ですが、節度は守ってください』

つまり、有る程度はやりたい放題出来る世界に行けるって訳か

『ちなみに、ある程度戦闘出来るような世界もありますが、いかがなさいますか？』

ほう……後の事を考えれば、ある程度戦闘経験を積んだ方がいいな。なら、そこに行くか

『了解しました。それでは、転送ゲート、オープン』

［ヴォォォォォォン……！］

なにやら、機械の駆動音が聞こえたと思ったら、機械の中心が光りだした

『その光に入ってください。そうすれば、異世界に瞬時に転送します』

……SFだな、こりゃ……

「うし、なら行くか……」

軽い気持ちで入ったのが、間違いだった……

□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■

未確認世界

「さて、他の異世界とは、一体どんな世界なん……」

……なんか、浮いてね？　俺……

つか、落下してね！！！！！！！？？？

「なんで空中に放り出されるんだよ！！！？」

『申し訳ありません。座標設定に不具合が生じたようです』

説明はいいから！！　このままだとトマトのようにグチャリだぞ！！！

『ならば、飛行魔法の使用を提案します』

「飛行魔法！？」

『はい。全身に魔力を流し込み、空間に自分を固定するような感じで行えば飛べます』

全身に魔力を流し込む……？　魔力って、精神力みたいなもんだろ？　つまり、こんな感じか？

［ふわッ……］

あ、出来た

『お見事です、主』

なんだ、結構簡単だな、飛ぶのって……いや、“魔導の心得”のおかげか。なんとなくで出来たし

「うっし、じゃぁどっかそのへｎ「ギャオォォォォォォォォォォォォォォォッ！！！！」で……」

……ナニ、イマノオタケビハ？

『ドラゴンです。あの種は低くめのEランク程度ですが、火炎放射が使える種ですので、注意してください』

イヤ、ソンナノキイテナイ。オレガキキタイノハ……

『ちなみに、この世界には、ありとあらゆる神獣、魔獣、霊獣、聖獣、幻獣、妖獣、果てには魔人、獣人、架空の怪物といったモンスター達が住む世界です。簡単に言えば、“幻想種の住まう世界”。今後は“幻世”と呼称することを提案します』

なんでそんな世界に連れてきた！！！

『戦闘経験を積むには、モンスターなどと戦えば良いと判断しました。ちなみに、うじゃうじゃいますので』

……まぁ、どこぞのゲームみたく、まずは経験値を積めってことか

『ですが、ステータスマックス状態に、初期から最強装備といった状態からですが』

「そこは、まぁ妥協しよう」

レベル1で放り出されるよりまだマシだ。さて、と

「まずは、さっきのドラゴンでも狩るか……」

戦うにも、最強でも無手でやるのは自殺行為だ。まずは、武器を使っての戦いに慣れないとな……ってか、武器は？

『思い描いてください。あなたの特殊技能、“兵装錬製（ウェポン）”は、あな

たのイメージした武装を瞬時に作り出す能力でありますから』

そういや、そうだったな。あの妹にしちゃぁ、随分大層な能力を考えたもんだな

さて、イメージ、か……

「イメージしたモノを作り出す……そんじゃ、アレも出せるのか？」

そうして、右手を前に出し、脳内にある武器をイメージする。すると……

［ジャキンッ！！］

「出来たし……」

右腕に現れたのは、ＭＨＰ２Ｇをやっていた頃の俺がよく使っていた武器

龍属性の太刀“龍刀【劫火】”

「マジでそのものだな……まさか、能力も同じなのか？」

『はい。この太刀は、龍の因子を持つモノ全てに絶大な切れ味を発揮する龍殺しの刀です』

おいおい、マジでゲームのコレと一緒じゃねぇか……ん？　待てよ……

「まさか、こんな事も……」

出現した龍刀【劫火】を左手に持ち替え、またも俺は右腕を突きだし、イメージする……

［ジャキンッ！！］
「おぉ」

次に出したのは、片手剣の“独龍剣【藍鬼】”。俺が龍刀【劫火】を作った時、余った素材を使って作った片手剣である。付いてくる盾は左腕に既に装備されている

『お見事です、主。すでにその力を使いこなせましたか』
「いや、この程度じゃまだまだだ。次は、これらがホントに使えるか、試さねェとな」

そう言った瞬間

「ギャオォォォォォォォォォォォォォォッ！！！！」
「さっきのドラゴンか」

俺がコイツラを作った時に放出した魔力に反応したのか、さっき俺をビクらせたドラゴンがやってきた

「まぁ、これも今後のためだ。お前には悪いが、俺の成長の糧になってもらおう」

そして、太刀を背中に刺し、すぐさま鞘から抜き放った。右手に太刀を順手に持ち、片手剣は左手で逆手に持ち、太刀と片手剣の二刀流の体制になった

『戦闘サポートを行いますが、いかがなさいますか？』
「チュートリアルみたいなもんか。まぁ、頼むわ」
『はい、戦闘モードに切り替えます。“アクティベイトコンバット

モード”、作動』

コイツが埋め込まれている右腕に、力がみなぎる。それと連動して、体中に力が入る

『身体強化、完了。ブレインリンクシステム、正常。全システム、オールグリーン。行けます』

「さて、いっちょ殺るか」

そして俺は、ドラゴンに向かって、突撃した

#6　朝起きたら人体改造されてた……はぁ、俺って不幸だな（後書き）

作「えぇ、次回は突破記念座談会を行いたいと思います」

神「今回は俺も参加させてもらうぜ！！！」

作「というわけで、お楽しみに～」

１５０００ＰＶアンド２０００ユニーク突破記念座談会（前書き）

またもやってしまいました……

でも、後悔はしておりません！

１５０００ＰＶアンド２０００ユニーク突破記念座談会

作「祝！！！　１５０００ＰＶア～ンド２０００ユニーク、突破ァァァァァァァァッ！！！！！」

ビ「イエェ～～～イッッ！！！！！！！！」

神「ヒャッホ～～～イッッ！！！！！！！」

グ「やかましいわ！！！　ったく、毎度毎度……」

作「いやぁ、まさかこんなに多くの方々に見てもらっているとは……今作を見てくださった方々に、無上の感謝をささげたいと思います」

作・ビ・神「本当に！！！　ありがとうございます！！！！！」

グ「……つーか、なんでお前もいるんだ？　神様さん」

神「クックックッ。なーに、この座談会と言うモノに興味を持ってねぇ……強制参加したまでよ、クックックッ」

ビ「良いキャラしてるね、神様」

神「フッ。あわよくば、俺も原作介入に参加しちゃおうかなぁ～？」

ビ「言っておくけど、なのはちゃん、フェイトちゃん、はやてちゃ

ん、アリサちゃん、すずかちゃんの五人は上げないよ。あの子たち達は私の女（モノ）にするんだから……（黒）」

神「分かっている、それに関しては問題ない。なぜなら、俺には既に九人の妻がいるからな！！！！　フッハッハッハッハッハッ！！！！！」

ビ「ならよし（＾ー＾）」

作「言っておきますが、神様が介入という予定はございませんので、あしからず」

神「だが、予定は未定。もしかしたら、あるかもね……クックックックックックッ」

グ「で、今回は何をするんだ？」

作「前回の座談会の時に言えなかった。又は言いそびれた事を話していきたいと思います！」

ビ「題して！！！」グ「さっさと始めろ！！！！」

ビ「うぅ～（T＿T）」

作「兄（あね）がキレそうなので、さっそく行いたいと思います！！　まずは！！！」

～～～グレイの犯罪意識について～～～

グ「俺の事かよ」

作「まずはこれからです。これについては本人に聞くのが良いでしょう」

グ「いや、確かにこっちに来てからは、罪の意識が段々薄れてきたからな……なんでだろ？」

神「それはな。お前がそういう人間だったからさ。元からお前は犯罪者としての資質を持っていたのさ。だから、罪を起こしても、それがばれなければ問題ない、証拠を無くせばいい、消せばいい。だが、お前はこうも思っている筈だ。犯罪が楽しい、スリルがあって気分が良い。そう思っているのなら、お前は犯罪者として素晴らしい気質を秘めているぞ」

グ「いや、全然思ってないから。つか、どれも生きるためにやむなくやったようなもんだし……別にスリルを感じるとか、そんなの思っていないから……」

ビ「最初のチンピラに対する詐欺窃盗も、たしかにそうだよね」

グ「あれはお前が悪い。金も無しにファミレスに行こうなんていうからだ、このバカ妹」

ビ「グ……（―　―　ゞ）」

神「俺の言葉はなんだったんだろ……？」

作「まぁまぁ、そう落ち込まないでください……次！！」

～～～妹の性格が特殊な件について～～～

神「アニオタ厨二病、百合スキーにして腐女子……要素多くね？」

グ「知ってんのか？」

神「神に不可能はない！！！」

ビ「そんなに特殊かなぁ？　これくらい、普通だと思うよ？」

グ「明らかに異常だ」

神「アブノーマルだなｗ」

作「もう異端ですね」

ビ「ヒドイ……（；＿；）」

作「まぁこれぐらいしないと、真面目な兄との温度差を解消出来ないのでね」

神「たしかになｗ　堅物な奴には壊れたキャラがお似合いだな」

グ「……はぁ、その相手をしている自分の苦労を知ってほしいわ……」

作「では、次にいきましょう！！」

～～～今後の予定について～～～

作「えぇ、とりあえず今は作り置きしていたモノを最終推敲して載せてはいますが……」

ビ「あとどれくらいストック有るの？」

作「現段階（5月29日）で、あと七話ほど……」

グ「だせよ」

作「まだ推敲がうまくいってないですし……それに、番外編を二つほど書きたいから……それに」

グ「まだあんのかよ!?」

作「今作っている所の進みが悪い」

神「なんで？」

作「……戦闘シーンって、難しいですね」

ビ「あぁ……そこに引っかかっちゃったか（；一_一）」

作「いろんな二次創作の小説見ても、戦闘シーンの描写が難しいって言ってるし……ホント、難しいですね」

神「まぁ、頑張れw」

作「はい、頑張ります……」

グ「んで、今回は今だけか？」

作「はい」

ビ「またやるの？」

神「やっちゃうの？」

作「はい、やらせていただきます。今度は、５万ＰＶになった時にでも……」

グ「あっそ」

作「今後とも、今作の事を、よろしくお願いします」

ビ「では、また次回まで！！」

作・ビ・神「ばいば～い！！！」

グ「……はぁ……鬱だ……」

150000PVアンド20000ユニーク突破記念座談会（後書き）

神「ところでさ、今回のお題はなんだったのさ？」

作「……まぁ、アレですよ、アレ……」

神「考えてなかったな」

作「……はい」

神「ヴァカが」

作「これからは、気をつけます。だから、応援、よろしくお願いします……」

#7　まさかの原作キャラとの初遭遇。って、今思えば俺、“犯罪者”だな

連続投稿です

#7　まさかの原作キャラとの初邂逅。って、今思えば俺、“犯罪者”だな

――――――そして、とある兄妹（しまい）の兄（あね）は、意外な形での邂逅をする……

……

転生してから、一週間が過ぎた……

《というわけだから、介入する時にちゃんと話をさっき言った通りに合わせてねぇ～。じゃ（＾＾ゞ》

ふざけんなあのクソ妹……

俺たちは、こうした念話で連絡を取り合う事をした。しかし、それだけならいいのだが……アイツが色々仕切り始めやがった。その内容を簡単に申し上げますと……

・俺の事はアイツの姉と紹介した事

・アイツは自分の事を“ビビ・スティン”と名乗ったから、それに合わせた名前を考えておく事

・未だに猫姉妹からのちょっかいが無いから、一応俺も警戒しておいてとの事

以上、三点。これを命令された。まったく、我儘な妹だ事

『しかし、どうなさいますか？　名前』

そうだな……前の名前を使うわけにもいかんし……

「……適当に“グレイ”、“グレイ・スティン”でいいか。男っぽいが、まぁいいだろう」

投げやりに考えたが、まぁ、語呂はいいので。つか、考えるのめんどくさいし……

「……そういや。お前、名前はなんていうんだ？」

今まで一度も気にしていなかったが、そういやこのデバイスの名前、聞いてなかったな

『いえ、私には名前なんてありません』

「は？」

無いのか、名前が

『開発コードは、ｉｎｔｅｌｌｉｇｅｎｔ　ｄｅｖｉｃｅ，ｔｙｐｅ　９６１２７５３８０７－Ｒ２４１でした。それが私の名称でしたが、いかようにもお呼びいただければ結構ですので』

ナゲェなオイ……ならこの際だ。コイツの名前でも考えてやるか

「……しかし、何が良いだろうか……？」

さっきのは自分に関する事だから、適当にしたが、他の奴の事となると、少し真剣になってやるか……

「そうだな……じゃぁ、“タマモノマエ”、なんてどうだ？」

日本三大悪妖怪の一人、“玉藻御前”。平安時代末期に鳥羽上皇に仕えた架空の絶世の美女。“白面金毛九尾の狐”が化けた女性で、天下一の美女であり、国一番の賢女だと言われていた女性の名である。インテリジェントデバイスってんなら、賢いんだろうし、コイツは女の声で話してくるから、丁度いいだろう

『“タマモノマエ”……かしこまりました、登録しておきます』

まったく、なんかコイツは機械的だな……いや、機械だったか

『主、そろそろ時間です』

「んお、そっか。ありがと」

さてさて、今日の昼飯としますか……

［パカ］

［グツグツグツグツッ……］

「うん、良い感じだな」

えっと……確か、今日のメニューは……

・キュクロプスと呼ばれる一つ目の魔人の目玉を煮て出汁をとったモノに、幻世で採ってきた大根や白菜みたいな野菜と昆布みたいな海草、ヤタガラスという怪鳥の肉をブチ込んだ味噌汁（味噌は市販のモノ）

・（昨日の夕食の残りだが）ミノタウロスの肉を挽いたハンバーグ

・竜種（リオレウス原種っぽかったな）の舌をスライスして、肉食植物（大きなラフレシアに牙みたいなのが付いた）の花弁を焼いてスモーク状にしたスモークベーコン
・金色の牛（多分、ギリシャ神話のミノス王のあの牛）の乳を（アレ乳牛だったんだな）絞り取った牛乳で作ったチーズ
・そしてただの白いご飯（ただし、前述のキュクロプスと呼ばれる一つ目の魔人の目玉を煮てとった出汁で炊いた）

「昼間っから豪華だな……ま、材料費が浮くから別にいいがな」

素材は幻世で採って来るモノで、こっちで買うのは精々米や麺、パンなどの主食の材料に、調味料だけである。それ以外はすべて幻世の生物を捕獲、狩猟して採って来るのである

さて、そろそろ突っ込もうか。なぜこんな事をしちゃっているのか！！！

～～～四日前～～～

幻世での検証（という名のモンスター虐殺）を行っている中

［グゥ～～～］

「……腹減ったな」

色々動いてたから、腹も減ってしまう。しかし、今日の検証分の事は終わっていなかった……いったん戻るか？

『それでしたら、そちらのモンスターの残骸を食べたらどうです？』

何を言ってるんだ、コイツは

『これらのモンスターには、毒物が検出されていません。問題無く食べれます』

「あいや、そういう問題じゃなくて」

『家に戻っても、冷蔵庫の中、及び棚の中にも何もありませんが』

そういや、今日買いに行こうとしたんだったな。すっかり忘れてたつか、モンスターを食うって……

『ここに塩とコショウを持ってきておりますので、魔法で焼いて食すのが良いかと思います』

用意周到だこと。始めからこうなる事を予想してやがったな、コイツ

「まぁしょうがない、少しワイルドだが、それしか無いみたいだな」

んで、近くにいたモンスター（ＦＦに出てくるバジリスクっぽいモンスター）から肉を剥ぎ取り、細い鉄の棒を造り、それにブッ刺し、塩コショウを撒いて火炎魔法でこんがりと……

上手に焼けました～

……まずい、精神が崩壊しかけてんな……つか、あれメッチャ記憶に残るんだけど

「さて、そんじゃ頂きますか」

と、パクッと一口……

「……あれ？　美味いじゃん」

ただの塩コショウで焼いただけだが、かなり美味だった。噛んだ瞬間直ぐに噛み切れてしまい、口の中ですっと溶けるように無くなって行った。そこらの高級焼き肉屋の肉なんかよりもずっと美味かった……

この日から、俺の食事の基本材料は、幻世から調達してくるのであった

～～～回想終了～～～

というわけで、頂きます。うん、今日も美味いな

「しかしまぁ、ちょっときつい様な気がする……」

『何がですか？』

「いや、俺の能力だ。あのクソ神の言う事が正しければ、デバイス無しで高威力魔法を使うのはキツイって話だ」

『あぁ、なるほど』

「だが、お前だけの力であれだけの事をするってのも、正直な」

まぁ、つまりだ。コイツはクソ神が造ったデバイスで、おそらくそこらの……主人公の高町なのはが持っているレイジングハートなんかよりも断然高スペックと考えてもおかしくない。それに俺はデバイスなんか持ってなくても変わらない能力を持つと聴く。コイツはカモフラージュの為に持っているようなもんだ（あと、データを修めておくのにも役に立つがな）。そんないきなり出てきた奴が、そんな高スペックのデバイスなんか持って出てきたら、そら検査と称した実験をされる羽目になりかねん。つまり……

『私以外にも、他にデバイスを持っていた方が何かと怪しまれずに済む、と？』

「あぁ、あとあのクソ妹の分も、二つほど造らねぇとな」

となると、デバイスの基礎知識が要るな……

「おい、デバイスに関する情報を送ってくれ」

『……』

？　どうした？

『申し訳ございません。デバイスに関する情報は、登録されておりません』

は？

『私に登録されている情報は、貴方の身体データと、貴方に関する情報、生活でのサポート。そして、あの転送装置の制御プログラムと、戦闘サポートプログラム。の、五つです』

あのクソ神め……色々積め込んであるからって言っておきながら

……

『どうなさいますか？』

「こうなったら、情報を仕入れるしかないだろう？　どこに行けばある」

『時空管理局のデータバンクに……一番情報量が多いのは、“無限書庫”と呼ばれるデータベースです』

ほう……んじゃ、一足早いが、ちょっくら行きますか

□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■

時空管理局本局、廊下

さて、あの転送装置で気付かれず転送して（ついでに、管理局の一般局員の制服を着て偽装している）来れたのはいいが……

「（どこにあんだよ、無限書庫って場所は！）」

標識や道案内でも掲示してんのかと思いきや、全然んな配慮してねぇじゃねぇか！！！

《迷子、でしょうか？》
《かもな……》

はぁ、最悪だ……

《人に聞いた方がよいのでは？》

だな……しかし、デバイスがこうなんだと、怪しまれるな……

というわけで、コイツのカモフラージュとして、カードのようなモノを造り、コイツの仮の体にした

「（さて、んじゃどっかに……あ、ガキが二人いる。つか、犬耳と尻尾が生えた女がいるし。いるんだな、そういうの）」

ファンタジーにはもう慣れしまい、何があってももう驚かない。って、んなこと考えてる場合じゃねぇな。えっと、口上は……うし、これで行こう

□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■

グレイの近くにある休憩室。そこには、黒と蒼の中間の色の髪をした少年と、金色の長髪を白っぽいピンクのリボンでツインテールにしている少女、それにオレンジ色の犬耳にふさふさの尻尾を生やした女の人の三人がいた

「これで、嘱託魔導師の試験を受けられる。これさえ合格すれば、裁判では確実に無罪になるよ。まぁ、余程の事がない限りだけどね」
「うん。ありがとう、クロノ」
「いや、当然の事をしているまでさ」

執務官をしている彼にとっては、やらなければならない仕事だ。本来なら、礼など要らないのだが、彼女の性格を考えれば、まぁ素直に受け取っておこう

「はぁ。やっぱ管理局って、色々メンドくさいねぇ……」
「アルフ」
「うう、分かってるよ、フェイト～……」

はぁ～、とため息と連動して、耳と尻尾が垂れ下がり、それを見たご主人様は、クスリと小さく笑った
そんな穏やかな雰囲気を見ていた少年に

「あの、すみません」
「「？」」

一人の女性局員が話しかけてきた。身長は男でもそうそういない１８０センチを軽く超え、手足は細く長く、スタイルは抜群と言ってもいい。さらりと長い黒髪をストレートに下ろし、彼の母親にすら匹敵するほどの美しく整った顔立ちをしている。おそらく、どこかのモデルと言ってもおかしくない程の美人であった

「えっと……“無限書庫”に行きたいのですが、その、どこにあるのか、分からなくて……教えていただきたいのですが……」

なんと間抜けな局員なんだろうと思ったが、一応場所のデータは本局にいる局員なら手持ちのデバイスに登録されているはず……それを言ったら

「すみません。つい先日、本局の方に異動となったので……まだ、データを受け取ってなくて……」

はぁ。まったく、この人の上は何をしているんだ……しょうがない

「とりあえず、マップデータを渡すから、デバイスを」

「は、はい」

そう言って、彼女はカード型のデバイスを出し、僕も自分のデバイス、S2Uを出して、データを送った

「ありがとうございます。では、失礼します」

と言って敬礼し、同じ敬礼で返して、彼女は歩いて行った……

「綺麗な人だったね」

「まぁ、フェイト程じゃないよ。フェイトだって、成長したらアレくらい綺麗になるって」

「ありがと、アルフ」

……腑に落ちないな……無限書庫に何の用があるんだ？

あそこは今はほとんど使われていないはず。それに、異動してきたと言ってたが……こんな時期に異動なんて、珍し過ぎる……

［ピッ、ピピピッ］

「？　どうしたの、クロノ」

僕の予想、外れてくれるといいんだがな……

□■□■□■

「全部。ってか、入りきるか？」
『問題ありません。私はあと１００兆テラバイト以上のデータを納める事が出来ます』
無駄に容量デケェな……まぁ、それなら問題ないな。さてさて、さっさとこんなコソ泥みたいな事終わらせたいぜ……
って、呑気にしてたら
「何をしている」
「……」
マジか？　まさか気付かれた？
《おい》
《サーチャー、及びデータ摘出に関しての偽装は問題ありません》
ならなんで怪しまれている。つか、アイツ……さっきのガキじゃねぇか
「さっきは聴かなかったが、君の配属先と、なんの理由でここにいるのか、答えてもらおうか」
チッ、感の鋭いガキだったのか？　まぁいい
「情報統括課です。上司から、このデータをここに送るようにと言われてここに。重要なデータですので、直接ここに運べと言われました」
そう言ってこのガキにデータを見せた。実はこれ、こんな事もあろうかと造っておいたダミーデータなのであった。ちなみに、配属先

の事は、事前に調べておいたのを言ったのである。これぐらい用意しておけば、ある程度は騙せると思ったが……

なんか、嫌な予感がしてきた

「……申し訳ないが、昨日本局の情報統括課に異動になった局員はいないと、人事部の方が言ってきたが」

……予感的中。まさか調べるとはね……しかも人事部とは……してやられたな……

「悪いが、拘束させてもらう。素直に従えば、弁解の余地はある」

んなわけにはいかんのだがねぇ……

《主。データの摘出、完了しました》

《ナイスタイミングだ。作戦Ｅ‐ＤＰで逃げる、捕まる前におさらばするぞ》

《了解。転送装置起動、Ｅ‐ＤＰプランで撤退します》

そう言って、すぐさま転送。ついでに、コイツをプレゼントっとんじゃな

［バシュンッ！！］

「！！？　逃げた！？　エイミィ！！」

《転送反応……確認！！　まだ本局内にいるよ！》

「直ぐに武装局員の配置の申請を！！」

《すでに申請済みだよ！　直ぐに配置させる！》

□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■

……で、行ったみたはいいが……

【そこには、〔残念でした、コレは人形でーす〕と顔に書いてあった人間大の人形が置いてあった】

してやられた。まさか同じ反応を出すダミーを本体の転送と同時にここに置いていったみたいだ

「エイミィ、本体の方は？」

《ごめん、見失っちゃった……結構用意周到だったみたい……》

まずいな……多分、本局のデータを奪われた。どんなデータが盗まれたのか、後で確認しなければ……まったく、大きな事件を解決した後だって言うのに……

そしてコレは、後に“本局データ窃盗事件”として言われるが、後で盗んだデータがミッドチルダの過去の犯罪のデータだったというのが（無論、そういう風に仕組んだ）判明し、あまり大きく取り扱われず、一ヶ月後、闇に葬られた。さらに、グレイ・スティンが逃

げる直後に、記憶操作の魔法とデータ消去のウィルスによって、ほとんどの局員、及びデータに彼の顔を記憶しているモノは、いなかった……

#7　まさかの原作キャラとの初遭遇。って、今思えば俺、“犯罪者”だな

神「なに連続で投稿してんの？」

作「はい、ごめんなさい。今調子に乗っています、はい」

神「まったく……それと、今回はデバイス紹介をすんだろ？」

作「あ、はい。前話で出たグレイのデバイスを紹介したいと思います。では、どうぞ」

“タマモノマエ”

右腕に内蔵されているインテリジェントデバイス。略称“タマモ”。

ＢＬＳ（ブレインリンクシステム）を搭載している事により、彼（かのじょ）が使える“魔導の心得”が使用可能。つまり、どんな魔法でもこのデバイスの任意で発動出来る。

また、ＡＩはレイハやバルディ以上に高性能

・“ブレインリンクシステム（ＢＬＳ）”

直訳した通り、脳とデバイスコアが直結するシステム。彼（かのじょ）の思考を高速化し、コンピュータと直結出来る（“勇者王ガオガイガー”の‘エヴォリューダー’と同じと考えてくれればよい）。更には、デバイスにあるデータを彼女の脳に送る事も出来る為、必要なデータをデバイス内に収め、要がある時に引き出す、と言った事が出来る

作「……以上です」

神「妖怪の名前を使うたぁ、ねぇ……」

作「アテナとかでもよかったかなと思いますが、和名で行きたかったので、この名前にしました」

神「つか、こんな名前を知っているとは……兄(あね)はほんとは厨二なんじゃねぇのか？」

作「妹の影響を少なからず受けているからかと……」

神「かわいそうにw」

作「今日は、あと一話載せる予定ですので、よろしくお願いします」

#8　守護騎士登場！！　って、なんか前フリ長くね？（前書き）

今日の最後の更新になります

あと、今日中に、更新してきた物の確認をし、編集するかも知れません

大幅に変わってしまうかもしれませんが、申し訳ありませんが、ご了承ください

ＪＡＭ様、青いタヌキ様。ご感想、ありがとうございます！　これからも、今作をよろしくお願いします

#8　守護騎士登場!!　って、なんか前フリ長くね？

――――そして、とある兄妹（しまい）の妹は、今の生活に満足しているようで……――――

6月3日、八神家……

さてさてさて、読者の皆さま、お待たせしました。いよいよです、いよいよですよ……

いよいよ、ヴォルケンズが現れる前日になりました!!!

え？　展開早くねって？　っていうか、これでも遅い方だと思いますよ。だって、他のA、s二次創作見てても、はやてちゃんサイドにやってきた場合、5，6話位でヴォルケンズと会ってるんだよ？　それに比べて、こっちは8話目。遅すぎだっつうの!!!　プロローグ入れたら9話だよ？　チョー遅すぎ!!!　いままで、お兄ちゃんが色々やってきた場面だらけだったと思うけど、ここから先は私のターン!!!　ここからは、私とはやてちゃんとヴォルケンズの、蒐集活動が始まるまでの温かな私生活をお送りする番なんだから!!!!

え？　もうメタな発言止めろ？　分かったわよ……（―｜―；）

あ、ちなみに今は、はやてちゃんと一緒にお夕食を作っています（

＊＾―＾＊）

「ビビさ～ん。そっちの材料、切ってくれへん？」
「はいは～い♪」

はぅぅ～……植田佳奈さんの関西弁ボイス……和むなぁ～……
……
さてさて、お夕食の準備完了！　ではでは……

「「いただきます♪」」

はやてちゃんと二人で食べるご飯。はう～、し・あ・わ・せ～（＊＾＾＊）

「そう言えば、明日だよね、はやてちゃんのお誕生日」
「あぁ、せやったなぁ……明日から、うちは９才や」

うん、９才なんだよね……本編みた時もだけど、私よりも大人びてて、ビックリしちゃったよ

「そういえば、ビビさんは、いつ誕生日なん？」
「私は８月１６日。今年で１１才だよ」

そう言ったら……

「うそ！？　ってことは、今は１０才っちゅうことですか？」

うそって、私どんな風に見られてたんだろう……（；一―一）

「全然、大人っぽくて、美人さんで、そうは見えへんかったわ……

……／／／／／」

う、うれしい事言っちゃって！！！　ヤバい、ハグしたい！！

「てっきり、介護ヘルパーなんてやってるから、高校生くらいやと……」

まぁ、そうだよね。普通だと、１０才って小学五年生なんだよね…

……

え？　なんで小５の女の子が深夜アニメのリリなのとか、色々な事知っているのかって？　Ａ〇－Ｘとかキッ〇ステーシ●ンとか、〇ニマ●クスとか見てたからかな……

それに、私のお母さんがそういうの好きだから、その影響で、ね☆

つまり、この妹の性格は、コイツの母親が原因なのである

「１１才で、もう仕事しとるんや」

「っていっても、まだまだ学生みたいな感じで、今回は実地演習みたいな感じなんだよね。あはは。それに、グレアムさんからも、年の近い子の方が行ってくれれば、早く仲良くなって、良いかもって思ったみたいで……」

「……そうなんや、グレアムおじさんが……」

フッ。やりたくないけど、アンタの株を少し上げてやるよ。っていうか、グレアムの名前出す度に殺気とか当てないでよ、猫姉妹～（――；）

「後で、ありがとうの手紙、出さなあかんな」

「そうだね～」

まぁ、グレアムにはあんま良い感情は浮かばなかったけど……この際はしょうがない。今露骨に嫌な空気を出すわけにはいかないもんね……

「はむ♪　ん～～～♪　やっぱはやてちゃんの作る料理はおいひ～～～？」

「ふふ、ありがとな♪」

そうして、夕食を終えた私とはやてちゃんは片付けをしていて……

……

［プルルルルルルルッ］

「あ、電話や。誰やろ？」

「私が出るね。」

はて？　確かこのタイミングの電話って……

［ガチャッ］

「はい、八神です……あ、石田先生。どうも御無沙汰しています」

あぁ、確かあったね。あの時は留守電だったかな？　まぁ、どうでもいいよね

んで、会話の内容は本編同様、明日の誕生日の事になり、明日にはやてちゃんと一緒に夕飯を食べに行こうという事になったんだけど……まぁ、次の展開が、ね……とりあえず、断るのはおかしいと思い、そのまま了承して電話を切った

「石田先生、なんて？」

「明日のはやてちゃんのお誕生日、なにかお祝いがしたいんだって」

「ほ、ほんま？　もう、そんなんいらんのに……気持ちだけでも、

十分やって」
「でもほら、せっかくお祝いしてもらえるんだから、誕生日の日くらい、甘えちゃえばいいじゃん♪」
「う～ん……そんなら、お言葉に甘えるわ」
「うん♪」

さて、んじゃ私はお風呂の準備にっと……

□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■

ある兄妹（しまい）が使っているマンションの一室

「……うし、こんなモンかな……」

奪ったデータを元に、デバイスとやらを作ってみたが……ちと色々やりすぎたな

『これら全部……一般に出回っているそこらのデバイスなんかより、ずっと高性能なのですが……』

あぁ、だからやりすぎた……

ちなみに、幾つ作ってしまったのかと言うと……

・ストレージデバイス、1基
・インテリジェントデバイス、3基
・非人格アームドデバイス、7基
・有人格アームドデバイス、1基
・ユニゾンデバイス（の基盤）、5基

計17基……あぁ、やりすぎたな……

「さて、どうしようか……」
『暫く保存させておき、時が来たら用途に合わせて使っていく。というのは？』

だな……

つか、改めて思うが、この“兵装錬製（ウェポン）”。それなりの知識と兵器という概念を持たせれば色んなモン造れるって、ヤバすぎだろ、こんな能力。ちなみに、デバイスもこの能力で造った。って、今はんな事はいいか

「まぁ、あとはコイツを……」

そう言って取りだしたのは、一基しか作らなかった有人格アームドデバイス。コイツは自分用に造った代物であり、今から俺の“左腕に埋め込む”モノだ。は？　なんで埋め込むのかって？　いや、そいつについては今は言えん、後でちゃんとわかるようにする

「ちょっとコワいが……頼むぞ、タマモ」
『かしこまりました』

そう言って俺は、デバイスの埋め込み作業を、開始した

□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■

八神家、はやての私室

「うんしょっと」
「いつもありがとな」
「いいのいいの。それに、はやてちゃん軽いから♪」

寝る前に、車いすからはやてちゃんを抱き上げて、ベッドの上に寝かせる作業。最初は嫌がってたけど、今はなんの遠慮も無くなっている……はう～、はやてちゃんを抱き上げる瞬間、すんごい幸せ～～～……

え？　なんで年近いのにはやてちゃんを持ちあげられるのかって？
そりゃ勿論あのチート能力で身体強化してるからだよ

「さてさて♪」
「？　ビビちゃん？」

私もそのままはやてちゃんの隣にベッドイン♪　こうしておけば、

すぐに守護騎士と出会えるしね♪
ちなみに、はやてちゃんが私をちゃん付けで呼ぶのは、さっきので年が近いってのが分って、さん付けで呼ぶのはどうなん？　って事になり、ちゃん付けで呼び合う事にしました♪　はうぅ～、良い響き＼（＊＜ｏ＞＊）／

「今日ははやてちゃんと一緒に寝ようと思ってね。いいでしょ？」

実はたまにこういう事をしているので、はやてちゃんも何も言わずに受け入れてくれます。いやぁ、はやてちゃんもまんざらじゃないみたいで……ちなみに、一緒に寝てる時何回か寝ぼけて胸を揉まれた事があって、その度に［ピー］が［ピー］でもう［ピー］ってしまって……
幸せです＼（＊＞＿＜＊）／

「そうなん？　でも、今夜はあんま眠くあらへんわ。なんや、明日が楽しみで」
「そう？　なら、眠くなるまでちょっと雑談でもする？」
「あ、ええなぁ。せやったらなぁ」

というわけで、はやてちゃんが最近読んでいる本の話をする事になりました。はやてちゃんの話は、どんなモノでもスンごく面白くて、楽しい事ばかりです♪　それに……

こういうのって、良いね……

□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■

ｐｍ１１：５８

「それでな……って、あぁ、もう１２時……」
「けっこう話したねぇ……」

さて、そろそろかな……

「……コォォォォォッ……！」
「？」
「（キタ！！！）」

突如、本棚の方から怪しい光が出てきた

「ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴッ！！」
「な、なんや……？」
「はやてちゃん……！」

私はすぐに震えるはやてちゃんを抱き締め、不安から守ろうとした。
でも、彼女の震えは止まらず、怪しい光の元……Ａ、ｓの中心であるロスト・ロギア、“闇の書”が宙に浮かび、起動を始めた

『Ｉｃｈ　ｅｎｔｆｅｒｎｅ　ｅｉｎｅ　Ｖｅｒｓｉｅｇｅｌｕｎｇ』

ベルカ式のデバイス特有のドイツ語の電子音が発せられ、闇の書は独りでに開き、何も書かれていないページがパラパラと開き始める

「あ、ああ……」

異常な光景に恐怖しているのか、はやてちゃんの震えは止まる事は無かった

「大丈夫、大丈夫だから……」

強く抱きしめ、少しでも不安をなくそうとする。そして、ページが全て捲られ

［バタンッ！！！］

閉じられた

……コワ。なにこれ、チョーコワかったんだけど……

そして、闇の書はゆっくりとはやてちゃんの前に降りてきて、更に光りだした

『Ａｎｆａｎｇ』

光と同時に電子音の声が鳴り、その後に現れたのは……

「「……！！！！！！？？」」

……黒い服を着た、３人の女性と、犬耳を生やした一人の男性だった……

「“闇の書”の起動を確認しました」

「我らは、闇の書の蒐集を行い、主を守る、守護騎士魔でございます」
「夜天の主の元に集いし雲」
「“ヴォルケンリッター”。なんなりとご命令を」
「「……」」
……ヴォルケンズキタァァァァァァーーーーーーーーーーーーーッッッ！！！！！！！！！！！！！／（ ゜∀ ゜）／

#8　守護騎士登場!!　って、なんか前フリ長くね？（後書き）

作「感想が増えてきた!!　本当にありがとうございます!!!」

神「よかったなw　こんな駄文に感想を下さる方がいて」

作「あれ？　いつもの調子じゃないんですか？」

神「何を言う。俺は読者（神様）には失礼のないようにしているだけだ。お前らにはいつもの調子でいじるがなw」

作「あぁ、そうですか……」

神「にしても、まだ原作開始点に行かんのか？　遅くないか？」

作「これでも早めたつもりなのですが……どうもやりたいことが多くて、こんなにグダグダな展開に……」

神「まぁ、文才ない上に、長く作りたがる性分が出てこんなにぐだるんだろう」

作「うぅ……」

神「まぁ、こんな作者ですが、これからもよろしくお願いしますわ。んじゃぁ　シーユー!!」

作「（超失礼じゃありません？……）」

#9　八神一家誕生！！　もちろん、私も含まれているよね？（前書き）

もしかしたら、今日はこれだけの投稿になるかもしれません……

……

がんばって書きますので、応援、よろしくお願いします

#9　八神一家誕生！！　もちろん、私も含まれているよね？

――――そして、とある兄妹（しまい）の妹と小さな主は、新たな家族を迎える……――――――

6月4日、am00：03、八神家……

……え、えっと～～～おはこんばんにちわ、読者の皆さま。え～っと、とりあえず、ヴォルケンズは来てくれたんですが……不覚でした（――；）

いきなり何を言ってるんだ？　と思うのも無理な事です。私だってわかんないんですから……

「あ、っと……（～＿～；）」

「？　？？」

「「「「……」」」」

はい。考えてませんでした、ヴォルケンズが現れて直ぐの事態を……いやいや、私とした事が……

原作だと、はやてちゃんが気絶しちゃって伸びるんだけど、今回は私がいた事により気絶せずにすんじゃいました。それにより、当初予定していた病院に運ぶというシナリオがぱぁです。やっちゃった

☆ＺＥ……やばい、空気が重い……

「あぁ……皆さまは、いったい、どちらさん、なんでしょうか……？」

とりあえず、聴いてみた。知ってるけど

「先ほど申した通り、闇の書の主を守る騎士、ヴォルケンリッターです」

や、あの、まぁ、それはさっき言ったような……じゃなくて、その……

「（なんて言えばいいんだろ？）」

混乱の極みであった。そりゃそうだよね、備えてはいたけど、やっぱりテンパっちゃうよね（；一＿一）

「ど、どうしよう、はやてちゃん……」

結局、縋るしかなかった……

「そ、そやな……とりあえず、ここで立ち話もあれやから、リビングの方に、移動しよ」

それが一番だね、うん

「ほんなら、あの、ヴぉるけんりったーのみなさん。ここは狭いですから、広い所に移動しましょ」

「いえ、問題ありません。こちらでも充分です」

「そ、そうなん？」

あぁ……仕方ないかな……とりあえず、なんとかしよう

「あの……ここだと、ちょっと話がしにくいから、だからリビングに、ね？」

「せ、せやな。とにかく、ここやと、色々落ち着けへんから、移動しような、うん！」

と言う事で、私たちはリビングに向かいました……さて、こっからが勝負だね……

□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■

んで、リビングに来ました

「あ、はやてちゃん。私、お茶淹れてくるね」

「あ、私も手伝うよ。あの、ヴぉるけんりったーの皆さんは、そこのソファでまっとってください」

そう言って、キッチンに行ってはやてちゃんと対策会議を開こうと思ったけど……

「いえ、結構です。主にお手間を掛ける訳には参りませんので」

ううう、シグナムさん……お願いだから、その、忠誠を誓うような体制、止めてくんないかな……それに、シャマルさんもヴィータちゃんも……つか、ザッフィーの人間モード、久々に見た気がする……

「そんな訳にはいかん！　お客さんが来たら、お茶を淹れておもてなしせな！」

「いえ、我々は客では無く……」

「それでもです！　とにかく、少しまっとってください」

……ちょっと意外な面が見れた気がする……って、んな事言ってる場合じゃないよね。とにかく、はやてちゃんと一緒にキッチンへゴー！！

□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■

さて、と……

「どうしよっか、はやてちゃん……」

うん、困ったね……だって、予定外な事が起きてテンパっちゃって、妙案が……（＊＿＊；

「と、とりあえず、まずは事情を聴かなあかんな。あと、どこから来たんかも……」

ううう……全部知ってはいるんだけど……今言えないのが何とも……

「じゃ、じゃぁ……それで行こっか」

「了解や」

んで、私たちはハーブティーを持って、ヴォルケンズの元へ……

ううう、何とかなってほしい限りです（一“一）

□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■

そして、３０分くらい後……

ヴォルケンズから、色々な事を聴いちゃいました。闇の書に関する事や、自分達の事。魔法の事も……まぁ、この辺りなら私は知ってるけど

「そっか……この子が、闇の書ってもんなんやね」
「はい」
「物心着いた時には、棚に有ったんよ」
つか、物心ついた時にはって、その頃からこんな厳つい本があったって事？　いやいや、そんな本があったら怪し見るって……
「綺麗な本やから、大事にはしてたんよ」
まぁ、確かにきれいな本だよね……
「覚醒の前と眠っている時に、闇の書の声を聞きませんでしたか？」
「う～～ん……私、魔法使いとちゃうから、漠然とやったけど……」
だよね。うん、普通はそうだよね……
「それで、どうするの？　はやてちゃん」
「うん、とりあえず分かった事が一つある。闇の書の主として、守護騎士達皆の衣食住、キッチリ面倒みなあかんゆう事や。幸い住むとこはあるし、料理は得意や。後は、皆のお洋服買わなあかんで、サイズ測らせてな」
「「「「……＞ぽか～ん＜」」」」
唖然としてらっしゃる……ま、無理もないよね。今までの主の中では、一番変わったタイプの子なんだと思うし……まぁ、だからあんな幸せな事が起きるんだよね……
「でも、はやてちゃん。今日はもう遅いから、とりあえず寝よ。は

ら、もう一時近いし」
「あぁ、せやね。ほなら、二階に空き部屋があるから、そこ使ってな。また明日に、サイズやら何やらせんと」
「「「「は、はい……」」」」
……さぁ、盛り上がってきたねぇ！！！　って、私の説明が抜けちゃった……ま、また明日にでも話しますかな……

□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■

翌日……
少し遅い起床の後、まずはヴォルケンズのサイズを測って服を買って（ザッフィーは狼モードになっちゃって不要だったけど、首輪とか犬用皿に水入れに……完璧にペットです、ありがとうございます）、新しい家具とか買って、人数分の食事も買って……
はぁ、お金が減って行く……まぁ、グレアムのお金なんだし、いっかw
そんで、あとは石田先生に説得を……さて、なんて言おうかな？
予定通り、はやてちゃんの遠い親戚っていう事で行くかな……
……
っていうか、色々慌ただしいです（一“一）

「なんやぁ、楽しいなぁ」
「だねぇ♪」

でも、なんか楽しいです♪　好きな人と一緒にいるのもだけど、色々とあって日々が充実しています♪

「あの、スティン殿……」
「ほえ？」
「少し、お話があるのですが……」

Ｏ☆ＨＡ☆ＮＡ☆ＳＩじゃ、ないよね……まぁ、多分この力を感づいたのかもね……うし、ここは予定通りにいくか（＾ｰ＾）

□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■

んで、とりあえずはやてちゃんに聞かれないように二階の空き部屋（現シグナムとシャマルの部屋）にきました……

「で、お話というのは……私の事ですか？」
「はい、その通りです」

やっぱり（＾―＾；）

「まず言いたい事は一つだけ。私ははやてちゃんの味方、これだけは絶対に約束できる」

これだけじゃぁ、納得できないかもだけど

「それは、主の貴女への態度と雰囲気で察しましたが……」

あれ？　意外と物分かりが良い……

「膨大な魔力反応と、そのほか、未知の力を持っているようですが……貴女は、いったい何者なのですか？」

なるほど。身内の事は知っておきたいってわけね……じゃあ、ちょっと色付けて話すかな（＾，＾）

「じゃぁ、まず建前から……私は、時空管理局本局にいる“ギル・グレアム”提督のご命令で、現闇の書の主、八神はやてと接触し、行動を共にするよう命じられたモノです」

「管理局！！？」

［チャキッ！！］

ちょっ、ちょっと待って！！！　だからそれは止めて！！！　つか！！！

「建前は、ね」

「建前？」

そう、落ち着いて。落ち着くのよ私……そう、１，３，５，７，１１，１３，１７，１９……うん、素数を数えればいいんだから

……うし！！

「私は、それを建前にして行動するように言われてね。本当のクライアントは別にいる」

「……そのクライアントは、何故闇の書の主を狙う」

「クライアントの言葉は……彼女を救ってほしい。闇の書という呪いから……一人ぼっちの寂しさから……と」

本当は、私の願望なだけなんだけどね

「……そのクライアントとは、何者だ？」

……じゃあ、まず一言……ごめんなさい！！

「神様です♪」

「……はい？」

予想通りの反応。だよね、そうだよね、そういう反応しちゃうよね……あぁ、そんな目で見ないで、シグナムさん……（；T－T）

って、今は真面目になろう！！！

「私は神託に従い、“八神はやて”を救済せよと神に申し使わされました。あの子は幼い時にご両親を亡くし、それでも優しい少女として育った事に、神は心震わせ、私に彼女の救済を命じました。私はあの子の事が心配だったので、その案に乗り、こうしているわけです。その時に、私は人外の力を授かり、異常なほどの魔力を保有しているわけです」

「つまり、貴女は元は一般人、だったという事ですか？」

「えぇ。はやてちゃんの事をよく知るただ人間でした」

脚本通りｗ　さてさて、どう反応する？

「……信じがたいな」

やっぱり（Ｔ＿Ｔ）

「だが、貴女の目を見る限り、嘘ではないみたいですね」

へ？

「……分かりました、貴女を信じます。他の守護騎士には、私から伝えておきます」

あれれ？　シグナムさんって、こんなにモノ分かりが良い人だっけ？　まぁ、並行世界の可能性という事にしておこうっと

にしても、違和感が……まぁ、いいけど

「だが、もし主を裏切るような事があれば……」

［チャキッ］

そう言った瞬間に雰囲気が一変！！　彼女は愛剣であるレヴァンティンを私の喉に突き立てた。って、コワ！！！　やっぱコワいなぁ、コレ……他の二次創作の主人公達は良くこんなことされてんのかなぁ？　まぁ、今すぐ引かせるけどね。ある方法を使って、ね……

……グッフッフッフッ（＊＾＿＾＊）

「大丈夫よ、神と名誉に誓って。それに、私はそんな事を絶対にしないわ……」

「なぜそう言いきれる」

「だって、私ははやてちゃんの事、大好きだから♪」（ニコッ）
「っ！！！？／／／」

フハハハハハハハハハハッ！！！！　決まった！！　私の“必殺女落としマジ惚れさせちゃうの笑み”！！　これで私のハーレムにまた一人よ！！！　この調子でヴィータちゃんもシャマルさんも落としてやるわ！！！　グッフッフッフッフッ！！！！

こんなアホな考えをしている妹はさて置き、そんなアホなことの影響を受けた相手はと言うと……

「そ、そうか。失礼した！　スティン殿（な、何を動揺している。私とした事が、女の笑みに、動揺するなど……えぇい、今は落ち着け、落ち着くんだ！！！）」

被害者二人目。烈火の将、ここに墜ちる……

「あ、それと……私の事は、ビビって呼んで。ちなみに、殿とか、そう言うのも付けないように、ビビってね♪」
「あ、あぁ、承知した、ビビどｎ「ビビ！」ッ……ビ、ビビ……／／／／／／」
「うんうん♪　これからもよろしくね、シグナム♪」
「あ、あぁ。こちらこそ……ビビ」

はい、完璧に私の女（モノ）になってくれました♪　え？　自重？　する気ないけど♪

□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■

「カァーカッカッカッカッカッカッカッ！！！　いや、マジウケるんですけど！！！　俺ってそんなに慈悲深い設定なんだなぁ。いやいや、滑稽通り越して大☆爆☆笑なんですけどぉ！！！？　カァーカッカッカッカッカッカッカッカッ！！！！！　なな、お兄ちゃんとしてはどう思う？　なぁなぁ？」

「テメェ、少し黙ってろ……つか言葉の中に星マークとかいれんな、キメェ……」

場所はある兄妹（しまい）が使っているマンションの一室。デバイスの埋め込み作業中にいきなり出てきた神と一緒にあの妹が何をしているのかを一緒に見ようと言いだし、それで見ていたが……

ハッキリ言うと、彼（かのじょ）は全く見ておらず、作業に集中していた。他に思っていた事と言えば……

「（俺の介入まで、後半年近く、か……）」

自分の心配だけであった

「おいおい、こんな面白いモノを見ないのか？　勿体ないぞ、おい」

「どうせ下らん事だろう、見る価値がない」

「枯れてるねぇ。ま、別にそれでも構わんがね」

……この神、そう言えばしょっちゅう俺の所にくんな……

何考えてんだ？

「いやいや、人を転生させたのって、今回が初めてなんでねぇ、ちと色々不安なんだよ。ちゃんと能力が使えるのか？　とかね」

……このクソ神、マジで殺してぇ……

「ちなみに俺はそう簡単には死なんから、殺そうとしたって無理だぞw」

……この態度、マジでムカつく……だが、逆らったって無意味な為、あえて反抗はしない

「さてさて、おもろいモン見れたし、帰るか」

［フッ……］

またも、風が吹いたかのように姿を消した

「さて、続けるか……」

またも彼は、自身を傷つける作業を再開した

#9　八神一家誕生！！　もちろん、私も含まれているよね？（後書き）

作「次回は番外編でも投稿したいなぁ……」

神「作っても無いものを投稿したいなんて言うな、ボケなす」

作「……作るか」

神「構成もまともに出来てないのによく言うな」

作「はい、ごめんなさい……」

神「やることもいっぱいあるんだからよ、今日はこれくらいにしておけば？」

作「そうですね、ストックも無くなってきてるし……こりゃぁキツイかも」

神「ダメ作者め」

作「ごめんなさい……」

番外編　鉄槌と湖の騎士が墜ちる時、変態腐女子は笑うｗ（前書き）

なんとか間に合いました、番外編です

ですが、（ある意味）重要シーンが含まれています（かと……

…）

どうぞごゆっくりご鑑賞ください

十六夜様、幻想の庭師様、未土井無視様。ご感想、ありがとうございます！！

番外編　鉄槌と湖の騎士が墜ちる時、変態腐女子は笑うw

――――そして、とある兄妹（しまい）の妹は、さらなる欲望を満たすため、行動を開始した……――――

グッフッフッフッ（＊＾―＾＊）　やっとヴォルケンズが登場し、面白い事になってきちゃって、もう笑いが止まらないってばよ！！！

まずはシグナムを落としたことで、ヴォルケンズ全員から信頼を得る事が容易に行う事が出来た……だが

「ねぇねぇ、何してるの？」
「うっせ、お前には関係ねぇよ」

ただ一人、ヴィータちゃんだけが、未だに信頼を貰っておりません……くぅ、結構頑固ちゃんだなぁ。それに、私と絶対に顔を合わせる事もないし……チッ、顔を合わせなければ、あの行為が出来ないジャマイカ！！！　そう毒づいていた

そうしながらも、時間はゆっくりと流れていく……

□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■

そして、ヴォルケンズが来てから、一か月が過ぎました

「「「“ぷーる”？」」」

「そや。この前、新装開店した温水プールがあるんよ。前、石田先生から無料チケット貰ってな。私の足の治療にも、って。だから、皆で行こうと思て」

温水プールかぁ、いいねぇ。水着姿のはやてちゃんやシグナム、ヴィータちゃん、シャマルさんを拝めるのね……ヤッバイ！！！　鼻血がでる！！！　出ちゃうよ～～～～～！！！！！！（＊＜＿＞＊）

「賛成！！　私は大賛成！！　他の皆もそうだよね！？」

興奮状態の妹の言葉はよそにして、守護騎士達はというと

「私も賛成です。ね、シグナム」

シャマルも賛成し

「はい、私も賛成です」

シグナムも同意し

「はやてが行くなら私も行く！」

ヴィータも行きたいと願った

「うし、ほなら明日行こか！　って、あ……」

「？　どうしたの？」

はやてが、申し訳なさそうに、有る一人……否、一匹の方を見た

「ここのプール、ペット連れてくるの禁止になっとる……」

「「「「あ……」」」」

「……」

もはや、完全にペット扱いにされてしまっている、守護獣であった

……

と言うわけで、ザフィーラはお留守番になりました

□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■

というわけで、来ちゃいました！　遠見市リゾートプール！！　この日のために、全員水着を購入したのは言うまでもない！！！

「ほなら、着替えていこか」
「は～い♪」

ムフフな水着に着替える為に……女子更衣室へＧＯ！！！（＊＾―＾＊）
あぁ、皆の水着姿、たんのしみ～♪

□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■

そして場所は、女子更衣室……

「うわぁ、やっぱビビちゃんって、スタイルええなぁ」
「そうかなぁ？　確かに、胸だけは大きいけどねｗ」
「ええなぁ、うらやましいなぁ……」

……まさか、来るのか！！？

「う～～ん……えい！」
［もみゅ］

「ひゃんっ！？　も、もう、はやてちゃん！」
「う～ん、やっぱビビちゃんの胸は揉み心地えぇなぁ……」
ううう！！　そんな事言わないでよ！！　濡れちゃうよ～～ッ！！！！（＊＜＿＞＊）
「は、はやてちゃん、その……周りの人が……」
シャマルが、心配そうにそう告げた。そう。この行動を見て、周りの人が凝視してきたのである。だがそんな事ももろともせずに
「ふえ？　別にええやん、女の子同士なんやから」
そう言って、未だに私の胸を揉みまくるはやてちゃん……
……も、もう……限、界……！！！
「うりゃッ！！！」
［もみゅ］
「うひゃぁ！！？」
揉まれたら　揉み返してやれ　揉み魔へと……
「ビ、ビビちゃん！！？」
「散々揉まれたんだからこれぐらいいいでしょう！！　ほれほれほれほれ～～～♪」
［もみもみもみもみ］
「く、くすぐったいて、ビビちゃん！！」

変態と揉み魔、二人による揉み行為に周りの人は赤面するばかりであった。無論、ヴォルケンズも例外ではなく、顔を真っ赤にしてその行為を止めるように促していた。ただ一人、ヴィータだけは、湯気が出そうなほど顔を真っ赤にして、俯きながら黙々と着替えていたとか……

□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■

えぇ、女子更衣室で甘美な事件を起こしてしまいましたが……

…まぁ、いいやw

そして今は、プールに来ています！

「うひゃぁ、ひっろいなぁ～！」

「すごぉ～い、こんな広いプール始めて見た」

結構大きなプールでした。それに、新装開店という事もあってお客さんの数もかなりのモノです

「これが、プールと言うモノ、ですか」

「なんだか面白そうな所ですね♪」

「おぉ～……！」

シグナムは興味深めな目で見て、シャマルはまるで子供みたいにはしゃぎ、ヴィータはこれでもかと言うほど驚いていた
ちなみに、皆のアレはと言うと……
はやてちゃんは、蒼いラインが入った白いワンピース。シグナムは紫色のビキニ、シャマルは緑と白のパレオ、ヴィータは赤いセパレート。そんで私はというと……どこぞの白い井の黒い子みたいなことはしないよ。黒色の競泳水着です！！　スク水じゃないよw
……ってか、周りの男共（ゲス）の視線が気持ち悪い……死ねばいいのに……
いやでも、皆素敵です（＊＜＿＞＊）

「それじゃぁ、まずは……ヴィータちゃん！！　勝負よ！！　どっちが早く泳げるかってね！！」
「あぁん？　なんで私がそんな事を」
うう、断られたよ……でも、これぐらい予想済みよ！！　なぜならこの後……

「なんだヴィータ。負ける事を主に見せたくないからと言って、勝負を棄権するのか」
［プチッ］

ナイスシグナム！！　やっぱベルカの騎士に逃走する権利はないみたいだね

「いいだろう！！　勝負だビビ！！」
「いいよぉ！！　負けないからね！！」

そうして、私対ヴィータちゃんの競泳大会が行われました

□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■

そして、丁度二つ空いていた２５メートルレーンのプールまで来ました

「ほなら！　ビビ選手対、ヴィータ選手の競泳勝負を行いたいと思います！！　まずは、第一レーン、ビビ～・スティ～ン！」

「いえ～い！」

「第二レーン！！　ヴィータ～！」

「は、はやて……は、恥ずかしいよ／／／」

少し赤くなっているヴィータをよそに、話は段々と進んでいき……

……

「それでは、位置について！！」

「「……」」

両者に、緊張が走る……

「よ〜い、ドン！！」
［バシャァァァッ！！！］

勝負が、始まった……！！

「（……クッ！）」
「（チッ……！）」

まさに、まったくの互角の勝負を繰り広げていた。お互い、強化などはしておらず、純粋な肉体能力だけで競っていた
種目はクロール。２５メートルプールをターンし、５０メートルをどちらが早いかを競っていた……
今、ターンポイントにさしかかった

「「（（負ける、ものか！！！））」」

互いに、負けじと本気になってきた……
そして……

「しゃぁ〜！！」「ッしゃぁ〜！！」

二人は、まったく同時にゴールをしや
勝負の行方は、シグナムの判定に任された……

「……どっち？」
「僅差で、ヴィータが勝っていました」

判定で、ヴィータの勝利宣言が来た

「やったァァァァァァァッ！！！」

「あぁ、負けちゃった……」

ガッツポーズを取るヴィータと、しょんぼりとうなだれるビビ……

…チート転生主人公が原作キャラに敗北したのであった……

「ふん、ベルカの騎士に勝負を挑んだのが間違いだったな」

「ふふっ。本当に強いねぇ、ヴィータちゃんは」（ニコッ）

「！！！？？／／／／／／　と、当然、だ！！　う、うん。当然の、結果、だ……／／／／／／」

フッハッハッハッハッハッハッ！！！！！　そう簡単にチート主人公に勝てると思ったか！！？　わざと負けたに決まってるでしょ！！！！　そう、このシチュエーション！！！　これを狙っていたのよ！！！　グッフッフッフッフッ！！！　最後は私の勝ちよ！！！！！　コレでヴィータちゃんも私のハーレムの一人よ！！！！！

……本気でアホな妹であった……鉄槌の騎士、ここに墜ちる……

□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■

そして、ビビ対ヴィータの対決を終えた後……

「ふぅ、ちかれた～（＋＿＋）」

敗者（ある意味勝者）のビビは、近くにあるベンチに腰掛け、休んでいた。ヘタに力の加減をしたので、疲れたのだろう。と、そこへ

「お疲れ様、はい、冷たいジュースよ」

「あぁ、ありがと、シャマルさん」

シャマルが来て、敗者のねぎらいに来たのだ

「おしかったねぇ、もう少しで勝てたのに」

「今度やったら負けないんだから！！」

本気でやれば勝てるのだから、とは言えなかった……

「ふふっ、本当、皆変わったわ……これも、はやてちゃんとビビちゃんのおかげね」

「ふえ？」

「シグナムにヴィータよ。あの子たち、昔はあんなに笑ったりはしなかったもの」

そう言いながら、砂浜のあるプールではやてと遊ぶシグナムとヴィータを見ていた。その表情は、穏やかだった

「本当に、嘘みたいな日々よ、あの子が、私達の主になってからは……」

……先代や、その前、それよりも前……今までの主は、た

だ力のみしか求めておらず……ずっと、闇の書を完成させる為に蒐集を行ってきた。ずっと、戦い続けてきたのだ。それだけしか、無かったのだ……

だが、今は違う。戦いなど無縁の世界で……戦いを望まず、強大な力も求めず……自分達を家族として受け入れてくれた主は、自分達に戦いをして欲しくないと願った……

「夢みたい……本当に、夢のようだわ……」

「……」

……そっか。そうだよね、ずっと、苦しい思いをしてきたんだもんね……原作見た時もだったけど、この子たちはホントに可哀想だよ。今まで、戦闘の為の道具として、扱われてきたんだから……

「……大丈夫よ」

「？　ビビちゃん？」

そう言って、私はシャマルさんの前に立った

「私が、助けてあげる。はやてちゃんも、シグナムもヴィータちゃんもザフィーラも、シャマルさんも……皆、助けてあげるから」

（ニコッ）

「ッ！！？　あ、ありがとう、ビビちゃん／／／／／／」

そう真面目な事言っておきながら、発動させたのは“魅了の笑み”。

そう、そして、その時の彼女（ビビ）の心の中は……

ヒャッホ～～～～～～～イッッ！！！！！ヽ（＾∀＾）ノ　シ

ヤマルさんも、我がハーレムの仲間入り～～～！！！　フッ、今日は大漁ぜよ！！！！！　グッフッフッフッフッフッフッフッ！！！！！！！

変態魂絶賛全開中。そうして、湖の騎士も墜ちたのであった……

……

そうして、彼女達は目いっぱい遊び倒し、満足して（特にビビが）帰りましたとさ……

番外編　鉄槌と湖の騎士が墜ちる時、変態腐女子は笑うw（後書き）

作「つ、疲れた……」

神「まったく全然構想もなしに、よくまぁぶっつけでやれたな」

作「どんな内容にするのかすらも考えずに、いきなり書くというのは、こんなにもつらい事とは……」

神「今日の朝からずっと考えて、昼過ぎから書き始めて……それでいて仕事もやってたんだろう？　頭大丈夫？」

作「死にそうです、オーバーヒート寸前です……」

神「完全なゼロから始めたんだしな、まぁ今回いじるのはこれくらいにしておいてやろう」

作「急ピッチで作ったので、雑な内容になっているかと思いますが、楽しんでいってくださる事を切に願います。では、今日はこれで失礼します」

神「また明日な！！！」

作「（つまり、明日は必ず更新しろということですね。分かりました……（泣））」

＃１０　さて、そろそろ蒐集が始まるね……って、私にどうしろと！？（前書

第十話更新です、どうぞごゆっくりご鑑賞ください

十六夜様、未土井無視様。いつもご感想、ありがとうございます！

！

#１０　さて、そろそろ蒐集が始まるね……って、私にどうしろと！？

――――――そして、とある兄妹（しまい）の妹は、大きな変革を行う……

……――――――

闇の書の起動と、守護騎士達が目覚めてから、四か月近くが過ぎた後
１０月２７日、海鳴総合病院……

ある一室に、はやての主治医である石田先生と、シグナムとシャマルの三人がいる……その部屋の空気は、かなり重苦しく、いるだけで押しつぶれそうな気がする場所であった

「命の、危険？」
「はやてちゃんが？」
「……えぇ」

宣告されたのは、大切な主であるはやての事。その内容は、二人の騎士に、衝撃を与えた

「はやてちゃんの足は、原因不明の神経性麻痺だと、お伝えしましたが……この半年で、麻痺が少しずつ、上に上がっているのです。この二カ月は、特に顕著で……」

二か月。それは守護騎士達が目覚めてから今日まで過ぎた日々であり、闇の書が起動してからの月日だった……

「このままだと、内蔵麻痺に発展する恐れがあるのです」

……それはつまり、死ぬという事である……

□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■

［ドンッ！！！］

「何故だ！！　なぜ気付かなかった！！」

「ごめん、ごめんなさい……！　私……！！」

「違う……！　自分に言っているんだ……」

ヴォルケンリッターの面々は、はやての異常事態にようやく気付いてしまった。いや、元から知っていたはずだった。だが、それが遅れてしまったのは、言うまでも無い……

今の生活が、それを忘れさせていた……

今の、幸せな時間が、それを無くしていた……

そして、はやてが言った言葉が、それを許してはいなかった……

……

〈現マスター八神はやては、闇の書にはなんも望みない。私がマスターでいる間は、闇の書事は忘れてて。皆のお仕事は、うちで一緒に暮らす事。それだけや〉

その言葉が、守護騎士達を惑わせ、知っていたはずの事に、気付かせなかった……

□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■

そして、場所は八神宅に移る……

シグナムとシャマルは、その事をヴィータ、ザフィーラ、そして、ビビの三人に伝えた……ビビにも伝えたのは、事を知っているからであり、ある程度関係していたからである

そして、三人はその事を聞いた瞬間、一気に表情が凍りついた。ヴィータとザフィーラに至っては、自分達の存在が、最愛なる主の負担になっている事に、言葉を失っていた……ビビは、この事を知っているためあまり驚いてはいなかったが、それでも、その場にいる事で、その空気に触れた事によって、余裕を無くしていた……

……

「助けなきゃ……はやてを、助けなきゃ！！！」

叫んだのはヴィータであった。守護騎士達の中で、最もはやての事が好きだから……失うのが、嫌だから……

ヴィータは、治療の魔法を得意とするシャマルにそう願うが、結局シャマルも、何もできなかった……

「……ビビ」

「な、なに？」

シグナムは、ここにいる中で唯一闇の書と関わりが浅い存在であり、そして、はやてを救うために現れたと言っていた存在に問いかけた

どうすれば、主を救う事が出来るのかを……

「（……さて、どうしよ／（ ゜ロ ゜）／）」

じつは、まだ決定的な方法が見つからなかったのである！！！

〜→ダメじゃん……〜

色々と考えてはいたが、どれも成功できるか怪しい方法ばかりで、確実性に掛ける方法が思い浮かばぬまま、ここまで来てしまったのである。いや、まったく以てダメな奴である

「（うう……どうすればいいのぉ〜（T＿T））」

そう悩んでいる時に、なんともいえぬタイミングで念話が来た

《おい》

《お兄ちゃん！？》

なんと、己の兄(あね)からの念話であった。彼の性格からは考えられない行動に戸惑ったが、今はそれがありがたかった

《ナイスタイミングだよ！！　実はかれこれこうこうそういう理由で……へるぷみ～～～／（ＴдＴ）／》

何とも情けない事だが、今は仕方なしである

《はぁ、やっぱそう言う事か……いいか、そいつらにはこう伝えておけ。今は……》

そうして、兄から闇の書改変プランの内容を聴き、妹はやっと口を開いた

「……まず、闇の書を完成させない事には、事を起こす事は出来ないわ……」

「「「「っ……！！？」」」」

闇の書の完成。それは、魔導師や魔法生物からリンカーコアを奪わなければならない。それも、かなり膨大な量の、である

だが、それ以前に……

「しかし、我々は……」

リンカーコアを蒐集してはならない。それは、主とかわした約束である。騎士の誓いに懸けてまで交わした誓いを、破らねばならない事に繋がる……

「でも、このままじゃぁはやてちゃんは死んでしまうわ。私は絶対にそれだけは阻止したい。それに、皆も同じ気持ちよね……

？」

「「「「……」」」」

確かに、主を救いたい思いは、皆同じ……しかし、騎士の誓いが、それを邪魔をする……誇り高き騎士である彼女らが、自ら誓いを破るなど……だが、今は……

「……あぁ、そうだな……今は、主を救う事を選ぼう。たとえ、後で主に恨まれようとも、我々は救わねばならない……！」

「えぇ。はやてちゃんが苦しむのは、嫌」

「はやてを助けるなら、私は何だってする！」

「うむ……」

騎士達は、誓いよりも、主の命を選んだ

「（うし、これで原作通り、蒐集が始まる。後は、蒐集対象を絞らないと）その前に、皆。これだけは止めよう。人殺しや、他人に迷惑がかかるような事は、絶対に」

後に、はやてが罪の意識に捕らわれる原因となる事。それが、他人を巻き込み、迷惑を掛けた事。例え原作にそんな描写は無いが、描かれていない部分で、彼女は色々と言われてきていたに違いない。ならば、それは避けなければならない

「蒐集対象は、魔法生物のみ。それ以外からは絶対に蒐集しちゃダメ。魔導師なんて絶対に襲っちゃダメよ。管理局にバレかねないし、何より、はやてちゃんの為に……」

罪を背負わせない。それも、彼女が原作を見て思う、理不尽で、納

得がいかない部分の一部であった……

「「「「「……〔コクっ〕」」」」」

守護騎士の全員もそれを感じ取ったのか、彼女の案に乗った。

「じゃぁ、今夜から……始めましょう」

最愛なる者を、救うための戦いを……

□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■

ある兄妹（しまい）が使っているマンションの一室

「……はぁ、段々近づいてきてるな……」

先ほど念話を飛ばした兄（あね）は、妹の行動に頭を痛めていた。それと同時に、自分の介入タイミングも近付き始めていた。彼（かのじょ）は、後悔していた

「（なんでこんな面倒な事を引き受けたんだ？　ったく、やってらんねぇな）」

どうせならぐうたら過ごすのも悪くないいと思っていた。が、そんな日常をしていても直ぐに飽きるのが関の山。故に彼（かのじょ）は介入する事を選んだ

「どうせなら、刺激ある生活の方がいいんじゃない？」
「……」

またも、あのクソ神であった

「てめぇ……はぁ、もういいよ」

彼がいきなり出てくる事にはもう慣れていた。故に、そうそう驚く事も無くなってきた

「で、いったい今日は何の用だ」
「別に。ただ、物語が面白くなりそうだったからね。生で見たかっただけだよ」

この神はホントに唯我独尊の道を歩んでいるなと思った。しかし、コイツの事を考えても脳の無駄である

「さて、じゃぁ、俺はこれで失礼するよ」
「今日は早いな。じゃぁさっさと帰れ」

手をひらひらさせて、さっさと帰れと促す。神はそれに構わず

「じゃ、またなw」

［フッ……］

またも、風が吹くかのように消えた……

「……はぁ。さて、また幻世にいって材料の調達に行くか」

そういって、腰かけていたソファーから立ちあがった

「“タマモ”、転送ゲートの準備をしろ」

『了解しました』

そして、彼(かのじょ)は歩きだした

「さて、今日も頼むぞ、“タマモ”。それに、“シュテン”もな」

『『はい』』

新たな相棒。“シュテンドウジ”と共に、介入への準備に取り掛かった……

#１０　さて、そろそろ蒐集が始まるね……って、私にどうしろと！？（後書き）

作「今日は後一話更新の予定ですので、お楽しみに」

神「なぁ、ストックが切れかかってるぞ」

作「はい、これはまずい事になりました……」

神「そうポンポンと更新するからこういう事態になるんだ！！　更新が早いって感想が来ているが、其れは唯コイツが予告を出したときからワード使って製作して、作り置きしていたモノを更新しているだけだ。ちなみに、プロローグにあった４月４日。あれはこの小説を“考え始め、書きはじめた”日なのだ！！　だから、実際に一話作ろうと思ったら、コイツの場合“一週間”は必要なのだからな！！！」

作「なに暴露しちゃってるんですか！！！！？？」

神「気にするな。それに、お前はまだ学生であり、あまり時間がないのだろう？」

作「まぁ、そうですね……暇見つけては、こうして更新していますが……」

神「全く、この阿呆は……」

作「……」

神「まぁ、こんな馬鹿な奴だが、よろしく頼むわ」

作「なるべく時間を見つけ、書いてまいりたいので、今後ともよろしくお願いします。では、失礼します」

#１１　蒐集活動開始　そして、物語りはいよいよ動き出した……（前書き）

おそらく今日最後の更新になるかもしれません

ごゆっくりご鑑賞ください

十六夜様、煌　焔様、未士井無視様。ご感想、ありがとうございます！！

#11　蒐集活動開始　そして、物語りはいよいよ動き出した……

――――――そして、とある兄妹（しまい）の妹とその家族である守護騎士達は、異界で戦い続ける……――――――

《シグナム！　そっちに大きいのが行ったわ！！》

蒐集開始から、早一ヶ月と少しが過ぎ……12月2日……

「ハアアアアアアアアアアアアアアッ！！！！」

とある管理外世界で、騎士達は戦っていた。今は、巨大な六本足のトカゲとシグナムが戦闘を行っている

「“レヴァンティン”！！！」

『エクスプロジョン』

［ガシャンッ！！］

彼女が持っている刀剣から、一発の弾薬が排出され、その刀剣に炎を纏わせた。そのまま巨大トカゲの頭上から、大きく振りかぶり

「“紫電、一閃”！！！」

［ザンッ！！！！］

巨大トカゲを、一刀に斬り伏せた

「■■■■■■■■■■■■■■■ッッ！！！！！！！？？」

巨大トカゲは理解不能な断末魔を上げ、その場に倒れた

「ふぅ……」

トカゲを切り伏せた本人は、剣を鞘に納め、ため息をついた

《お疲れ様。後は、私が蒐集しておくね》

「あぁ。次の反応は」

《休まなくてもいいの？　これでこの種の魔法生物を十体以上と戦ってるでしょ？》

「だが、未だに頁は百にも満たぬ……まだまだペースを上げる必要がある」

そう、未だに闇の書の頁は、８７頁しか埋まって無かったのである。不殺を決めていたが、それではあまりにも蒐集出来る数は少なかった……それに、魔法生物というのはリンカ―コアの質があまり良く無く、一匹に着き三ページ埋まれば上等と言えるぐらいだったのである

「（いくらビビ殿が決めた事でも、こればかりは何とも言えんな……まぁ、焦っても栓無き事だがな……）」

そういって、次のターゲットに向かっていた……

□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■

その頃、八神宅……

「はぁ、今日も皆帰るのが遅なるん？」

そう言ってきたのは、家の主であるはやてであった。そしてその話し相手は

「うん……でも、夕飯までには帰ってくるかもだから、良い子にして待ってようね♪」

「は～い♪」

介護ヘルパーをしているビビである。彼女は、蒐集活動にあまり参加していなかった。なぜなら、はやてを守るためであり、そして、その立場上、はやての傍を離れる訳にはいかなかったからである……

「（介護ヘルパーって設定、止めておくべきだったかなぁ……介護している人から離れる介護ヘルパーってのは変だし……あぁ、失敗だったかなぁ……）」

少し先の事を想定しておけばよかったと思ったが、だがコレはコレで良かったのである。それに、はやてが寝た後なら行動できるため、

いつも途中からの参加で蒐集活動を手伝っている

「（でも、あまり頁埋まって無いし、ちょっとこりゃぁ不味いかな……）」

原作に比べ、頁の溜まりが悪いのである。原作では、既にこの時には半分近くの３００頁位はあったはず。それがこの違いである。守護騎士達も、ビビも、この現状にあまり好ましく思っていなかった……

「（でも、例え魔法生物だけに限定しただけで、こんな違いが出るなんて……でも、原作じゃぁ確か魔法生物に関しては死ぬまで蒐集してたような気がするし……それに、魔導師からの蒐集もダメって言ったのが不味かったのかな……でも、はやてちゃんの事を考えたら……）」

管理局にばれる事も、それから始まる管理局との戦いも、出来る事なら避けたいところだったが……だが、この際は仕方ないかもしれない

「（魔導師からの蒐集も視野に入れるべきかも……それなら、管理局の目の届かない場所にいる魔導師達から蒐集すれば、管理局も感ずかないはず……でも、はやてちゃんはその事も責任感じちゃうかも……う～ん、困ったなぁ……）」

色々思考の渦に入っていた所に……

「ビビちゃん、どないしたん？」

「へ！？　い、いや、なんでもないよ～。あ、あははは」

いきなり話しかけられて、ビックリした。どうやら、顔に出ていたみたいだった

「ほーか？　ならええわ」

「ごめんね。ありがと、はやてちゃん（うん。やっぱりそれだけは止めよう。蒐集はいつも通り、魔法生物からのみに……この笑顔を、くもらせないために……！！！）」

そう思った矢先に、事件は進展する……

□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■

12月2日、夜……海鳴市、上空

「……あっちに、デケェ魔力を感じるな……」

そう呟く、小さな影があった……ヴィータであった

彼女は、この一カ月の成果に不満を持っていた

「魔導師から集めちゃいけねぇのは分かってる。でも、このままじゃはやてが危ないんだ……」

［チャキッ］

なかなか埋まらない頁にイラつき、ちまちまとしか集められない事にも苛立ち、特に一番苛立っている事は……

「（早くしねぇと、はやてが危ないんだ。だから……ビビ、ゴメン……）」

最愛なる主の次に好きな人……あの娘に心の中で謝罪し……そして、小さき影は移動し、結界を展開した……

□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■

ある兄妹（しまい）が使っているマンション

「……はぁ」

盛大な溜息をしたのは、今のこの部屋の主であるグレイ・スティンであり、部屋にある大きな窓から外を眺めていた。視線は、海鳴市のある方角に。凝視しているのは、そこに展開されたあるモノ……

……

「“封鎖結界”か。それも、ベルカ式……」

つまり、それは……

「はじまっちゃのねぇ、原作の開始点が」

「みたいだな」

またも、神が彼の隣に現れた

「どうすんの？　介入しちゃうの？」

「いや。あのクソ妹が言わん限り、動く気は無い。それに……」

［ピッ］［ウォン］

開示したのは、一つのウィンドウ。そこには、仮面を持ち、耳と尻尾を生やした女性の姿があった

「ほう」

“リーゼ姉妹”、だったか？　コイツらの事もある。コイツらが動き出そうとした時に、俺は動く。そういう手筈だからな」

今まで、目立った動きはしていないが、そろそろコイツらも動き出す時かもしれない。それを阻止するがために、今はこうして監視していたのである

「かるく覗き魔だなｗ　さすが前科持ち、やる事が違うねぇ♪」

「黙れ、九人も妻を持つ色ボケ神に言われたくねぇよ」

とにかく、それまで動く気は無い兄（あね）であった

「（さて、夕飯の片付けでもするか）」

そう言って、台所の方に移動した

「……つれないねぇ。ま、面白い性格してるから良いけどw」

そうして神は、またも風のように消え去って行った

#11　蒐集活動開始　そして、物語りはいよいよ動き出した……（後書

神「短くねぇ？」

作「まぁ、今までのに比べたら、なんかそんな気が……」

神「つか、前回の更新のときにグレイのニューデバイス出たろ。その紹介はしないのか？」

作「すみません、忘れておりました」

神「ヴァカめ」

作「今回載せますので、それで許して下さい。では、どうぞ」

“シュテンドウジ”
左腕に内蔵されているアームドデバイス。略称“シュテン”。ＢＬＳ搭載した事により、彼(かのじょ)が使える“兵装錬製「ウェポン」”が使用可能。それにより、このデバイスの判断で兵装を錬製出来る。さらに、使用できる数は限られてくるが作った武器を宙に浮かばせ自在に動かす事も可能（ＫＨ２のファイナルフォームの時の武器のような感じ）

作「遅くなってしまい、もうしわけありませんでした」

神「まぁ、次からは気をつけな」

作「あぁ、はい……」

神「んじゃ！　また明日な！！！」

作「ご鑑賞、ありがとうございました！！」

#12　やっとこさの原作主人公登場!!　つかお前も一緒かよ!!（前書き

いよいよ原作第一話に来ました！

次回は座談会をやりますので、お楽しみに

十六夜様。いつもご感想、ありがとうございます!!

#12　やっとこさの原作主人公登場!!　つかお前も一緒かよ!!

――――――そして、とある兄妹（しまい）の妹とその家族である少女の守護騎士達は、星と雷の二つの光と出会う……――――――

八神宅

「うし、お料理の下準備完了っと♪」
「あとは、シャマルが足りん材料を買って来るのを待つだけやな」
「だね♪」

今ここにいるのは、はやてとビビ、そしてザフィーラの三人だけだった。他の守護騎士は、蒐集に出ているため不在である
ちなみに、シャマルには足りない材料を買ってきてと頼んであり、それを使えば今晩の料理は完成である

「ほなら、帰って来るまでにお風呂の準備済ませなあかんな……」
「皆疲れて帰って来るからねぇ～。私がやっとくから、はやてちゃんはゆっくり休んでて」
「は～い。ほなら、うちは余った材料でなんかもう一品作るわ」
「やった～！　期待してもいいよね？」
「もちろんや。ほなら、もうひと頑張りしますか！」

そう言って、はやてはキッチンに向かっていった……直後に

「！！！？（この感じ、結界！？）」

いきなり感じた違和感。それはどこかで魔法が使用された時の感覚であった。そしてそのまますぐに張られた結界の解析に移った……

……

構成されている式は、ベルカ式。そして、流されている魔力の元は

……

「（原作通り、ヴィータちゃんがやっちゃったか……あちゃ～（－“－））」

やっちまった☆ＺＥ！！！　って呑気な事をしてる場合じゃないっての！！！

「（こうなったら、なのはちゃんと、ついでにフェイトちゃんのリンカーコアだけでも……って！！！　ダメダメダメダメ！！！　我が嫁の二人を傷つける訳にはいかん！！！　早く行って、阻止せねば！！！！）」

そうして、彼女は外に飛び出し、現場に急行した……ちなみに、はやてには念話で急用だと連絡し、風呂の準備は自身の能力を使い、とある借金執事を召喚しやらせたという……その日のお風呂は、これでもかと言うほど綺麗だったとか、それはまた別のお話……

……

□■□■□■

□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■

海鳴市、街中……結界内

［ダッダッダッダッ！！］

「あぁもう！！　ヴィータちゃんのバカン！！！」

一人の少女が、誰もいなくなった市街地を叫びながら走っている。ビビだ。彼女は、結界内で魔法を使わずに、逆に気配を消して走っている

「（っていうか。確か一回戦目はなのはちゃんの撃墜イベントだったわよね。だったら、フェイトちゃん達が応援に来てくるから、その時に割り込んで《ビビちゃん、いる？》シャマル！！？）」

いきなり念話でシャマルが話しかけてきた。いったい何？　と聴いてみたら

《ヴィータちゃんが、この街で巨大な魔力反応を感じたって言って……》

《まさか、知ってたの？》

《聞いたのはついさっき。私は止めたけど、ヴィータちゃんが聞か

なくって……》

《なるほどね……なら闇のＳ《それで、闇の書が今ヴィータちゃんが持ってるの》……ガッデムｏｒｚ》

闇の書を持っていれば蒐集出来ないんだけど……つーか、マジでヤバい状況かも……つか、あれ？　この時って確か、闇の書持って……たよね（；一＿一）

《ど、どうしましょう……》

どうしましょう？　そんなの決まってるよ！

《ヴィータちゃんを止めるよ！！　今管理局に私たちの事がばれる訳にはいかないわ！！！　シャマルは、先に帰ってはやてちゃんのお手伝いをして！》

《分かったわ！　あと、シグナムがそっちに向かってるんだけど》

《シグナムには、しばらく結界内のどこかに潜んで貰って！　もし管理局が来て戦闘になった時、途中で危なくなったら援護するように伝えて！！　ヴィータちゃんは私が連れて帰るから、よろしくね！！》

《はい！！》

さ～って、Ｏ☆ＨＡ☆ＮＡ☆ＳＩならぬ、Ｏ☆ＳＩ☆Ｏ☆ＫＩタ～イム！　言う事聞かない悪い子は、許さないぞ～っと！！！

……実は、この時のビビが何故はしゃいでいるのかと言うと、なのはともしかしたらフェイトにも会えるという事でテンションがハイになっていたからである……そう、後の自分の嫁に会うために……とことんアホな腐女子であった……

「誰が腐女子よ！！　ブッ殺すぞ地の文！！」

……誰かつっこんで……

□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■

市街地、結界内。あるビルの中

「はぁ、はぁ、はぁ……」

そこに、瀕死の状態で気を失い倒れている少女と、息を切らして倒れている少女を睨んでいる少女がいた。片方は、ツインテールの髪型に、白いワンピース、そして先端に金色のパーツに紅い宝石のような球体が付いたボロボロの杖を持った少女……先ほど部屋で勉強をしていたはずが、いきなり展開された結界の原因を調べようと出てきた高町なのはであり、予想外の戦闘で敗北してしまった。そしてもう一方は、赤い服に長めのおさげをし、先端が小型のハンマーの形をした武器を持った少女……ヴィータであった

「（ったく、手こずらせやがって。それに、はやてから貰った甲冑の帽子を……！）」

最愛なる主から貰ったモノ。それを傷つけられた事がかなり頭に来ていた。だからか、元々使うつもりが無かったカートリッジを使ってしまった……

「（まぁ、こんだけつえぇんだ。コアの質もいいかもな……）」

だが、心の中では相手の事を称賛していた。曲がりなりにも、彼女も騎士。敵の事を見るのも、戦いにおいての礼儀なのだろう

「（さってと、さっさと蒐集すっか）」

そう思い、彼女の手にあるモノ……“闇の書”を広げ、瀕死の状態の少女に近付いた……

その刹那

「ハァァァァァァァッ！！！」

「っ！！！？」

突如上から殺気を感じ、そのまま後ろに跳んでその殺気を持つ攻撃を交わした

殺気の正体は、先ほど倒した少女と同い年の少女で、金色の長い髪を黒いリボンでツインテールにし、赤い目をしている。黒いコートを纏い、その手には彼女を染めている色と同じ、黒き斧のような武器……否、デバイスを持っていた

「……“バルディッシュ”」

『サイズフォーム』
［ガシャンッ！］

電子音と共に、彼女の持つデバイスの先端が動き、金色の魔力刃を展開し大鎌へと変化した

「クッ……仲間か……！」
「……友達だ」

いきなり現れた邪魔者に苛立ったのか、瞳が蒼一色に染まり、武器を構えた

「チッ……邪魔だアアアアアアアアアッ！！！！」
「ッ！！　ハアアアアアアアアッ！！！！」

互いの武器が交錯する……瞬間に

「“火無菊”、“リリィ”、“梅厳”。“三天結盾、私は拒絶する”。プラス、“ベリウス・プロテクション”」

「キィィンッ……」［ガガキンッ！！！］
「「！！？」」

突如、両者の間に誰かが割り込んできた

「ストップ。これ以上の戦闘行為は無意味よ、引きなさい、ヴィータ」
「……誰？」
「ビ、ビビ……！？」

ヴィータは、いきなり現れた家族に驚いた。そして、フェイトは突如現れた相手の仲間と思しき少女を睨みつけた

「はぁ……私、言ったわよね。管理局に感づかれるのは面倒だから、魔導師からの蒐集は止めようって」

「でも！　あんなチンケな魔法生物からじゃ、全然頁が埋まらないじゃねぇか！！」

「それでもよ。まったく、これでお尋ね者決定ね。どうしてくれるのかなぁ～？」

「う……」

ニヤニヤしながら、ヴィータを見つめ、次の瞬間

「そんな悪い子には～……アイアンクローをプレゼントぉ！！」

「イダダダダダダダダダッ！！！？」

そう、ほとんどの二次創作で使われている秘技、“アイアンクロー”！！　普段彼女は、ヴィータが悪い事をする度にこうしてアイアンクローをかましているのだ！！！

「だから、変な説明すんな地の文！！　つか、やったのコレが初めてなんですけど！！？　嘘言わないでよ！！！」

「おい！　誰に向かってイダダダダダダダッ！！！！」

……ヴィータが可哀想だから、この辺にしておこう

「あ、あのぉ……」

「あ（。ｏ。）」

しまった、フェイトちゃん達がいる事をすっかり忘れてたよ……

私とした事が！！

「ごめんなさいね、うちの子が迷惑かけたみたいで……」
「い、いえ……あの、そのぉ……」
「分かってるわ。この子には後できつく言っておくし、そこに倒れてる子の事も、ちゃんと回復させてあげるから……」

そう言って、彼女はフェイトの後ろで倒れている……つか、いつの間にか淫獣こと“ユーノ・スクライア”がいるし……なのはに向けて、手を向けた

「“あやめ”、“舜桜”。“双天帰盾、私は拒絶する”」
［ポゥ……］

なのはが淡い光を放つ盾に包まれた瞬間、傷ついた体やバリアジャケット。そしてレイジングハートも修理され、戦闘を行う前の状態に戻った

「……う、うん……？」
「「なのは！」」
「う……フェイト、ちゃん？　それに、ユーノ君……」

お、気を取り戻したね……って、アレ？　そう言えばこの時なのはちゃんって、気を失ってたっけ？　たしかあの時は、ヴィータちゃんに武器を向けていたような気が……大分原作と違う点があるような……でも、本筋は多分同じな筈だから、いっか♪

「あぁ！！　今私を倒した女の子！！」
「な、何だよテメェ！」

あぁ、もう。穏便に行きたいのに、血の気が多いんだから、まったく……じゃぁ♪

「コラぁ、また喰らいたいのかにゃ～？」

［ワキワキ……］

「う……」

うし、しつけ完了っと。にしても凄い威力だね～、アイアンクロー。他の転生者達が使っているわけだよ。っと、脱線脱線。さて、と……

……

フフフッ、フッハッハッハッハッ、アァーハッハッハッハッハッハッハッハッハッハッハッハッ！！！　いよいよだわ……いよいよこの時がやってきたのよ！！　やっと、やっと！！　この二人に巡り合えた！！！　私の、“初恋の二人”！！！　はぁ～～～、もう可愛い！！！　その麗しい瞳が、その愛らしいツインテールが、その可愛らしい頬の輪郭が……そして！！　未来のあの美しきその御姿が！！！！　あぁぁぁぁぁ……今、その二人を……我がモノに！！！

じゃぁ……イクわよ！！！！！！！！！

「ふぅ……ごめんなさいね、白い天使ちゃん。うちの子が迷惑かけちゃって。怪我、もう大丈夫？（ニコッ）」

「ふぇ！！？　だ、大丈夫でしゅ！！（て、天使、なんて……お、お世辞にも、その……／／／／／／）」

「そっちの黒い天使ちゃんも、さっきは驚かせてごめんね（ニコッ）」

「へッ！！？　あ、いえ、こ、こちらこそ、その、すみませんでした（か、かわいい、かも……／／／／／／）」

フッハッハッハッハッハッハッハッハッハッ！！！！！　また も炸裂“必殺女落としマジ惚れさせちゃうの笑み”！！　今回はなんと二連続よ！！！　しかもあの二人によ！！　私の初恋の相手によ！！！　コレは素晴らしい！！！　しかも！！！　噛んだなのはちゃんかわいすぐる～～～ッ！！！！　やだやだもう、そんな目で私を見つめちゃってぇ～。もうそんな愛らしい君たちが大好きだ～～～～～～～ッッ！！！！！！！　あぁ、許されるのなら、この場でハグしたい！！！！　でも、今はそんな空気じゃないわよねぇ……ぐぅ、今のところは我慢するけど、いつかベッドの上で……グッフッフッフッフッフッフッ！！！！　このまま一気に我がハーレムを……甘美なる“百合ハーレム”を完成へ導いちゃうわよ～～～！！！！　オォーッホッホッホッホッホッホッホッホッホッホッ！！！！

後のエースオブエース、そして優しき金色の閃光……変態の毒牙にかかり、未来が大変な事になりました……

って、いかんいかん。またもトリップしてしまった。いけないいけない、今はそんな空気じゃないよね……

「さて、ヴィータちゃん？　隠さずにアレ、出しなさい」

「……はい」

そう言って、しぶしぶ闇の書を渡すヴィータちゃん……ヤバい、興奮しそう（＊＜＿＞＊）

「よし、良い子良い子♪　でも、しばらくヴィータちゃんにはこれ

を触る権利を許しません。私が良いと言うまでは、シャマルかザフィーラの二人で行動するように。いいわね」

「な……それじゃぁ！「返事、は♪」う……は、は～い……」

うんうん、調教完了。さってと、そんじゃぁ帰ろっかｎ

［ガキンッ！！！］

と思ったら、背後からなんか飛んできた……んで、見てみたら……どっかで見た事がある、蒼白い剣の形をした魔力刃が、地面に刺さっていた……

「……何、コレ？」

そういった後、コレが飛んできた方向を見てみた、ら……

「……」

「（な、なんでいんの……？　ＫＹ）」

そう……リリなの１の空気読めない少年……そう、あの黒い男の子がいました……それはもうスンゴイ形相で……今にも私を攻撃しそうな勢いかも……

「……時空管理局執務官、“クロノ・ハラオウン”だ。君の持っているその本を……“闇の書”を、渡してもらおうか」

なんでアンタがいるのよォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォ！！！！！！！！！！

#１２　やっとこさの原作主人公登場！！　つかお前も一緒かよ！！（後書き

神「うおい」

作「はい、ごめんなさい。分かってはいます、ちゃんとした理由もあるのですが……」

神「つーか、原作を変えるたぁどういうことだ？　なんであの場面にあのガキがいる訳？」

作「その件につきましては、いくらでも苦情を受け付けます。本当に、申し訳ありませんでした」

神「まったく……」

作「とりあえず、こんな作者ですが、よろしくお願いします」

祝！！　５００００ＰＶアーンド５０００ユニーク突破記念座談会！！！（前書き）

もしかしたら、今日最後の更新になるかもしれません

ではどうぞ

祝！！　５００００ＰＶアーンド５０００ユニーク突破記念座談会！！！

作「……」

ビ「さ、作者さん！！！　カメラ！！　カメラまわってますよ！！！！？」

神「返事がない、ただの屍のようだ……」

作「ごま、ぴーぶい……ごせ、ゆにー……」

グ「あぁ、こりゃアレだな。まさかここまで来るとは思わず、放心状態って所みたいだな」

ビ「まぁ、凄い事だよね。私もびっくりしちゃったよ（＾―＾；）」

神「おい、作者がこんな状態なら……ここ、カオスな空間にしちゃってもいいんじゃない？」

グ「おい」

ビ「うし！！　ならばここでこれを発動！！　かも～ん！！　私の愛おしき家族達～！！！」

［ババババシュンッ！！！］

はやて（以後、は）「ふえ！！？　ど、どこやここ！？」

シグナム（以後、シ）「な、ビビ。それと……？」

シャマル（以後、シャ）「あのぉ、どちら様でしょうか？」

神「神様だ」

グ「ビビの知人のグレイだ。詳しくは本編の時に言うから、今は無視してくれ」

ヴィータ（以後、ヴィ）「お、おう……」

グ「……所で、盾の守護獣はどうした？」

ビ「お留守番！！」

神「もはや空気にするつもり満々だなｗ」

グ「（可哀想だな……）」

ビ「さて！！！　じゃぁ一発行くよ！！！」

は「な、何をするん？」

ビ「あのね、ごしょごしょごしょごしょごしょ……」

神「何してんだろなｗ」

グ「しらん」

は「ふむふむ、それ面白そうや！　皆でやろう！！」

シ「……あ、主とビビが望むのならば……仕方ありません」

シャ「なんだか面白そうです！！　やりましょう！！」

ヴィ「まぁ、はやてとビビがやりたいんなら、私は良いけど……／／／」

ビ「よ～し！！　じゃぁ行くよ～～～ッ！！！！」

は「せ～の！！」

ビ・は・シ・ヴィ・シャ「「「「「祝！！！！　アクセス数５０００ＯＰＶ！！！！　アンド！！　ユニーク数　５０００突破記念感謝座談会！！！！　始まります！！！！」」」」」

神「いえぇぇぇ～～～い！！！！！！」

グ「アホどもが……」

ビ「えぇ、読者のみなさん！！　おはこんばんにちわ！！　いつも今作、“魔法少女リリカルなのは　～とある兄妹の転生物語～”を読んで下さり、誠にありがとうございます！！！」

は「ほんまにありがとな！！　原作キャラを代表して、うち、八神はやてと！」

シ「我らヴォルケンリッターが、感謝の言葉を贈りたいと思います」

シャ「そして、今までご感想を下さった未土井無視様、幻想の箱庭様、ＪＡＭ様、青いタヌキ様、幻想の庭師様、十六夜様、煌　焔様……本当に、ありがとうございます」

ヴィ「そして、こんな駄文をお気に入り登録してくれている９１名のユーザーの皆さまに、感謝を表したいと思います」

ビ・は・シ・ヴィ・シャ「「「「「本当に、ありがとうございます！！　これからも、今作をどうぞよろしくお願いします！！！！」」」」」

ヴィ「……つ、疲れた……」

シ「あ、あぁ……慣れぬ事をしたせい、なのか？」

シャ「そう？　私は楽しかったわ。ね、はやてちゃん♪　ビビちゃん♪」

は「うん！　なんか楽しかったわ♪」

ビ「でしょでしょ！！？　やっぱり好きな人たちと一緒に何かするって楽しいよね」（ニコッ）

シ「そ！　そうですね……／／／／／／」

ヴィ「だ！　だな……／／／／／／」

神「（おやおや、あの呪いにかなり嵌まっていらっしゃるようで…

……クックックッ、面白い能力を授けちまったモンだな、俺も……
…クックックッ」

グ「おい、声に出てんぞ」

神「おっと、いかんいかん……」

ビ「そんで、今回はなにしよう？」

グ「決めてないのかよ！！！？」

ビ「だって！！　作者さんが何か言うのかなぁと思ってたんだけど、あんな状態なんだもん！！」

グ「人のせいにすんなや」

神「ではではここで突撃インタビュー！！　今現在、はやてとヴォルケンズは、ビビ・スティンの事をどう思っているのか聞いてみよう！！！　まずは！！　家主のはやてちゃんから！！！」

は「わ、私！？　えっと……笑顔が素敵で、私や、私の家族皆に優しい……私が一番好きな人！」

ビ「は、はやてちゃん……（／／／／／／／）」

神「次！！　騎士達の将、シグナム！！」

シ「わ、私か……そうだな、我らが主と同じくらい、守りたいと思う者の一人、でしょうか」

神「はい次！！　騎士達のお母さん、シャマル！！」

シャ「明るくて、元気いっぱいで、それに、はやてちゃんや私達を救ってくれると言ってくれた、かわいい女の子♪」

神「ラスト！！　八神家末っ子、ヴィータ！！」

ヴィ「そう、だな……あんまし上手く言えねぇから、簡単にいうけど……はやての次に大切な人だ」

ビ「み、皆～～～（＊／／／／／／／／＊）もう！！　うれしい事言っちゃって！！！　私も！！　皆の事！　大好きだよぉぉぉッ！！！！」

神「はい、今回の座談会しゅ～りょ～、お疲れさまでした～w」

［ドンガラガッシャ～ン！！！！］

グ「おいクソ神！！！　何勝手に終わらせてんだよ！！！！」

神「ネタ切れだからw」

は「自由奔放すぎるわ！！　神様やからって滅茶苦茶していいと思ってるん！！？」

神「イエスアイアム！！！！」

シ「ほう……ならば、その性根、叩き直してくれる！！！！」

神「やれるもんならやってみろ！！！！」

［ギャー！！！　ギャー！！！　ギャー！！！］

グ「……作者がいないだけで、こんな事になるとは……まぁ、なにはともあれ、これからも、今作をよろしくな……」

シ「“紫電一閃”！！！」

神「なんの！！　“俺様を誰だと思っていやがるキーーーッック！！！！”」

ビ「何故にグレラガ！！？」

グ「……帰ろ」

祝！！　５００００ＰＶア～ンド５０００ユニーク突破記念座談会！！！（後書き）

作「ハッ！！！？　ここは……ってか！　いつの間にか座談会終わってるし！！」

なのは（以後、な）「ねぇ、作者さん……」

フェイト（以後、フェ）「私たちの扱い、ひどいんじゃないかな……？」

作「……（先駆者様達のお気持ち、今痛いほど身にしみました……）」

な・フェ「少し、頭冷やそうか……？」

作「お助けェェェェェェェェェッ！！！！！」

神「あらあら、大変な事になってんなｗ　あ、そうだ。次回は１００００ＰＶに行ったときにでもやる予定だとさ。っていっても、マジでネタ切れだから、何か良い案が無かったらなしになるみたいだが……まぁ、よろしく頼むわ。じゃ、また次回に！！！」

#１３　フッフッフッ……私を怒らせた事、後悔させてくれるわＫＹィィィッ！

今回はなのフェイ撃墜イベとＫＹフルボッコです

ＫＹに関してですが、自分なりの独自解釈が含まれております。
なので、観賞の時は注意してください

十六夜様、琥様、幻想の箱庭様。ご感想、ありがとうございます！！
これからも今作をよろしくお願いします！！

#１３　フッフッフッ……私を怒らせた事、後悔させてくれるわＫＹィィィッ！！

――――――そして、とある兄妹（しまい）の妹は、ある空気読めない少年をボコるのであった……――――――

「「……」」

なぜだ……なぜ、キサマがここにいる……確かさ、確かさ……この時にここに来るのって、フェイトちゃんにアルフ、そんでユーノの三人じゃなかったかな？　そうだよね？　そうだったよね？　つか、こんなことなら“アカシックレコード”接続権も持っておくべきだったかな？　まぁ、いいか……って、よくないって！！！　今は、この状況をなんとかしなきゃ！！

「あ、あのぉ～「君が、今の闇の書の主か？」はい？」

うわ、ホントにＫＹだ……人の話は最後まで聞けよ……でも、良い案思いついた♪　まずは……

《ヴィータちゃん、私に話を合わせて》

《わ、分かった……》

《シグナムも、聞いてたよね？》

《はい、お任せを》

《お願いね》

さて、一芝居打ちますかな

「えぇ、そうよ。私が今の闇の書の主、ビビよ。ね、鉄槌の騎士ヴィータ」

「あ、あぁ。そう通りだ、主ビビ」

うんうん、いいよヴィータちゃん！　そう、なるべく情報は隠しておくべきよ！　はやてちゃんの存在は、管理局に知らせないようにしなきゃ

「ッ……そうか……」

［チャキッ！］

「君を、“ロスト・ロギア不法所持”の容疑で、拘束させてもらう」

うわぁ～、予想通りの反応。やっぱ堅物ね、コイツ……しかし、こうもあれだと、逆にやりやすいなぁ～。ほんと、二次創作の主人公達の気持ち、嫌でも分かるわ……

「抵抗しなければ、弁護の余地はある……おとなしく、してもろうか……」

……何？　何様のつもりなのこのクソガキは？（ってか、私の方が年下か（＾―＾；））マジでムカつく。死ねばいいのに。こんな奴が、未来のフェイトちゃんのお兄ちゃんだと思うと虫唾が走る……こうなったら、フェイトちゃんハラオウン家の養子になるのを阻止するのも有りか……まぁ、今はどうでもいいか。今は……このＫＹ、どうしよう……？

「……悪いけど、私達はこのまま捕まるわけにはいかないの。それに、闇の書もアンタに渡す気は無いからね」
「それは危険なモノなｎ「知ってるわ。主を喰らい、呪いを掛け、挙句には自爆に誘う……狂ってしまった魔導書……でしょ？」っ……そこまで知っていながらなぜ！！？」
なぜ？　簡単よ
「いや、だってねぇ……必要だからよ」
「必要？」
「そう。私の大切な人を助けるために、私が救いたいと思う人を、救うために……」
「しかしそれは！！」
「五月蠅いわね、まったく……いいこと？　私は助けたい人がいるの。この、“改悪された夜天の魔導書”じゃないと、救えない命を……ヴィータ」
「おう」
［チャキッ］
「悪いけど、邪魔をするなら……容赦はしないよ」
そういって、私も構える……
ちょうどいい。このＫＹ、ここでフルボッコにしてあげよ（黒笑）
「ッ……ならば、仕方ない……なのは！！　フェイト！！　ユーノ！！　そいつらは次元犯罪者だ！！　捕縛するから、協力してくれ！！」
「「次元、犯罪者……！？」」

「ッ！！？」

ナッッ！！！！！？？　コイツは悪魔か！！！！？　私の愛しの天使ちゃん達を命令し使うだと！！！！？　マジ許せん！！！！　コロス！！！　ブッコロス！！！！！……でも、殺すとあの二人が悲しむから……うう（Ｔ＿Ｔ）　今回は半殺し程度に我慢してやるから覚悟しなさい！！！

《どうするんだ、ビビ。あたしなら、いつでも行けるぜ》

《ビビ。私もいつでも出られます》

《ヴィータ、シグナム……しょうがないわね。逃がしてもくれなさそうだし、こうなったら……こいつ等を、倒すわよ。でも、殺しも蒐集もダメよ》

《おう！》

《承知！》

そして、作戦を立てた。私はクロノを相手に、ヴィータちゃんはなのはちゃんとフェイトちゃんの相手を、シグナムは、ヴィータちゃんの所が不味くなったら不意打ちで攻撃を……そういう作戦で行くことにした……

「……管理局側の人間としては、そうなるかもね……でも、捕まるわけにはいかないわ！！」

［バッ！！］

そう宣言した後に……今は、闇の書の仮の主である私は、守護騎士たる少女に告げた

「鉄槌の騎士よ。私達の目的を達成するために、目の前の敵を……粉砕せよ」

「おう！！！」
［チャキッ！！］

……戦闘が、始まった……

――――――――――――――――――――

……それは、僕にとって、最も忌むべきものだった……

第一級捜索指定遺失物、ロストロギア、通称“闇の書”……

あの魔導書は、幾百もの被害を生み続けてきた。幾千もの、傷跡を残し続けてきた。幾万もの……いや、幾億もの悲しみを、造り続けてきた……

僕も、その幾億もの悲しみの、一つだ……

「君を、“ロスト・ロギア不法所持”の容疑で、拘束させてもらう」

幼いころ……父さんが殺された……原因は、任務から帰還している最中に起きた戦艦爆破事故……その時はそう教えられた……

でも、実際は違っていた……殺されたんだ、あの呪われたロストロギアに……！！！！

それを知った時、僕の心の中で生き場の無い気持ちが炎のように燃

え盛って、どうにかなりそうだった……

そして今、その気持ちが、また僕を支配しようとしている……！！

「しかしそれは！！」

あの時……僕から父を奪ったあの魔導書が、目の前にある……

それだけで、僕の心の中に巣くう化け物が、僕を支配しようとその手を伸ばしてきている……

――――――ダメだ、感情的になってはダメだ――――――

今は仕事中だ、そう、僕は執務官としての任務を……責務を果たせねばならない……！！！

でも、怪物はそんな僕をあざ笑うかのように、浸食を広げていった……

――――――……許せない、赦せない、ユルセナイ……！！！――――――

体が、理性が弾けそうになる……

必死に押さえていた。そうして、僕はなんとか理性を保っていた……

だが

「ッ……ならば、仕方ない……なのは！！　フェイト！！
ユーノ！！　そいつらは次元犯罪者だ！！　捕縛するから、協力してくれ！！」

憎悪の獣が、吠えた……

最悪だ、公私を混合させてしまうなど……執務官としては、恥ずべき行為だ……
無関係な三人まで、巻き込んでしまった……

だが、無情にも……相手は、牙を剥けてきた……当然だ。こちらから牙を向けてきたのだからな……

過ぎた事は仕方ない。こうなったら、闇の書と、その主を……

――――――確保するまでだ！！！！――――――

□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■

さてと、シグナムが助けに来てくれるとはいえ、一対二はやりずれぇな。それに、さっきブッ飛ばした奴も、また襲いかかって来てるし……

「レイジングハート！！」
『“ディバインバスター”』
「バルディッシュ！！」
『“サンダースマッシャー”』
［ゴゴォォォ

『“ラケーテンハンマー”！！』
［ゴオォッ！！！！］
「ウオォォォォォォォォォォッ！！！！！」

噴射口から勢いよく魔力で出来たバーニアを噴き出し、先ほどの高速移動も相まって、かなりの速度で二人に突撃していく

「「！！」」

二人はその速さに驚き、判断をするのが遅れていたが

『“フラッシュムーブ”』
『“ブリッツアクション”』
［ババッ！！］

二人の相棒である二つのデバイスが、二人を危機から救った。そこへ

「“リングバインド”！！」
［バシィィィッ！！！］
「ぐあッ！！？」

突如、第四者からの攻撃を喰らい、その身を捕獲された

「“チェーンバインド”！！」
［バシィィィッ！！！］

そこへ間髪いれず、結界魔導師たる少年が鎖状の拘束魔法を使い、完全に逃げられないようにした

「ユーノ君！」

「アルフ！」

第四者……桜色の魔導師の師であり友であるユーノと、金色の雷光の使い魔であるアルフが拘束の魔法を使い、鉄槌の騎士を捕らえた

「フェイト！　なのは！　やっちゃえ！！」

「今のうちに、魔力ダメージで気絶を！！」

そして、止めの一撃を放とうとした

「レイジングハート！！」

「バルディッシュ！！」

『“ディバインバスター”』

『“サンダースマッシャー”』

［ゴゴォォォ

砲撃を防いだのは、今現在彼女(ビビ)が召喚している“盾舜六花”の技の一つ、“三天結盾”。盾の外を拒絶する力を持つ、強固な盾を作り出す能力である
そして、相手は自分達の最大の砲撃を防いだ盾に驚いており

「ハァァァァァァァッ！！！！」
［ガキンッ！！！］
「うわッ！！？」
「「「フェイト（ちゃん）！！！！」」」

さらなる襲撃者に、気付けなかった

「シグナム！」
「大丈夫か、ヴィータ」
［パキンッ！！］

そう言って、ヴィータをバインドから解き放った

「チッ、魔導師のくせに……もう容赦しねぇからな、覚悟しろぉ！！！」
「魔導師如きに、我らベルカの騎士が遅れを取ると思うな……！！」

そして、二人の騎士は、魔導師達に接近した

「「「「！！！！」」」」

回避しようと動き出そうとして瞬間

［バシィィィッ！！！］

「「「「え！？」」」」

突如、四人全員の足に、空間固定型のバインドが付けられた……
その隙をみて、鉄槌の騎士は、白き魔導師に接近し

「接近すりゃぁ、こっちのモンだァァァァッッ！！！！！！」
『エクスプロジョン』
［ガシャンッ！］

カートリッジをロードし、威力を底上げさせ

［ブンッ！！！］

己が渾身の一撃を、放った

「“ラケーテン！！　ハンマァァァァーーーッッ”！！！！！！！」
「ッ！！！？」

白き魔導師は、防護壁を張って守ろうとしたが……先ほど効かなかった事を思い出し、避けようと思った……が，足場は固定され、身動きが取れない状態であった……故に

［ガキンッッッ！！！！！！！！］
「きゃぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁッッ！！！！！！！！」

無意識で杖を身構えて直撃を防いだが、威力があまりにも大きかったため……吹き飛ばされて、そのまま後ろのビルの壁に叩きつけられた

「「「なのは！！！！」」」

残った二人の魔導師と使い魔は、友達の白き魔導師の名を叫んだが、
その直後

『エクスプロジョン』
［ガシャンッ！］

もう一人の騎士が、既に武器を振り上げ

「“紫電、一閃”！！！」

振り下ろした

［ザンッ！！！］
「うわぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁッッ！！！！！！？？」

斬られたのは、黒き魔導師であり、切られた反動で、その身軽な身
は吹き飛ばされ……

［ズドオォォォォォォォォォォンッッ！！！！！！！！］

そのまま、地面に叩きつけられた

「フェイト！！？」
「フェイトォォォォォォォォォォォッッ！！！！！！！！」

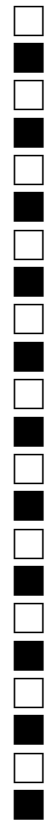
残った二人は、二人の安否を想った。そして、吹き飛ばされ、壁と
地面に叩きつけられた二人の少女は……

「「ッ……」」

気を失っていた……

「フンッ、あたしらに敵うわけ無いだろ」
「ヴィータ。残り二人だ、早めに倒すぞ」
「おう！！！」

二人の騎士は、残った二人に、狙いを定めた



その頃、妹（ビビ）の方は……

「ホレホレホレ！！　どうしたどうしたぁ！？　執務官さんよぉ！！！」

［バババババババ

かった。それをしながらも、未だに彼女はもう片方の戦闘の援護をしているのであった

「くっそう！！！」

「無駄よ！！　この弾幕をかいくぐるなんて芸当、貴様には出来まい！！！」

クロノは防戦一方だった。ときおり彼女が使う謎の召喚術に翻弄され、魔力弾の弾幕に耐えながらも攻撃を行っていったが、防護壁のようなものに阻まれ、手を出せずにいた……

「（隙を……隙をついて、急所を！！）」

「無駄よ！！！」

［ヴンッ……］

言い放ちながら展開したのは、小型の召喚魔法陣。そこから召喚されたのは

「出てきなさい、“ザイゴード堕天種、炎型”、１２体！！！」

［ウォウォウォウォウォウォウォウォウォウォンッ！！！］

卵のような形に、女性の上半身、天使のような羽を生やした一つ目の奇怪な形状の魔物……“荒神”と呼ばれる存在を１２体召喚し、それを壁にしながら弾幕を張り続けた

「アァーハッハッハッハッハッハッハッハッ！！！！！！！
さぁ、もがき苦しみなさい！！　私の逆鱗に触れた罰として……
…私の天使ちゃん達へ愚かにも命令した罰として！！！！！　地に這いつくばって私の足をお嘗めなさぁ～～～いッッ！！！！！！」

［ババババババババババババババババババババババババ

ババババババ

にっくき相手を倒したことで、ご満悦になった妹であった……

《ビビ、こちらは終わりました。そちらはどうですか》
《あ♪　シっグナ～ム♪　ナイスタイミング、丁度終わった所だよ♪》
《分かりました。では、こちらは撤退しておきます》
《うん。いつも通り、散開して後で合流。いいわね》
《はい》
《おう》

そして、三人はバラバラに逃げ去り、散って行った……戦場に、敗北者達を残して……

#１３　フッフッフッ……私を怒らせた事、後悔させてくれるわＫＹィィィッ

作「……なんぞこれ」

神「三日連続、一日で１００００アクに１０００ユニ、か……」

作「これ、そんなに面白いのか？　自分としては、あまり出来良くないと思うんだけど……見返してみたら、ここ直そうかな？　と思う部分あるし……」

神「まぁ、アレだ。見てくださった読者の皆様にお礼を言いなさい」

作「毎日このような駄文を読んで下さり、誠にありがとうございます！！　今後も頑張りますので、よろしくお願いします！！！」

神「じゃぁなｗ」

＃１４　暫くの小休止。そして物語は、大きく動き出そうとする……（前書き

もしかしたら、今日最後の更新になるかもです

それと、あとがきの方でちょっとしたお知らせがあります

幻想の箱庭様、十六夜様。ご感想、ありがとうございました！！

＃１４　暫くの小休止。そして物語は、大きく動き出そうとする……

――――――そして、とある兄妹（しまい）は、次に来る大きな戦い波を、まっていた……そして、それを見つめる神は、語り始める……

――――――

……神がいた、青空広がる荒野……

「……さて、と……結構な原作ブレイクをしでかしているな……クックックッ」

最初にあの二人と会った時と同様に、ニヒルな笑みを崩さず、その場で笑い続ける者がいた……

そう、あの二人の兄妹を転生させた神であった……

「まずは、八神はやてとの接触。アレにより、物語が一気に変わって行った……」

そして彼は、空を見上げる……そこには、あの時ビビとはやてが接触していたときの様子が“映し出されていた”。青空全てが、まるでスクリーンのようになっており、ただ一人の観客の為に、映像を流していた

「そして、コレだ……グレイ・スティンと、クロノ・ハラオウンとの邂逅。コレは意外な部分で原作ブレイクを果たしている……」

そう言った直後、またも青空と言うスクリーンに映っている映像が変わっていった。今度は、グレイが本局に忍び込んだ時、無限書庫でクロノと対峙している時の映像に切り替わっていた

「コレが原因となり、クロノ・ハラオウンは原作ではいる筈もいない場所……高町なのは撃墜イベントの場にいる事になった……まったく、面白い事をしでかしたもんだ」

クックックッ、と未だに不敵な笑みを浮かべて静観していった……

「そう……なぜあの場にアイツが現れたのか……簡単だ。グレイ・スティンという存在と絆を……“契り”を結んだのだからな」

神は、大地に広がる黒い人の形をした塊を見つめた

「者と者（もの　もの）、物と物（モノ　モノ）。即ち、者と物（もの　モノ）……それら全てには必ず“契り”が存在する。それが大であれ小であれ……必ずしも存在するモノ。例え一度しか出会わなくても、それだけで“契り”というモノは生まれる……一度だけ出会った、という“契り”がな……」

神は、瞳を閉じ、そこに流れるそよ風を浴びた

「そこから更に、“契り”は広がって行く。クモの巣のように……そこから新たな契りが生まれる……例えば、今回のように……

…」

あの兄妹の兄がクロノと出会った事により、それによって紡がれた“契り”が、妹とクロノを引き合わせたのだ。と……

「“契り”とは、そういうモノだ。常に引き合い、引かれ合う……“契り”は、世界中に張り巡らされた鎖のようなモノ。引き剥がす事が出来ない、解き放つ事も出来ない、絶対的な存在……」

そして、閉じていた瞳を見開き、虚空を仰いだ

「いやいや、面白い事になったモノだ。フッフッフッ……さて、今後どうなるのやら……ん？」

ふと、変な違和感を覚えた……

「……ほう、これは面白い客が来たものだな……いやいや、コレはとんでも無い事になったな」

違和感の正体は、ねじ曲がった歴史を正そうという働きをする力……“世界の修正力”であった……

あの二人の兄妹の介入行動は、後々の歴史に大きな一撃を与えかねないと判断したのか、行動を始めたようだ

「今は、あの世界の住民達を無意識下で操り、歴史通りにさせていっているようだが……このまま行けば、やがて世界そのものが動き出し、何かしら大きな力を生みだしかねんなぁ……」

そういって神は、表情を曇らせた

「……“つまらん”、それではつまらんぞ」

有り来たり過ぎる。そう思った……これでは、今まで暇つぶしの時に読んだ二次創作の小説とまったく変わらない……それではつまらない……

「この俺が転生させたんだ、この、俺がな……」

フッ、と鼻で笑い飛ばすと、周りにある鎖を巻かれた人の形をした黒い物体が……

［ギギギギッ……！］

動き出し、鎖がほどかれた。しかし、それだけで終わらなかった。それが色付き、人の色をしていき……一人の少年になった

「……何の用でしょうか？　我が担い手」

少年は深く礼をして、主である神に己がやるべき事を問うた

「頼みがある。俺の楽しみの邪魔をする輩が現れた。ソレを監視し、動きがあれば連絡しろ」

神は、上から少年に命じた。その少年はなんの異を見せず

「はい、心得ました……我が担い手よ」

少年はそう答えると、そのまま黒くなっていき、さっきと同様、人の形をした黒い塊に戻って行った……

「……ふぅ、アイツは、いつになったら……」

その瞳には、遠い過去を見ているような哀愁さを漂わせていた

「まぁ、仕方ないか。アイツが自分で決めた道だからな……」

かつて、自分が歩んできた道を思い出していた……神と“成る前”の、自分を……

「……さてと、続きでも見るかw」

そういって、神は青空のスクリーンを見上げた。そこには、夜天の主とその守護騎士達と戯れる妹と、起きた事件について会議しあう者達と、魔獣を狩り続ける兄……それらが三つの映像に別れ、映し出されていた

「クックックッ。もっと楽しませてくれよ、とある兄妹達よ……クックックックックッ」

再び、ニヒルな笑みを浮かべ、空を眺めた……

□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■

■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□

□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■

八神宅

時間は正午を回った辺り、丁度お昼時であった

「皆ぁ～、お昼ご飯出来たよ～」
「早く来ないと、冷めちゃうぞ～」

穏やかな時が流れる場所……八神家では、久しぶりに家族全員がそろっていた
家主であり闇の書の主である、八神はやて。その介護ヘルパーだが、今や家族同然の存在、ビビ・スティン。そして、はやてを守る守護騎士達……騎士達の長であり、炎を繰る烈火の将、シグナム。騎士の中では一番幼いが、現主の事を誰よりも思う鉄槌の騎士、ヴィータ。騎士達の中でも、特に家族みんなとの時間を大切にする湖の騎士、シャマル。影から主を守り、家族を守る、寡黙な盾の守護獣、ザフィーラ……
その一同が、こうして集まっていた……

「なんや久しぶりやなぁ、皆でごはん食べるの」
「そうですね」
「皆、色々と忙しいですからねぇ」
「じいちゃん達の相手をすんのはマジ大変だよ……」
「こうら、ご老人は労わるものよ。そう邪険にしないの」

「は、は～い……」
「ははっ、ビビちゃんの勝ちやな」
「いえい！」
「情けないな、鉄槌の騎士よ」
「もう、シグナムったら」
「うぅ……／／／」
「ふむ」

和やかな空気が、この家を満たしていた
普段は蒐集活動で家を離れる時が多い守護騎士たちだが、今回は皆集まっていた。なぜなら、管理局に見つかってしまい、行動を制限したのだ

「（まぁ、あんな事があったんだもん。これくらいの羽休めも必要かもね）」

そう思う、ビビであった……

「ビビちゃん、そっちの醤油、取ってくれませんか？」
「はぁ～い？」
「あぁ。零したらあかんよ、ヴィータ」
「ご、ごめん」
「ほら、これで早く拭け」
「……」

……今は、この一家に、安らぎの時を……

□■□■□■

「あぁ。それによる被害は、かなり甚大なモノばかり……」

あまりにも酷いものばかりだ、と……

だが、そこで話してきたのは、二人の少女だった

「でも、あの人、その闇の書を使って人を救いたいって……」

「うん。確かに、そう言う風に言ってた……助けたい人が、いるって……」

彼女……ビビが行っていた言葉に、二人の少女は戸惑っていた。

あんな素敵でやさしい笑顔をする人が、悪い事をするはずがない。

それに、人を助けるためにそれを使うのなら、私達は邪魔をするべきではないのかと……逆に、それの手助けをしなければならないのでは、と……

だが

「アレは、封印するべき代物なんだ。だから、僕達が確保しなければならない……それに……」

あのとき、何も出来なかった……

現闇の書の主を名乗った少女……彼女は圧倒的な力で、自分を凌駕していた。それだけではない、彼女はそれでも遊んでいた……

本気で戦っていなかったのだ。男として、そして管理局の高ランクの方である魔導師としては、屈辱以外の何物でもなかった……

そして、その敗北感は、他の四人にもあった。何も出来ずに、自分達を圧倒したあの少女と女性の二人の騎士――――――後に聞いた話で、ベルカ式魔法の使い手で、接近戦を得意とする騎士だと知った――――に、手も足も出なかった……

だが、負けた屈辱が大きかったのは、この四人ではなく、二人の少

女の相棒であるデバイス……“レイジングハート”と“バルディッシュ”の二つだった。彼らは、修理の際に新たな力……ＣＶＫ－７９２と呼ばれるパーツ……カートリッジシステムの組み込みを要求してきたのだ。インテリジェントデバイスにカートリッジシステムを組み込むのは、使い手にとって負担が大きすぎるので、あまりにも危険な事であった。それでも、彼らは己の使い手は必ず使いこなせると信じ、この提案をしてきたのである。そうして、今現在、本局にある施設で修理と改良がおこなわれているのである
そして、その二つの使い手である二人の少女は……

「（あの子たち、悲しい目をしてた……出来ることなら、助けたい！）」
「（あの人たちは、前までの私と同じ……だったら、話し合わないと。どうして、こんな事をするのかって……）」

二人の少女は、そう、胸に誓った。そんな中、少年は

「（あの時は、少し感情的になっていたのかもしれないな……いや、それでも……それに、なぜあれほどの力を持っていながら、闇の書の力を欲する。それに、“改悪された”？　どういう事だ？……調べてみる必要があるな）」

そうして、ここでの会話の結論は、闇の書の探索と確保と決まり、後に本局からの命令として正式に動き出した……

□■□■□■

［ズシュンッ！！！！］
「■■■■■■■■■■■■■■■ッッ！！！！！！！？？」
［ズドォォォォォォォォォンッッ！！！！！！！！！！］

貫き、一撃で即死させた

「……うむ、まだ行けるのか……これで三キロ先の相手も狙い撃てるな」

その女性は、未だに自身の能力がどこまで出来るのか、検証していた

『お見事です、主』
『やるでござるな。さすがは、我が宿り手よ！』

自身が持つ二つのデバイスからの称賛を得たが、彼はそんな事は気にせず、直ぐに行動を再開した

「次は、四キロからの射撃を行うか……」

自身の能力の可能性を更に知って行き、彼、グレイ・スティンは、もはやこの世界一最強の存在へと、なって行くのであった……

そして、己が出番を、待っていた……

――――――そして物語は、歪んだまま、佳境に向かうのであった―

#１４　暫くの小休止。そして物語は、大きく動き出そうとする……（後書き

作「えぇ、今作を読んで下さった読者の皆様方。まず、謝罪をもうします」

神「なにがあった？」

作「明日明後日、明々後日ほど、更新をストップさせていただきます」

神「そんなん別に言わんでもいいだろ！！！」

作「いえいえ、毎日更新しよう！　という当初の目的が達せられない事が、大変情けなくて……」

神「言ってねぇだろ、んな事」

作「自分の心の中に、留めておいた誓いだったのですが……」

神「はぁ……で、なんで遅れるんだ？」

作「実は、自分が通っている学校、宗教系でしてね……そこの行事に引っ張りだこなんです……それと、生徒会みたいなのに抜擢されてしまい、あげくに次の研修旅行に行かねばならんわ、パンフレット作らなきぁいけないわけで……」

神「リアルが大変だとｗ」

作「断ろうにも、断れない状況だったし、自分以外適役がいなかっ

たようでして……マジメンドウです……」

神「その旅行はいつからだ？」

作「６月２２日から、２７日までです。ちなみに、行先は海外です……」

神「五泊六日、オワタ＼（＾ｏ＾）／」

作「なので、大変申し訳ありませんが、明々後日までと、先ほど申した期間の時は休載させていただきます。誠に申し訳ございません」

神「その分良いのを書けｗ」

作「努力します……」

#１５　転生者の兄（あね）、介入を開始する……って、いきなり戦闘かよ

読者の皆様がた。お久しぶりです

ようやく更新ができる状態になりました

どうぞ、ごゆっくりご鑑賞ください

十六夜様、未土井無視様。いつもご感想、ありがとうございます！

！

#１５　転生者の兄（あね）、介入を開始する……って、いきなり戦闘かよ

――――――そして、とある兄妹（しまい）の兄（あね）は、介入を始めた……――
――――

ＰＭ　０６：３８　八神家

そこには、一緒に夕食を作るビビとはやての姿があった……ちなみに、今日のメニューはモツ鍋である

「～～～♪」
「さってと、次は……」

二人とも楽しく作っているが、ビビは別の事を考えていた

「（確か今日なんだよね、あの原作第５話の悲劇は……）」

そう、彼女が最も気に食わなかった事の一つ……第五話のヴォルケンズ達と、はやてちゃんの事である……

「にしても、皆遅いなぁ。今日は結構かかるんやねぇ」
「そうだねぇ……」

未だに帰ってこない家族の事を話し合っていた……その時

［ピンポーン］

「あ、来た！！」

突然の来客は……そう、原作キャラの一人で、この時にはやての数少ない友人である“月村すずか”であった。今日は、八神家の夕食会に招待されたのだ

「はやてちゃん、こっちは私がやっておくから、行って上げて」

「うん、よろしくな」

そう言って、玄関の方に向かうはやて……

さて、気になった方も要るであろう。実は、なのは撃墜イベントの前日に、すでにすずかとは会っていたのである。あの時のシチュエーションは……図書館で、同じ本を同時に取ろうとして、そこから話が盛り上がり……と言った具合に、仲良くなって行きました。え？　“魅了の笑み”？　掛けてないよ。だって、あとに来る最高のシチュエーションでやる予定なんだから……クッフッフッフッフッ……（＊＜＿＞＊）

アホな思考をよそに……

［キィィィンッ……！！］

「（！！？　結界……とうとう、始まったか）」

突如感じた違和感。結界が近くで張られた時の感覚である

そう、原作第四話、第五話の戦闘の鐘の音が、鳴り響いたのであった

「（……皆、無事に帰って来てね……）」

自分は今の立場ゆえに動けない。今は、家族である騎士達の安否を心配するだけしか、出来なかった……

□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■

同時刻。海鳴市、上空……結界の中

「管理局か」

「でも、ちゃらいよこいつ等」

ヴィータとザフィーラが、強層型の結界に閉じ込められたのである。闇の書の主がこの世界を中心に動いている事に気付いた管理局は、この世界に罠を張り、そして今、二人がその罠にかかり、こうして動き出していたのだ

今は、捕らえた二人を十数人の武装局員が二人を囲んでいた

「返り討ちだ！！」

そうしてアイゼンを構えた。が、囲んでいた局員が散開していった。

何かの罠かと思ったその時

「上だ！」
「！！？」

守護獣の言葉通り、上を見上げれば、一人の魔導師が攻撃準備をしていた

「“スティンガーブレイド！！　エクスキューションシフト”！！！」

数多くの魔力刃を、ヴィータとザフィーラに向けて放ったが、そう簡単には行かず、ザフィーラが防護壁を張ってそれを防いだ……が、三つか四つは防護壁を貫通し、彼の腕に突き刺さった

「ザフィーラ！！？」

少女は、自分を守ってくれた守護獣を心配したが、彼はその鍛え抜かれた肉体に貫かれた刃を自力で抜き、少女を安心させた。そしてその少女は、自分の家族の一人を傷つけた相手を睨んだ
睨まれた少年は、、その視線から感じる殺気に身構えた。一対二、このままじゃやられる……

「クッ、このままじゃぁ……」

そう毒づいた時

《クロノ君！！　武装局員、配置完了！　それと、強力な助っ人を呼んでおいたから！！》
「助っ人？　！！　まさか！？」

そう言って、下の方へと視線を向けると、ある二人の少女……“

高町なのは”と、“フェイト・テスタロッサ”の二人が、並んで立っていた……その近くには、二人の信頼のおける魔導師と使い魔……ユーノ・スクライアとアルフの姿もあった
そして、二人がお互いのデバイスを天高くかかげて

「“レイジングハート”！！」
「“バルディッシュ”！！」

二人は、己の相棒の名を唱え、それを起動させた

「「セーット、アーップ！！！」」

光が二人の少女を包み込み、互いのデバイスは認証を開始する。そして、新たな名を叫ぶ

「“レイジングハート・エクセリオン”！！！」
「“バルディッシュ・アサルト”！！！」
『ドライブ、イグニッション』

――――――新たな力が、起動する――――――

二人が光に包まれた後、そこには新たな力を宿した魔導師達の姿があった

「アイツらのデバイス、あれってまさか！？」

新たな力……カートリッジシステムを搭載し、二人の少女達のリベンジが、始まる

□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■

四人の魔導師達と使い魔、二人の騎士と守護獣が睨みあっている最中……裏に潜んでいた存在が動き出していた……そう、原作では仮面の男として登場する者……猫の使い魔、“リーゼ姉妹”の一人、短髪で快活な“リーゼロッテ”であった

「（クロスケ達が動き出してきた。このままじゃぁ、ただでさえ遅い蒐集活動に支障が出る……）」

必ず邪魔をしてくる。そう思い、彼らを邪魔する為に動き出した。自分達が為す事の、邪魔にならせない為に……

そうして、現場に急行した刹那

「待ちなさい」

「！！？」

いきなり声を掛けられたのである。自分は空中にいる。視認されぬよう、探知されない小型の結界も貼ってある。周りには、誰もいないはず……そんな中に至近から聞こえた声は、間違いなく自分に向けられたモノだと分かった。そして、声がする方に視線を向けれ

ば……

「……」

近くにあるビルの壁に“寝転がっている”、一人の女性がいた……

……

背丈は、女性としてはあり得ない１８５センチくらいの長身で、あまり手入れされていない腰まである黒い長髪をみだらに壁に“垂らし”、片目は閉じ、もう片方の目……金色の瞳は、ロッテに向けられていた……その風貌と奇怪な風景は、ロッテの注意を引くのに十分だった……

「……誰だ、キサマ」

当然の反応をしたが、彼女はそれに応えるようには見えない……ただただ、ため息を吐いただけであった。そして、無言のまま……

……

［チャキッ］

「！！！？？」

武器を……質量兵器らしき剣を虚空から取りだした。刀身は細長い、日本刀のような形状。しかしその長さは彼女よりも長い長刀……それを構えながら、“壁から起き上がり”、空に降り立った

「……“龍刀【斬鬼（ザンキ）】”、敵の腕を……切り裂け」

そう言い放った刹那

［ザンッ！！！］

「……え？」

右腕が、根元から切り落とされた……

「ッッッ！！！！！！！！？？？？？？」

声にならない悲鳴が、その場に轟いたのだ

「……痛い？　そうだろうね……痛いだろうね……痛くしているんだから」

「ッッ！！！！！！？？」

［バッ！！］

ロッテは、その場から脱出した。このままでは、自分の命はないと……

そして、彼女は逃げていくモノの背中を見た……まるで、狩りを行う猟人のような目つきで……表情は、凍てついた猛禽のようであった……

「（なんなのよ！！？　なんなのよ！！？　いったい何がどうなっているのよ！！！！？？　アイツはいったい何者なのよ！！！！！！？？？）」

突如訪れた正体不明の相手にいきなり腕を切り落とされ、何が起きたのかも分からない状態でパニックに陥り、傷みを感じないまま、ただ逃げる事だけを考えた……

そんな事をも見透かしているかのように、正体不明の襲撃者は、再び攻撃を仕掛けてこようとした。またも、無言で……

「……」

［フッ］

彼女がいきなり消えた。いや、この時はただに視界から消えたのだろうと思った。だから、全身に気を張り巡らせ、襲ってくる相手の攻撃の回避に備えた……直後

［ゲシィッ！！！］

「グフゥッ！！？」

何も気配も感じられないまま、今度は腹に蹴りを入れられた。その反動のまま、近くにあったビルの中にぶち込まれた

「グッ……ゲホッ！！　ゲホッ！！」

ロッテは、蹴りと、壁をブチぬいた事で受けた激痛で、その場で気を失いかけた……が

［グイッ］

「かはッ……？」

襲撃者は、容赦なかった。気を手放そうとした彼女の胸ぐらを掴み持ちあげ、そのまま激突で出来た壁の穴から外に出て……

［ブンッ！！！］

そのまま、ロッテを盾にするかのように、ビル１４階位の高さから、地面に突撃していった……

そして

［ニヤッ］

「！！？」

襲撃者の表情が、一瞬ニヤついた瞬間

［ズドォォォォォォォォォォォォンッッ！！！！！！！！！！］

「がはァァァァッッ！！！！？？」

ロッテは、地面に叩きつけられた……

――――――――――――――――――――――――――――

ロッテを完膚なきまでにボコにした襲撃者……“グレイ・スティン”は少し後悔していた

……正直、やり過ぎたかなとは思った。が、こうでもしなければ言う事を聞かないだろうと判断し……ここまでに至った。が、やり過ぎてしまったと思っている……だが、後悔というモノは、感じていなかった

「（しかし、なかなかなモンだな、“龍刀【斬鬼】”。龍刀【劫火】を素体に、相手の部位を唱えればそこが切れる、っていう設定にしたらマジでそうなったし……なんともまぁ凶悪な能力だな、“兵装錬製”は）」

“龍刀【斬鬼】”。それは彼が龍刀（かのじょ）【劫火】を素体に創り上げたオリジナルの武器の一つであり、武具の真名を唱え、その後に斬りたい部位を唱えれば、その部分が切れるというシロモノである。ただ

し、条件としては、相手との間に障害物があれば使えない、又は防御系のなにかで防ぐ事が可能という欠点があるが……不意打ちとしては充分に使える太刀である

「（しっかしまぁ、これは多少酷いかもな……）」

《主が気にする事ではありませぬ》

《うむ。早々に事を為す事の方が先決でござろう》

二つの声……彼の両腕に埋め込まれている二つのデバイス……右腕にインテリジェントデバイスの“タマモノマエ”。左腕に、アームドデバイスの“シュテンドウジ”……その二つがそう言ってきた……確かに、この二つの言うとおり、やるべき事をやるのが先決である

「さってと……“シュテン”、アレを」

『承知でござる』

そういって、彼はまたも虚空からあるモノを取りだした……形状は、“首輪”。そこに書かれているのは、血文字のような意味不明な字列。彼は、ロッテに近付き、その首輪を……

［カチリッ］

首に取り付けた……

「いいこと？　今から言う事を必ず尊守する事。いいわね」

「は……はい……」

首輪をつけられたロッテの表情は、虚ろなものだった。生気を失い、生きている事が苦しい……そんな、絶望に満ちた表情だった……

……

ちなみにこの首輪、これも彼女(かのじょ)が創り上げたオリジナルの武具で、“契約の首輪”と言うモノである。獣に属するモノに絶大な効果を発揮し、首輪を付けられた相手を、首輪を付けた者の命令に絶対に従わせると言う事が出来る道具である。ちなみに、契約は絶対的で、もし契約の内容に納得がいかなくても、それを実行してしまうのである……まさに、呪いのような能力である

「まず一つ。今後、闇の書に関わる者、並びにその近辺に存在する者全てと関わらない事。もう一つは、もし自分の身内が闇の書に関わろうとしたら、全力を持って阻止する事。最後に一つ、その首輪を外そうとしない事。以上、三点を守らなければ、この首輪は爆発し貴女は死ぬわ。それが嫌なら、絶対に守る事……いいわね？」

「……はい、わかり、まし、た……」

そう答えると、ロッテは意識を失い、その場に倒れた……対する彼女は、声を続けた

「……貴方も分かっているわよね、“ギル・グレアム”」

虚空に向かってそう言った直後、空に一つのウィンドウが表示された

《……》

出たのは、時空管理局の執務顧問官であり、“時空管理局歴戦の勇士”と呼ばれた老人……時空管理局提督、“ギル・グレアム”であった

《どうして、私がいるという事が分かったのかね……》

「視線を感じたからよ。ジロジロと殺気のこもった視線を、ね……

……」

相手の問いにそっけなく答え、彼（かのじょ）はさらに言葉を紡いだ

「いいこと？　貴方の大切な使い魔の命が惜しかったら、さっきの命令通りになさい……“タマモ”」

『はい』

そうして、そこに転がっている使い魔に手を向け

［シュンッ！！！］

どこかへ転送させた……後に

《なッ！！！？》

《ロッテ！！！》

モニターのあちら側から、驚嘆の声があった。なんと、今モニターの奥にいたはずの身内が、こちら側に転送されたのである

「その気になれば、本局なんて簡単につぶせるのよ？　さっき言った事、必ず守りなさいよ。じゃぁね」

《な、待ちたま［ブツンッ！！］

ウィンドウが、いきなり閉じたのであった。そう、強制的に切断させたのだった

「……はぁ。女口調でしゃべるの、まだ慣れないな……」

いきなり男のような声で話しだした彼（かのじょ）は、近くにある少し欠けた仮面を掴み上げた。おそらく、あのリーゼロッテを転送させた時に、転送しきれなかったモノなのだろうと思った。そして、あの衝撃に耐えられずひびが入り、欠けてしまったのだろう。口の部分が、半分欠けている

「……丁度良い、これを使わせてもらおう」

そう言って、仮面を拾い上げ、それを自分に付けた……

「……さて、と、どうしようか……」

そうして、考えに老けた後、妙案を思い付いた

「そうだ。この仮面の主がやろうとした事を、やるのもいいか」

執務官が、湖の騎士を捕らえる場面。そこでこの仮面の主は、執務官を蹴り飛ばし、騎士を救ったのだ

「挨拶がてらに、会ってみるか。いづれ、会うんだしな……」

そして、彼（かのじょ）は、飛び立った……

#１５　転生者の兄（あね）、介入を開始する……って、いきなり戦闘かよ

作「お久しぶりでございます！！！」

神「テンション高いな」

作「其れはもう！！　なんか、久々に書いてたら楽しくて楽しくて！！」

神「あぁ、そう……あ、そうだ。おい、なんかこれすごいことになってんぞ」

作「へ……？」

神「あと少しで、１０万ＰＶ逝くぞ」

作「……」

神「あ、固まった……まぁいいやｗ　そんじゃ、また次回な！！」

＃１６　ブレイクは徹底的に。減った頁は、キサマから蒐集し補おう（前書き）

更新停止中に９万ＰＶになり、つい先ほど１０万ＰＶを達成しました

今作を読んで下さった読者の皆様、本当にありがとうございます！！

十六夜様、未土井無視様。いつもご感想、ありがとうございます！

！

#16　ブレイクは徹底的に。滅った頁は、キサマから蒐集し補おう

――――――そして、とある兄妹（しまい）の兄（あね）は、絶対に起こりえない事をした……――――――

第97管理外世界。現地名称、地球……そこにある一つの街、海鳴市……

そこで行われている戦闘は、未だに続いていた……

前回みたいな圧倒的な実力差は、新たな力によりその差を埋めていた……

途中から烈火の将が参戦したが、それでもこの差は開く事は無かった……

そして、戦いの最中、二人の少年が動き出し、事態を変えようとした戦いは、未だに続いている……

海鳴市、強層結界の外側……

あるビルの上。そこに一人の影がある、シャマルだ。彼女は結界の外で、仲間達を助け出す方法を考えていたが、結局良い案が想い浮かばないのが現状であった

《状況が、あまり良くない。シグナムやヴィータが負けるとは思えんが……ここは引くべきだ。シャマル、何とかならんか？》

念話を飛ばしてきたのは、守護獣たるザフィーラであり、現在の戦況にしわを寄せていた。今の戦況は、ほぼ互角。こちら側に有る程度風向きがきてはいるが、このままでは長びいて、主に怪しまれる可能性がある。時刻は、すでに予定よりも一時間程過ぎていた

《何とかしたいけど、局員が外から結界維持してるの。私の魔力じゃ、破れない。シグナムのファルケンか、ヴィータのギガント級の魔力を出せなきゃ……》

《二人は今手が離せん。やむを得ない、アレを使うしか……》

アレ……今まで蒐集した闇の書の魔力を使い、魔力爆撃を行う事である。だが、それをするには最低でも２０頁近くの魔力を要する。今の闇の書にある魔力は１００頁ぐらい……使ってしまえば、今まで集めた分の二割を無くしてしまう事になる……それは、何としても避けたかった……

《分かってるけど、でも……》

と言った時に

［チャキッ！！］

「！！！？」

背後から、何かに突き付けられた

《シャマル！　どうした、シャマル！？》

守護獣は異変を感じたのか、念話を飛ばしたが、返答は返ってこなかった……

「捜索指定ロストロギアの所持、及びその使用の疑いで拘束する。直ぐに武装を解除し、おとなしく付いて来てもらおうか」

……管理局の局員、それも執務官という者に見つかってしまったのである。かなり不味い状況になってしまった……

が

［バッ！！！］

「え！？」

「なっ！！？」

突如、一人の襲撃者が現れた

「フッ！！！！」

［ボゴンッ！！！！］

「ぐあァァァァァァァッ！！！！？？」

［ガシャンッッ！！！！！］

襲撃者は、腹部目がけて拳を入れ、執務官を吹き飛ばした

「……」

襲撃者は、口元が半分欠け、ところどころにヒビが入っており、今

すぐにも壊れそうな仮面を付けていた。体の形から、女性だと分かった。風になびく黒い長髪を持つその襲撃者は、黒い布を纏った死神のように見えた

「あ、あの……」

シャマルは、突如現れた乱入者に話しかけ、驚愕した

「……大丈夫？　風の癒し手よ」

「！！！？？」

なんと、その乱入者は自分の事を知っていたのである。そしてその姿と相まって、警戒心を抱いた。が、それは直ぐに解かれる

「安心なさい、私はあのビビ・スティンの知り合いよ。だから、貴女をどうこうする気はないから」

「ビビ、ちゃんの……？」

意外な人物の名前が出てきた。そう、その名は自分の主と同じくらい大切な家族の一人……その知人だという

「で、その闇の書、使うの？」

「え？」

そう、その襲撃者はいままでの念話を全て聞いていたのである。そして、そのまま言葉を続ける

「使えばいいんじゃない？　それでしか現状を打破出来ないのなら、やった方がいいわ。やらずに後悔するより、やって後悔した方がマシよ」

「でも、頁が」
「減った頁なんて、後でいくらでも埋められるわ。だから、今は……」
そう言って、彼女は結界の方を見た。それにつられ、シャマルも結界の方を見据え……
「……うん」
意を決した表情に変わった……
「……あそこにいる局員は、私に任せなさい。足止めさせておいて上げるから」
「ありがとうございます、えっと……」
「“グレイ”、“グレイ・スティン”よ。あの子の姉」
「ビビちゃんのお姉さん!?」
「詳しくは後で。じゃ、頑張って」
そう言って、襲撃者……グレイは、執務官に向かっていった

□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■

「グッ……仲間か？」

ブッ飛ばされ、向かいのビルのフェンスに激突したクロノは、新たな敵に驚いていた

「チッ……いったい、何者だ……《クロノ君！！　大丈夫！！？》エイミィ！？」

いきなり通信が入り、出たのは彼の補佐官である者からだった

《今の人、レーダーやサーチャーに反応しないの！！　見えてはいるけど、反応が全く感知されないの！！！》

「なんだって！？」

その襲撃者は、機械の目を完全に欺き、ここまで接近してこれたのだと言う……今の管理局の技術以上の技術を持つことになる

「チッ……厄介な相手、と言うわけか……」

そう毒づいた直後

［シュッ！！！］

「なッッ！！！！！？？？」

先ほどの襲撃者が、目と鼻の先まで一気に接近し

「“獅子連撃（シシレンゲキ）”」

［ボコンッ！！！　ゲシィ！！！　ボコンッッ！！！！！！！］

「カハァァッッッ！！！！！！！！？？？」

腹に掌打と蹴撃のラッシュを掛け、更に相手を吹き飛ばし……更に

［シュッ！！！］

「！！！！！？？」

吹き飛ばされる相手よりも瞬時に吹き飛ばす先に移動し

「“穿天衝（ウテンショウ）”」

［ボゴォォォォォォォォォォンッッ！！！！！！！］

「グホォ……ッッッ！！！！！！！！？？？」

アッパーで、上空に相手を突き上げた。だが、もはやそれだけでは終わらせる気はなかった

［シュッ！！！］

再び、吹き飛ばした相手よりも先に移動して、相手が来るのを待ち

「“双極・明王烈破拳（ソウキョク・メイオウレッパショウ）”」

［ドドドドドドドドドッッ！！！！！！！］

空中で掌打のラッシュを掛け、相手を徹底的に痛めつけた後

［バッ！！］

「フィニッシュ」

［ボゴォォォォォンッッッッ！！！！！！！！！！！］

その勢いのまま、相手を地面に叩きつけた

［ズドオオオォォォォォォォォォォ

オオオオオンッッッ！！！

ァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァッッッッ！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！」

結界がある場所に、魔力による爆撃が行われ、強装結界は破れた

「あっちは終わったみたいね。さてと」

「フワッ……ダシュンッ！！！」

彼女は浮かび上がり、空中を“蹴って”、その爆撃を行った者の場所へと急行した……

□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■

魔力爆撃の着弾の確認を終え、シャマルは皆と共に撤退しようとした……と、その時

「スタッ」

「！？　グレイさん！」

後ろから人が降り立った音が聞こえ、振り向いたら、ビビの姉を名乗る女性がいた

「他の皆は？　無事に逃げられたかしら？」

その言葉は、まるで統率者のような口ぶりで、湖の騎士に訊ねた

「え、えぇ。皆、無事に脱出できたわ」

「そう……」

そっけなく答えたグレイ。シャマルはこの時、本当にこの人がビビちゃんのお姉さんなのだろうか？　と疑問に思った。あまりにも似てない姉妹に、疑問を抱いた

「なら、貴女もはやく逃げなさい。あぁ、それと、“闇の書”をしばらく貸してほしいんだけど、ダメかしら？」

「闇の書を？」

何に使うの？　と聴いてみたら

「ちょっとした確認に使いたくて……大丈夫よ、明日必ず返すから」

そういってはいるが……信用できなかった。当然の話である、いきなりであった相手に、自分達にとって重要な物を貸すなど、出来る訳がない……

だが、グレイもそれぐらいは分かっていた。だから

「いいから、貸しなさい」

［バチッ！！！］

「ッッ！！！！！？？……」

突如、電流のようなモノが体中を流れ、シャマルの体は痺れて硬直した……

「……ふぅ。素直に貸せばいい物を」

そう言ってグレイは、シャマルから闇の書を奪い

「“タマモ”、彼女を仲間の騎士の所に送って」

『はい、かしこまりました』

デバイスなのであろう電子音の声が聞こえた途端

［バシュンッ！！！！］

シャマルは、仲間の騎士の場所へと、強制的に転移させられた

「……さて、と」

帰ろう、としたその時

「あ、そうだ」

思い出したかのように、有る場所へと向かった

□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■

場所は、先ほどグレイがクロノをボコにしたビルの屋上。彼（かのじょ）は、その場に戻ってきた

［スタッ……］

「……」

彼（かのじょ）は、そこに未だに倒れている少年を見据えた

「ハァ……ッ、ハァ……ハァッ……ウッ……」

少年は、未だに荒い呼吸を繰り返していた……だが、前に比べ有る程度は整ってはいた

「……よく生きてたわね。バリアジャケットの防護壁すら通す“鎧通し”の効果を与えた拳術に耐えるなんて……まぁ、どうでもいいけど」

そう言って、彼（かのじょ）は手を少年に向け……

「“リンカーコア、摘出”」

［キィィィィンッ……！！！］

「ぐあッ……！！！！？？」

彼（かのじょ）は、少年の魔力の源であるリンカーコアを摘出した。そこから導きだされる、行動は……

――――――クロノ・ハラオウンを、蒐集するということである――
――――

彼(かのじょ)は、ビビから“魔導師からは蒐集しない”という事を聞いておらず、今その行為が行われる所だった

「闇の書よ、お前を満たしてやる。だから、私に使用権限を」

そう言ったら、闇の書は頁を開いていき、白紙の頁を開いた。それはつまり、闇の書が認めたという事である

「良い子ね……じゃぁ、“蒐集”を」

『蒐集』

そして、ここに初の、魔導師からの蒐集が始まる

「グアアア

「……さて、これぐらいでいいかしら？」

埋まった頁は、２５頁。先ほどよりも５頁分増えた結果だった。無論、殺すまではしていない、ギリギリまで蒐集したのだ

「良い質だったみたいね。まぁ、上々かしら」

クロノを蒐集した彼（かのじょ）は、転移魔法を使用し、その場から撤退した……

そして、更に歴史は、歪んでいった……

□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■

■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□

□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□

青空広がる荒野……

そこは今、発狂したかのような笑声が鳴り響いていた

「フッハッハッハッハッハッハッハッハッハッハッハッハッハッ！！！！！！！！　素晴らしい！！！！　やはりお前は俺を楽しませてくれる……！！！！！」

発狂している主は、あの兄妹を転生させた、あの神であった

「良いぞぉ、もっとだ……もっと俺を楽しませてくれぇ、とある二人の兄妹よ……フッ、フッハッハッハッハッハッハッ……ハァーハッハッハッハッハッハッハッハッハッハッハッハッハッハッハッハッハッハッハッ！！！！！！！！！！！！！！！」

狂いし神は、己が欲望のままに、笑い続けた……

#16　ブレイクは徹底的に。減った頁は、キサマから蒐集し補おう（後書き）

作「……」

神「お～い、作者～？」

作「……あぁ、はい……」

神「１０万超えたぞ」

作「あぁ、はい。そうですね……」

神「記念会やらんのか？」

作「ネタ無いんです……」

神「おい……」

作「だって、こんなに早く超えるとは思わなかったんですよ！！
もう少し後かなぁとばかり思っていたんで……」

神「まぁ、どうなるかなんて、誰もわからんのだ。予想道理に事が運ぶとは思わん事だなｗ」

作「あぁ、はい……」

神「さってと……今作を読んで下さった皆様方、誠にありがとうございます！！」

作「ご感想を書いて下さった方々、今作を評価して下さった方々、お気に入り登録して下さった方々。本当にありがとうございます！！　今後も、今作をよろしくお願いします！！！」

神「そればっかだな」

作「語録が乏しいんです」

神「あっそ……んじゃ。また次回にな！！！」

＃17　事件の後の話……各々は、兄（あね）の行動に翻弄される（前書き）

こんにちわこんばんはおはようございます

本日も、ごゆっくりご鑑賞下さい

十六夜様。いつもご感想、ありがとうございます！！

#17　事件の後の話……各々は、兄（あね）の行動に翻弄される

――――――そして、とある兄妹（しまい）の兄（あね）は、妹と守護騎士、法の管理者達へ、混乱を与える……――――――

グレイが原作介入を果たした日の深夜……ある兄妹（しまい）が使っているマンションの一室の（今や、一人しか住んでいない為、書斎になりつつある）リビング。そこで、彼（かのじょ）はある作業をしている

「……」

彼（かのじょ）の前にあるのは、先ほど奪った闇の書であり、今現在、彼に使用権限が与えられている……最初は蒐集するためにだったが……今は、その解析を起こなっていた

「ふむ、なるほど……ストレージデバイスとしての基礎フレームは残っているのか……そこに、これらのプログラム……“無限再生プログラム”、“転生プログラム”。そして、“防衛プログラム”……」

解析結果を口頭で言いながら確認し、どこを直すべきかを考えた……

一応、大まかな改変プランは立てたが、それらを実行するためには

一度防衛プログラムの破壊をする事が前提となっている。その為、いったんこれを完成させ、“原作通りに防衛プログラムを隔離。それの破壊”というプロセスを踏まえなければ不可能だった

「だが、原作通りだと、“無限再生プログラム”により、壊れたままのプログラムが蘇る。なら……」

“無限再生プログラム”の破壊。それも必要になる、が……

『それをしてしまえば、闇の書は機能不足に陥り、最悪機能停止になる可能性があります』

彼(かのじょ)の右腕の賢女はそう答えた。そう、暫くの間しか行動出来なくなってしまう。それは妹が望んでいる結末でない。この事が“悲しき事件”と呼ばれるのならば、その点を何とかしなければならない……出来る事なら、悲しい事は無い方がいい……

本来なら、有った方がその人の為だと、彼(かのじょ)は思っているが……

「ったく、面倒な事を……」

「人助けだと思ってやれよ」

……誰か来たが、無視しても平気な相手だった

「そう言うな。いや、思うなか……せっかく人が助けに来てやったってのに、それは無いぜ？　クックックッ」

は？　助けに？

「あぁ……“メイリン”」

「フッ……」

突如、風が吹いたと思ったら、そこには先ほどまでいなかった女性がいた。姿は、胸元が開いた露出度が高いチャイナドレスのような服。白い羽扇。そして、黒いストレートの髪に、なめらかな肌。すらりと伸びた四肢……

そう、最初の時に在ったあのクソ神にへばり付いていた女神の一人だった

「どうしたの？　何か、お困りごと？」

女神は、最愛なる神へと、そっけなく聞いた

「あぁ。ちとな……そいつと一緒に、アレの改変プランを考えてくれないか？」

そう言って、首でクイクイっと彼（かのじょ）の事を指す

「……分かったわ。じゃぁ、さっそくだけど、貴女のプランを教えてもらえない？」

彼（かのじょ）は最初こそ焦ったが、今は平常を取り戻し、すぐさま頭を切り替え、彼女に説明をした

「……というわけだ」

「なるほど。なら、このプログラムさえ何とかすれば……それに、この点を変えれば……」

「ほう、なるほど……」

話は進んでいき、改変プランは着々と固まって来ていた

「……フッ。コレで俺も、原作介入したという事に何のかねぇ？　いや、したのは我が嫁かw」

神は、窓から見えるネオンを見下ろし、静かにつぶやいた

□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■

同時刻八神家

賑やかな夕食会は、なんの問題も無く終わり、すずかは帰り、はやてはすでに眠りに着いた……そして、リビングには守護騎士達とビビの五人が集まっていた……

「……お姉様、が？」

ビビは驚いていた。まさか自分の兄（あね）が、あのクソ猫が行うはずだった行為を行い、そして挙句には闇の書を奪ったらしい……

「ど、どうすんだよ……闇の書がないと、私らどうなっちまうんだよ！！？」

一番驚いて、焦っているのはヴィータだったが、他の守護騎士達も焦っていた。まさか自分達が守るべきモノの一つである闇の書を、“奪われたのだ”。こんな事態は彼女達にとっても異常事態で、いくら様々な二次創作を見てきた妹でも、まさか闇の書が奪われるなんて事を描かれたモノは聞いた事もなく、平静を保っておられず、焦っていた……

「（最強の原作ブレイカーだね、お兄ちゃんは……つか！！　なんで念話飛ばしても応答が来ないの！！？＞、〜，＜）」

今もなお念話を飛ばし、連絡を取ろうと試みるが、彼からの返答は帰ってこなく……事態を読む事が出来なくなっていた

「（まぁ、本当にお兄ちゃんなら、問題無いかもだけど……つか、シャマルさんに手を出したのはいくらお兄ちゃんでも許せないんだから！！　（、，＃））」

そう誓うが、それが後にとんでもない事に繋がるとは、知る由もない妹だった……

□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■

同時刻、時空管理局本局……そこの医務室

「……」

「クロノ君……」

医務室のベッドに寝ているのは、極限状態まで痛めつけられ、挙句には蒐集された少年……クロノ・ハラオウンだった……その近くにいるのは、長年彼と共に歩み……そして、密かに想いを寄せている……彼の補佐官、エイミィ・リミエッタだった……彼は、あの襲撃の後、蒐集された後、すぐさま局員に保護されて、適切な処置を受けた。その対応が早かったおかげか、彼は一命を取り留め、魔導師としても九死に一生を得た。今は、ただ眠っているだけであった……

「「……」」

今、この部屋は静寂だけが、存在していた……

□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■

場所は戻り、海鳴市のあるマンション……今、修理中のアー

スラのスタッフが住んでいるマンションの一室。そこも、暗い静寂が支配していた

「クロノ君、大丈夫なの？」

その静寂を破ったのは、少女の声……“高町なのは”の声だった

「命に別状は無いらしい。それに、リンカーコアの魔力は奪われていたけど、時間がたてば治る程度のことらしいから、そんなに心配しなくてもいいよ」

答えたのは、少女の師であるユーノであり、彼は診断結果を聞いていた為、答える事が出来た

「……でも、あの人は何者なのでしょうか？」

聞いてきたのは、金色の閃光の少女……“フェイト・テスタロッサ”であり、クロノを襲撃した謎の女性の事を話してきた

「それは、まったくの謎ね」

それは、彼らの上司……“リンディ・ハラオウン”が今最も危険視している事態……闇の書の守護騎士達の反応から推測すれば……おそらく、闇の書の関係者ではない。そしてなお且つ、こちらとも敵対する意思を持つ……まったく謎の第三者だった……

「目的不明……いま分かっている事は、彼女も闇の書の完成を願っているという事ね……」

そうでなければ、蒐集などしないはずだから……

そしてまた、静寂が支配した……そんな中

「「（（……でも、どうして、あんな酷い事を……））」」

そう思ったのは、二人の少女……二人は、その時の様子を後で教えられたのだ……

徹底的に痛めつけ、その後に蒐集を行った……それが蒐集の工程ではあるが、痛めつけの度合いが酷かったのだ……

もはや気絶寸前と言った所までだったのだ。それに、全身の骨がところどころヒビが入っており、吐血も酷かったらしい……らしいというから、又聞きの話なのだが……それでも、アレは本当に酷いモノだった……

「「（（……どうして、そんなひどい事が、出来るの……？））」」

二人の少女は、何も分からないまま、時を過ごした……

#17　事件の後の話……各々は、兄（あね）の行動に翻弄される（後書き）

作「さて……本当にアレ、どうしようかな？」

神「次の記念会か。いまだに悩んでいるのか？」

作「はい。本当に、どうしましょうかねぇ……？」

神「してぇ事ねぇのか？」

作「……あるには、あるのですが……」

神「ならそれをすればいいじゃねぇかよ」

作「いいんでしょうか？」

神「俺が許す」

作「じゃぁ……アレで逝きます」

神「オーケー、そのいきだ！！」

作「とりあえず、ネタは決めましたので、皆様がた、お楽しみに……」

神「元気無いな……どうした？」

作「現実で、疲れているんだ……」

神「あっそw」

＃１８　久しぶりの兄妹（しまい）の再会。そして、蒐集活動は加速する（前書

そろそろストックが切れそうです……ｏｒｚ

なんとか旅行の前までにＡ、ｓ編は終わらせておきたいです

十六夜様、未土井無視様。いつもご感想、ありがとうございます！

！！

#18　久しぶりの兄妹（しまい）の再会。そして、蒐集活動は加速する

――――――そして、とある兄妹（しまい）久しぶりに再会をした……――――――

八神家のリビング……今は朝食を終え、各々が部屋に戻ろうとした時

［ピンポーン］
「「「「？」」」」
「お客さん？」

突然の来客者が現れた

「誰やろ？　こんな朝から……」
「さぁ？……私が出るね」
「うん、よろしゅうな」

そういって、ビビは玄関に向かい……驚愕した

「はぁーい、どちらさまで……って！！！！！！？？？」

それは、悲鳴のような声で、その場に轟いた……

「お姉様！！！！！！！？？？」
「やかましいわ、クソ妹」
来訪者は、彼女の兄（あね）、“グレイ・スティン”であった……

□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■

来客はリビングに招かれ、そこでお茶をごちそうになっていた……
…そして、一口飲んだ後……

「では、改めてご挨拶を……ビビ・スティンの姉の、グレイ・スティンです。以後、お見知りおきを……八神はやてさん」
「あ、はい。こちらこそ、ビビちゃんのお世話になってます！」

はやてはガチガチに固まっていたが、他の守護騎士達は警戒心丸出しで、はやてに気付かれぬよう殺気を飛ばしていた……だが、兄（あね）はお構いなしに話を続けた……

「所で、あの、グレイさんは、なんで、うちに来たんですか？」
「いえ。妹がちゃんと仕事をしているのか確認を……それと、先日そちらの方々の一人と出会いまして……ねぇ、シャマルさん」

「え、あ、はい」

突如指摘された事で驚いたが、直ぐに平静を取り戻した

「その時に、ちょっとした会話をしまして……それで気になって、こちらに赴いたというしだいです。急な訪問で、ごめんなさいね」

「い、いえ！　こちらこそ、そんなもてなしも出来ずに、すみません！」

未だにガチガチのはやてだった……その頃妹は内心が驚愕で埋め尽くされていたのであった……

「（なに？　このパーフェクト出来る女性は……？　なんでこんなに女性を演じられるの？　っていうか、なんでシグナム達の全力の殺気を浴びてもそんなに平然としていられるの？　私ですら最初は露骨に顔に出たのに……）」

疑問ばかりが生まれ、久しぶりに有った自分の兄（あね）の変貌ぶりに、驚愕するばかりであった……

《……ねぇ、お兄ちゃん》

意を決して、聞いてみた。そして、意外と早く返答が来た

《色々と有ったんだ》

ただそれだけ言って、念話は閉じた……と思ったら

《後で渡すモノがある。とりあえず、今は……》

そう言って、兄(あね)は守護騎士の方を見た

「貴女方が、妹が言っていたはやてさんの親戚かしら《貴方達が、闇の書の守護騎士ね》」

「「「「!!!!??」」」」

守護騎士たちは、驚愕した。普通に喋りながら念話を行った事では無く（それぐらいなら彼女達にも出来るが）……内容にだった。普通に喋る方のは他愛ない会話だったが、念話の方は、全てを知っているかの口ぶりで話しかけてきたのだ

「妹が世話になっているようで、本当にすみません《闇の書を奪った事については、謝罪するわ。ごめんなさいね、大切なモノなのに》」

「い、いえ。別に……」

答えたのはシャマルで、シグナムが続いた

「逆に、こちらがビビの世話になっております《闇の書はどうした。話では、今日持ってくるはずだな……》」

「そう……信じられないわね《あぁ、後で返すわ。でも、その前に聞きたい事があるの》」

「お姉様、それはないよ～《聞きたい事？》」

妹が苦笑交じりで返し、念話では真剣に返した

「まぁまぁ、ビビちゃん。押さえて押さえて」

《今日は、蒐集活動に出るの？》

はやての言葉とかぶさるように、念話で今日の予定を聞いてきたのであった

《今日は……っていうか、お姉様が闇の書持ってるんでしょ！！？　だから行きたくても行けないの！！！》

そう。行きたくても目的となる物が無い今……やろうにもやれないのである

《はぁ……私が言いたいのは、“蒐集をやる気がある”のか。ってことよ。》

心の中でため息とともに出たのは、まるで試すかのような口ぶりで言い放った言葉……“蒐集をするのか否か”……

《《《《……》》》》

守護騎士たちは、その意を組取ったのか、黙り込んだ……そして

《《《《はい〔あぁ〕》》》》

騎士たちは答えた。蒐集を、したいと……

《分かったわ。じゃぁ、今夜……八神はやてが寝静まった時に、私の家に来て頂戴。そこで闇の書を返すわ……ビビ》

《ふえ！？　な、なに？》

突如話しを振られ、何ですか？　という表情をした

《話したい事がある、お前は皆より先にこっちに来い。俺らの場所

を教えた後でな。いいな》

念話で聞いた声は、彼女がよく知る兄（あね）の声であった……おそらく、この話の事は他の守護騎士には聞かれていないみたいだが……

（何気に、力を使いこなせている……マジで何があったの？（・―・？））

明らかに変わった兄（あね）に起きた事を気にする妹であった……

ちなみに。ここでの会話は、はやてなどの第三者の視点から見れば、他愛ない会話にしか見えなかったとか……

そして兄（あね）は、暫くした後、そそくさと帰って行った……

□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■

そして、時間はあっという間に流れて……はやてが寝静まった時間ある兄妹（しまい）が使っているマンションの一室

「たっだいまぁ！！ヽ（＾ｏ＾）ノ　って、うわキタナッ！！！？（＊―＊！！」

妹にとっての久しぶりの帰宅……そこで見たのは、周りに散らばっている資料のような用紙に、機械の部品、武器の一部やらなんやら……閑散としたリビングだった

「ななな、なんなのコレ？」

「デバイスとやらを作っていて、色々とな……」

「デバイス！！！？／（◎ｏ◎）／！」

妹は驚愕した。今まで一度も言ってなかった事を、まさか兄（あね）が口にしたのだ。それは今までの兄（あね）の変貌ぶりの中で最も驚愕していた事であった……

「それよりも……ほらよ」

［ポイッ］

「おっと！？（＊￣＊；……って、なにこれ？」

放り投げられたのは、真っ白なダイヤ型の宝石のようなものだった……

「デバイスだ。お前用の……インテリジェントデバイスだ。名前は無いから、自分で勝手に決めな」

「あ、ありがとう……」

口を尖らせながら答えたが、心の中では嬉しかったりしていた……

「……っていうか！！！　なんでお兄ちゃんがデバイスなんて作れるの！！！？？／（◎ｏ◎）／！　ねぇ！！　なんでぇ！！？　どうしてぇ！！？」

「ッ！！？　やかましいわ！！！　このクソ妹！！！」

［ゴチンッ！！！！］
「イッターーーーーーーイ！！！！？（＜＿＞）」

マシンガンのように言葉を連発して、兄（あね）がそれにキレて拳骨を喰らわし、いつものように顔文字と共に悲鳴を上げた……懐かしいが、彼らの普段が戻った……

「あれから色々あったんだ……あぁ、そうだ。あの猫姉妹だが、なんとかしておいたぞ。ちょっかいは出せなくはした。まぁ、今後どうなるかは分からんがな……」
「そ、そうなの？（＋＿＋？）」
「あぁ……それと、闇の書の改変プランがようやく固まった。いつ事が起きても充分だ」
「あ、あ～り～が～と～！！（＊Ｔ＿Ｔ＊）助かったよ～～～！！！！」

妹は泣きついてきたが……

［ゴチンッ！！！！］
「イッターーーーーーーイ！！！！？（＜＿＞）」
「抱きつくな、ウザ妹……」

またもキレて拳骨を……まったく、どうしようもない妹であった……

「いたた……あ、そうだ。なんで、闇の書を奪ったの？」

傷みをこらえながら、何故あのような事をしたのかと言った時……
……

［ピンポーン］
「……やっと来たか」
タイミング良く守護騎士達が訪問してきた

□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■

「まずはこれを」
［スッ……］

「「「「！！！」」」」

机の上に置かれたのは、昨夜奪われた闇の書であり、見た所……
何もされていない状態だった……が、開いて見たら

「これ……頁が増えてる！！！？」
「「「なに！！！？」」」

そう、自分が知るのは、８０頁……それが、なんと２２５頁にま
で膨れ上がっていたのだ

「私が蒐集したの。丁度いい狩場があってね、そこで色々やってた

のよ」

ちなみに、彼(かのじょ)が狩り殺し、蒐集した対象は……

モンスターハンターに出てくる“ティガレックス”、“ナルガクルガ”。そして“テオ・テスカトル”、“ナナ・テスカトリ”……

…それらに酷似していたモンスター。それと、“ユニコーン”や“ペガサス”、“ニーズヘッグ”、“フェンリル”、“ヨルムンガンド”、“ラタトスク”といった神話の生物である。もちろん幻世に存在していたモンスター達であり、一匹につき11頁分ぐらい溜まる計算だった……

「まさか、貴女はこの為に……？」

守護騎士達の長は、奪った理由は蒐集を手助けするために、闇の書を……？　と……

「さぁ？　その点に関してはご想像お任せするわ……それにソレ、ちょっと見て見たんだけど……“壊れているわ”」

「「「「？」」」」

いきなり何を言い出したのかと疑問に思ったが……ソレの内容にも耳を疑った……自分達の一部と言ってモノが、壊れているという発言に、耳を疑った

「根元は有る程度保ってるけど、ほとんどイカレているの。このまま完成させちゃえば、ものの数秒で暴走。周囲を飲み込みかねない程の災害を生みだしてしまうわ」

「「「「！！！！！？？？」」」」

守護騎士たちは驚愕した。まさか、今自分達が行おうとしている行

為が、そんなことに繋がる事だとは……だが

「そんなわけない！！　闇の書はそんな事にはならねぇよ！！！闇の書については、私達の方が一番よく知ってるんだ！！！」

叫びながら答えたのは、ヴィータだった。彼女は、自分たちこそ一番それに詳しいのだと言った。だが、帰って来る言葉は、冷酷な口調だった

「なら、この闇の書の“本来の名前”を知っているかしら？」

「え……？」

「何？」

「闇の書の、“本来の名前”……？」

「？」

四人とも、顔に疑問の表情を浮かべた。それは、まったく訳が分からない話だったからだ。闇の書の“本来の名前”……それは、今の闇の書はおかしいという話であったが……

「そう。狂っているのよ、闇の書は……壊れているから、“闇の書”なんて大層な名前が与えられているのよ」

いきなり突き付けられた言葉……信じられない。が、すぐにその言葉が真実だと言う事を知らされた

「……ビビ。まさかとは思うが……」

「……ごめんなさい。先ほどお姉様が言った言葉は、本当よ」

「「「！！！？」」」

……そう、彼女も知っているのである（ソースは原作知識か

らだが……）。今の闇の書は、壊れているのだと……シグナムとヴィータにいたっては、今までも気付くはずの点があった……シグナムは、ビビと出会った時……

――――――「闇の書と言う名の、呪いから……」――――――

ヴィータは、あの二人の少女達との邂逅の時……

――――――「この、“改悪された夜天の魔導書”じゃないと、救えない命を……」――――――

シグナムのは分かりにくいが、ヴィータのは特に顕著なモノだろう……そう、これら二つの点を考えれば、ビビもこの事実を知っていたという事になる……

「言いたくなかったのよ。言ってしまったら、貴方達が壊れてしまいそうで……今のあの幸せが、消えてしまいそうだったから……」

「「「ビビ〜ちゃん〜……」」」

彼女は、悲痛な声で答えた……彼女には似つかわしくない、悲しみが詰まった声で……

「……だから、でしょ。そこにいる人達と、その主であるあの子を救いたいと言う事も」

「「「「？」」」」

「お姉様……」

唐突に答えたのは、真実を告げた女性であり、その言葉には、なにか救いがあるかのような単語を紡いだ

「……そう、だね……うん！！　私は、はやてちゃんと、皆を救いたい！！　壊れてしまった闇の書から、皆を救いたい！！！　そして、“闇の書”も！！！！」
「「「ビビ｛ちゃん｝……」」」
「……」

彼女が言ったのは、全てを救いたいという願い……傲慢で欲張りだが、彼女らしい答えと言えばそうだろうが……

そう、もはや彼女にとって、はやてや守護騎士たちは、テレビの向こうの憧れではなく、自分が守りたい、助けたいと願う“存在”となっていた……最愛なる、存在へと……

「……なら、行きましょ」
「「「「？」」」」

唐突に、女性が立ち上がり、どこかへと向かっていった

「それらを救うためには、まずソレを完成さないと。そうでもしないと、動かせないもの。だから、手っとり早く蒐集出来る所に行くのよ……」

これまた無愛想に、淡々と答えた

「あのぉ、どこに行くの？」

妹が、頭に大量の疑問符を浮かべて問いかけた

「そうね……正式な名前がないから言えないけど、私は“幻世”

と呼んでるわ。そこに行くの」

「「「「「“ゲン、ゼ”？」」」」」

妹と守護騎士全員が、聞き慣れない単語に首をかしげた

そして、蒐集はあり得ない速度まで、加速していった……

#１８　久しぶりの兄妹（しまい）の再会。そして、蒐集活動は加速する（後書

神「お～い、作者～……いねぇしｗ　ったく、この場を俺一人だけでやらせるつもりかよ」

メイリン（以後、メ）「だったら、私たちが手伝いましょうか？」

ヤーヤ（以後、ヤ）「全く、どこに行ったのよ、あのダメ作者は！」

神「まぁまぁ……っていうか、マジでどこ行ったんだ？」

メ「さぁ？」

ヤ「お兄様に仕事を丸投げして逃走なんて、いい度胸だわ……あとで生まれたことを後悔させてやりますわ」

神「ヤーヤ、穏便になろうな（汗）」

メ「この子なら、やりかねないわね……」

神「とりあえず、しばらく作者が不在（！？）なため、俺達三人がこのあとがきを支配させてもらう！！！」

ヤ「私とお兄様のラブラブで熱～い関係を見せつけてやりますわ！！」

メ「あら？　私も負けないわよ。あなたみたいな小娘にね（黒笑）」

神「おまえら、おちついてやろうな、うん（滝汗）」

#１９　転生者兄妹&守護騎士達の蒐集活動……ってタイトルが似合うよね？

更新が少しばかり遅れてしまって申し訳ありません

そして、とうとうストックが無くなってしまいましたｏｒｚ

おそらく、明日からは不定期更新になるかもしれません

ですが、止めるつもりは毛頭ありませんので、ご安心を

十六夜様、未土井無視様、ｍｅｏ様。ご感想、ありがとうございます！！

#１９　転生者兄妹＆守護騎士達の蒐集活動……ってタイトルが似合うよね？

――――そして、とある兄妹（しまい）と守護騎士は、幻世で壮絶な戦いを繰り広げた……――――

……元は、人のような者は存在してはいなかった世界……いたとしても、魔人や獣人だが……魔獣や神獣……幻想種が存在するだけの世界を今、六人の人が闊歩している

［ズガガガガガガガガッ！！！！］
「姉上殿！！　そちらに行きました！！」
「ありがと、貴女は下がってなさい」

現在、グレイとシグナム、ザフィーラの三人が組み、シグナムが陽動、ザフィーラが遊撃、そして、グレイが止めを刺そうとしている

［ズガァァァァァァァァンッ！！！！］
「ギャアァァァァァァァッ！！！！」

目標は、アースワームと呼ばれる架空の生物。地面を掘り進み、地中から目標を目がけて捕食すると言う方法で生きてきた生物……
それが今

「……五月蠅い」

たったそれだけの理由で――――

「カテゴリ、弓……“龍弓【山崩】”。カテゴリ、槍……“ゲイボルグ”」

［チャキキッ］

彼女（かれ）は、細長く、鮮血のように赤い投擲用の槍と、弦が長い和弓を具現化させ、それらを構え、槍を矢にして

「穿て、“刺し穿つ死棘の槍（ゲイ・ボルグ）”」

［バシュンッッ！！！！！！］

ソレを、アースワームへと

［ズシュンッッッ！！！！！！！！］

放った

「ギャアアアアアアアアアアアアアアアアッッッ！！！！！！！！！？？？」

［ズドォォォォォォォォォォォォォンッッ！！！！！！！！］

その巨体は、その世界中に響き渡るのではないかと思うほどの暴音を吐き散らし、地面に沈んだ……

「だから、五月蠅いって……」

――――――たった、それだけの理由で、穿たれた……

□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■

時間は、数分前に遡る……

ある兄妹（しまい）が使っているマンションの一室の物置部屋

「……ナニコレ？」

妹が疑問を述べ、守護騎士たちは唖然としていた……その視線を埋め尽くしているのは、何やら巨大な装置……ただのマンションに、なにやらとんでもない様なモノが置かれていたのである……

「転送装置よ。これを使えば、局にばれずに次元転送できるし、管理局の手が届いていない世界にだって行けるわ」

「「「「「！！！！？？」」」」」

管理局にばれずに、そして管理局が未だに知らない世界に行ける転送装置……なんという高性能なモノだろう

「……あのぉ～、お姉様？　そんなものをどこで手に入れたんですか？」

妹は、全員が思っている事を代表して言った。そして、帰ってきた言葉は

「神から貰った」

［コケッ］

全員がずっこけた。真面目な顔で素っ頓狂な言葉を紡げばそれはもうこけるしかないだろう

「マジで？」

あの姉がこのような事で冗談や嘘を言わない事を知っている妹は、その審議が本当なのかどうなのかを……

「あぁ、マジだ……」

「「「「「……」」」」」

守護騎士たちは、彼女達のバックはとんでもない存在なのだと、思い知った瞬間だった……

「さてと、時間がもったいない。“タマモ”」

『はい。転送装置起動、“幻世”への扉、開きます』

そうして、転送装置が鈍い稼働音を出して動き出した

「入りなさい。あぁ、それと、空中に放りだされるから、気を付けてね」

注意と共に、彼女（かれ）は、転送装置の中心に立ち、そこで消えてしまっ

た。残りの五人も、彼にならって転送装置が放つ光に包まれた……

……

□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■

そして、転送した先は……

「ギャオォオオオオオオオオオオオオッ！！！！！」「ギャァッ！！！　ギャァッ！！！」「グモォオオオオオオオオオオオオッ！！！！！」

「「「「「……」」」」」

さて、何なんでしょうか？　この魔境は……見た事もない様な魔物がうじゃうじゃ……それに、そこから感じる魔力が今まであってきた魔法生物よりも遥かに高い……ただの魔導師なんかよりも強い魔力を感じる事もあった……

「ようこそ、幻世（げんせ）へ」

まさに、狩場とはよく言ったものだと、思った……そして彼らは、六人は二つのチームに分かれ、蒐集活動を開始するのであった……

……

□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■

そして、時は戻り……

「闇の書よ、蒐集を」

『蒐集』

［キィィィィィィィィィィンッ……］

シグナムは、先ほど倒した巨体……アースワームを蒐集しながら、思っていた

「（圧倒的だ。姉上殿と私達の間には、絶対的な力量差を感じる……それに、戦い慣れしている感がある……シャマルが言ったように、まさにビビとは正反対な方だ）」

そう、思っていた……まさに、愛する少女とは一線を規す実力を秘めているのは、確かだった……

「（時間があれば、手合わせ願いたいものだな……）」

体中の血が……強者と戦いと言う願いが、彼女を駆り立てた……

…そして、その願いがかなうのかは、未だに分からない……と、

そこへ

《ヘルプミィィィィィィ～～～～ッ！！！！／／（ＴｏＴ）／／》

いきなり念話で大音量のＳＯＳが来た。あの腐れ妹の

「……どうしたの？」

グレイは、あくまで女口調で言ったが、怒気がこれでもかと言うほど含んでいた

《なんか！！　青い龍と白い虎！！　そんで黒い亀蛇に朱い鳥に追われてます！！！　どんな攻撃してもはじき返されて、どうしようもありませ～～～んッ！！！！！》

「青い龍に、白い虎？　それと黒い亀蛇に朱い鳥？」

『検索します……でました。中国の神話の生き物。“四聖獣”と呼ばれる聖獣、“青龍”、“白虎”、“玄武”、“朱雀”と判明しました』

「あぁ、どっかで聞いたことあるな……」

さすが賢女。なんでも知ってるな……と言おうとした時

《ビビ！！　後ろ！！！！》

《え？　うぎゃァァァァァァァッ！！！！？？、（ＴДＴ）ノ》

「ビビ！！！？」

念話の向こうから悲鳴が聞こえた。それにシグナムが反応したが

《た、助けてェェェェェェェェェェッ！！！！！、（ＴДＴ）ノ》

なんだか、まだ元気らしい……

「あのバカ……」

そう毒づいた後

「姉上殿、ビビやヴィータ達の所が気になります。急いでいきましょう！！」

真剣なまなざしで言われ、コレは断れんなと思い……

「仕方ないわね……行きましょう」

ため息交じりで答え、すぐさま妹達がいる場所に急行した

□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■

「うっひゃァァァァァァァッ！！！！？？、（ＴДＴ）ノ」

［ズガガガガガガガガガガッ！！！！］

今現在、ビビ、ヴィータ、シャマル組は逃げていたが……

「チッ……なんなんだよあいつらは！！！？」

自分達は、木々の間をすり抜けながら空中を飛んでいた

「もう！！　カメさんはのんびり屋さんじゃないんですかぁ！！？」

シャマルが前にはやてと読んだ本……それに出てくるカメは、鈍間のはずだったが、このカメは違っていた

［ズンッッッ！！！

［ズドォォォォォォォォォォンッ！！！！？」
「▼▼▼▼▼▼▼▼▼ッ！！！！？」

何を言っているのか分からない奇声を上げる玄武。それを襲った相手と言うのは

「……ふう。無事みたいね」
「お、お姉様！！！」

ビビの兄（あね）、グレイ・スティンだった。その隣には、心配そうな表情でビビの方を見るシグナムがいる

「ビビ！！」
「し、シグナム～～～！！！」

ビビはシグナムに抱きつき、胸に顔をうずめながら泣いていた

「だ、大丈夫か？」
「大丈夫く無かったよ～～～っ！！！　コワかったよ～～～ッ！！！！」
「そ、そうか……／／／／／／」

なんだか、異様な空気が包み込もうとした時に

「◆◆◆◆◆◆◆◆◆ッ！！！！」「▲▲▲▲▲▲▲▲▲ッ！！！！」「●●●●●●●●●ッ！！！！」「▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼ッ！！！！」

奇声を上げ出す四体の聖獣……どうやら、攻撃したことにより戦闘態勢を取ったようだ

「聖獣、ね……こいつらからなら、かなりの頁を蒐集できそうかも」

「「「「え？（@＿@）」」」」

「何……？」

ビビだけではなく、シグナムやヴィータ、シャマルですら耳を疑い、つい言葉に変なモノ（顔文字）を使うほど驚いた……ザフィーラは、普通に驚いた……

あの聖獣を、蒐集するという……

「神話の生物なら、神殺しの力が宿った武具で良いわね。なら、あれが一番いいかしら……」

そう言って、彼女は虚空に手を伸ばした

「カテゴリ、多機能武装。出なさい、神を喰らうモノ……“神機（じんき）”」

［ジャキンッ！！！］

［ドクンッ……！　ドクンッ……！　ドクンッ……！］

取り出したのは、機械のフレームが付いた黒い何か……それはまるで生きているかのような存在感をかもしだしていた。それと同時に、彼女（かれ）の腕に紅い腕輪が装備されていた

「武装は……“神触銃タキツ”、“神触剣タキリ”、“神触甲イチキシ”」

［ジャギギギンッ！！！！］

と唱えた後、黒い何かに、生体兵器のような黒い銃と剣と装甲が装備された

「それ、まさか、“ゴッドイーター”の？」

妹がそう言った事に耳を貸さず、彼女（かれ）は

［ダンッ！！！］

四聖獣に向かって、走り出した

「◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆ッ！！！！！」「▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲ッ！！！！！」「●●●●●●●●●●ッ！！！！！」「▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼ッ！！！！！」

四聖獣も、迎撃しようとグレイに向かって、各々が魔力弾らしきものを飛ばしてきた。が

「鈍間」

とだけ言って、攻撃を簡単に交わしていき

「“銃形態（ガンフォーム）”」

［ガシャンッ！！！］

「バレットセレクト、“カムイ・スラスター”……穿て」

［ダゴンッ！！！！］

神機を銃の形態に変え、そこから貫通性の高い神殺しの弾丸を、近くにいた白虎に向けて放ち

［ドガアアアアアアアアアアッッ！！！！！！！］
「●●●●●●●●●ッ！！！！！？」

白虎は今まで受けた事のない攻撃でひるみ、その隙に

［ダッ！！！］

彼女（かれ）は白虎の横へ通り過ぎた。その間に

「“剣形態（ブレイクドーム）”」
［ガシャンッ！！！］

再び神機を剣の形状に変え、更に次の標的……玄武と朱雀を睨んだ

［ダンッ！！！］

その場で彼女（かれ）は跳躍し、神機を構え

「ハァッ！！！」
［ザシュンッ！！！］
「▼▼▼▼▼▼▼▼▼ッ！！！！？」

最初に玄武を斬り付け

「フンッ！！！」
［ザシュンッ！！！］
「◆◆◆◆◆◆◆◆◆ッ！！！！？」

その勢いのまま、朱雀を斬り付けた

「ラスト……“捕食形態（プレデターフォーム）”」
「バシュッ！！！　ジュギギギギギギギッ……！！！！」
彼女（かれ）の持つ武器から、黒い何かが出現し、それらが集まり……化物の頭を、象った……それは、まるで生きているかのように、動いており……
『グルルルルッ……！！！』
否、生きていた
「ハアアアアアアアッ……！！」
［ダシュンッ！！！］
彼女（かれ）は、出てきた顎（アギト）を青龍に向け、空中を蹴り、突進していった
そして
「喰らえ」
［ガブゥッ！！！！］
「◆◆◆

［スタッ］
「……キサマの力、貰ったわよ」
彼女（かれ）は地面に着地し、それと同時に神機が元の剣形態に切り替わった瞬間
［バリバリバリバリィィィィッ！！！！］
「“バーストモード”」
彼女（かれ）の体から、電流のようなモノが走り、その身が金色に光っていた
「“銃形態（ガンフォーム）”」
［ガシャンッ！！！］
だが、彼女の次の行動は、銃形態に変形させ、銃口を真上に上げた
「ハアアアアアアアア……ッッ！！！！！！！！！！」
まるで、全身の力を武器に注ぐかのように、女性には似つかわしくない雄たけびを上げた
「アラガミバレット……“青雷・落迦陣（せいらい・らっかじん）”！！」
［ダゴンッ！！！！］
空中に放たれた弾丸は、何にもあたらず、空に消えた……刹那
［ズガガガガガガガガアアアアアアア

！？？」「▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲ッッ！！！！！！！！？？」「●●●●●●●●●●●●●●●●●●ッッ！！！！！！！！！？？」「▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼ッッ！！！！！！！！！？？」

青色の雷が、四聖獣達を襲った……

「「「「……」」」」

その様子を見ていた守護騎士たちは、唖然としていた……ただそこにいるだけで、膨大な魔力を感じる相手に、恐れを知らずに攻撃し、挙句にはそれらを圧倒していた……

そんな中、妹は

「なるほど、そうすればいいのね……だったら！！！」

そして彼女は、天に手を掲げ、荒ぶる神々を呼び出した

「さぁさぁおいでなさい！！　禁断なる戦の覇王！！　“テスカトリポカ”！！　四体！！！」

［ウォウォウォウォッ！！！］

現れたのは、四つの召喚魔法陣。そこから出てきたのは、神殿の外壁のような装甲に、ミサイルポッド、そして前足がキャタピラのような形状の異形の神……荒神と呼ばれるモノの中で、強い部類に入る存在。禁王、覇王の異名を持つ神であった。その神に

「よっとっと！」

ビビはその内の一体の兜の上に乗っかり、まるで隊長のようにビシッと指を四聖獣達に向け

「テスカトリポカ！！　“ロックブラスト”！　発射準備ッ！！！！」

「「「「グオォォォォォォォォォッ！！！！」」」」

［［［［バガンッ！！！］］］］

四体の神々は、その指示に応えるかのような雄たけびを上げ、ビビが出した指揮に従い、足を固定させ、前面の装甲を開き

「いてこましたれェェェェェェェェェェェェェェェェェェェェェェェェッッ！！！！！！！！！！！！！！！」

［［［［ドシュウウウ

「つ・ぎ・は～……今日は出て来てくれるかな!!?　“ウ・ロ・ヴォ・ロ・ス、堕天種”ちゃ～～んッ!!!!」
［ウォォォォォォォォンッ……ゴゴゴ

妹は決断した

「よ～し……じゃぁ、貴女は今日から“ベアト”……“ベアトリーチェ”を名乗りなさい！！」

“ベアトリーチェ”……イタリア圏でよくつかわれている名前で、ある作品では魔女の名でもある……

『了承。固有名称、“ベアトリーチェ”、登録完了。神魔招来（アバター）とのリンクを確認。モード０１“ベルレフォーン”の使用を提案します』

「べ、“騎英の手綱（ベルレフォーン）”！！！？（@＿@！）」

妹は驚愕した。まさか、あの宝具が……黄金の鞭と手綱で、操った対象の全能力をワンランク上昇させる、攻守ともに破格の宝具である物が……そんな物がこれに備わっているのだという

その事実に、妹は子供のような顔で喜び、そして

「なるほどねぇ……うしゃぁッ！！！」

気合いを入れて、妹はテスカトリポカの兜の上から、ウロヴォロス堕天種の背中に乗り移り

「じゃぁ……“ベアトリーチェ”！！　モード０１、“ベルレフォーン”！！　起動！！！」

『了解。チェンジ、“ベルレフォーンモード”』

［シュンッ……ジャキンッ！！！］

彼女の手に現れたのは、まぎれもなく黄金の鞭と手綱。そして、それを……

［シュルシュルシュルッ！！！］
「グルルル？」

ウロヴォロス堕天種の二つの角に巻き付けた……途端

「グオオオ

オオオオ

この二人は、いったいどれほどの力を内胞しているのかと……

「ふぅ、終わった終わった（＾－＾）」

「なかなかの威力ね……でも、もう少し改良の余地有りかしら……」

妹はこれでもかと言うほどのチート能力を使ってすっきりした顔で満足しており、兄（あね）は、妹に渡したデバイスの性能を検証していた

「「「「……」」」」

守護騎士たちは、またも絶句してしまった……

「あぁ～～、疲れた。戻ってシャワー浴びた～い（＾＾♪」

「ほら、何をしているの？　さっさと蒐集しなさい」

「あ、は、はい！！」

こうして、今日の蒐集活動は、終了した……

ちなみに、今回の成果は……グレイ、シグナム、ザフィーラが狩ったアースワームから１０頁。ビビ、ヴィータ、シャマルが狩った鳥のような魔物から５頁。そして、四聖獣からは一体に着き５０頁……計、２１５頁、累計して、４４０頁であった……

#１９　転生者兄妹＆守護騎士達の蒐集活動……ってタイトルが似合うよね？

神「作者が逃げた理由が判明……したわけがない」

ヤ「どこ行ったのよ全く！！！」

メ「さぁ？」

神「とにかく！！　今回はこんな事をやっちゃうぜ！！」

――――――今作のキャラ、グレイ・スティンとビビ・スティンの貸出許可――――――

メ「……いいの？　勝手にやっちゃって」

神「俺を誰だと思っていやがる！！！　なんでもできる、お前たちの最愛の神様だぜ！！！！」

ヤ「お兄様カッコイイですわ！！！」

メ「（盲目的ね、ホント）」

神「現在、リリなの小説を執筆している方々限定です！！　なので、ふるってお使いください！！！」

ヤ「来なかったら？」

神「来るまで待つさ……」

メ「知らないわよ、私は」

神「これも人気を集めるためだ！！　多くの応募、待ってるぜ！！！」

作「（神様、勝手なことしないでよ……まぁ、いづれやりたかった事ですがね……）」

祝！！！　１５万ＰＶ、１万ユニーク突破記念座談会！！！　の、つもりが、作

今回は本当に申し訳ありません、超変なモノなので、本編が見たい方はすぐに次話に飛んで下さい

＃６の一部を訂正しました

祝！！！　１５万ＰＶ、１万ユニーク突破記念座談会！！！　の、つもりが、作

作「えぇ、読者の皆様方。どうもこんにちは、こんばんは、おはようございます。日ごろから、今作、“魔法少女リリカルなのは　～とある兄妹の転生物語～”を読んでいただいき、誠にありがとうございます……今作も、早い事にもう掲載を開始してから早二週間近くを迎えました。そして、昨日……ついに１５万ＰＶを突破しておりました。コレは私にとっては大変うれしい限りです。そして、読んで下さった読者の方々、今まで感想を下さった未土井無視様、幻想の箱庭様、ＪＡＭ様、青いタヌキ様、十六夜様、幻想の庭師様、煌　焔様、琥様、ｍｅｏ様、緋水様。そしてお気に入り登録して下さっているユーザーの方々。評価を下さった方々……それらすべての方々に、心からお礼申し上げたいと思います……本当に、ありがとうございますｍ（＿＿）ｍ」

グ・ビ・神「……おい、作者」

作「なんでしょうか？」

ビ「今回は一体何を“したかった”の？　ねぇ、教えてもらえないかなぁ？」

作「今回、ですか……？」

神「前回は俺がカオスな空間を作ったが、今回の“コレ”はなんだ？」

作「いやいや、ついこの事実がうれしくって、ついやっちゃったw」

グ「テメェの頭の中どうなってんだ？　花畑でも広がってんのか？」

作「いえいえ、どちらかと言うと、剣の丘ですよw」

ビ「“無限の剣製（アンリミテッド・ブレイド・ワークス）”ですね、分かります」

神「でもさ、“コレ”はちとやり過ぎでしょ……」

作「いいじゃん、別に。ただ私がやりたいからやっただけなんだから……」

グ「……あっそ……（あれ？　でもこれ著作権侵害……大丈夫なのか？）」

作「さて、今回は……」

――――ただ作者がやりたくてやった。こんなＯＰ、あったらいいなぁと思いながら作ったＭＡＤみたいな何か――――

作「です！！」

グ・ビ・神「……」

作「あれ？　どうしたんですか？」

グ「いや、アホだろお前」

ビ「アホですねw」

神「バーカw」

作「酷い！！！　酷過ぎるよ君達！！！？」

ビ「そもそも、こんなの読者の想像力次第じゃない？　作者の頭の中共有出来る訳じゃないんだし」

神「つか、独りよがりすぐる」

グ「需要無いモノを作ってどうする」

作「……」

神「あ、黙った」

グ「軟弱」

ビ「多分、お姉様の言葉が止め刺したんじゃないのかなぁ（＾―＾；）？」

作「……い、良いモン！！　やりたくてやっただけなんだから！！！」

グ「あぁ、はいはい」

作「それでは、こちらになります……どうぞ！！！」

＝＝＝

『引き裂かれ　闇を抱いた心が叫ぶ』

深夜のネオンをバックに、マンションの屋上の給水塔の上に座り、たそがれているグレイ（『心が』で、横顔にアップし、『叫ぶ』で俯く）。左向き

『何もかも諦めるより　再び出会う』

真昼の海辺に立って潮風を受けながら、にこやかな笑顔を浮かべるビビ（『再び』『出会う』で空を見上げる）。右向き

『いま旅路へと』

なのは、フェイト、はやて、アリサ、すずかの五人娘のカット

『予感の冷たさに』

ヴォルケンズと、闇の書の意思、管制人格（リインフォース）のカット

『凍えつつ』

クロノ、ユーノ、アルフ、リンディ、エイミィのカット

『近付く魂』

青空広がる荒野の岩場に座る神様（『しい』口元にアップし、ニヒルな笑みを浮かべる）

『Ｈａｒｍｏｎｉａ　今日の意味は』

雲の上を、虚ろな表情で飛ぶビビ

『自分で紡いでいくのだろう』

上のシーンのビビの顔アップ。そして、そのまま仰向けになり、地上に落下していく（『だろう』で落下していく）

『刻んだ罪でさえも』

赤く染まった空の荒野に、剣型の武器を降りまわし、黒い影を斬りながら走るグレイ

『この手で光に還す』

上のグレイと空から降ってきたビビが背中合わせになり、互いに戦闘態勢を取る（『手』で、ビビが降りてきた、『えす』で戦闘態勢になる）

『Ａｌｅａ　ｊａｃｔａ　ａｌｅａ　ｊａｃｔａ　ｅｓｔ』

ビビが様々なアニメ、ゲーム、漫画のキャラの軍団を召喚し、グレイが大量の武器、武装、兵器を作りだし、空に浮かばせる。そして、その軍団ごと黒い影の集団に突っ込んでいく（『』）

演奏が終わるまで、上の画面の静止画のまま

＝＝＝

い出して、ソレを今作でやってみた結果なのですが……」

神「多分コイツ馬鹿じゃね？　と思われている事間違いなしだなｗ」

ビ「言えてる／（＾ｏ＾）／」

作「いいも～ん！！！　好きでやった事なんだから！！！」

グ「開き直りやがった……」

神《……なぁ、作者。お前が最近あとがきにいなかったのは、まさか……》

作《これ作ってましたｗ》

神　《……》

作《嘘です。実際は俺ら二人ではもうどうしようも出来なくなってきたら、急きょ……》

神　《ぶっちゃけやがった……》

作「とにかく！！！　これからも、今作をどうかよろしくお願います！！！」

グ「こんなアホだが、まぁよろしく頼むわ」

ビ「それでは皆さん、次回までお元気で！！！」

神「ばいば～い！！！」

神「さってと、じゃぁお前を粛清するとするか（黒笑）」

作「え？」

ビ「そうだねぇ（黒笑）」

作「ちょ……ま」

ビ・神「消し飛べ！！！！！」

作「ギャアアアアアアアアアッツ！！！！！！？？」

グ「アホ共が……」

祝！！！　１５万ＰＶ、１万ユニーク突破記念座談会！！！　の、つもりが、作

作「ほんとうに無駄なモノをお見せして申し訳ございませんでした」

ヤ「馬鹿ね」

メ「阿呆ね」

神「死ねば？」

作「うう……」

ヤ「罰として、アナタにはここにいる事を禁じます」

作「え？」

メ「迷案ね」

神「そっちかよｗ」

作「あの、お知らせとか、そのようなときには……」

神「大丈夫だ、俺が代わりにやってやる」

作「いや、ダメですって！！！」

ヤ「五月蠅い、ダメ作者はさっさと消えなさい！！」

作「あ～れ～～～～～」

メ「（ホントにやっちゃったわよ、この子）」

神「（キャラに振り回される作者……アホみてぇｗ）」

ヤ「というわけで、今日からこの場は私たちが支配することになります。読者の皆様方、どうかよろしくお願いします」

神「カオスを目指すからな！！　楽しみにしとけよ！！！！」

メ「（とてつもなく不安だわ……）」

作「ううう……俺はどうしたらいいんだろう？」

#２０　物語りは、終盤へ……って、はやてちゃんが入院しちゃったよ！！？

なんとかの、連続投稿ですが……なかなか次回の分の製作が進みません……

其れに、現実の方でも忙しく心身ともに疲れているため、やる気がしないのも原因かもしれませんが……なんとか頑張ります！！

十六夜様、緋水様、未土井無視様、青いタヌキ様、ｍｅｏ様。ご感想、ありがとうございます！！

#２０　物語りは、終盤へ……って、はやてちゃんが入院しちゃったよ！！？

――――――そして、とある兄妹（しまい）の妹は、愛する者の入院で、困惑する……――――――

兄（あね）の原作介入から、数日がたった……

１２月１２日……

……あの四聖獣を狩ってから、蒐集活動はゆっくりとだが進んでいた。しかし、一日に一気に１００頁も溜まる程のスピードでは無く、一日に１０頁程溜まる程度だった……実は、あの後から幻世の幻想種達がこちらを見る度に物凄い速度で逃走をしてるのである……おそらく、あの幻世の中でトップの場所にいたのであろう四聖獣をやったからか、それであの世界の生物達は自分達に恐怖を抱いたのだろう……それが原因で、今の闇の書の頁は４６１頁。あまり溜まっていないのである

「はぁ、どうしたものかなぁ……？」

リビングの机に頬杖を立ててため息をついたのは、転生者兄妹（しまい）の妹。ビビ・スティンであった。彼女も、幻世での戦いに慣れてきて、はやてが寝静まった時にあちら側に言って能力検証と言う名の修行を行っているが……

「私の召喚獣達が蒐集出来れば、あっという間に溜まるのになぁ……」

彼女が召喚するのは確かに強力だが、正体はビビの魔力である。故に、一個体にリンカーコアを持っていないのである

「……はぁ、どうしたものかな……」

またもため息をついたビビ。とそこへ

「どないしたん？　ビビちゃん」

はやてが、心配そうにビビの顔を覗き込んできた。その時、二人の顔がかなり近付いていたとか

「っ……な、なんでもないよ。ちょっと、考え事（ヤバ、キスしちゃおうと思ってしまったよ……まだそれは早いって（―　―ゞ）」

あくまで、手順は踏むようだが……欲望を必死に押さえて、ビビは椅子から立ち上がった

「さてと……確か、今日はすずかちゃんが来るんだよね？」

「うん。面白い本を見つけたっていっとったから、楽しみや」

そっか、とつぶやいたビビ……愛する者の笑顔が、今はたまらなく美しく見えていた……

「そろそろ来るはずなんやけどなぁ……」

［ピンポーン］

「あ、来た来た♪」
「私が出るね♪」
「うん、よろしゅうな」

そして、彼女は玄関に向かって行った……

□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■

ある兄妹（しまい）が使っているマンションの一室

「……はぁ、めんどくさ」

またもやこの部屋に一人になった兄（あね）は、いつものようにリビングの机に頬杖を立ててため息をついていた……デジャヴを感じるのは仕方ない

「まさか、こんな事になるとは。まったく、メンド臭い事になったわねぇ」

……嫌悪感、再び

「……（いかん、最近人前に出ているせいでか、女口調でし

ゃべる事が多くなってきているのがアレなのか……）」

いかんいかんと心に誓った……だが、ホントに女口調でしゃべる事に慣れてしまってきている自分が嫌になってきた

「（まぁ、変人に見られないようにだけはしないとな）」

それだけは、何としても防がねばならない。ただでさえ目立つ体型故に、せめてまともな精神をしていなければならないと……だが、平然と武器を取ってなんの恐れも無く武器を振りまわして魔物を倒していくというのはまともな精神の持ち主のやる事なのか……」

「……なんだ、いたのか」

「いたよ、ついさっきだがなw」

「あっそ……」

地の文を途中から支配してやってきたのは、あの神様。今回は何の用だ、と聞いてみれば

「暇つぶしw」

コイツは普段何をしているんだ？

「お仕事さ、神様にしかできないお仕事を、ね」

最後にウィンクをして熱烈な視線を送った、が

「……キモイ」

まさに一蹴。元男の彼（かのじょ）にとっては、その行為はとんでもないほどの

怖気に襲われる……さらに

「テメェ、俺が男だって知ってるんだろう？　それでよくそんなこと出来るな」

「いいじゃん。っていうか、もう身も心も女になっちゃえよ。楽になるぞぉ、色々と♪」

「絶対に嫌だね」

あくまで、男で有り続けたいと願う、兄（あね）であった……

□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■

場所は戻り……八神家のリビング

今は、ビビとはやて、そしてすずかの三人が一冊の本について語り合っていた

「でねぇ、その主人公が……」

「へぇ……そらおもしろそうやな♪」

二人の会話は、穏やかなそのもの。そして、それを見つめるビビはというと

「（はう～ん……やっぱり、すずかちゃんはかわいいなぁ♪
はやてちゃんもなのはちゃんもフェイトちゃんもだけど……アリサちゃんはまだ見てないけど、やっぱり可愛いんだろうなぁ……（＊＾―＾＊））」

変態な下心満載。いくらテレビの向こうの憧れで無くなっても、性根である可愛い女の子好きという点は抜けておらず、逆に加速している事実……とことん変態になりつつある妹であり、その変態の毒牙にどっぷりと嵌まってしまい、変態成分に浸食されそうになっているはやて。そして、次の標的にされているすずか……まさに、危険領域が形成されていた

「（はぁ……早くアリサちゃんに会いたいなぁ……（＾＾♪）」

そして思考は、いづれ完成する百合ハーレムの事でいっぱいに……

……その時だった……

「それでな……ッッ！！！！！？？」
［ドグンッ！！！！］
「あ……クゥ……」
「？　はやてちゃん？」
「どうしたの？」

何かが、起きた。そして、その原因となる事を、ビビは一瞬のうち

の把握した。そう、この日……はやてが……

「が、かはぁ……」

［ガシャンッ！！］

「「はやてちゃん！！！！！？？？」」

はやてが、闇の書の浸食で入院を余儀なくされる事態に陥る出来事が、起こる日だった……

□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■

そして、急に苦しみだしたはやての近くにいた二人は、すぐさま救急車を呼び、病院へと急がせた。その間に、ビビは守護騎士達全員を呼びだし、ザフィーラ以外の全員は病院に急行した

そして、石田医師の診察を受け

「うん、もう大丈夫みたいね」

「はい、ありがとうございます」

心配は無いようだが……

「（胸と手が釣ったって、よく考えればそれおかしくない？　まぁ、原作でも後で先生が変だって言ってたけど……）」

「はやて、よかった……」

「本当、無事でよかった……」

……気になる点は、この場にすずかちゃんがいる事……原作ではいないはずなのに、なぜかいる……やっぱり、私達が介入したことにより、大分違ってきているのかもしれない……

「（歴史とは、違った流れになって来てる……もしかしたら、このまま違った事が続いたら、世界の修正力が働くんじゃ……？）」

“世界の修正力”。それは、妹が今最も懸念している事柄のひとつ。もしそれが動き出せば、まず自分達がそれに狙われる……それでは、せっかくの転生ライフが台無しになる

「（でも、私だってそこのところは考えてないわけじゃない……）」

それらにも対抗できるようにと考案したのが、彼女達が持っている能力のひとつ……それと妹の神魔招来（アバター）と、兄の兵装錬製（ウェポン）。それら三つの能力は、対世界の修正力用に彼女が考えた能力なのであり、上手く動けば、おそらく神にすら勝てると自負している能力である……

だが、彼女達に世界の修正力¶＃@か、※$に£∴？§、±るΘも▼かっΩ……

「まぁ、来てもらったついでに、ちょっと検査とかしたいから、もう少しゆっくりしていってね」

……妹の脳裏に、とある言葉が連呼されたが、気にしたら負けだ……

「それと、シグナムさん、シャマルさん、あとビビちゃん。ちょっと……」

「「はい？」」

「……」

シグナムとシャマルは、何だろうという表情だが、ビビは違っていた。次に、あの人から来る話の内容を、知っているからである

□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■

そして、石田医師の話が終え……内容は原作同様、入院の話であり、その事をははやてに話していた

「入院！？」

唐突の話に、はやてはビックリな表情で答えた

「検査とか、念のためとかですから、心配無いですよ。ね」

「はい」

「うん、だから、安心して、ね」

魅了の笑み発動!!　は、無かった。なぜなら、近くにすずかちゃんがいるため、発動出来なかったのだ

「で、でも……私が入院したら、皆のご飯は誰が作るん？」

「「「「……」」」」

ザ・ワールド!!!!　その時、私達は固まった。そう、しばらくはやてちゃんの料理が食べられないという事は、死活問題なんじゃぁ……

「そ、それは、何とかします」

「な、何とかなりますよ、多分……」

「う、うん!!　それに、はやてちゃんの一番弟子の私がいるんだから、何とかするよ!」

そう。実は私、はやてちゃんとお料理を作っているうちに、料理スキルが飛躍的に上がっていたのだ。今なら、はやてちゃん並の料理が作れる自身があります!　たぶん（＾―＾；）

「そ、そうか……ほなら、ええけど……」

はやては、がっかりした様子で答えた……

「それに、何度もお見舞いに来るから、ね」

とそこへ

「私も、学校の帰りに時間があったらお見舞いに来るね。あ、そうだ。私の友達も一緒に連れてきてもいいかな？」

「！！！！！？？？／（◎ｏ◎）／！」

ちょっ、すずかちゃん！！！！　それは！！！！

「あぁ、ええよ！　私も、すずかちゃんの友達にあってみたいわ」

はやてちゃ～～～～～～んッッ！！！！！！、（ＴдＴ）ノ　それはなのフェイとヴォルケンズの鉢合わせフラグ～～～！！！！

「（……って、焦る必要ないか（・―・）　どうせ猫姉妹はお姉様が何とかしてくれたし、なのフェイコンビとの溝はあんまり無いんだし……っていうか！！！　ソレを利用して仲直りイベントを発生させるのもいいかも！！！！（＾＾）！）」

意外と計算高い妹。変態で腐女子なのだが、なぜか頭の回転は恐ろしく早いのだ。神は、なぜこんな奴にこんな才能を与えたのだろう……？

□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■

「ブエックション！！！　ぐぅ……俺、そんな才能上げた覚えは無いぞ」
「誰に向かって言ってるんだ？」
「いや、気分で言ってみただけだ」
「は？」

□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■

「それじゃぁ、今日はこれくらいで帰るね」
「うん」
「毎日会いにくるよ！！」
「ええよ、別に。いてもなんもやる事無いし……」
「で、でも……」
「ふふっ、ヴィータはええ子やなぁ」

そういって、ヴィータの頭を撫でるはやて……ヴィ、ヴィータ、うらやましい……

「すずかちゃんも、ごめんな。せっかく遊びに来てくれたのに」
「ううん。倒れちゃった時はビックリしちゃったけど、無事でよかったよ……はやく元気になってね」
「うん、ありがとな！」
そうして、私達ははやてちゃんの病室を後にした……

□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■

帰り道。私は、すずかちゃんを送りに行ってます。ヴォルケンズは、蒐集のために幻世への転送ゲートがある私達のマンションに向かっています

「ごめんね、いきなりこんな事になっちゃって」
「いえ、私は別に構いませんよ。はやてちゃん、早く良くなるといいですね」
「ありがとう。優しいのね、すずかちゃんは」

そう言って、私達は病院の前の道を歩き、そこで

「あ……それでは、私はコレで」
「うん。またね、すずかちゃん」

そういって、すずかちゃんは私に一礼し、迎えのリムジンに乗り込んで、帰って行きました……それを見送った私は

「……」

はやてちゃんの病室の方を向き、悲しみの視線を向けた

この世界は、どこかおかしい。なにか、原作通りに動いていない気がする……私達が介入したから、というのが原因ではない……

それが、私の不安をより大きくさせている。もしかしたら……

「……闇の書の暴走は止められず、この街が無くなる、とか……？」

そうとも、考えられる。それは、原作以上の悲劇が起きる事に……

……

「（！！！？　ダメよダメ！！　そんな事は、絶対にさせない！！！　なんの為の原作介入よ。悲劇を起こさないようにしているんだから、それ以上の悲劇なんて起こすわけにはいかないわ！！！　そう。はやてちゃんを助けて、リインフォースも助けて、そして、ハッピーエンドを迎えるんだから！！！！）」

妹は、最愛なる少女の為に、決意を新たにするのであった……

□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■

□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■

……そして、有る場所……

「ほ、ほんとうにいいの？」

「うん……これくらいしなきゃ、多分私は……」

二つの影のひとつ……右腕が無い人型の影は、無くなった腕を押さえながら

「だから、お願い……私は、お父様のやる事を、邪魔したくない……」

それは、悲痛に満ちた声だった……だが、その中には強い意志が宿っていた

「……分かったわ……全てが終わったら、必ず元に戻してあげるから……暫くの間、お休み……」

もう片方の影は、先端が棺のような杖を構えて、その名を唱える

「“デュランダル”……お願い」

『“エターナル・コフィン”』

……世界の修正力は、確実に動き出していた……

#２０　物語りは、終盤へ……って、はやてちゃんが入院しちゃったよ！！？

ヤ「さてさて、読者の皆様方。いかがでしたでしょうか？　こんな駄文を見て」

神「いきなり棘々しいねぇｗ」

メ「というより、結構飛ばしたわね」

神「仕方ないだろう。フェイト嬢蒐集イベが無いんだし、それに色々と飛ばしてるし」

ヤ「こんなの見る人間はみんな原作知識をある程度持ってる人間でしょ？　なら問題ないんじゃありませんの？」

神「いや、そこは決めつけてはダメだ、ヤーヤ。いいか、こういうのは原作知識無しのただ二次創作好きな奴も見ているかもしれないんだ。だから、何事も決めつけるのは良くないぞ」

ヤ「は、はい！！　お兄様！！」

メ「珍しくまともな事言うわね」

神「おい……それと、今回は前話に出た妹のデバイス……“ベアトリーチェ”について説明しよう！！！」

“ベアトリーチェ”

彼女の持つインテリジェントデバイス。彼女の能力、“神魔招来（アバター）”とリンクしており、それのブースト、補助を行う。最初はモード０１の“ベルレフォーン”だけだが、後でビビ自身が色々手を加えていく。それにより、今後進化していく……待機形態は、白色で、ひし形の宝石に似たモノ

１）“ベルレフォーン”

黄金の鞭と手綱の形状をしている。ソレを召喚した生物に取り付け操り、操った対象の全能力をワンランク上昇させる、攻守ともに破格の宝具……を、組み込み、形態のひとつとして確立させたモノ。神聖さのないデバイスに、本来の宝具並みの威力を秘めさせたシロモノで、彼女の神魔招来（アバター）との相性は抜群に良い

ヤ「チートね」

メ「そうね」

神「アイツもすごいの作るねぇ。まぁ、進言したのは俺だけどなｗ」

ヤ「そうなのですか！！！？」

神「あぁ、妹の能力の底上げ効果があるモノで良いんじゃないっていったら、まさにその通りの作ったし……」

ヤ「すごいですわ！！　お兄様！！！」

メ「（本当は、タマモなんだけどね……）」

神「とりあえず、今日のところはここまでだ。読者の皆様方へ、今回は読んでくれてありがとな！！　次回を楽しみにしてくれ！！んじゃ！」

神・ヤ・メ「ばいば～い♪」

作「……マジで乗っ取られた（泣）」

＃２１　闇は完成し、暗躍せし者達は動き出し、嘆きの意思は蘇る（前書き）

今回もなんとか更新できました
ですが、次回が無理かもしれません……

十六夜様、緋水様、ＪＡＭ様。ご感想、ありがとうございました！
！

#２１　闇は完成し、暗躍せし者達は動き出し、嘆きの意思は蘇る

――――――そして、とある兄妹（しまい）は、最後の戦いに身構える……
……――――――

はやてちゃんが入院してから、数日が経って……１２月２４日……そう、“クリスマス・イヴ”を迎えました……そして、はやてが入院している海鳴総合病院の病室では……

「「「「「……」」」」」

部屋の中は、異様な空気に包まれていた……そう、言葉に例えるなら、一触即発が似合うだろう……そう、彼女達……なのはちゃんとフェイトちゃんと、ヴォルケンズが鉢合わせしたのだ、原作同様に……

や、やっちまったＺＥ……なんて後悔しているわけ無い。そう、これは作戦！　作戦なんだから！！　そう、作戦、なんだから……ふふっ（－ω－）　まずは、落ち着いて挨拶だ！！

っていうか、アリサちゃんかわえぇ（＊＾―＾＊）……っと、脱線しないの

「はじめまして、すずかちゃんのお友達さん達」
「え、あ、はい。はじめまして」
「こ、こちらこそ、はじめまして」

「はじめまして。えっと……？」
「私？　私は、はやてちゃんの介護ヘルパーをしているビビ・スティンよ、これでも１１才なんだから、年取ってるなんて言わないでよ？」

ちょっと空気を軽くするために、こう言ってみたが……うう、シグナムぅ～、その殺気やめてぇ～。あの二人がメッチャ警戒してるんだけどぉ～（Ｔ＿Ｔ）

《シグナム。お願いだから殺気を飛ばすのを止めて。この子たちはただお見舞いにきてるだけだから》
《ビビ……しかし、こいつらは管理局の》
《こっちが攻撃さえしない限り、あっちも攻撃してこないはずだから……だから、今は穏便に。それに、さっきからはやてちゃんが気にしてるし》

そう言って、はやてちゃんの方を見る……

《……はい、分かりました》

分かってもらえたのか、さっきまでシグナムが放っていた殺気は霧散していった……
そしてビビは、シグナム達になのは達を任せ、自分ははやての傍に残った……何か、嫌な予感がしたからだった……
そう、愛する人がいなくなる。そんな、錯覚に……

□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■

海鳴市、市街地にあるビルの屋上……そこの上で、五人の女性達が重苦しい空気で話していた……この場の原作との異点は、ヴィータがいる事……これは、ビビからの指示だが……

「はやてちゃんが、本物の、闇の書の主……？」

内容は、本当の事……主はビビではなくはやて。そして、蒐集していた理由が、はやてを治す為に、と……

「悲願までは、まだ先が長いが……」

「邪魔をするなら、例えはやてちゃんのお友達でも……！」

「容赦はしねぇからな！！！」

そして身構える守護騎士達。そこへ、栗色の髪の少女が声を荒げて叫んだ

「ま、待ってください！！　ちょっと話を聞いてください！！！」

その直後、上空から声がした

「何をしているのかしら？」

「「！！！？」」

二人の少女は、その声のする方を向き……そこには空中に足を組

んで“座り”、まるで女王のようにそこにいるモノ……

「姉上殿？」
「グレイさん？」

グレイ・スティンが、そこにいた……

「まったく、今日はいつになっても来ないから、わざわざ出向いてみたんだけど……」

そうして、空から二人の少女を見下し、そこから飛び降りるかのように身をはね

［スタッ］

両者の間に立った……

「……さて、貴女の言い分は分かるけど、私達にはコレを行う必要があるの。だから、邪魔をしないで頂戴」

そう言われた少女達は、その声で、いきなり現れた女性が何者なのかが分かった……そう、クロノを蒐集したあの人だと……

「「……」」

この人が、クロノをあのような状態にしたのかと、怒りがこみ上げてくるのかと思いきや、それ以前に二人の少女は、身動きが取れなくていた。そう、彼女から出る雰囲気にのまれているのだ……
なんて暗くて……深く、底が見えない闇を連想する存在感を放つ人なんだろう、と……

「姉上殿、こいつ等は」
「分かってるわ……」
そう言って、彼女（かれ）は、守護騎士の方に向いた……
「さて……そういえば、残りあと何頁だっけ？」
「えっと……あと、１００頁です」
少し沈んだ口調で、シャマルが答え
「そう……なら、“充分かしらね”」
と、意味深そうな言葉を言って、腕を守護騎士達の方に向けた
「闇の書よ、お前を満たしてやる。だから、私の元に来なさい」
命じるような口調で言葉を放った後
［シュッ！！］
「「「！！！！？？」」」
闇の書が独りでに動き、シャマルの元を離れ、グレイの元に来た……
……
「姉上殿！！！　一体何をするおつもりですか！！！？」
「……」
シグナムが叫んだが、グレイは聞く耳持たずといった感じで、手元に来た闇の書の空白の頁を開いた。そして

「……闇の書よ……“我が血肉を喰らい、その身を満たすが良い”」
「「「「「え……？」」」」」
そこにいる全員が呆けた……今の言葉、小難しそうに言っていたが、直訳するとこうなる
――――――私を、完成するまで、蒐集しなさい――――――
［キィィィィンッ……］
すると、それに応じるかのように、リンカーコアがグレイの胸から出てきた
「グッ……闇の書よ、蒐集を」
『蒐集』
そして、自分で自分を、蒐集させた
「グ！！！！？？　グアアア

守護騎士たちは、困惑した表情に浸っていた。まさか、己自身を蒐集させるなど、彼女達が今まで会ってきたどんな魔導師でもやっていなかった事である。それが、今ここに現れた

「え、えと……えぇ！！？」

「こ、これは、どうしたら……？」

無論、二人の少女も突然の奇行に驚き、戸惑っていた。自分達は、どうしたらいいのかと……

そして、誰の邪魔も無く、自己犠牲の蒐集が終えた

「ハァ、ハァ、ハァ……」

『全頁の蒐集、完了しました』

闇の書が蒐集の完了を告げ……闇は、ここに完成した

「ふぅ……さてと、はい」

「え……？」

グレイは、シャマルに完成した闇の書を渡し

「まずは、管理人格を呼び起こさないと……今すぐ八神の所に行きなさい。そして、ちゃんと説明して、それから私達のマンションに一緒に来なさい。話は、そこで」

淡々と、さっきまでと何も変わらずに話し続けるグレイ……彼女（かれ）

らが持つチート能力、“膨大なエネルギー”は、闇の書の頁、１００頁分の蒐集に耐え抜いき、なお且つ充分な余力を残してみせた

「あ……ありがとう、ございます……」
「別に良いわよ。じゃぁ、また後で」
「はい……では、失礼します」
「あ、ありがとよ……」

そう言って、守護騎士たちはそのまま空に跳ぼうとした

……だが、その時

「バシィィィィッ！！！」
「ぐぅ！！？」
「姉上殿！！？」
「グレイさん！！？」

突如、グレイにバインドが襲いかかり、彼女（かれ）は為す術なくその捕縛の輪にかかった……その、魔力光の色は……

「……バカな、アイツらは」

それと同時に

「「「「「バシィィィィッ！！！」」」」」
「「「「「ッ！！！！？？」」」」」

その場にいた全員に、バインドが掛けられ、グレイは掛けた相手が

いる方を睨んだ……

「……相方はどうしたのかしら？　“リーゼアリア”」

「「「「？」」」」

全員がグレイの言葉に耳を傾け

「……」

名を呼ばれた猫の使い魔……リーゼアリアは、空中からグレイを睨みつけていた……

自分の片割れを、あんな姿にさせた奴が目の前にいれば、平常な姿を保っていられるわけがなく……全身から、怨念と憎悪が放たれ、全てがグレイに集中していた

「……闇の書を、渡してもらおうか……」

「「「「！！！？」」」」

アリアは、それでも今は父の想いを為すために、守護騎士達の方へと向かい

［スッ］

いとも簡単に、闇の書を奪った……

「……貴女、自分の片割れはどうしたのかしら？　確か、邪魔するように命じたはずだけど？」

「ッ！！！！」

アリアの表情が、これでもかと言うほど怒りに染まり

［ゲシィッ！！！！］
「グフッ！！！？」
「姉上殿！！！」

バインドで縛られたままのグレイの腹に、蹴り喰らわした

「……キサマの所為で……キサマの所為で！！！　ロッテは、ロッテは！！！！」
「……？」
「自ら、“凍結して”って！！！！」

自分が動く事が出来れば、必ず自分は父と片割れの活動の邪魔になる。ならば、自分の身動きを完全に封じればいい。だから、凍結を頼んだのだと……

「……なるほど、コレはしくじったわ。身動きを取れなくさせられても爆発するようにでもしておくべきだったわね」
「！！！！！！！！」
［ゲシィッ！！！！！！］
「ゴフッ！！！？」

アリアは、グレイの無機質な返答に怒りを更に高め、もう一度グレイの腹を蹴り

「お前さえ……“お前さえいなければ”！！！！」
「……」

グレイは、その言葉で黙り込んだ……そう、自分達は元々この世界には存在しない者……確かに、いなければこいつ等の計画に支

障をきたさずに事が全て終わっていたはずであろう……だが、この物語では違う。ここには、自分とあの妹という毒がある……

……それにより、物語は一気に違うモノへと展開していった……

……

「……まぁいいわ……今は闇の書の主に目覚めてもらう方が……」

そう言って、アリアはそこにいるモノ全員に何重にもバインドを掛け、ケージ系の魔法を掛け、身動きを取れなくした……それらを空中に浮かびあがらせ、ビルの屋上には、アリア以外誰もいなくなった……

「お父様と、ロッテの願いを……必ず！！」

そう言って、アリアは原作同様、仮面の男に……否、“ビビ”の姿に変身し、ある魔法陣を展開した……そう、“転送の魔法陣”を

□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■

「もう、どないしたん？　ビビちゃん」

「う、ううん……ただ、なんかこうしていたいだけ……」

ビビは、はやてを抱きしめていた……そして、わずかにだが震えていた……嫌な予感がする。もし、自分がこの手を愛する人から離したら、直ぐにでもいなくなってしまう。そんな、予感に……

……

だが、嫌な予感と言うのは、どのような予言よりも、必ず当たると言うモノ……

［ドクンッ！！！！］「グゥッ！！！！？」

「！！！？　はやてちゃん！！！！？」

急に、胸を押さえて苦しみ出すはやて。そう、闇の書が完成し、その影響が、主に襲いかかったのだ

「ぐ、クゥゥゥッ……！！！！」

「はやてちゃん！！！！　はやてちゃん！！！！」

苦しみ出したはやての名前を必死に呼ぶビビ。だが、そこに

［キィィィィンッ……！！！！］

「え？」

突如、青色のミッド式魔法陣が、はやての下に展開された。術式が転送だと瞬時に見抜けていれば……彼女は、転送されずにすんでいたかも知れない。が

［バシュンッ！！！！］

「はやてちゃん！！！！！！？？」

そして、はやては転送され、困惑した。だが、すぐにビビは思考を回転させ、あの魔力光から、誰が犯人なのかを当てた……

「あんのぉ……クソ猫がァァァァァァァァァァァァァァァァッッッ！！！！！！！！！！！！！！」

病院である事を忘れて叫び、ビビは窓ガラスをぶち破って外に飛び出した。そして、あのクソ猫の気配を探し

「……どこだ、クソ猫……ッ！！！！！」

これでもかと言うほどの怒気を含めた声を吐き散らし、彼女は空へと飛び立った

あのクソ猫を処刑したい……否、殺してやりたい怒りが、今の彼女を支配している

□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■

とあるビルの屋上……ここに今、

［キィィィィンッ……］

「ッ……あれ？　ここは……って、ビビちゃん？」

転送されてきたのは、確か、一緒に病室の方にいたのに……それが今は、なんでこんなビルの屋上に？……といった表情を浮かべ、ビビ（？）の方を見た

「！！！？？」

だが、その次の瞬間に、彼女の表情は凍りついた

ビビ（？）の後ろに、磔にされたシグナム、ヴィータ、シャマル、ザフィーラの姿があった……

「シグナム、ヴィータ、シャマル、ザフィーラ……？　ビビちゃん、これは、いったい……？」

はやては震えながら声を紡ぎ、最悪の予想をした……最愛の人が、最愛の家族を……？

「はやてちゃんはね、病気なんだよ……闇の書の呪いって病気に……もう、治らないんだよ」

「え……？」

「この子たちもね、壊れちゃってるの。闇の書という、闇によってね」

そういって、ビビ（？）はシグナムの方に手を向け

［パリンッ！！！］

「！！！？？　シグナムゥゥゥゥゥゥゥッ！！！！！！」

まるで、ガラスのように砕け散った……

「だから、捨てなきゃ……壊れてるのなら、廃棄しないと」
［パリンッ！！！　パリンッ！！！］
「シャマルッッ！！！！！！　ザフィーラッッ！！！！！！！」

シグナムと同じように、二人も消えていった

「なんで……なんで、こんな……！！！！！！」

あまりの事に訳が分からず、泣き叫ぶはやて。だが、その摩手は、ゆっくりと最後の廃棄物……ヴィータに向けられ

「ねぇ、はやてちゃん。運命って、残酷なんだよ……」
「止めて！！！！　止めてエエエエエエエエエッッ！！！！！！！！！」

そして

［パリンッ！！！］

壊れた……

「あ……あぐゥ……！！？」

あまりの事態に思考が付いていかず、困惑しているはやて……そしてその時、ある一つの想いが生まれた……

“こんなん、夢や……悪い、夢や……”

そう想った時、突如自分のいる場所を中心に白く光る魔法陣が出現

した。そして、目の前には、あの本……闇の書が現れた

『おはようございます、我が主』

途端、白く輝く魔法陣は黒紫に濁り、少女の瞳は、紅く染まった

［バキィィィィィィィィンッ！！！！！］

「主！！！」

「「はやてちゃん！！！」」

「「はやて！！！」」

「チッ、やってしまったか……」

突如、空から声が聞こえた。そう、捕まっていた守護騎士達と二人の魔導師、そして転生者の姉（あに）が解放されたのだ。だが、時すでに遅し

「ウワアアア

［フッ］
「封印、解放」
『解放』
［カッ！！！！］

そして、ソレは目覚めた……

「「「「「……」」」」」
「また、全てが終わってしまった……いったい幾度、こんな悲しみを繰り返すのか……」
「はやてちゃん！！！」
「はやて……」
「あれは……」
「闇の書の、管制人格……」
「……」

各々が、突如変貌した少女を見て、

「へぇ、アレが、か……」

唯一、彼女（かれ）だけは、感嘆の息をこぼしていた

「我は闇の書。我が力の全ては……」
『“デアボリック・エミッション”』
［バチバチバチバチッッ！！！！！！！！！！！！！！］
「「「「「！！！？」」」」」

腕を天に振り上げた後、ソレは……“闇の書”の意思は、莫大な魔力を行使し、少女達は愚か、守護騎士にまで、牙をむけた。そんな中

「……不味いわね、これ」

ただ一人、冷静でいた……

#２１　闇は完成し、暗躍せし者達は動き出し、嘆きの意思は蘇る（後書き）

神「さて、前々回にやったあの貸出、さまざまなかたがたから指摘されておりますが……」

ヤ「全部、強すぎるから無理ってあるわね」

メ「それはそうよ。だって、どう考えてもあの二人の能力はおかしいほど高いし」

神「俺様が上げた能力だしな、強すぎて当然さｗ」

メ「はぁ……まぁ、そういうことにしてあげるわ」

ヤ「転生者モノを書いている方々なら、扱えるのではなくて？」

メ「そうかもしれないわね」

神「まぁ、まだ公表されていないチート能力もあるしよ、それが表に出れば増えるというものよ」

メ「アレね……いつ出すの？」

神「みんなでフルボッコの時に出すってさ」

ヤ「お、お兄様。それ、ネタばれですわよ……」

神「いいじゃん、公表しないだけまだましさ」

メ「まぁ、それで読者の楽しみ増やそうってわけね」

神「さすがメイリン。だてに軍師やってないな」

メ「これぐらい、誰でも気づくわよ……」

ヤ「とりあえず、読者の皆様方は、いったいどんな能力なのか気になって夜も眠れないようになっていただければ幸いですわ」

神「何気にひどい言い回しだなw」

メ「ヒントは“女性限定の能力”よ。それじゃ、また次回に」

神「し～ゆ～！！」

作「もう、滅茶苦茶だぁ……（泣）」

#２２　クソ猫フルボッコ！！！　私の一番好きな人を傷つけたバツを受けろ

昨日は更新出来ずに、すみませんでした

理由は、ネタが思い浮かばなかったからです、ごめんなさいｍ（＿）ｍ

未土井無視様、緋水様、十六夜様、琥様。ご感想、ありがとうございました！！！

#22　クソ猫フルボッコ!!!　私の一番好きな人を傷つけたバツを受けろ

――――――そして、とある兄妹（しまい）の妹は、怒りに震える……――――――

海鳴市、上空……

［ダシュンッ!!!!］

「どこだクソ猫ォォォォォォォォォォォォォォォォォォッッ!!!!!!!!!!　出てきやがれェェェェェェェェェェェェェェェェェェェッッ!!!!!!!!!」

とんでもない爆音で叫びながら空を飛翔する者がいた……転生者兄妹（しまい）の妹、ビビであった。今、彼女の頭の中はドラ猫姉妹……リーゼ姉妹の抹殺で頭がいっぱいになっていた

「殺すゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥッッ!!!!!!!!!　ブッチKILLゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥッッ!!!!!!!!!!」

暴言を吐き散らし、怒りの矛先を探していた……そこへ

［ズガガガガガガガガァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァッッ!!!!!!!!!!」

「!!!!!!!??」

突如、遠くのビルの屋上から轟雷に似た音が聞こえ、その方角を向

いた

「まさか、闇の書が……？」

完成したのか？　しかし、記憶が正しければ、あと１００頁は残っているはず。なのに、それが一日にして埋まったのか？　あり得ない。神獣や聖獣クラスのモンスターを蒐集すればそれくらい簡単に埋まるが、そんなことは無いはずだ。それに、原作通りに事が運んでいたとしても、シグナムやシャマル、ヴィータにザフィーラの分で１００頁埋まるわけがない。だが、そこへなのはちゃんやフェイトちゃんも蒐集していれば、わずかにだが埋まる可能性が出てくる。でも、いくら不意打ちでもあの猫姉妹がそううまく出来るわけがない……じゃぁ、いったい誰が？

「……まさか、お兄ちゃんが自分で自分を蒐集した、とか？」

一番考えられる。あの原作知らずの転生者のローカルルールすら知らぬ兄の事だ。きっとあのチート能力“膨大なエネルギー”を使えば早く終わるんじゃね？　とか思ってやるに決まっている。意外とあの兄はめんどくさがりな為、手元にある物全部を使って為す事為そうとするからだ……もしそうだとしたら、合点がいく

つまり、こういう事だ……なのフェイとヴォルケンズが話し合う。途中で兄が乱入。闇の書借りる。自分で自分を蒐集。皆ビックリして動かない。蒐集完了、兄動けない。猫乱入、全員を拘束する、兄は力がうまく出せないからあっさり捕まる。全員を別の場所にやって、ヴォルケンズの偽物作ってはやてちゃんを脅す。闇の書覚醒……という流れだろう、うん

「さすがお姉様。誰も考えられない事を平然とやってのける。そこ

に痺れる憧れ［スタッ］……あ」

ふと、視線の先（と言っても、数キロ近くはある）のビルの屋上に、誰かが降り立った。それは、どこかで見た事あるシルエット……

そう、あの……

「見～付～け～た～わ～？　子猫ちゃ～ん……（黒笑）」

そう、標的であるあのクソ猫姉妹の一人……“リーゼアリア”だった……

□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■

一方、転生者の兄（あね）は……

「アンタ達、暫くアレを何とかしなさい。私は、あの子を呼んでくるわ」

そういって彼女（かれ）は踵を返し、先ほどどこかへ飛んで行ったであろうあの猫の使い魔の気配を探しだした

「「あの子？」」

「ビビ、ですか？」
「えぇ、そうよ。多分、八神は取り込まれただけよ。だったら、アイツと、貴方達家族が助けるのが道理でしょ」
「し、しかし……貴方も助力してくだされば」
「そうですよ、皆で助ければ」
「私はあまり関係のない人間だから、八神と、ね。それに、あの猫に一言言いたくてね……」

そう言った直後、底知れぬ静かな怒りのオーラが湧きだしたのを、守護騎士達は感じた。そして、何も言わぬまま、彼女（かれ）は、飛び去った……

□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■

闇の書の意思が目覚めたビルより遠い場所にあるビルの屋上

「さて、あとは強層結界の展開と維持。そして、暴走臨界点付近での“デュランダル”の使用とその準備ね」

そう言って、黙々と作業を続けるアリア……元々は、ロッテと一緒にやる仕事だったが、今は独り……

「これ以上、お父様に力を借りる訳にはいかないわ……」

ロッテを凍結封印したことにより、グレアムからの魔力供給が今はアリアのみになっている。それにより、ロッテの分の魔力も含まれ、今のアリアの能力は飛躍的に高まっているのだ。それと同時に、いつもよりも魔力の供給量を増やし、アリア単騎でオーバーSランク近い力を有するほどになった。だが、それはグレアムにとってしてみればかなりの負担になっている為、急いで事を為さなければならないのであった……

「お父様の意思と、ロッテの想い……無駄にしないためにも、必ず闇の書を！！！」

だが、その想いは、儚く散る事になる

［ズンッ！！！！］

「！！！？　誰だ！！！！」

突如、背後に誰かが降りてきたのを感じた。その方を見ると

「ハ～ロ～、ＫＵ・ＳＯ・ＮＥ・ＫＯちゃん……？」

そこには、自分達の計画を潰してくれた最初の人物……転生者兄妹（しまい）の妹、ビビがいた……

「キサマ……！！」

「クッフッフッフッ……よくもまぁ。私の愛しのはやてちゃんに酷い事してくれたわねぇ……あまつさえ、見ては無いけど、なのはちゃんやフェイトちゃん、それにシグナムやヴィータやシャマルにもしたんじゃないのかなぁ？（黒笑）」

ビビの言葉には、今までの彼女とは思えぬ怒気が含まれていた……
…それはおそらく、あの兄（あね）に勝る程の恐怖を抱かせる程だった……
……
だが、アリアはそれにのまれず、臨戦体制を取った。が、それは火に油

「……私の邪魔をするつもりなら、容赦はしないわよ」

あ〝ぁ〟？　容赦しないですって？　グッフッフッフッフッ……
……

「容赦しねぇのは私の方よ？　テメェには、地獄を見せてやる……
…！！！！！」

するとビビは、両手を広げ、何かを呼び出す仕草をしだした

「さぁさぁおいでなさい、“煉獄の七姉妹”よ」
「［［［［［［ウォンッ］］］］］］」
「「「「「「煉獄の七姉妹、ここに」」」」」」
「な、なんだ！！？」

呼び出したのは、七つの大罪に該当する悪魔の名前を持つ少女達。
ある物語の魔女の上級家具であり、強大な力を持ち、自らの意思でも動く事が出来るが、術者の命令を絶対とする……妹が最近使いだし、人型の中では最強の部類に入る召喚獣である……
ちなみに、妹に喚起された彼女達は、姉妹仲は良く可愛いモノ好きでちょっぴり変態という要素が含んでいるのだが、今は関係ない事だ
その時のアリアは、相手が召喚してきた使い魔（？）らしき存在に驚愕した。一人から感じられる魔力量が、自分達なんかより軽く上

回っているのだ。それを、七人も召喚したという……

「お願い、皆……そこにいる、私の愛するはやてちゃんとヴォルケンズ、そしてなのはちゃんとフェイトちゃんを傷付けたという大罪を犯したクソメス猫を……」

そうやって一呼吸置き

「ボッコボコにしておやりなさい！！！！！！」

「「「「「「「「はい！！　お嬢様！！！」」」」」」」」

「「「「「「「「フォンッ」」」」」」」」

そう言った途端、七人の少女達は杭のようなモノに変身し、アリアに突撃していった

「カンカラカンカラカンカラカンカラカンカラッッ！！！！！！！！」

「ぐ、グゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥッ！！！！！？？」

乾いた何かのような奇妙な音を鳴らしながら、宙に浮かぶ杭となった姉妹たちは、アリアを襲った

「「「「「「「「アッハッハッハッハッハッハッハッハッハッ！！！！」」」」」」」」

七姉妹達は陽気な笑い声を上げながら、アリアの体を切り裂き、肌を抉り、その身をズタボロにしていった

「クッフッフッフッフッフッフ……良い気味ねぇ、リーゼアリアちゃんw」

これでもかと言う程のあざけりと嘲笑を含んだ声で罵倒する妹。今、彼女の背中と尻には悪魔の羽と尻尾が付いているだろう……

「クッ……キサマぁッ！！！！」

「悔しい？　悔しいでしょう？　何もできずに一方的に痛めつけられるのはねぇ！！！！！」

「カンカラカンカラカンカラカ

［ズシュンッ！！！！］
「グぁッ！！！！！！！？？」

姉妹の一人……“傲慢のルシファー”が、アリアの左足を貫き、アリアは片膝をついてその場に沈んだ

「グ……くっそうぅ……！！！！」
「ウッフッフッフッフ……良いざまねぇ、リーゼアリアぁ？」

妹はいつの間にか空に浮かび、空中で足を組んで“座り”、兄同様、女王のような空気を醸し出して、アリアを見下した。これでもかと言うほど

「クッフッフッフッフ……まぁ、私にひざまづき、つま先にキスをして、足の裏を舐めて服従を誓うんなら……止めてもいいわよぉ？」

まぁ、それでも許すつもり無いけどねｗｗｗ

「だ、誰が！！！！」

ウザ……これだけやられてまだ言うか……

「いいわよもう……アンタなんか、もう死ね！！！！“ルシファー”！！！」
「かしこまりました、お嬢様」

抹殺命令を受け、心臓のある場所に一刺しようと浮かび上がり

「はやてちゃんを苦しめたバツ、死を持って償え！！！！！」

［ヒュンッ！！！！］

アリアに向かって、突貫した……

だが

［ガキンッ！！！！］

「ふえ！！！！！！！！？？？」

「ッ……何……？」

「……やり過ぎよ、バカ妹」

己の兄、グレイ・スティンが、ビビとアリアの間に割って入った…

……その手には、大型の大剣が握られており、今は盾のように使用していた

「ちょっと、邪魔しないでよ！！！　そいつは、私のはやてちゃんにあんな酷い事さらしてくれたのよ！！！　万死に値する！！！　処刑よ処刑！！！！　もっと痛めつけなきゃ気が済まないわ！！！！　キリングしなきゃ！！！！　こんな奴、生きてるだけでも害にしかならないわ！！！！！」

「ッ～～～……やかましいわ！！！」

［ゴチンッ！！］

「イッターーーーーーーイ！！！！？（＜＿＞）」

いつものように拳骨制裁。普段の兄妹の空気がやってきた……

「な、何故……？」

そんな時、アリアがグレイに向けて言葉を放った。なぜ、自分を助けたのかと？　だが、そんな彼女をみて、グレイがとった行動は

「まったく……しょうがない」
［チャキッ］
「え……？」

取り出したのは、自分の片割れの右腕を吹き飛ばしたと思われる刀……龍殺しの刀を改造した刀剣

「“龍刀【斬鬼（ザンキ）】”、敵の足を切り裂け」
［ザンッ！！！］
「ッッッ！！！！！！！！！？？？？？？　ウワアアア

「ふえ？　（？@＿@？）」

兄はそう言いながら、ある方角を向いた。そこには、闇の書の意思と化したはやてと、三人の魔導師と使い魔、そして守護騎士達が戦っていた。その様子を見たビビは

「……うん、分かった！！！」

［ダンッ！！！！］

言うや否や、空に飛び出して行った。それを見送りながら、グレイは反対側を向き

「出てきたら？　執務官さん」

「……」

誰かに、声を掛けた。そして、屋上の給水塔の裏側から呼ばれて出てきたのは……黒きバリアジャケットを纏った魔導師、“クロノ・ハラオウン”だった

「さすがですね、やはりバレていたのか」

「当然よ、妙な気配を感じたからね」

皮肉げに言葉を紡いだグレイ。だがその言葉に、クロノは何の反応もしなかった。ただ……

「……すまないが、君が倒したその使い魔……アリアの身柄は、こちらが確保しても良いだろうか？」

ただ、己の責務を全うする、その年齢にふさわしくない言動をした

「……いいわよ。ただし、条件があるわ」
「出来る範囲内なら、約束しよう」
そう言って、グレイはクロノに言葉を投げた
「私を、“ギル・グレアム”の所に連れて行って」

#22　クソ猫フルボッコ！！！　私の一番好きな人を傷つけたバツを受けろ

神「さてさて、そろそろこの後書きに名前をつけようか？」

メ「いるの？　名前」

神「いるさ。なにせ、ほかの作者様のを見てみると、最後の方にいつもコーナー的なものがあるじゃん」

ヤ「そうね……ならば、うちも其れをやろうというわけですわね！！」

神「ザッツライト！！！」

メ「普通に後書きコーナーで良いんじゃない？」

神「いやいや、それではつまらない……そこで、今回はこんな事をしちゃおう！！！」

――――――この後書き欄のコーナー名の募集――――――

神「たくさんの応募、待ってるぜ！！！」

メ「自分で考えなさいという感想がきそうね」

神「きてもショック受けるのは作者だけだ。それに、これこそがこのサイトの魅力的なところだと思うぞ」

ヤ・メ「？」

神「個人でページ作って小説掲載するのとは違い、ここだと感想という手段で読者とのコミュニケーションができる。まぁ、やろうと思えば前者でも出来るのかも知れんが、ここなら簡単だ」

ヤ「確かに、そうですわね」

メ「登録さえしてしまえば、どんな作品にでも感想を書けるわよね」

神「作者なんか無制限に感想を受け付けるようにしてるしな。これは、色んな人の意見が見たいからやってるんだと。つっても、本音はたくさん感想が欲しいからだけどな……おっと、脱線脱線。つまりはだ、読者が参加出来るようなシステムになってるって言いてぇんだ。このサイトは。現に、いろんな作品の中に、読者が考案したキャラってのがいるしね。それを見た読者は、自分が考えたキャラが描かれた事に喜ぶだろう……いいサイトだぜ、ここは」

メ「なるほど、ね」

ヤ「お、お兄様。カッコイイですわ！！！」

神「当然さ、神様やってんだからなw」

メ「（これが無かったら、ましな神になってたでしょうに……）」

神「ちなみに！！　募集期間は明日の夕方までだ。もう一度言うが、たくさんの応募、待ってるぜ！！！」

ヤ「ちなみに、タイトル次第では、今作のあの二人のキャラも登場させるから、良い名前を待っておりますわ」

メ「メインは、あの神様だから、なんとなく合った名前を期待しているわ」

神「それでは!!　また次回に!!!」

神・ヤ・メ「さよなら~!!」

作「私の復活は「無いぜw」……グスン（;;＿;;）」

#２３　親なら娘がいくら願っても、傷つけることはさせるな（前書き）

またも更新が遅れて申し訳ありません

最近忙しいですし、邪魔をする方が近くにいるため、なかなか筆が進まないです……

楽しみにしている方々には、本当に申し訳ありません。心から謝罪します

ｍ（＿＿）ｍ

十六夜様、緋水様、未土井無視様、琥様。いつもご感想、ありがとうございます！！！

#２３　親なら娘がいくら願っても、傷つけることはさせるな

――――――そして、とある兄妹（しまい）は、互いの相手を見据える……
……――――――

海鳴市、上空……

［バチバチバチバチバチバチッ……！！！！］
「「「「「……」」」」」

その場にいる者は全員、目の前で起きた事に困惑しきっている……
……
いったい、どうすればいいのか？
二人の少女は愚か、守護騎士達ですら困惑している
そう、彼女達はこのような場にいる事が今まで無かったのだ。いつもならば、最後の頁は己達のリンカーコアを差し出していた（それについては、今思い出したのだった）。だから、今回初めて、主の覚醒の場に立ち会ったのだ……
だが、その困惑している彼女達の目を覚まさせるかのように、闇の書の意思は、牙をむけ

「“デアボリック・エミッション”。闇に、染まれ」
［ゴアアア

広域空間攻撃が、放たれた

□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■

時空管理局本局、そこにあるグレアムの応接間

「リーゼ達の行動は、貴方の指示ですよね、グレアム提督」

そこで行われているのは、原作道理、クロノによる尋問であった。
ただ、違う点と言えば、この場にリーゼ姉妹がいない事。そして、
クロノ側に一人……

「……」

転生者兄妹（しまい）の兄（あね）、グレイ・スティンがいると言う事であった

「……あぁ、そうだ。クロノの、言うとおりだ」

自白したグレアム。そして、クロノは言葉を続けた

「１１年前の“闇の書事件”以降、提督は、独自に闇の書の転生先

を探していましたね？　そして、発見した。闇の書の転生先と、現在の主、八神はやてを……」

クロノは、淡々とグレアムが行った事を話し続けた。その姿は、執務官としての……その年齢に合わぬ空気を感じた

「（まだ１４のガキが、大人ぶりやがって……）」

グレイ本人は、クロノの事を関心したような、ただの見栄っ張りが、といった複雑な気持ちになっていた……その間にも、クロノによる尋問は続いていた。そして、グレアムは自身が行ってきた事を話しだし……

「……偽善だな」

グレアムがそう言うと、クロノは彼が建てたプランを言った

――――凍結による、闇の書を主ごと永久封印。そして、次元の狭間や凍結世界へ閉じ込める事……――――

それをきいた瞬間、グレイが口を開いた

「そして、その凍結魔法とやらを使って、アンタの娘を閉じ込めたと」

「？」

「……」

グレイの言葉に、クロノは疑問の表情を浮かべたが、グレアムは悲痛の表情を浮かべた

「誰がそんなこと考えたの？　アンタ？　それともあの姉妹のうちの一人？……どっちなの」

その声には、重苦しい怒気が含まれていた。そう、今彼女は怒っているのだ

「……あれは、ロッテが言い出した事だ。私は反対した。だが、ロッテの事を考えれば」

［プチッ］

何か、神経が切れたような音がきこえた

「あぁ？　アホじゃないの？　あの姉妹はあんたの娘でしょ？　なんで止めないの。そこは親としてどうなのよ……」

「親……？」

あからさまな怒気を含ませて、グレイは続けた。そう、彼女は気に食わなかったのだ。なぜ、身内同士であんな事が出来るのか……なぜ、自分の片割れを、凍結なんてさせれるのか……なぜ、娘が氷漬けにされるのを、黙って見ていられるのか、と……

「気に食わないのよ、アンタ……いいわ、はっきり言ってあげる。アンタは親失格よ、ギル・グレアム」

「！？」

そう言われた後、グレアムの顔が困惑の表情になった

「娘が自分を封印してなんて言ったら、親としてはそれを止めるべきよ。それを、アンタは娘が望むからやらせた？　クソ親父ね、血も涙も無いの？」

「「……」」

グレアムは黙っていた。彼女の言い分に、反論出来ないからだ。クロノは、ただ黙っていた。彼女の覇気にあてられ、言葉を紡ぐ事が出来ないのだ

「姉妹同士で傷付け合わさせるなんて、最低ね。私だったら、例え妹がそう願ってきたとしたら、ぶん殴ってでも……」

止めさせる、と……

「……」

グレアムは、黙った……親失格と呼ばれた事にも、娘同士に、酷い事をさせてしまった事にも……

「まぁ、事の発端作ったのは、私だけどね……」

先ほどまでとは違い、自虐的になって答えた……

「っと、ごめんなさいね。もう話を続けてもいいわ」

そうクロノに言うと、彼は

「いや、もう良い。話したい事は話した。それに、今は現場が気になるから、すぐに向かいたい」

「そう……私も行くわ。協力してあげる」

「感謝する」

そう言って、二人は失礼しますと言い、グレアムの部屋から出て行

こうとした。そこに

「クロノ」

「？」

「これを、持って行ってくれ」

そうして、渡されたのは、一枚のカード……否、デバイスだった

「もはや、私が持っていても不要なモノだ。だから、君にこれを託そう」

氷結の杖、“デュランダル”。クロノはそれを受け取り、部屋を後にした

「あぁ、そうだわ」

そいって、グレイはグレアムの方を向き

［トスッ］

「？」

机に、一本のクナイを刺した

「“癒刀（ゆとう）・？（いかし）”。ソレをあの二人に刺してあげなさい。そうすれば、斬れた箇所が再生するから……ごめんなさい、大切な娘を傷付けてしまって」

頭を深く下げ、謝罪の意を見せた兄（あね）。そう、グレイがグレアムの所に行きたかったのは、コレを渡すためだった。再生の刀、“癒刀（ゆとう）・？（いかし）”。いかなる傷も元通りに戻す、相手を殺す刃では無く、相手を

生かす刀……ソレを、グレアムに渡した

「いや、こちらこそすまなかった。君に言われて、ようやく、目が覚めた気がした……」

そして、グレアムは彼女（かれ）に背を向け

「家族、か……」

その言葉を聞いたグレイは、何も言わず、その部屋を出て行った……

□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■

第９７管理外世界、地球、海鳴市上空

そこでは、壮絶な戦いが繰り広げられていた

「バルディッシュ！！」

「レヴァンティン！！」

「アイゼン！！」

『ロードカートリッジ』
『『エクスプロジョン』』
［［［ガシャンッ！！！］］］

金色の閃光と、烈火の将、紅の鉄槌は、目標に向かって一閃を繰り出そうとしている……その、目標とは……

「……」

悲しみに沈み、全てが夢であってほしいと願ったはやての想いを、破壊という行動で実現させようとしている意思……闇の書の意思だった……

「ハアアアアアアアアアッ！！！！」
「“紫電、一閃”ッ！！！！」
「“ラケーテン・ハンマアアアアーー！”ッ！！！！」
［［［ブンッ！！！！］］］

三人の攻撃が来ると思いきや、闇の書の意思は

「カテゴリ、双剣。“封龍剣【超絶一門】”、“ラウンドシールド”」
［チャキキッ！！］
［ヴンッ！！！］

虚空から二つの双剣を取りだし、ソレで左右から来る二つの剣戟を。
背後に防御シールドを張り、後方から来る鉄槌を

［［［ガキィィィィィィィィィンッッ！！！！！］］］
「「ッ！！」」

「チッ！！」

あっさりと防いぎ、そのまま

「“スティンガーブレイド・エクスキューションシフト”」

［ヴヴヴ

［ウォンッ］
［ズガガガガガガガガガガガガガッッ！！！！！！！！！！！！！］
「！！？」

防御魔法であっさりと防がれ、更には

「“ラス・テル・マ・スキル・マギステル……契約（ト・シュンポライオン・ディアコ）に従い、我に従え（ネートー　モイ・バシレウ・ウーラニオーノーン）、高殿の王……」
［キィィィィィィンッ……！！！！！］

呪文詠唱を行い、魔法陣を展開。その規模で、どれほどの威力かを予想出来る

「まずい、防御を！！！」
「アルフ！！　お願い！！」
「はいよ！！！」
「ザフィーラもお願い！！！」
「応！！　ウオオオォォォォォォォォォォォォォォォォォッッ！！！！！！！！」
［［キィィィィィィィィィィィィィィィィィィィィィンッッ！！！！！！！！！］］

使い魔と守護獣は、全員を包み込む程の防御陣を展開し、来る攻撃に備えた

「―来たれ、巨神を滅ぼす燃え立つ雷霆《エピゲネテートー・アイタルース・ケラウネ・ホス・ティテーナス・フテイレイン》、―百重千重と重なりて、走れよ稲妻《ヘカトンタキス・カイ・キーリアキス・アストラプサトー》……」

だが、それも無意味なほど、その攻撃は、強力なモノだった

「千の雷（キーリプル・アストラペー）」

［ズガガガ

転生者兄妹（しまい）の妹、ビビ・スティンであった

「大丈夫皆!!　このビビが来たからには、もう平気よ!!!」（ニコッ）

「「「「「っ!!!?／／／／／」」」」」

そして忘れず発動する“魅了の笑み”。そう、実はコレ、重ね掛けすれば、さらにビビに魅力を感じるようになってしまうのだ。つまり、やればやるほどビビに惚れてしまうという……ちなみに、今回アルフには掛けていない。上手く位置を調節して、見させないようにしたのだ

「（アルフも好きだけど、出来たらアルフはザッフィーに上げたい。だって、凄く似合ってるもん、同じ狼同士）」

という考えであった……さすが変態、やる事が違う!!

「さってと!!　皆!!　力を合わせて、はやてちゃんを助けよう!!!!」

「「うん!!」」

「「はい!!」」

「「おう!!」」

そう言って、二人の魔導師、守護騎士達に指示を出した。ただ……

……

「な、なんなんだろう……？」

「さ、さぁ……？」

アルフとユーノ……二人の“使い魔”は、いきなり現れて、指示をし出した少女に、困惑しながらも、彼女に従うのであった……

……

□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■

本局、通路

［カツッ、カツッ、カツッ］

「にしても貴方、何も思わないの？」

「何がだ？」

今、その通路をグレイとクロノの二人が歩いている。だが、思い出して欲しい。彼（かのじょ）がクロノにした仕打ちを……

「あんなになるまで痛めつけられた相手の前で、挙句には自分を蔑集させた相手が近くにいるのに、よくそんな平然としていられるわね」

兄（あね）の意見は、尤もだった。そう、クロノにとってグレイは憎むべき相手。アリアをあんな風にし、おそらく、ロッテ（実は、彼女の右

腕切断の事は聞いており、その時は任務中に相手に斬られたと聞いていた）の事も、彼女（かれ）がやった事だと推測できる。自分と、自分の大切な師匠に酷い事をした人が隣にいれば、今すぐにでも攻撃するはず。だが、彼はそのようなそぶりはしてこない

「確かに、僕は君が憎い。でも、それは私情だ。そして、今は仕事の最中……私情で事件解決を遅らせるわけにはいかない」

「……」

随分と、“壊れている”奴だと思った。私情よりも、仕事を優先とする。なんと、歪んだ……

「狂ってるわね、人間として」

「そうかもしれないな。普通の人なら、あの時に前に出て、相手を殺すだろうね」

「そうね」

「アリアの事だって、君が武器を構えた時に止めようとしたさ。でも、彼女は罪を犯した。なら、それなりの罰がいるだろうと思って……なぜか私情よりも、その考えの方が正しく思えてしまい……」

止めなかった。と……

「完全にイカレてるわね、それ。今もそうなのかしら？」

「あぁ……それになぜか、ここ最近気持ちが随分と複雑なんだ。特に、蒐集されてからね」

「は？」

なんで？　Mにでも目覚めたのか？

「あまり良く分からないけどね……蒐集された後、暫く寝込んでいた時、ある夢を見たんだ」
「夢？　どんな」
「分からない、どんな内容だったか思い出せない。ただ……闇の書が、可哀想に思えてくるような気分にさせたのは、覚えている。それからだ、僕の気持ちが複雑になっているのは……」

だから、自分の気持ちが落ち着くまでは、私情は絶対に出さず、仕事のみに徹しようと、考えたのだと……

「……そう」

“闇の書が、可哀想に思えてくるような気分”。それは、自分も感じた。自分で自分を蒐集した時、なにか映像のようなモノが頭によぎったのを覚えている。それからだ、自分もその気持ちを抱いたのは……

――――闇の書の悲劇は、それ本体も、悲しんでいたのだと……いつになったら、この悲しみの輪廻が終わるのだろう、と……
……――――――

「……無駄話をしてしまったな、急ごう」
「そうね」

そして、闇の書に唯一蒐集された（全てグレイのせいであり、グレイに至っては自分でやった）二人は、現場へと急行した

そう、互いの為す事を、為すために……

#２３　親なら娘がいくら願っても、傷つけることはさせるな（後書き）

神「さて、色々あってあれだが……このコーナー名が決定したぜ！！」

ヤ「二通も来ていたのは、すごいですわね……」

メ「まぁ、来ただけでもすごいわ……」

神「では、この二つで、俺が一番気いったのは……これだ！！！」

――――十六夜様が考えて下さった、“神の舞台裏”に、決定しました！！！！――――

ヤ「おめでとうございます！！　十六夜様！！！」

メ「おめでとうございます」

神「考えて下さった十六夜様には、今作でグレイが作ったオリジナル武装、“龍刀【斬鬼】”と、今話で披露した“癒刀・？”をプレゼント！！！　そちらの小説のキャラに使わせて下さい」

ヤ「ロスト・ロギアとして発見し、それをそのまま使用しているといった設定で使っていただけ手もかまいませんし……好きにお使いになって下さい」

メ「ずいぶんと奮発したわね……」

神「だって、作者は基本オリジナル武器を作りまくるって言ってるし……いいじゃん」

ヤ「またネタばれを……」

神「どんな武器が出てくるか、楽しみにしていてくれ！！！　という事で」

メ「はいはい」

神「それと、今回あぶれてしまった緋水様。大変申し訳ありません。ですが、また同じような事をしますので、その時にもぜひご参加ください。」

ヤ「では、今夜はこの辺りで……」

神・ヤ・メ「さよなら～！！」

作「……結局、復活ならず……グスン」

#２４　ＶＳ闇の書の意思（其の一）。って、なにこのチートは！！　勝てる気がしない！！

またも更新が遅れてしまい、大変申し訳ありません

おそらく、本気で不定期更新になってしまうかもしれません

なるべく早く更新していくよう努力しますので、よろしくお願いします！！

ちなみに、今回は前、中、後編の三部構成（変更、何部になるか分かりません）となっておりますので、よろしくお願いします

未土井無視様、十六夜様、緋水様、香多詩路様、アルデンセン様、雨季様。ご感想、ありがとうございます！！！

#２４　ＶＳ闇の書の意思（其の一）。って、なにこのチートは！！　勝てる気しない

――――――そして、とある兄妹（しまい）の妹は、愛しき少女を救うため、戦い続ける……――――――

「さぁさぁおいでなさい、“煉獄の七姉妹”の一人、“マモン”！！」

［ウォンッ］

「煉獄の七姉妹の一人、“強欲のマモン”、ここに」

妹は、七姉妹の一人……その中で最も信頼のおける（っていうか、一番好きな）マモンを召喚し

「“ソード・オブ・プルガトリオ”！！！」

［フォンッ］

己も、人間状態の七姉妹達と同じように、腕に魔力刃（名前は自分が勝手に命名）を出現させ、シグナム、ヴィータを含めた四人で

「行くよ、シグナム！！　ヴィータ！！　マモン！！」

「はい！！」

「おう！！」

「分かりました、お嬢様！！」

闇の書の意思に、向かって行った

「……」

だが、闇の書の意思は動く様子は無く、そのままの状態で右手を軽く上げ

「カテゴリ、刀剣。“Ｅｍｅｒｇｅ（イマージ）・ＭＵＲＡＳＡＭＥ（ムラサメ）”」

［チャキッ！！］

虚空から漆黒に塗りつぶされた一本の日本刀のような剣を出現させて、それで迎撃するのかと思いきや

「“イリュージョン・ソード”」

［シュキイィィィィィィィィンッ……！！］

「「「「！！！？」」」」

刀身の部分が幾つにも別れ、闇の書の意思を中心に、無限と言える刃群が出現した

「（まんま“聖痕のクェイサー”のアレかよ！！！　ってか、なんでそんなのを知ってるの闇の書の意思ちゃん！！！？）」

っといっても、心当たりはあるのだ。そう、こっちの世界はあっちの世界と違い、“ネギま！”や“聖痕のクェイサー”はファンタジー小説としてあるのだ。そう、漫画家が小説家になっており、逆に小説の“バカとテストと召喚獣”は漫画版の方が原作で、小説が無かったりしているのだ……意外や意外。さらにはなんと、あっちでの続きとして見られるのだ。おかげで新しい情報も手に入り、ビビにとって気にしていた事……新情報や、気なる続きが見られる

のだ。無論、はやて達に気付かれないようにしているが……
…前にはやてがネギま！を読んでいた時は驚き、本屋に行ったらクエイサーを発見して、はやてに内緒で購入して読んでいた。のだが
……

「（まさか、見つかっちゃって読んだのかなぁ……？　それなら、これについて説明が付くんだけど……）」

という思考を張り巡らせている中、ビビは迫りくる剣群をさばいていた。周りにいるシグナム、ヴィータ、マモンも同様だ

「（っていうか、闇の書の意思の記憶って、はやてちゃんの記憶なのかな？　もしそうだとしたら、コレやばくない？）」

兵装錬製（ウェポン）は、想像力と知識の高さがそのまま強さに繋がっていると言っても過言ではない。あれは自分が思い描く武器を創り出す能力。そう、知識があればどんな武器でも作れるのだ。そして、はやては読書家……その身に宿す知識の量は膨大なのだ

「（厄介なのは、その中に約束された勝利の剣（エクスカリバー）とかがあって、ソレを使われた時だよ～。知っているのかどうかは知らないけど、知ってたら恐怖以外のなんでもないんだけど……あぁもう！！　お兄ちゃんが変な事するからとんでもなくヤバい事になってるじゃん！！！（――　ゞ））」

そう毒づく妹。そうしている間も

［シュバババババババババババババババババババババッッ！！！！！！！！］

「「「「ッ！！！」」」」

迫りくる剣戟を捌き、注意を引いて、そして

「ウオォォォォォォォォォォッ！！！！！“牙獣走破”！！！！！」

「！」

後方からの攻撃！！　闇の書の意思は、そのまま守護獣の牙に直撃するかと思われた。しかし

「断て」

『“パンツァーシルト”』

［キイィィィィィィィィンッ……ッ！！！！］

［ズガァァァァァァァァッッ！！！！！！！！］

「グゥゥゥゥゥッ！！！！」

防御魔法を使われ、あっさりと防御された。だが、それで終わる事は無かった

［［バシィィィィッ！！！！］］

「！」

両手、両足に、淡い緑色とオレンジ色のリング状のバインドが掛かり、空中で身動きが出来なくなった

「なのは！！！」

「今だよ！！　フェイト！！！！」

バインドを放った二人の術者に言われた二人の少女は、遥か上空からすでにチャージしていた砲撃をブチかまそうとしていた

「レイジングハート！！」
「バルディッシュ！！」
『“ディバインバスター”』
『“プラズマスマッシャー”』
［［ゴオオオオオオオォォォ

！！！」

全体に広がる爆煙、その中から全員が出てきた。だが、その身には先ほどの攻撃の傷が出来ており、全員疲弊しきっていた

「（ちょ、あり得ないって……まさか、こんなになるほど強力なモノだとは……）」

妹も、外見では余裕の笑みを見せながら闇の書の意思を睨んでいるが、内心はかなり焦っていた。まさか、ここまで苦戦を強いられるとは、思ってもみなかったのだ

「（つーか、まさかここまで出来る子だったとは、侮ってたわ。こりゃぁ、マジに行かないと無理かも……）」

だが、本気を出してしまったら出してしまったらでコワい。そう、やってしまったら、はやてを巻き込む可能性があるからだ。それだけは、回避しておきたい所だった

「（どうしよ……“ベアトリーチェ”のモード０２、使うしかないかな……？）」

出来る事なら、次に来るはずの防衛プログラムフルボッコの時に披露したかったモノだけど……この状況なら、使わざるをえないかもしれない……

「（とにかく、なんとか隙を見付けないと……）」

だが、本当の驚愕はこれからだった……

「カテゴリ、分類不明……“乖離剣・エア”」
［チャキッ］
「え〝……？（？@o@？）」

なぜか、とんでもないモノが……

［ギュイィィィ

「なんだ、あの剣は？」
「デケェ魔力を感じる……」
「あんなのが解放されたら、いったい……」
「……」

守護騎士達は、冷静な分析を済ませ構えだし、三人の魔導師と使い魔は、防御系の魔法を展開しようとしていた……そう、彼女達は迎撃しようとしているのだ。もし、アレが本物そのものの威力だとしたら……

「全員撤収～～～～～～～～～～～～～～ッッッ！！！

だ……そこで、ビビは簡潔に言った

「そりゃぁもう！！！！　君の全力全開の“スターライトブレイカー”なんて、豆鉄砲に感じちゃうほど強力なんだから！！！　下手すっと、次元震が発生しかねないほどなんだよ！！！！」

「「「「！！！！！！！！？？？？」」」」

アレを超える威力で、次元震すら引き起こす程の代物……つまり、それはかなりヤバいモノだと言う事になる……

「に、逃げよう！！！！　なのは！！！」

「ふえ！！？　ふぇ、フェイトちゃん！！！！？」

そう言って顔が青ざめているフェイトは、なのはを連れて遠くへ避難しようとしている……だが、原作を知っている読者の皆様はここで再び思い出して欲しい。そう、この時はスターライトブレイカーだったが、今回はアレになる……だが、そこは問題ではない。真の問題は……

『サー。左方向５００ヤードに一般市民がいます』

「「「「！！！！？」」」」

「（え……って、あああああああ

「（しまった、すっかり忘れてたよ……そうだったよ、この展開にはならないだろうなぁと思って、どうでもいい事にしていたよ！！！　もう！！！！！　ってか、ヤバいってコレ！！！！！！）」

アレの事で頭がいっぱいになっていた事を悔み、すぐさま二人の元へ急行しようと決断した

「それなら、その一般市民を救出に行くよ！！！　えっと……なのはちゃんとフェイトちゃんかな？」

知ってはいるが、まだ会って間もない間柄。それなら、こうやってすれば怪しまれずにすむであろう

「は、はい！！　そうです！　高町なのはです！！！」
「フェイト・テスタロッサです！！」

いや、自己紹介はさっきしたでしょ……まぁいいや！！！

「とにかく、二人は私と一緒に来て！！！　残り二人は、なんとかアレに届かないところまで非難して！！！！」
「わ、分かった！！」
「う、うん！！　フェイト、気を付けてね」

そう言って、二人の魔導師と使い魔は飛び立ち――――

「マモンッ！！　あなたは戻って！！」
「はい！！　お気をつけて下さい、お嬢様」
［パシュンッ！！］
「うっし！！！　全力で急ぐから、しっかり掴んでてね！！！！」

［［ガシッ！！］］
「「ふえ？」」

二人とも、何が何だか分からない表情をして、ビビに捕まれて

「加速魔法“ヘイスガ”！！　そして、“縮地无彊”！！！」
［キュイィィィィンッ！！！！］
「レディィィィ、ゴォォォォォーーーっ！！！！！！」
［ダシュンッッ！！！！！！！！］
「にゃあぁぁぁぁぁ～～～～～っ！！！！！！！？？」
「キャアァァァァーーーーッ！！！！！！？？」

――――――音速の域に達してしまうほどの勢いで、二人の少女の元に急行していった……

#２４　ＶＳ闇の書の意思（其の一）。って、なにこのチートは！！　勝てる気しないんだけど！！

～～～神の舞台裏～～～

神「ということで、記念すべき第一回！！！　開幕～～～！！！！」

メ「といっても、このメンツは盛り上がらないわね……」

ヤ「“スノウ”や“アサ”、それに“シェレン”がいたら、おそらくはしゃぐわね」

神「まぁまぁ、確かにあいつらが来たらそうだけど、今だに本編に出てないじゃん。だから、出るまでは俺達でガンバって行こうぜ！！」

ヤ「はい！　お兄様！！」

メ「はいはい」

神「では！！　とりあえずこのコーナー。今後は本編上あまり描写しにくい、または分かりずらいかなと思われる点をレクチャーしてお届けしようと思う！！！」

メ「さらに、作者の声を私たちが代弁して、製作中の裏側も一緒に話すという感じにしていくつもりよ」

ヤ「では、最初のレクチャーはこれよ」

――――――なぜ、闇の書の意思が“乖離剣・エア”を使わせたのか!?

神「なのはの資質をコピーしてないからあの悪魔の集束砲撃が使えなかったから。そして、はやての読書好きという設定を考慮し、ならば神話系のも読んでるだろうと判断し、使わせてみました……だとさ」

ヤ「ずいぶんな理由ですわね……」

神「ちなみに、ほかの宝具も同様の理由だとさ」

メ「完全にチートね……勝てるの?」

神「あの妹次第、だな」

ヤ「大丈夫かしら?」

神「なにしろ、ベアトのモード02は作者すらやりすぎだろうなと思っているほどチートらしい」

ヤ「そうですの?」

神「ちなみに、次回お披露目らしい。その時にでも、こちらで説明と補足をするつもりだぜ!!」

メ「ふーん……」

神「とりあえず!! こんな感じでやっていくつもりだから、よろしく頼むぜ!!!」

ヤ「それでは、今回も読んで下さった読者の皆様に、深い感謝を」

メ「それじゃぁ、また次回に」

神・ヤ・メ「さよなら～～～！！」

作「……もはや、私がいる意味がないですね……」

追記分

作「すみません、やりたいこと色々やってたら、かなり伸びてしまいました……ので、タイトルとか内容を一点だけ加筆しておきました」

神「んで、ベアトのモード０２はおあずけか……いいのか？」

作「別に良いと思います、が……」

神「とにかく、さっさと書け！！」

作「はいぃ！！！」

＃２５　ＶＳ闇の書の意思（其の二）。な、なんか大変なことになっております

皆さま方、お久しぶりでございます！！

旅行から帰ってきてさっそく一話投稿させていただきます！！

＃２４を加筆、修正しましたので、ご了承ください

十六夜様、未土井無視様、雨季様、緋水様。ご感想、ありがとうございます！！！

#25　VS闇の書の意思（其の二）。な、なんか大変なことになっております。

――――――そして、とある兄妹（しまい）の妹は、愛しき少女を救うため、戦い続ける……――――――

海鳴市、結界が張っている中、唯一いる一般市民。アリサとすずかの二人がいる所

「……」

そこには、一人の少女……すずかが、誰もいなくなった街の真ん中に立っていた。そして、視線の先には、とてつもなく強烈な光を放つ何かがあった

［タッタッタッタッタッ］

「やっぱり誰もいないよ！　急に人がいなくなっちゃった……」

「……」

そこへ、もう一人の少女、アリサが来たが、その表情はいつもの強気な彼女とは思えないほどの不安に満ちたモノだった

「辺りは暗くなるし、なんか光ってるし……一体なにが起きてるの！？」

ちなみに、この光は、今現在チャージを行っているエアから溢れ出る魔力が光となって映ったモノである

「とりあえず逃げよう！　なるべく遠くへ！」

「う、うん！」

そして、二人は少女達へと近づいて行った……

□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■

「……ギュオンッッ！！！！！」

「この辺りかな……二人とも！　下ろすからしっかり着地してね！！！！」

「「は、はい！！」」

そう言って、なのはとフェイトの二人を下ろすビビ。補足だが、この時音速を超えてここまで来ていたが、その間、この三人に薄い膜が張ってあり、それほど抵抗の衝撃は受けていないのである

「（今は伸びてる場合じゃないしね。それに、好きな子を傷付けるのは嫌だし（、、））」

って、そんな考えに浸ってる場合じゃないって！！！！　はやくアリサちゃんとすずかちゃんを探さないと！！！

「この辺り、のはずだけど……」

そして、二人の探索を始めたが……

「（どこ？　どこにいるの！？）」

「「……」」

必死に一般市民を探す三人。とそこへ

［タッタッタッタッタッタッ……］

いたぁ！！！！　紫色の長髪に、金色の長髪の二人組ィ！！！

「あのぉ！！　すみませ～～～ん！！！！　危ないですから、そこでじっとしててくださ～い！！！」

そうビビがいうと、二人の少女はこちらに振り向き

「え？」

「今の声って……」

そして、着地の際の砂煙が収まると、互いの事が見えるようになり

「なのは？」

「フェイトちゃん、それにビビちゃん？」

「「え……？」」

「（あぁ～あ、ばれちゃったし。しかも、こんな形で）」

ビビが立てた計画でなら、いつかはくるであろう二次創作特有のアリサとすずか誘拐事件（？）の時に披露するはずだったが……だが、今はそんな事を言っている余裕は無い。そう、アレから結構な時間が経った為、おそらく今頃……

□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■

［ギュイィィィ

□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■

「やっば！！！　“最強防護（クラティステー・アイギス）”！！！！！！」

［ウォウォウォウォウォウォウォウォウォウォウォウォウォウォウォウォウォウォウォンッッ！！！！！！！！！！］

ビビは、背後から来る衝撃の気配を感じ、その場で己が思う最強の防御系の魔法陣を展開し

「皆！！　私の後ろに下がって！！！！　それと、なのはちゃんとフェイトちゃんはその二人に衝撃が来ないようにして！！！！」

「は、はい！！」

「分かった！」

そう言って、二人の魔導師は後ろにいる二人の少女に防御壁を展開させるように促して

「二人とも、そこでじっとして！！」

『“ディフェンサープラス”』

［キィィィィィィィィィィンッ！！！！］

「「！？　？？」」

なのはも同じく、三人の親友と、素敵な微笑みをする少女の間に立ち、己も広範囲を守る防護壁を張る

「レイジングハート！」

『はい、“ワイドエリアプロテクション”』

［キィィィィィィィィンッ！！！］

「「「ッ……！！！」」」

そして

［ゴゴゴ

後ろの少女たちは、うめき声を上げながら、必死に耐え、ビビも、防護壁を維持し続けていた

「グッ……（くぅ、やっぱ強いなぁ、“天地乖離す開闢の星（エヌマ・エリシュ）”は。私もしたいなぁ……ってか、なんか思ったより威力低い。もしかして、あまりにも消費魔力がでかすぎだから、押さえたのかな？次元震も起きて無さそうだし……でも、それでもあの星光の殲滅収束砲よりも強力かも（~＿~；））」

そう言って毒づくも、内心では余裕が生まれ……少しニヤけていた

「（この勝負、勝つるかも!!）」

勝利を確信した。よほどの事（イレギュラー）が無い限り、自分の勝利は揺るがないだろうと思った

［ゴゴゴ

心配そうに、二人の方に振り返り、そしてついでに“魅了の笑み”
……

「「は、はい！！（（や、やっぱり、可愛い……／／／／／／））」」

二人の少女は、頬を赤く染め、少女の笑みに酔い始めていた……
……変態の毒牙が、徐々に芯まで食い込み始めていたのだ。そして、
変態（ビビ）は、二人の魔導師の後ろにいる二人の少女にも、その笑牙みを…
……

「後ろの二人も、大丈夫？　けがとか、してない？」（ニコッ）
「「っ！！？　は、はい！！！／／／／／／」」

突き立ててしまったのだ！！

ヒャッホォォォ

《ビビ！！》
《ビビちゃん！！》
「！！　シグナム！　シャマル！」
《大丈夫ですか！！？　直撃を受けたみたいですけど……》
「ううん、問題は無いよ。ただ……」
《《？》》
「すずかちゃんとアリサちゃんが、結界の中に閉じ込められちゃってて《《《《！！！！？？》》》》……シャマル。旅の鏡使って、安全な場所まで運んで上げて」
《わ、分かったわ！！　とりあえず、まずはそっちと合流しましょ！》
「うん、分かった」

湖の騎士にそう頼みこむと、今度は二人の少女の近くに行き

「ごめんね、怖い思いさせちゃって。直ぐに、安全な場所まで送ってあげるから」
「あ、あの・・・ビビ、ちゃん？」
「ちょっと！　どういう事なの！？　なのは！　フェイト！」
「「あ……」」

すずかとアリサは、困惑と心配の表情で転生者と二人の魔導師を見て、それに気付いたビビは、二人を安心させるように

「［［ポンッ］］」
「「？」」
「大丈夫。後でちゃんと説明してあげるから。だから、今は逃げて

いて……ね」（ニコッ）
「／／／／／／……は、はい……」」
二人の少女の頭に手を乗せ、優しく撫でて、“魅了の笑み”をやる
……相乗効果により、二人の頬は真っ赤になった！
「（か、可愛い……かも……って！　私は何を考えてんのよ！
！　バカッ！！）」
「（ビビちゃんって、こんな素敵な笑い方するんだ……今まで、
微笑む位しかなかったから……それにしても、可愛い？）」
落ちかけているアリサ。すずかに至っては、完全に落ちてしまっ
ている
「「ビビ！！」」
「ビビちゃん！！」
「！　皆！！」
遠くから、守護騎士達が合流し、付近に降り立った
「ビビちゃん！　怪我とかなかった？」
「ううん、大丈夫！　ごっそり魔力は減ったけどね（ー＿ー；）」
「どうやら、無事みたいだな」
シャマル、ザフィーラ……私の事心配してくれるなんて……う、
嬉しい（＊＜＿＞＊）　って、やってる場合じゃないっての！！
「それよりも……シャマル、二人をお願い」
「あ、うん、わかっているわ」

そう言って、シャマルはアリサとすずかの方へ手を伸ばし

［キィィィィィィィィンッ……］

「「！？」」

「大丈夫！　安全な場所まで運んで上げるから、そこでじっとしてて」

シャマルがそう言うと、二人は転送された

［［バシュンッ］］

「……見られちゃった、ね……」

「う、うん……」

知られてしまい、どうしようかと項垂れるなのはとフェイト……

……

［ポンッ］

「「？」」

「大丈夫だよ、きっと。ちゃんと説明して上げれば、分かってくれるはずだから……ね」

「はい……」

「そう、ですね……」

二人を慰めアリサとすずかと同じように優しく撫でて上げた……

ちなみに、“魅了の笑み”はかけていないです

「今は……」

「「「「「……」」」」」

……今は、はやてちゃんをなんとかしなきゃ……

■□■□■□

エイミィから原作通りの通信が来た瞬間

《おい、バカ妹、聞こえるか》

《お姉様!?》

ビビには、己の兄(あね)からの通信が来たのだ

《いいか、よく聞け。さっきエイミィ・リミエッタが言ったこととは別に、お前にはあることを伝えておく》

《あること?》

《あぁ。原作だと、確かこの時、あいつに停戦を呼び掛けた後、フェイト・テスタロッサが吸収されるんだったよな》

《うん。っていうか、よく知ってるね(・―・?)》

《誰のせいだ誰の……まぁいい。んで、その吸収されるのを、お前が受けろ》

《へっ?(@―@?)》

ちょ、今なんて?

《だから、お前が吸収されろ。割り込むなりなんなりしてな》

え……エエエッッ!!!!!??(O・O;)

《なんでぇ!!? なんで私が吸収されなきゃならないの!!!?》

《ごちゃごちゃうるせぇなぁ……良いか、闇の書改変プランに必要なのは、“繋がり”だ》

《“繋がり”?》

《あぁ、そうだ。お前らでいうと、パス、か? それを作るためだ》

な、なんでそれが必要なの？

《改変プランに必要な要素だからだ。それに、中に入れば、そこから行動出来るだろう》

《な、なるほど……》

《分かったらさっさと行動しろ、いいな！》

《は、はいぃ！！（@＿@）ゞ》

そう言って、念話を切った兄（あね）……もう！！　何がなんだかさっぱりだよ！！　なんでお兄ちゃんがパスとか知ってんの！！？　なんで私でさえうろ覚えな事を知ってんの！！？　まぁ、お兄ちゃん頭良いからね（ー＿ー；）……って、今はんな事考えてる暇じゃないっての！！！　とにかく、私が吸収されればいいんだね……うっしゃぁ！！！　いっちょやったるか！！　って思ってる間に、なんか進行してるし（・・；）

「闇の書さん！！　止まって下さい！！！」

「もう止めるんだ！！　管制人格！！！」

「彼女達を傷付けたのは、私達じゃないんです！！」

「私達は無事なのよ！！　戦う理由が無いじゃない！！！」

「そうだよ！！　だから、はやてを……はやてを解放してくれ！！　管制人格！！！」

二人の少女と守護騎士達が悲痛の叫びを上げるなか、其れは答える……

■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■

「我が主は、全てが夢で有ってほしいと願った……新たな二人の友も、そして、愛する守護騎士達が、武器を持って戦う事も……全て、儚い夢であってほしいと……だから主には、我が内で、安らかな夢の中で、永久の眠りを……そして、騎士達を傷付け、約束を違え武器を持つ騎士達には……」

［スッ……］

■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■

［［［［ポウゥゥゥゥッ……］］］］

「「「「ッ！！？」」」」

「シグナム！？　ヴィータ！？　シャマル！？　ザフィーラ！？」

其れが腕を此方に向けると、守護騎士達の体が光りだし……

「ぐゥゥゥッ、ッ、ぐあァァァァァァァァァァァァァァァ

アアアアッツ！！！！！！？？」
「ぐあああ、グッ、ぐあアアア

「……」

ちょっと・・・ちょっとちょっとちょっと!!!　なんで!?
　ねぇなんで!!?　なんでこうなっちゃったの!!!!?　つか、やるなら最初の内にやっとけよ!!Σ⊂（￣Д￣；）　ってか、今さら原作通りになっても困るって……なんで今頃守護騎士達がいなくなっちゃうの!!?

《お、お姉様お姉様お姉様!!!》
《喧しいわ。それに、そのお姉様っての、止めろ》
《いや、前に好きにしろっつったじゃん（・＿・）……って、そんな場合じゃないって!!!　皆が、ヴォルケンズの皆が!!!》

泣きそうな位悲痛な声を上げて、助けを求めたが、兄（あね）は淡白に

《あぁ、消えたか……だが、あの魔導師の二人は残ってんだろ？　なら、別に問題は無い》
《う、うん……》

たったそれだけ、伝えただけだった。が……

《だったら、助ければいい。全員、な……“今”のお前の、大切な“家族”なんだろ》
《!!?……う、うん!!!》
《なら、さっき言った通りにしろ。そうすれば、救える筈だ。お前が救いたいっ

て言った、闇の書の管制人格も、な……》

《うん！！　うん！！！！》

救いたい……皆、全員！！　はやてちゃん、シグナム、ヴィータ、シャマル、ザフィーラ。そして……

［キッ！！］

ビビは、今までの彼女かな無いくらいの、決意を固めた表情で、遠くにいる彼女を……闇の書の、管制人格を見据えた

■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□

「……」

その視線の先にいる彼女は、その場でずっと無表情のまま、その場にいた……

■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□

……そして

「よし……なのはちゃん、フェイトちゃん」

「「は、はい！？」」

妹は、後ろにいる二人の少女の方に向けて

「お願いがあるの。あの子を……はやてちゃんと、ヴォルケンリッター……シグナムとヴィータ、シャマル、ザフィーラを助けたいの。だから、力を貸して……お願い」

「「……」」

見せたのは笑みではなく、真剣な眼差し……そこに宿るのは、決意――――

「（と、エ・ロ・ス♪）」

――――だけだった

「（っておい地の文。今軽くスルーしたでしょ。私のノリを（―＃）））」

いやいや、ノリといっても、スベッたでしょ？

「（う、うるさいうるさいうるさ～い！！！）」

灼シャナ乙　って言うか、今戦闘中じゃない？

「（ハッ！！？（。ロ。；　そうだった！！）　よし……行くよ！！　なのはちゃん！！！　フェイトちゃん！！！」

「はい！！！」

「うん！！！」

そして、三人は、飛び立とうとした……途端

「「「「「「「「「「ズガァァ

「速いな……もう、暴走が始まってしまったのか……」

■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□

「（……ヤバい……）」

ヤバいヤバいヤバい！！　まさかもうタイムリミットが近付いていたなんて！！

！　あぁもう！！！　急がなきゃ！！！

「さぁさぁおいでなさい！！　煉獄の七姉妹の一人、“憤怒のサタン”！！！」

［ウォンッ］

「憤怒のサタン、ここに！」

「“ソード・オブ・プルガトリオ”！！！」

［フォンッ！］

七姉妹の中で二番目に好きなサタンを召喚して、戦闘モード、切り替え完了！！

「なのはちゃんは、後方からの射撃支援を！！　フェイトちゃんは、隙を見つけ

て遊撃を！！　サタンは、私と一緒に、真っ正面から攻撃していくよ！！」

「「はい！！！」」

「分かりました！　お嬢様！！」

指示出しオッケィ！！　さぁ、行くわよ！！！

［［［［ダシュンッ！！！］］］］

そして、四つの影は、空へ飛び立った……

#25　VS闇の書の意思（其の二）。な、なんか大変なことになっておりま

～～～神の舞台裏～～～

作「“小説家になろう！”よ、私は帰ってきた！！！！（後書きコーナー復帰も込めて）」

神「はい、これでお前の出番終わりね。サヨナラ～ｗ」

作「え！！？　なんでこんな扱、うわァァァァァァァァァァァァァッ！！！！？」

ヤ「そうやすやすと、私とお兄様との愛の巣箱に入れると思ったら大間違いですわよ！！」

メ「にしても、旅行から帰ってきたそうそうに更新とは……どういうこと？」

神「よし、今回のテーマはこれでいこう」

――――――なぜ、予定よりも早く更新出来たのか？――――――

神「簡単だ。旅行中の暇な時間に、執筆してたからだ！！！」

メ「……は？」

神「作者のアホは、旅行中に閃いたらしい。“あ、そういや、携帯

のメール機能使えば、執筆出来るんじゃね？”ってな」

ヤ「マジですの……？」

神「マジらしい。んで、途中の部分から携帯のメール使って書いていって、んで、帰ってくる直前に書いた分をパソに一斉送信して、帰ってからの始末の後に、編集して載せたんだと」

ヤ「アホですわ……」

メ「重度の馬鹿ね……」

神「だな……まぁ、俺たちも久方ぶりに出れたんだ。一刻も早い復帰に感謝しようぜ」

ヤ「そうですわね」

メ「でも、ここには復帰させないのね」

ヤ「それとこれとは別問題ですわ」

神「あぁw」

メ「……はぁ」

神「とにかく、今後とも今作をよろしく頼むぜ！！！」

ヤ「それでは皆様方、次回をお楽しみに」

神・ヤ・メ「さよなら～！！」

作「ひっぐ、えっぐ……せっかく、せっかく頑張ったのにぃ……
……うえ～ん（泣）」

#２６　ＶＳ闇の書の意思（其の三）。計画通りに行かない現実。そして、

最近戦闘描写ばかり書いている気がします……

しかし、やりたいことが多くてつい長引いてしまう事実……

はやくフルボコシーンが書きたいです（泣）

しかし、連日続く暑さにバテ気味で、ヤル気が……私はどうすればいいのだ！！？

未土井無視様、緋水様、十六夜様。毎度ご感想、本当にありがとうございます！！！

#２６　ＶＳ闇の書の意思（其の三）。計画通りに行かない現実。そして、

――――――そして、とある兄妹（しまい）の妹は、愛しき少女を救うため、戦い続ける……――――――

……青空広がる荒野

「ふむふむ、結構イイ展開じゃん」

そこでは、興味深げに、青空と言う名のスクリーンに映る戦闘を楽しむ“光”があった……

「……でんもぅ、このままあの兄の命令通りに物事が運ぶのは、ちょっとなぁ……」

う～ん……と女の子のような仕草で悩みこんだ“光”は

「……ちょっとだけ、ちょっ～とだけ、ちょっかい出しても、イイよね☆」

そう言って、親指をグッと突き立てて、それをそのまま、グリンと半回転させ

「えい♪」

親指を下にして、スドーン！　という効果音がなりそうな感じで、其れを下に落とした

「クックックッ、さぁ～って、どんな反応してくれるのかにゃぁ？
クックックックックッ……」

その笑みには、ただ玩具で遊ぶ子供のようなモノと、人が訳も分からず混乱し、その様を上から目線で楽しむかのような、狂喜が含んでいた……

■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■
■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■
■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■
■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■

海鳴市、結界内

「「ハァァァァァァァァァァァァァァッ！！！！！」」

二人の影……ビビとサタンが、右腕に出現させた魔力で出来た刃を振り上げて、闇の書の意思に跳び込んだ。だが

「無駄だ。その手をお前たちは、なんどやるつもりだ」
『“パンツァーシルト”』
［キィィィィィィィィィンッ……ッ！！！！］

先ほどと変わらない、淡々とした口調で、その攻撃を防ごうと

［［ガキィィィィィィィィィンッ！！！！］］

……否、防いだ

《サタン。私達の目的は、あくまで隙を作り、フェイトちゃんの攻撃を当てて、そんでなのはちゃんの砲撃を撃ち込むためだけの布石……余計に考えちゃだめよ！！》
《分かりました、お嬢様》

そして、転生者兄妹（しまい）の妹と、煉獄の七姉妹の三女は、念話で会話を行い、作戦を再確認する……

［……フッ……］
「！！」

不意に、ビビの視界に、金色の光るラインが見え

《サタン！　次の攻撃、防御壁崩すぐらいの攻撃でやって！！》
《はい！！　お嬢様！！》

そして再び、二人は突撃の体制を取り、そこから

［［ダシュンッ！！！］］

「「ハァアアアアアアアアアアッツ！！！！！！！！！！！」」

「……断て」

『“パンツァーシルト”』

［キィィィィィィィィィィンッ……ッ！！！！］

またかと、半ば呆れたような表情で、再び防御の姿勢を見せた

［［ガキィィィィィィィィィンッ！！！！］］

再び、二人の攻撃は防がれた……が

［シュッ！！！！］

「！！？」

突如真横に……防御壁を展開させていない側面に、人影が現れた

……ソニックフォームとなって、高速で動き、隙を窺っていたフェイトであった

「ハッ！！！！」

サイズフォームとなっているバルディッシュを降り下ろし

［ザンッ！！！！］

「クゥゥゥッ……！！」

一撃を当てた。そして、間髪いれずに、そのまま

「“ディバイン・バスタァアアアーーーー”ッ！！！！」

［ゴオオォォォォォォォォォォォォォォォォォォォッ！！！

！！！」

「グゥウウウウウッ！！！」

［ズドオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオンッッッッ！！！！！！！！！！！！！！！］

桜色の光の奔流が、闇の書の意思を飲み込み、爆煙を噴き出した

「やった、かな？」

妹は、確かな手ごたえを感じていたが、それでも、不安に駆られていた……そして、その不安は、現実となり

［［［［シュルルルルルルルッ！！！］］］］

「「「「！！？」」」」

［［［［バシィィィィィィィィッ！！！！］］］］

「「「「ぐあァァァッ！！！！？？」」」」

突如真後ろから、触手のようなモノに絡まれ、拘束された。そして、爆煙が噴き出した所から、声が響き渡る

「何故だ、何故私の邪魔をする。私はただ、主の願いを叶えたいだけなのだが……」

爆炎がはれて行き、そこにいたのは、無傷の闇の書の意思であった。そう、爆煙で相手から視認されていない間に、治癒魔法を使い、更には、触手を操り、四人を捕らえると言う連続攻撃を為していたのだった

「願いを、叶えるだけ……？　そんな願いを叶えて、はやてちゃんはホントに喜ぶの！！？　心を閉ざして、何も考えずに、主の願

いの願いを叶える道具でいて、貴方は！　それでいいの！！！？」

締めあげられていながら、思っていた事をぶつける少女

「我は魔導書、ただの道具だ」

そういいながら、闇の書の意思は、涙を流した……それは、誰の涙かは、分からない……

「だけど、言葉が使えるでしょ！！　心が、あるでしょ！！！」

叫んでいるのは、転生者兄妹（しまい）の妹であり、彼女は、原作道理に事を進める事に専念していた……例え役が違っていても、同じ事を言えば、うまくいくだろうと考えていた

「じゃないと、おかしいもん……本当に、心がないんなら……泣いたりなんか、しないはずだよ！！！！」

これでもかと言うほどに、原作に近い雰囲気で叫ぶ妹……もしかしたら、女優に慣れるのではと錯覚してしまいそうな程の名演技である

「この涙は、主の涙。私は道具だ、悲しみなど……ない」

そう断言すると、今まで拘束から逃れようと動いていたサタンが動き出した

「あああ、もう！！　うっとうしい！！！！」

［フォンッ］

苛立ちを込めた声で叫び、杭のような形態に変身し

［カンカラカンカラカンカラカンカラカンカラッッ！！！！！！！！］

［ブチブチブチブチブチブチブチブチブチブチブチブチブチブチッッッッ！！！！！！！！！］

乾いたような音と共にその場を暴れ出し、三人に巻きついている触手を斬りちぎって行った・そして、四人は拘束から逃れ、闇の書の意思から距離を置いた

「「「「ッ……！！！」」」」

「……」

そして両者は睨みあい、その場で動かなかったが……

「悲しみなど無い……？　そんな言葉を、そんな悲しい顔で言ったって、誰が信じるもんか！！！」

叫びだしたのは、金色の閃光の少女……フェイトであった

「貴方にも心があるんだよ……悲しいって、言っていいんだよ！！」

続くなのはの言葉。それに続くように、ビビも言葉を紡ぐ

「貴方の主……そして、私の大切な家族のはやてちゃんは、そんな貴方を受けとめてくれる……抱きしめてくれる、優しい子よ……きっとあの子になら、貴方の傷みを癒してくれる……貴方を、救ってくれる、最高のマスターよ！！！」

今のビビの言葉は、演技ではなかった……彼女が、はやてと共に過ごした日々を想いかえし、そして、その日々の中で知った、彼女の全てを、その場で吐き散らした。

「だから、はやてちゃんを……はやてちゃんを、解放して！！！！」

ビビの悲痛な叫びが、その場にこだまする……だが、その時

「「ズガァァァァァァァァァァァァァァァァンッッ！！！！！！！」」

「「「「！！！！！！？」」」」

四人と、闇の書の意思の間……正確には、間の両端……に、火柱が立ち上った

「もう、崩壊が寸前まで来ているのか……？　ならば、意識のあるうちに、主を願いを、叶えなければ……」

そういって、構えだした闇の書の意思……そして……

「この、駄々っ子！！」

サイズフォームのバルディッシュを構えたフェイトが、闇の書の意思に斬りかかった

「（よし！！　今だ！！！）」

フェイトちゃんを突き飛ばし、自分が変わりに吸収されようとした

が

［ビリィィィィィィィィィッ！！！！］

「ッッ！！！！！！！？？」

全身が、まるで雷撃を受けたように痺れ、身動きが取れなくなった。

その間に

［ガキィィィィィィィィィィンッ！！！！］

「ッ……っ！！！！？？」

［ポウゥゥゥゥゥッ……］

「フェイトちゃん！！？」

フェイトの体が光だし、そして……

［パシュンッ！！！！］

『吸収、完了』

［バタンッ！！］

光の粒子となって、消え散った

「フェイトちゃん！！！！」

なのはは、親友の突然の消滅に動揺し、妹は……

「……」

呆然としていた

なんで……さっき、なんで体が動かなかったの……？　どうして？　いったい、何が……？　なんで、こんな……？

完全に困惑しており、いったい何が起きたのか、理解できなかった……その表情は、内側だけでなく、外側にも現れていた。周りから見れば、突然消えたフェイトの事でそうなっていると思われるだろうが……そんな中

《おい！！　何してんだクソ妹！！！》

突如、兄からの念話が入った

《お姉様！？　ちょっと聞いて！！　さっき、私の体が！！》

《言い訳はいい！！！　とにかく、さっさと吸収されろ！！　中に入れば良いんだ！！》

ちょ、それは無いんじゃ！！！　こっちは本気で、何がなんだか！！！

《とにかくだ。今は落ち着いて、チャンスを伺え。いいな……》

《う、うん……》

最後は、冷たいがフォローをして、兄は念話を切った……そして、

妹は再び相手を見据え……た時

「やあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁッ！！！！」

ちょっとなのはちゃぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁんッッ！！！！！？？　なんで、ねぇなんで！！！？　なんで君突撃しちゃってんの！！？　何レイハのアクセルモードで殴りかかっちゃってんの！！？　しかも、魔力纏わせて！！？

「お前も、我が内で眠るといい……」

ちょっ、なんか嫌な予感……って！！！

「させる！！！」

と体を動かそうとしたら

［ビリィィィィィィィィィッ！！！！］

「ッッ！！！！！！？？（ま、またぁ！！？）」

またも、全身がまるで雷撃を受けたように痺れ、体が動かなくなった。そして

［ガキィィィィィィィィィィンッ！！！！］

「ッ……っ！！！！？？」

［ポウゥゥゥゥゥッ……］

フェイト同様、なのはの体が光だし

［パシュンッ！！！！］

『吸収、完了』
［バタンッ！！］

光の粒子となって、闇の書の中に消えて行った

「全ては、安らかな、眠りの中へ……」

そして、戦場は、アリサとすずかの護衛をしているユーノとアルフ。
召喚されたサタンと、ビビの二人だけになって行った

「……」

どう、して……なんで、こうなっちゃってるの……？　確か、私はフェイトちゃんの代わりに、闇の書に吸収される手はずだったよね……それなのに、残ったのは……今、この場に……闇の書の意思の前に残ったのは……私、だけ……

《おい、このノロマ》
《お、お兄、ちゃん……》

またも、兄（あね）からの連絡だった。だが、その声には、静かで、どこまでも鳴り響くような遠雷に似ており、呆れが混じった声だった

《バカか、お前は……言ったはずだ、お前が吸収されないと、意味がないんだと……それと、テメェは分かっている筈だろ。原作で、闇の書の意思、か？　それに魔力ダメージでノックアウトさせねぇと、あれが外に出られない事を……》

わ、分かってるよ、そんなこと……

《だが、今この場にアレをノックアウト出来るのは、お前だけだ……分かるか？　俺が言いたい事……》

どこまでも深く、どこまでも遠く、その声は轟いていた……ビビの心に、深く、深く、フカク……

《……もう、私が、吸収、されちゃったら、おしまい、って、事？》

切れ切れに、まるで死に瀕しているかのような声で、そう兄（あね）に伝える……それは、妹が考えた、最悪の結末を、意味する……

《……あぁ、そうだ》

《ッッッッ！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！？？？？？？》

妹は、声にならない叫びを……悲鳴を上げた

《……仕方ない、お前の力を借りずに、改変を行える別のプランを考えるとするか。とりあえず、お前はなんとかしてそいつを足止めしていろ、そして、吸収はされるな……いいな》

それだけ伝えた後……淡々と言葉を紡いだ後、念話は途切れた……それでも妹は、何も感じる事もなく、その場に立ち尽くしていた……

……どうして……なぜ、こんな……なんで……なんでこんな事に……

妹は、考えていた。何故……どうして、こんな想いをしなければならないんだろうと……どうして、あんな事に……どうして、私は阻止できなかったのだろうと……最愛の少女が、呪われている魔導書の主として覚醒してしまった事も……最愛の騎士達が、消えてしまった事に、何もできず、ただ見ているだけだった事も……二人の、大好きな少女たちが吸収されるのを、阻止できなかった事も……何も、かもに……今まで見てきたチートオリ主転生のリリなの二次創作の中で、最も最悪なパターンかもしれない……いままでのは、あまりにもあっさりと全てが上手くいっていた……全てが、予定調和のように、丸く、何も起きる事もなく、終わっていた……それなのに、自分は……他のチート転生者の中でも、屈指の能力を持っていると自負している自分が、何もできずに……何も、何も……言われた事すら、出来ずに……負の感情だけが、彼女の心を蝕んでいた……

――――「……闇の書の暴走は止められず、この街が無くなる、とか……？」――――

前に、一瞬だけ考えた、最悪の結末……そう。まさにその状況も考えられる……

――――原作以上の、悲劇が起きると言う、結末に――――

「（嫌だ！！！！！！！！）」

嫌だ。嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌

だ嫌だ嫌だ嫌

「（絶対に、全てを助ける！！！！）」

――――――という想いが、宿っていた

「……分かりました。どうかご無事で、お嬢様」
［パシュンッ！！！］

サタンは、主の意思をくみ取ったのか、命令のままに、消えて行った

「……さてと……“ベアト”、モード０２、行けるよね？」

彼女は、スカートのポケットから真っ白の宝石を取りだし、ソレを胸ぐらいの高さまで掲げた。そう、それは彼女が持っている、魔女の名を持つデバイス、“ベアトリーチェ”である

『無論だとも。さぁ、我が新たな力……そなたより賜りしこの力、我が力の全てを以て、そなたが満足できるよう、御し得てみせよう』

宝石は明滅しながら、淡々と、電子音と共に発せられた言葉……
そこには、主の為ならば命すら惜しいと思うほどの、武士のような誇りを感じせれる意思が、そこにあった

「ありがとう、ベアト……じゃぁ、いこっか」

いままでの彼女からは考えられない……其れは、彼女の兄（あね）が放つそれと同等の覇気が、彼女からにじみ出ていた……その少女は、己がデバイスを、天に掲げた

「……“ベアトリーチェ”、モード０２、リリース！！！」

『あぁ。モード０２、起動開始。デバイス、“ベアトリーチェ”のモード０２への最適化……完了。神魔招来（アバター）との接続……良好。主、“ビビ・スティン”の、モード０２に対する最適化……良好。全機能、モード０２への移行、完了。主、指示を』

「うん……モード０２、“神魔憑依（アバター・オブ・リンク）”、リンク対象、“セイバーリリィ”で発動を」

『了解。“セイバー・リリィ”、ダウンロード……完了。行けます、我が主よ！！』

明かされる、ベアトリーチェの新たな力……それが今、起動する

「私を本気にさせたんだから、何されても文句は言わないでよね！！！」

そして、天に掲げた白き宝石を、胸の前に突き出して

「“ベアトリーチェ”！！！　モード０２、“神魔憑依（アバター・オブ・リンク）”……“セイバー・リリィ”！！！！」

空へと、放り投げた

『スタンバイ、レディ』

「セーーーット、アップ！！！！！！」

［カッッッ！！！！！！！！！！！！！！！！］

そして、光り出す宝石。それと同時に、ビビの体も光り輝き、その場が一瞬、光に包まれた。そして……

「……」

現れたのは、真白き騎士……純白の華奢なドレスのような服の上に、銀色の光沢が栄える甲冑を纏った姿。髪は後ろで結ばれて、ポニーテールになっている……その姿は、戦場に咲いた、一輪の白百合……可愛さが目立つビビが、一見して別人となり、美しさが際立つ、可憐なる純白の騎士姫……かの騎士王、“アルトリア・ペントラゴン”のもう一つの姿へと、変貌していた

「……ふぅ。問題は、無いわね。それじゃぁ……」

［チャキッ］

彼女は、無手のまま、構えだした……否。その両手には、何かが握れている……そう、握れているのは、不可視の鞘、風王結界（インビジブル・エア）に納められた至上の聖剣。約束された勝利の剣（エクスカリバー）である

「……」

闇の書の意思は、その工程を、ただ見ていただけだが、それでもなお、その力を行使しようとしていた。そして、その口が開かれた

「無駄な抵抗はするな。お前ももう、眠るといい……」

「……悪いけど、そんなわけにはいかないわ……私には、やりたい事がまだ山ほどあるんだから……ソレを、夢で終わらせる気は」

［スッ……］

「無いわ」

彼女とは思えない、覇気がこもった声で、前方にいる闇の書の意思を、見据えた……今のビビは、今までの彼女とは、完全に違っていた……

#２６　ＶＳ闇の書の意思（其の三）。計画通りに行かない現実。そして、

～～～神の舞台裏～～～

神「やっと出たな、ベアトのモード０２」

ヤ「散々引っ張っておいて、なんか出たのが地味ですわね」

メ「まぁ、文才のない作者なんだから、許してあげましょう」

神「というわけで、今回のテーマはこれだ！！！」

――――――ビビのデバイス、“ベアトリーチェ”のモード０２、“神魔憑依（アバター・オブ・リンク）”について――――――

神「これは今まで通りの形式で発表するぜ。そんじゃ、どうぞ」

１－２）“神魔憑依（アバター・オブ・リンク）”

　ベアトのモード０２．漢字で描かれている通り、神魔招来（アバター）で召喚可能の存在を、我が身に憑依させる能力。憑依と言っても、操られるのではなく、簡単に言えば、そのキャラになりきる事が出来る能力。ぶっちゃければ、“ビビが知っているキャラクターに成れる”能力である。ちなみに、その時のビビの身体はそのキャラの服装と髪型に成り、その際には、髪の長さが変わる（が、身長はそのまま）。髪の色は変わらずそのままの銀色。そして、能力とそれに関わるモノを自在に使えるなど、良点は多い

ヤ「補足ですが、逆にそのキャラの弱点も反映されてしまいますので、注意が必要よ」

メ「……チートなのかしら、これ……？」

神「ぞう思うぜ。今回は軌起動するのに時間を取らせたが、実際は早く変わることができるぞ。それに、リンク中でも、ほかの奴にすぐさまチェンジ出来るしな。ギルガメッシュとか、英霊エミヤとか、セイバーオルタにも」

ヤ「なぜ全てそういうネタで行きますの？」

神「なんとなくw」

メ「はぁ……」

神「さて、今回はここまでだ。これについてわかんねぇ事があったら、感想にて受け付けているぜ！！」

ヤ「それでは、また次回に」

神・ヤ・メ「さよなら～！！」

作「……はぁ、私、どうしましょ……？」

#27　VS闇の書の意思（其の四）。深い眠りの果て、それぞれの夢の中

えぇ、読者の皆さま方……更新が遅れてしまい、大変申し訳ございませんでした！！！

えぇ、詳しい理由は、後書きの方で記載いたしますので、今は謝罪の言葉を述べさせて頂きます……

本当に、すみませんでした！！！！

十六夜様、未土井無視様、緋水様。いつもご感想、ありがとうございます！！！

#27　VS闇の書の意思（其の四）。深い眠りの果て、それぞれの夢の中

――――――そして、とある兄妹（しまい）の妹は、愛しき少女を救うため、戦い続ける……――――――

……海鳴市、八神宅（？）の二階にある部屋、シグナムとシャマルの部屋……

「……！！！？」

［ガバァッ！！］

「こ、ここは……？」

見慣れた、自分と同胞の部屋……先ほど、ベッドから跳ね起きたのは、守護騎士達の長、“剣の騎士”にして“烈火の将”……シグナムであった

「……なぜ、ここに……？　私は、確か、闇の書の、管制人格と……」

戦っていたはず……だが、記憶がおぼろげにしか思い出せず、混乱していた

「……いったい、何が……ん？」

そうして、周りを見回してみると、となりのベッドで寝ているシャマルがいた……すやすやと、寝息と立てて、熟睡しているようだ

「シャマル、起きろ、シャマル」

「う、う～ん……はれ？　しぐなむ？　どうしたの……って、あれ？　なんで、私、ベッドで寝てたの？　確か……ッ！！！？」

どうやら、シャマルも思い出したようで、寝ぼけて眠たそうな顔が、一気に眠気がとれ、戦闘状態のそれに変わった

「シグナム！！　戦闘は！！？　はやてちゃんはどうなったの！！？　ビビちゃんは！！？　ヴィータちゃんとザフィーラは！！？」

「……わからない。だが、覚えている事はある。我々は、闇の書の……いや、正確には“@#の¶∇＊”だが……その管制人格と戦っていた途中で……」

そう言って一呼吸置き、思い出した事を告げた

「我々は、吸収された。としか……」

「吸収って……じゃぁ、ここは“@#の¶∇＊”の、中？」

「そう、なるな……」

だが、それなのに、このような場所にいるのか……その疑問を口にしようとした瞬間

「みんなぁ～！！　ご飯やでぇ～！！」

「早く起きて来ないと、冷めちゃうぞぉ～！！」

「「！！！！？？」」

下の廊下から聞こえた声……愛おしき主と、愛おしき家族……はやてとビビの声だった

「主と、ビビ……？」

「え？　な、なんで……？」

困惑する二人……無理もない。主のはやては自分達の目の前で管制人格にのまれてしまい、ビビは吸収されていないはず（だが、あの後に吸収された可能性を考えたが、有りえない事だと判断した）

「ど、どうしよう……？」

「とにかく、一度下に行ってみるしかない……いくぞ、シャマル」

「う、うん……」

そして、二人は近くにあったクローゼットから私服を取りだし、着替えてから、部屋を出た

普段、いつもの朝の通りに……

□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■

八神家、一階、リビング

［パタ、パタ、パタ］
「あ、おはよう、シグナム、シャマル」
「おはよ～（＾ー＾♪）」
「お、おはようございます……」
「お、おはよう、はやてちゃん、ビビちゃん……」

リビングにいたのは、リビングのテーブルに料理を並べているはやてとビビの姿だった……何気ない、いつもの朝の風景だった……だが、違っている点が一つ……はやてが、車椅子に乗っておらず、自分の足で歩いているのである

「「……」」

二人の騎士は、またも困惑した表情をしており、その顔をみた二人は

「どないしたん？　そんなビックリした顔して」
「っていうか、珍しいよねぇ、シャマルはともかく、シグナムが寝坊なんて、ねぇはやてちゃん♪」
「あ、確かに。珍しい事もあるんやなぁ」

と、楽しく談笑する二人……とそこへ

《シグナム、シャマル》
《！？　ザフィーラ！！？》

窓側で外を眺めているふりをし、二人の騎士の方を見る守護獣から念話が届いた

《ザフィーラ、これはいったい……？》
《分からぬ。俺も気付けば、ここで寝ており、しばらくしたら、主とビビの二人がここに……》

つまり、彼も何が起きているのか分かっていなかったのだった……
…そして、お互いが知りえる情報を交換しようとした時

［バタンッ！！！］
「はやてッ！！！」
「「わひゃいッ！！？」」

ヴィータが困惑と心配、驚愕の表情が混ざった顔をして、リビングに押し掛けてきた。そのあまりにも突発的な行動にはやてとビビの二人は驚き

「び、びっくりした……（@　@；）」
「て、てか、どないしたん、ヴィータ……そないな、コワい顔して？」
「も、もう大丈夫なのか！！？　管制人格から解放されたのか！！？　戦いは終わったのか！！？　それに、足……もう平気なのか！！？」
「「！！！」」

ヴィータが、その場にいた守護騎士達全員が思っていた事を、ぶちまけた。ソレを聞いたはやては、ヴィータの近くまで歩み、静かに抱きしめ、頭を撫でながら

「何言うてんの？　今はもう、戦いとか、足の事とか、そんなん考えんでええよ」

「そうそう（＾＾♪　ほら、皆席について」

そう促され、全員がテーブルに座り、そして、毎朝のように

「ほなら、いただきます」

「いっただきま～す♪」

「「「……い、いただきます……」」」

いつもの、日常の空気が、流れた……

□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■

……時の庭園、フェイトと$±＃‡の部屋……

「「……う、う～ん……？」」

そこに、ふたりの少女が、ベッドから起き上がった……

「うん……あれ？　なのは……？」

「ふえ？　フェイト、ちゃん……？」

二人の少女……“高町なのは”と“フェイト・テスタロッサ”は、

同時に目を覚まし

「あ、あれ？　私達、なんで一緒に寝てたんだろう？」
「うーん……あれ？　なんでだろう？」

いつの間にこのような状態になったのか……現状を把握するために、周りを見渡したら……知らない部屋、知らない家具、そして……

「「え……？」」
「すぅ……すぅ……」

フェイトと瓜二つの、そっくりな子が、子犬フォームのアルフといっしょに隣で寝ていたのだった……

「ふぇ、フェイトちゃん……この子……？」
「ま、まさか……？」

その時に

［コンコンッ］
「「？」」
“アリシア”、フェイト、アルフ、なのはちゃん、朝ですよ～」
「「“アリ、シア”……！？」」

その時、二人の少女は確信出来た。そう、この子は……あの時の……P．T．事件の時、生体ポッドに入っていた……フェイトのオリジナルで、“プレシア・テスタロッサ”の実の娘……“アリシア・テスタロッサ”なのだと……それともう一つ。フェイトはもう一つ気付いた事がある……今、自分となのはを含めた四人

を起こしに来た人の事を……ヤマネコの、プレシアの使い魔にして、自分を教育してくれた人……“リニス”だと……

「う、う～ん……おはよう、フェイト、なのはちゃん」

「「……」」

二人は、なぜこの子がここにいるの……？　どうして、こんな事になっているのか？　まったく、理解できていなかった

［ガチャッ］

「みんな、ちゃーんと起きてますか？」

そこへ、四人が寝ている部屋に、一人……使い魔のリニスが入ってきた。そして、カーテンを開ける為に、窓のほうへ歩いてゆく

「は～い」

「う、う～ん……眠いよう……」

「あらあら、結構夜までお話してたんですか？」

「だってぇ」

「なのはちゃんとお話してたら、いつの間にか夜更かししてしまっちゃった、と言う事なんでしょう。それでも、ちゃんと早起きしているフェイトとなのはちゃんを見習ってほしいですね。アリシアはお姉さんなんですから、年長者としての意地を見せなきゃ」

「うう……」

うなだれるアリシア……だが、そんな事も気にせず、フェイトは

「り、リニス……？」

「はい、なんでしょうか？　フェイト」

「……アリシア？」

「？」
「アルフ、さん……？」
「なんだい、なのは？」
「「……」」

困惑する二人、そんな様子を見たリニスは

「はぁ……前言撤回。どうやら今日は、フェイトとなのはちゃんもねぼ助さんのようです」
「あはは」
「さぁ、着替えてください。朝ご飯ですよ。プレシアも、なのはちゃんのお父さんとお母さん、お兄さんとお姉さんも、すでに食堂で待ってますよ」
「「！！！？」」
「「は～い」」

二人は、驚いた……かつて、自分の事を大嫌いと言った母がいる事に……自分の家族が、かつて戦ったあの悲しい瞳をしていたあの人と、一緒にいる事に……

□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■

時の庭園、食堂……そこでは、プレシアの他に、士郎、桃子、恭也、美由希の五人が、談笑しながらモーニングティーを飲んでいた

「……本当、この紅茶は美味しいわねぇ」
「ありがとうございます」
「うーん、うちでも使ってみたいけど、なぁ……」
「もう、お父さんったら」
「でも、これほどおいしい紅茶なら、結構いけるんじゃないか？」

などと、五人が今飲んでいる紅茶を称賛しながら、楽しそうに話していた……そこへ

「おはようママ！」
「おはよう、プレシア」

アリシア、そしてアルフの二人が入って来て、プレシアに挨拶をし

「おはよう、アリシア、アルフ」
「アリシアちゃん、おはよう」
「おはよう、アリシアちゃん」

プレシアが返し、桃子、美由希も挨拶を交わした

「おはようございます、なのはちゃんのお母さん、お姉さん。お兄さんとお父さんも、おはようございます」
「あぁ、おはよう」
「おはよう、アリシアちゃん」

アリシアも挨拶を返し、士郎と恭也も挨拶をした

「プレシア、困りましたよ……今日は嵐か雪でも降りそうかもしれません」
「？」
「ほら、フェイト、なのはちゃん」
リニスに呼ばれ、顔を出したのは、浮かない表情をした二人……なのはとフェイトの二人だった
「「……」」
「どうしたの？　フェイト」
「なのは、何ぼーっとしてるの？」
「変な夢でも見たのか？」
プレシアがフェイトの事を心配し、美由希と恭也が、なのはを少し茶化した……確かに、起きてそうそうこんな表情で出てこられては、他の人はこんな反応をするであろう……“昨日まで、いつも通りにしていたのなら”……
□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■
時の庭園、廊下

《……フェイトちゃん、コレ、どういう事なのかな?》
《わ、分からない……でも、これだけは分かる。ここは、私が小さい時に過ごしていた場所で……》

二人は、念話を取り合って現状を把握した……

今、二人がいる場所は、昔、フェイトが住んでいた次元空間に漂う前の時の庭園であった事。フェイトは、アリシアの妹と言う事。プレシアは、その二人の母……それも、昔の、優しかったころの……リニスは、そのプレシアの使い魔。アルフは、フェイトとアリシア、二人の使い魔という……そして、なぜなのはの家族、士郎、桃子、恭也、美由希がここにいるのかと言うと、それはなのはが短期留学中（無印の時、管理局とのジュエルシード探索時のあの期間の事）に友達になったフェイトの家に遊びに来た……と言う事に成っている

《どうして、こんな事になっているんだろう?》
《分からない……でも、これは……》

これは、自分が……こうなって欲しいと、願っていた……“夢”

《母さんがいて、リニスがいて……そして、私がいて……アリシアが、いて……なのはが、いてくれて……そして、皆が、笑って、いて……》
「つぅ……」
「！」

いつの間にか、涙が、こぼれていた。それは、悲願していた想いが、

叶っていた場所……欲しかった、温もりがある、場所……
……

「フェイト、ちゃん……」
［つぅ……］

なのはも、親友の涙の意味を、知り、己も涙が流れた……友達の願いが、叶ったという事……友達が、為せなかった事が、このような形で、成就する事が……例えそれが、本当の“※Φ”であったとしても……

二人は、暫くの間、共に涙を流していた……周りがそれに気づき、宥めている間も……ずっと、ずっと……

□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■

……？？？

「……う、う～ん……？　ここは、どこや……？」

何も無い、真っ暗な空間……そこには、闇の書の意思に呑まれていた“本物”のはやてがいた

「……眠い……めっちゃ、眠い……」

まどろんでいる中、目の前に、誰かがいた……しかし、眠たさから来る目眩か、ぼやけていて、はっきりと見えなかった……

「……（だ、誰……？）」

はやては、目の前の女性が誰なのか、分からなかった……そして女性は、口を開いた

「そのままお休みを、我が主。あなたの望みは、全て私が叶えます。目を閉じて、心静かに、夢を見てください……」

「……？」

優しく、どこまでも心に響くような声でささやかれ、はやては再び、まどろみの中に、落ちそうになって行った……

□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■

“現実の”海鳴市……強層結界内

戦闘は、海上に移っていた

［ガキィィィィィィンッ！！！！　ガキィィィィィィィィィンッ！！！！］

「ッ！！！！」

「……」

「ヤアアアアアアアアアアアアッッ！！！！！！！」

［ガキィィィィィィンッ！！！！　ガキィィィィィィィィィンッ！！！！　ガキィィィィィィンッ！！！！　ガキィィィィィィィィンッ！！！！］

結界内を飛翔する、白と黒の軌跡……セイバー・リリィの姿となったビビと、闇の書の意思が飛び交いながら、空中で何度も激突と交錯を繰り返しているのだった。ビビは、不可視の剣を……闇の書の意思は、己を守る騎士の一人の剣、“レヴァンティン”を……お互いが持つ刃を、絡ませていた

「ハッ！！！！」

「ッ！！！！」

［ガキィィィィィィィィィ

闇の書の意思の言った事に反論し、己の持つ不可視の剣を持つ力を強め

［ガキィィィ

「ッ！！！！」

巨大な鉄球……おそらく、ヴィータの“コメートフリーゲン”だろうか？　それがビビに向かって飛んできた。が

「フンッ！！！」

［ザンッ！！！］

鉄球を一刀両断し、斬られた事で消滅した……だが。その背後では

［ギュイィィィ

それに対抗し、ビビが取りだしたのは、聖剣エクスカリバーの本当の鞘……“全て遠き理想郷（アヴァロン）”。有りとあらゆる攻撃、交信を遮断する、最強の守りの宝具である

［ズガガガ

呆気なく、天地を切り裂く程の砲撃を……最高の防御力で、難なく防ぎきったのであった

「（さて、相手はまだ健在か……はやてちゃんが覚醒してくれるまで、エクスカリバーぶっ放しても意味ないし……仕方ない、か）」

ビビは、冷静に状況を分析し、そして再びに構え直した

「（ふぅ……さて、もう少しふんばるか）」

気だるそうに……そして、どこまでも無感情に、ビビは、相手を睨みつけた……

それが、ビビの本気（マジ）。常のあのチャラけた雰囲気が消えた、兄（あね）であるグレイに似た、全てを射殺す眼光を宿した姿だった……

#27　VS闇の書の意思（其の四）。深い眠りの果て、それぞれの夢の中

神「さて……処刑と行くか、えぇ？」

作「はい……」

ヤ「どうして、更新が、こんなにも、遅れて、しまったの、かしら！！！？」

メ「丸11日……何してたの？」

作「えぇっと……学校の方で、色々と行事に引っ張りだこに遭い、そして実家に帰るから、レポートや試験の資料集めに奔走していたり、部屋の片づけや掃除してたり、まわりから強制的に遊び回されたりで……そのたびに、疲れ果てて……」

メ「つまり、パソコンの前にいる時間帯が少なかった、と？」

作「そんで、今回のなのフェイのシーンの構想が全然決まっておらず、それで……」

ヤ「執筆にてこずったから、というわけね」

作「はい……」

神「ふん、軟弱者が。遊びわされた事なら、断ればよかろうに」

作「無理っす。なんか、極道みたいな人が同期にいて、その人に言われたから……」

メ「断れなかった、と？」

作「ホント、周りに恵まれていないです……」

ヤ「あっそ」

作「かなり遅れてしまって、本当にもうしわけありませんでした！！！」

神「はぁ……とりあえず、もう帰れ」

作「え？　もう帰れって？　って、ワアアアアアアアアアアアアアアアア！！！！？？」

神「まったく、あのダメ作者が」

ヤ「ホントですわよ」

神「さて、気を取りなしていくか」

～～～神の舞台裏～～～

ヤ「ところで、今回のテーマはなんですの？」

神「ふむ……さっき言った、アレで行こう」

――――なのはとフェイトの描写について――――

神「だ！！」

ヤ「これは、あの二人の出番が少ないから、その救済措置ということでやったらしいわ」

メ「まぁ、メインの二人に、はやてと守護騎士がほとんどよね、この作品」

神「そんで、内容に関してだが……あれは原作のフェイトの夢をモチーフにしたもので、フェイトの夢を闇の書が再現した、ということになっております。そして、なのはの夢というのは、あまり原作にも描写が無かったので、独断と偏見で、“他人の幸福”が、彼女の夢という事にして、あんな感じになったんだと」

ヤ「なるほどねぇ……」

メ「完全に原作の場面をオリジナル要素詰め込むのは、結構難しいのね……」

神「まぁ、な……とりあえず、こんなモンかな」

メ「今回は、更新が遅れてしまい、重ねてお詫びいたします」

ヤ「今後は早めに更新させるようするから、それでお許しください」

神「それでは、また次回に！！」

神・ヤ・メ「さよなら～！！」

作「さて、と。次話の製作に取り掛かるとしますか」

＃２８　ＶＳ闇の書の意思（其の五）。愛する気持ち……届けこの想い

皆さま、お待たせいたしました

やっと、ＶＳ闇の書の意思編が終了いたしました

一話はさんで、やっと防衛プログラム戦となりますので、お楽しみに

十六夜様。ご感想、本当にありがとうございます！！！

#２８　ＶＳ闇の書の意思（其の五）。愛する気持ち……届けこの想い

――――そして、とある兄妹（しまい）の妹は、愛しき少女を救うため、戦い続ける……――――

……闇の書、深部

そこは、深い深い、眠りの中……はやては、眠りに着くかつかないかの、境界線にいた

「私は、何を、望んでたんやったっけ……？」

「夢を見る事。悲しい現実は、全て夢になる、安らかな眠りを、我が主……」

優しく、自分に言葉を掛ける女性。その言葉は、まるで子守唄のような雰囲気に似ていた

「そう、なんか……？」

だが、その子守唄は……その言葉は、本当に自分が望んだ事なのか……？　それは、今の自分が、願った事なのか……

「私の、本当の、望みは……」

疑問が、生まれた……

□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■

夢想の海鳴市、八神宅、リビング

八神家は、朝食を食べ終え、片付けも終わり、リビングで家族の会話に花を咲かせていた

「んでなぁ、その時にビビちゃんが」

「は、はやてちゃん!!　それは言わないや～く～そ～く～!!（TーT）」

「あはははっ！」

楽しく笑い合う二人……だが、その光景を見ていても、守護騎士達の気持ちは、やわらぐことは無かった……この、異様な光景が、あまりにも不自然だったから。あまりにも、いつもの空気では、無かったから……

「あはは……ん？　どないしたん、シグナム」

「あ、いえ……」

「ヴィータちゃんも、いつもなら絡んでくるのに……どうしたの

？（？―？）」

「あぁ、えっと……」

先ほどから、このような回答しかできなかった……だが、守護騎士の長は、その循環を断った

「……主、一つよろしいでしょうか」

「ん？　なに、シグナム」

「我々は、闇の書の意思と……管制人格と戦っており、その最中、闇の書に吸収され……気が付いたら、ここにいたのです。もしかしたら、ここは、闇の書の中なのでは……？」

「「「……」」」

守護騎士たちは、直球すぎる質問に何の異を唱えなかった。そして、“偽り”の主は

「……せや。シグナムの言うとおり、ここは闇の書の中。うちは、ニセモン」

「私も、ね」

「「「「……」」」」

あっさりと答えた。そして、ビビも、自分もそうだと伝えた……

……

「ここは、皆が望んだ……欲しかった、願い……それが、具現化した世界……つまり、夢の中や」

「夢の、世界……？」

シャマルが、この場所の名を、自らの言葉で、認識した

「そう。ここでなら、皆と一緒にいられる。皆と、楽しく過ごせる。皆が、戦わず、ずっと、ずーっと、一緒にいられるんだよ」

「「「「「……」」」」」

守護騎士たちは、黙り込んでしまった。この、悪魔のような誘惑に、答えるか否か……それを、考える為……だが、答えなど、とうに決まっている

それは……

□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■

時の庭園、外庭……

「ふんふふ～ん♪」

そこで、昼下がりの陽だまりの中で、読書をするアリシアと、木の下でその様子を見つめるフェイトの姿がいた。だが

「あれ？」

［ゴロゴロゴロッ……！！］

遠くの空から、雷鳴が響き、雨雲が近付いてきていた

「雨になりそうだね。フェイト、帰ろう」

「……」

アリシアの言葉に、フェイトは答えず、その場で虚空を見上げていた。その間に、雨がぽつぽつと振りだしていた

「？　フェイトってば」

「ごめん、アリシア。私はもう少し、ここにいる」

「そうなの？　じゃぁ、私も！」

［タッタッタッタッタッ］

「一緒に、雨・宿・り♪」

そう言って、フェイトの隣に座るアリシア。その時には、雨は小降りではに位に振りだしていた

［ザアアアアアアアアッ……！］

「「……」」

雨が降る中、木の下で雨宿りえをするフェイトとアリシア。だが、二人の間に会話は無く、沈黙が続いていた……だが、その沈黙を、フェイトが破った

「ねぇ、アリシア。コレは、夢、なんだよね」

「……」

「私とあなたは、同じ世界にはいない。貴方が生きてたら、私は生まれなかった」

「……そう、だね」

「母さんも、あんなに、優しくは……」

「……優しい人だったんだよ。優しかったから、壊れちゃったんだ」

死んじゃった自分を、蘇生させる為に……かの大魔導師は、その身を狂気に染めたのだと……

「……うん……」

その返答は、あまりにも深く、暗かった。それは、自分の親が、自分が知らない子を誰よりも愛していたという事に対して、嫉妬に似た、感情……例えその子が、自分を生みだした元となる存在だとしても……

「ねぇ、フェイト。夢でも、いいじゃない。ここにいよ、ずっと一緒に。私、ここでなら生きていられる。フェイトのお姉さんでいられる」

母と、使い魔の二人と……皆と、一緒にいられる……自分が、望んでやまなかった、今はもう、叶う事が出来ない、儚き夢……

「……」

「フェイトが欲しかった幸せ、皆あげるよ」

確かにソレは、フェイト・テスタロッサという少女にとって、最も欲しいモノ。今や天涯孤独の身となった、自分にとって、それは……だが、少女はもう、決意を固めていた

□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■

時の庭園、客間

「あぁーあ、今日で帰っちゃうのかぁ。なんか名残惜しいかも」
「お前よりも、なのはの方が名残惜しいだろう。また親友と離れ離れになってしまうんだからな」
「お店の方も、いつまでもお手伝いさんに任せきりにするのも、あれだからな」
「ちゃんとお土産も持って帰らなきゃね」

そういいながら、荷物をまとめているなのはの家族達。だが、その部屋の一角で荷物をまとめているなのはは……

「……」

俯きながら、ゆっくりとした動きで、荷物をまとめていた

「ん？　どうした？　なのは」
「ふえ？　う、ううん、なんでもないよ」
「お別れが淋しいの？　だったら、荷物まとめるのは私達がするから、フェイトちゃんの所に行って来なさい」

そう言って、自分に微笑みかける母……だが、これは“本当の母

”ではない

「……お母さん」

「ん？　なぁに、なのは」

「あ、なの……これは、夢、なんだよね。私の……ううん、私じゃなくて、フェイトちゃんの、夢、なんだよね……」

「……」

桃子は、黙ってしまった……だが、その表情には、穏やかな笑みがあった

「……えぇ、そうよ。ここは、フェイトちゃんの夢。フェイトちゃんが、望んでた事」

「でも、私の夢じゃ、ないんだよね……」

「！？」

桃子は、目を見開いて、驚いた。自分の娘が……否、ここでは自分は夢想の中の住人。彼女の母親ではない。だが、ここでは、彼女の母親役をしている。だから、目の前の子が、今はたまらなく愛おしい。娘のように……だから、今彼女が悲しんでいる事を、彼女はどうにかしてあげたいと思っている……そして、先ほどの言葉……

――――「でも、私の夢じゃ、ないんだよね……」――――

つまりこれは、自分には夢が、こうありたかったという夢が、無い事を意味する

「……ごめんね、私、こんな、夢の無い子で……ごめんね……

……」

「なのは……」

そして、二人の間に、沈黙が流れた……

□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■

闇の書、深部

「私が、欲しかった幸せ……？」

「健康な体、愛する者たちとの暮らし。眠ってください。そうすれば、夢の中で、貴方はずっと、そんな世界でいられます」

自分の目の前にいる女性は、主たる少女を、眠りへといざなって行く。だが、その言葉を聞いた、少女の出した結論は

「……フル、フル」

「……でも、それは唯の夢や」

□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■

現実の海鳴市、結界内、海上

［ガキィィィィィィンッ！！！！　ガキィィィィィィィィィンッ！！！！！］

未だに、この空域の戦闘は続いていた

「ヤァッ！！！！！」

「ッ！！！！！」

［ガキイイイイィィィィィィィィィ

お互いが、柄を握る力を込め、互いに押し出されていた

「クッ……こう、なったら！！」

［スッ］

ビビは、その場に留まり、剣を振りかぶり

「“風王鉄槌（ストライク・エア）”ッ！！！」

［ブワアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアッッッ！！！！！！］

「ッ！！！」

『パンツァーシルト』

突如巻き起こった突風に、闇の書の意思は防御壁を展開させ、攻撃を防いだ。そして、見えた

「（あれは……）」

見えたのは、黄金に輝く剣……風王鉄槌（ストライク・エア）を放った事により、隠されていた聖剣が、その姿を露見させてしまったのだ。だが、闇の書の意思が考えたのは、聖剣ではなく、それを隠していたモノ……

「つまり、あの風は、あの剣を隠すための、鞘」

そうならば、自分の持つあの能力で、“作れる”

「ッ、防いだか……やっぱり、もう少し威力を上げた方が良かったかしらね……」

そう言っている間に、闇の書の意思は、その手に、不可視の鞘を作りだしており

［ブワッ！！］

「え……？」

今、己が持つ剣、“レヴァンティン”を納めた。それにより、炎の魔剣は、不可視の剣となった

「これで、互角だ」

……やっぱ。迂闊に手の打ち見せちゃったから、コピーされちゃったし。でも、コピーしたのが、エクスカリバーじゃなくて、風王結界（インビジブル・エア）？

なぜ、鞘の方を錬製したのか……だが、ソレの答えは直ぐに分かった

「“飛竜、一閃”」

［ザンッ！！！］

「……え？」

き、斬られ、た……？

「……」

ま、まさか……風王結界を選んだ理由って……これ？

不可視の、連結刃

「さて、これで私が有利か……さぁ、お前も、眠るといい」
［ザンッ！！！！！］
「グゥウウッ！！！？」
う、迂闊だった……まさか、こんな手を考えてくるなんて……ッ！！
「負ける、もんか！！！」
現実の戦いは、更に熱を増すばかりであった……
□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■
闇の書、深部
「私、こんなん望んでない。あなたも同じはずや。違うか？」
自分の望んでいるのは、そんな幸せではない。夢の中で得られるモノでは、ないと。それは、目の前にいる女性も、同じなのではないのか、と……
「私の感情（こころ）は、騎士達と深くリンクされます。だから私も、貴方の

事を愛おしく思います。だからこそ、貴方を殺してしまう、自分自身が許せない」

「……」

少女は、目の前の女性の言葉を、聞いていた。深く、鋭いナイフに貫かれるような、痛みと共に

「自分ではどうしようも出来ない力の暴走。貴方を侵食させてしまう事も、暴走して、貴方を食らいつくしてしまう事も、止まらない……」

女性は、自分の罪を、懺悔のように、言っていた。自分は、呪われている。だから、何も救えない。最愛の、主すら……そんな自分が、唯一できるのは、せめて夢の中で、自分の願いを、叶えてあげるしか、ないのだと……

「……覚醒の時に、今までの事少しは分かったんよ……望むように生きられへん悲しさ、私にも少しは分かる。シグナム達と同じや。ずっと悲しい思い、さびしい思いしてきた……」

「……」

少女は、自分も、彼女達と……あなたとも同じだと、伝えた。それでいてなお、少女の瞳に、強い意思が宿り始める

「せやけど、忘れたらあかん」

［グッ……］

「!?」

足もろくに動かせない、それなのに、少女は今乗っている車椅子の肘掛を握り、力を込めて

［スッ］

腕を伸ばし、女性の頬に、触れた

「マスターは今は私や。主の言うことは、ちゃんと聞かなあかん」

［キィィィィィィィィィンッ］

暗い空間に、真白く輝く魔法陣が、その世界を照らし出した

□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■

時の庭園、外庭

［ザアアアアアアアアッ……！］

雨が降る中、フェイトとアリシアは、お互いに向き合っていた

「ごめんね、アリシア。だけど、私は、行かなくちゃ」

「……そう……」

しょんぼりと、顔を落とすアリシア。だが、それは分かっていた事

なのか。彼女はポケットからある物を取りだす

［スッ……］

「！！？」

それは、金色に輝く、三角系の形をした宝石……フェイトのデバイス、“バルディッシュ”だった

「「……」」

フェイトは、それを何も言わず、受け取った。アリシアも、何も言わずソレを渡し、そのままフェイトに抱きついた

「……ありがとう。ごめんね、アリシア」

「いいよ。私は、フェイトのお姉さんだもん」

その時、アリシアの体が、少しづつ、光となって行くのを、フェイトは見てしまった。彼女は、これ……バルディッシュを渡すために、この世にいたのか、と

「待ってるんでしょ。空に輝く、満天の星空のような、明るくて優しい子と、素敵な微笑みをする、強くて、かっこいい子が」

なのはと、ビビが……

「……うん」

フェイトは、その問いに答え、アリシアの顔を見つめた。その時には、アリシアの体は、半分以上が、光となって消えていた

「じゃぁ、行ってらっしゃい、フェイト」
「うん」
「現実でも、こんな風に、いたかったな……――――――」
そうしてアリシアは、光となって、消えて行った……
「……」
フェイトは、アリシアの最後を見届けると、踵を返し、名残惜しく、その場を去った
□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■
時の庭園、客間
「「……」」
なのはと桃子。二人の間に沈黙が訪れてから、数分が経っていた……
「（私は、この子になんて言ってあげたらいいのかしら……本物の高町桃子は、いったいなんて言ってあげるのだろうか……？）」

どうしたら、この子は明るく、元気になってくれるのだろう……
そればかりを、考えていた

「……なのは、あのね「大丈夫だよ」え……？」

だが、声を掛けようとしたら、少女のほうから、声がかけられた

「私は、大丈夫だよ。夢は、自分で見つけるモノだから……今は、なにも無いのかもしれないかもだけど、いつか、ちゃんと見付けるから……だから、心配しなくて、いいよ」

「……」

この子は、なんて強い子なのだろう。まだ、１０才にも満たない、こんな、幼い子が……

「……そう、分かったわ……じゃぁ、コレは返さないとね」

［ゴソゴソッ］

「？」

そう言って、彼女のポケットから取り出したのは……赤い、球体の宝石のようなモノ

［キィン……］

「“レイジングハート”……」

少女の相棒のデバイス、魔導師の杖、不屈の心、“レイジングハート”

「預かっていたけど、もう、その必要もないわね……」

「お母さん……」
「行ってきなさい。あなたの夢を、探す旅に」
「……はい！！」

そう言って、夢想の母親から、レイジングハートを受け取り

「頑張りなさいよ、なのは」
「お姉ちゃん……」
「行って来い、なのは」
「お兄ちゃん……」

夢想の兄と姉からの励ましを受け

「決して、諦めるな、なのは」
「……はい！　お父さん！！」

夢想の父親と約束し……

「……それじゃぁ、行ってきます！！」
「ええ」
「おう」
「うん」
「ああ」

夢想の家族に見送られ、少女は、駆けだしていった……自分の夢を、見付けるために……

□■□■□■

はこうやって、見送れる事が出来るんや」

夢想の主は、優しく微笑んで、それぞれの言葉を贈った……

「……それでは、失礼いたします」

シグナムが、頭を下げ、それに倣い、残り三人の騎士達も、頭を下げた

「うん、行ってらっしゃい、皆」

「またね。シグナム、ヴィータ、シャマル、ザフィーラ」

二人の少女は、手を振って、見送った……

「タッ、タッ、タッ、タッ、タッ、タッ」

そして、少し歩いた後、四人の騎士たちは、夢想の我が家へと視線を向けた。そこには、未だに手を振る二人の少女がいた

「……我々も、甘い夢を見たモノだな」

「えぇ……でも、これはきっと、夢じゃないわ」

「あぁ。夢になんてさせねぇさ、絶対に！」

「この夢を、実現させる……それが、我らの今の使命！」

四人の騎士たちは振りかえりながら、その身に甲冑を纏った

「戻るぞ、主とビビ……家族の元へ！！！」

「おう！！！」

「はい！！！」
「うむ！！！」

騎士たちは、光に包まれて、消えて行った……

□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■

現実の海鳴市、結界内、海上

「はぁ、はぁ、はぁ……」
「ッ……フゥ……」

戦闘は、一度はビビが見せた優勢が、今や逆転されていた。風王結界（インビジブルエア）を纏った“レヴァンティン”の“シュランゲフォルム”の攻撃に、苦戦を強いられていたのだ

「はぁ、はぁ、はぁ……ッ、こんな事に成るんなら、“ストライク・エア”なんて出すんじゃなかった」

肩で息をし、明らかに疲れている様子を見せるビビ。だが、表情は未だに勝てると言う自身に満ちたモノだった

「……なぜだ……なぜ、お前は、そこまで戦える……なぜだ……」

闇の書の意思は、疑問に満ちていた。いくら攻撃しても、致命傷とも言える攻撃を何度も繰り出し、そしてそれに何度か直撃を喰らっているはずなのに……相手は、一向に戦意を落とさず、何度も自分に向かってくるのだった

「なぜ、なぜ……なぜ、そこまで出来るのだ？」

「なぜか、ねぇ……」

ビビは、構えを解き、両腕を垂らした……その手には、武器は握られていない

「そんなの、決まってるよ……好きだから」

「？」

「はやてちゃんの事が、好きだから。ううん、はやてちゃんだけじゃない。シグナムも、ヴィータちゃんも、シャマルも、なのはちゃんも、フェイトちゃんも……そして……」

「スッ……」

「？」

「……あなたも」

ビビは、右手を胸に当て、左手を彼女の方に差し出した。それは、告白のような、そんな風に、ビビは告げた

「……好き、だと……私の、事が、好きだと……？」

彼女は、困惑した表情で、ビビを見つめた。いきなり好きだと言わ

れ、頭の中が混乱しているようだった

「うん。私は、貴方の事も好きだよ。闇の書……ううん、“夜天の魔導書”」

「……」

“夜天の魔導書”。それは、彼女の、本来の名前。彼女が狂ってしまう、前の姿

「貴方自身には、もっと素敵な名前が似合うと思うけど、それは、私が言う事じゃないし」

そう言って、ビビは、彼女の方へ、近寄った

「！　来るな」

［シュッ！！！！］

彼女は、今相手が自分に近付けば、自分は崩れる。ソレを直感のように感じ取り、接近を阻止しようとした。だが

［ザシュッ！！！］

「グゥッ！！！……ッ！！！」

それでも、彼女は徐々に近付いてきた。攻撃しても、その進行を防ぐことはできなかった

「ッ！！！」

［シュッ！！！］

［［［［［ザシュッ！！！］］］］］

「グウゥゥッ！！！！……ッゥ！！！」

何度やっても、無駄だった……いくら攻撃しても、彼女は止まらなかった……そして

［ギュッ］
「！！？」
「えへへ、つっかまーえた？」

近付いてきたビビは、彼女に抱きついた。その身に纏う純白のドレスは、所々が破れかかっており、ビビの血で赤く染まり、酷く、ボロボロだった……

「は、離せ」
「やだ。絶対に、離さないよ」
［ギュゥ］

ビビは、彼女を抱く力を強め、絶対に逃がさないようにしていた

「っ……なぜ、なぜ、私を……」

――――何故私を、好きになど、なったのだ……？――――

「う～ん……一目惚れ、かな？　憧れ、みたいな、そんな感じ」

それは、彼女が転生前に思っていた、些細な気持ちだった

「最初は、そうだった。でも、今の気持ちは、そんな甘ったれなモノとは、全然違う」

それは、彼女がはやてと出会い、シグナム、ヴィータ、シャマルと出会い、なのは、フェイト、すずかやアリサと出会った事で、感じた気持ち……

「幸せに、してあげたい。この人のためなら、私は何だってしてあげたい。悲しい過去を持っている、貴方を、うんと喜ばせたい。楽しく、生きて欲しい。心の底から、幸せに、なって欲しい……」

それは、安っぽい感情ではなく、心の奥底から来る、相手を想う、愛という、感情

「私は、それがしたい。私の手で、貴方を、幸福に満たしたい。それが、今の私の気持ち」

「……」

ビビは、秘めていた想いを、ぶちまけた……酷く、自分勝手な理由……“自分が、彼女の為に何かをしたい。例えそれが、彼女の迷惑だとしても、それでも、自分が彼女を幸せにするんだ”という、気持ちを……

「……」

彼女は、黙っていた……無理もない。彼女は、このような事を、一度も言われた事がない。それに関する知識も、無い。だから、こんな時はどうすればいいのか、分かるわけがない

そして、唐突に声が聞こえた

《この声……まさか、ビビちゃん？》

「！！？　はやてちゃん！！！？」

聞こえてきたのは、彼女が一番に愛している少女……夜天の魔導書の主、八神はやての声であった

《なんや、あったかいのに抱かれてるなぁと思たら、ビビちゃんやったんや》

「もう、大丈夫なの？」

《うん、うちは平気や。なんとか、魔導書本体からコントロールは奪い返せたんやけど、自動行動の防御プログラムが動いてて、こっちからは全く動かせへんねん。その子が動いてる限り、管理者権限が使えへんねん》

あぁ、コレは原作通りだね。だったら

「安心して、はやてちゃん。私が、なんとかしてあげる。だから、少し、ていうか、かなりかも知んないけど……痛いの、我慢できる？」

《う、うん。うちの事は気にせんでええから》

「うん、分かった……直ぐに、助けてあげるね」

そういって、ビビは彼女から身を離し

「やっと、貴方の苦しみが解放される……だから、じっと、してね……ね」［ニコッ］

「ッ……／／／」

と、ビビが浮かべた笑みを見た時に、彼女はなぜか頬がアツくなったのを感じた。でもビビはその様子に目もくれず

［バッ！！！］

距離を取り、武器を……不可視の鞘に納めし聖剣を取りだし、構えていた

「さて……一気に決めるわよ！！！」

［ブワァァッ！！！！］

そう叫んだ後、不可視の剣に覆われていた風が消え去り、彼女の手には、黄金に輝く剣が握られていた。その剣こそ、不可視の鞘に納められし聖剣。星が鍛えた、神が造りし武装……約束すべき勝利（エクスカリバー）の剣

「（次のフルボコの為に、力は半分程度は残しておかないと……だから！）残りの力、有りたっけを全部、この一撃に懸ける！！！！」

［グッ！！］

聖剣を握る手に力が入り、ビビは、聖剣を振りかぶった

「ウオオオオオオオオオォォォ

そこへ、ビビは自分の魔力を聖剣へと流し込み、一撃で決めようとした。だが

［［［ザパァァァァンッ！！！］］］

海から、三本の触手が伸びてきて、それらがビビの方へと向かって行った

「（それぐらい、分かってたわよ！！）」

ビビは、聖剣を振りかぶったままの姿勢で、己が持つ軍勢を呼びだした

「さぁさぁおいでなさい！！！“煉獄の七姉妹”よ！！！！」

［［［［［［［ウォンッ］］］］］］］

「「「「「「「煉獄の七姉妹、ここに！！！」」」」」」」

呼びだしたのは、最も信頼のおける姉妹達……七人の家具

「皆！！　私がでかいのを当てるから、その邪魔をさせないようにして！！！」

「「「「「「「はい！！！　お嬢様ッ！！！」」」」」」」

［［［［［［［バッ！！！］］］］］］］

七姉妹達は、襲ってくる触手を、手に持つ魔力刃で捌いて行った。

その間に

［カアアア

オオオオ

闇の書、深部

「名前を上げる。もう闇の書なんて言わせへん。私がさせへん。私は管理者や、だから、私にはそれが出来る」

「……」

そう言って、少女は、微笑みながら、彼女に……夜天の魔導書に、新たな名を送る

「……夜天の主の名のもとに、汝に新たな名を送る。強く支えるモノ。幸運の追い風。祝福のエール」

――――――“リイン、フォース”――――――

そして、暗い空間は、光の世界へと転じた

□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■

時の庭園、大広間

今は、誰もいない場所。そこへ、二人の少女が、その部屋の沈黙を破った

［［タッタッタッタッタッタッタッ！！］］

「！！　フェイトちゃん！！」「！！　なのは！！」

二人の少女……高町なのはとフェイト・テスタロッサが、そこで再び出会った

「……フェイトちゃん、ここから脱出しよう」

「うん、なのは」

そう言って、二人の少女は既に起動していたデバイスに語りかけた

「レイジングハート、“エクセリオンモード”、耐えられる？」

『はい、マスター』

「ありがとう、レイジングハート」

「バルディッシュも、“ザンバーフォーム”、行けるよね？」

『イエス、サー』

「うん、良い子だ」

それらの相棒は、主の命に忠実に従い、少女達の防護服（バリアジャケット）を展開させた

「「……」」

そして、二人の魔導師は、自らに秘められた力を、解放する

「レイジングハート、“エクセリオンモード”、ドライブ」
『イグニッション』
［ガシャンッ！　ガシャンッ！］
［ガシュッ、ガキンッ！！］

「……ッ！！」
『“ザンバーフォーム”』
［ガシャンッ！　ガシャンッ！］
［ガギギッ、バリィッ！！］

フルドライブモード、使用者の力を限界近くまで引きだす形態。それらを展開し、二人は、構えた

「行こう、なのは！！！」
「うん、フェイトちゃん！！！」
［［ガシャンッ！　ガシャンッ！　ガシャンッ！］］

二人は、お互いの残りカートリッジ全てをロードし

［ギイイイ

「ッ……チャージ、完了。フィールド形成、完了！！　おっきいの行くよ！　フェイトちゃん！！」
「うん！！！」
互いに声を掛け合い、打ち出す魔力を、攻撃の力へと転じた
「「Ｎ＆Ｆ！！　空間殲滅コンビネーション！！！　“ブラスト・カラミティ”ッッ！！！！！！」」
［ギイイイ

［ピキリッ！！！　パキィィィ

ていた

「これ、ぐらい、かな……皆ッ！！　戻って！！！！」

七姉妹達を引かせ、聖剣を握る手を、更に強め

「ウオオオオオオオオオオオォォォ

オオオオオオオッッッッッッッッッッ！！！

彼女は、膨大な光に包まれて、強烈な光を放って、爆発した

［ビキリッ！！　バキンッ！！！！」］

それと同時に、黄金の聖剣は罅が入っていた場所から砕け散り、その刀身は、粉々になっていった。そして、聖剣が放つ光は、霧散していった

「はぁ、はぁ、はぁ、はぁ、はぁ、はぁ……」

肩で息をするビビ。そして、折れた聖剣を見た

「……無茶させて、ごめんね。これからは、こういう事は無いようにするから……」

折れた聖剣に謝罪し、ビビは、ベアトに神魔憑依（アバター・オブ・リンク）の解除を命じ、その場で、光の膨張を見て

「……ねぇ、ベアト」

『なんだ、主』

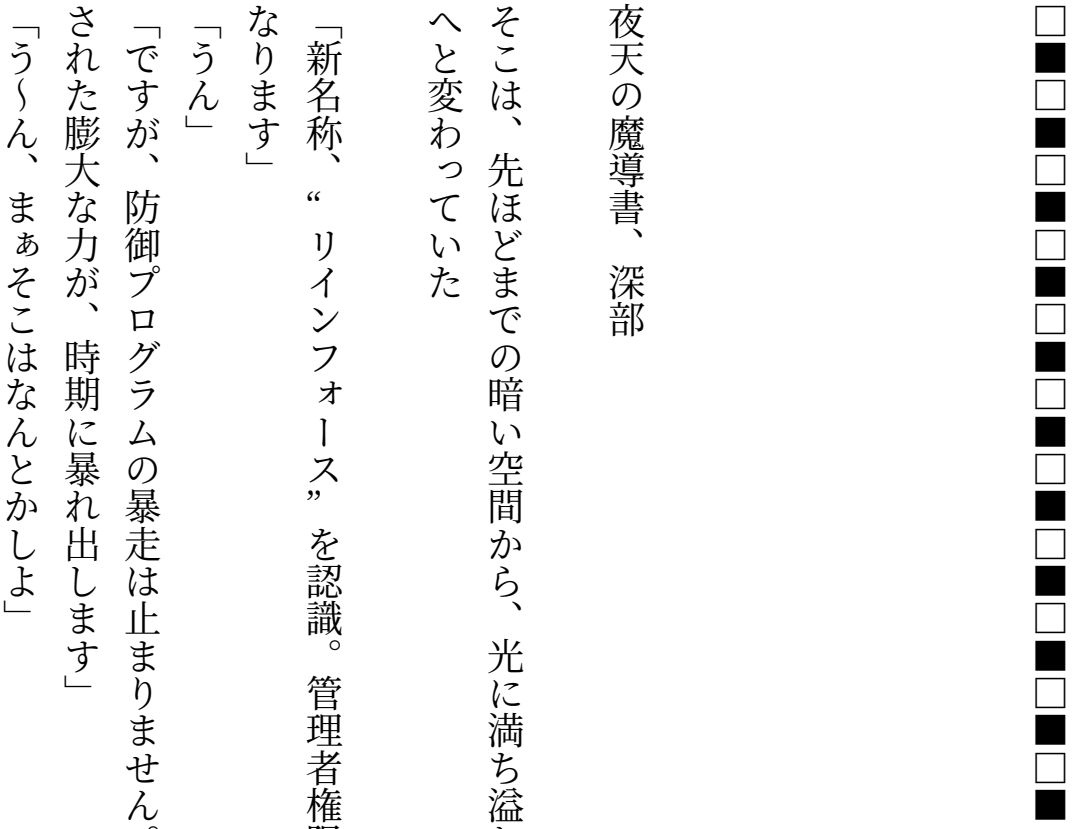
「やり過ぎ、ちゃったかな（-＿-；）」

『……知らぬ』

今までの、百合スキー且つ、変態で変態で変態な妹に、戻った。大事なことなので、さっきは三回も言ってしまったのは、無視してください

「言い過ぎよ！！！」

……このやり取り、久々に感じます……



夜天の魔導書、深部

そこは、先ほどまでの暗い空間から、光に満ち溢れた、優しい空間へと変わっていた

「新名称、“リインフォース”を認識。管理者権限の使用が可能になります」

「うん」

「ですが、防御プログラムの暴走は止まりません。管理から切り離された膨大な力が、時期に暴れ出します」

「う～ん、まぁそこはなんとかしよ」

［キィンッ］

目の前に現れた魔導書……リインフォースを抱き、少女は、夜天の空へと羽ばたく

「行こか、リインフォース」

「はい、我が主」

少女はこの時を以て、最後の夜天の主となった……

#２８　ＶＳ闇の書の意思（其の五）。愛する気持ち……届けこの想い

～～～神の舞台裏～～～

神「さて、今回はえらく遅いな……時間帯的に」

ヤ「文字数も、一万字超えてるし……まぁ、頑張ったのね」

メ「友人と遊びに行ったり、家族と旅行したりと、あまりパソの前にいなかったのに……」

神「さて、今回のテーマはこれだ！！」

――――――なのはを闇の書に吸収させた動機――――――

神「だ！！」

メ「これまた、前回と似たり寄ったりなテーマね」

ヤ「では、そんなことをいったから、今回はメイリンに説明願おうかしら？」

メ「分かったわ。えっと、動機は、ビビと闇の書の意思とタイマンさせたかったから。と、“ブラストカラミティ”をどっかに入れたくて、ここになら丁度いくね？　空間攻撃だし。って理由で入れた。だって」

ヤ「た、淡々と答えますわね……」

神「しかし、そろそろこのメンツで運営していくのがしんどくなってきたな……」

ヤ「まさか、作者を！！？」

神「いや、んなわけない」

メ「（きっぱり言ったわ、この人）」

神「俺の嫁から一人、本編に出した後に、ここに加えようかと思う。だから、それまでは俺ら三人でやってくぞ」

メ「はい！！　お兄様！！」

メ「で、誰を入れるの？」

神「そこで、今回はなんとこんなこともするぜ！！！」

――――――この神の舞台裏の新メンバー――――――

神「これを、読者の皆様方から、リクエストで応えるという、試みだ！！　ちなみに、参加人数は以下の六名！！」

“真・恋姫？無双”の“孫策”

“馬超”

“ＳＨＵＦＦＬＥ！”の“時雨亜紗”

“メル・ヘブン”の“スノウ”

“天空のユミナ”の“黒河雲母”
“神楽那由他”

神「以上から、読者の方々に選んでいただきたい！！！」

メ「ちなみに、“真・恋姫？無双”の二人は、私みたいにここでは真名で呼ばれるから、そのつもりでね」

ヤ「たくさんのご応募、お待ちしておりますわ」

神「期限は、来週７月２０日までだ！！　期間長いから、気長に考えてくれ！！」

ヤ「それでは皆様がた、今回はこの辺で失礼いたしますわ。では」

神・ヤ・メ「さよなら～！！」

――――――収録後――――――

ヤ「そういえば、一人たりませんわよおね。あいつが」

神「あいつはアイツで特別に出番作ってあるから、その時にだってさ」

メ「な、なんで？」

神「そりゃぁ、俺の一番の嫁だから」

メ「あぁ、そう……」

ヤ「なんだか、悔しいですわ……！」

作「結局、復活は無いんですね、分かりました」

#２９　闇の書の闇、現る……って、なぁにこれぇ……？（前書き）

いよいよ、次回から闇の書の闇戦です！！！

本当、ここまで来るのに、かなり長い道のりでした……

A、s完結まであと少し、気合いを入れて参りたいと思います！！

緋水様、未士井無視様、堕ちた聖騎士様、十六夜様。いつもご感想、ありがとうございます！！！

#２９　闇の書の闇、現る……って、なぁにこれぇ……？

――――――そして、とある兄妹（しまい）は、あまりの想定外の事態（怪物）に出くわす。が……――――――

第９７管理外世界、地球、衛星軌道上にある大型の船……次元航行艦、アースラ。内部、転送ポート前

「はぁ、随分と長くかかったのね」

「仕方がない。今回のあの結界は、まったく分からない理論で出来てたんだ。貴方が渡してくれたデータがなければ、解析は出来なかった」

そこにいるのは、黒い長髪をみだらに下ろす女性と、黒い法衣のような防護服（バリアジャケット）に身を包む少年……グレイと、クロノの二人

「（あの妹は、上手くやったみたいだな。次は、防衛プログラムの破壊、か……ふぅ、やっとここまで来たか。えらく、長かったな……さて、本番はその後だがな）」

グレイの頭は、次の作業、闇の書と切り離された防衛プログラムとの戦いと、その後の事、それら二つの事を考えていた

「さて……エイミィ、直ぐに現場へとつなげてくれ」

《オッケー！　すでに座標はインプット済み！！　ゲート開くよ！！》

［ヴゥゥゥゥゥンッ……］

機械が作動する音が聞こえた直後、目の前に光の柱が現れた

「こちら、クロノ・ハラオウン、現地に急行します！」

「（さて、行くか）」

そう言って、二人は、光の中へと、駆けだし

［［バシュンッ！！！］］

転移した

□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■

海鳴市、海上。結界内

［ゴゴゴ

光。それともう一つ。闇の書の意思の爆発と共に、そこから現れた、桜と金色の閃光

「！！　なのはちゃん！！　フェイトちゃん！！」
「「！　ビビさん！！！」」

二人の魔導師は、無事、闇の書から脱出していた

「……よかった……よかった、無事で」

ビビは、安堵の表情を浮かべた。それは、最も最悪な結末を、回避できたという気持ちと、愛する二人の少女が、何事もなく、戻って来てくれた事に対する、喜びの表情だった

「なのは！！！」
「フェイト！！！」
「！！　ユーノ君！」
「アルフ！」

そこへ、ユーノとアルフ。なのはの師匠と、フェイトの使い魔の二人がやってきた……って、遅すぎだっつの！！！　とビビが思った時

「ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴッ……！！！！！」
「「「「「！！！？」」」」」

突如、周囲の空気が、震え始めた

《現場にいる皆！！　気を付けて！！　闇の書の反応、まだ消えて

ないよ！！！》

通信で聞こえたのは、エイミィ・リミエッタの声。そう、まだ、全ては終わっていない……そう、ここからが本番なのだと

［ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴッ……！！！！！］

「……あそこが、闇の書の暴走開始地点、か」

目の前にある、大きな黒い淀み。その周りに、魔法生物達の残骸のようなモノが、蠢いている……おそらく、あの淀みを守っているのだろう。そして、それの前で、煌々と輝く白い光の球体……

あそこに、はやてちゃんが……

ビビは、直ぐにでも駆け寄りたい所だが、今は、彼女が完全に目覚めるまで、待っていることにした

《皆！！　下の黒い淀みが、暴走が始まる場所になる！　クロノ君と、グレイ・スティンさんがそっちに向かってるから、無暗に近付いちゃだめだよ！！》

「はい！！！」

「（え？）」

イマ、ナント？　お兄ちゃんと、ＫＹが、一緒にいる？

《お、お姉様？》

《なんだ》

ソレを聞いたビビは、直ぐに兄（あね）に連絡した

《なんで、管理局と行動してんの？》
《さぁ？　なぜか知らんが、いつの間にかこいつらと一緒にいた。ついでに言っておくが、お前がグダグダしてる間、あのアースラって場所にいた。そんだけだ》
い、今までどこにいるのかと思っていれば……ってか、なんかもの凄い場所にいたんだね……
《とにかく、今そっちに向かってる。俺らが来るまで、事を起こすんじゃねぇぞ》
《は、はい！！！（@＿@〃》
もう！！！　訳がわかんなぁ～い！！！！

□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■

白く輝く球体の中
「……管理者権限、発動」
「防御プログラムの進行に、割り込みをかけました。数分程度ですが、暴走開始の遅延が出来ます」

「うん」

［キィィィ

「シグナム！！！　ヴィータ！！！　シャマル！！！　ザフィーラ！！！」

愛する家族。夜天を守りし雲の名を冠する騎士達……名を、ヴォルケンリッター

「我ら、夜天の主の下に集いし騎士」
「主ある限り、我らの魂、尽きる事無し」
「この身の命続く限り、我らは御身の下にあり」
「我らが主、夜天の王……八神はやての名の下に」

□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■

そして、球体の中では、主も、戦いの場へと、赴くべく、準備をしていた

「リインフォース。私の杖と、甲冑を」
「はい」
［キィィィィィィィィッ、ジャギンッ！！！］

彼女の体に、黒と金色に彩られた騎士服が纏われ、目の前には、一

本の杖。現れたのは、金色の杖。先端に剣十字を意匠してある、魔導師の杖、“シュベルトクロイツ”

「……」

［パシッ］

それ手にする時、彼女は、力を得た

［ピシリッ、パキィィィィィィィィィィンッ！！］

白く輝く球体が砕けた後、そこに現れたのは、甲冑を纏った、はやてであった。

「はやてちゃん！！！！」

ビビは、愛する者の帰還に、歓喜し、喜びの表情をした。はやても、その笑みに返すように、ビビに笑いかけた

［チャキッ］

「夜天の光よ、我が手に集え。祝福の風、リインフォース。セーッ

ト！　アップ！！！」

ここに、新たな魔導師が、誕生した

□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■

その上空、その様子を見る、二人の影があった……

「……」

「……まだ、恨んでいるの」

その正体は、現場に到着した、グレイとクロノの二人であった

「……今は任務中だ、私情を持ち出すわけにはいかない」

防衛プログラムを見下ろしていたクロノは、グレイにそう告げた後、下の皆がいる場所に降りて行った

「……あっそ」

クロノの言動に、なんの感情も抱かないまま、グレイも、防衛プログラムがある場所へ、視線を落とした

「……あれが、か……はぁ、いざ目の前にしてみると、でかいんだな」

感嘆したような口調で、ソレを見るが……彼（かのじょ）は、ある不安を抱いていた

「（しかし、なんなんだ、この嫌な予感は……そう易々と、事態が丸く収まるとは思えないほどの、何かを感じる……）」

だが、今はそんな事を考えている暇は無かった

「ま、何か起きた時は、その時に対応すればいいだけの話か」

臨機応変。事が原作と違うのなら、やる事もそれに合わせればいい。そう考えた後に、クロノの後を追うように、グレイも下に降りて行った……

□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■

防衛プログラム、暴走地点付近

「はやて……」
「うん」
「すみません」
「あの、はやてちゃん……私達……」

騎士たちは、己達が行ってきた行為を、謝罪した。約束を破り、蒐集行為をしていた事を、騎士の誇りを、捨ててしまった事を……だが、それでも、自分達の主は、優しく受け入れてくれた

「ええよ。みんな、分かってる。リインフォースが教えてくれた。せやけど、細かい事は後や。今は……」

――――お帰り、皆……――――

ただ、家族を愛する、母のような包容力で、全てを許した

「うぅ・・・ウワアアアアアアアアアン！！」
［ボフッ］
「はやて！！　はやて！！　はやてぇ！！！」

ヴィータは、そのあまりの主の優しさに、泣き崩れてしまい、はやてにしがみついていた。そしてそこへ

「はやてちゃ～～～～～～んッッ！！！！！！」
［ガバッ！！！］
「ふえ!?　び、ビビちゃん！！?」

ビビも、愛する少女の帰還に喜び、近付いて、そのまま抱きついた

「良かった、良かったっ……はやてちゃんが無事で、よかったよ

オオオオ～～～～～！！！！！！」

ビビも、泣きつきながら、はやての体へ、自分を埋めていた

「ごめんなぁ、心配、かけてもうて」

はやては、今まで自分の為に戦ってくれた少女に、あやまった。だが、その少女は、気にすることなく、その身を少し離し

「そんなことないよ。それより、私の方こそ、ごめんね。はやてちゃんを、守れなくて……」

ビビは、しょぼんと肩を落とし、少女に謝罪した。だが、少女もまた、気にする様子もなく

「ううん。ビビちゃんは、私を助けてくれた。せやから、それでおあいこや」

はやては、ビビの事も、許したのだった……

「はやてちゃん……」

ビビは、恍惚な笑みを浮かべて、少女を見た。周りの騎士達も、その二人の様子を静かに見ていた……そこに、二人の魔導師が、降りてきた

「なのはちゃんとフェイトちゃんも、ごめんなぁ、うちの子たちが、色々迷惑掛けてもうて」

「ううん」

「平気」

魔導師二人に謝罪をしたが、彼女達も、そんな事は気にしなくていいからと、ソレを許したのであった……だが、そう長くは、この平穏は続かなかった……

「感動の再会の所、水を差してしまうけど。私は、そこにいるビビの姉、グレイよ」

「時空管理局執務官、クロノ・ハラオウンだ。時間が無いので、簡潔に説明する」

二人の影……転生者兄妹（しまい）の兄（あね）、グレイと、管理局の人間、クロノが現れ、平穏な空気は、一気に消え、緊迫し、張りつめた空気が、その場を支配した

「あそこの黒い淀み。闇の書の防衛プログラムが、あと数分で暴走する。僕らはソレを、何らかの方法で止めなければならない」

そして、ここから、クロノによる提案……二通りのやり方。“エターナル・コフィン”での凍結か、“アルカンシェル”による蒸発か……それら以外でのやり方で、なにか良い案はあるのか？　という質問が来て……原作通りの事が、起きていた。そしてその話を聞きながら、転生者兄妹（しまい）は、他の人は聞こえないように、念話で会話していたのであった

《ねぇ、お兄ちゃん。ここは原作通りに進行してるよ。んで、何かするようなことはあるの？》

《特にない。ここは、原作の流れに従い、あの防衛プログラムの破壊をする。それだけで十分だ》

《ほ、本当に？》

なにか、本当にそれでいいのかと思うビビだったが、兄（あね）は、

《あぁ。問題は、その後だ。残った本体をどうにかしないと、また呪われた書に逆戻りだ》

《分かった。じゃぁ、ここは私が考えたプランでいってもいい？（＊＾―＾＊）》

また変なこと考えてんじゃねぇだろうなぁ……はぁ、もういいや

《……好きにしろ》

と、またも投げやりに答えていた

《やった！！　まずは、アルフと淫獣で足止めしてもらって、バリアの一層目を、私とヴィータちゃんで。次のバリアを、なのはちゃんとフェイトちゃん！　そして、途中の妨害を、ザッフィーが。そして、三層目はまた私と、今度はシグナムと！　最後のは、お兄ちゃんとＫＹの二人でお願いね》

《強制かよ……》

また、勝手に命令された……あぁ。もういいや、こうやって次第を命令された方が楽か。自分で考えるよりかは、な

《そして、本体に向けては、はやてちゃんのミストルティンでカチンと！！　再生中の行動には、お兄ちゃんがなんとかして貰って》

《はいはい……》

《最後に！！！　私とはやてちゃんとなのはちゃんとフェイトちゃんで、トリプル成らぬ、フォースブレイカーで止め！！！　そんで、コアをシャマルとアルフと淫獣でおくって、“アルカンシェル”でドカーン！！！　よし！！　後でこの作戦を伝えよう！！！》

と、意気込んで自分が考えたプランを固めた妹。そんなアホな思考をよそに、兄はというと

《勝手にしな》

またも、投げやりに答えた……

そして、原作通りに、中々案が出ず、ビビがアルフの台詞をパクッて、三人の魔導師がそこから一気に名案を打ち出した。クロノはその作戦は上手くいくのかと思案したが、アースラからの通信で、実現可能という通達が来て、それをしようと即答で答えた。そこに、ビビが、さっき考えたプランを皆に提案し、全員（クロノも含む）から賛成を貰い、決定した。

その時、あまりにもクロノのキャラがおかしい事に気付いたビビだが

「（別にいっか（ー＿ー））」

といった感じで、気にはしていなかった

□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■

聖洋大付属小学校、前

「「……」」

遥かかなたに光る何かを見る、二人の少女がそこにいた。安全圏まで移動していた、アリサとすずかだった

「光、収まった……？」

「海に、まだ黒いのがあるけど……」

「一体何なの？　まさかこんなのが、このままずっと続いたりしないよね」

と、アリサが不安げに彼方海上にある黒い淀みを見据えた。そこへ、親友から声が掛かった

「なんとなくなんだけど、大丈夫な気がするの」

「？」

アリサは、親友の返答に、戸惑った。そして、この状況で大丈夫と言った少女の方へ向いた

「きっと、戦ってくれてるから」

「なのはと、フェイト、それから、あのビビって人が？」

「……うん」

強く、芯の通った答えに、アリサは、どこか納得した

「すずかに真顔で言われると、なんかそんな気がするから、怖いわ」

「あ……」

「……まぁ、それにしてもよ……あぁもう！！！　訳わかんない！！！　楽しいクリスマス・イヴに一体どういう事態なの！

！？」

「あ、あの……」

「夢なら覚めて！！！　一刻も早く冷めてよ！！　もう！！！！」

「あ、アリサちゃん、落ち着いて～」

しばらく、アリサはその場で暴れ、すずかはそれを止めるのに、必死だったとか……

□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■

「かなりギャンブル性の高いプランだし、個人の能力頼みの大博打だけど……それしかないのなら、やるしかないわ」

グレイが、作戦の成功率が非常に低い事を言ったが、全員にあるのは、その賭けを成功させるという思いしかなかった

「防衛プログラムのバリアは、対魔力防壁、対物理防壁、粒子対流防壁。そして、最後が、高熱の膜による防壁の、複合四層式のバリアや。ソレを砕かんと、本体には届かへん」

そこへ、はやてが防壁について説明し、クロノが先ほどのプランで行けると判断した

「なら、さっきの順序が妥当だな」
「えぇ……それじゃぁ、全員、指定した配置へ」
「いつでも攻撃できるように、準備しておいて！！！」
「「「「「「「「「「了解！！！」」」」」」」」」」

二人の姉妹（きょうだい）の号令を受け、各々が配置に着こうとした時

「あ、ビビちゃん！」
「？　どうしたの、シャマル？」
「結構、怪我してるでしょ」
「あぁ……」

確かに、結構ボロボロ。あ～あ、これ、ちょっとお気に入りの服だったんだけどなぁ……まぁ、途中から私一人で、あの子と戦ってたからねぇ。こうなっちゃうのも当然か……

「ちょっと、じっとしててね」
「？」

そう言うと、シャマルは口元に指輪型のデバイスを近づけ

「“クラールヴィント”、本領発揮よ」
『えぇ』
「静かなる風よ、癒しの恵みを運んで」

ビビに、治療魔法を掛けてくれた。それにより、ボロボロだったビビの体と服が、直ぐに元通りになっていった

「あ……（あぁ、気持ちいい……まさか、この場面の治療対象

になるなんて……し・あ・わ・せ？）」

そして、ビビの心も一緒に癒されたのは、ビビ本人にしか、分からないであろう

「風のリング、“クラールヴィント”と、“湖の騎士、シャマル”。癒しと補助が本領です」

「……ありがとう、シャマル♪」（ニコッ）

「い、いえ。それほどでも（やっぱり、ビビちゃんの笑顔は可愛い♪）」

ビビは、そのお返しに“魅了の笑み”を見せてあげた。ソレを見てこの反応、どうやらシャマルは、すでに結構な深度まで、ビビの毒牙にかかっているようだw

そして、全員が指定した各自の持ち場に着いた時、それは稼働した

「「「「「「「「「「ゴオオオ

…“闇の書の、闇”」

［ザパアアア

幻想種の、キメラ

「●▲●▼●▲●▼◆ッ……▲■▼●◆▲▲●●▼◆▲◆▼●▲
▼●▼▲◆●◆▲◆●▼▲◆●▼◆▼▲▲▼◆▼▲◆
▼●▲▼◆◆▲▲◆▼●▲■▼●◆▲▲●●▼◆▲◆▼●
▼▲◆●◆▲◆▲●▼▲◆●▼◆▼▲▲▼◆▼▲◆▼●
▲▼◆◆◆▲▲◆▼●▲■▼●◆▲▲●●▼◆▲◆▼●▼▲
◆●◆◆▲◆▲●▼▲◆●▼◆▼▲▲▼◆▼▲◆▼●▲▼
◆◆◆▲▲◆▼●……ッッッッッ！！！

「■▼●◆▲●▼◆▲◆▼●▲▼●▲◆●◆▲◆●▼▲●▼▲◆●▼◆▲◆●▼◆▲▼◆▼▲◆▼●▲▼◆◆▲▲◆▼●▲■▼●◆▲▲●ッッッ！！！！！！！！！！！！！！！」

「バサアアア

ビビが壊れたかのような発言をし、それにボケをかましたはやて。
それを、シャマルが突っ込んだ

「いったい、君たちはどんな生物を蒐集してきたんだ……？」

クロノが、こめかみに指を押さえて、蒐集の責任者であろう、グレイに問うた

「黙秘する。っていうより、まさかこんな事態に成るなんて、想定外だったわ」

頭をワシャワシャと掻き、嘆息をした。まさか、こんな事に成るなんて、彼女（かれ）は思ってもみなかったのだ

「……仕方ない、作戦を練り直そう。あの高速でも対応できるような案を」

そして、全員が再び、考え出していた。しかし、相手はそう待ってくれそうになく、いつか攻撃されるかもしれない。視線をキメラに集中させながら、全員、どうすればいいのかを考え始めた

《お、お兄ちゃん、どうしよ？／（。ロ。）／》
《俺も考えてはいる。だが、妙案が浮かばん》

まさか、あの時の蒐集が、このような形で影響しているなどと、誰が予想できたであろうか……？　だが、現に今、この場で起きている……ソレを、この状況を打破する解決策を考えるために、グレイは、思考の海へと潜っていった……

……どうする、相手は高速で飛翔する巨大な怪物。ならば、動きを止めて、そこから当初考えていた作戦を実行する。と言うモノだが……だが、どうやって足止めをする？　バインド系は、全てあのバリアが防いでしまう。だから、俺やバカ妹以外の連中には、ソレを行う事は不可能。だったら、俺かバカ妹で、アレを止めるしかないって訳か……だが、そんな術、あるのか……？
今。自分が用いる手札を整理してみるか……

“膨大なエネルギー”

これはただのエネルギー源だ。いくら膨大なエネルギーを持っていたって、使い道が不明なら意味がない

“最強体質”

これもダメだな……

“魔神の瞳”

意味無し

“魔導の心得”

あのバリアが邪魔で、使えるモノも使えん

“武術の心得”

無理だ。こんなちいせぇの肉体で、足止めなんて出来るわけがねぇ

“兵装錬製（ウェポン）”

あぁいった奴に使えそうな武装……チッ、俺の頭ン中には、そんなおあつらえな武器知らんし

“神魔招来（アバター）”

あのバカなら、何か知ってるのだと思うが……あぁやって考えてるってことは、あの怪物をどうにかする能力持ちの奴はいないみたいだな……

“魅了の笑み”

存在自体が無駄

……チッ、これらじゃどうしようも出来ねぇじゃねぇか。後、残っている能力と言えば……

「「あ」」

兄妹（しまい）は同時に、有る事の気付いた。いや、思い出した。自分達が持っている、八つ目の特殊能力（チート）を

《おい。確かお前、アレをどんな風に改造したんだ？》

《お兄ちゃんも、アレを？　えっとねぇ……》

妹は、兄（あね）にある程度原典から改造した能力について説明した。その間、グレイは不機嫌な表情だった。なぜなら、それが彼（かのじょ）を性転換させ、女にした能力だからだ

《……ってな感じに》

「《なるほど……それなら、行けるな》皆聞いて、名案が浮かんだわ」

「「「

と、考えてると

《ねぇ、お兄ちゃん。どれでいけばいいかな？》
《ああ？　アレの時のアレ戦のアレで行けばいいだろ》
《？……あぁ！！　アレの時のアレ戦のアレね！！》

アレアレアレと答えた兄だが、妹はそれで分かったらしい

《あ、でも、アレって二通りあるけど、どっちでやる？　効果は一緒だけど》
《好きにすれば？》
《お兄ちゃんが決めてよ。私じゃぁ、決められないから……（；一＿一）》
《はぁ……じゃぁ、紅の方でやりなさい》
《紅だね！　りょ～か～い！！！》

そう言って、ビビは、その能力を使う体制を取った……

「さて……行きますか！！！」

ビビは、その体を大きく開いた

#２９　闇の書の闇、現る……って、なぁにこれぇ……？（後書き）

～～～神の舞台裏～～～

神「次回でいよいよＡ、ｓ編最終決戦かぁ、長かったなぁ……」

ヤ「ですわね……」

メ「なんか、感慨深いわね」

神「さて、そんなことより、いつものやるぞ！！」

ヤ「はい！！」

神「では、今回のテーマは、これだ！！！」

――――今回の闇の書の闇について――――

神「やっぱ、これだよな……では、説明役として、二回続けてメイリン！　頼むぜ」

メ「はいはい……じゃぁ、今回はちょっと他の作品の事も触れて説明するわ・まず、アレが今回あんな形をとったのは、今まで蒐集してきた生物……今回は、幻想種ね。それらの資質が影響しているのよ。そして、最も多くの資質を蒐集したのは、あの四聖獣。四体全部を合わせると、２００頁分の魔力を持ってる計算だからね……だから、その影響が色濃くでたから、基盤になったのよ」

ヤ「ちなみに、動き出したのは、空が飛べる因子を持つモノを蒐集しまくったからよ。リオレウスモドキや、クシャルダオラモドキ……飛竜と言える存在ね、それらを数多く蒐集させたから、龍の因子が多い。だから、青龍が大きく出てきたのでしょうね」

メ「そして、作者いわく、これはおそらく歴代防衛プログラムの中で最速であろうと見ているのよ。それに、他の作品、今回は、作者がこれを書くきっかけになった“Ｈａｇａｌａｚ”先生が執筆していらっしゃる、“とある最強系主人公達の放蕩記”の防衛プログラムが、過去最大ならば、こちらは過去最速でいこうっていう、試みらしいわ」

神「単に、勝ち目のない見栄を張っただけだろ、まったく、馬鹿作者が」

ヤ・メ「同感」

神「さて、今回はこのくらいにするか」

ヤ「前回のアンケートは、いまだに募集中ですので、たくさん応募なさってくださいね」

メ「それじゃぁ、また次回に」

神・ヤ・メ「さよなら～！！」

作「“Ｈａｇａｌａｚ”大先生の“とある最強系主人公達の放蕩記”は、本当に面白いです！！！　お勧めです！！　見ていない方はぜひ見てください！！　あ、でも、ほぼ知っていらっしゃるでしょうね……このサイトの、リリなの二次創作の中で、トップ３に入るほどの名作ですから……」

＃３０　世界の果てで、謳い続ける二人の姉妹（きょうだい）（前書き）

更新が遅れて、大変申し訳ありませんでした

今回、過去最多の２８０００文字で書いているため、すごく長いです……

分割して送ろうかと思いましたが、ここの部分は一気に掲載したいと思い、一度に載せました

大変長く、疲れるかと思いますが、何卒、ご了承ください……ｍ（＿＿）ｍ

十六夜様、琥様、緋水様、ｔｋ様。ご感想、ありがとうございます！！

#30　世界の果てで、謳い続ける二人の姉妹（きょうだい）

――――そして、とある兄妹（しまい）は、世界を捻じ曲げる程の力を、発揮する……――――

第97管理外世界、地球、海鳴市、結界内

「◆◆▲▲◆▼●▲■▼●◆▲▲●●▼◆▲◆▼●▲▼●▼▲◆●◆◆▲◆▲●▼▲◆●▼◆▲◆●▼◆▲▲▼◆▼●▲▼◆◆◆▲▲◆▼●▲■▼●◆▲▲●●▼◆▲◆▼●▲▼●◆◆▲▲◆▲●▼▲●◆●▼◆▼▲▲▼▼◆▼▲◆▼●▲▼◆◆◆▲▲◆▼●◆◆●▼▲▲▼▼◆▼▲◆▼●▲▼◆◆◆▲▲◆▼●ッッッッ！！！

ビビは、体を大きく広げたまま、天を仰ぎ

「謳よ、世界に響け……」

［……♪］

「「「「「「「「「「？」」」」」」」」」」

突如、鉄琴を奏でるような音が、聞こえた……

「“ヒュムノス、‘EXEC―PAJA／．#Orica extracting．’”」

世界に、想いを紡ぐ、“謳”が響く

「……？Rrha kira hymme PA－JA yor，getrra，en gett wi gyas！［汚れた貴方のために、詩を謳います。悪霊よ、離れたまへ］？」

「？Was yea ra chs hymmnos mea［私は、謳になる］？」

「？Rrha kira hymme PA－JA yor getrra，en gett wi gyas！［汚れた貴方のために、詩を謳います。悪霊よ、離れたまへ］？」

それは、世界を浸食する、猛毒を含んだ謳

「？綾織の闇と光纏い？」

「？舞い降りる天と地の間に？」「？Diasee［神の子］？」

それは、同じ力を持つ者にしかその意味を聞き取れない、詩（ヒュムノス）

「「?さあ目覚めよ?」」「?甦れ?」「?甦れよ?」
「?遥かな静寂(しじま)より?」「?さあ目覚めよ、ａｎ　Ｓｐｉｒｉｔｕｍ　Ｓａｎｃｔｕｍ［魂の方舟とともに］?」
「「?さあ目覚めよ?」」「?声上げよ?」「?声を上げよ?」
「?歓喜と絶望と?」「?ｍａｎａｆ　Ｏ［命Ｏ］?」

それは……自分が犯した罪を、謳う詩……

「?何を背負って生まれた?」「?Ｍｅａ　Ｃｕｐｌａ　Ｌａ　Ｏ　Ｍｅａ　Ｍａｘｉｍ　Ｅｔ　Ｃｕｐｌａ　Ｌｉ　Ｓａ［私の罪Ｏそれは私の犯した最大の罪］?」
「?あまたの星の一つに?」「?Ｍｅａ　Ｃｕｐｉａ　Ｌａ　Ｏ　Ｍｅａ　Ｃｕｐｌａ　Ｌｉ　Ｓａ［私の罪Ｏそれは私の犯した罪］?」

「……キレイ……」
「うん……」
「ビビちゃん、こんなん歌えるんや……」

魔導師の三人の少女は今彼女が歌っている歌に、聴き惚れていた……神聖な、聖歌に似た歌は、彼女達の心を……否、彼女達を含む、その場全員の心を、美しく、洗い流すように、洗練させていった

その詩は、その場のみならず、その結界の外にも、そして、宇宙(テンクウ)にも、響き渡った

□■□■□■

《えっとですね。何か、周波数が特殊で、空気振動と共に、特殊な電磁パルス、みたいなモノも一緒に発せられているんです。それと、この歌に使われている語源ですが、それが、現在確認されている世界で使われてる語源のデータベースの中のどこにも無いんです！》

「なんですって？」

つまりそれは、この歌はまったく理解不能な歌で、おそらく、歌っている彼女にしか、理解できない歌なのだと判断した

《それとなんですが、この歌、全部あの子から発せられているんです。一つの口で、異なる違うパートと、演奏の音楽、それらが一度に流れているんです》

「えぇ！？」

その事実に、リンディは驚愕せざるを得なかった。そう、この歌は全て、彼女一人が歌っているという……それはつまり、喉の構造が常人のそれとはまったく異なっているという事で、人間の口からは決して出る事が不可能な音を出している。即ち……

「……人造魔導師、なのかしら？　いえ、それにしても……」

もはや、彼女の知識は追いついていけず、思考が停止する寸前までに陥った

「！！　防衛プログラムの動きに、変化あり！！！」

スタッフの声で我に帰り、彼女は、戦線の様子が映ったモニターを見た

□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■

「▼▲◆▼●ッ……▲▼◆◆◆▲▲◆▼●▲■▼●◆▲▲●●▼◆▲◆▼●▲▼●▼▲◆●◆◆▲◆▼●▲■▼●◆▲▲◆▼●▲■▼●◆▲▲……ッッッッ！！！

「やった！！！　皆！！！　攻撃開ｓ」

ビビは、“謳いながら、口頭で”全員に指揮をしだした、が

「◆◆▲▲◆▼●▲■▼●◆▲▲●●▼◆▲◆▼●▲▼●▼▲◆●
◆◆▲◆▲◆●▼▲◆●▼◆▼▲▼◆▼▲◆▼●▲▼◆◆
◆▲▲◆▼●▲■▼●◆▲▲●●▼◆▲◆▼●▲▼▲◆●◆◆
▲◆▲●▼▲●◆●▼◆▼▲▲▼◆▼▲◆▼●▲▼◆◆▲▲◆◆▼
●ッッッッッ！！！

おきなさい、バカ妹」
「は、は～い……あ、そだ。それなら、次謳うの、違う方の“パージャ”にしてよね！！」
命令すんな、この役立たず。まぁ、それもまた一興か……ふぅ
「そんじゃ、やるか」
そう言って、彼女(かれ)はその場で立ちつくし、息を吸い……
「“ヒュムノス、‘ＥＸＥＣ―ＰＡＪＡ／．　＃Ｍｉｓｙａ　ｅｘｔｒａｃｔｉｎｇ．’”」
祝詞(のりと)を、唱える
「？Ｒｒｈａ　ｋｉ　ｒａ　ｈａｒｒ　ｅｘｅｃ　ｈｙｍｍｎｏｓ　ＰＡＪＡ［彼女はヒュムノスパージャを実行する］？」「？Ｅｎｙｅｈａｒ［そして解き放つ］？」「？ｎｈａ　ｎｅａｒ　ｙｏｒ［生命を吹き込む］？」
姉(あに)もまた、世界にとって猛毒足りうる力を、振るう。妹よりも、強引に
「？Ｗａｓ　ｋｉ　ｒａ　ｓｅｌｅｎａ　ａｎｗ　ｈｙｍｍｎｏｓ　ＰＡＪＡ［ヒュムノスパージャを奏でる］？」
「？Ｅｎ　ｍａ　ｉ　ｇａ　ｃｈｓ　ｓｙｅｃ　ｖａｎ　ｎｅｌ　ａｎ　ｈｙｍｍｅ　ｅｎｄｉａ［そして、システムの中であってもＯと共に接続が終わりになる］？」「？Ｅｎ　ｍａ　ｋｉ　ｒａ

ｋｓ　ｓｙｅｃ　ｐａｒｇｅ　ｔｅｓ　ａｒ　ｈｙｍｍｎｅ　ｍｅａ［そして、システムの切り離しへの唯一の詩を私に暗示する］？」

「？Ｗａｓ　ｋｉ　ｒａ　ｅｘｅｃ　ｈｙｍｍｎｏｓ　ＰＡＪＡ［ヒュムノスパージャを実行］？」

「？Ｗａｓ　ｋｉｒａ　ｅｘｅｃ　ｓｙｅｃ　ｐａｒｇｅ　ｔｉｅ，ｇｏｔ　ｙｏｒ！［システムが隔離を実行し、あなたを排斥する！］？」

「▲▼◆◆▲▲◆▼●▲■▼●◆▲▲●●▼◆▲◆▼●▲▼●▼▲◆●◆◆▲◆●▼◆▼●▲■▼●◆▲▲▲▲◆▼●▲■▼●◆▲●●▼◆▲◆▼●◆▲▼●▼▲◆●◆◆▲◆▼●▲■▼●◆▲▲◆▼●▲■▼●ッッッッ！！！

その時、グレイの口から、声が響いた。だが、そんなバカなことは無い。現に彼女（かれ）は、“謳っている”。それなのに、彼女（かれ）の声が聞こえたのだ……

「私が押さえられるのも、そう長くないかも知れないわ！　だから早く！！！」

「「「

「よ～しッ！！　ベアトリーチェ！！“神魔憑依（アバター・オブ・リンク）”！！！」
『スタンバイ、レディ』
「セーーーット、アップ！！！」
［カッッ！！！！！！！！］

ビビが変わったのは、右腕が黄金に輝く装甲で覆われ、顔の半分に突起物のような装甲、背中に風車のような羽根、服装がジーンズにジャケットという男モノに変わった（“スクライドのカズマ”の第二形態を連想していただけたら幸いです）

「行くわよぉ……！！」
［ダッ！！！］

ビビは空中を蹴りあげ、バリアの方に突撃していった

「劫天、爆砕！！　“ギガントォ！！、シュラァアアアアアアアアアーーーク”ッッ！！！！！！」
［ブンッ！！！］
“シェルブリット・バアアアーストォオオオ

ァァァァァッッッ……！！！！！！！！！」

砕けるには力不足と考えたビビは、その拳に力を注ぎ……拳は、黄金に輝きだした

「もっと輝けエエエ

「“エクセリオン……バスタァァァァーーー”ッッ！！！！！」

『バレルショット』

［バンッ！！！］

なのはが、本命たる“エクセリオン・バスター”を打つための前振りとして、照準、弾道安定のための固め技を発射し

「ッ……ハァッ！！」

［ブルンッ！！！］

［ザザザザザザザザザンッ！！！］

フェイトが、バルディッシュを振りかぶり、それで生じた衝撃破が、キメラの周囲に生え始めていた触手を吹き飛ばした

「ブレイク！！」

［ババババシュッ！！！］

「シュウウウウーーートッッ！！！！！！」

［ゴオオオ

フェイトの魔力斬撃が、降り下ろされ

［ズガガガ

「ベアト！！　“憑依魂換（リンク・チェンジ）”！　“新・アーチャー”！！！」
『承知。リリースアンドダウンロード、変更完了。スタンバイ、レディ』
「セーーーット、アップ！！！」
［カッッ！！！！！！！！］

次にビビが変わったのは、紅き外套を纏い、黒き装甲を身に付けた、錬鉄の英雄と呼ばれるモノ……サーヴァント、アーチャーだった
（ぱっとしない方は、アチャ子さんを連想してください）

「行くよ！！　シグナム！！！」
「応ッ！！！」

二人は、互いに背を合わせた状態で、互いの弓（エモノ）を構えた

［ガシャンッ！！　ガシャンッ！！］

シグナムは、レヴァンティンに二発のカートリッジをロードさせ、魔力で出来た矢を引き絞り……

「Ｉ　ａｍ　ｔｈｅ　ｂｏｎｅ　ｏｆ　ｍｙ　ｓｗｏｒｄ．［我が骨子は捻れ狂う］」
［ギュインッ！！！］

ビビは、手元から螺旋状に刀身がねじれている剣を生みだし、ソレを矢のように細く捩らせ、剣を矢として……

「翔けよ、隼ッ！！！！」
『“シュツルムファルケン”！！！』
「“偽・螺旋剣（カラドボルグ）？”ッ！！！！」

［［バシュウウウッッッッッ！！！！！！！！！！！！！］］

ギリギリまで引き絞られた二つの矢は、邪魔される事無く、バリアの直撃した。だが、それでもバリアは破壊される事は無かった……

……

「“壊れた幻想（ブロークン・ファンタズム）”」

［パチンッ］

が、ビビが指を鳴らした直後

［ズドオオオ

だが、やられてばかりと言うわけにもいかず、動かしにくい体を無理やり動かし、バリアの外に生えている触手や角の先端にエネルギーを収束させ始めた。砲撃での反撃をしようと言うのだ

「盾の守護獣、ザフィーラ！！！　砲撃なんぞ、撃たせん！！！！！」

［キィィィィンッ……！！！！］

だが、ソレを許す事など、微塵も無かった

「縛れ、“鋼の軛”ッ！！！　デイヤアアア

▼●ッッッッ！！！

▲◆▲●▼▲●◆●▼◆▼▲▲▼◆▼▲◆▼●▲▼◆◆◆▲▲◆▼
●ッッッッ！！！

グレイがとりだしたのは、かつて四聖獣を切り刻み、貫き、喰らった武装……神喰いの武具、“神機（じんき）”。それに装備されているのは、銃口の大きいブラストタイプの銃と、深い蒼に彩られた冷気を纏う刀と、いかなる冷気にも耐えられる大型の装甲……それらが取り付けられていた

「凍てつけッ！！！！」

『“エターナルコフィン”』

［パキパキパキパ

［ガシャンッ！！！］
「ッ！！！」
［ダシュンッ！！！］

ソレを確認すると、武器を剣の形状に変え、その個所に向かって突撃し

「ハアアアアアアアアアアッ！！！！！」
［ザンッ！！！］

球体を、真っ二つに切り裂いた……直後

［ズドオオオオオオオオオォォォ

動をした

「“彼方より来たれ、宿り木の枝。銀月の槍となりて、撃ち貫け”ッ！！！」

［キイイイィィィ

石化したキメラは、その長い体を維持できず、甲羅から伸びていた首から頭の部分が、崩れ落ちた……

［グニャァッッ！！！！！］

「「「

ィィィィィィィィィィッッッ！！！

［バッ！！］
「！！？　お姉様ッ！！！」
「「「「「「「「「「「「「「「！！？」」」」」」」」」」」」」」」
その時、グレイはいきなり急降下していき
［ダンッ！！！！］
「上で無茶苦茶してんなら、下から行って潜り込めばいいだけだろ」
［ダッ！！！！］
“エターナルコフィン”で凍った海面を、駆けだしていった
「まさか、近付く気か！！？」
「近付いて行ったら、防衛プログラムに取り込まれてしまいます！！！」
制止の声が響く中、グレイは無視していき、海面を駆けて行った
「……カテゴリ、双剣……“ブレイズ・オブ・エグザイル”」
［ジャギギンッ！！！］
そして、彼（かのじょ）が選んだ兵装は、黒と金色に彩られ、禍々しく輝く、伸縮自在の鎖が付いた二振りの双剣。鎖鎌とヨーヨーを組み合わせたような動きを可能とする、“スパルタの亡霊”と呼ばれた神殺しの戦士が使いし、呪われた剣……
「（あのゲーム程、クリアできるのかと思ったモノは無かったな……だが、やってて良かった）」

彼の戦闘での動きは、昔転生される前までやっていたアクションゲームを考慮し、スタイルの基盤としているのだ

「（だが、今はどうでもいい事だ）」

そう昔を懐かしんでいた時

［［［［［［［［［シュルルルルルルッ！！！］］］］］］］］］

突如、目の前に何本か触手が生え、行く手を防ごうと……突撃者を捕らえようと、その手を伸ばしてきた

「“魔神の瞳（デモンズ・アイ）”、“予知眼”、“遅延眼”、セット」

その襲撃に驚く事無く、むしろ予想していたかのように、対処を行う……まず行動したのは、自身がもつチート能力、“魔神の瞳（デモンズ・アイ）”をその瞳に宿らせ、相手の次の行動を立体映像のように見る事が出来る“予知眼”。そして、相手の動きを遅く見えるようになれる“遅延眼”。その相手の動きを完全に読める二つの目を瞳に燈した

「……単純」

［ダンッ！！］

そう言って、凍った海面を蹴りあげ、跳躍によって、触手の攻撃を容易くかわした

［……ダンッ！！　ダッ！！！］

そして、空中で一回転し、着地をした後、その勢いのまま、再び駆

けだした

「▲▲◆▼●▲■▼●◆▲▲●●▼◆▲◆▼●▲▼●▼▲◆●◆◆
▲●▼▲●◆●▼◆▼▲▲▼◆▼▲◆▼●▲▼◆◆◆▲▲◆▼●
ッッッッ！！！！！！！！！！！！！」

［キュイイイイィィィ

そう言い放った後、駆けていた足の動きを止め、両手に構えている鎖付きの双剣を振るい

「ヌンッ！！！！」

［シュッッ！！！！！！］

［ザザザザザザザザザザザザンッッッ！！！！！！！！！！！！！］

それらを投げ飛ばし、弧を描くような軌跡を走らせ、触手全てを斬り裂いた

［チャキキッ！！］

双剣は、鎖が付いている為、彼の腕（かのじょ）に戻っていた

「▲▲◆▼●▲■▼●◆▲▲●●▼◆▲◆▼●▲▼●▼▲◆◆●◆▲●▼▲●◆●▼◆▼▲▲▼◆▼▲◆▼●▲▼◆◆◆▲▲◆▼●ッッッッッ！！！！！！！！！！！！！」

［キュイイイイィィィ

剣を頭部に向かってな垂直に投げ

［ズシュッッ！！！！！！！］

「◆●◆◆▲◆●▼▲●▼◆▲◆●▼◆▼▲▲▼◆▼◆▼▲◆▼●▲
▼◆◆◆▲▲◆▼●▲■▼●◆▲▲●▲▼◆▲◆●▼◆▼▲▲▼◆
▼▲◆▼●▲▼◆◆◆▲▲◆▼ッッッッッッ！！！！！！！
！！！！！！！！！！！！！！！！！！！？？？？？？？？？？」

右の顎に突き刺さり、頭部はその傷みから、エネルギーを溜めたまま暴れ出した

［グイッ！！！］

「ッ！！！」

彼（かのじょ）は、顎に突き刺した剣に繋がれている鎖に引っ張られ、暴れ出した頭部に引き寄せられるように、その身を空中に投げだされた

「「「「「「「「「「グレイ｛さん・姉上殿・スティンさん｝！！！！」」」」」」」」」」

上空で砲撃の嵐を回避している全員は、グレイがやられると思い、名を叫んだ。だが、その妹は……

「（まさか……“ＣＳアタック”？）」

自分の兄（あね）が、かの無理ゲの真似事をするのかと、慄いたのだった

「ッ……！！」

［グイッ］

そして、空中に放り投げられた彼（かのじょ）は、暴れている相手の頭部を見据え、あるタイミングを計り……

「（今だ）」

それが見えた刹那、その身を強引にねじり

「オラァッ！！！」

［シュッ！！！］

［ズシュッッ！！！！！］

「◆●◆◆▲◆▲●▼▲●▼◆▲◆●▼◆▼▲▲▼◆▼▲◆▼●▲▼◆◆◆▲▲◆▼●▲■▼●◆▲▲●▲▼◆◆▲◆●▼◆▼▲▲▼◆▼▲◆▼●▲▼◆◆◆▲▲◆▼ッッッッッッ！！！！！

剣から伸びる二つの鎖を縮めながら、力付くで真上に引っ張り上げた

「グッ……グオオオ

▲▼◆◆◆▲▲◆▼●▲■▼●◆▲▲●●▼◆▲◆▼●▲▼●▼▲
◆●◆◆▲◆▲●▼▲●▼◆▲◆●▼◆▼▲▲▼◆▼▲◆▼●▲▼
◆◆◆▲ッッッッッッ！！！

ビビは、兄(あね)の所行に、ただ絶句するだけであった

「（これ、お兄ちゃん死んだ？）」

縁起でもない事を言う妹であった……

［……ダンッ！！！！］

「ッ、たく、面倒かけさえやがって」

だが、グレイは無事だった。彼(かのじょ)は、なにごともなかったかのように、再びキメラの甲羅の上に立っていた

「（あの複合四層式のバリア、使えるな……あとで、タマモのオートガートのバリアに設定しておくか）」

爆発が起きる瞬間に、体を覆うバリアを張っていたのだった。それも、そのバリアは、先ほどまでキメラが展開していたあの複合四層式のバリアであったが為に、その体は、無傷と言ってもいい程だった……そして、周りには爆煙が舞っている為、外からは見られる事は無い……

［ズボッ！！！！］

「ッ！！！？」

突如、彼(かのじょ)の足が縺れた……その異和感の先を見て見ると

「（ヤバ！）」

右足の足首辺りが、キメラの甲羅に埋もれており、そこから、徐々に上へと浸食してきているのであった。更に

［［［

取り込まれそうになっている右足を、自ら、膝から下を切り裂いた

「ッ……！！！」

［ダンッ！！！！］

このままでは再び取り込まれそうになると考え、甲羅を蹴り上げ、空中へ離脱した

［……ダシュンッ！！！！］

「「「「「「「「「！！！！？？　グレイ〜さん・姉上殿・ステぃンさん〜！！！！！！！」」」」」」」」」」

グレイが空に戻ると、全員がその安否を確認し、無事だと知って安心するが

「あ、姉上殿！！？　右足が！！！」

シグナムが、膝から下が無い右足を見て驚愕し、他の全員がソレを見ると、絶句していた

「これくらい、どうってことないわ。それよりも、アレを」

そう言って、彼（かのじょ）は後ろを振り返ると

「「「「「「「「「■▼●◆▲▲●●▼◆▲◆▼●▲▼●▼▲◆●◆▲◆●▼▲●▼◆▲◆▼▲▼◆▼▲▲▼◆▼▲▲▼◆▼▲

▼▲●▼◆▲◆●▼◆▼▲▲▼◆▼◆▼◆▼●▲▼●▼▲◆●◆
◆▲◆▲●▼▲●▼◆▲◆●▼◆▼▲▼◆▼●▲▼◆◆◆◆
▲▲◆▼●▲■▼●◆▲▲●●▲▼◆◆◆▲▲◆▼●▲■▼●◆▲
▲●ッッッッッッッ！！！

そういうと、彼女が既に持ってい板状のトンファーのような武器を一つにし、サーフボードのような形状に合体させ

「えい！！」

ソレを空中に投げ飛ばした……直後、そのボードは空中で動き出し、反り上がって上空を一回転し出した

「さぁ、行くわよ！！！」

その間に、ビビは髪をツインテールにしている金具を外し、ソレを両腕にはめ……

［ヴンッ！！］

リング状の部分から、ナイフ並みの長さの魔力刃を扇状に展開させた

「とうッ！！！」

［スタッ！］

戦闘態勢を取ったのを待っていたかのように舞っていたボードが、彼女の後ろから迫り、そのタイミングを見計らったように、彼女はそのボードの上に飛び乗り……高速で飛んで行った

［バッ！！！］

「うッ……きゃぁッ！！！？」

［ばさッ！］

「「「

突然、ビビの上着が脱げ、着ている衣類が吹き飛んで……下着オンリーな姿になった！！！　ちなみに、色は上下共に、白！！！

「（うっわッ！！？　やっぱり、衝撃で服が脱げるって、マジだったんだ……イヤン、恥ずかしい（＊／／／∇／／／＊）ｗ）」

呑気でふざけた事を言っているが、あえて言おう、戦闘中であると！！！

「さて……受けてみる？　ビビのとっておき！！！」

［ザンッッッ！！！！！！！！！！！！！］

そうしている間に、彼女はキメラの懐に潜り込み、すれ違いざまに一閃、魔力刃による攻撃を繰り出していた

「もういっちょ！！！」

［グリンッ！！　ダシュンッッッ！！！！！！！！！］

再び攻撃しようと、彼女は巧みにボードを操り、ターンを決めて、キメラに向かって突撃した

［ザンッッッッ！！！！！！！！！！！！！］［ザンッッッッ！！！！！！！！！！！！！］［ザンッッ！！！！！！！！！！］［ザンッッ！！！！！！！！！！］［ザンッッ！！！！　ザンッッ！！！！　ザンッッ！！！！］［ザンッッ！！！！　ザンッッ！！！！　ザンッッ！！！！］［ザンッッ！！！！　ザンッッ！！！！　ザンッッ！！！！］［ザンッッ！！！！　ザンッッ！！！！　ザンッッ！！！！］［ザンザンザンザンザンザンッッ！！！！！！］［ザンザ

ンザンザンザンザンッッ！！！！！！」
［ザザザザザザザザザザザザザザンッッッッ！！！！！！！！！！！！！」
「「「「「「「「「「●◆▲▲●●▼◆▲◆▼◆▼●▲▼▲◆●◆◆
▲◆▲●▼▲●▼◆▲◆●▼◆▼▲▲▼◆▼▲◆▼●▲▼◆◆◆▲
▲◆▼●▲■▼●◆▲▲●◆▼●▲▼●▼▲◆◆●◆▲◆●▼▲
●▼◆▲◆●▼◆▼▲▲▼ッッッッッ！！！！！！！！！！！！！
！！！！！？？？？？？？？」」」

［ズシュウウウ

●▲▼●▼▲◆●◆◆▲◆▲●▼▲◆●▼◆▲◆●▼◆▼▲▲▼◆▼
▲◆▼●▲▼◆◆◆▲▲◆▼●▲■▼●◆▲▲●●▼◆▲◆▼●▲
▼●▼▲◆●◆◆▲◆▲●▼▲●◆●▼◆▼▲▲▼◆▼▲◆▼●▲
▼◆◆◆▲▲◆▼●ッッッッッ！！！

彼(かのじょ)は、取りだした武具を構え、取り付けられているバーニアを点火させ……

［ダシュンッッッッッ！！！

「ハッッ！！！！！！！」

［ズシュッッッ！！！！！！！

「「「「「「「「▲◆▲●▼▲●▼◆▲◆●▼◆▼▲▲▼◆▼▲
◆▼●▲▼◆◆◆▲▲◆▼●▲■▼●◆▲▲●●▲▼◆◆◆▲▲◆
▼●▲■▼●◆▲▲●●▼◆▲◆▼●▲▼◆▼▲◆●◆◆
▲◆▲●▼▲●▼◆▲◆▼▲▼◆▲▼◆▼●▲▼◆▼◆◆▲
▲◆▼●▲■▼●◆▲▼▲◆▼◆▼●▲▼●▼▲◆●◆◆●◆▼
●▲▼●▼▲◆●◆◆▲◆▲●▼▲◆◆●▼◆▼▲▲▼◆ッ
ッッッッッッ！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！
！！！！！！！！！！！？？？？？？？？」」」」」」」」」」

途中にあるビルや建物に激突し、通った場所全てを灰燼へとしてしまう程に、彼（かのじょ）は突撃し続ける……その間、キメラは体を削り剝られ、あまりの激痛に奇声の咆哮を吐き散らしているが、そのような事はお構いなしに、グレイは突き進んでいた……それならばと、キメラは再びグレイを取り込もうと触手を伸ばすが

「（無駄だ）」
［バチッ！！！！］

彼の体に触れた瞬間、触手が捻れる様に弾かれ、グレイを取り込むどころか、触れることすらできなかった……そう、グレイは取り込まれる事に対する対処として、体に触れた物を弾かせる膜状のバリアを展開していたのだった

「（そろそろ、海上の方に戻るか）グ……ヌンッ！！！」
［グイッ！！！］

そう言って、彼（かのじょ）は突撃槍の噴射口の角度を強引に曲げ、そこからUターンするように、海の方に戻ろうとした

［ズガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガ

ガガガ

！！！！！！！！！！！！！！！」

「ズシュンッッッッ！！！！！！！！！！！！！！！

オオオオ

「了解や！！」
「はい！！」
「うん！！」

諤うのを止めたビビの指示を受け、四人は、己のデバイスを（ビビは、神魔憑依（アバター・オブ・リンク）を解除し、右手を天にかざし）構えた

［チャキッ！！］
『“スターライトブレイカー”』
「全力全開！！“スターライトォォォォーーーッ！！！！」
［キイイイ

「ッ！！　響け終焉の笛！！！　“ラグナロク”ッッ！！！！！」
［キイイイ

［［［［ゴオオオ

オオオオ

□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■

軌道上、アースラ、ブリッジ

「コアの転送、来ます！！　転送されながら、生体パーツを修復中！！！　凄い早さです！！」

ブリッジでは、慌ただしい空気の中、空間歪曲反応消滅魔導法、“アルカンシェル”の発射の最終準備が行われていた

《“アルカンシェル”、バレル展開！！！》

「ファイアリングロックシステム、オープン」

［ウォンッ］

「命中確認後、反応前に安全距離まで退避します。準備を！」

「「了解！！」」

すでに、発射の準備は整っており、後は艦長、リンディ・ハラオウンによる始動機キーの差し込み、発射トリガーを引くだけとなっていた

□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■

そして、軌道上、大気圏外

［……バシュンッッッ！！！！！！！！！！！］

「●▲●▲■▼●◆▲▲●●▼◆▲◆▼●▲▼●▼▲◆●◆◆▲◆
▲●▼▲●▼◆▲◆●▼◆▼▲▲▼◆▼▲◆▼●▲◆▼●▲▼◆◆
◆▲▲◆▼●▲■▼●◆▲▲●●▼◆▲◆▼●▲▼◆▲◆●◆◆
▲◆▲●▼▲●▼◆▲◆●▼◆▼▲▲▼◆▼▲◆▼●▲▼◆◆▲
▲◆▼●ッッッッ！！！！！！！！！！！！！！！」

すでに、体は龍の姿をしておらず、醜い肉の塊のような姿となり、もはや理解不能な生命へと変貌していた

□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□

アースラ、ブリッジ

［……カチンッ］

［ヴンッ……！！］

リンディは、最後の作業、始動キーをファイアリングロックシステムに差し込み、後は、捻るだけ……

「“アルカンシェル”、発ｓ「！！！？　待ってください！！　艦長！！！」！　何が起きたのです！？」

突如、部下の叫びにその手を止め、部下が何が起きたのかを説明を請うた

「防衛プログラム、対魔力防壁を展開！！！　このままでは、“アルカンシェル”は無効化されます！！！」

「なんですって！！！？」

なんと、あのキメラは最後の悪あがきとして、自分が持つ残存魔力を全て使い、バリアを展開させたのだ。これでは、相手はまた、地表へと降り立ち、暴走を……

「（せっかく、皆さんが頑張ってここまで引きつけてくれたのに……！！！！）」

艦長は、顔を歪ませて、悔しさで拳を強く握り締めた。これでは、作戦は失敗してしまう……！！！！　そんあ、屈辱の念が、彼女の思考を支配した……

□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■

軌道上、大気圏外

――――――“デストロイ・フォール”……――――――

［ズガアアア

◆▲◆▼●▲▼●▼▲◆●◆◆▲◆▲●▼▲●▼◆▲▼◆▲◆▼
◆▼▲▲▼◆▼▲◆▼●▲▼◆◆◆▲▲◆▼●●▲●▲■▼●◆▲
▲●●▼◆◆▲◆▼●▼▲◆◆●◆◆▲◆▲◆▼▲●▼◆◆▲ッッ
ッッッッッッ！！！

［グッ……］
「“アルカンシェル”、発射ッ！！！」
［カチンッ］

そして、全てを消滅させる魔導砲を、放った

□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■

海鳴市、結界内、海上

［……カッッッ！！！！！！！！！！！！！］
「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「」」」」」」」」」」」」」」」」

上空で光った……どうやら、成功したらしいな……

《効果空間内の物体、完全消滅。再生反応、ありません！！》
《準警戒態勢を維持、もうしばらく、反応空域の観測をします》
《了解！　っというわけで、現場の皆、お疲れ様でした！！！》

「良かったぁ～～～……（＜ｏ＞）」
「ふぅ。やっと、終わったか……」

そう言って、二人の兄妹（しまい）は、安堵のため息をついた。戦いは、終わったのだと……

「（だが、本当に厄介なのは、こっからだ）」

夜天の魔導書の修復、リインフォースの救済……それをしなけれ、ハッピーエンドと言うわけにはいかなかった

「だけど、今は、疲れた……休んだ後に、皆に言えばいいかしらね……」

そのまま空中で寝転がり、項垂れた……嫌悪感を抱きながらも、人前では女口調でしゃべる、グレイだった……

「やったね、はやてちゃん！！　なのはちゃん！！　フェイトちゃん！！」

「「「うん！！！」」」

［パンッ！！！］

そう言って、四人でハイタッチを決めて、笑顔を浮かべた

「（はう～ん、このハイタッチに参加できるなんて……なんとうれしい誤算！！！　はぁ、癒されるよ～（＊＜＿＞＊））」

ビビの周囲には、またも危ない空気が漂い始めた。闇の書の意思と戦っていた時とは、大違いである

「あ、あの、アリサちゃんとすずかちゃんは？」

《被害が酷い場所以外の結界は解除してるから、元いた場所に戻っ

てもらったから》
「そうですか、よかった……」
「良かったね、なのはちゃん」
「うん、ありがとう、ビビさん」
「もう、ちゃん付けにして、これでも年近いんだから……」
「あ……うん、ビビちゃん」

はうぅ……ゆかりんボイスで名前を言われた……ヤバい、興奮してきた！！／（＊＜∀＞＊）／

自重しろ、妹……

「あははは……は……」
［グラッ……］
「！！　はやてちゃん！！」
［バッ！！］
「はやてちゃん、はやてちゃん！！！」
「どうした！！？　ビビ！！！」
「……はやてちゃんが、急に！！！」

はやてが、急に倒れてしまい、一行は、すぐさま、アースラへと移動した

□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■

アースラ、ブリッジ

そこで、リンディは深く考えており……

「……（にしても、あの光は一体……それに、あの声は……？）」

［……ズキッ！！］

「ッ！！？……？　あれ？（私は、何を考えていたのかしら？　まぁ、どうでもいいかしら）」

杞憂に、終わった……

□■□■□■

青空広がる荒野……

「やれやれ、あのバカは、一体なにを蒐集させたか、もちっと考えろよ、おい……」

そこにいる、かの神は、青空のスクリーンに映る兄を見て、やれやれといった表情で見つめていた

「まったく、俺が広範囲殲滅質量砲の“デストロイ・フォール”を撃ってなかったら、どうなっていた事やら……ま、これはこれでいいタイミングだったけどなw」

クックックッと、彼がいつも浮かべるニヒルな笑みを、晒した

「さてさて、これにて決戦は終わり、あとは、彼らが行う救済の物語を語って、第一章は幕を下ろす。その先は、いったいどんな物語を描くのやr「ダーリ～ン！！！」うわッ！！！？」

［ガバッ］

突如、神に小さい影が抱きついてきた

「な、なんだ、“スノウ”か……脅かすなよ、ビックリしちゃったよ」

「良いじゃありませんか、私はあなたの幼妻ですから！」

「ふぅ。ま、そうだな……んで、どうしたんだ？　急に来て」

「あ、そうだ。彼から伝言、“世界の修正力が活発化しました。しばらく、監視を続けますが、いかがいたしましょう？”　だって」

……珍しいな、アイツが人を使うとは……

「……なんで、アイツが言いに来ないんだ？」
「えっと、あの子と一緒に、差し入れにクッキー焼いて、持って行った時、丁度動き出して」
「なるほどねぇ……そのクッキー、残ってる？」
「もちろんです！！　持ってくる？」

う～ん……

「あとで食べるわ。だから、残しておいてくれ」
「は～い！！　じゃぁ、夕飯の準備してくるねぇ！！」
［フッ……］

そういうと、彼女は風となり、その場から姿を消した

「やれやれ、アイツは元気だな……さてと」

神は、その場から立ち上がり

「どうしよっかねぇ、“世界の修正力”……ま、やることは一つ、だな」
［フッ……］

そして、神も風となり、その場には、誰もいなくなった……

#３０　世界の果てで、謳い続ける二人の姉妹（きょうだい）（後書き）

～～～神の舞台裏～～～

メ「えらく長いわね、今回……まぁ、擬音語とか叫び声とか、それらが一番長く感じる部分なのだと思うけど……」

神「フッフッフッフッ、どうだ？　見たか！？　この俺の大活躍を！！！」

ヤ「素敵でしたわお兄様ぁ～～～？」

神「そうだろう？　そうだろう！？　ふ、フッハッハッハッハッ！！！！」

？「ほんと、カッコよかったよ！！　さすが、私達の旦那様ですね！！！」

神「おっと、自己紹介も無しに出てくるなよ。ほら、ちゃんと挨拶なさい」

？「は～い！！　では、初めまして！！　神様の妻の一人、スノウです！！　これからよろしくねぇ～！！！」

ヤ「一気ににぎやかになりましたわね」

メ「まぁ、これで三人目ね」

神「アンケートに答えて下さった十六夜様、ありがとうございます

！！！　お礼に、今回グレイが使用した武器、“神機”、“ブレイズ・オブ・エグザイル”、“ブースターランス”のどれか一つをプレゼントいたします！！！　“龍刀【斬鬼】”と同様に、そちらのキャラでお使いください」

スノウ（以後、ス）「本当にありがと～！！　私からは、お礼の投げキッス！」

［チュッ？］

ヤ「あら、はしたない子」

ス「さて、じゃぁいきなり仕切っちゃうよ！！　今回のテーマは、これよ！！！」

――――――あの兄妹（しまい）が使った能力について――――――

ヤ「やはり、今回のお題はこれですわね」

ス「それでは、能力説明なので、あの形式で発表します！！　どうぞ！！！」

“レ―ヴァテイル質”

“ヒュムノス”と呼ばれる詩を謳い、それによって世界の構造や性質を自在に捻じ曲げる効果を持ち、奇跡と呼ばれる現象を容易く起こせる、“世界干渉能力”。なんの力も要らない、クリーンでなお且つ無敵ともいえる。集中すればするほど効果が増すが、どんどん無防備になっていく。効果を薄くした場合、謳いながらの戦闘も可能

神「ちなみにだが、今回あの兄妹（しまい）が歌った“パージャ”の効果は、防衛プログラムの行動を制限し、足止めさせる効果だったわけさ。さらに、これの元ネタは“アルトネリコ”というゲームだ」

ヤ「そして、＃２０で妹が言っていた対世界の修正力用能力の一つで、自分達が世界に干渉している時に、無防備となる護衛として、神魔招来（アバター）を。そして、元から武具を持たないキャラに武具を持たせるために、兵装錬成（ウェポン）を……それが、妹が発てた作戦だったわけよ」

ス「これまた、チートだねぇ」

メ「もうバグキャラとして認定されてもおかしくない？」

神「だよなｗ　グレイに至っては、とんでもねぇ突撃思考だったしな」

ス「確かさぁ、あの人、真面目な一般人、だったんだよねぇ？　それがなんであんなことに？」

メ「ファンタジーが、彼（かのじょ）を変えてしまったのよ……」

ヤ「あの部分だけみると、妹の方がマトモに見えてくるわ……」

神・メ・ス「同感」

神「さって、今回はこれでお開きにするぞー」

ス「は～い！！　それでは、読者のみんな、とある兄妹の転生物語、次回もまたみてね♪」

ヤ「では」

神・ヤ・メ・ス「さよなら～！！」

作「今回は、本当に駄文の長文で、申し訳ありませんでした！！！！」

＃３１　事件の終結と救済。夜天の復活と、闇に浸食される者（前書き）

またも、長らくお待たせさせてしまい、申し訳ありませんでした

今回も、１８０００文字という長さで、大変申し訳ありません

なお、今回は終わり方の空気を濁したくないという個人的な思いで、後書きの～～～神の舞台裏～～～は休載させていただきます。次回に今回やろうとした分を載せたいと思いますので、どうかご了承ください

ムーギネーター（十六夜）様、白姫　彼方様、緋水様、ｔｋ様。ご感想、ありがとうございます！！　これからも、今作をよろしくお願いします！！

#31　事件の終結と救済。夜天の復活と、闇に浸食される者

――――そして、とある兄妹（しまい）の兄（あね）は、己を犠牲にし……妹は、無力を嘆いた……――――

第97管理外世界　アースラ、食堂

「……“夜天の書”の、破壊!?」

「そんな!　防衛プログラムは破壊したはずじゃ!?」

声を荒げて言葉を紡いでいたのは、フェイトとなのはの二人の少女……そう、ここは原作通りに、事が進んでいた……

あの戦いの後、倒れたはやてを連れて、魔導師達に非ず、グレイやビビ、そして守護騎士の全員が、アースラに乗っていた。そして、はやてを空き部屋の一つに移し、寝かせている。その間に、リインフォースとのユニゾンが解け、そのまま守護騎士達とはやての看病をしている。その時だった、彼女から、破壊を進言されたのは……

……

そして今、この食堂には、魔導師のなのは、フェイト、クロノ、ユーノ。使い魔のアルフ。そして……転生者兄妹（しまい）のグレイとビビ、七人が、その事について話し合っていた。ちなみに、彼の右足には、斬った部分を補うように、義足が填められていた。無論、彼が兵装（かのじょ）錬製（ウェポン）で生みだした、“機関銃が内蔵されている”義足だが……

《……ねぇ、お兄ちゃん》
《なんだ》
《本当に、大丈夫なの？　その、リインフォースの救済については……》
《あぁ。お前が言うとおりにしなかったから、有る程度難しくはなったが……修正の範囲内だ。やろうと思えばやれる》
《う……》

そう。あの時、ビビが謎の硬直に会い、それが原因で、彼女は、言われた事……“闇の書に吸収される”という事が出来なかった……

《あ、アレは《言い訳はいい。とにかく、出来るには出来る。それだけ分かっていれば、充分だろ》は、はい……》

しょぼくれるビビ……外見では平然を装っているが、心の中は深く落ち込んでいるのであった……

――――もし、自分が吸収されなかったせいで、救済計画が失敗したら……――――

などという、マイナス思考の渦に、飲み込まれていた……と、どうこう言っている間に、守護騎士達がこの場に来た。グレイは、それを待っていたかのように、立ちあがった

「……シグナム」
「は、はい。何でしょうか、姉上殿」
「リインフォースは、今どこにいるの？」
「リインフォースなら、まだはやてちゃんの所に」

「そう、ありがとう」
［カツ、カツ、カツ］

そう言って、グレイは歩きだし、その場から立ち去ろうとした時

「どこへ行くんですか？」

行き先を聞いてきたのは、シグナムの隣にいたシャマルだった……
……

「……リインフォースに会いに行く。ちょっと、用があるからね……」

そう言うと、彼は踵を返し、立ち去った

「……」

ビビは、その場に居座っていた。今、兄ついて行っても、なんの役にも立たないと、思っていたからであった……

□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■

……アースラ、はやてが安静にしている部屋

「……主はやて……」

そこには、はやての他に、リインフォースだけがいた

「赦して下さい。あなたに何も言わず、旅立つ私の事を……」

そう言って、主たる少女の顔を見て微笑み、出て行こうとした時

［ウィーン］

「？」

ドアが開き、そこに、主の家族にして、あの時、自分に告白をした少女の姉……自分に、最後の１００頁を与えた、あの女性が、部屋に入ってきた

「……どこに行こうとしてたの？」

入ってきた直後、彼女から、そんな言葉が飛んできた

「……私は、消え去らなければなりません。私がいては、主に迷惑がかかります」

「……」

グレイは、そんな事を吐く彼女を見据え、ドアの前に立ちふさがっていた

「……アンタがいなくなると、その子が悲しむんじゃない？」

「……えぇ。おそらく、いえ、絶対そうでしょう。主は、私

の事を、救ってくださいましたから……だから、私が消えると言えば、必ず阻止するでしょう」

「……」

グレイは、黙ってその言葉を聞き、今度は、睨みつける様に、彼女の方を見た

「アンタは、それでいいと思ってるの？　主を悲しませてまで、アンタはソレを本気で望んでるの？」

その言葉には、とてつもない程の覇気が込められていた。それは、今の彼女の行動を、否定するかのようなモノ言いであった

「私がいれば……私が動いていれば、無限再生プログラムは、また新たな防衛プログラムを生みだしてしまう。そうなってしまえば、主は再び、呪われてしまう。今度は、前の比ではないかもしれない。ソレを防ぐには、私を……夜天の魔導書を破壊しなければ「御託をぬかしんてんじゃねぇぞ！！！！　私が言いたいのは、夜天の書とかそんなんじゃなくて、“リインフォース”として！！　アンタはどう思ってんのよッ！！！！」な……リインフォース、として……？」

自分の言葉をさえぎり、急に荒々しい口調でどなり散らしたグレイ……だが、その言葉は、彼女の心を、大きく揺さぶった

「主とか、防衛プログラムとか、そんなの関係なしに、アンタ自身はどうなの？　アンタはどう思ってるの？　アンタ自身の“意思”は、どうしたいの？　ハッキリ言いなさい、“生きたい”？　それとも、“死にたい”？　どっち……」

ここまでかと思うほど、彼女は怒気と覇気を含む……凄みを利かせた声で、リインフォースに答えを求めた……

「……私は……私は、道具だ。主を第一に考えｒ「だから、主とか、そんなの関係無しに、よ。アンタという一つの存在に、私は聞いてるのよ……」……」

またも遮られ、そして黙り込んだ……両者の間に沈黙が流れ、それに意味は無いと捉えたグレイは

「……はぁ、質問がちょっと悪かったかしら……じゃぁ、これならどう？　“アンタを修復し、二度と防衛プログラムを生みださず、なお且つ主と共にいられる事が出来る事が可能”と言っても、アンタは死にたいの」

「え……？」

私を、修復する……？　ソレは、どういう……？

「ソレを言われても、アンタは生きたくないの？　主を悲しませたいの？　他の守護騎士達を、アンタの事を心配している子を、アンタを救いたいと言う子を！！　その人達を、悲しませたいの……？」

……私……私は……

「答えなさい。アナタは、どうしたいの？」

私、は……

［ツゥー］

「！！！？」

え……なみ、だ……？　何故だ、なぜ、涙を……

「……ソレは、主の涙じゃないわよ……ソレは紛れもなく、アンタの涙よ」

……私は……私は！！

「……生き、たい……主を、悲しませたく、ない……」

ソレは、今まで心の奥底に封印していた感情。主を想う者の、愛に似た、想いだった……

「……はぁ、最初からそう言えば、こんな無駄な説教をせずに済んだのに、まったく……まぁいいわ」

「だ、だが……出来るのか？　私を、修復など……」

疑問に思うのは当然だ。元の姿が分からず、歪められた基礎構造、そして、致命的な破損……もはや、修復など出来る筈もない

「それについては、そこで寝てる主が目を覚ましてから話すわ。その間に、防衛プログラムが再構築されると厄介だから……はい、コレ飲んで」

「？」

手渡されたのは、薬のカプセルのようなモノ。不透明なので、中に何があるのか分からない

「これは？」
「無限再生プログラムが、新たな防衛プログラムを生みだすのを遅らせるウィルスプログラムよ。錠剤の形をしてるのは、貴方のその体型からして、最も適した形だからよ」
「な、そんなモノが！！？」

こんなモノを飲んだだけで、遅らせる事が出来るだと！！？　まぁ、修復出来ると言っているのならば、それぐらいの事は出来るだろうと思うが……

「ほら、早く飲みなさい」
「あ、あぁ」

そう言われ、ソレを飲み込むリインフォース

……不味い

「良薬口に苦しよ。さてと、それじゃぁ、起きるまで待ちましょ」

そう言われ、二人ははやてが起きるのを待っていた……

だが、途中ではやてが「もう食べられへん」という寝言を言った途端、グレイがベッドを蹴り、叩き起こしたのは描かない方がいいだろう……妹という超変態に殺されそうだからね♪

□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■

その後、魔導師達や守護騎士達、アースラの一部スタッフ（クロノ、リンディ、エイミィら）を食堂に集め、説明をすることとなった

「「「「「「「「「「“夜天の魔導書”の、修復！！！？」」」」」」」」」」

「えぇ、そうよ」

「そんな……基礎構造が歪んで、どうしようも無いはず！！」

「それに、このままの構造では、無限再生プログラムにより、防衛プログラムが再生してしまう……」

「それに、それらのプログラムのプロテクトは、管理局の技術力を以てしても、解除不可能なほど硬いんですよ！」

など、事件の最中に、無限書庫で色々調べたユーノや、守護騎士達から非難を浴びるが……

「まぁ、そうなるわね……じゃぁ、順を追って説明するわ。まず、私がやろうとしている事は、“無限再生プログラム”と、“防衛プログラム”、“転生プログラム”の三つのプログラムの消去（デリート）よ」

「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「！！！！！？？」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」

」」

それを聞いた時、ビビが椅子を倒して立ち上がり

「ちょっと待って。そうしたら、リインフォースが機能不全に陥って……」

“Ａ、ｓ　ＰＯＲＴＡＢＬＥ”のように、いずれ消えて行くんじゃぁ？

「安心なさい。その後に、私が新しく組み込んだ“正常な無限再生プログラムと防衛プログラム”を組み込んでやれば、問題ないでしょ？　まぁ、基礎構造は、さすがに変えるとなると、色々面倒だから、今はそれら二つ、元のプログラムの消去（デリート）と新しいプログラムの組み込（インストール）みをする。で、分かったかしら？」

ソレを来た時、返事が来たのは、アースラの三人と、ユーノだったユーノ、クロノ、そしてエイミィの順に、そのあまりの不可能な複製技術を問うてきた

「……新しい、“正常な無限再生プログラムと、防衛プログラム”？」

「そんなモノ、作れるのか！！？」

「む、無理だよ。それらのプログラムって、こっちでも解析してみたけど、複製なんて出来るような代物じゃないよ！！　管理局の全技術力を以てしても、再現なんて……」

「えぇ、確かに、アンタ達の技術力じゃ無理ね。でも、私はそれ以上の技術を持っているの」

科学と“神秘”。それらを融合させた、強力なデバイス……“タマモノマエ”が有する驚異的な処理能力と、ＡＩとしての優秀さ……それらがそろって初めて為せる技である

「まぁ、実物を見ないと、複製も出来ないから、一時期借りてたん

だけどね」

「……まさか、あの時、貸して欲しいって言ったのは……？」

そう、蒐集活動の最中……彼女（かれ）が初めて介入をした時に……

「えぇ、そうよ。あの時は、ゆっくり話せなかったから、強引に奪っちゃったけど……ま、それはどうでもいいでしょう」

「……だが、その前に……“無限再生プログラム”と、“防衛プログラム”、“転生プログラム”。それらの削除など、可能なのか？」

騎士達の将が、最も重要な部分を聞いてきた。そう、それをどうやって行うのかと言うのだ。先ほども書いた通り、それらには強固なプロテクトが掛かっており、管理局の人間であっても、解除など到底不可能。故に、削除など……

「普通は無理ね。でも、“普通じゃない方法”でなら、出来るわ」

“普通ではない、方法”？

「そう……コレはある意味、賭けのようなやり方だけどね……」

「どんな、やり方なのですか？」

ソレを聞いてきたのは、アースラの艦長、リンディ・ハラオウンであり、この中で、最も権力のある人物だった

「そうね……簡単に言えば、非人道的な方法。人間の脳をコンピュータ代わりにして、処理速度を飛躍的に高め、本来ならばタダのコンピュータでは解析不能なプログラムにハッキングし、ソレをい

じるというやり方よ」

「「「

人間として完成された者であり、法を守る人間として……そのやり方を否定した

「言ったはずよ。非人道的な方法って……」

「他にも、やり方って無いんですか？」

別の方法は……？　それを聞いてきたのは、執務官補佐のエイミィ。だが

「ない。他にも手札があれば、出来るかもしれないけど……あいにく、そんな都合の良い手は無いの。さっき私が言った方法が、現状で唯一、リインフォースを救う事が出来る方法よ」

断言。もはやそれしかないと言った、他の奴を黙らせる。重圧を孕ませた、そんな一撃必落の言葉を、彼は放った……

「……さて、八神」

「は、はい！！！？」

そんな言葉を聞いた後、不意に彼女（かれ）からの声を掛けられた少女は、表情を固くし、声を裏返りながら答えた

「一つだけ聞くわ。アナタは、リインフォースを助けたい？」

「も、もちろんです！！「死ぬかもしれない事が、あっても？」……はい！！」

彼女は、迷いを見せることなく、答えた。“死ぬかもしれない”。

そう言ったにも、関わらずに……

なるほど、覚悟はできてると言うわけか……ったく、ガキのくせ

に、早くから死ぬ覚悟決めやがって……

「……分かったわ。じゃぁ、守護騎士の皆は？」
「無論、我らも主と同じです」
「はやてが無茶すんのに、黙って見てるわけにはいかねぇよ！！」
「えぇ」
「……」（コクン）

騎士達は皆、彼女（かれ）の言葉に、賛成した

「結構。あと……高町、テスタロッサ」
「「は、はい！！」」

次に、彼女（かれ）が声を掛けたのは、二人の少女

「貴方達にも、協力してほしいんだけど……お願い、出来るかしら？」
「は、はい！！　やります！　やらせて下さい！！！」
「私達に、お手伝いできるのなら！！！」

なのはとフェイト。二人も、即答のように答えた。まるで、最初から手伝う事を、決めていたかのように

「な、なのは！！」
「フェイト……」

そんな二人を見つめる二人……友達のユーノと、使い魔のアルフ。
二人が、危険な目に巻きこまれる事を、良しとしていなかった

「大丈夫だよ、ユーノ君」

「アルフも、心配してくれてありがとう」
「「……」」

二人の少女は、心配してくれる二人に向かって、笑顔で答え、安心させていた

「（……なんでここにいる連中は皆、こんなガキの頃から死ぬ覚悟が出来てんだ？　普通は嫌がるか……渋るぐらいはするぞ。こんな決意秘めた眼でやりますなんて、異常だぞ……まぁ、手伝ってくれるなら、良いんだけどな）はぁ」

グレイがそう、二人の事を考え、ため息をついた時、隣に座っていたビビが立ち上がった

「うっし！！　じゃぁ、私も頑張っちゃ「言っておくけど、妹、アンタは無理よ」え？　なんで？」

ビビが決意を胸した時、兄（あね）が、その決意をあっさりと砕いた。無理だ、と……

「アンタ、吸収されてないでしょ？　これはね、夜天の魔導書と接点を持つ人間だけしか、夜天の魔導書とリンクする事が出来ないの。そう、主であるはやて、護衛の守護騎士、意思に吸収された高町とテスタロッサ。そして、蒐集された私とクロノ。これらのメンバーじゃないと、夜天の魔導書の修復は不可能なのよ」

そう。この修復の為に、自分自身を蒐集するという狂行に至ったわけだし……

「……じゃぁ、あの時……」

吸収されろって、言ったのは……その為……？

「えぇ、そうよ」

「……」

ビビは、黙り込んでしまった……まさか、自分が一番改変したかった部分に繋がっている事だとは、知らなかったからだ……確かに、夜天の魔導書改変に必要な事とは聞いていたが……

《……い、今からでも、接点を持つというのは《不可能だ。そんな事をしている間に、防衛プログラムが再構築される可能性がある。諦めろ、お前はただ、黙って見てろ》ッ……》

つまり、自分は……何も、出来ない……？　一番、やりたかった事が……やれない……？

意思の時と同じく、またも、無力感に苛まれるビビ。その間に、話は進められていた

「さて……ハラオウン。ここじゃなくて、もうちょっと広くて、衝撃があっても問題ない場所は無い？」

次に彼女（かれ）が声を掛けたのは、管理局の法を守る者の中で、最もソレを厳しく見るモノ……クロノ執務官だった。彼に、場所の提供をお願いした。そしてそれは、同時にある事を、彼に伝えていた……

……

“アナタにも、協力してほしい”、と……

「……」

クロノは、暫く黙っており、考え悩んだ末に

「……広くて衝撃が起きても問題ない場所、となると……訓練室が適切だ。案内しよう」

協力を、承諾した

「「クロノ｛君｝！！！？」」

「ありがとう、助かるわ」

驚いたのは、艦長と彼の補佐……母親と、同期の親友の二人だった。それは、彼の言動とは思えない言葉が、飛び出してきたからであった

「クロノ。アナタ、どういうつもりですか」

その時、彼の上司であり、母親であるリンディが、彼に言い寄った。それは、上官として、彼が非人道的な行動に出る事を……もう一つは、母親として、彼を心配して……

「艦長。これは確かに、人として在ってはならない事です。ですが、コレは“壊れた物を治す為の事”。ならば、それに協力するのも、管理局としては、協力しても良いと思います」

「で、でも、死ぬ確率があるって……」

「確かに、そうかもしれないと彼女は言っている……だけど、もしこれを行わなかったら、防衛プログラムが再構築され、それが再度暴走し、二次災害が起こる可能性だってありうる。ならば、ソレを防ぐためにも、修復するか、破壊するかをしなければならない…

……破壊することは、本人が断っている為、修復しか出来ない。なら、ソレに協力すべきだと、僕は考えます。それに……これは、個人的な事だけど、僕自身も、彼女を……リインフォースを、救いたい」

「「……」」

クロノの、その決意に圧され、二人とも、何も言わなくなった……

……

「（……はぁ）」

まったく、この世界のガキどもは、なんでこう、ガキっぽくないんだ？　アレか？　アニメの世界だからか？　はぁ、まったく、非常識なガキばっかり……ま、もういい、慣れよう、うん

呆れてもう言葉が無いグレイだった。そしてその後、クロノの案内により、一同は、会議室に向かって行った……

皆が決意と覚悟をしている中、ただ一人、ビビだけが、力があるのに、何も出来ない無力感に侵され、落ち込んでいた。今から、戦場に向かう皆に、要らぬ気遣いをされないよう、悟れぬように……

□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■

アースラ、訓練室

全員がさっそくその場に入って行くと、直ぐにグレイは指示を出し、全員をある陣形に配置した。グレイとリインフォースが向かいあい、その間には、夜天の魔導書を。そして、グレイの後ろを半円形を描くように取り囲み、グレイに向かって右側から……クロノ、フェイト、なのは、はやて、シグナム、ヴィータ、シャマル、ザフィーラ……の順に、

「いい？　アナタ達はそこで、デバイスを構えているだけでいいわ。他の作業は、全部私が行うから。あと、はやてとザフィーラ。アナタ達はデバイスを持ってないから、私が発動させる魔法陣に手を置くだけで良いわ……あと、やっている間、激しい頭痛に見舞われると思うから、その辺り、覚悟しておいて」

「「「「「「「「「「はい！｛応ッ・了解｝！」」」」」」」」」」

グレイの指示に従い、全員が答え行動を実行に移した

「「「「「「……」」」」」」

その様子を各々が想いを抱いて見つめる五つの人影……ユーノにアルフ、リンディ、エイミィ、そして、ビビ……

「……」

ビビは、表情にこそ出てはいないが、心の中では、悔しさで満たされていた……

自分は、チート転生者の筈……原作の事を、誰よりも熟知しているはず。なのに、何も……何も、出来ない……そんな後悔の念で、彼女は苦しんでいる。そんな事は露知らず、準備は着々と進行していた

「さてと……“タマモ”、“シュテン”、準備はいいわね」

『無論です、主』

『当然でござる、我が宿り手よ』

彼は己(かのじょ)のデバイスに呼びかけ……“タマモノマエ”と“シュテンドウジ”が、それに答える

「……リインフォース。貴方も、準備はいいわね」

「あぁ……よろしく頼む」

「分かってるわ……それじゃぁ、これより、“夜天の魔導書”、及び管制人格、“リインフォース”の修復作業を行う。全員、歯を食い縛りなさい、でないと、耐えられないわよ」

「「「「「「「「「「はい！{応ッ・了解}！！」」」」」」」」」」

全員が答えた後、グレイはしゃがみこみ、地面に右手……タマモが埋め込まれている法の手を置き

「タマモ、各デバイスとのリンクを開始。リンク対象、“レイジングハート・エクセリオン”、“バルディッシュ・アサルト”、“S2U”、“レヴァンティン”、“グラーフアイゼン”、“クラールヴィント”」

『了解、リンク開始』

［キィィィィィィィィィィィンッ……！！！］

彼女が作業を行い始めると、彼の足もとに魔法陣が展開し、そこからプログラムの回線のように、各員の足もとに展開している魔法陣に直結した。それは、あの“別れの魔法陣”をさらに大きくしたような感じだった……

「つづいて、シュテン。各要員との“ブレインリンクシステム”を起動。対象、“八神はやて”、“高町なのは”、“フェイト・テスタロッサ”、“クロノ・ハラオウン”、“シグナム”、“ヴィータ”、“シャマル”、“ザフィーラ”」

『了解でござる。皆よ、覚悟せよ！！』

と、シュテンがまるで人を殺すかの言葉を言った直後

「「「「「「「「「「ズキッッッッ！！！

ングを開始」
『了解。夜天の魔導書、及びリインフォースにハッキングを開始します。接続……完了』
「ッツ！！！！！！！！！　グウウウ

「再生されるより早く削除しなさい！！　処理速度が間に合わない場合は、私の脳も使いなさい」

『だが宿り手よ、それをすれば、他の作業に影響が！！』

「やれっつったらやりなさい！！！　命令よ！！！！　それと、戯言をぬかしてる暇があったら、作業に集中しなさい！！！」

『御意。解除行動を続行、“マスター・グレイ”とのリンクを強化。処理速度、加速』

「キイイイ

れながらも、必死にその痛みに耐えていた

「クッ……ッ！！！！」

［ポタッ、ポタポタポタッ……］

グレイ本人もまた、皆と同様の傷みに、必死に耐えていた。その表情からは、あまりそうは見えないが、彼（かのじょ）の額や、体中から汗が滝のように流れ落ち、彼（かのじょ）のいる地面に、水溜りのようなモノを出していた

『……ッ！！！？　主！！！』

「どうした、タマモ」

『“防衛プログラム”が、再構築を始めました！！！　このままでは、リンクしている全員が、防衛プログラムのアタックを受け、最悪……』

「マジ、かよ……」

クッソ！！！　寄りにもよって、こんな時に……！！！

「ウィルスは、どうしたのよ……確か、アレの効果はまだ持続出来る筈！！」

『それが、どうやら抗体を創り上げたようです。同じ手は、もう通用しないかもしれません』

「ッ……防衛プログラムが機能を開始する程に再構築するまで、後どれくらいかかる」

『見積もって、凡そ３９２秒、約六分』

「シュテン、プロテクトの解除は」

『やっておるが、解除したらまた新しいのが増えるわ。それが最初のよりも強固になって出てくるから、どんどん遅くなる一方でござる』

「チィッ、悪あがきを……」

プログラムに、生存本能があるかのように思えてきたグレイ。一体、これをこんな風に改悪した奴は、なぜ、このようなシステムを作った？　一体、なんの目的で……！！！　そう毒づく間に、始まったタイムリミットが近づいてゆく……

後、３６５秒……

「「「「「……」」」」」

外から、その作業を注視する五人……ユーノ、アルフ、リンディ、エイミィ、そして、ビビ……

「……だ、大丈夫、なのかなぁ……？」

「さ、さぁ……？」

「フェイト……頑張って……！！」

「……クロノ……」

皆が皆、その作業の成功を、ただ願っていた……アルフは、主を応援し、リンディは、息子の心配をする、母親の表情になっていた……

そんな中、ただ一人、罪悪感にさいなまれているのが一人……ビビは、その作業を見て、悔しさと、虚しさで、涙が出そうになっていた……

「……（皆、苦しそう……はやてちゃんも、なのはちゃんも、フェイトちゃんも……シグナムにヴィータ、シャマルにザフ

ィーラ、クロノ、それにリインフォースも……お兄ちゃんも……
……）」

皆、皆、苦しんでる。皆が頑張っているのに、自分は……

なんで……なんでなの!!!?　なんで、私はこんなに、無力、なの……?　私は……私はなんで、こんな力の無い、人間なの?　なんで、チート能力を持っているのに、ソレを生かせないの!?　なんで、私は何もできないの!!?

なんで……なんで、なんで!!!?　なんで、私は……こんなに“弱い”の!!!?
強いと思っていたのに……こんなチートな能力、誰も考えないはずなのに……どうして、どうして!!!!!

［ツゥ……］

嫌だ……私は、こんな自分が嫌!!　何も出来ない、自分が嫌い!!!!　皆が苦しんでるのに、私だけが、こんな……こんな、場所に……

「（私……私、は……）」

［ポロッ、ポロポロッ……］

……無力な少女は、こらえていた涙を、とうとう、流してしまった……それは、押しとめられたダムが決壊したかのように、とめどなく溢れだし、彼女の可愛く整った顔は、涙でその美を、失わせていた

――――私は！！　ただ助けたい！！！　苦しんでいるあの子たちを！！！　助けたいだけなのに！！！！――――

無力な少女は、心の中に、自分の“想い”をぶちまけた……

助けたい、私が愛するあの子たちを、救いたい！！！　その“想い”を、少女は抱いた……

そして、“想い”は紡ぐ……

「……♪」

「「「「！？」」」」

「「「「「「「「？」」」」」」」」

「（コレは……？）」

……詩（ヒュムノス）を

「……“ヒュムノス、‘ＥＸＥＣ―ＣＨＲＯＮＩＣＬＥ―ＫＥＹ／．，”」

それは、想いを具現化する魔法（うた）

「？Ｗｅｅ　ｋｉ　ｒａ　ｃｈｓ　Ｃｈｒｏｎｉｃｌｅ　Ｋｅｙ　ｅｎ　ｇｒａｎｄｅｅ　ｓｏｓ　ｄｉｕｓ　ｙｏｒ．［尊い貴方を

守護(まも)る為　クロニクルキーを奏でよう」？」

「？Ｗｅｅ　ｋｉ　ｒａ　ａｒａｕｓ　ｔｅｓ　ｓｏａｒｅ　ａｎ　ｇｉｕｅ　ｍｅａ　ｉｅｍ．［この身の犠牲と引き換えに　今この詩を捧げよう］？」

それは、子守唄……使命を受けし者が謳いし、静かな詩(ヒュムノス)

「？Ｗａｓ　ａｕ　ｇａ　ｗｈａｉ　ｐａｕｗｅｌ　ｆｅｒｄａ　ｅｎｔｅｒ　ｗｈｏｕ　ｎａ　ｎｅｅｄｌｅ　ｓｏｒ，［何故　力は　無欲な人に宿るのだろう］？」

「？ｅｎ　ｗｈａｉ　ｐａｕｗｅｌ　ｇｅｕｎｊｉ　ｙａｓｒａ　ｗｈｏｕ　ｎａ　ｓｅｎｊｕｅ　ｓｏｒ　ｔｏｕ　ｚｕｉｅｇ．［何故　力は　諍い望まぬ優しい人を苛むのだろう］？」

「？Ｗａｓ　ａｕ　ｇａ，Ｄｉａｓｅｅ，Ｐａｕｗｅｅ，［神の子よ　力の子よ］？」

「？ａｉｐｈ　ｙｏｓ　ｄｅｌｉｊ　ｚｕｉｅｇ，ｅｎ　ｎｅｅ　ｄｌｅ　ｅｔｅｒｎｅ　ｆａｌｆａ，［もし貴方が争いを厭(きら)い　永久の安寧を求めるなら］？」

「？ｓｌｅｐｉｒ　ｔｅｓ　ｐａｕｗｅｌ　ａｎ　ｈｙｚｉｋ，［力と　そして肉体を　共に眠りへ就かせなさい］？」

「？ｆａｔｅｒｅ　ｔｅｓ　ｐａｕｗｅｌ　ｃｈｓ　ｄｅｌｅｉｒ，ｅｎ　ｏｕｓｙｅ　ｙｏｒ．［己が力が禍となり　貴方の身さえも蝕む前に］？」

その詩(ヒュムノス)を、無力の少女は謳う。手を合わせ、祈りをささげるように……その詩(ヒュムノス)が、遥か天空(そら)に響くように。その祈りを、奇跡にするように……

「？　これは……ビビちゃんの、歌……？」

「なんや、暖かくて、気分がすっきりする歌やな……」

「……すごく、キレイで、素敵な歌……」

三人の少女……はやてとなのはとフェイトは、その詩を聞き惚れ、気持ちを落ち着かせていた……

他の皆も同じだ。騎士たちは、まるでさっきまでの苦痛が嘘のように和らいでいくのを感じ……

リインフォースも、苦痛が消えて行くのを感じ、穏やかな表情をし……

クロノは、集中を保っているのか、苦痛の様子は無く、ただ真剣に、グレイの作業を見続け……

見守る四人は、目を丸くして……苦しむように、悲しむように、喘ぐように謳う、ビビの姿を見つめた……

そして、グレイは……

「（コレは……“詩（ヒュムノス）、エグゼク・クロニクルキー”？　なぜ、この詩を……ッ！？　そうか。クロニクルキーは、“封印の詩（ヒュムノス）”。それなら……）」

落ち着いたことで、他の思考が出来ようになり、グレイは何故、あの妹がこの詩（ヒュムノス）を謳っているのかを考えた……

『……！？　主！！　防衛プログラムの再構築が停止しました！！』

『宿り手よ！！　無限再生プログラムのプロテクトの再生も止まったぞ！！』

そして、自身が持つ二つのデバイスにより、その成果を聞いた。これは、イケると

「よし、今のうちよ。さっさと事を進めるわよ！！」

『了解』
『御意！』

そして、一気に決めるために、行動を開始した

［キイイイ

彼の右腕と左腕……その手に埋め込まれている、文字通り、彼の腕は、己の主の命に従い、最後の作業をこなした……

『……インストール、完了。夜天の魔導書、及びリインフォースとの接続を解除します』

『並びに、八神はやてに管理者権限を返却。そして、“八神はやて”、“高町なのは”、“フェイト・テスタロッサ”、“クロノ・ハラオウン”、“シグナム”、“ヴィータ”、“シャマル”、“ザフィーラ”とのリンクを解除。皆、良く頑張った！』

そして、全てが、終わった……

「「「「「「「「「ッ！！！？　ハァ、ハァ、ハァ……」」」」」」」」」

息が上がっている全員。皆、その場にへたり込んだ……

「はぁ、はぁ、はぁ……皆、お疲れ様。無事、修復は成功よ。もう、夜天の魔導書は、暴走することはないわ」

グレイがそういうと、全員が笑顔になったが、あまりの疲れからか、声を出して喜ぶ事は出来なかった……

「ありがとう、協力、感謝するわ……」

感謝の言葉を、激痛に耐えきってくれた皆に贈ると

「……ッ……」
［ドサッ……］
「「「

ん」
「は、はい」
「こっちで暫くビビを看ていてくれないかしら？」
「え、えぇ、分かりました」
「起きたら、家に戻って来いって言っておいて。じゃ、またね」
［バシュンッ！！！］
「「！！！？」」

そう言うと、彼女（かれ）は急に消えた……否、転送をしたのだろう。しばらく、その場で呆けた後、全員に休むように伝え、ビビを、空き部屋の方に搬送した……

皆、安堵の空気に、包まれた……

□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■

ある兄妹（しまい）が使っているマンションの一室。転送ポータルルーム

［ブウゥゥゥゥン……バシュンッ！！！］
「ッ……ふぅ、只今っと……」

彼（かのじょ）は、自身の家に帰った後、すぐさまバスルームに向かって行った。

その時、ふと時計を見ると……時刻は、ｐｍ１１：３２……

「ふぅ、夕方の五時に出たのに、偉く長く感じたな……六時間と半。やれやれ……」

結構、長く感じた一日だった……そのまま、窓から見える外の風景を見ると、そこには、いつもと変わらぬ、華やかなネオンが光るだけだった

「……あんだけドンパチやっても、外には一切影響ないって……すげぇ名、魔法って……」

何事もなかったように広がる世界。それは、紛れもなく平和な街並みであった……その様子にため息をつき、上着を脱ぎかけた時

［ズキイィィィ

□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■

バスルーム……

［サアアアアアアアアアアッ……］

「ウ、ウオエ、ガ、ガハァ……ウプッ、ウオォォォ……ッツッツ！！！！！！！？？？」

彼は、吐き気、頭痛、そして目眩に苦しみながら、頭から一気に冷水をかぶっていた。冬場の冷水はアレだが、今の彼には、それが丁度良かった……

頭が、目が、口が、耳が、首が、手が、指が、足が、腕が……体が、焼けるように熱い。まるで、真夏の炎天下にいるような、そんなのよりも、もっと熱い……マグマの中心にいるような……そんな熱さが、彼の体を蝕み、苦痛を抱かせていた……

「ッツッツ！！！！！！！！！！！？？？――――ッツハァッ！！！！　ハァ、ハァ、ハァ、ハァ、ハァ、ハァ、ハァ、ハァ、ハァ……」

急に、苦痛が和らぐと、彼は、その場にへたり込み、息を整えようと、呼吸を繰りかえす……

『主。“無限再生プログラム、及び、防衛プログラムのシステムへの癒着”が完了しました』

突如、彼の右腕から、声が放たれた……削除したはずのプログラムの、システムへの最適化が完了した、一言だった……

「……あぁ、分かった」

その報告を聞き、彼は、右足の義足を外した……途端

［グジュグジュグジュッ！！！！］

「ッッ！！！！！……ふぅ」

斬れた部分から、触手が生え、それが足の形をなし……彼の足は、見事に“再生”したのだ

「……こりゃすげぇな。ってか、これじゃぁ本当にバケモンだな」

完全に人間では無くなった自身に自嘲の笑みを飛ばし、またも流した汗を洗い流して、バスルームから出て行った……

□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■

リビング

「よう。相変わらずおもろい事ばっかやらかすなぁ、お前は」
「……」
そこには、ソファーに腰掛けている、一人の男が……どうやら、招いた覚えがない客がいるようだが、無視しよう
「おいおいおい、無視すんなよ！！！　ほら、差し入れ」
［ヒュッ！］
「……ありがと」
［パシッ］
受け取ったのは、スポーツドリンクだった。丁度汗を？いたばっかだったから、丁度良い
「俺様って、気がきく男だと思わな～い？」
「うるせぇ。で、今回は何の用だ、クソ神」
「いやいや。“自分の身を犠牲にしてまで、妹の願いを叶える兄”に、尊敬と称賛の声を届けに来ただけさ」
「……」
「まさかねぇ、“無限再生プログラム”と、“防衛プログラム”を“自身の身に取り込むなんて”、誰も考えないよ、うん」
「あっそ……」

そっけなく答えるグレイ……だが、なぜ、消去したはずのプログラムが、なぜ残っているのか……？

「“無限再生プログラム”。名の通り、無限に再生されるプログラム。故に、削除は如何なる力を以てしても不可能。因果を変えない限り、な……他のも再生させるわ、自分も再生させるわ……厄介かつ、難解なプログラムだねぇ」

「仕方ないだろ。つか、あんなプログラム考えた奴は本当に天才だな。実質、あの“新・無限再生プログラム”も、所詮は劣化コピーにすぎんしな」

手渡せたスポーツドリンクを飲みながら、彼は、自身の作ったプログラムを嘲った

「だからって、削除が無理だから、自分の中に移動させるって……アホだなテメェw」

「それこそ仕方ない事だ。そうでもしねぇと、あんなの夜天の魔導書から引き離す事が出来なかったんだからな」

更に言えば、それを行うには、自分一人の脳だけじゃ出来なかったから、アイツらに協力してもらったんだがな……

「それに」

「？」

「自身の強化にもつながるからな。コレ、以外と役立ちそうだ。防衛プログラムも含めて、な」

「イカレちまってるのにか？　特に防衛プログラムなんて、あんな不良品だぞ？」

起動したらすぐさま暴走し、周りを取り込む欠陥品。更に、いじろ

うとすれば、それでも暴走する……それは、爆弾を抱えているのと同じだ

「さぁな……まぁ、改良すれば良いだけだ。暴走する要因を取り除けば、少しはましになるかもな……」

「かもねぇw」

「……」

なんでコイツは、人の神経を逆なでする言動を……まぁ、もう慣れ切ったけどな

「はぁ、もういい、寝る」

「おう！　おやすみ～（@＾＾）／~ ~ ~」

「……」

［タッ、タッ、タッ、タッ、タッ……］

そして、自室の方に向かって行ったグレイ。リビングには、神様と呼ばれるモノしかいない

「……さて、読者の皆様方、いかがだったでしょうか？　“魔法少女リリカルなのは　～とある兄妹の転生物語～”、その第一章は……いやはや、なんとも奇想天外、予測不能、何が起きるか分からない。そんな物語を、ご堪能できたであろうか。クックックッ……」

神は、ソファーに座りながら、組んでいた足を組み直し、組んでいる腕を外し、虚空に肘を突き、頬杖をしながら、前を見た

「さてさて、次章からは、Ａ、ｓの後日談の後、Ａ、ｓ　ＰＯＲＴＡＢＬＥの出来事を挟み、Ａ、ｓエピローグまでを、描いていくつ

もりだ。でもその前に、次回はちょっとした小話を入れてみようと思う。番外編と言う奴さ。次章も含め、ぜひとも、お楽しみ下さい……クックックッ」

彼特有の、ニヒルな笑みをしたまま、頬杖をしていない方の腕を、空に向けた

「さぁ、物語を描く筆は、未だ彼の兄妹の手に在り。はたして彼らは、その羊皮紙に、その筆を以てして、如何なる物語を描くのだろう……」

さぁ！！！！　物語を続けようか！！！　とある兄妹の転生物語を！！！！！！

“魔法少女リリカルなのは　～とある兄妹の転生物語～”　第一章、完

#31，5（番外編）　神ノ力。ソレハ全テヲ圧倒シ、如何ナルものニモ触レラレナイ

今回は番外編で、神様メインのお話です。グレイやビビは一切出てきませんのであしからず

あと、独自設定が含まれておりますので、注意してお読みください

ムーギネーター様、白姫　彼方様、あんぎゃーす様、未土井無視様、緋水様、赤坂七夕様、ｔｋ様。たくさんのご感想、ありがとうございます！！！

#31，5（番外編）　神ノ力。ソレハ全テヲ圧倒シ、如何ナルものニモ触レラレナイ

――――トアル兄妹（シマイ）ノ物語ガ描カレテイル最中、鎮座セシ神ハ、
己ガ刃ヲ振ルウ……――――

……スティン兄妹（しまい）が、闇の書の闇との戦いが終わり、アースラへ行った時……
第９７管理外世界、通称地球……太平洋海上

「……ここか」
「そうみたいね。正確には、ここから少し遠い場所にある島国らしいわよ」

海上には、ある二人の男女の姿があった……二人の姿は、まるで騎士の鎧のような姿で、その二人が放つ気配は、とてつもない程の覇気が込められている

「にしても、こういう形でも君と肩を並べて戦う事になるとは思わなかったよ、“オリヴィエ”」
「そうね、“クラウス”。なんだか、昔が懐かしいわね……」

二人の影……それは、王と呼ばれた者達であった
古代ベルカ諸王時代。彼女達は王と呼ばれた存在だった……

女性は、“聖王”と呼ばれた者、“オリヴィエ・ゼーゲブレヒト”
男性は、“覇王”と呼ばれた者、“クラウス・G・S・イングヴァルト”

二人とも、古代ベルカの中では最強の存在として、後に“英雄”として語り継がれてきた存在……そんな彼らが、何故ここにいるのか……

「さて、昔を懐かしむのはもうやめましょう」
「あぁ。今は、我々に課せられし使命を果たすだけ……」

突如現れし、世界にとっての異分子の排除……
そう、彼らの魂は、死した後に世界と契約し、この世界の抑止力……世界の尖兵、“英霊”となっていた……
標的は、とある兄妹。彼らが行った、あの嘔……アレは、世界を崩壊させかねない程の力を秘めている。そんなモノを放っておけば、いづれ世界は……故に、世界の修正力は、彼らの排除を命じたのだ

「さて、それじゃぁ急ぐか」
「えぇ」

そう言って、彼らは動き出「ヘイユー！！　そこのコスプレカポー！！！　俺と一緒に遊ばなぁ～い？」
「「！！！？」」

突如、上空から陽気な声が聞こえ、二人は身構えた……
声を掛けたのは、見た目は２５歳ぐらいで、黒いＴシャツに黒いジーンズ、そして黒い茨のようなラインが入った白いコートを着ており、痩せてはいるが、体の肉付きは良く（言わば痩せマッチョ）、

手足は長く、赤いボサボサの髪に、顔はイケメンと呼ばれるくらい華奢な青年だった……

「おい、プロローグの所をただコピペしているだけじゃねぇかよ。真新しいのにしろよ、まったく……文才の無い作者め……」

「な、何を言っているのだ……？」

「というより、どこに向かって誰に話しているの？」

「おっと失礼。いきなり話しかけておいて、このような態度は気に障るよな、うんうん」

彼は、わざとらしく首を頷かせながら返答した

「……貴方は、どちら様でしょうか？」

問うてきたのは、オリヴィエの方だった。そして、その質問には全ての意味を含ませていた。それはそうだ。彼女達は今“海上”にいる。それは、自分達は空に浮いているという事。それでいて、彼は自分たちよりも上にいる……それも、いつのまにか背後を取っている……

つまり、彼は自分達の事を知っている存在なのだと……

そして、この質問……それを直訳するとこうなる

なぜ、自分達の前に現れたのか？　と……

「ふむ……そうだなぁ……まぁ、言えるのは一言かな？」

そう言って、彼は二人と同じ高度に降り立ち、満面の笑顔で一言

「お前らの邪魔しに来たw」

刹那

［［バッ！！！］］

二人の王は、戦闘態勢を取った。この男は、我らの邪魔をするために来た。それは明らかな敵対宣言。そうだと分かれば、やる事は一つ

「邪魔などさせない！！」

「世界の意思を、捻じ曲げる訳にはいかない！！」

そう言う中、彼……そう、“彼らの標的となる存在を転生させた男”は……

「いいよぉ♪　出来るモンなら、やってみな……」

そう言いながら、彼は左腕を真横に伸ばし

「おい、久々のバトルだ。そろそろ起きろ……“黄昏暁（たそがれのあかつき）”」

『そう……了解しました、愚かな主よ。偽装コーティング、解除』

［パシュンッ］

「「！！？」」

二人は、突如有られた襲撃者の左腕をみて、驚愕した……そう、彼の左腕が、いきなり機械仕掛けの腕へと変貌し、なんと声を放っているのだ。そして、己が知識の中から、それが何なのかが分かった

それは、デバイスであるという事

『本当に久しぶりの戦闘ですね。色々と鈍っているのでは？』
「さぁ？　とりあえず、いっちょかますぞ！！！」
『はいはい、分かりました』

そして、襲撃者も戦闘態勢を取る……

「悪いが、いきなりトップギアで行かせてもらうぜ！！　来い、“万死ヲ刻陰セシ虹”！！！」
［バシュンッ！！！　ジャギンッッッ！！！

［ブンッ！！！］
「！！！！？？」

襲撃者は、体を身軽そうに翻し、覇王の攻撃を軽く交わした

「おいおい、その程度？　そんじゃ、次はこっちの番だなｗ」

武器を構え直し、再び突進を繰り出そうとした時

［バババババババババババババババババババババッッ！！！！！！！！！！！！！］
「ん？」

突如、周りに数人の騎士が現れ、襲撃者を襲った。だが

「あらよっと♪」
［ブルンッ！！！！］
［ザザザザザザザザザザザザザザザザザザザザザザザザッッ！！！！！！！！！！！］

一閃。たった武器を一回振るっただけで、周りに現れた数人の騎士が真っ二つになり、海に沈んだ

「「……」」

二人の王は、唖然とした。なんだ、コイツは……仮にも、いまのも自分達と同じ英霊と呼ばれる最強の騎士の筈。それが、たった一振り。たった一振りでなぎ倒されたのだ

「おいおい、この程度かい？　ほらほら、もっときなよ！！！　千

人位さぁ！！！！」

挑発するかのように両手を広げ、無防備な体を晒した

「「「

『はいはい。“ウェポンレジスターシステム”、“フロートウェポンシステム”、起動開始。オーバードライブ、“ハザードモード”、展開します』

［［［［［［［［［［［［［［［［バシュッ！！　ジャギンッ！！！！］］］］］］］］］］］］］］］］

突如、彼の左腕のデバイスから光が飛び出た後、襲撃者の周囲に、大鎌、双剣、大剣、刀剣、銃剣、護拳、重槍、呪杖、魔典、妖扇、施弓、剛斧。そして、双銃……それら１３種類の武具が出現した。更には、それらの武具が、まるで意思を持つかのように、その場に浮遊していた……

「その覚悟とは……死ぬ覚悟だよ～だｗｗｗ」

笑いながらそう答えた直後

［［［［ザシュンッ！！！！］］］］

「「「「ッ！！！？」」」」

襲撃者の近くにいた４人の騎士の体が、宙に浮かぶ大鎌、大剣、刀剣、剛斧によって切断され、上半身と下半身の二つが、海へと沈んだ

「き、貴様！！！」

「よくも我らが同胞を！！！」

「全軍！！！　迎撃体制を取れ！！！　奴を確実に殺す！！！」

「「「「「「「「「「オォォォ

「良いね良いね、最高ぜよ！！！　まさか、こんな熱烈な歓迎を受けるなんて……う～ん、モテる男は辛いよ」
『介入して良かったですね、愚かな主。久々の無双ですよ、腕が鳴りますか？　そうでしょう？　そうじゃないんですか？　そうですよねぇ。そうでなければ貴方ではありませんからねぇ。フッフッフッ』
「だなｗ　さってと」
［チャキッ］

そう言って、異形の大鎌を持ち直し、その動きに連動するかのように

［［［［［［［［［［ジャギンッ！！！］］］］］］］］］］

周囲に浮遊する武具も、戦闘態勢へと変わっていった

「さてさて……世界の意思よ、英霊の貯蔵は万全か！！？　なんてなｗｗｗ」
［ダシュンッ！！！］

虚空を蹴り上げ、英霊の群れの中へと突撃していった……

「ヒーハーッ！！！」
［ザンッ！！！］

一閃。近付いてきた一人の英霊を、その異形な大鎌で切り裂き、真っ二つにして、海に落とした

「@９９５に～ん♪」

『それはそれは、まだまだ気の遠くなるような数字ですね。アッハッハッハッ』

彼も、彼のデバイスも、“壊れていた”

「さぁ～って、次行ってみよ～（＊＜＿＞＊）／」

［ダゴンッ！！！］

「グホゥッ！！！？」

陽気な口調で、義手の左手の人指し指を相手に突き付けると、周囲に浮かぶ銃剣が火を噴き、英霊がまた一人、死に墜ちた

『さぁ、泣きなさい！！　逃げて地面をのたうち周りなさい！！！　飢えた畜生のように！！　哀れな餓鬼のように！！！　ねぇ、愚かな英雄よッ！！！！』

［ザンッ！！　ザザンッ！！！　ザザンッ！！！！　ザザザザザンッッ！！！！！！］

「「「

！！！

「なんて、戦闘力……」

二人は、襲撃者の力を目の当たりにし、驚嘆と、戸惑いの貌を浮かべた

アイツは、普通ではない。異常の中の異常だ

「……！！　オリヴィエ。彼らが戦っているうちに、“アレ”を」

「！！！　えぇ、分かったわ」

そして、二人はあの襲撃者を倒す手段を練る……

その頃、襲撃者は……未ダニ、イカレテイタ

「おいおいおいおいおい、こんなに一方的な無双、ひっさしぶりじゃね！！？」

『あらあらあら、愚かな主。しばらく戦っていないのに、久しぶりもクソも無いわ。でも、確かに久しぶり……ヤバい、ゾクゾクする！』

そういうと、彼の左腕の義手が、震えだした

『キテる！！　キテるわ！！　グンジュン出てる！！！　穴という穴からドッパドパ溢れだしちゃってキテる！！！　そう、今の私は

クィーンオブフルーティ……デバイス界のマン！！　ゴス、チンッ！！！！』

「おいおいおい。どうしたんだ！！？　今日は何時になく絶好調だな、おい！！」

『何を言ってるんですの？　私はいつでも絶☆好☆調よ！！！　卑猥で淫らでエロスでしか頭が構成されていない、愚かな主と一緒にしないで。穢れるわ』

「おいおいおい。ならなんでお前は俺のデバイスなんだ？　俺にとってお前は左腕なんだぞ？　左腕がそんな生意気でいいのか？」

『いいのよ』

「だ、断言した！！？　コイツあからさまに断言しちゃったよ！！？　さすが自称、外道デバイス！！　伊達に何千何百何十何京年も俺の左腕やってないな！！！」

『あらあらあら、そんなにやってるからこそ、外道の道に至っちゃったんじゃない、そう、私はデバイス界の「そのネタさっきやったろ！！」……お、愚かな主が、突っ込んだ……だと！！？』

「おいおいおい、褒めるなよ、照れさせるなよ、困らすなよ、お代か～ん♪」

訳の分からない会話をする一人とデバイス……当然、そんなものを見ている騎士達にとっては、不愉快でしかない

「キサマァァァァァァァァァァッ！！！！」

「殺してやる！！　墜ちた同胞の仇を！！！！」

当然、怒り狂うはずだった

「おっと、危ないぜ」

［ダダダダダダンッッ！！！！！！！］

「「「「グアァァァァァァァァァァァァッッ！！！！！！

！？？」」」」

彼が言った直後、騎士の背後から双銃が弾丸を乱射し、四人が墜ちた

「だから言ったのに……もう、人の言う事はちゃんと聞かなきゃ、ダメでしょ♪」

［［［ズシュッッ！！！！！！］］］

「「「グオォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォッッ！！！！！！？？」」」

またも、背後から施弓が矢を射り、三人の騎士を貫き殺した

「ヒャーハッハッハッハッハッハッハッハッハッハッハッ！！！！！！　軟弱ッ！！！！　非力ッ！！！！　弾丸や矢一発で逝くとは！！！！　テメェらの装甲は粘土細工か！！！！？」

『愚かな主ぃ～、それは当然ですよぉ～。だって、攻撃全部に一撃即死効果付けてますから』

「おいおいおい、そんな面白い事してたのかよ！！　さっきの俺の言葉がバカみたいじゃねぇか！！　せっかく決めたのによ！！！！」

『あらあら。そうでもしないと、私の鬱憤が晴れないの。なんども攻撃して倒すよりも、こうやって楽に殺せるようにした方が、ストレス発散になるんだから』

「それ、お前のだろう？」

『当然。愚かな主は欲求不満になって、干からびて餓死しなさい』

「欲求不満？　ないない、なぜなら俺は……」

［スッ……］

またもおかしな会話を始めたかと思えば、彼は右腕を英霊の群れに向けて

「この世界で起こる事の全てが、楽しくて楽しくてしょうがねぇからよぉッ！！！！」
［［ウォウォウォウォンッ！！］］
彼の周囲に、“虹色に輝く”球体が現れた。それは、この世界の魔法で言うと……“フォトンスフィア”に似たモノ
「“トワイライトランサー”！！　ファイアッ！！！！」
［［バシュバシュバシュッッ！！！！！！］］
［［［［［［［［ズドオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオンッッッ！！！！！！！！］］］］］］］］
「「「「「「「「「「「「「「「「グアアア

オオオオ

いいのか！！？」
『いい……くないわね』
「今度は否定したよ！！？　自分の事否定しちゃったし！！！」
……あのぉ、話変わってません？
「おっとイケねぇ、そうだったそうだった。ありがとな、地の文」
『はぁ……じゃぁ、“亂世エロイカ”、なんてどう？』
「おぉ！！！　“アリ○ロ”の曲か！！　いいねいいねぇ。よし、それに決定！！！　さっさと掛けろ！！！」
『はいはい。はぁ、めんどくさいわぁ……では、ＡＬＩＰＲＯＪＥＣＴ　Ｎｕｍｂｅｒ　ｉｓ　“Ｒａｎｎｓｅ　Ｅｒｏｉｃａ”，Ｍｕｓｉｃ　ｓｔａｒｔ！！』
「嫌がってる割にはノリノリだなおい！！！！」
「――――♪」
そして、その場に音が流れた。だが、その音楽は、デバイスから流れてはいなかった。海、空……どこからともなく、その音が流れていた
「ううん……いいねぇ……？死ニ急ゲ　生キルナラ♪　魂ガ司ル　君ガ胸　戦場♪？」
その歌が流れた途端、彼も一緒に歌い出した……うん、良い声で
「さてさて、やる気出たし！！　歌いながら殺っちゃうか！！！」
「ダシュンッ！！！」
そう言うと、空中を蹴りあげ、敵のど真ん中に躍り出た

「?荒ぶる神の抱擁を　受けしその身には♪　鬼が棲まうか蛇が棲まうか　舞い墜ちる崖の底で♪?」

［ザザザザンッ!!!　ザンザンッ!!!　ザンッ!!　ザンザザザザンッ!!!　ザンザンッ!!!　ザンッ!!　ザザザザザザンッ!!!　ザンザンッ!!!　ザザンッ!!　ザンッ!!!　ザンザンッ!!!　ザザザザンッ!!!］

彼は、踊るように異形の大鎌を振るう。その歌に合わせ、そのリズムに乗りながら……戦場に、血の雨を降らせ……

「?尊ぶ命は天に有り　君よ満ちるまで♪?」

［ダダダダンッ!!!　ダダンッ!!!　ダダダンッ!!　ダダダンッ!!!　ダダダンッ!!!　ダンダンッ!!!］

そうしている間に、彼はその手に持つ武器を、異形の大鎌から黒き双銃に変えており、これも歌に合わせながら、辺りに乱射していた。当然、全ての弾丸が当たり……

「?弱さ　怒り　強さ　傷み♪?」

［ザンッ!!!　ザンッ!!!　ザンッ!!!　ザンッ!!!］

「?ありとあらゆるもの　その全てを呑み込め♪?」

［ザンザンザンザンザンザンッ!!!!!!!］

今度は大剣に持ち替え、その巨大な武器を振るいながら、斬り付けまくっていた……

そして、このサビの部分で、既に８０人の騎士が、死に墜ちた

「?目蓋を抉じ開け　再び出逢おうが♪　もう同じ夢には　酔えるはずもないだろう?♪?」

［ザンッ!!!!　ザンッ!!!!　ザンッ!!!!　ザンッ!!!!　ザンザンザンザンザンッ!!!!　ザンッ!!　ザザザンッ!!　ザンザンッ!!　ザザザンッ!!　ザンザンッ!!　ザザザンザンッッ!!!!!!!」

「?幾度葬れば気が済もう　累々たる屍を踏み♪?」

［ザザザザンッ!!!!　ザザザザンッ!!!!　ザザザザザザザザザンッッ!!!!!!!!!!　ザザザザンッ!!!!　ザザザザンッ!!　ザザザザザザザザザザンッッ!!!!!!!!!!」

今度は黒く細い刀身の刀剣を持ち、剣舞と呼ばれるような、美しき舞踏をなし、己に仇なす敵を斬り付け、最後は一つの刃の大鎌をもち、抑揚を付け回転しながら、周りの敵を斬った

「?繋がっているなど　愚かしい錯覚♪　言葉は嘘をつき　手は汗に解ける♪?」

［ザンッ!!!!　ザンッ!!!!　ザンッ!!!!　ザンッ!!!!　ザンザンザンザンザンッ!!!!　ザンッ!!　ザザザンッ!!　ザンザンッ!!　ザザザンッ!!　ザンザンッ!!　ザザザンザンザンッッ!!!!!!!」

「?独りでいるほど　漆黒の闇は濁らずに美しや♪?」

［ザザザザンッ!!!!　ザザザザンッ!!!!　ザザザザザザザザザンッッ!!!!!!!!!!　ザザザザンッ!!!!　ザザザザンッ!!　ザザザザザザザザザザンッッ!!!!!!!!!!」

先ほどの舞いと、まったく同じ動きをする。まるで、同じ所を再生するように……動きには、まったくの違いがない、完璧に同じ動作をする……そんな、有りえない動きを、為した

「?何も信じずも生きられる♪?」
［ザンザンザンザンザンザンッ!!!!］
「?うわべの優しさより　剣を見せろ♪?」
［スッ……チャキッ!!!］

七人を刀剣で斬り付けた後、男は一旦動きを止め……歌詞と同様、刀剣を天高く掲げ、その剣を見せた……決めたつもりだろう

このメロで、１３５人の英霊が、討ち死んだ……

「?荒ぶる神の咆哮を　追うその唇♪　真十鏡磨げど心には　未だ愛の姿なくば♪?」
［ザザザンッ!!!　ザンザンッ!!!　ザンッ!!　ザンッ!!　ザンザザザザンッ!!!　ザンザンッ!!!　ザンッ!!　ザザザザザンッ!!!　ザンザンッ!!!　ザザンッ!!!　ザザンッ!!!　ザザザンッ!!!　ザンザンザンッ!!!］

再び、同じパートに入ると、先ほどの動きと寸分違わず、踊り狂っていた。唯一違うとすれば、手に持つ武具だろう……異形の大鎌ではなく、其の身よりも巨大な、大剣だった

「?切望するは真実　君が握るまで♪?」
［ドガガガッ!!!　ドガガッ!!!　ドガガガッ!!!　ドガガッ!!!　ドガガッ!!!　ドガドガッ!!!　ドガッ!!!　ドゴォォォッ!!!!］

今度は護拳を両の手に填め、テンポに合わせて、歌詞に合わせて、一人一人を相手にし、一撃で相手を沈めていた……

「？正も　悪も　清ら　猥ら♪？」
［ザガンッ！！！　ザガンッ！！！　ザガンッ！！！　ザガンッ！！！」
「？定まりからぬもの　そのすべてを収めよ♪？」
［ザンザンザンザンザンザンザンザンッッ！！！！！！」

巨大な剛斧を振りまわし、四人を叩きつぶすと、刀剣に持ち替え、
それによる乱れ斬りで、九人を切り刻んだ

またも、８０人の英霊が沈み……これで、４０５人の騎士
が、死に沈んだ……

「さぁ～って、二番にいってみよ～ッ！！！」

彼のその表情は、恍惚と悦楽、狂喜に満ち溢れていた……

「？足を取る茂み　石に躓けど♪　君が通った後に　出来るが獣路
♪？」
［ザンッ！！！！　ザンッ！！！！　ザンッ！！！！　ザンッ！！！！　ザンザンザンザンザンッ！！！！　ザンッ！！　ザザザザンッッ！！　ザンザンッ！！　ザンッ！！　ザザザザンザザンッッ！！！！！！」
「？ひとりで抱くのは星が散る　剥がれた夜の欠片だろう♪？」
［ザザザザンッ！！！！　ザザザザンッ！！！！　ザザザザザザザザザンッッ！！！！！！！！！！　ザザザザンッ！！！！　ザザザザンッ！！！！　ザザザザザザザザザンッッ！！！！！！！！！！」

舞いながらも、その歌を歌う。まるで、騎士の断末魔を消すように
……この世界に、彼しか存在していないように……彼だけの、
舞台があるように……

「？誰を待たずとも未来は来る♪？」
［ザンザンザンザンザンザンッ！！！！］
「？無意味な寂しさという　盾を外せ♪？」
［スッ……バッ！！！］

その男は、酔っている……自分が歌う、その歌に……自分が舞う、その舞いに……自分が決める、その姿勢を……自分が与える、その死を……

「？破壊の神の吐息から　人は生まれ落ち♪　持つは般若か修羅の貌か　まだ見えぬ己の影♪？」
［ザザザンッ！！！　ザンザンッ！！！　ザンッ！！　ザンザザザザンッ！！！　ザンザンッ！！！　ザンッ！！　ザザザザザンッ！！！　ザンザンッ！！！　ザザンッ！！　ザンッ！！！　ザザザザンッ！！！　ザザザンッ！！！　ザンザンッ！！］

振り撒く、破る力を、彼は……撒き散らす、壊す力を、男は……具現化する、“破壊”を、その襲撃者は……

「？絶望あれども刹那　君は変わりゆく♪？」
［ドガガガッ！！！　ドガガッ！！！　ドガガガッ！！　ドガガガッ！！！　ドガドガッ！！！　ドガッ！！　ドゴォォォッ！！！！］

殺す……殺す、殺す、殺す、殺す、殺す、殺す、殺す、殺ス、殺ス、ころス、ころス、ころス、ころス、ころス、コロス、コロス、コロス、コロス、コロス、コロス、コロス、コロス……
周りにいる、自分の歌と舞いの観客を……その殺刃の舞いを惹き

たてる、その役者を……

「♪奪い　纏う　祈れ　呪え♪♪」

［ザガンッ！！！　ザガンッ！！！　ザガンッ！！！　ザガンッ！！！」

「♪生きる日々は乱世　受けて立つこそ運命♪♪」

［ザンザンザンザンザンザンザンッ！！！！！！」

ここは、彼だけの舞台……彼が、世界に干渉する歌を、彼が世界を変える舞いを……それを披露する、殺戮の宴となった……

「アヒャヒャヒャ

踊る／歌う

「♪荒ぶる神の抱擁を　受けしその身には♪　鬼が棲まうか蛇が棲まうか　舞い墜ちる崖の底で♪♪」

［ザザザンッ！！！　ザンザンッ！！！　ザンッ！！　ザンッ！！　ザンザザザザンッ！！！　ザンザンッ！！　ザザザザザザンッ！！！　ザンザンッ！！！　ザザザザンッ！！！　ザンザンッ！！！　ザザザザンッ！！！　ザンザンッ！！！　ザザザザンッ！！！」

壊れた鎧が舞う、折れた剣が舞う、砕けた盾が舞う……斬られた肉体が舞う、血が舞う、肉が舞う、骨が舞う……それは、まさに地獄

「♪尊ぶ命は天に有り　君よ満ちるまで♪♪」

［ダダダダンッ！！！　ダダンッ！！！　ダダダンッ！！　ダダダンッ！！　ダダダンッ！！！　ダンダンッ！！！　ダンダンッ！！！」

死が、その舞台を満たす。音など、もはや彼の歌声と、辺りに広がる音楽。そして、肉を斬る音と、殴打する音……もはや、そこは混沌の空間

「♪荒ぶる神の咆哮を　追えその肉体で♪♪」

［ザザザザンッ！！！　ザザンッ！！！　ザザザンッ！！　ザザザンッ！！！　ザンザンッ！！！　ザンザンッ！！！　ザザザンッ！！！」

英雄を冒涜し、それを蹂躙する……その舞いは、最後のパー

トに入っていた

「？弱さ　怒り　強さ　傷み♪？」

［ザンッ！！！　ザンッ！！！　ザンッ！！！　ザンッ！！！］

「？ありとあらゆるもの　その全てを呑み込め♪？」

［ザンザンザンザンザンザンザンザンッッ！！！！！！！］

歌が終わると、彼はその武具……異形の大鎌を構え、まるで戦争で勝ち残った戦士のように、武器を高らかに掲げ、その身を、未だに生き残った戦士に晒していた……

生き残ったのは、２６０人……約七割の戦士が、彼に倒されたのだった……

「……決まった……ヤバい、自分で自分が恐ろしくなるほど、決まってしまった……！！！！」

『あらあら、自分カッコイイ！！　なんてナルシーな思考に浸るなんて……ゲスね』

彼は、歌いきった自分に震え上がり、そのデバイスは、その様を嘲った

「あ～あ、たんのしぃ～なぁ～……ん？」

『あら？』

［……ゴオオオ

オオオオ

「……やった、のか？」

「分かりません。ですが、主砲クラスの砲撃を撃ち込みましたから、無事には済まないはず……」

クラウスとオリヴィエは、戦闘区域から離脱し、相手に気付かれぬように移動し、この戦艦を呼び出し、反撃の機会をうかがっていた。そして、相手が見せた好きをつき、主砲を相手に向かって放ったのだ……

これなら、例え相手が化け物でも、死ぬはず……！！　誰もが、下にいる騎士も、そう思っていた

だが、その考えは、甘すぎた……

［ビィー！！！！　ビィー！！！！］

「「！！！！？？」」

突如鳴り響いた警報。それは、ある事を知らせるモノだった

「まさか、生存している！！！？」

「そんな……如何なるものも破壊できる砲撃なのに！！！？」

□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■

外、戦闘区域

［ゴゴゴ

「さて、どうやってアレ落とそうか」
『言っとくけど、あまり私の力を使わないでくださいます？　無駄に消費したくないんで。あと、もう寝ます。飽きた。では、おやすみなさい』
［パシュンッ！！］
そういうと、彼のデバイスは静まり、左腕は、機械仕掛けから普通の腕に戻っていた。そして、彼の周りに浮かぶ１３の武器も、一緒に消えてしまった
「はいはい。そんじゃぁ、こうすることにするか。丁度、“エサ”がいる事だし、な……」
彼は、残った英霊の群れを一瞥し、それを見た後、ニヤリと笑った
……
［……ゴオオオ

鼓動を始めた

「暗闇よ集え……全てを呑み込む漆黒と成れ……」

［ジュイイイ

×２６）

それは、漆黒の波。黒き闇の奔流……彼の右手から放たれた闇の津波は、彼の右手から扇状に広がり……

「「「「「「「「「「う、ウワアアア

全てを呑み込んだ途端、その漆黒の波はまるで時を逆再生するかのように引いていき……

［ジュウウウ

聖王のゆりかご、玉座の間

「「……」」

その様子を、二人の王は静観していた……否、静観しかできなかった……

あの場にいた英霊たちは、皆相手が放った黒い波に呑まれ、そして……

「そん、な……あり得ない。彼らを、吸収するなんて……！！？」

「バカな……なんだ、なんなんだアイツは！！！！！？？」

覇王は、襲撃者に問いたかった。今度は、その言葉通りに……正体を、明せ、と……

《おやおやおや、なになに？　俺の事？　知りたいの？》

「「！！！！！？？」」

その言葉を投げかけた時、その本人から、不用意に、通信が掛かったのだ

《教えて欲しい？　俺が何者なのかを？》

「「……」」

無言。二人は、この男の言葉を無視した。この男の話に乗れば、確実に相手の思うつぼになる。だが、既にそれも、彼の思う壺だった

《いいよぉ、今回は特別にちょこっとだけ教えて上げる。君たちの同胞から奪った力で、君達を消し飛ばすついでに……冥土の土産って奴だ。ありがたく受け取りな》

そう言うと、映像の向こうにいる彼は、右手に炎を灯した……煌々と燃える、神秘の炎を……

□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■

外

「いいよぉ、今回は特別にちょこっとだけ教えて上げる。君たちの同胞から奪った力で、君達を消し飛ばすついでに……冥土の土産って奴だ。ありがたく受け取りな」

［ボオオオォォォォォォォォォォッッ！！！！！！］

そう言って、右腕に炎を灯した彼は、ゆりかごの方を睨みつけ、高らかに答える……己の、存在を

「……我が名は“∴ǂ≪＃・？§≡＄¶±Ｋ∇⊂Φ”。とある世界の、“破壊神”だ」

《《！！！！？？》》

モニターの向こうの二人は、驚愕した表情をした……

□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■

聖王のゆりかご、玉座の間

「バカな！！！！　神だと！！！！？」

「そんな、戯言を！！！！」

二人は、その言葉を信じず、嘘だと言った。だが、神をなのった男は続けた

《嘘じゃないよ～ｗ　だって、今までの戦いぶりを思い出せよ。明らかに人間じゃねぇし、そして、英霊すら軽く凌駕する存在だ。そんな奴が、ただの人間に思えるか？　そんで、バケモンなら、それを対峙する英霊も、さっきいたはずだが、それすら俺を倒せなかった……だったら、もう残っている選択肢は一つだけ……》

全てを超越した、全ての種族の頂点に君臨する種族……“神”

《分かった？　全てが全てじゃねぇが、英雄は神から力を得ているようなもんだ。だから、その力で、その力の本来の持ち主を倒すなんざ、不可能ってもんだ》

自身で目覚めた力なら、話は別だがな……

「「……」」

二人は、神を名乗る男の言葉を、聞いていた……その言葉には、その言葉を話していた彼の、その表情を見れば、それが真実だと、納得していた……

口は薄く笑っているが、目が、笑っていなかったからである

《さて、おしゃべりは終わりだ……では、聖王陛下、覇王陛下……良い、黄泉路の旅を》

「「！！！！！！？？？」」

□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■

外

「フッ……フッフッフッフッフッフッ……さぁ、フィニッシュと行くか！！！！」

そう言うと、彼はその手にある炎を、ゆりかごに向けた……

炎。それは、繁栄を象徴するモノ……人類を、ここまで発展させた、人類最初の文化。この炎を生みだした事で、人類は、全ての種族の上位に上り詰められたといえよう……だが、その文化の灯は、誰から齎されたモノなのだろうか……

そう。それこそ、神と呼ばれる種族だろう……全ての生命の頂点。幻想の中で、最もその存在を確立されている存在……

炎は、繁栄を象徴すると同時に、“破壊”をも意味する。炎は、時に人類を育ませたが、同時に、全てを燃やし、全てを壊す……

そして、彼がその手に持つ炎は……全てを焼き尽くす、“破滅”と“崩壊”を生む、“破壊”の炎……破壊神の炎

「受けてみな、我が神意を……我が力を……」

――――――“GS（ジェネシス・スキル）。燃え盛る業火の焔、レイディアント・フレアバースト”――――――

［カッッッッッッッッッッッッ！！！！！！！！！

！！！

玉座の間

「「！！！！！！！！！！！？？？？」」

「オリヴィエ！！　避けろ！！！！」

「無理よ！！　もう！！！！」

「ゴオオオ

外

「……」

神は、何も無くなった空を見上げた……ゆりかごは、その炎破によって、一瞬にして消し飛び……その姿を、消していた……

「……フッ、フッフッフッフッフッフッフッフッフッフッフッ……フッハッハッハッハッハッハッハッハッハッ……」

戦場には、独りしか、生き残ってはいなかった……神と呼ばれる、存在しか……

「ハッハッハッハッハッハッハッハッハッハッ！！！！！　アァーハッハッハッハッハッハッハッハッハッハッ

「……安心するがいい、とある兄妹よ。世界の修正力は、俺が押さえていてやる。だから、お前たちは気兼ねなく、この世界を犯すが良い……俺の為に、な……フッハッハッハ

#31，5（番外編）　神ノ力。ソレハ全テヲ圧倒シ、如何ナルものニモ触レラレナイ

～～～神の舞台裏～～～

神「ひゃっほ～～～～い！！！！　またも俺様大活躍ぅ～！！！
　オウイエーイッ！！！！」

ヤ「さすがお兄様ですわ！！！」

ス「ホントホント！！！　世界の修正力なんて私達のダーリンにかかればザコね♪」

メ「でも……暴れ過ぎってのも、考えものよ」

神「こまけぇこたぁ良いんだよ！！　そんじゃ、今日もさっそくアレやるぞ～～～！！！」

ス「今日は、前回の分も含めた、豪華二本立てだよ！！！」

ヤ「それでは、まずはこちらから」

――なぜ、転生プログラムは消去出来て、無限再生プログラムと防衛プログラムの二つは、消去出来なかったのか――

ス「これは、前回の分だね」

神「コレについては、一緒に改変計画に関わったメイリンに、説明してもらおう」

メ「分かったわ。まぁ、実はと言うと、あの二つのプログラムも、消去出来たのよ」

神・ヤ・ス「なん……だと……？」

メ「（偉くシンクロしてるわね……）続けるわよ。本来、この改変計画に置いての計画していたメンバーは、“グレイとビビだけ”だったの。それが、ビビが吸収されなかったことが原因で、急遽、あのメンバーに成ったって訳よ」

ヤ「どうして……確か、アレは未発達な人間の脳を使って……それが、グレイとビビだけ……ん？　ビビ？……ッ！！！　まさか！！」

メ「お察しの通り。そう、神魔（アバター）招来を使う筈だったのよ。あれなら、ビビとリンクしてるから、ビビを中継地点として、何十、何百、何千もの未成年の人の脳と繋げて行う予定だったのを……どこかのバカが、ねぇ……」

神「なんて野郎だ……見付けたら、俺が取っちめてやる！！！」

ヤ・メ・ス「アナタ〔ですわ・よ・だよ〕」

神「よ……嫁に突っ込まれた～～～ッ！！！！」

メ「ちなみに、中継地点となるビビには、とんでもない程の負荷がかかるけどね……」

ヤ「それ、何気にコワいですわね……それでは、次に進んでみま

しょう。二つ目は、こちら」

――――――この神様いったい何者？――――――

ス「そろそろ、読者の皆さんは疑問に思い始めているよね。っていうか、かなり前から持ってる人もいるんじゃない？」

ヤ「これほど完成された濃いキャラ……主人公達が霞むような程の存在感を放つ……そして、転生させた神としては、他作品に無い程の介入頻度……」

メ「そして今回……もはや、決め手としか言えない程の圧倒的戦闘能力に固有術技。主人公と言っても良い程の魅力……」

神「さて、そろそろ俺の正体を明かそう……そう、俺は！！！
“作者が今作を書く前に書いていた、とある独りの友人にのみ送り続けていた、杓眼のシャナの二次創作の主人公だったのだ～～～”
ッ！！！！」

ヤ・メ・ス「ぶっちゃけちゃったー！！！」

神「ちなみに、こいつ等はヒロインだ。俺の九人の嫁達は皆ヒロインだったのさ」

ヤ「えぇ、そうですわ……」

ス「でもあれ、打ち切りになちゃったんだよね～」

メ「文章構成も、コレみたく、ハッキリとしてなかったし……

…」

神「まぁ、つまりだ。作者は今作が初めてって訳じゃねぇんだ」

ス「まぁ、そうなっちゃうよね」

メ「ちなみに彼。友人曰く、主人公じゃなくて悪のラスボスの方が向いている、との評価だったのよ」

ヤ「主人公とは思えない行動ばっかりしますからねぇ……」

神「いいじゃんいいじゃん、ダークヒーローだったのさ！！」

ス「ちなみにちなみにだけど、実は作者のお気に入りのキャラナンバーワンだったり」

神「フッ、作者に愛されているが故に、登場頻度は高いのさ……これからは、俺も介入行動に入る！！！」

ヤ「即ち、わたくし達も介入いたしますわ」

ス「ネタ回の時かもしんないから、その時はよろしくねぇ♪」

メ「さて、そろそろ時間よ」

神「あっと。それでは、読者の皆さま、次回からは第二部の幕開けでございます。どうか、お楽しみに……では！！！」

神・ヤ・メ・ス「さよなら～！！」

作者「あぁぁぁ！！？　とうとう言っちゃったよ！！！　これが二作品目だってことを！！！」

#３２　事件が終わって、平凡な日常が続いてます！　っておい、いきなり過ぎ

今回は久しぶりに二日連続投稿が出来ました

それと、今話から第二章スタートです！！

内容は、事件後のアレコレを、解説のような形でやりました。今回からは、しばらく日常パートが続きます。一部、戦闘が入りますが……

ムーギネーター様、幻揶恣蔽様、ｊｕｎｋｙ様、緋水様、未土井無視様、白姫　彼方様、あんぎゃーす様。たくさんのご感想、ありがとうございます！！！

#３２　事件が終わって、平凡な日常が続いてます！　っておい、いきなり過ぎ

――――そして、とある兄妹（しまい）は、一つの事件を終え、日常に戻る……――――

第９７管理外世界、現地名称、地球……海鳴市、八神宅、ビビの部屋

［……ピッピッピッピッピッ！！　ピッピッピッピッピッピッ！！　ピッピッピッピッピッピッ！！　ピッピッピッピッピッピッ！！」

「……う、う～ん……」

［モゾモゾッ……」

［ピッピッピッピッピッピッ！！　ピッピッピッピッピッピッ！！　ピッピッピッピッピッピッ！！　ピッ！！」［カチッ］

「ん、んん……ふわぁぁぁぁぁぁ～～……よく寝たぁ～、ムニュ～……ウシッっと！！」

［ヒュバッ！！！　スタッ！］

「さてと、朝ごはんの支度支度っと！！」

読者の皆さま、ヤッホー！！　ご無沙汰しているであります！！！

ビビ・スティンです！！！　あの事件、“闇の書事件”が終わって、はや一周間が経っちゃいました。あれからの私達の近況をご報告しま～す！！

まず、はやてちゃん達、八神家の面々は、あまり罪には問われず、保護観察程度に収まりました。どうやら、あまり人的被害が出ていなかったことと、死傷者ゼロ、被害者も一人だけだった（報告によると、お兄ちゃんだけだけど……あれって、どう見てもお兄ちゃんが自分でやったことだけどね……）ので、まぁ、ぶっちゃけると、“闇の書事件”を根本的に解決してくれた協力者、的な風に扱ってくれています。保護観察なのは、二次被害とか、ソレを想定されたモノらしくて、二年間は、こういう生活をしなければなりません……まぁ、はやてちゃんが罪を意識してくれていないので、計画通り（「ー」）、という結果に終わりました！！　はい、良かったです！！！

後は、なのはちゃんとフェイトちゃん。二人とも、管理局のお仕事を手伝っていたり、色々忙しいそうです。後、なのはちゃんの場合は、家族や、アリサちゃんにすずかちゃん。皆に魔法の事を教えたそうで……まぁ、原作通り、事が進んだようです。ちなみに、なのはちゃんもフェイトちゃんも、私の事を見ると、頬を染めて笑ってくれるので……うむ、これも、計画通り（「ー」）でニヤニヤしちゃってたり……ウッフッフッフッフッ……

あぁ、あと……クロノ君なんだけど……なんだか原作と比べて、丸い。なんかＫＹじゃない。結構空気読んでくれてるんだよね……ほんと、不気味でしょうがないよ（；一_一）……あと、何気にお兄ちゃんと仲良いし……まさか、これフラグ？　そんなこと、無いよね？　クロノはエイミィとだよね？　うん……なんか、不安です……あ、ちなみに、私たちの保護観察官をやってくれています

そして、リインフォースの事を。なんとか、生存は出来たんだけど……プログラムの不適合が原因で、はやてちゃんとは、ユニゾン

出来なくなってしまったそうです……お兄ちゃん曰く

「どうやら、八神が適合していたのは、あの歪んだプログラムの方だったのかもしれないな……それなら、俺が新たに組み込んだあのプログラムに適合は出来ない。あれと元の歪んだモンは、ある意味別モンだからな……」

との事。つまり、他の二次創作にあるような事と同様、もうはやてちゃんとリインフォースは、ユニゾン出来なくなっちゃったって事らしい……

ですが、ね……

……クッフッフッフッフッ（＊＾－＾＊）　なんと、なんと！！　“私とユニゾン出来るように”なっちゃってましたぁ～～～ッ！！！！　ヒャッホ～～～～～～イッ！！！！ノ（＜∀＞）ノ

え？　なんでかって？　これも、お兄ちゃん曰く！！

「あのクロニクルキーが、新しいプログラムの方に影響したんだろな。組み込む最中、なんか構成が少し変わっちまってたからな。まぁ、暴走の危険性はないから、放って置いたんだが……」

との事。なんと言う嬉しい誤算！！！……っていうか、あの時の私、メッチャ無意識でした。いつの間にか、クロニクルキー謳ってたし、それに自分が気付いてなかったし……思い出すたびに、ちょっと怖くなったりします……でも、あれのおかげで、作業が滞り無く……あと一歩でヤバいって時にやったから、無事に済んだんだって、お兄ちゃん言ってたし……ホント、良かったよ

……

あぁ、それと、淫獣（ユーノ）は、原作通りに、無限書庫の司書をするって言ってた。そんだけ

んで、最後に私とお兄ちゃんなんだけど……はやてちゃんと同じ、保護観察を受けてます。っていうか、それで済んだ理由って、お兄ちゃんがアースラに行ってた時（私が闇の書の意思と戦ってた時）に、どうやらそう言う風にしろって言ってたみたいです……あと、お兄ちゃんはあのマンションに住んでるよ。うん、完全に一人暮ししてます……私は、この通り、まだはやてちゃんの家に御厄介になってます。まだ、はやてちゃんの足が回復していないので、せめて歩けるようになるまでは、自称介護ヘルパーは続けるつもりです♪

そして、今

［タッタッタッタッ］

「あ、おはよう、はやてちゃん♪　シグナム♪　シャマル♪」

「あ、おはよう、ビビちゃん♪」

「おはようございます」

「おはよう、ビビちゃん」

いつもの朝の風景。リビングに来たら、はやてちゃんとシャマルが朝食の用意をすでに始めてたり、シグナムが新聞を読んでいたり……でも、前とはちょこっと違う事が

「おはよう、リインフォース♪」

「あぁ。おはよう、ビビ・スティン」

シグナムの隣で座ってる、リインフォースの姿……これだけが、変わっています。うん、Ａ、ｓ　ＰＯＲＴＡＢＬＥの時のあの格好です

「ごめんねぇ、ちょっと寝坊しちゃった」

「えぇて、気にせんで。あ、それ微塵切りにしてくれへん？」

「は～い♪」

そう言って、キッチンの方に入るビビ……そして、朝食の準備をしている間に、ヴィータが眠そうな顔で起きてきて、朝ごはんです

「ほなら、いただきます」

「「「「「いただきます」」」」」

いつもの、朝の風景……それが、戻ってきました♪

あ、そうだ。ついでに、これからの事も、話しておこうと思います

はやてちゃん達は、どうやら管理局に入るようです。シグナム達が、今まで（先代から前まで）迷惑かけた罪滅ぼしで入るって言ったら、はやてちゃんが

「皆がそうなら、主の私も入らなあかん！！」

って言っちゃって……はい、管理局入局フラグですね、分かります……もちろん、はやてちゃん達が入るなら、私も入る。家族だ

しね♪　あと、なのはちゃんも、管理局に入るって言ってたし……現在は、局に入るために色々試験とか面接があるから、それに向けて猛勉強しております！！　それと、私とはやてちゃんは、来年から聖洋大付属小学校の四年生に入る為、それについての勉強もしております。え？　はやてちゃんは分かるけど、なんで私も四年生にって？　それは、またもお兄ちゃん曰く……

「お前、小五になってからすぐに死んだんだから、まだ学校には行かねぇとダメだろうが。こっちも義務教育ってのがあるんだ。せめて中学ぐらい卒業しろ。それは、他の連中にも言える事だ。あぁ？　なんでそれで四年生から始めろだ？　んなもん、こっちとあっちじゃぁ、ある程度違いはあるだろう。だから、それに対応するためにも、一年下がってモノ教われ。あぁ？　年齢？　サバ読みするか、家庭の事情って事にしとけ。戸籍？　ハラオウンに頼んである。とにかく、お前は学校に行け」

との事……はい、命令です、完全に。ってか、手際よすぎワロタｗ　さすが、お兄ちゃん。だてに社会出てないね……まぁ、皆と同じ学年になると言うのは、（私にとって）良い事だからね。良かったよ♪　というより……聖洋大付属小学校の制服……アレが着れるなんて、夢のようです……（＊＾―＾＊）

んで、お兄ちゃんはというと……うん、管理局に入る気は無いようです。メンド臭いとか言って、断っているようで……うん、ダメだよね。ここはビシッと言って、私が絶対入らせてみせる！！！

まぁ、いつになるか、分かんないけどね（―“―）……

とりあえずは、こんなところです。まぁ、今後どうなるか分かりませんが、とりあえず、暫く平穏な日々が続くのは間違いないです！

！……ところで、この世界ではＡ、ｓ　ＰＯＲＴＡＢＬＥの“闇の欠片事件”は起きるのかな？　まぁ、起きたら起きたで対処すればいいか。マテリアル達も、我がハーレムに加えてやるわ！！！　グッフッフッフッフッフッフッ！！！！（＊＜人＞＊）

□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■

そして、場所は変わり……ある兄妹（しまい）が使っているマンション。現在は、兄（あね）しかいない

「……ふあぁぁぁっ……眠い、だるい、んで暇……」

……って、ヤバいな。これじゃ社会問題のニートじゃねぇか。やっぱ働くべきなのだろうか、人間は……

「……にしても、一気に暇になったな……」

今まで、闇の書をどうにかする為に、色々駆けまわってたからな…

……それが終わったと思ったら、一気に暇になったし……

「……管理局、か……」

胡散臭い組織だが……まぁ、入る事には問題ないが……なんか、な……

「きな臭い匂いがする……あまり、信用してはいかんような、そんな空気が……」

ま、仕事の場としては、良いかもな。公務員だし、給料も安定してるだろうし。何より、有る程度関わりを持っているし……ま、考えておくか

「……にしても、珍しいな……」

最近、あのクソ神が来る事が減ってきた。前までは、二日に一度は来ていたのだが……

「まぁ、五月蠅いのがいなくなっただけでも、マシか……」

そう思い、ソファーでくつろぐ……

［ズキッ！！！］

「グゥッ！！！？」

……はぁ、またか

『申し訳ありません、主。そちらに影響が出てしまいました』

自分の右腕の方からの声……肉体に組み込まれたデバイス、“タ

マモノマエ”だ……さっきの頭痛は、防衛プログラムか？

『はい。私の体を奪おうと、度々暴走しております。押さえこんではいますが、たまにシステムの中枢にアタックされる時があるので、それが主の脳に……』

まったく、やっぱとんでもない爆弾を抱えこんじまったな……

「仕方ない。暇だし、防衛プログラムを抑え込むシステムを作るか……いや、或いは、防衛プログラムのみを組み込んだ正常なデバイスを作るのも……ま、暇つぶしが出来たな」

そんじゃ、ちと管理局の連中にも、協力してもらおうかねぇ……デバイスの知識の他にも、色んな科学技術を吸収すれば、良いモン造れそうだしな

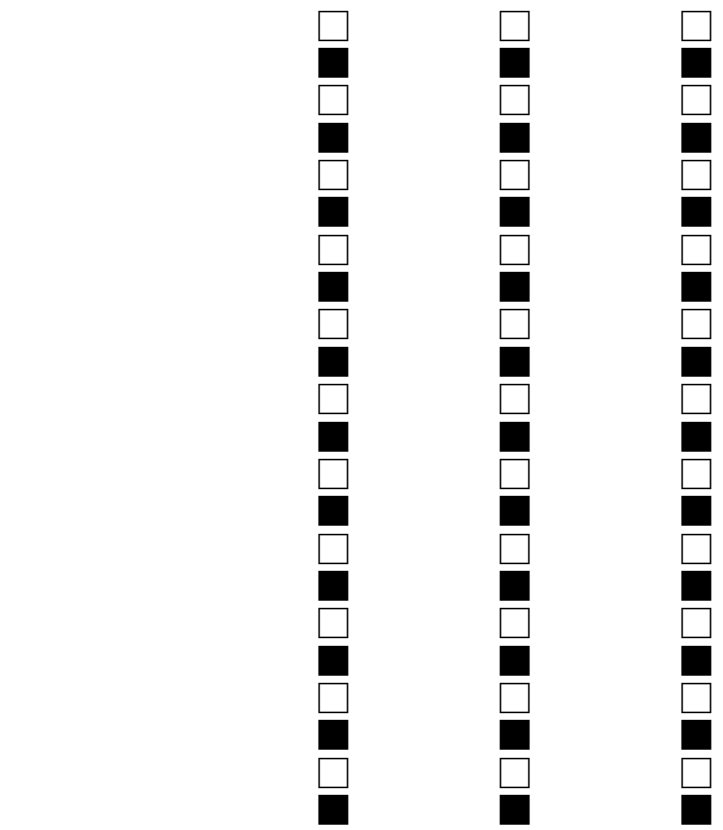
「手始めに、無限書庫にでもいってみるか」

『どうやって、ですか？』

「今回は、ちゃんとアポを取ってからだ。ハラオウンかスクライアに、案内してもらおう」

そう言って、彼（かのじょ）は動き出した……

これが、今の彼らの、日常である……



一方、ある場所では……

“トライデント・V（ヴァニティ）・スマッシャァァァァーーー”ッッ！！！！！」

［［［ゴオオオ

戦う優男は……そう、かの英霊１０００人殺しを果たした、あの破壊神だった……

「鮮血よ散れ……薔薇のように！！！」

［ザザザンッ！！！　ザザザンッ！！！　ザザザンッ！！！　ザザザンッ！！！　ザザザンッ！！！］

「“ブラッディ・ローズ”ッ！！！！」

［ザシュンッッッ！！！！！！！！！！！！］

「◆◆▲▲◆▼▲●●▼◆▲◆▼●▲▼●▼▲◆●◆◆▲◆▲●▼▲●▼◆▼▲◆●◆◆▲◆●●◆●▼◆▼▲▲▼◆▼◆▲●▲▼◆◆▲▲◆▼●ッッッ！！！！！！！！！！！！！？？？」

［クルクルクルクルクルクルッ、チャキッ！！］

「……フンッ、耳障りな奇声ですわね……その口、二度と吠えさせぬ様、縫って差し上げましょうか？」

だが、今回は一人ではない……彼の獲物とする怪物の周囲には、他にも、二人の影が、その小さな身よりも巨大な武具を、振るっていた……

一人は、薔薇の花弁を周囲に散らしながら、その薔薇を模した大鎌を繰る、緑色のウェーブが掛かった長髪に、ゴスロリのような服を着た少女……

「いくよ！！」

［ズシュンッ！！！］

「その身に刻め！！！」

［ズシュズシュズシュズシュズシュッッッ！！！！！！！！］

「“氷雪、神器”ッ！！！！」

［ズシュンッ！！！！　ズシュンッ！！！！　ズシュンッ！！！！］

「凍れ、“フリーズ・ニーベルン・ヴァレスティ”ッッ！！！！！

！」

［シュッ！！！！］［ズシュゥゥンッッッ！！！！！！！！！！！］

一人は、可愛らしい服を着た短めの黒髪で、周囲に粉雪を降らせ、突きや投擲に特化した雪の結晶の模様が入った長槍を携えて戦う少女……

《皆、準備が出来たわ。離れて》

突如、彼らの元に念話が入り、その連絡を聞く

「やっとか！！　おい“ヤーヤ”！！　“スノウ”！！　引くぞ！！！」

「はい、お兄様！！」

「りょ～か～いっ！！」

［ババババッ！！！！］

彼の指示に従順な彼女達は、すぐさま攻撃の手を止め。即刻怪物から距離を取った……

そして、怪物から数キロ離れた地点

「風上は良し。天は、我らに味方せり……」

［チャキッ……］

そこでは、黒い長髪に、枠無しの眼鏡を掛け、グラマラスな体型をくっきりと出した服に身を包み、虎の形を模した巨大な弩を構えた

女性が、あの怪物がいる方角を向いていた

「チャージは完了済み、照準も問題無し、もし外れた場合の事も対処済み……よし」

そう言って、彼女はその弩のグリップを握り

「“天雷火砲（テンライカホウ）”、発射」

［カチッ］

引き金を、引いた

［ゴオオオ

オオオオ

「はぁ……まったく、お前らと言う奴は……どこまで可愛いんだよ、まったく」

そう言って、男は少女達の頭を撫でてやる

「「う……うみゅ～……」」

「俺の気持ちを察してくれよ、ヤーヤ、スノウ。久しぶりに、我が愛しの可愛い嫁達と一緒に、戦いたかっただけなんだがな……」

「……お、お兄様が、そう仰るのなら……」

「そ……それなら、別に……これからは、先に言ってよね」

「ハッハッハッ、ワリィワリィ」

「「……」」

二人の少女は、頬を紅潮させて、彼が浮かべる優しい笑みを堪能していた

「……ふぅ……」

「ん？　どうした、メイリン。なんだ、お前も撫でて欲しいのか？」

「いえ。貴方の愛を頂く資格なんて、私には無いわ。私は、“あの子”のオマケみたいなものだから、ね……」

そういうと、彼女は彼に背を向けた

「んな事を言うなよ、淋しいじゃねぇか。現にお前の事も、俺は愛してるぜ……メイリン」

「……」

「それに俺は、お前を“シェレン”のオマケだなんて思った事、一度も無いぞ」

「……そう、それなら、それで良いかな」

彼女は彼に振り向き、妖絶な笑みを見せていた。彼もまた、その笑みに、爽やかな笑みで返した

「それで、目標は潰したけど、どうするの？」

「そろそろ、アイツから連絡が来るはずなんだけどなぁ……お」

ふと、彼が何かを見つけたような声を出すと、誰かから念話がきた

《我が担い手よ、世界の修正力がまたも発生しました》

「そうか。うし、今から《ですが、我々で対処しておきました》……さすが、と言ったところか、“我が武の器”よ」

《勿体なきお言葉、恐縮です》

「……なぁ、そろそろ昔に戻ってくれねぇ？　その喋り方、止めて欲しいんだけど」

彼は、その言葉にイラついているのか、少し、怒りをにじませた口調で、念話の相手にぶつけた

《……では、私はこれにて失礼致します》

「お、おい！！　ったく、切りやがった……あのバカは、もう……」

彼はイラつきながら頭をガシガシと掻くと、その場にいる三人の妻の方に向いた

「さて、帰るか♪」

「はい、お兄様」

「今日のご飯は何かなぁ～？」
「えぇ、楽しみね」
［［［［フッ……］］］］
そういうと、彼らはいつものように、風のように、消えていた……
……

#３２　事件が終わって、平凡な日常が続いてます！　っておい、いきなり過ぎ

～～～神の舞台裏～～～

ヤ「私たちもとうとう動き出しましたわね」

ス「どうだった？　私たちの強さは！！？」

メ「はっきり言って、私達、技一発しかやってないのだけど……」

神「そこはあのダメ作者に……って言っても、分からん訳ではないな。この尺だし、あいつ自身、こういう解説回は必要とか言ってたし。それのオマケだ、あの戦闘は」

メ「まぁね。色々面倒な描写を一気に書けるからね」

ヤ「とうとうヤル気がなくしてしまったのかしら？」

ス「いや、でも作者さん結構疲れてるっぽいよ。最近戦闘やシリアスばっかで、もう力尽きかけてるし」

神「ならなんで今回の最後が戦闘なんだ？」

ヤ・メ・ス「さぁ？」

神「あぁ、それと、今回はお題が無いな……これといって」

ヤ「確かに、そうですわね……」

メ「えぇ……」

ス「私たちの設定とか、今急ピッチで創りなおしてるからね……今度の座談会のときに出す予定だって、前つぶやいてたよ」

ヤ「いつですの、それ？」

神「確か、５００００ＰＶ言った時だって言ってたな。あと５０００ＰＶで行くそうだし」

メ「あと十分の一、ね」

神「だから、今回は再びこれを行う！！！」

――――――この神の舞台裏の新メンバー――――――

メ「また増やすの？」

ヤ「そうみたいですわね」

ス「あ、そうだ。これに該当したキャラが、次回以降に、本編に登場するキャラだから、それも考えて選んでね♪」

神「ちなみに、今回の参加人数は以下の五名！！」

“真・恋姫？無双”の“孫策”

“馬超”

“ＳＨＵＦＦＬＥ！”の“時雨亜紗”
“天空のユミナ”の“黒河雲母”
“神楽那由他”

神「の！！　中から好きな子を選んでくれ！！！」

ヤ「ちなみに言うと、これらのキャラは、全て作者のお気に入りだとか」

ス「ストライクゾーン広いね、作者さん」

メ「確かに……」

神「ではでは！！　今日のところはこれにて失礼！！」

ヤ「また次回も、楽しみにしていて下さい」

ス「それではそれでは！！　読者のみんなぁ～！！！」

神・ヤ・メ・ス「さよなら～！！」

作者「はっ、ははははっ……あれ？　なんか、キーボードを打つ感

覚が……？」

＃３３　ここは湯の街、海鳴温泉なの！　ってこれ無印のサブタイトル！！

３３話、更新しました。すこし遅れてしまい、申し訳ありません

見た限り、かなり駄文になってしまいました。和やかな日常を書くの、なんか苦手ですｏｒｚ

ムーギネーター様、緋水様、未土井無視様、赤坂七夕様、あんぎゃーす様、ｔｋ様、堕ちた聖騎士様。ご感想、ありがとうございます！！！

#３３　ここは湯の街、海鳴温泉なの！　ってこれ無印のサブタイトル！！

――――そして、とある兄妹（しまい）は、訪れた平穏を、満喫していたとか……――――

第９７管理外世界、現地名称、地球……遠見市、スティン兄妹（しまい）が住むマンション、リビング

時は２００６年一月三日……世間では、新年を祝ってセールなどが各店で行われている頃だ

「は？　温泉？」

素っ頓狂にモノを言ったのは、この家の主である、転生者兄妹（しまい）の兄（あね）。身長１８７？というあり得ない長身の体を持ち、スリーサイズを表現するなら、［ボオォォンッ！！！！］［キュウゥゥゥッ！］［ボオォォンッ！！！！］が適切となるほどの抜群のスタイルを誇り、その体は痩躯でありながら無駄がなく、そして美しき貌と良いのだが、その黒い長髪はあまり手入れされていないのか、クシャクシャになっている……そのような、女性も身惚れるスタイルを持つ……“元”男性、“グレイ・スティン”

そして、素っ頓狂な声を彼女（かのじょ）に出させたのは、この家の主の妹にして、現在は自称、住み込みの介護ヘルパーでこの家にいない少女。身長は１１才にしては高めの１５３センチ。そして小学生の年齢として

はあり得ないくらいのスリーサイズを持ち、子供でありながらスタイル抜群、学校のマドンナと言われても問題無い程のその無駄のない体、顔立ちは同性も眩んでしまう程可愛く、そして煌くように光る銀色の長髪。それは、人形のような可憐さを持つ……“変態”少女、“ビビ・スティン”

久しぶりに、この家にこの二人がいたのであった

「うん、温泉♪　なのはちゃんとフェイトちゃんとアリサちゃんとすずかちゃんの家族が計画してて、それにはやてちゃんの所も行こうって話になって、それなら、お兄ちゃんもって」

「……」

どうやら、高町家、ハラオウン家、バニングス家、月村家の家族合同旅行に、八神家とスティン兄妹（しまい）も交えようという話になったらしい

ちなみに、原作では、この旅行に八神家は罪を意識している為、自重して不参加と言う事になっているのだが、今回は罪に問われていないので、なんの気兼ねも無く参加すると言ったのだ。進言したのは、言うまでもなく……はい、“アイツ”がね

「ふ～ん……で、それが明日、と？」

「うん♪」

「それ、いつ知った？」

「三日前♪」

「俺を誘おうと思ったのは何時からだ？」

「聞いてから直ぐに♪」

「死ね」

「ボゴオォォォォォォォォォォンッ！！！！！」

「ボヒョベブラパズァッツ！！！！！？？」

［ズドオォオオオオオオオンッ！！！！］

ビビの顔面にグレイの右ストレートがクリーンヒット！！！　更に！！　タマモが埋め込んである手の甲で殴り付けたため、その硬さもあって、ダメージは二倍に！！！　更に更に！！！　壁にぶち当たって追加ダメージも発生！！！！　マンション壊れるってｗ

ってか、そんなもん早めに言いやがれ！！！　準備とか色々しねぇといかんだろが！！！

「だ、だって～～～、お兄ちゃんに連絡取ろうと思っても、全然繋がんないんだもん！！　それに、聞いても、どうせ、興味無いから行かん、お前らだけで勝手に行け……って言うだろうなぁって思って……」

まぁ、確かにそうだが……

「まさか……来るの？」

「あぁ……温泉だろ？　五年近く行ってないからな……ま、久しぶりに行きてぇな」

「……じゃ、じゃぁ！！　皆に、そう伝えてくるね！！！」

［バッ！！］［タッタッタッタッタッ］

そういうと、彼女はこの家の自室に向かった。ケータイで連絡をするようだ

「……温泉、ねぇ」

……ま、疲れがたまってる事だし、丁度良いか……

［……タッタッタッタッ！！］

「お、お兄ちゃん」

「？」

「車、ある？　四人程乗れるの」

……はぁ……

□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■

そして、翌日。翠屋前（集合場所）

「いや、ホントにすみません。レンタカーで頼んだのが、意外と小さかったので」

「いえ、別に構いませんわ」

ったく、もちっと考えてやれよ……まぁ、荷物が多いのも考えられるが……

《……ねぇ、お兄ちゃん》

《なんだ？》

《この車、どうやって手に入れたの？》

《あぁ、兵装錬製（ウェポン）で作った》
《免許は？》
《兵装錬製（ウェポン）で偽造品を作った。機械ですら欺ける程のな》
《……（＊＿＊；》

それ、犯罪なんじゃぁ？　つか、便利だね兵装錬製（ウェポン）！！　お金も作れちゃうし、車も免許書も作れるし、果てにはデバイスも！！！
はぁ、私が持つべきだったかな？

《元々車は運転できるんだ、バレなきゃ問題ない。それに、そうでもしないと行けんからな》
《……そんなに行きたかったの？》
《あぁ、久しぶりだからな》

……そう、なんだ……まぁ、もう良いや……

ちなみに、この時グレイが持ってきた車は、“スズキのスティングレー”に酷似したモノだった

「高町さん。私は最後尾からついていく形でよろしいかしら？」
「えぇ。それなら、彼と、これらの荷物を乗せてもらえませんか？」
「これらの荷物……って（は？　何この荷物？）」

そこには、何やら大きな荷物が……

「なんですか、これ？」
「色々とありまして……すみませんが、よろしくお願いします」
「……」

はぁ。ま、いっか……

その後、各々が車に乗り込み、出発をしていきました

ちなみに、その時の配車は……

一台目　八人乗りのワゴン車
ドライバー　高町士郎
助手席　高町桃子
高町なのは
フェイト・T・ハラオウン
アリサ・バニングス
月村すずか
八神はやて
ビビ・スティン
アルフ（子犬フォーム）

二台目　六人乗りのワゴン車
ドライバー　ノエル・K・エアーリヒカイト
助手席　ファリン・K・エアーリヒカイト
高町恭也
月村忍
高町美由希
エイミィ・リミエッタ
ユーノ・スクライア（フェレットモード〔美由希のおもちゃですw〕）

三台目　四人乗りの普通乗用車
ドライバー　鮫島

助手席　デビット・バニングス
アリサの母
すずかの母

四台目　六人乗りの普通乗用車
ドライバー　リンディ・ハラオウン
助手席　シャマル
シグナム
リインフォース
ヴィータ
ザフィーラ（子犬フォーム）

五台目　四人乗りのワゴン車
ドライバー　グレイ・スティン
助手席　クロノ・ハラオウン
荷物

……という事になっています。それと、すずかの父は仕事の関係で参加しておりません

□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■

そして、道中……最後尾を走るグレイの車

「……ふぅ、意外と遠い場所にあるのね」

「みたいですね」

「「……」」

……続かぬ会話が交わされ、互いに黙り込んでいた

「……で、ハラオウン。アンタ、根に無いわけ？」

「何をですか？」

「私の事よ。恨んでないわけ？　アンタをブッ倒しただけに非ず、蒐集をしたし……アンタの師匠に酷い事したのよ……前は、任務の最中とか言って無視してたけど……」

彼（かのじょ）は気がかりだったのだ。彼が、自分の事を恨んでいないのかと？

乗った瞬間から今まで、どうして何も言ってこないのかを……

彼（かのじょ）は、その事を不気味に思っていたのだ

「……もう過ぎた事です。あまり気にしてはいません」

「……」

なんつうガキだ。あんなの、受ければ確実に相手を恨むかなんかするぞ、それを、気にしていない？

「……いや、嘘だな。僕は、貴方を殺したい」

「……」

だろうな。ったく、良いようにしやがって

「だが同時に、貴方を尊敬している自分がいるという、なんとも言えない矛盾を抱いている」

「は……？」

どういう、意味だ？

「貴方は、僕の復讐の対象を消してくれた。出来ない事と思っていた事を、やってのけた……それに関して、僕は貴方に感謝しています」

「……こっちとしては、謝りたい所ね。復讐の相手を奪ってしまった事を、ね……」

「いいえ。僕だけでは、どうにも出来ませんでした。今回も、ただ闇の書を護送しただけでは、今までとなんら変らなかったかもしれない……管理局としては、礼を言うべき事です」

「……」

まったく、ホントにガキっぽくねぇ奴だな……ったく、この年の奴は、普通は親に甘えたがるか、反抗期真っただ中のようなモンなのにな……ま、他の奴にも言えることだがな……

「ですが、貴方には返す借りもある……まぁ、それはいづれ返させてもらう事にします」

「えぇ……その時に、ね」

その後、二人は会話もせず、目的地に着くまで無言であった……

……

あと、山道に差し掛かった時、グレイとビビの身が強張ったという

事を追記しておこう

□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■

そして数時間後、目的地の“海鳴温泉”に着きました♪

「う～ん……はぁ、着いたぁッ！！」

やっと着きました！！　海鳴温泉！！　いやぁ、ここがかぁ……
うん、まわりは自然がいっぱいだし、良い感じじゃん！！！

「みんな～、荷物を運ぶの手伝いなさ～い！」
「「「「「「は～い！！」」」」」」

さって！！　めいっぱい楽しむぞぉ～！！！

「よいしょっと」
「「ドサッ」」
「ふぅ、重いわね～」
「高町さんのお母さん、そっちの方、お持ちしましょうか？」

そう言って、桃子が両手に持っている荷物の一つを持とうとするグレイ。だが

「あら、スティンさん。大丈夫ですわ、これくらい」
「いえ、遠慮なさらず」
「あぁ、そう。でも、そちらも重そうな荷物を」

グレイ自身も、両手に荷物を持っており、明らかに桃子が持っている荷物よりも重そうだった

「私の事は気になさらずに、では、失礼します」
［ヒョイッ］
「え……？」

なんと、グレイは器用に三つの荷物を持ち、桃子が重いと感じていた荷物を軽々と持ったのだ

「あの……スティンさんは、鍛えていらっしゃるのですか？　その……それ、結構重いはずなのですが……」
「えぇ、まぁ」

そりゃそうだ。その気になれば、十階建てのビルすら持ちあげる事が出来るからな……

そんなこんなで、旅館のロビーでチェックインを済ませ、全員が部屋に入って行きました

□■□■□■

そんで、時と場所は移り……美女と美少女達と変態がいる女湯!!

「うわぁ……やっぱビビちゃん、えぇ体しとるなぁ……」

「ちょ、はやてちゃん、近い近い（＊／／／／／／／＊）」

不味いって!!　コレ以上近付かれたら、はやてちゃんの禁断症状が!!!　そしてそこから派生する、“例の事件”が!!!?

「不味い!　ヴィータ、止めるぞ!!」

「合点!!」

“例の事件”を知る二人は、すぐさま行動に出た。その後、はやてちゃんはシグナムとヴィータに取り押さえられたが、その反動でシグナムとヴィータの胸が揉まれ……揉み魔魂、健在でなにより

だが!!　自分のが揉まれていなくても、その行為を見ている事で、ある少女のある魂にも火が付いて!!!　……ターゲットは、隣で体を洗っているすずかちゃん!!!

「……そういえば、すずかちゃんのも、中々……」

「あ、あのぉ……ビビ、ちゃん?」

「うむ……うりゃッ!!」

「モミュッ♪」

「ひゃあぁッ!!?」

「うぅむ、この慎ましやかな、子供ならではの小ぶり感……だが、しっかりとした弾力……うむ。コレは将来、大物になる可能性が!!!?」

「な、何言ってるの?　ビビちゃん?」

普通ならドン引きだが……すずかの場合、あの笑みの効果で惚れてるから、ドン引きどころか、ちょっぴり嬉しがっていたり……

変態、恐るべし！！！！

そして、その後はやってもその様子を見て更に暴走。ビビもそれにつられて暴走し……“第二次揉み魔と変態の胸揉み事件”が発生した事を、ここ記載しておこう……変態自重しろｗ

□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■

そしてその後、温泉に設置してある卓球場にて

［タ、タ、タ、タ、タ］

「あ、グレイさん」

「ん？　高町さんのお父さん」

温泉内をぶらぶらしていたグレイは、たまたまここを通りかかったのだ。そこでは、高町士郎とアリサの父、デビット・バニングスが卓球をしている姿があり……その隣の卓球台では

「さぁーって！！　夏のプールの競泳勝負の借り、ここでキッチリ返させてもらうよ！！！」

「へっ！！　返り討ちして、今度も私が勝つ！！！」

ビビとヴィータが、火花を散らしながら勝負をしていたとか……

……

「どうですか？　貴方も、一緒に」

卓球か……ま、付き合いでやるってのもアリか

「えぇ、良いですよ」

「そうですか。では、七点マッチでデュース無し。サーブ権は、得点を入れた方に、というルールで、いいですか？」

「えぇ、別に構わないわ。それで行きましょう」

と、ここでグレイ・スティン対高町士郎の対決が、切って落とされた！！！

「さて、では始めますか」

「先行サーブはどちらにします？」

「そちらからどうぞ」

「分かりました。では……」

やるからには、勝たせてもらうぞ

「（まずは、軽めに行くか）……ッ」

［カンッ！］

セルロイドで作られたボールの乾いた音が鳴り、ボールはネットを超え、士郎の元へ……

「フンッ！！」
［カンッ！！！］
「は？」
［ヒュッ！！］

撃ち返された直後、ボールはそのままグレイの隣を過ぎ去った……
…そう、グレイが反応出来なかったほどの剛速球だったのだ

「言っておきますが、やるからには、手加減はしませんよ」
「……」

……ほ～う……いいだろう……

「墜としてやる……！」

グレイのやる気に、火が付いた……以外と負けず嫌いなのであった

そして、暫くして……

「はぁッ！！！」
「フンッ！！！」
［カンコンカンコンカンコンカンコンカンコンカンコンカンコンカンコンカンコンカンコンカンコンカンコンカンコンカンコンッッッ！！！

「クッ……（なんなんだこの人は！！！　つか、人間か！！！？）」

いいえ、ケフィア……ではなく、戦闘民族高町家の大黒柱でございます

「（チィッ……たかが人間如きに、負けるか！！）」

人間如きって……バケモンと言う事を認めているのか、グレイ……

「ハァッ！！！」
［カンッッ！！！！！］
「フンッ！！！」
［コンッッ！！！！！］

このままではらちが明かない……そう思ったグレイは、撃ち返した直後にラケットを大きく振り

「フンッ！！！」
［ブワッ！！！］
「な！？」

なんと、風圧を起こして、撃ち返される前に、球を相手のコートの奥に押し出し……

［コンッ……］

風圧で一瞬隙が出来た為、反応が出来ず……球は、士郎の横を通り過ぎた……まぁ、なんだ？　セコくない？

「……ははは っ。驚いたよ。まさか、ラケットで風圧を起こして、僕を欺いたとはね」
「……卑怯者、とは言わないんですか？」
「いや。勝負事に卑怯も何もないよ。まさかそう来るとは考えられなかった、僕の失態だ」
……人間出来てんな、この人
「（つか、何だったんだこの人。初手から一気に勝とうとして、“遅延眼”と“予知眼”使ってたってのに、そんな俺から五点も取るとか……マジで人間ですか？）」
だから、戦闘民族高町家の大黒柱って言ってるじゃん……
その後、グレイは恭也と美由希、果ては一瞬でルールを身に付けたシグナムやヴィータに勝負を挑まれ、そのすべてを完封してみせたとか……ちなみに、ビビともやったらしく、その勝負の姿は、人間の域を超えた壮絶なモノだったとか……ま、結果はグレイの勝利でしたが……後にグレイは
「（少し、はっちゃけ過ぎたか）」
と、後悔していたとか
……と、こんなそんなで、賑やかながらも、穏やかな時間が過ぎていましたとさ……

#３３　ここは湯の街、海鳴温泉なの！　ってこれ無印のサブタイトル！！

～～～神の舞台裏～～～

神「あじ～……（－ｏ－）」

ヤ「暑いですわね……」

ス「ううー、クーラー欲しい……」

メ「我慢なさい。作者の家には、そんなもの無いのよ」

神「貧乏作者め……あぁ、ヤル気無くなる……（；一＿一）」

ス「っていうか、更新する前に、栄養ドリンク飲まなきゃやってらんない程、ヤル気無くすよね、この猛暑は」

ヤ「というより、作者の家庭事情を喋っていいのかしら？」

神「こうやって書いてるんだから、良いんじゃない？」

メ「（それ言っちゃっていいのかしら？）」

ス「それよりも、今日のお題は～……これぇ～……」

――――グレイの身長はなぜ１８７センチなのか？――――

［ゴクッ、ゴクッ、ゴクッ……］

神「プハァッ！！　ウシッ！　元気１００倍！！　勇気１００％！！　今日もバリバリ答える☆ＺＥ！！！」

メ「（神様が栄養ドリンク飲んで良いのかしら？）」

神「普通なら、主人公の身長といえば、１８０ぐらいがベストだろう。だが、グレイの場合はそれ以上。さらに、さっきの身長は男の場合で、女では異常なほどの長身だ。そして、どこからこの１８７という数字が出てきているのか！？」

［ゴクッ、ゴクッ、ゴクッ……］

ス「フゥ。ヨ～シッ！！　私も元気１００倍！！　勇気１００％！！　で、どこから来てるの？」

神「作者の身長が１８７センチだからｗ　そっからきております。ちなみに、今現在も少しずつ伸びてるらしく、現在はどれ位なのかは知らんのだと」

ス「うわお、言っちゃった……」

神「さらに言うとな、プロローグのグレイの転生前の姿、あれのモデルが作者そのもの。妹のモデルは無い」

ヤ「なんという裏事情を……」

神「こう書いてるんだから、別に良いんじゃない？」

メ「個人情報与えていいのかしらね？」

神「まぁ、特定されなきゃ問題ないだろうｗ」

ス「笑って言える事なのかな？」

神「さて、そんじゃ今回は、ある募集をしようと思う！！」

ス「なになに？　なんの募集？」

神「フッフッフッ、今回は……これだ！！」

――――――新キャラクターの募集――――――

ヤ「やってしまいますのね、とうとう」

ス「他の作者さんがやってるの見て、やりたくなっちゃったんだよね、うん……」

メ「感想書いてくれる人が増えてきいるからね。波に乗っているうちにやってしまおう、という魂胆ね」

神「さてさて、ではでは、募集内容は以下の項目を踏まえて下さい！！」

・募集するのは、男性と女性の二人

・名前、イメージＣＶ、年齢、一人称、（血液型）、（身長）、（体重）、（＞女性の場合＜スリーサイズ）、魔力光、総合ランク、性格

・転生者という設定で

神「という内容で、よろしくお願いします！！」

メ「たくさんのご応募、お待ちしております」

ヤ「ちなみに、募集期間はそのキャラを使う前までとさせていただきます。よく熟考なさって、素晴らしいキャラが来ることを、切に願っております」

ス「もし、来なかったら？」

神「作者がキャラ考えるしかないだろう」

ヤ「というより、何故転生者という設定での募集を？」

神「あぁ、まぁ、後々に転生者四人追加する予定だったんだが、二人はキャラ固まったんだけど、残り二人が曖昧でね。女と男っていう括りで考えてたら、ネタにつまって……」

メ「固まった二人は何なの？　男？」

神「まぁ、そうだな。男二人。それ以外は言えん」

ヤ「男三人に、女一人……あら？　これって」

神「これ以上はネタばれになるから、この辺で。たくさんのご応募！！　おまちしておりま～す！！！」

メ「（バレバレね。まぁ、察しの良い方は、そのあたりも踏まえ上で、お考えください）」

ヤ「それでは皆様、今日はこの辺りで、失礼しますわ。次回もお楽しみに」

神・ヤ・メ・ス「さよなら～！！」

作「えぇ、皆さま方のご協力を、お願い致しますｍ（＿＿）ｍ」

#３４　アリサちゃんとすずかちゃんの魔導師化計画、始動！？　其の一、覚悟

猛暑が続き、かなりヤル気が激減しております……

しかし、それでも頑張って参りますので、よろしくお願いします

緋水様、あんぎゃーす様、ムーギネーター様、未土井無視様、煌焔様、ｅｖａｎｇｅｌｉｎｅ様、ヘルカイザー様。ご感想、ありがとうございます！！　そして、あんぎゃーす様、ムーギネーター様、煌　焔様。キャラ募集にご協力いただき、ありがとうございます！！！

#３４　アリサちゃんとすずかちゃんの魔導師化計画、始動！？　其の一、覚悟

――――そして、とある兄妹（しまい）は、ある二人の願いを聞き、それを実行する……――――

場所は、未だに海鳴温泉……

夕食を食べ終えた後、暫くして……１０時４２分、女湯、露天風呂

「……ふぅ、なかなか良い所だな。ここ……」

そこにいるのは、グレイただ一人……そう、彼（かのじょ）は頃合いを見計らい、一人だけで湯に入ろうと考えており、こんな時間に入っていたのだ

「深夜三時まで露天風呂を解放しているとは、なかなか良いサービスだな……ま、どうでもいいけど」

そんなこんなで、彼（かのじょ）はその湯を堪能していた……

のだが

［ガラッ！］
「あ、いたいた！！」
「ッ！！！？」

突如、誰かが入ってきたのだ。こんな夜中に、こんな寒い冬の深夜の露天風呂に

「な、お、お前……！！？」
「もう、こんな真夜中にお風呂に入ってるなんて思わなかったよ。さんざん探しても見つからなかったんだから、ベアトにサーチャー放ってたんだからね。お兄ちゃん」

そう、入ってきたのは、彼の妹のビビだった

「ったく、いいだろ別に……っていうか、ここお……」
「ここ？　女風呂だけど……？」

……そうだった。俺は今女なんだよな、認めたくないけど……だから、入るのも必然的に女風呂……はぁ、鬱になる……

［チャポン］
「っておい、何勝手に隣に来る」
「いいじゃん、兄妹なんだから。っていうか、姉妹か」
「止めろ、それは……」
「う～ん……やっぱ反則だよねぇ、お兄ちゃんがこんな美人になるなんてさ」

うるせぇ

「たく……俺は元男だぞ。ソレを知っておきながら、良く平気だな、お前」

「今は女。同姓同士だから、なんとも思わないよ？」

「あっそ……んで、なんか俺を探してた、って言ってなかったか？」

「あ、そうだった。忘れてた。ちょっと、聞きたい事があって……」

「？」

「いや、正確には、お兄ちゃんじゃなくて、タマモなんだけど……」

「タマモに？」

そう言うと、彼（かのじょ）は、右手を上げ、甲を見た

『私、ですか？』

「うん。あのね、えっと……“リンカ―コアを活性化する方法”って、ある？」

「は？」

『“リンカ―コアを、活性化する方法”、ですか？』

なんとも、変な質問をしてきた。自分の事だと思ったのだが、元からEXランクの魔力量を持つリンカ―コアを持ち、それ以外にも様々なエネルギーを体内に保有している彼らであるが……それが一体、なぜ活性化などと……

「おい妹、なんでそんな事を聞く」

兄(あね)は、当然の事を聞いた。そんな、必要のない事を、どうして聞くのか……

「あぁ、えっと、ね……」

時間は、十分前ぐらいに遡り……ビビ達、女の子達の部屋

□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■

きっかけは、ある二人がおもむろに聞いてきた言葉だった

「ねぇ、なのはちゃん、フェイトちゃん、はやてちゃん、ビビちゃん。ちょっと聞きたい事があるんだけど……」

「「「「？」」」」

「アリサちゃん」

「うん……」

「「私達にも、魔法って使える？」」

それが、事の発端だった

「え……ど、どうしたの？　急に」
「う、うん。どうしちゃったの、アリサ、すずか……？」
なのはとフェイトの二人は、困惑した表情を浮かべて、どうしよう、といった表情になった

「あぁ、えっとね……私達にも、魔法が使えれば、皆の仕事のお手伝いができると思って……」
「あんな危なっかしいことやってんのに、それを知ってるだけで何もしていないのは、私としては許せないのよ！！」
なんとも、友人想いの二人だったが……

「そ、そないな事、言われても……なぁ、ビビちゃん」
「う～ん……」

これって、もしかしてアリサちゃんとすずかちゃんの魔導師化のフラグ？　でも、二人とも……

《ねぇ、ベアト。この二人のリンカーコアって、どうなってるの？》
《ふむ……絶望的、だな。とても魔導師としてやっていける程の段階ではない。Ｅランクにすらいっていない程の微弱さだ。ただ、有るだけで何もできない、と言ったところか》

あぁ、やっぱり……まぁ、他のアリすずの魔導師化の二次創作のを見ていて、ふと疑問に思ってたんだよね。この二人にも十分なリンカーコアがあれば、無印の最初、ユーノが発したＳＯＳ信号をキャッチしてるし、Ａ、ｓの最初でも、ヴィータちゃんが捉えてる筈だし……まぁ、色々こじ付けさえすれば、良いんだけど……で

も、ここではそうはいかないっぽいね……（；一＿一）

「ねぇ……ビビちゃんは、どう思う？」

《う～ん……ねぇ、ベアトぉ、何とかなんないかなぁ？　例えば、リンカーコアを活性化させる、とかさ？》

《……あるとすれば、それを知ってると思われる人物を、私は知っている》

《ホント！！？》

「？　ビビちゃ～ん？」

となりで、はやてが呼んでいるが、聞いていないようである

《あぁ。我が作り手、グレイ・スティンが右腕に宿る賢女、タマモが知っているかもしれぬ。会ってみるのも手であろう》

《分かった！！》

「ビビちゃ～ん」

《あと……先ほどから、隣にいる八神はやてが呼んでいるぞ》

「へ？」

「あ、やっと返事した」

「あ……ごめん、ちょっと考え事してて……」

あぁ、私のバカン！！　ベアトとの会話にすっかり集中してたじゃん！！！

「って、何？　はやてちゃん」

「もう……あんなぁ、さっきのアリサちゃんとすずかちゃんの話や。魔導師になれるんかどうかって……」

「う～ん……リンカーコアが微弱だから、ソレを活性化させれば、なんとか」

「「“りんかーこあ”？」」

あぁ、やっぱこうなるよねぇ……まぁ、いいけど

「リンカーコアって、活性化出来るの？」

「うーん……でも、リンカーコアを活性化させる事は、違法な実験をすれば出来るかもって、昔読んだ本に書いてあったけど……普通に考えても、無理。リンカーコアが保有できる魔力を底上げするのは、現在の技術を以てしても、不可能だって」

い、違法……って、二人ともちょっと怖がってるし……って、やっぱ無理か。勉強してたフェイトちゃんが言うんだから、まぁしょうがないか

《だが、それでもあの賢女に聞いてみてはどうだ？》

う～ん……じゃダメ元で聞いてみっかｗ

［スクッ］

「「「「ビビちゃん？」」」」

「？　どこに行くん？」

「ちょっと、それに関して知ってるかもしんない人がいるから、その人に聞いてくるね」

［タ、タ、タ、タ］

そう言って、ビビはグレイを探しに出て……今に至る

□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■

「……ってなわけ」

なるほど、な。友達と一緒に苦しみを分かち合いたいって言うのか？　ったく、良く出来たガキだよ。あの戦いを見ていて、まだそう言うか……そう、あの戦い……闇の書の意思と、闇の書の闇……それらの戦いを見ていながら、そう言えるか……はぁ……

「タマモ、どうなんだ」

『リンカーコアの活性化する方法、ですか……少々お待ち下さい』

まさか、あんのか！！？　そんな方法が……リンカーコアってのは、確か先天的な、才能に似た何かだろ？　ソレを何とかする方法があんのかよ！

『……検索終了。該当件数、１７件と言う結果になりました』

「「嘘ッ！！？」」

意外と多い……

『その中で、最も現状で簡潔に出来、そして短期間で有効な方法は、この一件です』

そう言うと、タマモは俺の頭の中にのみ、データを開示した……

ほう、こんな方法で、リンカーコアって活性出来るんだ

『ベアトリーチェの話の内容に、リンカーコアが微弱だがある、と言っていたので、この方法でなら、確実にリンカーコアは活性化出来ます。ですが、有る程度限度はありますがね』

「なるほど……」

まぁ、それぐらいあっても良いだろう

『因みに、この方法で活性化を行った場合の最終的上昇量は、時空管理局が定めているランクに置き換えますと、最低でもＡＡＡ＋、最高でＳＳになります。まぁ、人によりますが』

「「マジで！！？」」

おい！！　それ上がり過ぎだろ！！！　って、妹の野郎、驚いて口パクパクしてやがるし……

《それで……主、いかがなさいますか？　この情報、彼女に言いますか？》

「……」

念話で、このプランを教えていいのかと、俺に聞いてきた。確かに、こんな簡単な方法で、魔導の力を得ると言ったら、誰でも喰らいつく。そんな方法を、易々と教えていいのだろうか……答えは、“否”

「（あぁ。何の覚悟も無しに、力だけを与えるなど、愚行に等しい。だったら、やることは一つ）」

どれほどの覚悟を持っているか、それを見定める必要がある

「……おい、妹」
「な、何？」
「１１時頃、近くにある森林にその二人を連れて来い。親共には、散歩とか言って誤魔化せ。場所は、ベアトのサーチャーを使え。いいな」
［ザパァッ］
「あ、お兄ちゃん！？」

そう言って、彼は湯から上がり、出口に向かって行った

「……なんなんだろう、一体……？」

ただそう思う、妹であった……

□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■

そして、１１時頃……近くの森林の中、少し開けた場所

「……来たか」
［……ザッ、ザッ、ザッ、ザッ、ザッ、ザッ］

そこに来たのは、ビビと、一般人のアリサ・バニングスと、月村すずか。そして……

「……なんで、呼んでもいない連中を連れてきた？」

「あ、あははは……御免なさいｍ（＿）ｍ」

他にも、魔導師のはやてとなのはとフェイト、そして守護騎士のシグナムとヴィータとシャマル、そして融合騎のリインフォースもいた。はやては、シグナムに抱きかかえられている

「あ、あの……お邪魔、でしたでしょうか？」

「ご、御免なさい。あの、気になっちゃって……」

「すまない、姉上殿」

「ご、御免なさい、グレイさん」

はぁ……ま、いっか

「邪魔をしないと言うんなら、別に良いわよ」

ただそれだけ言って、グレイは二人を自分の前に来るよう促した

「えっと……アリサ・バニングスに、月村すずか、ね」

「「は、はい！！」」

二人は、やや緊張した風に、グレイの声に答えた。二メートル程離れていても高いと感じるその長身で、二人を睨んでいた

「アンタ達、魔導師に成りたいって言ったのよね」

「「はい！」」

「あの戦いを見て、コワいと思わなかったの？」

「「は、はい……」」
「でも！！　親友があんな苦しい目にあってるのに、何もできずにいるのは嫌なんです！ただ帰るのを待っているよりも、一緒に戦いんです！！」
「私も同じです！！」
「……」
なんつう目をしてやがる、こいつ等は……ガキのくせに……
「……それは、覚悟はできていると言う事か？」
「「はい！！」」
「戦う覚悟を、か？」
「「はい！！」」
「人を傷付け、または殺す覚悟を、か？」
「「？」」
「自らも死ぬ、そう成りえる可能性を抱く覚悟を、か？」
「「……はい！！！」」
……さて、それは全て、誠か、虚栄か……
「……いいでしょう。なら、選別を行わせてもらうぞ」
そう言って、彼は徐に両腕を虚空に広げ
「カテゴリ、鎖付き双剣、“ブレイズ・オブ・エグザイル”」
［ジャギギンッ！！！］
「「「「「「「「「「！！！？」」」」」」」」」」
彼女（かれ）が取りだしたのは、柄尻に鎖が付けられた、黒と金色に彩られた、神を殺した戦士の武具……

「お、お姉様！！！？」

全員がその行動に驚き、ビビがとっさに叫んだ

「大丈夫よ、決して傷付けようって事の為に使うんじゃないわ」

そう、彼がある事をするには、これを持つ必要があった……

「さて……いい？　一つしか言わないわよ」

「「ッ……」」

ごくりと、二人して、彼が武器を取りだしてからの雰囲気に怖がり、唾を呑んだ……

「耐えなさい」

それだけ言って、彼女は目を閉じて、腰を低くし、両手に有る武器を握る力を強め、構えた……その姿は、まるで幽鬼のような――――そう、その構えは、この武器の原典である神との戦いの物語の主人公と同じ構え……直ぐに手に持つ剣を投げつけられる姿勢――――それを彷彿させる構えを取った。そして、閉じていた眼を……

「……ッッ！！！！！！！！！！」

［ギンッッ！！！！！！！！！！］

一気に見開き、きつく引かせ、二人を睨んだ

「「「「「「「「「「ッッッッッ！！！！！！！！！！

！！！！！！？？？？」」」

其の変貌ぶりは、彼女ですらおかしいと思っていた。そう、転生して、多少の性格の変化は他の転生系の主人公に有る傾向だが、彼は明らかに違う。転生前は、だらけてはいたが、妹の事を多少は想いやっていた、良い兄で、気遣いが出来る、良識ある普通の人間だったのを覚えている。だが、目の前にいる彼女は違う。そう、今の姿は、まるで“鬼”……

「ッ……ハ、ハァ、ハッ、ハァ……」
「ッ、ハァッ、ハァッ……！！？」
「ヒィッ、ヒィッ、ヒィッ……！！？」

三人の魔導師達は、その殺気に当てられ、何もできずに、過呼吸を繰り返すばかり……はやてに至っては、呼吸がおかしくなっていた

そんな、周りにいてすら、恐怖を抱く程の殺気を、直に受けている二人は……

「「ッッッ――――――」」

呼吸すらしておらず……いや、出来ないのであった。その圧倒される威圧感に、何もできずに、眼を見開き、茫然と立ち尽くす事しか、出来なかったのだ

「（こ、怖い……怖い、怖い、怖い、怖い、怖い怖い怖い怖い怖い怖い、怖いよ……か、帰り、たい……帰り、たい、帰り、たい、帰りたい、帰りたい、帰りたい帰りたい……）」

アリサは、そのあまりの恐怖に、壊れかけていた。もう、精神的に、

彼女はおかしくなり始めた……彼女のその目に……まるで獲物を逃がさんとする、狩人のような……餌を目の前にして、腹を空かせた猛禽のような……目の前にいるモノを、ただ殺し壊すだけの、“鬼”のような、そんな眼に……彼女は逃避の思考しか、出来なくなっていた……

「（嫌だ、嫌だ、嫌だ、嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だッッ！！！！！！）」

ふいに、目を閉じた。だが、その時に、有る言葉が耳に響いてきた

――――――「耐えなさい」――――――

それは、彼女（かれ）が殺気を放つ前に言った唯一の言葉。つまりこれは、この威圧感に耐えきる、又はその中でもなお、強い心を持ち続ける事が出来るのか。そして、逃げずに、いられるか……そうでなければ、魔導師に成る資格は無い。そういう事を、暗示しているのではないのかと……これは、魔導師に成る為の試練なのではないのかと……

彼女は、恐怖の中で狂っていたはずの思考が、目を閉じたときに急にクリアになって、持ち前の天才とも言える程の頭脳で、そう推理したのだ

「（……嫌だ！！！！）」

［グッ！！！］

彼女は、先程とは真逆の、恐怖に打ち勝つ思考に切り替えた。負けず嫌いの彼女は、その、歴戦の勇士ですら畏怖する殺気に、立ち向かい始めたのだった。今までの決意は、なんて脆い覚悟だったのだろう。全然、覚悟と言う事をしてはいなかった。だけど、今なら出

来る。ただの言葉ではなく、ただの虚栄でもなく……本当の、本物の覚悟を！！！

少女の心に、真の決意の炎が灯った

そして、もう一人の少女、すずかは……

「……」

その恐怖に、何も感じてはいなかった。むしろ、彼女（かれ）が放つ殺気など、毛ほどにも思っていなかった……

それは、彼女のその特異な体質にある……そう、彼女は吸血鬼の一族、通称“夜の一族”。異常な身体能力と知能を持つ、人ではないモノ……故に、他の人外に強く惹かれ合う……ビビを最初に見た時に、彼女は強い衝撃を受けていた。“彼女は、人間ではない。人の姿を取った何か”と、直感していた。だが、彼女の振る舞いは、人そのもの。だから、あまり気にしてはいなかった……だが、この姉は違う。彼女は、自分と同じ、人外のモノ。それを、出会ってから直ぐに気付き、そして今、確信した。彼女も、自分と同じであると……人では、ないと……

「……」

だから、彼女は見惚れていた。彼女のその、人ではないモノの眼を……人の皮をかぶり、ソレを認め、人として振舞うモノの眼を……その強さと恐れを与えるだけの、般若と言う名の“鬼”　のような、そんな眼に……ただ、心奪われていた……

そして、暫くした後……いや、本来はたった数秒の事だっただろう。だが、その場にいるモノにとっては、数分、いや数十分程の長さに感じていただろう。グレイは武器を収め、二人に放っていた殺気を、鎮めた

「「「「「「「「「ッッッ！！！！！　ハァハァハァハァハァハァハァハァハァハァハァハァハァハァッ……！！！！！」」」

性化する方法”。それを教えると、言ってきたのだった

「場所はそこにいる妹に聞きなさい。あと、早く戻って、もう寝なさい」

［ザッ、ザッ、ザッ、ザッ］

「「「「「「「「「「……」」」」」」」」」」

全員が、歩き去ってゆくグレイを、ただ呆けていながら、見つめていた

「……つ、つまり、アリサちゃんとすずかちゃんを、魔導師にしてあげるってことだよ！！　多分……」

一番に声を出したのは、彼女（かれ）の妹のビビ。だが、彼女は自信なくその言葉を出した。最近の、自分の兄（あね）が考えている事を、まったく理解できていないからだった……

「「そ、そう、なの？」」

二人は、喜び半分、疑問半分で答えた。あの殺気の中から解放されても、未だにしこうがうまく働かないからだろう。だが、なにはともあれ、二人は、魔導師と成れる資格を得たのだ

「とにかく、また温泉に入ろう。なんか、嫌な汗かいちゃったし」

ビビの提案に全員が賛成し、一同は、再びお風呂に入りに行くのだった

ちなみに、替えの下着は、“あくまで執事”を名乗る男に都合させたとか……まぁ、それはいいだろう。あと、“例の事件”は起き

なかったらしい

□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■

旅館内、廊下

［タッ、タッ、タッ、タッ、タッ］

「……ん？　あら」

グレイが、またもぶらぶらと歩いていると、廊下の柱に背を傾けている高町士郎の姿があった

「どうも。こんな夜更けに、散歩ですか？」

「……えぇ、そのようなモノです」

無難に答え、再び歩くグレイだが、士郎はその足を止めさせた

「先ほどの殺気は、貴方が放っていたモノですか？」

「ッ……」

グレイは、睨むような眼で、士郎の方へ向いた

「……どうして、そのような事を」
「昔の職業柄でしてね。そのような気配には、機敏に反応してしまってね。もうお店の事だけをやっていて、錆びついたモノだと思っていたけど、まだ感は残っているみたいでしてね」
士郎は、自分の過去を仄めかしながら、こうつぶやいた
「……それで、あの殺気は、やはり貴方が放っていたモノなのですね」
「どうして、確信したような言いぶりで言うのかしら……」
「分かりますよ。今あなたが、僕に向けているその視線。それは、先ほどの殺気とまったく似ている……まるで、“闘争の鬼人”のような、そんな気配を」
「……そう……」
そう言うと、グレイは士郎から視線を外し、歩き出そうとしていた
「今ので、貴方も、なのはが言ってた、“魔法”と言うモノの関係者だと分かりました。だが、出来る事なら、なのはには近づかないで欲しい」
「……どうしてかしら？」
「君のような、人とは思えない程の気配を持つ人の近くに、自分の愛娘がいると言うのは、父としては放ってはおけないのでね。もし、貴方が関わって、なのはを傷つけるような事があれば……」
士郎も、グレイとは反対方向に向かって、歩き出した
「僕は再び剣を取り、貴方を殺しに行きます」
そう言って、士郎は部屋に戻って行った……

「……殺しに、か……（やはり、只者では無かったと言うのか。ま、初めて会ったときから、キナ臭い奴だと思ったがな……）」

しかし、“闘争の鬼人”、か……“鬼”、か……

［……ペタ］

「！！！！！？？」

ふと、彼（かのじょ）が、徐に口元を手で触れた時、有る事に気づいた

「（笑って、いる！！！？）」

そう。口角がつり上がり、口が、笑みの形を取っていたのだ。それは、まるである言葉に反応しているかのような、そんな錯覚を抱いた

そう、“鬼”という、単語に……

「（なんでだ？　何がそんなにおかしい。“鬼”、ただその言葉が、なぜこれほど耳に残るんだ……？）」

彼（かのじょ）の頭の中は、あの二人の事よりも、“鬼”という言葉に、埋め尽くされていた

「……はぁ、疲れてんのか？　仕方ない、もう一風呂入るか」

グレイは、ある一つの謎を、抱え込んだ……

#３４　アリサちゃんとすずかちゃんの魔導師化計画、始動！？　其の一、覚悟

～～～神の舞台裏～～～

神「……なんと、まぁ……」

ヤ「すごい、投稿数、ですわね……」

ス「予想してたより、多い……」

メ「本当に凄いわ。作者に変わって、お礼を言うわ。皆さま、ご協力に、感謝いたします」

神「いやいや、まさかこんなに送られてくるとは……こうなれば！！　俺たちも頑張らないとな！！」

ス「はい！！」

ヤ「といっても、今回はお題がないのですが……」

神・ス「なぜ？」

メ「今回はそんなに説明が必要な事がないでしょ。色々フラグがあるから、下手に説明出来ないし。ネタバレになるから」

ス「そういえば、この小説、フラグ大量だよね。恋愛面以外の」

神「確かに……回収されてないのもあるしな……まぁ、作者のやり方だろう」

ス「ある程度予測付けられるんじゃぁ？」

ヤ「ま、そうして下さって、予想とは違う展開に持っていかせるのが、作者の考えなんでしょうけど」

神「ははは……愚か者が」

メ「（生みの親に向かって、この人は……）」

ヤ「それでは、本日はここまでに致しますわ」

ス「次回も！！　お楽しみに～！！」

神・ヤ・メ・ス「ばいば～い！！」

作「ううう……アヅイ、死ぬぅ……」

５０万ＰＶ突破記念！！　神の舞台裏、増刊号！！！（前書き）

今回は、記念座談会です

ある程度ネタばれを含みますので、みたくない方は、次の話に飛んで下さい。また、興味の無い方も。同様に飛んでいただいても結構です

そして……読者の皆様方。本当にありがとうございます！！！

５０万ＰＶ突破記念！！　神の舞台裏、増刊号！！！

神「あー、あー、テステス、テステス、マイクテスト、マイクテスト中……」

ヤ「お兄様、スタジオの準備、完了ですわ」

神「うし！！　そんじゃぁ……イッツショータァーイム！！！」

［バアアアアアアアアアアアアアンッ！！！！！］

【ＢＧＭ：　ｉｎｎｏｃｅｎｔ　ｓｔａｒｔｅｒ】

神「ハロー！！　パソコンやケータイの前で、これを見ている読者諸君よ！！！！　いつも今作を読んでくれて、ありがとな！！！！！」

ス「皆様の応援もあって、なんとこの小説！！！　昨日を以て、総アクセス数が５０万ＰＶに達成しておりましたぁーッ！！！！　ユニークもなんと！！　４４０００人を超えました！！！」

メ「そう言う事で、今回は私達、神様の嫁達全員が出張しての、“神の舞台裏、増刊号”を行いたいと思います」

ヤ「まずは私達！　第四夫人の、ヤーヤ」

メ「そして、第九夫人、メイリン」

ス「第五夫人！！　スノウ！！！」

神「そしてそして！！　カモーン！！！　我が愛しの女神たちよ！！！」

［［［［［［バシュンッ！！！］］］］］］

シェレン「はじめまして、読者諸君。第二夫人の孫策、真名を“シェレン”！！　以後よろしく～♪」

アサ「はっじめまして～～！！　ボクの名前は“アサ”！！　旦那様の、第三夫人で～す！！！」

ナユタ「第六夫人の那由他。ここではカタカナで、“ナユタ”と呼ばせてもらうわよ」

スイ「第七夫人の馬超！！　真名は“スイ”だ！！　よろしくな！！！」

キララ「第八夫人の雲母。“キララ”と表記させてもらう。まぁなんだ、よろしく頼む」

？？？「そして……神の第一夫人、“エアギア”の“ベンケイ”、ではなく……名は“レヴェッカ”や。今後とも、よろしゅうたのんます」

神「という、豪華な十人でやって行きたいと思っております！！！
　そんじゃぁお前ら！！！　準備はいいなぁ！！！？」

レ・シェ・ア・ヤ・ス・ナ・ス・キ・メ「おおぉぉぉーーーッ！！！」

ス「って、ちょっと待って！！　今回の左の表記じゃぁ、私とスイちゃんがかぶっちゃうよ！！！」

神「あ……そんじゃぁ、表記変更。おーい、スタッフー！！」

［パッ］

神様「うし！！　これでいいだろう」

スノウ「あ、確かに……」

スイ「ふう、危なかったぜ……ってかテメェら！！！　なんでお前らだけであんな事してんだよ！！！」

アサ「ヤーヤちゃん、スノウちゃん……旦那様を独占して、イチャイチャしたんだってぇ？（黒笑）」

シェレン「ホント羨ましいよねぇ。あとメイリン、貴方、色恋沙汰にも、その類稀なる知略を駆使するようになったかしら？（黒笑）」

神様・ヤーヤ・スノウ・メイリン「あ……」

神様「し、仕方ないって。作者曰く、最初のヤーヤの時は、素でくじ引きで決めたんだからよ！！　その後のは、内容的に、メイリンの方が適任だったし……スノウは読者様からのアンケートで決めたんだぞ！！！　そこ分かってほしいのよ！！！」

シェレン・アサ「むぅ……」

レヴェッカ「せやけど……うちらに黙ってあぁいう事しとるっていうのは、どうやと思うけどなぁ……」

［ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴッ……！！！！！！」

神様「レ、レヴェッカ、さん……？」

レヴェッカ「少し……ドタマ冷やしてこんかァァァァァァァァァいッッ！！！！！！！！！！」

［ゲシィィィィィィッッ！！！！！！！！！！」

神様「モロプヒャラベテドゴパズサコ～～～～～～～～～～～～～～～～～～ッッッ！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！？？？？？？？？？？」

［キラーン☆］

レヴェッカ「ふん！！」

シェレン・アサ・ヤーヤ・スノウ・ナユタ・スイ・キララ・メイリン「うわぁ……」

ナユタ「さ、さすがはレヴェッカ、ですわね」

キララ「唯一、あのバカをどうにかできる奴だからな……まぁ、これで少しは反省するのなら、まだマシなんだがな……」

スノウ「っていうか、レヴェッカ！！！　メインパーソナリティブッ飛ばしてどうすんの！！？　これ収拾付くの！！？」

レヴェッカ「そん時は、うちらでやれば問題あらへんやろ？　タイトルも、“女神達の舞台裏”に変えれば、一件落着や」

シェレン・アサ・ヤーヤ・スノウ・ナユタ・スイ・キララ・メイリン「あ、なるほど」

神様「って！！！　お前ら～～～～～！！！！」

レヴェッカ・シェレン・アサ・ヤーヤ・スノウ・ナユタ・スイ・キララ・メイリン「あ、戻ってきた」

神様「このタイトルもな！！　読者様が考えてくださったコーナー名なんだぞ！！！　勝手に変えるなど言語道断！！！　タイトル通り、ここでは俺が主役なんだ！！！！」

レヴェッカ「ほう……うちの付けた名前に文句付けると？　それはつまり、うちに対してのアレか？　反抗か？」

神様「ふん！！　久方ぶりに、お前とやり合うってのも有りだな……」

レヴェッカ「ほう……せやったら、覚悟しぃや」［ジャギンッ！！！］

神様「ぬかせ！！！！」［ジャギンッ！！！］

［［ダンッ！！！！］］

神様・レヴェッカ「ハアアア

［ガキイイィィィィィィィィィィィンッ！！！！！］

スイ「あーあ、始まっちまったな」

ヤーヤ「えぇ……では、あの二人の収まるまで、少々お待ちを」

――――暫く、お待ち下さい――――

――――そして、壮絶な夫婦喧嘩終了後――――

神様「すみませんでした、どうもご迷惑をおかけしました」

レヴェッカ「すんまへんな、これで堪忍してな……」

――――二人して、土下座で謝罪を……ってか、いい加減進めて！！――――

メイリン「はいはい。それでは、記念会恒例の感謝コーナーへと移らせていただきます。シェレン、アサ、スノウ、よろしく」

シェレン「はーい。それでは……読者の皆様方、いつも今作、“魔法少女リリカルなのは　～とある兄妹の転生物語～”を読んで

下さり、誠にありがとうございます。我ら、神とその女神一同、登場キャラクターのスティン姉妹、そして作者共々、心から感謝しております」

アサ「そして！！　今まで感想を書いてくださった未土井無視様、幻想の箱庭様、墜ちた聖騎士様、青いタヌキ様、ムーギネーター様、幻想の庭師様、煌　焔様、琥様、ｍｅｏ様、緋水様、香多詩路様、アンデルセン様、雨季様、ｔｋ様、白姫　彼方様、あんぎゃーす様、赤坂七夕様、幻揶恣蔽様、ｊｕｎｋｙ様、ｅｖａｎｇｅｌｉｎｅ様、ヘルカイザー様、朝凪　夜風様……以上、二十二名の皆さま！！！　本当にありがとうございます！！！！」

スノウ「そしてそして！！！　この小説に評価をしてくださった１８人のユーザーの方々、お気に入り登録して下さっている３０６名のユーザーの皆さま！！！　このような駄文を執筆しているダメ作者、“リィーン”をお気に入りユーザーにして下さっているカプリコット様、ｍａｉｙａ様、ｙｕｋｉ様、カビソン様、青いタヌキ様、ムーギネーター様、フェイト様、緋水様、香多詩路様、ｔｋ様、雨季様、ｇｕｉｌｔｙｈａｃｋ様、ジョイ様、紅舞姫様、幻揶恣蔽様、眼鏡の神様、ヘルカイザー様。どうもありがとうございます！！！」

シェレン・アサ・スノウ「本当に！！　ありがとうございます！！　これからも、今作をご愛読、よろしくお願いいたしまーす！！！！」

神様「はいお疲れ様でした！！！　続いては、このコーナーの本元、作品内の疑問やここはあんまり分からないんじゃないかなぁ？　と思われる部分をズバッと答えるコーナー。さぁ、今回のお題は……こちら！！！」

――――神様の設定――――

神様「です！！！！！　って俺ぇ！！！？」

レヴェッカ「あれ？　聞いとらへんかった？」

神様「初耳だよ！！！　ってか、本番前まで、何やるのか聞いてなかったし！！」

キララ「伝えたはずだぞ、私は」

スイ「プロデューサーが言うんだから、間違いないよな」

神様「ううう……（やっべぇ、聞いてなかったよ……）」

レヴェッカ「それでは、色々伏せたる所もあるけど、とりあえず明かせる範囲内で答えたる。ほなら、いつもの形式？で掲載するで。ほな、どうぞ」

名前：∴‡≪＃・？§≡＄¶±Ｋ∇⊆Φ（通称、神様）
かつての真名：〒＃の‡£ち＄
かつての神号：破壊神
現在の異名：βΔ∀ËΘ
性別：男
イメージＣＶ：ＧＡＣＫＴ

見た目年齢：２６歳
一人称：俺
種族：◆÷Σ
デフォルト身長：１８７センチ（変更可能）
デフォルト体重：７０キロ（変更可能）
かつての炎の色：虹色
総合ランク：測定不能（ＥＸすら軽く凌駕する）

【特記事項】

・グレイ・スティンとビビ・スティンの兄妹を転生させた神にして、作者が前に書いていた“灼眼のシャナ”の二次創作の主人公。故に、“元主人公の我儘な神様”というキーワードを付けている

・以前は紅世の王であり、そこから紆余曲折を経て、神へと昇華した存在。そこから、“更に高次元の存在へと昇華した”。故に、異質な存在

・その紆余曲折の間に、九人の妻を獲得し、子を生んだ親でもある

・神となってから、ある組織を立ち上げたが、その組織がどうなっているのかは不明

・おちゃらけている時もあり、真面目になったり、狂ったり……と、コロコロと性格が変貌する。茶目っ気が強く、人をからかうのを好み、色恋沙汰に機敏に反応する。また、気に入らない事があると表情にすぐ現れる。など、人間らしい性格をしている。そして、戦いと宴、“コイバナ”を好む自由人（しかし、限度知らずで、度

々暴走したりする）

・好きな食べ物は“たこ焼き”で、ある並行世界の“大阪”で武者修行を行い、“究極のたこ焼き”を追い求めている（現在進行系）。なお、彼が作るたこ焼きは絶品で、“昇天モノの味”とは、妻達の評価

・かつて、その戦いの様から、“死の恐怖”などと呼ばれていた事があり、“破壊神”となってからは、“恐破絶壊（キョウハゼッカイ）の死神”という異名を持っていた

・謎のカリスマ性を持つが故に、彼を慕い、尊敬するモノは多い

・“灼眼のシャナ”の二次創作と言う事で、無論、シャナと悠二達との親交はある。が、その後どうなっているのかは不明

・“蘇生”と“ＢＬ”、“ホモ”という言葉を何よりも嫌う

・見た目は、“魔法先生ネギま!”の“ナギ・スプリングフィールド”に、“キングダムハーツ2”のラスボス、“ゼムナス”の白と黒のコートを着せた感じ。そして、瞳が七色に光るオーロラのような不思議な眼をしている

・作者に最も愛されているキャラ（笑）

【固有能力】

０）“〒＃の＄”
彼が持つ唯一の能力。だが、その応用性は無限の如くにあり、“破壊神”の力も、この能力の片鱗でしかない。作者が思うに、明らかにバグ以上、勝てるモノ無しだと断言できる。能力と言うよりも、彼そのものを具現するモノなので、消す事は不可能。この力の消滅は、彼の消滅を意味する。彼の真名に由来するモノ

【使用デバイス】

１）“黄昏暁（タソガレノアカツキ）”
インテリジェントとアームド、ストレージにユニゾンの機能を併せ持つ、義手型のハイブリットデバイス。元は“宝具”だったが、ソレを改良し、紅世の王の時に起きた事件で失った左腕の代わりとしたモノ。それを、神となった今でも愛用している。色んなシステムを積みこみまくって改造を施したが故に、ＡＩが支障をきたし、主を冒涜する外道な性格へと変貌した（だが、命令はちゃんと聞く。デバイス本人曰く、これは“ゲドデレ【外道でデレてる、の略】”とのこと）。また、ユニゾンの機能もあるため、人間形態へとなれる。だが、この時はなぜか主に従順なメスイヌのような性格へと変貌する。ある意味、二重人格なデバイスである。形状は、“鋼の錬金術師”の“エドワード・エルリック”の“機械鎧”のような感じに、手の甲に虹色のデバイスコアがある。神となってからは、普段は偽装コーティングで普通の腕のようにしている

１－１）“ウェポンレジスターシステム”
このデバイスが最初に持っていたシステム。本来は元となった宝具の能力を、デバイスの機能として動かしている。武具を光粒子に換

えデバイス内に取り込み、戦況に合わせて武具を取り出せるシステム。一度取り込んだ武具なら、壊されても自己修復が可能。現在、このシステムに取りこんである武具は、大鎌、双剣、大剣、双銃、刀剣、銃剣、護拳、重槍、呪杖、魔典、妖扇、施弓、剛斧の１３種類

１－２）“フロートウェポンシステム”
武器を宙に浮かせ、自動的に敵を追尾させ、攻撃を行わせると言うモノ。これの制御は、黄昏暁のＡＩが行っている。このシステムと前述の“ウェポンレジスターシステム”を組み合わせたモノが、“ハザードモード”で、このデバイスのフルドライブに該当するモード

１－３）“カートリッジシステム”
無論、このシステムも積まれており、紅世の王時代ではかなり多様していた（神となった今でも、本気出す際は使用している）。パーツ名は、“ＣＶＫ－７９２／Ｇ”。Ｇは“ガトリング”の略で、外付けされた弾倉を填めて、高速でロードするタイプのモノ。外付け用の弾倉は異空間に貯蔵されており、そこから繋げて連続ロードする。貯蔵量は、当時は一兆発以上とか……現在は、其の更に一万倍もあるとか（更に、ロードするカートリッジは特別製で、“存在の力”を内包したカートリッジな為、魔力とは桁違いの力を発揮する）……

１－４）“ブレインリンクシステム”
“グレイ・スティン”の、“タマモノマエ”と“シュテンドウジ”に組み込まれているシステムと同様のモノ。実は、あれらの原典はコレ

１－５）“ＧＭドライブ”
皆さんご存じ、“機動戦士ガンダムＯＯ”の、あの“太陽炉”そのものです。カートリッジシステムだけでは追いつかない程、エネル

ギー消費が激しいので、この駆動機関を組み込んだ（だが、これを組み込んだせいで、デバイスのＡＩが狂った）

【使用武具】

１）“万死ヲ刻陰セシ虹”
彼の体並の巨大な刃を、両端に二つも持つ、異形の大鎌。扱いは難しく、かなりの技量がいる。だが、彼は扱いこなしている。なお、持ち手の中心は外す事が出来、大鎌の二刀流が可能。無論、原典は“．ｈａｃｋ／／Ｇ．Ｕ．”の“ハセヲ”の武器、“万死ヲ刻ム影”です

２）“？？？”
現在非公開中

３）“？？？”
現在非公開中

メイリン「以上、彼の設定でした」

神様「俺、もうお婿に行けない……って、もう嫁持ってるっての

！！！」

ヤーヤ「お兄様、一人ボケツッコミは止めてください。せっかく私が突っ込もうとしたのに……」

神様「あぁ、悪かった……（ってか、お前がツッコミ？）」

ナユタ「にしても、非公開な所が多いですわね」

キララ「あぁ、手抜き工事にも程がある」

神様「仕方ねぇじゃん、ネタばれに繋がるんだからよ」

レヴェッカ「まぁ、そんならしゃぁないけど……つまり、アンタはかなりのキーパーソンっちゅう訳やな」

神様「当然！！！　神様だからな！！！」

レヴェッカ・シェレン・アサ・ヤーヤ・スノウ・ナユタ・スイ・キララ・メイリン「……」

神様「な、なに？　なんで黙ってるの？」

レヴェッカ「いや、あんな……アンタが神かみカミ言うとると、なんや違和感覚えるんや」

神様「仕方ないじゃん。ここではそう通ってるんだからよ」

レヴェッカ「そんならええけど……」

神様「さてさて！！！　そろそろお時間が迫ってきたので、今日の所はこれにて終了！！！！」

アサ「いやぁ、中々楽しかったよ！！！」

ヤーヤ「でも、毎回続くと、結構大変よ」

シェレン「ねぇねぇ、一つ聞きたいんだけど……いつになったら、あの時のアンケートの結果を教えるの？」

神様・レヴェッカ・アサ・ヤーヤ・スノウ・ナユタ・スイ・キララ・メイリン「あ……」

神様「そういえば、期限決めてなかったな……」

スノウ「ど、どうしよう？」

メイリン「簡単よ。今締め切ればいいし、今報告すれば良いだけよ。誰がなったのかを、ね」

神様・ヤーヤ・スノウ「なるほど」

スノウ「それでは！！　前回の今コーナーの新メンバーアンケートは、今限りで終了させていただきます！！！」

ヤーヤ「では、新メンバーの発表を致します。新メンバーは……」

シェレン・アサ・ナユタ・スイ・キララ「……」

ヤーヤ「ムーギネーター様、未土井無視様が選んでくださった、“シェレン”に決定しました」

シェレン「いやっほぉーい！！！！　ありがとね、ムーギネーターさん♪　未土井無視さん♪」

メイリン「ムーギネーター様には、＃３０でグレイが使用した、“ブースターランス”を。未土井無視様には、遊戯王カードに変換した“ブースターランス”をプレゼントするわ。お二方が執筆している小説のキャラにお使いください」

スノウ「ちなみに効果は、装備魔法で、“このカードを装備したモンスターは、相手に直接ダイレクトアタックする事が出来る。この魔法効果は、他の魔法、トラップ、効果モンスターの効果を受け付けない。ただし、この効果が発動された場合、バトルフェイズ終了後、このカードを装備しているモンスターを破壊する”って事になっております！！」

ヤーヤ「チートね、その効果」

神様「まぁ、どっちもチートだろよ。何せ、このブースターランスは、かの闇の書の闇すらブッ飛ばす事が可能な程の高出力のもんだしな」

レヴェッカ・シェレン・アサ・ヤーヤ・スノウ・ナユタ・スイ・キララ・メイリン「なにそれ、怖い」

神様「俺的には、お前らの息があったその反応が怖いよ……」

レヴェッカ「ほんなら、今回はこれでしまい。次回も、楽しみにし

とってなぁ」

神様「それでは皆様！！　これからも今作をよろしくお願いします！！！」

神様・レヴェッカ・シェレン・アサ・ヤーヤ・スノウ・ナユタ・スイ・キララ・メイリン「ばいば～い！！」

作「えぇ、作者より一言。読者の皆様方。今作をご愛読して下さり、誠にありがとうございます。これからも、誠心誠意頑張って執筆してまいりますので、どうかよろしく、お願いします。では、失礼します」

#３５　アリサちゃんとすずかちゃんの魔導師化計画、始動！？　其の二、活性

今回の“神の舞台裏”は、同時掲載の増刊号をやったので、休載とさせて頂きます。勝手で申し訳ありませんが、ご了承ください

あんぎゃーす様、赤坂七夕様、ムーギネーター様、緋水様、ヘルカイザー様、朝凪　夜風様。ご感想、ありがとうございます！！　そして、朝凪　夜風様、キャラ募集にご協力いただき、誠にありがとうございます！！！

#35　アリサちゃんとすずかちゃんの魔導師化計画、始動！？　其の二、活性

――――そして、とある兄妹（しまい）は、ある二人の願いを聞き、それを実行する……――――

温泉旅行から、三日が経ったある日……遠見市、スティン兄妹（しまい）が住むマンション、リビング

普段は、一人しかいないはずの部屋に、今日は珍しく多くの人がいた。ここの家主、グレイ・スティンと、その妹、ビビ・スティン。そして、ここの家主に呼ばれた、アリサ・バニングスと、月村すずか……

「……で、なんで呼んでも無い奴らを連れて来るんだ、お前は」

「あ、あははは……御免なさいｍ（＿＿）ｍ」

デジャヴを感じるが、気にせず……そして、その二人の親友、高町なのはとフェイト・Ｔ・ハラオウン、そして新しく友達となった八神はやて。その守護騎士であるシグナムとヴィータ、シャマル。そして、夜天の魔導書、リインフォース……まさに、あの時のメンツがそのまま来ていたのであった。ちなみに、ザフィーラは留守番しているらしい……

「あ、あの……また、お邪魔、でしたでしょうか？」

「ご、御免なさい。あの、どうしても気になっちゃって……」
「度々すまない、姉上殿」
「ほ、本当に御免なさい、グレイさん」

またもデジャヴを感じるやり取りだが……気にしたら負けだ

「はぁ……まぁいいわ。それじゃぁ、バニングス、月村。そこの椅子に座って待ってなさい」
「「は、はい！！」」

そう言うと、二人はリビングにある椅子にそそくさと座った……
眼の前のテーブルには、何やら箸やフォーク、それとスプーンが……
……

「「「「「「「「「「？」」」」」」」」」」

全員が疑問に思っていた時

「はい、お待たせ」
［［ごとッ］］

そう言って、グレイは“キッチン”から何かを持って出てきて、その何かを、二人の眼の前のテーブルに一つずつ置いた。その何かとは……

「「「「「「「「「「？……！！！！！！！！！！？？？」」」」」」」」」」

皆が、唖然とした。そう、それは……

［でろ～～～ん……］

何やら、言葉に形容できない、“汚物のようなナニカ”（アルトネリコ2を知っている人は、“シャロン・ド・トロワ”のようなモノ。と言ったら、分かるだろう……）。それが、大きなお皿に盛られており、あたかも食べ物だと主張していた……それが、アリサとすずか、二人の前にドンと置かれたのだった

「……あ、あのぉ～……？」

「こ、これは、一体……？」

二人は、これは何なのかと言った雰囲気で問いかけてきた……そして、本能的に、この後の展開を予測していた。そう、これを……

……

「それを“食べなさい”、残さずね」

……オワタ＼（＾ｏ＾）／

「「「「「「「「「「……えええええええええええええええッッ！！！！！？？？」」」」」」」」」」

グレイ以外の、全員の絶叫がこだました。それはそうだろう。明らかに食べ物には見えないソレを、食べろと言うのだ。しかも残さず

……それを聞いたら、誰しも叫ぶだろう

「お、おおおおおおお姉様？　な、なななななな何をおっしゃるのですか？」

妹がテンパった口調で、当然のように反応してきた

「何？　文句あるの？　言っておくけど、それは“リンカーコアを活性化させる食材で作った食べ物”よ。そんな形をしているのは、食材を殺さないように作っていたら、そういう見た目になったのよ」

「「「「「「「「「「え？？」」」」」」」」」」

リンカーコアを、活性化する食材で作った、食べ物？

「そ、そんな、素晴らしいモノ、有るの？」

「えっと……私の記憶が正しければ、そんなモノは存在しないはずなんだけど……」

「シャマルの言うとおりだ。私も、そのような話は聞いた事がない」

ビビとシャマル、そしてシグナムが、その存在を否定した。それもそうだろう……なぜなら、その食材と言うのが、“幻世”に存在する幻想種達の血肉ですから……そう。タマモが提示してきた、短期間で効率よくリンカーコアを活性化させる方法というのは、“幻世に住まう幻想種の肉、そして、魔力が一番詰まっている部位を使った料理を食べさせる”という方法だったのだ。うん、手っ取り早くて良い方法だね！！　これ一食で、なんと君も、ＡＡＡ＋以上、ＳＳ以下の魔力ランクを得られるのだ！！！　ただし、リンカーコアを持ってないとダメだからね♪

「なんや、シャマルの料理の方が、可愛く見えるんやけど、私の気

のせいやろか？」
「はやてぇ、それ絶対気のせいじゃないと思う……」
「これは、明らかに酷い……」

八神家の食材ブレイカー（食材を侮辱するモノに与えられる称号）、シャマルの料理よりも酷い……そう評価する家主はやてと、末っ子のヴィータ、新しき家族のリインフォースであった。そして、外野よりも、一番衝撃を受けているのは……

「「……」」
「……ア、アリサ、ちゃん？」
「だ、大丈夫？　すずか……」

放心状態の二人を心配するなのはとフェイト……そう、食べろと言われた本人達、アリサとすずかであった……その衝撃は、かなりのモノだと見受けられる……二人とも、お嬢様故に、このような超絶ゲテモノなど、口にはしないだろう。いや、しない。そして見た事も無いだろう。そう断言できる！！

「……す、すずか……」
「な、何？　アリサちゃん……」
「こんな食べ物、見た事、ある？」
「えっと……ほら、魔法少女モノのアニメで、呪いの食べ物みたいな、そういうのになりそうかも……」
「あぁ、なるほど……確かに、そう言うのであるかもね……」

どうやら、かなりショックを受けており、思考が狂っているのであろう……二人とも、前回のあの試験の様子から、今回も結構大変な事になるのではないのかと思い、それなりの覚悟で迎えて

きたのだが……それが、まさかこんな形での覚悟を強いられるとは、毛ほども思っていなかったであろう

「どうしたの？　早く食べなさい。嫌なら、魔導師になる事を諦めるのね」

やや挑発気味に言ってみたグレイ。だが、本心では

「（見た目が不味そうだから食えないってか？　言っとくが、材料の質は良いんだ。不味いとは言わさんぞ）」

などと、あのゲテモノ料理を侮辱している事を後悔させてやる、と言った思考をしていたとか……

そして、二人の少女はと言うと

「た、食べれば良いんでしょ！！　食べれば！！！」

「「「「アリサ〜ちゃん〜！！？」」」」

負けず嫌い故に、挑発に弱い。故に、手元に有る箸を握り

「行くわよ！！　すずか！！！　これも、魔法使いになる為よ！！！」

「へ！？　あ、うん！！！」

恐ろしい表情で、隣にいる親友を巻き込み、ついにそのゲテモノ料理に、箸を付けてしまった。その時、箸から伝わってきた感触は、クリームを掴んだようなモノだったとか

「「ッ……」」

［プルプルプルッ」

箸を握る手が震え、ソレを口元へ運んでいく。その様は、さすがお嬢様と言ったところか、気品に満ちた箸使いだったとか……

もはや、引き返せない。意を決し、その“汚物のようなナニカ”を

「「ッ！！！」」

［［パクッ！！］］

「「「「「「「「「あ……」」」」」」」」」

口に、入れてしまった……だが

「「ッ……？　あれ？」」

「「「「「「「「「？」」」」」」」」」

「……ふぅ」

二人とも、意外な表情をして、その様を見たグレイは、“ほらな”といった表情でため息をついた

「「おいしい！！！」」

まさに、お約束展開である

「「「「「「「「「「えええええええええええええええええええええええええッッッッ！！！！！！！！！！！！！？？？？？？」」」」」」」」」」

皆が、二人の言葉に驚き、絶叫した。いや、確かに、それは驚くわな。あんなゲテモノがおいしいと言えば、ね。ははは、いがいだよ

ねー（棒読み）

「（な、なんてテンプレ的展開……シャマルのも、こうであったら良かった）」

妹、お前の気持ちはアレだが、それは無理な話だ。なぜなら、シャマルはそういうキャラだと世間が認識してるから！！

「あ、アリサちゃん。ちょっとそれ、食べてみていい？」

「うん。見た目はあれだけど、味はいいよ」

「すずか、一口だけ、食べてみてもいい？」

「うん。はい」

そう言って、なのはとフェイトが興味を示したのか、そのゲテモノに箸を付け

「はむ……うん、確かにおいしい……」

「な、なんで何だろう？　なんでこんな見た目で、こんなにおいしいモノが出来るの？」

まぁ、普通はそう思いますよね、うん

「当然よ。使ってる食材がいいから、それで作る料理もおいしくなるに決まってるじゃん」

お姉さまぁ、その自論はおかしいと思いま～す。もしそうだったら、シャマルの料理もおいしいってことになるから

「あと、人に食べさせるのは良いけど、一応分量考えて作ってるんだから、そこを考えてね」

「「「「は、はい」」」」

なのはとフェイト、アリサとすずかが同時に答え、二人は、ゲテモノの処理に戻った

「ううん、ちょっと遅かったか」

と、その時はやてがつぶやていたとか……

そて数分後、二人は“汚物のようなナニカ”を処理し、グレイに追い出されるかのように、各々が帰って行きました……

□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■

そして、その日の夜

リビングには、グレイが一人だけが、机に向かって作業をしていた。

そう、例の防衛プログラムの制御デバイスの製作を行っていたのだ

「……よし、まぁこんなもんか」

その手に有るのは、白いプレートを幾つも繋げたブレスレットのようなモノ。そして、机の上には、更に二つのデバイスが……

「（ついでに、あの二人のデバイスも作ったが……ったく、柄じゃねぇことしてんな、最近）」

まるで、何かを振り払うように、作業をしていた。ちなみに、アリサとすずかの二人に与える予定のデバイスは、どちらもインテリジェントデバイス。一つは、晴天に輝く太陽を象ったネックレスの形をしており、もう一つは、宵闇を照らす月を象ったイヤリングの形状をしていた……

「……はぁ。何やってんだろ、俺……」

なぜ、こんな事をしているのか。前までの自分なら、こんなお人よしな事はしなかったのだが……

――――「まるで、“闘争の鬼人”のような、そんな気配を……」――――

「ッ！！！」

［ドンッ！！！］

不意に、あの時言われた事を、思い出した。その途端、彼の脳内に、ある単語が木霊した

“鬼”という、言葉に……

「（クッソウ！！！　どうしたって言うんだよ俺は！！！　何故だ、何故これほどまで“鬼”という単語が気になってるんだよ！！！！）」

まるで、“今のバケモノと化した自分に、相応しい言葉のうな”……

「……チィ！！　胸糞ワリィ……憂さ晴らしに、幻世に行って怪物狩りでもしてるか、食材もキレそうだしな」

そういうと、作業を中断して、椅子から立ち上がり、歩き出した

「タマモ、ゲートを開けろ」

『……はい、主』

タマモの言葉は、主を思いやる、女中のような感情を、持っていた

そして、少しずつ彼は、狂っていく……狂くる、クル狂、と……

……

#３６　アリサちゃんとすずかちゃんの魔導師化計画、始動！？　其の三、特訓

更新が遅れてしまい、大変申し訳ありませんでした

それと、今回は性的な描写が含まれており、これはＲ－１５でも大丈夫なのかが、私は分かりません

なのでもうし訳ありませんが、誰か、これぐらいなら大丈夫とか、完全アウト、と言って下さい……

ムーギネーター様、緋水様、ｔｋ様、ヘルカイザー様。いつもご感想、ありがとうございます！！！

――――そして、とある兄妹（しまい）は、ある二人の願いを聞き、それを実行する……――――

未発見世界……現地通称、“幻世”

あのゲテモノ事件から、はや一週間……これまでの話しを簡単に説明すると、アリサとすずかのリンカーコアは活性化され、魔力保有量は格段に上がっていた。ベアトやアースラでの測定の結果、二人ともＳ－というランクにまで跳ね上がったらしい……なのはやフェイト、はやて達と同じか、それ以上になってしまったのだ。そして、地盤が固まった所で、これからはその魔力を扱う為の訓練になり……現在、グレイとその二人とビビ、そして……

「……全員、無事に来れたようね」

なのは、フェイト、はやて、シグナム、ヴィータ、シャマル、リインフォースの面々。更に、アルフやザフィーラ、それとユーノやクロノが、幻世に来ていた

「ギャオオオオオオオオオオオオオオッ！！！！」「ギャァッ！！！　ギャァッ！！！」「グモオオオオオオオオオオオオオオッ！！！！」

「「「

当然、ここに初めて来たなのはとフェイト、はやてとアリサとすずか、そしてリインフォース、アルフ、ユーノ、クロノの面々は、唖然としていた……

「……グレイ、さん？　ここは、なん、なの？」

「えっと……絵本とか、漫画とか……それでしか見たことあらへん動物がおるんやけど……」

「いや、あと……ゲームとか、アニメとか、そんなので見た事あるような動物もいるよ……？」

「それに、ここにいる動物達、感じる魔力が、桁違いなんだけど……」

「そ、そうなんだ……」

なのはとはやて、そしてアリサ、フェイト、すずかが、その魔境を見て、こう評価していた……

「ここなら、アンタ達にも手頃な魔物もいるし、有る程度なら何やっても、他の次元世界に影響は無いらしいし……まぁ、訓練をするなら、もってこいの場所って訳よ」

「「「

がっくりと肩を落とすクロノ。ちなみに、ここの事は他言無用だと釘刺している為、管理局に知られる事は無いだろう（でも、知った所で、どうこう出来る事は無いだろう。来たら餌にされるだけだ）

その後、アリサとすずかに魔法を教える為に、なのはとフェイト、アルフにユーノ、そしてクロノのミッド式魔導師達が付き、そして最近魔導師となったはやてには、ビビとシグナム、ヴィータ、シャマル、リインフォース、そしてザフィーラのベルカ陣が相手をすることとなった……グレイは、その二組の訓練に邪魔が入れぬように、周囲を警戒するという役目となり……二人を魔導師にする計画は、大詰めとなった

□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■

ミッド陣……

そこでは直ぐに、アリサとすずかの二人に、魔法の扱い方を教え始めていた。魔法学校を卒業したクロノが中心となって、独学や大魔導師の使い魔に教えられてきたフェイト、結界や防御魔法などの補助が得意のユーノ。そして、遠距離砲撃の得意なのは。の四人で教えて行く方針を決めたようだ。

「それじゃぁまず……二人とも、前に渡したテキストは、全部読んできたか？」
「「はい！」」
「あれくらい暗記するの、簡単じゃない」
「ちょっと、難しかったけど……なんとか、覚えてきました」

確かに、二人ともかなりの頭脳の持ち主だ。アリサに至っては、完全な天才少女だ。文章を覚えるくらいは、造作の無い事のようだった

「結構だ。それじゃぁ、次に移ろう。まず、君達の魔力量は、測定の結果、ニアSクラスで、かなり高い数値だ。それと、アリサ、君には他に、“炎の魔力変換資質”を持っている」

魔力変換資質。それは、フェイトとシグナムに宿る資質で、炎は、シグナムと同じである……うん、中の人繋がりであり、バニングスの姓を変えれば、バーニングになるから……それらから来てるのは言うまでも無い

「えっと……魔力をあまり意識せずに、違う物質に変える、っていうの、だよね？」
「うん。私の場合は、電気だから、こんな風に」
［バチバチバチッ！！］

そういうと、フェイトは腕に電気を纏わせ、その様子を見せた

「「うわッ！！？」」
「こ、これが、魔法……」
「す、すごい……」

二人は、その様子に関心を示し、ますます魔法に興味を示していった

「話を続けるよ。アリサは、遠距離からの砲撃に適正がある。これは、なのはと同じ適正だ。一定の位置で、味方を援護する、魔導師としての基本だ。それとは違って、すずかの場合は、フェイトと同じ、高速戦闘に向いている適正を持っている。相手を翻弄し、近距離から切りつけるか、中距離、遠距離からの砲撃をするか……オールラウドに戦うスタイルに向いている」

どうやら、アリサはなのはに似た感じで、すずかはフェイトに似た感じらしい……

「次に、さっきスティンさんから貰ったデバイスを起動してみようか」

「「はい！！」」

実は、ここに来る前に、二人にはグレイからデバイスを送られていたのだ。あの、晴天に輝く太陽を象ったネックレスと、宵闇を照らす月を象ったイヤリングの、あの二つである

「よーし、それじゃぁ行くよ！“アマテラス”！！」

『アイアイサー！！！』

「お願いね、“ツクヨミ”」

『勿論じゃ。では、行くかの、御前よ』

アリサのデバイスは、太陽の化身、日の本を照らす日輪の日本神話の神、“アマテラス”。そして、すずかのデバイスは、アリサのデバイスと対をなす、月輪の神にして、その兄弟神、“ツクヨミ”……それらを意識したデバイスだった

アマテラスは、少女のような女性で、陽気で明るい性格。ツクヨミは、献身的な女性で、年配風の口調で話す性格、と言った感じで設定し作ったらしい（形状やそれら設定は、全てビビがプロデュースしたモノらしい）……

「“アマテラス”！！」
“ツクヨミ”！！」
「「セーット、アップ！！！」」
『『了解！！』』
［［カッッ！！！！！！！！］］

二人がデバイスを掲げ、それらを起動させると、二人の姿は一気に変わって行った

アリサは、無印のなのはのバリアジャケットに似ていた。違うとすれば、スカートがミニスカで、袖はピッチリとなっており、青い部分が赤く、リボンが青くなっていた。また、足はハイソックスに変更され、腕にはA、sのフェイトのような手甲が装着されていた

それに対して、すずかは、無印のフェイトのバリアジャケットに似たモノになっていた。だが、スカートは長く、腕や足は黒いボディスーツのような感じで、露出が押さえられている。そして、赤い部部が薄めの紫色になっており、マントが無いデザインとなっていた。あと、髪型がポニーテールになっていた

「よし。なら、これから簡単な魔法を使ってみながら、徐々に難しい魔法を使って行こう」
「「はい！！」」
「なのは、フェイト。君たちも手伝ってほしい」
「うん！　分かった！」

「了解」

そうして、二人は魔導師として、段々と成長していったのであった

□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■

ベルカ陣……

「それでは、こちらも始めましょう、主はやて」

「うん、よろしくお願いします」

ミッド陣から少し遠い場所で、はやてに魔導を教えているのは、同じ後方支援に特化したシャマルとリインフォースの二人だった

「えっと、はやてちゃんには、有る程度基礎は教えてきたから、今日からは応用に入りたいと思います」

「はーい！」

「その為に、今回はリインフォースとユニゾンしたビビちゃんと、シグナムとヴィータとの戦闘を見て、一人でどのように立ち回るかを見た後で、実践に入ってみましょう」

まるで小学の先生のように、優しく指導していくシャマルであった

「それじゃぁ、リインフォース、行くよ！！」
「あぁ、ビビ」
近くで待機していたビビは、リインフォースに声を掛け
「「ユニゾン、イン！！」」
［カッ！！！！］
二人が光ると、ビビはユニゾンした姿になっていた。虹彩異色の瞳は、銀色と蒼色から、緑色と紫色に変わり、髪は銀髪から金色に輝き出した。バリアジャケットは、はやての騎士甲冑の黒い部分と白い部分が反転した感じのモノが装着された
「うわぁ……コレが、ユニゾン？」
『はい』
「すごい、力が溢れてくる……（こりゃぁ、私のチート具合も一層レベルアップしちゃってるかも（＾－＾））」
実は、二人がユニゾンしたのは、これが初めてなのであった。ユニゾンの適正があると言うのは、検査の結果であり、実際はどうなのかは分からなかったらしい。だが、はやてとのユニゾン不可能は実践済みで、融合事故を起こす一歩手前だったとか……だが、なんとかなったようで、なによりだが……
「それじゃぁ、始めよか」
二人のユニゾンの様子を見ても、彼女は明るかった。どうやら、ユニゾンは出来なくても、彼女が今を生きているという事が重要だと、彼女は言っていた

「（本当に、優しい子だなぁ……）」

ビビは、改めて、はやての優しさを知った……

「（にしても、ユニゾンってホントに凄いなぁ。皆作りたがるわけだよ……）」

この力の溢れよう。それは、彼女が予想していたよりも、膨大で尋常ではなかった。このほどの恩恵が得られるのなら、ユニゾンデバイスも良いと考えた

「（オリジナルのユニゾンデバイスを作るのもアリかなぁ。でも、私にはリインフォースがいるから、いっか♪）」

と言う事で、オリジナルユニゾンデバイスを断念した……コレ以上、チートになる必要はないから、と

『それでは、戦闘準備に入りましょう、ビビ』

「うん！　分かった」

体の中から、リインフォースの声が聞こえ、それに従い、彼女は戦闘態勢に入る……と、思いきや

「（そういえば、ユニゾンしてるってことは、リインフォースは今、私の中にいるんだよね……）」

などと、当たり前な事を考え出した……途端に！！！

［ドクンッ、ドクンッ、ドクンッ］

「ッ（や、ヤバい……興奮してきた（＊＜＿＞＊））」

ヤバい、チョーヤバい！！！　あのキレイで美女のリインフォースが今！！　私の中にいる！！！　これって、なんか……良い！！　あぁ……良い、良いよぉ！！！　コレが、天国って奴！！？　あぁ～、すごい……背筋が、背筋がゾクゾクするぅ～～～？。体が、体が火照りそう……息が、荒くなっちゃう……心臓が、バクバク鳴ってる……あぁ、あ、イイ……イイ？！！……あぁぁぁ……あ、あぁぁぁ～～ん？？？

「？　どないしたん、ビビちゃん？」

ぴたりと時が止まったかのように、動きが止まったビビを、はやてが気になって声を掛けた。だが、トリップしちゃっているので、聞いてはいなかった……

「「「「？」」」」

守護騎士達も、同様にビビの方を見て、不思議がった。なぜなら、少しずつ、ビビの息が荒くなっていっているのであった

「ビビちゃ～ん？」

「う～ん、どうしちゃったのかな？」

「リインフォース、ビビはどうなっているのだ？」

『さ、さぁ？　私も、何が何だか……ただ、心拍数が上がって、体の体温が上がっているのだ。だが、風邪を引いたわけではない……融合適合率も、問題は無い。なのに、なぜか……体が固まっているのだ』

「「「「？」」」」

全員が、不思議がっている中、ビビの息はますます荒くなってきて、その様は、十人中十人は絶対に引くであろう程の、ヤバさだった

「（もう……もう、もう、もうもう？！！！（／／／＜＿＞／／／）」

［ぷしーーーーっ！！！］

「「「「「『！！！？』」」」」」

……とうとう、その興奮のあまりに……噴水の如く、ＨＡＮＡＪＩを出してしまったのであった（。ロ。）

「も～～～……」

［ぽてッ］

チーンッ！　そして、下に血溜りを作り、倒れてしまったのであった……

「うわぁぁぁぁぁぁ～～～ッ！！！？　ビ、ビビちゃァァァァァァァ～～～んッッ！！！！！？？」

「きゅ、救急車！！！　衛生兵ッ！！！！　メディ～～～～ッック！！！！！！！」

「シャマル！！！　急いで手当てを！！！　リインフォース！！！　直ぐにユニゾンを解いて手伝え！！！」

「は、はい！！！」

『あ、あぁ！！！』

何とも、人騒がせな事件が起きて……その後、仕切り直し、今度は何事も起こさずに、無事訓練を開始したという……まぁ、なんです？　変態は変態だったと言う事で、皆さま、御愛嬌を

□■□■□■

「……」

その頃、グレイはミッド陣の講義の内容を思い返し、ふと、有る事を思いついたのであった。そんな時

《お兄ちゃ～ん。皆、帰り仕度終わったよ～》

「そうか。なら、最初に転送された場所に集合しろ。今からそっちに行く」

《うん、分かった》

そう言って、念話の回線を切って、グレイも、その場から全員がいる場所に行き、幻世から帰って行った

再び、幻世に静かな時が、戻ったのであった……

□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■

その日の夜……スティン兄妹（しまい）が住むマンションの屋上

「……」

そこに、一人の女が、立っていた……転生者兄妹（しまい）の兄、グレイ・スティンだった……

「……」

［ヒュンッ！！　ヒュンッ！！］

その影は、ただ立ってはいなかった……周囲に、２９個程の暗い虹色の光球が、彼（かのじょ）の周囲を飛びまわっていた……

そう、彼（かのじょ）は、ミッド陣の魔法の訓練を見て、自分専用の術式を編みだしていた。現在は、それらの制御に成れるよう、まずはシューター系の魔法の訓練をしていたのであった

「……」

訓練方法は、高町が行った空き缶にシューターをぶつけて、落とさないようにするモノではなく、自分の周囲、２メートル以内の空間に、２９個のシューターを発生させ、それら同士をぶつけさせないように、秒速５０メートルの速度で周囲を回転させるという割と簡単そうなモノ。正し、デバイスの補助無しで、逆にタマモやシュテンによる妨害操作があり、その難易度は高町のよりも高いだろう。無論、自分に当たったり、範囲から出たり、地面に当たってもアウト。カスっても即アウト、という規制の中で……なおかつ

［ヒュンッ！！　ヒュンッ！！　ヒュンッ！！　ジッ］

「ッ！　止まれ」

［ピタッ］

「……はぁ」

『惜しかったですね。後１０秒で、目標タイムでした』

「そうか。なら、次は１０秒足して、８１７秒だ」
『了解しました、主』

そう、時間制限以内に出来なければ、出来なかった時間分、次の制限時間に上乗せしていくという方法なのだ。それも、前に決めた制限時間分に、だ。最初は1分で終わりだったのが、最初の段階でミスが続き、今や４９回やってこのタイムにまで伸びてしまったのだ。それに、最初は２０個でやっていたが、５回程失敗すれば、制御する数を増やしていくというペナルティを課してある事で、どんどん難易度は高まって行く限りだった

「なかなか上手く行かんな……ふぅ。少し、休憩するか」

そう思って、腰をその場に下ろして、夜空を見上げた……

「……」

その時、またも不意に、有る言葉が浮かんだ

――――「まるで、“闘争の鬼人”のような、そんな気配を……」――――

「……はぁ。また、か……」

最近、よくあの言葉を思い出す……ソレを振り払っても、記憶から忘れても、再び頭に、その言葉が浮かぶ……

「クソッ、マジでなんだってんだよ……」

何故、ここまでこの言葉が耳に残り、頭に響くのだろうか……

「よッ！　訓練とは、精が出るねぇ」

「……」

よりにも寄って、こんな機嫌が悪い時に、この男が……クソ神が現れたのであった……

「おいおい、そんな嫌そうな眼をすんなよ。せっかく差し入れを持ってきたのにさぁ」

そういうと、彼はグレイに有るモノを渡してきた

「……なんだこれは」

「何って、“たこ焼き”やんけ。ちなみにな、ワイが作ったんやで♪」

得意げにそのたこ焼きをグレイに差し出すが

「いらん」

と言って、押し返されたのであった

「なんや、ウマいのにぃ……」

［パクッ］

「う～～～ん、おいひい？　やっぱ、たこ焼きはエエのぉ。う～ん、うみゃ～い♪」

ソレを口にした瞬間、一気にキャラが崩壊してしまった……

「せやけどぉ、なんや、今一つ、パンチが足りひんなぁ。う～ん、なんやろ？　タレやろか？　それとも、生地か？　でも、つこてる小麦も、いろ～んな世界巡って見付けた最高級のモン使ってるっちゅうのになぁ……やっぱタレか？　それとも、青ノリやろか？　鰹節か！？　タコか！！？　う～ん……やっぱタレやな。また１から作り直すか」

いきなりエセ関西弁でしゃべりだして、自分で作ったたこ焼きにダメだしをした

［ひょいひょいひょいひょいッ］

「あ～ん……」

［パクパクパクパクンッ！！！］

「モグモグ……ぷはぁ、ごちそうさん」

［ボウッ！！］

つまようじで器用にたこ焼きを空中に放り投げ、空中で１個ずつ口の中に入れて行って、その全てを平らげたのだった。なお、ソレを乗せていた竹の笹でつくった舟を燃やした

「……邪魔をするなら帰れ」

「邪魔って言うなよ。そんなこと言われたら、俺様泣いちゃうよ？」

「勝手に泣いてろ」

そういうと、彼（かのじょ）は立ち上がり、再び訓練の入ろうとしていた

「……にしても、最初は乗り気じゃなかったのに、今じゃ結

構ノリノリじゃないかw　えぇ？」
「仕方ないだろ、郷に行ったら郷に従えってな。こんなファンタジーな世界にいるんなら、こうなるしか無いだろ」
まぁ、普通に過ごす事も出来ただろうけどな
「ふ～ん……はたして、“本当にそんな理由”なのかなぁ？」
「は？」
グレイは、神が言う言葉に、不快を抱いた
「お前は、本当にそう思っているのか？　仕方がないと、ここにいる唯一の家族である妹の頼みだからと……そんな下らん理由で、この生活を過ごしてはいないだろう？」
神は、いつの間にか、あのニヒルな笑みを見せていた……
人を見下し、罵り、嘲る、あの笑みを……
「……何が言いたいんだ、テメェは」
グレイは、幻世での訓練で培った殺気を、眼の前にいる男にぶつけた
「いや。君は、“この生活を楽しんではいないかい”と、言いたいだけさ」
［ズドオオォォォォォォォォォンッッ！！！！！！！」
……と、男が言った途端、彼がいた場所に、先ほどグレイが制御していた数の2倍の数……５８個のシューターが着弾した

「……」
「おっと、危ない危ない。後一歩で、危うく当たっていたよ」
「ッ！！」
グレイが振りかえると、そこには無傷で歩いている神の姿が……
四方八方から当たるようにしたのに、当たっていなかったらしい
「にしても、口よりも先に手が出るようになったとは……ほら、無意識の内に君は、この世界に順応しているのさ……楽しむ為に、ね」
「黙れ！！！」
「ハッハッハッ！　どうした？　声を荒げるなんて、お前らしく無いねぇ。フッフッフッ……」
［フワッ］
そう言うと、神はその場で浮かび上がり、グレイを見下した
「君が知らないうちに、己に内に眠るモノは、目覚め始めているんだよ……最近無いかい？　自分が変わり始めていると、思う事を……例えば……」
――――“闘争の鬼人”、とか……――――
［ズドドドドドドドドドォオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオンッッッ！！！

彼は、またも上空に浮かぶ神を相手に、数発のシューターを撃ち込み、黙らせようとした……

《ハッハッハッハッ！！　そら見ろ、そんな“鬼”のような形相をしているんだ。間違いなく、お前はこのようなファンタジーがお似合いだよ……高町士郎は、上手い事を言ったなぁ。“闘争の鬼人”、まさに、これこそお前に相応しい言葉は無いよ》

「ッ！！！！」

どこからともなく、声が聞こえる……念話のようなモノではなく、空から、地面から……空気から……己の周囲から聞こえる声だった

《そうは思はないか？　心の底から、その言葉が心地よいとは思わないか？》

「黙れ！！！！」

止めろ……それ以上俺に、“鬼”という言葉を聞かせるな！！！

キサマの言う通り、俺は確かに、その言葉が……

――――心地の良い言葉に、聞こえるんだ……――――

《そう思うはずだ。なぜならキサマは、“元からこのような世界で生きる”ように仕組まれた運命を持っていたからな……》

は……？

《フッフッフッ。キサマは、“起源”という言葉を知ってるか？》

……“起源”……？

《あぁ。お前は、前世と言うモノを信じるか？》

「……さぁな」

《フフッ……精神や魂、生命という観念を取り除けば、全てのモノは、何かに生まれ変わっているのさ。其の前世から前世、その更に前世……まぁ、いうなれば、お前という魂の原点。その魂が持つ、始まりの意味……魂が持つ方向性。まぁ、簡単に言ってしまえば、深い所に眠る本能、と言えばいいだろう》

本能……だと？

《そう。お前は、己の内に寝る本能に、気付き始めているんだよ……そう、お前の起源、“幻想”と言う名の起源に、な》

……“幻、想”……？

《そう、お前の起源は“幻想”。全ての空想や仮想、想像上にしか存在しない存在……お前は、それらを前世としているんだよ》

はぁ……？　なんだよ、それ……

《そして言えば、お前の前世は“鬼”か“悪霊”の類だったんだろうなぁ。だから、“鬼”という言葉に、本能が反応しているんだよ。前までは、ただの単語として聞いていたモノが、自分に向けられた事で、魂が応えたのさ》

そんな、バカな話が！！！

《まだ理解できないか？　なら例えを言おう……そう、お前の妹にしよう。アイツの起源は、“禁忌”。それも、“恋愛”という概念に対しての起源。そう、アイツは“禁断の恋”と言うモノに対し、本能的に惹かれてしまうんだ。分かるだろう？　アイツの今までの行動や、今日のあの変態ぶりを見れば、ね……》

「……」

確かに……アイツは昔からあぁだった。同姓に対して、恋愛感情を抱く……禁断の、とかいう言葉に、敏感だった……

《アイツの前世は、おそらく稀代の同姓愛者だったんだろうなぁ。それでいて、一つだけではなく、複数の愛を持っている、な……“百合ハーレム”、なんつう“禁忌”に満ちた言葉だ。あの妹の起源にとって、これほどまで素晴らしく似合っている言葉は無いよ、クックックッ……》

……

《さて、分かったか？　そして、お前の場合は“幻想”。つまり、お前はこんなファンタジーに満ちた世界のほうが、実は居心地がいいんだよ》

……嘘だ

《嘘ではないぞ？　なぜなら、お前は生前の世界に不満を持っていたはずだ。だから、幻想というモノを感じるゲームの、それもＲＰＧなんてジャンルのモノをやっていたのではないのか？　だが、世

間の眼を気にしてか、オタクというモノに成らずに、ゲームが趣味という一般人として生きてきた》

嘘だ

《そして、お前の戦い方なんて、とても現代人のやり方ではない。剣を持ち、刃で切り刻む……まるで、物語の戦士のような》

嘘だ！

《現代人が戦いに巻き込まれれば、普通は銃や大砲など、遠距離からで威力の高い武器を選ぶが、お前の場合は……そう、近距離で攻める、自らも危険が及ぶモノを選んだ》

嘘だ！！

《そして、極めつけはアレだ。あのリーゼロッテを地面に叩き落とした時の、あの笑み。忘れはせんぞ？　あの時のお前の、楽しそうな笑みを》

嘘だッ！！！

《とても、現代を生きる一般人とは思んなぁ……オタ共の場合は、こう言った非常識に憧れを抱いているから、非日常を望んでいる。が……お前の場合は》

――――本能的に、この状況を待ち望んでいたんだよ……

――――

「ッッッ！！！！！！！！！！！！！！！！！！！？？？？？？」

バカな……俺が、こうなる事を、望んでいた……？

《そうだ。お前はそういう生き物なのだよ。非日常こそが、お前の欲を満たすのだ……》

……

《フッフッフッフッ……さぁ、認めろ。おまえの起源を、“幻想”と言う名の起源をなぁ！！！　フッハッハッハッハッハッハッハッハッハッハッ！！！！》

「グゥ……ウオオオ

□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■

その、遥か上空……

「おやおや、獣のような咆哮を上げちゃって……いや、この場合は慟哭、かな？」

神は、ここにいた……そこにいて、彼の苦しむ様を見ていたのであった……

「俺様が作ったたこ焼きを拒絶した罰だよ、ったく、神からの贈り物を拒絶するとは、やはり面白い男だな、君は……」

ニヒル笑みを浮かべて、彼のその無様さを、笑った……

［ムニュッ］

と、不意に腕に何かが絡まり、柔らかい感触が襲った

「おや？　“シェレン”か？」

「へへっ、アッタリ～♪」

そこにいたのは、男の愛する妻の一人、シェレン……桃色のように赤い、オリエンタルな衣装に身を包み、その長身に合った、長い桃色の髪。一言で表すなら、美女と言えるが、彼女はそれだけでは

なかった。その身から放たれているのは、虎のような勇ましき覇気。
王者が持つ、威風堂々とした空気が、彼女の美をより強調させていた……そう、女傑とも、言えるだろう女性だった……だが、今の彼女からは、そのようなモノは一切無くなり、まるで乙女のような、儚さが見えていた

「……おい、当ててんなよ」
「む。こういうときは、当たってるぞって言うシチュエーションでしょう？　せっかく、当ててんのよ、っていう決め台詞を言おうと思ったのに～……」
「ハハ、すまなかったな」

彼は、優しい微笑みをして、彼女のお茶目なやり取りに気付けなかった事を詫びた。他の妻たちなら、これだけで許してしまうが、彼女と、“彼が一番愛する女性”だけは、それだけでは足りない

「むぅ……ヤ。それだけじゃぁ、詫びてない」
「はいはい……」

そう言うと、彼は彼女の顔に近付き

［チュッ］

唇同士を、触れ合わせた

「ん……チュッ、ちゅ……ん、ん……」
「ん、ふあぁ……ン、レロッ……んちゅ……」

舌を絡ませながら、深いキスを交わした後、暫くして、二人の唇は離れた

「んあ、ふう……うん、コレで許すわ」
「そうか？　なんなら、もっとやっても良いんだぞ？」
「あらそう？　じゃぁ、後で遠慮なく頂戴ね、約束よ」
「あぁ、いいとも……俺の愛する、美しき女よ……」

そう言うと、二人は再び深いキスを交わして、また離れた……その後、男は瞳を閉じ、優しい笑みを浮かべた

「これからも、楽しみにしているよ、お前達が描く物語を……」
［［フッ……］］

そうして神は、とある兄妹の物語の行く末を、見守るのであった……

#３６　アリサちゃんとすずかちゃんの魔導師化計画、始動！？　其の三、特訓

～～～神の舞台裏～～～

神「今回はちょっとエロスに走ってみたぜ……掲載していいのかどうか、マジで分からんレベルだがな」

？？？「そんなことよりも、はやく始めましょう」

神「おっと、そうだな。それじゃぁ、新メンバー紹介だ！！」

シェレン（以後、シェ）「は～い、皆さま、増刊号で発表した通り、ここの新メンバーになったシェレンよ。これからも、よろしくねぇ」

ヤ「シェ、シェレン！！！　あ、あなた、な、なんて破廉恥な事を！！！？」

ス「ずるいよ～～～！！！　本編でダーリンとキスしちゃうなんてさぁ！！！」

メ「シェレン、少し自重っていうものをわきまえて頂戴」

シェ「えぇ～、イヤよ。だって、あれだけじゃ物足りないんだもん」

神「はは、さすがは第二夫人だな」

シェ「当然よあなたの一番になるためなら、どんな事でもして見せるわよ。いつか、レヴェッカを超えるんだから」

ヤ「……さすが、一番後の方に妻になったのに、お兄様の二番目になっただけはありますわね」

ス「ううん、うらやましい……」

シェ「そんなこと言っているなら、あんたたちもアイツにキスをねだればいいじゃない」

ヤ・ス「あ……」

神「まさか、気づかんかったんかい……」

メ「その前に、こっちの仕事をしてよね」

シェ「はいは～い。じゃぁ、今回のお題は、コレよ」

――――グレイの“起源”について――――

神「こいつは、かの有名な型月設定のだな」

メ「よくまぁ、ｗｉｋｉ知識だけなのに、ここまで多用するわね、この作者」

シェ「ただのバカでしょ？」

神「まぁまぁ。そんじゃ、シェレン、説明よろしく！！」

シェ「はいはい。えっと……グレイの起源は“幻想”だって、本編で書いてあったよね。つまり、非現実的な現象に惹かれ易い体質

で、目覚めれば、きっとオタクになる可能性１００％になるかもしんないけど、グレイの場合は、その社会性からか、オタに成らずにすんだ訳ね。でも、こっちに来てからは、その本性が目覚め始めて……あぁなっちゃったって訳ね」

神「そういう訳さ。狂っていったんじゃなくて、本性が顕わになっていったってわけ」

ヤ「不憫な男ですわね」

神「本人の精神が完成されてしまってるからな、２０近くまで生きてたから……だから、非現実を受け入れたくなく、己の本性が非現実的なモノだと知っても、簡単に受け入れはせんだろう」

シェ「でも、いつかは受け入れるのでしょ？　本能なんだから、ね」

神「まぁね……そんじゃぁ、今日はこんくらいで終いにすっか」

シェ「次回も、いくひさしく～♪」

ヤ「それ、違いますわよ……」

ス「それじゃぁ！！　次回をお楽しみに！！！」

神・シェ・ヤ・ス・メ「ばいば～い！！」

作「……言う事がないよ！！」

#37　何事も無き、平和な日常。彼の者の心には、未だ暗雲残りて……

更新が遅れて、大変申し訳ありませんでした

最近、なんだか質が落ちているように思えます。なんだか、前までの話の方が、上手いように思えるのは、気のせいでしょうか？

煌　焔様、あんぎゃーす様、ムーギネーター様、緋水様、幻想の庭師様、未土井無視様。ご感想、ありがとうございます！！！

#37　何事も無き、平和な日常。彼の者の心には、未だ暗雲残りて……

――――――そして、とある兄妹（しまい）の妹は、平穏が続く日々に喜び、兄（あね）は己の本能に苦しむ……――――――

第97管理外世界、地球……海鳴市

時は過ぎ去り、この日本には、春が訪れていた……桜の花びらが舞い、辺りは桜色に染め上げられている。そして、それは新たな門出となり、新たな世界の始まりとなるであろう……

そして、この場所でも、そんな新たな日々が、始まったのだった……

［タッタッタッタッ］

「それじゃぁ、行ってきまーす♪」

「あぁ……」

珍しく、ここに二人の兄妹（しまい）の姿があった。そう、転生者兄妹（しまい）、グレイとビビの二人だった。グレイは、紅いシャツに、灰色のような色のズボンを着て（イメージは、ＣＡＮＡＡＮのカナンの服装）。ビビは、聖洋大付属小学校の制服を着て、カバンを持っている……

そう、今日からビビは、聖洋大付属小学校へ通うのだった。無論、編入試験はクリア済み、戸籍も問題なく持っているのだった

［バタンッ！！］

「ったく、静かに閉めろよ、あのバカ妹は」

なぜ、今まで八神家の所にいたビビが、ここにいるのか……それは、はやての足がすっかり完治され、介護ヘルパーの意味を持たなくなっていたからである。故に、このマンションに戻って来て、これからは、この兄妹二人と過ごすのであった

「ふぅ……さてと、続けるか」

そんな中、現在グレイがやっているのは、新たなデバイスの製作。そう、前回作っておきながら放っておいたデバイスの基盤、それをいじっていたのであった

ちなみに、現在やっているのは、防衛プログラムを組み込んだアームドデバイスの製作と、無限再生プログラムの制御、研究の補助、情報処理、デバイスの修理、多種多様な医療用の魔法、等を登録する多目的ストレージデバイスの製作である。防衛プログラムの方は、ある程度完成はしており、今はストレージの方を作っているのであった。元たる基盤が出来ているのだが、どのような形にするかを検討している最中だ

「（やはり、魔導書型の方がいいだろうか……それとも、ハラオウンのように杖状か……または、眼球抉り取って埋め込むか……ま、さすがにそれは止めておくか）」

さすがに、そこまでしたらカバーしきれない……ただでさえ、タマモとシュテンの事を妹以外に黙っているわけなのだから……

実は、タマモとシュテンがグレイに埋め込まれている寄生型デバイスだとは、妹のビビ以外には知られていないのであった。なぜなら、それの存在を妹に話したら、血相を変えて隠しとけと言われたからであった。バレれば、研究対象としてモルモットにされる、とか何とか……故に、普段はグローブをはめて、グローブ型と偽っている。待機状態にさせておく際は、偽装コーティングされ、誰の眼からも視認されることはないのだ

故に、新たなデバイスは、寄生型以外にしようと思っていたのであった

「はぁ……（そうだな。夜天の魔導書から奪ったプログラムだからな。だったら、魔導書型でいいか）」

そして、再び作業に取り掛かる、兄（あね）でした……

□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■

そして……今日、４月４日。この日は、聖洋大付属小学校の始業式があり、新しい学年の始まりの時だった……

聖洋大付属小学校、４年Ａ組

「皆ちゅーもーく！　今日からこのクラスに、なんと転校生が入ってきます。と言っても、学年が上がってすぐだから、転校じゃなくて編入だけどね……それじゃぁ、入って来て」

［ガラッ］

［タッタッタッタッ］

入ってきたのは、茶色のショートヘアーの少女と、銀色のロングヘアーの少女

「はじめまして、八神はやて言います。今日から、よろしくお願いします」

「はじめまして！　ビビ・スティンって言います。ちょっと皆さんよりお姉さんですが、よろしくお願いします！！」

足はもうすっかり治り、その二つの足で、大地を歩けるようになったはやてと、転生者兄妹（しまい）の妹、ビビ・スティンだった

「ちなみに、ビビちゃんは家庭の事情で、皆さんより年齢が二つ程上なのですが、気兼ね無く声を掛けてあげてね」

と言う事で……はい、１１歳（今年で１２歳になります）なので、そんな子が四年生に入っているのは、家庭の事情って事にしました。ご都合主義ですね、はい……

あぁ、なのはちゃんとフェイトちゃん、アリサちゃんにすずかちゃんがいる～～～……制服を着た皆も可愛い……特に、隣にいるはやてちゃんの制服姿……あぁ、萌えぇ……？　って言うか、他の子も可愛いし……あぁ、興奮しちゃう……って、トリップ禁止！！　学校では、せめてこの淑女ソウルは封印しよう。

もし問題起こしたら、お兄ちゃんに殺される（＊―＊；

などと、思っていたとか……で、今日からビビは、学校に行くことになりましたとさ

□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■

そして、放課後……場所は移り、幻世

「ヤアァァァァァァァァァッ！！！」

「デヤァァァァァァァァッ！！！」

「ズガガガガガガガガガガガガッッ！！！！！！！」

そこでは、なのはとアリサ、その二人が、模擬戦を行っていた。だが、なぜこの幻世で行っているのか。それは、ここの魔力素の濃度が普通よりも若干高いので、魔力の回復が若干早いらしい……つまり、訓練にはもってこいの環境らしい。それに、毎度毎度アースラの訓練室を壊滅寸前のレベルまで使われてしまっている為、ここなら丁度いいのだとか……でも、ここの環境が破壊されては元も子も無いのだが……

「ふぇ～、アリサちゃんすご～い……」

「当然よ！　いつまでも初心者扱いに何かさせないわよ！！」

アリサは、炎属性の砲撃や射撃系……なのはとまったく同じなのだが、変換資質、炎を持つ為、その破壊力はなのはよりも高く、防御もそれなりに高い。が、すこし機動力に難があり、なのはよりも動きが単純なのであった……そう、言わば、なのはよりも固定砲台に近いスタイルなのだとか……いや、なのはに対して負けず嫌いが見えるのだが、気のせいではないはず……ちなみに、デバイスはこれまた、なのはを意識してか、レイジングハートにそっくりと来た。これは対抗心を燃やしているとしか言えなかった……

「ハアァッ！！！」
「やあぁッ！！！」
［ギィィィィィィィィィンッ！！！」

所変わり、場所はフェイトとすずか、ふたりの模擬戦が行われている場所……そこでは、その二人による高速の剣劇がおこなわれていた

「すずか、また速くなったね」
「フェイトちゃんも、更に速くなっていったんじゃない？」

すずかのスタイルはフェイト同様、オールラウンドに動けるスタイル。だが、使う獲物は、二刀流の小太刀……忍者刀と言えば分かりやすいだろう（“戦国ＢＡＳＡＲＡ”の“風魔小太郎”の武器に似た物）……すずかのスタイルは、一言で言えば“くノ一”に近しいモノだった。故に、フェイトが雷のような速さなら、すずかは風のような速さと表現すれば良いだろう。更に、すずかは小太刀に

加え、ツクヨミのセカンドモード、巨大手裏剣も扱っている……
はい、完全に“戦国ＢＡＳＡＲＡ”の“風魔小太郎”の女の子バージョンです……

「ふ～ん……皆、結構強くなってるねぇ～」
「せやなぁ～」

そんな様子を、遠くから見ているのは、ビビとはやての二人。今のはやての課題は、遠距離からの集中砲火の訓練……そう、“フレースヴェルグ”の制御訓練を行っていた

「それじゃ、休憩はおしまい。もう一度、あの魔獣の群れに向かって“フレースヴェルグ”を撃ってみようか」
「ふえぇ!!?　そ、そないなことして、もしこっちに向かって襲ってきたらどないするん?」
「大丈夫大丈夫。その時は、私の可愛い七姉妹ちゃん達と、近衛兵団の“シエスタ”達が迎撃するように言ってあるから、安心していいよ」

それに、いざと言うときの為、近くに“ロノウェ”と“ガープ”もスタンバイさせてるし、問題無いっしょ!!

そして、皆はまた一つ、己を磨いていったのであった……何気に、なのフェイはやアリすずの魔改造を行っているのは気にしないでほしい……

□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■

そして、皆が帰って行った後……幻世の森林地帯の少し開けた場所

「ッ！！！」
［シュッ！！　シュッ！！］

一人、ここに残っている人影……グレイ・スティンだった。今は、どんどんメイン武装となって行く二本の剣、“ブレイズ・オブ・エグザイル”を振りまわしながら、空を切っている。まるで、雑念でも振り払うように……

「ハァッ！！！」
［シュッ！！！］
「はぁ、はぁ、はぁ……」
『主、そろそろお時間です』
「あぁ、そうか……」

タマモの言葉を聞き、手を止めて、武器を消した……

――――「お前の起源は“幻想”。本能的にこの状況を望んでいたのさ」――――

「ッ！！！！！」
［ザガンッ！！！！！］

途端、不意に以前、神に言われた言葉を思い出し、地面に巨大な剣……“アルテミス・ブレイド”を突き刺し、苛立ちを納めた

「（チッ、またか……くそう、何が起源だ、何が幻想だ、何が本能的に望んでいただ！！　バカバカしい……）」

だが、そのバカバカしい事に苛立ちを覚える自分も、充分にバカバカしいと思い……結局、彼は迷いを振り払えずにいた……

「……はぁ、何なんだよ、まったく……どうしたんだ、俺は……」
［ガクンッ］

その場でへたり込み、頭を押さえ、悩むグレイであった……

［……ザッ］
「？」

と、近くから足音が聞こえてきた……魔人か、妖怪かと思い、顔を上げてみると

「……」

そこには、見慣れない男がいた……姿は、赤い外套を身に

纏い、その中に黒い甲冑を身に付けた、黒い髪をした初老の男性……年代的には、四十代近くの中年だろう。そんな風貌の男が、自身がいる場所の近くの木に、背を預けていた

「……誰」

殺気を放ちながら、この男に正体を明かせと問うた。ここは、自分（と、あのクソ神）以外、立ち入る事が出来ない場所のはず、なのにこの場所にいる……それはつまり、コイツは……

「そう構えるな。少なくとも、俺は敵ではない。そして、争う気も無い」

「……」

敵意は無い事を伝えると、眼を閉じていた男は、その眼を開き、グレイを見始めた。まるで、見定めるように……

「……ほう……」

「……何の用だ」

「いや、すまない。アイツが目を掛けた男と言うのが、どのような輩か……」

「！！？」

男？　コイツ、今俺を見て、男だと……やはり、コイツ

「あのクソ神の仲間か」

「……仲間、か……そうだな。そうとも、言えるか」

？　なんだ、コイツ……だが、はっきりした事はある。コイツは、あのクソ神を知っている……

そう判断したや否や、グレイは踵を返し、その場から立ち去ろうとした。関わっても、ろくなことにならないと、判断した結果である

「……なにやら、悩んでいるように見えるが、それは杞憂だと思うぞ」

［ピクッ……］

が、男の言葉を聞いた途端、脚を止め、振り返り、男を睨んだ

「……杞憂、だと……？」

あれが……鬼と呼ばれ、本能がこんなクソ訳の分からねぇ事態を望んでいた事を、嫌悪している事が、杞憂だと……！！？

グレイは、男の言葉に怒りを覚えた……彼が、ここまでこの状況を嫌悪しているのは、今自分がいる場が、非常識だらけだからだ……アニメの世界に来た事と、転生した事と、神様に会った事と……そして、“死んであの世”に行けなかった事……それらの非常識な事に巻き込まれたにも関わらず、自分には更におかしなことが纏わりつき、それらがイラつくから、彼は悩んでいるのであった……自分は、何故まともな道を、歩めていないのか、と……

「テメェ……何が言いてぇんだ」

「お前が抱えている悩みなど、もはや悩みではない。如何にして、それを受け入れるか、だ……」

「は……？」

男の言葉は、グレイの思考に、またも悩みの種を撒いたのだった

「起源と言うのは、即ち己だ。そうやって、己を偽り続けていれば、いずれお前は自滅する」
「なんだと……？」

自滅、だと？

「あぁ……しかし、今すぐ受け入れなければならない、というわけではない。そうだな……お前は、本能というのはどういうモノかを、どう理解している」

本能を、どう理解しているか……？

「……自身の欲望、一番欲する事、ってとこか？」
「ふむ……まぁ、及第点だな。だが、その認識は多少間違っている」

間違って、いる？

「そうだな……“もう一つの己”、と言えば良いだろうか」
「“もう一つの、己”？」
「あぁ。己の内に眠る己。即ち、唯識、と言えばいいだろう。無意識の己、それが、本能と言えよう」

唯識……無意識の、己……

「アイツは、“起源”などと、難しく言ったみたいだが、まぁ確かに、起源は無意識に訪れる衝動だ。故にお前は、その衝動を知ったにすぎん。後は、ソレを知り、如何に行動するか……だ」
「……これから、どう行動するか……」

「そうだ。さすれば、お前の悩みは解消されるはずだ。無意識に抗い、人として生きるか……ソレを受け入れ、鬼となるか……または、それらとは違う、別の道を歩むか……」
「……」
人か、鬼か、それとも、別の……
［ザッ］
「！」
そう思うと、男は踵を返し、その場から立ち去ろうとしていた……
……
「すぐに答えを出す必要は無い。その答えは、そう簡単に出るモノではないからな」
「……そういえば、アンタ、誰だ」
「……ただの旅人だ。世界をまたに歩く、途方もない旅を続ける愚か者だ」
……
「あぁ、それと一つだけ助言をしてやろう」
「あ？」
「あの男の言葉を鵜呑みにするな。アイツは、自身の言葉で人が苦しむ様を見て、楽しむ悪癖があるからな。あまり、真剣に聞き入る事を止めた方がいい」
「あぁ……うすうす感じていたさ。だが、アンタが言うなら、今後はそうするよ」
「そうか……」
「……だけど、ありがとよ。アンタの話しを聞いて、少し肩

の荷が軽くなった気がする」

「気にするな。アイツに振りまわされているお前を、哀れに思っただけだ……では、俺はコレで失礼させてもらう」

そう言うと、男は森の中へと、歩んでいった……

「……これは、お前の物語だ。お前が思うままに、歩めばいい……」

そう言葉を残し、男は、森の闇の中に、姿を消していった……

「……さてと、帰るぞ、タマモ」

『はい、主』

そう言うと、グレイはその場で直ぐに移動し、自宅へと帰って行った……

「……（人か、鬼か……そんなもん、決まっている）」

俺は、体こそはバケモノだが、心は、人であろう……

そう、誓うグレイだった……彼は、本能と、“起源”と立ち向かう事を、選んだのであった……

□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■

□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■

そして、グレイも帰って、誰もいなくなった……と思っていた幻世。その荒野地帯に、あの男がいた

「……ふぅ、やれやれ。アイツも、とんだ茶番をやっているようだな」

赤い外套を纏った男は、未だにその世界に留まっていた

「まったく、連絡も寄越さず、何をしているのかと思えば……はぁ、まったく、あの馬鹿は」

「……ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴッ！！！！　ズガアアア

［……ズドドオオオオオオオオオオオオンッッ！！！！！！］

男がそう言った直後、サンドワームは地面に倒れ込み、絶命した…

……その身を、真っ二つにされて……

男の姿は、その世界から消えていた……

#37　何事も無き、平和な日常。彼の者の心には、未だ暗雲残りて……

～～～神の舞台裏～～～

シェ「さて、今回もこのコーナーの時間がやってきたわよ！！　皆、気合い入れていくわよ！！！」

神・ス「オォーッ！！！」

ヤ「ちょっとシェレン！！　何あなたが仕切っているのですの！！？」

シェ「だって、たまには彼以外で仕切らないと、彼が疲れちゃうでしょ？」

メ「まぁ、そうかもしれないけど、ね」

神「俺は別に構わんぞ。何せ、今後はローテーションで仕切り役を交代しようって決めたからな」

ヤ「いつ決めたのですの！？　その決まりごと！？」

神「ついさっきw」

シェ・ヤ・ス・メ「……」

神「ほらほら、シェレン、早く仕切ってくれい！」

シェ「え、えぇ。それじゃぁ、始めていくわよ！！　今日のお題は

……これね！！」

――――今作の魔改造されたアリサとすずかの戦闘スタイルについて――――

神「まぁ、これは今後に出てくるけど……まぁ、今のうちに補足しておくか」

ヤ「では、まずはアリサから」

ス「まず、アリサちゃんのは……ぶっちゃけちゃえば、炎属性が付与されたなのはちゃん、だね」

メ「装備も、設定ではレイジングハートと全くの同系統のタイプだし、唯一違うとすれば、色合いね。ピンク色の部分が赤く、金色の部分は白銀色に、宝玉のようなのは、黄色い宝玉、って感じね」

シェ「続いて、すずかちゃんね」

神「まぁ、作中でも語っているように、忍者だ。作者は、アサシンタイプだっていうコンセプトで行くらしいぜ」

メ「これはね、夜の一族っていうとらハ設定をひねって……“夜に生きる種族。それって、忍びっぽいなw”っていう着想からしいわよ。ちなみに、なぜそれが“戦国ＢＡＳＡＲＡ”の“風魔小太郎”なのかというと……」

シェ「作者がネタの仕入れのために、ニコ動を彷徨ってた時に、それの３のプレイ動画を見たときに、気にいっちゃってね……これ

で行こうって考えに至ったらしいわ……」

神「作者、見境ないな……」

ヤ「使えるネタは使う。その精神は良いのですが……反発、来るのではありません？」

メ「さぁ？」

神「それに、現在作者は戦闘要素とシリアス成分皆無の部分書いてるから、どうもヤル気が起きないみたいだな……」

ス「ダメじゃん……」

神「仕方ないだろう。このような物語構成なんだから、こんな日常回は必須なんだからよ。それも、やりたいネタをやるには、この回をやるしかないんだからねぇ……」

ヤ「そうですわね……」

シェ「さて、今日はこれくらいにしまｓ」

作者「あのぉ、ちょっといいですか？」

神・シェ・ヤ・ス・メ「さ、作者！！？」

ヤ「キサマ、ここがどこなのかを忘れたのかしら？」

作者「いや、それは理解しております。ですから、その大鎌をしまって下さい。落ち着いて話が出来ません」

神「で、どうしたんだ、いきなり」

作者「いえ、ちょっと次回予告的な事を」

神・シェ・ヤ・ス・メ「次回予告？」

作者「はい。次回は、ｔｋ様の作品“魔法少女リリカルなのは　～とある兄妹の転生記～”とのコラボ番外編を掲載します。なので、今ここでその予告を」

神・シェ・ヤ・ス・メ「……」

作者「はい、タイトルが酷似してる。なんて言うのは無しですよ。何しろ、私もびっくりしましたからね、初めて見たときは」

神「まぁ、そうだろな……つか、転生記って、お前が当初考えていたタイトルじゃなかった？」

作者「はい。ですが、前作をちょっと意識して、物語にしたんです。ほら、今作も、結構多用しているでしょ？　物語って文字」

シェ「確かに、結構な頻度で使っているわね……」

ヤ「ま、そんな事よりも、次回は番外編って訳ね」

グ「はい。ですから、次回の今コーナーはおやすみとさせていただきますので、申し訳ありませんが、ご了承を」

神・シェ・ヤ・ス・メ「何ッ！！！？」

神「ちょっと待て作者！！！　どうゆうこったそれは！！！」

作者「そのまんまの意味です。では、私はこれで失礼します」

ヤ「これ、待ちなさ……チッ、逃げたか」

ス「逃げ足だけは速いね……」

神「くっそう、なんてこった……まさか、そんなオチになるとは……」

メ「っていうか、尺、もうないわよ」

シェ「ええ！！？　せっかく私が仕切ってるのに、こんな終わり方！！？」

神「仕方ない。文句は後で作者にぶつけな」

シェ「あんの野郎、ただじゃぁ済まさないわよ……」

メ「それじゃぁ、今回はこの辺で」

ス「次回のコラボ番外編、楽しみにしていてねぇ！！！　では！！」

神・シェ・ヤ・ス・メ「ばいば～い！！」

作者「ちなみに、今回の新キャラ。彼も前作からのキャラクターです」

コラボ番外編　転生物語と転生記の兄妹達、邂逅！？（前書き）

えぇ、今回は、予告通り、ｔｋ先生の、“魔法少女リリカルなのは～とある兄妹の転生記～”とのコラボになります

色々やりたい事をやろうとしたら、かなり長くなる事が分かり、前後編という二部構成になってしまいました。なので、どうかご了承を

未土井無視様、ムーギネーター様、紅舞姫様、あんぎゃーす様、緋水様、ｔｋ様。ご感想、ありがとうございます！！！

コラボ番外編　転生物語と転生記の兄妹達、邂逅！？

――――そして、とある兄妹は、とある転生者兄妹と、邂逅する……――――

？？？

そこは、誰もいなかったはずの世界。だが、今は、有るモノが黒き怪物達と戦う為に使っている、戦場だった……

「ヒーハー！！！　死ぃねェェェェッ！！！」

［ザザザザザザザザザンッ！！！！］

狂うように、その怪物たちを切り刻むのは、我らが破壊神、あの転生者兄妹（しまい）を転生させたあの神様だった。無論、彼が今戦っているのは、世界の修正力。その転生者兄妹（しまい）を倒さんと動き出したのだが、この神に邪魔されていたのだった

「死ね死ね死ね～♪　もっと死ね～♪」

こんな感じで、世界の修正力が動き出すと、こうやって戦いと言う名の虐殺を行っているのだった。だが、今回は少し違うようだ

「ラスト～～～♪」

［バシュンッ！！！］
「！！？」
［スカッ！！］

彼が振るった武器は、虚空を凪ぎ、獲物を斬る事は無かった……
……

「あっちゃぁぁぁぁ、逃げたか。ヤバいなぁ、俺の事見られたし、気配も覚えられただろうなぁ。これじゃぁ、アイツらに接触しちまうし」

アイツらに、修正力が動いてる事が知られるのは、不味いしなぁ…
……う～ん……

「あ、そうだ♪」

何を思ったのか、彼はポケットからケータイのようなモノを取りだした。どうやら、誰かに電話を掛けるらしい……

「……あ♪　もしもし、天使ちゃん？　俺俺、俺だって……って！！　オレオレ詐欺じゃないから！！　天使に向かってオレオレ詐欺する奴いるか！！？……そうそう、俺！！　俺だよ！！！　んもう、恥ずかしがり屋なんだから……え？　あ、そうそう。あんなぁ、そっちに転生者の兄妹いなかった？……そうそう、そいつら。そいつらをさぁ、ちょいと貸してくんねぇ？……え？　ゼウスに聞かなきゃダメ？　あぁ、アイツには、俺から直に出向いて説得するからさぁ、ね？　良いでしょ？……本人達の意思？　無視しろ、そんなもん……え、それでもダメ？　そこを何とかさぁ……うん、じゃぁそれで、よろ～♪　そや、今度デートしようなぁ♪　え、やだ？　あそう（；一_一）……」

［パタンッ］

「さって、コレで準備はいいなっと……あ、そうだ。兄妹同士の邂逅だから、アイツをあぁしてやるか」

そう言うと、彼は指を鳴らして、虚空を見上げ

「さてさて、楽しいショーの始まりだぁ、クックックックッ……」

いつもの、ニヒルな笑みを、浮かべた……

□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■

□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■

□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■

□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■

そして、ある五月の日曜日……場所は、第９７管理外世界、現地名称、地球……そう。遠見市にある、スティン兄妹（しまい）が住むマンション。そのマンションの一室、グレイの寝室

「……ん、んん……ふあぁ、朝、か……」

そこに有る彼が作った特別製のベッドから出てきたのは、転生者兄妹の兄、グレイ・スティンであった……彼は、いつも通り、顔を洗う為に、洗面台へと向かった

そして、数秒後……

「な、な……なんだこりゃァァァァァァァァァァァッッ！！！！！！？？？」

急に、発狂したかのような、奇声に似た悲鳴を上げた

「……ダッダッダッダッ！！！」

「ど、どうしたの！！？　お兄、ちゃ……」

その奇声を聞いて、次に洗面所に来たのは、彼の妹、ビビ・スティン。一か月前までは、八神家に住んでいたが、今はここに住んでいるのである。だが、一か月以上も住んでいた中で、いきなりこんな奇声が聞こえたので、飛び起きてきたのであったが……

「え、え……ええェェェェェェェェェェェッッ！！！！！？？？（！！！@д@！！！）」

彼女も、ビックリの現実が、そこにあった……

そう。グレイが、“男”に戻っているのであった……しかも、かなりのイケメンとなって……

□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■

そして、しばらくして……リビング

「ふ、ふはははははは……フハハハハハハッ！！！　やった、やった！！！　ついに、ついに男に戻れたァァァァァァァァァァァァァッッ！！！！！！！！」

彼は、キャラ崩壊すら気にせず、その現実に歓喜していたのである。ちなみに、今の彼の容姿は、黒い髪をし、左右の眼が金色と紅色の虹彩異色の眼で、身長が１８７?ある、と言う点を除けば、全て男らしい体格になっていたのである。顔は華奢なイケメンと呼ばれる程の顔立ちで、髪はオールバックで短髪、それでフサフサになっており、服装は黒のタンクトップにジーパンという妙な格好である

「アヒャッ！！！　アゲヤゲヤゲヤゲヤゲヤゲヤゲヤゲヤゲヤゲヤゲヤゲヤゲヤゲヤッッ！！！！！！！！」

だが、そんなことはお構いなしに、彼は発狂したかのような笑い声を上げていた。そんなに、男に戻れた事がうれしいのね……

「よ……よかった、ね、お兄ちゃん……」

ビビは、その様子に若干引き気味だったが、心の底ではショックだった

「（お兄ちゃんが……お兄ちゃんがむさくて下衆な男に戻っちゃった～……うう、男の娘ならまだいいのに、アニキ面じゃない、これ……（T＿T））」

よほど、兄の女姿を気に入っていたようである……

そんな感じで、この日の一日が始まった……次の瞬間

［ズドドォォォ

□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■

転送装置室……

「イっててて……大丈夫か？」

「う、うん……私は平気。お兄ちゃんは？」

そこには、年端もいかない少年と少女がいた。その二人は、今おかれた状況がよくわかっていなかった

「……ここ、どこだ？」

「さぁ……っていうかコレ、転送装置かな？」

自身の周りをキョロキョロと見渡す二人……その後に、そうだといった表情で、自身のデバイスに訊ねた

「“アルト”、ここがどこだか分かるか？」

「“ルーア”も、何か知らない？」

『はい、少々お待ち下さい……！！？　これは』

「主、ここは第９７管理外世界の地球、そして、海鳴市の隣町の、遠見市です。ですが、主達の知らない、遠見市……そうですね、並行世界の遠見市です」

「「え？」」

並行世界の？　なんで、そんな場所に……？

［……ガチャッ］

と、いきなり眼の前の扉が開き、そこに二人の男女が入ってきた。
一人は少女、一人は、男性だった……

「「「「……誰？」」」」

四人がハモり、互いに見合っていた

□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■

それから、暫くして……リビング

「はじめまして。俺は“林　恭介”。こっちは妹の」
「“林　優奈”です」
「私は、ビビ、ビビ・スティンだよ。で、この背高ノッポの人は、お兄ちゃんの」
「グレイ・スティンだ。って、背高ノッポってなんだ、このバカ妹」
［ゴチンッ！！！］

「イッターーーーーーーイ！！！！？（＜＿＞）　いきなり殴らないでよ！！！」
「五月蠅い、黙れ、そんで死ね」
「お、お～い……」
「あの～……すみませんが」
「「？」」

そして、二人の少年少女……恭介と優奈の二人の兄妹は、ここはどこか？　そしてお前たちは何者なのか……他にも、様々な事を聞いてきた。無論、それらを全て話し……そしたら、お互いが転生者という事と、林兄妹もリリなの世界に転生された事と、二人とも、チート能力だと言う事と、現在、ここに至った事を話していた

「……へぇ……って事は、優奈ちゃん達は次元漂流者って訳だね」
「そういう事になっちゃうねぇ……テンプレ通りの展開って訳だよね」
「だよね～（＾＿＾；）」

話し合っているのは、ビビと優奈で、お互いに、原作を知るモノ同士で話が弾んでいた

「……はぁ」
「どうしたんですか、グレイさん」
「いや、何でもねぇ……気にすんな」
「は、はい……」

その隣では、グレイと恭介の二人が、その話を聞いていた

「にしても、お前らも不運だな。強盗に襲われた挙句、転生なんて

面倒事に巻き込まれる事になったんだからな」
「いや、そうでもないッスよ。俺も優奈も、死んだのは悲しいけど、こっちに来れたのは嬉しいし、何より楽しいから。グレイさんも、そう思ってんじゃないッスか？」
「……」
はぁ、本能的には望んでるっぽいが、自身としては、あまりな……
……
「あれ？　グレイさん？」
「お前らは良いよ、望んでこっちにこれたんだからな」
「？」
何やら、分からないと言った風に、グレイを見る恭介だが……
「ねぇ、お兄ちゃん」
「……なんだ、クソ妹」
ビビから声が掛けられ、そっちの方を見た
「あのね、この二人を返してあげる事って、出来る？　あの転送装置で」
「……どうなんだ、タマモ」
そういうと、右腕を上げて、右腕の賢女に訊ねた
「「う、腕に何かある！！？」」
グレイの右腕の甲をみた瞬間、林兄妹の体に、戦慄が走った……
なんと、甲に何かが埋め込まれているのであった……だが、それ

もお構いなしに、グレイとビビは続けていた

『はい。このお二方を元の世界に送る事は可能です。ですが、転送装置はあの衝撃で軽破している為……現在、自己修復の最中ですが、おそらく、半日ぐらいはかかるかもしれません』

「そうか、分かった。だ、そうだが……？」

そういうと、二人に向かって話そうとしたが、二人は眼を点にして、俺の方を見ていた

「「う、腕……腕に、で、でば、デバイス、が……」」

……どうやら、タマモを見て驚いているらしく……事情を話して、納得させました

「き、寄生型、デバイス？」

「聞いたことないよ？」

「型の名前は、コイツを作った奴が言い出した事らしいが、感じとしては、埋め込まれているだけだ。寄生なんて、大それた事の程ではない。だから、気にすんな」

いやいやいや、普通そんなモノが手に埋め込まれてるのを見たら、誰だって気にするよ……

「タマモ、偽装コーティングをしとけ」

『分かりました』

［パシュッ］

「コレでいいか」

「あ、は、はい……」

「さすが、チート能力者。なんでもアリなんだね」

などと、関心していた時、ビビが突拍子もない事を口走った

「……にしても、優奈ちゃんって可愛いねぇ♪」

「え、そ、そう？」

「うんうん……ねぇ、ハグしてキスしてもいい？」

「「……」」

ザ・ワールド！！！　ビビの一言は、この空間の時を止めてしまった！！

「はぁ（このボケ妹は）……」

グレイは、呆れたかのようにため息をつき、頬杖をついた

「……へ、へえええええッッ！！！！！！？？」

と、この空間を破ったのは、優奈の叫び声だった

「な、なななななな、何を言ってんだよ！！！？　おい！！！」

「お前、頭イカレているのか！！！？」

その様子を驚く兄の恭介と、デバイスのルーア。それもそうだろう、いきなりあんな変態言葉を言われたら、誰でもこんな反応をするに決まっている

「良いじゃない、私は本気よ。ねぇねぇ、そんな兄より、私に流されてみｎ」

［ゴチンッッ！！！！！！］

「イッタァァァーーーーーーーーーーーイッッ！！！！！！

？？？（＼д／）」
「「「！！？」」」

と、ビビの暴走を止めたのは、言われるまでもなく、兄のグレイである

「何アホな事を言っている、お前は……ったく、人様に迷惑かけんな、このボケ」

なんとも冷たく、シベリアの凍土を想わせる程の冷酷な口調で、妹にいつもの倍の威力の拳骨を喰らわせた

「すまんな、コイツが変な事を言って……ほら」
［ガシッ！！］
「へ？（@＿@；）」

そう言うと、ビビの後頭部を鷲掴みにし……

「お前も謝れ」
［ドゴオオオオォォォ

［……ムクリッ！！！］
「「ヒィィッッッ！！！！！！！！！！！！！？？？」」」
なんと、ビビがいきなり頭を上げだした、ゾンビのように
「（こ、こえ～よ、いきなり顔をあげんな……心臓、止まるかと思ったぞ）」
と、その様をみて、恐怖を抱く恭介
「……ウウ、お兄ちゃん、イダイデス……」
［ドクドクドクドクドクドクドクドクッ……］
「（ビビちゃん！！　血！！　血が！！　血が流れてるよ！！！し、止血、止血しなきゃぁぁぁ～～～！！！！）」
顔中から血を垂れ流す様を見て、パニックになった優奈
「自業自得だ、クソ妹が」
「妹がクソなら、その兄はウ○コだね」
「あぁ、なんか言ったか？」
「言ったよ、ウ○コお兄ちゃんってね」
「なんだと？」
「何よ？」
［バチバチバチバチバチバチバチィィッ！！！！］
グレイとビビ、二人の間に火花が散り始めた。ちなみに、ビビの出血は既に完治されていた……その時、林兄妹はと言うと
「「（アンタら兄妹！！？　普通はそういう事しないよ！！？　っていうか、グレイさんコワッ！！！！　ビビ｛ちゃん｝も、そんな

兄に反抗しないで！！！！）」」

この兄妹に、底知れぬ恐怖を抱く、恭介と優奈の二人であった。ルーアは、優奈の後ろで震えていたとか……その時

『！！？　主、海鳴市海岸付近に、転送反応を感知致しました』

「何？」

スティン兄妹の、今にも始まりそうな喧嘩の火花を沈めたのは、タマモからの緊急事態のコールだった

『それも、巨大な生命体……あの闇の書の闇並みの生命体が転送されます』

「なんだと？」

「「えぇ！！？」」

タマモの言葉に、グレイだけではなく、ビビ、恭介、優奈の三人も反応した。そして、グレイは部屋にある大きな窓から外を、海鳴市のある方角を見ていた

「……アレは……？」

そこには、巨大な魔法陣が敷かれていた。知識から引っ張ってきて、導きだした答えは

「召喚の魔法陣、ですね。それも、かなり大規模の」

……を、優奈が答えた

「みたいだね。それに、周りにかなり強固な結界が張ってるよ」

「何かを抑え込むみたいな、そんな感じの結界だな」

ビビ、恭介と、自身の持ちうる知識を以て、その異変を見抜いた

「……タマモ、俺をあの結界内に転送、出来るか」

『はい、可能です』

そう言って、彼は転送しようとすると

「ちょっと待ってよ！！　私も行く！」

「妹？」

ビビが制止の言葉を投げ、自分も行くと言ってきた

「なんかかなりヤバそうだしな、俺たちも手伝うよ。な、優奈」

「うん。私達も、チート能力をもつ転生者だからね」

林兄妹も、自ら赴く事を進言した

「……どうなっても、俺は責任取らんぞ」

そう言って、タマモを起動する

『アクティベイトコンバットモード、起動。グレイ・スティン、ビビ・スティン、林恭介、林優奈。この四名を、海鳴市海岸付近に展開している強層結界内へと転送します』

［［［［バシュンッ！！！！］］］］

（まさかの）後半に続く！！！

コラボ番外編　転生物語と転生記の兄妹達、邂逅！？（後書き）

ええぇ、いかがだったでしょうか？

ｔｋ先生、二人の口調はこれで合っているでしょうか？　正直、不安です

次回は戦闘回になりますので、お楽しみに！！

コラボ番外編　転生物語と転生記の兄妹達、共闘！？（前書き）

お待たせしました、後半です

はい、駄文の長文になってしまいました。ｔｋ先生、申し訳ございません

次回からは、本編に戻るか、ネタをやろうかと、悩んでおります。ので、次回の更新は遅いかもしれません。どうか、ご了承を

緋水様、ムーギネーター様、あんぎゃーす様、ｔｋ様。ご感想、ありがとうございます！！！

コラボ番外編　転生物語と転生記の兄妹達、共闘！？

――――――そして、とある兄妹は、とある転生者兄妹と、共闘する……――――――

［……バシュンッ！！！］

「「「……！！！？　な、何これ！！！？」」」

あの部屋からすぐさま転送された四人の前には、漆黒に塗りつぶされた巨大な怪物がいた。だが、その姿は……

「や、闇の書の闇、みたい……」

「確かに、原作のアレと、姿形は似てるけど……真っ黒じゃねぇか」

「それに、かなり大きくない？　確か、一回りほど、小さかった気がする……」

そう、見た目が原作の闇の書の闇のような、あの巨大な怪物だった。

それも、一回り巨大な、である

「……なんだ、アレは」

『データ照合……一致するデータ、ありません。おそらく、そちらの林兄弟がこちらに来た事による歪みが、実体化したモノ、かと思われます』

歪み、か……そういや、俺たちはこの世界の歴史をかなり歪ませている。それなら、それ相応の何かが現れてもおかしくは無いはず……ま、どうでもいいか。今は、アイツを何とかしよう

「優奈、“アカシックレコード”に、アレにかんする情報は無いのか？」
「調べてみたけど、在ったのは、世界の歪みだって。さっきタマモが言ってた通りかも」
「自然災害の二次災害って奴？　もう、最悪（一“　一）」
「おい、じゃれあっている暇は無いぞ。どうやら、やる気みたいだ」

そう言うと、黒き怪物が動き出そうとした

「グルルルルルルルルルルルルルッ……グオオオ

「灼シャナ理論で行くと、歪みの強さに比例して、歪みの規模も大きくなるから……転生者なんて言うイレギュラーが一気に四人に増えたんだから、それ相応のイレギュラーに対応できる力を持っている事は確実なはず……」
「だったら、宝具とか、その辺りにも耐性があるとか？」
「宝具というのは知らんが、少なくとも、それらの効果を使っても、薄い可能性があるな」
「かもね～……だったら、どうする？」
「せめて、相手を弱体化できれば、良いんだけどね……」

さて、どうしたものか……

「……やっぱり、こういうときは、アレだよね♪」
「「？」」

アレ？……あぁ

「“ヒュムノス”か」
「「“ヒュムノス”？」」
「えっと……あぁ、アルトネリコの！」
「アレか。でも、そんなもん使って、一体どんなメリットが……」
「あぁ、えっとね……」

妹が考えた“レーヴァテイル質”の力について、説明した所

「「チート｛だな・だね｝」」

そう返ってきた

「まぁ、それならイケるかもな」
「なら、作戦はこうだね。私がヒュムノスを誘って、優奈ちゃんがその力を使った砲撃を準備」
「その間、お兄ちゃんとグレイさんの二人が、私達の護衛。って感じでいいよね」
「あぁ」
「オッケー！！」

そう言うと、ビビと優奈の二人が下がり、グレイと恭介の二人が、前に出た

「タマモ、シュテン、戦闘モードに切り替えろ」
『はい、我が主』
『了解でござる！！　我が宿り手よ！！！』
「カテゴリ、鎖付き双剣、“ブレイズ・オブ・エグザイル”」
［ジャギギンッ！！！］

グレイが取りだしたのは、もはや彼の愛用の武器となった鎖が付いた双剣……黒金の装飾が目立つ、神殺しの刃だった

「うっし！！　そんじゃぁ……アルト！！」
『はい！』
「出てこい、“絶世（デュランダル）の名剣”！！」
［シュキンッ、チャキッ！！］

そして恭介は、背後に“王の財宝（ゲート・オブ・バビロン）”を開き、そこから一本の剣を引き抜いた。その剣は、剣と言う宝具の原典。だが、フランスの叙事詩『ローランの歌』に登場する聖騎士ローランが、同名の剣を持つ……決して折れぬ、不滅の聖剣である

「行くよ！　ルーア！！」
「はい！！」
「「ユニゾン・インッ！！！」」
［カッ！！！！］
「……接続（リンク）――――世界の記憶（アカシックレコード）。参照（アクセス）――――大規模魔法」
［ヴンッ！！］

優奈もまた、後方に下がり、自分の相方を内に宿し、アカシックレコードへと接続し、その力を発動させた

「さって……私もやっちゃうぞぉ～ッ！！！」

ビビは、優奈の背後に周り、瞳を閉じ、祈りを捧げるように手を合わせ……

［……♪］

世界を狂わす、歪な詩（ヒュムノス）を紡ぐ……

「“ヒュムノス、‘ＭＥＴＨＯＤ＿ＲＥＰＬＥＫＩＡ／．，”」

まるで別人が憑依したかのような、冷酷な面持ちと成り、声は冷たさが支配し、瞳はきつく引かれ、世界を引き裂く詩（ヒュムノス）を謳う

「？ｘＡ　ｈａｒｒ　ｈＬＹＵｍＬＹＵｍＯｒＯ　ｅ．ｊｅ／．［彼女は心を謳う］？」「？ｘａ　ｈａｒｒ　ｈＵｍｍＯｒＯ　ｅ．ｊｅａｇ　ｄａｚｕａ／．［彼女は心と闇を謳う］？」
「？ｘＡ　ｓｏｒｒ　ｋＬＹＵｖＬＹＵｒ　ｄｕ　ｑｅ．ｊｙｕ／．［それは人々を覆い］？」「？ｘＡ　ｓｏｒｒ　ｋＵｖＵｒ　ｄｕ　ｑｅ．ｊｙｕ　ｄｎ　ｂａｌｄｕｏ／．［それは人々を闇で覆う］

？」

「？ｘｌ　ｒｒｅ　ｆｌｒＩｌＵ　ｈＩｌＩｓＵｓＵ　ａｙｕｌｓａ　ｄａｚｕａ／．［永遠の闇に嘆き怯える］？」「？ｘＩ　ｒｒｅ　ｃＥｚＥ　ｆＩｌｒＩｌＵ　ｈＩｌＩｓＵｓＵ　ａｙｕｌｓａ　ｄａｚｕａ，［永遠に嘆き怯える闇になる］？」

「？ｖａｇａ　ｏｕｖｙｕ　ｇｉｚ　ｓｐｈａｅｌａ／．［ここは廃墟の恐怖空間］？」

その詩（ヒュムノス）は、この世界に圧倒的な闇を……恐怖を生む。イカレし、狂いし、歪んだ詩（ヒュムノス）……それが、“ＲＥＰＬＥＫＩＡ（レプレキア）”

「？ｘＡ　ｈａｒｒ　ｎＡｔＬＹｌｎＯ　ｈｙｍｍｎｏｓ／．［彼女の歌は続く］？」「？ｘＡ　ｈａｒｒ　ｎＡｔＡｎＯ　ｈｙｍｍｎｏｓ，ｕｔ　ｏｕｖｙｕ／．［彼女の歌は廃墟へ続く］？」

「？ｘＡ　ｓｏｒｒ　ｍＬＹＯｒＡｒＡ　ｄｕ　ｓｐｈａｅｌａ／．［それはこの世を映し出す］？」「？ｘＡ　ｓｏｒｒ　ｍＯｒＡｒＡ　ｄｕ　ｄａｅｄｕ　ａｇ　ｕｊｅｓ／．［それは醜いものと悪意を映し出す］？」

「？ｘＯ　ｒｒｅ　ｍＬＹＯｔＯｙＯｙＯ　ｇｉｚ　ｗＯｓＬＹＩ　ｄｕ　ｇｉｚ／．［恐怖を生むものに恐怖を！］？」「？ｘＯ　ｒｒｅ　ｍＬＹＯｔＯｙＯｙＯ　ｇｉｚ　ｗＯｓＬＹＩ　ｄｕ　ｇｉｚ／．［恐怖を生むものに恐怖を！］？」

「？ｘＮ　ｈａｒｒ　ｖ．ｔ．　ｅｓｓ　ｄａｚｕａ／．［彼女は闇の中で生き］ｘＮ　ｈａｒｒ　ｖ．ｔ．　ｇｏａ　ｂａｌｄｕｏ　ａｐｈａｅｌａ／．［暗い世界しか知らない］？」

ビビもまた、その詩（ヒュムノス）に圧倒され、その身を押さえだした。その詩（ヒュムノス）が、まるで自身を喰らい、呑みこもうとしていそうだったから……

そして、このヒュムノスの力を受けた優奈は、その溢れるばかりの

力を行使する為の準備に入る

「グオオオ

オオオオ

「ゴオオオ

［［シュキンッ！！　チャキッ］］

恭介が取りだしたのは、黄の短槍と、紅の長槍。輝く魔貌を持つ槍騎士が持ちいた二振りの槍である。その槍を構え、一気に接近した

［ダシュンッ！！！］

「ウオオオォォォ

グレイは、その様子を見て、確信した。あの二つの槍……紅い方は、魔力を打ち消す効果がある事。そして黄色い方は、突いた、或いは斬った部分の個所の傷が癒えないようにする呪いの槍……恭介が今持つ槍の分析をしたのであった

「（だったら、前に妹から教えてもらったアレとあぁすれば……）」

そう考えている間に、恭介が隣に来ていた。どうやら、暴れだしたので、危険と判断し、下がってきたのだろう

「チッ、やっぱりあれだけじゃぁダメか」

そう毒づく中、グレイは手を前に出し

「……カテゴリ、独創武装、槍……」

［ジャギンッ！！！］

三又の槍を、その手に出現した

「な、なんだ？　それ……」

恭介が、その槍を凝視した……鮮血のような紅に彩られた長槍に、紅と黄の槍が捻れるようにその長槍に巻き付き、先端には、巻きつかれた二つの槍の刀身が、薔薇のように咲き誇る……歪な、三又の槍だった

「さて、試すとするか」

そう言うと、グレイは黒き怪物の頭部に狙いを付け、その槍を投げ……

るような構えを取り……

「真名解放、“一刺し穿つ破滅の三ツ薔薇（ゲイ・トライデント）”ッ」

槍を……“ゲイ・ジャルク”と“ゲイ・ボウ”、そして“ゲイ・ボルグ”を融合させた槍を、投げ飛ばした。それは、狙いを定めた場所に当たるという結果を作ってから、槍を放つという原因を創り出し、当たった相手の防御の為の魔力的効果を無効化し、その攻撃で喰らった傷は癒す事が出来ない呪いを受ける、という効果を孕んでいる……まさに必殺の一撃である

［ズシュンッッッ！！！

背後のところでは、未だにビビが、狂想の詩（ヒュムノス）を紡いでいた

「？xN　rre　hLYimLYUmOrO　a.u.k.　z
ess　quesa／.［嘔は雷の如く］？」
「？xN　rre　hLYUmLYUmOrO　byu.i　q.l.
s.　du　sechel／.［嘔は街を大きく揺らす］？」
「？xA　harr　nAtLYlnO　hymmnos／.［彼
女の詩は続く］？」
「？xA　sorr　mLYinLYUgO　dn　z.z.x.
／.［それは絶望で飲み込む］？」
「？xA　harr　nAtLYlnO　hymmnos／.［彼
女の詩は続く］？」
「？xA　rre　mArArA　sphaele／.［この世を
映し出す］？」
「？xA　rre　mArArA　balduo　ouvyu　s
phaela／.［暗い廃墟の世を映し出す］？」
「？xN　rre　hNmNmNrN　ayulsa／.［謳う
謳い続ける…］？」
「？xN　rre　hNmNmNrN　ayulsa／.［謳う
謳い続ける…］？」
「？xN　rre　hNmNmNrN　ayulsa／.［謳う
謳い続ける…］？」
「？xN　rre　hNmNmNrN　ayulsa［永遠に］？」
「？xN　rre　hNmNmNrN　ayulsa［永遠に］？」
「？xN　rre　hNmNmNrN　ayulsa／.［謳う

謳い続ける…」？」「？ｘＮ　ｒｒｅ　ａｙｕｌｓａ［永遠に］？」

“レプレキア”という詩（ヒュムノス）は、少女の詩で世界を破壊する意味を持つ。故に、この詩（ヒュムノス）は破壊の力を徹底的に向上させる効果を持つ。更に言えば、この詩（ヒュムノス）を謳う時間が長ければ長いほど、その威力は比例して強くなるのだ。そして、先ほど見た再生力……それを見た二人は、生半可なモノではダメだと判断し、圧倒的な殲滅力を持つ攻撃をしようと考え……

《まだ掛かりそう！！　あと6、7分くらい！！！（、´ゞ》

《だから、もう少し耐えて！！　お兄ちゃん》

だから、謳う時間を長くし、最高の威力を持つ砲撃を放とうと決めたのであった……

「はぁ、マジかよ、めんどくせぇ」

「だけど、アレを見たら、普通はそうですって」

「……仕方ない。行くぞ、恭介」

「分かってるって！！」

［［ダシュンッ！！！］］

そして、グレイと恭介は、セカンドアタックをしかける

「グオオオ

オオオオ

オオオオ

［ギギイイィィィィィィィィィィィィィィィィンッ！！！！］

その二つの双剣を投げ飛ばしたが、固い甲殻の所に当たったのか、弾き返された

「――――心技（ちから）　泰山ニ至リ（やまをぬき）」

［［シュッ！！！］］

［ギギイイィィィィィィィィィィィィィィィィンッ！！！！］

だが、それでもなお、恭介は同じ所に双剣を投げ続ける。これまでに、既に十組という夫婦剣を投げつけ、そのすべてが、甲殻によって弾き飛ばされていた

「――――心技（つるぎ）　黄河ヲ渡ル（みずをわかつ）」

［ダシュンッ！！！］

その後、彼が取った行動は、今まで投げ続けてきた場所へ向かって突進をした。その手に、魔力を流し込み刀身が翼のように長くなった夫婦剣……“干将・莫耶、オーバーエッジ”を

「――――唯名（せいめい）　別天ニ納メッ（りきゅうにとどめ）……！！！」

［ザガンッ！！！！］

突撃の勢いを利用し、投げられて少しずつ削れていた場所に“干将・莫耶、オーバーエッジ”を突き刺した。そして、周囲には先ほどまで投げつけられた双剣は、全て周囲の空中に散乱していた。そして、それらは強い魔力を帯びた“オーバーエッジ”の方に殺到しだした

「両雄（われら）、共（ともに）ニ命（てん）ヲ別（いだかず）ツッ！！」

そのタイミングに合わせ甲殻を蹴り、その場から離れた直後

「“壊（ブロークン）れた幻想（ファンタズム）”ッ！！！！」

［ズドオオオオォォォ

見えなかった部位からの攻撃。故に、完全に反応しきれなかった

［シュッ！！　ジャギッ！！！］

だが

［グイッ！！］

「へ？　うおッ！！？」

突如、脚に何かが絡まり、そのまま恭介は引っ張られ……ギリギリで、砲撃をかわせたのである

「ッと……サンキュー、グレイさん」

「別に、気にすんな」

そう、助けたのはグレイであった。彼の武器、“ブレイズ・オブ・エグザイル”で恭介の足に鎖を撒き、その身を引っ張ったのだった

「ったく……ッ！！！？」

［ガシッ！！］

「へ？」

突如、グレイが恭介の腕を掴み

［ブンッ！！！！］

「ウワワワワッ！！！？」

その上、上空に投げ飛ばしたのであった

「っと、おい何すんだグｒ［ズガアアアアアアアアアアアア

ァァァ

ポセイドンの怒り（レイジ）であった……そして、その直撃を受けた龍頭は、当然苦痛の咆哮を上げながら、その場をのたうち回り出した……

「ッ！　カテゴリ靴、“ヘルメス・ブーツ”」
［ジャギッ！！］

その後、グレイは足に、神々の伝令が使いし、金色の彩色と翼のような彫刻が彫られた靴を自身に装着し……

［……タッ、ダダッ！！！！！！］

伸びてきた龍頭の上に降りた直後、首の上を音速並みの速さで走って行き、黒き怪物の本体まで接近していった

「カテゴリ、大剣、“アルテミス・ブレイド”」
［ジャギンッ！！！］

次に彼が出したのは、歪な形状で、刃の面の部分がかなり広く、青紫色に光る刀身の大剣。月の女神の名を持つ、巨人（タイタン）殺しの武器

［ガッ！！！］

そして、首の上を走っていたグレイは、首の根元の部分（よりにも寄って、この龍頭は元からある獣の頭の口から伸びてきたらしい）にまで到達すると、その大剣にて……

「ウザい」
［ザンッ！！！！］

［……ズルッ、ズシャッ］

一閃を繰り出し、両断した

「グオオオオオオオォォォ

背後……二人の少女による最大級の砲撃の準備をしている所では……

「?xA harr hLYUmLYUmOrO e.je/.［彼女は心を謳う］?」「?xa harr hUmmOrO e.je ag dazua/.［彼女は心と闇を謳う］?」「?xA sorr kLYUvLYUr du qe.jyu/.［それは人々を覆い］?」「?xA sorr kUvUr du qe.jyu dn balduo/.［それは人々を闇で覆う］?」

「?xl rre flrIlU hIlIsUsU ayulsa dazua/.［永遠の闇に嘆き怯える］?」「?xI rre cEzE flrIlU hIlIsUsU ayulsa dazua,［永遠に嘆き怯える闇になる］?」

「?vaga ouvyu giz sphaela/.［ここは廃墟の恐怖空間］?」

未だに、詩（ヒュムノス）を謳い続けるビビと、その力を上手く制御し、術式を組んでいる優奈、二人の姿があった……

「?xA harr nAtLYlnO hymmnou/.［彼女の歌は続く］?」「?xA harr nAtAnO hymmnos,ut ouvyu/.［彼女の歌は廃墟へ続く］?」

「?xA sorr mLYOrArA du sphaela/.［それはこの世を映し出す］?」「?xA sorr mOrArA du daedu ag u.jes/.［それは醜いものと悪意を映し出す］?」

「?xA harr vIsIkI dazua/.［彼女は闇しか知らない］?」

「?xA harr tAhAsA s.iann/.［初めて外に

出た時」？」

「？ｘＡ　ｈａｒｒ　ｌＡｋＡｋＡ　ｍａｅｎ／．［彼女は月を見上げる」？」

「？ｘＡ　ｈａｒｒ　ｈＡｍｍｒＡ　ｂｙｕｉ　ｅｊｅ／．［そして心を謳う」？」

その詩（ヒュムノス）は、段々と希望が出始めているが、未だに、その絶望からは脱していない。彼女は、圧倒的な恐怖と闇の詩（ヒュムノス）を紡ぎ続ける

《もう……あと、ちょっと、だからッ！！》

《１００秒か、１１０秒ぐらい！！　そんぐらいだから、もちっと頑張って！！！》

そう言って、ビビと優奈は、作業に集中しだした

「そんぐらいなら、約二分って言え、あの馬鹿妹が」

「まぁ、それぐらい気にすんなよ。そんじゃ、俺達のラストアタックと行くか！！！」

「はぁ……ま、そうだな」

そういうと、再びお互いが武器を……グレイは、愛用の“ブレイズ・オブ・エグザイル”を。恭介は、“デュランダル”を……

……それぞれが、お互いが使いやすい武器を持ち、黒き怪物の方を睨んでいた

「……そういや、グレイさんって、前ゲーマーだったんだよ

な」

「あぁ、それがどうした」

「だったら、“・ｈａｃｋ／／Ｌｉｎｋ”っての、やった事ある？」

……あぁ、あれか。前作が良かったらから、今作もかと思って買ったが……つまらん。一定の事を繰り返すだけのゲームだったな。だから、やらずじまいで未クリアのまんまだが……

「やった事はある。で、それがどうした」

「あるのか！？　だったら、アレやりません？　アレ！！」

アレ？　アレって……あぁ、アレか……あのふざけた奴が多い……ま

「別に構わん、好きにしろ」

「いや、そう言われても……まぁいいや。そんじゃぁ、行きますよ！！！」

［チャキッ！！］

武器を構え直し、恭介とグレイが同時に唱える（グレイは素のまま、恭介は叫びながら）

「「“クロス、レンゲキ”ッ」！！！」

と……

［［ダシュンッ！！！！］］

そして、二人が同時に突進し、黒き怪物に接近した

「ウオオオオォォオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオッ！！！！！」

［ザンッ！！！！］

「ぬんッ！！！」

［ザンッ！！！！］

「ハアァァァッ！！！！！」

［ザンッ！！！！］

「ッ！！！」

［ザンッ！！！！］

接近した直後、二人はすぐさま攻撃を開始し

［ザンッ！！！！］

［ザザンッ！！！！］

［ザンザンッ！！！！］

［ザザザザンッ！！！！］

［ザンッザシュッ！！！！］

［ザザンッ！　ザンッ！！！］

［ザンッ！！！　ザンッ！！！］

……そのまま、交互に攻撃を繰り出しながら、黒き怪物の周囲を廻りながら攻撃を繰り出していた。攻戦一方のタコ殴りならぬ、タコ斬りへと至った

「ハアァァッ！！！！」

［ザシュンッ！！！！］

「フンッ！！！」

［［ザガンッ！！！！］］

その後、恭介は“デュランダル”で深く斬り付け、グレイは鎖を伸

ばし、遠心力で重みを増加させた“ブレイズ・オブ・エグザイル”で叩き斬った

「止め、合わせろよ！！！」

「フンッ」

恭介の合図で、互いが黒き怪物の背後に周った二人は、そのまま武器を水平に構えた

「魂交わりて！！！」

「刹那に響け」

［［ダシュンッ！！！！］］

武器を水平にしたまま、一気に獲物に接近し……

――――“衝破！！　十文字”ッッ！！！！！！！――――

［［ズシュンッッッッッッ！！！！！！！

オオオオ

今から行う、対超獣一点集中型殲滅砲撃魔法の発動を、確かなモノへと昇華させる為の術式を……

「響け」
「奏でよ」
「「天の雷を！！」」

ソレは、二人の魔力波長を同調させる術式だった

「「“シンクロニティ・チェイン”ッ！！！」」
［カアアアアアアアアアアアアアアッ……！！！！］

ビビの持つ“魔導の心得”、それは自身が持ちうる知識にある魔法なら、短時間でなんでも発動出来るスキル。そして優奈が持つ“世界の記憶。それらを組み合わせれば、如何なる魔法、魔導、魔術……もはや、扱えぬモノなど無くなる力となるのだった

お互いが個別に発動していたミッド式と、ヒュムノス語で書かれたミッド式の魔法陣は、一つに組み合わさり、二人の魔力光を同時に照らしだした

「？ｘＡ　ｒｒｅ　ｗＡｒＡｍＡ　ｍａｅｎ　ａ．ｕ．ｋ．　ｚｅ　ｓｓ　ｔｉｔｉａ／．［照らす満月はまるで善き心のようです］？」
「？ｘＥ　ｒｒｅ　ｈＡｋＡｔｔ　ｎａｆａｎ　ｏｕｗｕａ　ｓｉ　ａｎｎ　ａｒｈｏｕ／．［優しく抱きしめる　たくさんの光の希望］？」
「？ｘＡ　ｒｒｅ　ｓＥｎＥｋｋ　ｍｉｒｉｅ，　ａｇ　ｈＥｍｍ　ｏｒＡ　ｅｊｅ／．［芽吹く温かさ　そして心の謳］？」「？ｘＡ　ｒｒｅ　ｃＥｚＥ　ｈｕｍｍｎｏｓ／．［謳になりましょう］？」

「？ｘＥ　ｒｒｅ　ｓＡｌＥ　ｓｐｈａｅｌａ　ａｒｈｏｕ／．［世界の希望を信じて］？」

「？ｘＥ　ｒｒｅ　ｌＡｎＡｃＡａＡ　ｅｊｅ／．［さぁ　心を繋げましょう］？」「？ｘＥ　ｒｒｅ　ｌＡｎＡｃＡａＡ　ｅｊｅ／．［さぁ　心を繋げましょう］？」

「？ｘＡ　ｒｒｅ　ｈＬＹＡｍＬＹＥｍＬＹＥｒＡ　ＥｒＡ　ｓｐａｅｌａ／．［そしてこの世界の為に謳いましょう］？」「？ｘＡ　ｒｒｅ　ｈＬＹＡｍＬＹＥｍＬＹＥｒＡ　ＥｒＡ　ｓｐａｅｌａ／．［そしてこの世界の為に謳いましょう］？」

「？ｘＡ　ｈａｒｒ　ｍＬＹＥｒＥｒＡ　ａｊｅ　ｔａｆａｎｅ　ｓｐｈａｅｌａ／．［彼女は新しい輝く世界を映し出した］？」「？ｘＡ　ｒｒｅ　ｃＬＹＡｚＥ　ｔａｆａｎｅ　ａｒｈｏｕ　ｈｙｍｍｎｏｓ／．［輝く希望の謳になる］？」

それは、絶望から希望へと変わっていた。廃墟を闇を創り出す悲しき少女は、夜空に輝く月を見て、その想いを詩（ヒュムノス）へと変換させた

「ターゲット、補足。発射用魔法陣、展開開始」

［キイイイ

イイイイ

！！！

そして、しばらくして相手が現れえない事を確認すると……

「「やったぁぁぁぁぁッ！！！！　あははははっ、イェーイッ！！Ｖ（＊＾∀＾＊）Ｖ」」

二人の少女は、勝利を大いに喜んだ

「はは、やるじゃねか、優奈も、ビビちゃんもな」

「あぁ……（ほう。一点集中砲火型の収束魔力砲撃、か。研究してみるか）」

「って、反応薄くねぇか？　勝ったんだぞ？」

「別に……」

そして、全員はスティン兄妹のマンションへと、帰ったのであった……

□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■

スティン兄妹のマンション、転送装置室

「なんだ、もう帰るのか？」

「あぁ。長居してると、またあんなのが出てきそうだしな」
「早めに、帰った方がいいかなと思って……それに、まだA、sの所が終わってないから、そっちを片付けないと」
「あぁ、そっか（＾―＾；）」

転送装置はもう修復が終わり、転送が可能となっていた。だから、林兄妹が元の世界に帰る事が可能となっていた

「うう、優奈ちゃ～ん……（T―T）」
「も、もう、泣かないでよ。これが今生の別れって訳じゃないんだから」

（それって、暗にもう一回コラボしましょうって話ですか！？……良いですとも↑仮定）

「ま、縁があったらまた会おう」
「おう、縁があったら、な」

いつもの無表情なグレイと、笑顔で返す恭介。何気に、兄同士で意気投合しているみたいだが……

「タマモ、送れ」
『はい。では、転送装置、起動』
［ヴォォォォォン……！］

機械の駆動音が鳴り、転送装置から光が溢れだし、二人を包み込んだ

「それじゃ、また会おうな！！」
「またね！！　ビビちゃ～ん！！！」
「うん！！　またねぇ～！！！♪」

［［バシュンッッ！！！！！！！！］］

こうして、二組の兄妹の出会い、そして共に戦った物語は、幕を閉じ、再び平凡な日々が訪れました……

□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■

……かに思えたがその翌日！！　スティン兄妹（しまい）のマンションの洗面台

「ナゼダアアア

コラボ番外編　転生物語と転生記の兄妹達、共闘！？（後書き）

作「えぇ、只今より！！　“転生物語”と“転生記”のコラボの打ち上げを行いたいと思いま～すッ！！！」

ビ・恭介・優奈「いえぇぇぇ～いッ！！！！」

グ「下らん……」

作「では、飲んで食って騒ぎまくれ！！！　といっても、ジュースだけどね」

恭「いや、まぁ俺達、未成年だからね」

優「っていうか、お酒飲む人いるの？」

作「いや、まず私と……そこの絶世の美女」

グ「美女って言うな！！　このクソ作者が！！！」

恭・優「……（すっごく綺麗……こんな人が、あのグレイさんなんて信じられないよ）」

グ「っていうか、なんで俺女に戻したんだ！！！？」

作「いや、グレイの性別を決めるのは、あの神様だから」

グ「そういや、あのクソ神はどうした？　こういった場なら、アイツも来ると思うんだが……」

作「いや、彼なら今頃妻達とイチャイチャしてると思いますよ。今回のコラボを高みの見物しながら」

ビ・優「リア充爆発しろｗｗｗ」

恭「優奈、そう言う事は口に出すな。思っていても」

グ「思うのはいいんだな……」

作「神様から伝言が来ております。“グレイ、お前が男に戻れるのは今回だけだ。ま、気が変わったら、男に戻してやるよ、クックックッ”だっ、て……」

グ「アノクソ神、イツカ絶対コロス……」

「ゴゴゴ

ビ「えっと、あんぎゃーす様、ｋ様、ありがとうございます！！！
　おいしく頂かせてもらいます！！！」

グ「……にしても、林兄妹の戦闘スタイル、オリジナルにし過ぎだろ」

作「まぁ、元の戦闘描写が少ないので、オリジナル要素を加える事にしたんです。それに、能力を見れば、このような戦闘方法も可能という結論に至ったので」

グ「あっそう……」

ビ「にしても、なんか兄同士と妹同士で必殺技繰り出すのって言うのは、どうなの？　まぁ、熱い展開だから良いけど（＾―＾）」

作「まぁ、兄妹同士なので、あぁいった事でもさせようかなぁと思いまして……グレイと恭介のクロスレンゲキは、近くに“・ｈａｃｋ／／Ｌｉｎｋ”のソフトが転がってたから、思い突いたし、ビビと優奈のシンクロニティ・チェインは、初期段階から決めてた事だしな」

優「それにしても、息ぴったりだったよね、お兄ちゃんとグレイさん」

恭「いや、なんとなくでやってたからなぁ……な、グレイさん」

グ「あぁ、まぁな……」

作「とまぁ、こんなこんなで、今作初のコラボだったですが、いかがだったでしょうか？　そしてｔｋ先生、こんな粗悪品になってし

まい、大変申し訳ありません」

グ「悪いと思うならもっと頑張れ」

作「はい……それでは、そろそろ中締めとさせていただきましょう。妹ズ、あとよろしく～」

ビ・優「は～い♪」

ビ「それでは、今日も見て下さりありがとうございました！！！」

優「これからも、今作の“魔法少女リリカルなのは　～とある兄妹の転生物語～”を。そして、私と恭介お兄ちゃんの二人が主人公の“魔法少女リリカルなのは　～とある兄妹の転生記～”を」

ビ・優「どうか、ご贔屓に～？」

作「それでは！！　次回をお楽しみにしていてください！！！」

ビ・恭・優「ばいば～い！！！」

グ「またな」

作「あ、そだ。恭介くん、これ、ｔｋ先生に渡してきて、お土産として」

恭「なんだこれ？」

作「＃３５の、“あのリンカーコア活性食”って言えば、通じるから」

恭「あ、あぁ……」

短編集　作者は確実にイカレている、そう断言する！！（前書き）

今回は、初の短編集（といっても、二つだけですが）です

書いていて思ったのですが、自分にはギャグは向いていないという事が判明しました

まぁ、やりたかったネタだったので、どうか温かい目でご覧下さい

白姫　彼方様、あんぎゃーす様、ｔｋ様、ムーギネーター様、未土井無視様、紅舞姫様、緋水様。ご感想、ありがとうございます！！！

短編集　作者は確実にイカレている、そう断言する！！

――――――そして、とある兄妹（しまい）は、おかしな日常を送る……
――――――

前変（ぺん）

保護者会……だと……？

「イッダァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァ～～～～イッッ！！！！！！？？（ＴДＴ）」

七月の始まりの頃、日が赤く燃え沈む夕暮れ時……あるマンションの一室から、叫び声が聞こえました。しかし、その叫び声は毎度のことなので、近所の人たちは無視しています。っていうか、注意しにいったらすごい形相で睨まれ、その日から、このマンションの住人達は皆、その部屋に住んでいる二人の住人を無視し出したのである

そして、その叫び声がした部屋では……

「もう！！　なんで殴るのさ！！！　しかもグーで！！！！　乙女のやわ肌に傷付けていいと思ってるの！！？」

「じゃかしい！！　んな大事な事を言わんからだ！！！　グーで殴ったのは気分だ！！　それと、お前は乙女じゃねぇだろ！！！！」

「女の姿で男声で男口調でしゃべらないでよ!!!　っていうか、そろそろ統一してよ!!!　いちいち呼び方変えるのめんどくさいのよ!!!」

「テメェのせいだろうが!!!　こんな面倒な事になったのはよ!!!!」

……えぇ、この兄妹（しまい）、グレイ・スティンとビビ・スティンの二人が、とんでもない罵詈雑言を吐き散らしながら喧嘩していたのである……これぞ、“世界に響く　二人の兄妹の罵詈雑言”である!!!　はい、脱線してしまいました。そして、その二人がなぜこんな事になっていると言うと……

～～～数分前～～～

それは、夕食中の事……

「あ、そうだ。ねぇ、お兄ちゃん」

「あぁ？　なんだ」

いつも通り、素っ気なく妹の呼びかけに答えるグレイ。普通ならムッとなるが、ビビは気にしてはいない……そのまま平然と続けた

「えっとね。今度、学校の保護者会と授業参観があるんだけど……」

…それに、来てくれないかな？」

「は？」

箸を止めて、妹の言葉で呆気にとられた……

「別に行かなくても良いだろう。親が忙しいって言っとけ」

「……まぁ、そうなん、だけど……」

「……」

ま、家庭の事情って事で、１１の年で小４だから……ま、それを気にしてるちいせぇガキから何か言われたか……はぁ、しょうがねぇなぁ

「分かったよ、行ってやる」

「本当！！！？」

妹は、目を輝かせて兄（あね）の顔へと近づけた。だが、そんな事は気にはしない

「あぁ……で、いつだ」

「明日」

「死んどけ」

「ボゴオオオオオォォォ

～～～回想終了～～～

「人様の前に出るんだから、それなりの準備ってのがいるに決まってるだろ！！！　お前は何時も何時も大事なことを直ぐに言わねぇな！！！！」

「言うのを忘れてたんだもん！！！！！」

「忘れるなボケが！！！！！」

あの時の温泉と言い、今回と言いコイツは……

「なにか案内の紙があるだろうが！！！　ソレはどうした！！！？」

「えっと……か、カバンの中に、あった、はず……」

「取ってこい！！」

「は、は～い（＊＿＊；」

そして、数分後。部屋からおずおずと戻ってきたビビは、一枚のプリントをグレイに手渡してきた

「は、はい、どうぞ」

「あぁ……」

「ペラッ」

そして、プリントを凝視するグレイ……

「……ふぅ、分かった。んじゃぁ、明日な」

「うん、よろしく～（＾＾ノ」

そう言うと、ビビは再び食事を取り始めた。ちなみに、怪我はすでに治っている。ギャグ補正という効果で

「……そういや、保護者会っていうのは、事前に出欠を取るはずだが……ソレどうした」

「勝手に出席って書いて提出した」

「マジで死ね」

［ボゴオオオオオォォォ

そこに、一台の大型バイクが入ってきた。黒い装甲に、巨大なマフラー、まるで戦車のようなフォーム。まさに異法改造を施してあるようなバイクがそこにあった……ちなみに、ナンバープレートはちゃんと付いている

「……ここ、か」

そんなモンスターバイクに乗ってきたのは、ビビの兄（あね）、グレイ・スティンである。このバイクも、兵装錬（ウェポン）製で精製したモノであろう……それを、指定された駐車場へと行き、目的の教室へと歩いて行った……

「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「」」」

……どうやら、見えざる意思が動いていたようである

□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■

教室。今日は授業参観の為

［ザワザワッ、ザワザワッ……］

教室内は、異様な空気が包まれていた……そう、ある家族の保護者が、異様な空気を創り出していたのである

「「「「「……」」」」」

そう、高町なのはの母、高町桃子。フェイト・T・ハラオウンの養母、リンディ・ハラオウン。はやての母親代理、シグナム。そして、ビビ・スティンの姉（あに）、グレイ・スティン……この、あまりにも美人保護者の登場で、いつにもまして、この教室の空気はざわついていた

特に、一番目立つのは……言うまでもない

「……」

グレイである。この学校という空間に入った直後から、全ての場を支配しているようなオーラを放っていた……だが、そんな空気に奥することなく授業をするこの先生は、かなり肝が据わっているのか、あるいは、気が付かないだけか……

「ねぇ、あの人」（ヒソヒソ）
「あぁ、例の美人ライダーですね」（ヒソヒソ）
「なんでも、かなり凄いバイクで来たって」（ヒソヒソ）
「えぇ、私見ましたわ。なんだか、もう女優のような、そんな仕草でしたわ」（ヒソヒソ）
「どんなお仕事をしている方なのでしょうかね？」（ヒソヒソ）
「誰の母親なのでしょう？」（ヒソヒソ）

学校に入ってきた様子の事が、もうすでに親の間では知れ渡っていたようである

「（聞こえてるっつうの）」

無論、身体能力が高いので、聴力もいい。だから、奥様方の噂をも聞き逃す事なき、その耳に入って来るのであった……

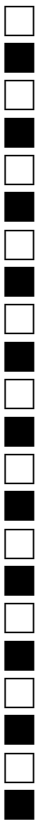
《お、お姉様。貴方は、なんという事を（。д。）》

突如、念話が流れてきた。誰からの……は、文面にあるあるモノで察してください

《いや。俺も、なんであんなので来たのか……まったく分からん。マンションから出て、気が付いたら、アレに乗ってた》

……何それ？　と言いたいが、そんなことをさせる人と言え

ば、もはやこの人しかいないだろう

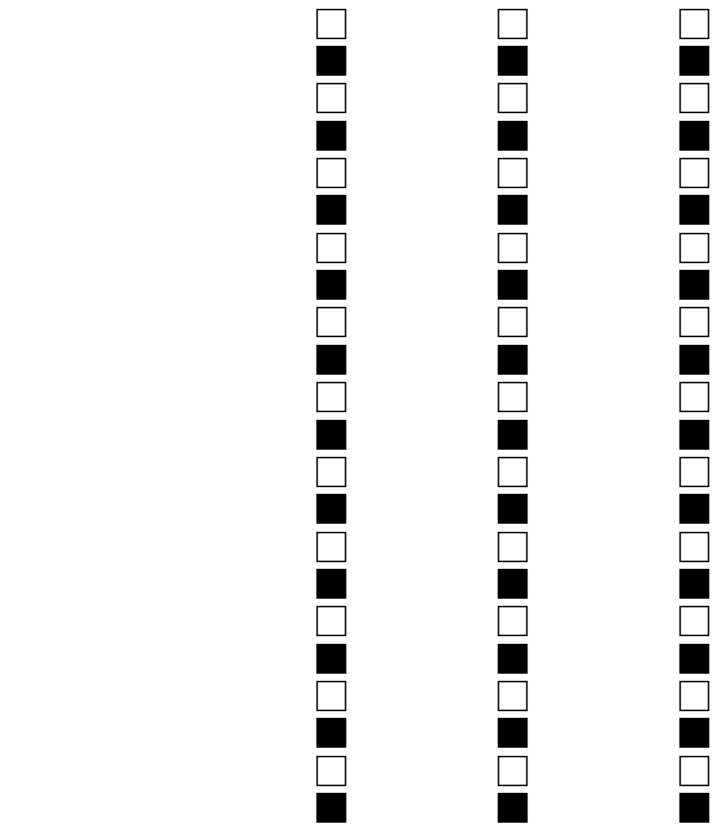


青空広がる荒野

「プックックックッ。いいねぇいいねぇ。これぞ、公開処刑って奴か？　いやぁ～、一時的にアイツに憑依して操ったかいあったよ。グッフッフッフ」

ヴァナタ、何をしたンダッチャブル……

「別に～（－∇－）　さてさて、続き続きぃ～w」



さて、舞台を教室に戻し……キンクリよろしく、今は保護者面談に移っており……グレイと、ビビの担任が話し合っていた

「あ、あの～、ご職業は、モデルか何かでしょうか？」

いきなりこんな質問が来たのである

「いいえ。公務員、のようなモノです」

まぁ、嘘だがな……一応、管理局の仕事をちょっとばかりやったからな。戸籍とか手に入れる時に、ハラオウンが対価として仕事をやっただけだからな……

「……妹は、学校でちゃんとやっていますか？」

と、なんとも心配性的な質問だが、本人の心の中では

「（問題起こしてねぇだろうなぁ……特にあの変態具合で）」

という方面での心配であった

「えぇ。とっても明るく、編入後は、クラスの皆とすぐに仲良くなれましたよ。それに、うちのクラスの子たちは、皆積極的な子共ばかりですから」

よかった。なんか変な事やってるのかどうか、心配だったが

「でも、ときどき、変な空気になると言うか……ちょっと、子供が出すようなモノではないオーラを、辺りに漂わせていますが……」

「（……前言撤回。アイツ、後でしばこう）」

と、心に誓ったグレイであった……

そして、その日の夕方。二人のマンションから悲鳴が聞こえてきたのは言うまでもないだろう。更に、その日から数日間、学校に訪れた美人の噂が絶えることなく囁かれ、ビビは色々と質問攻めにあったらしい……

後変

☆ゲッダン☆

またも舞台はスティン兄妹（しまい）のマンション、夕食中

「あれ？　お兄ちゃん、それ食べないの？」

「あ？　あぁ……」

妹がそれと刺したのは、鳥（ヤタガラス）のから揚げ。ちなみに……

「いらないならも～らい♪」

［ヒョイッ、パクッ］

「アッ！！！？」

グレイの好物だったりする

「テンメッ！！！　残しておいたモノを！！！！！」

「だって、それ食べないの？　って聞いて、あぁ。って言ったから」

「誰も食っていいとは言ってねぇだろうが！！！！！」

「あんな反応されたら、誰でも、いいんだ。って思っちゃうもん！！！　変な反応したお兄ちゃんが悪い！！！」

「何のために皿を二人分に分けてんのか、これじゃ意味ねぇじゃねぇか！！！」

「知らないよそんなこと！！！」
「なんだとぉ！！！！」
［［［［［［［［［［シュキンッ！！！］］］］］］］］］］

グレイが取り出したのは、何本ものナイフ……それを妹に向かって投げようとした瞬間

「とう！！！」
［スタッ！！］

二人と等間隔の場所に、一人の男……そう、あの破壊神様が降臨した。目を光らせて

「スゥ……？ゲッ、ダン☆？」

何故か歌い出した……途端、妹の中に眠っていたニコ厨魂に火が付いてしまい！！

「！！！！」
［バッ！！！　バッ！！！］

なぜか、踊り出した

［ババババババババババババババババッッ！！！！！！！！！］

と同時に、グレイはナイフを投げる……が！！！

「？揺れる廻る振れる切ない気持ち、二人で一緒に眠る　Ｗｉｎｔｅｒ　Ｌａｎｄ♪？」

［ババババババババババババババババババババッ！！！］

神様が歌う歌（これまたすっごく良い声で）に、まるで合わせる気無しと言った感じに、マト○クスよろしく、投げつけられるナイフを驚異の回転でかわして行くビビ……もはや、人間がなせる業ではないのは目に見えている

「？あなただけ見つめて、私だけ見つめて♪？」

［ババババババババババッ！！　ふりふり？　ババババババババッ！！　ふりふり？］

途中でグレイの高速ナイフ連続投擲の合間に、何故か腰を降るビビ……これは、ネタ的に合わせているとしか言いようがない！！！

「？明日を♪？」

［ババババババババババババババババババババッ！！！　ピタッ］

当然、そんな動きはグレイの逆鱗を逆なでするようなモノ。故に、再び投げつけられるナイフ。だが、異常な速度で行われる腰の運動を前に、全てが交わされていく……ってか、女の子がそんなことしちゃダメでしょうか！！！　レズごっこする時、アレ付けてやるんだったら話は違うけど

「？誓う♪？」

［バッ！！！　バッ！！！　バッ！！！］

なぜかポーズを決めながら踊るビビ……ちなみに、この時グレイは疲れて休んでいます。額にあるマークを浮かべながら

「?ぎゅっと抱かれ燃える恋心、激しく舞い散る雪に包まれて♪?」
［ババババババババババババババババババババババッ!!!］

またも行われる驚異の投擲&回避の構造。そんな中、兄妹(しまい)が繰り広げている罵詈雑言は

「ハハハハハッ!!!　きかねぇ納豆!!」
「ウザい黙れ!!　この同性愛の変態が!!!」
「ハハッ、褒め言葉♪（。∀。）」

と言った感じである

「?永遠に愛してる今日より愛してる、ずっと　Ｅｔｅｒｎａｌ　ｌｏｖｅ♪?」
［ババババババババババッ!!　ふりふり?　ババババババババッ!!　ふりふり?］［ババババババババババババババババババババッ!!!　ピタッ］［バッ!!!　バッ!!!　バッ!!!］

と、こんな変な空気をよそに、その空気を創り出した張本人はというと……すっごく爽やかな顔で、すっごく爽やかな汗を掻きながら、楽しそうに歌っていたのであった。うん、バンド系のヴォーカル顔負けの歌声で……

「ッッッッッッ!!!!!!!!!!……お前、マジで死んどけぇ!!!!!」
［ギュイィィィ

と、グレイは巨大な魔力球を精製し出し

「なんの！！　ベアト！！　神魔憑依（アバター・オブ・リンク）！　“フェイト・Ｔ・ハラオウン、真ソニックフォーム”　！！！」

［バシュンッ！！！］

対するビビは、あのレオタード風のバリアジャケットを装備し、その手に“ライオット・ザンバー”を装備し、あるフォームを取る……

「ッッッ！！！！！！！！！」

［ブンッッッ！！！！！！！！！］

グレイ、一投目……投げた！！！

「ッ！！！！！！」

［カキーーーーーンッ！！！！！］

打ったァァァァァァァァァァァァァァァァァァァッ！！！！！

ホ～～～ムラ「ふえ？」

［ズドオオオオオオォォォ

様へと直撃し、窓ガラスをブチ破って、外にはじき出されたのであった……ちなみに、この部屋は27階にある

「ハァ、ハァ、ハァ……ったく、無駄な体力使った。から揚げの件は、貸しだからな」

「ハァ、ハァ、ハァ……は、は～い……」

と、再び食に付く、兄妹（しまい）であった……

っていうか、窓ガラス直せ

□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■

□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■

□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■

□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■

一方、青空広がる荒野

「シクシクシク……俺が、俺が一体何をしたと言うんだよ～～～

……」

と、泣いている神様がいました

「自業自得や」
「自業自得ね」
「自業自得ですわ」
「自業自得だね」
「自業自得だよ」
「自業自得っつうんだ」
「自業自得だわ」
「自業自得だ」
「自業自得です」

と、彼の嫁全員からのツッコミがあったのは、言うまでもない

「お前ら夫を慰めるという事はしないのか！！？」
「「「「「「「「「「うん（はい）」」」」」」」」」」
「……シクシクシクシク……」

まぁ、ドンマイです、神様

「ううん、鬼だ、鬼嫁だぁぁぁぁぁ～……」
「「「「「「「「「「ナニカイッタ？」」」」」」」」」」
「いいえ！！！　何も申しておりませぬ！！！！」

……嫁がそうろうと、彼の立場が逆転することを、ここに追記しておく……あと、夜の場合は彼が優位ですがねｗｗｗ

短編集　作者は確実にイカレている、そう断言する！！（後書き）

～～～神の舞台裏～～～

神様「今回は久しぶりというわけで！！　神裏、復活祭を開催すっぞぉぉぉ～ッ！！！」

シェ・ヤ・ス「おぉぉぉ～ッ！！！！」

メ「やけに賑やかね。ま、毎度毎度の事だけど」

神「では、お土産の紹介だ。“あんぎゃーす氏とk氏”様執筆の作品、“兄。妹。テンプレ転生”の主人公、“ルチア”ちゃんからの“手作りケーキの詰め合わせ”だ！！　ルチルチ～、ありがとうなぁ！！！！」

シェ・ヤ・ス・メ「おいしぃ～～～？」

ヤ「このケーキ、爽やかなミントの味がしますわ。それに、その味を生かすような控えめな甘さのケーキ……素晴らしいわ」

ス「このショートケーキも美味し～！！　イチゴの酸味を上手く活かすような、このクリームがベストだよ」

シェ「このモンブランも、病み付きになりそうな、口にちょっと残る甘さがあって、ついつい一杯食べちゃいそうね」

神「このチョコケーキ、ビターで作られていて、甘さが抑えられて、いい苦みを出してるよ。それに、このココアパウダー、苦みを引き

立てていて、まさに大人な味ってか？　憎いねぇw」

メ「っていうか、残りのメンバーの分、どうするの？」

神「あぁ。それなら、転送してやるか。転送！！」

［バシュンッ！！！！］

神「うっし、コレで良いだろう」

メ「随分適当ね……」

シェ「はぁ、美味しかった。さてと、それじゃぁ、いつものコーナー、行くわよ！！！」

メ「今回のお題は、コレね」

――――――妹の起源、“禁忌”について――――――

神「前に、兄の方をやったからなぁ……ま、補足のような感じで行くか」

メ「それなら、旦那さま。よろしくお願いします」

神「おうよ。ま、前の本編で言った通り、妹、ビビの起源は“禁忌”。同性愛と多重愛という点においてずば抜けた欲を持つ奴だ」

ヤ「なんとも変態な欲ですわね」

神「まぁな。んで、妹はすでに起源には目覚めかけているって訳だ」

ス「あれ？　覚醒はしてないの？」

神「覚醒には、まだ一歩足りないって感じだ。あと一歩、アイツが踏み出したら、ビビは“起源覚醒者”となる。ちなみに、グレイの場合は、後数歩踏み出せば、“起源覚醒者”となるだろう」

シェ「かなり起源に近付いているのね、アイツ」

神「そう。まだ押してやらねぇとならんなぁ、アイツは……クッフッフッフッ」

メ「（あの笑み、悪だくみを考えてる笑みだわ……まだまだいじられそうね、彼は）」

神「ま、今回はコレでしまいだ。次回からは本編に入るから、楽しみにしとけよ！！」

ヤ「それでは、読者の皆様方。また次回にお会いしましょう」

神・シェ・ヤ・ス・メ「ばいば～い！！」

作「えぇ、つまらない内容を更新してしまい、ホント、申し訳あり

ませんでしたm（＿）m」

#３８　Ｒｏｕｎｄ１　闇の欠片事件、勃発……って、なんか遅過ぎない？

諸注意。今回はかなり短いです、今までの自分の中で

今回から、ようやくＡ、ＳＰＯＲＴＡＢＬＥ編に入らせていただきます。マテリアルファンの読者の皆様方、長らくお待たせしました

ｊｕｎｋｙ様、冥府の死神様、ムーギネーター様、あんぎゃーす様、ハーディス様。ご感想、ありがとうございます！！！

#３８　Ｒｏｕｎｄ１　闇の欠片事件、勃発……って、なんか遅過ぎない？

――――――そして、とある兄妹（しまい）は、闇が残した残滓と戦い始める――
――――――

日付はかなり飛び……八月の半ば。グレイは２１歳になり、ビビは１２歳となった……

まぁ、ここ一カ月ぐらい前だが……あいつら、高町、八神、バニングス、月村、そしてあのバカ妹の五人が、管理局へと入った。高町は戦技教導官になる為、テスタロッサは、執務官になりたいらしく、八神は捜査官になるとか……あと、バニングスは武装隊に所属。月村は、教官になる道を進んでいるらしい。アイツは、指揮官候補生になったみたいで……あいつに務まるのか？　まぁ、勉強すればいいだけだがな。んで、シグナムやシャマル等の守護騎士共は、八神に付いていくみたいだ

っていうか、ガキを働かせてもいい組織とは、労働法に抵触するんじゃねぇのか？……ま、否定はせんがな。使える奴は、使っていけばいい……俺はそう思う

あぁ？　俺？　今は……ニートって言うわけではない。一応嘱託として管理局に席を置き、非常時の為の予備戦力という扱いを受けている

魔導師ランクってのが、異常のＥＸランクだとか……ま、よくわ

からんが、まぁ良いだろう
ま、そんなこんなで、今や俺たちは、局の駒になったって訳だが、
何事もない平穏な日を過ごしている……
んで、そんな時、ある事件が起きた……

遠見市、某所……

［ブルルルルルルルルルルルルンッ！！！］

そこを爆走する一台のバイク。黒い装甲を纏い、車輪は普通のバイクよりも一回り太い大型の……モンスターバイクである。それの乗り手は……ヘルメットからはみ出た長い黒髪に、バイザーから見える瞳は、紅と金色の虹彩異色。体のラインはまさに全ての女性の理想とも言える程の体型で、彼女から醸し出される空気は、まさに大物の女優を想わせる風格を出している……そう、彼の名は“グレイ・スティン”。この世界……“魔法少女リリカルなのは”というアニメの世界に転生された兄妹の兄である

［ブルルルルルルルルルルルルンッ！！！］［キィッ！！！］
［……タッ］
「っと、ふぅ、やっと着いたか」

彼は、キッチンにある材料が切れていた為、それの買い出しの為、近くにあるスーパーに来ていたのである。といっても、彼女がこんな場所で買うモノは、調味料や米、パン、麺類などの材料で、肉や

野菜、魚などは全く買わないのである（なぜならば、それらの食材は全て幻世で採取してきているからである）

「（確か、醤油と味噌が切れそうだったんだよな。あと、明日の朝飯はパンにしてぇから、食パンでも買うか。後は……そういや、コーヒーの豆が少なかったな。買っておくか）」

そんなこんなで、買い物をするグレイであった……

□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■

そして、買い物を済ませ、自宅に帰ろうとすると……

「コオォォォォォォォォォォォォォォッ！！！！！」

「！！！？」

突如、周囲に結界が張られた

「……誰だ、一体……」

と、そう思案している時

［……スタッ］
「？」

ふと、背後に誰かの気配がした。もしや、この結界を張った張本人かと思い、後ろを向いてみると……

「……妹？」

そこには、バリアジャケット（セイバー・リリィの衣装【それが、今のビビのメインバリアジャケットになっている】）を着て、その手に聖剣、“エクスカリバー”を携えた、ビビの姿が在った……

「どうした、バカ妹。結界なんて張り、バリアジャケットなんか着て……模擬戦でもやってんのか？」
「……」
「？　妹？」

なんだ？　様子がおかしい……いや、分かる。コイツは、妹じゃねぇ……？

「……さない」
「あ？」
「お兄ちゃんに、はやてちゃん達は渡さない！！！！」
［ダッ！！！］
「ッ！！！？」

ビビ（？）は、エクスカリバーを振りかぶりながら、突進してきたのであった……

「チィッ！！」
［ダッ！！！］

と、突撃をかわし

「ッ！！“エグザイル”ッ！！！」
［［ジャギンッ］］
「ッ、フンッ！！！」
［［ブンッ！！］］
「へ！？」
［グルグルグルッ、ジャギッ！！！！］
「キャッ！！？」

回避している間に、“ブレイズ・オブ・エグザイル”を現出させ、鎖の部分を使い、ビビ（？）を捕獲した。なお、物理バインドの為、抜け出すには術式ではなく、己の力を使用しなければならない

「……おい、妹」

いきなり、グレイが己の妹を呼んだ。だが、この時呼んだのは目の前にいるビビ（？）ではなく

《？　なに？　お兄ちゃん》

と、念話から己の妹……本物のビビ・スティンが出てきたのである

「お前の偽物が現れたんだが……心当りは無いのか？」

少し……いや、かなりの怒気を含んだ声で、ビビに言うグレイ。
そして、ビビが次に言った言葉は……

《え？　偽物……ねぇ、それって、もしかしてもかしたら……色素が、なんか薄くない？　バリジャケの色素》

「バリアジャケットの色素が、薄い？……」

そう言って、目の前の偽物の方を見ると……

確かに、薄い。純白の衣服の部分が、少し灰色に近い。そして、銀色の鎧は、なんか白く剥げているようにも……

「あぁ、お前の言うとおりだ」

《やっぱり……多分ソレ、“闇の書事件”の二次災害の事件。“闇の欠片事件”だよ！！》

はぁ？　“闇の書事件”って、もう半年以上も前の事件だぞ。それの二次災害が、なんで今頃？

《なんで、事件の発生が遅れたんだろう……いや、ソレよりも！！！》

……嫌な予感がする……

《マテリアルズが……星光ちゃんと雷刃ちゃん！！　そして闇王ちゃんがいる！！！　これ確実！！！　確定事項！！！　“ビビ・ラヴァーズ”の新人よぉ～！！！！》

……もう駄目だ、この妹。死んだ方がましだ、コイツのこの変態症を治すには……

「っていうか、“ビビ・ラヴァーズ”ってなんだ？」

《私の嫁達の総称（＊＾―＾＊）》

あっそ、下らん……

「っていうか、“闇の欠片事件”っていうのはなんだ？」

《まぁ、ぶっちゃけちゃえば……闇の書に関わった場所に、闇の書の残滓……つまり、残りカス。それらが実体化して、闇の書の闇を復活する為に動き出すって言うモノなんだ。その為に、それらの欠片は人の形を取るの。そして、さっき私が言った三人……正式な名前は、“星光の殲滅者”、“雷刃の襲撃者”、“闇統べる王”……その三人は、闇の書の闇のコアの欠片。それが中心となってるってわけ……まぁ、これは私の解釈だけど》

「つまり、その三人をどうにかすればいいって言うわけだが……」

《殺すのはダメだよ！！　私の未来の嫁なんだから！！！》

はいはい……

《もし遭遇したら、捕獲するか、確保するかしておいてね。絶対だよ！！！》

「善処しよう……」

《今から私も動き出すから、お兄ちゃんもお願い。あ。それと……マテリアル以外、ただの闇の書の残滓は、殺してもいいから》

と言われ、目の前の偽物を見る……鎖を砕こうと必死に動いているが、無駄だ。この鎖は、冥府の神すら縛り付けられる程の頑強さを誇る鎖だ。そう簡単には砕かれはせんだろうが……

「捕らえると言っても、どうやればいい」

《そこはお兄ちゃんに任せるよ。あぁ、リンディさんにも話をして

おかないと。あと、はやてちゃんやなのはちゃん達にも……じゃぁ、よろしくねぇ！！！》

そういうと、妹は念話を切った

「まったく、あの妹は……チッ、また厄介な事が起きるとは、めんどくせ～……」

そういうと、目の前のビビの偽物を睨み

「……さて、殺せ、だったな、闇の書の残滓は」

［ギロッ］

「ヒィッ！！？（@д@）」

「……丁度良い。あのオリジナルの魔法を使ってみるか」

少し考え事をし、何をするかを決めると……

［ウォウォウォウォウォウォウォウォウォウォウォウォンッ……］

グレイの周囲に、１３基のフォトンスフィアが形成され、それらは全て、ランサーのような形状へと変わって行き……

「……穿て」

［［［［［［［［［［［［バシュッ！！！］］］］］］］］］］］］

「ヒッ！！！？」

［ズドドドドドドドドドドォオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオンッツツ！！！！！！！！！！！！！］

「キャアアア

やるとするか

［フワッ……ダシュンッ！！！］

グレイは浮かび上がり、空中を蹴って、空へと飛び立った……

これが、後に彼の運命を決める、“闇の欠片事件”の、始まりだった……

#38　Round1　闇の欠片事件、勃発……って、なんか遅過ぎない？

～～～神の舞台裏～～～

神様「つーことで、今回からA、SPORTABLE編に突入だぁぁぁ！！！」

ヤ「今回はかなり短いですわね」

シェ「そうねぇ……作者の怠慢？」

メ「区切りがいいからに決まってるでしょ。これでも、最初に比べたら、増えている方よ」

ス「そんなことより、さてさて！！　今回は私が仕切らせてもらうよ！！」

神様「おう！！　がんばれ！！」

ス「は～い！！　それじゃぁ、今回のお題はこちら！！！」

――――――なぜ、闇の欠片事件は八カ月後のこの時に発生したのか――――――

ス「です！！　これについては、闇の書に関わったメイリンに聞いて見た方がいいかな？」

メ「えぇ、答えられる範囲よ」

ス「では！！　よろしくお願いします！！！」

メ「何故遅れたのか……理由は簡単よ。蒐集した魔力が、あまりにも膨大な力を有していながら、普通の魔力とは質が全く違うからよ。それらを構成するのに、膨大な時間がかかったってだけよ」

シェ「それなら、管理局の監視に、引っかかるんじゃない？　魔力が再構成されてるんなら、何かしらの反応はあるはずよ」

メ「そうねと言いたいけど、ここで重要になって来るのは、蒐集されたグレイの資質よ。元は一般人。それが神様によってとんでもない程の力を与えられた……その資質の影響で、サーチャーには反応しなかった。って事になるわね」

ス「つまり、こういう事かな？　グレイ君の資質＝神様……ダーリンの資質って事？」

神「そういうこった。ま、＝というより、　の方だがな」

ヤ「似ているようで、違う。と言うわけですね」

メ「神の力を構成するのにも時間がかかる。なお且つ、聖獣なんてモノも蒐集してるんだから、魔力の質はとんでもない程よ。それらを自分が構成しやすい様に変換するなんて、時間が無いと出来ない事だわ」

ス「だから、事件発生が原作よりも遅れた。って訳だね」

メ「そう言う事よ」

ヤ「にしても……作者が、今回からはおそらく内容が短くなるでしょう。って言ってたわね」

神「まぁ、話の感じ的に、短くなるようだしなぁ……」

ス「まぁ、一気にすると、驚きが減っちゃうらしいからねぇ」

神「今回の闇の欠片事件。作者曰く、究極の原作ブレイクを引き起こすって……内容の大まかな流れを見させてもらったが……」

ヤ「が……どうなさいましたの？」

神「……コイツアホだろと、何度思った事か」

シェ・ヤ・ス・メ「（変な展開の連続ってわけ｛ね・ですね｝）」

神「まぁなんだ。いつものアイツ節が炸裂すること間違いなしだからよ、温かい目で見てようぜ」

ス「はーい！！　それでは！！　今回はここまで！！　読者の皆！　次回もまた見てねぇ～！！！　じゃぁ」

神・シェ・ヤ・ス・メ「ばいば～い！！」

作「えぇ……なんだかんだで、闇の欠片事件、始まります」

#39　Ｒｏｕｎｄ２　ｖｓ星雷光天（前書き）

読者の皆様方、大変お待たせいたしました。やっとレポートがひと段落し、復帰してまいりました

それでは、マテリアル編の第二話を、お送りいたします

あんぎゃーす様、ムーギネーター様、緋水様、幻想の庭師様、ミラ様。ご感想、ありがとうございます！！！

#39　Round2　vs星雷光天

――――そして、とある兄妹（しまい）は、闇が残した残滓と戦う、戦い続ける……――――

場所は、海鳴市の海辺……

「……アレか」

海上の空を、彼（かのじょ）は浮いている……その双眸、視線の先には

［ヴヴッ……］

黒く淀んだドーム状の何か……結界である。その結界は、先ほど自分が殺した闇の欠片ビビが覆ったモノとまったく同じ……つまり、この結界を張ったモノの正体は

「この中に、マテリアルか。或いは、闇の欠片という残滓がいる、と言うわけか」

口にだしながら確認し、自身のポケットから、小さな本を取り出す

「……さて、初起動だが、上手く行くのか……」

それは、彼が創り出した新たなデバイス。自身のコントロールの為

にと開発した、制御デバイスである

「……開発コードネーム、“ｆａｎｔａｓｙ　１２６－Ｂｔ”、起動開始……起動詠唱、提示。作り手たる我が告げる。開け、その身に記されし叡智の知識を。閉じよ、その叡智の知識を封ずるために。そして、その叡智の知識、我が為に開示せよ。提示者、妖魔へと墜ちし帝よ……“スウトクテンノウ”、セットアップ」

［カッ！！！！］

起動の為の呪文を唱え、その手にあるデバイスを起動したグレイ。すると、デバイス本体は、元となった闇の書のような、分厚く厳つい辞書のような本の形へと変わり、グレイの姿を、変化させた……紅い布を腰に巻き、余った部分を左側に垂らし、金色の足鎧、“ヘルメス・ブーツ”を装着し、黒色の二ーソックスを履き、右腕には二の腕まである金色の手甲で、如何なる攻撃にも耐える事が出来る神の道具、“金羊の毛皮”に覆われていた。左腕には、手首までしかない鈍色の手甲を装着し、そして体の上半身はタンクトップのような上着を着ただけの、薄着の姿……動きやすさと、回避行動に重点を置いたモノ。それが、グレイのバリアジャケットだった

「……設定どおりだな。どうだ、スウトク」

展開するや、自身の真横に浮かぶデバイスに声を掛ける

『ふむ……陳の体は問題ない。否、むしろ好調。敵が奇襲をしかけようとも、問題は無い』

ずっしりとした、重みのある声で答えるデバイス……王者が、下々に言葉を与えるような、そんな口調で、自らを“陳”と呼ぶ……

……

『読み手よ、敵はどこぞ……陳が全てを壊滅し、灰燼へと誘わん』
「悪いが、そうはいかん。今回は、お前の予備機能を使わせてもらう」
『なんだと……？』
「今回の目的は、マテリアル……つまり、お前の元となったデバイスのコアの欠片、それらの鹵獲だ。だから、お前に搭載してある吸収システムを使う。いいな」
『うぅむ……よかろう。我が読み手の命とあらば、陳の力、己が儘に振るうが良い』
「あぁ、頼むぞ」
『合点承知』
「……タマモ、シュテン、お前たちもいいな」
『勿論です、主』
『無論でござる！！　我が宿り手よ！！』

双腕に寄生する二つのデバイス。それらの言葉を聞くや否や、すぐさまグレイは、結界の内部へと入って行った……

□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■

「……バッ！！！」

そして、結界の内部へと侵入したグレイを待っていたのは、二人の少女……それも、姿には見覚えがある。が、なにやら、違う存在に見えていた

「……」

「あら？　何やら、邪魔者が来たみたいですね」

「なんだよ～、僕達が動いているって時にさぁ～……」

一人は、“高町なのは”に似た少女。ただ違うのは、その髪型。ツインテールのはずが、それがなく、髪がショートカットにされている。そして、バリアジャケットの色が、明らかに違う。白いはずの部分が、紫が少し混じった黒に、青い部分が、紫色。胸のリボンも紫に。瞳は蒼く、切れ目となっている……

もう一人の少女は、“フェイト・T・ハラオウン”に似た少女。だが、髪の色は青く、ツインテールの先が、黒に変色している。バリアジャケットも、赤い部分が青に変色し、マンとが青色一色に染まっている。瞳は、ピンクに近い色をしている。そして、先ほどのなのは同様、切れ目となっている

「（まるで格闘ゲームにある2Pキャラみたいだな……だが）」

それら、外見だけで、彼（かのじょ）は理解した。こいつ等は、先ほど倒したビビの偽物とは違うと

「……お前らが、“マテリアル”とか言う奴か」

「はい。私は、“星光の殲滅者”と申します」

「僕は“雷刃の襲撃者”！！　この世で最も最強の強者だ！！！」

……それ、普通なら、最も強き者だ、って言わねぇか？　て、隣の奴、笑いこらえてねぇか？　口元が笑っているように見えるんだが……

「さて……この結界内に入れた、というと、かなり出来る方とお見受けしてよろしいでしょうか？」

「そうだったら……どうするつもりだ」

「決まっている！！　闇の書の復活の為の贄になってもらうのさ！！！」

「その魔力……それがあれば、闇の書の復活など、容易き事となる……故に」

［チャキッ］

「その魔力、貰い受けるッ！！！！」

［チャキッ！！！］

と、二人のマテリアルは、互いにデバイスを――――――星光の殲滅者は、赤と金色の部分が紫色に染まっているレイジングハートと同じ形状のデバイスを。雷刃の襲撃者は、金色の宝石の部分が青く光るバルディッシュを――――――構えた

「いざ、勝負ッ！！！！」

［ダシュンッ！！！］

先手を打ったのは、雷刃の襲撃者だった。その手にあるデバイスから金色の魔力刃を造り出し、ハーケンフォームの様な大鎌の形態に変え、グレイに向かって突撃してきたのであった……

「……馬鹿が」

そういうと、前にスウトクを持っていき、何も書かれていない頁が

捲られ……

「断て」

『無論』

［ヴンッ！！］

グレイの前方に、ベルカ式の魔法陣が展開され、それに

［ガキィィィィィィィィィィィィィィンッ！！！！］

雷刃の襲撃者の攻撃は、阻まれた

「クッ……ウオオオ

雷刃の襲撃者は、姿を消した……

「……まずは一人目、確保完了」

グレイは、閉じられたスウトクテンノウを手に取り、残った方のマテリアルを睨んだ

「……なるほど。貴方の目的は、我々の捕縛、ですか」

残った方のマテリアル、星光の殲滅者は、相手……グレイの目的を看破した。そして、慄いた……

「（つまり、次に狙うのは私だ。ならば、相手に捕らわれずに、逆にあの方を捕縛しなければ……そして、雷刃を救わなければいけませんね）」

そう考え、相手に近付かず、自分の最も得意の距離……ロングレンジからの攻撃あるのみ！　そう作戦を練っていた直後

［チャキッ］

「ッッ！！！！！？？」

星光の殲滅者の背後に、いつの間にかグレイが周り込んでおり、首元にエグザイルの刃を向けていた

「何……ッ！！？（バカな、何時の間に！！？）」

そう考えている所を、グレイは察し

「悪いな。時間かかると思ったから、“時間を止めて”お前の背後を取らせてもらった」
「！！！？」

何だと！！？　“時間を、止めた”だと！！？　そんな事、出来るわけが！！？

「スウトク」
『構成体、吸収』
［ポウゥゥゥゥゥッ……］
「……ここまで、ですか……」

星光の殲滅者の体が光り出すと、彼女は逃げられないと悟り、無抵抗のまま

［パシュンッ！！！！］
『吸収、成功也』
［バタンッ！！］

さて、これで二人……ま、あと一人か……これなら、直ぐに終わるかな

「っていうか、妹の方はどうなっているんだ？　タマモ、繋げてくれ」
『はい、かしこまりました』

と、妹の方へ通信モニターを繋げた直後

［ウォン］
《ギャアアア

ァァァ

《とにかくとにかくとにかく！！！！！！！！！！　ピンチなので、失礼しま～～～～～～～～～～すッッッ！！！！！！！！！！》

［プツン……］

……俺の偽物が出たとは……まぁ、妹の偽物がいたんだから、いてもおかしく無いがな……

「……そのままあのクソ妹、死なねぇかなぁ……」

……あ、つい本音が出ちまった。ま、一人だけしかいねぇから、いっか

「タマモ、スウトクで捕らえたマテリアルのデータを使って、次のマテリアルを探せ。シュテン、お前もサポートしろ」

『畏まりました、主』

『了解でゴザル、我が宿り手よ』

そう言って、グレイとそのデバイス達は、その場から移動していく

……闇の残滓を、探し求めて

……って、妹がもし死んだら、もう集めなくてもいいんじゃねぇのか？　ま、死んだらの話だがな

物騒な事を思うな、兄（あね）よ……

#39　Round2　vs星雷光天（後書き）

～～～神の舞台裏～～～

神「ひっさかたぶりのカミウラだぁッ！！！　テメェら！！　テンションマックスで行くぞぉッ！！！！」

シェ・ヤ・ス・メ「おぉーッ！！！！」

ヤ「では、今回は私が中心となって答えて行きますわ。さっそく、今回のお題に入りますわよ」

ス「何か一言ないの？」

ヤ「そんな非効率な事など致しませんわ。では、今回のお題は、コレですわ」

――――――グレイの新デバイス、“スウトクテンノウ”について――――――

ヤ「ですわ」

シェ「デバイス紹介なら、いつもの通りでいいんじゃない？」

メ「設定に関わる事なら、そうするのが今回のセオリーだから、ね」

神「そんなら、いつものパターンってわけだな」

ヤ「そうですわね。では、どうぞ」

3）“スウトクテンノウ”
魔導書型のインテリジェントとストレージのハイブリットデバイス。略称“スウトク”。タマモやシュテンに組み込まれた“無限再生プログラム”の制御の為に造られたデバイス。他にも、自身の研究の補助や情報処理、タマモとシュテンの修理プログラム、多種多様の魔法が登録されており、戦闘時に後方支援や持久戦にも使える多目的デバイス。他にも、“あるシステム”が積まれている。開発コードは“ｆａｎｔａｓｙ　１２６－Ｂｔ”。一人称は“陳（ちん）”で、遠雷のような低い声で話す。イメージＣＶは、若本規夫（口調は、戦国ＢＡＳＡＲＡの“織田信長”風）

ヤ「以上ですわ」

メ「コレは、幻想の庭師様から案を頂いた、“幻想の書”を、作者が独自のアレンジを加えたモノよ」

ス「結構変えたねぇ……原型ないじゃん」

シェ「確かに……」

神「ちなみに、開発コードの“ｆａｎｔａｓｙ　１２６－Ｂｔ”。コレは元となった“幻想の書”を英訳したｆａｎｔａｓｙ　ｂｏｏｋ、それのｂｏｏｋの頭文字を取ってｆａｎｔａｓｙ　Ｂ、それにタイプの頭文字のｔを組み込ませ、ｆａｎｔａｓｙ　Ｂｔ。更に、この案が送られた感想が１２６番目だったという所から、考えられているんだぜ」

メ「そして、スウトクテンノウという名前。これは“玉藻御前”や“酒天童子”と同様、“日本三大悪妖怪”の一体、“嵩徳天皇”から来てるのよ」

ヤ「またそれですのね……」

神「最初タマモの名前みた後に、これらをデバイスの名前にしようと思い突いたらしいぜ、この作者は」

ス「っていうか、ほとんどの人は大方予想してたと思うよ、この名前は」

シェ「かもねぇ……ま、いいんじゃない？」

神「だんなw」

ヤ「それでは、今回はこれにて終了よ」

神「暫く休載してて、読者の方々には、大変申し訳ない。作者には、俺らがきつく言っとくわ」

シェ「二か月近くも休みがあったって言うのに……怠慢もいい所だわ」

ス「ホントホント！！！」

メ「（実際は、ほぼこの小説の事考えてたみたいよ、休みの間中）」

ヤ「まぁ、アホで厨二病で脳内お花畑で変態で自称妄想狂なんだから、仕方無いわよ」

神「だったな、昔から」

ス「ねぇ……」

ヤ「それでは、今回はここまでですわ。読者の皆様方、また次回に会いましょう」

神「そんじゃ！！　皆揃って～ッ」

神・シェ・ヤ・ス・メ「ばいば～い！！」

作「しばらく更新できなくて、本当に申し訳ありませんでした。それと、今度は試験がありますので、再び更新を停止するかも知れません。読者の皆様には大変申し訳ありませんが、なにとぞ、ご了承をお願いいたします」

＃４０　Ｒｏｕｎｄ３　ｖｓ炎帝月妃（前書き）

二日連続での投稿です

今回の話は、今まで自分が書きたい書きたいとしていた内容なので、サラサラと書いていくことが出来ました（なので、早く完成してしまいました）

こんな発想、なかった！！！……はず

ムーギネーター様、煌　焔様、あんぎゃーす様。ご感想、ありがとうございます！！！

#40　Round3　vs炎帝月妃

――――――そして、とある兄妹（しまい）は、闇が残した残滓と戦う、戦い続ける……――――――

海鳴市、市街地上空に展開されている結界内

「あら？　どうやら餌が一匹、入り込んだみたいね」
「ふえ？　あ、ほんとだ」

そこには、二人の存在があった……

「（マテリアル、だよな。だが、こいつ等は……）」

その二人は、そう……あの二人のマテリアル――――

「テメェらも、マテリアルか……或いは、闇の欠片か」
「私達を……根幹たるコアの半身である私達を、あんなカス共と同等にしないで頂戴。虫唾が走るわ、このノッポ女」

ノッポ言うな。気にしてんだからよ、この体の事はな

「クスクス……どうやら、貴方があの星光の殲滅者と雷刃の襲撃者を捕獲したヤツみたいですわね」

「そ、そう、みたいだね」
「……よく分かったな」
「当然よ。だって、そのデバイスから、あの二人の力を感じられるんだもの」
「う、うん」

バレてやがったか。まぁ、別にいいがな……問題は、別の所だ

「テメェら、何者だ」
「あら？　人に名を聞く時は、自分から名乗るモノじゃないのぉ？　まぁいいわ。今回は教えてあげる……」

――――半年前、自分達が魔導師として覚醒させた二人の、マテリアルだった

「私は“月夜の暗躍者”、冥土の土産に、覚えておくといいわ。クスクスクスッ」
「わ、私は、“煉獄の殺戮者”。よ、よろしくお願いします！！」

その二人は、自分達をそう呼んでいた……

《ア……“アリサ”ちゃんとす、“すずか”ちゃんの、マ……マ～テ～リ～ア～ル～～～ッッッ！！！！！！！！！？？？》

突如、近くのモニターから、超大音量の叫び声が発せられた。そう、グレイの妹、ビビだった

「……おい、クソ妹。お前なんで通信してきた」
《あ、いや。お兄ちゃんが新たなマテリアルに接触したってベアト

から聞いたから……っていうか！！！　なんでアリサちゃんとすずかちゃんのマテリアルがいるのさ！！！　原作には存在して無いよ！！！　っていうか、他の二次創作にすらいないし！！！
　というより、なんで存在してんの！！！？　在りえないよ！！
あの二人のマテリアルが現れるなんてさぁ！！！　闇の書に関係ないでしょ！！！　一体どこに接点があるの！！！？≫
≪何をブツブツ独り言を言ってんだこのクソ妹オオオオ

トは、全体的に紫色に変り、スカートは透ける程薄い白。手足に付いている装甲は、金色になっている。口調からするに、本人と比べてどうも饒舌に感じる

一方、“煉獄の殺戮者”は、髪が金色から赤色で、先に行けば黒く変色している。結び目が無く、ストレートに垂れている。瞳も引きつっており、黒く変色している。バリアジャケットも、ほとんどが反転しているような色合いで、黒を基調とし、赤色の所が灰色に、青いリボンは、白色へと変化している。そして、先ほどからおどおどとして、隣にいる“月夜の暗躍者”の後ろにへばりついているという状況である

「（なんか、本物と立場が逆転しているような感じだな……ま、別にどうでもいいか）」

そう。そんな事はさほど問題ではなく、今彼（かのじょ）がするべき事は……

……

「（マテリアルの鹵獲……）行くぞ、タマモ、シュテン、スウトク」

『はい、主よ』

『承知でござる！！　我が宿り手よ！！！』

『よかろうぞ』

［チャキッ］

己の手に持つ武器、“ブレイズ・オ・エグザイル”を持ち、腰を低くし、構えた

「へぇ。あの二人と同様、私達を捕らえるつもりですか？　クスクスッ、そんな無駄な事を」

「ど、どうするの？　“月夜の暗躍者”」
「どうにも。ただ、あの方を追い込み、闇の書復活の贄とし、星光の殲滅者と雷刃の襲撃者の二人を解放するのよ」
「わ、わかった！！」

そういうと、あの二人も、戦闘態勢を取り……戦いが、始まった

「（捕らえられるという事が分かってんなら、かなり接近がしにくくなっている可能性がある……なら、気絶させてからの捕獲しかないな……だが）」

一つ、気になる事がある。アレは、おそらくあの偽ビビと同じ、この地の記憶から引き出されたモノ。なら……

《タマモ、“インディグネイション”と“ミスティックケージ”、“エンシェント・カタストロフィ”、“イノセント・シャイン”、“セイクリッド・ブレイズ”、“ビッグバン”の準備を。シュテンは、“アルテミス・ブレイド”と“バーバリアン・ハンマー”、“ランス・ザ・デステニィー”の換装準備をしておけ。スウトクは、いつでも吸収できるようスタンバイ、いいな》
《《《御意》》》

デバイスに念話で指示を送ると、直ぐ目の前に、すずかのマテリアル……月夜の暗躍者がそこにいた

「それッ！！！」
「ッ！！？」
「シュシュッ！！」

二振りの忍者刀……おそらく、グレイが作ったデバイス、“ツク

ヨミ”と同じ機構を持つ武器が、彼(かのじょ)を左右から襲ったが、バックしてソレをかわし

「このッ！！！」

［シュッ！！］

鎖付きの双剣を飛ばし、攻撃を加える。が

「クスッ」

［スゥウゥウゥウッ……］

月夜の暗躍者の姿が消え、その場を、エグザイルが過ぎた

「（やはり、“インビジブル・ミスト”は使えるのか）」

“インビジブル・ミスト”。それは、体を一時的に霧状に変換させ、全ての攻撃をすり向けさせ、自身の体を見えなくする、暗殺にはもってこいの代物。ビビがこの術式を開発し、月村に教えたとか、前に言っていたな。やはり、同じ事をするのか

［ボオオオ

「あぁ、“メルトダウン”が避けられた……ど。どうしよう」
「何を言ってるの？　あの二人を出しぬいた実力を持つのよ。煉獄の殺戮者のヘボ砲撃くらい、簡単に避けられて当然でしょ」
「ううう……へ、ヘボじゃ、ないもん」

……なんか、まったく違うな、あの二人。本物と……ま、別にいいか

「さて、それじゃぁ、行くわよ」
「う、うん！！」
［ババッ！！！］

そういうと、欄獄の殺戮者はさらに後退し、月夜の暗躍者はグレイに向かって突っ込んできた

「（さて、次はどう来る）」

グレイは、次の行動を全て避けるつもりで、二人の行動を見た

「“幻霧（ゲンム）”、呪動！！」
［スゥウウウウッ……］

月夜の暗躍者は、“インビジブル・ミスト”を展開すると、その場から姿を消した

「（やはりか。さぁ、どこから来る？）」
［［［［［［……ボウッ！！！！］］］］］］
「！！！」

バニングスのシューター系射撃魔法、“ファイア・スピア”か。な

ら、アレの後は……

［ババッッッ！！！！！！］

「ッ！！（やはり、ソレをするか）」

煉獄の殺戮者が、射撃魔法で牽制し、その隙に月夜の暗躍者が相手の左右か、或いは背後、上下、どれかから巨大手裏剣……月村のデバイス、“ツクヨミ”の第二形態、“ヒュージダガーフォーム”での奇襲……

「タマモ！！」

『はい』

［ヴヴヴヴンッ！！！！］

グレイはその場から動かず、タマモへ指示を出し、前回、闇の書の闇が展開したあの“複合四層式のバリアフィールド”を展開させ、全ての攻撃を難なく防いだ

「えぇ！！？　あ、あんなの、ひ、卑怯だよ！！！」

「なるほど……ソレを展開するとは、中々ですね。普通なら、展開した直後に、魔力を全て取られて身動きが取れなくなるのですがね。クスクスクスッ」

二人は、再び並び、グレイと距離をあけていた

なるほど。あの二人連携パターン……最初のは、月村が一撃離脱で攻撃を仕掛け、その隙にバニングスが砲撃系の魔法で攻撃をする、シフト1。そして、さっきのが、月村が消えて、バニングスが牽制に射撃魔法を放つ。その間に月村が奇襲をするシフト2…

……つまり、あの二人の行動がそのままこいつ等の攻撃パターンと

言うわけか。なら、次はバリア貫通攻撃を組み込ませた連携、シフト5……もしそれならば

《タマモ、起動準備しておいた術式、準備はいいか》
《はい、いつでも発動出来ます。どうなさいますか、主》
《次に奴らが行動を起こした直後、“ミスティックケージ”と“エンシェント・カタストロフィ”を俺の左右に展開。その後、俺の頭上に“インディグネイション”を、足元に“イノセント・シャイン”を発動。そしてら、俺の解除コードで“ビッグバン”を発動させてエンド。もし決まらなかったら、“セイクリッド・ブレイズ”で追撃。いいな》
《了解》
《シュテン、奴らが動き出した直後、すぐさま武器を“バーバリアン・ハンマー”に変更、いいな》
《承知でござる！》
《スウトクは、奴らが攻撃を受けた時に、リングバインドを仕掛けて同時吸収……出来るな》
《無論》

グレイとそのデバイス群は、主の命を聞き、相手の出方を待った……直後

「行くわよ！！　煉獄の殺戮者！！！」
「う、うん！！！」
「ババッ！！！！」

相手の二人は、互いにグレイの横へと、旋回しながら向かって行った

「（やはりか）タマモ」
『“ミスティックケージ”、“エンシェント・カタストロフィ”、

発動』

［［ヴウウウ

左腕のデバイスに命ずると、グレイの手には、石や岩、木などで出来た無骨なハンマーが握られており

「おらッ！！」

［ブルンッ！！！！］

［［［［［［［コオオォォォォォォォォォォォォッッッ！！！！！！！］］］］］］］

「「ヒッ！！！？」」

ハンマーを振るった直後、グレイの周囲に青白い炎のような人の形をした塊……そう、俗に言う亡霊が顕れ、それらが向かってくる二人に向かって突撃し出した

「な、なにあれッ！！！？」

「お化け！！　お化け怖い～～～ッ！！！！」

二人は、突如現れた亡霊の出現に混乱し、その場から離れだした

「爆ぜ、タマモ」

『“ビッグバン”、発動』

［カッッッッッ！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！］

グレイが、タマモに解除コードを命ずると、グレイの周囲に巨大な閃光が発光し

「「！！！！！！！？？」」

［ズドオオオ

オオオオ

なら、かわす事など容易いだろ」
『ふむ……いささか、卑怯とは思うが、それもまた戦略の一つ。読み手よ、中々な采配であった』
『お見事でござったぞ！！　主！！！』

スウトクとシュテンから、称賛の声が送られたが、グレイはそんな事に目もくれず……

「あっそ。なら、次のマテリアル反応を探せ」
《《《御意》》》

三つのデバイスは、主であり、宿り手であり、読み手である彼の言葉に従い、次なるマテリアルを、探し始めた……

#40　Round3　vs炎帝月妃（後書き）

～～～神の舞台裏～～～

メ「さて、今回は私がメインでやって行くことになっているわ。よろしくね」

神「っていうか、しばらくはほぼお前でもよくないか？」

ヤ「そうですわね。今やっているマテリアル編。これは闇の書関連の事だし、それなら貴方が一番詳しいのですからね」

メ「私よりも、旦那さまがやればいいんじゃありませんか？　ほぼ全ての事は、お見通しなのですからね」

神「ドキッ！！　さ、さぁ！！　今回もハイテンションで言ってみよ～～～ッ！！！」

シェ・ス「おぉ～ッ！！！」

ヤ「（は、はぐらかした……）メイリン、やってもいいわよ」

メ「あぁ……なら、今回のお題は、これね」

――――――アリサとすずかのマテリアル、煉獄の殺戮者と月夜の暗躍者について――――――

ヤ「やっぱり……メイリン、説明をお願いしますわ」

メ「えぇ……なら、まずはこの二人が生まれた経緯について話すわ。まずは、中身的に。この二人が生まれた原因は、海鳴市という場に刻まれたあの二人の記憶。それが闇の書の闇のコアと共鳴し、あの二人を象る事になったのよ。そして、今の彼女達と同じ能力を持ったマテリアルが誕生したって訳。分かるかしら？」

神「原作で言うと、闇の欠片クロノが、いい例だな。奴は闇の書と密接な関係が無いにも関わらず、残滓の一体として登場しているからな」

ス「作者曰く、この例が無かったら、この二人のマテリアルは誕生してなかった。との事」

ス「そして、このマテリアルを出そうと思ったのは……やっぱり、作者のあの奇抜な発想が、オリジナルマテリアルを出そうと思ったから、だけどね」

メ「じゃぁ、次にあの二人の性格についてね」

神「作者がこの二人のコンセプトにしてるのは……まず、煉獄の殺戮者、コイツはホンモノのアリサとは１８０度違う、大人しく弱気で、おどおどした性格を。月夜の暗躍者の場合は、コレも本物のすずかとは１８０度違う、腹黒で毒舌家、不敵な笑みを何時も浮かべる嫌な性格……これらを念頭に置いて書いてるって言ってたぜ」

ヤ「濃くありませんか？　それ」

神「まぁ、そういうな。俺達の周りだって、濃い奴だらけだろ？

２４時間３６５日、年中無休で毎日いつもイチャ付いてる超絶変態エロバカップル。それに邪悪な百合バカップルと清らかな百合カップル、そんで格闘筋肉バカップルと……まぁ、他にもいっぱいいるだろ？」

シェ・ヤ・ス・メ「確かに……」

神「ま、そう言うこった」

メ「さて、他にも分からない所があれば、質問してきてください。答えられる範囲内で、お答えいたします」

神「そんじゃ、今回はこれでおさらばと行くか」

ヤ「そうですわね」

メ「疲れたわ……しばらくこのコーナー、休んでていい？」

神「それなら、お前に変わる新たな闇の書関連に詳しい奴がいるな……どうしよ？」

ス「それだったら、今スウトクの中にいるマテリアルを呼んで、自分達で説明させる。って言うのはどう？」

神「スノウ！！！　ナイスアイディア！！！！」

ヤ「帰る際に、記憶操作をしておかなければなりませんわね」

神「ま、その辺りはその時にやって行くさ」

メ「じゃぁ、次回から暫く、休ませてもらうわね。読者の皆様、また今度、お会いしましょう」

神「そんじゃ、今回はここまで！！！　読者の皆！！　また次回に会おう！！！」

神・シェ・ヤ・ス・メ「ばいば～い！！」

作「ここだけの話。今回の事件が半年遅れで起こしたというのは、この二人のマテリアルを出す為だったのです。はい、裏事情です」

#41　Round4　vs黒騎士団（前書き）

なんとか、一週間以内に更新できました。

残暑が暑すぎて、ヤル気が無くなって大変です……

緋水様。未土井無視様、ムーギネーター様、あんぎゃーす様、冥府の死神様、蒼穹様。ご感想、ありがとうございます！！

#41　Round4　vs黒騎士団

――――そして、とある兄妹（しまい）は、闇が残した残滓と戦う、戦い続ける……――――

場所は別世界へと移り……幻世、上空

『……主、山岳地帯に、マテリアルの反応がありました』

「あぁ、なら向かうか」

『『『御意』』』

日の本に蔓延った三大悪妖怪達の名を冠するデバイス達の返答を聞くや、直ぐにマテリアルの反応があった場所へと向かって行った……

そして、向かって行った先。森林地帯には……

「フッハッハッハッハッハッハッハッ！！！　狩れ！！　狩り殺せ！！　塵芥のような魔獣など、闇の贄としてしまえ！！！」

「オーホッホッホッホッ！！　弱過ぎて、他愛無いですわねぇ」

「……」

「え～い♪　やられちゃえ～♪」

「オラオラオラ！！！　とっとくたばれやゴラァッ！！！！」

見覚えのある姿だが、明らかに別人だと分かる五人んも姿があった
……

……なんか、関わりたくねぇ……

「（逃げたい。が、そうはいかんな……ほっとくと、不味い気がする）」

そう思うと、グレイは牽制目的で、魔力弾を放つ

［バシュッ！！！］

「「「「！！！？」」」」

「何者だ！！」

突如向けられた殺意に、その場にいる五人は、一斉に同じ方向を向いた

グレイが浮かぶ、空域に……

「……貴方達、マテリアルよね……闇の書の闇、防衛プログラムの」

反応したのは、最後の夜天の王に似た少女。だが、声からは、本物には無い覇気が込められていた

「ほう……我らを知っているのか。フッ、塵芥の分際が」

「（なんか、変な雰囲気だな、おい……）」

「まぁ、訊ねられたのならば、王として、答えてやらねばならぬな……如何にも、我れらは“闇の書の闇”の中心存在。我が名は“闇統べる王”也」

主……八神はやてが名乗ると、他の四人も、名乗りを上げた

「私(わたくし)は“常夜の魔導書”よ。知っておきなさい、下人。オーホッホッホッホッ！！！」

「……“業火の魔騎”」

「わたしは～、“金剛の魔騎”で～すっ！！　よろしく～♪　キラッ☆」

「アタイは“烈風の魔騎”だ、覚えとけこのクソデカノッポ女ッ！！！！」

順に……リインフォース、シグナム、ヴィータ、シャマルに似たマテリアル達が、挨拶をした

《こ、今度は、ヴォルケンズのマテリアル？　ま、まぁ、あっても、おかしくは、ない、けどね……》

おい、お前、戦闘はおわｔ

《だから何をブツブツ言ってんだこのイカレ妹オオオオ

……さて、捕獲する以前に、こいつ等を止めないと、大変なことになるんじゃないのか？　幻世の魔獣共が、なんか減ってる気がするし……はぁ、まったく……面倒くさくて嫌になるわ

「何を呆けておる」

「……いや、なんでも無い」

「……おい王。コイツ、星光と雷刃、それに煉獄と月夜を捕獲してるみたいだぜ」

「あら？　ホントね」

「うえぇ～！！？　た、たすけないと～！！」

「……」

……やはり、何か感じるのか？　同族が近くにいると、反応するみたいだな

「どうやら、我が同胞を捕らえているようだが……なにをするつもりだ」

「さぁな。おそらく、変態のおもちゃにでもされるでしょうね。よく分からないけど」

こいつ等があの妹の所に行ってどうなるのかと言われても、俺が知るわけないし。ま、卑猥な事になるのは間違いないはずだ。あの変態の事だからな

「ほう……玩具、か……出来るモノなら、やってみるがよい！！」

「「「「「バッ！！！」」」」」

王の敵対意思を感じると、従者たる魔騎と魔導書は、戦闘態勢を取

った

「……はぁ、やっぱ戦うのな。めんどくせぇ……」

だけど、こう殺気を感じると、心臓が高鳴り、内心では喜んでいる自分が嫌になる……

――――「お前の起源は“幻想”。本能的にこの状況を望んでいたのさ」――――

……バカバカしい。だが、もしそうなのだとしたら、俺は抗ってやる。だから

「カテゴリ、銃。ライオットショットガン」

［ジャギンッ！！！］

取りだしたのは、大型のショットガン。人外にならないようにするには、人が生み出した機械仕掛けの武器を使う他ないのだ

「質量兵器か……面白い、抗ってみるがよいわ！！！」

［ヴンッ……！！］

闇統べる王が、自身の足元に魔法陣を展開し

「消し飛べ！！“アロンダイト”ッ！！！」

［ゴォオオオオオオオオオオオオオオオオオッッ！！！！！！］

砲撃魔法を放った

「！！」

［バッ！！！］

だが、その砲撃はグレイに当たる事無く、彼（かのじょ）は避け

「ッ！」

［ダゴンッ！！！］

砲撃を放ったモノに、反撃を繰り出した

「ッ！」

［ザンッ！！！］

「ッ！？（何？）」

しかし、攻撃は通る事無く、放たれた弾丸は、騎士の一人……烈火の将のマテリアルの持つ剣によって、切り裂かれた

「さすがよ、我が業火の魔騎」

「は……」

「チッ……だったら……カテゴリ、ミサイルポッド」

［［ジャギンッ！！］］

今度は、背中からアームが伸び、そこに二つのミサイルポッドが出現し、腰のあたりに固定された

「ホーミングミサイル、発射」

［［ババババババババババババババババババババ

バババババババババッッ！！！！！！！」」

二門の発射口から、何発ものミサイルが放たれ、それは不規則な動きをして、相手へと向かって行った

「あめぇんだよタコッ！！！」

「バババッ！！！！」

しかし、それに対応したのは、あらあらしい口調の癒し手……シャマルのマテリアルが放ったクラールヴィントに似た指輪から伸びたペンダルが、全てのミサイルへと向かって行き

「ドドド

――――――そう、近距離で攻める、自らも危険が及ぶモノを選んだ
――――――

……やはり、俺にはこんな武器よりも、エグザイルやハンマーみたいな、あんな武器しか使えないのかよ!!!

「すっきあり～～～っ!!!」
「ッ!!!?」

しまった!!　考えに集中し過ぎた!!　まさか、隙を作っちまうとは!!　アイツは、あのハンマーのガキのマテリアル……ヤバい、墜ちる

『宿り手ェェェッ!!!』
［ジャギンッ!!］
「!!?」
［ガギイイイイイイイイイイイイイイイイイイッ!!!!!］

だが、その間に左腕の判断で、腕に大型の剣が握られており、それで攻撃を防いだ

「ぶぅ～～～、なんでふせいじゃうかな？　かな!!」
「ッ……（やはり、俺にはこういう武器がお似合いってか？　クッ、イラつく……）」

眉間に青筋を露骨に浮かべ、グレイは攻撃を弾き返し

「ッ！！　ハアァッ！！！」
［ガギイイィィィ

［ズキッ！！］
「グッ！！？……！！！？」
途端、酷い頭痛が起きたが、直ぐに止み、脳内に、新たな知識が書き込まれた
なんだ、コレは……EC（エクリプス）兵器？“魔導殺し”？……
《ほう……なるほど。コイツはいいな》
《だろ？　しかも、神たる俺の加護や、その神に認められた最高の技術者による改良と改善があるから、そこの技術力じゃぁどうにもならない程強力なんだぜ》
《……なら、さっそく使わせてもらうか》
そして、グレイは神から得た新たな力を発動する
「……“ECディバイダー”、セット」
［ジャギンッ！！！］
「「「「「！？」」」」」
「……銃剣、か」
グレイの手に現れたのは、銀色の銃剣。リボルバー式銃身の下に、片刃のワイヤーカッター付サバイバルナイフを融合させたような形状をしている
「さて……じゃぁ、遠慮なく、やらせてもらうぞ」
［チャキッ］
その手に持つ、銀色の銃剣を握り、その銃口を、マテリアル達へと向けた

「フンっ！！！　下郎の分際で！！！」
「一気に沈みなさい！！！」
［［ゴオオオ

砲撃である

「チィッ！！！」

［［［［［バッ！！！！］］］］］

闇の王と、闇夜の書、そして魔騎達は、迫りくる砲撃をかわし、反撃を繰り出そうとした……が

［［［［［バシイイイィィィィィィィィィィッ！！！！］］］］］

［［［［「！！！！？」］］］］

突如、鞭のようなモノが顕れ、五人のマテリアルを一斉に捕縛した

「ふう……やっと捕まったか……スウトク」

『合点承知。構成体、吸収』

［［［［［ポウウウウウウッ……］］］］］

闇統べる王、常夜の魔導書、業火の魔騎、金剛の魔騎、烈風の魔騎。その五人のマテリアル達の体が光り出し、粒子へと変化していく

「な、何だコレは！！？」

「ちょっとぉ！！　離しな、さい！！」

「……不覚」

「ふえ？　ふえええぇ～～～？？」

「クソが！！　離しやがれ！！！」

各々に抵抗を試みるが、すでに吸収は始まっており、もはや逃げる事が出来なっている

「グゥウウウウウウウウウッ！！！　オノレ塵芥アアアアアァアアアア

リーズの新情報を教えただけだよ。妹は原作知識の他に、別の方面の知識も豊富だからな。せめてこれくらいのハンデはあってもいいと思ってな》

……

《ま、大切に使えよ。んじゃ、まったねぇ～♪》

あ、切りやがった……ったく、調子を狂わせやがって

「……そういや、他の連中はどうしてんだろ……タマモ、なんか情報はないのか？」

『はい。私達が幻世に来る前の状態ですと、クロノ・ハラオウンとユーノ・スクライアの二名が、己のマテリアル……“黒衣の断罪者”と“歴史の諦観者”と交戦中。そして、高町なのは、フェイト・T・ハラオウンの二名が、複数人の闇の欠片破壊し、次の欠片へと移動中。八神はやて、シグナム、ヴィータ、シャマル、リインフォースの五名も同様……情報が入りました。アルフ、ザフィーラの二名が、己のマテリアル、“雷電の魔獣”、“暗雲の魔獣”と交戦中。なお、クロノ・ハラオウン、ユーノ・スクライアの二名は、未だ戦闘中。高町なのはとフェイト・T・ハラオウン、八神はやて、シグナム、ヴィータ、シャマル、リインフォースのメンバーは、マテリアルと戦闘中の二組へと支援に周る様です。妹様は……以前、闇の欠片の主と交戦中、苦戦を強いられているようですが、なんとかなるかと思われます』

あのクソ妹は……だが、やはり他の連中のマテリアルもいたのか……ん？　待てよ

「タマモ、シュテン、スウトク。もしかするとだが……俺や、

あの妹のマテリアルもいるのか？」

『索敵開始……検出。はい、主と、妹様。お二方と同様の魔力反応と、マテリアルと同じ魔力反応の融合体を検知しました。これは間違いなく、お二方のマテリアルとみて間違いないと思います』

……さすがに、そんな奴らまで手に入れようとは、思わないよな、あのクソ妹は……

『いかがなさいますか？　このまま索敵を続けますか？　或いは、この幻世にいる闇の欠片を討滅致しますか？』

あ？　幻世にいる闇の欠片？

『はい。この世界に、複数の闇の欠片の反応を察知しました』

マジかよ……めんどくせぇな

「仕方ない。その反応を追って、その反応してるモノ全てを殲滅するぞ。いいな、オメェら」

『『『御意』』』

#41　Round4　vs黒騎士団（後書き）

～～～神の舞台裏～～～

神「いやっほう！！　今回もカミウラ、はっじまっるよぉ～～～！！！！」

シェ・ス「いえぇ～い！！！」

ヤ「前回申した通り、今回からこの闇の欠片事件の間だけ、メイリンはおやすみよ。今頃、書斎で本でも読んでゆっくりしてるでしょうね……」

神「というわけで！！　メイリンに変わり、この場にはあのマテリアルズに来てもらう事になっているぜ！！　では！　カモ～ン！！！」

［［［［［［［［バシュンッ］］］］］］］］

星光「皆さま、お久しぶりです。星光の殲滅者と申します」

雷刃「僕は強くて凄くてカッコイイ雷刃の襲撃者だ！！！　知ってるよな！！」

闇王「我は闇統べる王……わざわざ来た事を感謝するんだな、塵芥共」

煉獄「ど、どうも！　こんにちは、れ、煉獄の殺戮者、です」

月夜「月夜の暗躍者よ。今後もよろしくね、子豚ちゃん達。クスクスッ」

神「では、こっからは今回初出のマテリアルズだ。俺らによるコメントもあるけど、キッチリ自己紹介するように」

シェ「まずは、シグナムのマテリアルから」

業火「……業火の魔騎だ」

ヤ「他には？」

業火「……」

シェ「と、こんな感じで、無口キャラというわけよ」

神「それ以外にはあまり無いので、次！！　ヴィータのマテリアル！！！」

金剛「金剛の魔騎でぇ～す♪　みんな、よろしくぅ～♪　しゅみは～、おかしをたべることで～す♪　てへっ☆」

ス「お、オリジナルより、なんかはっちゃけてる……」

神「作者曰く、ブリっ子風に書いているんだと」

金剛「わたしぶりっこじゃないもん！！　ぷんぷんっ！！」

神「これ誰得なんだろう？　ブリっ子ヴィータって言うのは……」

シェ「続いて、シャマルのマテリアルの紹介よ」

烈風「烈風の魔騎だ、夜露死苦」

神「今時そんな死語言う奴なんかいねぇよ～～～ッ！！！！」

烈風「うっせぇ！！　何を言おうが、アタイの勝手だろうが！！！
　死ね優男が！！！」

ヤ「まるでヤンキーですわね……いや、こういうときは、アネゴ、かしら？」

ス「さぁ？　少なくとも、全国のシャマルファンの方々には申し訳がない気がする」

神「あぁもう……次！！　リインフォースのマテリアルだ！！」

常夜「オーホッホッホッホッホッホッ！！！　皆さま、御機嫌よう。私は、常夜の魔導書ですわ！！！！」

ヤ「キャラ被ってるわよ！！！　そういうキャラは私だけでいいはずよ！！！！」

神「（いや、俺の嫁の中に、後一人、そう言うキャラがいるんだがな、ヤーヤ……）」

常夜「あら、どんな性格をしていようと、この転生物語にはいないのだから、別によろしくても構わないのでは？」

ヤ「ややこしいのよ！！！　特にこの場所では！！！」

ス「ヤーヤちゃん、落ち着いて！！」

シェ「とまぁ……こんな感じのお嬢様な性格な訳です……」

神「……ハッキリ言って、変人だらけだな」

ス「ねぇ……」

神「清楚でおとなしめななのはに、天然馬鹿の僕ッ子フェイトに、傲慢で態度がやけにでかいはやて……それだけでも強烈だって言うのに、弱気でおどおどしてるアリサ、腹黒で毒舌家のすずか。そんで無口なシグナム、ブリっ子ヴィータ、ヤンキーシャマル、お嬢様リインフォース……どんだけ属性揃えてんだよ！！！」

ヤ「これほどの属性の子を、あの変態が抑えられえるのかしら？」

シェ「さぁ？　少なくとも、いけるんじゃない？　あの変態なら」

ス「だね♪」

神「結局、そういう所に、落ち着くのね……っと言うわけで、今回は出てきたマテリアル達のおさらいでした～。いきなりオリキャラが一気に増えて、混乱していると思うので、ここいらで纏めてみました」

ス「で、今回はこれでおしまい？」

神「まぁ、そうだな。尺的にも、丁度良いし。それに、次回からはこの子達にも頑張ってもらうからね」

ヤ「何気に、楽しようとしてません？」

神「ナンノコトカナ？」［ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴッッ！！！

常夜「ごきげんよう」

神「合わせろよお前ら！！！！」

ス「今回、何気にツッコミまくってたね、ダーリン」

ヤ「そ、そうね……」

作「ちなみに、今回グレイにディバイダーの知識を与えたのは、ただの気分です。はい、すみません」

＃４２　Ｗａｒｎｉｎｇ　ｖｓ魔狼双牙・　ｖｓ悪法劣史（前書き）

皆さま、大変お待たせいたしました。ようやく更新致しました

学業やら、なにやらで、全然手をつけられなかったので、本当に申し訳ございませんでした

テスト期間が明日で終わるので、そこからは週に一度のペースでやっていこうと思います

ＸＧ－７０ｄ　凄乃皇・四型様、ムーギネーター様、あんぎゃーす様、めがね様、緋水様、蒼穹様、ｊｕｎｋｙ様。ご感想、ありがとうございます！！！

#42 Warning vs魔狼双牙・vs悪法劣史

――――そして、とある兄妹（しまい）は、闇が残した残滓と戦う中、その世界の人物達も……闇と戦う、戦い続ける……――――

グレイ・スティンが、幻世で闇の欠片を潰して周っている時……
海鳴市、市街地

そこで、四匹の魔狼達が、その牙を、その爪を、削り合っていた

「「ウオォォォ

夜天の守護騎士、ヴォルケンリッターの一人、“盾の守護獣”、“ザフィーラ”のマテリアル、“暗雲の魔獣”

その二組が、戦っていた。だが、一方の方では……アルフとザフィーラの二人は、かなりイラついている。そうとしか、見えない戦い方しか、していないのであった

「オラッ！！！」
［ブンッ！！］
「キャァッ！！？」

自身の偽物にイラつきながら、アルフが空いていた左腕の拳で、相手の腹部を殴打し

「！！？“ハニー”ッ！！！」
「よそ見をするな！！！」
［ボゴンッ！！！］
「ガハッ！！？」

その様子を、隣で戦っていた“暗雲の魔獣”が振り向き、その隙にザフィーラが同じように、腹部に殴打し吹き飛ばした

「グッ……や、やるな」
「ね、ねぇ、“ダーリン”。こいつ等、さっさと倒してしちゃおうよ。そんで、はやく他のマテリアルと合流しなきゃ」
「あぁ、その通りだな、“ハニー”」
「「……（ムカツク）」」

そう、この二人がイラついている原因は、その二人の言動にあった……なぜか、この二人は、お互いの事を“ハニー”と“ダーリン

”と、まるで……いや、まさにカップルであると辺りに言いふらしているかのような言葉を使っているのだ。そして、極めつけは……

「さぁ、行くぞ“雷電の魔獣”！！　俺達のラブアタックを見せつけてやろうぜ！！！」
「キャ～～～ッ！！！　“暗雲の魔獣”カッコイイッ！！　ホレちゃう～～ッ！！！！」

と、見事なバカップルを演じているのである

「……ザフィーラ、あたし、もう我慢、できないんだけど……」
「安心しろ。俺も、あんな事をしている自分を見るのは、もう……限界だ」

つまり、この二人の出した結論は……

「ブッコロス」
「殺す」

の、一択だった

「［［ダンッ！！！］］」
「ハアアアアアアアアアアッ！！！！」
「ウオォォォォォォォォォォォッ！！！！」

と、一気にケリを付けるべく、二人の守護獣は、魔獣の方へ突撃していった

「フッ、ただの突進か。ならば、俺様のハウリングで一発だ！！！」
「やっちゃえダーリンッ！！！」

魔獣達も、その突撃に対して反撃を仕掛ける

「スゥ……ウオオオ

当然、手が空いている雷電の魔獣が、それを防ぐ

「あ、あっぶな……」
「大丈夫か」
「あぁ。ったく、無駄に連携してるから、やりにくいったらありゃしない」

確かに、アルフの言う通り、この二人の連携の密度はかなり高いのであった。故に、アルフそのものをコピーしたマテリアルであっても、ザフィーラのマテリアルとの組み合わせによって、動きが読めなくなっているのである

「フッハッハッハッハッ！！！　俺達の愛の前に、もはや的などおらぬわ！！！」
「キャー！！　ステキィィ～ッ！！！　もっと惚れちゃうじゃなぁ～い？」
「「……」」
［プチプチチプチプチプチッ……！！！］

ちなみに、先ほどの効果音は、実はかなり前からアルフとザフィーラの周囲に響いており

［ブチッ！！！］

という音が今しがた鳴って、プチプチという音が、消えた……

「ザフィーラ。アタシがでかいの一発出すから、それまでの壁になって頂戴」
「それが、アイツらを一瞬で滅ぼす程度のものなら、いいだろう」

とだけ言って。二人は離れた。アルフは、比較的安全な後方に、ザフィーラは、相手を一手に引き受ける為、自分達のマテリアルの所に

「ウオオオオォォォ

「クッ、邪魔をするな！！　本物風情が！！！」
「キサマ達の面など、もう見たくもないわ！！」

そう言っている中、アルフは

「煌めきたる天神よ。いま導きのもと降りきたれ。バルエル・ザルエル・ブラウゼル……」

既に、詠唱のほとんどを終えているのであった

「不味いわよコレ……暗雲の魔獣！！　なんとかならないの！！？」
「なんとかしようにも、コイツが！！」
「ウオオオォォォ

「う、うん！！！」
［バババッ！！］

マテリアルの二人も、一気に射程圏内から、離れようとした。でも、ソレを許す筈もなく

「縛れ、“鋼の軛”ィィィッ！！！！」
［ガガガ

「キャアアア

その場に立ちあがったのであった。だが、その身は既に満身創痍。とても戦えるとは言えない様子だった

「ハ、ハハハハハハッ……さすが、オリジナル、か」
「さすが、やるわねぇ……あぁあ、もうちょっと暗雲といちゃつきたかったなぁ……」
［［ピシリ］］
「「！！？」」

と、マテリアルの二人の体が、まるで罅が入ったように割れていき、それが段々と広がっていった

「仕方がない。俺たちはここで終わりだ、ハニー。あとは、他のマテリアル達に任せよう」
「そうね、ダーリン……それじゃ、本物の私達、ばいば～い♪」
［［パリィィィィィン……］］

そして、陽気な言葉と共に……雷雲の双狼は、姿を消した……

「……潔いよいな」
「そ、そうね。以外だったわ……にしても、中々のアシストだったじゃない」
「逃げようとしていたのだからな。動けなくする事など、やらねばならぬ事」
「まぁね……さっきの二人じゃないけど、あたしら、結構イイコンビかもね」
「……さぁな」

そして、後に現れたはやてとリインフォース、シグナム、ヴィータ、

シャマルらと合流し、他の闇の欠片を探していったアルフとザフィーラだった。それ以降、二人の息の合ったコンビネーションに、はやて達は唖然としたとかしなかったとか……

ま、アレです。アルザフィのフラグが建ちましたとさ、めでたしめでたし……

□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■

そして、同時刻、海鳴市、海上

「“スティンガー・ブレイド”ッ！！！」

「“クライミング・ソード”ッ！！！」

［ガガガガガガガガガガガガッ！！！！］

そこでは、管理局に所属する執務官と司書候補生と、その二人の姿が似ている二人が、争いあっていた

「“チェーンバインド”ッ！！！」

「無駄っての！！　オラァッ！！！」

［ドゴドゴッ！！！］

時空管理局執務官、クロノ・ハラオウンと、ユーノ・スクライアの

二人と、その二人のマテリアル……“黒衣の断罪者”と、“歴史の諦観者”の二人であった

「おいおい、このイイ子ちゃん共！！！　ヌルい手ばっか使ってんじゃねぇぞゴラァッ！！！！」

「俺ら舐めてるとか、マジ笑えるｗ　ガッハッハッハッハッ！！！！」

「「……」」

歴史の諦観者が怒り、黒衣の断罪者が貶す……その様子を、本物である二人からしてみれば……

「「（な、なんだか腹が立つ……）」」

不快に思うのも仕方が無かったのだった……

「っていうかぁ～、さっさとくたばってくれよ。マジでｗ」

「あぁ～～もうめんどくせぇなおい！！！　さっさと魔力寄こせってんだアァンッ！！！？」

と、先ほどからこのようなやり取りが続いている状態であった

《……もう、見るに耐えられないんだけど……》

《安心しろ、ユーノ。僕も、自分の姿であんな事をされているのには、腹が立っているから》

ユーノとクロノの二人の不満は、今にも爆発しそうだった。それよりも、二人にはこの状況を他の人物に知られるのが、逆に怖かったりする

「（もし、なのはがこんな僕を見たら……あぁ、絶対に嫌われそうだ……）」
「（もし、エイミィがこんな僕を見たら、当分は笑い物にされる。この結界が、外部との連絡を断絶する機能を持っていてよかった……）」
そう、今の二人の心に有る思いは、唯一つ
「「（こんな自分は、見られたくない！！）」」
という言葉に尽きるのであった

《ユーノ、次で一気に片を付けよう。僕が砲撃を放つから、君はその間の防御、あるいは捕縛を頼む》
《うえ。まさか、あの二人を同時に相手しろっていうのか？》
《そのまさかだ。いい加減、あんな自分を見るのも嫌になったろう。だから、それぐらい出来るだろう》
《う～ん……まぁ、出来る限りやってみるよ。でも、なるべく早く》
《分かっている》

念話で作戦を建て、二人は攻撃の準備に取り掛かる

「なに念話使ってコソコソ話してんだよ。キモッｗ」
「んな事より、さっさとくたばれってんだッ！！！」
［［ダシュンッ！！！！］］

と、マテリアルの二人も、まるでしびれを切らしているかのように、考えなしとも言えるような突進を繰りだした。当然、そんな突進が普通に通るわけもなく

「“ストラグル・バインド”ッ！！！」
「［［バシィィィィィィィィィィィィィィィィィィッ！！！］］」
「「グガッ！！！？」」
ユーノにバインドによって、簡単に防がれてしまった
「うわ、バインドかよ。メンデぇなぁ～……」
「キッサマッ！！！　小細工なんかしてんじゃねぇッ！！！！」
罵詈雑言を吐き散らす二人に
「これぐらい、戦略とか作戦だと思うけど！！」
ユーノは、ただそんな返事しかしなかった
「クロノ！！　はやくしてくれ！！！　あまり長くは持たないから！！！！」
「なら少しでも踏ん張れ。なのはの使い魔なら、それくらいは出来るだろう」
「僕は使い魔じゃないッ！！！！！」
軽いジョークを飛ばし、そして、詠唱は完成した
「ユーノ、そのまま押さえてろ。“ブレイズ・カノン”ッ！！！」
［ゴオオオォォォ

「「ゲッ！！！？」」
［ズドオオオ

「「ウワアアア

「？　どうしたんだよ、オリジナル。闇の書と聞いても、何とも思わねぇのか？」
「……あぁ。僕はもう、闇の書に、なんの怨みも、想いもない」
そう、その気持ちは、あの人が受けてくれたから……

～～～闇の書事件が終結した日の、翌日～～～

それは、事件が終わり、事件に関わった人達で開いた、クリスマスパーティの時だった

「……」

僕は、その場から一人抜けて、行っていた翠屋の外に出て、一人になったんだ。そこへ、もう一人の来訪者が現れた

［タッタッタッタッタッ］
「ハラオウンか」
「……スティンさん」
「どうしたの、こんな場所に一人で……ま、私も言えた義理はないけど」
そう、あの人が……強大な力を有し、なお且つ、僕を……

「……貴方こそ、どうしてここに」
「あんな賑やかなの、苦手だから。抜け出してきたのよ」
「……僕もです」

頭を掻き、空を見上げながら彼女は答え、自分も同じだと、返した

「「……」」

しばし、二人は沈黙をし……先にソレを破ったのは、スティンさんだった

「……アンタ、今ならいいんじゃない」
「何がですか」
「怨んでいるのでしょう、私を……自分をあんな目に合わせた相手、自分の師とも言える大切な人達を傷付けた相手、そして……自身の復讐の対象を奪った相手を……」

……自身の、復讐の対象……

「聞いたわよ。アンタ、過去の闇の書事件で、父親を失ったって」
「えぇ」
「今でも、憎いんじゃないのかしら。闇の書が……」
「ッ……」
「……そうなのね」
「……えぇ」

この人には、隠し事はできなさそうだ

「……なら、ぶつけたらどう。その怒りを、その憎しみを……感情を」

「どこにですか……」
「私に、よ」
え……？
「アンタの怒りの矛先は、私が奪った。なら、アンタの怒りを受けるのも、私で充分じゃないかしら」
「な、何を……それに、貴方だけではない。なのはやフェイト達も、貴方の妹さんも、僕も、アレの破壊に加担した。なら、僕はそれで」
「そんな訳ないでしょ……でなきゃ、こんな場所に一人でいる筈がないわ」
「ッッ！！！？？」
な、ど、どういう……？
「自身の復讐の対象を奪った奴ら……そんな奴らから、離れたかったんじゃない？　自身の感情が、一緒にいる事を、拒んでいるから……」
……
「……どうなの、クロノ・ハラオウン」
……僕、は……確かに、彼女達を、怨んでいるのかもしれない。心のどこかで、憎んでいるのかもしれない……僕の、父さんを奪った奴を、奪った奴らだから……！！！
「ッ……」
「……いいのよ、殴ったって。アンタのその感情は正しい、

人間として……あるべき感情なのだから」

「ッッッ！！！！！！！！！！！」

ウウ……ウワアアア

静に分析している者の眼だった

「（さて。ユーノは動けないし、援軍が来る事は望み薄だな。ま、来てくれるとは思うけど、おそらく遅いだろうね……だったら、あの二人を僕が一人で相手するほかないだろうねね）」

でも、こんな二人を一気に相手するのは……あぁ、そういえば

～～～数日前～～～

いつものように、幻世での訓練を終え、一同が解散する際

「ハラオウン、ちょっと」

その幻世を管理（とはいっても、行き帰りの事だが）をしているグレイに、呼びとめられた時だった

「？　なんですか」

「アンタに、渡したいモノがあるの」

そういうと、渡されたのは一枚のカード。見るからに、デバイスのようであるが……

「……これは、なんですか？」

「ストレージデバイスよ。と言っても、アンタが持ってる“デュランダル”と同じ、唯一つの魔法を行使する為に作ったモノよ」
「……貴方のような、バケモノじみた力の人でも、デバイスの力を借りるのですね」

皮肉下に言っているように見えるが、これ彼女（かれ）の強さを評価しているともいえるであろう

「研究の為に作っただけよ。もう必要ないから、アンタに上げるわ。この前の、アレの謝礼を込めてね」
「そうですか……ありがとうございます。所で」
「なに」
「どんな魔法が登録されているのですか？」

～～～回想終了～～～

「（まだ使った事無かったな。丁度良い、ここで使わせてもらおうか……）」
「スッ……ジャギンッ！！！」

そこから起動したのは、一本の杖（デバイス）。だが、形状は杖と呼べるようなものではなく、むしろ……大砲と言った方が、良いだろう

「ん？」
「あぁ？」
「行くぞ、“ギャラルホルン”」

大砲の砲身が付いた杖……“ギャラルホルン”、ある一つの魔法の限界点を知る為に作った、グレイが作った――――

『了解。術式起動。ユーザー保護の為のバリア、展開』

［ウォンッ……］

と、起動した直後、直ぐに術式を発動し、クロノの周囲にバリアフィールドを展開した

「おい、勝手に『目標補足、かの二名に敵対の反応有り。空間座標、認識完了』言う事を聞け！！」

黙々と……使い手の意思に反して、その身に宿した魔法の発動を進める……

『術式展開、発動までのカウントダウン、５』

［ヴウゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥンッッ……！！！！！］

「な、なんだこりゃ？」

「つか、ヤバくねｗ」

マテリアル達は、突如現れたデバイスに対し警戒していたが……

……彼らは間違いを犯した。そう、彼らが本来するべきは、警戒ではなく……発動阻止だ

「はぁ、仕方ない。こうなったら、一気に決めろ」

と、クロノは諦め気味に、デバイスの勝手を許したのであった

『了解。カウント、４、３』

と、一気にカウントが早まり、そして……

『２、１……“ラグナレク・ビッグ・バン”、発動』

［カッッッッ！！！

［［ピシリ、パリィィィィィン……］］

当然、あの二人のマテリアルも、その例外に及ばず……呆気なく砕け散り、周囲に展開していた結界は、消え失せていった

「……」

そして、その爆発を起こした本人……クロノは、そのあまりにもけた違いな威力の魔法に、唖然としていた

『目標の撃破を確認。動力不足により、全機能を停止します』

［キィン］

と、元凶であるデバイスは、その力の行使によるエネルギー切れで、沈黙した

「……あの人も、とんでもない爆弾を渡したもんだな」

というか、こんなモノを簡単に手渡す事も、ある意味考え物だな……

「さて、ユーノを回収しないとな」

［ピピッ］

《く、くくく、クロノ君！！！》

「エイミィ？　どうしたんだい、血相を変えて」

《い、いいい、今、じ、次元震が……クロノ君が放った魔法で、小規模次元震が起きたんだけど》

「……」

……コレ、ロスト・ロギアに指定して、封印しないと

#42 Ｗａｒｎｉｎｇ ｖｓ魔狼双牙・ ｖｓ悪法劣史（後書き）

～～～神の舞台裏～～～

神「えぇ、皆さま、おひさし～～～ッ！！！！　いやほんと、マジで久しぶりだな」

ス「作者がようやく書く気になって、やっとこさの更新だよ」

ヤ「しかし、何かクオリティが落ちてるが……」

神「仕方ないって。今回のこの話、主人公兄妹が一切出ないから、やる気無くなってきた、とか言ってたし」

シェ「なら、なんで書くの？」

ス「作者曰く、あの四人の最後の活躍の場だから、だってさ」

神「それに、愛読者の人の中に、クロノファンがいるから、クロノの活躍場面でも作ろうとしたら、ここしかなったから、あえて……だとさ」

ス「その代わり、ユーノ君の活躍は皆無に等しいね」

ヤ「作者にとって興味無いキャラだから、扱いがぞんざいなのですわね」

神「そう言う事～ｗ　ではでは、いつもの補足コーナー、今回のお題は、コレだ。１、２、３」

シェ・ヤ・ス「（なぜ“べ〇ト・ハウ〇”？）」

――――――クロノの新デバイス、“ギャラルホルン”について――――

神「デバイス紹介なら、いつもの形式でいいか。そんじゃ、ＶＴＲ、スタート！！！」

ヤ「画面なんてありませんわよ！！？」

シェ「あるじゃん、パソコンとか携帯のとかさ」

ス「でもでも！！　ＶＴＲとは言わないと思うよ！！」

神「（なぜここまでボケとツッコミが連鎖した？）」

“ギャラルホルン”
グレイがある魔法、広範囲爆破魔法“ビッグ・バン”（テイルズシリーズのアレです）の最大威力を試す為に作った試験用のストレージデバイス。このデバイス事態に魔力が凝縮されており、使用者の魔力は一切消費せず、なおかつ使い手自身を巻き込まないようにするための防護膜も自動的に張ってくれ、更に、それらの行使に必要な魔力は自動充填してくれるという優れ物。だが、欠点としては、一度起動したらタイミング関係無くデバイス自身が勝手に発動してしまい、使用後の充填時間は十日間かかるという、完全な決戦兵器である。だが、このデバイスから放たれる魔法の威力は本編で書いた通り、非殺傷設定でも相手を殺しかねない程の威力なので、文句

は言えない。この魔法の名称は、最大出力ビッグ・バンから、ある神様によって“ラグナレク・ビッグ・バン”と改名された
これによって得たれたデータは、グレイオリジナルの“収束砲撃魔法”の開発に一役買っている

シェ「まさかの、チートデバイス登場ね」

ヤ「でも、使い勝手悪そうよ。連続使用できませんし」

ス「完全に抑止力になりうる兵器だね」

神「デバイスはいいが、使い手がかなり、な……」

ヤ「どうして、あの堅物執務官にしたの？」

ス「まぁ……クロノの活躍を書こうとしたらこうなった。としかねぇ」

神「なんでもかんでもチートにするんだな、この作者」

ヤ「原作よりも、激しさが倍増しておりますわね。原作キャラ含め」

シェ「まさか……このクソ作者、あの五人娘＋ヴォルケンズの面々も、魔改造しちゃうの？　Ｓｔｓのメンバーも含め」

神「えっと……ネタばれになるから、黙秘します。だって」

シェ・ヤ・ス「（やる気ね）」

神「それでは！！　今回はこれで失礼するぜ！！　皆！！　ちゃんと挨拶しろよ！！！」

シェ・ヤ・ス「は～い！！」

神「それでは！！」

神・シェ・ヤ・ス「ばいば～い！！」

神「あと、今回は久方ぶりだから、俺らでやったが、次回はマテリアルズも含めてお送りするぜ」

星光「その時は、私がメインパーソナリィとして、頑張らせていただきます」

作者「ホント、更新がかなり遅れて御免なさい。今後は、こういった事態が無いよう、尽力していきたいと思いますので、応援、よろしくお願いします！！」

#43　Ｗａｒｎｉｎｇ　　ｖｓ錬装闇片（前書き）

更新がまたも遅れてしまってすみませんでした。一週間以内と言っておりましたが、十日以上も遅れてしまい、すみませんでした

どうも筆が進まず、グダグダとなってしまってこのザマです。どうか、ご了承ください

寝落ちの亜留ジャ野様、ムーギネーター様、あんぎゃーす様、蒼穹様、緋水様。ご感想、ありがとうございます！！

#43 Warning vs錬装闇片

――――――そして、とある兄妹（しまい）は、闇が残した残滓と戦う、戦い続ける……――――――

「ヒッギャアアア

）」

え？　メタな発言は作品の質を落とす？　分かったわよ……んで、今なにしてんのだって？　そりゃ……

「キサマのせいで俺は……俺はアアア

のおおおおおッ！！！！！！！

「あぁぁぁんもう！！！！！　不幸だ～～～～～～～～～～ッッッ！！！！！！！！！！」

「じゃかしいわッッッ！！！！！！！！」

［ウォウォウォウォウォウォンッ……！！！］

って！！！？　なんか周囲にフォトンスフィア出しておりませんかぁぁぁぁぁッ！！！？　もしかしてもしかすると……

「吹き飛べエエエエエエエエエエエエエエエエエエッッ！！！！！！！！」

［［［バシュバシュバシュバシュバシュバシュッッッ！！！！！］］］

ですよねぇ～～～～～ッ！！！　やっぱり放ってきますよねぇ～～～ッ！！！！！

「ベアト！！！！」

『うむ。“ゼパルフィールド”』

［ヴォォォォンッ……］

ビビが展開したのは、その身を覆うほどのフィールド状の魔力防護陣。左右上下前後、周囲全ての攻撃から身を守る事を想定された魔力防壁だった

［ズドドドドドドドドドドドドドドオオオオオォォォォ

「……ッ、防ぎきったか」
「ッ……にゃ、にゃはは……あ、危なかった～……（＊―＊；」

いや～、怖かった。まさかお兄ちゃん、こんなの開発してたなんて……ま、私もしたけどね♪　この“ゼパルフィールド”。あの“ソロモン72柱”、“ゼパル”の魔力を運用して作った、“不死身の絶大な防御力”を誇る無敵の防壁陣！！　でも、この式を作るには、あのゼパルに“愛の理論”を提唱しろとか言われて……軽く困ったし（＾―＾；）　ま、そんなの簡単な事だから、すんなり協力してくれたけどね♪　え？　何を言ったんだって？
それは

「カテゴリ、独創武装……ゲイ・トライデント」
［ジャギンッ！！］

って、ちょっとォォォ

！！」

［ポウ……ッ］

ウシッ、ドント来い！！！

「一刺し穿つ破滅の三ツ薔薇（ゲイ・トライデント）ッ！！！！」

［ブンッッッ！！！！！！！！！！］

「ッッ！！！！！！」

――――――［ズシュンッ！！！！］――――――

「グッ！！！？」

放たれた槍は、ビビの心臓……から外れ、右肩に突き刺さった

「ッ！！　外した？」

「っ……ソレ、私が教えたんだよ。だったら、その対処法ぐらい、知ってるに決まってるよ」

「ッ……！！！！」

フフッ……このお兄ちゃんは、おそらく分かっていない。お兄ちゃんが知っているモノは全て、私も知ってるって事。いや、お兄ちゃんよりも、私の方が深く理解してる。お兄ちゃんの能力の応用性は確かに凄いけど、結局は根本の部分を深く理解してる私の方が、お兄ちゃんよりも上回ってて当然なんだから

「ッ！！」
［ズッ］
「ッ……さてと」

ゲイ・ボウの能力、それを解除するには……

「能力発動、“一方通行（アクセラレータ）”」
［グニャリッ、バキンッ！！！！］
「ッ！！」

フフフッ、動揺してる♪　やっぱりこういう時はコレだよねぇ……運動エネルギーのベクトルを変化させて、持ってる物を歪ませ、破裂させちゃえば……いやいや、さすがアクセラロリータさんの力だよ。能力使うだけで、メッチャ頭疲れる（＾―＾；）
ま、使えるだけマシか

「クソ妹が……」
「……言っておくけど……偽物のお兄ちゃんに、私を倒せる可能性はゼロに等しいよ」
「あぁん？」

やっぱり……ホント、このお兄ちゃんは、偽物だ

「まず一つ。このまま戦っていれば、いづれ魔力切れによって消滅する。二つ目、アンタはお兄ちゃんにある冷静さが欠けてる。三つ目、アンタの知識は、私も知ってる物ばかり。だから対策がしやすい。そして、四つ目……」
［フルフルフルッ……］

と、言いきると、急にビビの体が震えだし……

「？」

「……私を、本気で怒らせたからッ！！！！」

よくも……よくも私を足止めしてくれたわねぇッッッ！！！！！！！！！　マテリアルちゃん達に、結局誰一人会う事無く！！！！　見慣れたお兄ちゃんの、しかも闇の欠片！！！！　それと延々と付き合わされて、イライラが溜まってるのよ！！！！　どうしてくれんのよ！！　エェッ！！！？（。Д。＃）

「あぁ……一刻も早くマテリアルズに会いたい！！！！　だから、アンタを……」

即効で潰すッ！！！！

「さぁさぁおいでなさいッ！！！　“煉獄の七姉妹”達ッ！！！！」

「「「「「「「「ウォンッ」」」」」」」」

「「「「「「「煉獄の七姉妹、ここにッ！！！」」」」」」」

呼び出したのは、己が最も信頼する召喚獣……最高位の魔女が使いし最高の家具、罪人を磔にする煉獄の七杭、それらを本体とする、七人の少女達

「それなら、俺も良く知っている。たかが文鎮のようなモノになるぐらいの連中で何をする」

「「「「「「「「なっ！！？」」」」」」」」

「こ、コイツ！！！」
「お嬢様の姉上様の偽物のくせに、生意気な！！！」
「あの人のほうが、誇り高いわ！！！」

何気に、七姉妹達も、グレイに関しては好評価みたいだ

「……フ、フフフッ……偽お兄ちゃん。今から私がする事を見てからでも、そんな余裕ブッこいていられるかな？」
「あぁ？」
「フフッ……」
［パチンッ］
［バシィィィィッ！！！］
「！！！！？？」

よ～し♪　“ベルゼブブバインド”、成功♪　さすが、ステルス性を組み込んだだけはあるね。いくら偽物でも、あのお兄ちゃん相手にこうも引っかかってくれたし（＾－＾）

「テメッ」
「お兄ちゃんは、こう言った新しい能力を見せる時の、絶対的なお約束（ルデンルール）を知らないからね。バインドで拘束させてもらったよ♪」
「ゴ、ゴールデンルール？」

そ（＊＾－＾＊）　こういう時は、“相手は空気を読んで、その場で待機する！！”という、戦隊シリーズにあるモノがね！！！　お兄ちゃんなら、警戒して様子見するよりも、発動を阻止するために、あの手この手と使うからね（－－；）　ま、コレで万事解決。後は……

「ベアトリーチェ。モード０２、“セカンドエディション”。起動

開始！！！」

『心得た。“神魔憑依Ｓｅｃｏｎｄ　ｅｄｉｔｉｏｎ”……“神（アバター）魔連鎖（アバター・イン・アバター）”、起動』

［キィィィィンッ！！！］

さぁさぁ、御開帳。私の能力、“神魔招来（アバター）”のバリエーション！！！

「対象選択。“セイバー”イン“ベルフェゴール”、“アーチャー”イン“レヴィアタン”、“ランサー”イン“ベルゼブブ”、“ライダー”イン“マモン”、“アサシン”イン“ルシファー”、“キャスター”イン“アスモデウス”、“バーサーカー”イン“サタン”……さぁ、煉獄の七姉妹よ。大いなる英霊達の御魂を以て、主に仇名すモノを蹴散らしなさい」

「「「

［ジャギッ！！］

それに対抗し、闇の欠片グレイは、全力でバインドを砕き、その身の丈並みの太刀を現出し、ソレを構えた

「龍刀【斬鬼】ッ！！　敵を「遅い！！」ッ！！？」
［ガキイイィィィィィィィィィィィィンッ！！！！］

一気に接近したルシファーは、すぐさま相手の攻撃を防ぎ、膠着状態を作り出した

「ッ、テメェ……！」
「お嬢様、今です！！」

「フフッ……レヴィアタン」
「はーい、準備完了でーす♪」

と、そこへ七姉妹の二女、“嫉妬”を司り、その身に“錬鉄の弓兵”を宿した少女が前に出て

「Ｉ　ａｍ　ｔｈｅ　ｂｏｎｅ　ｏｆ　ｍｙ　ｓｗｏｒｄ．［我が骨子は捻れ狂う］」
［ギュインッ！！！］

手元から螺旋状に刀身がねじれている剣を生みだし、ソレを矢のように細く捩らせ……

「お姉様、ちゃんと避けて下さいね」
「言われるまでもない！！」
［ガキッ、ガキイイィィィィィィィィィィィィ

ィンッッ！！！！！！」
「グッ！！？」

その時に、ルシファーは強く刀を握り、そのままグレイを押し切り

「“偽（カラドボルグ）・螺旋剣？”ッ！！！！！」
［バシュゥッッッッ！！！！！！

「“射殺す百頭（ナインライブズ）”ッッッ！！！

「でもねぇ、そういうお兄ちゃんの考えくらい、読めちゃうんだよなぁ（＾―ー）ー☆」

彼(あに)の性格を一番よく知るビビ(いもうと)故に、さらには直情的に行動するが故に、ビビは、次々と一手ずつ、罠を張っているのだった

「マモン、言った通りにね」
「了解です、お嬢様」
［チャキッ］

ここまでは、予定通り……いや、計画通り♪

「それッ！！！」
［ジャラッッ！！！！！！］［ガキッ！！！］
「ッ！！！？」

マモンが手に持つ鎖、“ベルレフォーン”が闇の欠片グレイの足に絡みつき、身動きを封じ

「ベルゼブブ、下地に可愛くコーティングしてあげて」
「了解です、お嬢様♪」
［チャキッ］

と、ベルゼブブの手に、紅き呪槍が出現し

［グッ……］
「死んじゃえ、“刺し穿(グイ・ボルグ)つ死棘の槍”ッ！！！！」
［ブンッ！！！］

その真名を解放し、闇の欠片グレイ目がけて投げつけた。当然、その槍の特性上、その槍は

［ズシュンッ！！！！］

「グウゥゥゥゥゥッ！！！？」

闇の欠片グレイの胸に、深く突き刺さり、心臓を貫いた……が

「グッ……て、テメェ……」

闇の欠片グレイは、即死する事無く、その場に留まっていた。そう、彼らは人ではない。疑似生命体のようなモノ。故に、心臓を刺されても、ごく平然としてられるのだ。だが、ダメージは相当あるはずだった……身動きを、完全に取れなくし、かつ、バインドなどの拘束をしても、抜け出せるように……

「フッフッフッ、無様だねぇ、お兄ちゃん♪」

「ッ！！」

ビビは、闇の欠片グレイを見下すように、彼よりも上空にいた。その表情は、嘲笑と優越感に浸り、瞳には、決定的な殺意が込められていた

「このッ……クソ、妹が！！」

「あらあら？　そんな強気な態度を取ってもいいのかなぁ？」

「ッ……！！！？」

闇の欠片グレイの周囲には、煉獄の七姉妹の内の六人……ルシファー、レヴィアタン、サタン、ベルフェゴール、マモン、ベル

ゼブブが、獲物を逃がさないように取り囲んでいた

「クソがッ……！！！」

「さて……止めをお願いね、アスモデウス」

「はいは～い。お任せあれ、お嬢様♪」

［ギュウゥオオオ

この能力でアサシンを組み込まれたルシファーの力はレベル１５では無く、レベル５６となるのである
しかし、この掛け算式、実はビビにも可能なことのはずなのであるが、元々ビビの体は人間の体で、神魔の力をそのまま取り込めば、いくら“最強体質”という体を以てしても、人の身ゆえに自壊してしまうのである。“神魔憑依（アバター・オブ・リンク）”を使用する時は、取り込む側の力をある程度落としてから組み込んでいるのである。そう、ビビにはこの神魔の力が扱いきれないのである。だが、ビビではなく、ただの純粋な魔力で構成された生命体なら……反動を受ける事無く、扱えるのである
最もこの能力の組み合わせは何でもいいわけではなく、ある程度の適合率が無ければ、不可能だとか

「なんつう、出鱈目な」
「出鱈目じゃないと、チートじゃないからねぇｗ」

満面の笑顔で答えたビビが、次は氷のような、冷たい嘲笑の笑みを作り……

「さぁ……偽物は偽物らしく、本物によって滅ぼされなさい！！」

ビビの努号がトリガーとなっていたかのように……アスモデウスは、溜めこんでいたその力を、開放した

「いっくよ―！！“ヘカティック・グライアァァァァーーー”ッッ！！！！！！！」
［ゴオオオオオオオォォォ

オオオオ

煉獄の七姉妹達を元に戻すと、不意に通信が入ってきたのである。
相手は……兄(あね)のグレイ・スティンである

「はいは～い、何、お兄ちゃん。」
《……なんだ、倒したのか？》
「あ、うん。ついさっき」
《そうか……こっちは幻世にいた闇の欠片共を潰してたが……
……そっちはどうだ》
「えっと……とにかく、皆が頑張って、闇の欠片を始め、アルフにザフィーラ、それに、ＫＹと淫獣のマテリアルを殺した所」

……酷い言われよう。哀れ、クロノ、ユーノ……

《そうか……なら、一度合流するぞ。なんか、ヤバい気がするからな》
「ヤバい、気？」
《あぁ……場所はマンションの屋上だ。いいな》
［プツンッ］
「お、お兄ちゃん？」

お兄ちゃんが、珍しく焦ってる……まぁ、そのヤバい気には、私も同感。だって……

――――ここまではっきりと、原作とまったく違う展開が、起きてるんだから――――

#43　Warning　vs錬装闇片（後書き）

～～～マテリアルの舞台裏（！？）～～～

星光「皆様方、お久しぶりです」

雷刃「今回はなんと！！　ボク達マテリアルズが、このアトガキを務めさせてもらうぜ！！！」

闇王「フッ。喜ぶがよい、我らを好むと言う下劣な塵芥共」

煉獄「ど、読者に向かって、そ、そう言う言葉は」

月夜「いいじゃない、別に。一部のファンには溜まらないサービスなんだから、ね」

常夜「そういう読者がいるかは知らないけどね……」

業火「……浅はかなり」

金剛「そのねた、どっかできいたことあるよ～な……まいっか♪」

烈風「いいのかよ、そんで……ま、アタイは興味ねぇな」

神「コラコラコラコラァァァァァァァァァァッッ！！！！！！！！！　なに勝手に進行してんのさ！！　タイトルもばっちり変えやがって！！！」

ヤ「前回、レヴェッカがやろうと企んでた事を、平然としたわよ、

この子達」

シェ「かなり大物ね。レヴェッカがいたら、おそらく皆蹴り飛ばされているかもね」

神「確かに、お前らに任すとは言ったが、全権をお前らに託した覚えは無い！！」

ス「それでは、仕切り直し～～～～！！！」

～～～神の舞台裏～～～

神「というわけでカミウラぁ、始めるぞ～～～ッッ！！！！！！！！」

シェ・ヤ・ス「おぉ！！！」

マテリアルズ「……（なに？　このハイテンション）」

神「さて、今回は読者から疑問があったので、まずはそれに答えよう」

――――――グレイとビビに隠された“第六の能力”について――――

ヤ「そういえば、ちゃんと明言しておりませんでしたね。すっかり忘れておりましたわ」

ス「何の事？　という方は、一番初めの座談会の方へどうぞ」

シェ「で、答えは？」

神「うん、答えは、“レ―ヴァテイル質”。アレの事です」

ス「へぇ、結構速い段階から決めていたんだね」

神「いや、実はこの能力、初期設定からずっとあるんだよな。うん」

ヤ「マジですの？」

神「マジらしい。では、次に、マテリアルズ！！　出番だ！！！」

星光「はい。では、ここからはこの作品における、我々マテリアルについて、この作者の独自設定を伝えたいと思います。まずは、こちらから」

――――――この作品における、マテリアルの意義――――――

星光「です」

月夜「コレに関しては、私が説明するわね」

星光「はい。お願いします」

月夜「フフッ……まず、私達マテリアルは、闇の書を復活させる為に、魔力を集めている。ここまでは、原作通りね」

神「そうだな」

月夜「ここからが、違う。私達マテリアルは、闇の書のコアとなるべく、魔力を吸収しながら、闇の欠片共を回収し、そして、マテリアル達全員の合流を果たさないとダメなの」

ス「う～ん？　つまり、魔力と闇の欠片を集めて、マテリアル同士で集まる、そうしたら、闇の書は復活する。ってこと？」

烈風「そうだよ。んなもんもわかんねぇのかバーカ」

ス「む（ー＿ー＃）」

煉獄「ヒィッ！？」［ビクッ］

神「はいはい、喧嘩はしない。煉獄ちゃんが怖がってるよ～」

星光「では、次の質問に入りましょう」

――――――なぜ、マテリアルがこんなにいっぱいいるのか――――――

闇王「これについては、我が話してやろう。ありがたく思え」

神「はは～、なんつってw」

ス「ダーリン、ふざけないでよ（泣）」

闇王「この理由に関しては、えらく簡単じゃ。コレは、事件が遅れた理由とまったく同じ……あのグレイとやらの資質が、あまりに

も膨大、且つ、絶大な力を有していた為に、マテリアルを構成する分の魔力が、余分に残ったのだ。故に、三体ではなく、１５体のマテリアルが生成された。というわけだ」

金剛「それとな！！　こんかいのこのじけんにでてくる闇の欠片も、とんでもないほどおおいんだ！！！」

ス「へ、へぇ～……」

シェ「……それって、つまり……」

ヤ「この事件をここまで甚大にしたのは、グレイが自らを蒐集させたから、ってこと？」

神「そーなるねｗ　自分で自分の首絞めてやがるし、アイツ」

星光「では、今回はこれぐらいにしておきます」

常夜「コレ以上言っちゃったら、ネタばれになってしまいますわ」

ヤ「グゥ……キャラ被りめ」

神「耐えろ、ヤーヤ……どうせ、この闇の欠片事件の間だけなんだから」

ヤ「……」

神「そんじゃぁ！！　みんな元気よく別れのあいさつと行くぞ～～～ッ！！！！」

シェ「それでは皆様、次回をお楽しみにー！！！」

神・シェ・ヤ・ス「ばいば～い！！」

星光「さようなら」

雷刃「またな！！」

闇王「さらばだ」

煉獄「ば、ばいばい……」

月夜「さよならね」

業火「……」

金剛「まったね～♪」

烈風「あばよ！！！」

常夜「ごきげんよう」

神「だから合わせろって言っただろうがーーーーーーッッ！！！！！」

作「ちなみに、今回でた“神魔連鎖（アバター・イン・アバター）”に関しては、機会を見て、発表したいと思います。では、失礼します」

＃４４　転生兄妹（しまい）、己のマテリアルと出会う（前書き）

なかなか筆が進まず、こんなに短くなってしまいました。自分としては、負けな気がしますｏｒｚ

筆が進まないっていうのは、スランプ何でしょうかね？　なんか、またクオリティ落ちてる気がしてたまりません。どうしましょう……

ムーギネーター様、緋水様、あんぎゃーす様、蒼穹様、未土井無視様。ご感想、ありがとうございます！！！

＃４４　転生兄妹（しまい）、己のマテリアルと出会う

――――――そして、とある兄妹（しまい）は、闇が残した残滓と戦う、戦い続ける……――――――

遠見市、スティン姉妹が住むマンション、屋上

［……スタッ］

「っと、到着トーチャクぅ♪」

この場に最初に来たのは、妹の方のビビであった。彼女は、自分の兄（あね）と連絡を取り合い、ここに一旦集まる事にしたのだった

「はぁ、まだお兄ちゃんは来てないみたいだね～……」

とぼやきながら、しばらくしていると

［ガチャッ］

「およ？」

マンションの屋上のドアが開き、そこへ兄（あね）のグレイが出てきたのであった

「……もう来てたのか」

「お兄ちゃんが遅いんだよ。部屋から転送魔法を使ってくれれば、楽なのに」
「あまり、そういったものは使いたくねぇんだよ」
「ふ～ん……」
変なの。ま、いいや
「所で、なんで一旦集まる事にしたの？　まだ、闇の欠片を始め、もしかしたら、マテリアルだって、いる筈だし……」
いるとすれば……グレイとビビ、その二人のマテリアルだが……
……
「そのマテリアルについて、だ……今から、この捕らえたマテリアルを使って、ここにおびき出す」
……へ（＊＿＊？
「ちょ、ちょっと待って！！　お、おびき出すって、一体どうやって！！？」
「簡単だ。このスウトクに、マテリアルの解析をしてもらった結果、マテリアル同士は、互いに呼び合う傾向があるそうだ。だから、このスウトクに捕らえたマテリアルの反応を、一時的に外部に放出し、ここにおびき出すって訳だ」
な、なるほど……
「……っていうか！！　何そのデバイス！！？　タマモやシユテンだけでなく、そんなストレージデバイスも作ったの！！？」
「あぁ……暇だった、からな」

「あぁ……羨ましいなぁ、羨ましいなぁ……＞、へ、＜」

ガキか、コイツ……いや、ガキだったな。っと、そういや……

「ほらよ」

［ポイッ］

「っと。ほえ？」

グレイがビビに投げたのは、白い七枚のプレートが腕輪状に繋がって作られたブレスレット。プレート一枚一枚に、宝石のようなモノが填められている、キレイなモノだった

「……これ、デバイス？」

「あぁ。防衛機能に特化した、アームドデバイスだ」

『……始めまして、マスタービビ』

「あ。こ、こちらこそ、始めまして……ってアレ（？―？）」

なんで、この子……私の事、知ってるの？

「何故かはわからんが、そいつを作った時から、使おうとすると、いつもエラーが起きてな。調べると、マスターではない為、使用許可できませんって出て……お前以外に、使える奴がいないんだよ」

な……なんで、私なの？

「知るか。とりあえず、中身は色々入っているが、名称は決めてない。そいつがお前に使われたがっているんだから、好きにしろ」

……な、納得いかねぇ……でも、コレで私も、晴れてダブルデバイス！！　だし、こまけぇこたぁ気にしないで行こう！！！

「さて、名前、だったね」

『はい。貴方がお与えになる名ならば、どのようなモノでもかまいません』

な、なんか、初対面って感じしないな……えっと……名前、イイ感じの、名前……

「む～～～（￣―￣メ）……あ、そうだ！！！“ワルギリア”！！　“ワルギリア”なんてどう！！？」

『ワルギリア……素敵な名前を、ありがとうございます、マスター』

「えっへへ（＊＾―＾＊）」

「……」

何故だ……なぜ、アイツだけが使える？……あのデバイスは、あの“防衛プログラム”を、俺の体から切り離し、デバイス内にようやく落とせた唯一の物だ。だが、なぜアイツにしか使えない？まぁ、暫くは暴走をしないようにするために、注意しておかねば……

「さて。スウトク、始めろ」

『合点承知』

［パラパラパラッ］

と、グレイの隣に浮遊する厚手の魔導書型のデバイス……“スウトクテンノウ”が開かれ、何枚もの頁が捲られていき……

［パラパラッ……］
『マテリアル波、一時開放』
［ズンッ！！！］
『閉鎖。待機状態へ戻る』
［バタンッ！！！！……］

スウトクの頁が閉じられ、少しの間、その場静寂が訪れた……直後

［コオオオオォォォ

「もしかして～、そこにいるブ女達が、何かしたからかしら～？」
「さっすがお姉様♪　冴えてる～♪」
「「……」」

……カチーン

「ねぇ、お兄ちゃん」
「……なんだ、クソ妹」
「アレ、どう考えても、私達、だよね」
「……あぁ……」
「そんで……なんであんなイチャイチャしてんの？」
「……」

……その場に現れたのは、見紛う事無く、スティン兄妹（しまい）の……グレイとビビのマテリアルであった。だが、この二人の兄妹（しまい）とは、かけ離れた関係のようだ……

グレイのマテリアルは、オネェ口調で話す、女らしい振る舞いをしている……
そして、ビビのマテリアルは、グレイのマテリアルに縋りつき、まるで恋人のようにじゃれている……お姉ちゃんッ子と言えばいいだろう

一見、仲のよさそうな姉妹に見えるが、いかんせん、見ている人が人だった

「「……」」

ビビは、そのあまりにも違う、オリジナルとのギャップの差に唖然としていて……グレイはというと

［ビキビキビキビキビキッッ……！！！！！！］

額や頬、果ては首に至るまで、顔全体に、青筋が浮かびまくっていた……

そして

［ブチンッッッ！！！！！！！！！！！！！］

「へ（＊＿＊？」

嫌な音が、その結界内に響き渡った……

「……おい、妹」

「は、はひ。な、なんでございま、しょうか？（＾＿＾；）」

「アイツらは、殺していいか……」

「あぁ……えっと……（＾＿＾；）」

「殺していいかッ……！」

［ゴゴゴ

もはや、怒り心頭。いくら偽物と雖も、自分の姿で、自分が最も嫌う事をやっていれば……そりゃぁ、ブチ切れますわｗｗｗ

「“ブレイズ・オブ・エグザイル”ッ」

［［ジャギンッ！！！！］］

己の愛剣……鎖が付いた双剣を現出させ、ソレを構え……

「ブッコロス」

［ダンッッ！！！！！！］

地面を蹴りあげ、自身の偽物目がけて、突貫して行った

「ッッッ……！！！！！」

もはや、表情は何時もの冷静なモノではなく、火山が噴火したかのような、憤怒の形相へと、変貌していた

「あら？」

「フンッ！！」

［ズガンッッッ！！！！！！！！！！］

「キャァッ！！？」

マテリアルグレイの方に目がけて突撃をかまし、相手を掴み、そこから一気にその場から引き離そうとした

「お姉様！！？」

［バッ！！！］

「ッ！！！！？」

「おっと、そこまでだよ」

マテリアルビビも、その後を追おうとしたら、ビビに阻まれ、その場に留まった

「悪いけど、今のお兄ちゃんをコレ以上怒らせるわけにはいかないかもだし、君達を合流させるわけにはいかないのよ」

「ッ……フフッ」

マテリアルビビは、苦虫をつぶしたかのような表情から変わり、口元に笑みを作り、ビビに一瞥した

「仕方ないね。二対二だし、どっちかを潰した後に、もう片方をフルボッコうればいいんだからw」

「言っておくけど、そうはさせないわよ。お兄ちゃんが負けるなんてことはあり得ないとは思うけど、私は負けるわけにはいかないのよねぇ……」

そう言いながら、先ほどグレイから渡されたデバイス……ワルギリアを腕に通し

「まだ、あの子達からの愛を、貰ってないからねっ！！！！」

戦闘態勢へと、その身を転じた

「ワルギリア、貴方の力、見せて頂戴ね！！」

『貴方の為なら、如何なる事にも、お守り致します……』

……ほんと、なんて可愛らしい性格してるんだろう、この子……まぁいいや。とにかく、コイツを……

「ベアト、貴方もいいわよね！！！」
『無論だ。行こう、主』
そして……
「行くわよ。マテリアルの私ッ！！！」
「フフッ。“無限の召喚士”、いざ尋常にッ！！！」
「「バッ！！！」」
「「勝負ッ！！！！」」
ビビｖｓ無限の召喚士、Ｂａｔｔｌｅ　ｓｔａｒｔ！！！！
□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■
その頃、分断に成功し、海上付近まで移動してきたグレイとグレイのマテリアルはというと……
「ッ……」
「フフッ……」
互いに、睨みあいに入っていた。グレイは、怒りと冷静さが込み混

ざったような、険しい表情を……マテリアルグレイは、嘲笑と余裕を織り交ぜ、不敵な笑みを浮かべて……どちらも、対極的な表情で、互いを睨んでいた

「なんて事をしてくれたのね。私の可愛いシスターに何かあったら、どう責任取ってくれるの？」

「黙れ、このクソが……俺の顔と声で、そんなふざけた事を言うなッ」

マテリアルグレイが声を出すたびに、グレイのイラつきは増すばかりで、どうしようも無くなっていた

「あら？　何を言っているのかしら？　コレは貴方の可能性の一つなのよ」

「あぁん？」

「クスッ……このあり得ない状況を受け入れ、楽しもうとしていれば、もしかしたらこんな性格になっていたのかもしれない。男としてではなく、女性として生きていれば」

「黙れ。俺は男だ。体はこんなりになったが、心まで女になったつもりはねぇ」

「でも、それは貴方が転生される前の話でしょう？　今の貴方は、正真正銘、じょS」

［バシュッ！！！！］

「ッ！！」

［バチンッ！！！］

女性と言おうとした直後、グレイが射撃魔法を放ち、その言葉を言わせないようにした。それは、グレイが最も忌み嫌う言葉だからだ……

「……あら、せっかちね」
「黙れ、このイカレ偽物が……」
「クスッ、馬鹿ねぇ、貴方……こんな言葉を知ってるかしら？」
「あぁ？」
「“精神は、肉体に影響を及ぼす”……いくら貴方が男だと言っても、いづれはその体から、心が蝕まれ、最終的に貴方ｈ」
「黙れッ！！！　それ以上御託を並べるつもりなら、その体を引き千切ってブッ殺すぞッ！！！！」

グレイらしからぬ、荒げた声で、その偽物に喰らい突いた

「あら、こわ～いｗ　引き千切って殺すなんて、まるで“鬼”みたい♪」
「ッ！！！！」

鬼……それもまた、今のグレイにとって、言ってはならない言葉……これ程、グレイの逆鱗に触れたのなら、命運は一つ……

「……いいだろう。テメェは殺す。その減らず口を閉ざすには、それぐらいしねぇとな」
「いいわよう。お遊び程度でしてあげるわ」
［［スッ］］

そして、互いに戦闘態勢に入り、睨みあい……

「“無限の錬装士”、可憐に参ります」
「……殺スッ！！」

グレイｖｓ無限の錬装士、Ｂａｔｔｌｅ　ｓｔａｒｔ！！！！

＃４４　転生兄妹（しまい）、己のマテリアルと出会う（後書き）

～～～神の舞台裏～～～

神「さてさてさて！！！　今回もおっぱじめるぞこのコーナー！！
お前ら！！　ハイテンションで行くぞぉ～～～ッ！！！！」

シェ・ヤ・ス・雷刃・煉獄・金剛「おぉぉぉ～～～ッッ！！！！！！」

月夜「あらあら、今回も無駄に張りきっちゃって、クスクスッ」

常夜「あの神様ならともかく、雷刃と煉獄、それに金剛まで混ざっちゃって……はしたないですわね」

ヤ「だから、キャラが被っていますわよ」

神「はいはい、そんなのどうでもいいから……星光ちゃん、今回もよろしくぅ！！！」

烈風「結局まる投げかよテメェはよ！！！」

星光「はい。では、任されましたので、交代させて頂きます。今回は、こちらについて、お話いたします」

――――――グレイとビビのマテリアル、“無限の錬装士”と“無限の召喚士”のついて――――――

闇王「ふん。あのイレギュラー共、か」

シェ「イレギュラー？」

闇王「あぁ。あの二人……いや、無限の錬装士の方だ。奴は、何故か我と同格の位置に置かれたマテリアルだ」

ス「？　どういう事なの？」

星光「コレは作者の独自設定ですが……あぁ、前回は述べていませんでしたね。闇統べる王は、私達マテリアルの統括者なのです。ですが、あの無限の錬装士は、なぜかその統括下に入らないのです。逆に、闇統べる王以外のマテリアル達を統括に入れる事が可能なのです」

雷刃「つまり、奴は闇統べる王と一緒というわけだ！！　どうだ、分かりやすいだろう！！！」

煉獄「そ、それ……さっき、私が言った言葉……」

神「（あたかも自分が言ったようにしやがったぞ、アイツ……）」

金剛「（あいつ、ばかだからねぇ～♪）」

常夜「そう言えば、私達マテリアルって、特別な奴がいますわね。これも、この作者の独自設定だけど」

星光「えぇ……その辺りも、後に言っておかねばなりませんね。ですが、今回はこの二人についてを説明します」

神「お願いねぇ～」

闇王「完璧にまる投げだな、この下衆神が」

星光「では、続きを……次に、あのお二方の性格ですが……」

烈風「本編みりゃぁ分かるが、無限の錬装士は本人とは全く違う性格してやがるんだよな」

ス「うん……ビックリだよ。如何にも女性らしい人だね」

神「妹のほうは変わり無かったけどなw」

月夜「でも、お姉ちゃんッ子だから、本人達とは間逆だけど」

ヤ「あの百合スキーですから、あの兄(あね)を好きになるとは考えられませんし」

神「（いや、それは分からんぞ、ヤーヤ。何せ奴の起源を考えりゃぁ……）」

星光「まぁ、この二人の関しては、これぐらいですね。何か分からない事があれば、こちらの方でお答えいたしますので、是非質問を」

神「さて、今日はここまでにするか」

ヤ「今回も見て下さり、ありがとうございます。では、また次回にお会いいたしましょう」

シェ「それじゃぁ！！」

神・シェ・ヤ・ス「ばいば～い！！」

星光「さようなら」

雷刃「またな！！」

闇王「さらばだ」

煉獄「ば、ばいばい……」

月夜「さよならね」

業火「……」

金剛「まったね～♪」

烈風「あばよ！！！」

常夜「ごきげんよう」

神「……お前ら、合わせる気ないだろう」

マテリアルズ「……」

作「告知ですが、もしかしたら＃４２を、いづれ増筆するかもしれません。しましたら、前書の方に連絡いたします。なお、今回出た

“ワルギリア”に関しては、次回に紹介したいと思います」

＃４５　Ｒｏｕｎｄ５　ｖｓ反転姉妹（前書き）

……今回は、なにも言う事がないので、このくらいで失礼いたします

ムーギネーター様、あんぎゃーす様、蒼穹様。ご感想、ありがとうございます！！！

#45　Round5　vs反転姉妹

――――――そして、とある兄妹（しまい）は、闇が残した残滓と戦う、戦い続ける……――――――

結界内。遠見市、上空

「さぁさぁおいでなさい！！　“煉獄の七姉妹”達ッ！！！」
「煉獄の七姉妹が長女、ルシファー」
「次女、レヴィアタン」
「三女、サタン」
「四女、ベルフェゴール」
「五女、マモン」
「六女、ベルゼブブ」
「七女、アスモデウス」
「「「「「「「ここにッ！！」」」」」」」

さって、お決まりのこの子達の召喚完了！！　なんだって来やがれってんだッ！！！

「出でよ！！　ペントラゴンの近衛兵達ッ！！！」
「にゃ、にゃにィッ（@Δ@；）」
「「「ウォンッ」」」

「“シエスタ４５（ヨンジュウゴ）”、ここにッ」
「“シエスタ４１０（ヨンイチマル）”、ここに」
「“シエスタ００（ダブルオー）”、ここにッ！！」

うっそ～～ん……まさかのシエスタ近衛兵。おい、どうなってんの？

「シエスタちゃん達、そこにいる私の偽物を、殺っておしまい！！！」
「「「了解でありますッ！！」」」
「偽物はそっちだろうがァァァァァ～～～ッ！！！　皆ッ！！アイツらをケッチョンケチョンのギッタギタにしてあげなさいッ！！！」
「「「「「「お嬢様！！！」」」」」」
「「「「「「「フォンッ」」」」」」」

そして、七人の姉妹達は、己の身を杭へと変貌させ

「目標への射撃、開始。地形データ収集、射撃用データ収集。４５（ヨンジュウゴ）、４１０（ヨンイチマル）”へリンク」
「データ受領、地形誤差修正」
「射撃曲線形成、制御線補正完了」
「「射撃準備、完了！！」」

そして、お互いの家具の準備が終わり……

「「行けぇッ！！！」」
「「「「「「「「はいッ！！！」」」」」」」」
「「「「「「「カンカラカンカラカンカラカンカラカンカラカンカラカンカラカンカラッッ！！！！！！！」」」」」」」

「「射撃ッ！！！」」
［［バシュッッ！！！！！！！！］］

お互いの攻撃が、放たれた

「「ッ！！」」
［［ダシュンッッ！！！！！！］］
［［ババババババババババッ！！！！！］］

お互いの放った攻撃は、まっすぐ相手の召喚主……煉獄の七姉妹の召喚者、ビビと、シエスタ近衛兵達の召喚者、無限の召喚士へと向かって行った。故に、互いに空中を飛び交い、その攻撃をかわしていった

「チッ、あのクソウサギ共めェ！！！」
「このッ、文鎮共がッ！！！」
［［バッ！！］］

無論、そのようなイタチごっこなど、やるつもりなど無く

「“神魔憑依（アバター・オブ・リンク）”ッ！！　対象、英霊エミヤ！！」
『スタンバイ、レディ』
「セーット、アップ！！！！！」
［カッッ！！！！！！！！］
「ッ！！」

今回選んだのは、赤き外套を身に纏い、その下に黒き鎧で身を固めた、正義へと成り損ねた弓兵

「“神魔憑依（アバター・オブ・リンク）”ッ！！　対象、アルトリア！！」

「ふえぇッ！！！？（@々@；）」
『スタンバイ、レディ』
「セーット、アップ！！！！！」
［カッッ！！！！！！！！］
「ッ！！」

ま、マジで？　それすらもコピーしてんの！！？　一体どこまで私のマルパクリな訳！！？

［ババシュッッッ！！！！！！］
「って、考え事してる場合じゃないって！！　“熾天覆う七つの円環（ロー・アイアス）”ッ！！！」
「“全て遠き理想郷（アヴァロン）”ッ！！！」
［［［［［［［［ヴンッ］］］］］］］］
［ヴンッ！］

互いに、最硬を誇る守護陣を展開し、迫りくる攻撃を

［ギイイィィィィィィィィィィィンッッ！！！！！！！！］
［［［［［［［［ギイイィィィィィィィィィィィンッ！！！！］］］］］］］］

難なく、防いだ

「ッ……（さっすがシエスタちゃん達ね。でも、弓矢から放たれた攻撃なら、投擲効果があるし……それなら、アイアスで防げば問題無し！！）」

余裕の笑みを浮かべ、挑発するかのような目つきで、相手を見たが

「フフッ……」

相手も、自身と同じような目つきで、睨み返していた

「……（気に入らないわねぇ……）」

「申し訳ありません、お嬢様」

「？　ルシファー」

「敵を貫けず、命令を遂行できずに……」

「気にする事無いよ、ルシファー。なんて言ったって、相手は私のマテリアル……レプリカよ。私そのものだと考えれば、こうなるに決まってるわ」

やや自嘲気味に答えたが、その声には余裕が見えていた……

「……さっすが、私のオリジナル。こうでなくっちゃ」

「申し訳ありません、仕損じてしまいました」

「ううん、別にいいよん。ただ……アンタ達じゃぁ、火力不足って事だからねぇ……」

マテリアルのビビも、余裕を見せており、互いに挑発し合っていた

「さて、次にでも行っちゃう？」

「ウフフッ……なら、次は少し、本気出しちゃうわよ」

「？」

「……行きなさい！！“ババハムート”ッ！“ババハムート・改”ッ！！“ババハムート・零式”ッ！！“ババハムート・烈”ッ！！」

……へ？

［［［［バシュンッッ！！！！！！］］］］

「「「「グルルルルッ……グオオオ

所変わり……海鳴市、海岸付近

［ギイイイイイイイイイイイイイイイイイイインッッ！！！！！！」

「クゥゥゥッ……！！！」

「フフフッ……」

グレイと、グレイのマテリアル、“無限の錬装士”の激戦地。そこには、剣戟による金属同士が交わり合う音が木霊し、その空間を満たしていた

「この、野郎ッ！！！」

「どうしたのぉ？　さっきから攻めに余裕が無いわよ♪」

「黙れッ！！！」

グレイ自身は、その相手の言動に、気が逆立っていた。かれこれ何度も攻撃をしているにも関わらず、相手にまともなダメージを与えていなかった

「ほらぁ、またこんなところに♪」

［ザンッ！！！］

「グッ！！！？」

逆に、グレイがダメージを受け、彼は劣勢状態に陥っていた

「（クソッタレが……ッ、今のは、まともに食らってたら、墜ちてたかもな……）」

ダメージを喰らえば、冷静な判断はできるものの、相手の言動により、冷静だった思考は一気に吹き飛び、考えなしに突撃しては、またダメージを負い……この悪循環の輪の中に捕らわれていたのであった……

「クスクスッ。どうしたのぉ？　オリジナルのわ・た・し♪」

「ッ！！！」

落ち着け……この程度で、何をそんなに！！

「ほらほら、掛かって来なさいよぉ。理屈なんて捨てて、無我夢中に私を襲いなさいよ」

別の解釈が取れる発言だが、そう言った事に関しては枯れているグレイには、効果が薄かった

「ゴチャゴチャうるせぇんだよ。どれほどしゃべれば、その口は閉じるんだ」

「んっとねぇ～……アンタを殺した時、かな♪」（ニコッ）

「ッッ！！！！！！！！“ブースターランス”ッ！！！！」

［チャキッ！！！］

「あらあらぁ」

［ゴオオォォォ

オオオオオッッッ！！！！！！！！！！！！！！！」

またも、何も考えなしに相手へと突撃をする……今回は、音速をも超えた速度で、だが……しかし

「無駄よ、“全て遠き理想郷（アヴァロン）”ッ！！」

［ヴンッ！！］

「ッ！！！」

［ガキイイイ

砲撃が、放たれた

「クソがッ……！！！　“ヘリオスの盾”ッ！」

［チャキッ］

その不意打ちに対して、グレイが取った行動は、小さな……バックラーのような、小さな盾。だが、ただの盾ではない

「弾き返せッ！」

［ギィィィィィィィィンッッッ！！！

「でも、それは私じゃないんだよねぇ♪」
「ッ！！？」
しかし、それすらも、彼女（マテリアル）の思惑の一つ。手にしている白銀のレイピアを構え
「“魔神闇”ッ！！！」
［ズシュンッ！！！！］
「グアッ！！！？」
グレイ目掛け、一撃をお見舞いした
［ズガアアアアアアアアアアアアアアアアアンッ！！！！］
「――――――カハァッ！！！？」
突き飛ばされた勢いで、海岸近くに建っていた建物の壁に激突し、その衝撃で血反吐を吐き散らした
「ッ……クソッ、タレが……ハァ、ハァ……」
「フフッ、無様ねぇ……オリジナル」
「ッ！！！」
その場の上空にマテリアル（レプリカ）は移動し、グレイ（オリジナル）を上から見下していた
「……ねぇ、どうして、“本気で戦わないの”？」
「ッ！！！！」
な、なんだと……？

「本気を出せば、貴方もこれくらい出来る筈でしょう？　なのに、どうしてそんな突撃思考なわけ？」

「ッ……」

いちいち、癪に障る……ッ！！！　俺が、本気で戦っていないだと？

「フフッ……なるほどぉ。そうよねぇ、そうだよねぇ……本気を出すって事は、アンタが一番嫌いな事なんだよねぇ……」

あぁん……？

「こんなファンタジー、認めない。自身は普通でいたい、まともでいたい、平凡でいたい……“人間でありたい”。そう理性が、歯止めをかけているからでしょう？」

「テメェ……何を、いってやがる……」

「フフッ……つまり、アンタが自身を“人間ではない”という事を受け入れないと、私は倒せないって事を、言いたいの？」（ニコッ）

「ッ……！！！？」

“人間ではない事を、受け入れる”……？

――――「まるで、“闘争の鬼人”のような、そんな気配を……」――――

ッッッ！！！！！！！！！！！！！？？？

――――――「お前の起源は“幻想”。本能的にこの状況を望んでいたのさ」――――――

ッ！！！　また、アイツの言葉が……！！！

――――――「起源と言うのは、即ち己だ。そうやって、己を偽り続けていれば、いずれお前は自滅する」――――――

ッ……こうやって、自身を偽っていては、コイツには勝てないとでも言うつもりか……

［……ムクッ］

「あらん？」

……絶対に、受け入れるモノか……

「俺は“人間”だッ！！！　バケモノになど、成ってたまるかッ！！！！」

［ダンッッ！！！！！！］

「ウオオオォォォ

オオオオ

！！！！！！！！」

「グウウゥゥゥゥゥゥッッ！！！！！！？？」

「ズドオオオオオオォォォ

「フフフッ、そうやっていると、酷く滑稽ねぇ、アッハッハッハッハッハッ！！！」

あの野郎ッ！！　高みの見物を決め込みやがって！！！

「（皆ッ！！　そっちは何とかなってる！？）」

《はいッ！！　なんとか、やっていますッ！！！》

一方、召喚していた煉獄の七姉妹達は、あのシエスタ近衛兵達と戦闘中。何しろ、この状況では、それが一番的確だと思うしね

「「「「グオオオ

［［［［ズドドドドドドドドドドオオオオォォォォォ
オオオオオ

「アンタ！！　もしかして！！！」
「フフッ、今更気づいても、遅いわよ！！！！　バハムート共！！！　眼前の敵を、粉砕しなさい！！！！」
「「「「グオオオオォォォ

？？」」」」」」」

避けるにも、範囲広すぎ……あぁ、ダメだ。無理だね……

……あぁ、なのはちゃん、フェイトちゃん、アリサちゃん、すずかちゃん……シグナム、ヴィータちゃん、シャマルさん、リインフォース……はやて、ちゃん……

『マスターへの直撃攻撃を感知、緊急起動開始』

［ジャギギギギギンッッ！！！！！！！！！］

ふえ？？？（。ロ。？）

［ズガガガ

バハムートによる光線を、難なく防いだのであった

「な……なんですとぉΣ（ °д° ）ゞ」

その状況に、ビビのマテリアルも驚きを隠す事が出来ず、その事実の驚愕していた

［［［［ゴオオオ

『ご命令を、マスター。貴女が望むなら、私はあなたの賢盾と成り、宝剣と成り、全てを焼き尽くす魔砲にもなります。さぁ、参りましょう』

「うん……お願いね、ワルギリア！！」

『はい、マスター！！』

［ジャギギンッ！！！］

ビビの新たなデバイス……ワルギリアが展開した七枚のプレートは、ビビの背後に浮遊し、いつでもビビの防御に回れるように待機した。

「さぁ～って、と。よくも私を殺す寸前まで追い込んだわね！！でも、運は私に味方してくれたみたいだねぇ」

「ッ……なによ、一度攻撃を防いだくらいで、もう勝ったつもりになってるの？」

「うん♪　だって……私を怒らせたんだからねぇッ！！！！」

ビビが怒りで活性化、本気（マジギレ）の怒り状態（モード）に移行した！！

「まずは、そのウザったいトカゲ共をブッ潰すッ！！！！」

［ダシュンッッ！！！！！！］

まず一体目！！　ただのバハムート！！！

「吹き飛びなさいッ！！“サタン、バスタァァァァァーーー”ッッ！！！！！！」

［ゴオオオオォォォ

ビビの右腕から、彼女が編み出したオリジナルの魔法、直射型砲撃魔法、“サタンバスター”が放たれ

「ギャアアア

其のプレートは、光速とも言えるほどの速さで、相手へと向かって行き

［ズシュンッッッ！！！

［ゴオオオ

オオオオ

そこから、先ほど飲み込んだ光を、送り返してやった

「な、ななな、な……なによソレェ！！！？　そんなの、聞いてないわよ！！！？」

「フフフッ……ベアト！！」

『了解した、主……モード０１、“ベルレフォーンモード”』

［ジャギンッ！！！］

――――――もはや、勢い付いてしまった為に、そのまま勝利への道を突き進むのみとなった

「さぁってと、オラァッ！！！」

［シュッ！！！］

「グルルルルッ！！？」

［シュルシュルシュルッ！！！　ジャギッ！！！］

「グルッ！！！？　グルルルルルルルッ……グオオオオォオオオオ

「さぁって……行くわよ、ワルギリア？」
『はい、マスター。あなたの意のままに』
［ガチャガチャッ！！！　ガチャガチャガチャガチャッ、ガチャガチャッ、ガチャンッ！！！］
［キュイイイイィィィ

「それぇ！！！」
［［ガシッ！！！］］
「ひゃあぁっ！！？」
「でぇいッ！！！」
［［ガシッ！！！］］
「く、クソゥッ！！！」

マスターの援護に回ろうとした直後、煉獄の七姉妹によってその行動が阻まれ、身動きが取れなくなった

「さっすが私の愛する七姉妹ちゃんね♪」
「ッ、あの役立たず共めッ！！！！」

……あぁ、なるほどね

「ねぇ、マテリアルの私」
「何よ」
「貴方と私、この勝負の敗因は何だと思う？」
「はぁ？　何を言っているのよ、ウザ」

フフフッ……やっぱりねぇ……

「貴方に足りなかったものは……“愛”よ」
「はぁ（一Д一？）」

そう……愛する人への想い、愛する我が可愛い七姉妹達。そして、初対面の私に、精一杯の愛を注いでくれているデバイス……もはや、これほど愛に満ちた私に！！！

「自分が呼びだした子に、愛を与えないアンタが、勝てる訳ないのよ！！！！」

……うわぁ、今の私、メッチャ決まったかも（＾ω＾）

「ハッ！！！　愛？　そんなモノ、お姉様以外の相手に与えたくないわ！！！」
［バッ！！！］

反撃する気？　言っておくけど、無駄よ

［バシィッ！！！］
「ッ！！！？　バインドッ！！！？」

フフフッ……闇の欠片お兄ちゃんに通用した“ベルゼブブバインド”よ。お兄ちゃんに通用するなら、私にも通用するに決まってるからねぇ

「さぁ～って……懺悔なさい、一辺倒の愛しか与えられない、愚かな偽物ォッ！！！！」
［［キュイイイ

――

［［ゴオオオ

そして、無限の召喚士が召喚していたシエスタ近衛兵達と、バハムート・烈は、光となって、共に散っていった……

「……ふぅ、ひやひやした～……（；一＿一）」

ま、さすが私のマテリアル、だね。まさか、ここまで出来るとは…

……

「「「「「「「「お嬢様ッ！！　ご無事ですか！！？」」」」」」」」

「あ、皆ぁ？　うん、ダイジョブだよ。皆も、お疲れ様。ゆっくり休んでいってね♪」

「「「「「「「「は、はい、かしこまりました。では、失礼致します、お嬢様♪」」」」」」」」

「「「「「「「「パシュンッ」」」」」」」」

あぁ、やっぱ可愛いなぁ？　煉獄の七姉妹ちゃん達は。転生前、何度も文鎮呼ばわりして、ごめんねｍ（＿＿）ｍ

「さってと、今回はあなたに助けられたわね、ワルギリア」

『いえ。あなたをお守りする事。それが、私の喜びですから』

「……ねぇ、なんでそこまで、私の事を気に懸けるの？」

『……分かりません。私のＡＩの根幹が、あなたを中心にしている事しか、分かっておりません』

はい？

『ですが、あなたを思うこの気持ちに、嘘偽りはございません。あなたと共にいる事、それを、私の生まれた意味だと、そう感じております』

「……」

な、なんか、アレだけど……まいっか（＊＾―＾＊）

「良くわかんないけど、それなら、これからもよろしくね、ワルギリア？」

『ッ！……はい、我が主』

ビビｖｓ無限の召喚士。勝者、ビビ

#45　Round5　vs反転姉妹（後書き）

～～～神の舞台裏～～～

神「あぁ……今回も、張りきって行くぞ～……」

ヤ「ど、どうなさいましたの！？　お兄様ッ！！！」

シェ「あ、アンタらしく無いわね……」

星光「えぇ。あの常にハイテンションな方がこうも墜ち込んでいるとは……明日は、一足早く雪が降りそうですね」

月夜「変なモノでも食べたのじゃないのかしら？　クスクスッ」

煉獄「あ、あの、どうしたんですか？」

神「あぁ……実は……最近、描かれてないなぁと、思ってな……」

ス「なにが？」

神「本編での俺の出番」

シェ・ヤ・ス・マテリアルズ「……」

闇王「おい、始めろ」

ヤ「えぇ、お願いします、星光さん」

星光「はい、分かりました。では、今回はこちらについてご紹介したいと思います」

――――――この作者のマテリアルに関するオリジナル設定、其の二――――――

星光「今回は、このテーマについてお伝えしたいと思います」

シェ「お願いねぇ～♪」

烈風「まずは、前回言ってた、“闇統べる王”と“無限の錬装士”に関してだ」

ス「そう言えば、前に言ってたよね。特別なマテリアルだって」

常夜「えぇ。彼女達の役割は、“分散したマテリアル、及び、闇の欠片の統合する為の管制人格”。原作の名称を用いるなら、“王のマテリアル”と呼ばれる者で、かつての闇の書のコアの大部分を有しているのよ」

闇王「だが、本来ならば我一人の筈だったが、なぜかあのような異分子が生み出された……おそらく、コアの内部に、何かしらの干渉があったとしか言えん」

シェ・ヤ・ス「（それってまさか……）」

神「ヒュ～ヒュヒュ～♪（＾３＾；）」

シェ・ヤ・ス「（やっぱりね）」

金剛「そしてそして～！！　そいつらいがいのマテリアル。わたしたちのようなマテリアルを、このさくしゃさんは～、“マテリアルや闇の欠片達の結合の際の楔としてのマテリアル”っていうせっていをつくったんだよ～」

星光「それらのマテリアルを、原作の名称から、“力”と“理”のマテリアルと区別されています」

月夜「星光と煉獄、常夜に、歴史の傍観者と黒衣の断罪者。そして私を含めた六名が、“理のマテリアル”に分類されるのよ」

雷刃「そして！！　ボクと業火、金剛、烈風、暗雲の魔獣に雷電の魔獣の六人が、“力のマテリアル”なのだ！！！」

業火「……無限の召喚士は、“力”と“理”、両方の特性を持っている」

マテリアルズ「（業火が、喋った！！？）」

ヤ「なるほどねぇ……この作者、脳内が中二全開ですわね」

ス「ソレを自覚してるのが、いい事なのか悪い事なのか……」

煉獄「え、えっと、これらが、マテリアルに関する、この作者さんのオリジナル設定、です……」

ヤ「では、続いてはこちらをどうぞ」

――――ビビの新デバイス、“ワルギリア”について――――

シェ「これなら、あのやり方で行けばいいわね」

ス「では、どうぞ～ッ！！！」

“ワルギリア”

グレイが作っていた新デバイス。デバイス自体が、マスターをビビ以外に認めていなかったので、ビビの手に渡った。なぜかビビに従順（理由は下記に記載）で、ビビの事を第一に考えている。待機状態は、中心に宝石（デバイスコア）が付いた白い七枚のプレートが繋がって出来たブレスレット

能力は、最硬の防御性能を中心とした多機能型で、デバイス起動時には、二辺が長い六角形の形状のプレートが七枚展開され、それが使用者の周囲に浮遊する。プレート一枚の大きさは、人一人分がすっぽりと隠せる程度の大きさ。そのプレート一枚一枚に、特殊な機能が備わっており、それらを使い分けることで、真の威力を発揮する（それらの詳細に関しては、また後日に）

これのＡＩプログラムの基盤は、あの“防衛プログラム”を使用しており、暴走の危険性はあるものの、その能力の高さは折り紙付きである。なお、このデバイスがビビにしか使えない理由は、“一度ビビは、防衛プログラムに“魅惑の笑み”を見せているから”、その微チャーム効果で、ビビの事が特別な存在として認識し、そのデータが再生されたプログラムにも影響を及ぼし……あぁなったという訳である

ヤ「恐るべしは、あの変態ね」

ス「プログラムにすら気にいられるとは……あの“魅惑の笑み”、

そうとう凄い効果ね」

マテリアルズ「……」

ス「？　どうしたの？」

闇王「よもや、闇の書の力の一部が、あのようなモノに……」

星光「なんだか、嫌気が指してきます」

雷刃「ボクもだよ、ハァ……」

シェ「（この子達、ビビに関してはノータッチなのね）」

ス「（つまり、この子達には“例のチャーム効果”は影響されていないのね）」

ヤ「さて……それでは、今回はこれまでにしておきましょう。読者の皆様方、また次回にお会いいたしましょう。それでは」

シェ・ヤ・ス・マテリアルズ「ばいば～い！」

神「アァァァァッ！！！！　本編に出てェェェッ！！！！！！！」

シェ・ヤ・ス・マテリアルズ「……」

作「……神様。今暫く、お待ちを……必ず、出番を作りますから……」

＃４６　決戦の前触れ、鬼の目覚め（前書き）

いよいよマテリアル編の最終戦前です！！　いつも通り、糞みたいな駄文のオンパレードですが、何卒、ご勘弁を……

ムーギネーター様、あんぎゃーす様、緋水様、蒼穹様。ご感想、ありがとうございます！！！

＃４６　決戦の前触れ、鬼の目覚め

――――――そして、とある兄妹（しまい）は、闇が残した残滓と戦う、戦い続ける……――――――

ビビと無限の召喚士との戦いが決着した同時刻……結界内。海鳴市、海岸付近

「ッッッ！！！！！！！！！！！！！？？？　召喚士ッ！！！！！！！！！」
「ウオラァッ！！！！！」
［ボゴンッ！！！！！］
「キャァッ！！！！？」

無限の召喚士……己の妹の死を感じ、その方角を向いた直後、あろうことか隙を作ってしまい……その隙を、グレイが無逃す筈が無く、その顔面に、己の拳を喰らわせたのだ

「はぁ、はぁ、はぁ……っ、やっと、一撃……」

そう、コレが始めての……無限の錬装士へのダメージだった

「……アンタ、女性の顔を殴るなんて……それでも、心は男なの！！？」
「知るか。少なくとも、気に食わない奴を殴る事に、男も女も関係

無いだろ」

最もな発言だ。嫌いな奴なら、性別なんて関係なく、ぶん殴ればいいだけなのだから。目の前にいる自分の偽物だろうと、自分をこんな世界に送り飛ばした神様だろうと、妹だろうと……

「ッ……」

「それと、アンタのさっきの反応。ソレを見る限りじゃぁ、どうやらあの妹が勝ったのか……コレで、残るマテリアルはアンタだけってことになるな」

そう、必然的に、そういう事になる。高町なのは、フェイト・T・ハラオウン、八神はやて、アリサ・バニングス、月村すずか、シグナム、ヴィータ、シャマル、リインフォースのマテリアル達は、厳重に封印され、外との干渉は全くと言っていいほど不可能な状態にある。そして、クロノ・ハラオウン、ユーノ・スクライア、アルフ、ザフィーラの四名のマテリアルは、己の本物達によって殺され……そして先ほど、ビビが己のマテリアルを倒し、残るマテリアルは、グレイの眼の前にいる、己のマテリアル、“無限の錬装士”のみ

「……そう、もう、私だけなのね……クスッ、ウッフッフッフッフッ」

「あぁ？」

だが、その絶望的な状況の中においても、彼女は奥する事無く、逆に、笑い始めたのであった

「そう、もう私だけなのね。マテリアルは……なら、ちょっとやり方は違ってしまうけど……やっと、“闇の書が復活できるのね”」

「……は？」

闇の書の、復活……？　いや、まて、確かこいつ等の目的っていうのは……、闇の書の闇の欠片、そのうちの、闇の書の闇のコアの欠片……それが、構成体（マテリアル）……闇の書の闇、それは、“転生プログラム”と“防衛プログラム”、そして“無限再生プログラム”……！！！　なるほどな。つまり、そう言うことか……

「本来は、マテリアル全員が揃い、なお且つ充分な魔力を、闇の欠片（ファクター）、もしくはマテリアル自身が回収し、そして、それら二つの因子が揃った時、闇の書を復活することが可能。だが、マテリアルがお前だけとなった今、マテリアルが全員必要だという因子（ファクター）が不要となり、貴様を核（コア）とし、闇の書が復活できる、というところか？」

気に食わない奴をぶん殴ったおかげなのか、グレイはやっとクリアになった思考を動かし、そう推測した

「ご明答♪　さすがは私のオリジナル、やはり出来る男は違うわねぇ」

「ッ……！！」

腹が立つなぁ……いちいちッ！！！

「だが、もう一つの因子（ファクター）の条件はどうした。まさか、すでに溜まっているのか」

「えぇ。他の異世界にいる闇の欠片や、この世界にいる闇の欠片……それら全てを総合すれば、復活には充分。おつりがくるほどの魔力が集まってるわ」

いつのまに……って、俺がマテリアル共を捕獲してた時や、幻世で闇の欠片を一掃してた時か。どうやら、時間を食っちまったみたいだな

「あら？　どうしたの？　絶望的な発言を聞いて、戦う気が無くなったの？　今私を倒せば、復活は阻止できるかもしれないわよ？」

「……」

確かにな。だが……

「復活するってのは、あのキメラにだろ。それなら、一度ブッ倒したんだ。もう一度ブッ飛ばせばいいだけだし、それに……図体がでかけりゃ、どんな攻撃でも当たるだろう」

「ッ、言ったわね。いいわぁ、ならその発言、後悔させてあげるわッ！！！！」

［バッ！！！］

そう言うと、彼女はその両手を大きく広げ、まるで何かを……いや、まるでではない。まさに何かを呼び寄せる仕草をした

「さぁ、闇よ！！　闇の欠片ども！！！　私を取り巻くように群れるがいい。私を王とし、その身を王に捧げるがいい！！！　来たれッ！　集えッ！！　闇と成れッ！！！」

［ジュイイイ

無限の錬装士がそう叫ぶと、彼女の周囲に、黒い瘴気――――それらは、異世界に存在していた闇の欠片達。それが、一気に次元転送され、この地に集まったのだった――――が渦巻き、彼女の中に入って……いや、取り込まれていった

「……ダサい文句だな」

アレが、あのクソ妹が言っていた、“中二病”って奴か……いや、“厨二”、だったか？　まぁいいや。どっちにしろ、コレで標的が一つになる。色々手っ取り早くなるか

「アッハッハッハッハッハッハッハッ！！！　素晴らしいわぁ！！！　魔力がこんなに満ちている！！！　アッハッハッハッハッハッハッハ

「……“闇の書の闇”、か」

そう。それは当に、半年前の再現……かつて、防衛プログラムの暴走時に起きた、あの現象と……

「お姉様ッ！！！」

「「「「「「「「「「グレイ｛さん・姉上殿・スティンさん｝！！！！」」」」」」」」」」

「……お前ら、か」

丁度そこへ、高町なのは、フェイト・T・ハラオウン、八神はやて、アリサ・バニングス、月村すずか、シグナム、ヴィータ、シャマル、リインフォース。そして、クロノ。ハラオウン、ユーノ・スクライア、アルフ、ザフィーラ。そして、妹のビビ・スティン。彼女達が来たのであった

「あれは、いったい……？」

「アレは……まさか、闇の書の！！？」

「「「「「「「「「「「「！！！！？？」」」」」」」」」」」」

リインフォースの一言で、その場全体に緊張が走った

「……どういう事か、説明してもらいたいのだが」

そして、その場にいるクロノ・ハラオウンが、グレイに事の次第を訪ね

「……了解。まず、アレは……」

□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■

アレは、マテリアルの一体が核となり、そこを中心に闇の欠片が集い、闇の書の闇が復活寸前にある。という事を、全員に告げた。そんな簡単な説明が終わり、その場にいるメンバーの表情が、困惑した表情から、真剣な面持ちに変わった

「なるほど。なら、アレを倒せば、万事解決。という事になるのだな」

「さぁ。少なくとも、私はそう思うけど」

という会話を行っている中、原作を知るビビはというと

「（闇の書の闇が復活？　そんなの、原作にはない展開……私達が介入したことにより、かなり原作と違う展開が繰り広げられている。でも、こんな……ここまで変わるものなのかな？）」

ま、今はそんな事を考えている暇ではないのは分かっている。今は、アイツをさっさと倒し、マテリアルちゃん達に会うのが先決だ！！！

「闇の書の闇って、たしか、アレよね。私とすずかが遠くで見てた」

「うん。大丈夫なの？　アリサちゃん」

「何を言ってるのよ！！　なのは達でも倒せた相手なんでしょ？だったら楽勝よ！！！」
「今回は私達がいるんだから、戦力的には上だよ」
「それもそうやな、それに、リインもおるし」
「主……はい、例えユニゾン出来なくても、前には出れます。私も、作戦に参加します」

そうそう。前回とは違って、アリサちゃんとすずかちゃん、そしてリインフォースの三人がいるんだもん。楽勝楽勝♪

……など、前向きな思考を張り巡らせていた

「よし、なら作戦だが……」
「前の時と同じでいいんじゃない？」
「そうだな。ビビと姉上殿の歌で、相手の動きを封じ、その間に、我々が一斉攻撃を仕掛ける」
「でも、相手の情報が、ちょっと少ないけど……あの複合四層式のバリアが展開されているのか、それとも、違うバリアでも展開しているのか……」
「どんなモンが出てこようと、あたしとアイゼンが打っ潰してやるよ！！！」
「それに、如何なる攻撃が来ようと、俺が防ぎきる」
「僕も、出来る限り頑張るよ！！」

そして、周りでは新たな脅威に立ち向かうべく、己の意思を示している中……

「……（できる事なら、俺の手で引導を渡したかったが、まぁ、あのクソ偽物をブッ倒すのが目的だしな。なら、ここは感情を押し殺すか）」

そう思った直後

《おやおやおや～～～？　そんなんでいいのぉ？　グレイちゃん♪》

「……」

唐突に、どこからともなく声が聞こえた……こんな事を彼にするのは、ただ一人

「（何の用だ、クソ神）」

《クックックッ。いやいや、己の偽物相手に憤激し、傷ついたお前を癒そうと、心のカウンセリングに来たのさw》

嘘付け、このクソが

「（本当は何しに来た）」

《いやぁ、ただの見物♪　だって、お前の甚振られる姿、なかなか見られないかなぁと思ってな。だけど、コレはちょいとアレかねぇ。人がいっぱい来ちゃったし、まずお前がリンチにされる事はないだろうなぁ……残念♪》

「（……）」

残念そうな声には見えねえがな

《……“つまらん”。これでは前回の繰り返しだ。まったく、それじゃぁ飽きるわ》

「（ッ）」

突如、神の口調が変わった。それは、まるで同じ事をするというその行為を――――――――

《さて、どうしようかなぁ……》
「（知るか、んなもん）」
《……フフッ、そうだ。なぁ、お前》
「（あぁ？）」
《お前の偽物、“無限の錬装士”を見て、どう思った？》
は？　コイツは一体なんの事を……
《アイツ。お前にこんな事を言ってなかった？　こんなファンタジー、認めない》
「（ッ！！！？）」
――――「自身は普通でいたい、まともでいたい、平凡でいたい……“人間でありたい”。」――――
《……クックックッ、思い出したのか》
「（……テメェ、何が言いたい）」
《おお。君らしい、その怒りに満ちた声。本当に君は、鬼という言葉がお似合いだよ……ん？　オニがオニあい……ププッ、お前にピッタリなギャグを思い突いたぞ！！！》
「（だまれ馬鹿神。そんなギャグ、誰も笑わねぇよ）」
《ほう……お前は神に逆らい過ぎだぞ。ちょうどいい。神罰としてここいらで、“お前の本性というモノ”を、その目に焼き付けさせねばならないようだなぁ……》

は？

《……“ｉｎｔｅｌｌｉｇｅｎｔ　ｄｅｖｉｃｅ，　ｔｙｐｅ　９６１２７５３８０７－Ｒ２４１”、通称“タマモノマエ”。製作者権限発動。使用者の精神の不安定化、ならびに脳の活動の８９％を停止、そして興奮状態に肉体設定を変更せよ》

……は？

《了解、シマシタ。ユーザー、グレイ・スティン、ノ、肉体、設定、ヲ、変更、シマス》

タ……タマモ、一体何をする気だ！！！！

［ドクンッッッッ！！！！！！！！！！！！！！］

「！！！！！！！！！！！！！？？？」

な……なんだ、体、が……

《クックックックッ……どうだ？　今の気分は？　まるで、理性のタガが外れたような気分だろう？》

「（テ、テメェ……一体、何を、しやがった……？）」

《いやいや。お前が無意識に掛けているリミッターを、一時的に外しただけだよ。そう、“理性（リミッター）”を、な……》

は、はぁ……？

《本来はやりたくは無かったが、お前がここまで頑固だとは思わなかったよ。まさか、２０歳という完成された精神が、ここまで起源という存在への抑止となるとは……いやいや、恐れ入ったよ、

グレイ・スティン♪》

な……

「（テメェ……まさか、タマモを俺ん中にいれた理由って……！！！）」

《あぁ、そうさ。もしも、俺の“予想通りに事が進んだ事態”になった時、ちょっとしたイタズラをする為に、弄りやすくするようにする為、さ》

……コイツは、人をなんだと思ってるんだ！！！

《神にソレを説くか？　クックックックッ。人間なんて……いや、神以下の存在など、ただの道化。神が己の娯楽として見る、掌で踊り狂うピエロさッ！！！！》

……クソ、神がッ！！！！

《クックックックッ……さぁって、見せて見ろ。そして、その目に焼き付けるがいい、グレイ・スティン。お前の本性を……貴様の起源、“幻想”を！！　お前の真の姿、“鬼”の姿をなぁッ！！！！》

［ドクンッッッ！！！！！！！！！！　ドクンッッッ！！！！！！！！！！　ドクンッッッ！！！！！！！！！！　ドクンッッッ！！！！！！！！！！　ドクンッッッ！！！！！！！！！！　ドクンッッッ！！！！！！！！！！　ドクンドクンドクン

「ッッッ……」

止めろ……頭が、割れる……眼の前が、揺れる……耳が、痛い……口の中が、焼ける……変な臭いが、鼻に付く……体の震えが、止まらない……なんなんだ。全てが……全てが、醜く見える……何もかも、破壊したくなる……

……自分ガ、壊レテ行ク……

――――「フフッ……愚かな鬼さんだこと♪　人間でいたい、なんて……私みたいに、何もかも受け入れ、流されてしまえば、楽なのにねw」――――

「ハァ……ハァ……ハァ……ハァ……」

……ニクイ。アノ、己ノ姿ヲシタ偽物ヲ、俺ノ手デ……

――――コロシテヤル――――

＃４６　決戦の前触れ、鬼の目覚め（後書き）

～～～神の舞台裏～～～

神「ヒャッホ～～～～～～イッッッ！！！

神「星光ッ！！！　今回もよろしくぅぅぅッッッ！！！！！！！」

星光「は、はい……では、今回はこのようなお題で参ります」

――――――闇の書の闇の復活について――――――

星光「では、コレに関しては、闇統べる王に」

闇王「また我か。まぁ、我以外にこの件を説明できる者はおらぬからな。いいだろう」

月夜「では、お願いしま～す」

闇王「うむ……まぁ、本編でグレイ・スティンが説明をしたから、いいだろう。だが、一点だけ。あの闇の欠片共がどうやって無限の錬装士の下に行ったのか……簡単だ。アイツの元となった奴、グレイ・スティンか？　アイツの資質に関係しているからだ」

金剛「やっぱり～、そこにかんけいしてるの～？」

闇王「あぁ。あのグレイ・スティンとやらが介入したせいで、闇の書に関する色々な事が変わってしまっている。まったく、面倒な事をしてくれたもんだよ」

神「それを人は！！！！　原作ブレイクと言うのだアアァァァアアア

雷刃「おお！！！？　絶好調だな！！！！！　神様！！！！！！」

神「おうよ！！！！！　今の俺は、誰にも止められないぞオオオ

煉獄「え、えと……また会いましょうの、挨拶？」

ス「煉獄ちゃん、律義に答えなくていいよ」

神「うっし！！！！　そんじゃぁきっちりシメるぞォォォ

ッッ！！！

#47 Final Round vs巨闇魔獣（前書き）

※注意※　今回の話の後半、かなり残酷的描写が描かれておりますので、本気で苦手な方は、あまり見ない事をお勧めします

ですが、稚拙な駄文で書かれているため、それほどのものではないと思いますがね（汗）

ムーギネーター様、緋水様、あんぎゃーす様、寝落ちの亜留ジャ野様、蒼穹様。ご感想、ありがとうございます！！！

#47 Final Round vs巨闇魔獣

――――――ソシテ、トアル兄妹（シマイ）ノ兄（ゲンソウ）ハ、闇ガ残シタ残滓ト戦ウ、戦イ続ケル……“鬼”ト、ナッテモ……――――――

結界内。海鳴市、海岸付近

［［［［［［［［ゴオオオ

そこに現れたのは、間違いなく、四聖獣を主体とした幻想種のキメラ。だが、違う点と言えば、そのメインとなる“青龍”の頭部に付いている、あの磔にされたような女性の体の部分が……

「アッハッハッハッハッハッハッハッ！！！！！　ナンテ美シイ体ナノ！！？　コンナニモ力に満チ溢レテイルナンテ！！！！」

……グレイのマテリアル、“無限の錬装士”だという点のみであり、意思が備わっているという事であった

「……まさか、彼女のマテリアルの意思が、まだ生きていたとは……」

「ど、どうするの？　クロノ君」

「作戦は変わらない。前回と同様、グレイさんとビビの二人で足止めをしてもらい、その隙に攻撃をする。幸い、バリアらしきものは見受けられない。一気に殲滅するぞ！！」

「「「

「「「

「……カテゴリ、独創融合武装、“ブレイズ・オブ・リグドゥオーグ”」

［［ジャギンッ！！！］］

呟き程度の声量で、その手に生みだしたのは、二つの黒い生体兵器……“神機”と呼ばれる武装である。が、その手に有るのは、その柄と、本体と、“その本体に括り付けられ、自身の腕にも縛られている鎖”……それは、彼の愛剣、“ブレイズ・オブ・エグザイル”と“神機”の融合した武装であった

「右……銃口、ブラストノズル、“ディバイダー９９６”。刀身、ロングソード、“龍刀【斬鬼】”。装甲、タワーシールド、“全て遠き理想郷（アヴァロン）”」

［ジャギギギンッ！！！！］

グレイがそう言うと、右手に握られし神機に三つの武装が装着された。だが、それは元となったあの武装群ではなく、全て他の……グレイが知りうる最も強き武具武装、装備が、その神機に付けられ……いや、取り込まれた

「左……銃口、アサルトノズル、“レイジング・ハート”。刀身、ショートソード、“―刺し穿つ破滅の三ツ薔薇（ゲイ・トライデント）”。装甲、バックラー、“ヘルメスの盾”」

［ジャギギギンッ！！！！］

そして、右の神機と同様に、その左腕の神機にも、グレイが知りうる最も強き装備が、装着された

「……ッ」

そして、グレイの口から、言葉が漏れた……詩（ヒュムノス）の、タイトルが

“ヒュムノス、‘ｃｈｍｏｄ　ｂ１１１０００００／ｎ’”」

そして、詩が、紡がれる……己を変える、詩（ヒュムノス）を

［……♪］

「？Ｍａ　ｎｕｍ　ｒａ　ｇｙｕｓｙａ　ｙｏｒ［我は其方を支配する］？」

「？ｅｎ　ｖａｌｗａ　ｇｅｔｒｒａ　ｓｐｉｒｉｔｕｍ，ｄｅｎｅｒａ　ｗａｌａｓｙｅ［汚れた魂を持つ　悪しき人間を浄化する］？」

世界に、その詩（ヒュムノス）の伴奏が響き渡ると同時に、グレイの口から、力（ヒュムノス）が溢れた。そして、それと同時に、ある異変が起きた

［［ジュギャンッ！！！！］］

「「「「「「「「「「「「「「「「！！！！！！！！！？？？」」」」」」」」」」」」」」」」

その詩に呼応したのか、彼の両腕が。突如変貌し、赤黒く、そして毒々しい色彩を持つ、怪物のような腕に……“鬼”のような腕へと、変貌を遂げた

「?Was yea ra chs gatyunla yorr na naja here,［我は地獄となる 其方の去りどころなし］?」

「?rete hueaf dsier yorr gauzewiga［無駄な欲望など忘れ 絶望するがいい］?」

それは、己の理性に向けた詩（ヒュムノス）。不幸に苛まれ、苦痛の中にすら居場所は無く、ただただ、己の本性に対し絶望し続けろと、そう謳っていた

「?Was yea ra wael yorr zash, werlwe netvear,［其方が苦痛に泣きながら諦めるのを 我は喜んでいる］?」

「?gyaje guatrz gyas ween fayra［過ちの憎悪で出来た悪霊である其方は 炎の中にいるのだ］?」

その詩（ヒュムノス）は、相手に害を与えない。それは、己を変える詩（ヒュムノス）。理性という枷が外れ、心が興奮し、本能が、それに歓喜の意を示している……

もはや、グレイ・スティンという存在は、今や完全に人間ではない。人外の、鬼と化したバケモノに成り上がったのである

「ヴゥゥゥゥッッッ……グアアア

対応出来ず

「ヴアアア

［［ウォウォウォウォウォウォウォウォウォウォウォウォウォンッ……］］

そして、グレイ自身も、その身の周囲に幾つものフォトンスフィアを形成し、それら全てを

「穿テェエッッッ！！！！！！！」

［［［［［［［［［［バシュバシュッッッ！！！！！！！！！！！！！］］］］］］］］］］

［［ズドドドドドドドドドドドォオオオ

！！！！！」」」

［［［［［［［［［［ザパパパパパアアア

ウウウ

「“ヤシャノタテ”ッ」

［キィィィィィィィィィンッ……ッ！！！！］

［ズガガガ

「?Ｒｒｈａ　ｋｉ　ｒａ　ｃｈｓ　ｗａａｔｈ　ｃｉｅｌ，ｐａｋ　ｃｅｌｅｔｉｌｌｅ　ｆｒａｗｒ，［再生の世界になる　美しい未来の花を開かせる］？」

「?ｌｉ　ｍｅａ　ｍｅｏ　ｅｎ　ｋｉｌ　ｙｏｒｒ［それこそが我の理想　だからこそ、其方を殺めるのだ］？」

グレイ（オニ）の詩（ヒュムノス）は、当に攻撃的な想いが込められている。相手を殺したい、殺したい、殺したい、殺したい、コロシタイッッ！！！！！！　そんな想いしか、込められていなかった

「?Ｒｒｈａ　ｗｏｌ　ｇａ　ｒａｎａ　ｂｏｈ　ｈｅａｔｈ　ｖｉｅｇａ　ｓｏｓａｒ，［暴走する魔力は灼熱の剣］？」

「?ｃｏｌｇａ　ｇｅｔｙｕｎｌａ　ｄｈｅｚｅａｌｌ［それとも氷の呪われた地に囚われたいと願うか?］？」「?ｙｅｈａｈ［嬉しい］？」

「ヴゥゥゥゥゥッッッ……グアアア

「「「

アアアア

止した

「キイィィィィッ……！！！！！！！！」

闇の書の闇の形相は、今は醜く歪んでいた。何をしても、このオリジナル（オニ）には効かないからである

「ヴウウウ

た魔力砲撃……それらが、何にも邪魔される事無く突き進み

［［ズドオオオ

「？Ｒｒｈａ　ｋｉ　ｒａ　ｃｈｓ　ｎｏｓａａｓｈ，　ｅｎｙｏｒｒ　ｇａｔ　ｇｙａｊｌｅｅ，［我は女神になり、其方は呪われた罪人になる］？」

「？ｃｏｌｇａ　ｇｅｔｙｕｎｌａ　ｄｈｅｚｅａｌｌ［氷の呪われた地に囚われろ］？」「？ｙｅｈａｈ［嬉しい］？」

「？言ふことの怖き夜道　黄泉路？」

「？かれ果つ地　そぼ降るは紅の涙か？」

そして、グレイが謳う詩も、最後の想いを、紡ぐ……ソレは一体、誰に向けた言葉だろうか……

「グゥッ！！　コノォ……」

「ヴゥゥゥゥゥゥッッッ……」

［バッ！！］

身動きが取れない闇の書の闇に一瞥をし、グレイは、その身を大きく広げ

［［ヴウゥゥゥゥゥンッ……！！！］］

自身の足元と前方、それら二個所に魔法陣を展開した

「ヴアアア

そして、高密度の魔力エネルギーを瞬時に溜めこみ、そして……
……

「ケシトベエエエ

その勢いのまま、キメラの頭部に磔にされていた“無限の錬装士”の頭を掴み、龍頭からその体を引き剥がし……

□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■

［……バシュンッッ！！！！！！］

「ヴアアアアッッッ！！！！！！！！！！！！！！」

［ガッ！！！！　ブンッッ！！！！！！！］

［ビタンッッッ！！！！！！！！！！］

「ガハァッッッ！！！！！！！！！！！！！！？？？」

その勢いを殺さず、無限の錬装士を持ったまま、陸地にあるビルの屋上まで飛翔し、着地と同時に相手を投げ、壁に叩きつけた

□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■

［カッッッッッ！！！

そして、グレイ（オニ）がいる屋上

「ヴウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウ……うっ！！！？」

『肉体の限界点に到達。鎮静剤、投与』

今までの暴走に、とうとう肉体が耐えきれなくなったのか、タマモの判断で、その体を鎮める薬が送られた

「グッ……ガハァッ！！！？　はぁ、はぁ、はぁ、はぁ……」

グレイは、ようやく理性を取り戻し、そして……嫌悪した

「（なんだ、今までのは……アレが、俺だと……あんなのが、俺だと！！！？）」

ありえん……あんな、あんな攻撃など、絶対にしない……あそこまで俺は、“力を使いこなせるわけが”……！！！！

「ふ、ふふふ……そうよ。アレこそ、アンタの本性なのよ」

「……」

と、突如隣から声がした……キメラから引き剥がし、壁に叩きつけたはずの偽物……無限の錬装士であった

「あの暴れよう……アレこそ、アンタの本来あるべき姿。そう、私の本来の姿でもある……えぇ、間違いないわ。アレこそ、アンタのあるべき姿なのよ！！！」

……あんなのが、俺のあるべき姿、だと……？

「バカな……んな訳「じゃぁ、なんでさっきまで、アンタはあの姿だったの？」ッ！！！」

それは……あの、クソ神が！！

「誰のせいかは分からないけど……でも、どんな事をされても、アンタにさっきの行動を否定出来る事は不可能よ」

「なに？」

「だって、暴れていた時の貴方の眼……すっごく輝いてたからね」

「ッッッ！！！！！！！！！！！？？？」

な……ど、どういう、事だ……？　輝いて、いた？

「そうよ。アレこそ、お前の真の姿。アンタの本性！！　キサマの、あるべき姿なのよ！！！！！」

……黙れ

「フフッ……精々、暴走していた時の姿を思い出しながら、苦痛に満ちた日々を過ごすといいわ」

黙れ

「或いは……その姿の自分を、受け入れ、認めるのもいいかもね。その方が、楽になれるわよぉ♪」

「ッッッッッ！！！

つけまくり

「ヴアアアアアアアアアアアアアアアアアアッッッ！！！

！！！！！！！！！！」

そのまま、顔面へと、何発もの殴打を続け……

「ヴウウウウウッッ……！！！！！！！！！！」

［ガシッ！！！］

「ガッッッ――――――？」

「ヴアアアアアアアアアアアアアアアアアアッッッ！！！！！！！！！！！！！」

［ブンッ！！！！］［ズガアアアアアアアアアアアアアアアアアアンッッッ！！！！！！！！！！！！］

「――――ッッッッッ！！！！！！！！！！！！！？？？」

再び頭部を掴み、またも壁へと投げ叩きつけ……無限の錬装士は、もはや悲鳴すら、上げられなくなっていた

「！！！！！！！！！！？？？」

［バタッ！！！　バタッ！！！］

無限の錬装士は、グレイとは反対側へと、脚を引きづりながら、向かって行った。彼女の、今の心境を言うなら……逃げたい！！の一言だろう……だが、その逃走を、グレイは逃す筈もなく……

［ガシッ！！］

「！！！！！！？？」

逃げる彼女の脚を掴み

［ズルッ！！！！］

それを引きよせて、再び無限の錬装士の上にまたがり

「“ブレイズ・オブ・エグザイル”ッ」

［［ジャギンッ！！！］］

両手に、己の愛用の武器を持ち

「ヴウウウウウッッ……！！！！！！！！！！！」

［［ズシュンッッ！！！！！！！］］

「――――ッッッッッ！！！！！！！！！！！！！？？？？？」

逃げられないよう、その両手に、グレイの双剣が突き刺さった……

……

「ヴウウウウウッッ……」

［ガシッ！！］［ガシッ！！］

「ッッッ――――――？」

「ヴウウウウウッッ！！！！！！！！！！」

［［ズチャッッ！！！！！！］］

「グアアア

グレイは、再び“鬼”へと戻り、その心は、もはや無情……“非情の戦鬼”へと、なっていた

「……なんだ、男の声、出せたのか」

グレイ(オニ)が放った言葉には、何も無かった……冷酷さも、残虐さも、何も……

「ッッ……いづ、れ、お前、は……受け入れる……己の、本性をなッッッッッ！！！！！！！！！！！！！！」

「ッッッ！！！！！！！！！！！！！！！！」

［ボゴオオオ

グレイｖｓ無限の錬装士。勝者、グレイ

□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■

一方、それら一部始終を見ていたビビ達は……

「「「「「「「「「「「「「「「「……」」」」」」」」」」」」」」」」

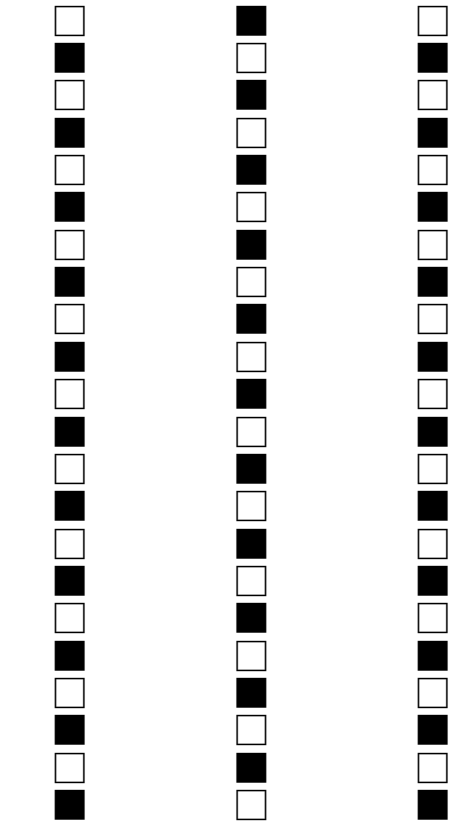
言葉を失い、一言も、喋る事は無かった……

「……」

ビビもまた、その一人となり……皆が、その圧倒的な存在を、目の当たりにした……

こうして、闇の欠片事件は終息し、三次被害も確認されないまま、終わりを告げた……この事が、後に管理局内の噂と成り、い

づれグレイに、“闘争の鬼人”という異名が付けられることとなった、事件であった……



青空広がる荒野……

「クックックックッ……やっと、やっと彼は、起源覚醒へのさらなる一歩を踏み出した。コレで、残る歩数は二つ」

そこにいるのは、華奢な顔つきの青年……あの神様であった

「さぁって、残る歩数を、どうやって歩ませようかなぁ？　このままにしていても、結局はアイツは立ち止まるだけだし、ある程度は干渉しねぇとなぁ……でも、今回はあからさまだったしなぁ……

…今度は、間接的に干渉するか。でも、どうやってしようかなぁ…
……」

ニヒルな笑みを浮かべながらう～んと呻き、更に思考を深める……
……

「そうだ！！！“新しい転生者”を連れてこさせて、アイツにぶつけてみるか！！！　うん、それもアリだな！！！」

そういうと、神は自身の周囲に幾つものウィンドウを開き、それらを凝視した

「どいつにしようかなぁ……クックックッ、、楽しいなぁあ、楽しいなぁ！！　ヤオオあこういうのは楽しいなぁ！！！　人ｌｏｖｅ！！！！　なんつってな♪　クッハッハッハッハッハッハッハッハッハッ！！！！」

神は、その場で笑いながら、自身の欲を満たすための作業を、続けるのであった。そして人は、その神に翻弄され続けるのであった…
……

#47　Final　Round　vs巨闇魔獣（後書き）

～～～神の舞台裏～～～

神「つ～事で、今回も始めっか、カミウラ♪」

シェ「今回はヤケに落ち着いているのね」

神「毎度あんなテンションじゃ、疲れるって……今回は、ちとローテンションになろうと思ってな」

ス「それは良いけど、あの子達が……」

マテリアルズ「……」

［ガクガクガクガクッ］

ヤ「何やら、震えておりますのよ」

神「いや、多分原因は、本編上のアイツの行動だろうよ。最後なんて、完全にクレイトスだよ。あぁ、クレイトスっていうのは、武器ネタに使ってる“ゴッドオブウォー”の主人公の名前な」

シェ「これじゃぁクレイトスじゃなくて、“グレイトス”ね」

ヤ・ス「誰が上手い事を言えと……？」

神「ま、確かに今回の最後のシーンは、それの再現だったしな。対ポセイドン戦の最後のフルボッコ、あのシーンのオマージュだし」

ヤ「分かる人にしか分からにと思われますから、お題の方に参りましょう」

神「だな。んじゃ、星光ちゃん……の、出番は無いか。今回のお題は、コレ！！！」

――――――今回、グレイが使った武器と魔法について――――――

神「アレら、ねぇ……これなら、俺が適任か。アイツのオリ魔法の開発に、一役買ってるし」

シェ「そうなの？　それじゃお願いね」

神「あいよ。まずは、“ブレイズ・オブ。リグドゥオーグ”についてだ。面倒だから、下に書くな」

シェ・ヤ・ス「えぇ～……」

“ブレイズ・オブ・リグドゥオーグ”について

グレイの本性があらわとなった時に、彼が生み出した双剣の神機。作中での起債で分かるように、他作品の武器や自分が考えた武器、それらを適した形状に変えて換装可能となっている。本体は“ブレイズ・オブ・エグザイル”と“神機”を組み合わせた融合武装。なお、これの使用の際は、腕が鬼のような、禍々しいモノになる。これは、神機の特性上の事で、“ゴッドイーター”に詳しい方なら、ある程度見当つくだろう。知らない方に説明するなら、“神機は生体兵器な為、それを扱うには特殊な制御装置が必要となる”と言った方がいいだろう。つまり、あの禍々しい鬼の腕は、制御装置代わりとして用いたのである。名前の由来は、ＯＧＲＥ　ＧＯＤ（オーガゴッド）のアナ

グラムで、ＲＥＧＤＯＯＧ（リグドゥオーグ）となっている（読み方が違うとか、言わないでくださいｍ（＿＿）ｍ）

神「以上、ブレイズ・オブ・リグドゥオーグの説明終わり♪　続いて、魔法の説明をすっぞ～」

“オニビダマ”
鬼火玉。グレイが編み出したシューター系の射撃魔法。追尾性と誘導性に長けており、グレイは最大１００発は制御可能

“ウラノゲキ”
温羅の戟。ランサー系の射撃魔法で、鋭く尖った魔力弾の形状で、相手に突き刺さる事が出来る。追加詠唱で、爆発させる事が可能

“ラセツノタチ”
羅刹の太刀。魔力刃形成魔法。自身が持つ武器に魔力刃を乗せたり、或いは自身の腕に魔力刃を形成させる事も可能。その刃渡りは、最大１００ｍ。それまでなら自由に変更ができる。なお、これはフェイトのハーケンセイバー同様、相手の向かって投げ飛ばす事も出来る

“ヤシャノタテ”
夜叉の盾。シールド系の防御魔法。目の前にベルカ式の魔法陣を展開する。が、その硬さは、なのはのスターライトブレイカーを軽く防ぐことが可能な程

“モミジガジン”
紅葉が陣。フィールド系の防御魔法。周囲四方八方に防御壁を展開し、攻撃を防ぐ。強度も文句なし

“ゴズメズノドウコク”
牛頭馬頭の慟哭。直射砲撃魔法。ディバインバスターやプラズマスマッシャーよりも高威力の砲撃。連射性が高く、連続して１０発は撃てる

“オオタケノクサリ”
大嶽の鎖。チェーンバインドを改良した捕縛魔法。相手の真下に魔法陣を展開し、そこから多量の魔力で作られた鎖を、相手に縛り付ける。空中でも発動可能

“イバラギノヒャッキヤコウ”
茨木の百鬼夜行。グレイが有する最高威力の収束砲撃魔法。チャージタイムが異様に短い。それでいてなお且つ、威力がけた違い。魔法陣を自身の前に展開し、その魔法陣の中心を、術師が付き破り、相手へと突撃をかまし、使用者による一撃を当てると、突き破った魔法陣から、百発の砲撃が０．００１秒に一発、連続して射出される。まさに、百鬼夜行。ちなみに、一発一発は、なのはのスターライトブレイカー並である。茨木は“イバラキ”と呼ぶが、ここではイバラギと表記する
補足、これは、コラボ番外編での、“１０８スターライトブレイカー”を参考に作られている

神「イッジョウ。これが、今回アイツが使ったオリジナル魔法並びに新装備です。あと、“ブレイズ・オブ・リグドゥオーグ”は、今後の彼のデフォルト装備になります」

シェ・ヤ・ス「バグ乙」

シェ「なんなの、このブレイズ・オブ・リグドゥオーグっての。本編見たら、アヴァロン装備してんじゃない」

ヤ「負けることは無いんじゃない？」

神「まぁ、確かにね。でも、いいじゃん。バグ目指してんだから」

シェ・ヤ・ス「（コレ以上目指さなくてもいいと思う）」

神「さて、本編でも言ったが、新しい転生者を介入させる予定ですから、読者のみなさん、まだ募集の期限はありますので、これはカッコイイ！！　或いは可愛い！！　というキャラ、どんどん寄せてくださ～い！！！」

ス「そういえば、まだ締め切ってなかったよね、アレの募集」

ヤ「何の事？　と言う方は、＃３３の後書きの方をご覧ください」

神「うっし！！　じゃぁ今回はここまでだ！！　それと、今回でマテリアルズはこのコーナーからいなくなってしまいま～す。理由は、次回本編に出るから」

ス「みんな～、このコーナー、どうだった？」

マテリアルズ「神様がとことん唯我独尊だって事が良く分かった」

神「（。ω。）」

星光「ですが、まぁ楽しかったですし、文句はありませんね」

雷刃「また来たいぜ！！！」

闇王「たまに来る分には、良い所だがな」

煉獄「あ、楽しかった！！　です……」

月夜「ある意味、二度と来たくないけどね、ウフフッ」

業火「……良かった」

金剛「おもしろかったよ～♪」

烈風「ケッ、二度と来るか」

常夜「そこそこ、良かったわよ、オ～ホッホッホッホッ」

ヤ「（やっと、コレでキャラ被りから離れられますわ）」

神「おいおい……それじゃぁ！！　最後の最後だ！！！　お前ら！！！　しっかり合わせろよォォォォォォォッッ！！！！！！」

シェ「それでは皆様、また次回に！！」

神・シェ・ヤ・ス「ばいば～い！！」

星光「さようなら」

雷刃「またな！！」

闇王「さらばだ」

煉獄「ば、ばいばい……」

月夜「さよならね」

業火「……」

金剛「まったね～♪」
烈風「あばよ！！！」
常夜「ごきげんよう」

神「だから！！！！　あわせろって言ってるでしょォォォ

＃４８　マテリアルズ、いらっしゃ～い♪（後半はシリアスだよｗ）（前書き）

更新がまたも遅れてしまい、申し訳ありませんでした

最初のレポート部分なのですが、あんな感じでよいのか、分からないのですが……おかしな点があれば、教えて下さい

あと、＃４２を加筆しました

ムーギネーター様、あんぎゃーす様、ハーディス様、緋水様、白姫彼方様、蒼穹様、Ｋ・Ｈ様。ご感想、ありがとうございます！！！　そして、湊　燐様、蒼穹様。キャラを応募していただき、誠にありがとうございます！！！！

＃４８　マテリアルズ、いらっしゃ～い♪（後半はシリアスだよｗ）

――――そして、とある兄妹（しまい）は、闇が残した残滓と戦い終えて、
安息の日々に戻ろうとした……唯一つの不安と、唯一つの期待を
胸に……――――――

Ｒｅｐｏｒｔ

■事件Ｎｏ.　ＡＰ１４６６５３９７０３　？　Ｓ７５５３７６
■事件種別　遺失遺産による二次災害
■担当　巡航Ｌ級８番艦アースラ
■指揮官　同艦長　リンディ・ハラオウン
■現場主任　執務官　クロノ・ハラオウン

■概要

　事件初動は、第三種管理外世界での未確認結界の感知。
当初その管理外世界にて、今事件の原因ともなった１８５日前の「闇の書事件」の二次災害を警戒していたＬ級８番艦アースラのスタッフによってそれを検出。艦長指示により、当時研修中であった候補生数名、嘱託魔導師一名、協力者一名と共に現場へ移動。
　未確認結界内へ突入した魔導師の証言により、展開された未確認結界は、闇の書の残滓（以後、「闇の欠片」と呼称）が、なんらかの原因で目覚め、それが展開した物だと判明。さらに、現場魔導師

の証言により、その闇の欠片は、「闇の書」という遺失物（※１）の「防衛プログラム」、並びに「無限再生プログラム」を再構築させるために起動したプログラムの一種であるとの報告を受け、現場主任とビビ・スティン指揮官候補生の判断により、それらの駆除を目的に行動を開始した。
（※１　このデータに関しては、事件Ｎｏ．　ＲＴ６７２Ｔ８８Ｕ２５６？Ｈ１７６４９１のレポートを参照）

闇の欠片は、発見された第９７管理外世界（現地名称「地球」）以外の世界にも出没し、、それらの探索と駆除を円滑にするため、各個駆除の行動を開始する。だが、闇の欠片の数が膨大だったのか、様々な世界の魔導師、魔法生物、並びに魔力を持った物質などが被害に会った事が報告されている（幸い、死者の報告は、今のところ０である）

駆除の最中。闇の欠片の中での上位個体、通称「マテリアル」という存在に遭遇。その場にいた現場主任クロノ・ハラオウンを始め、民間協力者、ユーノ・スクライア、フェイト・Ｔ・ハラオウン執務官候補生の使い魔アルフ、八神はやて捜査官候補生の守護騎士魔ザフィーラ、ビビ・スティン指揮官候補生、アースラ所属の嘱託魔導師グレイ・スティンらによって駆除された（他にも、このマテリアルという存在がいたみたいだが、それらは全て、現場にいたアースラ所属の嘱託魔導師、グレイ・スティンによって駆除されたとの報告がある）

だが、そのマテリアルの内の一体（個体名称、「無限の錬装士」）によって、各世界中に散っていた闇の欠片が集まり、「闇の書」は再構築され、「防衛プログラム」並びに「無限再生プログラム」が出現した。それにより、魔導師は全員、急遽現場（第９７管理外世界）に集合し、それの破壊を立案、行動にでようとした。だが、そ

の場にいた嘱託魔導師グレイ・スティンの身に異変が起き、彼女一人の戦闘によって、再構築されたプログラムは破壊され、この事件は解決した

なお、この事件における三次災害の可能性は、今のところ、極めて低いとの見解である

■最終被害結果

重傷者１４２名、負傷者５６３名、軽傷１７２９名、死者０名

■レポート担当　時空管理局執務官補佐
巡航Ｌ級８番艦アースラ通信主任　エイミィ・リミエッタ

※追記…最後の方に記載したグレイ・スティンの異変に関しては、本人は問題無いと主張。検査を拒否し、現在、自宅療養中である

□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■

闇の欠片事件が終わった翌日の昼……スティン兄妹（しまい）のマンション、

リビング

「ワクワク、ワクワク（＊＾―＾＊）」

あぁ……いよいよだよ、いよいよだよ！！！　我がハニーズ、マテリアルちゃん達とご対面だよ！！！　あぁ、楽しみだなぁ、楽しみだなぁ！！！　嫁Ｌｏｖｅ！！！

「ねぇ、まだなの？」

「五月蠅い、少し黙ってろ」

……この日、このマンションの住人であるスティン兄妹（しまい）の内、妹のビビは、心弾ませていた。そう、あのマテリアル達を解放する為であるからだ

開放するだけだったら、直ぐに済む話なのだが、彼女達は皆、元は闇の書のコアの欠片、闇の書を復活させようと動いていた連中だ。故に、その存在はとても不安定で、危険であった。故に、グレイが考えたのは、このマテリアル達を、彼（かのじょ）のデバイス、“スウトクテンノウ”の予備機能、“守護騎士システム”を用いて、守護騎士にするという計画を始めたのであった。守護騎士ならば、シグナムやヴィータ、シャマルらと同様、ビビ自身の“魅了の笑み”の効果対応者であり、成功例もある。故に、この方法を取ったのであった

だが、彼女達マテリアルも、そう簡単に“守護騎士システム”に順応してはくれず、先ほどから延々と作業を続けているのであった

「（ま、俺はただ頭痛めるだけだし、細かい事はデバイスがやってくれるからな……別にどうも思わんし）」

作業を行っているグレイ本人はこう思っており……とりあえず、今はいたずらに時間が過ぎて行くのであった

そして、ついに……

『……全マテリアル、システムへの定着、並びに守護騎士化、成功。ようやく終わったぞ、主』

その作業が、終わりを告げた

「あぁ、そう「終わったの！！？　ねぇねぇ！！　やっと終わったの！！！？」ッ……うるさい」

［ゴチンッ！！！］

「イッターーーーーーーイ！！！！？（＜＿＜）」

ふぅ……久々の拳骨制裁だな

「さてと……とりあえず、出してみるか」

「ワクワク、ワクワク（＊＾＿＾＊）」

「……スウトク」

『了解。守護騎士システム、作動』

［……カッッッ！！！！

「あっはっはっはっ！！　もっとやれ～♪」
「見苦しいにも程がありますわ」
「まぁまぁ、面白いからいいじゃない。クスクスクス」
「ソレをキサマが言うか、塵芥」
「……愚かなり」
「珍しいですね、貴方が喋るとは」
「「……」」

……が、現れ、いきなり、謎の会話をしていたのであった

「な……なんだ、コレは」
「さ、さぁ……（@＿@？）」
『陳の中で騒ぎ出し、騒々しいがゆえに、色々与えたのだが……
……』

あぁ、それで喧嘩になっていたと言う訳か

「なるほど……つまりはこういう事ですね、ワトソン君。あのマテリアルシャマルさんが、マテリアルフェイトちゃんの何かを奪った。と、マテリアルフェイトちゃんは勘違いしており、マテリアルシャマルさんに食ってかかっている。でも、それは別のだれかがそう言う風に仕組んだ罠！！　ということですかな？（、´）」
「知るかボケ」

コイツの頭の中、一度真っ白にする必要があるな。そうでもしないと、治らないかもしれん。ま、とりあえず、今は……

「おい、テメェら。いい加減にしろ」
「「「？」」」
「「「あぁ？」」」

「「「おや？」」」

さて、何を先に言うべきか……あぁ、そうだ

「お前ら、全員言いたい事があると思うが、まず俺の話しを聞いてもらおう……お前らは、俺の守護騎士でいいんだな」

「「「あぁ」」」

「「「はい」」」

「「「えぇ」」」

「「「おう」」」

「……」（コクッ）

うし、一応成功したようだな

「っていうか！！　お前は僕を一撃で落したノッポ女！！！」

「あぁそうだ！！！　テメェ、よくもやってくれやがったな！！！」

「おかえししちゃうよ～だ！！」

と、オツムが低い連中は、こういう反応を

「あら？　コイツ、女のくせに、男の声を？」

「そう言えば、始めてお会いした時は、女性らしい口調でしたはずですが……」

「ふむ……確かに、言われてみればそうだな」

「そ、そう、だね……」

「どう言う事かしら？」

「……」

そして、残りの連中は、最初と違った空気を纏うグレイの姿を見ていた

「……あぁ……そんなら、まず色々聞きたいだろうから、順に聞いて来てくれ」

と、その場で色々と質問をしてきたマテリアル達であった

……その間、どれ位たったのだろうか。グレイは、次々と来る質問の対応に追われた。闇の欠片はどうなったのか。とか、自分たち以外の他のマテリアル達はどうしたのか。とか、自分達は、どうなってしまたのか、とか……そして、グレイの事とか……まぁ、そんな感じであった

そして、その間、妹はと言うと……

「……（す、すすす……素晴らしい！！！）」

なに、なんなの！？　この豊富な属性の数々！！！　星光ちゃんのおしとやか、雷刃ちゃんの天然馬鹿さ、闇王ちゃんの傲慢な態度！！！　それだけでも十分なのに、弱気なアリサちゃんに、腹黒そうなすずかちゃん。そして、クール無口なシグナムに、ブリっ子ヴィータ、アネゴシャマルさん。そして……お嬢様リインフォース！！！　ヤバい、やばすぎる！！！！　みんな、私のストライクゾーンよ～～～！！！！　ウッハッハッハッハッ！！！！　この子達も、我がラヴァーズに加えるべきね！！　うん、それがこの子達の為！！　そう、この子達は、私のモノになるべく生まれてきたんだわぁ～～！！！！

……と、こんな感じであった。ってか、どれだけ広いんだ、君のストライクゾーンは……

「……つまり、闇の欠片と他のマテリアルは全て破壊された」
「そして、私達は貴方の守護騎士となった」
「んで、お前は元男っと」
「そこは強調するな」
「（はぁ……雷刃ちゃんのあの？さ……ヤバい、今すぐにでもお持ち帰りしたい（＊＾π＾＊））」

鼻血をだすな、鼻血を

「んで、他に聞きたいことは？」
「いえ、コレと言って特には」
「あっそ。あぁ、自己紹介が遅れたな。俺は……グレイ・スティンだ」

キタ！！！　今が我が時よ！！！！　フッフッフッフッフッ……さぁ、マテリアルちゃん達～、覚悟はいいかなぁ？　っていっても、聴きやしないけどねｗ　貴方達みたいな可愛子ちゃんは、我がモノになるべきよ！！！！　さぁ、受けなさい！！　私の最強の能力……“魅了の笑み”を！！！！

「そして！！！　私はその妹の、ビビ・スティンで～す！！！（＊＾∇＾＊）　みんな、よろしくね♪」（ニコッ）

さぁ！！！！　見せて頂戴！！　貴方達のその、頬を染めた、可愛らしい恥じらう顔を！！！！

「えぇ、よろしくお願いします」
「うん、ヨロシク～」

「ふん、塵芥が」
「よ、よろしく、お願いします……」
「よろしく、クス」
「……」
「よろしく～♪」
「ケッ、ウゼェガキだ」
「えぇ、こちらこそ」

……あ、あれ？　あれれ？　反応、薄く無い？　な、なんでだろう。なんか、反応が薄い。うん、薄すぎる。はやてちゃん達の時は、顔が真っ赤になるほど染まっていたのに、なんだか、この子達は……あるぇ～～～～（。３。）？

と、ビビが、“なんだかとっても、訳が分かんな～い？”的な表情を表に出しており、顔をしかめていた

「では、私から……私は“星光の殲滅者”です。以後、よろしくお願いします。“ご主人様”」
「え〝？（。Δ。？）」
「……は？」

と、星光の殲滅者が、“グレイ”に向かってそう言うと……

「ボクは“雷刃の襲撃者”だ！！　よろしくな、“マスター”！！！」
「我が名は“闇統べる王”、よろしく頼むぞ、“主”」
「わ、私は！！　れ、“煉獄の殺戮者”です！！　よ、よろしくお願いします！！　ご、“ご主人様”！！！」
「私は“月夜の暗躍者”。よろしくお願いしますね、“マスター”。クスクス」

「私（わたくし）は“常夜の魔導書”。以後、よろしくお願いしますわ、“ご主人様”」

「……“業火の魔騎”だ、よろしく、“主”」

「わたしは～、“金剛の魔騎”でぇ～す♪　よろしくね、“主”ぃ♪」

「“烈風の魔騎”だ。しゃぁねぇから、アンタの騎士になってやるよ、“主”」

「「……」」

ちょっと待って。ねぇ、それは私に向かって言う言葉でしょ？　ご主人様、マスター、主？　良い響きだけど、それをなぜ、お兄ちゃんに向けて言うの？　なんで？　ねぇなんで！！？

「あ、あの～……みんな、私の事、どんな風に見える？」

「？　何のことですか？」

「う～ん……マスターの妹」

「ただの塵芥だろうが。いちいち王たる我に、確認を取るな」

「ただのビッチでしょ？　クスクス」

……あれれれれ？　おかしい、おかし過ぎる。これは明らかにおかし過ぎるし！！

「び、びっちって、何？」

「お前は知らなくても良い事ですわよ、煉獄」

……ちょっとまって～～～～！！！！！

「ねぇ！！　貴方達は私のモノになるべく生まれたんじゃないの！！？　主とかマスターとか、ご主人様とか！！　それは私に言うべ

きじゃないの！！？」
「なんでテメェみたいなガキを主と呼ばなきゃならねぇんだよ、馬鹿かテメェ」
「そうそう♪　アンタとわたしたちのかんけいって、そうじゃないしねぇ～♪」
「……」
「それに、我らの主は、グレイ・スティンであり、妹君の貴方ではありません。よって、貴方との関係は、薄いモノと、私は考えます」
「ガ～～～～ン（＊д＊；」
「……」

あぁ、確かにそうだな。こいつ等は、俺が使い手であるスウトクのシステムで守護騎士になってるんだから、こうなるはずだよな……
……はぁ、面倒なことになりやがったし……だが

「おい妹。どうなっている。こいつ等は、お前の能力でお前のモンになる予定じゃなかったのか？」
「い、いやぁ……そのはずなんだけどね。なぜかこの子達に、アレが通用しなかったの」
「は？　お前の能力だと、守護騎士にも効果があるんじゃないのか？」
「おかしいなぁ（；一＿一）……こんなはずじゃないんだけど、う～ん（＋＿＋）」

と、妹がうんうん唸っている時に

《あぁ！！　それそれ、すっかり忘れてた！！》

とある人物からの念話がきた

「（なんだ、クソ神）」

《いやいや、すっかり忘れてたよ。お前に与えた能力の一つ》

は？　能力？

《実はな、そこにいる妹は、お前の能力を一つだけ考えてなかったんだよ。だから、俺が一つオマケで追加したんだよ》

マジか……で、何を追加しやがった

《えっと……“驚異的なカリスマ”っていう能力でな。お前の男ボイスを聞くと、そいつはお前を気にし出してしまうという……いわば、“魅了の笑み”のアンチスキルのようなもんだw》

……ナンデ、ソンナモンヲ追加シヤガッタ……？

《おもしろそうだからw》

コイツ……はぁ、もういいや。コイツの我儘も、もう慣れたよ

「？　どうかなさいましたか、ご主人様」

「いや、なんでもない……っていうか、お前ら名前はなんだ」

「はぁ？　先ほど申したではないか」

「？……あぁ、あの異名みたいなモンがか……」

それじゃぁ、言いにくいな……わざわざあんな長ったらしいのを言うのも、な……それに、あんな名前じゃ、戸籍を入手する時にあれだし……

「じゃぁ、なんかまともな名前でも考えてやらんとな」

「！！！　じゃぁじゃぁ！！！　私が「塵芥の考える名など、いらぬ」「名をもらうなら、ご主人様から頂きたいわ、クスクス」……ぐすん（；＿；）」

はぁ……大方予想通りの結果だ。だが、なんて名前にするか……適当なのも、気が引けるし……さて、なんて名にするか……あ、そういや……

「……あぁ、そうだ。おい、星光の殲滅者」

「はい、なんでしょう」

「お前には、“リュマ”という名を与えてやる」

「“リュマ”、ですか？」

「あぁ、ヒュムノスっつう語源の中で、“星”を意味する言葉だ」

「星……確かに、私に相応しい言葉ですね。ありがとうございます／／／」

……なんか、変な表情になったが……まぁいいや

「雷刃の襲撃者、お前は“クエーサ”って名乗りな」

「“クエーサ”？　なんか弱そうな名前だな」

「稲妻、輝きという意味だがな」

「おぉ！！　まさにボクに相応しい名前じゃないか！！！／／／」

……はぁ……掌返しやがって

「んで、闇統べる王には、王、支配者の意味を持つ“ディア”の名でいいだろう」

「ほう。王たる我に、王の名を与えるか……フッ、中々良い思考をしているではないか、主よ／／／」

「センスいいかどうかは知らんがな」

さて、次はと……

「煉獄の殺戮者、だったな」

「は、はひ！！　そうです！！　ご主人様！！！」

「（殺戮者って割には、弱気だな……）お前は、そうだな……“シェアク”。ヒュムノス語で太陽、灼熱の光って意味だ」

「“シェアク”……あ、ありがとうございまひゅ！！！　か、かみました／／／」

なんだコイツ……ってか、妹が隣で悶えてるんだが、気にしたらいかん気がする

「月夜の暗躍者、だな」

「えぇ、そうです、マスター。クス」

「お前には“ウィアク”。月の意味を持つ名でいいだろ」

「う～ん……月、ねぇ……なんだか、あの子と似たような名前なんだけど」

「知るか。ヒュムノス語を考えた奴に言え」

「クス、それもそうね／／／」

……もういい、次だ

「常夜の魔導書には、“シアリーフ”」

「な、なんですの？　その葉っぱのような名前は」

「意味合いは、空の書。夜を空と掛けて、夜空の魔導書という風にしたんだが……気にいらんのか？」

「いえ、いいですわ……シアリーフ、空の書。フフッ、素敵ですわ／／／」

気にいったようだな。そんじゃ、次行くか

「業火の魔騎」

「……」

「お前には、“ヴィエーガ”。刃、剣の意味を持つ名を与える。いいな」

「……／／／」（コクッ）

……無口な奴だな。ま、その方がやりやすい

「ねぇねぇ！！　わたしはわたしは！！？」

「あ？　えっと……金剛の魔騎、だよな。お前は……“ガーナ”、だ」

「えぇ！！？　なにそれかわいくな～～～いッ！！！」

「五月蠅い。ヒュムノス語で、岩石、堅きモノって意味だ。キサマの破壊力を表す言葉なんだから、コレ以上に似合う名など無いはずだが」

「……まぁ、主からもらったなまえなんだから、いっか♪　ありがと、主♪／／／」

……なんだコイツ、可愛子ぶりやがって……ってか、クソ妹。お前は何をそんなに悶えている。床に血溜り作るな、鼻血で

「最後だが……烈風の魔騎」

「なんだよ、変な名前つけんじゃんねぇぞ」

「変かどうかは知らんが……お前には“フリュイ”っつう名前を。泉っていう意味だ」

「泉ぃ！？　アタイに最も関係無いじゃねぇか」

「まぁ、元となった奴の……湖の騎士というところからやったんだが……それとも、風っていう意味で、“ヒュフ”にするか？」

「あぁ……フリュイでいいや。ヒュフよりかは、その……マシだ／／」

ふぅ……これで、全員分か……やれやれ、難しい奴らだ

「……うが～～～～～～～ッッッ！！！！！！！！！　やっぱり納得できない！！！　君たちは！！　私の女（モノ）になるべく生まれてきたんじゃないの！！？」

いきなり騒ぐな、この妹は……

「ですから、先ほど申した筈ですわよ。貴方と私達（わたくし）の関係は、軽薄なモノ。それでいて何故、貴方のモノにならなければなりませんの？」

「色々矛盾してんぞ、クソガキ。それに、アタイがお前みたいなメスを、主になんて認めねぇけどな」

な、なんですとぉ？

「……こんな人間が、ご主人様の妹君、なんですか？」

「お前がマスターの妹なんて、信じらんねぇ……」

それはマテリアル達だけではなく、その場にいる本人達や、原作キャラ達。そして読者の皆様。はては作者すら思っている事ですから

「っていうかぁ～、おまえ、きもい♪」

「（@д@；）」

「お前なんて、死ねばいいのに、クスクス」

「あぁ。キサマのような塵芥、消えてしまえばいい」

う……うわぁぁぁ

そして、家を出たビビはというと……

「シクシク、シクシク……（ΤΔΤ）」

「あぁ、泣かない泣かない」

八神家に来ており、家主のはやてに慰めてもらっていたのであった

「にしても、酷いお姉さんやなぁ。そんな性格悪い騎士作るなんて」

「あ、あの～……そもそも、守護騎士を作れるなんて、すごい技術ですよ」

「今や、ロストロギアに指定されても、おかしく無い技術だからな……」

ちなみに、はやて達には、兄（あね）が作った守護騎士達に罵倒され、逃げてきた。と言っていたのである。マテリアル達の事は、ある程度はぐらかしてはいるが……

「とりあえず、今日はうちに泊ったらどうや？　ビビちゃんの部屋、まだそのままやし」

「ホントに！！？Σ（＊Д＊）」

「うん♪　うちは大歓迎や。それに、今日はみんな、本局の方行ってまうし、私一人だけやから」

「あ、ありがと～～～～～～！！！！　はやてちゃ～～～～～～んッッッ！！！！！！！！！！、（ΤΔΤ）ノ」

あぁ、なんて優しい子なんだろう！！！　もうマテリアル達なんてどうでもいい。はやてちゃんこそ。私の嫁だ～～～～～～～ッ！！！！！！！！

……と、言う訳で、ビビははやての家に泊まることになりました。良かったね、ビビ(ヘンタイ)ｗｗｗ

□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■

……その日の晩、スティン兄妹(しまい)が住んでいるマンションの屋上

「……」

そこには、そのマンションの住人の一人、グレイ・スティンの姿があり、その屋上の上で風に吹かれていた

「……はぁ」

ったく、面倒なことになりやがって……なんで俺がアイツらの面倒を見なきゃいけねぇんだよ……妹がなんとかするのかと思えば、俺の方にツケが周って来やがったし……はぁ、最悪だ、もう……今日なんて、一気にメシを作る量が増えるわ、エンゲル係数増えるわ、駄々こねられおかわり作らされるわ……はぁ、めんどくせぇ～

「とか言っておきながら、作る俺は何なんだろうな……」

妹の野郎に押し付ければ良いと思っていたが、なんでこんな事に…

……

「災難だな、青年」

「？」

誰だ？　って、コイツは……

「久方ぶりと言ったところか。いや、数日前に出会ったばかりに、そういうのはあまり不似合いか」

その場に突如現れたのは……数日前、幻世で出会った、黒い鎧の上に赤い外套を羽織い、右腕には籠手を装着した、中年の男性だった

「……アンタか」

「あぁ」

「何の用だ」

「特にコレと言った用は無い。前に言った通り、俺は旅をしている身だ。故に、俺はこの世界に脚を踏み入れたのだ」

……世界を又に旅、ねぇ……

「どうした、疑っているのか」

「……別に。ただ……いいなと、思っただけだ」

自由に、どこでも行けて……自由に、生きていられたら……

「ほう……だが、キサマも自由の筈だ。言っただろう、これは“

お前の物語”だと。お前も、自由に物語を紡げばよいモノを」
「確かに、それが出来たら苦労はしないだろうよ。だが」
「俺と言う名のお邪魔虫がいるから♪　って言いたいのか？」

……クソ神か

「……はぁ。お前は、人の意思を縛るのが得意なのか」

？

「いんやぁ。自由にはさせているつもりなんだけどねぇ……」

なんだ、こいつ等……あぁ、そういや、知り合い、とか言ってたな

突如現れた、彼らを転生させた神。だが、その神は、先ほどまでいた赤き外套の男性と、親しげに話し始めた

「と言っておきながら、お前の言動は常に、相手の心を縛っている。そう、絡みついた鎖のように」
「おいおい。お前も知ってるくせに。それが、俺の本質であり、俺が俺である証みたいなモンだと」
「あぁ……そうだったな。お前はそういう存在だったな」

雑談でも始めやがったし……はぁ、もういいや

「……んじゃ、俺は帰るわ」
「おいおいおい！！　主役がいなくちゃ、会話が成りたたねぇじゃん」

は？　主役？

「当たり前だろ。な」

「知らん」

「冷たいねぇ～……まぁ、別にいいけど♪」

「帰る」

「ちょちょちょちょちょちょ！！！　まってぇなぁ、このイケず～～♪」

……ウゼェ

「まぁまぁ、そう思うなよ。“ウラ”」

「ッ」

「それとも、“ラセツ”と呼ぶか、“ヤシャ”か？　それとも、“ゴズメズ”？」

「……」

「どれも、日本と呼ばれる国に伝え聞かれている鬼の名。なぜ、お前の魔法はその名を冠している」

あんなの、適当に付けただけだし。名前がねぇと、区別しづらいからな

「それなら、普通にランサー０１とか、そんな感じでも良かったんじゃないの～？」

「だが、キサマはそうはせず、鬼の名を、己の魔法に付けた……なぜだ」

なぜって、そりゃぁ

「鬼の名前が付いた魔法を使う。というのは、“己は鬼を従え、そ

れを繰る事で、己の鬼を理的に抑制しようとした”。という所か」
「ッ……」
「でもよぉ、結果的にそれが、“その鬼と成り、その鬼の力を奮う”っていう意味になってるしな♪」
……確かに、あの時はそうだった。そう、このクソ神に変な事をされ、あんな目になって！！！
「おいおい。なんでもかんでも俺のせいにすんなよ。俺だって、良識のある神様だぜ。お前が人間で有り続けるという意思が強ければ、あんな事にはならずにすんだかもしれねぇのによ」
「は……？」
なんだよ、それ……どういう？
「確かに、思考の８９パーセントは停止状態にさせて、そんで興奮状態にもした。が、理性が強ければ……意思が強ければ、あの程度、お前の力でもどうにでもなっていたんだぜ」
な……なに？
「だが、キサマはあろうことか、その残りの理性を、全て攻撃の力に変換していた。あろうことか、己を変化させる詩まで用いてな。それにより、お前は鬼への道へ踏み込んだ」
「残りの１１パーセント、全部魔法やヒュムノスに当てやがって……それで本能くらい、抑えられたはずだぞ？」
……
「そんでぇ？　あの無限の錬装士への止めの時には、俺の介入無し

で、鬼になっちまってたしよぉ……説得力、ねぇぞ」

っ……確かに、あの時、俺は……

「……もう一度言おう。己の本能のままに動き、己が起源を受け入れるか」

――――即ち、“鬼の道”を歩むか――――

「それとも、理性で本能を抑制し、否定し、それに抗い続けるか」

――――つまり、“人の道”を歩くか――――

……鬼か、人か……

「「お前はまだ選択できる、好きな道を選ぶがいい」」

「もっとも、人の道など、もはや戻れないかもな……クックックックッ」

「……」

そう言うと、その場にいた二人の男……神と旅人は、消えていた。まるで、最初からその場にいなかったかのように……

「……」

残されたモノ……選択を迫られた転生者、グレイは、ただその場に立っていた

人であるか、鬼であるか……それら、二つの道の分岐点に立つモノは、ただその場で、立ち尽くすしか、出来なかった……ただ、時だけが、無情に過ぎて行った……

□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■

某所

「……はぁ……はぁ……はぁ……はぁ……はぁ……」

「……っ、うん……はぁ……はぁ……はぁ……」

そしてこの時、とある場所にて、ある人物の“起源”が、完全に覚醒していた……

#４８　マテリアルズ、いらっしゃ～い♪（後半はシリアスだよｗ）（後書き）

～～～神の舞台裏～～～

ヤ「さぁ！！　今回もカミウラ、始まるざますよ！！！」

ス「行くでガンス！！！」

シェ「ふんが～！！！」

神「お前らまともに始めんかい！！！！！」

ス「だって、ダーリンが今回のタイトルコール任すって言ったから、つい♪」

神「この後、もってけセーラー●でも歌うつもりなのか？　そうなのか！！？」

ヤ「お兄様が求めるのでしたら、いくらでも」

［コンコンッ］

メ「はぁ、相変わらず陸の孤島ね、ここは」

シェ「あら、メイリン。お帰り～♪」

神「どうだった？　休暇は」

メ「えぇ、久しぶりにゆっくり読書できて、良かったわ。で、そっ

ちはどうだったの？」

ヤ「色々ありましたわ……えぇ、色々と」

メ「聞いたら負けだと思うから、聞かない事にするわ」

神「つーわけで、メイリンが戻ってきた報告が済んだことだし、アレ、行きますか！！！」

ス「今回のお題は、コレだ！！！」

――――――グレイの能力、“驚異的なカリスマ”について――――――

神「っと、これは俺だな♪　コイツの効果は、まぁ本編と名前みりゃぁ分かるが、“グレイにカリスマ性を感じて、気になって気になってしょうがなくなる”という能力で、効果は“芸能人の熱狂的なファン”くらいの効果だな」

ヤ「それなら、ビビの“魅了の笑み”よりも効果が高いですわね。」

神「対象者は無制限……ってな事はせず、ビビの魅了の笑みを見たモノ以外ならだれでもオケ♪　な感じ」

ス「“魅了の笑み”よりも厄介じゃない？」

シェ「でも、使い手が使い手よ」

メ「今後、滅多に使う事が無くなる能力になりそうね」

神「ちなみに、この能力によってか、煉獄の七姉妹達がグレイの事を尊敬しているんです」

メ「前に、質問されてたわね。尊敬しているんだなって」

ス「まぁ、こんな事情があるんです♪」

シェ「さて、次だげど……ネタ、ないの？」

神「ありません。残念ながら」

作者「ちょっと失礼しま～す」

神・シェ・ヤ・ス・メ「あ、作者だ」

作「……なんだか、私の扱い酷くありません？」

メ「今回は何しに来たの？」

作「えっと……まぁ、前回同様。“コラボ番外編”の予告を」

ヤ「な、なぜそれを？　私達に任せればいいモノを」

作「こればかりは、自分の手で行いたいので。神様にも、許可は取ってあります」

シェ・ヤ・ス・メ「そうなの！！？」

神「まぁ、人様のキャラなんだから、責任者に任せた方がいいと思って♪」

シェ・ヤ・ス・メ「は、はぁ……」

ス「それで、次は誰とのコラボなの？」

作「はい。“白姫　彼方”様の作品、“魔法少女リリカルなのは～ＦＡＮＴＡＳＹ　Ａ　ＣＬＩＳＴＥＲ～”という作品の主人公、“麻井美緒”さんとのコラボになります。ちなみに、彼女は神様なので」

神「……もしや、俺らが出番？」

作「よろしくお願いいたしますｍ（＿＿）ｍ」

神「……ク、クックックックッ……いいだろう。我らの力、見せつけてやるぞ！！！」

シェ・ヤ・ス・メ「おぉ～～～～ッッ！！！！！！！！！！」

作「それでは、皆様方。今回はこの辺りで失礼させていただきます。次回のコラボ番外編、楽しみにしていてください。そして、白姫彼方様。頑張らせて頂きますので、何卒、よろしくお願いいたします」

神「んじゃぁ！！！　今回はこれで失礼するぜ！！！」

シェ「それでは！！」

神・シェ・ヤ・ス・メ「ばいば～い！！」

作「ばいば～い」

神「テンション低いぞ～、作者～」

ヤ「やはり、ダメ人間ですわね」

作「うう……」

コラボ番外編ｖｏｌ．２　神ト神、交ワリ出会ウ（前書き）

どうも皆さん、お久しぶりです、リィーンです

ようやっと完成して、更新する事が出来ました。皆さんには長らくお待たせさせてしまって、大変申し訳ありませんでした

今回は、白姫　彼方様の作品、魔法少女リリカルなのは～ＦＡＮＴＡＳＹ　Ａ　ＣＬＩＳＴＥＲ～の主人公、“麻井美緒”とのコラボになります。白姫　彼方様、コラボのお誘い、ありがとうございます！

緋水様、ムーギネーター様、あんぎゃーす様、蒼穹様、Ｋ・Ｈ様、寝落ちの亜留ジャ野様、けびん様、夕霧麻人様。ご感想、ありがとうございます！！！　そして、けびん様、夕霧麻人様。キャラを応募していただき、誠にありがとうございます！！！！

コラボ番外編ｖｏｌ．２　神ト神、交ワリ出会ウ

――――――トアル兄妹（シマイ）ノ物語ガ描カレルヨリモ昔、神ハアル神ト出会イ、己ガ刃ヲ振ルウ……――――――

……これは、スティン兄妹が転生される以前の話……時は、百数年に遡る……
場所は、世界と世界の狭間の空間

「ふぅ。今日も一仕事終わりっと。帰ってさっぱりしたいわねぇ」

その空間を飛ぶ一人の女性……彼女の名前は、“麻井美緒”。ある世界で、第二位の女神であり、“神殺しの狂い女神”という異名を持つ者である
そんな彼女が、なぜこのような場にいるのかと言うと、神としての務めとして、ある世界の調査を行う為に自ら赴いて行動し、それが無事に終わり、元いた世界に戻る為の岐路に立っていたのである

「う～ん……たまには、のんびり帰ってみようかな」

休みなく仕事をしており、少し疲れが出たのか、ゆっくりしてから帰ろうと思い、戻る速度を緩め、周りを見渡してみた……

「……？　あれ？」

その時、見渡してみた方角にあった世界に、何か違和感を感じた彼女は、気になってその世界に近付いてみた

ソレガ、彼ト出会ウ、キッカケデアッタ……

□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■

「……な、何？　これ……」

彼女が違和感を感じた世界に近付き、そして見たモノが、“異様な術式によって覆われた世界”だった。そう、その世界こそ、後に「おうおうおうおうおう！！！　そこのセクシーな美女様！！　申し訳ないが、ここから先は立ち入り禁止だぜい！！！」

「！！！？」

突如、近くから若い男の声が聞こえた

「（な、なんなの？　変な世界があると思ったら、奇妙な男が現れて……一体、何者なの？）」
「あ、あの～、聞いてますか？　もっしも～し？」
「（……軽。なに、このチャラ男。そんな奴が、なぜこのような場所に？）」
「いやいや。神様である君の前にいるのだから、まずは同族と考えるべきか。それとも、それよりも上位の存在か……クックックックッ」
「同族？　それよりも上位の存在？　なんの事を言ってるの？」
「おろ？　知らないの？　いや、知る訳が無いよな。自分達が一番上位種だと思っている奴が、それよりも格上の相手を認識できる訳が無いからな。クックックックッ」
「……貴方は、何者なの？」
とにかく、まずは相手を知らなければならない。それは、対人関係では必要な事であるから
「う～ん……そうだねぇ。元が付くが、破壊神。」
「！！！？」
破壊神！！？　それは、シヴァさんの位じゃぁ！！　でも、元？
「であり、“破滅神”であり、“崩壊神”であり、“支配神”であり、“救世神”であり……また、“終末”を司る神でもある」
「？」
何？　それらの位……あまり、聞いた事がない位ばかり……
「……今度は、とぼけずに答えてくれないかしら」
「ふむ……うし。なら名前を名乗ろう。俺の名は……あ

ぁ、そうだな。偽名だけど、“シャドゥネル・リバリアース”。ま、“シャドウ”って呼んでくれ」
「……」
シャドウ……って
「偽名じゃ意味が無いでしょ」
「う～ん（ー―ー）　普通のツッコミだなw　もうちょい捻れよ」
「……はぁ。もういいわ。それよりも、あの世界は何？」
と、彼女が指差したのは、あの違和感を感じた世界。今も、その違和感は消えず、その世界を覆っている
「あぁ、アレね……別にどうでもいいだろう？　君には、関係無いんだし」
「いいえ、関係あるわ。神として、知っておかなければならないからね」
「……ク、クックックックックックッ」
「？」
なに？　何がおかしいの？
「お前さぁ。いや、お前ら、か？　神だからって、なんでもかんでも知る義務があるとでも思ってんのか？」
「……どういう事？」
「いやぁ。ただ……自分達が種のトップ、頂点に立っていると思っている連中を見てると、可笑しくてなw」
「……そういう、貴方は何なのですか。神を見下す貴方も、先ほど神を名乗っていましたし」

相手を睨みながら、美緒は毒がたっぷり詰まった言葉を吐き、男を威圧しようとした。が

「クックックックッ。言ったじゃん、元、ってな。それに、便宜上、神を名乗っているがな」

虚無的な……ニヒルな笑みを浮かべながら、相手を見下していた

「あぁ、それと……勝手に探りを入れないで欲しいねぇ。アレに」

「！！！？」

な、なんで！！？

「何故分かった？　って顔してんなぁ。クックックッ、期待通りのご反応、ありがとうございま～すｗ」

彼女がしようとした事。それは、彼と話をしている間に、自身の能力、次元干渉を行い、あの世界を調べようとしていたのだ。かなり複雑な、それも感知することですら出来ないくらいに隠蔽したはずの術式を、彼は見破ったのだ。それも、何かを行った素ぶりを見せず、まるで自身の体に触れられたような感覚で、だ

「さて、コレ以上あの世界に関して触れられると、厄介だからな。特に、お前のような、“時空管理局”、それも“機動六課”の連中と関わっていた奴は、特にな」

「！！！　なぜ、ソレを！！！？」

どうして？　なんで彼はそこまでの事を知っているの？　記憶を読める能力？　それとも、何か他の？

「ってなわけで、悪いが……死んでくれ」
「ッ」

と、彼が腰から何かを引き抜くような姿勢を取ると、彼女も戦闘態勢に変わっていた。彼の口元は笑っているが、瞳が笑っていない、その表情から、本能が危険信号を発していたのである

「出でよ、我が刃。“万死ヲ刻陰セシ虹”」
［バシュンッ！！！　ジャギンッッッ！！！

「無駄無駄ッ！！！」

［ガキガキガキ

！！！！！」

と、それら瘴気は全て、彼の右腕の内に収束されていった

「何よ。詠唱もしないと、魔法が使えないの！！！？」

［［［［［［ゴゴゴ

彼もまた、右腕に収束した瘴気を扇状に広がるように放ち、彼女が放った魔力砲、それら全てを呑み込まんとしていた

「！！！？」

「我が闇に飲まれなッ！！！！」

「ドパアアア

はアナタという番人がいる……」
「……」
彼は、黙って彼女の言葉を聞いていた。その表情には、笑みが無かった
「聞くわ。一体アナタは、あの世界で何をしようとしてるの？」
その言葉を聞いた瞬間、彼から感情が消えた
「……お前、生かしておけんわ」
「！！！」
［ゾクッ］
彼の口調は、無感情な、無機質な……まるで、機械が発したような電子音のような……そんな、抑揚のない、淡々とした口調へと変貌した。その言葉に、彼女は一瞬、身震いをした。コレは、危険だと
「放置しておけば、俺の計画の障害となる。なら、そんな不穏分子は、排除しなければな」
［［［［［［［［［［バッ！！！！］］］］］］］］］］
「！！！？」
と、突如周囲に九人の人影が現れ、それら一つ一つの影には、彼に勝るとも劣らぬ、強い殺気が込められていた
「ッ！！！」
［バッ！！！！］

彼女は、それら全ての攻撃からなんとか回避し、その人影達を睨みつけた

「ッ、仲間？」

「……いいや、“嫁”や」

「はい？」

襲ってきた人影の一人がそうつぶやくと、彼女はその人影達を見た。確かに、嫁と言っている通りなのか、全員が女性。それも、２０後半の女性から、高校生位、そして１０歳児のような体型の少女まで……

「中々鋭いねぇ、アンタ」

「ですが、それが命取りになると言う事は、ご存じないのですね」

「うちのダーリンに目を付けられるなんて、可哀想だね」

「あの人をその気にさせたら、結構面倒よ」

……ふざけてる、ってわけではなさそうね。でも、こいつ等も、強い

「旦那様の計画邪魔しようってんなら、容赦はしないよ！！！」

「あぁ。テメェのような奴、ブッ飛ばしてやる！！！」

「ふん。まぁ、痛くはせん。永遠に眠ってもらおう」

「そうですわね」

そういうと、彼女達は、それぞれの獲物……一人はクレイモアと呼ばれる両刃剣を二振り、一人は彩色が施された大鎌を、一人は投擲を考慮された槍を、一人は刃が付いた弓を、一人は刺突を考慮された槍を、一人は金色の大型のガントレットを、一人は黒い傘のような槍を、一人は虎を意匠された弩を、そして一人は、漆黒に

塗られたレガースと呼ばれる脚鎧を……それぞれが装備しているモノを、構えた

「ッ……」

一対十。卑怯にも程があるわね……でも、この程度なら！！

「勝てるつもりでいるのか？　キサマ」

「？」

「この力量差を見ても、先ほどの攻撃を見ても分かると思うが、お前ら神如きでは、我々には勝てない。そう、神如きではな」

「そう言うアンタは、神じゃないの？　神と呼ばれる存在ではないの？」

「あぁ、違うね」

「な……」

神では、“ない”？　なら、彼は何者なの？

「おしゃべりが過ぎたか……そいつを殺す。力を貸せ、我が麗しき刃達よ」

「「「「「「「「「「はい……」」」」」」」」」」

「ッ……！！！」

来る……防御を

「……」

「スッ」

「ッ……ん？」

「「「「「「「「「「

アレ？　何も、仕掛けてこない？

「レヴェッカ」

「はいな……“着装”」

［ポウッ……ッ、バシュッ！！］

「？」

何？　アレ……刀の、柄？

彼の妻の一人が、その身を刀の柄のような形状へと変化し、彼はそれを手に持ち

［……ジャラッ！！！］

「（今度は、鎖？）」

ソレを持っている彼の手から、八本の鎖が現れ、それらが全て……

……

「我に縛られし愚かな女達……その身を刃と化し、俺に振るわれろ」

［［［［［［［［［ジャラジャラジャラッ！！！　バシィィィィッ！！！！］］］］］］］］］

「「「「「「「「「ッ！！　うあぁぁぁッ！！！！」」」」」」」」」

「な……」

それら全てが、彼の妻と呼んだ女性たちに、縛り付けられた

「仕上げだ……やってくれ、我が最愛の妃よ」

「はいよ……“着装連鎖”」

［［［［［［［［［ポウゥ……ッ！！］］］］］］］］］

「「「「「「「「うッ、うあああああぁぁぁ

「「「「「「「「「うッ、くぅぅっ……ッ、はあぁぁぁぁぁッッ！！！！！！！！！」」」」」」」」」

……“わらって、る”？

「何？　その子達、M？」

「まぁ、そう言うな。こいつ等は、俺が与えるモノ全てに喜びを感じるのさ。そう、“俺の愛”を一身に受けることに、快感と悦楽を……つまり、“嬉しい”のさ。俺を感じる事を」

「……」

歪んでる。なんて、歪んだ……

「愛と言うのも、人それぞれに存在する。お前も、娘たちに愛を与えるのと同じように、俺も彼女達に、愛を与えるのさ」

「ッ！！！！　キサマ、なぜ……まさか、記憶を！！？」

「さぁ？　どうだろうなぁ……」

彼は、未だに無表情な顔をしていた。それは、彼女達を苦しめていることへの苦痛の面なのか。それとも、それは何時もの事だと、気にしていないからなのか……

「「「「「「「「「

と、女性達の身体が光ると……そこに現れたのは、美しく光り輝く刀身。色取り取りな輝きに、その刀の身は綺麗な曲線を描き、刃こぼれなど無い、芸術品としてあるような業物だった。が、その刀身には柄が無く、唾があるはずの部分には、無骨な鎖に巻きつけられ、その周りには傷が幾つも付けられていた

「これぞ、俺の愛の形だ……彼女たちは俺によって傷付けられ、俺にしかその傷を付けさせてはいない……俺だけの、“刃”達……そう、俺によって振るわれる、“憐れな女共（ファッキンマムズ）”さ」

「……狂ってるのね、アンタも、そしてアンタの妻達も」

「狂うさ。何百、何千、何万、何億、何兆……もはや、時を数えるのが面倒どころでは無いほどに、生きていればな……」

［チャキッ］

［［［［［［［［ジャギンッ！］］］］］］］］

と、彼がその手の柄を握りしめ構えると、それに呼応して刃達も、彼の周囲を、まるで寄り添うように……縋りつくように、浮遊し始めた

「我が“希望の猛虎”よ」

［シュキンッ！］

その柄に、一人の女性が変化した刀身がピタリとハマり、そして

「行くぞ」

［ダシュンッ！！！！］

「！！！」

彼女に向かって、突進してきた

「ッ！　このッ！！！」
［シュキンッ！！！］
「ハァッ！！」
「ヤァッ！！」
［ガキイイイ

その後、隙が出来た所に、彼が持つ刃で彼女を切り裂き

「斬光(スラッシュ)ッ！！！」

［［［［［［［ザシュザシュザシュザシュザシュザシュザシュッッッ！！！！！！！！！！］］］］］］］

浮かぶ刃が、再び彼女を……今度は切り裂き

「旋風(ウィンド)ッ！！」

［ブルンッッッ！！！！！！！！！！！！］

［ブオオオオオオオォォォ

身近にいて、自身が巻き込むにも関わらず、彼女に電撃波を浴びせ

「割殺（ディバイド）……！」

［ザシュンッッッッ！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！］

だが、彼は間髪いれずに、手にした刃に力を入れ、彼女を一刀両断の下に斬り伏せ

「……撃（エンド）”」

［ズドオオオオオオォォォ

？えぇ。お兄様に適うモノなど、この世界にはおりませんわ？
？でも、実際に二人ぐらいいたよね♪　あの人と彼と？

などと、ほのぼのと呑気に会話をしていｔ「解放する」

「？？？？？？？？？？！！！？　？？？？？？？？？？」

ふと、先ほど殺ったはずの女性の声が聞こえた

「勝負を決める！！！」
［バシュッッッ！！！！！！！！！！！！！！！］
「なッ！！？」

突如、爆煙から一条の閃光が煌き、その閃光は彼に向かって

［ズドンッッッ！！！！！！！！！！］
「グホォッ！！！？」

直撃し、そのまま彼を遠くへとブッ飛ばした

「風と共に、駆け抜けるッッ！！！！！！！」
［ゴオォォォォッッッ！！！！！！！！！！！！！！］

「ッ！！！？」

爆煙から出てきたのは、先ほど倒したと思っていた女性。それが、
ブッ飛ばされた自身目がけて突撃を仕掛けているのを見た直後

――――秘技ッ！！“シャドウ・モーメント”ッッッ！！！！！！！！！！！！――――――

［ズガアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアンッッッ！！！！！！！！！！！！！！！！］

防御する間も無く、その突撃の直撃を受けた

「グゥゥゥゥゥッ！！！？？」

？お兄様ッ！！！？？

？ダーリンッ！！！？？

彼は大きく吹き飛ばされ、なんとか体制を立て直し、彼女を睨みつけながら

「ッ……やるな、テメェ」

「……殺すつもりで、やったんだけど……浅かったかしら？」

互いに、言葉を交わしていた

「こっちこそ、アレで沈められたと思ったんだが……何故生きてる」

「私の力の一つよ。最も、こうなると反動がきついから、あんまりやりたくなかったけど……アンタを殺るには、本気で行かないといけない気がしたからね」

出し惜しみしてたら、一瞬で落される。そう、感じる……

「……クッ、クックックックッ……」

「？」

ふと、彼は笑みと笑声を上げた。それは、喜々として、嬉々として……“鬼気”とした、狂喜の笑みを

「いいねぇ。まさか、アイツら以外にも、俺に本気を出させる奴がいるとはなぁ……クックッ、面白い」

［ジャギンッ！！］

「良いぜぇ、殺り合おうぜ！！！　断罪と復讐の女神さんよぉッ！！！！」

狂喜に満ちた彼の笑みと挑戦。それに対して、彼女は……

「えぇ……イキましょうか！！！　六つの権能を持つ神！！！！」

……彼女も、狂喜に染まった笑みで、ソレを返した

［［ダシュンッ！！！！］］

「「ハアアア

ッッ！！！！！！！！！！！！！！！」

激突した

「ッ……！！！！！」

「くぅッ……！！！！！」

「ガキッ、ガキッ……ガィィィ

［ズドドドドドドドドドォオオオ

防御に専念している中、彼女は周囲に彼と同様の刀剣を創り出し、

「いけッ！！」

［［［［［［［［［バシュッッッ！！！！！！！！！！！！！］］］］］］］］］

それらを射出し、全てが彼に向かって行った

「俺の真似事か？」

？そんなもん、ウチら無意味やで？

？えぇッ！！！？

［［［［［［［［［チャキッ！］］］］］］］］］

だが、彼らもそれに対抗すべく、浮かぶ刃達が構え

［［［［［［［［［バシュッ！！！！！］］］］］］］］］

迎撃する為、突撃した

［［［［［［［［［ガキィィィ

ろうとした

？ったく、かなり手ごわくね？　コイツ？

？ここまで、この方と互角に渡り合えるとは……あの人と同レベルか、或いは？

？いや、ソレは無いと思うよ？

？ですが、中々やるようですわね？

彼の刃達は、彼女のその強さを、称賛した。己が愛するモノと、互角に渡り合える存在が、この世にいた事を……

「……さぁってと、デカイのを一発、お見舞いしてやろうか」

［キュイイイ

彼女も、己の最高の一撃を与えるべく、腕に魔力を収束させ始めた。
そして、互いに己の渾身の一撃を放つ準備が整い……

「フッ！！」
［バッ！！！］
「はッ！！」
［バッ！！！］

狂神の二人が、破壊の光を、世界に照らした

――――――“ダークネス・スターライト・ブレイカアアアアアアアアアアアアアアアーーーー”ッッッ！！！！！！――――――

――――――“轟滅！！　一撃！　一閃ッ！！！！！　デストラクション、ブレイカアアアアアアアアアアアアアアアーーーー”ッッッ！！！！！！――――――

［［ゴオオオ

オオオオ

「やあアアア

「え……？」

その第三者を見た瞬間、その身が固まった。なぜなら、その第三者は、今まで対立していた男と、“容姿が全く似ているからだった”

「何のつもりだ、“ゼルナ”」

「……いや。コレ以上、アンタの犠牲者を増やしたくないだけだ」

［スッ］

「？」

と、第三者は、彼女の方へ手を向けて……

「お前は帰れ」

［バシュンッ！！！］

と、彼女……美緒を、その場から消した

「……おい、なんの真似だ」

残った方……彼は、第三者に食ってかかった

「どういうつもりだ。“総意”たる俺に刃向かうのか？　我が“六冠”よ」

「……」

［スッ］

そう彼が言うと、第三者は、まるで信仰者が神に祈るかのように、彼の前で頭を垂らし

「いや。アンタの手間を、俺が背負っただけだ。気にしなくていい、アイツは二度と、ここにはこねぇよ」

行動とは真逆の言葉で、それを返した

「……もういい。興が削がれた、俺は帰って寝る」

［バシュンッ！！！！］

そう彼が言うと、そのままどこかへ転送した。そして、残った第三者は、後ろに振り向き……

「……手荒なまねをしてすまねぇな、美緒さん」

「……」

いつの間にか、その場にいた彼女に話しかけた

「一体なんなの、彼と、貴方も……それと、あの世界も」

「……答えられねぇ。だが、これだけは言える。アイツにコレ以上関わったら、その身をアイツに捧げることになるぞ」

「はぁ？　どういう事？　私が彼に惚れるとでも？」

と、第三者に食ってかかると、男は

「ある意味そうだ。彼には、他者を引きつけ、縛り付ける力を持つ。それが、彼の力でもあるからな……」

「……そう言うアンタは何？　アイツと姿が似ているのは、どうして？」

彼女は、最もな質問をした。が、彼はそれに答えるまでもなく

「……帰るといい。アンタの娘が、まってるんじゃねぇのか？」

［バシュンッ！！！］

と言うと、彼もその場から消え、そこには、美緒一人しかいなくなった……

「……」

確かに、彼からは危険な匂いがした。おそらく、彼が本気で戦ったら、まず私の方が負ける……いえ、勝てないわ。彼の力は、おそらく神を、いいえ、概念や理論、空想上の仮定すら、超越してるかも知れないわ……そう、なぜなら、彼は……

「……この事は、報告しない方がいいわね」

と言うと、彼女もその場から、姿を消した……

コレは、とある神と、とある神同士が出会った物語である……

コラボ番外編ｖｏｌ．２　神ト神、交ワリ出会ウ（後書き）

作者「カァァァァァァァァァットッッ！！！！！　はいおっけーでぇーす！！！」

神「ふえぇぇぇぇ、ちかれたじぇ～（－Δ－）ゞ」

ヤ「お疲れ様でした、お兄様」

ス「みんなもお疲れ～」

メ「美緒さんも、お疲れ様でした」

美「え、えぇ……（何？　この和やかな空気は？）」

神「つか、おいクソ作者！！！　なにこんなに長い事待たせてるんだよ！！！！！　一体何テイクしたんだよ！！！！！」

シェ「軽くテイク１５はしたんじゃない？」

（因みにこのテイク数、執筆の際、私が壱から書き直した回数の事です）

作「はい、すみません、申し訳ございません……どうも書いても私が納得できる内容ではなかったので、はい……」

神「それでも！！　これは無いだろさすがに！！！」

作「いや、せっかくのコラボなので、自身が納得できる内容にしたかったのです！！！」

ヤ「最後はかなり強引、かつグダグダですわよ」

作「ぐふッ！！……カスタム」

神「ハッハッハッ！！　ザ○とは違うのだよ●クとは！！　って何言わすんじゃボケ！！！！」

美「……なに？　このカオス空間は」

シェ「あぁ、まぁここでのいつもの風景よ。キャラに支配権を握られ、尻に引かれてるのよ、ここの作者は」

ス「ちなみに、ここでの位は、神様がトップで、私達ラヴァーズが二番。で、本編の妹ちゃんが三番目。お兄さんが四番目で、作者さんはその次なんだって」

メ「権限使えば、二番目になるけどね」

美「それでもトップじゃないの！？」

神「あぁ。俺が、この俺が！！　この作品を導く、カミサマだ！！！」

嫁ズ「リボ○ズ乙」

神「……（・ω・）ショボーン」

美「（一体、ここのトップは誰なの？）」

作「ゴッホン。えぇ、それはさておき……読者の皆様方。更新がかなり遅れてしまい、大変申し訳ありませんでした。そして、コラボのお誘いをくれた白姫　彼方様。このような粗悪品になってしまい、更に勝手に美緒に必殺技を付けさせてしまい、大変申し訳ありませんでした。」

神「しっかしまぁ、またフラグだらけの話になったな」

ス「ねぇ、こんなフラグだらけで大丈夫なの？」

メ「大丈夫じゃないわ、問題よ」

美「えぇ、問題ね」

作「君まで言いますか！！？」

美「だって。これじゃぁネタバレと大差無いわ。むしろ、予測しやすいじゃない、今後の展開が」

ヤ「えぇ、そうですわ。コイツのフラグは、もはやフラグじゃなくネタバレ級ですわ」

作「だ、だって！！　書いてるとついやってしまうんだもん！！仕方ないよ！！　自然とこうなってしまうんだから！！　そう、これは！　私はね、テンションが上がっちゃうと、ついやっちゃうんだ♪　ってな奴と同じくらいの事なんです！！　ですから！！！」

神「ゴチャゴチャうるせぇ！！　男なら背中で語れ！！！！　“神様ビーム”ッッ！！！！！」

［ゴオオオオオォォォ

オオオオオオオオオオオオオオオオッッッ！！！！！！！！！！！！！」

作「ぎゃぁ～～～～～～～～～～～～～～ッッ！！！！！！！！！！！？？？？？」

ス「さすがダーリン。テイルズオブの新作の秘奥義を使うとは、時代の先をいくねぇ」

美「……ふ、フリーダム、ね」

ヤ「これが、お兄様クオリティですから」

美「あ、あぁ、そう……」

――――数分後――――

作「ううう……で、では、時間もそろそろなので、今回はこのへんで失礼させて頂きます」

神「次回は本編に戻る予定だから、楽しみに待ってろよな！！！！」

ヤ「そして、今回コラボして下さった白姫　彼方様の作品、“　魔法少女リリカルなのは～ＦＡＮＴＡＳＹ　Ａ　ＣＬＩＳＴＥＲ～”も、よろしくお願いいたしますわ」

メ「それでは皆様、また会う日まで」

神・美・シェ・ヤ・ス・メ「ばいば～い！！」

作「失礼します」

神「おい、テンション低いぞ、クソ作者」

ヤ「本当にクソですわね」

ス「ホントホント」

メ「コラボ書く資格、無いわね」

作「うぅ……すみませんm（＿＿）m」

お知らせ　っていうか、警告

皆様、おはようございます、こんにちは、こんばんは。リィーンでございます

毎度今作品、“魔法少女リリカルなのは　～とある兄妹の転生物語～”をご覧いただき、誠にありがとうございます

本日は、あるお知らせをする為に、このような文章を書かせて頂きます

長期休載とか、そのようなモノではございませんので、ご安心を

はい、タイトル通り、警告です。はい、“警告”です！！！

（大事な事なので、二度言いました）

なにをそんなに警告するのか。えぇ実は、次から第二章　三編に移行するのですが、そこで描かれる内容が過激、卑猥、かつ性的描写

がギリギリアウトな物になりかねないのです（いや、そこまではいかないかも）

さらに、原作キャラ×オリキャラとの絡みになるので、〇〇〇は俺の嫁！！！　と本気で思っていらっしゃる方。また、そのような描写が苦手、毛嫌い、または“精神年齢１８歳以上”でない方は、見ない事を推奨します。はい、マジですから

因みに、空気ブレイカーと成りうる“神の舞台裏”も、しばらく休載とさせていただきます。このコーナーを楽しみにしている方々には、大変申し訳ございませんが、何卒、ご容赦ください

言いましたよ、私は言いましたよ！！！　それでも見たいと言う方は、相当な覚悟と強い精神力を持って、次話をご覧ください。では、失礼します

お知らせ　っていうか、警告（後書き）

～～～神の舞台裏～～～

神「ちょっと待てやクソ作者ァァァァァァァァーーーーーーーーッッッッ！！！

ヤ「お、お兄様！！！？」

ス「ダメだよダーリン！！！！！」

シェ「これはあのクソ作者の策略よ！！！！　惑わされちゃダメ！！！！！」

神「ふむ……どのような出番に配置されているのか、期待してるぞ、作者！！！！！」

メ「現金ね」

ヤ「お兄ザマぁぁぁ～……」

ス「ううん、ダーリンがいいように丸め込められた～～～……」

神「なわけあるか！！！！！　俺が出ても、我が可愛い妻たちと一緒じゃなきゃだめだ！！！！！」

ヤ「お、お兄様！！！」

ス「ダーリン！！！」

神「ってなわけで、次回から復帰するまで、カミウラは短編集として連載させる事を、ここに宣言するッッ！！！！！！！」

［パンパカパーーーン！！！！！］

シェ・ヤ・ス「おぉおおお！！！！！！！」

メ「……ねぇ、そんな事をして大丈夫なの？」

神「大丈夫だ、問題無い」

ス「じゃぁ、何か特別な事をしたいよねぇ……」

神「この際だ。前作で出てきた奴らでも呼んで、テラカオスな空間にしようぜ！！！」

シェ「サンセー！！！」

ヤ「良いですわね、それは」

神「と言う訳で、次回から同時進行で始まる、“神の舞台裏　～出張号～”！！！　こうご期待！！！！」

ス「それではみなさん！！！　出張号で会いましょう！！！」

神・シェ・ヤ・ス・メ「ばいば～い！！」

作「……なぜこうなったし！！！？」

＃４９　それはある夜の出来事　夜天の少女と、転生者（前書き）

前回のお知らせ通り、今回からかなりアウアウなモノになりますので、ご注意ください
特に、“はやては俺の嫁”！！！　とおもっていらっしゃる方は、要注意です

カミウラ出張号は、１２月１４日午後１０時頃に掲載します

ムーギネーター様、あんぎゃーす様、ｎｏ　ｎａｍｅ様。ご感想、ありがとうございます！！！

#４９　それはある夜の出来事　夜天の少女と、転生者

――――――そして、とある兄妹（しまい）の妹は、心優しき夜天の王たる少女と、気持ちを交わし合い、そして……――――――

……青空広がる荒野

「……かつて、この世界に住まう人間達は、皆ある二人の人間から生まれたとされている。キリスト教の聖書では、“アダムとイヴ”。日本の古事記で言えば、“イザナギとイザナミ”……まぁ、どちらでもいい」

そこにいる男……神様は、空に広がるモニターの一つを凝視しながら、ため息交じりに言葉を放っていた

「その二人の男性と女性の二人によって、人間は生み出されたとされている。そう、人は皆、男と女という関係に囚われている。子孫を残す為か、或いは、種としての存在の維持の為か、或いは……ま、人間じゃない俺にとっては、どうでもいいけどな。クックックックッ」

皮肉下に、自嘲気味に笑った後、再び視線をモニターに戻した

「だが、その関係に囚われないモノがいる……そう、“人としての摂理から外れ、忌み禁じられたモノ”……“禁忌”」

［ウォン］

彼が凝視していたモニターが大きく展開され、そこに映しだされたのは……二人の少女

「それは、実に厄介なモノだ。人としての摂理にまったく左右されず、禁じられたモノに興味を抱く……摂理に従う者からは、忌み嫌われる筈のモノだ。だが、それがもし、他者を撒きこんだら？他者に、その一部が“刻まれたら”？」

モニターに映し出された二人の少女は、特に片方の少女は、どこか満たされたような表情で、荒い息遣いをして、ベッドの上にいた

「クックックッ。そう、楽園（エデン）にある禁断の果実をかじってしまえば、二度と元には戻れない……あぁ、一度墜ちれば、一度その快楽を覚えてしまえば、もはやそれ無しにはいられない。生きて行く事など、無理になってしまう……」

男は、その様子を愛でるように眺め……

「……いやぁ、やっぱり“百合”っていいなぁ♪」

［だら～～～～ッ！！！！］

鼻血を出していたｗｗｗ

□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■

■□■□■□

思って」
「あぁ、せやな。もう、脚はなんとも無いんやしな」
だよね。なんだか、淋しいな……
「……そういえば、もう一年以上も経つんだね」
「何が？」
「ん？　私が、はやてちゃんと出会ってから、もう一年以上も経ってるんだなって」
そして、それは即ち、私とお兄ちゃんが転生してから、もう一年以上も経っていると言う事でもある……うん、早いなぁ
「……？　どうしたん？　ビビちゃん」
「え？　う、ううん。何でもないよ。気にしないで」
「ほーか？　ほなら、ええけど」（ニコッ）
「っ！！」
はうううううう！！！（＝／／／∀／／／＝）　可愛い！！！　はやてちゃんの笑顔マジ可愛すぎる～～～～～～ッ！！！！！　ヤバい、ハグしたい！！　ハグハグしたい～～～～！！！！！！！……
……って、落ち着け私
「さてっと。ほなら、もう寝よか」
「うん♪」（ニコッ）

□■□■□■

――――――この世で、一番好きな子の表情なんだから――――――

「……え……ビ、ビビ、ちゃん？」

「？……あ」

し……しまったァァァ

違う。ソレじゃなくて……

……うん、もう、言っちゃおう……

「……ううん、違うよ」

「え？」

「……私は、はやてちゃんの事が、好き。ううん、愛してる」

「っ……ビ、ビビ、ちゃん？」

「私、女の子だけど……初めて会ったときから、私ははやてちゃんに、一目惚れしちゃったんだ」

それは、前世の時も同じ……そう、初めてA、sの一話を見た時。初めて、テレビにはやてちゃんが映った時……私はこの子に、恋をしてしまった。テレビの向こう側にしか存在しない少女を、恋人にしたいと、そう、思ってしまった……

それが今、目の前にいる。初恋の少女が、今私の眼の前にいる。触れられる場所にいる……

だから、私は伝える。この想いを、この子に伝えたいから……

「私、ビビ・スティンは、あなた、八神はやてを、恋人にしたい」

「……」

もはや、それは止められる事は、出来なかった。溢れだしたバケツの中の水が、一気に押し流れるように、その思いを、ぶちまけてしまった……押しとどめることなど、出来なかったのだ

「……ビビ、ちゃん……」
［トクン、トクン、トクン……］

それを……告白を受けた少女の心臓は、静かに脈を打っていた……

告白された。生まれて初めて、真剣に好きだと、そう言われたからだ。故に、彼女の心の中は、揺れていた

……否、違う。揺れてなどいない。そう――――

「……あ、えっとな、ビ「……って、なに言ってるんだろうね、私」ッ、ビビちゃん？」
「ダメ、だよね。女の子同士の恋なんて、普通の人からしたら、変、だよね」
「ッ！！！」

少女は、告白した少女の、その悲痛の表情を見て、心を痛めた。それは、今自分が、最も、みたくないモノ、だったからかもしれないから……

「（……嫌。嫌や……そんな……そんな表情、せんといて、ビビちゃん……）」
「……じゃ、じゃぁ、私、別の部屋で、寝るね」
「！！！？」
「おやすみ、はやてちゃん」

そう言って、ベッドから起き上がり、出て行こうとした

――――この時の少女の行動が、後の全ての未来を、決めてしまった……己と、告白した少女、家族である三人の騎士達、自身の友人となった少女達、己が救いたかった融合騎……それら全ての、運命を――――

［キュッ］

「！！！？」

「あ……」

少女は、出て行こうとするビビの袖を掴み、その行動を止めた。ここでこうしなければ、後に一生、後悔すると、そう思ったから

「……はやて、ちゃん？」

ビビは無論、その行動の意味が分らなかった……訳ではない。そう、コレは……

「……あかん。出てったら、あかん」

「……」

少女の言葉は、どこか弱々しく、だが、確固とした意思が、込められていた

「……」

うん。これでようやっと、はっきりした。私も、ビビちゃんの事が……

――――揺れてなどいない。そう、八神はやてもまた、ビビ・スティンの事を、友達としてではなく、それ以上の存在として、愛しているからだった

今まで、自分に優しくしてくれた少女。笑顔を素敵な少女を。長い孤独を打ち破ってくれた少女を。家族である少女を。そして、自身をたすけるために、その身が傷付いてもなお、立ちあがるその強い少女を……自分もまた、好きだから。愛しているから……

だから、好きだと言われた時、愛していると言われた時、恋人にしたいと言った時……少女の心は、喜びに満ちたのだ

「……私も、ビビちゃんの事、好きやで」

「……で、でも、ソレは友達としての「ううん。きっと……いや、絶対、ビビちゃんの言う好きと、まったく一緒の好き。私、八神はやても、あなた、ビビ・スティンの事が、好きです」っ……！！」

［パリン］

何かが、弾けた……私の中の何かが、一瞬にして、砕けた気がした……

「……はやて、ちゃん……」
「ビビちゃん……」
もはや、この二人は、止まれなかった。もう、ここまで来てしまったのだ。だから……
「「……ん」」
［チュ……］
唇を、触れ合わせた……
「「……」」
暫く、二人はそのままの状態のまま……長い口付けを交わし合った
「「……ん、んあ」」
……嬉しい。なんだろう、この満たされた感覚は……私、はやてちゃんと……キス、したんだ……
「……ねぇ、はやてちゃん」
「ん？　なに、ビビちゃん」
「もう一度、キス、しよう」
「……うん」
少女は、断る事無く……逆に、それを待っていたかのような笑顔で、それに答え
［チュッ］

再び、キスを交わした

「「ん、んん……ん……」」

……あぁ、ダメ……頭の中、ボウっとする……あぁ、もっと……もっと、はやてちゃんを

「ん……れろ」

「ん、んんっ！？」

［レロッ、クチュ、クチャ……］

その最中、ビビは自分の舌を、はやての中に入れ、その口の中を、優しく蹂躙し始めた

「ん、あん（もっと、はやてちゃんを、感じたい）」

欲しい。はやてちゃんの全てが、欲しい……！！！

「ん……ひ、ひひ、ひゃん……ん、れろ」

［クチュ、ペロッ］

「（！！？　は、はやてちゃん！！！？）」

そうした直後、はやてもまた、深いキスの味を感じたいのか、自分の舌も絡ませてきた

「ん……んん、んあ、ん……」

「……（可愛い。はやてちゃんが、すごく、可愛く見える……今まで見た中で、どんな姿のはやてちゃんより、可愛い……）」

あぁ。ダメだ……もう、やっても、いいよね……

「「ん……んあ」」

［クチャッ……］

「「はぁ、はぁ、はぁ……」」

長い、深いキスを交わし合った二人の唇からは、夜の光に照らされ、輝く糸を引いていた

「……ねぇ、はやてちゃん」

「？　なに、ビビちゃん」

もう、止められない。こうなっちゃったのは、全部、はやてちゃんのせい、だからね

「私、はやてちゃんの全てが欲しい。だから、はやてちゃんの初めて……全部、頂戴」

［スゥ……］

「あ、ん……」

ビビは、はやての体を優しく撫でて、そして抱きしめた。そして、はやては

「……いいよ……上げる。ビビちゃんになら、私……」

「……はやてちゃん……」

［チュッ］

そして、三度口付けを交わし、二人は……

……

□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■

そして、それからどれくらい経ったか……

「はぁ、はぁ、はぁ、はぁ……う、んん……」
「はぁ、はぁ……はぁ、ん……んん……」
「はぁ、はぁ、はぁ……ふう……」

……あぁ、やってしまった。やってしまったよ！！！　私は！！！！　あぁ、はやてちゃんとキスしちゃった挙句、あんなことやこんなことまで！！！！　ってか、一気に階段を駆け上がっちゃったじゃない！！！！　どうなの！！？　ねぇこれどうなのよ！！！！……あぁ、まぁ、結果オーライ？　ってなわけにはいかないわよね、コレは。なんか、勢いでいっちゃったし、うん……はやてちゃんの初めて奪うどころか、私の初めても上げちゃったし（――；）

「（でも……嬉しい、な。私の初めてを、はやてちゃんが貰ってくれた、なんて……）」
「すぅ、すぅ、すぅ……」

ビビの隣では、はやてが気持ちよさそうに、寝息を立てながら寝ていた。だが、着ているパジャマは着崩れており、少し汗もかいていた

……そう。私は、はやてちゃんの初めてを奪ってしまった。

この手で、はやてちゃんの初めてを……

「……なんだろう、すごく、嬉しい」

まさか、こんなに気持ちいいことだったなんて……本当に、気持ちいい……はやてちゃんの初めてを、私が……

「……欲しい、もっと……ううん、全部」

欲しい。初めてだけじゃない、これからも、ずっと……そう、はやてちゃんの……はやてちゃんの全てを、私だけ……私だけのモノにッ！！！

［バッ！！］

「はぁ、はぁ……ベアト、“神魔憑依（アバター・オブ・リンク）”、“サイトヒメア”」

『了解した』

［カッッッ！！！！！！！！！！！！！！！！］

「……」

それは、最古の魔術師とも言われ、又、“ヴァンパイア”とも呼ばれた存在……それを体内へと取り込み、その力を己のモノとした

「ハァ、ハァ、ハァ、ハァ……はやて、ちゃん……」

はやてちゃん、はやてちゃん、はやてちゃん、はやてちゃんはやてちゃんはやてちゃんはやてちゃんはやてちゃんはやてちゃんはやてちゃんはやて

ちゃんはやてちゃんはやてちゃんッッッ！！！！！！！！！！

「ハァァっ……」

今のビビの歯は、まるで吸血鬼のように鋭く尖っており、その牙を、愛する少女の首元に突き刺そうとしていた

己のモノとするために、彼女の中にへ“毒（ジブン）”を、入れる為に……

……

「……ん、ビビ、ちゃん？」

「！！！？」

だが、それを首につきつけようとした時、彼女は意識を取り戻した。どうやら、息が敏感になっている首筋に触れたせいでか、目を覚ましてしまったようだ

「どない、したん？」

「……」

どう、しよう……なんか言って、誤魔化しちゃう？　……うーうん、嫌だ。この子に、隠し事なんて、したくない。だから、素直に言おう

「……ごめんね、はやてちゃん」

「？　何を謝るん？」

「私、はやてちゃんに、酷い事をしようとした。はやてちゃんの自由を……これからのはやてちゃんの未来を、一生縛るような事を……」

「……ビビ、ちゃん……」

「私は、はやてちゃんが好きで、大好きで、大好きで堪らなくて……だから、はやてちゃんが他の人とかに触れられるのが嫌。他の人に取られるのが、すごく嫌……だから、はやてちゃんに、私しか触れさせない呪いを……“毒（まじゅつ）”を、掛けようとした……」

［ギュッ……］

その手に持つ白い宝石のようなデバイス、ベアトを握りしめ、少女は、悲痛な声で、自身が犯そうとした罪を、吐露した

「……ビビちゃん」

「……ダメ、だよね。私の我儘を、押し付けちゃうの、ダメ、だよね……」

「……」

ううん、ダメや、ない

「ええよ」

「え？」

「ビビちゃんの我儘、聞いたげる。せやから……ビビちゃんの言う、その“毒（まぼう）”を、私に掛けて」

「……いいの？」

「うん」

「もう、普通じゃいられなくなると、思うよ」

だって、これは私の力の一部を、分け与えるのと同じ……ざっくり言うと、悪魔との契約に近いモノ。代償の代わりに、すごい力が、はやてちゃんに備わる。神様から貰った、とんでもない程のチート性能の一部が、はやてちゃんに備わる事になる……そんなの、確実に普通じゃいられなくなる。魔改造どころの問題じゃない……

……

「もう普通やないやん。だって、私も、女の子に恋をしてもうたんやから」
「……」
もう、覚悟は出来ている。まさに、そういった意味を含んだ言葉だった。だから、ビビも覚悟をした
「……責任は、ちゃんと取る」
人の一生を、自身の身勝手で変えてしまった。それに対する、責任を……
「……いくよ、はやてちゃん」
「うん……きて、ビビちゃん」
互いに言葉を交わし、それを誓いとして、ビビは、はやての首筋に、その牙を運び
［チュク］
突き立て、噛みついた
「ッ……ッッ！！！！！？？」
［ドクンッッ！！！！！！！］
噛まれた所から、はやての体の中に、何かが流れ込んできた。それは、とても温かく、だが、どこか冷たく、妖しく……でも、それら全ては快感の波となって、はやての中を満たしていった。麻薬のように……

「ッ……はい、おしまい」
「……ビ、ビビちゃん、今のは？」
「私の力の一部を、はやてちゃんの中に入れたの。言ってみれば、契約に近い、かな」
「契、約？」
「ねぇ、はやてちゃん……“愛してる”って、言って」
「え……？」
「そうすれば、この毒（まじゅつ）は完成するの。いわば、契約の呪文みたいなモノ。だから、言って……愛してるって」

好き。では無く、愛してる。と……好きと言う言葉では軽い。愛してるという言葉の方が、重く、その意味が存在する。だから……一生を決めるこの契約にとって、不可欠な言葉でもある

「……うん」

――――愛してるで、ビビちゃん――――

［ドクンッッッ！！！！！！！！！！！！！！］
「「ッッ！！！！！？？」」

その後、二人の間に、何かが繋がったような感覚に合い、全身に電気が走ったかのような衝撃が、ビビとはやてを襲った……

「ッ……はぁ……はぁ……はぁ……はぁ……はぁ……

はやて、ちゃん……」

「……っ、うん……はぁ……はぁ……はぁ……ビビ、ちゃん……」

そしてこの時、この場所にて、ある人物の“起源”が、完全に覚醒した……

そう、“禁忌”という、ビビの“起源”が……

＃５０　戸惑いとヤミの切先　剣の天（そら）と、転生者（前書き）

今回も、前回と同じアウアウ的な要素に踏まえ、キャラ崩壊という要素もありますので、注意して下さい
特に、“シグナムは俺の嫁”、“シグナムは心の師匠”という方々は、特にお気お付け下さい

カミウラ出張号は、１２月２０日、午前１０時から正午の間に更新します

あんぎゃーす様、蒼穹様、ムーギネーター様、寝落ちの亜留ジャ野様、夕霧麻人様、ヘルカイザー様、けびん様。ご感想、ありがとうございます！！

#５０　戸惑いとヤミの切先　剣の天（そら）と、転生者

――――――そして、とある兄妹（しまい）の妹は、夜天を護る剣の騎士と、気持ちを交わし合い、そして……――――――

……青空広がる荒野

「元来、剣と言うモノは鞘と一対に成っているモノだ。最初から抜き身の剣など、大型の剣ぐらいしかないだろう。いや、大型の剣でも、鞘と言うモノはある」

［チャキッ］

その荒野の主は、一本の剣を見ながら、語っていた

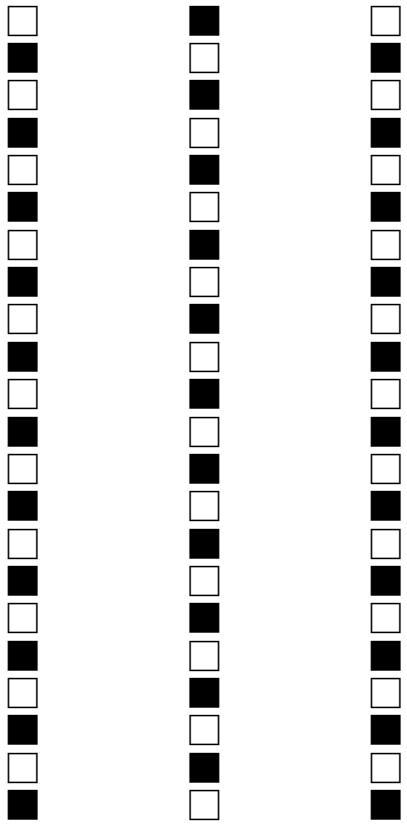
「そう、抜き身の剣など、珍しい部類だ。そう、実に珍しい……」

［シュゥゥッ、シュキンッ］

彼は、その剣を鞘から抜き、ソレを数回振りまわしながら語る

「それは、己を一本の剣だという奴も同じだ。もし、己の迷いや惑い、それを受け入れてくれるべき鞘が必要と成る。そう、その剣を納めるべき場所がいる。刃がむき出しのままだと、危ないからな。そうしなければ……」

［ポロ……］
［ザンッ！……ザガンッ！！！］
手にした剣を落とすと、男の腕を切り落として、地面に深く突き刺さった
「護るべきモノすら、切ってしまいかねないからな……その剣を使う主も、その剣自身が恋する、大切な人すら、な……」



……あの鮮烈な夜から、二日が過ぎた日の朝……八神家
「あ、ビビちゃん、そこのキャベツとってくれへん？」
「いいよ～♪　はい」
「ありがとな♪」

「いいのいいの♪」

結局、ビビはグレイの守護騎士達（マテリアル達）とのほとぼりが冷めるまでの間、八神家の家に居候すると言う形となったのだ。幸い、今は学校が夏休みと言う事で、平日だろうと問題は無いのだとか……因みに、この子達は優秀な為、夏休みの宿題などとっくの昔に済んでいる。ビビに至っては、一度学んだことな為、朝飯前だったとか

「えへへっ♪」
「あはは っ♪」

二人とも、互いに幸せな表情のまま、台所で朝食を作っているのだった

そう、この二人はもう、友達と言う絆で結ばれているのではなく、“恋人”という絆で、結ばれているのだから

□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■

「なんだか、楽しそうですね」
「あ、あぁ、そうだな……」

その二人の様子を、守護騎士たちは温かく見守っていた

「なんか、最近はやてとビビ、前よりもずっと、仲がいいように見える」

「あぁ。だが、いい事ではないか。お前もそう思うだろう、将よ」

「……」

「？　どうした、シグナム」

「ッ！？　な、何でもない、リインフォース」

「そうか？　何か、苦しそうだったが」

「いや、気のせいだろう。ビビと主が幸せそうであるのが、我らにとっても良い事だ……苦しい筈がない」

そう、これはとても喜ばしい事のはずだ……なのに、なんだ、この感情は……この、モヤモヤした、感情は……

「（……）」

何故だ。何故、ビビと主が一緒にいるお姿を……否、ビビと主が楽しげに笑われているお姿を見ていると、なぜこのような感情になるんだ……！！！　あの様子は、我々にとって喜ばしい事のはず！！　なのに、なぜこんなに……胸が苦しむのだ！！！

「（一体、どうしたの言うのだ。私は……）」

私は将。夜天の主を守護する騎士、ヴォルケンリッターの将。主の幸せを願い、主の幸せの為に、その身に尽くす、騎士のはず……なのに、今の主の幸福を見ると、胸が苦しくなる……なぜ、なぜなのだ……

「（……“ビビ”……）」

……今、烈火の将の心は、酷く揺れていた。主の幸せを見ていると、胸が苦しくなる……そんな、自身ですら分からない、そんな感情を……

そんな感情を、このどうしようも無い気持ちを、どうしたらいいのか？　と、聞くとしたら、その相手は……

□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■

……翌日、八神家二階、シグナムとシャマルの部屋

「……っと、掃除終わり～♪　シグナム、そっちの窓拭き、もう終わった？」

「あぁ、今終わった所だ」

この日、八神家は月に一度の大掃除（八神家ではいつもそうしている）をしており、全体的に慌ただしかった。だが、そんな慌ただしい時間は終わったばかりであった

《ビビちゃん、そっちはもう終わったん？》

「あ、はやてちゃん？」
「ッ」
また、だ……あぁ、そうだ。ビビが、主と幸せそうに話をしている姿を見ると、胸が痛む……なんなんだ、この痛みは！！
「……」
「うん、今終わった所だよ♪」
《そうなん？　私、今からシャマルと一緒に今日の夕飯の材料を買いに行くんやけど、シグナムと留守番しとってくれへんか？　リインフォースは調整で、アースラの方に行っとるし、ヴィータとザフィーラは、今から老人会のゲートボール大会に行くって言うとったから》
「うん♪　掃除の片付けもしなきゃいけないしね、気を付けてねぇ～♪」
《は～い♪》
「っと、シグナム。聞いてたと思うけｄ［シャキンッ……］……シグ、ナム？」
「……」
いきなりだった。シグナムは、いつの間にか起動したレヴァンティンを構え、その刃を、ビビの喉元に突き立てた
「……え？　え、え？（@＿@；）」
ちょ、ちょっと待って……な、なんなの？　この状況……シグナムが、剣を突き付けるってシチュエーションは、かんなり序盤の方に有るもんじゃないの？　っていうか、経験したし、私……なんか私、シグナムの逆鱗に触れるような事、した？　な、なん……なんで？　ってか、なんなの？　なんで～～～～～～＼

（@д@？）／

と、ビビの頭の中はパニック状態となり碌な思考が出来ない状況となっていた

「あ、あのぉ～～～、シグナム、さ「痛い……」え？」

シ……シグナム？

「痛い……痛いのだ……何故……何故ビビと主が一緒にいる所を見ると、胸が痛むのだ！！！？」

「！！！？」

シグナムの、その悲痛に満ち、震えるその声は、ビビの心を、さらにかき乱した……ただでさえ、突然の事態に、思考が停止しているというのに……

だが、そんな事も、次の一言で、思考というギアに、潤滑油が注がれることとなる

「ビビと主が一緒にいる所を見ると、苦しいのだ！！！　だが、それだけなら、抑える事は出来たはず……だが！！　その光景を見るたびに、私は……！！」

――――――「私は！！　主はやてを、“憎い”と思ってしまうのだ！！！！」――――――

「ッッッ！！！！！！！！！？？？」

え……憎い？　はやてちゃんの事を、シグナムが！！？　え？　ちょっと待って……こんな状況、なんか知ってる……うん、そう……そうだ。昔やってたギャルゲに、こんな感じのシーンが、あった……あの時は、確かバッドエンドで、主人公は、こんな事を言ったヒロインの言葉に、何も返す言葉も無く、ただ殺されるんだったっけ？　っていうか、今の状況、なんかそれに近いよ！！！？　って、あれ？　ちょっと待って。アレって確か、ヒロインの一人が、ヤンデレっていう設定のキャラ、だよね？　んで、その主人公を殺すヒロインが、確か……その、ヤンデレのキャラ……ま、まさか！！？

シグナムが……ヤンデレぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ～～～～ッッッ！！！！！！！！！？？？

心の中で、絶叫した

「……」

え？　なんで？　なんでなの！？　一体どこに！！　シグナムヤンデレフラグがあったの！！？　ねぇ！！　一体何故に！！？　どこにあったのさ！！！　そのフラグは、どこに～～～～！！！！？

【因みに、そのフラグは＃１９に有ります】

「……シ、シグナm「教えてくれ」え？」
「騎士たるもの、主にこのような想いを抱くなど、あってはならない……だから、教えてくれ。この思いは、どうすれば消える……どうすれば、無くなるのだ……」
［ツゥ……］
「！！！？」

泣い、てる……シグナムが、泣いてる

「教えてくれ……お前しか……ビビしか、いないんだ。だから……教えて、くれ……」
［カタカタ、カタカタカタッ］

彼女は、泣いていた。その手に持つ魔剣、レヴァンティンを握る手も、震えていた……

「……」

それは、初めて見た、姿かもしれない……前世でも、そしてこの世界に来てからも……気高き、そして強く、誇りある、騎士の鏡である人……あの、綺麗な人が、泣いている……彼女が流すその涙は、主を想う騎士の涙であり、また、“愛する人を想う涙”でも、あった

故に、今の……“起源が覚醒した”ビビは……

「……うん、分かった。教えてあげる」
「！！？　本当か！！」
「うん。大切な人が、苦しんでいるんだもん。それを見過ごす事な

んて、出来ないよ」

その苦しみを、消す為に、動き始めた……そう、“起源（ホンノウ）”のままに

「……では、教えてくれ。どうすれば、この苦しみは消える！」

「簡単だよ……うん、とっても、簡単」

［……ガシャン］

ビビは、彼女が持つレヴァンティンの刀身を掴み、それを地面に落とし……

「こう、するんだよ……ん」

「な、ビビ……んんッ！！？」

［チュ……］

唇と唇を、触れ合わせた

「ん……んん、んふぅ……」

「んッ！！　ん……ん……」

最初は驚き、身を離そうとしたシグナムだが……なぜか彼女は、なんの抵抗もなく、その身をビビに、委ねたのだった

「ん……んあ」

「んん、ん……んあ、はぁ、はぁ、はぁ、はぁ……」

シグナムは、初めての行為の緊張からか、鼓動が高鳴り、興奮で息が上がっていた

「どう？　苦しみは、少しは晴れた？」
「な……こ、このような、ことで……？」

なんだ？　この穏やか気持ちは……さっきまでの、苛立っていたのが嘘のように、消えている……

「あ、あぁ……大分、落ち着いた……逆に、気持ちが良いくらいだ」
「ん、良かった……」（ニコッ）
「！！」

あぁ、この笑顔だ……私にとって、この笑顔は、平穏の証だ。かつて、戦う為だけに存在していた我らにとって、笑顔など無かった……このような表情など、我々には不要だった。だが、この笑顔……ビビと主、この二人の笑顔を見て、我々も、笑う事の大切さを知った。ようやく我々に、平和が訪れたのだと、感じさせてくれる笑顔だ……だから私は、ビビの笑顔に、引かれたのだな……最初は可愛らしい顔とだけ思っていたが、その、様々な笑みを見ている内に……私は、ビビに……

「シグナムは、私の事が、好きで好きで、仕方なかったんだね」
「あぁ……そうだ。私はビビに、惚れていたのか」

ようやく、分かった……私は、主はやてに、嫉妬していたのか……滑稽だな

「嬉しい」
「！！？」
「シグナムが、私の事を好きでいてくれたなんて……私、今すっごく嬉しい」

「ビビ……」
「……ねぇ、シグナム」
「な、なんだ？　ビビ」

止まれない。理性なんて、もう私は無い。この感情を抑える事が、今の私には、出来ない……だから

［グイッ］
「な、うわッ！？」
［ボフッ］

シグナムの腕を掴み、そのままひっぱりだし……二人は、ベッドの上に寝転んだ。ビビの上に、シグナムが跨るような態勢となって……

「ねぇ、シグナム」
「な、なんだ、ビビ……」

だから、シグナムの全部……頂戴

「もっと、シグナムを感じたい。シグナムも、私を、感じたいでしょ？」
「な！！？　何を言っているッ！　私は、別に……」
「いいよ」
「な……」
「私を……シグナムの好きにして、いいよ……シグナムが、私にしたい事全部……受け入れるから」
「……ビビ……」
「大好きだよ、シグナム……ん」
「っ！！！　……あぁ、私も、ビビが……ん」

［チュッ］

□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■

「ハァ、ハァ、ハァ、ハァ……」
「はぁ、はぁ……だ、大丈夫か？　ビビ……」
「う、うん……らいひょうふ……」

や、ヤバすぎたぁぁぁ～～～……何度か、意識飛んじゃったし。ってか、シグナム結構凄い。私がちょっとやった事を直ぐに吸収して、私にヤバいくらいしてくるんだもん……あぁ、でもぉ……幸せだぁぁぁ～～～？……シグナムに攻められるなんて、私って、なんて幸福者なんだろう？　っていうか、はやてちゃん達がまだ帰って来てなくてよかったぁぁぁ～～～……（――；）

「……ビビ、一つだけ、いいか」
「？　なに？」
「ビビは、主と何か、特別な繋がりを持ってはいないか？」
「？」

特別な、繋がり……？

「私達守護騎士は、夜天の書と切り離され、今は自立して動いている。が、未だに主とのラインは少なからずは繋がっている」
「つまり、まだはやてちゃんと魔力の繋がりはあるって事？」
「あぁ。それを通じて、ビビと主の間に、なにか強い魔力の繋がりを感じられる」

……あ、アレの事かも。でも、アレは……

「アレは、私の力の一部を、相手に分け与えるようなモノ、なんだ」
この世界にとって、イレギュラー中のイレギュラー。この世界に元は存在していない、異分子である私の……私自身の、一部。即ちソレは、私とパスを繋げると言う事になる。そんな事を、この世界の住人にしてしまえば、其の人も……その世界にとってのイレギュラーと成ってしまう

「やはり、か……ビビ、頼みがある」
「な、なに？」
「私にも、其の繋がりを繋いでくれないか？」
「！！！？」

え……アレを、シグナムに、も……？

「私も、それが欲しい……出来ない事なら、仕方がない。だが、それが無いと、私は……また、主を怨む事になるやもしれない。だから、頼む」
「……シグナム……」

……いい、よね。うん、私も、彼女と……

「……うん、いいよ」

そうして、ビビはシグナムの首筋に、いつの間にか生やした牙を向けて

［チュク］

はやて同様、突き立て、噛みついた

「ッ……ッッ！！！！！？？」

［ドクンッッ！！！！！！！］

ぐぅ！！？　なんだ、この、温かいモノ、は……血か？　だが、違う……コレは……あぁ、そうだ。コレは、ビビ、そのもの、なのか……

「ッ……ねぇ、シグナム」

「？　なんだ、ビビ」

「もし、また何かで迷う事があったら……其の時も、私の所に来て」

？……ビビ？

「あなたが迷い、戸惑い、そして苦しんでいる時、その痛みを、私が受け止めて上げる……あなたという剣の、“鞘”になってあげるから」

「……私と言う剣の、鞘に……」

剣と鞘は、二つで一つ……故に、この言葉は、愛の告白とも言え

る、そんな、誓いの言葉であった

「だから……愛してるよ、シグナム……」

「ッ……」

愛している……なんだ、この言葉を聞いた途端、わき上がるように、喜びが……

――――――あぁ、私も、愛してる……ビビ――――――

［ドクンッッッ！！！！！！！！！！！！！！！］

「「ッッ！！！！！？？」」

そして、剣の騎士は、禁断の果実を、口にした……

□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■

二日後。時空管理局本局、第０９訓練場

「ハアァァァァッ！！！！」
［ガキンッ！！！」
「キャアァァァッ！！？」

現在、ここは数人の武装隊員、特に近代ベルカ式の使い手や、近接戦闘が得意な武装隊員が集まり、訓練を行っていた

「あいったた……はぁ、やっぱり強いですね、シグナム一等空士」
「いや、それほどのモノでもないさ。お前も、前回戦った時よりも、大分動きにキレが増してきている。これからも、互いに精進して行こう」

先ほどまで戦っていたのは、武装隊の同期で、同じベルカ式の剣使いという事で知り合った仲である。最も、彼女はシグナムよりも強くは無く、逆に彼女がシグナムを師と仰いでいるような感じなのである

【因みに転生者では無く、ただのモブの使い捨てなので、注意】

「はい！！　ありがとうございました！！！」

と言って、彼女はその場から立ち去り、次の相手との模擬戦を始めていた

「……ふう」
「お疲れ様です、シグナム」
「あぁ、テスタロッサか。お前も今回の訓練に参加してたのか」

彼女の戦闘スタイルは、高速近接戦闘だから、たまにこの訓練に参

加しているのである

「はい。久しぶりに空き時間と重なったので」
「真面目だな、相変わらず」
「シグナムこそ、結構ここに馴染んでいるみたいですね」
「おかげ様で、な」

この二人は、互いにバトルジャンキーな所がある為か、意気投合し、何度も戦っている仲である。まぁ、コレも原作の流れに沿った何かなのだろうか……

「さて、せっかくの機会だ、一戦交えてみるか？」
「はい、よろしくお願いします」

因みに、この二人の戦績は五分五分であり、今はフェイトが一勝差している感じである

「フッ、いい心がけだ」
［スッ］
「ッ」

と、レヴァンティンを鞘に戻そうとした時、ふと、ある言葉を思い出した

「……（いや、もう、鞘はいいか……もう、己の鞘と、“見えた”のだから）」
「……？　どうしたのですか？　シグナム」

……あぁ、そうだな。もう私に、この鞘は不要

「……レヴァンティン。私は、己を納める場所を見つけた。
もう、この刃の切先を、間違えずに向ける事が出来る」

だから……故に

「（私はもう、かつての私を捨てよう！！）」
『“ツヴァイ・シュベルトフォルム”ッ！！！』
［ジャギンッ！！！］
「！！！？」

シグナムが手にしていたレヴァンティンの鞘は、本体の命令を受け、第二のレヴァンティンと化した

「もはや、私に鞘は不要」

納めるべき鞘が、出来たのだから！！！

「行くぞ、テスタロッサ！！」
「ッ……はい、シグナム！！」

……そして、この日の二人の戦闘は、シグナムの圧勝に終わった。これが後に、“剣天の騎士”という異名が彼女に付く、一つの物語であった

＃５１　夜に輝く閃光の月　夜の一族と、転生者（前書き）

すこし間があいてしまい、申し訳ありません

今回も、卑猥かつキャラ崩壊が起きますので、注意して下さい。特に、“すずかは俺の嫁”という方は、特に注意して下さい（それと、ゼッタイに反感を買うような感じになってしまったので、ご容赦ください）

それと、この更新を以て、キャラクターの募集を締め切らせていただきます。数多くの応募、誠に感謝しております。応募して下さった皆様に、心から感謝致します。本当に、ありがとうございました！！

次のカミウラは、１月５日の深夜頃に投稿致します（なぜ間が開くのかというのは、活動報告の場にて発表させていただきます）

あんぎゃーす様、ムーギネーター様、寝落ちの亜留ジャ野様、蒼穹様、けびん様。ご感想、ありがとうございます！！！

#５１　夜に輝く閃光の月　夜の一族と、転生者

――――――そして、とある兄妹（しまい）の妹は、一人の異端と、一緒に生きる事を誓い、そして……――――――

……青空広がる荒野

「人外のモノ……それは人の姿をしてはいるが、その中身は全く人とは異なるモノ……例えば、人狼とか魔人、獣人、エルフ。そして、吸血鬼、“鬼”」

それら全てを、天空と言う名のモニターに映しながら、その荒野の主は語る

「そのもの達は、何食わぬ顔で、人間の社会に溶け込んでいるかもしれない。己の特徴を隠し、世に潜む……時には人と関わり、時には世の表に出て暴れたり、己の欲を満たしたり……ま、それぞれと言った所だな。なぁ、“アサ”」

「くす。そうだねぇ、旦那様……」

彼の膝もとには、一人の少女がその身を横たわって、彼の傍にいた

「人外たるものは、その秘匿性と特異性からか、場合によっては神秘なモノと成りうる。それは、何気ないモノを強く惹き、そして、人外同士は、その特異性故か、強く惹かれ合う……」

「まるで、ボク達みたいだね」
「フッ。あぁ、そうだったな」

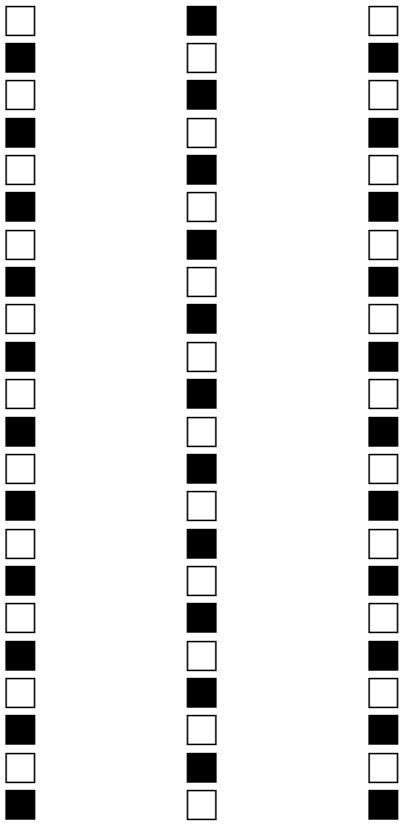
その二人は、まるで昔を懐かしむように、そのモニターを見上げていた

「そして、それらの行く先は……」
［スッ……］
「あ……」

男は、少女の首筋に自身の口を近づけ……

「幸か、不幸か」
［チュクッ］
「ッツ……」

その首筋を甘く噛み、少女を傷付けた



時間は、夕方を過ぎた6時頃。場所は、時空管理局本局にある、空戦用訓練スペース

そこで、ある二人の空士達が、激戦を繰り広げており

「グアッ！！！？」
［ズシャァァァァッ！！！］
「いっつつ……」
［チャキッ！！］
「ぐ！！？」
「……ここまでだな」
「ッ……参り、ました」

その一方……シグナムが、己の愛剣、“レヴァンティン”の切先を相手の喉元に突き立て、見事勝利を収めた

「ありがとうございました」
「こちらこそ、ありがとうございました」

互いの戦いを称え合うように一礼をし、二人はスペースから離れて行った

「ふぅ。なかなか、骨のある奴だったな」
「お疲れ様です、シグナムさん」
「？　月村か」

その勝者に声を掛けたのは、同期であり、管理局に入る前からの顔馴染みでもある、“月村すずか”である。かつて、“闇の書事件”の渦中、シグナムの主である八神はやてと出会い、友達となった少女である

「珍しいな。お前も、訓練に来たのか？」
「はい。武装魔導師として登録していますので」

そう言いながら、すずかはシグナムの隣へと座り、そのまま他の試合を見ていた

「そういえば、最近絶好調だと聞いているのですが、何かあったのですか？」
「な」

と、いきなりすずかは、最近のシグナムの事を離し掛けてきたのであった

「フェイトちゃんとの戦いに、見事圧勝とも言える戦いをしてみたりとか、シャマルさんに聞いて見たら、前まで、二刀流で闘う事なんてなかったのに、なんでかしら？　って言ってましたよ」

今のシグナムの戦闘スタイルは、二つのレヴァンティンを用いての、防御として使っていた鞘を捨てた二刀流。その戦いぶりは、当に歴戦の戦士を悉く退けて行き、いまや管理局の近接戦闘の頂点に立たんとする程の勢いであった

「そうか、シャマルまでそう言っていたのか」
「それで、なにかあったんですか？」
「う……そ、それは、だな……」

と、声を籠らせながら、言おうか言わまいかと悩んでいる時

「シ～グ～ナ～ム～♪」
「！“ビビ”！！」
“ビビ”ちゃん！？」

その場に、シグナムをそうした原因である、ビビ・スティンが、その二人に向かって歩いてきたのであった

「あれ？　すずかちゃん？　珍しいね、こんな所にいるなんて」
「ビビちゃんも、珍しいよね」

まぁ、そりゃぁね。転生者の特典である“チート”能力のおかげで、こんな訓練なんて必要ないんだけど……今回はちょっとね

「試したい事があって、ちょっとここの訓練スペース使おうかなぁって」
「そうだったのか」
「ま、また、あんな凄い砲撃とか、撃つの？」

因みに、前にビビは、この訓練スペースの壁を貫き、更に次元空間に届く程の砲撃を打った事があり、幸い其の時けが人は零だったが、ビビには暫くの間、訓練スペースの使用を禁止されたりで……

……まぁ、問題があったわけです

「こ、今回は大丈夫。今回は、格闘とか、そんな感じに事をする予定だから」
「そ、そうか……」

と、こんな感じで会話をしている時

「っと、そろそろ時間時間。それじゃ、また後でね♪　シグナム、すずかちゃん」
「うん」
「はい、お気を付けて、ビビ」
「ありがと♪　シグナム♪」
「いえ……」
「？」

すずかは其の時、頬を染めながら、ビビの言葉を返すシグナムを見た……

「……（もしかして？）」

シグナムさんが変わった理由って、ビビちゃん？

という仮説を、立てたのであった。そして、その答えを知るのは、直ぐ先の事だとは、まだ誰も分からなかった……

□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■

そして、その日の夜。本局、局員宿泊施設の一室

［……ウィーン］

「ふえぇ～、ちかれた～（＋＿＋）」

其の日、この部屋はビビが借りていた。それも、訓練スペースを借りていられる時間が、昼と夜の二回しかなかった為、ここで寝泊まりしようと決めていたのである（それと、まだマテリアル達とのほとぼりが冷めていないという理由もあるのだが）

にしても、税金の使い過ぎっていうのかな、これ。社員、いや公務員かな？　それ専用の宿泊施設だって言うのに、割とキレイだし、普通のビジネスホテルのダブルぐらいの設備揃ってるし……ま、世界を管理している組織なんだから、このくらいは普通なのかな？

「ま、どうでもいっか♪　さってと、シャワーでも浴びようっと」

と、いいながら、部屋に有るシャワールームに行こうとした時

［ウィーン］

「あれ？　先に来てたんだ、ビビちゃん」

「あ、すずかちゃん！」

月村すずかが、入ってきたのであった

□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■

「にしても、今日も凄かったよね、ビビちゃん」
「え？　そう？　あれくらい、普通な感じでやってたんだけどなぁ……」

その部屋にいるビビとすずかは、今日あった出来事を語っていた。
ちなみに、何故この部屋にすずかが入ってきたのかと言うと、この部屋を取っていたのは、ビビとすずかの二人だったからである。すずかもまた、夜にしか訓練スペースを使わせてもらえなかった為、帰るよりもこっちに泊った方がいいとビビに言われ、一緒の部屋に泊ることになったのである

……こらそこ、下心丸見えとか言うな

「……あ、そういえば……ちょっと、聞いてみたい事があるんだけど」
「ん？　なに？」

少女の問いに、ビビはなに？　と返してきた

「最近のシグナムさん、前と比べて、随分変わったよね」
「シグナムが？」

前と比べてって……あ

そう。彼女の中には、ビビの“毒（まじゅつ）”があり、それに侵されている。

それによってか、シグナムには原作には無い力が備わっているのである

「そ、それが、どうしたの？」
「うん……それって、もしかしたら、ビビちゃんが関わっているのかなって思ってるんだけど」

ドッキ～～～ン！！！／（@д@）／　はそれもうもろ私ですよ、はい！！　っていうか、なんですずかちゃんが？

「なんで、そんな事を気にするの？」
「え？　えっと、シャマルさんやヴィータちゃんが気にしていたし、それに、前までは互角だったフェイトちゃんが、一瞬で負けてたし……それに、私も気になったから……」
「あ……」

確かに、シグナムは前に、フェイトちゃんと戦って、圧勝したって聞いた。つまり、それほど私の力は、影響を与えたって事になるんだよね……そしてそれは、はやてちゃんにも、影響があるって事に……

「ねぇ、ビビちゃん」
「な、なに？」

いつの間にか、すずかはビビに近寄って来ていた。それはもう、少し手を動かすだけで、相手に触れてしまう程に……

「一体、シグナムさんと何があったの？　あんなに、変わってしまう程に……」
「ッ」

――――――［ドクンッ……］――――――

だめ、すずかちゃん……そんなに寄って来ると、私……

「ねぇ、ビビちゃん……」

……ダメ、頭が、ボウッとして……

「……そんなに知りたいの？　私とシグナムの事」

「え？」

ビ、ビビちゃん……？

「いいよ、教えてあげる。ただし……その体に、ね」

［スッ］

「あ……」

違う……いつものビビちゃんじゃ、ない……なに、この感覚……まるで……あの時の……グレイさんの時に感じた、あの感覚に……

自分と同じ、ヒトであって、人では無いモノ……グレイが放ったあの威圧感とは違うが、だが、今のビビから感じるのは……優しい、恐怖

「あの、ビビちゃ「ん」ん、ッ！！！？」
［チュッ］
ビビは、そのまますずかの口元に近付き、そのままキスを奪った
「ん……んぁ」
「ッ……ビビ、ちゃん……？」
い、いきなり……き、キス？　な、なんで……？
「言っておくけど、もうスイッチ入っちゃったから、止まらないよ」
「え……？」
すずかはこの時、ビビとシグナムの間の事など、考えていなかった。
いきなり口付けされ、そして次に、この言葉の意味が分からず……
…混乱してしまったからである
「ビビちゃん、一体、何を？」
「大丈夫、全部私に任せて……ん」
［チュッ］
「ん、ん……」
そして又も、ビビはすずかの唇と自分の唇を重ね、そのまますずか
の背中に腕をまわし、抱きしめていた
「ん……レロ」
「ッん、んんっ！！？」
だが、突如ビビの舌が、すずかの口の中に入り、前歯から順に、そ
の歯を優しく舐め始めた

「（だ、ダメ……ビビちゃん、ダメ！！）」

と、そう思った時……

「レロ……ッ！！？」

「ん……」

ビビは、ある歯を舐めた時、ほんの一瞬、動きが止まった

「（これは……牙？　これってまさか……“夜の一族”！？）」

“夜の一族”。原作である【魔法少女リリカルなのは】のさらに大元……【とらいあんぐるハート】と呼ばれる作品の中に登場する、吸血鬼の一族の総称。その中に、月村すずかの姉、“月村忍”は、その“夜の一族”の一人なのである。故に、その妹であるすずかも、必然的に“夜の一族”、つまり吸血鬼であるという事になる。ビビは其の事を思い出し……

「ん……んん……」

「ッん？」

［チュクッ……チク］

「ッ……！」

「！！？」

口の中に入れていた自分の舌を、その牙で貫かせ……自身を、傷付けた

「（ビビちゃん！！！？）」

な、なんで……どうして、そんな……やめて！　ビビちゃん！！！

「んん……ぁん」
「んッ、んん……」

そんなすずかの心の声も、今のビビには届きもせず……その血が出始めた舌を、すずかの口の奥にある舌に押し付けるように、動かした……それは、そう、自身の血を、飲んで欲しいとでも、言わんばかりに……

「ん……んあ」
「んはぁ、はぁ、はぁ、はぁ……」

長い、そして予期せぬ吸血行為を交わすキスは終わり……二人の間に、血で染まった糸が引いた

「……ビビちゃん、一体「夜の一族」ッ！！！」

え……どうして、ビビちゃんがそれを？

「やっぱり、そうだったんだ……牙があって、びっくりしたけど」
「……ビビ、ちゃん……」

すずかは、放心状態に近い感覚に見舞われた。嫌われるのかと、怖がられるのかと……だが、ビビはそれらのどれでもない、ただ微笑みを浮かべていた

「ねぇ、私の血、美味しかった？　それとも、不味かった？」
「え……」

などと、冗談すら言える程……自分の事を、気にしていないようなそぶりだった

「ねぇ、すずかちゃん」
「な、なに？」
「夜の一族っていうのは、他人に知られると、その他人と、何か盟約を結ぶ、っていう掟……みたいなのがあるんだよね」
「え……う、うん」

この掟のようなモノをビビが知ったのは、他の二次創作の小説を見た時だった。前世、というか転生される前の話であるが、それの中に、その掟にかんしての事が書かれていたからである。ビビは【とらいあんぐるハート】をしたことが無かった為、詳しくは知らないが……だが、この世界には、どうやらあったようだ

「“他者に、自分の正体が知られた時、その者と、永久の盟友となるか……共に生きる同族となるか”って」
「なんで、そんなに詳しいの？」

すずかは、至極当然の答えを聞いてきた。どうして、自分達の事を、ここまで詳しく知っているのか……と。だが

「そんな些細なことは、どうでもいいじゃない。これは、私しか知らない事だから」

と言って、その答えを言わず

「ねぇ、すずかちゃん」
「な、なに……？」

はぐらかすように、次の言葉を紡いだ

「私は、あなたと共に生きる同族になりたい。すずかちゃんと、一緒に生きる仲になりたい」

「え……」

すずかにとって、思いもよらぬ言葉が、聞こえてきた。一緒に生きる、共に歩む、同族となる……と

「私は、すずかちゃんが好き……大好き、愛してる」

「！！！？」

愛、してる……？　私の事を、ビビちゃんが？

「私、すずかちゃんを私のモノにしたい……ねぇ、ダメ？」

「……」

すずかは、ビビの出す甘い空気に、この誘惑に似た……洗脳に近しいような行為に、酔わされていた。そんな思考が狂ってしまいそうな言葉を、たんたんと紡がれていき……やがて、彼女は確信した

――――ビビちゃんも、グレイさんと同じ……いや、それ以上に、人外のモノではないのかと――――

「……」

彼女が、そんな事を考えている最中に

「すずかちゃん……あむ」

［チュク］

ビビは、その少女の首筋に、己が生やした牙を突き立て、そこに自分の“毒（まじゅつ）”をかけた

［ドクンッッ！！！！！！］

「……」

だが、その噛まれた傷みも、魔術が入ったことによる、心臓の鼓動にも、彼女は気付かなかった。それは、その甘い誘惑と、そして先ほど舌にべっとりと付いたビビの血の味が、感覚を無くしていた

「ねぇ、すずかちゃん……私の事、愛してる？」

「……」

その言葉……その天使のような笑みと、悪魔のような誘惑を含んだ言葉で、彼女の心は、完全にビビの虜となってしまい

――――うん、愛してる……――――

［ドクンッッッ！！！！！！！！！！！！］

「「ッッ！！！！！？？」」

月村すずかは、恋獄の中へと、墜ちていった

「ッ……嬉しい、嬉しいよ、すずかちゃん」

沢山愛して、幸せに幸せにしてあげるね

「ん」

［チュッ……］

「ん、んん……」

［……ギュッ］

その夜、二人は交わり……秘密を共有し合った

＃５２　星満ちる天（そら）の下　不屈の少女と、転生者（前書き）

どうも、この場ではお久しぶりです。こっちは新年初の投稿となります。こんなに遅れてしまって、大変申し訳ありませんでした

なお、今回もかなりアウアウ、超展開、意味不明な駄文、かつ見ている方を不快にさせてしまうような描写が含まれておりますので、どうか、ご了承を。特に、「なのはは俺の嫁」、「なのはは俺の魔王」と言う方は、特にご注意下さい

次回の神の舞台裏は、１月２５日に掲載予定です

ムーギネーター様、あんぎゃーす様、緋水様、蒼穹様、Ｃｈａｏｓ様。ご感想、ありがとうございます！！！

#52　星満ちる天（そら）の下　不屈の少女と、転生者

――――――そして、とある兄妹（しまい）の妹は、星が輝く夜空の下、己の犯す罪を知り、そして……――――――

……青空広がる荒野

そこの主である神様を名乗る男は、いつものように青空というモニターを見ながら、ニヒルな笑みを浮かべていた

「……人っつうのは、どうもメンドクサイ生き物だなと、毎回思うよ」

ニヒルな笑みから一転、退屈そうな……気だるそうな表情となり、空を眺めていた

「他者の為に、自分の事は後回しにするっていう事。そいつはどうもメンドクサそうな気がしてたまらねぇよ。なんか、人生損してるような気がするよ、うんうん」

人というのは、他者に良いように見られたがる。自分はアナタにとって良い人であると、自分は良い子だと……

「それでは、まるで自分を抑えつけようとしてるのと変わらない。

そんなのが続けば、いづれそいつは壊れる日が来る。人間という、知識というか、知恵というか……そういった知的な生命は、そういった理性的に生きていると、どこかで本能が暴走する。そうなったら、全てが台無しと成りうるかもしれない。なら、最初から本能を丸出しにしていれば……そんな苦しみなど、ないはずだ……」

だが、それでは社会性が消えて、世界は混沌と化す。社会と言うモノが完全に支配した世界では、本能など剥き出しにする事など、難しくなっているのである

「社会という枠の中で、本能はもはや罪という存在。と言っても、過言じゃない。人が犯罪をする大抵の条件には、本能が関わって来る」

例えば、性犯罪。これは男性の、女性に対する欲求が異常に高まった際、犯してしまう罪……それらはほとんど、好き好んでやった。とか、むしゃくしゃしたからやった、とか、そういった動機であり、どう考えても本能的としか言いようがない内容である

「だからだ。他者の為に自分の本能を抑えつける事など、不可能だ。そんな無茶に似た無謀が、あんな悲劇を生む」

モニターには、白い防護服を血で濡らし、息絶え絶えの少女が映っていた。それは、間違いなく……

「さて、転生者の妹よ。君はその悲劇に対して、どういった対処をする。不屈の少女の本能を……“不屈”と言う名の起源を、どうやって“禁忌”に、己の色に染め上げる……？」

再びニヒルな笑みを浮かべ、男は青空を見上げる……その瞳には、愛おしい人形を見るような、そんな瞳だった……

□■□■□■

いてあるメニューを開き、何を頼もうか考え

「すいませーん」

「はーい！」

少女は先ほど来た客の所へ行き、注文を聞き、それを厨房の方にいる店員に注文を伝えた……そして、注文したモノが届き、それを客の方へと運んで行った

「お待たせしました。翠屋特性サンドイッチとコーヒー、そしてシュークリームになります。どうぞごゆっくり♪」

笑顔と共に料理を渡して、その場を後にした

□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■

「ふぅ、接客って、意外としんどいかも（；一＿一）」

と、愚痴気味に声を出したのは、現在絶賛家出中のスティン兄妹（しまい）の妹、ビビ・スティンであった。現在、この翠屋でバイト中なのである

「お疲れ様、ビビちゃん」

「あ♪　なのはちゃ～ん？」

そこに現れたのは、その翠屋の店長の娘、高町なのはであった

「ごめんね、ビビちゃん。なんだか、手伝ってほしいって頼んじゃったみたいで」

「いいっていいって、気にしないで。私も、やってみたいなぁって思ってたんだから」

なぜ、ビビがこんな事をしているのかと言うと……それは、昨日、なのはの家に遊びに行った時のことだった……

ビビとなのはが、部屋でしゃべっていた時、この部屋になのはの母、高町桃子さんが訪れ、明日急用で来れ無くなったバイトの代わりに、なのはが出て欲しいと頼みに来た事が発端。それを聞いたビビが、それに自分も手伝うと志願した……というのが、大まかな流れである

「しんどいけど、意外と楽しいし。それに、なのはちゃんと一緒だし、ね♪」

「う、うん……私も、ビビちゃんと一緒だと、なんだか楽しい♪」

ウィンクをしてなのはに笑顔を見せるビビ、それに、少し見とれたなのはも、ウィンクと共に、笑顔で返した

［カランカラン］

「っと、お客さんだ。さぁって、一仕事しますか」

と、なんだか気合い十分で、店内の、新しくきたお客に接待していくビビだった

因みに、男の客にも愛想良く接していましたよ。さすがに、サービススマイルと言わんばかりの、作り笑顔でしたけど（可愛い女の子には、心からの笑顔を見せてたけど）……

□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■

そして、その日の夜……高町家、なのはの部屋

「ふえ～～～、ち、ちかれたじぇい（；一＿一）」
「お疲れ様、ビビちゃん」

その部屋には、主であるなのはの他に、ビビがいた。なぜかというと、仕事が夜の八時まで続いてしまい、一人で帰るのは危ないと言う事で、そのまま泊ってったら？　と桃子さんに誘われたからだ。ちなみに、ビビは最近、アースラに部屋を一つ設けてあり、そこで寝泊まりしているのである

「にしても、意外と凄い繁盛ブリだねぇ、翠屋。まさか、あんなに人気なお店だったとは……」
「そうかなぁ、他の喫茶店とか行った事無いから、よく分かんないけど」

朝は誰もいないが、昼間になると、昼休みで訪れるＯＬや高校生、それに近所の人たちがやって来て満員御礼な状態。夜も夜で、仕事帰りにシュークリームやケーキなどをお土産として買って行くお父さん達や、噂を耳にした人達など……喫茶翠屋、かなりの有名な店らしい

「（一度雑誌に載ったって言ってたっけ？　さすが、桃子さん、マジパネぇッす）」

戦闘民族高町家のお母さんをやっているだけはある……そうビビは納得した

「それにしても、なのはちゃん、かなり慣れた手つきだったねぇ」
「ふえ？　そ、そう？」

そう。なのはちゃんのあの仕事ぶりは凄まじかった。テキパキと行動をしていて、それでいて私のフォローをしてくれるという慣れップリ……さすがと言った所である。が……

「（さすがにアレは、慣れ過ぎっていうか……むしろ、無茶して覚えたような、そんな感じがした）」

周りから、すごく出来る子と、認識させるような……まるで、その仕事を精一杯覚えて、今抱いている気持ちを、抑えようとしているような……そんな風に、ビビは見えていた

「う～ん……小さい頃から、お店のお仕事をしてたから、それでかな？　あはは」

まるで、カラ元気のような笑顔……そんな笑顔を見た時、ビビはある衝動にかられ、そして、ある事を思い出した

――――高町なのはは、いづれ己の無茶が集り、その身に大けがを負うという、未来の事を……――――

「……でも、私から見たら、なんだか……無理、してるように見えた」

「っ……」

ビビは、とっさにこんな言葉を言っていた。それは、未来のこの子を思ってのことか、それとも、彼女の過去に、関わる事だからか……

「無理して、良い子を演じて、そして、それで自分を押し殺しているような……そんな風に、私は見えた」

「ビ、ビビちゃん？」

なのはは、普段とは違うビビの雰囲気に、たじろいでいた……なんだか、いつもと違う、彼女を……

「どうして？　どうしてそんなことをするの？」

「え？」

「どうして、そこまで他人の為にやろうと思っているの？　どうして、良い子でいようと思っているの？」

……どうして、自分を傷付けるような事を、しているの？……

それは、今もやっている事。魔法という力を手に入れ、その思いが更に強まってしまっている、その思いを、ビビは否定しようとしたんでしょ」っ……！」

「ど、どうしてって……良い子でいるのは、悪い事じゃないよ。だって、皆に「その皆に、嫌われたくないから、良い子でいようとしてるんでしょ」っ……！」

ビビの言葉で、なのはは、言葉を詰まらせてしまった

「良い子でいようとして、それで無茶して、無理して、それで大けがしちゃったら……皆、心配しちゃうよ」

「そ……そんなこと、絶対「無いとは、限らないかもしれないよ……この世界に、絶対なんて、無いんだよ」え……？」

なのはは、困惑していた。突如変貌した友人に、いきなり、こんな質問をしてきた友人に……そして、それは全て、自分を否定するかのような、そんな事ばかりを……

だから……

「そんな無茶なんてして、いつか怪我なんてしたら……皆、悲しむよ」

「……じゃぁ、どうすればいいの？」

「え？」

「どうすれば、いいの。私は、何をしていれば、良いの？」

少女は、涙を流していた。己を否定する、彼女のその変貌ぶりに…
……だから、教えて欲しいのだ。己を否定するのなら、それに対す
る答えを、教えて欲しいから……

「……うん。いいよ、教えてあげる」
「？　ビビ、ちゃん？」

そう言うとビビは、なのはの腕を握り、そして片方の手で、少女の
頬を撫でた。まるでそれを待っていたかのような、そんな笑みを浮
かべて

「とっても簡単だよ、それは……今以上に、強くなればいいんだ
から」
「今、以上に？」
「そう。今以上に強く、今の段階での無茶が、まるで呼吸をするぐ
らいになっちゃうくらいに」
「そ、そんな事……」

出来る訳が無い。と続こうとしたが

「出来るよ。そう、私なら、ね……」
「……」
「トクンッ……」

ふと、彼女の笑みに、心臓が跳ねた気がした……そして、なんだ
か分からないけど、頭がボウッとしてきた

「ねぇ、なのはちゃん……」
「な、なに？　ビビちゃん……」
「強く、なりたい？　皆を守れる、そんな力が、欲しい？」

まるで、悪魔のささやき、悪魔との契約に似たソレは、少女の心を犯していき……

「……うん、欲しい」

「……」（クスッ）

少女は、悪魔との契約に……否、“魔女”との契約に、誓約をしてしまった

「じゃぁ、それをする為の儀式……みたいな事かな？　それをするけど……いい？」

「う、うん……」

「分かった。うんと優しく、してあげるから……ん」

［チュッ］

そして少女は、“魔女”の口付けを受け、意識は、闇へと……“禁忌”の世界へと、墜ちて行った……

その時、少女の部屋に特殊な結界が張られたのに、誰も気付かなかった……

□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■

そして、それから数時間が経った

「……ん、んん……あれ？　わたし、寝てた？（？―？）」

そう、疑問符を浮かべながら、ビビは、ベッドから起き上がったのだ。なんとも言えない、姿で……

「あれ？　私、何時寝たんだっ、け……え？」

「……う、う～ん……ビビ、ひゃ～ん……」

「（あれ？　なんで私、なのはちゃんと同じベッドで？　それと、なんでなのはちゃん、その……え？　なんで、私も？　えっと……あれ？）」

艶姿のなのはと、自分も同じ姿……なぜ、こんな状況なのか、それを何とかして思いだそうとして……

「……ッッッッ！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！？？？？？？」

思い、出したのであった

「（うそ……私、なん、て……）」

ビビは、己のしたことを。思い出したのであった。人の意思を踏みにじり、そして、己の良いように誘導し、そして……

「あ、あああ、あ……」

私……なのはちゃんに、酷い、事を……

いや、なのはちゃんだけじゃない。そう、前の、すずかちゃんの時、も……

「私……私……」

人の意思を無視し、己の欲望を、他人に押し付け……そして、少女たちを……自分が愛する少女たちを、あんな風に……

「（いや……違う。こんなの、私、望んでなんか……）」

望んでなんか、ない……私は、ちゃんと愛したかった。ちゃんとした、恋愛をして、そして、自分の力で落として、そして……

でも、今私がやったのは……こんな、こんなのは……

「（洗脳、じゃん……）」

他者から、最も忌み嫌われる事……そう、禁忌（ビビ）は、その起源通り、禁忌によって、愛する少女を、狂った愛で、己のモノに……

「……いや……あんなの、私じゃ……私じゃ、ない……」

己の起源を知らない禁忌（ビビ）は、それが自身でな無いと、強く、主張した。そして、コレは夢だと思いたかった。だが、それでも忘れることは無かった。あの時の、目の前の少女と触れ合った時のあの感触が、今も、その体に、残っているのだから

「あ、あああ……あ、ああ……いや、いや、いやぁ……
……」

禁忌（ビビ）は、自己嫌悪に陥り、その場で、泣き崩れた……自分が犯した罪に……愛する純真無垢な少女に、己の意のままにしてしまう呪いを与えてしまった事を……自分を、無意識のうちに求めてしまう、そんな毒を、与えてしまったことに……どうしようもない罪の意識に、溺れてしまった

眼の前には、その……己の自己満足の為に、犠牲となった少女がいた。その首筋には、まるで牙を突き立てたような跡が、わずかに、残っていた……

＃５３　対決の果てにあるもの……　鋼の騎士と、転生者（前書き）

久方ぶりに、こんなに早い更新と成りました

今回ですが、すぐに次話を投稿すると思います

それと、今回もビビ×原キャラの絡みがあるので、注意して下さい。
特に、“ヴィータは俺の嫁”という方は、注意して下さい

次回の神の舞台裏は、１月２９日になるかと思います

ムーギネーター様、夕霧麻人様、あんぎゃーす様、緋水様、皇　翠輝様、蒼穹様、寝落ちの亜留ジャ野様、真王様、けびん様。ご感想、ありがとうございます！！！

#53　対決の果てにあるもの……　鋼の騎士と、転生者

――――――そして、とある兄妹（しまい）の妹は、己の犯した罪の意識に悩み、抑えきれない欲望に振り回され……――――――

……青空広がる荒野

「ふむ……やっと進展アリか？　しかし、これは参ったかも」

そこにいるのは、その荒野に常にいる男……そこだけ出ている岩場に腰掛け、青空を見上げながら、その青空に広がるモニターを見る……変わらない、彼の行い

「そう言えば、あの妹には言ってなかったな。己の起源が、“禁忌”という、これまた厄介なモノだって事を……」

「ふん、お前の伝え忘れのせいだろ。」

そして、今日はそこに、もう一人の住人がいた

「そう言うなよ、“キララ”。俺だって、忘れていた訳ではない。むしろ、覚えていたくらいさ」

その一人は、小柄な少女だった。黒い衣服に、黒い髪をした少女は、

彼の膝の上に堂々と座り、まるでそこが自分の指定席であると、周りに公言しているような……そんな風に見えるたたずまいをしていた。

「ほう。ならば、何故伝えていない」

「あぁ、それはだな……」

何かを思い出すように……いや、何かを考えるかのように、顎に手を添えて、考えていた

「どっちかって言うと、伝える必要はない。いや、必要は無かった。とでも言うべきか？　アイツは何気に、自分の起源を自覚している。そう思っていただけだよ」

男は、やれやれといった風に、肩をすくめながら、少女の問いに答えた

「だが、結局はアイツ、自覚してはいないみたいだな……はぁ、買いかぶり過ぎたか？　てっきり、自身の起源を自力で見付けていたモノかと思ったが」

「ふん。読みが外れているとは、お前もまだまだ精進が足りんと言う事だ、クックックックック」

「おかしいねぇ。これでも、精進は怠っていないと思っていたんだがな……クックックックック」

互いに、不敵な笑みを交わし合った。長身の男と、小柄な少女。その二人が放つ空気は、異彩にして異色。だが、どこか共通した何かを感じさせる、そんな笑みを浮かべて、互いに笑いあっていた

「フッ……さってと」

「ん？」

と、突然男は立ち上がり、膝の上に乗っていた少女は、そのまま横に移動し、岩の上に座った

「そんじゃ、ちょっくら行ってくるわ」

「どこへだ？」

その少女のまたの問いに、男はニヒルな笑みと共に、言葉を返した

「あぁ、ちょっと……神様らしい事を、ね」（ニィ）

「ほう……」（ニィ）

不敵な笑みを浮かべ、互いに見つめ合う二人……その、尋常ではない笑みの中には、一体何があるのだろうか……

「どんな事だ？」

「フッ……迷える子羊に、神の導きを、ね」

「ほう……お前の導き先、か……楽しませてもらうぞ。クックックックック」

「あぁ。それも、今回は俺の得意分野だ。期待していてくれ。クックックックック」

［［フッ……］］

そして、神と名乗る男は、その空間から消えた。それと同時に、黒き少女もまた、消えていた……

□■□■□■

堪らなく……堪らなく、嬉しかった……あの時、すずかちゃんとなのはちゃんを犯していた時の私は……笑っていた。それも、恍惚に満ちた、歪んだ笑顔を……

「……はやてちゃんの時と、シグナムの時と、同じ……」

心から満たされたような、そんな感情に、あの時もなっていた。なら、今度もまた、なってしまうのではないのだろうか……あんな、風に

「……ダメ。そんなのは、絶対ダメ」

人の意思を無視するような、あんな事は、絶対にしてはいけない。そう、あんなのは、私が求めている、関係ではない

「……でも、どうしたら……」

どうしたら、あの気持ちを抑えられる？　すずかちゃんとなのはちゃんの時にわき出てきたあの感情を……あの、自分自身を覆い尽くし……違う。まるで、己の中にいる何かが、一気に体中を浸食していくような……あの感情を、感覚を、どうやったら……

「……私、どうしちゃったんだろう……？」

今の兄（グレイ）と同じ、そんな悩みを抱えた、ビビであった……

□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■

その日の昼……八神家、リビング

「おいビビ！！　今日という今日は、決着を付けるぞ！！！」

いきなり大声を出したのは、この一家の末っ子、ヴィータであった。未だにリインフォース?がいない為、末っ子の地位は不動のモノと成りつつある

「（そういえば、まだリインはいないんだよね。でも、リインフォース……アインスが生きてるから、作らないのかな?）」

だが、リインフォースははやてとユニゾン出来ない。出来るのは、ビビとだけだ。だから、いづれその埋め合わせとして、ユニゾンデバイスが必要と成る筈……なのだが、はやて本人はそれを必要としない程の力を得てしまっている

そう、ビビの毒（チカラ）である。それが今、彼女自身のリンカーコアと深く同調し、チートクラスの力を扱えるようにまでなってしまった。無論これは、シグナムのリンカーコアにも見られ、おそらく、すずかとなのはのリンカーコアにも、いづれ現れてくるだろう……

「おい、ビビ！！　聞いてんのか！！」
「ふえええ！！？　な、なに？　ヴィータ」
「何って、さっきから呼んでたんだぞ」
「（あ、あぁ……そっか。そうだったね、つい、考え事に集中してたや）」
「ほら、さっさと準備しろ！　今日こそ、決着を付けようぜ！！」

因みに、ヴィータが言う決着とは……ある日から始まった、ビビとヴィータの決闘の数々である。去年の夏に行ったプールでの競争から始まり、それからというもの、ヴィータはビビと対決を申し込んでいた。そのひとつに、この年の初めに行った温泉旅行での卓球勝負。それから、この夏に行ったビーチボールや、訓練などでの模擬戦、ヴィータが得意なゲートボール、果てはお買いもの競争……
……など、数回にわたりこういった対決をしているのであった……
……今現在の戦績は、２９戦中、ビビが１３勝、ヴィータも１３勝、３引き分け、という結果である

「今日こそ勝って、一勝差を開けてやる！！」
「……い、いいよ。言っておくけど、負けないんだからね！！」

と言って、ビビはバリアジャケットを展開し、ヴィータは騎士甲冑を纏い、外へと繰り出した

その時のビビは、今まで悩んでいる事を、まるで忘れようと、しているみたいだった……

□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■

海鳴市上空、結界内

「で、今日は何で勝負するの？　アースラに使用許可と、結界展開までしてもらって……まさか、模擬戦？」

そう。現在この空域には、結界が展開されている。それに、魔法の使用は許可が無い限り使ってはいけないのだが、ヴィータは前もって、その許可をもらっていたようだ

「おう。それ以外に何があるって言うんだよ」

「（やっぱり（＾―＾；）？）」

因みにだが、このビビとヴィータの対決、こと模擬戦においては、ビビが全て勝利している。それは当然だ。何せ彼女には、兄特製のデバイス、“ワルギリア”があり、それがかなりの強固な壁と成り、ヴィータの攻撃を防いでは、後ろから反撃するという戦法を取るのである。そのワンサイドゲームのような戦法によって、毎度負けているのである

「何度もこれで負けてるんだから、別のを選んだらいいのに」

「うっせ！！　これで勝てねぇと、ビビよりも強いってのが証明出来ねぇじゃんかよ。それに、騎士として、戦いで負けっぱなしってのは気にいらねぇからな」

まぁ、そうだよね……うん、ヴィータちゃんの性格を考えたら、そうなっちゃうよね

「そうだ。おいビビ」
「ん？　なに？」

そう言うと、ヴィータはビッと人指し指をビビに突き出し

「今回の戦い、負けた奴は勝った奴の言う事を聞くってのはどうだ？」
「はい？（？―？）」

な、なんですかそれ？

「えっと、なんだっかか？　前に、時代劇で見た……そう、“背氷の陣”って奴だ！！　自分が不利な条件になるほど、気合いが出るって奴だ」

それ、“背水の陣”じゃない？　しかも、何気に間違ってる気が……

「つーわけで、行くぞ！！」
［チャキッ］

そういうと、ヴィータは己のデバイス、“グラーフアイゼン”を構えた

「あはは……しょうがないなぁ。ソレじゃ、私達も行こっか、ワルギリア」

『はい。あなたの盾として、必ずやお守り致します』

そして、互いに準備が揃った時……

［［ダシュンッ！！］］

「うおりゃあァァァァァァァァァァァッ！！！！！」

「ヤアァァァァァァァァァァァァァァッ！！！！！」

互いに、突撃し合った

□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■

そして、それから数分後……え？　戦闘はどうしたって？　あぁ、えっと……ビビの勝ちですけど。え、違う？　なんで書かないのかって？　いや、だって、終始こんな感じでしたから

【「喰らえ！！」「なんの！！」［ガキィィィィィンッ！！！］「クッ！！　こんなの、ぶち抜いてやる！！！」『させませんよ！！！』［バッ！！］「！！？」「ヤアァァァァァァァァッ！！！！」［ザンッ！！！］「ぐあッ！！？　クッソゥ！！！」】

……と、まぁこんな感じでした。それが永延と続いた結果、

定められていた被攻撃回数が規定値に達した為、ヴィータの負けになりました

「ぐぅ……クッソウ」

「やった！！　また私の勝ちだね♪」

そう言いながら、笑顔を見せるビビ。もう、悩んでいる事は忘れているようだ

――――――だが、そうは行かんぞ、ビビ・スティン……なにせ、君の起源は、もはや完全に目覚めているのだから……――――

「チッ……約束だ、煮るなり焼くなり、好きにしろ」

「え……？」

あぁ、そっか。最初に、約束したっけ。負けた方は、勝った方の言う事を聞くって……それってつまり、勝者は敗者を、好キニスレバイイッテコトダヨネ？

［ドクンッ！］

「ッ！！！？」

［ドクンッ！！］

なに……今の……あ、いけない……

［ドクンッ！！！］

「ッ！！！」

「……？　ビビ？」

あのときと同じ……あの、感覚……自分の内側から、何かが、這い出て来るような……あの！！

［ドクンッ！！！！］

「やだ……私は、もう、あんな……！」

「？　どうしたんだよ、ビビ」

ヴィータ……お願い……逃げ

［ドクンッッ！！！！！］

……

「ビ……ビビ？　どうしたんだよ。どっか、調子でも悪いのか？」

「……」

「？　ビビ？」

「ん？　何？　どうしたの、ヴィータ」

「なんか、変だったぞ、さっき」

変、だった？　あぁ、そうだね……

「何でもないよ、気にしないで」
「お、おう」
「フフッ。あ、そうだ。そう言えば、勝った人は、負けた人を、好きにしていいんだよね？」
「え、あ、あぁ……そういう、条件だったからな。自分でふっといて、アレだけどな」

……フフッ、むくれ顔のヴィータも、可愛いなぁ

「じゃぁ、好きにするよ？」
「ん？　ビビ、どうしたって［チュッ］ムッ！！！？」

ヴィータの言葉をさえぎるように、禁忌（ビビ）は、ヴィータの唇を、奪っていた

「ん……んん、クチュ……レロ……」
「ッン……ひひ、ひっはい、ない、を……んんッ！？」

ヴィータの声を塞ぐように、そしてかき消すように、ビビは己の舌を、ヴィータの口の中へと、入れていった

「んん……ヴィータの中、熱くて、甘い……」
「ビ、ビビ……いま、なに、しやがっ、た……？」

ヴィータは、何が起きたのか分からず、歯切れの悪い声を出した

「何って、好きにしていいんでしょ？　なら、ヴィータの事、好きなだけ触る。そして……」

私を、好きになってもらうの。もっと、心の底から……そしてあなたを、私だけのものに……

「ビビ……？」

ヴィータ自身は、その言葉の意味が分からず、そして、豹変したビビに、困惑した

「フフッ。ここじゃアレだから、家に帰りましょう。ちょうど今、はやてちゃん達はいないし、ね」

［フッ……］

そう言うと、ビビとヴィータは、その空域から姿を消した。それは、風のように……“あの神と、同じような、消え方だった”……

□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■

それから、大体、一時間後……

「……う、うん……ハッ！！　ここは！！？」

ガバッ！！　という音が聞こえてきそうなほどの勢いで、ビビはいきなり起き上がった。そして、周囲を見渡した

「ここ……私の、部屋？　それに、私、確か……（ヴィータと、模擬戦して、そして、勝って……そして）……まさか」

と、不意に視線を、右隣の下へとやると……

「……あ、ああ……」

そこには、前の夜と同じ……衣服を纏っておらず、そして彼女の特徴ともいえる三編みの髪型が解けた状態の……そして、その首筋には、前とまったく同じ、“牙を突き立てたような痕”があった

「いや……私、また……」

また、やってしまった……私は、また、愛する少女を……

……

「なんで……なんで、こんな、事を……？」

――――私は、どうして……なんで、彼女達を傷付けるような事を！！？――――――

［パチンッ］

「？」

そのような思考をしていると、指を鳴らした、乾いた音が聞こえた。それと同時に、世界が止まったかのような、そんな錯覚を抱いた

「話をしよう」

「え？」

そして、男の声が、聞こえた。それも、ビビは聞いた事がある声だった

「あれは今から、３６万……いや、１万４千年前だったか」

「……え？」

そこにいたのは、彼女達をこの世界に送った男だった……黒い茨の模様が付いた白いコートを羽織り、黒いシャツとズボンという出で立ちの男……

「まぁいい。私にとってはつい昨日の出来事だが……君たちにと

っては多分、明日の出来事だ」

「……神、様？」

男は、神だった。その、一見では、神だと言い難い服装だが、それでも、彼は神だと名乗った……それに見合う、奇跡すら起こしたほどに……

「……よ、久しぶり。一年と半年ぶり、かな？」

男は軽い口調とともに、その場に現れていた

＃５４　神と転生者の妹の対話、許される罪

――――――そして、とある兄妹（しまい）の妹は、神と再び出逢い、己の犯した罪を、吐露した……――――――

八神家の二階、ビビの部屋

「……」

「なんだい？　久しぶりに会ったって言うのに、そんな無言でいられても、困るのだが」

やれやれと言った、そんな仕草をしながら、まるで古くからの友人に話しかけるような口調で、彼はビビに話しかけた

「あ……あの……」

「っと、すまないな。こんなタイミングで出てくるなんて、デリカシーがないよな」

「え……あ」

何のことだろうと思い、訪ねようとしたら……自分の姿と、隣で自分と同じ姿をした少女を見て、納得がいった

「こんな場所でもなんだ。とりあえず、場所を変えよう」

［パチンッ］

□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■

「ッ……！！？」

と、再び彼が指を鳴らすと、目の前の風景が一気に変わった。そこは、どこかの庭園のような……太陽の日差しで温かく照らされ、周りには様々な花が咲き誇り、小鳥の囀りが聞こえる……どこかの貴族の豪邸の庭に見えるほどの、場所だった

「……あ、あれ？」

と、ふいに自分の姿を見てみると、黒い服を着ていた。それも、ゴスロリと言えるような、そんな服を、だ。それに、自分は椅子に座っており、前にはテーブルが置いてあった

「お待たせしました、お嬢様」

「ふえ……？」

と、神と名乗った男が、その場に現れた。服装は、執事が着るような燕尾服に、白い手袋。その手には、銀のトレイがあり、その上には、ティーセットとお菓子が置いてあった

「心休まるロイヤルミルクティーと、甘さが控えめのビターチョコです」
［コト］
「え、あ、あの……」
と、まるで本物の執事のような感じに、慣れた手つきでティーカップに注いでいき、それをビビの眼の前に置いていった
「あ、ありがとう、ございます」
「いえ」
というと、彼はビビとは反対側にある、もう一つの椅子に腰かけ……
「あ、あれ？」
すると、彼の服装はまたも変わり、今度は貴族が着るような服を纏っていた。自然と、その姿に違和感はわかなかった
「さて……まぁなんだ。冷めないうちに飲みたまえ。神が淹れたミルクティーなんて、滅多に飲めないぞ」
「あ、はい。頂きます……」
と、目の前にあるミルクティーを手に取り、それを口に運んでいき、喉へと流した
「……おいしい」
「だろうね。なんていったって、俺の嫁達も絶賛してるんだ。神様たるもの、美味しいお茶も淹れられなくてどうします？」

と、柔らかな笑みを浮かべながら、肘をテーブルに置き、手を組んでいた

「……」

そして、ビビは少し考えた後、唇を動かした

「……あの、聞いてもいいですか？」

「どうして、神様がここにいるのですか、だろ？」

「ッ……」

ビビの言葉を、その続けた。ビビは、それが知りたかった。いきなり現れた神。それも、あのタイミングでの登場。それを意味するモノは……なんなのか、決まっている

「……私を、罰する為に、きたんですか？」

「……」

神は、少女の懺悔に似た言葉を、何も答えずに、聞いていた

「あんな事をした……すずかちゃんとなのはちゃん、そしてヴィータに……あんな、人の意思を無視した、あんな、強引な……まるで、洗脳と同じような事をした、私を……」

「……」

「許されるわけ、ないですよね。あんな……酷い事をした、私を……」

少女の手の、ティーカップを握る腕は、震えていた……自分は、罰せられる為に、呼ばれたのだと……そう、思っているからだ

だが、神の答えは、その気持ちとは、まったく違ったモノだった

「いいんじゃないかな？」

「え……」

「別に俺は、罰しようとか、そういう事をする為に来たわけじゃない。っていうか、むしろ逆だ」

「ぎゃ、逆？」

「そう、逆だ……君の悩みを、解決してあげようと、思ってね」

彼は、彼特有の、あのニヒルな笑みを浮かべた

「君は、“どうして自分があんな事をしてしまったのか”と、悩んでいるんだよね」

「は、はい……」

「無意識のうちに、彼女達を犯していた……それも、自分では抑えきれない、本能の波に飲み込まれて、ね」

「……」

神は、再び言葉を続けた……

「君は、“起源”と言う言葉を、知っているかな？」

「“起源”？“起源”って、あの……“空の境界”で出てきた、あの？」

“起源”……精神や魂、生命という観念を取り除けば、全てのモノは、何かに生まれ変わっている。其の前世から前世、その更に前世……いうなれば、魂の原点。その魂が持つ、始まりの意味……魂が持つ方向性。簡単に言ってしまえば、深い所に眠る本能……それが、“起源”である

「そう、それだ。君のあの行動は、その“起源”が関わっているのだよ」
「え……えぇ？」
起源？　私が無意識にあの子たちを犯していたのは、私の起源が原因？
「あぁ。ちなみに、君の起源は“禁忌”。禁断の愛に、強く惹かれる起源……例えば、同性愛とか、そういった愛を強く求める起源なのさ。それも、他者を感化してしまう程の、強力な起源だ。そうだな、これは俺の作った言葉だが、“浸食起源”とでも言おうか？　君の起源は、他者の起源を浸食し、その色に染めてしまうんだ。まったく、とんでもないモノだねぇ」
禁忌……私の起源って、禁忌だったんだ……
「覚えは無いかい？　例えば……そうだな、君は転生をする以前から、女の子が好きだった。とか」
「……はい」
「だろうね。君の記憶の一部を、少し拝見させてもらったが……っと、すまない。気を悪くしてしまったかな？　女性の記憶を勝手に見るなんて、男としては失格だな」
苦笑いをしながら、彼は申し訳なさそうな笑みをした
「それが……」
「ん？」
「それがどうしたって言うんですか？　私は、あの子達の心に、傷を付けてしまったんですよ！！」

あの子達に、酷い事をした……自分のせいで、あの子達は消えない傷を受けた。そして、あの子達の意思とは関係なく、自分を求めるようにしてしまった。あの毒（のろい）には、そういった要素も含まれている……私の力を、強く求めてしまう、そんな、呪（どく）いを……

……

「あの子達は、もう戻れない……普通には、戻れない。私のせいで、すずかちゃんとなのはちゃんと、ヴィータは！！！」

ビビは、泣きながら叫んだ……

「私は……普通の恋が、したかった……あの子達と、本当に、心の底から、通いあわせたかったのに……」

そう、弱々しく、彼女は声を紡いだ……

「だが、彼女達は、君を愛してくれるのだろうか？」

「？」

だが、男はそれを、少女の願いを……

「君のその気持ちを、はたして彼女達は、分かってくれるだろうか？」

否定した

「ど、どういう？」

「彼女達は人間の子。人という規範の枠の中で育てられたモノ達だ。そんなヒトと、お前が心を通わせ合える事など、はたして出来るの

かな？」

人間という知的生命が生き物が生み出した、社会という名の鎖。それは、同性同士の恋愛を、強く否定する

「そ、そんなの、やってみなきゃ分からないじゃないですか」

「もし、通わせ合えたとしても、それは親友程度で止まるだろう。いくらあの子達が、純真無垢であろうとも、所詮は人の子。社会という箱庭で育てられた精神は、やがてそういった、“禁忌”を嫌う……あの子達もいづれ、そうなる」

それは、一年後か、十年後か、または、明日か……

「そ、そんなこと「無いとは言えないだろう？　世の中は常に変わる。諸行無常。諸々（もろもろ）の行いに、常は無い。と書く……そう、人の心ですら、いづれ変わってゆくものさ」……で、でも、はやてちゃんとは……ちゃんと、心を通わせ合う事ができましたよ！！」

「あぁ。だが、それは彼女が無知なだけだ。あの少女は、人とあまり接する事なく育った。その脳にある知識も、全て本などから得た知識だ。そんな知識で得た社会など、本当の社会ではない。彼女は、社会というものに対して無知だった。故に、君という因子に感化され、知らず知らずのうちに、彼女も禁忌という起源に染まっていたのだよ。だから、君に魅かれたのさ」

「……」

ビビは、神の言葉に、黙ってしまった……

「それに、君は人並みの恋愛が出来ると思っているのか？」

「え？」

そして今度は、少女を絶望させるような言葉を、放った

「君は起源を覚醒した“存在”だ。それに、転生者なんていう、世界にとってのイレギュラーでもある。そして、ありえないほどのチート、っていうか、バグか？　まぁ、強大な力を持った存在だ。そんな“人外”とも言えるような存在が、人と同じような感情を抱けると思っているのか？」

「な……そ、それは、どういう」

「君自身は気付いていないだろうが、君はもう十分な、“バケモノ”なんだよ。それも、愛に飢え、愛する少女を我がモノにしようとする、ケダモノだ」

「ッッッ！！！！！！！！！？？？」

ショウジョは、絶句した

「……私が……バケ、モノ？」

「そうだ。そんな奴が、普通の恋愛がしたいだと？　そもそも、女同士の恋が、普通な訳ないじゃねぇか。何を言っているんだい？君は。クックックックック」

ニヒルな笑みで、彼はショウジョを笑った

「……違う」

「ん？」

「私は、バケモノなんかじゃない！！　私は、普通の「“腐痛”、だろ？　この変態が」ッ、でも！！！　それでも！！」

「否定するなよ。君はあの子達を犯している時、満たされたんだろう？」

「ッ！！！！」

「彼女達にその毒牙を突き立て、己の一部を中に入れた時、こう思

っていたんじゃないのか？　“これでこの子は、私のモノだ”って」
「止めて！！！」
「止めない。君は心の奥底から……起源が禁忌という事もあって、本能が少女たちを望んでいると言う事もあるが……高町なのはと、月村すずか、そしてヴィータ。あの子たちを犯した時、君は満たされた筈だ。そうだろう？」
「止めて……止めて止めて！！！　あれは私じゃない！！　私じゃ！！！」
「いや、君だ。君の本能さ……君は彼女達を求めた。だから、己のモノにしたかった。そうじゃないのか？」
「……止めてぇ、いやぁ……あんなの……あんなのッッ！！！！！！」

否定し続けた……己の犯した罪を、償わなければならないから。
いくら神の言葉が正しくても、彼女は否定した……

――――“許してやる”――――

「！！！！！！！！！！！！！！！！？？？」

その言葉を聞いた瞬間、ビビは、考える事を、止めた

「君は、許されたいのだろう？　己が犯した、人の意思を捻じ曲げてしまった罪を……だが、それは人間と言う名の規範の中での話

だ。君はバケモノ。バケモノに、そんな規範は通用されない」
「……」
「故に、君は自由だ。何をしても、君は罪に囚われる事は無い。だが、それでも罪と言う名の意識を持つのならば……その罪は、神たる俺が許してやろう」
神が許すのだ。それは、全てにおいて許される事と同義だ
「だからだ。君の行動は正しい……そう、欲しいのならば、奪えば良い」
「……」
ふと、周りの風景を見てみれば……あの美しかった庭園がまだ、そこにはあった。だが、今の神の言葉を聞いていると、その美しさが、醜く見え始めていた
「欲しいものは、奪えば良い。なにから奪えって？　それは……そうだな。未来に出来る、彼女達の男から、とでも言おうか」
「！！！！！！！！！！！！」
彼女達の男。その単語が出た時、ビビの思考が一気に加速し、想像した……自分の愛する少女達の隣に、男がいる。という光景を……
「いやだ……認めない。そんなの、認められない……」
そんな事、耐えられる訳が、ない。見たくない、考えたくもない
「だろう？　だから、今のうちに奪っちまうんだよ。彼女達を」

愛に形なんて無い。どんなに酷く醜かろうと、愛は愛だ。己の満足しか埋められない愛でも、別に良いじゃないか……

「愛すれば、いいの？」

「そうだ、愛すればいいのだ。愛を与え、幸せを与え……そして、己と一緒にいる事が、運命なのだと思わせればいいのだよ」

そうすれば、いづれ彼女達の方から、愛してくれるかもしれんぞ？

幸せにしてくれるのだから、私達からも、幸せをあげよう。愛を上げよう。と

「……幸せに……あの子達を、私の手で、幸せに……そうすれば、あの子たちから、愛を貰える……」

「そうだ。だから奪え。未来の男共から、彼女達を！！！　そして、己の色に……君の起源、“禁忌”に染め上げ、己のモノにするのだよッ！！！！」

そして神は、ショウジョに言った

――――――我が許そう。君の行いの全てを、我は容認しよう！！君は、許されているッッ！！！！！！――――――

と……

「……」

ビビは、その言葉を聞くと、今までの悩んでいた表情が、一気に晴れていき……それと同時に、彼女が纏っていたゴスロリの衣服の色が、黒から白へと、変わっていった。それは、まるで百合の花のように、汚れの無い、純白の色だった

「……許されるの？　私は、あの子達、を……」

「あぁ。本能のままに、犯せばいい。それは、許された事なのだから」

クックックックック、と、何かを秘めたような、ニヒルな笑みを浮かべながら、男は、席から立ち上がった

「フッ……じゃ、俺はこれで失礼するよ。君の絆……“禁断ノ絆（ピュア・リリイズ）”に、永遠があらん事を」

［パチンッ］

□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■

神が指を鳴らすと、ビビは、元いた場所……自分の自室に戻っていた。そこには、未だに、眠り続けるヴィータがいた

「……」

許された……私は、あの子達を、愛しても……奪っても、いいのだと……本能のままに、犯セバイイノダト

「……ウフ、ウフフフフッ……」

ビビは、笑った。それは、心の底から来る、笑みだった

「そうよ、奪おう。あの子達が奪われる前に、奪ってしまえばいいのよ」

それは、理性と本能、その二つの意思が混じった、結論だった

「そうよ、えぇ、奪いましょう。そして、犯しちゃおう」

愛する少女達全てを、己の禁忌へと、染める為に……

「ウフ、ウフフフ……ウフフフフフフッ……」

禁忌（ビビ）は、笑みを浮かべた……

＃５５　悲しき過去の宿命　運命の少女と、転生者（前書き）

テスト勉強そっちのけで執筆し投稿……これ、確実に追試決定だわ（＊―＊；　反省はしているが、後悔はしていない（キリッ

今回も、前回まと同様、描写がアレなので、注意して下さい。特に、“フェイトは俺の嫁”と、本気で思っていらっしゃる方（相当数いるかと思いますが）は、見ない事を推奨します

なお、この転生物語、気が付いたら１１０万アクセスに、９５００ユニークを超えてました

いづれ、何か突破記念の企画モノでもやろうかと思います。今は、今作を読んで下さり、支援していただいた皆様へ、感謝の言葉を送りたいと思います。本当に、ありがとうございます！！

次回のカミウラは、２月５日に掲載予定です。お楽しみに

ムーギネーター様、緋水様、あんぎゃーす様、皇　翠輝様、夕霧麻人様、真王様、蒼穹様、けびん様、寝落ちの亜留ジャ野様。ご感想、ありがとうございます！！！

＃５５　悲しき過去の宿命　運命の少女と、転生者

――――――そして、とある兄妹（しまい）の妹は、己の起源を受け入れ、その起源のままに、行動を起こす……――――――

海鳴市、某マンション

［ピンポーン……ガチャ］
「あ、ビビ。いらっしゃい」
「うん♪　お待たせ、フェイトちゃん」

□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■

という訳で、私、ビビ・スティンは、只今フェイトちゃんの家（イコール、リンディさんとエイミィ、あと黒いのの家）に来ております！！　え？　なんでかって？　いや、実はね……

フェイトちゃん、国語が全然出来ないから

……うん、その他は、すっごく良いんだよ。他のは全部１００点満点なんだよ。でもね……国語。それだけ、５０点代という……

え？　アンタはどうなのって？　一応、去年にも習った事をまたやってるようなもんだから、全教化１００点満点よ。意外だと思うけど、転生前でも、９０点代はザラだったのよ！！　頭いいの、私ッ！！！

……んで、こうして私と皆（はやてちゃんとなのはちゃん、アリサちゃんにすずかちゃん）で教えていると言う訳。日本語って難しいって言われるけど、本当に難しいみたい。それに、他の次元世界から見ても、この語源って結構珍しいみたいで、なかなか他の語源での応用が利きにくいんだって。へぇ～、日本語ってすごいね。さすがニッポン！！！

……そして、今現在、フェイトちゃんの部屋で、お勉強中です。小学生だからね、勉学はしないといけないと思います！！

「だから、この文法だと……」

「うん、うんうん……」

と、まぁこんな感じで、進めていきました

え??　なんでアンタだけなのかって？　他の皆は、本局に行ってたり、お仕事に行ってたりで、フェイトちゃんとフリーな時間が重なったのが、私だけと言う訳。おわかり！！？　下心なんてないのよ！！！

……あんな事を言われたけど……出来る事なら、心を通い合わせて、友達から恋仲になりたいんだ……せめて起源に……

“禁忌”に縋りたくは、無いから

□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■

そして、それから約数時間後

「ふぅ……これくらいでいいかな？」

「ありがとう、ビビ。おかげで、かなり分かってきた」

そりゃぁ、パーフェクトバイリンガルこと、アリサちゃんに、純日本人かつ、読書でかなりの知識を持つはやてちゃんに、頭良いなのはちゃんにすずかちゃんが教えているんだから、当然と言えば、当然だよね

「まだまだ教えることはたくさんあるけどね……この世界での漢字とか、古文とか」

「う……」

っていうか、あの小学校は凄いよ。なんと、小一から古文なんて教えてるんだよ。私も最初は追いつかなかったけど、はやてちゃんやなのはちゃんのおかげで、なんとかなってるけど……フェイトちゃんなんて、お手上げ状態なんだから

「が、頑張る」

「ッ！！［ドキンッ］う、うん！！　頑張ろう！！」

か……可愛い……今のあの、頑張るぞって言う感じの仕草……キュンって来ちゃった……あぁ、ホシイ

「ッ！！！」

だ、ダメダメ！！　抑えろ、抑えなきゃ！！　出来る事なら、心を通い合わせて！！！

「……」

「？」

あれ？　どうしたんだろう、フェイトちゃん……

「……ねぇ、ビビ」
「ほえ？　な、なに？」
あぁ！！　私のバカン！！！　なに声裏返ってるのよ！！！　っていうか、なんか、さっきと違って……暗くなってる？
「……どうやったら、“シグナム”に勝つ事が、出来るのかな？」
「ッ！！？」
シグナム……私の力を受けて、原作以上の力を有している、私の愛する人の一人。私の毒（マジュツ）を容れられえたのが原因なのか、フェイトちゃんとのパワーバランスが、一気に崩れてしまった。原作では、互いに力を高め合う、好敵手（ライバル）って言うのかな？　そう言う関係が、完全に崩壊してしまっている
「いくら頑張っても、シグナムのあの強さに、敵わなくて……」
「（……私の、せいだ……）」
原作をブレイクするっていう目的はあるけど、それで、愛する人の一人が、それで苦しむ事になるって事……その可能性も、あった
「（……私が、シグナムにあんな事をしたから、原作でのパワーバランスが……いや、シグナムだけじゃない。はやてちゃんや、なのはちゃんやヴィータ。それに、原作では魔法すら使えないすずかちゃんとアリサちゃんも……）」
原作における力の関係が、完全に崩れている。そうなると、やがて来るｓｔｓの時期に、取り返しのつかない事が、あるかも……そ

う、考えた

「ねぇ、ビビ」

「！！　な、なに？」

と、どうしたの？　フェイトちゃん

「シグナムと、何かあったの？」

「え……」

な、なんで、フェイトちゃんが、それを？

「シグナムが言ってたの。“私は、迷いが無くなった。いや、迷った時に、己の切先を正してくれる者を見付けた”って……それで、誰の事って聞いたら……ビビの事を、言ってたから」

「（シグナム……）」

本当に、私の事、愛してくれてるんだ……なんか、嬉しいな……っと、今は、フェイトちゃんの事を考えなきゃ

「……確かに、あったよ。シグナムと。ちょっと、言いにくい事、だけど」

「……そっか」

「……」

そう言って、フェイトちゃんは表情を暗くしていった……

――――――……止めて……――――――

そんな表情、しないで……まるで、私のせいで、そうなっていったみたいに、見えるから……

だったら、彼女にも容れよう

え……？

私のせいで苦しんでいるのなら、その苦しみは、私が癒せばいい……

……そう、フェイトちゃんにも、私の力を与えればいいんだ

……そっか。そうだよね、シグナムと同じ力を与えれば、彼女も、強くなって……

そう。だから……

だから……

――――――犯シチャオウ。心優シキ、金色ノ閃光ヲ、禁忌（ワタシ）ノ愛デッ！！！――――――

「ねぇ、フェイトちゃん」
「？」

少し、とろけたような口調で言ってみた……前に、起源が暴走（っていうのかな？　アレ）した時に、私が出してた声……こんな声出せるって知った時は、驚いたけど……今は、そんな事関係無い

「教えて上げよっか、私とシグナムが、どういう事を、したのかを」
「え？　び、ビビ？」

すずかちゃんとなのはちゃん、そしてヴィータと同じ反応……やっぱり、突然変貌したことに、戸惑っているんだろうね……でも、ゴメン。もうスイッチ、入っちゃったし。だから、止められないよ

「大丈夫だよ。痛くは無いから……逆に、気持ちいいかもね？」
「な、何を……んッ！！？」
［チュッ］

そして私は、フェイトちゃんの唇を、奪った

「ん……フェイトちゃんの唇、しびれそうな甘さだね」

「ビ……ビビ？」
「ん？　何？」
「な、なんで……なんで、キス、を？」

戸惑っているフェイトちゃんも、可愛い……ううん、可愛い。全てが可愛く見える。彼女の一つ一つの行動が、私の心を刺激してくる……

「言ったでしょ、教えてあげるって。シグナムと、何があったのかを」
「え……？」
「でも、今はシグナムの事は、考えないで。私を……私だけを見て、思っていて」
［スゥ］
「あっ……ビビ、ダメ……」

そういうと、私はフェイトちゃんの上着の裾を掴み、撫でるように上へと捲って行き

「あ……」
「ッ……！！」

そして、見てしまった……フェイトちゃんの、過去を

「（コレ……この、傷痕って）」

うっすらとしか見えないが、確かに、傷の痕がある。戦いでの傷では無い、これは、柔らかいなにかで、叩きつけられた傷だと、判別できた

「（この傷……そうだ、無印の……プレシアさんから受けた傷、なんだ。もう、普通では見えなくなっているくらい、消えてるけど……でも、まだ残ってるんだ）」

「ビ、ビビ……止めて」

そうは言ってても、抵抗はしてないよ？　だから、していいんでしょ？

「嫌だ。フェイトちゃんの受けた傷を見たら、もっと、大切にしたいって、思っちゃった」

「え？……傷？」

「だから……」

うんと、優しくしてあげる

［ペロッ］

「ひやぁ！！？」

そして、その見えない傷痕に沿って、優しく舐めた……なんだか、とっても甘く感じた

「いやぁ、ビビ……」

「クス……大丈夫だよ、フェイトちゃん」

「え……？」

「私が……あなたの力に、なってあげる。私があなたを、護ってあげる。その身がなんであろうと、あなたを傷付ける全てから、護ってあげる」

コレ以上、あなたのそのきれいな体に、傷が付かないように……

身も、心も……

「だから、受け入れて。私を……ねぇ、フェイトちゃん……」

「……ビビ……」

「フェイトちゃん……ん」

［チュッ］

そう言って、私はまた、フェイトちゃんの唇を、貪った。だけど、その唇の味を味わった時の私は……確かに、満たされていた

□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■

「……ん、んん……」

［ムクッ］

「……ふぅ、また、やっちゃった」

しかも、今度は人の家。それも、確かリンディさん、いたはずだよね？　なぜ来なかったし？

「（いや、ある程度見当は、付いてるけど……）」

そう言って、周りを見てみると、そこにあるのは、“明るい虹色の火線”で描かれた、魔法陣のような模様のライン……私は知っている。これは……“自在式”。そして、周りは、陽炎で覆われた空間……“封絶”だ

「（私って、こんな事も出来るようになってたんだ。あの神様、大奮発してくれたんだねぇ……）」

改めて、神の凄さを理解し、隣を見た

「……すぅ、すぅ……」

隣では、フェイトちゃんが小さな寝息を立てて眠っていた。その、あまりの可愛さに、私はまた、胸キュンしてしまった

「でも、もうこの子も……私の……」

そう言いながら、彼女のサラサラな金色の髪に触れた。そこから見えた首筋には、他の五人と同様、牙を突き立てた痕が、残っていた

「それが、あなたが受ける最後の傷。絶対に、傷なんて付けさせないからね」

うっとりとした表情で、その傷に触れると

「う……うん……ん？」

「あ……起しちゃった？」

「ん……ビビ？」

「っ、うん……」

あぁ、やっぱり、愛してる子から名前を呼ばれるって、なんだか気持ちいい。なんだろう、普段よばれているよりも、こういった雰囲気で呼ばれると、すっごく嬉しい

「……愛してあげる」

「ビビ……」

「うんと、うんっと愛してあげる。だから……今はいいけど、いつか、フェイトちゃんの愛を、私に頂戴」

さっき交わした、あの“愛してる”よりも、心の奥底からの、“愛してる”を……

「……うん」

［チュッ］

そして、何度目かの口付けを交わた……

こんなにも、満たされている日々が続き、私は……幸せだ

□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■

■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■

□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■

……青空広がる荒野

何も無い時は、普段ここにいる男……神を名乗る男は、その場で笑っていた。いつものようにい、隆起している岩の上に、座りながら

「クックックック……いいねぇ。また一人、魔女の毒を容れられ、禁忌に染まった者が現れたか……否、もう“者”ではないか。もはや、人には戻れないからな。なら……女（モノ）、と言おう。彼女達は、ビビの女（モノ）となったのだ」

禁忌に染められた起源、それはやがて本来の起源の覚醒を促す。ならば、そのモノはいつか、起源に目覚め、人という枠から外れ、“バケモノ”と化す……

「起源の目覚め。それは人と言う殻を破り、さらなる進化……いや、“真価”か。高次元の存在へとシフトする為の儀式……あの妹によって毒されたモノは、もはや人では無い」

ニヒルな笑みを浮かべ、その影響を受けた六人の少女達を見た

「クックックック……あの子達はもはや、あの世界にとってイレギュラーとなったか（ならば、あの世界の意思は黙ってはいないだろうな）」

つまり、何かしらの手を打たなければ……

「……駄菓子菓子！！　え？　漢字が違うって？　それは気のせいだ。だがしかし！！」

大事な事だから、二度も言おう！！

「百合はほんまにエェのぉッ！！！　こういった百合も、アリっちゃぁアリやろォ！！？」

そのような、明らかに終わっているような事を、高らかに公言しｔ「［［ゴオォォォォォォォォォォォォォォォッ！！！！］］」「のあッ！！？」

と、いきなり“蒼色と金色”の二つの太い閃光が、彼を包もうとした。が、彼はそれを間一髪で、後ろに倒れるように避け、そのまま岩の斜面をゴロゴロと転がっていった

「っつぅ……い、今のは……」

「チッ、避けたか」

おい、俺を狙っていたのかよ……ってか、この声……

「よっと。ふぅ……まさか、お前がこんな所に来るなんて、思いもしなかったぞ」

彼は、先ほど現れた襲撃者に話しかけた。その声は、まるで親しき、友と会うかのような、そんな懐かしさがあった

「あぁ。僕としては、あんまり君とは会いたくないんだけどね」

「そう言うなよ、我が同士にして、“反存在”よ」

襲撃者……緑と赤のオッドアイに、蒼い髪。その身は青年を想わせる体躯だが、身に纏う衣は、漆黒で塗られていた。まるで、闇夜の暗殺者のような出で立ちをした者……彼の知人は、彼の言葉を聞き、口元に笑みを浮かべた

「んで、なんでいきなり砲撃なんてぶっ放した？　挨拶にしては過激だろ」

「いや、この状況を見れば、分かるだろ？」

と言って、蒼き青年はその隣をちら見して、彼になんのことかを示した

蒼き青年の隣には、金色の長い髪に、赤き瞳。そして、彼と同じ、黒き衣服を纏っていた、１９歳ぐらいの女性がいた。そして、彼女のその金色の長髪は、黒いリボンで結ばれ、ツインテールのようになっていた。だが、その彼女の眼は、潤んでいた。頬は赤くなっており、恥ずかしそうに、俯いていた

そして、彼の隣にいる彼女を見て、そして彼の頭上で展開されている青空と言う名のモニターを見て……交互にその二つを見て

「あぁ、なるほど」

［ぽん］

と、納得した。わざわざ、相槌まで打って

「っ！！！　“トライデント・スマッシャー”ッ！！！！」

［［［ゴオォォォォォォォォォォォォォォォォォッ！！！！］］］

「のひょんッ！！！？」

いきなり、彼女はその手に持つ黒い戦斧の先から、この場の主に向かって三つの光の閃光を放った。が、彼は紙一重という所で、これを避けた

「……あ、危な」

この場の主は、冷や汗をドバドバ掻きながら、まるでブリキの人形みたいに、ギギギと首を曲げ、彼らの方を見た

「最低……最低です！！　こんな覗きのような事をして！！！！
それに……それにぃ！！！　うわぁぁぁ～んっ！！！！」
「あぁ、よしよし。大丈夫だから……アイツのラヴァーズに頼めば、きっとお仕置きしてくれると思うから」

彼女は涙目になりながら、隣にいる蒼い青年の胸にうずくまって行った。ってか、最後の方になんかすっごい処刑発言が出た気がするのは気のせいか？

「あぁ、なんだ、その……申し訳ありませんでした、ごめんなさい」

とりあえず、謝っておこうと思って、謝った

「……っていうか、何しに来た、お前ら。まさか、こんな事（だが覗きじゃなくて、監視だと言っておく！！）してる俺を殺しにきた訳じゃないだろう？」
「当然だよ。でも、こんな事してたとは……いくら僕でも、殺意と言うのが湧いたよ」

Ｏｈ……普段は温厚な彼が、殺意を抱くとは……でも！！　そんな事では止めないからね！！！

「次こんなことしてる現場を見かけたら、本気で君を殺すけど、良いよね。答えは聞いてない」

なんだと！！？　クソウ……大画面で見られる時代は、終わったのか

「で、なんの用だ」

「あぁ……前に君に頼まれた、例の“アレ”、完成したよ」

「……」

例の“アレ”、それを聞いた時、彼はニヤリと、何度目かの笑み浮かべた

「さすがだ。伊達に“創造”と“創世”。それら二つの創る力を司ってはいないな」

「君の“破壊”や、“破滅”と“崩壊”、“終末”よりも、ずっと使える能力だからね」

蒼き青年もまた、己の力を自慢するかように、彼の能力を冷やかした

「っといっても、君の“本来の力”を使えば、こんな事、簡単にできる筈だけど？」

「俺の力は、どっちかと言うとマイナス側に働きやすい。それに、プラス側の扱い方は、よく分からんし、おおざっぱにしか使えん。だから、エキスパートである君に、頼んだってわけさ」

「なるほどね……」

蒼き青年は、納得したかのような表情で、肩すくめた

「……で、こんなモノを、一体何に使おうって言うんだい？“魂の無い、抜け殻の体”なんて……それを、“五つ”も」

「あぁ、それはだな……秘密だ」

「……まぁ、別にいいけど。ちょうどいい暇つぶしだったし、何よりも、君の頼みだからね」

「いつも悪いな、同志よ」

「君に同志とか、あんまり言われたくないけどね、同志よ」

互いに、挑発するかのような笑みを浮かべて……蒼き青年は、となりの（未だに泣いている）女性の手を取り

「じゃぁ、アレらはここに置いていくから。またね、虹色の、破壊の神よ」

「あぁ、また会おう。蒼き、創造の神よ」

［［フッ……］］

二人とも、風のように、消えていった

「……さて、これで駒は揃ったかな」

と、先ほどあの二人がいた所を見ると、そこには、五つの人の形をした、何かがあった

「クックックック……あとは、あの連中が死ぬのを、待つだけか」

そう言って、青空に広がるモニターを見た……そこには、“三人

の男と、二人の女”が、映っていた

「クックックックック……さぁって、そろそろパーティの準備をしなきゃなぁ。あぁ、忙し忙し、クックックックック……」

この荒野の主は、ニヒルな笑みを浮かべながら、モニターに映る五人を、見つめていた

「その前に、フラグブレイクの良い方法を考えないと」

と言って、手元に（いつのまにか）散乱しているラノベの内の一冊を拾い、読み始めた

「あぁ～、どうしよ～かなぁ～……」

……不味い、のほほんさんの事を考えてたら、思考がのほほんさんみたいになってきちゃってるよ～……ど～しよ～？

＃５６　力無き炎の覚悟　ただの少女と、転生者（前書き）

読者の皆様。どうも、お久しぶりです、リィーンです

今回から、いよいよ転生物語を再開いたします

いままで私情で更新を停止していて、大変申し訳ありませんでした

謝礼、と言ってはなんですが、今回は二回連続更新とさせていただきます。そして、次回も、転生物語を更新する予定です

ムーギネーター様、あんぎゃーす様、緋水様、蒼穹様、夕霧麻人様、けびん様、真王様。ご感想、ありがとうございます！！！

#５６　力無き炎の覚悟　ただの少女と、転生者

――――――そして、とある兄妹（しまい）の妹は、なんの異点も無い少女の思いと渇望を知り、そして……――――――

……青空広がる荒野

「人と言うのは、なんと不平等で、憐れな存在なんだろうなぁ……」

目の前のモニター……青空に映るその映像は、あまりにも悲惨な、人種の違いを投影していた……

「貧富……豊かな暮らしをし、日々を悠々と暮らす者がいれば……貧しい暮らしをし、一日を生きるのにも必死にならなければならない者達……そして、能力の差……己のその天性の可能性を見出し、それを行使する者がいれば……己の可能性の無さに、嘆く者もいる……」

だが、それが無くては、存在は成り立たない。この世に、平等など、無いのだから……

「そして、彼女も……それに該当する存在だ……」

そう言った直後、青空のモニターに映し出されている映像が変わり、一面には、一人の少女が、必死に何かの訓練をしている姿が見えた

「彼女は、なにも無い……そう、己に異能の力など、秘められていないのだから……」

才能も無ければ、センスも資質も無い……おそらく、努力でしか得られない能力を、得ようとしている……

「秀才、と響きはいいが……ね」

「本当に、何もないのですか？　その子には」

ふと、その場に誰かが現れた……声、体のライン、顔付き、髪の長さ、纏う衣服……それらからして、女である事が分かる

「“ナユタ”か。どうした？」

「いえ……食事ができたから、呼びに参りましたのよ」

「そうか。悪いな……今行くよ」

そういうと、青空のモニターは、青々とした、蒼穹の空に戻った

「……覗きは、あまり関心はしないわよ」

「分かっているさ。だが、これも仕事だw」

クックックック、と、笑いながら彼は歩きだし、風のごとく消え去った

「……うそつき、ね」

ナユタと呼ばれた少女もまた、彼と同じように、風のように、その

場から消えた……

時は9月の中旬に入っていた……

夏も過ぎ去り、ビビ達が通う聖洋大付属小学校も二学期に入り、新たに気持ちが入る季節となった。そして、彼女達もまた、管理局での仕事も慣れてきていた

「じゃぁ、今日の六時から、海洋公園に集合ね」

「うん、了解♪」

「分かった、準備していくね」

彼女達は、暇があると集まって模擬戦などの訓練を重ねていた。そうやって、己の腕を磨いていった。今では、ベテランの魔導師にも

勝てる程の実力を持ち始めた者も現れ始めた程に……彼女達の力は、確実に伸びていた

「アリサちゃん、今日の六時、海洋公園に集合だって」

「う、うん。分かった」

だが、その中でも、あまり伸びが悪い者がいた……アリサ・バニングスである

「？　どうしたの？　アリサちゃん」

「へ？　あ、なんでも無いわよ。今日の六時ね、分かったわよ！」

……彼女は、その事に関して、悩んでいた

「（皆だけが、どんどん強くなっていく……なのはやフェイト、はやてだけじゃなくて、すずかも……）」

最近の皆の力の伸び用は、目に見えて上がっている

いや。初めの方から、自分はまったく伸びていないのだと、気付かされた。フェイトは幼いころから魔導師としての教育をされて、なのはやはやては、先天的なセンスを持っていたがために、魔導師としての戦いの伸びは良かった。そして、自分と同じスタートを切ったすずかは、元々の身体能力が良かった……それに比べて、アリサという少女は、まったく伸びなかった

「（理由なんて、分かっているけどね……）」

彼女は、確かに頭は良い。だが、彼女は“それだけなのだ”。知識だけは豊富であっても、それを実践でいざやろうにも、体が付いて

いけていないのであった。なのはやすずか、フェイト、はやてとは違い、元々戦いという分野においては不得手に等しかったのだ……

……

「（ビビは、まぁ……なんか明らかに飛びぬけているのは分かるけど……でも……）」

自分と同じスタートラインにいたはずのすずかに、明らかな差が存在する……故に彼女は、それについて、思い悩んでいた……いや、“諦めかけていた”

「（いくらやっても、結果は同じ……）」

頭の回りが良い故の、結果だった。いくら知識を身に付けようとも、結局は変わらない。それらの知識を活かそうと努力しても、そうしている間に、他の皆の力は上がって行く。だから、皆と共には、付いて行けないのだと……悟っていた

「（はぁ……覚悟、したはずなのにな……）」

自分は、この異能の力を得るために、死ぬような想いをした。あの時は、本当に恐怖を感じた。だが、自分はその恐怖を払いのけ、力を手にする事が出来た。その時の覚悟の表れとして、親に魔導師としての事を話して許しを貰い、今までやってきたお稽古や習い事を止めてまで、この魔導の道を歩みはじめたのだ。なのに、力を手にした途端、こんな些細なことに、頭を悩ませていた

「（って、私は何マイナス思考になってんのよ！！！　こんなんじゃぁダメ、ダメに決まってんじゃん！！！　）」

そう、心に鞭を打って、今まで考えてきた思考を振り払い、六時からの皆との自主訓練の事を考えた

「（今は、少しでも今の状態に合った戦闘方法を模索しないと！！せめて、なのはには勝たないと！！！）」

そう思った時、授業のチャイムが鳴り、意識を授業と戦闘での立ち回り方の二つの思考へと持っていった

そんな、不安になっている事を誰にも気づかれないようしていたはずのアリサだった……

「……」

が、ある一人だけは、それに気づいていた……

□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■

そして、午後七時……

ビビやはやて、なのは、フェイト、すずか、アリサ。そして守護騎士達を含む数名での自主訓練は終わり、その場で解散になった

「はぁ……結局、またダメだったか……」

授業中に考えていた戦略は、悉く看破され、なのはやフェイト、すずか達に連戦連敗だった。やはり、自分の状態や体の負担や、体にかかる反動、それらを計算したうえでの戦法だと、無理があった……無茶をすれば、ある程度はいけるのだが、やはりそれでも限界があった

「……どうすれば、いいんだろう……はぁ」

そう、皆と離れたあと、ぼそりと呟いてしまい、ため息を吐いた……

「ア～リサちゃん♪」

「ッ！！　ビ、ビビ？」

ふと、後ろから誰かに呼ばれ、振り向くと……そこには、ビビがいた。その表情は、いつもの笑顔……ではなく

「……ちょっと、いい？」

少し、悲しげな……痛々しい何かを、感じさせていた

□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■

「……で、何よ」
「そう、ぶっきらぼうにならないでよ～」

あの後、私はアリサちゃんと二人で、近くにあった公園のベンチに座っていた。すこしばかり距離があるのが、ちょっとアレだけど……

「で、何の用なの？」
「いや……最近さ、アリサちゃん、思いつめているなって思って」
「ッ……べ、別に、そんな事無いわよ！！」

嘘……私は知っている。いや、知っていなきゃ、いけなかった……

本来なら、アリサちゃんはなんの力も無い、普通の人だった。でも私がいたから……私と言う存在がいたから、アリサちゃんは魔導師となった。私が、お兄ちゃんに頼んで、魔導師になる方法を探ってもらって、そして、それを実行した……もし、私があの時に、アリサちゃんとすずかちゃんを魔導師にする事を諦めさせていれば、こんな事にはならなかった……

それに、アリサちゃんは本当に、ただの人間。すずかちゃんは、夜の一族っていう、生まれた時から、異質な存在だった。フェイトちゃんは、最初から魔導師としての教育を受けていたから……

それに、もし同じスタートでも、はやてちゃんやなのはちゃんには

勝てないかも。なのはちゃんの空間把握能力、はやてちゃんの魔導師としての資質……それら、生まれながらにして魔導師として天性の才を持っている彼女達には、適わないだろう……そう。言ってみれば、アリサちゃんは本当の意味で、凡人なのだ。それを……それを私は、早く気付くべきだったのだろう。気付いたのが、先月の夏休みの間だった……全てを知っていたが故に、こういうことに、気付くべきだった……

「そんな事、無いわよ……」

「そうやって弱々しく言っても、説得力ないよ」

「……」

やっぱり、思い悩んでいるんだ……私のせいで、こんな目になった。そう言っても、過言じゃない。私は、この子を魔導師にした責任がある……でも、私なんかに、何ができるのだろうか……

……っていうか、あるじゃん

そう、私には……今の私には、ソレが出来る。今、アリサちゃんが抱えている悩みを、解消する事が出来る

それは、とても簡単な事……

うん。そうだ、そうしよう……

そう、しなきゃいけない。私が歪めてしまったモノは、私が何とかしなきゃいけない。それが、さらなる歪みへとなったとしても……

……

そう……これ以上、私が好きな女の子達を、苦しめたくないから

……

――――――アリサチャンニモ、禁忌（ワタシ）ノ愛（ドク）ヲ、上ゲチャエバイインダ

――――――

そうと成れば、まず、やることは……

「……ねぇ、アリサちゃん」

「な、なに？」

「ちょっと、移動しよっか」

「え？　あ、ちょっとぉ！？」

アリサちゃんに優しく声を掛け、そしてその後、彼女の手を取って、ベンチから立ち上がり、すぐさま駆けだした

□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■

［タッタッタッ］
「ちょ、ちょっと、ビビ！！　こんな所に連れて来て、なんなのよ！！」

アリサちゃんの手を引っ張って連れてきた所は、海鳴公園の茂みや木々の中。そう、人気の無い場所である

「ねぇ、アリサちゃん……」
「な、何よ……」
「アリサちゃんは、私の事……好き？」
「……え？」

素っ頓狂な声で、私の告白を返してきた。もう、そこは“うん”って、恥ずかしそうに言う所なのに……

まいっか。これから、そう言ってもらうんだから……

［トンッ］
「っ、な、いきなり変な事いわな「ん」」
［チュッ］
「んぐッ！！？」

近くの木に優しく押し倒し、そのままアリサちゃんの唇を奪った。その味は、燃えるように熱く、そして……紅茶のように甘かった

「ん……ちゅ、ちゅくッ……」
「んん……ひ、ひひ、んん……ッ!?」
［クチュッ、クチャッ……ペロッ……］

私の舌で、優しくアリサちゃんの唇を舐め、少し開いた口の中に、私の舌を入れて、厭らしい音を立てて、彼女の口の中を貪る。それは、まるでケーキのように甘く、幸せな味がして……頭の中が、クラクラするような刺激があった

「ん……んあ」
「ぷはぁ！　はぁ、はぁ、はぁ……な、なな、何してんのよ!!!　アンタは!!!!」
「何って、キスよ。ふふ、どうだった？　私のキスの味は」
「分からないわよ!!!　は、初めて……なのに……」

そう言いながら、顔がどんどん赤くなって、恥ずかしそうに俯いていくアリサちゃん……もう、キュンとくる反応ねぇ

「やった♪　アリサちゃんのファーストキス、ゲット☆　じゃぁ、セカンドもいただき？」
「へ？　ちょっと、ん」
［チュッ］

また、その熱い唇にキスを落とす。今度は、ついばむようなキスだけど。それを、何度もアリサちゃんの唇にする

だけど、そのキスに抵抗がなかった。さっきのキスは、不意打ちからのキスだったから、混乱して抵抗するのを忘れていただけだったと思うのだが……もしかして、さっきのキスになんか媚薬的な効

果でもあったのかな？　まぁ、なんでもいいや

こうして受け入れられてくれるのは、凄く嬉しいから……

「ん、んふぅ、ん……」

「ん、び、ビビ、ん、ちょっとぉ、ん……」

［チュ、チュッ……］

「ん……な、なんで」

「？」

「なんで、いきなり、こんな事……」

なんでって……決まってるじゃない

「アリサちゃんの事が、好きで好きで、堪らないから」

「え……？」

「アリサちゃんが可愛くて、アリサちゃんが愛おしくて……愛したくて、堪らないの」

「ビ、ビビ……もしかして、アンタ……ん！？」

［チュッ］

言わないで……ううん、言わせない……

落としてやる……アリサちゃんを、“禁忌”に染める。染めさせて……私を愛するようにしてあげる。あなたを幸せに……最高な幸福に導けるのは、私。私だけなんだから……

「んあ……ねぇ、アリサちゃん。」

「な、何よ……」

「強くなりたい？」

「ッ……！！？」

「最近のアリサちゃんの気持ち、凄く分かる。いくら頑張っても強くなれない事、すっごくわかるよ」
「な、なんでそれを」
「アリサちゃんの事、よく見てるからね、私」
「な……／／／」

あ、顔が赤くなった。うん、そういった表情も、可愛いなぁ

「だから、ねぇ、アリサちゃん……強く、なりたい？」
「……確かに、強くはなりたいわよ。皆と、同じくらいには」
「（……やっぱり、その事について悩んでたんだ……）」
「でも、いくら頑張っても、全然、強くなれないし……どうしたって、もう……」

っ……そんな悲しくて、苦しそうな顔、しないで……アリサちゃんには、そんな表情、似合わないよ

だから、私が強くしてあげる……うん、私の、愛で

「アリサちゃん、顔、上げて」
「？　ビ……ん」
「チュッ」

何度目かの、キスをする。今度のキスは、長めの、深いキス。それも、抵抗なく、アリサちゃんは受け入れてくれた

「ん……レロッ、んぅ、クチュッ……」
「んく、んん……クチャ……」
「レロ、チュルッ、チュ……」

「ん、んん……んぐッ！！？」
［コォォォォッ……！！］

そのキスの時に、私はアリサちゃんの中に、自身の力を注ぎこむ。
何が起きたか分からないような表情をした彼女は、一瞬だけ困惑し、
苦しそうな表情をする

「ん……んくぅ」
［チュ……レロッ］

でも、その注ぎこまれた何かの正体に気付いたのか、はたまた、その一瞬の苦しみが杞憂だったのかを知った途端、彼女は自分から舌を私の口の中へと滑りこませて、その何か……その力を貪るように、彼女の舌が私の口の中を這う様に動いて、私の中へと容れてゆく

「（あぁ……アリサちゃんが、私の事を、求めてる……）」

つい、そう思ってしまう。本当は、その力が欲しいだけなのかもしれないが……でも、私はそう思う。そう思った方が、嬉しいから
……幸せ、だから

「ん……んあ」
「んあ……はぁ、はぁ、はぁ……」

深く、長いキスを終え、私達の唇は離れる。その時に出来る、銀色の糸。これは何度見ても、すごく綺麗に見える

「くす、どうだった？　私の愛は」
「あ……愛？」
「そう、愛。私から、アリサちゃんへの、愛」

実質は、違うけど……でも、私からの愛だと言うのは、変わらない

「ねぇ、アリサちゃん……もっと、もっと受け取って、私の愛を」

「……」

「そして、私の事を愛して、二人で愛し合おう……ねぇ、アリサちゃん」

「ビビ……」

［スッ……シュルッ］

そう言って、私は彼女の制服のリボンを解く。アリサちゃんはそれでも抵抗する事無く、私の行動の全てを、受け入れていった……

……

□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■

それから、数十分後

「ハァ、はぁ、はぁ、はぁ……」

「はぁ、はぁ、はぁ……ん、んくぅ……」

はぁ、ちょっと……激し過ぎちゃったかな？　いくら人避けの結

界張っていても、野外はかなりスリルがあって、凄い感じちゃった……

アリサちゃんも、＞誰か来たらどうするのよ＜とか言ってたけど……嬉しそうに言ってたから、熱が入り過ぎちゃった

「（でも、これでアリサちゃんも、私のモノ……）」

［ペロッ］

猥らに肌蹴ている制服のアリサちゃんの首筋を、ミルクを飲む子猫のように、優しく舐める。そこには、今までの皆と同様に、二つの牙を突き立てた痕があった

「ウフ、ウフフフッ……あぁ、私の、アリサちゃん……」

［チュッ］

「ん……ひひ……ん」

［クチュクチュ、レロ、クチャッ……レロ］

「ん、んん……んあ、ん……」

「んあ、ん、んん……れろッ、ん……」

二人で、お互いを求め合いながらのキスは……どんなキスよりも、格別に気持ちいい。そして、何よりも……楽しくて、嬉しくて、幸せに成れる

あぁ……なんて最高な気分なんだろう……私は、それだけに、満たされていた

□■□■□■

その青空のモニターに映っていたのは、俺が転生させた兄妹の片割れと、俺が転生先に選んだ世界の住人の少女との、猥らな淫行の現場である

「なんてモンを見てんだよナユタぁ、お前も覗き癖でも出来たのか？」

「えぇ。貴方に感化させれてしまいましてね……ふぅ、昔の私では、あんなモノを見ていたら、恥ずかしがってそれを止めようとする筈ですが……」

「エッチな子に育っちゃったねぇ。ま、俺はそれでもいいんだがな」

「こうなったのは、あなたのせいでしょう？　責任、取ってくれる約束、忘れは致しませんわよ」

「あぁ、分かっているよ、ナユタ」

「ふふ……」

そう言いながら、俺は彼女の傍まで歩みより、共に並んで猥らな空を見上げる

「……ねぇ、少し聞きたいのですけど」

「なんだい、ナユタ君」

「なぜ、あのアリサという少女は、一度のキスだけで、彼女を受け入れたのです？　まさか、本当に媚薬のような効果でもありましたの？」

「あぁ……あれはおそらく、彼女の起源が一気にあの少女の起源に浸食したから、だろうね」

おそらくだが、彼女のキスは、相手の起源を一気に禁忌という起源に染め上げさせる効果を孕んでいる。故に、たった一度のキスで、あの少女はビビの虜になったんだろうな

「まさか……それほど彼女の浸食力は強いのですの？」
「あぁ」
「……では、あのビビが行ったあの行為……あれはなんですの？」
「あのなんか力を与えていたキスの事か？　そうだな……おそらくだが、アレはビビの魔力。いや、存在だろうな。それを、少女の中に入れていたのさ」
「それって、まさか！！？」
「そう。“俺がお前にやった事”と同じ、“相手の中に、己の存在をいれ、その生命力を一気に活性化させる”方法だ。それを行えば、確かに保有魔力は跳ね上がると思うし、そして何より、その副作用で、あの少女は“己の潜在能力”に目覚める事が出来た」
「潜在、能力？」
「あぁ……“高速思考能力と、完全記憶能力”だ」

“高速思考能力”と“完全記憶能力”

どっちも、読んで字のごとく……前者は、思考を高速でフル稼働させ、普段は数十秒は掛かる思考を、わずかコンマ1秒で終わらせる事が出来る能力。そして後者は、一つ一つの物事を完全に鮮明に記憶出来る能力……

「これら二つの力に、彼女は目覚めた。彼女は頭が良かったのは、潜在能力である完全記憶能力によるものだろうな。そして、今回あのビビの影響で、それが完全に呼び起された。そして、“高速思考能力”。これと“完全記憶能力”が組み合わせれば……」
「戦略の一つ一つを記憶しておき、それらを実戦の場に於いて、瞬時に組み立て行動する。つまり、前線の司令塔、のようになれますわね」

「それだけじゃない。相手の一挙手一動すら記憶しておけば、それらから次の手を高速思考で割り出し、行動できる」
「なるほど。ようは、考えるのが早くなり、隙を少なくできる。という訳ですのね」

あぁ、その通りだ

「そして、あの少女は、その生命力を得ることで、その力を目覚めさせる事が出来るという事を知り、あの生命力を受け入れたのですね」
「あぁ。だがそれは、ビビの愛を受け取る事と同義。彼女は、力を得る代償として、ビビの愛獄に墜ちる事を選んだのさ」

これでもう、あの少女は元には戻れない。無垢だった起源は禁忌に穢され、また己の初めて全てを、彼女に奪われた……それはもう、あの魔女のモノになるしか、あの少女の生きる道は無い

「フッフッフ……いやいや、あそこまで欲に従順な存在、久方ぶりに見たよ」
「いつも見ておりません？」
「あぁ……アイツらは別だ」

何はともあれ、これからも、俺の期待以上の動きを、楽しみに待ってるよ……

「クックックックック……クッハッハッハ

#57　穏やかな団欒の中　風の騎士と祝福の書と、転生者

――――――そして、とある兄妹（しまい）の妹は、今の生活が、自分の行動によって作られた結果だと知り、そして……――――――

……青空広がる荒野

そこには、いつも通りに、青空という名のモニターを見上げながら、ニヤニヤと笑みを浮かべる男がいる……

「さってさて、今度は誰があの変態の餌食になるのかなぁ♪」

その姿は、まるでアニメが放送されるのを心待ちにしている子供のような無邪気さと、今何を考えているのかがまるで分からない、暗い闇を思わせる冷静な感情を、見る者に与える

「クックック……いまだに墜ちていないのは、この二人かな？」

［ウォウォン］

と、男が不意に、二つのウィンドウを目の前に展開した。そこに映るのは、二人の女性……

「ふむ……よし、次はコイツが狙われると予想……いや、こっちだ！！」

［ビシッ！！］

その二つのウィンドウの内、一枚を指差し、宣言する。そのウィンドウに映る女性は、長い銀髪に、紅い瞳をした女性

ちなみに、もう一枚のウィンドウに映る女性は、薄い金色の髪に、薄めの紫色の瞳をした女性である

「……かつて、呪われた書として生きたモノ。今や、その呪いは浄化され、生きる意味を見出し、平穏な日々を生きている」

銀髪の女性のウィンドウを見ながら、男は語る……その女性の過去と、今抱く思い、現在を……

「そして、かつてはその呪われた書の守護者であったコイツも、今の主と出会い、あの転生者の妹と出会って……本当に、幸せに満ちた日々を送っている」

もう一つのウィンドウに映る女性を見ながら、男は更に語る。二人の少女によって、あの書に関わるモノ全てが、救われた事を……

……

「この二人は、あの少女によって救われたようなモノだ。そうでなければ、あんな平和な日常を過ごせる筈が無い」

モニターではない、雲一つなき青空になった天を眺め、その男は、語る

「全ての始まりは、あの少女の思い。“救いたい。あんな悲劇から、好きな人達を助けたい”。という、願いから……」

そして、その為に行動し、その願いは成就され、今は幸福な家庭として生き続けている

「フフッ……あぁ、どうなるのかなぁ、楽しみ楽しみ♪　クックックックックックック」

男は、笑みを崩す事無く、再び映像を映し出した大空のモニターを眺める。どこか、気だるそうな雰囲気を、隠しながら……

□■□■□■

で、この室温を高めるように、ある二人が騒いでいます

「おいビビ！！　私がとっておいたプリン食っただろ！！」
「む、なんでそこで私だって判別するのよ！！！」
「お前しか食うような奴はいないからだ！！」
「な、なんですとぉー！！！」

と、ビビちゃんとヴィータちゃんがなにやらケンカしていたり……もう、ビビちゃんはともかく、ヴィータちゃんは子供じゃないんだから

「もう、二人ともまだまだ子供やなぁ」
「え、えぇ……」
「？　どないしたん、シグナム。新聞で顔を隠すようにして」
「い、いえ。今日の新聞は、いつもより字が小さいような気がしまして……」
「ふ～ん……」

……まさか、ヴィータちゃんのプリンを食べたのって、シグナム？　あとでちゃんと謝りなさいって、言っておかないと

「シャマル。こっちの食器の片付けが終わったぞ」
「あ、ありがとう、リインフォース。っと、それじゃぁ、今晩のご飯の買い物に行かないとね」
「付き合おうか？」
「いいの？」
「今日は特に何も無いからな」
「分かったわ。あ、ザフィーラも行く？」
「……」（コクッ）

と、今日もこんな感じで、一日が始まります……

本当に、一年と数カ月前までは、まったく考えてもみなかった生活。ううん、考えられなかった生活。はやてちゃんが主になって、ビビちゃんと出会って、私達は変われた。闇の……ううん、夜天の書の管制人格であるリインフォースも救われて、私達は、こんな温かな日々を、生きている。本当に、ビビちゃんやはやてちゃん、そして皆のおかげで……私達は、夢の生活を過ごせている……

「（本当に、あなたのおかげね……ビビちゃん）」

私は、その思いを密かに念じ、リビングを離れた

□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■

それから、私達は昼食を取り、各々がのんびりとした日を送っていた

「はぁ～……ぽかぽかな陽気だね～、はやてちゃん」

「せやなぁ～……ちょっと昼寝でもしてしまいそうやわぁ～」

我が主も、そして今の主……ビビも、互いにベランダで寝転がり、温かな日差しを受けている

「おいシグナム！！　私があのプリンを買う為に費やした時間をどうとってくれるんだよ！！！　あの店の、毎週日曜日に先着限定１０個しか発売されない貴重なモンなんだぞ！！！！」
「す、すまない……次の日曜日に、また新しい物を買う。それで今は許してくれ」
「ほう……前日の深夜から店の前でまってまでして買ってくれるっていうのか？」
「な……そこまでしなければ買えない物なのか！！？　あのプリンは！！」

なにやら、将と……いや、シグナムとヴィータが、何やら揉めているな。昔では、考えられないな。シグナムが、あんな事であそこまで動揺している姿というのは……

「……ふふ」
「あら、どうしたの、リインフォース。笑みなんて浮かべて」
「シャマルか。いや、なんでもない」
「そう？　あ、紅茶淹れたから、飲む？」
「あぁ、頂こう」

そういえば、最近の事だな。シャマルが淹れたお茶が飲める位になったのは。今までは、何やら妙な色の液体、とビビが言っていたな。だが、八月に入った時に、だったか？　やっと飲めるようになったと、皆から言われたのは……

「これでも、毎日お料理の勉強は欠かしていませんから」
「そうか……」

ん？　声に出ていたか？　まぁ、どうでもいいか……

「ほへ～……日向ぼっこは、私のライフワークなのだ～」

ふふ……本当に、私にこのような生活をありがとう……ビビ…

……

□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■

その日の夜。皆で夕食を食べ終えた後

「ほんなら、行ってくるわ」

「うん♪　行ってらっしゃ～い！」

「シャマル、リインフォース、留守は頼むぞ」

「はい」

「あぁ、任せろ、シグナム」

「お～い。早くいかねぇと、遅刻するぞ」

「っと、せやな。ほな、お留守番よろしゅうなぁ」

「はいは～い♪」

［バタンッ］

……と言う訳で、今夜は私とシャマルとリインフォースの三人でお留守番です。明日からなんかある事件の調査をするとかなん

とかで、今日から本局の方に行って、一泊してくんだって

あ～あ、なんで私にも召集が掛からなかったんだろう？　こうなれば、一気に上の階級に行って、私が命令する立場にならなきゃね。そして、可愛い女の子たちでいっぱいな部隊……“ヴァルキュリア・オブ・ユートピア”を作ってやるッ！！！　もちろん、全員私の嫁よ

「さってと、夕食の片付けをして、のんびりテレビでも見よっかな」
「はい、三人でやれば、直ぐに終わりますし」
「そうだな……早めに終わらせよう」

□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■

と、まぁ片付けの様子とか、お風呂シーンとかなんて、アイツ（作者）は書く訳も無く……あれ？　変な電波を受信した気がする……まいいや

ちなみに、お風呂は一番最後にいただきました。なんたって、今日はシャマルとリインフォースの二人が先に入ったのよ。美女二人が入った後のお風呂程、最高なモノは無いからねッ！！！　ちなみにだけど、いつも一番最後に入ってますよ。はやてちゃんやシグナム、

ヴィータちゃん達が入った後のお風呂の香りと言ったら、もう至福の一言で……

「（って、私凄い変態じゃん（――；））」

って、今頃気づくのは、遅すぎるかな？　そうだよね、あ～んな事やってんだから

そして、私はリビングでのんびりとテレビ、それもお笑い番組、を見てるんだけど……

《なんでやねん！！》《んなアホなぁ！！》

……はぁ、なんかイマイチだなぁ、こいつ等。ホント、男って屑ばっか。そんで、可愛く無い女も、屑しかいない……あぁ、やっぱり最高なのは、はやてちゃんやシグナム、すずかちゃんになのはちゃんにヴィータにフェイトちゃんにアリサちゃん。そして、隣にいるリインフォースとシャマルみたいな、美女と美少女ね！！！

「さ～ってと、もうそろそろ寝よっかなぁ」

「そうですねぇ、もう寝る時間ですし」

そう言って、私は座ってたソファから跳ね立ちあがり、自室に向かっていった

「ねぇ、ビビちゃん」

「？　何、シャマル」

不意に、シャマルから声を掛けられ、歩むのを止め、声を聞こうとする

「……ありがとう」

と、言われた……って、へ？

な、なんでいきなり……ほえ？　なんで、感謝されたの？　私？

「ビビちゃんのおかげで、私達はこんな人生を、歩める事が出来た。本当に、ありがとう」

「しゃ、シャマル？」

「あぁ……お前のおかげで、私は主を悲しませる事無く、そして生きていく意味を見付けられた。」

「リインフォース……い、いやぁ、私は何もしてないよ」

したのは、お兄ちゃんだけじゃん。私なんて、結局何もできなかったし……

「いや。お前の姉が言っていた。お前達を救ったのは、お前だとな」

「え？　お姉ちゃんが？」

「はい。私達が、感謝しようと思って、あの事件の後に、皆で会いに行ったの。その時にね、言われたの。あの詩が無ければ、皆今頃死んでいた、って。それと、アイツがお前達の所にいたから、お前たちの家族に成っていたから、今の幸福があるんだって」

……お兄ちゃんが、そんな事を……

「今、みんなで笑って、一緒に暮らしている事は、ビビちゃんのおかげよ」

「主はやてや、騎士達を幸せにしてくれ、私まで、救ってくれたのは、お前だ……ありがとう、ビビ」

「……あ、あっはっはっは、あいや、その……う、うん。どう、いたしまして？　って言えばいいのかな？」
「うふふ」
「あ、笑わないでよシャマル～！」
「御免なさい、ビビちゃん」

……幸せに、か……私がまず初めにここに来たのは、間違ってなかったんだね

ここにきて、私も幸せだよ。皆と一緒に暮らしているこの生活も、転生する前の生活に比べると、全然、雲泥の差だよ。この世界での生活の方が、幸せだもん……

そして、皆を幸せにしているのは、なんだかすっごく嬉しい。私も幸せになって、周りも幸せになっている……これが、こんなにも気持ちが良い事なんて、思わなかった

……ねぇ、もっと欲張っても、良いんじゃないかな

うん。この子たちは、皆苦しい過去を過ごしてきたんだもん

だから、もっと幸せになって欲しい……それが、私の喜びにも、幸せにもなるんだから

皆で、もっと幸せになりたい。もっと、もっと幸せになろう

なら、どうすればいい？　どうすれば幸せに成れる？

簡単だよ。そう、愛し合えば、更に幸せに成れんじゃないかな？
そうだ、それがいい。そうすれば、皆でもっと幸せになれる

――――――上ゲヨウ。禁忌(ワタシ)ノ毒(アイ)ヲモッテ、永久ノ幸福ヲ与エテ上ゲヨウッ！！！――――――

「クス……ねぇ、シャマル、リインフォース」
「「？」」

ソファに座る二人に近付き、とろけたような笑みを浮かべる

「ねぇ。二人とも、今が本当に幸せなの？」
「え、えぇ」
「そう言っただろう、ビビ」
「そう、良かった……うん、私も、二人にそう言われて、凄く嬉しいし、幸せだよ」

でも……“足りない”

［スッ］
「「？　ビビ｛ちゃん｝？」」

「でもね、私はもっと幸せに成りたい。よくばりだと思うけど、それでも、もっと幸せに成りたいの……だから」

二人の柔らかな頬に触れて、自分が今したい事を、呟く

「だから、ね。私……二人に、キスがしたい」

「え……えぇ！！？」

「キス……？」

シャマルは、いきなり言われた事に顔が真っ赤に燃え、リインフォースはそれが何なのかが分からないのか、首をかしげている……

……

そんな二人の仕草が、妙に艶っぽく見える。可愛い仕草のはずが、美女の二人がやると、凄く色っぽく見えてきちゃう……

「リインフォースは、キスがなんなのか、知らないの？」

「あ、あぁ」

「クス。じゃぁ、教えてあげる……ん」

［チュッ］

「ん？」

「～～～ッ！！！？」

と、私はいきなり、リインフォースに触れるだけのキスをする。リインフォースは、少し興味深げに私のキスを受けて、隣にいるシャマルは、顔を更に真っ赤にして驚いていた

あぁ……なんでだろう、二人のその様子が、すっごく可愛く見えちゃう

「……どうだった、リインフォース」
「い、今のが……キス、という奴か？」
「うん、そうだよ。他にも、キスは有るけど、ね」
「ほ、他にも、あるのか？」

あぁ……そんなに、キスに興味をもっちゃったの？　私はいいけどね。っていうか、もっと持ってほしいなぁ。キスをするのって、凄く好きだから

「び、ビビちゃん……あ、あなた、いったい」
「シャマルにも、キス、していい？……ん」
「え、あ、あの、ビビちゃ、んぐ！？」
［チュッ］

そう言いながらも、ちょっと強引にシャマルの唇を奪う。そして、さっきリインフォースに言った、もう一つのキスの仕方をする

「ん……レロ、んん、チュッ」
「び、ビビちゃ、ん……クチュ」
「クチュ、クチャ……ペロ、クチュ」

いやらしい音が、私とシャマルの口から聞こえてくる。口の中で、舌が動く音だ。その音は、何度聞いても心地よく、私を興奮させてくれる

「ん……んあ」
「ぷはぁ、はぁ、はぁ……も、もう、ビビちゃん、いきなり変な事しないでよ」
「あはは、ごめんね、シャマル」
「……／／／」

あぁ、頬を染めて恥じらう顔って、本当に可愛い。シャマル、そんな表情してると、またしちゃいそうになってきちゃう

「び、ビビ……今のが、もう一つのキス、なのか？」

リインフォースが、興味津々な口調でたずねてきた。さっきの私とシャマルの深いキスを、まじまじと見てたみたい。リインフォースって、意外とこういうのに興味を持つんだ……

ダメだ、そう考えただけで、更に興奮してきた

「うん、そうだよ。ねぇ、リインフォースも、してみたい？」

「な……なんだ、その……あんなのは、その、恥ずかしい／／／」

「……クス、大丈夫だよ。ほら、こっち向いて」

「ビビ……ん」

［チュッ］

そして、リインフォースに二回目のキスをする。それも、舌を絡ませての、深いキスを

「ん、んん……レロ、ん……ひいんふぉーふ……ん」

「んあ、ん、レロ……ほ、ほれへ、よひのふぁ？　ん、クチュ……」

［チュ、クチャ、レロッ、クチュ……］

まるで、深いキスを練習するかのような感じで、舌を絡ませてくる。そんなリインフォースが堪らなく愛おしくなっていく。だから、私はなんのアクションもせず、ただされるがままに、リインフォー

スに侵される

本当に侵しているのは、私なのだが……だが、こうもせめられると、そんな気分になってしまう

「ん……んあ」

「んあ。こ、こんなモノ、なのか？」

「クス、うん、すっごく上手だったよ、リインフォース」

「そう、なのか。良かった、ふふ」

あぁ……可愛い♪　リインフォースって、大人な女性って雰囲気があって、こう言った事でも、攻める方の方が似合っているんだけど……でも、こうして子供のように嬉しそうな表情をしていると、すっごく可愛いんだよなぁ……

「で、どうだった？　今のキス」

「？　上手、だったのだろう？」

「違うよ。あぁいったキスって、すっごく気持ちいいんだよ？　どう、気持ちよかった？」

「な……そ、その……気持ちいいというのが、よく分からないのだが」

う～ん。これはこれは、なかなか……教えがいがあるかも

「あ、あの～……ビビ、ちゃん？」

「あ、ごめんね。シャマルも、またキス、して欲しいの？」

「えぇ？　いや、あの」

「ん」

「チュッ」

「ん……もう、ビビちゃんは……」

「うふふ、ごめんね、シャマル」

こんなシャマル、見るの初めてだ……あぁ、本当に綺麗だよねぇ、シャマルは……

「ねぇ、シャマル、リインフォース」

「？」

「こ、今度はなに？　ビビちゃん」

「三人でさ、その……私、気持ちよくなりたい。皆と一緒に、幸せを感じたいの」

そうすれば、もっと幸せに成れる。うん、気持ちが良いほど、幸せな事は無いから……

「さっきみたいなキスを、またするのか？」

「ううん。キスの他にも、色々するよ。いろいろやって、もっともっと、気持ちよくなって……幸せになりたいの」

そして貴方達にも、幸せを感じさせてあげる。それが、私の幸せでも、あるんだから

「……ビビちゃん」

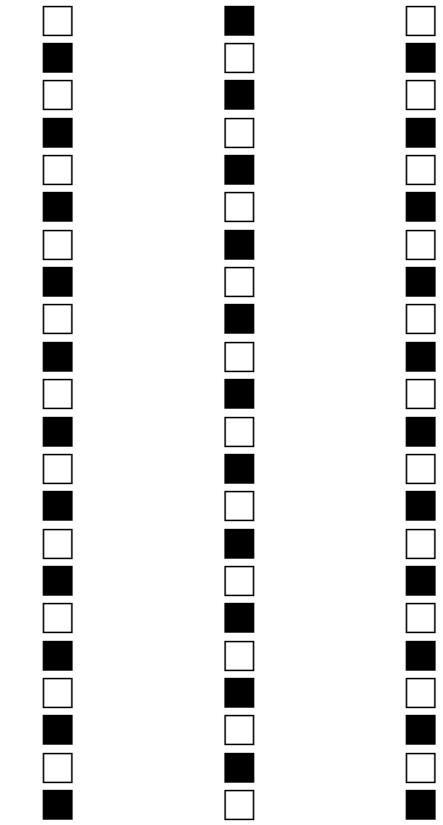
「ビビ……」

「シャマル……リインフォース……」

「スッ……」

少し、興奮した声で、二人の名前を呼んで、衣服に手を掛けていく……もっと、幸福な気分に、成る為に……

その首筋に、私のモノにする為の、刻印を刻むために……



青空広がる荒野

「……」

あんぐり。開いた口がふさがらん。いや、それくらいに衝撃を、俺は受けていた

「まっさかの……二人同時攻略。そんで、三人でやっちゃったのか！？」

あの変態妹、やるなぁ……百合でそこまでするたぁ、さすがとし

か言えねぇわ、うん……

さすがは、禁忌を起源としているだけは有るわ……禁断の方法で、まさかいきなりそういった攻略をするなんてなぁ……俺ですら予想外だったわ

「だが、これでアイツが目にしている女性全員を、その手に籠絡してしまった、という訳だが」

こうして、九人全てのファーストキスと、初めての全てを、あの妹は奪っていった。そして、奪われたモノ達は、皆アイツの起源、禁忌に己の起源を浸食され、毒(まじゅつ)を入れられた。もはや、あの九人は普通には戻れんだろうし、元にも戻る事も出来ない

「さってさて。もし、この九人とやっちゃったことが全体にバレたら、どうなるんだろうなぁ？」

クックックックック、それはそれで、楽しみだなぁ……

「さってと。まずはこの妹の所行を、兄(あね)であるアイツに見せにいかなきゃな♪」

どんな反応するだろうなぁ、ちょっと楽しみ♪　クックックックックックックックック

『愚かな主ぃ？　お楽しみの所、申し訳ないんだけど』

「？　どうした？」

『もうそろそろ、“起床”の時間ですよ？』

あぁ……もうそんな時間か。はぁ、コレからだってのになぁ

「確か、一限目は“織斑先生”の授業だったな。遅刻すると、またあの“青龍出席簿刀”で頭カチ殴られるや」

それだけは、有る程度避けたい。はぁ、お兄(ねえ)ちゃんへの報告は、また明日にでもするか

「そんじゃ、おはようでもしますか」

［ゴロン］

そして、今いる岩場の上に寝転がり、俺は瞳を閉じ……愉快な学園生活の中へと、目覚めていった

＃５８　トアル禁断ノ愛　九天の魔導騎士と、魔女の転生者（前書き）

どうもこんにちは、リィーンです

なんとか、書きあげたのですが……正直、低クオリティです。はい……

それと、今回は前回と同様、二話連続で更新します。それを以て、第三編、“禁断ノ絆”を終了とさせていただきます。そして、次回からは第四編を開始します

ムーギネーター様、ルファイト様、寝落ちの亜留ジャ野様、緋水様、あんぎゃーす様、真王様、鳴神ソラ様、夕霧麻人様。ご感想、ありがとうございます！！！

#５８　トアル禁断ノ愛　九天の魔導騎士と、魔女の転生者

――――――ソシテ、トアル兄妹（シマイ）ノ妹ハ、九人ノ女性達ヲ、己ノ色ニ染メアゲテ、自身ガ望ム絆ヲ紡ギ、ソシテ……――――――

……時は、９月の第四土曜日。その日、ビビやなのは、フェイト、アリサ、すずかの面々は、はやての家へと遊びに来ていた…

……

……そう、なのだが……

「「「「「「「「「「……」」」」」」」」」」

「……（こ、この空気は、キツい……）」

その部屋の空気は、ピリピリとした空気に包まれていた。言ってしまえば、一触即発。という状況だろう

「（ど……どうしてこうなった！！？／（。д。）／）」

なぜだろうか……だが、思い当たる事はある。いや、有りまくりだろう

言ってしまえば、うん……浮気がばれたアレ、うん、修羅場的なモノなのだ

こうなってしまったのは、はやての有る一言から始まったのだ

～～～「さすが、“私の愛するビビ”ちゃんやなぁ」～～～

この言葉を聞いた途端、全員が石のように固まり、ビビはその様子を見て、しまったと思い、会話を別の方向に持って行こうとしたが……すでに時すでに遅く

～～～「どういう、事なの……？」～～～

そして、なのはのその一言によって、八神家のリビングは……異界と化したのであった

「「「「「「「「「「……」」」」」」」」」」

「っ……（これは、正直気まずい。いや、気まず過ぎる）」

しかし、その痛々しい程の空間の矛先は、ビビに向けられているのでは無く、ビビ以外のモノに向けられているのである

愛する人には、殺意を向けたくないのか、はたまた、ビビが容れた毒（マジュツ）には、自身（ビビ）に対して嫉妬の念を向けさせない。と言ったモノも含まれているのかもしれないのか……だが、今はそのような事はどうでもいいだろう。この空気の中では……

ちなみに、この家のペットで有る筈のザフィーラは、さっきアルフと一緒にどっかへ行きました。この惨状を狼の本能が察知したのか、足早に逃げていきました。クッソゥ……あぁ？　淫獣？　なにそれ、知らないわよ

「……あ、あの、みんｎ「「「「「「「「「ビビ｛ちゃん｝は黙ってて！！」」」」」」」」」あぁ、はい……」

うぅ……やっぱり、こうなるよね。有る程度予想はしてたけど

「……で、はやて。愛するビビって、どういう事なの？」

この沈黙の異界を壊したのは、アリサちゃんだった。さすが、アリサちゃん……

「どうもこうも、そのまんまの意味や。私は、ビビちゃんの事を、合いしとるって訳や」

「ちょっと待って。ビビの事を愛しているのは、私だよ」

「うっ」

ふぇ、フェイトちゃん！！？　そ、そんな事言わないでよ！！　今、心臓が飛び跳ねてヤバい事に成りそうだったよ！！

「いや、私だ。一番ビビを愛しているのは、私だ」
「シグナムさん、それは違います。ビビちゃんの事を一番愛しているのは、私ですから」

シグナム、すずかちゃん……あのね、私にとっては、その……
……

「シグナムも変な事を言うなよな。ビビの事を愛してるのは、あたしだ」
「いいえ。私とリインフォースよ」
「あぁ、私とシャマルが、ビビの事を、誰よりも愛している」

ヴィータ、シャマル、リインフォース……そう言ってくれるのは、凄く嬉しいけど……

「違うよ。私がビビちゃんの事を、一番に愛しているの！！」
「なのはや皆じゃなくて、私が一番よ！！」

なのはちゃん、アリサちゃん……な、なんなんだろう。言われてすっごく嬉しい言葉の筈なのに、なんだか……すごい、罪悪感が出てきちゃう……

ここにいる皆には、私の毒（マジュツ）に侵されている。だからか、皆が私の事を愛していると言う。なんだか、狂ったように……まぁ、そうさせてしまったのは、私なんだけどね……そう、させたかった。例え人外の道を歩んででも、私は彼女達を愛したかった。そして、例えどんな手を使ってでも、彼女達から愛を欲しがった

結果、私は自分の起源、禁忌に覚醒して自覚してしまい、結果、彼女達を私色に染めることで……禁忌を容れることで、彼女達が持っている人間性、異性への興味を、消滅させた。そして、私は彼女達をモノにする事が出来た

「言っておくけどね。私はビビと何度もキスをしているのよ！　数え切れないくらいにね」
「それを言うなら、私だってしてるよ！！」
「私だって！！　それに、ビビに体中キスしてくれたよ！」
「それは私もよ！！　何度も体を触ってくれた！！」
「私はビビちゃんの初めてを貰ったんやで！！！」

……皆が、不味いような事を言いだしちゃった……彼女達の中の、禁忌の起源が暴走しだしているのが分かる。多分、私とパスが繋がっているからだ

皆が、私を求めている……それが今、すごく分かる。心の奥底から、そう言った感情が、感じる

でも、私はこんな事……確かに、楽観的にみちゃえば、“私の為に、争わないで！！”っていう感覚なんだけど……

でも……でも！！　こんなのは！！！

「私だ！！」
「いや、私だ！！」
「あたしだ！！」

「私よ！！」

……あぁんもうッ！！！！！

「いい加減にしてッッ！！！！！」

「「「「「「「「「「ゾクゥゥゥッ！！！！」」」」」」」」」」

「「「「「「「「「「ひやあぁぁぁぁぁんッ！！！？」」」」」」」」」」

」

……

「「「「「「「「「「……ガクン」」」」」」」」」」

「「「「「「「「「「あッ……んくぅ／／／」」」」」」」」」」

「はぁ、はぁ、はぁ……」

「び……ビビ、ちゃん？」

「はぁ……ごめん。ちょっと話を聞いてもらいたかったから、イカせた」

彼女達の中にある毒（マジュツ）。それは言ってしまえば、私の分身みたいなモノ。それが、彼女達の中にいる。だから、こうやって、その分身を使い、イっちゃうツボを刺激させて、直ぐにイカせちゃう事が出来る……

やりたくなかったけど、皆を静かにさせるには、手段は選んでいられなかったから

「……多分、今から私が言う事は、理解しにくいと思う。ううん、理解はしなくてもいい。いづれ分かってくれれば、いいから……」

「「「「「「「「「「……？」」」」」」」」」」

「……皆が、私の事を愛してくれるっていうのは、本当に、凄く嬉しい。そして、そう言ってくれて、私は嬉しいよ……でも」

私は、言葉を続ける。彼女達に、私が今抱く、本当の思いを伝えるために

「私は、皆と一緒に愛し合いたい。誰が一番とか、そんなの関係無く、愛し合いたい。皆と一緒に愛し合って、皆と一緒に、幸せになりたいの」

「「「「「「「「「「……」」」」」」」」」」

「我儘なのは分かってるよ。でも、それでも！　私は……皆の事を愛したい。そして、皆も一緒に、愛し合って欲しいの」

……皆と、一緒に……

「……ごめん、ビビちゃん」

「っ。はやてちゃん？」

「ビビちゃんのその気持ちに気付かんで、私ら……」

「あぁ……すまない、ビビ」

「ごめんなさい、ビビちゃん」

はやてちゃん、シグナム、すずかちゃん……

「……謝ることじゃないよ。聞いてくれただけで、充分だから」
「ううん、ビビちゃんの気持ち、伝わったよ」
「お、おう……あたしも、大人げなかった、しな」
「ビビが言った事、全部、分かったから……」
なのはちゃん、ヴィータ、フェイトちゃん……
「ま、まぁ……ビビの事が好きな気持ちは、皆同じ。って事でいいんでしょ？」
「あぁ。皆同じ気持ちを抱いているのだ。だったら、いがみ合う必要など、ないのだろう」
「えぇ。そうね……」
アリサちゃん、リインフォース、シャマル……
「……ありがとう。私の事を、好きでいてくれて」
感謝をするような立場では無いのは、分かっている。彼女達をこうしたのは、私。人の意思を、思うがままにしてしまった、罪。だから、私はその責任を負う
彼女達を幸福にする事が、不幸になどさせないのが、私の贖罪。私は、そう考えました、神様
さぁ、ならばするべき事は一つ
そう、私がやるべきは、彼女と共に生き、幸せに生きる事が……

……

それが、本心（ワタシ）と本能が出した結論……

だから……墜ちよう。恋獄へ、愛獄へと……

皆と一緒に、穢れ無き白の世界へと……

――――――サァ、行コウ禁忌ノ世界（ワタシノキズナ）へ、愛スル者達ト一緒ニ……

禁断ノ絆（ピュア・リリィズ）ノ世界ニッ！！！！――――――

「……じゃぁ、仲直りを兼ねて……皆で、愛し合おう」

［スッ……パチンッ］

□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■

「「「「「「「「「「……あ、あれ？」」」」」」」」」」

指を鳴らしたと同時に、私達はある場所へと転移した……そこは、真っ白な百合の花が咲き乱れる花畑と、その真ん中にぽっかりと空いた草地。その草地には、真っ白い四本の柱で支えられた、西洋風の東屋が建てられている。その中には、白いテーブルや白いイス、そして１０人なら余裕で並んで寝られる程の大きな純白のベッドがある。上には、白い雲がゆったりと流れる蒼穹の空、果てしなく広がる地平線、心地よいそよ風が流れる世界……

私が思い描く楽園、“白百合の花園（リリィ・ザ・タブー・ガーデン）”だった……

「あれ？　な、なに？　この服……」
「うわぁ、可愛い」
「なんなんだよ、このヒラヒラした服は」
「生地が、薄くはないか？　下着が、その……透けて見えるぞ……」

皆の服が、私服から別のモノへと変わっていた。それは、いわゆるネグリジェと呼ばれるタイプの服。白色だが、薄い生地を使われている為、色は分かりにくく、下着が見えてしまうほど透けていた。そして、彼女達の下着も、全てが白色に彩られたモノへとなっていた

「ビビちゃん、ここは？」
「ここは、私が作った“固有結界”。まぁ、私達だけの世界、って思ってくれればいいから」
「私達、だけ？」

そうだよ、はやてちゃん。ここにいるのは、私達だけ。ここでは、なんの邪魔も入らない。私達だけしかいない世界

「この世界でなら、思う存分、皆と愛し合えるから、ね……」

「「「「「「「「「っ……／／／」」」」」」」」」

うふふ。はぁ、頬を染めちゃって、可愛いんだから……さぁ、それじゃぁ……

［ポフ］

「皆……おいで」

「「「「「「「「「「……」」」」」」」」」」

そこにあるベッドの真ん中に座り、皆を呼ぶ。それに答えるかのように、彼女達は、私の元へとやってくる……

そして、私達は……

□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■

「……ん、ふあ……」

……あ、あれ？　どうしたんだろう？　私……

［キョロキョロ……］

えっと……あぁ、そっか。私、“固有結界”を開いたんだ。そこで、皆と、愛し合ったんだ……

「……んくぅ！」

［ゾクッ］

「あ……はぁ、はぁ……」

まだ、あの感覚が残ってる……イッた後の、あの背筋がビクビクする感覚が……

「はぁ、はぁ……気持ち、いい……」

この感覚は、いくら味わっても、飽きる事が無かった。本当に、心地よい、刺激……

「……ん、んん」

「あ……」

隣で、愛する少女の寝息が聞こえてきた……はやてちゃんが立てる寝息が、妙に艶っぽく聞こえてくる……

「んん、ん……」
「スゥ……スゥ……」
「ん～、びび、ひゃ～ん……」
「んぁ……ん、んん～……」
「ぅん……スゥ……」
「……ん、んぅ……」
「ん……ぁん……」
「ふぅ……んん……」

……クス。もう、皆可愛いなぁ、本当に……寝顔も、本当に可愛くて、素敵……

「（にしても、今回はかなり激しかったかな……？）」

この世界の体感時間は、現実と比べるとかなり遅い。この世界の一日は、現実の世界での一時間になるからね……だから、私達は時間いっぱい、愛し合った。触れ合った、口付けを交わした、秘部を重ねた……沢山、たくさん、幸せを感じ合った……

「（私は、こんな可愛い子達と、あんな事を、したんだ……）」

そしてこの子達は、私の事を、愛している、と……そう、言ってくれた

「（そして、この子たちは、私のモノ……）」

そう。この子達は、私の……私だけの、女の子……

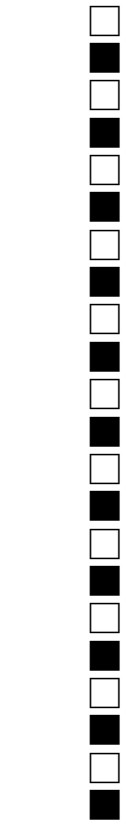
「……うふ、うふふふふ……うふふふふふふっ……」

あぁ、上げたい。この子達に、私の愛を。そして、もっと欲しい。
この子達の愛が、もっと欲しい……

「ウフフ、ウフフフフ……ウフフフフフッ」

……ソシテ、私ハ、彼女達ヲ、得タ……

これが……後の未来に、“夜天のハヤテ、“剣天のシグナム”、“月天のスズカ”、“星天のナノハ”、“鋼天のヴィータ”、“雷天のフェイト”、“炎天のアリサ”、“風天のシャマル”、“祝天のリインフォース”。そして、“魔天のビビ”、又は“九天の魔女”と呼ばれるようになる十人の女性……そして、彼女達だけの部隊、“真白き戦女神（ヴァルキュリア）・ヴァイス”の……絆を紡いだ、物語である



その頃、幻世と呼ばれる世界では……ある一つの存在が、その世界に住む生物を狩っていた

「ッッ！！！！！！」

［ザンッッ！！！！！！］

「ギアヤアアアアアアアアアアアアアアアアアアッッッ！！！！！！！！？？？」

［ズドオオォォォォォォォォォォンッ！！！！］

「……ふぅ」

はぁ……おし、コレで今晩の夕食の食材は揃ったな。ったく、クエーサやガーナのせいで、以前よりも十倍以上は食材を用意しねぇとならなくなったしな

「ったく、なんでアイツをおもりをやってんだか……」

……いや、多分それが、俺がヒトで居続ける為の、アレなのかもしれないな……

「……さて、と。帰るか」

［……ザッ］

「イヨウ（。ω。）ノ　おっひさ～♪」

「……」

見たくも無い奴の、見たくも無い表情を見てしまった

「本当に久しぶりだなぁ。えぇ、元気してたかい？　グレイ君」

「……なんの用だ、クソ神」

最近は音沙汰無しだった奴が、何故今頃現れた

「まぁまぁ、そう邪険になるなよ～♪　面白いモンを見せてやろうと思ってな」

［ウォウォウォウォウォウォウォウォウォンッ］

「……」

コイツが開いたウィンドウ。そこに映っていたのは、あの馬鹿妹と……あの馬鹿妹が狙っていた少女達との、性行為の映像だった。

声すらも録音されていて、あの馬鹿妹を含む九人の女共の喘ぎ声が、流された

「……なんだ、コレは」

「おいおい、反応無しかよ。コレは、彼女の起源が目覚めて、そし

て起源覚醒者としての正当な行為を撮った映像だ。こいつ等は皆、お前の妹によって犯され、食われてしまった憐れな女達だ」

……へぇ

「それだけか？」

「あぁ。あの妹は、人外の道を歩みだした。それにお前は、何も感じないのか？」

「あぁ……何も思わないな」

あの妹が何をしようと、俺にとばっちりさえ来なければ、別にどうでもいい

「クックックック。お前はどこまで、妹の事が好きではないんだい？」

「別に嫌いでもない。というよりも、あんな妹の事など、どうでもいい」

「クックックック……俺のお気に入りのＪ－ＰＯＰの曲の中に、こういった歌詞があったな」

――――“愛の反対は憎しみじゃなくて、無関心という諦めなのです”――――

「……」

「クックック。まさしく、お前が妹に対する感情を表す言葉として、ピッタリだとは思わないかい？」

……確かにな。俺はアイツの事など、どうでもいい。好きでもなければ、嫌いでもない。ただの、妹という名の“他人”でしかない

「やはりなぁ……やっぱりアレか？　“最愛の女以外には、興味と言うモノを抱かない”のかな？　“非童貞”のグレイ・スティン君？」

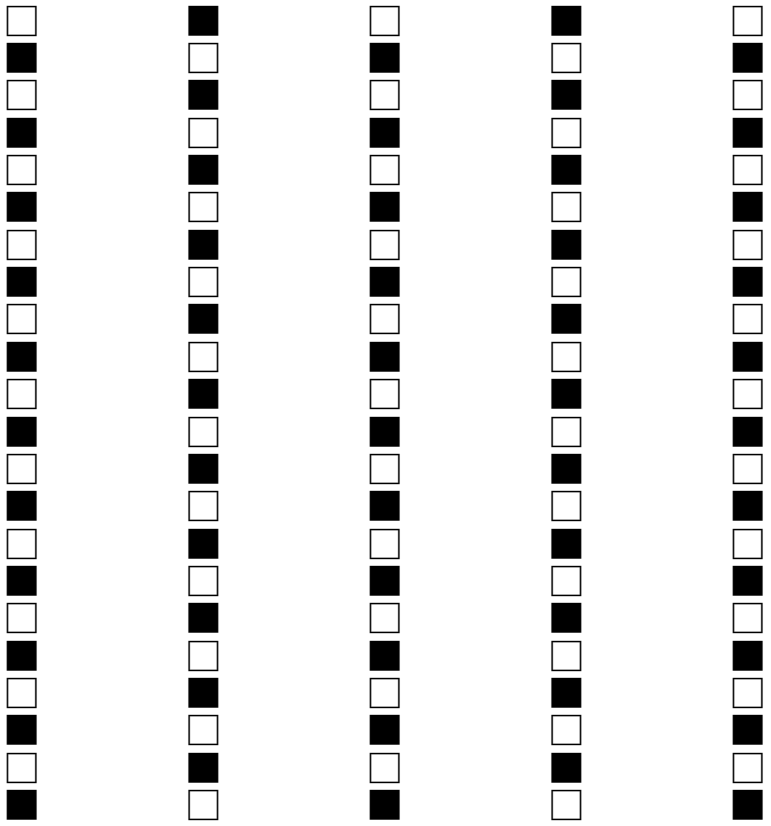
「ッッ！！！！！！」

［ズドオオオォォォ

「……まぁいい。面倒な奴が消えてくれてよかったか」

……最愛の女、か……確かに、俺はアイツ以外の人間に、無関心だよな……

「（……¶ΘΔ……）」



……だ、誰だ！！！　俺の楽しみの一つである“鬼弄り”を

邪魔した奴、は……

「授業中に居眠りとは、いい度胸だな、スティン」

「……お、“織斑、先生”」

あぁ、俺が唯一、弄れない鬼、でしたか……

「お、おはようございます」

「あぁ、おはよう……」

［バシィィィンッッ！！！！！］

イッダアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアッッ！！！！！？？

＃５８，５（番外編）　戦友にして親友にして……相棒にして好敵手（前書き）

連続更新です

この回は、２００００字近くを行っておりますので、ご注意ください
あと、今話のメインは神様と旅人の二人です。無双が発動しますので、ご注意ください

後書きに、ちょっとした予告を書きました

#58，5（番外編）　戦友にして親友にして……相棒にして好敵手

――――――ソシテ、トアル兄妹（シマイ）ノ妹ガ歪メタ世界ハ、異分子ト化シタ者共ヲ抹殺スル為ニ動キ出ス。ガ……――――――

……グレイやビビがいる第９７管理外世界、ではない世界。
この世界は、未だに時空管理局によって発見されていない、未観測の世界である

有人世界であり、地球と同じ程度の文明レベルを持っており、高度な知的生命体も住んでいる

［……ヴヴヴヴヴヴヴヴヴヴヴヴヴヴン］
［［［［［［［［バシュンッ！！！！］］］］］］］］

その世界の、人気の無い場所。まっさらな荒野に、七つの影が、降り立った

「ったく、なんでいちいちこんな面倒な転移を繰り返さなきゃならねぇんだよ」
「仕方無いよ、“ヴィータ”ちゃん。だって、こうしないと、“あの男”に気付かれちゃううし」
「文句を言うな。それでも、ベルカの騎士か？」
「分かってるよ“シグナム”！　こうも面倒な事してっと、愚痴ぐらい言いたくなるんだよ」
「はぁ、わがまま言うたらあかんで。なぁ、“フェイトちゃん”」
「うん。“はやて”の言うとおりだよ。でも、そういいたい気持ち

も、分からないでもないけど……」
「“シャマル”さん。次の転送まで、どれくらいですか？」
「あと、7、8分くらいは掛かるわ、“なのは”ちゃん」
「急ぐ必要はないのだ。慎重に近付いていき、“あの連中を抹殺さえ出来れば、いいのだからな」
「せや、“リインフォース”の言うとおり、慎重にいかなあかん。ええな、皆」
「「「「「了解」」」」」

そこにいるのは、あの転生者の妹である“禁忌の起源を持つ少女”が籠絡した女性達……の、“未来の姿”であった

「ったく、あんな変態に良いようにされるなんて……あたしとした事が」
「同感だ。あのような愚か者に媚びる私など、見ていて吐き気がする」
「私もそやわ……なんであんな子を好きになったんやろか、かつての私は」

その場にいるヴィータ、シグナム、はやては、あの禁忌の少女に手篭めにされているもう一人の自分に対し、嫌悪感を抱いていた

おそらく、感の鋭い方はもうお分かりであろう。ここにいる彼女達は、この“世界の修正力”、“抑止力”として送り込まれた者達なのである

“闇の書事件”、そして未来に起きる“J・S事件”。それ以降に起きうるであろう困難な大事件。それらを全て解決へと導いた奇跡の部隊。それに所属していた者たちは皆、英雄と呼ばれる程に、成長していった。そして、彼女達は死後、世界に認められ、この世界

の英霊となり、世界を守り続ける守護者となったのだ

そして、この世界にとってイレギュラーと化してしまった過去の自分達を消滅せんと、世界に命じられ動き出したのであった

「この世界に、私達っていう存在はいなくなっちゃうけど、あんなケダモノのモノにさせるくらいなら、せめて自分の手で、殺した方がいいと思うからね……」

「無関係なアリサやすずかも巻き込んで……私は、それだけは絶対に許せない」

「同感や。せやから、私らは来たんやから」

「「「「「……（コクッ）」」」」」

その場にいる者全員が、禁忌に墜ちた自分達を殺そうと、そう誓っていたのである

「シャマル、転移までどれくらいかかる」

「あとご5分くらいはかかりそう……でも、直ぐに終わらせるわ」

彼女達は、先ほど言った“あの男”に気付かれないように、行動していた

“あの男”……破壊神を名乗り、千人の同胞達を殺戮し、最後には、この世界の英霊として最強の座にいたはずの“オリヴィエ”と“クラウス”の二人までも退けた。そしてその後も、修正力が生み出した召喚獣達をも退け続け、物量で挑んだ時は、仲間を呼んだのか、その全員で襲いかかってきていた……

修正力が動き出した瞬間に、彼らも動き出し、その全てを叩きつぶしている……今も、他の場所で修正力は活動し、彼らと戦ってい

る。その間に、こうした隠蔽転移連続使用による移動で、目標に近付いているのである

「（なんとしてでも、この作戦は成功させなアカン……そして、この世界を正しくするんや！！）」

皆が、そう思っていた……

が

［……ザッ］

「邪魔だ、退け」

「「「「「「「「「!?」」」

「シグナム！！！　邪魔すんな！！！」
「落ち着け……貴様、まさか私達が見えるのか？」
「！！！？」

シグナムの一言により、昂ぶっていた気持ちは一気に冷え、真剣な表情と成って、男を睨み始める

今、彼女達は他者から視認出来ないよう、光学迷彩を周囲に展開している。そして、気配遮断や、その他様々な隠蔽魔法を使っている。機械のレーダー、視認すら不可能な状態へと成っている。なのに、この男は、あっさりとそれを見ているのである

「……何を言っている。お前達がそこに存在している。ならば、その存在を見る事など、呼吸をすると同じ事であろう」

理解しがたい言葉で、見えている事を認めていた。その反応を見て、フェイトは有る可能性を見出し、男に聞いて見る

「貴方……まさか、“あの男”の関係者、ですか……？」
“あの男”？……あぁ、アイツか。やれやれ、また何かしでかしたのか、アイツは……まったく、これほどまでに世界の修正力を動かしていると言う事は、相当くだらない事をしているようだな……」
「そう、ですか……」

肯定。まったく隠す事も無く、この男は、あの男の知り合いだと、そう言いきったのだ

だが、不明な点がある。なぜ、この男は自分達の事を修正力だと知っているにも関わらず、攻撃を仕掛けてくる事が無いのだろうか…

……あの男の仲間と思われる連中は皆、修正力だと判別した瞬間、攻撃を仕掛け、それを殺している。なのに、この男だけはそうともせず、動かないのか……罠という可能性も考えたが、男の言動からそういった意思を感じる事はなかった。隠しているだけ、という事も考えたが……

「もう一つ、いいですか」

「なんだ。またアイツに関わる話か？」

「貴方とあの男は、どういった関係なのですか」

それ聞けば、無駄な争いをせずに済みそうであると……そう考えたなのはであった。だが

「……そうだな……“友”、とでも言っておこうか。同胞でも間違いはないが、そっちの方がしっくりくる」

「「「「「「「ッ！！！」」」」」」」

確定した。コイツは、あの男の味方であると。そして、自分達にとっての、敵であると

「アイツの友だってんなら！！　ここで叩きつぶすッ！！！」

［チャキッ！！！］

「「「「「「「ッ」」」」」」」

［［［［［［チャキッ］］］］］］　［［スッ……］］

グラーフアイゼンをハンマーフォルムで取り出し、その先端を向ける。それと同時に、なのはとフェイト、はやて、シグナムは己のデバイスを。リインフォースとシャマルは身構え……臨戦態勢をとった

「……刃を向けたか。ならば、貴様らは俺の邪魔になる、という事か」

ならば、致し方ないな。友といっても、好敵手としての、戦友と言ったはずなのだが……どうやら、親友と受け取ったのか？　アイツの友達だから、自分達の敵だと思ったのか？……フン、愚か者が

「ウオリャァァァァァァァァァァァッ！！！！！！」
「フン」
［スッ］［ブンッッッ！！！！！！！！！！］
「チィ、避けやがって……じゃぁ、これならどうだッ！！！」
『ギガント・フォルム！！』
［ブンッッ、バチンッッ！！！！］

ほう……鉄槌の巨大化……ただの、それだけか

『エクスプロジョン！！』
［ガシャンッッ！！　ガシャンッッ！！］
「（その程度で……）」
「劫天、爆砕！！　“ギガントォ！！　シュラァァァァァァァァァァァァーーーク”ッッ！！！！！！！！」
［ブンッッッ！！！！！！］
「……ヌンッッ！！！！」
［ボゴンッッッッッッ！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！］
「うわぁッッ！！！！！！？？」
［ズドォォォォォォォォォォォォォォォォォォンッッッッッ！！！！！！！！！］

「「「「「「ヴィータ｛ちゃん｝ッ！！！！」」」」」」

……ふん。ハンマーを巨大化させただけで、どうにかなると思ったのか？　面の部分が広がり、狙い安くなっただけではないか。それに、胆力が足りん体で、あのような武器を振りまわすなど……自殺行為にしか思えんな

「……そん、な……ただのパンチで、ヴィータのギガント・シュラークを、弾き返して、ふっ飛ばしたやと？」

「ッ……ならば、これならどうだ！！！」

［ガシャンッ！！　ガシャンッ！！］

『シュランゲ・フォルム！！』

［ガチャッ！！　シュキィィィィィィィィィィィンッッ！！！！！］

「行け……“飛龍・一閃”ッ！！！」

［シュッ！！！！］

連結刃、か……やれやれ、昔そういった武器を使う奴がいた気がするが……

［チャキッ］

「無駄だ」

俺は、使いなれた刃……大剣と呼ばれる部類の代物を虚空から取り出し、その迫りくる刃へと、それを向ける……

［ガキッ！！！　ガチンッ！！！！］

「！！！？」

「フン」

［ダッ！！！］［ボゴンッッッッ！！！！！！！！！！！！

！！！！！」

「――――ッッ！！！！？？　ガハァ……ッ！！！？」

「「「「「「シグナム〔さん〕ッ！！！」」」」」」

……蛇腹剣の致命的な欠点。それは、剣を何かに絡ませれば、使い物にならなくなり、使い手は無防備になる。そこに、こうして急接近を仕掛け殴打や斬撃なりを繰り出せば……終わる

「……言っておくが、俺はアイツみたいに優しくは無いぞ」

「グ……きさ［ザンッッッ！！！！！

「はやてちゃん……ッ。完成まで、あと数秒よ」
「そう……ほなら、それが完成次第、直ぐにここから撤退や。コレ以上、コイツとたたかっといたら、私らは全滅する」
「……はい」

――――おいおいおい、そう簡単に逃がすと思ったか？　クックックックック――――

「「「「「ッッ！！！！！？？」」」」」
「……はぁ、お前か」

我が友……俺と唯一、同等なる存在……

赤き髪、そしてその内側にある黒髪。黒き衣服で身を漆黒に染め、黒き茨を刺繍した白きコートを纏うモノ……

我が、永久の友……

「ヤッホー、この世界の修正力さん♪　ワリィけど、お前達の目論

見は、ここでついえさせてもらうぜ」
「「「「「……」」」」」

最悪だった。まさか、自分達の事がこの男に感づかれてしまったとは……

同胞を殺し続ける、この世界にとっての害悪が……

「いよう♪　こんな所でなに油売ってんだよ、え？　マイフレンド」
「貴様に答えるつもりはない」
「シュッ！！」「おいおい、つれないねぇ。俺達、永遠を誓った仲じゃねぇかよ」
「「「「「ッ！！！？」」」」」

何時の間にか、その男は、先ほどシグナムとヴィータを斬り殺した男の隣に立っていた……

「気色悪い事を言うな、この馬鹿たれ」
「はいはい、分かってるって。クックックックック」
「……フッ」

……やはり、この二人は相当親密な関係。ならば、我々の排除対象だ！！

「「……バシュンッ！！」」
「「ん？」」
「……ク、油断した」
「大丈夫ですか？　シグナム」
「あぁ、問題は無い、テスタロッサ」
「何ともない？　ヴィータちゃん」

「あぁ、もうあんなヘマはしねぇよ！！」

先ほど殺されたはずの二人が、生き返った。おそらく、再び世界に再召喚されたようだった

「……生き返ったか」

「この世界もやっと躍起になりだしたのか？　ったく、メンドクセェこって」

この男にとって、やはり我々世界の修正力……いや、おそらく、歪みの元凶である二人の女。アイツらの邪魔をする者達は、皆敵として見ている。という事か

「おいおい。まさかさぁ、存在ゴト消してなかったのか？」

「面倒だったからな。あの場所さえ空けてもらえれば、俺はそれでいいのだが……」

「刃を向けてきた、と？　俺達のお友達だと聞いてか？」

？

「あぁ、そうだ……まったく、余計な事を。おかげで、とばっちりを喰らったわ」

「ハッハッハッハッハ！！　そりゃ悪かったな♪」

な……ちょっとまて？　ど、どういう事だ？　あの男は、アイツの仲間では無いのか？

「あぁ、言っておくけどよ、この世界さん？　コイツと俺は仲間では無い。ただの友だ。俺の行動には賛同していない、かと言って敵対もしていない。いわば、無関係な奴なんだよ」

「「「「「「？」」」」」」」

分からない……どういう事だ？　友であって、仲間では無い？

「テメェらの物差しで、俺とコイツの関係を測ろうとするな。お前らが思っている程、俺とコイツの関係は複雑だぜ？」

「そして、短調であるがな」

……分からない。……こいつ等は、一体どういう……？

「だが……一度俺に刃を向けた。ならば、貴様らは俺の敵だ。今更刃を引っこめた所で、それは変わらん……」

「覚悟しろよ～？　コイツ、敵だと認識した奴には、容赦ねぇから♪」

……どうやら、要らぬ事を、してしまったようだ……我々は、余計なモノにまで、手を突っ込んでしまったようだ

「だったら……アンタら二人、纏めて倒せばいいだけやッ！！！」

「バッ！！！」

「「「「「「

……こりゃぁ、馬鹿のやる事だな

「まっさか、自分達のコピーを沢山生みだして、物量で攻める戦法とは」

「はぁ……お前が来たせいだぞ、この馬鹿者」

おいおいおい、その言い方はねぇだろぅ？

「何しろ、アイツら転移しそうだったんだもん。ここで逃がしたら、後々面倒な事が起きそうだったしな」

アイツらに、今修正力が動いている事を知られたら、行動の制限をしてくる可能性がある。そして、修正力とやり合う為の準備を始める。それをされると、こっちとしては面白くねぇんだよなぁ。そこ、わかってくんねぇ？

「フン……お前の私情など知らん。それに俺を巻き込みよって」

「はぁ……はいはい、ごめんなさい、スン←マセーン→（ ゜∀ ゜）」

「……はぁ」

「そうため息つくなよ、詫びとして、これをやるからさ」［シュッ！！］

「ん？」［パシッ！！！］

「……なんだこれは、バッジか？」

「あぁ、青年探偵団バッジ」

「握りつぶすか」

ちょちょちょちょちょ！！！！　冗談だってッ！！！！

「俺が新しく開発した兵器よ。“ＩＳ＞インフィニット・ストラトス＜”っていってな。なかなかカッチョエェ“鎧”よ」
「ＩＳ……ほう、なるほど。鎧、か……」
お、鎧という言葉に反応したか。さすが、俺と同じく無数の刃を所持する男だ。鎧の意味を、瞬時に理解したか
「フッ、有りがたく使わせて頂こう」
「あぁ、言っておくけど、それ、まだトライアルの段階でねぇ……あとでお前が気付く限りの修正点を教えてくれや」
「あぁ、よかろう……で、使い方は？」
っと、そうだな。そうだったそうだった……
「名前を呼べば、誰でも使えるようにしてある。でも、まだその肝心の名前が決まってなくてな……今は、コードネームを言えば出来るようになってるから」
「それはなんだ」
「あぁ、“ＧＣ－０００”だ。それからの使い方は、そいつが教えてくれる」
「分かった……“ＧＣ－０００”、起動」
［キュインッ、バチンッッ！！！！！！］
「……ほう」
……我が友が纏った鎧は、白を基調とした黄金の彩色に包まれし、機械仕掛けの鎧。日本という国の鎧武者のような形状をしており、近接格闘用のブレードを標準装備している。原典世界に存在する、量産型のＩＳ、“打鉄（ウチガネ）”のデータと、俺が収集したＩＳの基本データを元に作ってみた、試作品

「なるほど、ふむ……おい」
「？」
「コイツの名だが……神が纏いし鋼、“神鋼（カミガネ）”、というのはどうだ？」
“神鋼（カミガネ）”。神が纏いし鋼、か……
「いいねぇ。さっすが、直ぐにそう言った名前を考え付くとは。お前のネーミングセンスには、つくづく驚愕に値するよ」
「それはどうも」
［ビィーッ！！］
「ん？　なんだ？」
攻撃が来る時の警告アラート……って！！！
［［［［［［［［［［キイイイ

「ほう……ちょうどいい。奴ら相手に、試してみるか」
「壊すなよ……まだ量産体制に至ってないんだから」
「善処しよう」

……どうやら、壊す気マンマンでいる、俺の友であった

「なるほど、“ハイパーセンサー”とは……そして、“瞬時加速（イグニッション・ブースト）”。ほう、こんな事が出来るとはな……さて、行くぞ、“神鋼”」
［フワッ……ギュオンッッ！！！！！］
と、いきなり瞬時加速（イグニッション・ブースト）を使用し、アイツらが浮かぶ空中へと躍り出る

「（……これは、中々だな）」
急加速を行うこの瞬時加速（イグニッション・ブースト）、なるほど。確かにコレは有用性が高い機能だ

「（武器を搭載しているのか。まずは、この近接用ブレードでも試してみるか）」
［バチンッ！！　チャキッ］

……短い。２ｍしかないだと？　少し、手を加えるか……
……

「“Ｉ　ａｍ　ｔｈｅ　ｂｏｒｎ　ｍｙ　ｓｗｏｒｄ?我が骨子は捻れ狂う?”」

［ギュインッ！！　シュキィィィ

突如、相手が取り出した鈍色に光る刀が、その長さを増長させた
その長さ、およそ“１００メートル”
「あかん！！　二人とも！！　離れて！！！」
「ヌンッ！！！！」
［［［［［［［［［［ザザザザザザザザザザザザザザザザンッッ！！！！！！！！］］］］］］］］］］
そして、その刀を横に薙ぎ、一気に数十名のコピー体を、斬りはらった
「……なるほど、なかなかいい業物を使っているようだな。いや、斬れ味を高め、維持し続けるために、刀身に特殊なコーティングを施してあるのか。ふむ、これならまだ伸ばしても、問題はなさそうだな……」
まるで、その刀を試し切りしたかのような口ぶり……そして、その言葉から、ある感情が見えていた
コイツは、本気で戦っていないのだと
［スッ］
“Ｉ　ａｍ　ｔｈｅ　ｂｏｒｎ　ｍｙ　ｓｗｏｒｄ?我が骨子は捻れ狂う?”」
［ギュインッ！！　シュキイイインッッ！！！！！！！！

何やらぶつぶつと喋った後、１００メートルはある刀を、更に伸ばし出した

その長さ、およそ“５００メートル”。もはや、人が使う武器では無くなった

「さて……俺の力に耐えきれるか……試させてもらおうッ！！」

「ギュオンッッ！！！！！！」

「ハアァッッ！！！！！！！」

「「「「「「「「「「ザザザザザザザザザザザザザザザザザザザザンッッ！！！！！！！！！！」」」」」」」」」」

「ヌゥンッッ！！！！！！」

「「「「「「「「「「ザザザザザザザザザザザザザザザザザザザザンッッ！！！！！！！！！！」」」」」」」」」」

「ウオオオォォォ

「チョッッ！！！　お前！！！　俺にも被害がキテル！！！　ってウオッ！！！？」

［バッ！！！］

「ん？　なんだ、いたのか」

［シュッ！！］［［［［［［［［［ザザザザザザザザザザザザザザザザザザザンッッ！！！！！！！！！！］］］］］］］］］］

「ウワァ！！！？　いたわボケ！！！　地上にまで被害を及ぼしてんじゃねぇよ！！！　のわっと！！！？」

［バッ！！！］

［シュッ！！］［［［［［［［［［ザザザザザザザザザザザザザザザザザザザンッッ！！！！！！！！！！］］］］］］］］］］

あの破壊神を名乗っていた男は、鎧を纏う男の攻撃のとばっちりが来ていた。が、アイツはその攻撃を、紙一重という所で回避していた

「まったく……お前のそれは危ねぇんダよ！！！　何度それで死ぬ思いしたか！！！」

「別によかろう。現に、生き残っているではないか」

［シュッ！！］［［［［［［［［［ザザザザザザザザザザザザザザザザザザザンッッ！！！！！！！！！！］］］］］］］］］］

「あ、あのなぁ……」

……愚痴のように言っているが、本心ではおそらく違う事を、思っているであろう。その口から出ている声には、どこか嬉々とした、喜びが見えるような気がしたからだ

……分からない。いったいこいつ等は、どういった関係なのかが……

「ヌンッ！！！！」
［シュッ！！］［［［［［［［［［［ザザザザザザザザザザザザザザザザザザザザンッッ！！！！！！！！］］］

「？……ッ！」

［［［

「ほう……それは、お前専用と言う訳か？」
「あぁ。俺専用のＩＳだ。もっとも、コイツはホンモノじゃなくて、コピー体だがなｗ」
［スッ］
そう言いながら、奴は左腕に手を添えた。奴の左腕は、デバイスが搭載された義手にして、コイツが携える最強の刃の一つ
「おい起きろ、“黄昏暁”」
『……ん？　ふあ～、あぁ、やっと起こしたの？　愚主』
「おう……今からアイツらをフルボコにすっから、力を貸せ」
『ん～、は～い。はぁ、眠いのに』
……機械のくせに、人間味のある奴だな
さて……あの大軍、ざっと１０００万以上はいるな……その数、どう捌こうか……
さってさて、長い長い前置きはここまで。こっからがようやくのお楽しみ、っていうか、本番だ
「それじゃぁ、行こうか？　我が友よ」
隣に浮遊する我が友に……かつて、“紅世の徒”として生きた日々、共に駆け抜けた旧き友……コイツに声を投げ、タイミングを作る

「あぁ。久方ぶりに、お前と刃を並べよう」
「ハハ、それでこそ、我が友だ」
「フッ……」

乾いた笑みで俺の声に答え、俺達は、数万年ぶりに隣に並んだ

［［スッ……ギュオンッッ！！！！！！］］

身構えた後、同時に……まったくの同時、ずれる事もなく、瞬時（イグニッション・ブースト）加速を発動し、１０００万以上はいるであろう、敵の大軍に突撃していった

［［［

軍とぶつかろうとする

「“黄昏暁”ッ！！！」

『オッケイ！！“ウェポンレジスターシステム”、“フロートウェポンシステム”、起動開始！！　オーバードライブ、“ハザードモード”、展開ッ！！！』

［［［［［［［［［［［［［［［バシュッ！！　ジャギンッ！！！］］］］］］］］］］］］］］］

その直前に、左腕から光が飛びだし、俺の周囲に、大鎌、双剣、大剣、刀剣、銃剣、護拳、重槍、呪杖、魔典、妖扇、施弓、剛斧、双銃。それら１３の武器が出現し、周囲に展開した

「使え！！」

「言われなくても！！」

［パシッ、チャキッ！！］

そう言うや否や、さっそく我が友は、周囲に展開した武具の一つ、大剣を掴み握りしめ、敵陣の中へと入っていく

「ヌンッ！！！！」

［ザンザンザンザンザンザンザンザンッッッ！！！！！！！！！］

そして、その大剣を片手で振りまわし、近くにいる敵を容赦なく斬り殺していく

「おうおう、やっぱり容赦ないねぇ。さって、なら俺もやるか」

［パシッ、チャキッ！！］

俺も俺自身が本気で戦う為の刃、“大鎌”を持つ。せっかくの友と並んで戦うのだ、嫌でも本気を出したくなってしまう

俺に心臓というモノがあれば、今頃相当脈打ち、昂ぶっている事だろう。今でも、有る筈の無い心臓がバクバク高鳴りを上げているッ！！

「ヒャッハァッッ！！！！！！」

［ザンザンザンザンザンザンザンザンッッッ！！！！！！！！！！！！］

俺も、アイツ同様に、大鎌を振りまわしながら前進していき、敵と言う敵全てを、斬り殺す

「フッ、さすがは我が友だ」

「テメェに後れを取る訳にはいかねぇからよ」

「フフフッ……」

「クックック……さぁ、殺るか」

「あぁ、殺ろう」

［［スッ、ギュオンッッ！！！！！！！！］］

一度前進を止め、背中合わせとなった後、瞬時加速（イグニッション・ブースト）を使用し、その場から左右に分かれて行動を開始する

「ウオオオ

ッッッ！！！！！！！！！！」
「ハアアア

［［……バッ！！！］］
「む」「ん」
「ハアアアアアアアアッッ！！！！！！！！」「デヤアアアアアアアアアッッ！！！！！！！！」
その隙を付いてきたのか、剣の騎士と鉄槌の騎士（コピーの方だろう）が攻撃を仕掛けてきた……
［［ズシュンッッ！！！！！！！！］］
「「ガハッ――――――」」
「「……」」
だが、俺達が背中合わせとなっている状態で、俺はアイツを狙ってきた剣の騎士を、コイツは俺を狙ってきた鉄槌の騎士を、それぞれ刺殺していた
「おい、コイツは俺が狙ってたんだが？」
「お前こそ、この女は俺が斬ろうとしていたんだが……」
そう言いつつも、お互いの事を守り合う。背中越しでも分かる相手の感情を、俺は感じていた
「ククッ……」
「フフッ……」
互いに笑みを零し、刃を握る
「行くぞ。遅れるなよ、“相棒”」
「それはてめぇだろ、“相棒”！！」

［［ギュオンッッ！！！！！！！］］

瞬時加速（イグニッション・ブースト）で、背中合わせの状態から離れ、再び、殺戮の惨劇を開幕させる

俺は、それが楽しかった……友と共に、虐殺の限りを尽くす事が、コイツと共に戦う戦場が……誰かと共に戦う戦場こそが、俺の荒野を潤してくれる……

それが、堪らなく嬉しかった……

「クックックック……クッハッハッハッハッハッハッハッハッハッハッ！！！！！！」

そして、狂いってしまうほど、楽しいッ！！！！

「「「「「「「「……」」」」」」」」

そ、そんなバカな……まさか、あの奇襲を避けた、だと？

「なんなんだよアイツら、なんだよ！！！」

「落ち着け、ヴィータ。確かに、あの隙を付けなかったのは仕方ない。またチャンスをうかがうしかないだろう」

そうは言うが、本当にチャンスなど、来るのだろうか？

「ヒャッハァッッ！！！！！！」

［ザンザンザンザンザンザンザンザンザンッッッ！！！

ま振り回され投げ飛ばされた

だが、その後に奴が取った行動は、回転を加えて、槍を構えての突撃。勢いが有る分、威力が上がっている一撃。そんな出鱈目な行動を、奴は起こした

「さぁ～って、次行くかッ！！」

「やかましいぞ、少しは黙って戦えんのか？」

「おいおい。こんなモンはなぁ、楽しんだモン勝ちなんだよッ！！　こう言う時に騒がないで、いつ騒ぐ？」

「フッ。そうだな……久方ぶりのお前との共闘だ。俺も楽しまなければ、勿体ないか」

「あぁそうだ。あまりにも楽しくなりすぎちまって、共に狂っちまおうぜぇッ！！！！」

「［［ギュオンッッ！！！！！！］］」

「クックックックック……クッハッ！！！！！！」

「フッフッフッ……フハハハハハッ！！！　フッハッハッハッハッハッハッハッハッハッハッハッハッハッハッハッハッハッハッハ

その笑いは、心の奥底から来ている。本当に楽しんでいる者の、笑いだった

「……ど、どうするの？　はやてちゃん」

「……」

もう、逃げられない。もはや、アイツに出会ったら最後、アイツを殺すまで、自分達はあの兄妹に干渉する事が出来ない。ならば……

……

「せめて、ここでアイツを倒すんや！！　作戦は続行、コピーに気を取られて、隙が出来た所を攻撃。ええな！！」

「「「「「了解ッ！！」」」」」

だが、もう無駄な事だと……そう感じ始めていた

奴らは、一度会えば全てをなぎ倒していく天災、いわば災害と同義。そんなモノを相手に、自分達は為す術なんて、何一つない

敗北が、見えていたのであった……

「「ハァーーッハッハッハ

！！」」

あぁ～♪　やっぱたんのしぃ～なぁ～♪　楽しくなりすぎて、ガチで狂ってきたぜ。クッハッハッハッハッハッハッ！！！！！！

「「「

「アレか……フッ、面白い。その提案、乗った」
よぉ～し♪　ならば、一気にやりますかなッ！！！！
［バッ！！！］
「まずは……お客様には、お静かにしてもらわないと」
［パチンッ］

「「「「「「「ッッ！！！！？？」」」」」」」
［［［［［［［ピタッ］］］］］］］
か、体が……動かない！！？

「さてさて……では、これより開幕とさせていただきます」
「俺達が繰る武具によるミュージカル、刻一刻と続くスフォルツァンド……」
「グランディオーソな音色の数々、コンフォーコのような音量……」
「さぁ、フィナーレに相応しき……」

「「殺戮の演奏（デストロイ・コンサート）を、ご堪能あれッッ！！！！！！」」
［［ギュオンッッ！！！！！！］］

さぁ、まず初めに奏でるは、俺の大鎌と、アイツの大剣による“竜巻の円舞曲(ワルツ)”ッ！！！

「ハァッ！！！」
「ヌンッ！！！」
［ガキィィィィンッッ！！！！！！］
「「“秘伝・陣風”ッッ！！！！！！」」
［ギュルルルルルルルルルルルルルルルルルルルルルルルルルッッッ！！！！！！

［［［ダダダ

オオッッッッ！！！

互いに、持っている刃から気弾や衝撃波を飛ばし、その全てを、“銃撃の合唱（コーラス）”と同様、竜巻の中心へと向けていく

さぁさぁ、そろそろ盛り上げ時だ。今度は、俺が放ちし施弓の一矢に、アイツが投擲する重槍による“衝撃の交響曲（シンフォニア）”ッ！！！！

［［チャキッ！！！！］］

「華麗に、ターゲット、ロックオンッ！！！」［ギギギギギッ……］

「派手にいっちゃうよんッ！！　“クライシス・レイン”ッッ！！！！！」

［ババババシュッッッッ！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！］

「さて……あの技を、試してみるか」［グッ……！！！！］

「浄化せよ、“ニーベルン・ヴァレスティ”ッッ！！！！！！！」

［ブンッッッ！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！］

俺が放った四つの光矢、“クライシス・レイン”。そしてアイツが投げた槍、“ニーベルン・ヴァレスティ”。それら二つは、“銃撃の合唱（コーラス）”、そして“闘気の諧謔曲（スケルツォ）”と同じく、竜巻の中心を回転する大鎌と大剣。それら二つへと巻き込まれていく

［［バッ！！］］

「「さぁ、終曲（フィナーレ）を飾ろう……俺達による、“世界の二重奏（デュエット）”でなッ！！！！」」

［［ギュオンッッ！！！！！！］］

己の手に、護拳を装着した彼らは、一番初めに巻き起こした竜巻の中心。大鎌と大剣の元へと、瞬時加速（イグニッション・ブースト）を用いて突撃していく

「「聴け。これぞ俺達が紡ぐ、“契りの刃”だ……ッ！！！！」」

――――――“武刃が奏でし世界の終焉（ウェポンズ・オルケストラ…ワールド・エンド）”――――――

［ボゴオオオオォォォ

□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■

「……あ～あ、やっちまったな」
「はぁ。これでは、旅の続きが出来なくなってしまった」
「つい、熱くなっちまったな」
「あぁ……」

俺達は、あの大技、“武刃が奏でし世界の終焉（ウェポンズ・オルケストラ・オヴ・ワールド・エンド）”を放って……まぁなんだ、うん……やっちまったんだ

俺達がいた星を含む、周囲３０００万個近くの惑星や恒星を、“綺

麗さっぱり消し飛ばしてしまった”ｗｗｗ　銀河丸ごとブッ飛ばしたようなもんだよな、コレ……

「まぁ、まだ被害は軽い方だよな」

「そうだな……確かに、微々たるものだな」

もしも、あれ本気でやってたら、今頃この世界、いや、この世界だけじゃなく、周囲の世界までも消し飛ばしていたかもしれないからな

“武刃（ウェポンズ・オルケストラ…ヴァイルド・エンド）が奏でし世界の終焉”

コイツは、最初に起こした竜巻に様々な技をブチ込み、そのエネルギーをその竜巻にため込ませ、最後に俺とコイツの殴打による衝撃で、ため込んだエネルギーを一気に爆発させる、超絶広範囲型殲滅技……その爆発エネルギーは、星は愚か、世界すらおも破壊しかねないし、最悪、他の世界にまで影響を及ぼしかねない、最悪の対界奥義だ

んで、今現在は宇宙空間に放り出されております。まぁ、さっきのは、ＩＳの絶対防御で耐えられる程の衝撃なんだ。うん、被害は最小限にとどめられたんだ。それだけで、満足しなければな♪　おかげで、ＩＳが大破しちゃったけどね。ダメージレベルはＤ。修理に出さなきゃならないな、こりゃ

「“神鋼”だけど、返してくんねぇ？　壊れちまってるだろう？」

「あぁ」

［ヒュッ！］［パシッ］

「ふむ……そんじゃ、治してまた持ってくるわ」

「まて」

ん？　なんだ？

「“神鋼”だが、それでは俺の全力に耐えきれん。もっと良いモノを要求する」

あぁ、そうだな。確かに、コイツの全力には耐えきれられんわな。

ふむ……

「だったら、今新たに開発中の超ド級ＩＳ、“キング・ザメク”のテスト・パイロットになってくんねぇ？　そいつなら、おそらくお前の全力に答えられるモノだと思うから」

「いいだろう。そのＩＳという兵器、気に入った。中々に面白い鎧だな」

だろう？　それに、カッコ良いしなｗ

「さて……俺は旅を続けるとしよう。お前はどうするのだ」

「俺は今の生活に戻るよ。これでも、現在絶賛青春を謳歌中だからな」

「なるほど……まぁ、せいぜい楽しむがいい」

「あぁ、楽しんでるぜ。それなりに、な」

「フッ……そうか」

［クルッ］

そして、俺達は互いに振り返り、違う方向を向き、互いに進む先を見る

「んじゃ、またな。俺の……親友にして戦友にして、良き相棒（パートナー）よ」

「あぁ、また会おう。我が親友にして戦友にして、生涯の好敵手(ライバル)よ」
「クッ……クックックックック……クッハッハッハ

#58，5（番外編）　戦友にして親友にして……相棒にして好敵手（後書き

起源に目覚めたビビは、幸福な日々を送る

起源に悩むグレイは、未だに不幸の底にいる

そんな中、新たに現れる者。神からの、転生者という名の兵

はたして、転生者兄妹の未来は……

第四編、“鬼幻覚醒”

お楽しみに……

＃５９　第二のプロローグ、新たなる転生者（前書き）

こんにちわ、リィーンです

今回から、新編が開始されます。それに伴い、新たなキャラ達が登場します

えぇ、あのキャラ達が、いよいよ登場です。本当に、長らくお待たせいたしました

ムーギネーター様、鳴神ソラ様、真王様、緋水様、夕霧麻人様、あんぎゃーす様、斬空様、　寝落ちの亜留ジャ野様、けびん様。ご感想、ありがとうございます！！！

＃５９　第二のプロローグ、新たなる転生者

……西暦２０１１年４月４日。この日、ある四人の男女が、死亡した……

……同時刻、別の異世界で、ある一人の男が、死亡した……

……

原因は交通事故と、自殺、転落死だった……

□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■

「――――ッ、うん……？」

あ、あれ……？　俺、なんで、寝てんだ？　いや、寝てた、か？　まぁ、いいや……とにかく、起きよう

「ん、ふあぁ～……あれ？　どこだここ？」

な、なんだ？　この、荒れ果てた荒野は……それに、なんだよこの、真っ黒な物体。なんか、鎖でグルグル巻きにされてるし……な、なんかこえぇ～

「にしても、良い天気だなぁ……」

よし、現実逃避は止めよう。現実を見よう……

「ここどこォォォォォッッ！！！！！？？」

いや、マジでこれ、え、どういう状況！！？　なに、ビックリ！！？　びっくり企画なの！！？　あ、夢か。そうだよ夢だ夢。な～んだ、ビックリして損し

［ギュッ］

「イタッ」

……前言撤回、夢じゃなかった……

「ま、マジでここ、どこなんだよ……お～～～～～いッッッ！

！！！

刺さっただろ？」
「おう」
「で、死んだだろ」
「おう……」
……」
あぁ、死んだんだ、俺ら
「って、エェェェ

に行ったってのに！！！　そんで、“リリなの”のゲーム版、それも“超豪華限定版ＧＯＤ　ＢＯＸ”の予約しに行ったってのに！！！！　あと、“娘ｔｙｐｅ”も買って、“なのは”様の艶姿を眺めようとしてたのに～～～ッッッ！！！！！！！！！！　これじゃぁ、死んでも死にきれねぇッッッ！！！！！！！！！！

「くっそ～～～ッッ！！！！！！！！！！　あんガキッ！！！　マジブッコロス！！！！！！」

「僕達、死んでるけど」

「グッ……」

うぅぅぅ……な、なんてこったい……この怒り、どこに晴らすべきか……

「あ、いたいた！！　お～い！！　そこの野郎ども！！！」

「？……ッッ！！！！？？」

な、あ、あああ、アイツ、いや、あの人は……！！！？

「「“真・恋姫？無双”の、“雪蓮”姉さんッ！！！？」」

「あぁ……アンタらも、そう言う反応をするんだ……」

？　アンタら？　ど、どういう事？

っていうか、死んだ後で、まさか雪蓮姉さんが出て来てくれるとは……俺的には、なのはさんに出てきて欲しかったな……あぁ、俺の女神様……

「とにかく、アンタ達、付いてきなさい」

「「え？　あぁ、はい」」

とにかく、俺達は雪蓮姉さんの後を付いていった……

□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■

［ザッ、ザッ、ザッ……］

「「……」」

その後、俺達はずっと歩きっぱなしだった。どこまで行っても、同じような風景で、正直飽きた……でも、こんなに歩いても、疲れる事が無かった。普通なら、もうばててる筈だし……

「あ、あの～「黙って歩きなさい。色々聞きたいのは分かるけど」あ、はい……」

……と、まぁこんな感じで、雪蓮姉さんに話しかけても、こういう反応だし……っていうか、ホンモノなのか？　この人……

そして、暫く歩いていると、風景に変化が起きた。小高い岩場に座った、一人の男が見えた

「お、来た来た♪」

そいつは、なんだか俺達の事を待っていたかのような口調で、出迎えてくれた

クッ、なんだこのイケメソ……あれ？　っていうか、なんかどっかで見た事ある様なぁ……

「「「……」」」

そいつの前には、なんか見覚えの無い男が一人と、女が二人。まぁ、知らない奴だな

「連れて来たわよ、あなた」
「おう、ごくろうさん、シェレン♪」
［チュッ］
「「「「「！！？」」」」」

な！！？　こ、こいつ、雪蓮姉さんの唇を～～～～！！！！？

「むぅ、足りないから、あとでたっぷり頂戴ね、ご褒美♪」
「おう。あとで、な」
「クスッ……楽しみにしてるわよ」
［フッ］
「「「「「！！！？」」」」」

き、消えた！！？　雪蓮姉さんが、消えちまった！！？　おのれこのイケメソ！！　雪蓮姉さんをどこへやった！！！

「さて……初めまして、諸君」

そして、その後に、目の前の岩場の上に座って、俺達五人を見下すように見る男が、喋り出した

「俺は神様だ。以後、よろしくな♪」

「「「「「……は？」」」」」

な、なに？　コイツ、いまなんつった？

「まぁ、なんだ。とりあえず、君達の状況を言ってあげようか……」

……

□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■

その後、俺達はその神様の言葉を、聞いていた。その時に、全員が軽い自己紹介をしていた

そして、分かったのが……あぁ、俺達は死んだ。ただ、それだけは確定だった

「んで、なんで神様が、アタシ達の前にいる訳？　って言うか、なんでアタシ達は、神様の所に来させられた訳？」

最初にいた二人のうちの一人の女が……確か、“天音”、だったか？　そいつが、やけに冷え切った声で、この自称神様に言い寄った

「あぁ。それはだな……君達は、“選ばれたから”だよ。神である俺によって、な」

……？　な、なんだ、その、中二的展開は……か、神様に選ばれた？　ど、どういう事だよ

「あ、あの～、さっぱり意味が分からないんですけど……」

えっと、“夢乃”ちゃん、だっけ？　この子が、今の俺達の心情を代弁してくれた……

「う～ん……まぁなんだ。ようは、お前達には、別の世界で第二の人生を生きてもらうって訳だ。いわゆる、“転生”って奴だ」

――――――――――――――――――――――――――――――

「「ナンダトォォォォォォォォォォォォォォォォォォッッッ！！！！！！！？？？」」

「「「！！！！？？」」」

今、俺とマイフレンドがハモった……ま、マジか？　まさか……まさか！　まさか！！！　あ、あの……転生、を？

「ちょっと、まってくれ。転生って、あの転生なのですか？」

「あの……チート能力を貰って、アニメや漫画の世界に行って原作介入が出来るという、あの転生ですか？」

「あぁ、そうだ。やはり知識がある人は、話が早くて助かる」
「「テンプレキターーーーーーーーー（ﾟ∀ﾟ）！！！！！！！！！」」
やったァァァァァァァッ！！！！！！　ありがとよガキ！！！　お前は、神様からの使いだったんだな！！！
「ふざけるなッ！！！！　神だかなんだか知らぬが、転生だと？ちーととはなんだ！！　あにめやまんがとは何のことだ！！！？そのような得体の知れぬ物、信用ならん」
お、おい。なんなんだよ、コイツ……えっと、“ハジメ”、っったな。なんだよあの格好。コスプレ？　しかも、なんか刀まで持ってるし……こえぇ～
「まぁまぁ落ち着きたまえ。なんのことか、今教えてやるよ」
［パチンッ］
「ッ……グゥ！！！？」
な、なんだ？　いきなり、苦しみだしたぞ？
「今し方、おまえの頭の中に、こいつ等と同じような情報を与えた。痛みはいづれ引くだろうし、そん時は色々知ってるだろうよ」
……さ、さっすが、神様だぜ……
「さて♪　他の皆には、別の事を話しておこう」
「まさか……チートな能力を与える、とか？」
「そうそう♪　やっぱり知っている奴は話が早くてマジ助かるわｗ
ちなみに、エネルギーマックスに、肉体強化はデフォルトだから、

他に二つ、能力を言ってくれれば、助かるかな」

おぉ……まさにテンプレ通りだわ……それに、なんかデフォルトまであんのかよ。なら、どうしようかなぁ……

「それじゃぁ！！　俺は“ＢＬＥＡＣＨ”に出てくる“斬魄刀”とか！！　っていうか、それに出てくる能力全部が使えるようにしてほしいのと！！！　“機動戦士ガンダム”に出てくるＭＡとＭＳを、“バリアジャケット”と言う事で使えるようにしてくれ！！！！」

「なら僕は、“家庭教師ヒットマンＲＥＢＯＲＮ”に登場するリングと、“匣兵器（ボックス）”全部を使えるようにして欲しいのと、あと“グレンラガン”のガンメンをバリジャケとして使えるようにしてほしいかな」

お、おい、意外とチートな感じだな……

「うん、オッケィ。なら、次は君だな」

「はぁ……転生とか、なんか興味無いけど。でも、そんな面白い事なら、関わってみようかなぁ……」

「で、能力はどうするんだい？」

「そんなら、ここは常に乗っ取って、“Ｆａｔｅ”に出てくる能力全部が使えるようになる力と、“魔法先生ネギま！”に出てくる魔法やアーティファクトを全部使えるようにしてほしいかなぁ」

お、おい……そりゃぁやり過ぎだろ？

「うんオッケイ♪　そうしよう」

えマジで！！！？

「ちょ、神様！！　能力へんｋ「あぁ御免ねぇ、もうさっきので決めちゃったから」ｏｒｚ」

ま、まじかぁ……

「あの～、私は、よく分からないんですけど……とりあえず、ゲームのテイルズオブシリーズの技とか魔法とかが使えたら、それでいいかなぁ」

おぉ、この子もなかなかいい所持ってくるなぁ

「それだけでいいのかい？」
「はい」
「うし、分かった。それで行こう」

な、なんだか、ポンポン拍子で話がまとまったなぁ……

「ッ……イツツ」
「お、大丈夫かい？　ハジメ君」

あ、アイツ元（？）に戻ったのか？

「どうだい？　ある程度は、理解できたかい？」
「……えぇ、おかげ様で」
「で、君はどうするんだい？　能力について」
「……なんでもいいですよ、お任せします」

おいおい、何なんだよ。せっかくのチャンスをさ

「ふむ……なら、そこにいる二人と同様の能力を与えよう。その

方が、統一感があるからね♪　知識と一緒に、与えて上げよう」
「えぇ、じゃぁそれで……」
「……」

ケッ、なんか感じワリィな……

「って言うか、なんでアタシ達、神様に選ばれたんですか？」
「ふむ、良い所に気付いたね、天音ちゃん。実を言うと、ある世界。まぁ、君達が転生される先の世界だがな。その世界に、“ある異変”が起きようとしていてね」
「ま、まさか……その異変って奴を、なんとかしてほしい！！って事か？」
「クックックック……あぁ、そう思ってもらえればいいかな」

おぉ……なんだか、他の転生とは違うな……こう、使命があるって、なんだかカッコ良いかも

そんな感じで、俺は転生することへの期待を、どんどん膨らましていった

「そう言えば、神様」
「ん？　なんだい、虎太郎君」
「一体、僕達はどんな世界に転生するんですか？」

あ、そうだよ。確かに、それは重要かも。で、どこなんだろう？

「う～ん……そうだなぁ。敢えて言うなら、“魔法少女リリカルなのは”のような世界、かな？」
「「――――――――――――――――――――――――」」

……

「竜虎……」

「仁哉……」

「ガシッ！！！」

「「キターーーー

［パチンッ］

そう言った瞬間、神様は指を鳴らし

「「「「「「！！！！！！！！！！！？？？？」」」」」」

俺たちの意識は、落ちて行った……

□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■

……さて、と

「クックックック。本当に頼むよ……その世界の未来は、君たちに掛かっているのだから……」

さぁ、物語の再開と行こうか……クックックックック

□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■

■□■□■□

い張る……まったく、彼は本当に、命をなんだと思っているんだか」

まぁ、分かっているとは、思うけどな。と、青年は付けたす。良くも悪くも、彼は命とは何なのかを理解している。どれほど大切なモノなのかも、知ってはいる。と……

「でも、何を企んでいるんだろう、あの人は……」

「確かにね。でも、これだけは予測できる。今の彼の企みには、犠牲が出る。それも、沢山な無駄な命を、散らそうとしているのは間違いない」

「ッ……じゃぁ」

「あぁ……僕も、いや、僕たちも動かなければならない、かもしれないね。でも、彼がそれを許すか……」

それぱっかりは、分からない……青年は、そう言い放ち、玉座から立ち上がった

「どうするの？　私は、あまり動けそうにはないけど」

「大丈夫だ。もしものことを考えて、あの人形の一つに、細工をしておいた。も篠も場合は、なんとかしてもらうようにする」

玉座から離れた青年は、そのまま歩きだす。それに続き、彼女も後に続く……

「まぁ、君の悪だくみは、いつも周りの為にやってるからね……そうだろう？　自称、恋のキューピット野郎」

青年は、笑みを浮かべて、その場から立ち去った……

＃５９　第二のプロローグ、新たなる転生者（後書き）

今回出てきた新たな転生者達の設定は、次回掲載します

そして、次はメガウラを更新いたします。お楽しみに

～カミウラ　出張号～　新キャラズの設定を公開するＺＥ！！！（前書き）

どうも、お久しぶりです、リィーンです

ここ最近、学校も始まり、慣れぬ先輩としての行動で、色々とグダグダしており、更新が遅れてしまいました

今回は、サブタイトルにも書いてある通り、前回登場した新たな転生者達の設定を紹介させていただきます

なお、今回は挿絵を挿入してみました

ムーギネーター様、鳴神　ソラ様、あんぎゃーす様、けびん様、斬空様、緋水様、真王様、装甲轟鬼様。ご感想、ありがとうございます！！！

～カミウラ　出張号～　新キャラズの設定を公開するＺＥ！！！

～～～神の舞台裏、出張号～～～

神「いよう（。ω。）ノ　こんな形で会うのは、ひッさしぶりだね～」

レヴェッカ「今の今まで、あちこちで暴れとったんやから、久しぶりっちゅう気にはなれへんなぁ」

メイリン「っていうか、上の表記……もはやあっちが本家に成ったってわけなの？」

シェレン「良いんじゃない、別に。もうあっちがメインに成ってるからねぇ、あのステージ」

レヴェッカ「せやけど、やることは一緒なんやし。どこが本家とか、別にもういいやん」

神「そうだなぁ～……どこで暴れようと、結局楽しけりゃいいんだしｗｗｗ」

レヴェッカ「せやな♪」

シェレン「そうね♪」

メイリン「（はぁ……まぁ、最終的にはそうなんだから、良いわよね）」

神「そんじゃ、今回のお題とでも、行ってみますか♪」

レヴェッカ&シェレン「は～い♪」

シェレン「っていうか、今回は私達だけでやるの？」

神「おう。俺の嫁ズの美人チームで、な」

レヴェッカ「ちなみに、アサ、スイ、ナユタの三人は、嫁ズの美少女チーム。スノウ、ヤーヤ、キララの三人は、美幼女チームなんやで」

メイリン「一つ、犯罪の匂いがしているような気が……」

神「大丈夫じゃないが、問題無い。お前らも含め、全員5万年以上は生きてんだし。それに、美幼女チームの中に、一番の年上のスノウがいるんだから♪」

レヴェッカ&シェレン&メイリン「（なんだか、それはそれで、痛い気が……）」

新キャラズ「（その前に、年の事はもう気にしてないのか？）」

神「さって！！　話しが大分逸れちまったが、今回のお題を発表しよう！！！」

――――――転生物語に新たに登場する五人の転生者達について――――

神「だ！！！」

レヴェッカ「まぁ、コレは本人も交えてやった方が、早いわね」

神「だな……そんじゃぁ、いつもの方式で公表した後に、登場してもらおうか」

シェレン「まずは二人、作者考案のキャラクターから！！」

メイリン「こちらになります」

名前：上谷（カミヤ）　仁哉（ジンヤ）

性別：男

イメージＣＶ：檜山修之
年齢：１９歳
一人称：俺
血液型：Ｏ型
身長：１７８？
体重：６１？
術式：近代ベルカ式
魔力光：薄い虹色
総合ランク：ＥＸ

【特記事項】

車の運転中、子供を引きそうになってハンドルを切った時、近くの電信柱に激突し死んでしまった人。だが、あの神様によって選ばれ、転生者としてリリなのの世界に送られ、第二の人生をスタートする

重度の熱血質で、バカ。周りからも引かれる程の熱血な漢、でバカ。体育会系のノリを見せるが、オタクでバカ。好きな歌は、燃え上がる様な曲ばかりで、周囲から付けられたあだ名が“絶叫王（声が、かの勇者王に似ている事から来ている）”、または“バカヤ”

リリなの世界に転生後、まずは“なのは”にフラグを建てようと宣言している（リリなので一番好きなキャラが“なのは”だから）

見た目は、“魔法少女リリカルなのはＦｏｒｃｅ”に出てくる、“ヴェイロン”を１９歳まで若くし、目つきを少しまるめ、髪を赤色

にしたような感じ

【神様から与えられた能力】

1）“膨大なエネルギー”
スティン兄妹と同じ能力

2）“最強体質”
これも、スティン兄妹と同じモノ

3）“魂の秘法”
“ＢＬＥＡＣＨ”に出てくる“斬魄刀”や“”など、とにかくソレに出てくる能力全てを使用出来るようになる

4）“機動争甲”
“機動戦士ガンダム”シリーズに登場する“ＭＳ”、または“ＭＡ”を自身の鎧として装備が出来る。感じとしては、“ＩＳ＞インフィニット・ストラトス＜”のような形状となる

【使用デバイス】

“ヴェステージ”

刀剣型のアームドデバイス。待機状態は、鞘に納刀された太刀。抜刀するだけで起動が可能であり、その際に“斬魄刀”となる事が可能。仁哉の能力を制御、管制をする為のデバイスとして、神様が創り出したモノ。ＡＩは持ち主の性格をコピーしたもので、仁哉並みの熱血バカで、ある意味良いコンビ

名前：竜ヶ崎（リュウガザキ）虎太郎（タロウ）
性別：男
イメージＣＶ：緑川光
年齢：１９歳
一人称：僕
血液型：Ｂ
身長：１７３？
体重：６１？
術式：近代ベルカ式
魔力光：薄い虹色
総合ランク：ＥＸ

【特記事項】

“上谷仁哉”の親友で、腐れ縁の仲。仁哉が運転していた車に乗っていて、彼と一緒に死亡した。だが、あの神様によって選ばれ、転生者としてリリなのの世界に送られ、第二の人生をスタートする

常に冷静でいて、何事にも動じない程の度胸を持つ。でも馬鹿をやらかす。だが、頭の回転は良く、周囲からは天才と呼ばれる。つまり、天才故の馬鹿なのである。周り（特に仁哉）からは、“竜虎（名前が“竜”ヶ崎“虎”太郎だから）”と呼ばれている

リリなの世界に転生後、まずは“フェイト”にフラグを建てようと宣言している（リリなので一番好きなキャラが“フェイト”だから）

見た目は、“家庭教師ヒットマンＲＥＢＯＲＮ！”に出てくる、“雲雀恭弥”の髪色を青にし、気だるそうにした感じ。だが、意外と鍛えている為か、肉付きが良い体を持っている

【神様から与えられた能力】

１）“膨大なエネルギー”
スティン兄妹と同じ能力

２）“最強体質”
これも、スティン兄妹と同じモノ

3）“復活の秘法”
“家庭教師ヒットマンＲＥＢＯＲＮ！”に登場する能力や、全“匣（ボックス）兵器”等を使用出来るようになる

4）“螺旋戦鎧”
“天元突破グレンラガン”に登場するガンメン（ロボ）を、自身の装甲として装備できる能力。仁哉の“機動争甲”と同様、見た目が“ＩＳ＜インフィニット・ストラトス＜”のような形状である

【使用デバイス】

“獅皇龍帝”
指輪型のインテリジェントデバイス。待機状態は、装飾の無いシンプルな指輪。起動すると、任意の“リング”に変形し、対応する“匣（ボックス）兵器”を召喚する事が可能。虎太郎の能力を制御、管制をする為のデバイスとして、神様が創り出したモノ。ＡＩは持ち主の性格をコピーしたもので、クールで知的で馬鹿

神「と言う訳で、登場してもらおう。バカヤ君と竜虎君だ！！！

仁哉「バカヤって言うなァァァァァァァァァァァァァッッ

！！！！！」

虎太郎「そう言うな、仁哉。もはや読者も、お前の事を馬鹿キャラ扱いし始めているし」

仁哉「しょ、しょんなぁ～～～～っ……」

レヴェッカ「っていうか、見た目からしてバカっぽい」

シェレン「そうね、バカっぽいわね」

メイリン「馬鹿にしか見えないわ」

仁哉「ｏｒｚ」

虎太郎「バカヤは、９９９９９の精神ダメージを受けた。」

神「何気に、ダメージ限界突破してんな」

仁哉「っていうか、ＦＦかよ……」

神「っという訳で、馬鹿コンビ枠でした～。つづいて」

仁哉＆虎太郎「まてぇいッ！！！」

神「なんなんだ？」

仁哉「こんだけ？　俺ら、こんだけなのか？」

神「あぁ。次があるからな」

虎太郎「不本意だ。もう少し、僕たちについて言及を要求する。仁哉はいいけど」

仁哉「おいこら竜虎ッ！！　俺はいいって、どういう事だ！！？」

神「あぁもう……とにかく、次だ次。メイリン、次の奴らを表示してくれ。その間にレヴェッカ、そいつらをつまみ出せ」

レヴェッカ「は～い♪　手荒なまねはしたくあらへんのやけどなぁ♪」

［バキバキッ！！　バキボキッ！！］

仁哉＆虎太郎「（メッサ手荒っぽく見えるんですけど～……）」

メイリン「はぁ……それじゃぁ、次行きましょう。次は、読者から募ったキャラクターの紹介よ。まずは一人目、男の方を発表するわ」

名前：ハジメ・クレバヤシ
性別：男
イメージＣＶ：置鮎　龍太郎
年齢：１８歳
一人称：俺

血液型：Ｏ型
身長：１７０ｃｍ
体重：６０？
術式：古代ベルカ式
魔力光：薄い虹色
総合ランク：ＥＸ

【特記事項】

“けびん”様投稿キャラクター

魍魅魍魎が跋扈する和風世界に住む人間で、妖魔を討伐する家系に生まれた者。妖怪を退治している時に重傷を負い、妖魔の攻撃で付近の崖に転落。そのまま死亡する。妹がいるが、生き別れという結果になった

死亡後、他の四人と共にあの神の前に召され、ある程度の現代知識と転生者としての能力を得て、リリなの世界に送られる

妖魔退治を生業としていた為か、身体能力やバトルセンスは他の四人と比べて高い。尚且つ、チート能力を受け取った為、けた違いの力を持つことになる。生前の戦闘スタイルは、居合い抜刀を主体とした剣技

いつも気だるそうにしているめんどくさがり屋。だが一度火が灯ると熱血漢になる。義を重んじて、受けた恩義は必ず返すといった義

理堅さも持ち合わせている。そしてサバイバルな経験をしている為か、料理が得意

見た目は、腰まで届く外跳ねの癖毛な黒髪を乱雑に鋼糸で一纏めにしており、瞳は黒（戦いになると真紅になる）。無駄な贅肉が一切なく、体中に大小無数の傷がある。水晶と勾玉の付いた首飾りをしている（転生前の妖魔退治の際に、妹から無事に帰ってくるようにとお守りにもらったもので今では絶対に失いたくない宝物になっている）

【元から持つ能力】

“空間固定能力”

ハジメの家系に伝えられている妖術で、能力として使えるようになっている。その場に透明な足場を作ることが出来る。また、見えない壁にもすることも出来、透明な檻を作れる。と、多様性に富んだ能力

【神様から与えられた能力】

1）“膨大なエネルギー”

スティン兄妹と同じ能力

2）“最強体質”

これも、スティン兄妹と同じモノ

3）“忍の秘法”

“ＮＡＲＵＴＯ”に出てくる忍法や能力などをを用出来るようになる能力（神様から知識を貰ったが為、ある程度しか使えない）

4）“勇者兵装”

“勇者ロボ”シリーズに登場するロボを、自身の装甲として装備できる能力。仁哉の“機動争甲”や、虎太郎の“螺旋戦鎧”と同様、見た目が“ＩＳ＜インフィニット・ストラトス＜”のような形状である（だが、ハジメ自身が、勇者ロボを知らない為、使えるのは神様から教えてもらった“グレート・ゴルドラン”、“スーパー・ファイヤー・ダグオン（ライオソード&無限砲装備の形態）”、“ジェネシック・ガオガイガー”の三つのみ（これだけでも、充分チートだが））

【使用デバイス】

“赤夜叉（愛称、スズナ）”

大太刀型のアームドデバイス。彼が使っていた対妖魔用の妖刀、それが転生後も彼の手元に有った為、それが神様によって改造されデバイスとなった。かつては、ありとあらゆる霊力を『切断』出来る大太刀であり、魔力も同様に『斬る』ことが出来る。この大太刀で斬られた相手は魔力による効果を受ける事が出来なくなる（回復する日数は斬られた相手の魔力量次第）。使い方次第では、リンカーコアを断ち切ってしまうことも出来る代物。デバイスと成ってから

もこの性能は生かされ、更にそこへ能力の管制などを行うシステムを搭載された。無論、人格を有している。ＡＩは女性型で、穏やかな性格で世話好き。ハジメの体調管理やスケジュールなどを一手に手掛けている（ハジメ曰く、性格や声が生き別れの妹そっくりな為、敢えて愛称として、妹の名前の“スズナ”で呼んでいる）

神「それでは!!　登場していただこう!!　ハジメ君だッ!!!」

ハジメ「また、変な所に連れてこられた……」

レヴェッカ「災難やなぁ、唯一の非現代の時代から飛ばされたんやから」

神「まぁ、作者に気に入られたのが運の尽きだ♪」

ハジメ「作者？　なんの作者だ？」

メイリン「投稿して下さったけびん様は、かなりハイテンションでしたけど」

ハジメ「？　何を言ってるんだ？」

シェレン「……ねぇ、もうキャラ確定してるの？」

ハジメ「きゃら？　きゃらとはなんだ？」

神「当たり前だろ？　世間知らずで、こう言ったノリに付いていけない系の」

ハジメ「のり？　のりって、あれか？　海で取れる、あの……？」

レヴェッカ＆シェレン＆メイリン「（色々と苦労しそう……）」

ハジメ「？　？？」

神「さて、本人の頭がオーバーヒートしそうなので、次のキャラの紹介、行こうか」

シェレン「オッケー♪　それでは、次のキャラクターは、この子よ！！」

名前：出雲（イズモ）　天音（アマネ）
性別：女
イメージＣＶ：宮村優子
年齢：１６歳
一人称：私、又は、アタシ
血液型：Ａ型
身長：１６７？

体重：■■？（真っ黒に塗りつぶされている為、読めません）
術式：ミッド式
魔力光：薄い虹色
総合ランク：ＥＸ

【特記事項】

“あんぎゃーす”様投稿キャラクター

成績優秀、スポーツ万能、容姿端麗。と、まるで絵に書いたような天才美少女。だが、それ故に毎日退屈の日々を過ごしており、生きる意味を見いだせなくなり、自殺。その時にあの神様に召喚され、刺激的な転生者ライフを生きることに

転生前は淡白な性格だったが、転生後はハスキーでお転婆という豹変したかのような性格になった。周りからは発狂したかのような目で見られるが、本人はお構いなし。故に、特殊な性癖に目覚めそうにある状態。百合の気、アリ

天才故に、オタ知識も豊富。リリなのにも精通しており、様々な知識を有している。が、能力は控えめにしている。リリなのでお気に入りキャラは、“ロリな子”

見た目は、“新世紀エヴァンゲリオン”の“惣流・アスカ・ラングレー”の髪色が紫色にしたような感じ

【神様から与えられた能力】

1）“膨大なエネルギー”
スティン兄妹と同じ能力

2）“最強体質”
これも、スティン兄妹と同じモノ

3）“魔の秘法”
“魔法先生ネギま!”の能力やアーティファクト、その他諸々の能力が使えるようになる能力。天音は、そこから組み合わせてオリジナルの魔法やアーティファクトを製造する事が出来る

4）“エクストラ・ステイナイト”
“Ｆａｔｅ／ｓｔａｙ ｎｉｇｈｔ”と“Ｆａｔｅ／ＥＸＴＲＡ”など、“Ｆａｔｅ”シリーズで登場する能力や宝具などを使用できるようになる能力。ちなみに、天音はさらにそこから独自の固有結界やオリジナルの宝具などを使用していく

【使用デバイス】

“アタラクシア”

ピアス型のインテリジェントデバイス。他のメンバーと同様、天音の能力を管制、制御する為の、デバイス。無論、神様が製造したデバイスで、調整入らずのハイテクデバイス。管理局ですら、オーバーテクノロジーで作られたモノと判定されている

神「と言う訳で、もう一人の投稿キャラクター、天音ちゃんの登場だァァァァァッ！！！！」

天音「はぁ～い！！　出雲天音、でぇ～す！！！　皆ぁ、よろしく～ッ！！！！」

レヴェッカ「誰やねんアンタ」

シェレン「本編に出てた時と、１８０度性格が違う気が……」

天音「何を言ってるのよ。これが私の本来の姿よッ！！！　はぁ、早くあの世界に行って、大暴れしたいわぁ♪」

メイリン「確か、いつかのあんぎゃーす様の感想では、こんな感じだったわよね」

神「あぁ……だが、始めっからあんなのだと、仁哉と被るからって言う事で、最初は淡白キャラで行こうと、作者は考えたみたいだがな」

天音「フフッ。ここの作者、色々と分かっているのね」

神「いや、分かってないだろうな」

レヴェッカ「ほぼ直感やろな」

メイリン「だと思うわね」

天音「ふ～ん。ま、別にどうでもいいけどね♪」

神「（さすが、選考の際のくじ引きで、他のキャラを突き離しての一位を取っただけはあるな……）」

レヴェッカ「ほな、最後のキャラ、行きまひょか」

神「だな……それでは、五人目のキャラ紹介と行こう！！！」

レヴェッカ「最後は、このキャラクターや！」

名前：寿（コトブキ）　夢乃（ユメノ）
性別：女
イメージＣＶ：阪田佳代
年齢：１７歳
一人称：私
血液型：Ａ型
身長：１５３？

体重：４２？
術式：ミッドとベルカ混合
魔力光：蒼
総合ランク：ＥＸ

【特記事項】

“作者の親友にして同士、Ｆ”様投稿キャラクター

元は声優で、有望ある新人だった。が、子供が引かれそうに成っている所を助けて、代わりに引かれてしまって死亡。だが、その後に魂があの神様の元へと行き、他の四人と共に転生することとなった

温厚で優しい性格。いつもニコニコしており、人当たりが良い。真っ先に他人を手伝うタイプで、みんなに好かれる

声優をしていた為に、アニメに関して知識はある方。だが、あまり関心は無い為、うろ覚え。が、ゲームには興味があり、“テイルズオブシリーズ”が好きで、かなり知識を持っている。それはマニアレベルと言えるほど（夢は、そのゲームのメインパーティのキャラを演じる事だった）

見た目は、白いニット帽にダウンコート、手袋に赤い長靴を愛着している。ダウンコートの下には、長袖の白いシャツとミニスカート、そして黒い二ーソックスをはいている

？匿秘記述？
■■■

【使用デバイス】

“ヴォルケーノ”
ペンダント型のハイブリットデバイス。彼女の能力の制御、管制を行う神様作のデバイス。剣や杖、銃など、様々な形状に変形出来る。ＡＩは、優しい青年（だが、どこか神秘的な雰囲気を醸し出している）

神「……と、言う訳で、五人目の夢乃ちゃんに登場してもらおう！！！」

夢乃「はじめまして！！　寿夢乃です！！　趣味は」

レヴェッカ＆シェレン「チョイ待ち！！」

夢乃「ふえ！！？」

神「なんだ？」

レヴェッカ「アンタ、そういやさぁ……“募集は二人やなかった”？」

シェレン「えぇ。＃３３の後書きでは、あなた、確かこういってな

かったっけ？」

――――――神「あぁ、まぁ、後々に転生者四人追加する予定だったんだが、二人はキャラ固まったんだけど、残り二人が曖昧でね。女と男っていう括りで考えてたら、ネタにつまって……」――――

メイリン「ここ、転生者四人……って文章だけど……それでなぜ、五人目がいるわけ？」

神「……ここは、作者に出てきてもらおうか」

［パチンッ！］

作者「！！！？　な、なんだ！？」

神「おいクソ作者、これは一体どういう事だ？」

レヴェッカ「なんで、四人が五人になったん？」

作者「あ、そ、それ、ですか……それは、あの……えぇ、まぁ……」

神＆レヴェッカ＆シェレン＆メイリン「まぁ……？」

作者「……同志Ｆが、イラスト付きでキャラを投稿してくれたんですよ。そのイラストに胸打たれ、あげくにそこからさらに妄想の域が広がって行き……特別枠で採用したんです、はい」

神＆レヴェッカ＆シェレン＆メイリン「特、別枠？」

作者「えぇ。それで、まぁ……こうしてこのキャラにのみ、色々と伏せてある事があるんです、はい」

神&レヴェッカ&シェレン&メイリン「いいのか、それ……？」

作者「いや、だって、しょうが無いですよ。こんな、可愛い絵を送られてきちゃんたんですから」

＞ｉ２２９４５―３０４９＜

神&レヴェッカ&シェレン&メイリン「（あぁ、納得）」

作者「ですから、こうして急遽採用したんです」

神「そういった経緯があったんだね、夢乃ちゃん」

夢乃「みたい、ですね……でも、なんだか私でも分からない事があるので、ちょっと怖いです……」

神「まぁ、別にそれはどうでもいいんじゃね？」

メイリン「えぇ、後で色々分かって来るんだから、ね」

夢乃「は、はい」

神「うむ、良い返事だ」

レヴェッカ「まるで、我が子を見る親みたいな空気やな、アイツ」

シェレン「そうね……」

神「さって！！　これで今回の出張号はおしまいだ！！　これから活躍する、この五人達を、どうかよろしくなッ！！！」

仁哉「よろしくなッ！！！」

虎太郎「よろしく」

天音「よろしくねぇ～ッ！！！」

夢乃「よろしくお願いします！！！」

ハジメ「お前ら、どこに向かってやってんだ？」

神「それでは！！　チャンネルはそのままで、次回をどうぞ！！！」

仁哉＆虎太郎「テレビかよッ！！！？」

出雲「良い感じにカオスな終わり方ね……ゾクゾクしちゃう♪」

夢乃「え？　なんでですか？」

ハジメ「分からない……一体何がどうなってんだ！！？」

メイリン「困惑キャラ、確定ね」

シェレン「そんな事よりも、締めのあいさつをしないと」

レヴェッカ「せやったわ。ほな、みなはん、またカミウラの方で、お会い致しましょなぁ～」

神「それでは！！」

神＆レヴェッカ＆シェレン＆メイリン「ばいば～い！！」

仁哉「またな～～～ッ！！！」

虎太郎「またな」

天音＆夢乃「またね～♪」

ハジメ「だから、どこに向かってやってんだよ～～～～ッッ！！！！！？？」

～カミウラ　出張号～　新キャラズの設定を公開するＺＥ！！！（後書き）

このまま、次回も投稿いたします

＃６０　星の代わりに墜ちる鬼（モノ）（前書き）

連続投稿です

#６０　星の代わりに墜ちる鬼（モノ）

――――――そして、とある兄妹（しまい）の兄は、己の今の現状を知る。人間では無くなっている、自分の肉体の事を……――――――

時は、一気に過ぎ去っていき……もう、あの“闇の欠片事件”から、一年と半年近くが過ぎ……こっちの世界に来てから、三度目の冬を迎えた。俺は２２歳となり、そして妹の奴も、１３になっていた……

本当に、ここ最近の時の流れは、緩やかなのか、早いモノなのか、分からなくなってきている。だが、これだけは言える。こっちの世界での生活は、常に不幸が纏わりついている、と言う事は……

「マスター！！　こっちは終わったよ！！！」
「おい主！！　こっちはどうすればいいんだよ！！」

……はぁ。ったく、五月蠅い奴らだ。なんでクェーサとフリュイは、あんなにやかましい奴なんだ？　元の人格となった、テスタロッサや湖の騎士は、あんなんじゃねぇのにな……

「リュマ、アイツらに、次やる事を教えてやってくれ。こっちは俺がやっておく」
「かしこまりました、ご主人様」

俺の守護騎士の中で、最も物分かりがいい奴といえば、コイツが一

番だな……高町のマテリアル、リュマ……本人よりも落ち着きがある分、本人以上に周りを見ているからな……色々と世話をかけているな

そんで、俺はと言うと……いや、俺達は、か？　俺とこいつら……俺の守護騎士と成ったマテリアル共は、ここ、遠見市から離れることにした。そして、第一管理世界、通称、“ミッドチルダ”の方へと、移住しようとしている。そうすれば、仕事でいちいちこっちに戻る手間が省けるからな。今は、その荷造りと準備だ。そして、次の俺達の住処は……

「にしても、コレから住む場所が、まさか“飛空挺”なんて、ね～」

「ふん。空から下劣な愚民共を見下ろしての生活、王たる我に相応しき住まいよ」

「えぇ、わたくしもそう思いますわぁ。楽しみですわね」

あのクソ神から与えられた情報を元に、俺が製造した“超大型エクリプスウェポン”……“飛翔戦艇（エスクアッド）・フッケバイン”、だったな。そこが、俺達の新たな新居になる場所だ

名前の通り、空飛ぶ船だ。しかも、次元間を移動できる代物。それなら、仕事に向かう時に楽して行けるし、帰る時も楽だ。戦闘でも使えるし、色々と役には立ちそうだ

「（あとは、アイツら用に開発している“ディバイダー”に、制御用のデバイス……はぁ、やる事が多そうだ）」

だが、暇にならずにすむ……

それに……こいつ等の世話。それだけが、俺が人間性を引きとめ

てくれている。最近になって、そう思い始めていた……“似合わなねぇなぁ”……

「あ、あの～、あ、主」

ふと、バニングスのマテリアル、シェアクが、俺に声をかけてきた。その後ろには、コイツに任せてあった荷物が積まれている

「なんだ」

「え、えっと～……つ、通信が、来てます。その……管理局の、ハラオウン、執務官さんから」

「……」

仕事の依頼、か……

「分かった。ガーナ、そこにある荷物を全て、“フッケバイン”に運んどけ。シェアク、この荷物をまとめておけ」

「おっけ～でぇ～す♪」

「は、はい……」

鉄槌の騎士のマテリアルに運搬を任せ、俺はその通信とやらをするために、邪魔にならない場所へと向かった

□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■

遠見市、スティン姉妹のマンションの一室……

「で、何の用かしら、ハラオウン」

そして、荷物が無くなった部屋に行き、ハラオウンからの通信を取った。あぁ、ちなみにだ、女声でしゃべっている。戸籍上では女だし、第一男声を出すと、なんか面倒事が起きる。あのクソ神から押し付けられた、確か……“驚異的なカリスマ”、だったか？　それのせいで、男声を封じられている。まったく、いづれマジで殴りてぇ……

《あぁ。いつも通り、仕事の依頼だ》

「そう……で、どんな仕事？」

《今度、第５７観測世界で、ある捜査が行われる。君には、それに付き合ってほしい、との事だ》

捜査任務、か……はぁ、面倒臭い

「欲しいっていうのは、誰から指示されたのかしら？」

《上層部からの指示だ。理由は分からないが、とにかくお願いできないだろうか》

「……いいわ。どうせ暇だし……で、いつ」

《三日後の、現地時刻で１９００からだ。それと、出来る事なら、君の所にいる守護騎士達にも、来て欲しい》

「……それは、誰の指示？」

《僕個人、からだ。そうした方が、捜査もはかどりそうだし、早めに切り上げる事も出来るだろうからね》

はぁ、コイツがそんな事を言うとは……ま、別に良いか

「分かったわ。クェーサとフリュイの二人を連れていくわ」
《あぁ、ありがとう。じゃぁ、よろしくお願いします》
「えぇ、また」
［プツン］

そう言って、アイツは通信を切って行った……

《お兄ちゃん？》
「……」

すると、今度はあの馬鹿妹が、念話を飛ばしてきた

「なんだ」
《さっき、クロノから連絡、きた？》
「あぁ……ん？　まさか、アレはお前の差し金か？」
《う、うん……ほんと、お兄ちゃんって鋭いね》

鋭い？……ったく、まるでタイミングを図ったかのように念話を飛ばすから、丸分かりだぞ

「で、なんでこんな事をさせるんだ？」
《いや～……実は、ね。その任務なんだけど、ちょっと曰くつきなの》
「……詳しく話せ」
《う、うん……その捜査から帰還中に、なのはちゃんがアンノウンに撃墜されるの。で、それでなのはちゃんは、重傷を負って……》

「つまり、それを阻止しろ？　ってか？」
《出来る事なら。でも、後の事を考えると、それは間違っているかも、しれないけど……》
なんだ？　なんか不味いのか？　それは……ま、別に未来のアイツらの事など、どうでもいい。が……
《でも、私はなのはちゃんが大けがをするのは嫌。だから、その……》
「……分かった。まぁ、やるだけやってみるよ。阻止が出来そう、だったらな」
《ッ……うん、お願い》
「あぁ……だが、なんでお前がしないんだ？」
《ま、まぁ……仕事と、被っちゃって》
「……確か、もう“少佐”になった、って言ってたな」
《うん、そうだよ。っていうか、少佐じゃなくて、三等空尉、だけどね》
「似たようなもんだろ」
《いや、意外と違うんだけどね……（ーー；）》
細けぇなぁ……だが、こんな奴が組織の少佐、か……世も末、だな。っていうか、意外と頑張るな、コイツは……どうして、そこまで頑張れるんだ？　お前はもう、やりたい事をやったんじゃねぇのか？　それ以上、何を求めてるんだ？
《そ、それじゃぁ！！　お願いね、お兄ちゃん！！》
［プツンッ］
そう言って、妹の奴も、念話を切った

ったく、なんで俺は、アイツの言う事を聞いてしまうんだろうな…
……アレか？　兄としての甘さ、か？　はぁ……わかんねぇな、
まったく……

「……ふぅ。ま、引き受けてしまった以上、やらねぇといけ
ねぇな」

……三日後、か……とにかく、今日中に全ての荷物を、な
んとかするか

□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■
■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■
□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■
■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■
□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■
■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■
□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□

まったく、面倒を掛けさせやがって……まぁ、阻止出来るかはどうかはわからないが……なんとかやってみる、か

「（しかし、何も起きて欲しくない、ってのが、第一なんだがな）」

「どうしたんだ？　主」

「考え事かァ？」

「……何でもないわ」

あぁ、なんでもねぇ。お前らには、関係無い事だ

「あの……グレイさん」

「なに」

と、不意に高町が俺に話しかけてきた。無論、女声でそれを返す

「今回は、ご同行していただいて、ありがとうございました」

「別に気にしなくていいわ。こっちも、仕事だから」

「でも、グレイさんは頼もしい方なので、一緒に着てくださっただけでも、凄く心強かったです」

「……そう」

まったく……なんで俺にこうも食い突くのか……お前はあの妹のモノなんだろう。だったら、妹にその愛想を向けろ

「にしても、お前がビビの姉っての、いまだに全然考えられねぇんだけどなぁ」

「ヴィータちゃん。そう言うの、言っちゃダメだよ」

「わぁってるよ……でも、ホントに似てねぇんだもんなぁ」

……当たり前だ、似ている訳が無い。俺は、アイツとは違うからな

そう、根本的に、な……

「とりあえず、捜査は終わったけど、気を抜かないようにね」
「そうだぞ！！　任務は帰るまでが任務だからな！」
「遠足じゃねぇんだぞ、おい……」
「お前達は黙りなさい」
「「は、はい……」」

まったく、こいつ等は……はぁ、頭痛くなる

「（だが……本当にこのまま、何事も無ければ、いいんだがな……）」

そう、願うばかりだった……無駄骨になったとしても、俺はそう合って欲しい……いや、欲しかったのだ

なぜなら……この事件が、俺にあんな現実（シンジツ）を、付きつけるモノに、成るのだから……

［ジリッ］
「ッ！！！？」
［バッ！！］
「んお？　マスター？」

なんだ、この気配は……だが、何も見えないし、レーダーにも、何も反応していない……ステルスか？　それとも、勘違いか……？

［ジリッ］
「ッ！！！」

“いる”。何かが、近くにいるッ！！！

「全員ッ！！　警戒態勢をッ！！！　敵が近くにいる！！！！」
「「ッ！！！！」」
「「えっ！？」」
＞＞？＜＜

クェーサとフリュイは、言うとおりに警戒態勢に入り、高町とヴィータは、驚いていた。そして他の連中は、何の事だと、首をかしげていた……

だが、他の連中はどうだっていい。問題は、どこに何がいるのか……見えない敵意を探りながら、俺は妹の話を思い出した

――――その捜査から帰還中に、なのはちゃんがアンノウンに撃墜されるの。で、それでなのはちゃんは、重傷を負って……

――――

「（つまり、狙いは高町か！！！）」

そう考えるやいなや、俺は高町がいる方へと目を向ける

「……ッ！？」

そこには、困惑している高町と……その背後に、何か可笑しな違和感が……そう、風景が“動いている”ような……そんな、錯覚に……

「高町ッ！！！　後ろッ！！！！」

「ッッ！！！！？？」

［ギランッ！］

その背後には、光学迷彩で姿を消していた“何か”が、その腕のようにも見える刃を、振り下ろそうとしていた

「ッ！！！！！」

［バッ！！！！！］

［ブンッ！！！］

だが、高町もその気配に気づいたのか、なんとか回避をする……
……

［ギランッ！］
「ッ！！！」

だが、その回避した先にも、空間の歪みが有り……つまり、その“何か”が、まだ他にもいた、と言う事。そして、それの刃は、未だに高町を狙っていた

そして、最悪なのが……高町は、その二体目の事が、見えていないと言う事だ

このままでは、高町は刃の餌食となり……彼女は……

――――もし、貴方が関わって、なのはを傷つけるような事があれば……――――

「ッ！！！」
［ダシュンッ！！！！］

ふと、有る人物の声が、頭の中に響きわたり……俺は、空中を蹴り飛ばし

［ドンッ！！］
「キャッ！！？　ぐ、グレイさ――――」

――――――［ズシュンッッッ！！！！！！！！！］――――――

「「「「――――――え……？」」」」
「――――――ッ……カハぁ、ッッ……！！！！！！！」
高町を突き飛ばし、少女を狙っていた刃の、餌食となった……
［……ズシュッ］
「ガ……ッ、カハッ……――――――」
［ドパァッ！！！！］
その刃が貫いたのは、胸……そう、“心臓”がある場所を、刃で貫かれたのである。そして、口からも、刺された部位からも、大量の血を噴き出し……体が動かなくなり……
［グラッ……］
宙へと、墜ちていった

「ッッ！！！！！！　マスタァァァ

「フリュイ！！　マスターをッ！！！」
「わぁってるッ！！！！」
［ダシュンッ！！！！］
「行くぞ、“グレイブヴィント”ッ！！」
『合点です姐御ッ！！』
［ポゥッ……］

その後、すぐさまフリュイが近づき、刃に貫かれたグレイの治療のために、自分のデバイス、“グレイブヴィント”を起動させ、回復を始めた

「ッ……貴様らァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァッッッ！！！！！！！！！！！！！」
［チャキッ！！］
「行くぞ！！！“バルニフィカス”ッ！！！！」
『おうよ！！！　弔い合戦だァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァッッ！！！！！！！！』
［ダシュンッ！！！！］

フリュイにグレイを預けたクェーサは、すぐさま自分のデバイスを構え、グレイを刺し貫いた“何か”へと、突撃していく。グレイを刺したせいでか、刃にはその血がべっとりと付いており、それが目印となっていた

「“光翼斬”ッッ！！！！！！」
［ブンッ！！！！］

“バルニフィカス”を、“ハーケンフォーム”へと変形させ、その大鎌から展開された刃が離れ、ブーメランのように向かって行き

［ザンッッ！！！！！！］
［ズドオオオォォォ

「艦に連絡！！！　直ぐにこちらへと転送ポータルを開かせろ！！
そして、すぐに医療室の準備を！！！」

その周りでは、他の局員が厳重な警戒態勢へと、意識を向けていた

「ま、マスター……ッ！！！？」
［バッ！！！］

クェーサも、グレイの場所へと向かおうとした……直後、何かの気配を感じた

［ジリッ……］
「ッ、まだ、いやがる……ッ！！」

先ほど破壊した“何か”と同じ気配、それを感じ取ったクェーサは、意識を集中させ、デバイスを構える……

「マスターには、近づけさせないッ！！！」
［チャキッ！！！］

最愛のマスターを守る為に、気持ちを昂ぶらせて、見えない敵を睨む……

その時、だった……

［ズドオオオォォォ

「……」

［グッ］

「あ、主！？　体を動かしては！！！」

［ダシュンッ！！！！］

「「「ッ！！！？」」」

だが、そんな動かすことすら困難になるはずの重傷を負った肉体は、武器を空中を蹴りあげ、クェーサがいる所よりも高く、飛び上がる

「……“リアクト”」

［カッ！！！！］

そして、何かを唱えると……グレイの身に、変化が訪れた

「「「「……」」」」

それは……当に“漆黒”

「な、なんだよ、あれ……」

髪も、瞳も、衣服も、上に纏われた鎧も……全てが、漆黒

「ありゃぁ……まだ主が試験段階とか言ってた、新兵器じゃねぇか……」

ソコに現れたのは……純粋な色に塗られた、“黒きモノ”。グレイは、それに成っていた……

「……“ディバイダーＢＩＺ[812]　オーガ・リアクテッド”」

それは、“黒鬼”……赤でもなければ、青でもない……純粋なる黒。混じりけなど存在しない程の、まるでそれが存在する部分は、何も無いかのように錯覚してしまうほどの黒に塗られた、鬼だった

「……ケシトベ」

［チャキッ］

そして、黒き鬼は……その手に持っている獲物……銃剣だったそれは、姿形を変え、異形の大剣へと……まるで生体兵器の様相を見せる黒き刃へと、変貌を遂げていたそれを握りしめ……

「ウウウウッ……ヴアアアアアアアアアアァァアアアアアアアアアア

一閃。その異形な大剣を振るった直後、彼の周囲から、一気に爆発の嵐が巻き起こった。それはつまり、それほどの数の未確認体が有った、と言うことになる

「「「「……」」」」

＞＞……＜＜

だが、そこにいた全員が驚いていたのは、グレイのその変貌である。心臓を貫かれた筈の肉体が動き出し、そして漆黒に塗られたかと思ったら、一気にアンノウンを撃破させたその異端の女傑に、目を奪われた……

「……リアクト・アウト」

［フッ］

そして、その変貌が解かれ、普段の姿へと戻り……

「……ッ」

［グラッ］

「ッ！！　マスター！！！」

［ダシュンッ！！！］［トサッ］

再び意識を失い、中へと落ちそうにあったグレイを、クェーサが再び高速で移動して抱きとめた

「マスター！！　起きてよ！！　マスター！！！」

「黙れクェーサ……こりゃぁ多分、気を失ってるだけだ。すぐに戻って、安静にしておけばいいと思う」

「お、おう」

そうフリュイが言い放つと同時に、この時の上官が即時撤退の指示を通達、ここにいる全員がすぐさま、帰還していった……気を失った、グレイを連れて……

そして……この事は、当然のごとく、管理局の中に瞬く間に広まっていった。それによって、彼はついに、こう呼ばれるように、なってしまった……

“闘争の鬼人”、と……

＃６０　星の代わりに墜ちる鬼（モノ）（後書き）

次回も、転生物語を投稿する予定です

＃６１　襲来する転生者軍団。二人の思いは、“気に食わない”の六文字（前書き）

どうも、リィーンです

……ダメだ、文章がうまく頭から出て来ません。本当に、春と夏と秋は苦手です……体が無性にだるくなってしまいます……

せっかくのＧＷ、執筆のチャンスを、無駄に過ごしてしまいました……

そんな中で執筆したので、低クオリティ化しているかもしれませんので、ご注意を……

ムーギネーター様、鳴神　ソラ様、斬空様、あんぎゃーす様、緋水様、真王様、けびん様、装甲轟鬼様。ご感想、ありがとうございました！！！

#６１　襲来する転生者軍団。二人の思いは、“気に食わない”の六文字

――――――そして、とある兄妹（しまい）と、新たに現れた転生者達は、動き出す……ある男の、掌の上で……――――――

……青空広がる荒野……

普段なら、誰かはいる筈の荒野。だが、今この地には、珍しい事に、誰もいない……無人の地と成っている。本来ならば、荒野という世界は、誰もいない、静寂な空間のはずだ

［……フッ］

だが、その静寂も、ただ一つの変化で消え去ってしまう。そう、彼が……この荒野の主であるモノ……神を名乗る青年が、現れた

「……っと、さってさて、送り込んだ連中は、どうなっているかなぁ？」

［ヴヴヴヴヴンッ］

その男は、この地に来るや、さっそく手を空にかざし、空中に数枚のウィンドウを展開し、それらを注視しだした

「ふむ……あぁ、やっと付いたか。時間軸的に、あのイベントの

後、か……フッ、あの兄妹、いや、姉妹か。アイツらがいなくても、高町なのはやフェイト・テスタロッサに対し、フラグは結構建てにくいような気がするが……まぁ、俺としては、どうでも良いんだけどね♪」

［ヴツンッ］

そう言いながら、一つのウィンドウを消し、もう一つ展開していたウィンドウを注視する

「さて……アイツの起源、もうあとひと押し、と言った所か？」

ソコに映るのは、一人の女性であり男性の存在……転生し、男から女へと成った存在、グレイ・スティンの姿があった

「まさか、あの撃墜イベントが、こうも変貌するとは……あの妹にしては、良い判断をしてくれたよ。クックックックック」

笑いながら、そのウィンドウに映る存在……グレイ・スティンの姿を眺めながら、こう呟いき、表情が笑みへと変わる。狂喜と、慈しみが混じったような、歪な笑みを……

「そして……“高町士郎”。彼には感謝をせざるを得ないねぇ……」

あの時、なぜ彼が、高町なのはを救ったのか……それは、過去に彼が言った言葉があるからだ

「“もし、自分の娘に、何かあったら”……か。子を思う親の心は、他者をこんなにも蝕ませる結果に成ったとは……クックック

ックック。なんとも、皮肉を感じざるを得ないな」

まぁ、こちらとしては、ＧＪッ！！　と言いたい程の事だがな

「もはや、アイツの肉体はバケモノと成っている。そして、心も徐々に鬼へと成っている。あとは……“技”、だな」

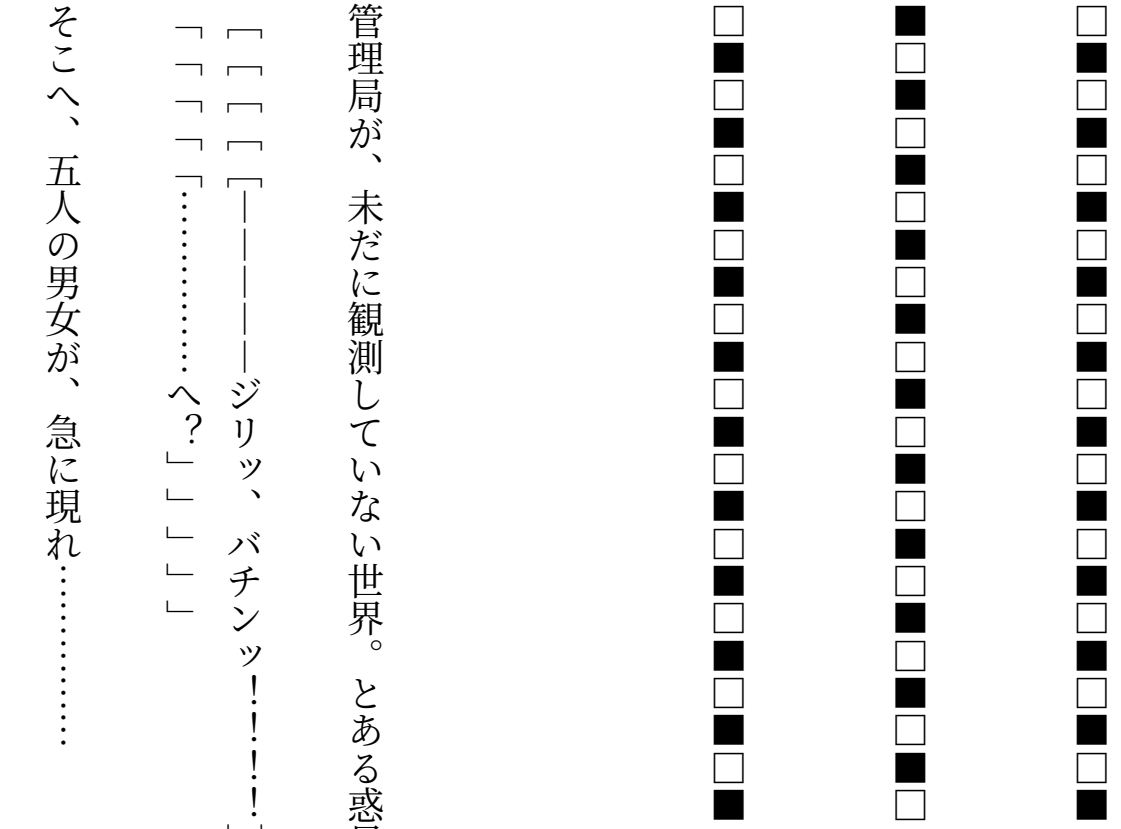
ふと、彼は何かを思案するような……そんな表情へとなり、そのまま目を閉じた

「“心”、“技”、“体”。この三つは、存在をカテゴリかする際に、結構重要な存在となる。どんな“心”を持っているのか、どんな“技”をするのか、どんな“体”をしているのか……今のアイツは、“心”と“体”がすでに“幻想”の存在のソレと成っている。あとは、アイツが“幻想”の技を身につければ……アイツは完全に、“起源覚醒者”となる」

すでにその為の術式は、あの体に打ち込んである。あとは、アイツがその存在を認識し、受け入れ、そして……

「クックックックックックック……もうすぐだ。もうすぐ、アイツの起源は目覚める……よもやそれは、守護者と呼ばれる存在だろうが、なんだろうが……止めることは出来ない……さぁ、その時、お前はどんな産声を出してくれるんだい？　グレイ・スティン……」

彼の、恍惚に満ちた表情と、狂喜に満ちた笑いが、その荒野の静寂を打ち破る……ただただ、無情に……



管理局が、未だに観測していない世界。とある惑星のその上空

「「「「「「――――――ジリッ、バチンッ！！！！！」」」」」」

「「「「「「……へ？」」」」」」

そこへ、五人の男女が、急に現れ……

「「「「うわァァァァァァァァァァァァァァァァァァッッ！！！！！？？」」」」

「「「「きゃあァァァァァァァァァァァァァァァァァァッッ！！！！！？？」」」」

地面に向かって、落ちていった。そんな命の灯が消えようとしている最中に、彼らはと言うと

「ちょっとまてやッ！！！　さすがにコレはねぇだろあのクソ神がァァァァァァァッ！！！！！！」
「う～ん……このままじゃ僕達、マヨネーズになっちゃうね」
「そ、それを言うなら、あの……ケチャップ、じゃないの？」
「そんなボケはどうでもいいから！！！　この状況をなんとかする方法を考えなさいよ～～～ッ！！！！」
「“まよねーず”と“けちゃっぷ”とやらがなんなんのかが知りたいが、今はどうやって地面との激突を避けるのかが先決だ！！！
下らん事を言っているなら、何か良い手を考えろ！！！」

などと、遥か上空１００キロ地点にて、このような口論を展開していた……その時

『おい仁哉ッ！！！　能力だ！！　“機動争甲”を使え！！！』
『虎太郎。“復活の秘法”で、“Ｘグローブｖｅｒ．Ｖ．Ｒ．”を出すんだ』
『ハジメ！！　あなたの力で、空間に足場を作って！！』
『天音！！　“ゲート・オブ・バビロン”から、“ヴィマーナ”を出しなさい！！！』
『夢乃ちゃん。空を飛ぶイメージをするんだ』
「「「「「？」」」」」

ふと、どこかから声が聞こえてきた。機械的な声であるが、どこか、人間味を帯びた、そんな声が……

「ど、どっから聞こえた？」
『おい仁哉ッ！！　腰！！　腰を見やがれッ！！！』
「は？　腰？……って、な、なんだこれ！！！？」

その声は、仁哉の腰に下げられた太刀から……

『虎太郎。左手の人指し指を見ろ』
「人指し指？……あ、なんかあった」
『なんかって、これはどう見ても指輪だろ』

それは、虎太郎の指にはめられていた指輪からも

「今の声……どこかで……っていうか、どこから？」
『何をしてるのよハジメ！！』
「ま……まさか、“赤夜叉”！！？」

それは、ハジメが常に握り締められていた刀からも

『ほら天音ッ！！！　早くしないと、またあの世行きよ！！！』
「あぁ～、それも悪く無いかもしれないけど……っていうか、良いかも」
『良くな～～～～いッ！！！！』

それは、天音の耳に付けられていたピアスからも

「あ、あの……だ、誰ですか？」
『それは、後でちゃんと説明するよ。だから、今は急いで。自分を、空を自由に飛び回る鳥だと、イメージするんだ』
「へ？　は、はい！！」

それは、夢乃の首に下げられていたペンダントから……

それぞれが、いつの間にか持っていた、または常に持っていた物から、発せられていた

「と、とにかく、“機動争甲”だな！！　えっと～……上谷仁哉ッ！！　“ガンダム”！！　いきまーすッ！！！」
［キュインッ、バチンッ！！！］

「“Ｘ（イクス）グローブｖｅｒ．Ｖ．Ｒ．（バージョン・ボンゴレリング）”」
［ボオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオッ！！！！］

「ヲン・キリキリ・バジュラ・ウンハッタッ！！！」
［ヴンッ！！！］
「ッ！！」
［スタッ！！！］

「“ゲート・オブ・バビロン”ッ！！　来なさい、“ヴィマーナ”ッ！！！」
［バチンッ！！！！］
「よっと」
［トンッ］

「鳥……私は、鳥に！！！」
［フワッ］
「ひゃっ！？……あ、で、できた～～～っ！！！」
『さすがだね、夢乃』

そして、それらから発せられた声に従い、全員が空を飛んだ

「す……スッゲェェェェェェェェッ！！！！　なんだコレ！！　マジでガンダムじゃんかッ！！！」
「へぇ、こりゃすごいな……」
「うわぁ……私、こんなモノを呼び出せるようになったの？」
「……どうやら、この“妖術”は、まだ使えるようだな」

「わぁぁぁっ！！　私、魔法使いになったみたい！！！」

その、超常の力の行使に、皆が歓声を上げる

『ふぅ。とりあえず、ゲームオーバーには成らずに済んだな』

「そういや、お前……いったいなんだよ？」

『俺か？　俺はお前の能力を管理するデバイスだよ。“ヴェステージ”だ！！　よろしくな、マイブラザー！！！』

「おぉ……俺専用のデバイスだったのか！！　なんか燃えるかもッ！！！」

仁哉が、己に専用のデバイスが与えられていることに歓喜し

「へぇ……能力の管理の為のデバイス、ねぇ」

『そうだ。あぁ、自己紹介が遅れたな。僕は“獅皇龍帝”だ。よろしく』

「あぁ……まるで、僕みたいだね」

『あぁ。君の性格を反映して作られているからね、僕は』

「へぇ」

虎太郎は、そのデバイスの事に感嘆を漏らして……

「っていうか、アンタもそうなの？」

『そうよ、天音。私は“アタラクシア”。よろしくね、マスター♪』

「な、なんか私っぽく無いんだけど……」

『そんなことは無いわよ。とにかく、私は天音の本質を元に、あの神様によって作られた高性能のデバイスなのよ』

「普通、自分で高性能って言う？　っていうか、アンタって、あの神様が作った物なの！？」

『そうよ。あの神様、あぁ見えて兵器の開発とか、そう言った事が

好きだからねぇ』
「へ……へぇ……」
天音は、そのデバイスの製作者の意外な一面を知った……
「お前は……“赤夜叉”、だよな」
『はい。あの神様によって、新たなにデバイスとして転生したんです。ちなみに、私のＡＩの基盤は、マスターの妹君、“クレバヤシ・スズナ”様を参考になされたようですが……』
「えー、あい？」
『あ、えっと……疑似人格、と持っていただければ。つまり、私はスズナ様と同じ、意思と心を持った、と思っていただければよろしいかと』
「……そっか」
ハジメは、己の愛刀の変化に、何か心を曇らせる……
「えっと……貴方、は？　私でもないし、かといって、私の知り合いでもなさそうなんだけど……」
『僕は、ちょっと特別と考えても良いよ。あぁ、そうだ。僕は“ヴォルケーノ”。改めて、よろしくね、夢乃』
「は、はい！！　こちらこそ、よろしくお願いします」
『ははは。そんなに堅くならなくても良いよ。これからは、一緒に行動をする仲、なんだから』
「……う、うん！！」
夢乃は、自身でも知人でもない、どこか心優しいデバイスに、明るく返事をした

「さってと……で、これからどうしよっか？」

そんな中、転生者軍団の一人である仁哉は、今後の事を考え出していた

「とりあえずさぁ、ここは常に乗っ取って、能力の確認云々をした方がいいと思うけど」

「そうだね。僕も、出雲さんの提案に賛成」

「俺もだ（この体になってからも、昔と同様の動きは、出来るのか、心配だしな）」

「私も！！　どんな事が出来るのか、試したい！！」

「うっし！！　そんじゃそうすっかッ！！！」

天音の提案に、全員が賛同。そして、しばらくの間、どこまで出来るのかを、何が出来るのかを、確認していた

□■□■□■

「……」

その一室にあるベッドの上には、ある一人の女性（ダンセイ）が、息をせずに、眠っていた……“グレイ・スティン”だ。息をしていないことから、生命活動を止めているのかと思うが、心臓は動いており、心拍数も安定している。いわば、死んだように、眠っているだけなのである

「ご主人様……」

「マスター……」

その隣には、高町なのは、月村すずかのマテリアルにして、彼女（カレ）の守護騎士である、“リュマ”、“ウィアク”の二人……と

「お兄ちゃん……」

以外にも、彼女（カレ）の妹、ビビ・スティンも、その場にいた

「……ッ」

「「「！！！」」」

「ッく……ん……」

と、その時だった。グレイ・スティンの眼が、ゆっくりと開かれた

「お兄ちゃんッ！！！」

「ご主人さま！！！」

「マスター！！！」

今まで、“付きっきり”で看病をしていた三人は、皆彼女（カレ）を呼ぶ時

の名称で、その言葉を待っていた

「妹……それに、リュマとウィアク……」

彼は、三人の様子と、自分の様子、そして周りを見渡した後、思案するかのように虚空を見つめ

「あぁ、そうか。なるほど……」

と呟き

「すまなかったな、心配を掛けさせたようで」

とだけ、言った……その、不自然な言葉を吐いた兄に対して、妹が突っ込んだ

「お、起きてから言うセリフが、ソレ？」

「どうでもいいだろう……思った事を口にしただけだ」

それに、別に俺の事なんて、お前が気にする程でもないだろうに……

「良かったです、ご主人様……」

「もう、心配いたしましたよ、マスター」

「……悪いな、手間を掛けさせた」

「いえ。私達は、貴方の守護騎士です。主の事を一番に思うのは、当然です」

「えぇ。私達の役目は、あなたを守り、補佐するモノです」

「……あっそ」

俺的には、押し付けられたようなモンだがな……

「とにかく、もう傷は大丈夫、なんだよね」
「あぁ……俺の事はもういいから、お前はお前のしたい事をやれ」
「今は、お兄ちゃんの看病がしたい」
「はあぁ？」

つい、素っ頓狂な声を、出してしまった……

今コイツ、なんつった？　俺の看病がしたい？　だと……

「妹として、兄の一大事に、他の事なんて出来る訳ないでしょ？
だから、今日はお兄ちゃんの看病をしてる。今まで、私の我儘聞いてくれたお礼も兼ねて、ね」

……家族、か……

「……仕事があるんじゃねぇのか」
「有休を取ったから、今日一日は暇なの」

……なんで、そこまでする……お前にとって、俺はそんなに大事な奴なのか？　仕事よりも……お前が好きなアイツらと一緒にいられるから、仕事を頑張っているんじゃねぇのか？　それを休んでまで、どうして、俺なんかを……

「とにかく、今日はつきっきり」
「……はぁ。ウィアク、コイツを締めだせ。そんで、ソイツを今日一日、フッケバインの中で大人しくさせてろ」
「ほえ！！？　Σ（゜д゜）」
「は～い、マスター♪　ほら、行きましょう、妹様」

「ちょ、ちょっと！！　その引っ張り方止め、イダダダダダダダダダッ！！！！　か、髪を引っ張らないでエエエエエエエエエ～～～ッッ！！！！！！！！！」

［ウィーン］

……ふぅ、まったく、あんな奴がいても、落ち付く事が出来ん

「ご主人様、リンゴを剥きましたが……召し上がりますか？」

「いらん。余計な気遣いはするな」

「分かりました。ですが、お気が変わった時が有るかと思いますので、こちらに置いておきます」

［コトっ］

そう言うと、ベッドの隣にあった机に、綺麗に剥かれ、均等に切り分けられたリンゴが置かれた。確か、コイツは料理が出来るんだったな

「……リュマ」

「はい、なんでしょうか」

「俺がやったことは、正しかったのだろうか……」

「……私のオリジナル、“高町なのは”の撃墜の阻止、ですか……」

「あぁ」

俺は、コイツとウィアク、そして八神と剣の騎士のマテリアル、ディアとヴィエーガの四人にだけ、俺達の事を、全て話してある。この世界が、“魔法少女リリカルなのは”というアニメの世界だと言う事も、俺達が、そのアニメが放映された世界から来た転生者だと言う事も……原作の一通りの流れも……俺が知る全てを、話してあるのだ……

「あの撃墜、妹の奴は、阻止するか否かを悩んでいた。だが、結果俺は、阻止をした」
「はい」
「だが、あの撃墜が無ければ、今後の未来に、何か悪影響を与えかねないのでは無いのだろうか」
「……可能性としては、有ります。いえ、有りまくりです」
「……やはりか」

あの撃墜には、意味があったのか……

「おそらくですが……このまま彼女を放置しておけば、間違いなく無茶をし……」
「挙句の果てに、自壊、か……」
「はい。それが考えられます。今現在、彼女の体にはかなりの負担が掛かっています」

高町のマテリアルだからこそ、言える言葉だった。おそらく、リュマが生み出される時には、もうすでに体にはかなりの負荷が掛かっていた、と言う事にもなる

「今は、あの妹様からの力の供給によって、その負担が軽減されているにすぎません。いくら肉体に強大な力の影響を受けたとしても、いづれはそれが、仇と成る時が来ます」
「……」

妹の奴は、おそらくそれを知っている。だが、奴自身、それが許せないのだろうな

傷つけたくない。後の事を知っているが故に、アイツはそれを回避

させるべく、今動いているのだろうな……未来に起こる事を知っていれば、やるべきことはおのずと分かって来る。だからアイツは、それを防ぐため、避けるために、するべき事、やっておかねばならぬ事を、やっているのだろう

だが……それは正しいのか？　原作の通りに進めなければ、奴らは子供のままだと、俺は思う。このままでは、苦を知らず、他者に縋らせる事しか出来ぬ、愚人へと成り果てるだけだぞ……

「（いや……それが目的、か）」

己の腕の中で、己が作りし楽園の中で、生きてくれればいい。その代わりに、自分が全ての苦を背負う、と……

「……リュマ」
「かしこまりました」

俺は、ただ一つ、コイツの名を呼んだ。だが、それだけで、コイツはなんのことかが、理解出来たらしい

「何をするべきか、分かっているな」
「はい。高町なのはを、完膚なきまでに叩きのめし、己の実態を知らしめさせろ。ですね」
「あぁ。どんな事をしても構わん、徹底的にやれ……出来るな」
「ご主人様のご命令とあらば……このリュマ、いかなる事もなさいます」
「頼むぞ」
「かしこまりました」

と言って、アイツはこの部屋から出ていった……おそらく、今頃

俺の事で落ち込んでいる高町に発破を掛けて、やるだろうな……
ま、別にもういいか

……気付けば、やっと俺は、一人になれていた

「……はぁ、なんでこんな事を、してんだろな」

なんで……俺はこんな場所に、入るんだろな……

「……はぁ」
「おいおい、ため息なんかついちゃって。それも、なんだかその格好で言っていると、妙にエロっぽく感じてしまうなぁ♪」
「……」

こんな時に、こんな奴が来るとはな……

「なんの用だ、クソ神」
「なんのって、お見舞いに決まっているじゃないか」
「冗談を言うのも大概にしやがれ」
「あら、冗談だってばれちゃったの？　まぁ良いけどw」

冗談だったのか、アレ……

「まぁ、別にそれはどうでもいいとして……あ、リンゴじゃん。言っただきま～す」
［パクッ］

……人のモノを勝手に食うな

「う～ん……なかなか美味いリンゴじゃん」

「おい。それは俺のだぞ」
「正確に言えば、君の手下が、君の為に剥いたリンゴ、だけどね」
「一緒だろ、んなの」
「ま、それもそうだなw」
［パクッ］
って、何気にもう一個食ってんじゃねぇよ

「ムグムグ……ふぅ。にしても、君も中々無茶をするねぇ。それで、他人には無茶をさせるなだって？　矛盾も良い所だ」
「別に……どうせこの体は、無茶してもそんなにダメージにはならんからな」
「そりゃぁ当然だね。なにせ、“心臓を貫かれようが、脳味噌がグチャグチャにされようが、その体は‘無限に再生’するんだからなぁ”」
「……」
あぁ、そうだったな……もはや俺の体は、尋常なモノじゃなくなっている

――――“無限再生プログラム”――――

「かつて、“夜天の魔導書”が“闇の書”と呼ばれる所以だったプログラム……それは普通では破壊する事が不可能で、“リインフォース”救済の際、処理に困るモノ。そして、お前が取ったそれの処理はと言うと……」

「“己の中に、容れる事”……」

つまりそれは、俺自身が、あの“闇の書”と、同じようなモノに成る、と言う事を表す

「あんだけ強力な再生システムを、よもや肉体に作用させるとは……おかげで君は、プログラムのコアさえ残っていれば、腕だろうが足だろうが、頭だろうが……君の中に組み込まれているデバイスだろうが、再生が可能と」

……それじゃぁ、完全にバケモノだな、俺は……

しかもそのプログラムは、タマモが作った“アヴァロンシステム”という新たに作られた防御プログラムによって、完全に保護されている。おかげで、俺は死ぬ事が許されない体に成った……

「そして、老化した細胞すら、捨て去り、また新たな若い細胞を生みだす……簡潔に言えば、お前の肉体は“老いる事が無くなった”」

……つまり、“不老不死”の肉体、だとでも言うのか？

「その通り♪　まぁ、まだ体がそれに慣れていないのか……完全な不老不死、と言う訳ではないようだが……まぁ、いいだろう。いづれ、その肉体は幻想のモノとなるのだから」

“不老不死”……確かに、人間にしてみれば、コレほど幻想的なモノは、無いだろうな……

「もはや幻想の存在としての条件は、すでに揃いつつある……あ

と少しで、君は完全に起源を覚醒し、人間では無くなる」
「……（それが、鬼だっていいてぇのか、コイツは）」
笑みを浮かべながら、コイツは俺がたどる末路を、謡っている……
…その光景は、何度も見飽きた
「それでも、俺は人だ……こんな肉体に成ろうとも、俺は……
……」
「クックックックックッ……あぁ、それでも構わないよ。だ
が、何時までそう、強がって入られるのかなぁ」
「……俺が死ぬ時、までだ」
「ほう……クックックックックックックックッ……あぁ、
分かった。楽しみにしてるよ。君の、無様にあがく、姿をね」
［フッ……］
そう言い残し、アイツはいつものように、風となって、消えていった
「……クソ、相も変わらず、いらつく奴だよ……」
あんなのが神様、か……
［フッ］「あそうそう言い忘れてた」
「ッ！！？」
すると、いきなりアイツが目の前に、再び現れた
「い、いきなりに目の前に出てくんなッ！！！」
「別にいつもの事じゃねぇか。それとも何か？　ちょっと驚いちゃ
ったとか？　おいおいグレイちゃんってば、そんな可愛い所がある
なんて」

「五月蠅い黙れ殺すッ！！！」
「はいはい……んで、伝えておきたい事があってね♪」
「……さっさと言え」
「おう……俺から一つ、試練を与えよう」
「試練？」
「あぁ。試練だ……今後の君の人生を左右する、重大な試練だ。君はそこで、ある選択を強いられる……今後、永遠に歩むべき道の、最後の選択を……」
「……」
永遠に、歩める道……それはつまり、人の道か、鬼の道、か……つまり、それら事、だよな……
「これで最後だ。これからどうあがこうとも、その選択の後は、もう二度と、もう一つの道へと、歩めなくなる」
「それはつまり、人の道にも、行けると言う事か」
「さぁ、それはどうだろなぁ……」
「……」
「とにかく、君の命運を決める大事な試練だ。充分に、気を付けてくれよ……クックックックックックックックッ……」
「フッ」
そうして、再びこの部屋から消えていったアイツを見届け、ベッドに背を傾けた
「……試練、か……」
そう呟いた時

『主ッ！！』

ふと、右腕の手の甲から、女性の声が聞こえる……俺の体に宿るデバイスの内の一つ、“タマモノマエ”だ

「……どうした」

『ご報告いたします。管理局が観測していない世界にて、強大なエネルギー反応を五つ、感知いたしました』

「……」

なるほど。どうやらそれが、あのクソ神が言ってた試練、って奴か

『映像の入手に成功いたしましたが、いかがなさいますか？』

「……タマモ、ウィアクに連絡しろ。あの馬鹿妹を、こちらに呼び戻せ、と」

『了解致しました』

□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■

タマモの連絡を受けて、フッケバインから緊急転送で、妹であるビビ・スティンは、グレイ・スティンの病室へと戻ってきた

そして、ことの次第と、タマモが映し出したモニターを見せた後…
……ビビは、こう呟いた

「こいつら……間違いない。私達と同じ、“転生者”だよ」

「……やはり、な」

モニターに映し出されたモノには、何やら俺が見た事あるようなモノが、ちらほらと現れていた

「これは……“ストライク・フリーダム”と“”。それに、こっちは“グレンラガン”に“Xグローブ”。それに、あれは“影分身の術”と、“ガオガイガー”？　それに、アレはどう見ても、ネギまの“ネギの杖”だし、左手に持っているのは、間違いなく“約束された勝利の剣”。それに、この魔法は、テイルズの“セイクリッド・シャイン”……間違いない。こいつ等は、転生者としか思えない」

ビビは、モニターに映し出された数々の力を、全て当てた。グレイは、その様子に嘆息しつつも、そうだったなと、納得していた

「それに、アイツらのやっている事は、例え奴らが転生者じゃなくても、明らかに常軌を逸脱している……危険因子であるのは、変わりない」

今、自分が所属している組織的には、こいつ等は捕らえるべき対象、であると、判断した

「「……」」

そして、そのモニターを見つめながら、互いに沈黙し合った……

……

……まさか、転生者なんて奴が、来るなんてね……まったくの想定外だったわ。世界の修正力に対しては、まだ対処が簡単だと持っていたけど、まさかこんな奴らがくるなんて……予想だにしなかったわ

「（しかも、男が三人。ほかの二人は可愛いし、結構好みな子、だけど……）」

やつらは転生者。そして、モニター越しではあるけど、奴らが今思っている事が、まるで自分のことのように分かってしまう

「（アイツらは、はやてちゃん、なのはちゃん、フェイトちゃんを、自分のモノにしようとしている）」

モニターに映る彼ら……特に、そのウチの二人の表情は、自分がこの世界にやってきた時の顔と、同じ表情をしているのである。自分の嫁に、生で会える。触れる所まで、来ている、と言う事に、喜びを感じ……

「（……触れる……アイツらに、私のはやてちゃん達が、触れられる……）」

［ゾワッ！！］

そう考えた瞬間、身の毛が弥立つような、そんな気味の悪いモノを

見るかのような目で、モニターに映る五人組を見据えた……

そして、それと同時に、過去に聞いた有る言葉を、思い出していた

――――――欲しいものは、奪えば良い。なにから奪えって？　それは……そうだな。未来に出来る、彼女達の男から、とでも言おうか――――――

「――――――――――」

約一年前、あの神様から言われた、あの一言を……

その瞬間、私がこの転生者達に抱く思いが、興味の対象から、急激に変わっていった

「（転生者、か……）」

なるほど。そう言う事か……

「（こいつ等が、あのクソ神が言っていた、試練、か……）」

つまり、こいつ等をどうするかで、俺の命運が決まる、という事か

……

「……（こいつらも、あのクソ神の口車に乗せられたのか…

……いや、違うな）」

こいつ等は、おそらく自分達の意思で、この世界に来た、と言う事だろう。この、妹と同様に……

「……ッ！！」

なんでだよ……なんでこんな訳のわからないのことに、足を突っ込むんだよ。手を出すんだよ……どうして、普通の生活を捨ててまで、こんな訳の分からない場所に……

「（なんで……どうして、こいつ等はッ！！！！）」

沸々と、俺のこの五人に抱く感情が、変わりつつあった。あの神に踊らされているということへの同情から、まったく別のモノへと…

……

そして、この兄妹（しまい）は、まったくの同時に、こう呟いた

――――――“気ニ食ワナイ”――――――

と……

「……ねぇ、お兄ちゃん」

「あぁ……タマモ。俺達を、そいつらのいる世界へ」

『畏まりました。転送ゲート、開きます。時空座標、算出……完了。ターゲットから数キロはなれた空中に転移致します。転移後、直ぐに飛翔して下さい』

「分かった」

『それでは、転移します』

［ヴウゥゥゥゥンッ……バシュンッッ！！！！！！］

そして、二人の兄妹（しまい）は、新たに現れた五人の転生者の元へと、向かって行った……

＃６１　襲来する転生者軍団。二人の思いは、“気に食わない”の六文字（後書き）

次回も、転生物語を投稿致します。お楽しみに

＃６２　転生者兄妹と、５人組の転生者、邂逅と激突（前書き）

どうも、テンション檄落ち中のリィーンです

今日から二泊三日、学校の行事で研修に行く事になりました。出席しないと、進級に関わるので、行くの一択しかないです……行きたくね～～～ッ！！！！

しばらくパソコン、それとケータイすらからも遠ざかる三日間……あぁ、テンションが下がる一方です

愚痴をこぼしてしまい、大変申し訳ありませんでした。では、せめて行く前に、更新だけはしておこうかと思いますので、どうぞごゆっくり、ご覧下さい

鳴神　ソラ様、斬空様、真王様、ムーギネーター様、緋水様、あんぎゃーす様、ｅｖａｎｇｅｌｉｎｅ様、夜桜様、けびん様。ご感想、ありがとうございます！！！

#６２　転生者兄妹と、５人組の転生者、邂逅と激突

――――――そして、とある兄妹（しまい）と、新たに現れた転生者達は邂逅し、激突する……ある男の、思い描く、シナリオ通りに……――――――

……管理局が、未だに観測していない世界。とある惑星のその上空

［ズドオオオオォォォ

動いてくれるなぁおいッ！！！！」
『当然だろ！！　なんて言ったって、俺が細かく修正してやってんだからなッ！！！』
「おぉ……なんか良く分からないが、なんだか燃えてきたァァァァァァァァァァァァァッッ！！！！！！」
『その意気だぜッ！！！　仁哉ァァァァァァァァァァァァァッッ！！！！！！』

そのうちの転生者の一人、“上谷仁哉”は、“アルケーガンダム”の装甲を身に纏い、そのデバイス“ヴェステージ”の補佐の元、自律稼働兵器の“ファング”を、周囲に飛ばしていた。その様子に、その使い手はご満悦で、己のデバイスと共に、歓喜のあまりに叫んでいた

『なんなんだ？　あのハイテンション状態は』
「あぁ、気にしなくていいよ。バカヤにとって、いつもの事だから。近所迷惑顧みずに、アイツは絶叫する癖があるから」
『何だそれ……だがしかし、“ヴェステージ”にまで、あんな叫び癖が付いてしまったら……』
「耳触り、でしかないよね」
『そうだな……』
「『はぁ……』」

その様子を見ていたのは、仁哉の友人にして、転生者の一人、“竜ヶ崎虎太郎”と、そのデバイス、“獅皇龍帝（シコウリュウテイ）”である。彼の人となりを知る虎太郎は、その友人の叫びそするような人物がもう一人増えたことに、頭を抱えていた……

「ハァッ！！！」
［ブンッ！！！］

「デヤッ！！！」
［ブンッ！！！］
「……ッ！！！！」
［チャキッ］
「ウオォォォォッ！！！！」
［ブンッ！！！！！］
「……ふぅ」
『お疲れ様、ハジメ』
「なに、これくらいで疲れることは無いよ、“スズナ”」

その隣では、彼らとは違う世界からあの神に選ばれ、転生を果たした青年、“ハジメ・クレバヤシ”が、己の愛刀、“赤夜叉（アカヤシャ）”を振るっていた。かつて、妖魔退治を生業としていた彼は、新たな体を慣らす為に、素振りをしていた

ちなみに、彼が“赤夜叉”を“スズナ”と呼んでいるのは、赤夜叉が彼の生き別れの妹、“スズナ・クレバヤシ”の人格をコピーされて生まれた存在だから、と言う事らしいから、彼がそう呼んでいるのだ

「ラス・テル　マ・スキル　マギステル！！！」
『ラスト　テイル　マイ・マジック・スキル・マギステル』
「“契約に従い我に従え炎の覇王（トゥ・シュンポライオンディアーコネートホモオユラネ・フロゴス・ウーラニオーノーン）”」『“契約に従い我に従え高殿の王（トゥ・シュンポライオンディアーコネートペモタ・レウサントーン・ピュール・カイ・ティオン・ハ・エペフレゴン・ソドマ・エビゲネーテートー・アイタルース・ハマルトートウス・エイス・クーン・タナトゥ）”』
「ほとばしれよソドムを焼きし火と硫黄」『来たれ巨神を滅ぼす―燃ゆる立つ雷霆≪ケレウネ・ホス・ティテナース・フサイレイン≫』
「罪ありし者を死の塵に……」『百重千重と重なりて走れよ稲妻（トラブサトー）』
「行くわよ！！　アタラクシア！！！」
『オッケー！！　マスター天音！！！』

「“轟き燃える天雷（キーリプル・フロゴーシス）”ッッ！！！！！！！」

［ズドオオオ

否。狂ってはいない。これが、彼女の本質であった。あまりにも平凡で、刺激の無い現代で生きてきた彼女にとって、この力はまさに、その平凡さを吹き飛ばす刺激となりえたのだ

ちなみに、先ほど彼女が放った魔法は、“千の雷”と“燃える天空”の二つの大魔法を組み合わせた、彼女自身のオリジナルであり、自分とデバイス、その二つが同時に詠唱を行って放つ、極大魔法であった

「狂気と強欲の水流、旋嵐の如く逆巻く……」
『ディレイ。夢乃、次の魔法だ』
「は、はい！！　宙に放浪せし無数の粉塵、驟雨となり大地を礼賛す……」
『ディレイ。夢乃、最後の呪文だ！！』
「はい！！　天光満つる所に我はあり、黄泉の門ひらく所に汝あり、出でよ！！　神の雷……ッ！！！」
『ディレイ！　行くよ、夢乃！！！』
「はいッ！！！」
「『“インディグネイト・タイダルスウォーム”ッ！！！！』」

「ズガガガ

「……す、すご～い……」
『へぇ。たったあれだけのサポートで、ここまで上手く魔力を練って、的確に目標を撃ち抜くなんてね』
「へ？　こ、これって……そんなに凄い事なの？」
『あぁ。初めて魔法を使うにしては、純粋に称賛に値するよ』
「そ、そう……ありがとね、ヴォルケーノ」
『いいよ。僕は、君のデバイスだから、ね』

そして、もう一人の転生者、寿夢乃も、自分が使える魔法の力を、試していた。それも、デバイスの指導の元、元の魔法を色々と組み合わせて、自身オリジナルの魔法を紡いでいた。先ほど放ったのは、彼女のデバイス、ヴォルケーノが教えた融合魔法の一種であり、三つの奥義クラスの魔法を同時に放つ代物である

そんなこんなで……この世界に新たに現れた五人の転生者達は、己の思うがままに、その身に秘められた能力を、行使していた……まるで、新しいおもちゃを与えられた、子供のように……

『『『『『……ッ！！！？』』』』』
「？　どうした、ヴェステージ」
「アタラクシア？」
『この感じ……攻撃が来るわッ！！！』
「「「「「！！！？」」」」」

その子供たちをしつけるかの如く、その五人に向けられた何かを察知したデバイス達は、己のマスター達に、その存在の登場を知らせた……

□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■

その五人がいる場所から、遠く離れた空域

［ヴウゥゥゥゥゥンッ……バシュンッッ！！！！！！］

「「……」」

その空域に現れたのは、二つの影……

一人は、長い黒髪をし、紅と金色の虹彩異色、そしてあまりの長身を持つ女性（ダンセイ）……転生者兄妹（しまい）の兄（あね）、グレイ・スティン

一方、もう一人は、シルクのように真白な髪に、蒼と銀色の虹彩異色、そして、隣の女性より小柄な少女……転生者兄妹（しまい）の妹、ビビ・スティン

……既に、この世界へと来ていた転生者である、スティン兄（し）妹（まい）の影が、この世界に落とされた

「……タマモ、奴らはどこにいる」
「ベアト、アイツらはどこ？」

その二人が、己のデバイスに声を掛けた

その声には、膨大な殺気と敵意、そして怒りが込められており……瞳は、猛禽類のそれを連想させる程に歪み……表情は、氷河すらも温いと感じさせるほどに、冷徹になっていた……

……もはや、この二人の表情は、“人間が出来る筈も無い”ほどに、酷くなっていた

『7時の方向、距離にして5キロの場所、だな』
「ありがと、ベアト……それじゃぁ、殺ろっか、ワルギリア」
『招致した、ビビ』
［スッ］［ジャギギギギギギッ！！！］

ビビの声に従い、彼女が手を前にかざすと、それを中心に、七枚のプレートであるワルギリアが砲身のような形状へと変化し、その攻撃を支援すべく、動いた

「……俺達もやるぞ、タマモ、シュテン、スウトク」
『了解でござるよ！！　我が宿り手よ！！！』
『うむ……陳の力、思う存分、振るってやろうぞ』
『ですが、相手は転生者です。反撃など、充分に注意をなさってください……（それに、マイスターが遣わした相手です。並大抵の攻撃ではすまないかと思いますが）』

「（分かっている……だが）」

グレイの起源、“幻想”の覚醒を望む彼……あの神にとって、おそらくこの襲来は、自身を更なる絶望へと叩き落とす為に用意したモノであると、彼（かのじょ）は確信していた。アイツらと出会う事で、自分がどれほど異質な存在に成っているか……どれほど、かつての姿とかけ離れたモノになっているのか……それを認識させるために、かつての自分と同じような連中を、送り込んだのだと……

……彼（かのじょ）は、そう考えていた

「（だったら、あのクソ神に、何か吹き込まれている可能性はある）」

俺を殺せ、とか……おそらく、そういった類いの事を言われている。そうに違いないと……

「（アイツの思い通りになんて、成ってたまるか）」

［グッ］

食われるのならば、逆に喰らえばいい……鬼へと成らず、人のまま、アイツらを追い払えば良い……そういった思いと共に、彼（かのじょ）は腕を虚空に伸ばし、その転生者達の場所へと向けた……

「チャージ開始」

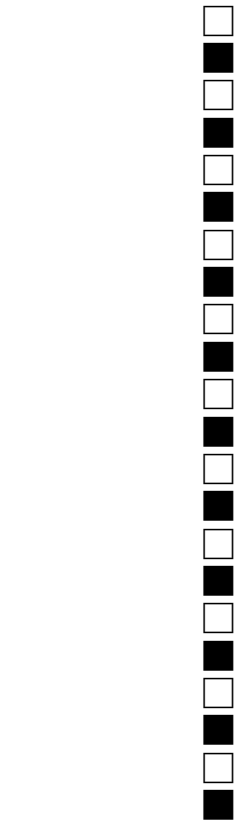
『はい、チャージを開始します』

［キュイィィィ

前へと向けられたビビの手に、彼女の魔力が収縮され始め、さらにそれは、収束されたワルギリアによって研ぎ澄まされ……悪魔の名を冠する刃へと、変わって行く……

「ッ……ヴウウウッ……！！！！」

［ギュイィィィ



［……キラッ］

「「「「「？」」」」」

「な、なんだ、あの光」

『アレは……砲撃魔法の！！！　アタラクシアッ！！！』

『分かってるわよヴォルケーノ！！！　天音ッ！！“全て（アヴァ）は遠き理想郷（ロン）”を出しなさいッ！！！！』

「はえ！！？　な、なんでよ！！！」

『いいから！！　早くッ！！！』

「ッ～～～、わ、分かったわよ！！！“全て（アヴァロン）は遠き理想郷”」

［ヴンッ！］

デバイス達の警報に従い、最硬を誇る防御系の宝具……究極の聖剣を納める為の鞘であり、究極の加護の力を有する宝具……を展開した

［……ゴオオオ

その鞘を取り出し、自分達に向かってきた二つの光から身を守るように、その鞘の後ろに向かった五人。そして、その光が鞘に直撃した直後、強い衝撃が彼らを襲った。が、なんとか無事に、彼らはその衝撃をやり切った

「……な、なんだったんだ？　今の……？」

「さ、さぁ……」

『砲撃魔法、だな』

「「え？」」

『あぁ、間違いないな』

転生者の一人、仁哉が、あの光の事に疑問をもち、声に出していった。それに答えたのは、彼の親友のデバイス、獅皇龍帝であり、それを“砲撃魔法”だと告げた。それを聞いた仁哉と虎太郎の二人は、その意外な名称に、素っ頓狂な声をだした

「「ほうげき、魔法？」」

『光線を放つ魔法の事だよ。簡単に言えば、レーザーを放てる魔法、ってところかな？』

「レーザーを？」

『そうね……ハジメに分かりやすく言うなら……妖力を練り上げて、質量を持った光の柱を放つ術、って言うところかな』

「……なんて、芸当だ……」

ハジメと夢乃は、聞き慣れない単語の登場に、混乱仕掛けた。が、二人のデバイスがそれに関する説明をしてくれた

「にしても、“全ては遠き理想郷（アヴァロン）”じゃないと防げない攻撃って、どんだけよ！！」

攻撃を防いだ功労者である天音は、自身が受けた攻撃の、測りきれない力を感じていた……自分が展開できる防御の中で、トップであると言える程の防御壁……それでなければ、防ぎきれないと感じさせるほどの力を持つその力は、脅威しか、彼女に抱かせなかった……

「「……バシュンッ！！！」」
「「「「「ッ！！！！？？」」」」」

と、その攻撃に関して、様々な思考を張り巡らせている五人の前に、ある二人の女が、現れた……

「「……」」

この世界へ、彼らよりも先に来ていた、転生者の二人……グレイ・スティンと、ビビ・スティンの、二人だった……

「「……」」
「「「「「……」」」」」

その空域に、七つの影が対立し始めた……

片方は、二人の影……人の道から外れかけそうになっている……又はもはやヒトでは無くなってしまっている二人……転生者兄妹、グレイ・スティンとビビ・スティンの二人……

もう片方は、人の世界から、あの神によって選ばれ、この世界へと舞い降りた、五人の転生者……転生者の集まり、上谷仁哉、竜ヶ崎虎太郎、ハジメ・クレバヤシ、出雲天音。そして、寿夢乃の五人だった

「おい！！　さっきの攻撃、お前らの仕業か！！？」
「「……」」
「ッ、おい！！！　答えやがれッ！！！」
「待て仁哉。そう熱くなるな」
「だけどよッ！！！」
「確証も無い事を言うなって事だよ」
「ッ……攻撃が防がれた直後に現れたんだから！！　コイツらのせいに決まってるだろ！！！」
「ただの偶然かも知れないわよ？」
「グゥ……」

気が立っている仁哉を、虎太郎とハジメ、天音の三人が宥め、そして残った夢乃はそこに現れた二人に対して、謝礼をした

「すみません、私の友達が変な事を言って、御免なさい。不快な思いをさせてしまって、すみませんでした」
「「ッ」」［ピクッ］

その言葉に、二人は反応した

「そう……そう思ってくれたのなら……“消えて欲しい”んだけどね」
「「「「「ッ！！！？」」」」」（ゾクッ！！！）

口を開いたのは、ビビだった……その言葉に、ありったけの冷たさと鋭利さ、殺意を織り混ぜて、五人に対して言い放った

「……」

対するグレイは、声に出す事無く、ただただ、睨むだけだった……妹と同様、冷たく鋭い、その瞳を釣り上がらせて……

「消えて、欲しいって……」

「じゃぁ、やっぱりさっきの砲撃は、お前らがやったのか！！！」

「えぇ、そうよ」

「「「「「ッッ！！！！？？」」」」」

聞いた途端、五人の表情が凍りついた。あの、人を殺す破滅の光は、自分達を確実に狙っていたと言う事になるから……だが、なぜ？　どうして自分達を殺そうとした？　その疑問が、彼らの頭中に浮かぶ

「どうして、僕達を……？」

「どうして？　決まってるじゃない。アンタ達が、“転生者”だからよ」

「「「「「ッッッ！！！！！！！！？？？」」」」」

さらに、五人は驚愕した。コイツは、自分達の事を知っている。まるで、自分の事のように、知っていたのだった……だからか、突如現れた存在の正体に気付いた

「まさか……アンタ達が、あのイケメンな神様が言ってた……この世界に既にいる転生者、だって言うの？」

「「！！！！！！？？」」

天音が、その気付いたことに答え、確認のために、二人に問いかけた

「えぇ、そうよ」

「……あぁ」

返ってきた返答は、肯定……隠すつもりもなく、ただありのままに、真実を伝えた

「……は、ハハハハハッ……へぇ、なるほど。アンタ達が、俺達のセンパイって訳か」

その返事に反応したのは、仁哉であった。彼は、相手が一方的に向けている殺気に対し、なんの苦悶の表情を見せる事無く、二人を見ていた

「（へへ、転生者が先にいるって聞いて、ひやひやしてたが……なんだ、二人とも女かよ……やったな、竜虎）」

「（そうだね……確かに、良かったかもね。男だったら、すでにフラグを作られていたかもしれないけど……これなら、問題はない、かな）」

念話で会話をし合い、お互いに安堵していた。もし、転生者が男だった場合、すでに自分達の女神様が取られていたかもしれないと思っていたからだ。そんな、彼らの心配は、杞憂に済んだ……

だが、それは対立している相手の、異常な性癖の事を、考えていなかったから、出てきた結論だ。実際は、すでにフラグどころか心身ともに、彼らの女神達は、目の前のショウジョに、奪われているのであった……

「……」

そんな呑気な事を考えている馬鹿二人に対し、ハジメの胸中は、緊張していた

「（なんだ、この二人は……アイツら、人間なのか？　気配が……あの二人から放たれている殺気は、人間のソレではない。まるで……“妖魔”ッ！！！）」

魑魅魍魎が跋扈する異世界の出身である彼は、現れた二人が放つ異常な程の殺気を感じ取り、警戒していた。彼女達が放つソレが、自身が討滅の対象として斬り捨てていったバケモノ……“妖魔”が放つ妖気に似たモノであったからだ。その時だった。彼はこの世界に来る原因となった、ある男の言葉を、思い出していた

――――実を言うと、ある世界。まぁ、君達が転生される先の世界だがな。その世界に、“ある異変”が起きようとしていてね――――

「（まさか、こいつ等が、その異変の元凶と成りうるのか……？）」

充分に、考えられる事だった。こんな、人の形をしている、“妖魔”に似た何かは、絶対に異変の中心となりえる。そう、確信めいた

感情が浮かんだ。故に、彼はその二人に対して、最大限に警戒のレベルを引き上げ、すぐに刀を抜き放てるよう、そして、“瞳の色”を、漆黒から“紅”へと変色し……戦闘準備をしていた

「……な～んか、感じ悪くない？　アイツら」
「え～っと……その……わ、私、は……」

一方、新たな転生者達の女子組、天音と夢乃は、互いに横に並び、自分達と同性の二人を見ていた

「それにしてもさぁ、あの二人、良く見ると美人よねぇ……な～んか、妬ましくならない？」
「それを言うなら、天音ちゃんだって美人さんだよ？」
「あら？　お世辞のつもり？」
「ちち、違うよ！！　本当にそう思うよ」
「ありがと。でもまぁ、アンタも可愛いけどね」
「ふえ！！？　か、可愛いって……からかわないでよ天音ちゃ～んッ！！」
「からかう気は、無かったんだけどね～♪」
『なんだか、微笑ましいわぁ♪』
『一応、今結構ヤバい状況だと、僕は思うけどね』

その二人は、その転生者達の容姿について話し合っていた。その会話は、小さくガッツポーズをする仁哉と虎太郎、準戦闘態勢をしているハジメと違い、なんとも穏やかなモノだった

「（だけどさぁ……なんかあの二人、見てても嫌な感じしか湧かないわねぇ）」
「（あの二人……確かに綺麗、だけど……なんだか、怖

い）」

そんな事を話しあっている中であっても、天音と夢乃は、その二人に対し、負の感情を、抱いていた

そして、そんな転生者達と対立している二人、グレイとビビはと言うと……

「「（（……やっぱり、“気に食わない”）））」」

と、思っていた

「（特に、あの二人……男ってだけでアレだけど、あの二人の表情……）」

大方、自分達の意中の相手に、未だフラグが建てられていない事に、安堵しきっているに違いない。そう、考えていた

「（フフッ……悪いけど、あの子達の中の誰かは知らないけど、アンタ達が想っている相手は、もう私のモノよ……そして、私以外、その心に触れる事なんて、出来やしない状態になっている……）」

自身の一部……それを体内に埋め込み、それはもう相手の心と完全に同化を果たしている状態……もはや彼女達は、ビビ以外には触れる事を許さぬ、高嶺の花となっていた

「（それでも、こいつ等は必ず、目障りな奴らになる……）」

もし、こいつ等がその事を知れば、私から彼女達を奪おうと動くだろう。非人道的な事に、反発をするハズ。花にまとわりつく、虫のように……せっかく花開いた白百合に付く、一点の濁りのように……

「（ヤッパリ、コノバデイカシテオクワケニハ、イカナイワヨネ……）」

ビビの心が、真っ白になるほどの純粋な殺意に、完全に染められた

「……」

そして、グレイ・スティンもまた、目の前の連中に対して、良い感情を持てなかった

「（やはり、こいつ等はあのクソ神の手先か）」

自身が、今最も嫌うモノ……彼（かのじょ）の運命を、大きく狂わした相手……その男が、自身を更に狂わせるために送り込んだ軍勢……

「（俺達の事を、アイツから聞いたような発言をした……なら、確実にこいつ等は、俺達を倒しに来る）」

異物だのなんなの……それが引き金となって、俺達を撃つ銃弾となるだろう

「（ナラ……ウタレルマエニ、コロスシカネェナ……）」

グレイの心も、真っ黒な敵意をむき出しにし、眼前の相手を、更に睨んだ

だが

「（……なんで、こうなったんだろな？）」

彼らを更に睨んだ瞬間、そんな気持ちが、ふと、湧き始めた。それは、なぜ自分が、こんな世界で生きているのか……なぜ、こんな目に、会っているのか……

「（……なんで、“死んだのに、生きてんだろな”……）」

……

「「……」」

「「「「「……」」」」」

そして、互いに沈黙を交わし合い……少し時が過ぎた後

「仁哉、虎太郎、天音、夢乃」

「「「「？」」」」」

それを破ったのは、ハジメだった。図太いのか、鈍感なのか分からないが……彼以外の新たな転生者達は、彼女達になんの警戒もしていなかった。故に、彼は注意を促す為に、口を開いたのであった

「気を付けろ……おそらくだが、コイツらが、あの神が言っていた、“この世界の異変”の元凶、かもしれない」

「「「「「!!!!!」」」」」

それを聞いた瞬間、彼らは一気に、ハジメと同様に、警戒をし始めた

「はは、なるほどな……つまり、こういう事か？　俺達は、コイツらを倒す為に、この世界に呼ばれたって訳かぁ!!？」

「可能性としては、ありえそうだよね……アイツらが原作をブレイクしまくって、この世界を大きく歪めてしまったから……僕達が転生者として、呼ばれたのかもね」

「あ〜、あるある。テンプレであるわよねぇ、転生者を殺すって奴」

仁哉、虎太郎、そして天音の三人は、神から与えられた使命の意味を、理解した……気に、なった

「え〜っと……つまり、あの人達を倒す、の？」

ただ一人、夢乃だけは、その事に迷い始めた

『多分、ね……怖いかもしれないけど、戦うしか、ないよう、だね』

「ヴォルケーノ……う、うん!!」

だが、その迷いは、彼女のデバイス、ヴォルケーノによって吹き飛ばされ、仁哉、虎太郎、ハジメ、天音と共に、戦闘態勢へと構えて

いた

「……へぇ、やる気なの？（まぁいいや。コレで大義名分は立ったし、ね……）ウフフフッ」

その様子を見たビビは、魔女の笑みを浮かべた。相手は、攻撃の意思を持った。ならば、正当防衛として、後に提出する始末書に、己の正当性を示せるからだった。エリート街道を突き進むビビにとって、こんなことで足元を躓きたくはない。早く局内の上層部へと上り詰め、己の花園を築き、更に発展させ、守る為に……

「……やはり、か（戦い、になるか……）」

グレイも、その様子を見た瞬間に、自身も戦闘態勢を取った……自分の在り方……それを示す為に、己の心を、人にするために……

「「……ッ！！！！」」［［ダシュンッ！！！！］］

「「「「「……ッッ！！！！！！」」」」」［［［［［ダシュンッ！！！！］］］］］

そして、七人の転生者達は、激突をする

＃６２　転生者兄妹と、５人組の転生者、邂逅と激突（後書き）

次回は、引き続き転生物語を掲載する予定です

二話連続更新をする予定なので、遅くなるかもしれませんので、ご了承ください

【友人が】グレイ&ビビ、スティン姉妹の絵【書いてくれました】（前

どうも、こんばんは、リィーンです

今回は、ちょっとした座談会を開きたいと思い、予定とは違った事をやらせていただきました

ホント、素晴らしい友人を持っている事に、感謝しています！！

ムーギネーター様、あんぎゃーす様、鳴神　ソラ様、斬空様、緋水様、装甲轟鬼様、真王様。ご感想、ありがとうございます！！！

【友人が】グレイ&ビビ、スティン姉妹の絵【書いてくれました】

神「さってさて……これはどういうことなんだ作者ッ！！！」

作者「私もさっぱりですよ！！！　まさか、こんなに素晴らしい事に成るとは思いもしなかったのですからッ！！！！」

神「まさか……」

――――――グレイとビビの二人が、絵になるとは！！！！！――――――

神「チョービックリだよ！！！　びっくりし過ぎて、バイクと合☆体しそうになるぜ！！！」

作者「貴方はプラ○ドですか！！！？　まぁ、そうとも言えそうですがね……」

神「とにかく、コレは素晴らしい事だ！！！！」

作者「本当……私の友人、同志Fには、感謝してもしきれませんよ、コレは……」

神「しかし、一体なんで、書いてくれたんだ？　同志Fは」

作者「あぁ……それには、こう言った経緯があるのです……」

F「HI☆MA☆DA」

作者「貴方仕事が有るでしょが、暇じゃないでしょ？」

F「なにか、楽しいが事したい……そうだ。何か書いてほしいモノとか、ある？」

作者「え？　あぁ……出来たら、俺が書いてる二次創作のキャラ、書いてほしい、なんて……無理か」

F「グレイ姉さんとビビか？　任せろ」

作者「へ？」

作者「ってな事があったので」

神「なんか数パーセント捏造がある気がするが、気のせいか！！？」

作者「気のせいですよ」

神「むぅ……まぁ、気のせいならいいが……」

では、晒させて頂きましょう。これが、我が同志Fが書いてくださった、グレイ・スティンですッ！！！！

＞i239749＜

グレイ「……これが……俺、なのか？」

ビビ「やだ……お姉様、お美しゅうございます……（／／／＜ω＞／／／）」

グレイ「なんだその口調は……気色悪い」

ビビ「お姉様……私と一緒に、百合の世界へと行きませんか？ハァ、ハァ……」

グレイ「行く気ねぇよ！！！！　いいから、その荒い息遣いを止めろォォォォォォォォォッッ！！！！！！！」

神「……な、なんつう威力だ、これは……」

ホント、友人曰く、かなり本気出したって言ってました。それと、今まで書いてきた中で、ここまで身長が高いキャラはいないって事で、なんか結構苦労したみたいですが……

神「あぁ……コイツは想像以上だ……」

えぇ。ここまで上手く変えた事に、、友人本人も、驚いてました。もう、イレギュラーだっとか……

神「俺ですら、胸がキュンとしたぞ、おい……」

さて、続いては、我らが変態妹、ビビの登場です！！！

＞ｉ２３９７５―３０４９＜

ビビ「きゃぁぁぁぁぁッ！！！！　私可愛い！！！！　チョー可愛い！！！！」

グレイ「……ありえねぇ、あの妹が……こんなん、だと？」

ビビ「やっばい、こんな可愛い姿で、はやてちゃん達と……いやん。想像しただけで、あそこがジンジン来ちゃう？」

グレイ「とにかく、その卑猥な行動を止めろ」

ビビ「あぁ……ありがとう、作者の友人さん。私を、こんなに可愛くしてくれて……ありがと～～～～！！！！　愛してる～～～～ッッ！！！！！！」

神「……これまた、ヤバいな……」

友人曰く、もうガチ本気だそうです。特に服に関しては、私の注文通り過ぎて……脱帽しましたよ、えぇ

神「いや、脱帽ってレベルじゃねぇだろ……なんか、神でも降臨したんじゃねぇのか？」

私もそう思います……もう、コレは神降臨してますね

神「なにはともあれ、素晴らしいな……」

いかがだったでしょうか、あのグレイとビビの二人の御姿は！！！

グレイ「なんで、俺があんな姿に……」

ビビ「もうね、最ッ高！！！」

因みに、現在追加として、仁哉、虎太郎……そしてハジメと天音の四名も、書いていただいております

神「マジか？」

なんだか、もう挿絵もかいてやってもいい☆ＺＥ！！　って言ってますから……もう、ガチとしか

神「同志Ｆ……無茶しやがって……」

そこまでは、頼めないのですけどね……

それでは！！　次回はちゃんと本編を掲載する予定なので、楽しみにして下さい！！！　失礼します！！！

神「ばいば～い！！」

ビビ「ば～いば～い♪」

グレイ「……はぁ」

【友人が】仁哉、虎太郎、ハジメ、天音の絵【更に書いてくれた】（前書き）

今回も、イラストの回、となってしまいました

本編を楽しみにしている方々、未だ執筆の途中なので、もう少し、お待ちください

ムーギネーター様、鳴神　ソラ様、けびん様、あんぎゃーす様、緋水様、夜桜様、レオとなごみ様、真王様。ご感想、ありがとうございます！！！

【友人が】仁哉、虎太郎、ハジメ、天音の絵【更に書いてくれた】

神「……おい、昨日の今日で、なぜこんな事に成っている」

まぁ、その……あれです。実は、昨日の内に、残りの四人も掲載しようと思ってたんですが、友人からの許可が下りずに、今日に移行したんです

神「あぁ……なるほどな」

で、今回はこの四名のイラストを晒させて頂きます

――――――上谷仁哉、竜ヶ崎虎太郎、ハジメ・クレバヤシ、出雲天音の四名のイラスト――――――

神「そんじゃまッ！！！　まずは馬鹿コンビ二人のイラストからだ！！！」

っと、その前に、一つ申し上げさせていただきます

神「なんだよ、おい」

前回と同様、グレイとビビを書いてくれた私の友人、同志Fは、“男を書くのが苦手”です

神「……はい？」

なんか、生理的に、受けつけないらしくて……書くと、どうしても崩壊してしまうんです。と

神「つまり……女性キャラ限定で、アイツは上手いのか？」

書けるには書けるらしいのですが、どうしても……ですから、仁哉と虎太郎、ハジメの三名には、あまり期待しないでください、との事です。

あと、ハジメを投稿して下さったけびん様へ、同志Fから言伝を預かっております

F「雑に書いてしまって、大変もうしわけありません。これが、自分に出来る限界です。本当に、申し訳ありません」

神「なら、掲載しない方が良くね？」

そう言わないでください。グレイとビビの二人を掲載したんですから、もう残り転生者ズも掲載したいじゃないですか

神「まぁ、それもそうだな♪」

では、まず最初に、もはや馬鹿コンビで定着した二人、上谷仁哉と、竜ヶ崎虎太郎の二人から行きましょう！！！

＞ｉ２４０２６―３０４９＜

＞ｉ２４０２７―３０４９＜

仁哉「おぉぉぉぉぉぉッ！！！？　俺様、カッコよく無い！！！！？」

虎太郎「これが僕か……ふむ、なかなかだね」

仁哉「っていうか、なんかどっかで見た事ある気が……？」

虎太郎「君のコレ、確実にｆｏｒｃｅの“ヴェイロン”だね」

仁哉「そうだ！！　それだ！！！　ってか、なんで俺がこんなヤンキーに成ってんだ！！？」

虎太郎「さぁ？」

仁哉「さぁって……ナゼダアアアアァァァァッッ！！！！！！」

神「おうおうおう……グレイとビビに比べると、なんだかレベルダウンしている感がマンマンだなおい」

さすが、我が同志、へんｔ……紳士だな

神「今、なんか失礼な事、言おうとしなかった？」

いえ、別に……

神「……」

では！！　続いて、ハジメ・クレバヤシのイラストを掲載いたします！！！

＞ｉ２４０２８－３０４９＜

ハジメ「な……これが、俺か？」

赤夜叉『うんうん！！　カッコ良い、カッコ良いよハジメ！！！』

ハジメ「ありがと、スズナ……でも、これはさすがに、アレだな……なんかこう、恥ずかしいな」

赤夜叉『なんで？』

ハジメ「こう、俺の絵がこうして貼り出されるって、なんだかくすぐったいし……な」

赤夜叉『ふ～ん……』

まず、最初に一言……グレイとビビに比べて、なんか崩壊気味で、大変申し訳ございません

神「だからさ～、無理に掲載しなくても」

読者に、どんな感じなのかをイメージしやすくするためには、少なくとも！！　キャラのイラストは必須なのです！！！

神「あぁ、はいはい……」

では！！　最後に登場していただきましょう！！！　出雲天音ちゃんです！！　どうぞ！！！

＞ｉ２４０２９―３０４９＜

天音「あら、私って、結構可愛いじゃん♪」

アタラクシア『当然よ。なんていったって、私のマスターなんだから！！』

天音「それ、褒め言葉？　ま、そう言う事にしておいてあげるわ」

アタラクシア『さっすが私のマスター♪　トゲっちぃ所が、なんだか素敵♪』

天音「すり潰すわよ、アタラクシア♪」

アタラクシア『やだ♪　マスターったら、こんな見た目で、こわ～い♪』

神「……なんだこのレベルの差は！！！？」

俺もびっくりですよ！！！　仁哉、虎太郎、ハジメの三人の次にこれが送られてきた時は、マジで目を疑いましたから！！！

神「これ、全部書いている奴、同じなのか！！？」

もう、そう思ってしまう程、この女尊男卑の格差は……

神「……さすが、お前の同志だな」

ええ、さすが、我が同志ですよ……

神「っていうかぁ、確かコイツの見た目って、エヴァのアスカじゃなかったっけ？」

あぁ……友人が、それ知らん。だから、なんかオリジナルで書いたみたいで……

神「……同志F、贔屓過ぎだろ」

では、今回はこの辺で

神「次回こそ、本編なんだろな」

予定では……そうです

神「予定は未定、つまり……」

……

で、では！！！　次回を楽しみにしていてください！！！　失礼します！！！

神「さっさと執筆活動に戻れこのクソ作者が～～～～ッッッ！！！！！！！！！！！！！」

はい～～～～～～～！！！！！！！！！！！！！！！

【友人が】仁哉、虎太郎、ハジメ、天音の絵【更に書いてくれた】（後書き）

追記（5月17日）

ハジメ、天音の二人に関して、同志Fから書きなおすという事を聞いたので、こちらに修正版のイラストが送信され次第、掲載しようと思います

＃６３－Ｇ　起源覚醒（オニ、メザメル）（前書き）

どうも、おはこんばんにちは、最近色々と頑張っています、リィーンです

読者の皆さま、ヤッテシマイマシタｗｗｗ

今回の文字数、記号やその他もろもろを含め、“３１５４８”字、段落“７２６”段……過去最高記録、更新です（ーー；）

（製作に使っているワードでのページ数が５０以上とか、初めて見ましたよ……）

それほど、色々とやりたかった、今回の回。毎度の如くグダグダ文章ではありますが、どうかご容赦下さい

そして、ケータイで読んでいる方にとって、大変読みにくい仕様となっていますが……その点も、どうかご容赦下さい……

あと、二話連続と言いましたが、私情により一話のみの掲載とさせていただきます。期待されていた方々には、大変申し訳ございません

ムーギネーター様、斬空様、真王様、鳴神　ソラ様、緋水様。ご感想、ありがとうございます！！！

＃６３－Ｇ　起源覚醒（オニ、メザメル）

――――そして、とある兄妹（しまい）の兄（あね）は、覚醒を果たす……人だったころに、交わした約束を、引き金として……――――

……管理局が、未だに観測していない世界。とある惑星のその上空

「ウオオオ

その合間に、ハジメの後方にいる天音と夢乃の二人は、己が持つ魔法体系の中で、相手を射撃する魔法を援護射撃として、ハジメの指揮の元で撃ちまくっていた

「ッ！！！」
［バッ！！］
「クッ……ッ！！！？」
［ズドドド

「へぇ～」
「凄いんだね、ハジメ君は」
「あぁ、あははははっ……」
夢乃の称賛の言葉に、つい照れてしまうハジメであった……が
［ジリッ］
「ッ！！　二人とも、まだ気は抜けられないよ……」
「「え？」」
［ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴッ……！！！！］
「ウソォッ！！？」
「えぇ！！？」
「……」
着弾後の爆煙が消えた直後……その虚空に浮かぶのは、“無傷”のグレイだった
「なんで！！？　確かに手ごたえはあったはずよ！！？」
「う、うん！！　でも……なんで！！？」
防壁も無く、確かに直撃を与えたはずの相手が、まるで戦いの前と同じ姿を取っている事に、天音と夢乃の二人は、驚愕した
『多分、治癒したんだと思う』
「赤夜叉？」
その問いかけに答えたのは。ハジメの愛刀であるデバイス、“赤夜叉”である。ちなみに、彼は戦闘中のみ、己の刀の事を、“赤夜叉”と呼ぶようにしている

『そうだね……おそらく、あの爆煙が立ちこめている合間に、受けた傷を癒したんだと思う』
「そ、それにしても、早すぎない？　回復の魔法って、そんなに直ぐに傷がふさがるようなもんなの？」
『実際はそんなに早くは無いわよ。でも、アイツは私達と同じ、転生者なのよ。それくらいの異常っぷりは、あってもおかしく無いわよ』

更に、ヴォルケーノとアタラクシアが、相手の治癒に関して言葉を紡いだ。そして、そこへ夢乃が、気付いた事を、言葉にした

「でも……回復の魔法って、服も治したり出来るの？」
『いや。体が受けた傷しか治せないよ。でも、もしあの服が、魔法で出来た防護服だとすれば、魔力を用いて修復は出来る』
「そ、そうなんだ……」

夢乃の質問に、彼女のデバイス、ヴォルケーノが答え、夢乃はそれで納得したようだ

『（でも、そんな事をする必要は、皆無なはずだが……）』

三人がそう喋っている間、彼らに対し一人で戦うグレイは……己のデバイスに対し、憤っていた

「ッ……（おいタマモ！！　何勝手に“無限再生プログラム”を起動してんだッ！！！）」
『（申し訳ございません。ですが、そうなさらないと、主の命に危険が伴うと判断致したので……）』

「（別にいい……この勝負は、絶対にそういった力を使わずにやらなきゃならねぇんだッ！！！）」

そう……この戦い、彼は人として勝利しなければならないのであった。その為には、まず己の中にある力の大部分を、自粛しなければならなかった……

「（なんとしても……起源ってやつを抑え込んで……アイツらを撃退するッ！！！）」

あの神によって送られたモノ……もし、戦いから逃れたとしても、あの神がソレを許すはずが無い。もし、ここで戦いをしなくても……こいつ等を確認したあの時、戦いを選んでいなかったら……

……

「（確実に、あのクソ神はこいつ等を焚きつけ、俺達を襲わせる）」

だったら、逃げることはせず、戦う事を選んだほうがいい……いづれ戦う事になるのなら、今のうちに戦っておくのが……

「（タマモ、アイツらから次の攻撃が来た瞬間、ウラノゲキを１０発ずつ周囲にセット、以後コントロールを俺に渡せ。シュテンは、俺が攻撃を交わした瞬間、“エグザイル”をリリースし、左手に“ディバイダーＢＩＺ”をコール。スウトクは、あの男が刀を振りあげた瞬間に、バインドを仕掛けろ……いいな）」

『（ハッ！）』

『（了解でござるよ！！）』

『（承知した）』

念話で作戦を伝え、相手の方へと向き、武器を構える……

そして、戦闘は再び動き出した

「ッ！！！」
［ダシュンッ！！！］
「ッ！！」

先に動いたのは、ハジメであった

「（スウトクッ！！）」
『（うむッ！！）』

グレイの意に従い、接触する瞬間にバインドを仕掛けようと、試みる……

が

［ッ！！！］
［ザンッ！！！］
「な！！！？」

拘束しようとしたバインドは、彼の愛刀によって“切られ”、その意味を為さなかった

「ッ！！　タマモッ！！」
『スフィアセットッ！！』
［［ウォウォウォウォウォンッ］］

バインドに失敗をしても、グレイはハジメの背後にいる二人に攻撃をしかけようと、周囲にウラノゲキを射出する為のシュータースフィアをセットする

『天音ッ！！』
「はいよッ！！！　“魔法の射手（サギタ・マギカ）、連弾炎の２００矢（セリエス・イグニス）”ッ！！！！」
［［［［［［［［［［バババババババババババババババッッッ！！！！！！！！！！！！］］］］］］］］］］
「ッ！！！？」

だが、そのスフィアを展開するも、その背後から来る魔法の矢の弾幕によって、シューターは無意味だと判断する。今、目の前のこの男に放ったとしても、先ほどバインドを切った時と同様、切られるだけ。背後に向けて撃っても、かき消される……

「（だったら、今は防御をッ！！！）」

だが、そこまでの決断をするのが、遅かった

［バッ！！］
「ッ！！？」

いつの間にか、両手持ちの剣を装備していた夢乃が、背後に現れていた

『今だッ！！　夢乃ッ！！！』
「“襲爪ッ、雷斬”ッッ！！！！！！」
［ズガアアア

その防御をしようとする隙を、もう一人の転生者に付かれた……
目の前の男の背後にいたはずの、遠距離型の力しか使えないと思っていた相手の、思いもよらぬ奇襲を喰らい、グレイは、地面に向かって叩き落とされる

『今だよ！！　ハジメッ！！！』
「ハアアア

オオオオ

それに従った

一方、その遥か上空では

「うっひゃ～。二人とも、なんかエグいわねぇ」
「え、エグいって……そ、そんなに、悪い事だったのかなぁ？」
「いいんだ。戦いに善し悪しなんて無いんだ。ようは、生き残るか死ぬか、だよ」
「ッ……」
「さっすが、大先輩様は違うわね」

ハジメの、どこか冷たい声を聞いた二人は、別々な反応を見せた……夢乃は、その冷たさに怯え……天音は、皮肉気にハジメを称賛した

「大先輩なんて、俺はそんな大したモノじゃないよ。いつも、誰かと一緒に妖魔と戦ってきたから、ね……」

そんな声に、ハジメはやや自嘲気味に答え、ふと、下に墜落させた相手の方を見る

「……」
『ハジメ……まだ、あの人は生きてるよ』
「そうみたいだな」
「「え？」」
『そうね……結構ダメージはあるみたいだけど、倒してはいない

わね』

『あぁ。まだ生命反応を感じる……虫の息でも無さそうだし……かなり頑丈みたいだね、あの人』

天音と夢乃の二人は、地面に激突したはずの相手の生存に、驚愕していた。それもそうだ。なぜなら、彼女はこんな高い所から、地面に激突をしたのだ……それで生きているというのは、彼女達にとって、常識はずれも良い所だった

『天音、追撃よ。このまま、一気に落としなさい！！！』

「まぁ……ちょっと気が引けるけど……しょうがないわね！！！」

［バッ！！！］

「止めに成ってよね！！！　“魔法の射手（サギタ・マギカ）、連弾光の２００矢（セリエス・ルーキス）”ッ！！！！」

［［［［［［［［［［ババババババババババババババババッッッ！！！！！！！！！！］］］］］］］］］］

そして、地面にいる女性に目掛けて、光の矢が降り注ぐ

［［［［［［［［［［ババババババババババババババババッッッ！！！！！！！！！！］］］］］］］］］］

「……ッ！！！？」

地面にいるグレイは、上空から降り注ぐ光の矢を視認した直後、すぐに行動を開始した

「ッ、“ハイヨルクロヅカ”ッ！！！！」

［ゴアアア

直後……

――――――［ズシュンッッッ！！！！！！！！！］――――――

「――――ッ！！！！！！！！！！！！！？？？？……ガッ……カハぁ、ッッ……！！！！！！！！！！！！！？？？？」

突如、“赤い槍”が、自身の“心臓”を、穿った……

『主ィィィ

「今の？　あぁ、アレね……刺し穿つ死棘の槍（ゲイ・ボルグ）。相手の心臓を確実に貫く、魔槍よ」
「な……なんだソレは！！？　そんな武器が、存在するのか！！？」
「ま、まるで……魔法みたいだね」

それを聞いたハジメは、その槍のトンデモ能力に、驚いていた。対する夢乃は、どう反応していいのか分からないのか、生返事で、それに答えた

「とにかく、コレで絶対に仕留めたわね……とりあえず、死体確認でもしましょ」
「あ……あぁ」
「し、死体……」
『夢乃……』
「あ、あぁ……そんじゃ、それは私とハジメだけでやるわ。夢乃は、ここで大人しく待ってなさい」
「え……う、うん」
「ほら、行くわよハジメ」
「お、おう」

死……それを聞いた夢乃は、顔が青ざめてしまい、その場で震え始めてしまった。それを見かねた天音は、夢乃を空域に残し、ハジメと共に、下の方へと降りていった

そして……その下。グレイがいる地面……

「ッ……ガ、ガハッ……」

な……こ、この槍、は……まさか、あの鞘を見た時、一瞬思ったが……まさか、この手の力を、使う奴だったとは……

『主！！！　しっかりして下さい！！！！！　主ッッ！！！！！！』

ハァ、ハァ……ダメだ、体中の血液が、ほぼ、無くなりかけてきた、か……タマモの声が、聞き、にくくなっている

『宿り手よ！！！　“無限再生プログラム”の使用許可を！！！！！』

あぁ……黙れ、シュテン……それは、使うなって、言った、だろが……

『読み手よ！！！　このままでは、貴殿は“死”んでしまうぞッ！！！！』

……死、か……

いや……それでも、いいんじゃねぇのか？

そうだよ。もう死んでるんだ。それが、あのクソ神によって、転生なんてふざけた事に巻き込まれて……そして、こんな事に成ってんだ……

そうだよ……なんで俺は、そんな簡単な事に、気付かなかったんだろう……

『！！！？　生命バイタル値が！！！　主！！　しっかりして下さい！！　主ッ！！！！』

こんなクソな世界に来てまで、生きているよりも……死んだ方が、よっぽどマシじゃなかったか？

あぁ、そうだな……生きるのがつらいなら、死んだ方が、楽になる……

あの妹も、俺がいなくても、もう良いよな……大切な人って奴がいる、一緒にいてくれる奴らがいる……それなら、俺がもう、家族でいてやる事も無いし……もう、アイツの兄をしているのも、疲れた……

マテリアル共も、俺の消滅と同時に、供給が届かなくなり、いづれ消滅をする。道連れって形になるが、それでも、あいつらにとっては、本望かもな

「……なら、もう……俺が、生きている意味は……ねぇ……」

選択をする……だったら、俺はこの場で死ぬって道を、選択しよう

このまま、目蓋を閉じ、溢れ出る血を、地面に流し続けて……この場で、俺の生涯を、閉じよう……

……くだらない、人生だったな……

――――――――――――

――――――「逃げないで」――――――

ッッッッッ！！！

……あぁ、そうだった……俺は……生きなきゃ、ならないんだ……

「……タマモ……“無限再生プログラム”を起動しろ」

『ッッ！！！！！！　御意ッ！！！！！』

そうだ……約束を、したんだ……アイツ、と……“妹”と、約束をッ！！！！

生きるんだ……俺は、何が何でも、生きなきゃならねぇんだッ！！！！

どんな事があっても、俺は……生きるって……

なんで、あんなに大事だった約束を、忘れていた……

いや、そんなのはもうどうでもいい。俺は、生きるんだ……例え、俺がどんな事に、なろうともッ！！！

「タマモ……アイツらには、どうすれば勝てる」

『主……？』

「教えろ。お前は、俺のデバイスだろうが」

まず、その為には……あのクソ神が送ったこいつ等を、殺す気配を探れば、さっき俺と対峙していた三人のうち、二人が降りてきているのが知覚できた

『……一つだけ、明言させて頂きます。今の主では、確実に彼らには、勝てません』

「何故だ」

『簡単です。主は、自分自身を抑えるために……起源を抑えるために、己の力をかなり抑えています』

「……」

確かに、タマモの言うとおりだ。俺は、起源と言う者がどんなモノか分からない。ソレを抑えるなんて事なんて、さっぱりだ。だから、とりあえず力の大半を抑え込んでいた……自分が勝手に行動するのを、無意識に動く事を、止めていた……

「つまり、起源って奴を抑え込んでいる限り、俺は奴らに勝てない、って言う事か」

『そう、なります……』

「……」

――――――「逃げないで」――――――

それは、今の俺が向き合っている事にも、言っているのか……起源から……本能から、逃げるなって、そう、言っているのか……

……

――――――「生きることから、逃げないで……」――――――

「（なら……受け入れろって言うのか……それで俺が、どうなるか、分からないぞ……）」

それでも、生きていろ、と……そう、お前は言うのか……？

――――――「これは、約束だよ……“お兄ちゃん”」――――――

……なら、俺は……

「起源を……幻想を、“受け入れてやる”」

［ドクンッッッ！！！！！！！！！！］

「ッッッ！！！！！！！！！！！！！？？？」

そして、彼（グレイ）は……“転生”した……

［［……タッ］］
「「……」」

警戒をしつつ、ゆっくりと地面へと降りてきたハジメと天音は、未だに警戒を解く事無く、グレイの傍へと、近づいていった

「……どうなの？　アタラクシア」
『う～ん……死んでは、いない、かな』
「だが、心臓にあの槍が突き刺さっている。それに、地面に散っている出血量を見れば、いくらなんでも、生きているなんて状態じゃ無いだろう」
『うん……確実に、コレは致死量は超えてる。だったら、直に死んでいくと思う』

夥しく溢れている血、それをみれば、確実にコレは死ぬ。そう判断し、警戒を緩めようとした……

その、時……

［ドクンッッッ！！！！！！！！！！］
「「『『ッッッ！！！！！！！！！！！？？？』』」」
［［バッ！！］］

死んでいくはずだった肉体が、脈を打ち、一瞬、痙攣を起こしたのであった

「……」
［ムクッ］
「『なッ！！！？』」
「『えぇ！！！？』」

更に……その肉体が、立ちあがり始め、その二つの足が、地面に付いたのであった

「な、あいつ……バケモノ、か？」
「そんな……確かに、心臓を貫いて、血をドバドバ出した筈なのに！！！？」

ハジメと天音の二人は、その驚愕の事態に、我が目を失っていた。当然である。止めを刺したと思っていた相手が、いきなり立ち上がってきたのだから、驚くのも、無理は無い

その二人に対し、起源を受け入れたグレイは……

「……（ウルセぇなぁ）」

とだけ、感じていた

「（ピーチクパーチク、何をそんなに驚いてんだか……まぁ、どうでもいいか）」

無気力に、ただただ脱力しながらも、相手を睨みつける……事無く、どこか虚空を、眺めていた

「（にしても、なんだ？　この感覚は……一気に、体の重りが消えたような……そんな……なんて言うか、解放感みたいな……いや、そうだ。抑えつけていたモンを、一気に溢れさせたような……そんな気分だ）」

その身に降りかかっていた重み……それが一気に解き放たれ、体が軽くなった。そんな感覚に、浸っていた

「（なんだ……俺は結局、何をしていたんだ？　起源を抑える。本能、己の行動の方向性……それを抑えていると言う事は、自分を偽る事……それって、考えてみれば、メンドくせぇだけじゃねぇのか？）」

今までの自分は、自分で自分の首を絞め続けていた事に成る……抑え込んでいた全てを吐きだして、自分はやっと、己がやってきた事の、無意味さを知る

「（そう……もし、俺が頑なに、人間であり続けようとしていなければ、ここまで苦しむ必要は、無かった。俺が、もっと早くから、人間ではない事を自覚に、認めていれば……）」

こんな連中に、負けそうになることも、無かった……

「（……案外、あっさりと認めちまったな……あんなに、拒絶していたのに……あんなに、嫌っていたのに……人間で、あり続けようとしたのに……こうも簡単に、ヒトを止めるなんてな）」

たった一つの約束……それを果たすには、どうやら人間のままで

は、いられない。そう判断したグレイは、決断をした

「（例え、人ではなくても……例え、鬼の道を歩んでも……
…俺は、生きなければならない）」

交わした約束を、果たす為に……瞳を開き、誓う……押し寄せる全てを、受け入れて、進みだす……

「（決めたよ、クソ神……俺は、アンタの思い通りに成ってやる。だが）」

このままでは、終われない。例え、身も心も鬼に成ろうとも、人である事を、止める気は無い……

「（だから俺は……中途半端な道を、歩ませてもらう）」

鬼でも、人でも無い……その中間の道。そう、鬼人（オニビト）の道を

「……」

グレイは、完全に起源を……“幻想”を、覚醒させた

「ッ、天音、構えろ」
「分かってるわよ。こんな気持ちの悪いの、さっさと殺す！！！」
［チャキッ］

一撃で終わらせる。その為には、もはや肉片すら残さず、打ち滅ぼす事を考え……星が鍛えし、勝利を誓う剣を、生み出した

「ハジメ！！　下がってなさい！！！」
「ッ！！　分かった！！！」
「真名解放！！“約束された勝利の剣（エクスカリバ）ァァァァーーーッッッ！！！！！！！！！！！！！！！”」
［ゴオオオ

ハジメと赤夜叉は、その威力の高さに、驚くばかりであった……
だが、天音は困惑していた

「あ……あれ？　アイツ、避けるどころか、防御もとらなかったわよ？」
『た、確かに……んで、コッパミジンに吹き飛んだわよね？』
「え、えぇ……あいつ、エクスカリバーのこと、知らなかったのかなぁ？」

意外と、あっさりと済んでしまい、なんだか拍子抜けな表情を、見せていた

「……グジュッ！！！」
「「！！！？」」

だが、その困惑も……更なる驚愕と、恐怖によって、支配される

「グジュグジュグジュグジュグジュグジュグジュッッ！！！！！！！！」「バチンッッ！！！！！！！！」
「――――――ッ、ふぅ（死ぬかと思った）」

何も無い虚空から、骨が表れ、四肢を形成し、肉が生み出され、皮膚が纏わり、瞳が、口が、耳が、鼻が、髪が生え……グレイ本人が、“再生”された

「『『ヒイイイ

不可能な存在へと、昇華していた。それも、グレイという存在が、防衛プログラムと同じ役割を果たす、闇の書以上に、厄介極まりない存在へと……

「（さて、と……どうやって殺そうか。シュテン、何か良い武器は無いか）」

『（ハッ！！　それならば、先ほど“フッケバイン”にて、調整が終了した“ディバイダーＢＩＺ”の使用を提案するでゴザル。フッケバインからなら、転送可能でゴザル）』

“ディバイダーＢＩＺ”。グレイが、あの神から強引に譲渡された“ディバイダー”という魔導殺しの武装。それを、彼自身（かのじょ）が改造を施し、自身の体質に合わせたモノへと変貌させたモノ……ディバイダーであり、ディバイダーに非ずの代物。通称“ディバイダー・Ｔｙｐｅ－Ｂ”

「（やっと終わったのか……だが、悪いがソレ、もう少し改良をする。頭の中にある程度想像しておいた。ソレを覗いて、そのように調整をし直せ）」

『（御意……って、主、コレは？）』

「（質問をするな。いいな、その通りにやれ）」

『（……御身の意のままに）』

調整し終えた自分のディバイダー・Ｔｙｐｅ－Ｂを、更に調整する。それも、戦闘中に、だ。主の、そんな無茶な注文を、彼の左腕の鬼は、喜色の籠ったかのような声で、答えた

「［［ザンッ！！！］］」

「ッ……？」

「「ッ……！！！」」

ちょうど、その時ボーっとしていたのか、隙と見た二人は、グレイに対し、斬撃を浴びせていた

「この……バケモノがッ！！！！」
「さっさと、くたばりなさいよッ！！！！」

二人の努号。そして、グレイを、自分達とは違う何かと見ている二人に対し、グレイが思ったことは……

「（……あっそ）」

無気力な、肯定だった

「（タマモ）」
『（はい、分かっております）』
［シュウゥゥゥゥッ］
「！！！？」
「再生したッ！！！？」

先ほどやられた傷は、切られた服と共に、再生をし始め、グレイは、完全に元通りになった

「……はぁ」
「「ッ！！！！」」
［バッ！！！］

グレイがため息をした瞬間、何かしらの恐怖が働き、二人は、その場から後退をし、距離を取る

「な、なんなんだよ！！！　アイツはッ！！！！」
「知るかッ！！！！　あんな能力、どこのラスボスの能力よッ！！！！」
「（とにかく、あんな奴を、放ってはおけん！！）……天音、後方援護を頼む」
「りょ、了解！！」
『夢乃ちゃんはどうするの？』
「あの子は呼んじゃダメよ。こんなの、あんな線の細い子がみたら、気絶するわ！！」
『確かに、アレはグロ過ぎるわ……』
「ッ……ハジメ・クレバヤシ、参るッ！！！！！！」
［ダンッッ！！！！！！！］

突如、バケモノと化した相手を殺す。その為に、ハジメは天音に支持を出し、そのまま地面を蹴り上げ、相手の方へと向かって行く

「ッ……“龍刀【斬鬼】”」
［バチンッ！！　チャキッ］
「ッ……！！！！！」
［ガキィィィ

『ラスト　テイル　マイ・マジック・スキル・マギステル』
「“契約に従い我に従え炎の覇王（トゥ・シュンポライオン・ディアーコネートホモオュラネ・フロゴス）”」『“契約に従い我に従え高殿の王（トゥ・シュンポライオン・ディアーコネートパヌゥ・ウーラニオーノーン）”』
「ほとばしれよソドムを焼きし火と硫黄（ピュール・カイ・テイオン・ハ・エペフレゴン・ソドマ・エビゲネーテートー・アイタルース・レウサントーン）」『来たれ巨神を滅ぼす一燃ゆる立つ雷霆《ケレウネ・ホス・ティテナース・フサイレイン》』
「罪ありし者を死の塵に……（ハマルトートウス・エイス・クーン・タナトゥ）」『百重千重と重なりて走れよ稲妻（トラプサトー）』

その後方、天音は一撃で仕留められそうなモノを選び、その詠唱に入っていた

「ハジメ！！　退きなさい！！！」

「！！！」
［ガキッ、ガキィィィ

［ズドオオオ

相手の、その超常過ぎる力を、改めて思い知る天音であったが、未だに勝てる算段を、彼女は建てていた

「……（はぁ。こりゃまいったな）」

グレイは、ある一つの解に、辿りついていた……相手二人と自分のレベルは、どうやらあちらの方が上であると、思い始めていたのである……

グレイは、ハジメと交錯をしている内に……ハジメが、こういった戦闘行為に慣れているのを、感じ取っていた
こっちに来てから何度か戦闘を経験してきてはいるが……それは、幼少の頃からそう言った戦いのイロハを学んできたと思われるハジメと比べると、微々たるもの。そう、グレイとハジメの間には、経験上での差が生まれている。更に、その経験があってあの神から能力を与えられている為、その実力は確固たるモノとなっている。おそらく、スティン兄妹（しまい）を含めた転生者達の中で、一番の実力者であろう

そして、次に能力の扱いの差であった。自分と天音を比べ、その使い方を分析している内に、グレイよりも、相手の天音の方が、その力の使い方を熟知していた
相手は、おそらく自分が使いこなせる能力を選んで、この世界にやってきた。グレイのように、誰かが勝手に付けた能力とは違い、その使い方には、どこか洗練された何かがある。それも、緻密に計算され尽くされた、天性の才が……

そんな、自分よりも戦いに関して勝っている二人に対し、自分が今勝っている事……それは

「（“性能（スペック）の差”、だな）」

相手の力の使い方、それを見ていても、どうやらこっちよりも、相手の方が“少ない”事に気付いた。肉体的頑強さと、内包するエネルギー。それらはおそらく、互角。だが、手札があちらの方が少ないと感じていた

「（相手側の能力の数は、見積もっても三つか二つ……隠している、ような素振りは見せていないが……せいぜいそれぐらいしか、貰っていないだろうな）」

あのクソ神も、ケチな事をしたな。と、そう勝手に思い込んだ

「（こっちが使える手札は、“魔神の瞳”、“魔導の心得”、“武術の心得”、“兵装錬製（ウェポン）”、“レーヴァテイル質”、そして……“無限再生プログラム”）」

これらの手札を全て使えば、勝機は見えてくると思われる。が……

……

「（あっちも、この強固な守りが有る。もし、コレに籠られたら、厄介だ）」

だったら、一気に戦闘を終わらせる必要がある。或いは、この強固な守りを、“砕く方法”を考えなければならなくなる

「……そう、だな」

相手が、そんなモノを使用するという判断をさせない。そんな攻撃をするしかない。または……それすらも砕く、何かをすればいい

「（……試す、か）」

一度、“無限再生プログラム”の活用法を考えていた時に、ふと、脳裏によぎった、ある方法を……

それは、完全に人間ですら無くなる“技”の為、記憶から忘れさせていた程のモノ……それを、彼は、行使する事を、決める

「（タマモ。無限再生プログラムを“過剰駆動”させろ）」

『（ッッッ！！！！！！！！！！！！！？？？……よろしいので？）』

「（構わん、やれ）」

『（……御意）』

それは……己の身を、完全に人間から解脱し……

“バケモノ”と成る、“技”

「（まずは……“手数”を増やしてみる、か）」

『（了解。“無限再生プログラム・過剰駆動”、開始します）』

「……グウウウッッ！！！！！！？？」

己の身の変化に、声が出るほどの激痛を感じ、苦しみだした

「「？　？？」」

『な、なに？　なんなの？』

『急に、苦しみだした？』

相手にとって、グレイのその苦しみだした姿は、気味悪がられていた。それは、彼らのデバイス達にとっても、同じだった

「グ……クゥゥゥッ……グアアア

それは……“腕”だった。それも、グレイの背中から“新たに生えた、無数の腕”である

間接の間の長さが異様に長いモノもあれば、その間接が三個や四個も付いている腕もある……見た目は、“千手観音”を連想させるそれは、実物を見れば、醜悪なモノでしかなかった

「……成功、か」

それこそ、“無限再生プログラム・過剰駆動”の正体。自身に埋め込まれているデバイスに、己の遺伝子を書きかえる能力があるが故に行える、無限再生プログラムの活用法

自身の遺伝子を弄り、その再生の方向性を変え、己の望む姿へと変貌する……確実に、人間離れした“技”であった

「（なんだろうな。こんな状態になったにも関わらず、違和感がまるで無い……まるで、元からこんな体だったかのような……そんな感覚だ）」

『（大丈夫、なようですね）』

「（あぁ……制御は頼むぞ、タマモ）」

『（御意。モード・“千手邪鬼”、制御開始）』

そして……その力を、己の感じるままに、振るいだす

「シュテン。“龍刀【斬鬼】”、“約束された勝利の剣（エクスカリバー）”、“破魔（ゲイ）・ジャルクの紅薔薇（ゲイ・ボウ）”、“必滅の黄薔薇”、“絶世の名剣（デュランダル）”、ブースターランス……各１００個。“ブレイズ・オブ・エグザイル”、“夫婦剣、

干将・莫耶”“覇弓・レラカムトルム”……各１００個。神機“クロユリ、アルストロメリア、グロリオサ”装備、“オヴェリスク、クラウディア、インキタトゥス”装備、“スーリャ・パシーマ、イー・アンガム、カーラ・カパーラ”装備、“虎銃　女王　無、虎剣　大王　極、虎甲　帝王　衛”装備、“真竜砲　真、真竜大剣　真、真竜盾　護”装備。各２０基……その全てを、腕に持たせろ」

『合点承知ッ！！！』

「「「

”、“絶世（デュランダル）の名剣”、“ブレイズ・オブ・エグザイル”、“夫婦剣、干将・莫耶”が握られた腕が、ハジメと天音の二人目掛けて、振り下ろされた

［［［

［］［］［］

」」」」」」」」」」」」」」」

全ての神機を銃形態（ガンフォーム）に変形させ、“覇弓・レラカムトルム”と共に、相手に向けて一気に放った

「……（避けた、か）」

だが、千の腕から放たれた猛攻すらも、彼らは避けたのであった

「（だが、どこに逃げた？）」

周囲を見渡し、相手を探そうとｓ「ハアアアアアアアアアアアアアアッ！！！！！！！」

「」」」」」」」」」」」」」」」

きて、手にしている刀、“夕凪”を以って、グレイが生やした腕の大半を、消し飛ばした

「ハッハッハッ！！！　どうよ！！！！」

「ッ……舐めるなッ」

［グジュグジュグジュグジュグジュグジュグジュグジュッッ！！！！！！！］

「うげぇ！！？」

だが、天音が吹き飛ばした腕の根元から、更にゲル状の何かが蠢きだし、再び、新たな形を為していく

［バキッッ！！！！！！　バキャッッ！！！！！！］

「ッ……！！」

新たに作られたのは、巨大な腕。それも、先ほどの千本の腕の内、１００ずつ束ねたかのような、極太の腕だった

「ハアアア

しかし、とっさに天音が仕掛けた障壁で、その拳は届く事無く、ただ弾かれていった

「クッ、そんな魔法も、あるんだな……」

グレイ自身は、その魔法の存在を認識し、自身の記憶の中に納める

［バッ！！！！］

「ッ！！！？」

「隙アリッ！！！！」

［ザンッッ！！！！！！］

「なッ……！！！？」

その油断を突こうとしていたのか、いつの間にか自身の懐へと潜り込んでいたハジメに、胴体を一刀両断され、下半身と上半身が、真っ二つに切り裂かれた

「ッ……タマモ！！」

『御意！！』

［グジュグジュグジュグジュグジュグジュグジュグジュッッ！！！！！！！！］

それでも、切られた上半身の切り口から、再びゲル状の物体が溢れだし、その地面に落されていく

『ハジメ！！　逃げて！！！』

「あぁ！！！」

［ダンッ！！！！］

その場にいては、危険だと判断したデバイス、赤夜叉の声を聞き、ハジメはその場から跳躍。そして、空中にいる天音の所に合流した

「な、何よアイツ！！！　不死身な訳！！？　っていうか、どこのＲＰＧのラスボスなのよッ！！！！！！」

『知らないわよッ！！！　あんな再生速度ありえないし……それに、ただの自己再生で、あんな芸当が出来るなんて、誰が考えるのよ！！！！』

「……まるで、完全に妖魔だな、アレは……」

「で、どうすんのよ！！！」

「今度あいつが攻撃を仕掛けてきたら、あの鞘を出してくれ。そして、俺がその隙に、一気に回り込んで切る」

「でも、そんなことしても、また再生されるんじゃない？」

「かもね……でも、アイツは妖魔に近い。俺は、そう感じる」

『ッ！！　まさか、ハジメ！！？』

「あぁ……父さんが使っていた、“封印結界”を使う。今の俺なら、使える気がするんだ……出来るか、スズナ」

『……うん。やろう、ハジメ』

「はぁ……ヨウマようま妖魔……そんで、今度はフウインケッカイ？　何その中二。私には、さっぱりわかんないけどね」

「ちゅ、ちゅうに？　どう意味なんだ？」

「ググレカス。でも、その作戦には、賛成ね」

「ぐぐれ？……まぁ、後で聞こう……ありがとう、天音」

「はいはい、分かったから、さっさとあっち向いて」

ハジメと天音の二人による作戦会議をしている最中……未だに下半身がゲル状のまま、浮遊魔法を持ちいて上半身を支えているグレイも、作戦を建てていた

「（そろそろ、使ってくるかもな）」

全て遠き理想郷（アヴァロン）……絶対防御の、あの鞘を

「（シュテン、ディバイダーの調整は済んだか）」

『（あと３０秒は掛かるでゴザル）』

「（３０秒、か……充分だな）」

『（どうするのだ、読み手よ……）』

「（……スウトク、“ダンセラルアクジオウ”と、“アルカンシェル”の準備をしておいてくれ）」

『（心得た）』

「（タマモ、切れた下半身を、俺の頭にある通りにしてくれ。空を飛ぶ）」

『（はい。では、腕は翼状にしますか？）』

「（いや……分割し、触手状にしておいてくれ。空へは、ただの飛行魔法で飛ぶ）」

『（……なるほど、了解致しました）』

「（よし……行くぞ）」

『『『（（（御意ッ！！））））』』』

［スッ……フワッ］

そして、飛行魔法で空へと浮かび、空中にいる相手の所へと、向かって行った

「ッ！！！　来たわよ！！！」

「あぁ。まだ仕掛けるなよ！！」

「分かってるって！！！」

「（良し、ある程度高度は取った。タマモ！！）」

『（はい！！）』

［バキバキバキバ

「スウトク」
『うむ。“ダンセラルアクジオウ”、発動』
［カッッッッッ！！！

『（丁度終わったでゴザル！！！　主、受け取るでゴザルよ！！！）』

「よし……“ディバイダーＢＩＺ”」

［バチンッ！！　チャキッ！！！］

その攻撃が防がれるや、グレイは直ぐに、己の手に、黒く輝くその銃剣、“ディバイダーＢＩＺ”を召喚した

「（うし……行く）［バッッ！！！！！！！］！！！！？」

「ウオオオォォォ

なくなった

「（よし、効いたッ！！）“ナマ・サマンダ・キリキリ・シュド・カン”……」

［ビキビキビキビキッ……！！！！］

「ッ……（体が、だんだん、マヒしていくかのように……なんだ？　コレは……）」

困惑するグレイをよそに、ハジメは更に、祝詞を続ける

「“ヲン・サルバ・サルバ・マンダリ・リョウギリ・テイ・ソハカ”……ッ！！！！」

これが、ハジメが切り札として……止めとして使おうとした力、“封印結界”

かつて、魑魅魍魎の中でも、退魔不可能だと言われていた妖魔を、封印する為に使用してきた術式……相手を縛り、身動きをとれなくし、そして亜空間へと引きずり落とす……かつて、ハジメの生き別れの妹が使っていた、妖術であった

それを、グレイ相手に使用する、という作戦だった

「（これで、最後だッ！！）“ジビ・キャナン・マンダラ・ギャギャ・ナ・ウン・ウン・ウン・ソハカ”ッッ！！！！！！」

［バキャンッッッ！！！！！！！！！］

そして、空間に亀裂が走り、亜空間へと続く道が、創られた

「（終わりだッ！！！）」

あとは、その空間へと、対象を叩き落とせば！！！

――――――“エンゲージ、ディバイダーＢＩＺ”、“リアクト”――――――

［ズシュンッ！！！！］

「――――――カハァッ……！！！？」

だが、ハジメの“背後”から、鋼鉄で作られた槍が、貫かれた

「（な、なんだ？　何が、起きたんだ？）」

『ハジメ！！！　周りを見て！！！』

「周り？……！！！！！！？？」

ハジメの周り……彼の周囲、上下左右、四方八方、３６０度、それら全てが……グレイの背中から伸びている触手によって、囲まれていた

「“ディバイダーＢＩＺ、オーガライズ・リアクテッド”……」

［グギャギャギャギャギャギャギャギャギャギャギャギャギャギャ

ギャギャギャ

には……自分はどう映っているんだろうかと、疑問を抱かせる目だった

「（そして……戦う者の目では、無い）」

人間でもなければ、妖魔が持つ相手を喰らう目でも無い……ただ、虚無感を抱く者の、目だった

「（……アンタは……一体……なんで、そんな姿になったんだ？）」

そう、考え始めた時……体中に、弾丸が突き刺さって……ハジメの意識は、削ぎ落された

［ズドドド

その光景を、外野で見ていた天音は、ハジメの名を呼ぶ

［シュルッ］

「――――――――――――――――」

［ドンッ！！］

そして、ハジメを覆っていた触手が動き出すと、その中から、無数の銃撃を打ちこまれ、気絶したハジメが表れ……地面に、落とされた。幸い、デバイスの判断により、障壁が張られたようだが……衝撃は防げず、それをモロに喰らい、落された

「な……なによ……あれ……」

「……ッ」

［ギン］

「ッッッ！！！！！！！？？？」

グレイの瞳、それが天音を捕らえる……だが、その瞳は、次の獲物を見るかのような瞳ではなく、純粋な……ただ相手を見るだけの、睨むような眼では無く、見る目であった

「……」

［トクン］

その瞳を見た瞬間、天音の鼓動が、脈を打ち始めた。その光景と、相手の異様な姿と、ようやくまともに見た、相手の表情を見て……天音は、何か不思議な感覚に、囚われた

「（なによ、アイツ……人間、なの……？）」

明らかに、最初は人間だった。だが、途中から人間離れした行動を始めた相手に対し……“心を、奪われた”

「（……なんで……どうして……どうして、こんなに気になるの？）」

明らかにありえない……こんなの、絶対におかしいはずなのに……天音は、相手のその“狂っている”行動に……酔ったような気分に晒された

「……ハァ、ハァ」

『天音ッ！！！　しっかりなさい！！！　来るわよッ！！！！』

「ッ！！！？」

そんな状態の中、デバイス、アタラクシアの声を聞いた途端、我に返った

「ッ！！！」

［［［

「悪いけど、私はソンナ趣味は無いわよッ！！！　“全て（アヴァ）は遠き理想郷（ロン）”ッッ！！！！！」

［ヴンッ］

自分へと延びる槍付きの触手との間に、絶対防御の鞘を置き、その攻撃を防ぐ

［］［］［］

［［［

『あ、アレはッッ！！！！！！！？？』

爆煙が晴れ、天音の目がグレイを捕らえた時……二人は、息を飲んだ

［［［

上半身の背中から生えている千本の腕に握られているのは、全て“エクスカリバー”で、下半身の千本の腕に握られているのは……全て、“乖離剣・エア”である。それも、チャージを終えているかのように、その二千の究極の剣は、眩く輝いていた

『読み手よ、“アルカンシェル”の準備、完了したぞ』

「分かった……タマモ」

『承知。“アルカンシェル・バレル”、生成します』

「バキバキバキバ

―――――“約束されし常勝の千剣（エクスカリバー・サウザントレイド）”　ッッッ！！！

ァァァ

｀
｀｀
｀｀｀
｀｀｀｀
｀｀｀｀｀
｀｀｀｀｀｀
｀｀｀｀｀｀｀
｀｀｀｀｀｀｀｀
｀｀｀｀｀｀｀｀｀
｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀
｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀
｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀
｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀
｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀
｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀
｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀
｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀
｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀
｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀
｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀
｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀
｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀
｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀
｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀
｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀
｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀
｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀
｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀
｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀
｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀
｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀
｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀
｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀
｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀
｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀
｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀
｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀
｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀
｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀｀
｀｀
｀｀｀
｀｀
｀｀｀
｀｀
｀｀｀
｀｀
｀｀｀
｀｀
｀｀｀
｀｀
｀｀｀
｀｀
｀｀｀
｀｀
｀｀｀
｀｀
｀｀｀
｀｀
｀｀｀
｀

「ッッ！！！！！！！！！“未だ果てぬ遠き理想郷（アヴァロン・オーバードライブ）”ッッ！！！！！！」

「ヴンッッ！！！！」

よって、今手に存在する絶対防御の鞘……“全て遠き理想郷（アヴァロン）”で、防御をするしかない。

「グッッ！！！！！！グウウウ

」」」

『はぁ……はいはい』

そう言いながら、天音は“全て遠き理想郷（アヴァロン）”を下げ、更に“エクスカリバー”を取り出す

「さぁって……今度はこっちのターンと致しま［バッ！！！！］ッッ！！！！！！？？」

だが、その瞬間に、天音の懐に、まるで転移でもしてきたが如く……人の姿へとなっているグレイが表れた

「（こ、コイツ、何時の間に！！？）」

回避することも、防御をする事も忘れ……突如現れた相手の出現に、困惑を見せる

「……フッ！！！！」

［ブンッッ！！！！！！］

そして、グレイは……天音の腹を目掛けて、金剛石へと性質を変化させた右腕で、拳を振り

［ボゴンッッッ！！！！！！！！！！！！！］

「――――ガハァ……ッッ……！！！！！！！？？？」

『天音ェェェェェェェェッッ！！！！！！！！』

「……」

動揺する相手に、止めを与えた……

これが、グレイが立てた作戦……“全て遠き理想郷（アヴァロン）”という絶対防御を、どうやって突破するべきなのか……

グレイが出した結論は、“全て遠き理想郷（アヴァロン）”を下げた時。絶対防御が外された時こそ、チャンスであると踏んでいたのであった。その為に、自身が持つエネルギーの９９，９パーセント以上、１００パーセント以下を使っての攻撃……あの“約束されし常勝の千剣（エクスカリバー・サウザントレイド）”、“一遍く世界を乖離す開闢の星光（オーバーリミット・エヌアル・ラリシュエル）”、“歪みし規律の極光”の三つを、囮として使用したのであった

そして、それら三つの攻撃で歪んだ空間内、その中でも転移が出来る、あの神がグレイに与えたトランスポーターの能力を利用し、天音の懐へと入り……残存エネルギーを上乗せしてのパンチと、“無限再生プログラム。過剰駆動”と、“ディバイダーＢＩＺ”とのリアクト効果で得た力を利用し、一気に勝負を付ける腹積もりだった

そんな作戦は……天音の油断、という隙を付き……その一撃を、食らわす事が出来た

［グラッ……――――――］

「……」

鉄以上の堅さを持つ拳の直撃を喰らい……意識をもぎ取られた天音は……そのまま地面へと落ちていった……

激戦が繰り広げられた空域には……グレイ（ゲンソウ）が、残った

＃６３－Ｇ　起源覚醒（オニ、メザメル）（後書き）

【“ディバイダー・Ｔｙｐｅ－Ｂ”】

グレイが、あの神から与えられた“ディバイダー”の情報を元に、改良をした代物。“魔導殺し”としての特性、“結合分断”などのメリットは残しつつ、デメリットである殺戮衝動、破壊本能は排除。さらに、エクリプス因子が無くとも、リアクターがあればリアクト可能という、ディバイダーであって、ディバイダーではないモノ。性能面では、ディバイダーよりも上である。特徴としては、型番がアルファベット標識であり、数字を、アルファベットに置き換えてある

・“ディバイダーＢＩＺ”
グレイ専用の“ディバイダー・Ｔｙｐｅ－Ｂ”。読み方は、“ビーアイゼット”、数字で言えば、“８１２”。形状は“ディバイダー９９６”の非リアクト状態の銀色の銃剣の色違い。全体的に黒色で、グリップやトリガーが白色、という仕様。普通の銃剣としての使用法もある

・“ディバイダーＢＩＺ、オーガライズ・リアクテッド”
前述の“ディバイダーＢＩＺ”のエンゲージ形態。グレイのデバイス、“タマモノマエ”と“シュテンドウジ”、“スウトクテンノウ”の三つのデバイスをリアクターとして発動する。リアクトした直後は、見た目の変化は無い。だが、その効果は、“肉体から無機物の兵器を生みだす”事である。例えば、腕をレールガンに変化させたり、足をハンマーに、指を槍に、胸をミサイｒ、ゲフンゲフン……など、肉体から武具や重火器、いわゆる兵器を“生（は）やす”能力を得る。グレイが持つ“兵装錬製（ウェポン）”や、後述する“無限再生プログ

ラム・過剰駆動”と抜群の相性を持つ

【“無限再生プログラム・過剰駆動”】

読んで字の如く……グレイが“闇の書”を“夜天の魔導書”へと戻す際、自身の中へと移動させた“無限再生プログラム”を、過剰に動かす事。体内に埋め込まれ、脳ともリンクしている“タマモノマエ”に、脳内の情報を送信し、その情報通りに肉体の遺伝子を変化させ、無理矢理肉体をその通りに再生させる。それが無限に行えるという事で、グレイが持つエネルギーが許す限り、どのような形状にも変化が可能。本編でも行った腕の増殖や、下半身を獣の体に変化、体から触手を生やしたり……その気になれば、幻想種であるユニコーンやペガサス、ドラゴン、本物の鬼にも成れる（正し、あの神の呪いがあるせいか、“男”には成れない）。変化する際、肉体を構築しやすいよう、一旦体をゲル状にする必要がある（その見た目がかなりグロい）

なお、前述の“ディバイダーＢＩＺ、オーガライズ・リアクテッド”と併用することにより、体を巨大な戦艦、または要塞のように変化させる事も可能。

【約束されし常勝の千剣（エクスカリバー・サウザントレイド）】

約束された勝利の剣（エクスカリバー）を千本、“兵装錬製（ウェポン）”で創り出し、“無限再生プログラム・過剰駆動”で腕を千本に増殖させた状態でのみ放てる対界宝具。その威力は、英雄伝ではなく神話レベルの魔法へと昇華

している。ただでさえ最強のエクスカリバーを千本同時に振るうため、並みの魔力の持ち主では放てない（そもそも、腕が千本なけりゃ無理だし）

【“一遍く世界を乖離す開闢の星光（オーバーリミット・エヌマ・エリシュ）”】

前述動揺、“乖離剣・エア”を千本創り、千本の腕を以って撃てる対界宝具。元々の威力が高すぎる“天地乖離す開闢の星”を千回同時発動という荒技で、魔力消費量が半端ない……そんな芸当をこなすグレイお姉様、そこに痺れる憧れるぅ！！！　え？　次元震が起きるって？　そんな野暮な事を聞くなんて、わけがわからないよ

【“歪みし規律（アルカンシェル）の極光”】

時空管理局の所有する大型戦艦に搭載されている魔導砲。それをアースラの先端部分を宝具化させ、対界宝具の域まで昇華させた改造版“アルカンシェル”。威力や効果範囲の調整が可能となり、管理局が使用するモノよりも、遥かに性能が上である

【“封印結界”】

ハジメが使用した、妖魔を封印するための法術。もともと、彼の得意分野では無い事なのだが、チート転生をした事により、使用が可能と成ったモノ。相手が身動きできない状態で祝詞を唱え、背後に

空間の歪み、ブラックホールのようなモノを引き起こし、そこへ叩きこむモノ。大型の妖魔など、倒せないモノ相手に使用してきたらしい

【“未だ果てぬ遠き理想郷（アヴァロン・オーバードライブ）”】

天音が使用した、“全て遠き理想郷（アヴァロン）”の更なる使用法。あの神から受け取ったありったけのエネルギーを“全て遠き理想郷（アヴァロン）”に一気に注ぎこみ、その強度を高めるモノ。絶対防御を、“絶対完全防御”の域まで到達させる代物。如何なる攻撃も、この鞘の前では、無意味である。だが、それを解いたらダメだよね

次回も、転生物語を更新します。お楽しみに

＃６３－Ｂ　白百合の舞踏、歪んでも、変わらぬ思い（前書き）

どうも、お久しぶりです、リィーンです……

な、なんとかの更新……一点だけ、言っておきます

今回、低クオリティ過ぎます。なので、ご注意ください

なぜか、ビビの描写は、エロが関わらないと書きにくくなってしまいました

（；一＿一）

最初の方にある戦闘とか、グダグダ過ぎる……

それでもよろしいという方は、どうぞごゆっくり、ご覧ください

ムーギネーター様、鳴神　ソラ様、あんぎゃーす様、けびん様、緋水様、真王様、斬空様、空言天孤様、装甲轟鬼様。ご感想、ありがとうございます！！！

#６３－Ｂ　白百合の舞踏、歪んでも、変わらぬ思い

――――――そして、とある兄妹（しまい）の妹は、新たに現れた転生者の内の、男達と争う……己の愛する者達との、平穏の為に……――――

……管理局が、未だに観測していない世界。とある惑星のその上空

「ヴェステージッ！！！　“スサノオ”モードだッ！！！！」
『オゥライッ！！！』
「獅皇龍帝、“ラゼンガン”形態。それと、“グレンウィング”装備で」
『分かったよ、虎太郎』
［［キュインッ……バチンッ！！！］］

「（な、何よアイツら！　ロボオタ！？）」

ビビと対立している二人……上谷仁哉と、竜ヶ崎虎太郎……彼らは、己の身に、機械の装甲を纏わせる

「ウオオオォォォォォォォッッ！！！！！！！！　ヤッベェェェェェェェェェェェッ！！！　マジで“スサノオ”じゃんか！！！　ヤバい、ヤバすぎるぜコレは！！！！」

「五月蠅いぞバカヤ」
「黙れぇ！！！　こうして敵側の機械を操るって、なんか燃えるだろうが！！！！」
「まぁ、確かに……敵だった奴が味方に成るって展開は燃えるし、僕も好きだし」
「だろぉ？　だから……こんなにテンション上がることは無いってことだよォォォ

「（じゃぁ）行くわよベアトリーチェッ！！！“神魔憑依（アバター・オブ・リンク）”！！！！」

『スタンバイ、レディ』

「セーーーット、アップ！！！」

［カッッ！！！！！！！！］

ビビが変化した姿は、真白き騎士……純白の華奢なドレスのような服の上に、銀色の光沢が栄える甲冑を纏った姿。髪は後ろで結ばれて、ポニーテールになっている、騎士姫の姿

「うおッ！！？　なんだなんだッ！！？　アイツ、いきなりセイバーに成りやがった！！？」

「バリアジャケットの展開？　にしても、リリィなんて……なかなか良いチョイスだね」

その相手の行動に驚く二人。しかし、その驚きは、興味から来る好奇心からの驚きであり、興味深気に、ビビの行動を見る

「……ッ（ジロジロ見んな、ゲス男共が）」

そんな視線を受けて、ビビの不機嫌さはますます上がって行った

「（あぁ、いらつくッ！！！）さぁさぁおいでなさいッ！！！“煉獄の七姉妹”達ッ！！！！」

［［［［［［［ウォンッ］］］］］］］

「煉獄の七姉妹が長女、ルシファー」

「次女、レヴィアタン」

「三女、サタン」

「四女、ベルフェゴール」

「五女、マモン」
「六女、ベルゼブブ」
「七女、アスモデウス」
「「「「「「「ここにッ！！！」」」」」」」
「おおおおッ！！！？」
「煉獄の七姉妹、だと……？」
「（更に！！）　出でよ！！　ペントラゴンの近衛兵達ッ！！！」
「［［［ウォンッ］］］」
“シエスタ４５（ヨンジュウゴ）”、ここにッ」
“シエスタ４１０（ヨンイチマル）”、ここに」
“シエスタ００（ダブルオー）”、ここにッ！！」
「お、おおおおおおおおおおッッ！！！！！！？？」
「シエスタ近衛兵……へぇ、なかなかな布陣だね」
そんな苛立ちから早く出したいのか、速攻でつぶす為に、ありったけの魔力を以て、自身が召喚できる最高の従者たちを呼び出す
「（まだまだ！！！）出てきなさい！！“バハムート”ッ！“バハムート・改”ッ！！“バハムート・零式”ッ！！」
「「は？」」
［［［バシュンッッ！！！！！！］］］
「「「グルルルルルッ……グオオオ

「う……うっそ～～～～～～んッッ！！！！！？？」
「まさかの……ＦＦ７の、バハムート三種……」

煉獄の七姉妹、シエスタ近衛兵、三体のバハムート……膨大な魔力を使用して、連続で召喚をした、１３の召喚獣が、ビビの周囲に集結した

「（からの！！）　ベアトリーチェ。モード０２、“セカンドエディション”。起動開始！！！」
『“神魔憑依（アバター・オブ・リンク）”Ｓｅｃｏｎｄ　ｅｄｉｔｉｏｎ”……“神魔連鎖（アバター・イン・アバター）”、起動』
［キィィィィンッ！！！］
「対象選択。“アルトリア”イン“ベルフェゴール”、“ディルムッド”イン“レヴィアタン”、“佐々木小次郎”イン“ベルゼブブ”、“メデューサ”イン“マモン”、“ギルガメッシュ”イン“ルシファー”、“キャスター”イン“アスモデウス”、“ヘラクレス”イン“サタン”」

そして、己の可愛い使い魔達に、英霊達の御力を与え、それを付加させていく

「な……なんだ？　あの統一感ありそうでないあの感じは……」
「一つだけ言えることは……彼女のチート能力は、召喚系なんだろうね」
「は……自分は戦わねぇってか？　良い御身分だなぁッ！！！？」

「ッ……（あのやかましいゲス男、いちいち癪に障るわね……）皆、遠慮なんていらないから……あいつら、フルボッコに

しておやり」
「「「「「「はい！！　お嬢様ッ！！！」」」」」」
「「「了解でありますッ！！！」」」
「「「グオオオ

「「射撃ッ！！！」」
［［バシュンッ！！！！］］

シエスタ近衛兵が持つ黄金の弓から放たれた光弾が、仁哉に目掛けて放たれる。どんな隙間にも入り込み、相手を絶対に射殺すその光は、まっすぐに仁哉に向かって行く

「ハアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアッツツ！！！！！！！！！！！」
［キイインッツツ……！！！！！！！！！！！］

その事を知っているはずなのに、仁哉はその場から動かず、体に装着されているアーマーから、多量の紅い光の粒子……ＧＮ粒子を散布し出し、周りに覆わせていく

「“ＧＮフィールド”ッ！！！　マックスエディションッツツ！！！！！！！！！」
［［ギイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイインッツツツ！！！！！！！！！！！！！！！］］

「な……！！？」

そして、紅い粒子が防御障壁を生みだし、二つの光弾は、相手を貫く事無く弾かれ、消えていった

「ハッハッハッハッハッハッハッハッハッツ！！！！！！！　んなモン、このＧＮフィールドの前じゃ、無意味ッ！！！」
「おい、悪役みたいな笑いすんなよ。まるで、僕らが敵みたいじゃ

ないか」

なにか、コントのようなやり取りを行っている男二人に対し、絶対の命中率を誇る攻撃をさせたビビは……困惑していた

「（なに？　なんであんな障壁で、攻撃を防いだの？　まさか、入る隙間すらない障壁だというの？）」

確かに、その原理の方が、納得がいく……だが、今はそんな事を考える暇は無い

「ッ、だったら……全員！！　総攻撃ッ！！！」

「「「「「「「はい！！　お嬢様ッ！！！」」」」」」」

「「「了解でありますッ！！！」」」

「「「グオオオ

「“約束（エクス、カリバ）された勝利の剣ァァァァーーーッッ！！！！！！”」
「“ヘカティック・グライアァァァァーーー”ッッ！！！！！！！」
「［［［ゴオオオ

オオオオ

オオオオオオオオオッ！！！！」

「はぁ……まったく、僕は仁哉みたいに、熱血症じゃないんだ。でも……ここでやられる訳にいかないよ、ねッ！！！」

［ダシュンッ！！！！］

その力の固まり達に対し、動きが無かった黒い装甲を纏う虎太郎が、その力の前に向かって、突撃していく

「“ラゼンガン・オーヴァロード”ッッ！！！！！！」

［ズガガガ

［ズガガガ

［グアッッ！！！！！　バクンッッッ！！！！！

［ボオォォッッ！！！！！！］

仁哉が引き抜いたはずの、機械で作られた黒い二刀の刀は、マウント状態から引き抜かれた直後、“斬魄刀”へと姿を変え、漆黒に染められた細めの刀と、巨大な蛇の骨のような形状の刀へと、変貌を遂げる。そして虎太郎は、額に付いている黒き角に、紅く燃える炎を灯し、瞳も、その炎と同じ色に変化していた

「ッ！！？」

ビビは、二人が新たに出したモノの正体を見抜き、不味いと判断する。が、反応が少し出遅れた

「“狒骨ッ、大砲”ッッ！！！！！！」

［ゴオオオオォォォ

は、己の体から、黒い槍のように、細く尖っているドリルを、まるで鞭を操るかのように伸ばしていき

［ズシュズシュズシュ

その衝撃破とビビの間に、割り込む三つの影……

「「「「「ザンッッッ！！！

『まったくの同感だ』
「竜虎ッ！！　それに、えっと……“ち○こうるんてん”ッ！！！」
『“獅皇龍帝”だ。下ネタ止めろ、バカヤ』
「だからバカヤって言うなァァァァァァァァッ！！！！」

その中、相手側であるあちらは、まるで余裕をかますかのように、ふざけたやり取りをしていた。本人達にしては、他愛ない会話であるが……

「……テメェら……マジで殺ス」
［ゴオォッ……！！！！］

その様子を見たビビは、更なる殺意を解放し、少女には似つかわしくないほどの重苦しい殺気を、彼らにぶつける

「ッ！！？　な、なんだ……？　この、異様な殺気は？」
「おそらく、今の攻撃で、カチンと来たんだろ。大方、自分のお気に入りのキャラを殺されて、普通でいろなんてのは、出来たいと思うからね」
『あぁ。この、まるで剣山のようにとげとげしい殺意……間違いないだろうね』
「はッ！！　それがどうしたッ！！！　こっちとしても、転生したてで死ぬなんて、御免だぜ！！！」
『おうよッ！！！！！　やっちまおうぜッ！！　仁哉ッ！！！』
「よっしゃッ！！！！　もっとド派手にやろうか！！！」
「はぁ、相変わらず、五月蠅いな……ま、嫌いじゃないけどね」
『同感』

対する二人も、ビビから放たれている濃厚な殺気を感じて、更に気

を集中させて、相手の方を見る

「……なぁ、仁哉」
「あぁ？　なんだ？」
「前にさ、考えたアレ、あるだろ」
「おう……って、まさか」
「出来るんじゃないかな？　アレ……」
『？　何の話しなんだい、虎太郎』
「あぁ、実は……」

ふと、虎太郎は何かを思い出したようで、その内容を仁哉。そして、彼らのデバイス、ヴェステージと獅皇龍帝に話し始めて、軽めの作戦会議をし始めた

一方、煉獄の七姉妹を傷付けられたことで、怒り心頭となっているビビは……危険な状態へと成っていた

いくら、魔力の塊であり、死しても、再度召喚可能であっても……愛する存在が傷つくのは、嫌だったから

「（よくも……よくもルシファーを、ベルフェを、アスモを……マモンをッ！！！）」

……許セナイ……

「（……殺す。殺す、殺す、殺す、殺す、殺す、殺す、殺す、

殺す、殺す、殺す、殺す、殺す、殺す、殺す、殺す、殺す、殺す、殺す、殺す、殺す、殺す、殺す、殺す）」

コロスコロスコロスコ

そして、残らせておいた二体の超龍を、相手の方へと向かわせる

「「！！？」」

「ったく、そそっかしい奴だなオイッ！！」

「別にいいんじゃないか？　アレが出来るって話は聞いたんだし」

「だな……うっし、そんじゃぁ、行くぜ虎太郎ッ！！！！」

「あぁ、仁哉ッ！！！！」

［ダシュンッ！！！］

迫りくる脅威に対し迎え撃つ為、仁哉“一人”が、動き出した

「「グオオオ

！！！！！！！！」

蒼き翼から、八基の自立機動兵器……スーパードラグーンが放たれ、周囲に散開した

「行くぜ……“ハイマット・フルバースト”ッ！！！！」

［［［

羽を広げ、身をくるむように、防御姿勢へと成った。が、その光線の威力が高かったのか、防御を貫通し、紅きバハムートは、その姿を霧散させた

「あと、一体！！！」

［ダシュンッ！！！］

そして、勢いが付いたのか、その装備のままで、最後の一体の超龍の方へと向かって行く

「グオオオオォォォ

オオオオ

［ズウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウンツツツ！！！

の甲冑が覆われている……そう、かの“騎士姫”と、“英雄王”、その二人の姿を、組み合わせたかのような姿だった

「“全て遠き理想郷（アヴァロン）”」

［ヴンッ］

「あ、アレって……全て遠き理想郷（アヴァロン）じゃねぇか！！？」

そして、己の前に、絶対防御の鞘を顕現させ、防御の姿勢へと……

…なったかと思いきや

「“エクスカリバー”」

［チャキッ］

「“乖離剣・エア”」

［チャキッ］

「……ハアアア

「な、なんかアレ……ヤベぇだろオイッ！！！　竜虎ッ！！！！」

そう言いながら、自分の後ろで準備をしている親友を呼び掛けた

「……よし、イケる」

『やるぞ、虎太郎』

「あぁ。行くぞ、“獅皇龍帝”」

『応ッ！！』

「すぅ……ふぅ……」

仁哉の後方にいる虎太郎は、目を閉じて、深呼吸を繰り返し……集中力を高め、ある物体を想像する……

「……ッ（見えた）。来い！！　“アーク・グレン”ッ！！！」

［キュインッッッ……バチンッッッ！！！！！！！！！！］

「……で、出た」

『成功だね、上手くいって何よりだよ』

虎太郎が呼び出した物……それは、銀色に鈍く輝く戦艦……大型の戦闘機並みの小ささに凝縮されてはいるモノの、その大きさは、圧倒的な威圧感を醸し出している

「急げ虎太郎ッ！！　なんか、相手さんがやっべぇ事をしでかしそうだぜッ！！！！」

「見れば分かる……よしやるかッ」

［ギュリンッ！！！］

仁哉の発破の後、虎太郎は下半身をドリル状の形態に変化させ、その先端を、先ほど召喚した“アーク・グレン”に向け

［ズガンッ！！！！］

“突貫”していき、“突き刺した”

「行くぜ……ッ！！！！」

［ギュリリリ

銀色に光っていたはずの装甲は、黒く変色をしていた

「来い、仁哉ッ！！」

「オゥライッ！！！　行くぜ、“ミーティア・ユニット”ッ！！！　カモンッ！！！！」

［キュインッッッ……バチンッッッ！！！！！！！！！！］

「うっし！！　ドッキングだッ！！！」

『オウッ！！！　ミーティア・ユニット、ドッキングモードに移行ッ！！！！』

［ガゴンッ！！！……ガウンッ］［ガチッ！！　ガチャンッ！！！！］

仁哉もまた、背後に巨大な兵器……二つの巨大なアームを持つ、戦闘補助兵器……“ミーティア・ユニット”を顕現させ、それを己の背後に装着、アームから現れたグリップを握り、ドッキングを完了させた

「？（アイツら、あんなものを取り出して、何のつもり？　アヴァロンの事を知らない筈は無いと思うけど……なんであんな事を？）」

その二人の行動を、奇行のように見るビビ……そして、その間に、彼女の両手に握られている二つの剣から、とてつもない程のエネルギーが高鳴りを上げ、今にも弾けそうになっている

「来いッ！！　虎太郎ッ！！！」

「おうッ！！」

―――――“ドッキング”ッッ！！！！！！！！！！！！！！！

「は？」

［［ギュリンッ！！！］］

「フッ！！！」

［［ズギュンッッ！！！！！！！！！］］

「ウオオオ

「「その名も、“ファイナル・アーキア・ブラスター・フォーム”ッッッ！！！！！！！！！！」」

「……（な、なにそれ？（。д。）？）」

あまりにも奇行、考える思考がおかしいと思うほどの事に、ビビ自身、頭を抱えたくなるような頭痛に見舞われそうになった

「さぁって……行くぜエエエ

相手の砲身にためられていくエネルギー。それは自身の想定外以上の数値を叩きだし、しかもそれは、自身が持つエネルギー以上かもしれないと考え始めた

「（更に、力を剣に注ぎこまなきゃ！！！）御免、もう一度、耐えて頂戴、エクスカリバー！！！」

［カアアア

「お前の力も、螺旋エネルギーとして取ってんだよ。お前が熱くなればなるほど、エネルギーは早く上昇する」
「マジか！！？　おっしゃアアア

そして……ビビが持つ二つの剣は、膨大なエネルギーを蓄え過ぎて、悲鳴を上げ始める時……前にかざしておいた“アヴァロン”を引っこめた

「（死ネ……コノ下衆男ドモオオオオォォォ

ビビが持つ二つの剣から、世界を作り出す程のエネルギーを秘めた光と、ありとあらゆる戦いに於いて、必ず勝利をもたらす光の帯……その二つの光が、途中で合わさり、、巨大な光の柱と成って、二人に向かう

「……９１６７％、１００００％ッッ！！！！！　撃て、仁哉ッ！！！」

「応ッッッ！！！！！！！！！！！！！！」

［グッ！！］

そして、仁哉と虎太郎の二人も、己が持つ最高の一撃を放つ準備が完了し、トリガーに手を掛ける……二人の手から、宇宙を作り出す程の、強大なエネルギーの塊が、放たれる

「「いッッッけエエエ

ッッ！！！

オオオオ

オオオオ

！！！！！！！」

力の拮抗は、完全に崩れた

「！！！！！！！！！！！？？？」

二人が放った螺旋の光……それがビビの放った光を巻き込み、自分の力として取り込み、更なる力を持たせ、ビビへと向かって行く

「（不味イッ！！）“全て遠き理想郷（アヴァロン）”」ッッ！！！！！！」

［ヴンッ］

［ゴオオオ

［ゴオオオ

「うっし。なら、負けた罰として、案内させてもらおうか」
「そうだね」

仁哉と虎太郎は、勝手に相手と、自分の女神達の関係の事情を決めつけ、そして案内をさせる為に、吹き飛ばした相手の方へと、降りていった

だが、この判断が……決めつけていたことが、この二人にとっての、悪夢の始まりだったのかも、知れない

□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■

地面。ビビが落ちた場所

「――――――ッ、いっつつ……あのゲス男共、なんて事してくれてんのよ……私のお気に入りの鎧、汚れちゃったじゃない」

その姿は……酷く汚れていた。真っ白なドレスを思わせる服は、所々が焼け焦げ、破れ、泥にまみれていた。黄金の甲冑も、煤が付いていたり、一部がひび割れていたり……砕けている場所すらあった

「ッ……ベアト。もう一度アレ、放つわよ。ワルギリア、今度はサポート、お願い」

己の持つ、二つのデバイスに、再度攻撃を仕掛けるよう、指示をする……が

［［……］］

「？　ベアト？　ワルギリア？」

『もう、仕分け、ござ、いませ、ん……ある、じ……』

「ベアト！！？」

『ダメー、ジレベ、ル……E。再起、ふの、う……』

「ワルギリア！！？」

先ほどの衝撃……実はこの二つのデバイスによって、ビビが受ける衝撃を、半減させていたのであった。しかし、その分、この二つのデバイスが受けるダメージは相当なモノとなり……二基とも、再起不能と成ってしまったのだ

「そんな……うそ……」

『すま、ない……あ、るじ……――――』

『護れ、なく、て……ごめんな、さい……――――』

「！！！！？？　ベアトッッ！！！！！！　ワルギリアッッ！！！！！！」

二つのデバイスコアの輝きが無くなり、二人の魔女は、完全に沈黙した。それと同時に、白きドレスと黄金の甲冑が消え、普段のビビの姿に戻った

「……そん、な……」

［カクンッ］

大切なモノである二人がいなくなり、膝を落とす……もう、あんなモノに対抗できる術が、無くなっていた

［［ズンッ！！！］］

「！！！？」

その時、背後に誰かが降り立った。その、隠す事もしない二つの気配は……先ほど、自分を地面に叩き落とした奴らだった

「っと……おぉ、マジで生きてた」

「これは、なんとも頑丈だねぇ。アイシスみたいだ」

「ッ……！！？」

［ズルッ］

その二人を見た瞬間、ビビは何か底知れぬ恐怖を感じ、本能的に、後ろに下がった

「あぁ、いや、その……悪かったな。そこまで、その……痛めつけちゃ、まってよ」

その様子を見た仁哉は、何故か謝罪の言葉を掛けた。多分、さっきのアレが怖くなってしまい、それで引き下がったのか。と、そう決めつけていた

「僕も謝るよ。さすがに、女を傷付けるなんてこと、いけないだろうし、ね」

虎太郎も、仁哉と同じ気持ちで、ビビに向かって謝罪した

「ッ……（キモイ声を、出さないで）」

だが、二人のその言葉も……ビビにとっては、気持ちの悪い言葉でしかなくて……気持ち悪がった

「あぁ……あと、さ。話は変わるけどよ。お前、“高町なのは”って女の子、知ってるか？」

「ッッッッッッ！！！

前を知らないはずが無い。なぜなら、その二人は、ビビが愛する少女の名前、なのだから

「……（ヤッパリ……）」

ビビの心は……禁忌の心へと、変貌した

コイツ等、やっぱりあの子たちを狙っていたんだ……

「なぁ、知らないかなぁ？　お前も原作介入してんなら、彼女達の事は知ってるだろ？」

知ってるだろ？　もちろん知ってるわよ。テメェらなんかに教わらなくても良いんだっつのッ！！！

「君、彼女達と、“友達”なんだろ？」

“トモダチ”？　違うわ。そんな安っぽい関係じゃないわよ……私とあの子たちは、愛人で、私の嫁にする女の子達よ……肉体的にも、社会的にも……心の奥底からでもッッ！！！！！

「コイツさ、“なのはは俺の嫁”だって、五月蠅いんだよなぁ」
「あぁ？　ソレを言うならお前もそうだろ？　“フェイトは俺の嫁”だって、豪語してるじゃねぇか！！！」
「僕の場合は事実だよ。遊戯王で、フェイトのスリーブを使ってやったデュエルでの勝率は、１００％なんだから」
「ケッ、羨ましいねぇ。女神様に憑かれている奴はよ」

俺の嫁？　憑かれてる？　ふざけんじゃないわよ……あの子達は、私の嫁よッ！！！　私が、私が先にあの事たちと交わったのよッ！！！！　誓いあったのよッッ！！！！！！！！　アンタラみたいな下衆な男が、あの子達の嫁だって語っていい資格なんて、ないのよッッッ！！！！！！！！！！！！

「でさ、話し戻すけど……知ってるか？　その二人」
「こんな事、いう義理は無いと思うけど……知っていたら、会わせて欲しいんだけど……ダメかな？」
「――――――――――――」

ふと、あの神様の言葉が、浮かんだ

――――――欲しいものは、奪えば良い。なにから奪えって？　それ

は……そうだな。未来に出来る、彼女達の男から、とでも言おうか――――

――――未来に出来る、彼女達の“男”から、とでも言おうか――――

――――“未来に出来る、彼女達の男”――――

――――彼女達の、“男”――――

「ウワアアア

「「！！！！！？？？」」

……フザケルナ！！！！！　アノ子達ハ……私ノモノダ……ワタシノ、愛スルモノ達ダッッ！！！！！！！！！！

テメェラ下衆ナ男ナンカガ……共ニ歩ム資格ナンテ、ネェンダヨッッ！！！！！！！！

――――――I　am　the　bone　of　petals.

体は花弁で出来ている……――――――

「？　なんだ？」

「これ、は……詠唱？　それも、この感じは……まさかッ！！？」

――――――White　is　my　body,　and　tab
oo　is　my　blood.

血潮は白で、心は禁忌に満ちている……――――――

見セテヤル……見セツケテヤル。私ト、アノ子達トノ絆ヲ……
“愛”ヲッッ！！！！！！

――――――White flower garden, I'm held captive.
白き花園に、私は囚われている……――――――

「これって、まさか……“固有結界”！！？」
「こ、固有……結界って……アンリミテッド・ブレイド・ワークスか！！？」
「いや、詠唱の呪文が違う……多分、オリジナル！！！」
「はぁ！！？」

――――――However, there is no suffering.
でも、そこに苦しみは無く……――――――

「ど、どうすんだよ竜虎！！！」
「どうするもこうするも……ってか、どんな結界か分からないし。それに、さっきのあの叫び声、なんで上げたんだ？　コイツ……」

——There is pleasure and pleasure there, there are only supreme happiness.

あるのは快楽と悦楽、至上の幸福だけ……————

突然の事態に、まったく理解が追い付かず、全然行動出来ない二人

……そうしている間にも、ビビ（キンキ）は、その世界を構築する

——I'm here. I want to be here. And loved ones, want to be here.

私はここにいる。私はここにいたい。愛する者と、ここにいたい…

……————

——If you're a person way, I will not allow it.

もし、邪魔する者がいるのなら、私はそれを許さない……——

——

そして、その世界は、姿を見せる……禁忌（ビビ）の、心の中の世界……彼女の、望む世界

――――So, I will defend. This, "Lily the Taboo Garden".
だから、私は守る。この"白百合の花園"を……――――
"禁欲の楽園"が……顕現し始める

□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■

「「!!!!!??」」

そして、その世界は現れた……

果てしなく広がる地平線。その全てには、真っ白な百合の花が咲き乱れる。心地よいそよ風が流れ、雲がゆったりと流れる、蒼穹の空

……そして、真ん中にぽっかりと空いた草地。その草地には、真っ白い四本の柱で支えられた、西洋風の東屋。中には、白いテーブルや白いイス、そして１０人なら余裕で並んで寝られる程の大きな純白のベッド……

「ようこそ、私の世界へ」

そう。私が思い描く、究極の理想郷、最高の楽園、“白百合の花園（リリィ・ザ・タプー・ガーデン）”

「……あ、アンタ……固有結界なんてモン、持ってんのかよ」

「なるほど……こりゃぁ凄いね……厄介極まりないけど」

……あぁ、男の声って、本当に気持ち悪い。あぁ、やっぱりこの世界に招くの、止めておけばよかった。本当に、キショいでも、仕方ないわよね……こいつらに、身の程ってものを、教えるには、ね

「にしても、なんかほのぼととした空気だよなぁ。う～ん、きもちいい♪　なんか、寝そべりたい気分だぜ」

「おい仁哉、何を呑気な事を」

……やっぱり、あの男ウザい。声からして、ウザすぎる。態度も尊大で、自分が一番だと思ってる所とか……キモイ

「“口を閉じろ、そこの下賤な男”」

「ンッッ！！！！！！！！！！！！！？？？」

「！！？　仁哉ッ！！！？」

『仁哉！！！！』

「ン！！！！　んんんんんっ！！！！！？？」

ウフフフフ、上手く行った～♪

「……君、仁哉に何かしたのか！！？」

［チャキッ！！！］

銃……フン、無駄な事を

「“お前ら、私に攻撃をするな”。そして、“その場で這い蹲りなさい”」

［［ガクンッッ！！！！！！］］

「「！！！！！！！？？？」」

『仁哉ッ！！！！』『虎太郎ッ！！！！』

チっ。デバイスも、持ち主と同じくらいウザい声ね……

「“アンタ達のデバイス、機能停止しなさい”」

『『！！！？……――――――』』

「！！！？　獅皇龍帝！！！！」

「ンンンーンッッ！！！！！？？」（ヴェステージッッ！！！！！？？）

ふぅ……ま、これぐらいにしてあげましょうっと

「……一体、何をしたんだ？」

「あら？　聞きたいの？……だったら、それ相応の態度を見せないよ。そうしないと……」

――――殺すわよ――――

「ッッ！！！！！！！？？」［ゾクッ！！！！］

「うふふ……」

「（……な、なんだ？　コイツ……いきなり、変貌したかと思ったら……固有結界を展開し、挙句に、謎の力で、僕と仁哉……そして、デバイス達を、無力化……）」

……あぁあ、変な思考をしてるわねぇ。いいから、早く私の前で頭を下げて、言う事を聞きなさいよ

「……一体、何をしたのですか？」

「……ウフッ」

あぁ、コイツはちょっと聞きわけが良いみたいね……

「何って、私の固有結界の能力を使ったのよ」

「固有結界の、能力？」

「そう。この空間内ではね。“如何なる行動も、私の許可なしでは行えなくなるようになる”の。つまり、“この空間では、何もかもが私の思いのままに動く”って事よ」

「なッ！！！？」

「んんぅ！！！？」（ナニィ！！！？）

あら、驚いちゃって。まぁ、仕方ないけどね……

「ここは、私の世界……純白の白百合を穢すモノは、その行動を

抑制される。何者にも触れることのできない、高嶺の花として、ね」
「……な、なんだよ、それ……（つまり、自分以外は、行動を制限される……そんな空間、ある意味無敵じゃないか）」
うっふふふ……いいわねぇ、その絶望に満ちた表情……
…こうして見下しながら見るそれって、最高の眺めだわ♪

「ンンッ！！　ンンンンンンンンンッ！！！！！！」
（おいッ！！！　なんでこんな事をするんだッッ！！！！！！）

……ったく、なんて声量をしてんのよ、コイツ……口を閉ざしても聞こえる声とか、考えられないわね……はぁ、男って、ホントムサイ存在ね。ていうか、何言ってんのかしら……

「……どうして」
「ん？」
「どうして、こんな事をするんだ？　一体、僕は君に何をしたって言うんだ」

はぁ？　何をしたって？

「確かに、僕達は君を攻撃した。だが、少し考えてみれば、最初に襲ってきたのは、君達の方だった……何故、僕達に対して、攻撃をしたんだ」

……そんなの、決まってるじゃない……

「アンタ達が、“転生者”だからよ……」
「「？」」
「アンタ達が、原作介入しようとして、なのはちゃん達を……私

の愛する人を取ろうとするからよ。だから、彼女達に遇う前に、消しておこうってね……花に纏わりつく害虫は、駆除しなきゃ、ね……」

純粋な白……をれを濁らせない為に……

「私の、愛する人……？」

「んんんん。んんん、んんんんっんんんんんんん？　んんんんんんんんんんんんんん……」（おいおい。コイツ、頭言ってんじゃねぇのか？　女が女を愛するとか……）

なにか、またなんかほざいているようだけど……何をいっているのか、さっぱりわからないわ

「……まさか、“レズ”？」

「ッ！！！！」

「ゲシッ！！！！」

「グフッ！！！！？？」

「んんんッッ！！！！！！！！」（竜虎ッ！！！！）

黙れっ！！！！　レズなんて、そんな汚らしいモノと、私の愛を一緒にするなッ！！！！

「ッ……もしかして、君は……」

「えぇ、そうよ……私ははやてちゃんを、なのはちゃんを、フェイトちゃんを、愛しているのよ。だから、それを邪魔するっていうのなら、私はソイツを許さない」

「「……」」

何よ、その訳が分かりません的な表情は……

「あぁ、あと言っておくけど……例えアンタ達が、なのはちゃん達に出会った所で、何も出来ないからね……もうあの子達は、私の女(モノ)なんだから」
「は？」「んん、んっん？」
「あら？　聞こえなかったかしら？　もう、あの子達は私が奪ったのよ。身も、心も……そう、キスも、処女も、つまりあんな事も……全部、ね」
「「！！！！！？？」」

信じられないって表情してるわね……まぁ、予想通りだけど

「嘘だッ！！！」
「嘘を言う必要がどこにあるの？　正真正銘、本当の事よ」
「……だ、だが、あの神様から聞いた話だと、今はなのはの撃墜が起きた辺りって聞いたぞ！！！　まだ、彼女達は小学生……そんな関係になんて、成れるはずが無い！！！！」

……はぁ？　何を勝手に決め付けているのよ。コイツ、馬鹿ね……恋愛に、年齢なんて関係ないんだから

「……いいわ……だったら、見せて上げる……私と、なのはちゃんとフェイトちゃん達との、“なれ初め”の一幕を」
「「「「「「「「「「ヴンッ」」」」」」」」」」
「「？……！！！！！

ビビが出したモニター。そこには、彼女と自分の女神達。そして、天使とも言える七人の女性と少女達との、交わり合う姿が映し出されていた。深く口付けをし合い、肌を重ね合わせ、互いの秘部に触れ合い、犯し合う……そう、あわよくば……もし、出来る事ならば、自分達がやろうとしていたことが、本人達が想っていた事とはまったく違う形で、映し出されていた

「な……なんだよ、これ……」

「何って、言ったでしょ？　私とあの子達との、なれ初めだって」

「ん……んん、んん……？」（う……うそ、だろ……）

二人は、目の前に映る映像を、信じられなかった

「ど、どうせ……合成とか、作り物だろ」

「いいえ、違うわ……正真正銘、本物よ。あの子達の初めては、全部私が奪ったんだから。この唇で、この手で、ね」

「「ッッッッ！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！？？？？？」」

ありえな、かった……わずか、何もかもが未成熟な小学生を犯した事など……二人は、考えられなかった……

「ほら、見て。このベッドのシーツ……あれ以来、洗うのが惜しくて、ね」

「「……？」」

ビビが指し示す、ベッドの上……それは、何か水のようなモノで濡れて、ベトベトのままに成っているシーツが、引かれていた

「分かる？　この汁……あの子達と、皆で一緒に交わった時の、愛液よ」

［ヴンッ］

「「……」」

新たに現れた、大きめの映像……そこには、ビビと……そして、二人にとっての女神である九人の少女と女性達が……互いを求め合うように体をすり合わせている姿が、映し出された

「あぁ……やっぱり、この時ほど、気持ちよかったことは無かったわね……今でも、このシーツに付いている愛液の匂い、嗅ぐだけで、イッちゃいそう♪」

「「ッッ……！！！！！？？」」［［ゾクッ］］

シーツを手に取り、それを鼻に近づけ、匂いを嗅ぐ……その表情は、恍惚に満ちたモノであり、周りから見たら、異常でもある風景だった

「いい？　もうあの子達は、私の女（モノ）なのよ。アンタ達なんか、付け入る隙すら、無いのよ。ウフフフッ……」

「「ッッッッッ……！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！？？？？？」」

絶望、した……もはや、自分達の女神は、目の前の少女によって、歩んではいけない道を歩んでいる事を、知った

「「ッ……」」

もう、自分の女神達が穢されている姿を見たくなくて、映像から目

を反らし、更に目をキツク閉じた

「……“映像から目を反らすな”」

「「グイッ！！！！」」

「「！！！！！？？」」

「（そ、そんな事まで、命令出来るのかッ！！？）」

虎太郎は、相手のその力に、更なる驚愕と、恐怖を覚えた。そして、こうも思った……今、自分達の命は彼女に握られており、いとも簡単に握り潰せることが出来る、と言う事を

「ダメじゃない。せっかく見せて上げてるんだから……本当は見せるの、嫌なんだけど、こんなの滅多に見られないのよ？　今の内に、“嫁だと思っていた相手”の裸体を、充分に堪能しておきなさい……感謝なさい。アンタ達みたいな下衆な男なんかに、見せる気もなかったモノなのよ。しっかり、目に焼き付けておきなさい」

「（こ、こんなん、見たくもねぇよッ！！！！）」

「あぁ、私って、なんて慈悲深いのかしら。ウフッ、ウフフフフフフッ……」

否、これは慈悲では無い。これは、相手に絶望を与える為だけに、やっている事だった

もう二度と、自分の愛する人たちを、勝手に“自分の嫁”だと、言わせなくする為に……二度と、手出しをさせない為に……

「なのはちゃんとフェイトちゃんは、“私の嫁”よ」

「「……」」

……その後、仁哉と虎太郎の二人は……魂が抜け落ちたかのような表情で、ビビとなのは、フェイト、はやて、アリサ、すずか、シグナム、ヴィータ、シャマル、リインフォースとの淫行を、何時間も、見せつけられていた……

そして最後には、現実逃避でもするかのように……二人とも、気絶をしてしまい、その場で倒れたのであった……

「ウフ、ウフフフフ。フフフフフフフッ……」

勝者は、禁忌（ビビ）……歪んだ愛だった……

#６３－Ｂ　白百合の舞踏、歪んでも、変わらぬ思い（後書き）

【“多重神魔憑依（デュアル・アバター・オブ・リンク）”】

ビビのデバイス、“ベアトリーチェ”のモード０２、“神魔憑依（アバター・オブ・リンク）”のサードエディション。名前の通り、自身の身に、複数の神魔招来（アバター）で召喚可能の存在を、我が身に憑依させる能力。の際、姿はその存在達の特徴を併せ持ったかのような姿と成り、更にはその二つの力を“反発させる事無く”、発揮させることが出来る。既に使えられる状態だったのだが、反動によるリスクを負う事により、使用はしていなかった。が、起源覚醒者と成り、その時に編み出し、出来るようになった自身の“固有結界”のサポートにより、使用可能と成った

【ファイナル・アーキア・ブラスター・フォーム】

仁哉と竜虎が、転生前に遊びで考えたモノの事で、グレンラガンの謎の合体機構を利用した、“高エネルギー体射出砲撃形態”。ミーティア・ユニットそのモノを、アーク・グレンラガン（本編では、ラゼンガンとの合体だった為、アーク・ラゼンガン）の手持ち武器としてしようする、ある意味男のロマンを詰め込んだ一品（ｗ）
発射の際、虎太郎がエネルギーチャージを。仁哉が照準と機体制御、トリガーの役目を持つ
なお、ミーティア・ユニットを“デンドロビウム”や、“ジェネシス”に変える事も可能らしく、その時は、“カテドラル・ラゼンガン”か、“超銀河グレンラガン”でやる必要があるらしい……威

力は保障します

【白百合の花園（リリィ・ザ・タブー・ガーデン）】

ビビが創り出した自分専用の“固有結界”。その風景は、本編でも書いてあるように、一面白百合の花畑である世界。ここに立つ東屋は、彼女のお楽しみ用の為にある建物である（w）。その空間では、何もかもがビビ思うがままとなり、ビビの許可なしでは何もする事が出来ない。唯一、ビビの許可なく自由に動けるのは、ビビの毒（マジュツ）を容れられた者のみである（つまり現状では、はやてやなのは、フェイト達のみである）。

更に、この固有結界が展開されていなくても、常時“ビビの肉体に対するありとあらゆる反動、危険が排除される”という、その力の片鱗が動いている。それが、前述にある“多重神魔憑依（デュアル・アバター・オブ・リンク）”が使用可能となった理由である

なお、この危険というのは、生命活動に対するモノで、致死量のダメージを受けそうになっても、その攻撃を弾き返すことを可能とし、病源菌も無効化し……つまり、死を排除する（ようするに、ビビも不死となったのである（しかし、グレイと違って、不老ではないが））

＃６４　蒼き神の光、創生の輝き（前書き）

いつもより、ちょっと早めの更新です

今回、かなりの超展開を迎えます。そして、今まで隠されていた何かが、明らかになります。まぁ、いつもみたく、グダグダの駄文ですが……

次回は、久しぶりにカミウラの方を掲載しようかと思います。来週中に更新予定ですので、お楽しみに

ムーギネーター様、あんぎゃーす様、鳴神　ソラ様、真王様、緋水様、ポッキー様、空言天孤様、装甲轟鬼様。ご感想、ありがとうございます！！！

＃６４　蒼き神の光、創生の輝き

――――――そして、とある兄妹（しまい）は、とある世界の神と出会う……
蒼き光を纏い、蒼き闇を抱える……命を尊ぶ、“創生”の神と……
……――――――――

……青空広がる荒野……

「……クックックックックッ……クッハッハッハッハッハッハッハッハッハッハッハッハッハッハッ！！！！！！！！！！　ヒャーヒャッヒャッヒャッ

に、彼は大いに喜んだ

「クックックックッ……やはり、“あの記憶”を“封じておいて”、正解だったよ。アイツにとって、あの記憶はもっとも大切な記憶……“愛していた存在”と、交わした約束……」

そう言いながら、彼は虚空に両の手を伸ばし、そしてその両手の小指同士を絡ませ、指切りのような形にする

「なにかしらのキッカケになると思い、あえて記憶から消し、命の危険と成ったときに、思い出すようにさせておいて正解だったよ……まさか、それが起源覚醒のトリガーになるとは、全く想像もしてなかった……クックッ、クッハッハッハッハッハッハッ！！！」

だが……だからこそ、彼はそれを楽しみ、喜ぶ……予想外の事態に。それこそ、彼の一番の楽しみだから……

「にしても、妹も妹だな。まさか、自力で自分自身の固有結界を作り上げるとは……ハッハッハッ、なかなか面白いねぇ」

妹の方に関しては、“まるで興味が無いかのような”、棒読みみたいな口調で言った

「しかし、中々強力な固有結界だなぁ……まるで、他者を浸食するかのような、そんなおっかなすぎる能力……やはり、彼女は他を浸食させる事に関しては、とんでもない程の才能を見せるな」

如何なるものも、己の色へと変えてしまう……純粋な白。そう、彼女を表すには、この言葉が似合う

「“浸食する白”、と言った所か。色ってのは、どんな色を混ぜても、決して白にはならない……が、あの妹の場合、それを完全なる白へと変えてしまう……浸食者として、半端無い力を秘めてんな♪」

まぁ、自分はそう簡単に浸食はされんがなｗｗｗ　そう、俺の起源だって、“浸食起源”だし、な……

「逆に、グレイ・スティンの場合は……何者にも変える事の出来ぬ黒……“汚れ無い黒”、と言うべきかな」

他者に感化されず、如何なる事にも動じない。どんなことがあっても、我を貫く……一点の曇りなき、純粋な黒

「“汚れ無い黒”、“浸食する白”……ホント、正反対だなぁ、あの兄妹は」

感嘆するかのように息を吐く、神であっｔ「ん？　待てよ……“黒”と“白”？」

……

「いや、そんな訳ないか。気のせいだ気のせい……」

そして、大空に広がるモニターを見上げる。そのモニターには、先ほどの戦いがハイライトのように流れており、様々な場面を映していた

「……そういえば」

ふと、彼は口元に手を当て、何かを考え始めた

「あの子のデバイス、あんな設定だったかな？　確か、ハジメ君以外のデバイスＡＩは、全部持ち主の性格と性別、思考傾向を基盤としている筈。なのに、なぜ彼女のデバイスだけ……」

彼は、ある事態について、考えていた……それは、“寿夢乃”の事であった。ただのイレギュラーにしては、少々引っ掛かる

「どういう事だ？……なんで、彼女のだけ……それに、“ヴォルケーノ”って名前、どこかで……」

かつて、どこかで聞いたことのある事……己の思考を、深い深い底へと潜らせていき、記憶の泉から、その情報をサルベージする……

「“ヴォルケーノ”……“ヴォルケーノ”……ん？　“ヴォルケーノ”？」

思い浮かんだのは、ある少年……己の反存在にして、同じ志を持つ者、そして……友の一人

「……まさか！？」

そして、思い出す。蒼い髪に、紅と翠の虹彩異色の瞳……“創生

”を司る、己の同志を

「あんのヤロウッッ！！！！！！！！！」

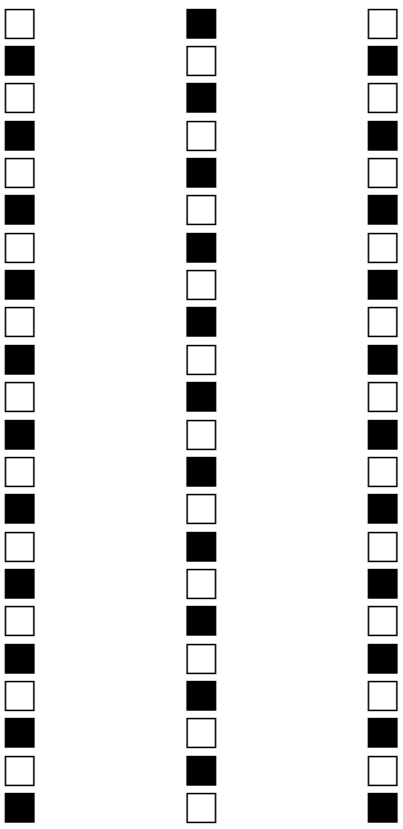
［ダンッ！！！！］

座っている姿勢から、器用に地面を蹴りあげ、空中へと躍り出た

「ッ……！！！！」

［フッ……］

そして彼は、そのまま風のように、姿を消した。その時の表情は、彼には珍しい……“怒り”の顔であった



……管理局が、未だに観測していない世界。とある惑星のその上空

「……天音ちゃん、ハジメ君……」

『……』

その空域に、唯一残っていた者……最初は、天音とハジメの二人と共に、グレイと戦っていた少女……寿夢乃であった

「仁哉君と虎太郎君も、下の方に降りていっちゃったし……ど、どうしたらいいかな？ヴォルケーノ……」

もう、自分の周りには誰も残っておらず、今や自分一人、と言う状況……どこか心細さを感じ、ふと、自分の首に掛かっているペンダント……彼女のデバイスである、“ヴォルケーノ”に問いかけてみた

『……そう、だね……とにかく、まだ動かない方がいいと思う。もし、片が付いたら、連絡してくれると思うし』

「そ、そうだね……」

『それに、まだ四人とも、元気みたいだから、そんなに気を落とさなくても大丈夫だよ』

「う、うん！　ありがとね、ヴォルケーノ」

屈託のない、明るい笑み。それを、自分のパートナーであるデバイスに向け、一息安心した気分になった……が

『……！！？』
「？　ヴォルケーノ？」
『ハジメ・クレバヤシの生体反応、衰弱！？』
「え……？」

突然の事に、夢乃は素っ頓狂な声を上げた。そして、自分のパートナーが何の事を言っているのか、理解できなかった

『まさか、まだ倒してなかったのか？……！！？　上谷仁哉と竜ヶ崎虎太郎の生命反応が消失？……一体、何が起きてるんだ？』
「ど、どうしたの？　ヴォルケーノ……」

自身のデバイスのみが現状を理解していて、夢乃は一人、困惑し始める

その時……

「ゴアアア

アアアア

彼女は、最悪な事態を、想定した。先ほどまで、自分と一緒にいたはずの四人が、傷付き、倒れている様を……

『……夢乃、一旦下に降りてみよう』

「！！　う、うん！」

今は心の拠りどころであるデバイスの言うとおりに、夢乃は、皆が降りていった地面へと、向かった……

□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■

その空域の下の地面……

［パキィィィィンッ］

「……っと。ふぅ、疲れた（- Δ - ；）」

「「――――」」

空間が割れたような音が鳴り響いた直後、何もなかった地面に、転生者兄妹の妹、ビビと……新たに現れた五人の転生者の内の二人、仁哉と虎太郎が現れた。だが、ビビはともかく、仁哉と虎太郎に至っては、気絶をしていて、意識が無かった

［……ズル、ズル、ズル、ズル］
「あ、お兄ちゃん」
「……」
何かを引き摺る音と共に現れたのは、ビビの兄である、グレイだった。そして、彼が引きずってきたのは……
［［ドサッ！！］］「「――――――」」
グレイと戦っていた、三人の内、二人の転生者……天音と、ハジメの二人だった。天音は気絶をしているだけだったが、ハジメは全身が煤だらけで、出血量が他よりもひどかった
「うわぁ。これまた、酷くやったね」
「……」
「でも、その子はあんまり怪我してないね。ふぅ、良かった」
［タタタッ］
そう言うと、ビビはグレイが引き摺ってきた二人の内、天音の方へと向かって、その近くでしゃがみこんだ
「うわ。でも、近くで見ると、結構傷だらけ……待っててね。直ぐ、回復魔法を掛けて上げるから……“ケアル”」
［ポウッ……］
そう言うと、ビビは手を天音のほうへとかざし、かざした掌から、緑色の光が放たれた……
「……そいつだけにしか、やらんのか」

「え？　うん……男なんて、放っておけば直ぐに回復するでしょ」
「……あっそ」

明らかに、人間とは思えない行動をする妹。そして、その妹に対し、何も感じることが無い兄もまた、ヒトではなった……

グレイとビビ。この兄妹は、人としての存在意義を喪失し、人間では、なくなっていた

「……あ（。д。！）　そういえば、お兄ちゃん。」
「なんだ？」
「確か、もう一人いたよね、女の子」
「あぁ」
「その子は？」
「……さぁ。まだ空の上じゃねぇのか」

そう言いながら、もう一人の事を考えている時……

「……スタッ」
「む」「あれ？」

丁度、その子が……夢乃が、その場に現れた

「！！！？　天音ちゃん！！　ハジメ君！！　仁哉君！！　虎太郎君！！」
「ダッ！！！」

一緒に転生してきた四人の名前を叫びながら、その四人の元へと走りだした

［シュルッ］
「ひやっ！！？」
「初めまして、かわい子ちゃん♪」

だが、その途中で、天音の傍にいたはずのビビが夢乃の背後へと周り、後ろから彼女に抱きついた

「はぁ、またか」

その様子を見ていたグレイは、ため息混じりで、ビビの行動に呆れていた

「え？　あ、あの……ええぇ？」
「私の名前はビビ、ビビ・スティン。あなたの名前は？」
「ゆ、夢乃……寿、夢乃です」
「夢乃ちゃん、ね……可愛いらしい名前だね♪」
「え？　あ、は、はい……」

後ろから抱きついたビビは、口を夢乃の耳元へと近づけ、囁くように、彼女の名前を聞いた

「あ、あの……天音、ちゃんは？」
「天音ちゃん？　あぁ、あの子ね……大丈夫よ。回復の魔法を掛けたし、怪我は酷くも無かったから。しばらく安静していれば、問題無いわ」

その声は、どこまでも優しかった……まるで、愛する人に向けるような……そんな、雰囲気を持つ声を出して……ビビは、“夢乃を己のモノにしようと”、動き出した

「だから、ね……気が付くまでの間、私と「それじゃぁ、ハジメ君は？」ッ！！」
「仁哉君と虎太郎君も、大丈夫なの？」

ハジメ、仁哉、虎太郎……どう聞いても、男の名前。それに、仁哉と虎太郎は、先ほどまで自分と戦っていた二人の事だ

可愛い子の可愛い声から、聞きたくも無い男の名前が出た事が……はらただしかった

「……男なんて、魔法なんてしなくても、自力で回復するでしょ？　だから、ね……夢乃ちゃん」
「？　な、なに……？」
「私のものに、なってくれない？」
「ッ！！！？」「ゾワッ！！」

怖い……彼女から放たれる空気が……彼女が醸し出すその空気に、夢乃は、底知れぬ恐怖を感じた

「あ……いや……は、離してッ！！！　イヤァッ！！！！」

彼女に抱きしめられた状態で、夢乃はその身を暴れさせる。だが、しっかりと抱きしめられた状態で、ビビを振りほどく事が出来なかった

「大丈夫よ、怖がらなくてもいいわ。すぐに、あなたは受け入れるから……私の、優しさに……だから、安心していいわよ、夢乃ちゃん」
「ひっ……い、いやぁ……」

安心なんて、出来なかった……彼女が出すその声、それはどこまでも優しかった。だが、夢乃は直感で感じていた。その声のままに進んでしまったら、絶対に取り返しのつかない事に成る。と……

……

「……た、助けて！！！　誰かぁぁぁぁぁッ！！！！」

「……」

本能的に、助けを求めてしまった夢乃。だが、その場にいたグレイは、その様子を見る事無く、自身が持っている魔導書型のデバイスを開き、その中身を読んでいた。ビビの事など、まったく気にはしていない様子だった

「ハジメ君ッ！！！　仁哉君ッ！！！　虎太郎君ッ！！！」

「「「――――――」」」

「ッ……天音ちゃんッ！！！！」

「――――――」

その次に、地面に気を失って倒れている四人。彼らにも助けを求めたが、返ってきたのは、無言であった……

「あ……あぁぁ……」

「大丈夫。大丈夫よ、夢乃ちゃん……」

「クルッ」

「きゃッ！！！？」

ビビに抱きしめられたまま、体を彼女の方へと向けさせられ……

ビビと夢乃が、互いに抱き合い、向き合う状態へとなった

「怖がる必要なんてないわ……貴方も、私の花園に、招待してあ

げるわ……夢乃ちゃん……ん」
「ッッ！！！！！？？」

そのまま、夢乃の唇へと、ビビは自分の唇をはこんでいく

「（イヤ……イヤァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァッッッ！！！！！！！！！！！！！！）」

心の中で、悲痛の叫びを上げる……誰にも、届く事など無い、叫びを……

『夢乃、ゴメン』

「（え……？）」

［カッッッ！！！

「ッ……」

吹き飛ばされたビビは、地面を抉りながら着地し、何が起きたのかを確認する。グレイは、突然の事態に体が動き、いつでも動けるように、構えを取っていた

□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□

「……あ、あれ？　なに、ここ……？」

「夢乃……」

「？　だ、誰？」

「ごめんね……少しの間、君の体を、借りてていいかな？」

「え……？」

「ッ……時間が無い。すまない、勝手に借りていくよ。君は、少しの間、眠っていてくれ」

「え？　あ、あの……あ、あなた、は……ヴォル、ケー……

……――――」

■■■

「……彼女なら、少しの間、眠ってもらう事にした。君達を、止めるまでの間、ね」
「はぁ？」
「……」
若干少年らしさが残る口調で、平然とした態度で、グレイとビビの二人を見る
「止めるって、どういう意味よ」
「言葉通りの意味さ……“彼”の掌の上で踊らされている、憐れな人形を、止める為に……」
「？」
「ッ……」
彼……この言葉に、ビビはなんの見当もつかなかったが……グレイは、察しがついた
「テメェ、あのクソ神の知り合いか？」
「クソ、神？……って、あの神様！？」
「……そう、だね。確かに、知り合いではあるね。もっとも、僕と彼は、同胞でありながら、反発し合う仲、だけどね」
「……」
やはり、な。と……グレイは、自分自身の察しが当たった事に、嫌悪感を抱く。たったあれだけの情報で、自分が嫌いな存在の事が分る事が、気に入らなかった
「……で、止める。っていうのは、どういう事」
そのまま、グレイは青年に対し、言葉を続ける

「そのままの意味だよ。コレ以上、彼の掌で踊り狂わされていく君達を、見ていられないから……彼によって、運命を捻じ曲げられてしまった、被害者を。ね」

「……」

青年の言葉……それを聞いて、グレイは思った。コイツは、あのクソ神の過去を知っている、と。そして、あの神との関係は、上下の関係では無いと言う事を……奴の考えから、外されている存在なのだと

ならば、あの神の事を聞いてみるかと、そう思った時だった

「訳分かんない事、ほざいてんじゃないわよッ！！！！」

［パチンッ！！！］

ビビの咆哮が、轟いた

□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■

「！？（なんだ、ここは）」

「ッ！！（これは……）」

ビビの轟きが止んだ後、周囲の世界は、彼女の世界……“白百合（リリィ・ザ・タブー・ガーデン）の花園”へと、姿を変化させていた

「（あの妹の力か？　なんだ、この能力は……）」

グレイは、始めてみる“固有結界”に興味を示し、分析を始めていた……

「（彼女の固有結界。確か、効果は……）」

対象の行動の束縛、だったはずだと……青年は思い出す。そして、どう行動するべきかを、思考する

「ウッフフフッ……さぁって、どう料理してあげようかなぁ……」

対するビビは、上から目線で青年を睨みつけ、どう殺そうかと思考する

「そうねぇ……じゃぁまずは、“私の目の前で、頭をさげｎ「チャキッ」ッ！！！？」

「ッ！！！？」

「それ以上、口から声を出さない方がいいよ……この位置なら、確実に君の命を奪える」

ビビの言霊が唱えられる直前だった……なんの脈絡もなく、青年はビビの背後に立ち、その後頭部に、いつの間にか手にしている銃の銃口を突き付けていた

＞ｉ２９４１６―３０４９＜

「ッ……このッ！！！」

［ダンッ！！！！］

距離をあける為に、地面を蹴りあげ、青年から離れようとする。そして、今度はひと思いに殺そうと考える

「ッ、この野郎が！！！　“今すぐ自分で自分の首を絞ｍ［チャキッ！！］ッッ！！！！！？？」

「……」［キュイイイ

その様子を見ていたグレイは、青年の能力を分析していた……なんの脈絡も無く、動作一つ無く……呼吸や、心臓の鼓動すらも感じなかった。なのに、彼は二度もビビの隙を突き、更に二回目の時には、既に魔力砲撃をチャージし終えている銃を腹に当て、それを放っている……

「（見えない……一体、どんな力を使ったんだ？）」

正体が分からなければ、自身の力で再現が出来ない……グレイは、更に思考の渦へと、身を投じる

その間、グレイが凝視し、ビビを吹き飛ばした青年は、周囲の風景を見渡しいた

「……なるほど。確かに、君の心の世界は、凄く綺麗で、純粋な思いで溢れている……この白百合は。この白で彩られた世界は、君の純粋な想いを表しているんだね」

愛する人と、一緒にいたい……ただ、それだけの想い。ソレを体現した……恋する少女の、一途な想いを描いた、素晴らしい世界だ。と……

「（否定はしないし、拒絶もしない。ただ……悲しいな）」

その一点でしか、物事を考えられなくなってしまうのは……凄く、寂しくなるのではないだろうか、と……青年は、白百合の少女を、哀れんだ

「……ＸＳ（クロス・スキル）」

［スッ］
「？」
青年は、手を上にかざし……彼の権能を、発揮する
「（だったら、見せて上げたいな……世界と言うのは、これだけじゃないって事をッ！！！）」
――――“再び刻む誕生の刻ッ！！！　ビッグ・バン”ッッッ！！！

オオオオ

禁断の楽園は、呆気なく崩れ去った……

□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■

白百合の世界が、元に戻った直後……先ほどまでいた場所へと、戻っていた。そこは、青年が引き起こしたと思われる爆発によって、荒れた大地へと、姿を変えていた

「ッ……（な、なんだったんだ？　今の、アレは……）」

先程の爆発を見て、グレイは戦慄していた……

「（あの変な花畑を、壊したのか？　いや、にしても……あの爆発は何だったんだ？　アレは、魔法じゃないし、科学的な事でもない。何か、それ以上の……）」

そう考えているグレイをよそに、青年は、未だに片腕を上げたまま、その場に立っていた

「（しまったな……外の世界にも、影響を与えてしまったか……

……でも、彼と彼女は無傷みたいだし、あの四人も無事だ……
…それだけでも、良くやった方かな？　僕も、まだまだだな）」

あの爆発が起きる寸前……彼はグレイとビビ、そして外の世界にいた仁哉、虎太郎、ハジメ、天音の六人に対し、自分のあの爆破攻撃にも耐えられる障壁を張っていたのであった。故に、彼らはあの爆破で傷付かず、煤すらも付いていなかった

「よくも……」
「！」

自分の向いている方から、ビビが遠雷のような声を出して、青年を射殺していた

「よくも……よくも私の世界をッッ！！！！！！！」
「ッ……」

自分の楽園を……最上の理想郷を破壊され、怒りに満ちたビビの表情を見て、青年の心は、痛んでいた

「……すまない。でも、こうでもしないと、君に話を聞いてもらえそうになかったから、ね」

青年は、心の底からの謝罪を述べ、深く、頭を下げた

「ッッ……！！！！！！！　男の話しなんかッ！！！　聞きたくも無いッッ！！！！！」
［［ギュイイイイィィィ

青年の謝罪の声すら、ビビにとっては嫌気の刺す邪言でしかなかった……故に、自身の両手に、魔力スフィアを形成し、その力を、青年へと向け始める

「……本当に、君は純粋だね。そこまで純粋にいられるのが、少し羨ましいよ」

ただ一つの想い……それだけの為に、他の全てを排除する……

……まさに、究極とも言える一途さ……これほどまで、真っ白な少女の生き方に、青年は、憧れのような気持ちを感じた

「でも……悪く言えば、それは盲目的すぎる！！　世界には、今君が見ているモノの他にも、素晴らしいモノはあるんだッ！！！！」

［チャキッ！！！］

君が見ている世界は、狭すぎる。憧れに似た気持ちを抑え、自分が生きてきた中で感じた事を叫び、青年は、再びその銃口をビビに向ける

「“百合”以外に素晴らしいモノなんて、あるもんかァァァァァアアア

アアアア

オオオオオオオオオオッッッッッッッッッッッッッッ！！！

オオオオ

驚いた……青年は、グレイの持つ中で、無駄な能力である“驚異的なカリスマ”の事を、知っていたのであった

「テメェ、なんでそれをッ！！！」

「……僕が言えることは、一つだけ……僕も、君達兄妹の物語の、読者だからね」

「は？」

物語？　読者？　どういう事だ……？

「あぁ、ごめん。小難しく言ってしまって、申し訳ない。そう言っても、君には理解出来ないか……簡単に言うと、君達の事を“監視”していた。と言った方がいいだろう」

「監視、だと……？」

つまり、グレイとビビの事は、四六時中、ずっと誰かに見られていた。と、彼（かのじょ）は判断した

「そう……正確には、彼がやっている事を、勝手に覗いていたんだけどね」

「彼……」

おそらく、あのクソ神の事だろう……つまり、アイツはずっと、俺達の事を見ていた、と言う事になる

「虫唾が走る……」

やはり、あのクソ神は一度思いっきりブン殴るしかない……そう、再び心に誓ったのである

「で、アンタは何者なんだ。俺達の事を知っていて、自分の事を話さないってのは、不公平だと思うが」

あのクソ神の関係者だと確定している。それでもなお、彼の正体を知りたがった……この青年の正体を知ることは、即ちあの神の正体を知る事が出来る、と……そう考えたからであった

「……確かに、不公平だよね……でも、申し訳ないけど、簡単に素性を明かす訳には、いかない身の上でね。申し訳ないけど、黙秘させてもらう」

「……あぁ、そう」

だったら……こうするしかない、な……

「タマモ、“無限再生プログラム・過剰駆動”を始めろ」

『御意。モード・“千手邪鬼”、発動します』

［グジュグジュグジュグジュグジュグジュグジュグジュッッ！！！！！！！！］

「！！！（これは！！）」

グレイの背中がゲル状に溶け出し、それが無限の如く溢れ

［バキバキバキバ

グレイは、相手を叩きつぶし、そして吐かせる事を、選んだ

「……やれやれ。彼の周りには、血の気の多い人ばかりが集まるね……彼の愛人にしても、親友にしても……仲間にしても」

遠い昔を見るような目で……そして最近あった事を呟くような声で、彼(かのじょ)を見つめた

「悪いけど、僕は君よりも強い。先ほど、あの子を圧倒した力を見ていて、それでも挑むと言うのかい？」

「テメェの力は、概ね察しが付いたからな……シュテン」

『合点承知ッ！！！』

「「「

」」」

「ッ……」

そのまま、お互い必殺の距離、必殺の位置を保ちつつ……互いの目を、睨みあった

「妹の奴がやっていたのを、見た事があるからな……“時間停止能力”、って奴だろ」

「……」

青年は、沈黙でその答えを、肯定した

「瞬間移動にしては、挙動が全くなかった。そして、一番初めに見せたあの砲撃魔法。あそこまでチャージを完了させるには、それなりの時間がかかるはず。なのに、それを一瞬で終わらせた……だったら、時間を止めて背後行き、そしてチャージを終えさせる……そうすれば、いとも簡単に近付く事が出来、攻撃を与えられる。違うか」

……先ほどまでの、彼の行動を見ていて、考えた結果を、青年にぶつけた……

自身の察し

「正解だよ。さすが、彼が見込んだ存在だね」

「……で、どうするんだ。種がバレたんだ。そう簡単にやられる気はねぇぞ」

「……確かに、ネタがばれてしまったら、対策は簡単だよね……でも、君は一つだけ、勘違いをしている」

「何？」

[[[[

よ」

「！！！？」

思考の渦に沈んでいた隙に、青年はグレイの背後から離れていた。
しかも、銃口をグレイに向けて、今にも発射しそうな体制だった

「……言ったはずだよ。僕は……君よりも強い、ってね」

そう言いながら、彼はその異なる色の瞳を閉じ、意識を集中させ…
……叫ぶ

――――――“ケルレウス”ッ！！！！――――――

［バサァァァァァァァッ！！！！！！！］

「！！！？」

彼が叫んだ直後、背中に機械で出来た翼が出現した……それは、
淡い蒼色に光り輝く、エネルギーで出来た、ビームウィング。そし
て、両腰に、鋼鉄で作られた突起物が追加されていた

「これで、終わりだ……“ヴォルケーノα”ッ！！！」

『了解。“ベクターキャノン・モード”へ移行』

［ギュインッ……バサァッッ！！！！！！！］

銃を両手で持ち、背中の翼が、彼の後ろで大きく広がり……まる
でエネルギーをその銃身に収束……注ぐかのような体制へとなった

『エネルギーライン、全段直結』
［ウォウォウォウォウォウォウォン……］

そして、その銃の周囲に、六角形のプレートのようなモノが出現し、それが銃口を中心に回転を始める

「（アレは……不味い！！！）」

相手の行動、それはおそらく相当強力な砲撃を放つ為の姿勢だと感じ、それを止める為、すぐさま行動しようとする……

［バシィッ！！！］
「ッ！！！？　な、なんだ？」

だが、動き出そうとした直後に、グレイの身が固定され、身動きが取れなくなった

「バインドさ……悪いけど、少し全力を出させてもらおうよ」
『ライディングギア、アイゼン、ロック』
［ズガガンッ！！！］

腰の突起物から杭が伸び、それが地面へと撃ちつけられ、青年の体を固定した

『チャンバー内、正常加圧中』
「ッ……タマモ！！　シュテン！！　スウトク！！　バインド解除は！！？」
『やっています！！　ですが、この術式……まったく解析が出来ないんです！！！』

『なんなんだよコレは！！！　全く分からないでゴザル！！！』
『陳に解析が、出来ぬとは……』
彼（かのじょ）は、自分に付けられた“見えないバインド”を解除しようと奮闘していた。が、それを解除することが出来ずにいた
『ライフリング、回転開始』
［ギュイイイ

［ゴオオオ

オオオオ

武器をしまった直後、彼は手を二人に……気絶しているグレイとビビの二人に向けた

「……ッ！！！」

［［バチンッ！！！！］］

すると、その手から稲妻が走り、それが二人の体に当たった。しかし、その稲妻が当たった個所は、焦げる事も無かった……

「……これで、彼らは暫く、アイツに踊らされることは無くなる、かな」

何かを二人にした青年は、上げていた手を降ろし、再び一息ついた

……

―――――“デストロイッッ！！！！！！　フォオオオ

［ズガガガ

ァァァ

――――――“久遠の創生者（ザ・クリエイター）”、“フワル（Fwal）・ウィンディス”ッ！！！！――――――

「……それを言うなら、僕からも言わせてもらうよ、破壊神……いや」

――――――“契りの仲立ち人”、“リィーン・スプリングフィールド”ッ！！！！――――――

カミウラ　～出張号～（前書き）

どうも、こんにちは、リィーンです

今回は、こちらのほうにも、カミウラを掲載しようかと思います。
連載として掲載している方の“神の舞台裏”と同じ内容ですので、
注意して下さい

ムーギネーター様、真王様、あんぎゃーす様、緋水様、けびん様、
ｅｖａｎｇｅｌｉｎｅ様、空言天孤様。ご感想、ありがとうございます！！！

カミウラ　～出張号～

神様「いようッ！！（。ω。）ノ　皆ぁ、ひっさしっぶり～～～ッ！！！！　さぁ、今回も張りきって、“神様の舞台裏”。略して“カミウラ”ッ！！　はっじめるよぉぉぉぉぉッッ！！！！！！」

【……】

神様「オイゴラァァァ

［スッ］（まともカンペが現れた）

神「なになに？　“いつものレギュラーである旅人様は、最近感想版の方へ行かれているのを理由に、カミウラ出演を拒否。嫁ズの一人、レヴェッカ様も同様の理由で拒否。残りの嫁ズは、未だに絶頂状態が続き、出演不可能……よって、出られるレギュラーが、神様一人と言う事に成っているからです”……ほう、レヴェッカの奴、よほど俺のお仕置きを喰らいたいみたいだなぁ……クックックックッ」

［スッ］（三度、カンペが現れた）

神「？　“ですから、今回はゲストを呼んでいますし、お題も特別なモノと成っています”？　おい、それは誰だ？」

［スッ］（またまたまたカンペがｒｙ）

神「……ほうほう。そいつは良いねぇ。なら、出てきていただきましょう！！！　今回のゲスト！！　我が反存在にして友！！！　今作品のイラストレーター“同志Ｆ”のキャラクターこと、“フワル・ウィンディス”く～～～～んッッ！！！！！」

［……］

神「ってこねぇじゃねぇかよ！！！！！」

フワル「いや、来てるけどね」

神「ウオオオオオッッ！！！！！？？　い、何時きやがった！！？」

フワル「ついさっき。脅かしてやろうと思ってね。時間停止使って、君の背後から現れたんだ」

神「変な事に力使うなよ、おい……」

フワル「それを君が言うかい？　でも、君の小恥ずかしい姿を見れたんだから、大成功だったかな？」

神「コロスゾ」

フワル「やれるものなら、ね」

［ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴッッッ……！！！！！！！！！！！！！」

［スッ］（カンペがｒｙ）

神「あぁ？　何々？」

フワル「“ここで暴れないで下さい。ただでさえこのスタジオ、毎度毎度の夫婦喧嘩のせいで、ガタが来ていますので”……相変わらず、君たちは激しいねぇ」

神「お前の方は、そう言ったケンカとかしてないのか？」

フワル「そんな野蛮な事なんて、一度も無いよ。僕と彼女の間には、ね」

神「あぁ～あぁ～。だっだ甘い空気出しやがってよぉ、妬ましいぜ

ゴラァ」

フワル「ははは。美人美女美少女達に囲まれていて、男としては勝ち組の方である君に言われたくないね」

神「なんだとぉ？　この糖分１０００％のイチャイチャバカップル夫婦が」

フワル「褒め言葉をどうも」

［ゴゴゴ

――――蒼き青年、フワル・ウィンディスとは？――――

――――【友人が】ハジメ・クレバヤシと、出雲天音のイラスト【修正したようです】

――――【作者であるリィーンが】神様の武器である大鎌、“万死ヲ刻陰セシ虹”【書いちゃいました】――――

フワル「以上、この四つのお題について、僕とリィーンが、話していくよ」

神（以後、リィーン）「っつう訳で、左の表記も、俺の本名で行かせてもらおうぜ」

フワル「さて……どこから話すんだい？」

リィーン「まずは、俺の事からだな……前々から公言している通り、俺は“神を超越している存在”であり、その状態になる前は、“破壊神”だった。そんで、その破壊神となる前は……“紅世の徒”っていう存在だった」

フワル「紅世の徒、って何？　という方は、ウィキペディアで、“紅世の徒”と検索してね」

リィーン「んでだ、話を戻すぜ……俺のその時の真名は、“契りの仲立ち人”っつう、なんともヘンテコな真名だったのよ」

フワル「それついては……作者さん呼んだ方がいいんじゃない？」

リィーン「あぁ、そうだな。そんじゃぁ、出て来い作者ぁ」

［ヴンッ］

作者「はいどうも～、“作者の”リィーンです」

リィーン「テメェ、俺と同じ名前を語るたぁ、良い度胸してんなぁ、おい」

作者「いやいや……ここでのペンネームを考えていたら、コレしか思いつかなかったので……」

フワル「まぁ、あなたはそう言う人、ですからね」

作者「分かってくれますか、フワル君……」

リィーン「ケッ……で、なんでこんな真名を付けたんだ？」

作者「まぁ、それを語るなら、まず私の“前作”の事をお話しなくてなりません……まず、私の前作というのは、“灼眼のシャナ”の二次創作だったのです」

フワル「灼眼のシャナ、って何？　という方は、グーグル先生で、“灼眼のシャナ”と検索してね」

リィーン「ググれって言えよ……」

作者「その始まりは、灼眼のシャナのアニメ一期の終わり方が、個人的に気に食わなかったんです。それに、当初は二期なんてやるか

どうか、怪しかったですから……」

フワル「つまり、アニメ版の灼眼のシャナの続きをやろう！！　と、そういう想いから始めたんだよね」

作者「はい。まぁ、その時は、“シャナと悠二”を完全なカップルにしてしまいたい！！！　という邪推が一番大きな理由なんですけどね……」

リィーン「お前、なにかとカップリングしたがるよな……」

作者「ならば、この二人をひっつけさせるための恋のキューピット役が必要だ！！　という考えを元に、真名を考案。当初ハマッていたマンガ、“エア・ギア”の“閃律の道（リィーン・ロード）”や、“契の玉璽”から着想を得て、“契りの仲立ち人”という真名を創り、名前も、その道の名である“リィーン”から取って……」

リィーン「俺が誕生した。と言う訳か」

作者「はい。そして、前作である灼眼のシャナの二次創作が始まりました」

リィーン「そんだ、書いていくうちに、最初は主人公として書いていた筈のシャナと悠二がフェードアウトして行き、俺が主人公に成って行っちゃったと」

作者「そうなんですよねぇ……」

リィーン「そこまでならいいんだがなぁ……」

フワル「書いていくうちに、どんどん設定を追加して行って、挙句には最初はただの恋のキューピット役としていたはずの存在が、破壊の神様に成っていたり、そこからさらに肥大化していって、神すらも超越しちゃって……って事に成ったんだよね」

作者「どうしてこうなった!!?　というのは、当にこの事だと思いますね、はい……」

リィーン「まぁ、おかげで俺は、考案から五年間、フェードアウトする事無く、コイツの書く作品全部に出演してるんだしな」

作者「おそらく、今後も使って行くと思いますね、あなたは……なにしろ、色々と凡庸性が高いキャラですから」

リィーン「ギャグからシリアス、おまけに戦闘から恋愛沙汰……なんでもござれのパーフェクトなキャラだからね♪　クッハッハッハッハッ!!!!」

フワル「まるで量産型のザクみたいだね」

リィーン「なんか言ったか?」

フワル「別に♪」

作者「で、もう一つが……なぜ、私が神様と同じ名前なのか……それは先ほども言いましたが、ペンネームを考えている時、この名前以外使う気にはなれなかったのです」

リィーン「……そこまで、俺の事が好きなのか?」

作者「そりゃもうそうですよ。なにせ、あなたは私にとって、“分身”とも言えるキャラですから」

フワル「おや、そこまで言っちゃうのかい？」

作者「はい。私にとって“リィーン”というキャラクターは、当に私が書く作品の中で、私の代わりに動いてくれるキャラクター……分身なのです。そして、私の思い描く“理想の人格”も兼ね備えたキャラ……つまり、私にとって半身であり、一番カッコイイと思う理想のキャラクター。それが、“リィーン”というキャラなのです」

リィーン「おいおい、照れるじゃねぇかよぅ♪」

フワル「あと、性が“スプリングフィールド”だという事に関しては……」

作者「これは、ごく単純な理由です。当初、書いていく時に、姿があまりにも不安定だったので、もうどこかから引っ張って来るか。と言う事で、“魔法先生ネギま！”の最強キャラ、“ナギ・スプリングフィールド”にしよう。と……それなら、性もここから取って、フルネームを、“リィーン・スプリングフィールド”にしてしまおう！！！　と……」

リィーン「つまり、あの作品のスプリングフィールド家とは、“全く関係無い”から、そこから変な憶測をすると、作者の思う壺だぜ～」

フワル「（因みに、憶測して欲しいのは、彼の真名、“契りの仲立ち人”って部分を考察してみると、彼の本当の力が分っちゃうよ♪）」

作者「以上が、現状明かせる情報です」

リィーン「つまり、まだ他に知らせていない情報が有る。と言う訳だな」

作者「はい。それは、おいおい報告していく予定です」

リィーン「はっはっはっ。全国１００億人の俺様ファンの皆！！まだ俺の事は、“謎の神様”と呼んでくれよな！！！」

フワル「はいはい、“ナゾノカミサマ”ｗｗｗ」

リィーン「ぶっ殺されてぇのか？　フワル」

作者「え、えぇっと……つ、次のお題の事に進めたいんですけど」

フワル「っと。なら、僕が答えた方がいいね……」

リィーン「早くしやがれ～」

フワル「だが断る」

リィーン「あぁん！！！？」

作者「お、抑えてください、神様……」

フワル「さて……それじゃぁ、次は僕、“フワル・ウィンディス”について。だね……簡単に言うと、僕はこの作品群の“作者であるリィーン”の友人、グレイ・スティンや、ビビ・スティ

ン、そして仁哉君や虎太郎君、ハジメ君、天音ちゃんのイラストを書いた人、“同志F”が考案した、オリジナルキャラクターなのさ」

作者「えぇ～……それだけだと、訳が分らないと思いますので、補足説明を」

リィーン「んとな。転生物語のキャラを描いてくれた“同志F”。そいつも、この作者と同時期に、灼シャナの二次創作を書いてたんだよ」

作者「正確には、私よりも、彼の方が少し先、ですがね」

リィーン「ちなみに、コイツの言う前作、俺が主人公だった物語を送っていた唯一の人、それが“同志F”なのさ」

作者「当初、彼の場合は私みたいに一つの物語を長続きさせる事無く、単発で作って行きましたが……ある一つの物語が最後まで長く続き、今では、自分の前作と同じくらいの量を書いていて、１００名以上のキャラを操ってましたね」

フワル「僕は、その途中で生まれたキャラで、“同志F”の分身的なキャラというコンセプトで作られたんだ」

リィーン「つまり、この駄作者で言う俺、のポジだな」

フワル「そう言う事。まぁ、理想云々は無いかもしれないけどね」

作者「理想、だと思いますよ……何せ、あなたの妻は、アイツの嫁ですから、ね」

フワル「まぁね……はは、それを考えると、確かに理想、なのかもしれないね」

リィーン「理想だろうよ。なにせ、二次創作とか、物語なんて書くのは、自身にとっての理想を描くようなモンだからよ。こうあってほしい、ここはこうあるべきだ。っていうのを現実にするのが、物書きって奴じゃぁねぇのか」

フワル「それもそうだね……現実逃避、とも取れそうだけど」

リィーン「言wえwてwるw」

作者「ううう……」

フワル「さて、それじゃぁ……次は、僕の分身、“同志F”の書いたイラスト晒しのコーナー♪」

リィーン「何気に楽しそうだな、おい……」

フワル「まぁ、僕の分身が書いたモノが乗るんだから、楽しみでしょうがないよ」

作者「では、まずはハジメ・クレバヤシ君の修正したイラストから。どうぞ」

＞i256794－3049＜

リィーン「顔だけか！！？」

作者「はい。男はもう、本当に書けないみたいです、生理的に」

フワル「その僕の分身から一言あります……“けびん様、大変もうしわけございません。このような雑なモノに成ってしまって、本当にすみません”」

リィーン「だが……メッチャかっこいいな、おい」

作者「結構全力出したみたいですよ、コレ……書けない身としては、もう充分なのですがね」

リィーン「無理言ったしな、お前も」

作者「本当にありがとう、同志F……」

フワル「続いては、出雲天音ちゃんの修正したイラストをどうぞ」

>i25680—3049<

リィーン「……どこ変わった？」

作者「ほんのちょっと修正したのと、カメラ位置を変えての撮影したみたいです」

フワル「可愛いねぇ……なんで、彼は男を書くのが苦手なんだろうね」

作者「そこは、もう……さっぱりです」

リィーン「まぁ、独特のタッチ、という事で良いだろう？」

作者「そう、ですね……」

リィーン「さぁって、今度はお前のターンだな、駄作者」

作者「個人的には、公開するべきか否か、悩みどころだったのですが……」

フワル「まぁ、せっかく書いたんだから、公開するべきだよ」

作者「うぅ……で、では……友人があぁいったイラストをいく

つも贈られてくる内に、自分も何か書きたい！！　と思いまして、何かキャラを書こうと思ったのですが……」

リィーン「下手すぎたんだよなｗｗｗ」

作者「もう、人に見せるモノではない。と言う事で、昔からよく書いていた分野……武器を書こうと思いまして、それなら何を書くか、悩んだ結果……」

フワル「この作品の神様の武器、二つの刃が取り付けられた大鎌、“万死ヲ刻陰セシ虹”。それを書こうと思ったんだね」

作者「は、はい」

リィーン「俺のメインウェポンなんだ。当然、カッコ良い出来なんだろうなぁ？」

作者「同志Ｆに見せた時のコメントは、“やだ、カッコ良い”と……」

リィーン「うわ、お世辞クセェｗｗｗ」

作者「と、とにかく！！！　晒させて頂きます！！！　これが、私の、全力全開ですッ！！！！」

＞ｉ２５６８１―３０４９＜

リィーン＆フワル「……」

作者「ど、どうですか？」

リィーン「まぁ……な」

フワル「うん。一つだけ言うと……」

リィーン＆フワル「武器か？　コレ……」

作者「お、大鎌です！！！　確かに、右の部分の形状は、大鎌っぽくないかと思いますが……」

リィーン「なんだよ、この黒い何かはよ」

作者「設定上、エネルギー刃、と言う事で……しかし、ただのエネルギー刃だと、なんだか物足りないなぁと思い、“魔法先生ネギま！”の、“闇の魔法、暴走状態”のネギ君の腕にあるグルグルを参考にしてみました。ちなみに、左の刃の部分は、この武器の元ネタである“．ｈａｃｋ／／Ｇ．Ｕ．”の“万死ヲ刻ム影”や、“スケィス２ｎｄ”の大鎌を。刃とはがｙく方向の部分は、“マンガ版、魔法少女まどか☆マギカ”の、“散って行くまどかの羽”を、目玉の意匠は、“ゴッドイーター　救世主の帰還”に描かれている“ザ

イゴード”の目玉を、それぞれ参考にして書いてみましたが……」

リィーン「いや、消し後が残って、それが目立つから、分かり憎いんだが……」

作者「……さ、さーせんｍ（＿＿）ｍ」

フワル「書き直したら？」

作者「もう無理です……」

リィーン「……」

リィーン「っと、そろそろ時間だな」

フワル「もうかい？　意外と長く、そして呆気なく早かったね」

作者「そう言うモノですよ、こういう企画モノは」

リィーン「うし。そんじゃぁ作者、もう帰っていいぞ～」

作者「え？　あ、あの、最後の挨拶ｈ［パシュンッ！！！］」

リィーン「うし、そんじゃぁ、シメの言葉と行きますか」

フワル「分身に対して、酷い扱いだね」

リィーン「こっちじゃぁもうこうなんだから、しゃぁなしだろ」

フワル「なるほどね」

リィーン「それでは!!　次回もこのカミウラ、楽しみにしていてくれよな!!!」

フワル「読者の皆さん。僕の半身、“同志F”が描くイラストも、楽しみにしていてください」

リィーン「それでは!!!」

リィーン「ばいば〜い!!!」

フワル「まったねぇ〜♪」

リィーン「おい、ここは合わせる部分だぞ」

フワル「君と合わせるなんて、吐き気がするね」

リィーン「なんだとぉ!!?」

フワル「やるかい?」

「ゴゴゴ

1919

カミウラ　～出張号～（後書き）

次回は、転生物語の続きを掲載します

なお、レポート提出や前期試験が在るため、更新はかなり遅れるかと思います

申し訳ございませんが、それまでしばらく、お待ちください

#６５（上）　破壊する事により、創造が生まれる。故に、彼らは相反する……

どうも、リィーンです

今回から、（上）（中）（下）と、神様と青年のバトルを描いていきます

なお、現在リアルでレポート提出やらテスト期間やらで、次の更新が、おそらく来月以降になるかもしれませんので、ご了承ください

（休憩の時に、少しずつ書くかもしれませんが……）

ムーギネーター様、あんぎゃーす様、鳴神　ソラ様、緋水様、装甲轟鬼様。ご感想、ありがとうございます！！！

#６５（上）　破壊する事により、創造が生まれる。故に、彼らは相反する……

――――その二人の出会いは、なんの因果だったのだろうか……

……

――――気まぐれな女神のイタズラか、数奇な運命の糸だったのか……

――――決して交わることのない二人……性格も、生まれも、歩んだ道も、自身の力の方向も、そして住んでいた“世界”でさえも……なにもかもが、相反する二人……

――――そんな二人……リィーンとフワルは、ある日に出会った……

――――それはもう、遠い過去の物語だ……

［……タンッ］
「「……」」

その二人は、互いに同じ地に立ち、互いを睨みあっていた

一人は、赤茶けたボサボサの髪に、七色に光る瞳をもつ、長身の男
……

“元”破壊神。今は、神を超越した存在となりし、“元”紅世の徒
……
通称、“リィーン・スプリングフィールド”。かつての真名を、“
契りの仲立ち人”

対するは、整えられた蒼い長髪を後ろで束ね、紅と翠という虹彩異
色の瞳を持つ、少年らしさが残る青年……

“元”創造神。そして今は、彼と同じ神を超越した、“造られし命
”……
名を、“フワル・ウィンディス”。そして“久遠の創生者”と、今
は名乗っている

「……“黄昏暁”」
『オッケェ。いつでも良いわよ、愚主……』
［パシュンッ］

破壊神……リィーンは、己の神具（デバイス）の偽装を解く。現れたのは、機
械仕掛けの義腕……紅世の徒の頃から使い続けてきた、彼にとっ

て生涯の相棒。夜更けと夜明け、相反する名を持つモノ、“黄昏暁（たそがれのあかつき）”

「……“ヴォルケーノα”」

［ジャギッ］

『はい。いつでも行けます、マイマスター』

創造神……フワルの手に現出したモノ。それは、銃の形状をした神具（デバイス）。彼の為だけに生み出され、彼のみに与えられ……彼と共に成長した、己の相棒……ある世界の龍の名を冠する神銃、“ヴォルケーノα”

［［ザッ！］］

「「……」」

彼らは、己の長年の相棒を掲げ……それを、振るいだす

「「ッ！！！！」」

［［バッッ！！！！！！］］

「“ヴァニティッッ！！！！！！！！」

「“エンシェントッッ！！！！！！」

――――――スマッシャァァァァァァァァァァーーー”ッッッ！！！！！！！！！！！！――――――

［［ゴオオオ

オオオオ

アアアア

直後、その硝煙の中に二人は突っ込んでいった

「オラァッッッ！！！！！！！！！！」

「デリャァッッッ！！！！！！！！！！」

［ガギンッッッッッ！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！］

［ブワアアア

「“トワイライト・ランサー”ッ！！！！」「“フォトン・ランサー”ッ！！！！」
［［ウォウォウォウォウォウォウォンッッッ……！！！！！！！！！］］

二人は、まったくの同時に、周囲に魔力スフィアを七つ形成し

「ファイアッッ！！！！！！！」「シュートッッ！！！！！！！」
［［ババババババシュッッッ！！！！！！！！！！！］］

至近距離であるにも関わらず、そのスフィアから、魔力弾を撃つ

［ズドドドドドドオオオ

「ッ……来い、“万死ヲ刻陰セシ虹”ッッ！！！！！！」
［バシュンッ！！！！　チャキッ！！！！」］

リィーンが取り出した物……それは、彼が長年愛用し続けていた得物……彼にとって、己が抱いてきた希望と、貫き通す信念を体現する武の器……両端に二つの刃を持つ禍々しき異形の大鎌……
“万死ヲ刻陰セシ虹”

「ッ……“ガゥンゼーヴィーガ”ッッ！！！！！！」
［ヴンッ！！　ジャギンッ！！！！」］

対抗するように、フワルが取り出した得物。それは、十字架の形をし、槍と鈍器が組み合わさったような武具……それは、彼の拭い切れない絶望の過去を思い出させる、破壊の力しか能の無い武器……
“ガゥンゼーヴィーガ”

――――――二人の生まれも、まったく違っている……リィーンは、希望となるよう願われ、紅世で生まれた。フワルは、絶望を約束され、望まぬ生を与えられた……

［［ダンッッッ！！！！！！！！！！！！！！］］
「ハアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア

ァァッツ！！！！！！！！！！」「ウオオオオォォォ

「ウオオオオォォォ

「グッ！！！？」

その交錯の中、リィーンは己が持つ刃に更に力を加え、彼の武器を押し返す……

「破壊神だった俺にッ！！！　破壊の力が通用する訳ねぇだろがァアアアアアアアアアアアアアッッッ！！！！！！！！」

［ガギイイイ

「クックックッ……壊してやったぞ？　お前の絶望をな」
「……正直、有りがたいんだけどね……どうも昔を思い出すし。それにコレ、僕と相性が最悪だから」
［ヴンッ］
そう言いながら、彼は壊れた“ガゥンゼーヴィーガ”をしまい、彼の方へと向き会う
「破壊の力には、同じ破壊の力を、と思って使ったんだが……やっぱり、破壊の力は、君の方が上手みたいだね」
「創造神だったお前に、破壊の力なんて似合わなねぇだろ？　クックックッ」
「それも、そうだね……」
リィーンは、笑みを浮かべならが、彼を見つめ……フワルは、射抜くかのような眼光で、彼を見る……
「だったら……これを使うまでだよッ！！」
［ジャギギギンッ！！！］
「！！！？（アレは……）」
フワルが取り出した物……いや、その身に纏わせたモノ。それは、シンプルな作りの手甲と脚甲であった。それと同時に、彼が纏う衣服の色が、白を基調としたコート状から、黒い暗殺者が纏うようなモノへと、姿を変えた
「“天先（あまさき）”……参るッッ！！！！！！！」
［シュンッ！！！！］
「ッ！！！」

次の瞬間、フワルが消えた

「（いや、違う……コレは！！！）」

［ボゴンッッッ！！！！！！！！！！！！！！！］

「――――ガハァッ！！！！？」

「ッ……！！！！！」

突如、リィーンの左の脇腹に、フワルの拳が当てられた

「（やはり……今のは！！！！？）」

「（今だッ！！！！）」

リィーンがフワルの行動を予測するが、すでに、時は遅かった……

……

［］［］［］

「……テン、メェッ！！！」
［ボオオオ

「ッ……このッ！！！」
［ブンッ！！！］

そして、空いている片足から蹴りを放ち、隙だらけの腋を狙った

［スカッ！！］
「ッ！！！？」「フッ」

だが、その攻撃は当たる事無く……いや、確かに当たってはいる。
だが、当たった所から、リィーンの肉体は炎と化し、フワルの攻撃を無効化した

「おい、忘れたのか？　俺は“元”、紅世の徒なんだぜ」
「（ッ！！　しまった、コレは……“完全炎化”か！！）」

“完全炎化”

紅世の徒であった彼が、その当時から考案していた、己の体の活用方法。自身の身が、こちら側に来た際に火の粉のような物質で構成されている事を知り、それを利用する手立てとして、考え付いたのは……自身の身を、人の形をした炎にする事であった

［パシッ！！］
「フン」［ジュウウウ

アアアア

「ッ！！　させんッ！！！」

［ボオオォォォォォッッッッッッッッッッッ！！！

と変換し、虹色の光の帯となって、その砲撃を相殺する為に放った

［ズガアアア

α”を、二丁拳銃状態で装着。それと同時に、衣服が再び白いコートへと変わった

「ハッ……万死ヲ刻陰セシ虹、“ツインサイズ・フォルム”ッ！！！」

［ガキッ、ガチンッ！！！］

リィーンは、自身が持っている二つの刃を持つ大鎌……万死ヲ刻陰セシ虹を、二つに切り離し……大鎌の二刀流状態へとなった

「行くぞフワルッ！！！」

［ダンッ！！！］

地面を蹴り、手に持つ二つの大鎌を振りかざし、フワルへと向かう

「させるか！！“ライトバスター”ッ！！！！」

［ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴオオオオオオオオオオオオォオオオオオオオオオオオオ

オオオオ

ドドド

ォォォンッッッ！！！

「ッ！！」
［ジャラッ！！！］

フワルの行動を見た直後、リィーンは虚空に“自在式”を打ち込み、そこから弾帯に似たモノを取り出す

「暁ィッ！！！」
『ラジャーッ！！　外部弾倉接続部、オープン！！』
［カシャン］
「ッ！！」［ガチャッ！！！］

その取り出した弾帯を、自身の左腕に空いたデバイス接続部に取り付けた

「暁！！　カートリッジロードッ！！」
『オゥライッ！！！　ロード・カートリッジッ！！！！！！』
［ギィィィン……ガガガ

対抗すべく、己も全力の砲撃を放つ準備を始める

「へぇ、邪魔をするんじゃないんだ」

「テメェの左手の銃を見れば、邪魔しようにもさせねぇんだろ？だったら、打ち合いで負かしてやるだけだ」

「言ったね……でも、負けるつもりはないよッ！！！」

「上等だこの野郎ッッ！！！！！！」

互いに打ち合いを宣言し、己の全力を、その砲身へと集中していく……

『チャンバー内、正常加圧中。ライフリング、回転開始』

［ギュイイイイィィィ

そして……

『カートリッジ3729発、装填完了ッ！！！　イケるわよ愚主ゥッ！！！』

『撃てます……マイマスター、トリガーを』

準備が、整った

「“E（イクサ）・ヴァニティィッッッ！！！！！！！！！！！！！！」

「“V（ベクター）・エンシェントッッッ！！！！！！！！！！！！！！」

――――――スマッシャアアア

オオオオ

「ズウウウ

アアアア

光の拮抗は、互いの爆散という形で、崩れ去った……

［ゴゴゴ

「それを言うなら、君の方こそ、体力が落ちたんじゃないの？」
「バカ言え。さっきの争いの最中に起きた歪みの数々……それを抑え込むのに力を使ってたんだよ。それに、あいつらを保護するのにも、力を使ってたしな」

リィーンも、周囲に気を配りつつ戦っていた。だから“全力出せなかった”と……そう言ったのであった

だが……彼らの周辺。半径数百キロに渡り、地面が抉れていた。更に、元々草地もあったはずの大地は、大きく削り取られ……完全な荒野へとなっていた

「しかしまぁ、お前がこんな所まで来るとは、よほど暇してんだな」
「まぁね。そういう君は、色々と多忙そうだけど、ね」

二人は、そのまま声を掛け合った。その口調からは、相手を皮肉にさせるような……若干、軽い雰囲気を表していた

「おう。毎日忙しくて、マジで大変だぜ……だが、ようやくそれも、一段落したがな」
「へぇ。それはそれは、ご苦労様な事だ」

彼が何をしているのか……フワルは、リィーンの事情をある程度知っているかのような言葉で、彼を労った

「……で、何しに来た」

そして、先ほどまでの空気とは打って変わり……リィーンは低い声で、フワルに聞いた

「……まぁ、君の所業を見る為に、ね」

フワルはリィーンの問いにそう答え、更に、言葉を続けた

「間近で見ようと思って、あの時君に頼まれたあの人形の一体に、ある仕掛けを施したのさ。何かが起きた時、僕がその体を乗っ取り、介入出来るように……」

「なるほど……その仕掛けを施した肉体に入ったのが……寿夢乃の魂だった。だからか、彼女のデバイスのＡＩがお前であって……名が、お前のデバイスの一つである“ヴォルケーノ”と同じだったのは」

「あぁ、そうさ……驚いたかい？」

「……」

その言葉に、リィーンは表情を変えず、眉ひとつ動かす事無く、彼の言葉を聞いていた

「……で、なぜ介入してきた」

「……」

リィーンは、そこから更に質問をして行く……どうして、そういう事をしたのか、を

「そう、だね……敢えて言うなら、あの二人を……あの兄妹を止める為、だね」

「止める為、だと……？」

「そう。止める為、だよ……彼女達の、いや……彼らの起源の暴走を、ね」

フワルは、そのまま言葉を続ける

「あそこまで心が起源に近付き過ぎていては、やがてその人は壊れる。心が消えて無くなり、その起源そのものと化す……そうなってしまったら、どれほど世界は歪むと思う」

「……次元震ぐらいの話じゃ無いな……心が消え、その起源がそいつを動かし……やがて他人を巻き込み、連鎖的に世界中へそれが疫病のように蔓延して、その世界を狂わし、歪ませる。イレギュラーな存在である異世界人の人間なら、なおの事ヤバいよなぁ」

「ッ……じゃぁ、なんd「なんで、分かっているのになぜ、そんな事をするのか……ってか？」ッ……あぁ、そうだよ」

フワルの言葉と重ねるように、リィーンはフワルの言いたい事を続けた

「その理由ぐらい、お前なら分かるはずだろ？　なぜなら、お前は俺の“同志”なんだからな」

「……」

フワルは、若干その理由を探り、考え……そして、その答えを言う

「……“己の楽しみの為”……な訳“ないよね”？」

そのフワルの問いに、リィーンは……

「“当たり前だ。遊びで俺がそんなヤベェ事、する訳無いだろ”」

と、答えた

「まぁ、少しぐらいは、遊びが入っていたかもしれんがな」
「……良かった。君がトチ狂った訳じゃなくて、安心したよ」
「ハッ。俺がトチ狂うのは、アイツとの決闘の時だけだ。それ以外で、俺が狂う訳ないだろ？」
「まぁ、狂ったかのように“演じる”のは、良くやるからね、君は」
「まぁな」

……つまり、それは……彼は、“ただの楽しみだけで、彼らを転生させたのではない”。という事になる

「やはり、あの兄妹は……いや、“あの兄”の方だけかな？　彼が、“あの計画”の根幹なのかい？」
「あぁ。今のところ、強引に起源を覚醒させ、そして計画の最終段階へと至った」

そういいながら、リィーンはフワルに対し、神妙な面持ちでそう言い放ち……

「だが……それをどこかの誰かさんのせいで、大幅に修正しなければならなくなったけどな」
「……」
「何故だ。何故、“アイツの起源を抑制させ、人に戻した”ッ！！？」

怒りと共に、それを叫んだ

フワルが、あの兄妹を倒した後、行った行動……それは、“二人の起源、本能を抑え込み、理性をそれに上らせる為の術式”を打ち込む事であった

神をも超えた彼ら故に行える、人の精神への介入……彼が行ったのは、彼らを“バケモノ”や“ケダモノ”の思考から、“人の思考”へと引き戻す事……フワルは、彼らに消えかかっていた“理性”を“創生”したのだ。それも、今後リィーンが干渉をしづらくする為の術式込みで……

「答えろフワル、なぜ“計画”の邪魔をするような事をしたッ！！？」

リィーンは、声を荒げながら、対する青年に問うた。そして、彼から返ってきた言葉は……

「……君らしく、無かったからさ」

という、どこか悲しさが混じった言葉だった

「俺らしくなかった、だと？」

「あぁ……者と者、物と物、そして、者と物（モノ）。それらに必ず存在するモノ……すなわち、“契り”」

「ッ……」

「それを、何よりも重んじる君が……何よりも尊び、何よりも大事にしてきた君が、それを蔑ろにさせる事を助長する行為が、らしくないと思ったからさ！！」

「……それは、アイツらの起源を覚醒させる為に行ってきた事を、言ってるのか？」

「……あぁ、そうさ」

フワルは、さらに強い口調で、リィーンに言葉を投げる

「彼……グレイ・スティンを孤立させ、孤独の闇の中へと陥れた」

「奴の起源……“幻想”を目覚めさせるには、社会との関わりを断たねば成らなかったからだ」
「ッ……彼女、ビビ・スティンに至っては、愛する人しか見なくなり、盲目的にさせてしまった」
「あの妹に関しては、俺の信念に従って動いた。彼女の愛は、この世界では実る事など、出来なかった。それを俺は助けてやった……“契りの仲立ち人”として、彼女の苦悩を取り去ってやったまでだ」

自分の、紅世の徒としての存在意義……ある二つの関係、その間に立ち、その仲を取り持ち、繋げる……それが、“契りの仲立ち人”という真名を持つ、自分のすべき事であると

「だけどッ！！！　それのせいで、他の人との関係を滅茶苦茶にしてしまったではないか！！！　“契りの仲立ち人”として、それはどうなんだ！！！」
「ふん。その答えなら、お前も分かるだろう……フワル」
「ッ……もしかして、“愛さえあれば、それ以外はどうでもいいだろう”って、言いたいのか？」
「あぁ、そうだ」

リィーンの言葉……それはどこか決意が……確固たる意志が、宿っていた

「ッッ！！！！！！　間違っているッッッ！！！！！！！！！！！！」

だが、その決意を、フワルは否定した

「人は、一人だけでは……ましてや二人でも生きてはいけない！

！！　色んな人と関わり合い、色んな人と交り、色んな人と共に生きる……愛だけでは、生きていけないッ！！！！　“君がそうだろう”ッ！！！！」

「何ふざけた事を抜かしてんだッ！！！　愛は如何なるものにも屈しない！！　例え全てが消え去っても、愛だけは滅びる事は無い！！！　愛する人が隣にいるだけで、人は生きていられる！！！　“お前がそうだろう”ッ！！！！」

――――――……リィーンは、常に仲間と共に歩んでいた。彼の興味を持たれ友となった者、慕い仲間となった者、恩を返したい為に一緒に行くと言った者、そして……恋し愛したいと思った者……さまざまな気持ちを抱いた者達が、彼の周りへと集まり、共に歩むと言い、仲間となると言い、やって来た。リィーンはそれを拒む事無く、全てを受け入れてきた。そして、その旅路の途中で、彼は仲間であった女性達から、愛を受け取った……

――――――……フワルは、絶望と孤独の中、ある一人の異性と出会った。彼女との出会いは、彼に生きる事の喜びを、生きる意味を、そして、生きる道を照らしてくれた。だが、その彼女とは死に別れる事と成り、再び孤独の中へと沈んだ。だが、そんな彼に、再び寄り添う者が現れた。彼女は、その優しさで、フワルを包み込み、彼と共に永久を歩むと誓ったのであった。そして、彼の周りには、かけがえのない仲間がいた……

――――リィーンとフワル。元、破壊神と創造神……戦闘狂と、平和主義者……希望と絶望……この二人の、歩んだ道……何もかもが、まったくの正反対……故に、この二人は、互いにこう呼び会う……

――――“反存在”、と――――

「やっぱり、お前とは相いれない関係、みたいだな」
「そうだね……悲しくなるくらいに、ね……」
［［チャキッ……］］

そして、お互いの武器……二振りの大鎌と、二丁の銃……それらを握る手に、力が込められる

「フワル。あの二人にやった事を取り消せ」
「だが断る」
「あっそ……だったら」
「力づく、かい？」
「あぁ、そうだ」
「……いいだろう。なら、僕も全力を以て、君を止める」
「……止められるモンなら止めてみろ、止まる気はねぇがな」
［ザッ］

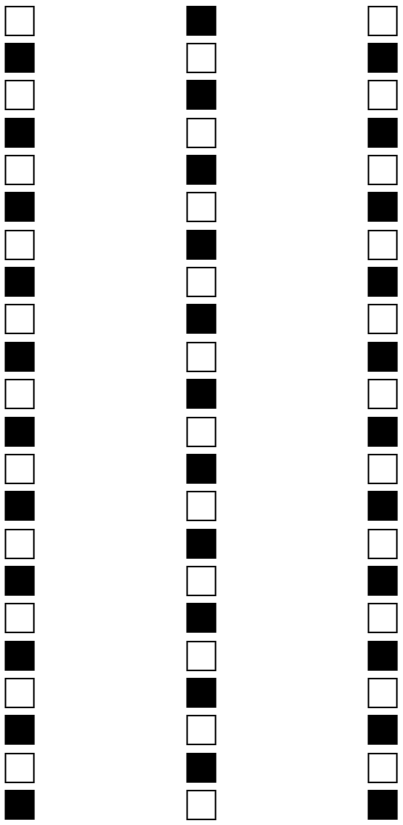
リィーンは、地面を踏みしめ、直ぐに攻撃を繰り出せる為に、構える

「……ありがとう、夢乃。ここからは、僕だけで行くよ」
［パシュンッ……トサッ］

フワルは、自身が借りていた夢乃の体から己の魂魄を抜かし、自分にとって最良の肉体を“創生”し、そこへと移った。そして、夢乃はフワルの後ろに、そよ風に抱かれながら、ゆっくりと地面に寝かせられた。ちなみに、夢乃の意識は無かった

「……さて、と……ここじゃアレだから、場所を変えようか」
「賛成だ。アイツらに気を使ってたら、本気になれねぇからな……」
［［フッ……］］

そして二人は、まるで風のように、その場から消え去った



そして場所は、いつも神がいる世界……あの、青空広がる荒野へと変わる……

［［……フッ］］

「……ここなら、共に全力が出せるだろ」
「君の領域じゃないか……だったら、コレで」
［パチンッ］
「お相子、だね」

フワルが指を鳴らし、何かをした。だが、それをしても、周囲の景色は、何一つ、変わることは無かった

「……良いだろう」

だが、何かしらの変化はあったのか、リィーンは、その変化を認めていた

「それじゃぁ、第二ラウンドと行こうか……フワル」
「あぁ、そうしようか。リィーン……」
［［ザッ……］］

二人とも、地面を踏みしめ、互いに距離を取って、その場で構えた

「「……ッッ！！！！！！」」

そして、互いに“真”の実力を出すため、己を変える

「……ッッ！！！！！！！」
［バババッ！！！！］

リィーンがやり始めたのは、自身の姿と同じ存在の息子。その少年が使う技法と同じモノ……魔の闇の力を己の体に取り込み、力を増幅させる闘法、“闇の魔法（マギア・エレベア）”

「左腕、解放固定（シニストラーエーミッサ・スタグネット）ッ！！　“ＧＳ　燃え盛る業火の焔、レイディアント・フレアバースト”ッッ！！！！！！」
［ボオオオ

「双腕掌握（ドゥブレクシオー）ッッッ！！！

ベイン”！！“ノーハート”！！“約束のお守り”と“過ぎ去りし思い出”ッ！！！そして、“χブレード”ッ！！！」

［ジャギギギギギンッッ！！！！！！！］

「エアリアルブレード、“フォービドゥン”ッ！！！」

［［ブゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥンッッ！！！！！！！］］

次に、大鎌、双剣、大剣、刀剣、銃剣、護拳、重槍、呪杖、魔典、妖扇、施弓、剛斧、双銃……それら１３種類の武具が出現。そして、鍵の形状をした剣が五つに、二つの鍵型の剣を交差させ、その中心点から光の刃が伸びる剣が一本。それらが、リィーンの周囲を浮遊し始める。更に、彼の両の手に、光の粒子で構築された薄紅色のビームソードのようなモノが現出……当に、フル装備といった出で立ちとなった

そうして、彼の戦闘形態への移行は、完了した

「……さて、なら僕も行こうかな」

［スッ］

彼が虚空から何かを取り出した。それは、紅く輝く、綺麗な宝石。しかし、その宝石は、どこか禍々しさをにじませていた……その宝石のある部分だけが、どこか歪んでいるように見える

「……ッ！！！」

［ズブッ！！！！］

その宝石を、フワルはあろうことか、己の中へと“捻じ込んだ”

「ッ、グウゥゥゥゥゥッ……グアアア

だが、彼が何かを叫ぶと同時に、周囲の歪みは消え、彼は一息呼吸を吐いた

彼が行った事。それは、“世界の歪み”の結晶体を、己の内部へと取り込み、それを力とする行為……ありとあらゆる生物、無生物、世界にすらも影響を与えかねない毒物を、彼は自身に取り込み、それを力としたのであった

「さて……“Ｈ．Ａ．ウェーブアナライザー”、セットッ！！」
［シャキンッ！！！］
「“クリムゾンレギュレーター”、セットッ！！！」
［ジャギンッ！！！］
「“クリムゾンウィングバーニア”、セットッ！！！」
［バサアアア

闇と魔、二つの力をその身に宿したリィーン。世界の歪みを、体に組み込んだフワル……

本来ならば、有害であるはずの存在を、彼らは己の力としたのであった

「「……ッッ！！！！！！」」

［［ダンッ！！！！］］

互いに、戦闘準備が出来た事を確認するや否や、すぐさま地面を蹴りあげ、空中へと飛び立った

神すらも超えし者、“契りの仲立ち人”と“久遠の創生者”、二人の戦いは、再開された

＃６５（中の一）　契りを尊ぶ者、命を尊ぶ者。信念や道は違えども、二人が目指すは同じ

どうも、ご無沙汰しております、リィーンです

予定よりも、三日も遅れてしまって、大変申し訳ありません

ブランクやらも有りましたが、今回はやりたかったネタをとことん詰め込んだ結果、とんでもない量になってしまいました

総文字数、５２０００字。はい、自己ベスト更新です。無論、二回に分けて更新します

一回の戦闘に掛けている文字数じゃないですよね。それは分ってます。ですが、どうしてもやりたいことは全てやる主義なので……大変長いですが、どうかご了承ください

ｍ（＿＿）ｍ

ちなみに、今回は2窓展開して、この曲を聞きながら見ていただけると嬉しいです

↓ｈｔｔｐ：／／ｗｗｗ．ｎｉｃｏｖｉｄｅｏ．ｊｐ／ｗａｔｃｈ／ｓｍ１０５７６１６２

ニコニコ動画に登録している事が前提ですが、コレと一緒にお願いします。いや、これは神アレンジです、はい。これを創った人は、本当に素晴らしいです

（あと、この曲を作った人と私はなんの関係も無いので、あしからず）

では、そんなこんなで、破天荒な神様バーサス生真面目な青年の第

二ラウンド、開始です！！！

鳴神　ソラ様、緋水様、ムーギネーター様、けびん様、真王様、あんぎゃーす様、空言天狐様、ベガＦ９１様、装甲轟鬼様、金色の戦姫様。ご感想、ありがとうございました！！！

＃６５（中の一）　契りを尊ぶ者、命を尊ぶ者。信念や道は違えども、二人が目指す場所は、決まっていた……

――――リィーン・スプリングフィールド……

――――ありとあらゆる存在、その全てが有するモノ。“絆”を何よりも重んじる男……

――――フワル・ウィンディス……

――――この世界に生きる、普く全ての生命。“命”を最も尊ぶ男……

1969

――――互いに思う信念は、まったくの別である二人。その二人が描いた物語も、まったく別の過程で、まったく別の結末を迎えていた……

――――しかし、そんな彼らにも、目指す場所は、決まっていた……

ある男のいる世界。普段は、青空広がる荒野と呼ばれている場所……いつもは、ある男が鎮座しているそこは、今、激戦の中心にあった

「ハァッ！！」

［ダダダ

イイイイ

「ッ！！！」
「（隙有りッ！！！！！）」［シュッ！！！］
その幾数回目の交錯が、リィーンの勝利で終わる。そして、そのままフワルの首を目掛けて、その大鎌を振り下ろす
「ッ！！！」［ダシュンッ！！！！］
「！！！？」［スカッ！！！］
その振り下ろされる瞬間。交錯が解かれ、強い衝撃を受けたはずが、フワルはその持前のスピードを生かし、死神の鎌の脅威から離れたのであった
「君が力強いのは分っているよ。でも、速さなら負ける気は無いけどね」
「ハッ、言うねぇ……だったら」［ブンッ［チャキキッ！！！］］
と、ふいにリィーンは自身の愛用の大鎌を放り投げ、周囲に浮いている双銃を手に取る
「その速さを、俺は超えてみせる」
「やってみな……雷の女神に愛されている僕の速度を、超えられるものなら、ね」
「あぁ……言われなくてもなッ！！！」
［ダダダダダダダダダダダダダダダダダダダダダダダダダダダダダダダダダダッッッッ！！！！！！！！！！！］
リィーンが持つ双銃の銃口から放たれるマズルフラッシュ。そして、相手の動きを鈍らせる、或いは心臓を穿つ為に放たれた数発の弾丸は、一直線にフワルへと向かう

「ッ……！！！」
［ダダダ

計な思惑を考えて攻撃を回避する事を選び、ある方向へと行く。そこで自分が待ち構え、刃を奮う。相手の行動と、その方向を読み、狙う。ある意味博打染みた事だが、そこは彼の天性の、そして自身の中で培ってきた類い稀なるバトルセンスから導き出される結論だった

［ブンッ！！！！］

彼が次に手にしていた得物。それは大剣だった。しかも、ただの大剣ではない。刃の代わりに、その刀身に付けられているのは、電動ノコギリの如く動く牙刃（キバ）だった。相手を叩き切るというより、“切り抉る”ことを目的として作られた、殺戮の剣（キリングブレード）……そんな大剣を、リィーンは振り下ろそうとしていた

「クッ！！！」

［ガキィィィ

出し、相手を切り抉ろうと、迫りだす。周りには、金属と金属が引っ掻き合う時の、あの騒音がまき散らされた

「ッッ……！！！！！！」

［フッ］

「！！！？」［ブンッ！！！！］

しかし、その振り下ろしは、まったくの無駄に終わった。彼が突如、いきなり“消えたからである”

「（いや、コレは！！！）」

時間停止。彼が持つ能力の一つ……それであると判断した瞬間

［ゴオオオ

だが、その回避の先には、フワルがいた。先ほどリィーンがしたように、彼もまた、回避する先を読んで……いや、彼の場合だと、時間停止を利用しての接近だろう。位置を確認し、その場へと行っただけである

「終わりだ」

「ッッ！！！！！！」

リィーンのこめかみ、そこに突き付けた銃口から、一発の凶弾が放たれる

［ダゴンッ！！！！］

「……ッ！！！？」

だが、その凶弾が放たれる瞬間、リィーンが消えた。引き金を引き、弾丸が“その銃身の間を通っている”、そのほんのわずかの瞬間……その瞬間に、リィーンは消えたのであった

［バッ！！！］

「ッ！！！」

「フィニッシュッ！！！！」

［ブンッ！！！！］

そして、フワルの背後から、大鎌……それも、“万死ヲ刻陰セシ虹”とは違う、まるでギロチンのような形の大鎌を、フワルの首を目掛けて奮う

「甘いよッ！！！」

［ガキィイイイ

イイイイ

［［［［［［［［［［ゴオオオオオオオオオォォォォォ
オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ
オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ
オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ
オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ
オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ
オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ
オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ
オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ
オオオオオオオオッッッッ！！！！！！！！！！！！！
！！！！！！！］］］］］］］］］］

しかし、今度は違っていた。その間、彼はかなり後ろの方に後退して、彼の両腰にある機部から大型のレーザーカノン砲を現出し、さらに両腕の双銃、そして彼の周囲に浮かぶ数基のビット兵器……それらが、一斉にリィーンに向かう

「ッッ！！！！！！　甘いわアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアッッッ！！！！！！！！！！！！！

砲撃を隙なく放ち、もはや面として迫りくる砲撃の波に対して、彼は突撃という行動に出た。フワルからしてみれば、それは当に無謀。そうとしか言えない事だった

「トォウッ！！！！」
［ギュルンッ！！！］
「ッッ！！！！！？？」

だが、彼はそんな事お構い無く……その隙なく放った筈の砲撃の、そのわずかな隙を見出し、そこを掻い潜る、という芸当を見せたのであった

「ヒャッハァァァァッッ！！！！！！！」
［ザンッッ！！！！！！！］

そして、フワルの右腕……そこを、リィーンの双剣の牙が、食い込んだ

「グゥウゥッ！！！　このッ！！　“戦声”ッッ！！！！！！！！！！！」
［ゴアアア

「戦いも、エンターテイメントにやるもんだ。お前の方こそ、理知的ってか？　かたい戦い方をし過ぎなんだよ」

剛と柔……奇しくも、二人の戦いも全くの反対であった

「……なぁ、フワル」
「なんだい、リィーン」
「結局さぁ……決着、つかねぇよなぁ」
「っていうか、着く訳が無いよ。なにしろ……これが“前までの僕達の限界での行動”、だったからね」

お互い、もうすでに知っていたのである。この戦いに、ケリなど着かぬ事を……二人が今までやってきた事は、あくまで今の自分達と成る前の自分から借りたようなモノ。自分達がいままで行ってきた戦闘は、無意味だと言う事を

「あぁ……ってなわけでだ」
「……ここからは、もう本気で行こうぜ。ってことかい？」
「あぁ。お互いに唯一許された権能、そいつを使っての、な」
「……確かに、それぐらいしか、決着の仕方が残されてないのかもね」
［［パシュンッ］］

そして、互いに先ほど展開した装備、そして武器などをしまい……素の状態へとなった

「「……」」

そして、互いに同じ高度の高さまで上がり、瞳を閉じる……

…己の権能、それを発現する為に……

「「……ッッ！！！！！！」」

［［カッ！！！］］

二人の目、それが同時に見開かれ……世界が揺れ始める

――――あの時、場所にいて、戦いにもがいていた自分。その全ては、こんな今を選びとるために、やっていた事なのだろうか

Entschuldigen Sie mich, wenn ich manchmal in dieser Stelle w?re, und sich selbst, das k?mpfte, war, jetzt ganz zu w?hlen

――――

それは、リィーンの過去……己が歩んだ、物語。それは、今の自分を象る為にあったものであったと言うことなのだろうと……彼は、そう詠う……

――――今この瞬間、僕は前だけ見ていよう。信じる事を、信じていよう。得た愛も、過去の絶望も、羽根に変えて、不死なる翼を生み出そう。さすれば、僕の鼓動は蘇る

Sie sollten jetzt nur die Front anschauen. Sie sollten glauben, da? Sie es glauben. Sowohl die Liebe als auch die Verzweiflung werden die Federn unsterblichen Fl?gel. Erholen Sie sich; meine Niederlage――

――

それは、フワルの今……護るべきものがいて、信じられる人達がいて、愛する人がいる。それら全てを束ね、翼となって羽ばたこうと……彼は、そう詠う

――――俺達が、自由気ままに生きていた日々は、今や遠い過去。無邪気に笑い、無垢な想いだけでは、今この瞬間、生きることなど出来ない

Jene Tage, als wir nur frei sind, und war, es gibt schon lang, wurde daran. Nur ein unschuldiges L?cheln kann kein Leben mehr geben――――

「（穏やかだった過去。今とは違い、何もかもが自由だったあの頃……それはもう、過ぎた出来ごと……）」

――――少し、ほんの少しだけ。愛する君が笑ってくれるのなら、僕は黄昏の騎士となって、君に僕の全てを上げよう

Es gibt ein wenig es und ist gut. Wenn Sie lachen, werde ich ein Ritter der D?mmerung und geben wir alles von mir――――

「（自分を絶望から救ってくれた人、自分が愛する人。その人の為なら、僕はどんな事でもしよう）」

――――遠い過去、心の彼方で望んでいた場所に、俺はいる。その事に、途方に暮れた。だが、もうあの日々には、戻れない

An diesem Tag, die an einen Ort jenseits des Verstandes zog. Sie in einem Dilemma passiere n. Aber wieder zur?ck zu gehen――――

「（得たかったもの、護りたいもの護る為に得た力。だがそれは、結局、想像してたモノよりも、酷く醜い力だった。俺は、あの頃に逃げたい……）」

――――君に誓おう、僕は夢を見よう。この命と愛の限り。その震える声に、口づけをしよう。そして、無限の未来へと羽ばたこう

Ein Gefühl zu Ihnen, um mir den Traum. So weit wie das Leben, so lange wie die Liebe. Ein Kuss auf die bebender Stimme. Und dann, um die unendliche Zukunft――――

「（彼女と生きたい。彼女と共に歩みたい……この永延に、ずっと、一緒に……彼女といたい）」

――――現実の世界にあふれ、たゆたう感情。それを感じたとしても、あなたが目を閉じるのならば、そのまぶたの裏に、俺はいる。そこに、絆が存在する。だから、お前は一人では無い

Ich wanke in die reale Welt Emotionen. Auch das Gefühl, wenn du deine Augen geschlossen sind Sie da. Es ist eine Bindung. Also, nicht allein――――

「（だが、孤独ではない）」

――――僕はいつでも、君の傍にいよう。どんな事があっても、傍にいよう。この世の全てが、君を狙っていたとしても、僕は、君を守る盾になろう

Ist immer neben mir. Ich werde in der Nähe jederzeit. Datte

alle Feinde der Welt，nur Sie w?rden Schild――――

「（今の僕は、君だけの為にある）」

――――俺達は止まらない、何があっても進み続けよう。己が信じられる想いが、ここに残ってるのだならばッ!!!

Wir gehen los，los Aber sicher fortsetzen. Glauben Sie，was das Wort，ich von links！！――――

「（友がいる、愛する人がいる、俺を慕う者がそばにいる。そうならば、俺は逃げない。逃げる事など許されない。それが、俺の魂の在り方!!!）」

――――いつしか涙は、明日を灯す奇跡の太陽に変わるだろう。だから、行こう。護るべき存在が、あるのならばッ!!!

Unawares Tr?nen，das Licht der Sonne ein Wunder morgen. Lass uns gehen. Wenn Sie etwas zu sch?tzen！！――――

「（僕の身体、僕の心は、君だけの物。この心が示すままに、僕は彼女を護る、護り続ける。あの日の涙を糧とし、光ある、明日へと!!!）」

互いの想い……意思、願い、渇望、信念、貫く正義、許さぬ悪…
……それらを言葉にして、彼らは“世界に変わる”

――――契れ――――――

一人は、鎖が蔓延る闇の世界に

――――創生――――――

一人は、生を創る光の世界に

「進(Progress)みゆく、―真の激情《Ｒｅａｌ　ｅｍｏｔｉｏｎ》――――」
「祈(pray)りの先へ――――」

己を歌い、その“真意”を、顕現する

―――描かれる絆の物語
Ｌｉｅｎ ｔｈｅ ｃｈａ?ｎｅ ｅｔ ｏｂｌｉｇａｔｉｏｎｓ
Ｅｐｉｓｏｄｅ―――

―――創られる命の物語
Ｆｗａｌ ｔｈｅ ｅｔｅａｌｕｎｅ ｍｅｌｅｎａｓ ｈｅｒ
Ｓｔｏｒｙ―――

そう、彼らの“物語”を……

◆◇◇◇◇◆◆◆◇◇◇◆
◆◇◆◇◇◇◆◇◇◆◇◇
◇◇◆◆◆◇◇◇◆◇◇◆

「それじゃぁ、始めようか、フワル。本当の、第二ラウンドを」
［チャラッ］

世界と成ったリィーンの周囲……そこに、無数の鎖が漂い始めた。
その鎖は、今いる世界から伸びているもの……地面から、空から、
空中から……ありとあらゆる部分から伸びているその鎖は、全て
リィーンが繰る力の形となって、その場に現出した

「そうだね……始めようか、リィーン……」
［スッ］

対する、同じく世界と成ったフワルは、徒手空拳だった。その手に
も、周囲にも、彼の周りには何もなく、当に隙だらけと行って良い
だろう……だが、それこそが、有り方なのかもしれない。武器と
いう明確なモノを持たぬ、戦いを好まぬ、彼の性格の現れであるよ
うに

「……行くぞォォォォッッ！！！！！」
［［［［［ジャラララララララ

いや、召喚では無い。彼は、自身の力を使い、その二輪の大型バイクを、“創り生み出した”のである

［バッ！！］「来い、リィーン！！！」

［ギュイイイッ！！！　ドルルルルルルルゥゥゥンッッ！！！！！！！！！］

そのバイクに跨り、フワルはリィーンがいる方角とは全く間逆の方向へと向かい、空を走って行った

「逃がすと思ったか？　フワルゥゥゥゥゥッッ！！！！！！！！！」

［ダシュンッ！！！！］［［［［［ジャラララララララ

虚空を蹴りあげ、更にフワルへと接近していく……そして、その後に続くのは、リィーンの武器である鎖達である

「オラァッ！！！」

［［［［［［ジャラララララララ

そして、それは当たりだったのか。フワルは速度を上げて、更にリィーンから離れていく

「無駄だぞフワル……何を考えているのかは知らんが、逃げ回り続けるのならば、こっちにも考えは有るぞ！！！」

［ジャラッ！！！］

「オラァッ！！！」

［ジャラッッッ！！！！！！！！！！！］

［ゴゴゴ

［パキッ、パキパキパキパキッ……！！！！］
「な！！！？」

突如、リィーンが引っ張ってきた黒い物体に色が付き、それが動き出したのであった……

巨躯の大男で、その手には巨大なハンマーを持ち、周囲には雷を帯びた鎧いしもの……神と崇められし存在。それが、リィーンによって“引きずりおろされたのである”

「行け、トール……そいつを叩きつぶせ！！！」
「ッ……！！！！！」
「“サンダー・パイル”ッッ！！！！！！！！」
［ブルンッッ！！！！！！！！］
「ッッ！！！！！！！！」
［ズドオオオ

「ハッハッハッ、さすがだよ。だが、今度はどうかな！！！」
［ジャラッッッ！！！！！！！！！！！］
［ゴゴゴ

「グウウウ

「グオオオ

更に、彼は次なる龍を呼び出した。その姿は、一輪の薔薇のような、美しくも、そして雄々しさが際立つ、そんな風貌のドラゴン。当に、黒薔薇の龍と呼ばれる存在だった

「ブラック・ローズ！！！　あの二体の神を吹き飛ばせ！！“ブラック・ローズ・ガイル”ッッ！！！！！！」

［ブワアアア

［パキッ、パキパキパキパキッ……！！！！］
「……」

現れたのは、全知全能と呼ばれる神。戦争と死を司る……唾の広い帽子をかぶり、白く長い髭を生やし、左目無き隻眼を持つ……巨大な槍、“グングニル”と呼ばれるモノを携えた神であった

「さぁ、これで、“星界の三極神”と呼ばれる奴らは出したぞ……とあるカードゲームの、な……」
「メタな発言は控えなよ、リィーン」
「ハッ、だがどうするよ。こいつ等、カードじゃぁ弱いが、俺の補正を受けてんだ。そう簡単にはくたばらんぞ？」
「ははっ。鬼補正掛かってそうだね。だったら、こっちも強いのを出せばいいだけだし、ね」
「なに？」

フワルの言葉……それを聞き、彼の方を向くと……彼は、リィーンよりも遥か彼方の先まで移動をしていたのであった

「ここまでくれば、君の邪魔は無いだろうから……ね！！！」
［ギュインッ！！！　ゴオオォォォォッッ！！！！！！］

そして、次にフワルが取った行動は……急旋回からの、リィーンの方へ向けての全力疾走だった

「な！！？　何をする気だアイツは！！……」

もはや、その行動の意味を理解できず――――

「いや、待て（ブラック・ローズ・ドラゴンと、ブラックフェザー・

ドラゴン……どれも、アレでは“赤き竜”と呼ばれたモノの……なら、あいつがしようとしてる事は！！！？）」

速さが関係する、何か……その、召喚である、と

「？集いし願いが新たに輝く星となる。光さす道となれ？ッ！！！」

［ブウウウウウウウンッッ……！！！！！！］

リィーンの場所へと全力で疾走してくるフワルの背後に、召喚の魔法陣が描かれる。その中央から、光の粒子が漏れ出て、幻想的な何かを思わせた

「創生（クリエイト）ッ！！　飛翔せよ、“スターダスト・ドラゴン”ッッ！！！！！」

［バシュンッッ！！！！！！］

「グルルルル……クオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオッッッ！！！！！！！！！！！！！」

「ッ……やはり、星屑か！！」

フワルが召喚した竜。それは、箒星が落とした星の欠片の如く輝く玉体と翼をもち、神話の竜を連想させるドラゴン……スターダストの名を冠するに相応しき存在、“スターダスト・ドラゴン”だった

「……ここから更に……行くぞ！！」

［ギュオンッッッ！！！！！！！！！！］

その召喚を成功したにも関わらず、フワルは攻めるどころか、更に速度を高め、加速をしていく……まるで、速さの高みへと、向かうかのように……

「ッ！！　やっぱり、あいつはアレを！！！」

リィーンは、相手が何をしようとしているのかを、感じ取った

「？集いし夢の結晶が、新たな進化の扉を開く。光さす道となれ？ッ！！！！」

［ギュイイイ

「ハハッ。良いねぇ……だったら、俺もカッコつけようかな！！」

［ダンッ！！　スタッ］

オーディンの唾の広い帽子の上に立ち、まるで神の指揮者のように、手にタクトのようなモノを持った

「神々よ。我が音に従い、眼前のモノを討ち、粉砕せよ！！！」

「「ッ！！！」」「グッヒッヒッヒッ……」

それに無言で答えるオーディンとトール、そして不気味な笑い声でロキも答え、三体の神々は、動き出した

「行くぞ、シューティングスター・ドラゴンッ！！！　ブラック・ローズ・ドラゴンとブラックフェザー・ドラゴンも続け！！！」

「「グオオォオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオッッ！！！！！！」」

「クオオォォォ

ックフェザー・ドラゴンに向かって行った

「させないよッ！！！　シューティングスター・ドラゴン！！！“ヴィクテム・サンクチュアリ”ッッ！！！！！」

「クオオォォォ

攻撃を無効化する力を無効にする効果……おそらく、今リィーンがあの槍に込めた力はそれに違いない。と……そう考えたフワルは、その攻撃に対して……

「だったら、攻めるのみだ！！！」

攻勢に、出た

「シューティングスター・ドラゴン！！！“スターダスト・ミラージュ”ッッ！！！！！！」

［ヴゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥンッッ！！！！！！［［［［フォンッッ！！！！］］］］］］

「むっ」

フワルの言葉に従い、シューティングスター・ドラゴンは、五つの幻影に分裂し、トールとロキに一体ずつ。そしてオーディンと、その上に乗っているリィーンに対して、突撃を仕掛けた

「行けェッ！！！！」

「クオオォォォ

オオオオ

従えて、近づいてきた

「どうしたんだい、リィーン。あの三体、確か蘇生持ちだったはずだけど」

「蘇生っつうのは嫌いだ」

有る事件。過去に起こしてしまった事件以降、彼は蘇生というモノを激しく嫌悪している。それゆえに、元々そういった能力を持っていたあの三体の神から、その能力を消し去ったのだった。有る事件、というのは、また別の物語なので、ここでは割愛させて頂く

「あっそ。それとリィーン。そうやって、呑気にしてても良いの？」

「何が？」

「今の状況……君、ヤバいよ……」

「「グオオォォォ

「降参、しなよ……君の負けだ」

フワルの言葉……確かに、囲まれている状況、そしてフワルの言葉……おそらく、彼は討とう思えば、今の会話の中で、リィーンを殺すことが出来ていた。だが、それはしない主義なのが彼だ。フワルは、なんとかして、血を流さずに事を済まそうとしたのである

「……だ～れが、するもんか」

だが、相手からの返答は、彼の想いとは、全くの別だった

「……なら、止めを刺す」［チャキッ］

引き金の指に力を掛け、そのまま銃弾を撃たんとするフワル。そんな様子見ながら、リィーンがした事は

「――ああ、わたしは願う。どうか遠くへ……死神よどうか遠くへ行ってほしい《Ｖｏｒ?ｂｅｒ，ａｃｈ，ｖｏｒ?ｂｅｒ！ｇｅｈ，ｗｉｌｄｅｒｋｎｏｃｈｅｎｍａｎｎ!》――」

高らかに、謡いだしたのだった

「――わたしはまだ老いていない。生に溢れているのだからどうかお願い、触らないで《Ｉｃｈｂｉｎｎｏｃｈｊｕｎｇ，ｇｅｈ，Ｌｉｅｂｅｒ！Ｕｎｄｒ?ｈｒｅｍｉｃｈｎｉｃｈｔａｎ．》――」

「ッ？」

フワルは、その声に妙な違和感を覚えた。だが、そんな事はお構い

無く。引き金を……

［ダゴンッッッ！！！

「――我が腕の中で愛しい者よ。永劫安らかに眠るがいい《ｓｏｌｌｓｔ　ｓａｎｆｔ　ｉｎ　ｍｅｉｎｅｎ　Ａｒｍｅｎ　ｓｃｈｌａｆｅｎ！》――」

そして、その詠唱は、完成した

創造――Ｂｒｉａｈ――

「死世界・凶獣変生――Ｎｉｆｌｈｅｉｍｒ　Ｆｅｎｒｉｓｗｏｌｆ――」

［ズガガガガガガガガァァァ

［ダシュンッッ！！！！！！！］
「！！！！？？」

そういうと、リィーンの姿が、一瞬にして見えなくなった

「消えた？　まさか、透過したのか？（いや、違う。これは……まさか！！！）」

当たりを見渡しながら、相手の事を探すフワル。だが、どこにも相手を見つける事が出来なかった

「ほらほら？　どこを見ているのかなぁ？　フワル君」
「ッ！！」

リィーンの声。それが、自分の周囲から聞こえてきた……その声のハッキリさからみて、そう遠くは無いのが分った

「まさか……近くにいるのか、リィーン！！」
「正解♪　距離的には、さっき俺らが会話してた時と変わらないぜ」

そう。今リィーンは、目で追えない程の高速で動きまわっているのである。超高速状態、というのだろうか。それは、明らかにフワルの行動よりも速い

「クッ（僕よりも、早いだと？）」

その現状を知ったフワルに、なんとも言えない怒りがこみ上げていた。速さには、だれよりも速いと自負している自分だったが、まさかそれが、こんな形で追い抜かれた事に腹立たしくなったからである

「ハッハッハッ。そう言う能力なんだぜ、コレ……すげぇだろ？
これ考えた人間には、深く敬意を表する」

まるで何かの反響音のように聞こえるリィーンの声……フワルの周囲をグルグルと回転しているのか

「（相手よりも速く動く事が出来る能力か……）君も、また変な知識を取り込んだもんだね」

「まぁねぇ♪」

リィーンの元来の力……それは彼が持つ知識が深ければ深いほど、その異常さは増していく。この“死世界・凶獣変生（ニブルヘイム・フェンリスヴォルフ）”すらも、彼にとってはほんの豆粒如きの知識であり、彼の力のほんの一部を使って使用している能力に過ぎない……つまり、彼本来の力を使えば、“如何なる力でも、彼はそれを使用できる”のだ。例え、一個人のオリジナルでも……

「ま、なんだ……とにかく、死ね」

と、リィーンの声が、途中から遠ざかっていくような感じに聞こえたと思った……瞬間

［ブンッッッ！！！！！！！！！！！！！！］

「！！！？　ブラックフェザー・ドラゴン！！！！　“ダメージ・ドレイン”ッ！！！」

「グオオォォォ

ァァァァァァァァァァァァァァァァァァッッッッ！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！」

「グウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウッッ！！！！！！！！！！！！！！！！」

「ッ！！（こ、コレは！！！？）」

突如、巨大な槍のようなモノ……先ほど、リィーンが召喚していた神の一体、オーディンが持っていた巨大な槍が、フワル目掛けて襲いかかってきたのである

「（なんで、コレが？　まさか、さっきのが復活したのか？）」

だが、蘇生能力を消されている奴らが生き返る事は無い。そして、更に言えば一度やられたモノを再び戦線に出すような奴でもないリィーンが、負けたモノをもう一度使うなんて事はしない筈……

……それなのに、コレの槍は一体誰が操っている？

「まさか……」

一つの考えに至るフワル。そう、今この建造物のように巨大な槍を動かしているのは……

「へ、またそれで防いだか。だが、そう何度も出来る事じゃねぇよなぁッ！！！！」

［ブルンッッッッッ！！！！！！！！！！！！！！！！！！！

いたのであった

「！！！？？（ば、バカな！！？　あんな巨大な槍を、まさか振るっていると言うのか！！？）」

明らかにサイズが違っている。片や、２ｍ近い身長の男。片や、“東京ス○イツリー”と並べてもおかしくない程の長さと太さを誇る杖のような槍……明らかに無理がある組み合わせ。だがそれを、リィーンは軽々と振りまわしているのであった

「“アイツ”が出来る事は、俺にも出来るんだよッ！！！！」

［ブルンッッッッッッッッ！！！！

「ほらほらどうしたぁ？　なんなら、こういう事もやっちゃうぞォォォ

！！！！」

フワルが更に召喚した竜。それは、妖精のような翼をもった、神秘的で、どこか女性らしさがある竜……古代の妖精の竜、“エンシェント・フェアリー・ドラゴン”という名の、赤き竜に連なる竜だった

「むむ？　他力本願の竜じゃねぇか。そんな奴召喚して、何になるってんだ？」

「侮蔑のあだ名で呼ばないでよ……まぁ、なんだ……面白いもの、見せて上げるから」

「あぁ？」

そういうと、フワルは倒れているオーディン指差して、エンシェント・フェアリー・ドラゴンに呼び掛けた

「エンシェント・フェアリー・ドラゴン。あの神の遺物を破壊しろ！！！！」

「クオオオ

ィンの身体は爆散していった

［シュパァァァァッ……］

「……なるほどね」

その瞬間、リィーンが手にしていたオーディンの槍も、オーディンが消え去ると同時に、一緒に消えていった

「このエンシェント・フェアリー・ドラゴンは、相手が召喚した存在を消す力を持つ。それも、その召喚した存在が持っていた武器も、ね」

つまり、いくら召喚獣が持っていた武器を持っていても、それも一緒に消えて無くなるということになる。ということなのだろう

「ハッハッハッハッハッ！！！　なるほどなぁ。そいつは厄介な力だなぁ……だったら、“そいつらの力、奪わせてもらおうか”」

と、リィーンが言った直後

［シュルルルルルルルッ、バシッッ！！！！！！！］

「クオオォォッ！！！？」

「！！！？　エンシェント・フェアリー！！！！？」

突如、エンシェント・フェアリー・ドラゴンに、光る縄のようなモノが巻きついていた

「これは……まさか！！？」

「ククッ……“機皇帝ワイゼル∞”ッ！！　そのまま“エンシェ

ント・フェアリー・ドラゴン”を吸収しろォッッ！！！！！！！」
［キュインッ！！］

エンシェント・フェアリー・ドラゴンの真下……そこには、白い人の形をしている、機械で出来たロボットがいた

「クオオオ

ッッ！！！！？？」」

「ブラック・ローズ！！！　ブラックフェザー！！！」

［［ギュインッッ！！！！！！！！］］［［バシュンッッ！！！！！！］］

ブラック・ローズ・ドラゴンとブラックフェザー・ドラゴン。その二体の竜すらも、リィーンが召喚したロボットによって、吸収されてしまった

「ッ……まさか、そう言う手で来るとはね」

「クックックッ。どうする、フワル……その竜すらも、頂こうか？」

「ッ……シューティングスター・ドラゴンは、そう簡単に吸収されないよ」

「ハッハッハッハッ！！　それが、俺が手を加えたコイツによって……その想いはツブされるぞ」

「ッ……まさか」

「クックックックッ……さぁ、出てきな。絶望に満ちた機械仕掛けの神よ」

［ジャラッッッ！！！！！！！！！！］

［ゴゴゴ

今度現れたのは、当に巨神。白きボディ、そして右手には銃、左手には盾を持つ、巨大なロボットのようなモノ……絶望に明け暮れた存在が召喚する、機械の神である。それが、リィーンの背後に現れた

「フワル。貴様にもう一度、絶望を与えてやる」
「ッ……断る。僕はもう、絶望なんかする必要はない」
「クックックッ……マシニクルよ、その流星の如く輝く竜を喰らえ……」
［シュルルルルルルッ］
「避けろ！！　シューティングスター！！！」
「クオオォォォォォォォォォォォォッッ！！！！！！！」

マシニクルの胸から伸びる光の糸。それは、まっすぐにシューティングスター・ドラゴンに向けられていく。それを回避すべく、シューティングスター・ドラゴンは大きくその場から離れていく

「無駄なあがきだ。俺が呼び出した機皇の吸収は、何者にも抗うことなど出来ん！！！」
［バシッッ！！！！！！！］
「クオオォォッ！！！？」
「！！！？　シューティングスター！！！！」

だが、無情にもシューティングスター・ドラゴンは、マシニクルの鎖からは、逃れられなかった

「クックックッ……吸収しろ！！！　マシニクルッ！！！！」
「……」
「クオオォォォォォォォォォォォォ

！！！！」

［ギュインッッ！！！！！！！！］［バシュンッッ！！！！！！！！］

「シューティングスター・ドラゴンッッ！！！！！！！！」

そして、流星の竜は、そのまま呆気なく、機械の神に、取り込まれた

「……そんな……」

「クッハッハッハッハッ……」

バイクで空を掛けながら、その様子を見ていたフワル……そして、一定の場所にとどまり、その様子を見るリィーン

「どうした？　フワル。お気に入りの竜共が一瞬にして消えて、茫然としてるのか？」

「ッ……」

「安心しろ。お前の竜の力は、こっちが有効活用してやるからな！！！　行け！！　ワイゼル！　スキエル！　グランエル！　マシニクルッ！！！」

「「「「……」」」」

［［［［ダシュンッッ！！！！！！］］］］

何の言葉も出す事無く、ただ機械的な音を出して、その命を受けた四体のロボのような存在は、フワル目掛けて動きだした

［ブンッ！！！］

「クッ！！！」

［ギュオンッッ！！！！！！］

ワイゼルの右腕にある刃が、フワルの乗るバイク目掛けて振り下ろされる。が、その動きはフワルに捕らえられているのか、簡単に避

けられた……が

［バッッ！！！！！！］「避けんなよ、フワル！！！」

［ゲシイイイィィィ

のタイヤ部分である

「ッ！！！！」

［ギュオンッッ！！！！！！！］

そこから、更にアクセルを踏み、超高速状態へと入って、その銃撃から逃れる……が

「無駄だって言ってんだろ？　フワル君」

［ゲシイイィィィ

「ウワッ！！！？」

その時、フワルの車体が大きく揺れた。原因は、フワルの横に付いていたワイゼルの攻撃。先ほど、リィーンが蹴飛ばした先には、ワイゼルが待ち構えていたのである

「討てェッッ！！！！！！」

［［［ダゴンッッッ！！！！！！！！］］］

二体の機皇帝と、機皇神の銃口から放たれる光。そして銃弾と光線、それらは全て、今フワルがいる場所へと、一直線にむかっていった

「これで、ジ・エンド。かな？」

勝利を確信したかのような……それでいて、どこか何かを期待しているような羨望の眼差しで、その様子を見るリィーン……どちらに転んでも、リィーンの期待通りの展開になると言うことだが……

そして、その攻撃に対する、フワルの行動は

「……？王者の鼓動、今ここに列を成す。天地鳴動の力を見るが良い？……」

［ヴゥゥゥゥゥゥゥゥンッッ！！！！］

新たな竜の、召喚だった

「創生（クリエイト）。我が魂、“レッド・デーモンズ・ドラゴン”ッ！！！！」

［バシュンッッ！！！！！］

「グオオオォォォ

オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオッッ！！！！！！！！！！！！！」

現れたのは、悪魔のような姿の竜……赤き魔翼に、魔王のような角、黒と赤の色の身体……まさに、赤き悪魔といってもいいだろう。そんな竜を、彼は召喚した

「ほう……クックック、そいつを出したか」

「レッド・デーモンズ！！！　その攻撃を相殺しろ！！！　“灼熱の、クリムゾン・ヘルフレア”ッ！！！！」

「グオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ

「あぁ、そんな竜もいたなぁ……２５０円のレモン」
「だから、メタな侮辱発言は止めろって……」

その様子を見つめていた、リィーンは、終始笑みを絶やす事無く、傍観していた

「いやいや。俺個人としては、２０００円の竜なんだがねぇ……」
「いやだから、それは買う店を間違えた君の失態だ」

……おい、読者置いてけぼりですよ

「クックックックッ……まぁ、メタな部分はどうでもいいとしてだ。そんな奴を呼び出した所で、一体何になるってんだ？」

たかだが竜一体。先ほどは、おそらく全力を使っての一撃で、機皇の攻撃を防いだのだろうが……はたして、その後はどうするつもりなのか

「ふふ……目にモノを見せて上げるよ……」
［スッ］
「あぁ？」

そう言うと、フワルは右手をレッド・デーモンズ・ドラゴンに向けて、その言霊を唱えた

「……？王者と悪魔、今ここに交わる。荒ぶる魂よ、天地創造の叫びを上げよ？！！！」
［ボオオオ

オオオオ

と向かって突撃していく

「ッ……荒ぶれッ！！！　“バーニング・ソウル”ッ！！！！」

［ダシュンッッッ！！！！

オオオオ

て、羽ばたいた

「ブラック・ローズ・ドラゴン！！　“ブラック・ローズ・フレア”ッ！！！　ブラックフェザー・ドラゴン！！　“ノーブルストリーム”ッ！！！　エンシェント・フェアリー・ドラゴン！！　“エターナル・サンシャイン”ッ！！！　スカーレッド・ノヴァ・ドラゴン！！　“バーニング・ソウル”ッ！！！」

［［［ゴアアア

その時、フワルが一気にマシニクルの左腕の付近まで移動をして

「それをさせなければ、良いだけだ！！！」

［ガンッッッ！！！！！！！！！！！！！！！］

ドリフトの要領で、バイクの後輪を相手の左腕にブチ当て、その防御体勢を大きくずらしたのであった

「いけェェェェッ！！！！！」

［ダシュンッッッ！！！！！！！！！！！！！］

［ズドオオオオオオオオォォォ

「クオオオ

＃６５（中の二）　契りを尊ぶ者、命を尊ぶ者。信念や道は違えども、二人が目

神様バーサス青年、第二ラウンド其の二です

この回からは、曲をこちらの方に変更してくださると嬉しいです
↓ｈｔｔｐ：／／ｗｗｗ．ｎｉｃｏｖｉｄｅｏ．ｊｐ／ｗａｔｃｈ／ｓｍ１１５０８６５４

では、第二ラウンド其の二、どうぞ

＃６５（中の二）　契りを尊ぶ者、命を尊ぶ者。信念や道は違えども、二人が目指すは同じ場所

「……チッ。やっぱ主人公の扱う力ってのは、なんか補正でも掛かるのかねぇ。あれか？　主人公補正って奴」

左手で頭をぼりぼりと掻きながら、右手で白い長髪となった髪をくるくると指に巻き付けては戻すを繰り返しているリィーンは、フワルの周囲にいる竜達を見つめながら、そう言った

「だったら、君も主人公の力ってのを使えば良いじゃないか」

「それもそうだが……俺ってさ、敵が使う武器とか魔法とか、そういったのが好きだからさぁ……分るだろう？　そう言うの」

ゲームなどで、クリア特典とかによくある、敵の誰かが使っていた武器が手に入るイベント。彼は、そう言ったのが好きなのである

「だからぁ、俺はついそういった力を使いたがるんだよねぇ」

「……それで、負けても良いのかい？」

フワルの言葉が、今は酷く重くのしかかった。確かに、今彼が呼び出した召喚獣達は、どれも原典では主人公の敵側として描かれたモノの方にいた奴らだ。例えそれが、途中で仲間になったとしても、その因子は拭いされないものだ。

“敵は、主人公に負ける”。その概念が、強く出てしまうのである。故に、リィーンが召喚した召喚獣……極神と機皇は、フワルが呼び出した竜には勝てないのである

「……だったら、アプローチの仕方を変えてみるだけだ」

［チャラッ］

そういいながらも、彼はまたも、周囲に漂う鎖の一本を握り締めた

「敵であり、絶対に倒される事の無かった存在……つまり、物理的な破壊をされなかった奴を、召喚するだけだ」

［ジャラッッッ！！！！！！！！！］

［ゴゴゴ

その色が付いていく物体の上には、巨大な歯車が付けられており、さらにその歯車の下には……“上下が逆さになっている、青いドレスを着た女性の人形”が有った

「クックックックックックッ……さぁ、最強の名も無き魔女よ。希望を叶えた代償に、絶望にその身を堕した憐れな道化の女よ。その力を、今我に託すが良い。そして、我が意に従え、“舞台装置の魔女”ッ！！！　通称……

――――“ワルプルギスの夜”よッ！！！！――――

［ギギッ！！！　ガゴガゴオンッッ！！！！！！］［ボオオオ

ハハハハハッッッ！！！！！！！！！！！！！」
［ブワアアア

リィーン本人は、ワルプルギスの夜の歯車の上に立ち、まるで舞台の上の役者のように……演劇に出てくる魔王役の男優のように、立ち振舞っていた

「さてぇ、こっちも手数を増やすか……出て来い、舞台装置の魔女の手下ども……“道化役者の使い魔”達よ！！！」

「「「「「ヴンッッ！！！！！！！」」」」」

「「「「「クスッ、クスクスクスッ……」」」」」

リィーンが呼び出したのは、ワルプルギスの夜の使い魔達……もはや、完全にワルプルギスの夜を我が物としているリィーンにとって、その魔女の使い魔すらも、容易に操る事が出来るようになっていた

そして、そのリィーンの呼び声に現れたのは、五人の少女の形をした。黒いシルエットのような使い魔だった。

一人は、華をあしらった弓を携えたツインテールの少女
一人は、砂時計のような小さな盾を持ったロングヘアーの少女
一人は、マスケット銃と呼ばれる銃を携えたツインのロール髪の少女
一人は、両刃の両手剣を握ったショートカットの少女
一人は、長槍と呼ばれる長物を持ったポニーテールの少女

……その五体の使い魔が、リィーンの言葉に従い、現れた

「行け。使い魔共……あの竜を蹴散らせ」

「「「「「クスクスクスッ……」」」」」

「「「「「バッ！！！！！」」」」」

リィーンの命令に異を唱えず、ただ薄気味悪い笑い声を上げながら、

それぞれが、竜の元へと向かって行った

「クスクスッ」

［ギリギリギッ……バシュシュシュシュシュッッ！！！！！！」

「ズドドドドォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォンッッ！！！！！！！！！！」

「クオオォォォォォォォォォォォォォォォォォォォ

！！！」

「グオオォォォ

「クッ……なんてモンを召喚したんだ、彼は！！！」
「おいおい、悪態なんか付いている場合じゃないぜぇ？」
「ッ！！！」

ワルプルギスの夜が起こした突風によって飛来してくる岩石を避けていたフワルの傍に、リィーンがひょこり現れたのだった……

「「クスクスクスッ……」」

二体の、ワルプルギスの夜の使い魔を連れて……

「ッ！！！」
「やれ！！！」
［［ジャギンッ！！！！］］
「クスクスッ」
［［ズガンッッッ！！！！！！！！！！］］
「グウゥッ！！！！」

手から長い鉤爪を出している、短髪の少女の形をした使い魔と

「クスクスッ」
［ヴヴヴヴヴヴヴヴンッ……］［［［［［［ヒュンッ！！！！］］］］］］］］
［ズドドドドドドドドオオオ

らったフワルは、跨っているバイクごと、大きく吹き飛ばされた

「ッ……厄介過ぎるだろ、アレは……」

何度目かの悪態を付くフワル……ワルプルギスの夜は、先ほどまでリィーンが呼び出した極神や機皇なんかとは、比べ物にならない程の力と能力を持っていた。それほど、リィーンにとって何か特別な思い入れがあるような……そんな感覚を抱かせている

「ハッハッハッハッハッハッハッ！！！　さすがはワルプルギスの夜ッ！！！　良いぞぉ、その調子で、アイツに絶望を与えろォッ！！！！」

「キャハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハッ！！！！！！！」

「「「「「「「クスッ、クスクスクスッ……」」」」」」」

またも、ワルプルギスの夜の歯車の上に立ち、高らかと魔女と使い魔に指示を与える……最強の魔女は、彼の言うままに、その無邪気そうな笑い声と共に、絶望を振りまいていった

「ッ……なんとか、しないと……」

あの魔女をどうにかしないかぎり、彼にすら攻撃が出来ない。今の所、ダイレクトにダメージを追っているのは自分の身で、相手はまったくといって良い程、ダメージを喰らわずにいる……それが、フワルにとって腹立たしい事だった

「（何か、良い手は……ッ！！！　そうだッ！！！）」

［ギュオンッッ！！！！！！！！］

［［［［［バサァッ！！！　ダシュンッッ！！！！！！］］］］］

何かをひらめいたフワルは、そのまま空中に上昇。それに追従するように、五体の竜達も、共に空へと登っていく

「ん？　何をするつもりだ？」

リィーンは、その様子を眺めるだけで、なんのアクションも起こさなかった……だが

「空飛ぶバイクが天高く上昇……五体の竜の追従……ん？　五体？」

そのワードに、良い知れぬ何かを感じ取ったリィーン。そして、直ぐに気付いた。フワルが、何をしようとしているのかを

「まさか、アイツっ！！！」

が、時はすでに遅かった……

空へと高く上り、大気圏ギリギリの位置まで来たフワルは、シューティングスター・ドラゴンへと手を向けた

「行くぞ……スカーレッド・ノヴァ・ドラゴン！！　ブラック・ローズ・ドラゴン！！エンシェント・フェアリー・ドラゴン！！ブラックフェザー・ドラゴンを！！　シューティングスター・ドラゴンに融合する！！！！」

「「「グオオォォォ

オオオオ

［バシュンッッッ！！！

「ちょいと、コレは厄介過ぎるかもな……ったく、アイツもとんでもないモノを召喚するなぁ……」

そう愚痴るように言葉をこぼし、足元にいるワルプルギスの夜へと目を落とし、次に辺りを見渡しながら、その使い魔共の様子を見ていく

「フッ。だったら、俺達も少し本気になるか」

ニヤリ、と笑みを浮かべて、次の行動を取る

「――彼ほど真実に誓いを守った者はなく《Ｅｈｔｅｒ　ａｌｓ　ｅｒ　ｓｃｈｗ?ｒ　ｋｅｉｎｅｒ　Ｅｉｄｅ;》――」

「――彼ほど誠実に契約を守った者もなく《ｔｒｅｕｅｒ　ａｌｓ　ｅｒ　ｈｉｅｌｔ　ｋｅｉｎｅｒ　Ｖｅｒｔｒ?ｇｅ;》――」

「――彼ほど純粋に人を愛した者はいない《ｌａｕｔｒｅｒ　ａｌｓ　ｅｒ　ｌｉｅｂｔｅ　ｋｅｉｎ　ａｎｄｒｅｒ:》――」

それは、己の世界に、また新たな渇望を塗り加える

「――だが彼ほど総べての誓いと総べての契約総べての愛を裏切った者もまたいない《ｕｎｄ　ｄｏｃｈ,　ａｌｌｅ　Ｅｉｄｅ,　ａｌｌｅ　Ｖｅｒｔｒ?ｇｅ,　ｄｉｅ　ｔｒｅｕｅｓｔｅ　Ｌｉｅｂｅ　ｔｒｏｇ　ｋｅｉｎｅｒ　ｅｒ》――」

「――汝ら、それが理解できるか《Ｗｉ?ｔ　ｉｎｒ,　ｗｉｅ　ｄａｓ　ｗａｒｄ?》――」

「――我を焦がすこの炎が、総べての穢れと総べての不浄を祓い清める《Ｄａｓ　Ｆｅｕｅｒ,　ｄａｓ　ｍｉｃｈ　ｖｅｒｂｒｅ

nnt’ rein' ge vom Fluche den Ring!≫――」

「――祓いを及ぼし穢れを流し熔かし解放して尊きものへ≪Ihr in der Flut l?set auf’ und lauter bewahrt das lichte Gold’≫――」

「――至高の黄金として輝かせよう≪das euch zum Unheil geraubt.≫――」

それは、ある女性の渇望。輝きに満ちた存在の、その輝きに未来永劫焼かれ続けたい願望が具現化したモノであり、他者との馴れ合いを拒むものの、そいれにしか興味を示さないという拒絶の意味を持った、能力であった

「――すでに神々の黄昏は始まったゆえに≪Denn der G?tter Ende d?mmert nun auf.≫――」

「――我はこの荘厳なるヴァルハラを燃やし尽くす者となる≪So – werf' ich den Brand in Walhalls prangende Burg.≫――」

創造――Briah――

「焦熱世界・激痛の剣――Muspellzheimr L?vateinn――」

［ボオオオ

詠唱が完了した直後、リィーンがいつ世界が、変化を起こした。それは、目に見える変化。リィーンがいる辺り一帯どころか、彼がいる世界が、荒れ果てた荒野から変わり出し、灼熱の世界の中に放り込まれたのだ

「で、お次は……」

その世界を構築した直後、今後はなんの抑揚もない、低く唸るような声で、次の詠唱を唱え始めた

「――死よ。死の幕引きこそ唯一の救い《Ｔｏｄ！　Ｓｔｅｒｂｅｎ　Ｅｉｎｚ'　ｇｅ　Ｇｎａｄｅ！》――」
「――この毒に穢れ蝕まれた心臓が動きを止め《Ｄｉｅ　ｓｃｈｒｅｃｋｌｉｃｈｅ　Ｗｕｎｄｅ，ｄａｓ　Ｇｉｆｔ，ｅｒｓｔｅｒｂｅ，》――」
「――忌まわしき毒も傷も跡形もなく消え去るように《ｄａｓ　ｅｓ　ｚｅｒｎａｇｔ，ｅｒｓｔａｒｒｅ　ｄａｓ　Ｈｅｒｚ！》――」
「――この開いた傷口　癒えぬ病巣を見るがいい《Ｈｉｒｅ　ｂｉｎ　ｉｃｈ，ｄｉｅ　ｏｆｆ'　ｎｅ　Ｗｕｎｄｅ　ｈｉｅｒ！》――」

今度もまた、先ほどの“焦熱世界・激痛の剣（ムスペルヘイム・レーヴァテイン）”と、前の“死世界・凶獣変生（ニブルヘイム・フェンリスヴォルフ）”と同じ種類の詠唱を唱える。だが、それで得られる能力は、まったくの別モノである

「――滴り落ちる血のしずくを、全身に巡る呪詛の毒を《Ｄａｓ　ｍｉｃｈ　ｖｅｒｇｉｆｔｅｔ，　ｈｉｅｒ　ｆｌｉｅｓｓｔ　ｍｅｉｎ　Ｂｌｕｔ：》――」
「――武器を執れ、剣を突き刺せ《Ｈｅｒａｕｓ　ｄｉｅ　Ｗ

affe!　Taucht　eure　Schwerte.　≫――」

「――深く、深く、柄まで通れと≪tief,　tief　bis　ans　Heft!　≫――」

それは、死者の言葉……死した者が、なんらかの事によって生かされており、それを嘆き、それを終わらせたいと強く願う者の、悲痛の願望を具現化した、己のルールである

「――さぁ、騎士達よ≪Auf!　lhr　Helden:≫――」

「――罪人にその苦悩もろとも止めを刺せば≪Totet　den　Sunder　mit　seiner　Qual,≫――」

「――至高の光はおのずからその上に照り輝いて降りるだろう≪von　selbst　dann　leuchtet　euch　wohl　der　Gral!≫――」

創造――Briah――

「人世界・終焉変生――Mi?gar?r　V?lsunga　Saga――」

［ズガガガガガガガガアアア

焦熱世界（ムスペルヘイム）、死世界（ニブルヘイム）、人世界（ミズカルズ）……それら、三つの地獄の世界をその身に内包したリィーンは、空を見上げ、相手の来訪を待つ

「さぁ、準備は出来たぜぇ、フワル……クックックックッ」

［……ブワァッ！！！！］

そう言っている時、突如雲が割れ、そこから高速で突撃してくるフワルと、拳を握り、ワルプルギスの夜へと向かって行くシューティング・クェーサー・ドラゴンの二体が、恒星の如く輝きながら、現れた

「ウオオオォォォ

「クオオオ

の戦いを味わいたいよ」
「何寝言を……ほざいているんだ君はっ！！！！」
［ブンッッ！！！！！！！！］
「よっとッ！！！」

車体を大きく動かし、そのまま追撃をしようとしたが、結局それは、
“死世界・凶獣変生（ニブルヘイム・フェンリスヴォルフ）”の効果によって、攻撃を受ける前に動かれてしまい、空回りした

「ッ！！　その力、本当に厄介だね」
「あぁ。だが、今は他の力も働いているがな！！！」
［ボゴンッッ！！！！！！！！］
［バキバキバキバキバキッッッ！！！！！！！！！！！！］
「ッッ！！！！？？」

フワルが乗っているバイクの車体をリィーンが殴り、そこから全体に罅が走って行き、今にも砕け散りそうなほどにボロボロになっていく

「これは！！！？」
「“人世界・終焉変生（ミズガルズ・ヴォルスング・サガ）”。コイツはなぁ、“その拳に触れたものが誕生して一秒でも時間を経ていたものならば、物質・非物質を問わず、例え概念であろうともあらゆるものの歴史に強制的に幕を引く”。つまり、破壊する能力なのだよ。どのような敵であれ、どのような強固な盾であれ、防御不可の、文字通り一撃必殺の力を相手に与える力さ」

まさに、ご都合主義（チート）、幕引きの機械神（デウス・エクス・マキナ）と呼ばれる存在。今のリィーンは、言わば人の形をした“戦車”といっても良いだろう

「さぁ、止めの一発だ」
「ッッ！！！！！！！」
［ギュオンッッ！！！！！！！］

その一撃が繰る前に、フワルは急旋回をしていき、大きくその場から離脱。リィーンの追撃を回避する

「フッ。無駄なあがきだ……今お前は、どこの中にいると思ってるんだッ！！！」
［ボオオオ

いう力、色んな力と組み合わせた時には、莫大な力を発揮する事が出来るのさ。例えば……今の俺のようにな」

「ッ……」

フワルは、その脅威と、リィーンのその余裕な態度から、今の彼の状態を考えた

“焦熱世界・激痛の剣（ムスペルヘイム・レーヴァテイン）”によって、完全な逃げ場を無くさせ、さらに相手に対して強力な火炎を浴びさせる力……そして、本体である彼の放つ一撃は、“人世界・終焉変生（ミズガルズ・ヴォルスング・サガ）”の影響によって、全てが一撃必殺の攻撃力を持つ。もし、隙を見付けて攻撃を繰り出しても、“死世界・凶獣変生（ニブルヘイム・フェンリスヴォルフ）”が発動している状態である彼には、誰も届く事が出来ず、それ以上の速さで翻弄され……挙句には、一撃必殺級のカウンターの餌食になってしまいかねない……

「バグにも程が有るでしょ」

「そう言うなって。そういう知識を持ったんだからよぉ。知ってるか？　“ディエス・〇レ”ってエロゲの能力でさ、面白かったぞ♪」

「そんなことは聞いてないよ……」

「クックックック……で、どうする？　フワルぅ……」

「……」

フワルにとって、万事休す、といった状態であった。リィーン自身は、一騎無双な状態であり、自身が召喚したシューティング・クェーサー・ドラゴンは、未だにワルプルギスの夜と呼ばれる魔女と交戦中……もはや、手に負えないような状態だった

「降参しろ、フワル……云ったろ、絶望を与えてやるってな」

「……」

だが、フワルはそれでも、負けるつもりはないだろう

「何を言ってるんだ？　まだ僕のターンは終了してないぜ」

「むっ」

ネタにも聞こえそうな言葉だが、そこから感じられる気迫に似た何かが、未だにリィーンに勝てると言っているような感覚を持っていた

「……創生（クリエイト）。飛翔せよッ！！　“スターダスト・ドラゴン”ッ！！！！　我が魂ッ！！　“レッド・デーモンズ・ドラゴン”ッ！！！！」

「［［バシュンッッ！！！！！！］］」

「クオオオオォォォ

フワルの詠唱によって、スターダスト・ドラゴンとレッド・デーモンズ・ドラゴンの二体の身体が光に包まれ、更に眩き光源となって、その場を明るく照らす

「光来せよッ！！“セイヴァー・スター・ドラゴン”ッ！！！！大いなる魂ッ！！“セイヴァー・デモン・ドラゴン”ッ！！！！」

［［バシュンッッッ！！！！！！！！！！］］

「クオオオ

ウウウ

［［ダシュンッッッ！！！！！！！！！！！！！！］］

リィーンの力を吸収した二体の竜に、魔女への攻撃を命じたのである

「行けッ！！　“シューティング・ブラスター・ソニック”ッ！！！！　“アルティメット・パワーフォース”ッ！！！！」

［［ダシュンッッッ！！！！！！！！！！！！！！］］

［［ズガアアア

界・終焉変生（ヴォルスング・サガ）”、“死世界・凶獣変生（ニブルヘイム・フェンリスヴォルフ）”によって、何よりも速く、そして絶対命中であり、一撃必殺の攻撃となった。そんな攻撃を受けて、まともにいる事など無理があったのか、最強の魔女は、その巨体を地面に叩きつけられたのであった

「……へぇ、ほぉ、ふぅ～ん……なるほど、コイツはしてやれたな。まさか、セイヴァーら・ドラゴンらに、あの能力らを吸収するほどの効果があったとは……」

「まぁ、その点は僕の改良の甲斐ってモノさ……で、どうするんだい、リィーン」

「何がだ？」

「お得意のパクリは無効化され、最強と謡われた君の魔女は倒れた……さて、次はどうするつもりだい？」

立場逆転……先ほど、リィーンがフワルを追い詰めていたが、今度はフワルが、リィーンを追い詰めていた

「……はぁ。どうするって、俺はこうするさ」

［ダシュンッ！！！］

「？」

空中を蹴り、ワルプルギスの夜の場所へと近づいていくリィーン。そして、ワルプルギスの夜の身体の一部である歯車の軸がある所まで行った

［ガシッ］

「おい、何時まで寝ているんだ」

［グイッッッ！！！！！！！！！！！！！］［ガバッッッ！！！！！！！！！！！！！］

「キャハハハ

ワルプルギスの夜の身体である歯車の軸を掴み、それを握ったまま空中へと飛んでいき、ワルプルギスの夜を無理やり起こしたのである。だが、その魔女が出す不気味な笑い声は、どこか弱々しく聞こえていた

「フンッ、お前の力はその程度ではないだろう？　見せてみろ……文明をもひっくり返す程の、強大な力をなッ！！！」

［ブンッッッ！！！

「ッッッ……！！！！！！！！！？？？」

その直後、突如水を得た魚の如く、ワルプルギスの夜は先ほど以上の不気味な高笑いを上げながら、歯車を高速で回転させながら、身体をまるで駒の如く回転させた。その影響で、ワルプルギスの夜を中心に、巨大な竜巻が引き起こされた

「クッハッハッハッハッハッハッハッハッッッ！！！！！！！！！　そうだ！！！！　それだ！！！！　その力を見たかったのだよ！！！！　俺はァァァッッ！！！！！！」

その様相を見つめ、イカレ狂うリィーン。当に、魔女の狂気にでも当てられたかのような狂いップリ……いや、コレは魔女の狂気ではなく、その強大な力を見て、喜びのあまりに狂っている様子である

［ブワアアア

でいき、さらに

［［ズシュンッッッッ！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！］］

「クオオオ

形成――Ｙｅｔｚｉｒａｈ――

［ジャギンッ！！！！］

「“聖約（ロンギヌスランゼ）・運命（テスタメント）の神槍”ッ！！！！」

呼び起したのは、黄金の槍。きらびやかな装飾が施された、聖殺の槍

「キリ○トとか言うどこぞの世界の聖者様をブッ殺した槍だ。その概念上、コイツは神殺しの力を持つ……ま、俺らには関係ないけどな」

「確かに、ね……元神だからね……」

フワルも、軽口を言ってはいるものの、その内面は焦っていた

「（不味いな。まさか、あんな事が出来るとはね……正直、たかが魔女だと思って侮っていたよ）」

ワルプルギスの夜の、想像以上の力。ソレを目の当たりにして、彼は心底後悔しそうになる

「クックックッ。さぁってと……そんじゃぁ、続けようかぁ！！」

［ダシュンッ！！！！］

「！！！？」

「ヒャッハァァァァァァァァァッッ！！！！！！！！！！」

［ズガンッッッ！！！！！！！！！！！！！！］

「ウワッッ！！！！？？」

隙を疲れたのか、黄金の槍を携えたリィーンは、一気にフワルの近くまで近づき、黄金の槍を振り下ろし、地面へと叩きつけた

［スガァァァ

アアアア

「（だったら、彼と同じような、そう言った中二能力を使ってやり切る位しかないかな）」

だが、自分は彼ほどそんなに詳しくは無い。故に、彼が今奮っている槍を打ち砕くような代物は、持ち合わせていないのである

「無駄な事を考えているのかぁ？　いっとくが、コイツは中々に強固だぞぉ。破壊や無力化なんて、愚かな考えを棄てて、我を忘れてガチンコで叩き合おうやッ！！！！　戦いの人形のように……絶望に満ちていた昔のお前のようにッ！！！！」

考え事をしていて顰め面になっているフワルに対し、リィーンはいつものニヒルな笑みを浮かべて、挑発のような態度でフワルを攻撃へと誘って行く

「絶望……」

そして、リィーンのある一言によって……フワルは、攻めの一手を構築していき……

「そんなに、君は絶望を知りたいのかい？」

フワルは、低く、唸るような声を上げて、リィーンの方を見た

「ッ……！！？」

その眼差しを見たリィーンは、一瞬、身体に緊張が走ったかのような錯覚に遇い、先ほどまで醸し出した楽しげな表情から一変し、引き締めた表情をする

「だったら、見せて上げるよ。僕の、感じた絶望の深さを……」

［スッ……チャキッ］

両手に持った愛銃、“ヴォルケーノα”を構え、フワルは、己の過ごし去った日々の痛みを、相手に与える威を

「……避けろよ。さもなくば、消えるから」

奮った

――――――QED“兆年の絶望”――――――

［ゴアアア

その銃口から、そこから放たれるモノとは到底思えない程の、半径数十mに及ぶほどの、極太の巨大な光線が放たれた

「ッッッ！！！！！！！！！？？？」

［バシュンッ！！！！］

リィーンは、その場から空間転移に近い力を使い、その射線上から逃れられた……が

「それが、狙いだよ」

「ッッ！！！？　　しま」

その延長線上……その極太の光線は、そこにある物に対して、放たれたモノである事知った

「ズガアアア

フワルの放った極太の光線は、ワルプルギスの夜に向けられた物であった。その光は、竜巻と化していた筈のワルプルギスの夜の動きを止めて、さらに、身体の一部を食い破り、魔女の動きを止めた

「今だ！！！　シューティング・クェーサー・ドラゴンッッ！！！！！！」

「クオオォォォ

［［［［［ズドオオオオオオオオオオオォォォォォ
オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ
オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ
オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ

「……仕方無いな。だったら、一旦仕切り直すか」
［フッ……］
「な！？」

そう言うと、リィーンは風のように姿を消して、どこかへと行った

［……フッ］
「テメェのこの竜をブッ飛ばすのに使わせてもらおうよッ！！！」
［ズシュンッッ！！！！！！］
「クオオオ

オオオオ

み合っていた

「……にしても、羨ましいなぁ、フワル」

「？　何が？」

「お前は、あれほどの絶望を味わってきたんだろ？　全てを消滅させたく立ってしまうほどの、絶望を……」

QED　“兆年の絶望”……

全ての決め手と成ったそれは、フワルが感じてきた絶望、それを糧として放つ、消滅魔法であった。兆年という長い長い時を、孤独にさまよい、破壊しか生まず、絶望に苛まれた日々……それらを、消しさりたい、無かった事にしたい。そんな願望から来た、フワルの力であった

「お前ほどの聖人君子が、そこまでして消し去りたい絶望……それは、生半可なもんじゃないってのは、今のアレでよく分かったよ……」

「……で、君は何が言いたいんだ。言っておくけど、こんな会話をしていても、僕に隙は出来ないよ」

なんらかの作戦なのかと。彼なら、会話をしていて、敵の注意を散漫にして、不意を付いて倒すなんて、そんな卑怯な方法を、取る事がある。故に、フワルは常に神経を辺りに張り巡らせ、罠である事を前提として、そのような言葉を言った

「いや……ただな、羨ましいと思っただけだよ」
「ッ……？」
と、リィーンの言葉から、予期もしなかった言葉が飛んできた。絶望する事が、羨ましいと……
「俺は、そんな絶望を理解する事無く、物語を完結させてしまった。知ることはあっても、それを実際に感じる事など、無かったのだ……」
「……」
独白のような、懺悔をするかのような声で、リィーンはフワルに、語りかけていく
「俺は、他人の不幸、他人の絶望、他人の憎悪をよく知っている。だが、それを自分はした事が無い。それでいてだ！！！　俺は物語を完結させた！！　終わらせたのだッ！！！　だから、自分の事を、ちゃんと語ったお前の事が、羨ましい」
まるで、羨望の眼差しのように、リィーンはフワルを見つめていた
……
「……なら、君は一体どんな物語を語ったと言うのだい」
そして、その言葉の中から、フワルは一つの質問を、リィーンに問うた。自分は自分の事を語ったと言った。ならば、お前自身は何を語って、その物語を完結させたのかを
「……“他者を語ったのさ”」
「他者、を……？」

リィーンから返ってきた返事は、なにやら哲学的な、そのような何かに聞こえる言葉だった

「俺が語った物語は、俺が描いていった物語は、他者の成長を描いていった。俺は、そのモノ達にとって重要な存在ではあったが……俺の物語は、他者語りの物語」

他者の物語の登場人物と成って、その存在を導く存在である事を、語った物語だと……リィーンは、そうフワルに言った

「俺の物語は……他者がいなければ語れない。いや、描く事すらも、出来なかった……そして、他者を導くには、迷いなどしていられない、常に高き所に、常に最高の場所に……どんなときだって、誰もが頼る存在、誰もが必要としている存在でなければならなかった……そんな俺には、絶望など、している暇など、無かったな」

「……」

リィーンの言葉、それを無言のまま聞いていたフワルは……

「どう思う、フワル……こんな絶望もしないで、こんな高みまでたどり着いた俺は、はたして主人公だったと言えるのだろうか？」

「……さぁ。君の価値観云々をどうこう言うことはしないよ。ただ」

「ただ……？」

「それでも、いいんじゃないのか？　他者を導いていった物語。それでも、充分語るに相応しい物語だと、僕は思うよ。物と物、者と者。そして、物と者。それら普く全てに存在する“絆”を第一とする、君らしい物語だと、僕は思うけどね」

「……ラスボスみたいな奴が主人公の物語だぞ、どれもつまらなさそうだな」
「確かにね。主人公最強モノとしては、アレだし……でも、そこに恋愛要素が有れば、少しはまともな物語になるんじゃないのかい？」
友達に向ける言葉のように、フワルは、少し気を緩めて、リィーンに語りかけた
「……そうだな。そういや、俺達の物語には、いつも愛する女性がいたな……」（ニヤリッ）
［ザワッ］
「ッ！！？」
フワルの言葉に対するように、リィーンもまた、言葉を掛ける……が、それを聞いた瞬間、フワルは底知れない恐怖を覚えた
「（そうだ。そういえば、彼は今まで、“一人で戦っていた”……）」
おかしい、おかし過ぎる事だ。彼の事をよく知っているが故に、その状況が酷く歪んで感じ始めたのである……
召喚獣は出していたが、アレは、どちらかと言えば使い魔的な形で呼び出されたモノ。その全ては、どれも明確な意思が存在していないモノだらけ。そんなモノを召喚して戦うなど……それは、彼の本来の戦い方では、ない
「（彼の、本来のバトルスタイルは……確か）」

それを思いだそうとした時、その違和感は、現実と成って現れた

［バッ！！！！］

「ッッ！！！！！？？」

突如、彼の背後に、リィーンとフワルの二人とは別の、明確な意思を持つ、第三者が現れた

「気付くのが遅いんとちゃいますぅ？　フワルはん」

その第三者、関西弁と京都弁が混じったかのような口調の女性は、フワルの首目掛けて、蹴りをかまそうとしていた

「やれ！！！　“レヴェッカ”ッッ！！！！！！」

「はいよッ！！！！！」

［ブンッッ！！！！！！］

その、完全な不意打ちが、決まろうとしていた。そう、リィーンが決め手としていたのは、この一手だった。今まで、色々と大盤振る舞いのように召喚獣や能力を出して、この一手の存在を隠ぺいし、そして、最後に何気ない会話を出して、隙を創った所を討つ……

……卑怯と言われるような戦い方だが、これがフワルという強大な相手を確実に仕留める、最良の手なのである。しかもこれは、リィーンが愛している女性の一人が考えた兵法なのであり、リィーンは喜んでそれを採用したのであった

「ッッ……！！！！！！！？？」

そして、その一撃……リィーンの愛人の一人であり第一夫人、“レヴェッカ・C（シリウス）・スプリングフィールド”の強力無比なハイキック

が、フワルに直撃しようとした

それで、全てが終わる……リィーンとレヴェッカ。そして食らうであろうフワルすらも、そう思った……

『ソニックムーブ』

が、それはその場に新たに、“金色の閃光”の如く現れた更なる第四者によって、予想もしていなかった方向へと、軌道を変えた

「ガギイイイィィィ

結び、赤き瞳を持った、心優しき女性……“フェイト・T・ハラオウン”……いや、フワルの愛する人である、“フェイト・T・ウィンディス”であった

テスタロッサ

テスタロッサ

＃６５（中の二）　契りを尊ぶ者、命を尊ぶ者。信念や道は違えども、二人が目

次回も、転生物語を更新予定です。神様と青年のバトルの決着なので、もうしばらく、このバトルをお楽しみください

＃６５（下）　彼らの、戦いにおける真の決着。それは、愛する人と、共に戦う事

どうも、ご無沙汰しております、リィーンです

やっと、リィーンｖｓフワル、完結です。本当、やりたい事全部やりきって、個人的には満足しております

ですが、そのせいで展開がかなり停滞してしまい、次がどうなるのかを気にしておられた方々には、大変申し訳なく思う所もあります

次回からは、話も少しは進みますので、お楽しみに

真王様、ムーギネーター様、鳴神　ソラ様、寝落ちの亜留ジャ野様、装甲轟鬼様、緋水様、あんぎゃーす様、けびん様、なめ猫様。ご感想、どうもありがとうございます！！！

#６５（下）　彼らの、戦いにおける真の決着。それは、愛する人と、共に戦う事。

――――――リィーンとフワル……

――――――奇しくも、まったくの正反対である彼らであったが、そんな彼らに、唯一の共通点があるとするのならば、それはこの一点にほかならぬだろう……

――――――“二人には、愛する人がいる”。そして、その真の実力を出すには、その者と共に戦う事なのだ……

――――――守り、守られる。そのような関係だからこそ、彼らは全力を出し切る事が出来るのだと……

――――――或いは、共に並んで戦う事も、また愛の形の一つだと、言わんばかりに……

普段は、青空広がる荒野と呼ばれている世界……今は、蒼き創生の化身と、虹の契りの代行者の決闘が行われている場所……

「やれ！！！　“レヴェッカ”ッッ！！！！！！」
「はいよッ！！！！」

その、二柱の意思の争いの場に現れた、参入者……

一人は、契りの代行者の伴侶の一人……“レヴェッカ・C・スプリングフィールド”

［ブンッッ！！！！！！！］
「ッッ……！！！！！！！！？？」
『ソニックムーブ』
［ガギイイイイィィィ

奇襲に失敗したレヴェッカは、フェイトの持つ金色の魔力刃を持つ剣、“バルディッシュ・ザンバー”と呼ばれる大剣の刀身を蹴りあげ、そのまま後方へと跳ねて、リィーンの元へと向かう

「ゴメン、しくじってもうたわ」

「別にいいさ。まさか、アイツの女がこの場に来るとは、俺ですら想定外だったよ」

当に、想定外……いや、ありえないとでもいっていい状況だった。フワルの性格と、彼の彼女に対する想いの大きさを考えてみれば、彼はこのような激戦の場に、自分の一番大切な女性を連れてくるような事は絶対しないと。そう、リィーンは……そしてレヴェッカ“達”でさえも、そう思っていた

「せやけど、いったい何で、フェイトはんがここに来たんやろか……」

「さぁな……だが、これだけは言える。あいつにもう、さっきの手は通じなくなった。だから……」

「やろな……」

二人で、そんな会話をしている時……

［［［［［［［パシュンッッ！！！！！］］］］］］］

彼らの後ろに、八人の女性達が転移してきた

「あらあら、何しくじってんのよ、レヴェッカ」

「“シェレン”……なんや？　あんさんやったら、あん妨害すらも叩きつぶせるんかいな」

「えぇ。小覇王と呼ばれた私の実力なら、アレぐらい突破して、そんで本命に必殺の一撃を入れてたわよ」

一人は、リィーンの第二夫人。“シェレン・S（ソン）・スプリングフィールド”

「シェレン。確証もない事は言わない方がいいわよ」

「えぇ～。自身があるから、問題無いでしょ、“メイリン”」

「はぁ。自身だけで、そう事が上手く行くはず無いでしょ」

一人は、リィーンの第九夫人。“メイリン・S（シュウ）・スプリングフィールド”

「大丈夫ですか？　お兄様」

「どこか、いたい所は無い？“リンちゃん”」

「あぁ。問題ないよ、“ヤーヤ”、“アサ”。お前たちも見ていたのだろう？　さっきまでの、俺の戦いっぷりを」

一人は、リィーンの第三夫人、“ヤーヤ・T（トーカーズ）・スプリングフィールド”、もう一人は、リィーンの第五夫人、“アサ・S（シグレ）・スプリングフィールド”

「ったく、お前のボロボロになる姿でも見られるのかと期待してたのによ」

「あれれ～？　“スイ”ちゃん、何気にSな発言だねぇ」

「なッ？　ち、チゲぇよ！！！　ただ、たまには、コイツのそう言う姿を見たいなって言っただけだ“スノウ”ッ！！！！」

「はいはい。隠しきれてないてれ隠しは意味ないよ～♪」

「だから！！！　違うって！！！」

一人は、リィーンの第四夫人、“スノウ・V（ヴァルキュリア）・スプリングフィールド”。もう一人は、リィーンの第七夫人、“スイ・B（バ）・スプリングフィールド”

「まったく、こいつ等は戦いの場と言う場にいる自覚が足りなさすぎる。そう思わんか？　“ナユタ”」

「そうですわね。ですが、私達もそのような自覚というモノが無い点は、同族だと思いますわよ、“キララ”」

「ハッ。確かに、言えている……お前も私も、随分と変わったな」

「えぇ、そうですわね」

一人は、リィーンの第六夫人、“ナユタ・K（カグラ）・スプリングフィールド”、もう一人は、リィーンの第八夫人、“キララ・K（クロカワ）・スプリングフィールド”……

リィーン・スプリングフィールドの伴侶達……計九人が、今この場に集結を果たしたのである

「なんだよ。皆来ちまったのか？　そんなに俺のぬくもりが欲しいのか？」

「「「「はーい！！！」」」」

「アホか」

「い、いいいや、わ、わわわ、私は、そんなの！！！」

「スイ、自ら墓穴を掘るような事をしておりますわよ」

「それを言わない方が、返って被害が少なくなるのだけどね……」

リィーンの冗談交じりの惚け事に、元気よく返事をする四人と、それに対して呆れるキララ。そして、スイが変に意識をしてしまい、ナユタとメイリンがそれを指摘し合う。ちなみに、返事をした四人

とは、シェレン、ヤーヤ、スノウ、アサの四人である

「はぁ。なんで来たん？　せっかくリィーンと二人っきりで戦える思たのに……」

「おいおい、俺を独り占めってか？　俺の一番なのに、贅沢な奴だなぁ」

「いいもん。ウチ、贅沢モンやから」

独占宣言をした第一夫人を諌めるリィーン。それに気を害し、レヴェッカはむくれっ面をしながらそっぽを向いてしまった

「レヴェッカぁ？　リィーンは皆の物でしょう？　独り占めは良くないわよ」

「やかましいわ！！　全く……ここ数千年、リィーンと二人っきりでデートしとらんから……ちょっと欲求不満気味なんやけど」

「はいはい。それは、また今度な」

「むぅ～……いつもそうやってはぐらかしてぇ」

「悪い悪い。埋め合わせはちゃんとするから、な」

「……分った」

しぶしぶと、デートの件を先送りにされた事を了承しつつも、リィーンの言った埋め合わせを期待し始めたレヴェッカであった

「いいないいなぁ。レヴェッカだけずるい～」

「スノウ。埋め合わせの意味を知らぬお前ではないだろう」

「でもでも！！　羨ましいものは羨ましいの！！　キララは羨ましくないの？」

「私だって羨ましいさ。だが、我慢をするのも、良い妻の条件だ。そうだろう？　リィーン」

レヴェッカに対して、軽い嫉妬を覚えるスノウと、それを諫めるキララ。はたから見れば、幼い少女だが、その会話の内容は、愛する人から愛を欲しいと願う女性のそれだった

「あぁ、そうとも言えるな」
「むぅ～。私、我慢強く無いもん」
「おいおい、この中で俺の次に一番年食ってるお前が言うな」
「それ言っちゃダメ～～～ッ！！！」

涙目に成りながら、リィーンの言葉をもみ消そうとするスノウ。ちなみに、彼女の見た目年齢は、１４歳くらいだが、実際はその“数万倍”は生きているのである

「キャ～～～ッッ！！！！？？　どこかで、私の実年齢がばらされた気がする～～～ッッ！！！！！！」
「「（なに？　そのメタな発言は）」」

スノウの言葉に、スイとナユタは、心の中でツッコミをしている

「ハッハッハッハッ！！！」

対して、彼女達の夫であるリィーンは、その様子を笑い飛ばしていながら、楽しげに見守っていた

そんな、一人の夫と九人の妻による夫婦漫才が繰り広げられている中、もう一組の夫婦……フワルとフェイトは……

「……フェイト。君がどうして、ここに」
「ごめんね、フワル……でも、どうしても、“見ていられなかったから”」

「？」

“見ていられなかった”……それはつまり、今までの戦いを、彼女も見ていた。ということになる。しかし、一体誰が、この閉ざされた空間での戦いの映像を、それもリィーンを含めた当事者たちに、気付かれる事無く……

「“あの人”……あの人が来て、映像とここへ直通で行ける転移陣を出してくれて……それで、フワルが危なくなったのを見たら、いてもいられなくて……」

「あの人？……ッ！？」

一体、あの人とは？　と聞こうとしたフワルだが、直ぐに誰かを特定し、喉まで出ていた言葉を呑み込んだ。そして、その人物に対して、感謝と、そして“憤り”を覚えた

「……そう、か。分かった……助かったよ、フェイト。ありがとう」

「ううん、気にしないで。私は、あなたのパートナーだから」

やわらかな笑みを浮かべながら、彼女は、愛する人から貰った感謝の言葉を、喜んで受け取った

「……さぁ、ここは危険だ。ここにいたら、アイツに殺されかねない。だから、フェイトは戻っていてくれないか」

そしてフワルは愛する人に対し、優しく、この場からの撤退を、求めたのだ

「え？　な、なんで？」

「なんでって……リィーンは危険だ。本気の戦いになれば、例え友人だろうと、殺しにかかる程の男だ。だから「それって、フワルも危ないって事だよね」ッ……」

確かに、それはそうだ。危険な相手と戦うのならば、それはフワルも危険だということと同義。それなのに、彼は自身の身を顧みず、愛する人を逃がそうとしたのである

「それは、そうだけど……でも、君が傷つくのは……」

「大丈夫だよ。戦うのに、負傷をしないなんていうのは、すごく傲慢な事。だから「それでも、君を傷つけたくないんだよ」フワル……」

「僕は、何があっても、君を守りたい。どんな脅威からも、君を守りたいんだ」

フェイトを、なんとしても、あの男の爪牙から遠ざけたい。そう考えるフワルは、何度もフェイトに語り掛ける

「でも、私だってフワルを守りたいよ！　だから……私も、あの人達と戦う。フワルと対している相手と、戦いたい」

「……フェイト」

頑なに、フェイトはフワルの言葉を拒み続ける……自身も、一緒に戦いたい。その想いを、フワルに懇願した

「……でも、やっぱりフェイトを危険な目に合わせるなんて事は、出来ないよ」

しかし、フワルもまた、フェイトの言葉を拒み、彼女を返そうと、必死になっていた

「ねぇねぇ、どう思います？　あの男」
「ダメやな」
「ダメね」
「ダメですわね」
「ダ～メダメ」
「ダメだね」
「ダメだな」
「ダメ男ですね」
「ダメ過ぎる」
「そ～だよね～、ダメな男だよねぇ、フワルくんは」
「酷い事言うのね、あなた達……」

それを見ていたリィーンとその妻たちが、一緒になってフワルを罵倒していた。ちなみに、最初に質問をしてきた声はリィーンのモノであり、一番最後の声は、メイリンのモノだ

「（ア、アイツら……）」［ピクッ、ピクピクッ］

その声を聞いたフワルは、眉間にしわを寄せて、眉毛がピクピクと動いていた。ある意味、すこしシリアスな空気が吹き飛んだような気もするが……

「お～い。女の頼みすら聞かん男は、馬に蹴られて死んじまえ～♪」
「そーだそーだ！！」
「そんだけ健気～に、おねだりしとるフェイトはんが可哀相やわ」
「レヴェッカ？　それ、なんだか卑猥に聞こえますわよ？」
「（とにかく、君たちは黙っていてくれッ！！）」

更なる罵声を飛ばすリィーンとスノウ、レヴェッカの言葉に突っ込

むナユタ……その様子は、まるで人の恋路を弄る悪友キャラのような雰囲気である。そんな様子を、フワルは快く思っておらず、イライラするだけである

「フェイトさ～ん！！　こういう時は、上目づかいで、瞳をウルっとさせてお願いすると、大抵の男はコロっとイっちゃうよ～♪」

「そうですわ～！　ちょっと試してみたらどうです？」

「なんだったら、それにぶりっ子ポーズとかも加えてみたら～？」

「アサ、ヤーヤ。それにシェレンも。そんな助言をしてどうするのよ……もしあの子が参戦するとしたら、それは敵が増える事になるのよ」

「えぇ？　１０対１でボコるより、１０対２の方が少しは面白味が増すと思うんだけどな～」

「お前は本当にバトル脳だな、スイ……」

などと、リィーンの妻達の間では、何やら謎の会話が繰り広げられており、戦場の空気とは言えない空気が、蔓延しだした

「う、うぅ……」

そして、その会話の中心にいる事が恥ずかしいのか、フェイトは少し俯き気味になってしまい、顔を赤くしていた

「ったく、アイツといいその愛人といい……変な事を言う人達だな」

半ば呆れ、半ばその仲の良さに感服しているフワルだった。一夫多妻という環境でありながら、そう言った会話が出来る事に、一種の感動を感じ、どこか尊敬をしていた

「ねぇ、フワル……」
「ん。フェイ、トッ！！？」
「う、ううっ……」［ウルウルウル……］

そんな時、フェイトがフワルに言葉を掛けて、フワルもフェイトの方を見た……上目づかいで、瞳をウルっとさせ、ぶりっ子のようなポーズを取る、フェイトの方を

「じ、「「「「「「「「「実践してる～～～～ッ！！！！？？」」」」」」」」」

先ほどアサが言った事、大抵の男はコロっとイっちゃう（？）方法……それを、生真面目に行っていたのである……ウルっとする為にやったのか、目を何回も擦った痕があり、目も何時も以上に赤かった。そんな様子を見たリィーン達は、絶叫していた

「だ、ダメ？　なの……？」
「う、うぐッ……」

さすがに、ここまでされてまで、一緒にいたいと想う気持ちを無下に出来る訳も無く……そして、さすがの頑固者であるフワルでも、その眼差しには適わず

「う……フェ、フェイト」
「う、うん。なに？」

上目づかいの仕草をして、それが他の人にも見られた事が恥ずかしくて、未だに顔が真っ赤になっている

「……僕から、あまり離れないでくれよ。いざって時に、守

れないから」
「ッ……はい！！」

嬉々として、フェイトは、フワルの言葉に返事をした。フワルも、その嬉しさを感じたのか、表情は柔らかなものだった

「……それじゃぁ、行こう、フェイト」
「うん、フワル」
［［ジャギンッ！！！］］

そう言いながら、二人は己の武器……フワルは“ヴォルケーノα”を、フェイトは“バルディッシュ・ザンバー”を……それぞれを、その手に具現化させた。そして、その表情も、先ほどの柔らかさを消え去り、戦いへと赴く、戦士の顔と成った。

蒼と金色、その二人の準備は、整った

そして、対する十人……リィーンとその妻たちである者達の方も……その二人の体勢を見て、己たちも動き出した

「フッ……おいお前ら、手を出すなよぉ。アレらは俺の獲物だからなぁ」
「「「「「おいッ！！！？」」」」」
「今の流れから、どうしてそのような事が言えるのですかお兄様！！」
「ここは、“俺たちも行くぞ”。という言葉を言うのが通例ではなくて！？」

だが、リィーンのあまりにも空気読まない台詞に、レヴェッカ、シェレン、スノウ、アサ、スイ、キララのツッコミが走り、ヤーヤと

ナユタの二人が、そのツッコミに対して乗ってきたのである

「あら。どうやら、あなたにはあの二人を相手にして勝てる算段が有ると言うのかしら。軍師として、是非聞いてみたいものですね」

「あ、あい？」

しかし、メイリンだけはツッコミの嵐の中、リィーンに対して真面目な態度で、その言葉を返してきたのである

「そうなん!?　それは聞いてみたいわぁ、なぁ皆」

「「「「「「「うんうん」」」」」」」

メイリンの言葉を聞いて、レヴェッカが更に乗ってきて、それに皆も返答としてうなづいていた

「ぐぐ……メ、メイリン。そう言うボケ殺しな事を言わないでくれ。冗談だと言うのが、言いにくいじゃねぇか」

「でしたら、そう言った事は言わない方がいいですよ、リィーン様」

「ぐぅ……わ、わぁったよ」

メイリンの指摘に、つい本音を漏らすリィーン。ちょっとしたお茶目から来た事とは言え、さすがに今のはアレだったようだ

「ふぅ……んじゃ改めて……準備は良いよな？　マイハニーズ」

笑みを浮かべながら、リィーンは自分の愛する女たちに、メイクは出来ているかを聞いて見た

「バッチリやで」

「もうとっくに終わってるわよ」

「先ほどから万端でございますわ、お兄様」
「いつでもオッケーだよ～♪」
「私も、これでもかって言うほど気合い入れて準備したんだから！！！」
「私もですわ、リィーン」
「おう！！　準備運動もバッチリだぜ！！」
「フン、野暮な事を聞くな。いつもの事、だからな」
「策（コース）の用意も出来ております。あとは、あなたの次第です」

九者九様……全員が違う言葉を言っているが、言っている意味は、まったくの一緒

「フフッ……それじゃぁ、デート（たたかい）にでも行くかぁッ！！！！」
「「「えぇッ！！！」」」
「「「おうッ！！！」」」
「「「はいッ！！！」」」
「「「

そして、互いの瞳を睨み合いながら、両雄は、手に持っている武器を握る手を強め

「「「「「「「「「「ッッ！！！！！！！！！」」」」」」」」」」
「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「バッッ！！！！！！」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」

全くの同時に、全員が動き出したのであった

「さてと！！！　ラストパーリィとしゃれこもうかッ！！！！　フワルゥウゥウゥウゥウゥウゥウゥッッッ！！！！！！！！！」
「あぁッ！！！　これで、ケリを付けてやるッ！！！！　リィーン・スプリングフィールドッッッ！！！！！！！！！」
「「「「ダダダ

そして、もう一方でも、激突が開始された……レヴェッカのレガースと、フェイトのザンバー。その二つが、交錯音を立て、ぶつかり合った

「ッ、さすが、力はそちらの方が上のようッ、ですね……ッ」
「ほうか？　あまりよく考えた事、あらへんけどなッ！！！」
［ググググググググググッ……！！！！］
「ッ！！！」

その交錯、それは夫である彼ら同様、スプリングフィールドが、ウィンディスを押す形……レヴェッカが、フェイトを押していたのである

「せやけど、堪忍な……まずは、アンタを潰させてもらいますえ」
「ッ！！！？」

潰す。その言葉を、柔らかな京都弁モドキの言葉で言われた直後

「でやあああァァァ

その殺意を感じた直後、レヴェッカは、舞うように身体をひねらせて、その攻撃を回避した

「“フローズン・スティルレン”ッ！！！！」「“ローゼン・スラシェイル”ッ！！！！」
［［シュッッ！！！！！！！］］

フェイトの背後から、氷雪と薔薇の戦乙女たち……スノウとヤーヤの二人が、今の彼女達の周囲には、己を象徴するもの（スノウは、粉雪が。ヤーヤは、薔薇の花弁）が漂い、その手に持つ武器、スノウの剛槍とヤーヤの大鎌……の攻撃が迫りくる

「ッ！！！」
『ソニックムーブ』
［ヴンッッ！！！！！！！］
「「ッ！！！？」」
［［スカッ］］

だが、その二人の攻撃は回避された。雷速の如き速さで、その空間から脱したのである。その速度は、まるで瞬間移動のようにも見える速度であり、二人が知覚出来なかった程である

［チャキッ！！］
「だが、その程度は予測済みだッ！！！」
「ッ！！？」

フェイトの回避した先。そこには、漆黒に身を包んだ小柄な女性が持つ槍のような傘が煌いていた……それは、キララがもつ武器。リィーンの愛する者の中で、最速を誇る彼女の傘が、獲物をとらえて、振り下ろされた

「ハアァッ！！！！」
「ッ！！！」
『ディフェンサー・プラス』
［ヴンッ！！！！］［ガキイイイ

「ッ！！！？　フェイトッッ！！！！！！」
［バッ！！！］

その様子を見たフワルは、すぐさま彼女の所へと行こうとする

「ＤＡ☆ＧＡ☆ＳＨＩ☆ＫＡ☆ＳＨＩッ！！！！」
［［［［［［［［［ジャラララララッッ！！！！！！！］］］］］］］］］
「ッッ！！！！！！？？」

が、その行く先を、リィーンが操る鎖によって阻まれ、彼は愛する彼女の元へと行けなかった

「行くぞシェレンッ！！！！」
「オッケーッ！！！！」
［［バッ！！！！］］

そして更なる追撃を、リィーンは仕掛ける。それは、彼と第二夫人、シェレンの二人で行う、愛の連携（ラブ・アタック）

「オォォォラアアアアアアアアアアアアアアアアアアッッ！！！！！！！」
［［ブルンッッ！！！！！！！！］］

シェレンの細い腕から放たれる、大剣の双撃。女性が奮うようなモノでは到底考えられない二つの牙は、そのままフワルの身体を突き刺そうと迫る

「クソウッ！！！！」
［［ガギィィィ

ッッ！！！！！！」」
「ッ……！！！！！」

フワルは、その双牙の内の一本を右手に持つ銃の銃身でいなし、片方の銃で受けとめた。さすがに、二つを同時にいなすことは出来なかったようだ

「やるわねぇ。さすが、私の男が見込んだ奴ね」
「ッ。そいつは、どうも……ッ！！！」

銃と大剣、その二つの交錯は、互いに力を加えるたびに、火花を散らしながら舞わせ、金属同士がぶつかった時の音が、辺りに鳴り響く

［バッ！！！］
「ッ！！！？」

そして、シェレンの背後から、リィーンが現れた

「シェレン。“私の男”ってのは、どういう意味だぁ？」
「どういうって、そう言う意味……よッ！！！」
［ガギリィッ！！！！］
「グッ！！！」

シェレンの言葉の最後に、彼女は大剣に込める力を強め、更にフワルを圧していく……その間に、リィーンはシェレンの背後から、彼女の左手に触れた

「さっきは、独り占めは良くないって言ってたくせに……どっちが独り占めしてんだよ」
「いいじゃない。女の言葉にいちいち文句を言うと、嫌われるわよ

？」

［パシッ！］

そして、シェレンが持っている大剣の一つ……先ほど、フワルがいなした方の大剣を握り、それをフワル目掛けて振り下ろす

「そいつは、ごめんだなッ！！！」

［シュッ！！！！］

「クソッ！！！！」

［ガギィィィィィィィィィィィィィィィィィィィィンッッ！！！！！！］

フワルも、なんとかそれに反応して、迫りくるリィーンの大剣を残った銃身で受けとめ、何とか防ぎきった

「ッ……二体一は、卑怯じゃないかい？　リィーン……ッ！！！」

「そうかぁ？　まぁなんだ。これも、愛してる女の一人が考えてくれた、作戦（デートプラン）なんだけどなッ！！！！」

［ガギイイイイィィィィィィィィィィィィィィィィィィィィンッッッ！！！！！！

「クックックッ……やっとそこにイってくれたぁ♪」
［［［［［［ジャラッ！！！］］］］］］
「ッッ！！！？？」
［［［［［バシィィィィッッ！！！！！］］］］］「グッ！！！？
……しまったッ」

そして、その網状だった鎖は、生き物の如く動き出し、そのままフワルの両手両足を縛りつけ、身動きが取れなくなった。聖者が裁かれる時の、十字架に磔にされるが如く……

［［チャキッ］］
「！！？」
「行くぞ、シェレン」
「えぇ、リィーン」
［［ダッ！！！］］

その、身動きが取れなくなってしまったフワルに対して、彼らは大剣を水平に構えて、宙に浮かぶ鎖の一本を踏み場にして蹴り……
……突撃していった

「「“猛虎（モウコ）ッ、裂較牙（レッコウガ）”ッッ！！！！！」」
［［ズシュンッッ！！！！！］］
「グアァッッッ！！！！！！！？？」

二人が繰り出した、突き一閃。それは、鎖に縛られ、回避も防御も出来ないフワルの右肩と左肩に、深く突き刺さった

「ッッ！！！！？？　フワルゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥッッ！！！！
！！」

その様子を、付近で戦っているフェイトが視界に捕らえて、最愛の彼の名を叫んだ

「フェイトはん、死合の最中によそ見はするもんやないで？」
［ゲシイイィィィィィィィィィィッ！！！！！！］
「ッッ！！！？？……カハッ！！！！！！」

その隙を付き、レヴェッカのキックがフェイトの腸に直撃。その衝撃は、２トントラックが５０台連続でぶつかったかの如く、尋常では無い程の威力が込められていた。いくら身体が強化されているとはいえ、血反吐を吐かせるほどの衝撃を、モロにくらい、フワルがいる方向とは正反対の方向へと、吹き飛ばされた

「“ナユタ”ッ！！！」
「了解ですわッ！！！」
［シュタッ］

そして、その間にレヴェッカはナユタを呼び、自身の足に彼女を乗せ、蹴りを繰り出す姿勢と成る

「行くでェッ！！！　“舞脚・七の舞いッ！！！」
［グググググ……ッッッ！！！！！！！！］

ナユタが乗る足に力を入れていき……そのまま

「飛立（ヒリュウ）”ッッ！！！！！！！」
［ドンッッ！！！！！！！］

ナユタを、まるでボールの如く……フェイトが蹴り飛ばされた方

向へと、蹴り飛ばした

「オオオォォォ

「フェイトォォォォォォォォォォォォォォォォッッ！！！！！！！」

その様子を、縫い付け、縛りつけにされているにも関わらず見ていたフワルは、必死にその拘束から逃れようと暴れ始めた

「無駄だ。その鎖は物理系のバインドであり、俺の化身、そう簡単には外れんぞ」

「それに、結構グッサリと刺したから、この大剣も簡単には抜けない。だからぁ、諦めたら～？」

未だに、突き付けた剣を握る二人が、フワルのそんなみじめな姿を見て、嘲笑っていた

「ッ……まさか、コレが狙いだったのか？」

「クックックッ……あぁ、その通りだ」

□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■

一方、吹き飛ばされたフェイトは……

「ッ……ッ！！！」

［バッ！！！］

なんとか、飛ばされて身動きが取り難い身体を動かし、更なる追撃を防ごうとした……だが

「ふぅ……ま、こんくらい離れれば、大丈夫やろな」

その追撃はなく……だがそれでも、フェイトを討つ目的は変わらないのか、彼女の周囲を、八人の女性……レヴェッカを筆頭として、ヤーヤ、スノウ、アサ、ナユタ、スイ、キララ、メイリンが取り囲み、逃げ場を封じていた

「ッ……まさか、コレは作戦ですか？」

「えぇ、そうよ」

そんなフェイトの問いに、この作戦の立案者であるメイリンが、答えを返した

「簡単に言ってしまえば、戦力の分断化。相手が二体で、こっちは十体。数の差で私達が圧倒しているのならば、そのアドバンテージを生かす作戦が良いと考えただけよ」

□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■

「なるほど。つまり、僕達を分断させ、後は各個撃破。そして、終わった方から、残った方へと移って援護をする……そう言う魂胆なんだろ」

磔にされていながらも、未だに戦意を無くす事無く、フワルはリィーンを睨みつけながら、今相手らがしている作戦を看過した

「正解♪　やっぱり、ここまでくれば、誰にでも予測は可能か」

「ッ……そして、フェイトの所に八人も行った理由は……」

□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■

「私を、先に潰す。ということですか」

「そん通りや♪　モノ分かりがええ子、ウチは好きやでぇ……食べたいくらいに、な」

「ッ……」

つまり、メイリンが考えた作戦（デートコース）は、こういう言うことだった。最初に、フワルとフェイトの二人を分断させ、先にフェイトを大人数で潰してから、フワルを数でボコる……戦略的には、お手本

とも言って良いだろう。完全にリィーン達が有利とも言える状況ならば、この手で行くのは常識とも言える

「ッ、卑怯ですね」

「卑怯では無いわ。どこかの偉人や賢人、または愚か者たちも言っているように、戦いにおいて卑怯というのは本来ないのよ。まぁ、騎士の決闘とか、そういった儀礼的な戦いならば、話は別に成ると思うけど」

「せやけど、これはただのケンカ……夫同士のケンカから始まった事やけど……ケンカに、ルールもクソもあらへんやろ？」

「ッ……」

確かに、これは自身が愛する人たちのいざこざから起きた私闘。このようなケンカじみた事に、ルールなんてモノは無いに等しい。故に、レヴェッカの良い分は、正当性がある

□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■

「確かに、良い作戦、だね……数の利を生かした、最も効率のいい戦い方だ」

「だが、あまり好かんやり方だがね……まぁでも、メイリンが必死になって考えてくれた策（デートコース）だ。それを、俺は無駄にしたくないから

ね」

どこか蕩けているような表情と声色で、愛する人の事を語るリィーン……それは、第九夫人であるという肩書であるにもかかわらず、彼は彼女を、愛している証拠でもあった

「……なるほど……よくやるよ、君は」

「クックックック……一夫多妻も、大変なんだよ……まぁ、楽しい事の方が多いから、苦では無い」

「クスッ。ホント、ケダモノね、貴方は」

リィーンは肩越しに、共に突き刺している自身の愛人の一人に、楽しげに話しかけた。帰ってきたのは、罵声交りな言葉だが、そこに嫌悪など皆無で、あるのは、愛しい人と共に居る事に、魂が歓喜にうち震えている、そんな喜色に満ちたモノだった

「クックックックッ……で、だ。あとは、お前を抑えつけ、あっちが終わるのを、ただ待つだけ……さぁ？　どうするんだ？　フワル」

「言っておくけど、私がここにいるのは、あの中で、私がレヴェッカの次に強いからなんだからね」

ちなみに、彼の夫人の中の序列は、ただリィーンの愛している順という意味では無い。少なくとも、そう言った事も含まれているが……これは、実際の戦闘での実力順でもあるのだ

「“猛き虎たる小覇王”。私のこの二つ名に、偽りは無いんだから」

「ッ……困ったな……」

その実力は、力量と技術だけなら、夫であるリィーンと互角とも言

える。彼女は、それほどまでの力を持つ。だから、今こうして、彼に対して一撃をお見舞いしてやったのだ。その力の前に、フワルはただ……

「……ッ」

見え見えの敗北を目の前にしているにも関わらず……彼の瞳の奥は、何か輝いているように見えた

□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■

「ちゅー訳や。せやから、まずアンタから落ちてもらうえ、フェイトはん」

「ッ……」

そしてもう一方……フェイトとレヴェッカ達が対し合う空域。フェイト一人に対し、彼女を囲むのは、殺意を飛ばしまくる八人の女性。フェイトにとってこの状態は、当に絶体絶命ともいうべき状態である

「ほな……再開や！！　アサッ！！！　メイリンッ！！！」

八人の女性の中の一人……リィーンが最も愛しており、彼女達の中で一番の猛者、第一夫人レヴェッカの努号が、響き渡る

「オッケィ！！！」

「了解」

その努号に当てられた二人……第五夫人であり、“運命に咲く穿花（センカ）”の二つ名を持つアサと、第九夫人、“覇を導く智将”の異名を持つメイリン……彼女達は、構えていた己の武器を、相手に向ける……和弓と呼ばれる弦の長い弓と、大砲のように巨大な弩弓の二つを、相手の後ろ斜めの左右から

「行くわよッ！！！　“エルクルド・エアルロウ”ッ！！！！」［［［

防御するよりも、回避する方が性に合うが故の判断……だが

「しかし、それでは先ほどの二の舞だ」

「ッ！！！？」

その声……第八夫人であり、“漆黒に這う飛閃（ヒセン）”の異名を与えられたキララによって、その進路は断たれた。彼女は、自身の得物をまるで、刀を抜刀するかのような体勢で、瞬間移動をした彼女の所へと、自身の動いたのである

「貴様の動きは、先ほどからの戦いである程度は把握出来ている。もはや貴様の速さでは、私に届くことは無い」

［シュキンッ！！！！］

「なッ！！！？」

その一瞬の出来事。その時に、キララは傘を鞘とし、持ち手を柄として……刀を、抜き放った。彼女の武器である傘。それは、俗に言う所の、暗器と呼ぶ代物なのである

「ハアアア

［バッ！！！！］

キララの言葉に従い、リィーンの愛人の中で、一番純粋な力が強いスイが……“白銀に瞬く豪槍”の名に恥じぬ一撃を、フェイトにお見舞いする。無論、先ほどの攻撃を喰らったせいか、回避をするのは無理と判断し、その攻撃を受けると決めた

「いっくぜエエエエエエエエエエエエエエエエエエッ！！！！！！」

［ブンッッッ！！！！！！！！！！］

「ッ！！！？」

［ガギイイイ

！！！」

［ガギイイイ

おそらく、それは島すらも粉砕しかねない程の一撃であり、星すらも砕く事が出来るかもしれぬ……そんな衝撃を、人のみで受ければ、肉体が弾け飛ぶような一撃である

それを受けても、死ぬような事が無いと言うことは、フェイトも神の一人だと言うことに他ならないからである

「ヤーヤ！！　スノウ！！　追い打ちやッ！！！」

［［バッ！！！！］］

その場を任されたレヴェッカの号令が飛ぶ。その号令に従い、“薔薇を司る戦乙女”と、“氷雪を纏う戦乙女”の二つ名を、愛する人から与えられた二人が、己の武具を振りかざし、ダメージを貰い、まともに身動きが取れない相手の、首を刈らんと、胴を貫かんと、動く

「食らいなさい」「あの人への」

「「愛の一撃をッ！！！」」

［［シュッッッ！！！！！！！！！］］

「くッ！！！！」

『ディフェンサー・プラス』［ヴンッ］

［ガキイイイィィィ

薔薇の乙女が、凛とした声で相手に語りかける

［［［［［［シュルルルルルルルルルルルルルルッッ！！！！！！！］］］］］］［バシィッッ！！！！！！］

「なッ！！！？」

防いだはずの攻撃。だが、相手のその刃から茨の蔦のようなモノが生えてきて、それは障壁すらも貫通して、フェイトの身体を縛りつけた

「かわした方が、良かったのに♪」

氷雪の乙女が、無邪気な声色で、相手に言葉を投げる

［ビュオォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォッッッ！！！！！！！！！！！！！］

「グッ！！！？」

直後、スノウの槍から強烈な吹雪が吹きおこり、それは彼女の体温を奪い、さらに縛り付けている蔦ごと、彼女を凍て付かせようとしていた

「（不味い！！　なんとか、振りほどかないと！！！）」

だがしかし、フェイトを拘束しているのは、物理的なバインド。それは魔法で行ったバインドとは勝手が異なり、解除魔法でどうにかするのではなく、自分自身の力量で引きちぎるモノ……しかし、相手が仕掛けたバインドは、抜け出すのも困難だった。動こうとすると、蔦に付いている無数の棘が付き刺さり、その蔦は、吹き荒れ

る吹雪によって、中の水分が固まって行き、強固さを増していたのである

「ッ……！！！！」

そんな、絶対的な敗北を前にして、フェイトは、なんとかして逃れようと動く……

「無駄やで。ヤーヤとスノウ、二人のその連携技……“フロズネスニア・バインド”。それ、いまんとこ破られたんは、せいぜい十人くらいなもんやで……それも、どいつもこいつもバカ力で引きちぎって逃れたもんだけやけどな……フェイトはんは、そんな怪力持っとらんやろ？」

レヴェッカの言葉……その話を聞く限り、この技に相当な自信を持っている事になる。彼女達のような戦好きで経験が多い彼女達が、このように断言していると言うことは……絶対的な信用をこの技に持っている。ということになる……

「ッ……クスッ」

「ん？」

だが、しかし……

□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■

「さて、そろそろあっちも終わりそうだな」

その様子を、遠くから見ていたリィーンは、喜色の笑みを浮かべながら、愛する女たちの来訪を、心から望んだ

「あら、意外と速くない？　もう二人っきりの時間は、おしまいなの～？」

「そう嘆くな……で、どうする？　フワル」

「――――――」

「ん？　フワルく～ん？」

愛する女のやられた姿を見て、狂うのかと思いきや……彼は、いたって平静なままでいた。しかも、瞑想をしているかのような、静けさを持っていた

「もしも～し？　おい、彼女がやられるぞぉ～？」

軽い口調で、フワルを呼ぶリィーンだったが、彼はそんな彼を

「ペラペラと、よくしゃべるね、君は……」

嘲りが混じった声で、嘲笑してやったのだ

「あぁ。おしゃべりだからな、俺は」

「ハッハッハッハ……あぁそれと、彼女を舐めない方がいいよ……」

「あぁ？」「なんですって？」

フワルの、突然の言葉に、リィーンとシェレンの二人は、とぼけた表情を浮かべてしまう

「彼女は、僕を絶望のどん底から引き上げてくれた、強い人だ……そして、今では、僕の大切な、愛する人だからね」

□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■

「確かに、私には、怪力なんてものは持っていません。ですが……」

吹雪に晒されながらも、彼女は力強い声で、相対する八人の女性達のリーダー……レヴェッカに、言い放った

「私は、創造神の妻……“創造の女神”ですよ。このくらい乗り越えなくて、あの人の妻は務まりません」

「ッ……！！！」

なんとも勇ましい、そして夫を思い、持ち上げる言葉であろうか…

……しかし、その言葉に込められた感情を読み取ったレヴェッカは

「全員！！！　フェイトはんから離れるんやッ！！！！」
「「「「「「「「「ッッ！！！！！？？」」」」」」」」」

相手が、“捕らえられている状態で何かする”という事を、感じたのである

「……XS（クロス・スキル）」

そして、今まで研ぎ澄まさせてきた精神を、更に研ぎ澄まさせる

□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■

「“再び刻む誕生の刻……」
「「ッッ！！！！？？」」

フワルもまた、彼女と同じような事を呟く。そしてそれは、同じ空間で戦っている自分の愛人も、まったくの同時に唱えていたことは、リィーンですらも分らず、分っていたのは、フワルとフェイトという、創造を司っていた神と女神の、二人のみだった

――――――ビッグバン”ッッッ！！！

！！！

笑みを浮かべる。そして、近くで体勢を取り戻したシェレンを連れて、彼を追った

□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■

「「「「「「「「「ッッ……！！！！！！」」」」」」」」」

もう一方の熱源。ここでは、レヴェッカの間一髪の直感による指揮によって、吹き飛ばされることは無かったものの……その身には、衝撃によるダメージが幾らばかりかあったようだった

「つぅ……やってくれますなぁ、あん子は」
「ですが、未だに拘束は解かれておりませんわ」

だが、こちらの場合、直ぐに彼女は拘束を解く事無く……いや、解けないのであろう。強度が違いすぎたのか、またはフェイトの放つ“ビッグバン”の威力がフワルのそれと比べて低かったのか、或いは両方か……フェイトは、その身の拘束を何とかしてほどこうと、必死に身体を動かしていた

「だが、多少はもろくなってる可能性がある。放っておけば、いづれは破壊されるだろう」

「そうですわね。スノウ、やるわよ」
「おっけぃなのだ！！」

キララの言葉に従い、ヤーヤとスノウが、己が掛けているバインドの強度を上げようと、手をかざ――――――

「“エンシェント・スマッシャー・インフィニット”ッッ！！！！」
「「ゴオオオ

「私もね～。ま、死にそうにはなったけど」

そして、二人の反応は、どこか軽かった。ビッグバンと言う名を冠する程の爆発を受けた筈の者の声とは、到底思えなかった

「……フワル・ウィンディスがここに来て、そして貴方がここに来た。つまり、作戦は……」

「あぁ、失敗した。見事に、破られたよ……」

「そう……まぁ、これは貴方には向かない戦い方だったかしら？」

「かもな……だが、これで良かったかもな。ちょっと、俺らしくないと想ってな」

「そう……今後は、そう言った事も含めて、考える事にするわ」

「あぁ、頼むな」

この作戦の立案者、メイリンは、自身の至らぬ事をリィーンに謝罪したが、それを彼は何とも思っておらず、ただ笑って、返事を返した

「さて……そんじゃぁ、次はどういう風に戦おうかな……クックック」

と、彼はそれだけを、考えていた……

一方、砲撃の壁によってレヴェッカ達から切り離されたフェイトの方……

「これは……フワルの」

その砲撃の色、そしてそこから感じられるその力強さ……それは

紛れも無く、愛する彼のモノ……そして、それを決定づける出来事が、起きた

「フェイトぉぉぉッ！！！！」
「！！！？　フワルッ！！！！」

その場に、彼女の夫……フワルが、駆けつけてきたのである

「待ってて、直ぐにコレを壊すから」
［ボゴンッッ！！！！！！］［バギンッッ！！！！！！］
「フワルッ！！！」
［ガバッ！！！］
「うわ！？　っと」

そのまま、フェイトを拘束していた蔦を殴り懐して、彼女を解放した。そして、解放されたフェイトは、そのままフワルへと抱き付いた

「大丈夫だったかい？　フェイト」
「うん、平気だったよ。フワルは、大丈夫だった？」
「あぁ、僕も、なんともないよ」

お互い、嘘を言っていた。フワルは両肩を貫通され、フェイトは腹部や背中を強打したはずなのに……しかし、それはお互い分っている事であった。なので、互いに言及する事無く、しばらくそのまま顔を見合わせて、互いの無事を確認するだけだった

そして、フワルの放った砲撃の光が納まって行き……

「「ッ……」」
「「「

スプリングフィールドとウィンディスが、再び睨み合いをするような形で、対峙した

「あ～あ、やっぱ助けたか」

「当然だよ。それと、よくも僕とフェイトの仲を裂こうとしたね……君らしくないじゃないか」

「……そう言われると、反論出来ないな」

頭をぼりぼりと掻きながら、少し自嘲的な表情を取る

「まぁ、二度と同じ手は食らわないだろうし、次の作戦と行きますか」

「へぇ。どういう作戦なんだい？　ちなみに、答える気は無いって返事は無しで。あと、それと同義の言葉もダメね」

なんとも不可思議な質問を、フワルはリィーンにしてきた。それは、敵に対して、作戦をゲロってくれって言ってるようなモノ……そんなこと、本来は言う訳が無い

「頭いかれたか？　ホント、お前って時々そう言う言葉吐くから、調子狂うんだよなぁ……」

「そうかい。で、早く言ってくれないかな？」

「……」

フワルは、相手をせかすように、返事を待っていた。そして、あろうことか、リィーンは……

「メイリン、どんな作戦を考えた？」

「「「「「「！！？」」」」」」

と言って、嫁たちを仰天させた

「ちょ、アンタ、何を言うてんねん！！！　頭アホになったんかいな！！？」

「さすがに、そう言う事は言わないのが常識でしょうが！！！」

「お兄様！！！　ジョーコーという言葉を知らないんですの！！！？」

「リィーンさん！！！　どういう精神してたら、そんなふざけた事を言えるのですか！！！？」

「リンちゃん、さすがにそういうのは……ドン引きだよ」

「リィーンさん……いよいよ、思考がおかしくなりましたのね」

「つーか、マジありえねぇ～……」

「とうとう、本格的にイカれたか……まぁ、いつかなるとは思っていたけどな」

そんなリイーンの発言に、嫁たちは各々抗議の声を上げ、罵り、侮辱した

「お前らなぁ～……おいメイリン、お前、分ってるよな？　“わざわざお前にそう言った意味を”」

「……えぇ、理解しておりますわ、リィーン様」

「「「「「「「「「？」」」」」」」」」

しかし、どうやらそれは、リィーンの考えている策の一つなのか……何かしら、裏の有りそうな言葉で、彼の軍師であるメイリンに訪ねた

「ハッキリ申し上げますと、“策などございません”。こうなれば、“一対一のガチンコ”で決める、というのが手っ取り早いかと」

「ッ……！！！！」

「……フッ、なるほど。そう言う訳か」

メイリンの言葉を聞いて、リィーンとフワル。双方が、同じ答えに行きついていた。そう、ある答えに……

「だ、そうだ。乗るか？　フワル」

メイリンが言った、“一対一のガチンコ”。その意味を理解したフワルは、それに対して受けるか否かを、自身の愛する人に対し答えを求めた

「……いいかな？　フェイト」

「？……！　まさか……」

フワルのその言葉。それを聞いて、フェイトはメイリンの言葉の意味を理解し、フワルのその言葉の真意を、感じ取った

「……うん、いいよ」

「ありがとう、フェイト」

温かな笑みと共に、フェイトはフワルの意思に、同意した

「……さて、お前らも、理解できたか？」

「「「「「「「「「「……」」」」」」」」」」（コクッ）

一方、リィーンの所でも、メイリンの言葉の意味を理解し、彼の言葉にうなずいた。どうやら双方ともに、同じ気持ちに至ったようだった

「……っと言う訳だ。そっちも、いいんだろ？」
「あぁ、いいよ。なら、見せつけて上げるよ。僕とフェイトの、愛をね」
「それは、こっちの台詞だ……俺のこいつ等に対する愛の深さ……その身を以て知るが良い」
「無駄だよ……僕とフェイトの愛に、追いつける訳が無い」

そう言いながら、リィーンとフワルは、お互いに己の愛する人の元へと行く

「行くよ、フェイト」
「うん……いつでもいいよ、フワル」

フワルとフェイトの方。二人は、お互いに向き合い、両手をかさね、その指を絡ませて……お互いの瞳を、見合った

「これをするのは、久しぶりだけど……大丈夫、だよね」
「うん。もちろんだよ。フワルと一緒なら、なんでも出来るって、自信有るから」

途方も無い程の信頼。この二人の間には、愛を超えた何かが有り、それは、お互いの事を誰よりも……自分よりも、信用出来るという……そんな感情を、どこからか感じ取れる、そんな雰囲気を、醸し出していた

「ふふっ……愛しているよ、フェイト」
「うん。私も、愛しているよ、フワル」

名前を呼び合い、絡まっている指に力を込めて、相手の手を力強く握りしめ……瞳を閉じて、集中力を高める……

「「……――――――――――――――――――――――――――――――」」

数秒間の沈黙……それは、今世界には、自分と相手、その二人しかいないと感じる為の瞑想。その間、二人は相手の鼓動すらも聞こえてしまう程、相手に身も心も委ねようと、していた

「「――――――――――――――――――――――――――――――ッッ！！！！！！！！！！」」

そして……閉じられた眼が一気に見開かれ、お互いが、叫んだ

――――――“エクステンド・ユニゾン”ッ！！！！“フェイト・フアイナライズ”ッッッ！！！！！！！！！！――――――

［カッッッッッッッッ！！！！！！！！！！

「……」［ポオォォォォッ］

輝きだした片方……フェイトの身体が、金色の粒子と変わっていき、それがフワルの中へと“入って行く”

「ッ……ふぅ……」

身体の中に、愛しの女性が入って来る……その行為にどこか喜びがあるのか、穏やかな表情を浮かべて、フワルは、金色に包まれる

そして……粒子となったフェイトの身体は、完全に消えてしまい、その場には、金色のオーラに身を輝かせ、彼女の全てを取りこんだ……フワルの姿があった

「……ッ！！！」

［ゴオオオオオオオォォォォ

『了解、ミスターフワル』
［［チャキッ！！！］］

そして、その右手に、フェイトの武器である“バルディッシュ・アサルト”を、左手には、彼の愛銃、“ヴォルケーノα”を構え、戦闘を行う武器を取り出す

「……行こう、フェイト」
?うん。行こう、フワル?

どこからか聞こえてくる、フェイトの声……それと同時に、フワルの背中に翼が現れた。蒼と金の、二つの光翼を……そして周囲には、その二色の光の粒子が舞い散っていた……

「それじゃぁ、俺たちもやるか……なぁ、レヴェッカ」
「あいよ、リィーン……」［スッ］

一方、その様子を見ていたリィーン達も、同じようで違う事を、し始める……しかし、彼らの場合は、お互い向き合う事無く、ただ、リィーンの後ろに、彼女達がいるだけだった

ただ一人……レヴェッカのみ、彼の隣に立ち、彼の右腕に抱きついていた

「……行くで、リィーン」
「あぁ。来い、我が愛しのレヴェッカよ」

序列一位……彼の愛人の中で、この地位にいる事には、ただ実力が一番強いとか、一番リィーンが愛しているという意味以上の事が、そこに含まれている

それは、彼女の持つ能力が物語る……レヴェッカの持つ力、それは、“自信の身を、対象の武装へと変化させる力”にある。それが、リィーンの第一夫人、“装武の着き手”、“愛すべき絆契（バンケイ）の鎖姫（クサリヒメ）”の二つの名を与えられた、彼女の本領……“唯一、リィーンが求めた女性”の力なのである

「……“着装”」

［ポウッ……ッ、バシュッッ！！！！！］

彼女が、その身を光らせた直後。その身は、大きく変貌を遂げた……リィーンの、右腕の鎧と化したのだ。その姿は、武者鎧のような形をしており、右の肩には、大袖と呼ばれる楯状の鎧が備え付けられている……そう、一般的に、籠手（ガントレット）と呼ばれている装備と成ったのだ

「……よし。次だ、レヴェッカ」

？あいよ、リィーン……“連鎖着装”？

［［［［［［［ジャラジャラッ！！！　バシィィィィッ！！！！］］］］］］］

「「「「「「「ッッ、くぅぅぅッ……！！！」」」」」」」

そして、レヴェッカの姿なき声が響く中、リィーンの背中から、八本の鎖が服を突き破って生え、それらが全て、シェレン、ヤーヤ、スノウ、アサ、ナユタ、スイ、キララ、メイリンの八人を縛り付けた……しかし、その行為は本来ならば嫌悪される行為。であるはずが、鎖に縛られた彼女達の表情は、皆が頬を染め、あるものは恥

辱の表情、あるものは恍惚の表情、あるものは喜悦の表情……誰もが、その行為をされる事が、嬉しいのだった

「さぁ……イっちまいな」

「「「「「「「「クッ、くあぁぁぁっ、あっ……あああああぁぁぁ

そういった戦いで、決着を付けようというモノだった

「まぁ、そうなるね……」

［［チャキッ］］

フワルは、両手に持つ武器……黒斧の杖と、蒼の鉄銃を握る手を強くし、相手を睨む

「クックックッ……」

［グッ……！！］

［［［［［［［［［ジャギンッッッ！！！！！！！！］］］］］］］］］

リィーンも、右手を強く握り、それに倣い、背中から生える刃も、意思を持つかの如く……いや、実際は意思を持った刃なのであるが……その身をギラつかせる

「「……ッッ！！！！！！！」」

［［ダシュンッッッ！！！！！！！！！］］

「ハアアア

ッッッ！！！

［［ダシュンッッ！！！！！！！！］］
［［［［［［［［［［［［ガギンッッッッッ！！！！！！！！！！！！！！！！］］］］］］］］］］］］
［［ダシュンッッ！！！！！！！！］］
［［［［［［［［［［［［ガギンッッッッッ！！！！！！！！！！！！！！！！］］］］］］］］］］］］

そして、そのような激突が、幾度も行われた……その光景は、地上から見れば二つの光のぶつかり合いに見えるだろう。蒼金の閃光と、虹色の閃光……それら二つの光の衝突が、続いた

「この……ッッ！！！！！！！！」
「クソがァァッッ！！！！！！！！」
［［ダシュンッッッ！！！！！！！！！！］］
「ハアアア

［バチンッッ！！！！！！］
「ッッ！！！！？？」

フェイトの言葉が聞こえた直後、フワルが“消えた”

「な、なんだ？　これは？」
？リィーン！！！？？後ろですわ！！　お兄様！！！？
［ガギイイイ

刃が震え、声を上げて話し合っていると言う変な現象が起きて、その内、フワルの攻撃を防いだ刃が力強く動き、フワルのリィーンよりも小柄な体が、吹き飛ばされた

？フワル！！！？

「ッ、大丈夫……反撃はなさそうだ」

？……やっぱり、一筋縄じゃいかないよね？

「あぁ。だが、なんとしてでも彼を倒す！！」

？うん！！？

［［グッ！！！］］

そう言って、フワルらは武器を握り直し、構える

「しっかしまぁ、なんとしぶとい奴だよなぁ、アイツ」

？ねぇねぇ、この戦い、どんだけ時間たってるの？？

？コイツがアイツと激突し始めてから、すでに体感時間では３０日は経過している？

？うわ、なにそれ……一か月も戦いっぱなしって事？？

？よくやるねぇ……私なら、やってらんないわね？

「まぁ良いじゃねぇか……まぁでも、そろそろ片を付けないとな」

［グッ……］

リィーンの方もまた、籠手に込める力を高め、この戦いを終わらせる一撃を放たんと、構える

「「……」」

しばしの沈黙……互いに、愛する人と共に放つ本気の一撃を以て、この戦いを終わらせようとしていた

――――それこそが、この二人の戦いを終わらせる、唯一の方法……何もかもが正反対で、唯一同じなのが、愛する人がいると言う事……ならば、彼らの戦いを終わらせるのは、その愛する人がいなければならない……

――――どちらが、より相手を愛しているのか……それが、この一撃によって証明され、その一撃が、どちらかの勝敗を決める……

――――……“だが”……

「「……ッッ！！！！！！！！！！」」

［ダシュンッッ！！！！！！］

その本気の一撃……動いたのは、リィーンのみで、フワルは動かず、その場で、自身が持つ二つの武器を、リィーンに向けて構えていた

「……行くぞフェイトッ！！」

？うんッ！！？

［［キュインッッッッ！！！

べく、自身も砲撃の自在法を放つ

？？？？？？？？？？？“ルセイスンスクムッ！！！！？？？？？？？

？？「ヴァニティ……」

自分の前に力を急速に収束させ、砲撃の為の魔力スフィアを形成する

？？？？？？？？？？「スマッシャァァァァーーー”ッッッ！！！

！！！！！！！！！！！！！」？？？？？？？？？？

［ゴオオオオォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォ

ォォォォォォ

その光のせめぎ合い……砲撃魔法の応酬が、世界に轟いた。
蒼金と虹の光……それら二つの光は、互いに押し合いながら、どちらかを食い破らんと、輝きを増す

［カッッッッッッッッッッ！！！

！！！」

しかし、フワルの攻撃は、続けられた……その砲撃の爆発は、予定調和とでも言うかのように、彼は黒き斧杖を、金色の刃が輝く大剣の姿へと変えた

？フワルッ！！！？

「あぁ！！！」

［グッ！！！］

“バルディッシュ・ザンバー”の強く握りしめ、それを振りかざす

？「ハアアアアアアアアアアアアアアアアアッッ！！！！！！」？

［バリバリバリバリバリバリバリッッッッ！！！！！！！！！！！！！！］

その大剣に、蒼と金の雷が纏わり、その刀身が、極限まで引き伸びていき……

フワルとフェイトの、最後の一撃が、放たれる

――――――撃ち抜け、雷神ッ！！！！！――――――

――――――“ジェットぉ……ザンバアアアアアアアアアアアア

ァァァァァァァァァーーーーー”ッッッッッ！！！

？？？？？？？？？？「ハアアアアアアアアアアアアアアアアッツ！！！！！！！」？？？？？？？？？？

「ギュイイイィィィ

リィーンの拳からは放たれる、虹色の光の帯……斬撃の特性を持ち、相手を斬り伏せる力を持つその刃は、まっすぐフワルへと向かって行く……

その二つの刃のぶつかり合い……それが、この二人の対決を終わらせる一撃となる……

［［ガギンッッッッ！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！］］

「「ッッ！！！！？？」」

“そう、なるはずだった”……

「双方、剣を引け。この場は、俺が預からせてもらう」

「「っ……！！？」」

その場に、まったくもって予想だにしなかった存在の乱入によって、二人の攻撃は、弾かれたのである

その場に現れたのは、黒髪の中年の男性だった。“赤き和服のような外套に身を包み、その下には、黒い鎧を装着し、黒いサングラスを付けている”という出で立ち……今は、数多の世界を歩んでいる、“旅人”の男である。その両手には、大剣と呼ばれる刀が二本、握られており、おそらくその刀で、リィーンとフワルの本気の一撃を防いだのだと想われる

「あなた、は……」

「くッ……」

その、想定外の存在の登場に、リィーンもフワルも、驚いた

「テメェ、なんの真似だ……」

そして、その男の事を、誰よりも一番よく知るリィーンが、彼の“名”を叫ぶ

――――――“アーロン”――――――

と……

「……いや。お前が俺以外の相手に本気を出している事に、腹が立ってな……それで邪魔をした」

？？？？？？？？？？うわぁ～……？？？？？？？？？？

？アーロンはん、それドン引きやで？

？なにそれ、嫉妬？　ないわ～……？

リィーンの妻たちが、介入してきた旅人、アーロンの事をえらく酷いように言っているが、それを気にすることなく、彼はフワルの方へと向いた

「アーロン、さん……」

「フワル・ウィンディス、これはどういうことだ。お前には、“計画”に関して、リィーンの要請なく干渉する許可は無いはずだが」

「ッ……」

「あぁ、そういや俺らがやり合ってた理由、それだったな。すっか

り忘れてたわ」

威圧するような言葉で、アーロンは、フワルに言及していく。しかし、フワルはそれにおじける事無く、言葉を紡ぐ

「ですが、アーロンさん！！　彼のやり方は、間違っていると想います！！！　そうでなければ、“また失敗してしまいます”！！！」

アーロンに対して、声を荒げて言うフワル。それを聞いて、返してきたのは、話の中心であるリィーンだった

「あぁ？　フワル、テメェ何を根拠にモノ言ってんだッ！！！　間違っていたから、“失敗する”？　今までお前にとって間違っていない事をやってて失敗してんだ。だから、今度は「お前は黙れ、リィーン」ッ……ケッ」

戦闘態勢のまま、しかしいきなりの他者の介入で、完全に毒気を抜かれてしまった二人は、争う様子もないまま、第三者の勝手を許していた

「フワル・ウィンディス。確かに、貴様の言うとおり、リィーンの行いは、“あの者”の意向には反している。が、それでもだ。貴様は、あの者の許可を貫わず、独断で行動した。それは許されざる行為……よって、厳正に処罰を与える。異論は認めんぞ」

「ッ……了解、しました」

？フワル……？

アーロンのその言葉。そこに込められているその意味を理解したフワルは、黙ってしまい、従うしかなかった

「……で、次はお前だ、この馬鹿者が」
「あぁ？　俺はちゃんと仕事してるだろ。“あの大将”の命令通り、な」
「あぁ。確かに、な……」
“あの大将”、というのは、先ほどアーロンが言っていた“あの者”の事を指す。しかし、アーロンはその人を敬い、でもどこかでは侮蔑しているかのような口振りである……リィーンは、完全に毛嫌い、または馬鹿にして、露骨にその存在を嫌悪しているかのような口調だった

「だが、腑に落ちぬ点がある。フワル・ウィンディスがこの世界に介入した直後、なぜコイツほどの真面目な奴が、とっさに動いてしまうほどの事が起きているのかと思い……先ほど、ここにくる前に、お前がやっていた諸行を見てきたが」
「ハッ！　ご苦労様なこっただな。３０日間も……いや、それはこの世界ではか。あっちの世界じゃぁ、まだ“３０秒しか”経ってないのか」

この世界……リィーンが展開したこの世界は今、時間の流れが他の世界よりもかなり早い。リィーンによって、この世界の時間の流れが、変化されているのだ。“あの兄妹が居る世界の一秒が、この世界の一日”となっていた

「その３０秒の間で、よく分かったもんだな……」
「あぁ、簡単に分かったよ……アイツらの姿と、何かがあった跡を見れば、な……」

言葉を途切れさせた後、アーロンは彼を……リィーンを睨み付けて、言葉を言い放つ

「なぜ、あのような事をした」
「あぁ？　何のことだ」
「とぼけるな。あの五人……今回貴様が転生させた人間達だ。なぜ、あんな“何の価値も無い人間共”を転生させた。それも、まるで“使い捨ての駒”の如き扱い……グレイ・スティンの精神が不安定な時期を見計らっての投入……怪しいとしか思えん」

それはまるで……リィーンが途中で投入した五人は、何かの為だけに送られた存在であると言う事……それはもちろん、グレイ・スティンの起源の覚醒ででは有るのだが……

「おいおい、価値が無いなんて言うなよ。アイツらは皆、面白い“起源”を持っているんだぜ？」
「……」
「“極限”、“情熱”、“不動”、“狂気”。そして「“生命”、だろ」あ……あぁ」

リィーンの言葉の途中から、フワルがある人物の……“寿夢乃”の起源を言った

「“そんな下らない事はどうでもいい”。どんな大層な資質を持っているところで、それを理解し使いこなせなければ、意味がなかろう」

だが、アーロンはそれを関係ないと言い放ち、一蹴。そして話を戻し、その続きをしていく

「今回のあの五人の件、さすがに“あの者”も容認出来んと申された」

「む……テメェ、チクったのか？」
「俺は俺の使命を全うしているまでだ。お前が行った事に関して、俺は“あの者”に報告しただけだ」
「あっそ……で、なんて言ってた」

“あの者”……それは、リィーンにとって“上司”のような存在であるのか、その者に自身が行ってきた事の感想が気になるのか、彼はその言葉を待った

「……お前はしばらく、あの七名の転生者達と接触することを禁ずる。だそうだ」
「なッッッ！！！！！！！？？？」
「そして、フワル・ウィンディス。お前には今回の罰として、しばらくあの転生者達をリィーンに代わって監視せよと、“あの者”はそう申された。いいな」
「……了解しました」

以外にも、その言葉はリィーンに取って鋭い棘を持って突き刺さり、フワルには、リィーンがいた場所に代わるよう言われ、その任を了承した

「おいアーロンッッ！！！！！！！　どういうことだそれはッ！！！！」
「どうもこうも無い。これは、“あの者”の決定だ。異論があるのならば、“あの者”に言え……いいな」
「ッ……ケッ！！」

悪態をつきながら、彼は踵を返して、その場から離れようとした

［パシュンッ］

「リィーン」「お兄様」「リィーンさん」「リンちゃん」

その際、戦闘の意思を霧した事を示すかのように、レヴェッカ達の武器化を解除した。その時の彼女達は、ただその愛する人の背中を、心配そうな目で見つめていた

「……帰るぞ」

「フッ」

「「「「「「「「「「あ……」」」」」」」」」」

「「「「「「「「「「フッ」」」」」」」」」」

と、それだけを言うと、彼は風と成って消えていき、それに続くように、彼の妻たちも、一緒に消えていった。しかし……レヴェッカだけが、そこに残った……

「……」

「どうした、レヴェッカ・シリウス」

「クス。あんただけやな、アーロンはん。今、ウチの事をその名……シリウスの名で呼ぶのは」

「フン……で、何故残った」

「いんや。夫の不作法をどうにかするんが、妻の務めやと思うからや……ただ、そんだけや」

「……そうか」

とだけ、アーロンが言うと、レヴェッカは彼の方と、フワルの方を向いて、深く、頭を下げた

「ウチの夫が、えろう迷惑をおかけしました。あと、フワルはん。いきなり奇襲をしてしもうて、ホンマにすまんかった」

「え……？」

「あ、あの……レヴェッカ、さん？」

その口から出てきたのは、謝罪の声。夫の行動で、自分の知り合いに迷惑を掛けた事を、彼女は彼に変わって謝ったのである

「……全く、アイツに比べて、妻の方がまともなのか……勿体ない、というのは、こういうことを指すのだろうな」

「まぁ、そう言わんといて、アーロンはん……しょうがないんや、今回に限り、な」

「ふん。それぐらい、“言われなくても分っている”……あいつを、暫く頼むぞ」

「リョーカイ。手綱は、しっかり握っとくさかい」

「……あぁ」

［フッ］

そう言いながら、アーロンはリィーンと同様、その場から姿を消した

「……ほな、二人ももう帰りや」

「あの、レヴェッカさん」

「わかっとる。さすがに、今回はあん人のやり方には、うちらももろ手を挙げて賛成はしとらん」

どこか悲しげに、しかし確固たる決意を感じさせるような言葉に、フワルは一つ、訪ねた

「あの、レヴェッカさん。やはり、今回の彼の行動は……“失敗が続いているから”、ですか」

「……そうや」

その質問……おそらく、ある“計画”の事だろうか……この“

計画”というのは、実はかなり前から……“数万年”から行われ始めている事なのである。そして、彼はその度に、失敗を繰り返してきたのだった

「そん通りやで、フワルはん。さすがに“時間”もあらへんし、焦っとるという事もある……せやから、あん人は信念を曲げてでも、今回の計画を成し遂げたいんやと思うんや。まぁある意味、プライドの問題やと、思うんやけどな」

「……」

レヴェッカの言葉に、フワルはどこか納得していた。しかしそれでも、納得のいかない部分が大きく心を埋め尽くしているのか、それでも、彼の行動を許す気にはならなかった

「おこっとる？」

「別に怒ってはいません……ですが、やはり今回の事に多少は関わってしまったので、それに関して説明をしてくれなかった事に、腹が立っただけです」

あの五人の転生者の肉体……あれを創造した身として、なんの目的で使うのかを聞かされず、そしてそれが、自分にとって気に食わない事だったから……だから、フワルはリィーンと戦う事を決めたのであった

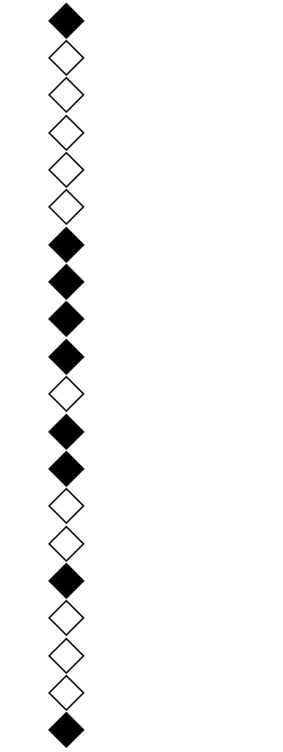
「まぁ、今すぐ許してくれなんて、思とらへんから……それでも、いつかはあん人の事、許したってな」

「……いつかは、許すかもしれませんけど……しばらくは、仲違いをしてるかと思いますがね」

「クスッ……ほなな」

［フッ］

そう言いながら、彼女はリィーンらと同じく、風の如く、その場から消えて居なくなった



その直後、世界は再び、有る世界……スティン兄妹と、他の転生者達のいる場所へと、戻っていた

「「「「「「「「「……」」」」」」」」」

その場には、未だに気を失っている、七人の転生者達の姿があり、フワル……青年はその七人の姿を見て、心を痛くしていた

「どう、するの？」

そんな彼を、彼の伴侶であるフェイトが、ややおどおどした様子で、七人をどうするのかを聞いてきた。あと、いつの間にか、彼らの融

合は、解かれていた

「……まず、彼らの記憶の“改竄”を行う。彼らの出会いは、あまりにも悲しすぎたから。せめて、良い形での出会いにしてあげよう」

「そう、だね……それが、良いと思う」

「うん……ありがとう、フェイト」

「え？」

「僕に同意してくれて、ありがとう。やっぱり、一人で決めつけて、行動を行うことは、なんだか気持ち悪いからね」

「あ……」

そう言う青年の言葉を、フェイトはあの男……この人達を転生させた張本人の事を、指しているのだと……簡単に、気付いたのだった

「……どうしてだい？　一体、なんでそこまでして、君はこのような事をするんだ……“リィーン”……」

フワルの言葉には、友への悲しみが、詰まっていた……

＃６５（下）　彼らの、戦いにおける真の決着。それは、愛する人と、共に戦う事

次回は、カミウラを更新予定です。内容は、今回のリィーン対フワルの補足と解説を予定しております

～カミウラ　出張号～（前書き）

どうも、こんにちは、リィーンです

今回は、こちらのほうにも、カミウラを掲載しようかと思います。
内容が軽度のネタバレを含んでいるので……見たくない。という方は、戻って下さい

連載として掲載している方の“神の舞台裏”と同じ内容ですので、注意して下さい

斬空様、緋水様、鳴神　ソラ様、真王様、ムーギネーター様、あんぎゃーす様。ご感想、ありがとうございます！！！

～カミウラ　出張号～

［ガヤガヤ、ガヤガヤ、ガヤガヤ……］

神様「ん、んん！！！　えぇでは！！！　これより俺様対コイツ編の、無事の終了を祝して！！！」

全員（レヴェッカ、シェレン、ヤーヤ、スノウ、アサ、ナユタ、スイ、キララ、メイリン。そしてあの創造神とその女神）「かんぱ～～～～いッッ！！！！！」

［カンッ！！！！］

神「いやいやいや、お疲れでした～ｗｗｗ」

青年（フワルの事）「いや～、お互い、ホントにお疲れ様～♪」

旅人「やれやれ、やっと終わったか……おいスタッフ、ポン酒を持ってこい。こんな泡だらけの酒では物足りん」

レヴェッカ「フェイトはんも、お疲れはんどした～♪」

フェイト「いえいえ。レヴェッカさんも、お疲れさまでした」

［ワイワイ、ワイワイ、ワイワイ］

作者「いやいやいや！！！　ちょっとまった～～～～～ッッッ！！！！！！！！！！！」

全員「？」

ヤーヤ「なんです？　この駄作者」

スノウ「まさか、打ち上げ会だから、一発芸でもしてくれるの？」

作者「んな訳ないでしょうが！！！　ってか、なんですかこの飲み会は！！！？　いきなりこんな事をし始めて、読者置いてけぼりにも程がありますよッ！！！　ってか、今頃パソコン、もしくはケータイの前で、口がポカーンと成っているでしょう！！！！　ってか、そうなっているはずですッ！！！！」

神「あぁ、まぁ……細かい事は良いだろう♪」

作者「よくないです！！！！」

神「あぁ～……まぁいいや。とにかくお前ら～！！！　今夜は飲んで食って暴れるぞ～～～ッ！！！！」

全員「おおおぉぉぉぉぉッッ！！！！！！！！！！」

神「という訳でスタッフ！！！　“ア○ヒビール”持ってこい！！！　あと、“麦とホ○プ”もなッ！！！！！　チューハイも有りたっけもってこ～いッ！！！！」

青年「まぁ、僕とフェイトは、コーラにしておくけどね」

フェイト「……」［ゴクゴク］

作者「なにこのカオス……もうやだこのキャラクター達（ＴωＴ）」

旅人「といいつつも、結局はお気に入りなのだろう」

作者「えぇ、まぁ……もういいや！！！　私も飲む～～～ッ！！！！」［グビッ、グビッ、グビッ］

【→ガチで飲んでおります！！！】

神「さて！！　ある程度酒も入った事だから、そろそろ本題に行くぞ！！！」

嫁ズ「イエ～～～イッ！！！！！」

青年「ハイテンションだな～」

神「それでは、今回のお題を発表しよう！！！　今回は……これらだッ！！！」

――――――今回の“元”破壊神対創造神に出てきた様々な能力云々について――――――

――――――今回明らかになった“ある計画”について――――――

――――――“あの者”、“あの大将”について――――――

神「だ！！！」

レヴェッカ「ほな、まず初めの方から、順に上からやって行きまひょか」

神「まずは、俺とフワルの激戦の解説と補足から。まず、第一ラウンドから」

――――今回の“元”破壊神対創造神に出てきた様々な能力云々について――――

青年「まぁ、ハッキリ言えば、これは惰性試合、だったかな」

神「あぁ、そうとう遊んでいる。肩慣らしにしかならんな」

青年「っていうか、お互いにその程度ぐらいの殴り合いだったしね」

神「あぁ……特に、言うような事も無いし、次行くか」

作者「（すっごくはしょりましたね……）」

青年「で、第二ラウンド……まさかの二部構成」

作者「これには、自分でも驚いています。色々とやっていくうちに、文字数が４万を超えてたんです」

神「で、結局削ろうにも無理だから、急遽二部にしたってことか」

作者「はい……やりたい部分が多々ありましたし、擬音語の部分を削ればよかったと思うのですが、どうしてもそうすると表現的に、なんか味気が無くなって……」

青年「で、結局もういいかってなって思い、書き続けたら……」

作者「5万文字……これほど長く書いた戦闘は有りません」

神「だろうな……で、まぁ以上が作者の事情だ。そんじゃぁ、中身の方に行くぞ」

青年「まぁ、目玉というと、コレだよね」

・【〇〇化】
・召喚の応酬

神「確かに、な……そんじゃぁ、まず一番初めの方から説明するか」

青年「そうだね……まずは、この【〇〇化】からだね……」

レヴェッカ「って、名前伏せられとるやないか！！！」

ナユタ「これは、どういうことですの？」

作者「いやぁ……まだそれは伏せておきたいと言いますか……ねぇ」

神「なら説明のしようがねぇじゃねぇかよ」

作者「まぁまぁ……今回話すのは、あくまでもその効果を述べさせていただきます。」

青年「それ、バレにならないの？」

神「コイツはその点は問題ない……はず」

作者「まず、この【〇〇化】。見ての通り、普通の技とは違います。平たく言えば、神様と青年の本来の力を発動する為の、言わば始動キーのようなモノです」

神「あの長ったらしい詠唱の事か」

作者「はい。まずは、神様の詠唱についてです。以下に書かれているのが、今回神様が行った【〇〇化】の詠唱です」

――――あの時、あの場所にいて、戦いにもがいていた自分。その全ては、こんな今を選びとるために、やっていた事なのだろうか

Entschuldigen Sie mich, wenn ich manchmal in dieser Stelle w?re, und sich selbst, das k?mpfte, war, jetzt ganz zu w?hlen

――――遠い過去、心の彼方で望んでいた場所に、俺はいる。そ

の事に、途方に暮れた。だが、もうあの日々には、戻れない
An diesem Tag, die an einen Ort jenseits des Verstandes zog.
Sie in einem Dilemma passiere
n. Aber wieder zur?ck zu gehen
――――

――――俺達が、自由気ままに生きていた日々は、今や遠い過去。無邪気に笑い、無垢な想いだけでは、今この瞬間、生きることなど出来ない
Jene Tage, als wir nur frei sind, und war, es gibt schon lang, wurde daran. Nur ein unschuldiges L?chelnkann kein Leben mehr geben――――

――――現実の世界に溢れ、たゆたう感情。それを感じたとしても、あなたが目を閉じるのならば、そのまぶたの裏に俺はいる。そこに絆が存在する。だから、俺は一人では無い
Ich wanke in die reale Welt Emotionen. Auch das Gef?hl, wenn du deine Augen geschlossen sind Sie da. Es ist eine Bindung. Also, nicht allein――――

――――俺達は止まらない、何があっても進み続けよう。己が信じられる想いが、ここに残ってるのだならばッ!!!
Wir gehen los, los Aber sicher fortsetzen. Glauben Sie, was das Wort, ich von links!!――

―――

―――――契れ―――――

「進みゆく、真の激情（progress Realemotion）――――」

―――――描かれる絆の物語

Ｌｉｅｎ ｔｈｅ ｃｈａ?ｎｅ ｅｔ ｏｂｌｉｇａｔｉｏｎｓ

Ｅｐｉｓｏｄｅ―――――

作者「以上です」

神「ながッ!!!? 今思ったが、かなり長いぞッ!!!?」

作者「まぁ、色々と要素を詰めすぎたら……」

青年「で、これをしたらどうなるの?」

作者「今回のこれを発動した時の効果は、“彼が知りうる全ての存在。それがたとえどんな存在であろうと、彼の“友”として、その場に召喚させる事が出来る。或いは、彼が知りうる全ての道具を顕現させる事が出来る。また或いは、彼が知りうる全ての能力を、例え如何なる力であろうとも、使用する事が可能と成る”。というものです」

神「つまり、知識さえあれば、どんな事でもできる。という訳だな」

作者「しかし、その度合いや制限は一切無し。加えて反動すら無く

なります。あっても、それは彼自身の存在の質が異常な為、軽微なモノとなる。そして、友として召喚した存在には、色々と神様による鬼補正が掛かり、いづれも“最高神”と呼ばれる存在クラスにまでレベルを引き上げる事が可能という能力」

神「つまり、どいつもこいつも、神様並みの力を得るって訳だ。例え、某“銀のソウル”の駄メガネツッコミ役でも、神様と対等に成れる。って訳だ」

作者「そう言う事です。名も無きモブな一般人でも、神殺しとしての資質を持たせられる事が出来るので……簡単に言えば、最大で最強で最悪な軍隊の召喚。そして自分は何でも出来ちゃう。それが、神様の本来の力……の半分です」

青年「半分!?　まだあるのか!!?」

作者「実際、ここまでくれば、ほぼバラしているようなもんですけどね……実際の神様の力は、恐ろしくカオスなのですよ。先ほど言った効果も、“本来の力の応用”に過ぎませんから」

神「まぁ、色々と捻った訳だ。あと、この時の俺のメイン武器は、虚空から伸びる“鎖”になる。ちなみに、この鎖の範囲は無制限で、やろうと思えば、銀河すらも縛り付けて、それを鎖付き鉄球の如く操る事も可能だ……まぁ、あくまでもやろうと思えば、だけどな」

作者「では、次に青年君の【〇〇化】について」

青年「詠唱は、以下のとおりね」

――――今この瞬間、僕は前だけを見ていよう。信じる事を、信じていよう。得た愛も、過去の絶望も、全て羽根に変え、不死なる翼を生み出そう。さすれば、僕の鼓動は蘇る

Sie sollten jetzt nur die Front anschauen. Sie sollten glauben, da? Sie es glauben. Sowohl die Liebe als auch die Verzweiflung werden die Feder; zu einem unsterblichen Fl?gel. Erholen Sie sich; meine Niederlage――

――――少し、ほんの少しだけ。愛する君が笑ってくれるのなら、僕は黄昏の騎士となって、君に僕の全てを上げよう

Es gibt ein wenig es und ist gut. Wenn Sie lachen, werde ich ein Ritter der D?mmerung und geben wir alles von mir――――

――――君に誓おう、僕は夢を見よう。この命と愛の限り。その震える声に、口づけをしよう。そして、無限の未来へと羽ばたこう

Ein Gel?bde zu Ihnen, um mir den Traum. So weit wie das Leben, so lange wie die Liebe. Ein Kuss auf die bebender Stimme. Und dann, um die unendliche Zukunft――――

――――僕はいつでも、君の傍にいよう。どんな事があっても、

傍にいよう。この世の全てが、君を狙っていたとしても、僕は、君を守る盾になろう

Ｉｓｔ ｉｍｍｅｒ ｎｅｂｅｎ ｍｉｒ．Ｉｃｈ ｗｅｒｄｅ ｉｎ ｄｅｒ Ｎ?ｈｅ ｊｅｄｅｒｚｅｉｔ．Ｄａｔｔｅａｌｌｅ Ｆｅｉｎｄｅ ｄｅｒ Ｗｅｌｔ，ｎｕｒ Ｓｉｅｗ?ｒｄｅｎ Ｓｃｈｉｌｄ――――

――――いつしか涙は、明日を灯す奇跡の太陽に変わるだろう。だから、行こう。護るべき存在が、あるのならばッ！！！

Ｕｎａｗａｒｅｓ Ｔｒ?ｎｅｎ，ｄａｓ Ｌｉｃｈｔ ｄｅｒ Ｓｏｎｎｅ ｅｉｎ Ｗｕｎｄｅｒ ｍｏｒｇｅｎ．Ｌａｓｓ ｕｎｓ ｇｅｈｅｎ．Ｗｅｎｎ Ｓｉｅ ｅｔｗａｓ ｚｕｓｃｈ?ｔｚｅｎ！！！――――

――――創生――――

「祈り(pray)の先へ――――」

――――創られる命の物語

Ｆｗａｌ ｔｈｅ ｅｔｅａｌｕｎｅ ｍｅｌｅｎａｓ ｈｅｒ Ｓｔｏｒｙ――――

青年「……なんだろう、激しく中二成分が込められている気がする」

作者「能力も中二のようなモノですよ……これは神様のと同じようで別モノなものです。効果は、“ありとあらゆる存在、事象の創生”。つまり、知りうる知識から、新たに物質、又は能力を創りだ

す事なのです」

神「？　つまりアレか？　コイツも、知ってる全ての存在を召喚させる事が出来て、コイツが知りうる全ての道具を顕現させる事が出来て、コイツが知ってる全ての能力を使用する事が出来る……って事か？」

作者「はい。しかし、本質は異なります。神様のは、いわゆる“既存のモノを、色を付けて借りる”事に対して、青年のは、“無から創りだす”という事なので……見た目や能力などが同じでも、それを自身のオリジナルとして」

青年「だから、彼の効果の事を、借りパクって表現にしたのか……」

作者「そう言う訳です。ちなみに、この【○○化】というのは、『ディエス・イレ』というゲームに登場する、“流出階位”相当の位置づけになります」

神「でぃえす？　“流出階位”？　って奴は、ググるかウィキで調べな！！！」

青年「それと、この詠唱に関しては、Ｊ－ｐｏｐ系の音楽の歌詞が元ネタになっているんだ。ちなみに、僕の詠唱は、“水樹奈々”さんの、『Ｐｒａｙ』が基になっているんだよ」

神「俺のは、“倖田來未”の『ｒｅａｌ　Ｅｍｏｔｉｏｎ』と、“浜崎あゆみ”の『ｐｒｏｇｒｅｓｓ』って曲が基になってるぜ……ちなみに、どっちも作者が一、二を争うほど好きな歌手で好きな曲だとさ」

作者「好きなんですもん……倖田來未と浜崎あゆみ……私の中では、二大歌姫と言っても過言じゃないです！！！　例え現実で問題起こしていても、歌が好きなので結構です！！！」

レヴェッカ「そういや、まだ詳しく設定は乗せておらへんけど、ウチのイメージＣＶ、“倖田來未”なんやけどな……」

神「あぁ、そういやそうだったな……ってな訳で、ほんじゃ次行ってみよう！！！」

作者「えっと……召喚の応酬について、ですね。これはアレです、読者の中に、遊戯王に詳しい方が結構いたのと、この時期、私が遊戯王にのめり込むようになってしまった直なので、ちょっとしたサービス感覚でやりました」

神「ちなみに、“ワルプルギスの夜”もそういったサービスだが……まどマギ、見てない人結構いるもんだな」

作者「その点に関しては、私も驚きです……ですが、レンタル屋でも開始されていますから、それで見ていただけると幸いです」

青年「製作会社の鬼修正掛かってるけどね」

作者「なぜ“もう何も怖くない”のポーズが変わってんだよ～～～ッッ！！！！！　確かに、マミさんらしくないとは思ってたけど、アレはアレでよかったのに～～～ッッッ！！！！！！！！！」

青年「あの～、知らない読者おいてけぼりだよ？」

作者「っと、そ、そうですね……大変失礼いたしましたm（＿）m」

神「まぁ、アレはサービスって事で」

作者「あと、同志Fが生粋の決闘者なので……そう言った点でのサービスでも有ったりします」

神「という訳で……それじゃぁ、第三ラウンドの説明に行くか！！」

青年「まぁ、これは……言わずも分るよね」

作者「ですが、愛する人との一体化、という点で、有る程度説明をはしょった部分もあるので、その辺の説明をさせていただきます」

レヴェッカ「せやな……」

フェイト「そう、ですね……」

作者「まず、青年とフェイトの一体化。これは、完全な肉体と魂の融合です」

青年「そうだね。確かに、そんな感じではあるかな。故に、主導権は僕が握っているけど、いざという時は、フェイトに身体を任せる事も可能だ……まぁ、そんな事はまず無いだろうけどね」

フェイト「う、うん……そう、だね」（ふにゃん）

神「（ん？　なんか、フェイトさんの様子がおかしい気が……気のせい？）」

青年「まぁ、なんだろうね。“一つと成っている”、という表現がぴったりな感じだな」

作者「と、言う訳です……続いて、神様と、レヴェッカ達の一体化についてです」

神「あ、あぁ……俺達の場合は、コイツのそれとは違って……女全員が、俺の武器と成った。つまり、完全に俺が主導権を握っているという事になる」

レヴェッカ「ウチらは、こん人の女（モノ）。モノは、使い手に使われてこそ、その真価を発揮するんや」

神「つまり、女は振りまわすモノ。男が主導権握らねぇで、何が旦那だ」

青年「普段の立場は逆だけどね」

神「ウルセェッ！！！」

作者「あははは……まぁつまりは、愛する人と一体になるといっても、共に並んで歩むか。それとも、どちらか一方が引っ張っていくか……そう言う違いがある。という訳です」

神「あれ？　それ考えると、結局俺達……」

青年「恋愛面でも、正反対（？）な気が……」

全員「……」

作者「……こ、コマケぇこたぁいいんだよ！！！　そうですよね！！　旅人さん！！！！」

旅人「さぁな……そんな下らん事を、いちいち俺に聞くな」

作者「……しょぼーん（・―・）」

神「ま、まぁまぁ……そ、そんじゃぁ！！　次のお題に行ってみよう！！！」

――――今回明らかに成った“ある計画”について――――

作者「これについては……当事者である神様にでも、お聞きしましょう」

神「おう♪　まぁ、ハッキリ言うと……ネタバレが豊富すぎて、明かせないんだよなぁ」

全員「おいッ！！！！」

神「まぁ、なんだ？　これだけは言える。“グレイ・スティン”を転生させたのには、“ある理由”がある。そしてそれが、その計画には必要不可欠な重大な要素に繋がっている……ということだ」

青年「“グレイ”のみが対象、ってわけか？」

神「現段階では、彼のみだ……まぁ、彼がその計画に必要なファクターである。ということは、言っておこう」

旅人「一体何の為に、というのは伏せておかせてもらう……少し、秘密裏で行わなければならない事情だからな……」

青年「じゃぁ……ビビは“おまけ”で転生させたのか？」

神「“まぁ、そうなるな”」

作者「では、最後のお題に行きましょう」

――――“あの者”、“あの大将”について――――

旅人「いうなれば、俺達が属しているある組織の盟主の事だ」

青年「どうも、ラスボスだという声が有るみたいなんだけど……どうなの？　その点」

作者「まぁ、そう取っていただいても構いません……真実は違いますけどね」

神「まぁ、“女将”の事は言わなくても良いだろう。かなりのネタバレ要素含んでんだし」

作者「それもそうですね……」

旅人「（おい、ネタバレ的な発言を見逃しているぞ）」

青年「（これで、あの人の性別が“女性”であると言うことがばれちゃったね……まぁ、別に問題は無いと思うけどね）」

神「（あと、上の存在だからと言って、そいつが俺たちよりも“強いとは限らない”しな……クックックックッ……）」

作者「えぇ、まぁ……こんなもの、でしょうかね？」

神「そうじゃね？　まぁ、言うべき事は言ったしな」

旅人「む、終わったのか……ならば、飲み続けるとしようか」

神「だな～。おいスタッフ！！！　アルコール０，００１％ビール、もってこ～い！！！」

全員「何ソレ……？」

青年「まったく、また変なモノを……っていうか、それってノンアルコールと変わらない気がすｒ［ガバッ］うわッ！！？」

フェイト「……」

全員「？」

青年「ふぇ、フェイト？　どんしたんだい、いきなり後ろから抱きついて来て……」

フェイト「……フ～ワ～ル～、えへへへ♪」

全員「うお??」

青年「フェ、フェイト、さん……？」

旅人「……おい。フェイト・Ｔ・ハラオウンが飲んでいたこの炭酸飲料、なんだ？　“酒の匂い”がするが」

神「んあ？　あぁ、それ“コーラショック”じゃん。アルコール入りのコーラ」

旅人「ほう……そんなモノが有るのか」

青年「――――ま、まさか……フェイト、酔ってるの？」

フェイト「酔ってら～い！！！　フワル～、変なきょと、ひわないて～……えへへへ♪」

全員「酔ってるやんけ」

青年「だれだ！！！！　フェイトに酒入れた奴はッ！！！！！　おいスタッフ！！！　これは一体どういう」

フェイト「フ～ワ～ル～！！！　おこっちゃらめっ！！！　めっ！！！！」

［ポコンッ］

青年「いた……あ、ふぇ、フェイト、落ちついてくれ、な？」

フェイト「わらしはおちちゅいていましゅ～ッ！！！！」

神「……なぁ、お前か？　あの子に酒入れたの」

作者「えぇ、まぁ……ちょっとした、遊び心で、つい♪」

神「……グッジョブ（＾ω＾）」

作者「いえいえ……お酒の入った私のテンションは、どこまでもイっちゃいますよ～♪」

神「お前も酔ってるのかよ！！！？」

フェイト「フワル～♪　フワル～♪」

青年「ちょっと！！　ねぇフェイト！！！　お願いだから酔いからさめて！！！　っていうか、そこダメ！！！　そこはダメだってば～～～ッ！！！！」

レヴェッカ「あらあら、フェイトはんったら、大胆やねぇ」

シェレン「そんなにこの男の事が好きなんだ～、仲いいわねぇ」

スノウ＆アサ「ホントほんと～♪」

青年「あのさ！！！　見てないで助けるって事を君たちはしてくれないの！！！？　そうじゃないと……って、フェイト！！！　ズボンのチャックに手を掛けないでエェエェエェエェエェ～～～ッッ

！！！！！！」

神「……なぁ、そろそろ〆た方がよくね？　なんだか、フェイトさんの暴走が始まってるんだが……」

作者「そうですね……放送禁止的なことをしでかしそう……（；一＿一）」

神「だな……それでは！！！　次回もカミウラ！！　期待していてくれよ！！！」

作者「これからも、このカミウラでは、公開出来る限りの様々な情報を載せる予定なので、是非お楽しみにしていてください」

神様「それじゃぁ最後はみんな揃って～……」

全員「ばいば～い！！」

旅人「フン……また会おう」

青年「あのさ～～～ッ！！！！　助けてくれないの～～～ッッ！！！！？？」

フェイト「フワル～、しゅきしゅき～♪」

神「……フェイトって、酔うと甘え上戸になるのか？」

作者「さ、さぁ……？」

旅人「下らん……む、この笹かま、美味いな……」

～カミウラ　出張号～（後書き）

次回は、転生物語を更新予定です。お楽しみに

あと、これは最近の私の活動報告にも在る事なのですが……

“魔法少女まどか☆マギカ”のファンフィクションを書こうかなと、考えております。しかし、二つも連載を掛け持ちしているので（一つは絶賛放置中）、皆様の意見を聞かせてほしいのです

詳しくは、私の活動報告の方に書いてありますので、そちらの方をご覧ください

では、失礼します

＃６６　なのはＶＳリュマ。果てされぬ運命を（前書き）

どうも、リィーンです

久しぶりに原作のキャラを書いたのですが……完全に書き方を忘れていて焦りものでした（＊―＊；

あと、なぜか神様が関わらないとヤル気が起きてきません、不思議だ（やはり、あの神様がいなければ、ろくに文章が書けないようです、自分は……それ、一番ダメなのに……）

ちょっとしたリハビリがてらな感じになってしまいましたが、どうかご了承ください

あと、＃６４に挿絵を掲載しましたので、よければそちらをご覧になってから、こちらの話を読んで下さい

ムーギネーター様、なめ猫様、鳴神　ソラ様、アンディ様、緋水様、装甲轟鬼様、けびん様、金色の戦姫様。ご感想、ありがとうございます！！！

#６６　なのはＶＳリュマ。果てされぬ運命を

――――――そして、とある兄妹（しまい）の兄の部下（あね）である星は、主の命に従うべく、己の原典と向き合う……――――――

……時は、グレイ・スティンとビビ・スティンの二人が、五人の転生者の存在を認識する所まで、遡る……

時空管理局の本局、その渡り廊下の一つ……そこを、彼女は歩いていた

「……」

“リュマ・シュテル”……“高町なのは”という少女を基礎として、“闇の書”と呼ばれる“遺失物（ロストロギア）”の欠片から生み出されたマテリアルの一人であり……今は、グレイ・スティンの守護騎士の一人として、生を与えられた存在である

「（さて……高町なのはは、一体どこにいるのでしょうか……）」

今、彼女は自身の基となった存在、“高町なのは”を探していた。自身の主を、あのような目に合わせた張本人の一人、とも言える存在を……高町なのはが謎の存在によって撃墜させるという事態を阻止する為に、逆に彼女の主が撃墜される事になり、傷付いた。使

える身としては、恨みの対象である、少女を……

だが、彼女がその少女を探している理由は、そのことへの糾弾では無く、別の事だった

「（彼女の魔力を、この辺りに感じるのですが……あ、いましたね）」

そして、彼女はその少女を見付けた。廊下の隅に備え付けられている、休憩室のような場所で、椅子に座って俯いている彼女を

「見つけましたよ、高町なのは様」

「あ……リュマ、ちゃん」

声を掛けるリュマ。そしてそれを返すなのは……二人は、以前出会っているのだった。彼女達、グレイの守護騎士となったマテリアル達は、一度自身のオリジナルとも言える存在と出会っているのである。理由は、戸籍の登録やら、管理局に入る為の諸々の手続き、それ以来からの模擬戦などであるが……ちなみに、リュマは主と同じマテリアル以外の事は、どんな人間であろうと（例え、あの妹であろうとも）、フルネームで呼び、様を付けるようにしている

「あの……グレイさん、は」

「ご主人様なら、先ほど目を覚まされました。特に、何も問題は無い、との事です」

「そ、そう、ですか……よかった」

リュマと出会ったなのはは、まずグレイの事を聞いてきた。だが、リュマが聞いたその声には、どこか心配している事と同時に、恐怖

を感じているようにも、感じられた

「……あなたは、何をそんなに怯えているのですか？」

「え？　な、なに？」

「いえ……なんでもありません、気になさらないでください」

リュマは、自分の主の事が怖いのかと問おうとしたが、なんと返って来るかが目に見えて分っていたので、取り止める事にした

“彼女は、自分の元となった原本。故に、考えている事ぐらい、有る程度は把握出来る”。と……リュマは、そう考えたのである……返って来る返事は、〔怯えてなんかいない。主の事は、怖くは無い〕。そう、答える筈だから……

「（皮肉なものですね……まったく、恨めしく思います）」

「あの、リュマちゃんは、どうしてここに？」

色々と思考しているリュマに対し、なのはは一つ質問をしてきた。それは、リュマが高町なのはに会いに来た、理由に繋がっていた

「あぁ、そうですね……高町なのは様」

「は、はい！！」

低い声で、様付けされてしまったからか、変な声を出して、なのはは返事をした

「あなたに一つ、折り入ってお願いがあります」

「は、はい……？」

□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■

……そして、五人の転生者達の襲来から、暫くして……

場所は、次元航行飛空挺、“フッケバイン”。その船の中にある、ある一室

「――――――――ッ、うぅ……」

「あ……ご主人様ッ！！」

「ッ……ここ、は……俺の部屋、か……」

その一室に備え付けてあるベッドの上に、彼……いや、彼はいた

グレイ・スティン。あの神によって、この世界に転生され、今はこの世界で二度目の人生を歩む、兄妹の兄である……そんな彼は今、なぜか気を失っていて、そのベッドの上に寝かされていたのである。それが、今、気が付いたのである

「大丈夫ですか？　どこか、お身体の調子がすぐれない所がありましたら、なんなりと」

「……あぁ、問題は無い、“シアリーフ”」

そんな彼を、ずっと看病していたのは、リュマと同じく、“闇の書

”の欠片から生み出されたマテリアルで、彼(かのじょ)の守護騎士の一人、“シアリーフ・ヴァン・ダルクネメス”。基礎となったのは、その大本である“闇の書”の管制人格……現在は、“リインフォース”の名を持つ女性である。が、見た目はその大本とは異なり、緑色の瞳に、髪は輝くような金髪をロールにしている……本人曰く、個性を出した。とのこと……

「……ずっと、見ていたのか」

「はい……皆、心配致しましたわよ。いきなり本局の病室から、貴方が居なくなったと聞いて……」

「あぁ？　病室……？」

何の事だと思い、その事について思いだそうと、記憶の底から情報を引っ張りだす。まずは、覚えている所から、始めていく

「（確か……俺は、高町の撃墜を阻止してくれって、あの妹から頼まれて……そういや、それで俺は大怪我を負った……んじゃねぇよな）」

“高町なのは”の撃墜。それを阻止しようと、自身の身を投げ出し……彼(かのじょ)は、瀕死の重傷を負った。しかし、それは彼(かのじょ)の体内に宿っていた“無限再生プログラム”というシステムによって、重症の肉体が再生を果たし……事無きを得たのであった

その時、だったのかもしれない。自分の中で、もう自分が人間では無く、バケモノになっていると、ハッキリと認めていたのは……

……そして、そんな自分に嫌悪して、死にたいと願い始めたのは……

「（それで、病室に運ばれた。しかし、その後は……あれ

？）」

ふと、頭の中を探ろうとしたら……何かが、引っ掛かる感じがした

「（確か……病室で目覚めた後……俺は、どうしてたんだ？）」

「？　ご主人様？」

必死に頭の中から、情報をたぐりよせようとする。が、どこかで何かが引っ掛かり、それを思い出させるのを、拒み続けた。そんな様子に、おかしな所を感じたシアリーフは、主を見つめていた

「（あの時……そうだ。あの時、病室に誰もいなくなった後、あのクソ神が現れて、そして……タマモが、“謎のデバイスからの緊急救難信号をキャッチしたんだった”）」

そう……あの神を名乗る男が現れた直後、彼（かのじょ）の右腕に内蔵されているデバイス、“タマモノマエ”が、正体不明の救難信号を受け取った。そのあと、不審に思い、妹の奴を呼んで相談し……仕方無く、助けに行った、んだよな

「（そして、あの世界に行ったら、五人の転生者共が、“バカデカイ怪物に襲われていたんだった”）」

あの時の救難信号は、その五人の転生者達から発信されていたものであり、彼（かのじょ）とその妹である“ビビ・スティン”の二人が、彼らを救助。そして、その巨大な怪物と戦闘を開始した……

「（こっちに来て早々、あんな奴に追われてたから能力なんて使う暇が無い、とかほざいていたな、あの……“バカヤ”って言ってたか？　アイツ……まぁ、名前なんて、後で覚えればいいか……

……しかし……確か、俺はあの時に……）」

彼（かのじょ）は、その時の戦闘で、怪物の吐きだした槍状の何かによって、“心臓を刺された”のだった

「（あの時は、“無限再生プログラム”を停止させていたから、死に絶えそうになった……まぁ、それが本望。“だったんだがな”……）」

――――昔に交わした、ある約束――――

――――“生きる事から逃げないで”という、生存を願う誓いを……――――

その約束を思いだした彼（かのじょ）は、その場で死ぬ事を由とする選択肢を消して……生きる事を選んだ

「（だが、生きる為には、今までの俺じゃダメだったから……あぁ、そうだ。俺は、“起源”を受け入れたのか）」

グレイ・スティンの起源、“幻想”……彼（かのじょ）はその真実を受け入れ、しかし、それに？まれる事の無い……“鬼人の道”を歩むと、誓ったのであった

「（そして、“あの巨大なバケモノ”をぶっ殺したはいいが、結局力尽きて……倒れたのか）」

全員で立ち向かい……まぁ、連携なんて言えたモンじゃなかったが……それを倒したのは良いが、皆が力尽き、その場で倒れてしまい、あの世界で倒れたままだった……おそらく、そこへ俺達を探していたこいつ等が来て、こうして介抱してくれた。と言うことになる……――――

「（？）」

いや……“そう、だったのか”？　なんだか、その事に関して、どこか納得していない部分がある……まるで、“捏造”されたかのような……

「……気のせい、だよな」

「？　何が、気のせいなのですか？」

「いや、お前には関係ない」

自身を介抱してくれた者に対して、冷たい反応で返すグレイ。しかし、それが彼（かのじょ）だと言うことを知っているシアリーフは、その事になんの反感を覚える事無く、起き上がる彼（かのじょ）を支えた

「……そういや、他にも倒れている奴らがいたはずだが……そいつらは」

「あ、はい。あの“ド腐れ妹”ともども、別々のお部屋で寝かせております」

ちなみにだが、グレイの守護騎士は皆、ビビに対しては良い印象を持っておらず、皆が毛嫌い、遠ざかっており、“クェーサ・レイヴ

ィン・”と“ガーナ・エンホウイン”の二人は露骨に嫌っている

「あの妹には、“クェーサ”と“ヴィエーガ”が。男三人は、同じ部屋に寝かせており、“フリュイ”が監視を。それから、女二人も同様に、そちらには“ウィアク”が……“ディア”様と“シェアク”と“ガーナ”の三人は、ブリッジにて待機をさせております」

「そう、か……」

少しだけ気になっていただけだが、とにかく、全員回収はされていたようで、“ひと安心を”……

「（まて……何を安心している。別にアイツらがどうなろうと、俺の知った事ではないだろう）」

しかし、未だに少し気になる事があるので、自分の守護騎士に、再び質問を投げる

「そいつらの意識は」

「連絡が来ていないので、おそらくまだ……ん？」

「どうした？」

言葉の途中で声を途切らせるシアリーフ。どうやら、誰かからの念話を聞いているのだと、そうグレイは思うが……

「……分りましたわ。では、その事に関して、ご主人様にお伝えしておきますわ」

「誰だ」

「フリュイとウィアク、あとヴィエーガからです。全員の意識が回復したとの報告です。あと、あのド腐れ妹は、なぜか暴れ出したので、ベルトでしっかりと固定したそうです」

「あっそ」

グレイにとって、それはつくづくどうでもいい事である……だが、とりあえず状況説明をしなければならないと思い、ベッドから立ち上がる

「（はぁ、メンドーだ……）シアリーフ。そいつらを、応接室に集合させろ。妹の奴は、呼ばなくていい」

「かしこまりました」

「あと、今はどこに向かっている」

「管理局の本局でございます。現在、そちらの方に、“リュマ”がおりますので」

「そうか……なら、さっさと行って、妹の野郎とアイツらの身柄を管理局に預けさせねぇとな……ここで色々と騒がれるのは、面倒だし」

「同感です」

とりあえず、あの五人の転生者達から、聞かなければならん事が有るのは確かで……そして、おそらく色々と五月蠅く言うに違いない。それを黙らせるという名目上、集めさせる場所へと歩き出す

「（そう言えば）……おい。リュマはなんで本局に残っているんだ」

「え？　ご主人様からのご命令があるので、私は残る。と、言っておりましたが……お心当たりが無いのですか？」

「命令だと？」

命令をした覚えが無いグレイであったが……その記憶は、すぐに思いだせた

「あぁ、アレか……アイツ、律義にこなしているのか」

真面目だなと思いながら、しかし結局他人ごとのように感じながら、グレイは追加で備え付けておいたフッケバインの応接室へと向かった

□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■

……フッケバイン、空き部屋の一つ。今は、ビビ・スティンを寝かせている部屋である

「ッ……ア、アグっ……か、カはァッ……ッ……！！！」

が……その彼女本人は、かなり苦しんでいた

「ッ～～～！！！　アァァァァッ！！！！！　おいッ！！！　いい加減五月蠅いぞッ！！！　まったく、このクソッタレ妹が」

「……」

しかし、そんな様子を、“ただ暴れている”のだと見た“クェーサ・レイヴィン”、フェイト・T・ハラオウンのマテリアルであり、自称天才、周りからはアホの子と言われている彼女は、そのまま放置していた。しかし、あまりにもその暴れている度合いが大きかった

為、ベルトで固定したのである

「……」

そんな様子を、終始隣で見ていたはずの一人、シグナムのマテリアル、“ヴィエーガ・ブレイドヒェン”は、彼女が苦しんでいる事には気付いていた。が、言う気はさらさらなく、ただ無言に、椅子に座って……

「……Ｚｚｚ」

寝ていた

「ッ……が、カハッ……ハァ、ハァ……な、のは、ちゃん……」

だから、彼女が口にした有る人物の名前を、この二人は聞いてはいなかった

□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■

そして一方……場所は戻り、本局……そこにある、空戦用トレ

ーニングルーム

「やあァァァァァァァァッ！！！」

『“ディバイン・バスター”』

「ハアァァァァァァァァッ！！！」

『“ブラスト・ファイアー”』

［［ゴオォォォォォォォォォォォォォッ！！！！］］

……先ほど、本局の渡り廊下で出会った二人、リュマ・シュテルと高町なのはは、この場で“模擬戦”を行っていた

「っ、まだ……まだッ！！！」

「ぐぅッ……！！？」

事のきっかけは、リュマからの誘いであった。〔「私と、模擬戦をして下さい」〕という、なんとも場違いな申し出をしたのである

「（さすがは、私の基礎（オリジナル）ですね……隙が全く見えてこない）」

しかしなぜ、リュマはそのような申し出をしたのか……それは、彼女の主である“グレイ”の命令である

「（高町なのはを、完膚なきまでに叩きのめし、己の実態を知らしめさせろ）」

その命令を、彼女は実行していたのである

“高町なのは、撃墜事件”。それは、原作で起こった一つの事件であり、第三期目に当たる、“魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ”での、“高町なのは”を形作る要因の一つである事件……

高町なのはが、ある世界の調査をして、その帰還中にアンノウンの襲撃に遭い、瀕死の重傷を負う事件。それを、転生者兄妹の妹にして、なのは達を愛しているビビは、グレイにその重症を負う事の阻止を頼んだのだ。それによって、高町なのはは撃墜を免れたのである

しかし……この事件は、高町なのはの成長……己の実態を知らしめさせる絶好の機会でもあるのだった。原作における一期、そして二期と、彼女がその身に負ってきた負担は、この時点でピークを迎えていたのである。まともな訓練をせず、ただ才能と素質頼みの、無理と無茶を通して魔法を使い戦ってきた。それも年端もいかない、小学生の少女がである。その負担は、容易く想像できる。そんな時に、撃墜された事によって、彼女は自分の行いを反省し、それが後のＳｔｒｉｋｅｒＳのある場面に繋がるのである……

だが、この世界の高町なのはは、その実態を知らずにいる。それは、もしかしたら不味い事なのではないのだろうか？　そう思い立ったグレイは、自身の守護騎士であり、なのはの事を最も理解しているであろう者、リュマに、その事件の代わりに、己の身の負担を知らしめさせろ。という命令を与えたのである。故に、彼女はこうして模擬戦を通して、知らしめさせようとしているのである

「（さて……そろそろ限界の筈です）」

そして、その限界が、訪れた

「ハァ、ハァ、ハァ、ハァ、ハァ……」

すでに疲労しきった表情で、肩で荒い呼吸をし始めたなのはを見て、そろそろ詰める時と判断するリュマ。これで、ご主人様のご命令にを完遂する事に、ちょっとした嬉しさを感じつつも、未だに終わっ

ていない故、気を再び引き締め……止めを刺す

「（では……参ります）」

そして、自身の手に持つ魔導の杖……ルシフェリオンの先を相手へと向け、その引き金を抜

――――ダレダ――――

「ッ！！！？」

だが、その場に響いた謎の声に、おもわずその身を止めてしまった

――――ダレダ……ワタシノなのはちゃんヲキズツケタノハ、クルシマセテイルノハ、ダレダ……――――

「（この、声は……）」

自身の耳元で呟かれているような感覚。それに嫌悪感を感じつつも……その声の主を、リュマは知っていた……

「（“ビビ・スティン”？）」

自分のご主人であるグレイ・スティンの妹……自分達が嫌い、最も毛嫌いしている存在……そして、今自分と相対している高町なのはを、狂わせた元凶

「（なぜ、アイツが……確か、今はフッケバインにいるはず！！）」

この場にいる筈の無い存在の声、それが脳内に響き渡るという謎の状態と、その声は、自分達が嫌う存在の声だという不快感……それらが、脳内でせめぎ合う中……

［ヴンッ……］

「！？」

突如、高町なのはの足元に、“純白に輝く、見た事も無い魔法陣”が展開され、その魔法陣から、白い魔力の帯が伸び始め……それが、高町なのはの身体を覆い尽くしていく

「（なんだ？　あれは……）」

どこか繊細さを持っているようで、しかし、その内部には溢れんばかりの念が込められ……狂気と歪みを感じる何か……それが、高町なのはの身体から、流れはじめた

――――――だいじょうぶだよ――――――

「！！！？」

またも、ビビの声が頭に響く……しかし、それはおそらく相手に向けたモノではなく、向こう……高町なのはに向けた声だろう。先ほど聞いた声とは違い、怒りや憎しみに満ちた声では無く、その正反対。優しさと慈しみ、慈愛に満ちた聖女の声と間違えてしまいそうな安らかな声色が、木霊する

――――――ハァ、ハァ、ハァ……ビビ、ちゃん？――――――

――――――だいじょうぶだよ、なのはちゃん。あなたのくるしみ、いたみ、それはぜんぶ、わたしがいやすから。だきしめるから……だから、くるしまないで――――――

――――――……う、うん――――――

それと同じように、なのはの声も、ビビの姿無き声と同じように、その空間に響くような声で聞こえてきた……まるで、“ビビとなのはが、同一人物であるかのような感覚”になるような

「ッ……（なんて、なんて気味が悪い……そこまでして、その

存在が欲しいのか……ッ！！）あの、ド腐れ妹が……ッ！！！」

いつもは、冷静で無感情な表情をしているリュマは、さすがにその事態には、怒りをあらわにした

そして、なのはを覆っていた真白の帯が消えて、足元の魔法陣が消えた……そこにいるのは、戦う前の状態に戻った高町なのはの姿があった

「（い、今のは……ッ！！！？）」

なんだったのか？　という感情では無い……何が起きたのかは、理解できていた……彼女が驚いたのは、その行為の真意である

それは、“毒（マジュツ）”……ビビ・スティンが、高町なのはに掛けた……いや、他の者達……八神はやてや月村すずか、他六人にも掛けた、呪（どく）いであった。愛しい人を傷付かせない。そして、愛しい人を永遠に抱きしめていたい。一緒にいたい、離れたくない。自分以外には、触れさせない……その気持ちが、禁忌という因子を孕み歪んで、変容した事によって来る感情であった

「（つまり、“自分に依存させる”ということ）」

そうすれば、離れない。ずっと、自分に寄り添ってくれる……魔女の考えるような、下劣な事だと、リュマは感じていた

「……っと。よぉーっし！！　行くよ！！　リュマちゃんッ！！！」

［ヴンッ！！］

「！！？」

さきほどの影響で、消耗された体力も疲労も回復され、完全に戦闘前の状態へと戻った高町。しかし、実際はまんま同じに戻った訳ではない

「（アレ、は……）」

彼女の足元に展開された、ミッド式の魔法陣。普段なら、それは桜色の魔力光である筈のそれが……

「白、い……」

“真白”。八神はやてのそれ以上に白く、混じりけの無い、白百合の色……彼女が展開した魔法陣が、白い魔力光で輝いているのだ

これが、ビビの毒の力（マジュツ）……“自分の魔力を与えた存在に対し、自分の魔力を運用させる事”……それだけを聞けば、なんの害も無いように思えるが、これが“ビビの魔力”である場合、別の意味合いがある

ビビの魔力は、今や彼女の起源である禁忌によって、その質を変容させており、本来ならビビ以外の者がその魔力の影響を受けると、気が狂ってしまい、最悪、魔力の源である“リンカーコア”が壊れかねない程、歪んだ魔力と成っている……つまり、ビビが他人に魔力を与えると、その与えられた側は魔導師としての資質を失い、人格崩壊を引き起こしてしまう。ようは、“猛毒”なのである

「“ディバイィーン……バスタァァァー”ッ！！！！」

［ゴオォォォォォォォォォォォォォッッッ！！！！！！！！！

！！」

しかし、そんな猛毒を受けていながらも、なのはは苦しむそぶりは見せなかった。逆に、その魔力を何の苦も無く扱っている

「ッ！！！　ルシフェリオンッ！！！」

『“ロートリシュト”』

［ヴンッ！！！］［ズガガガガガガガガガガァァァァァッッ！！！！！！］

「ッ！！！　グウゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥっ！！！！！」

これは、彼女の中に入れられたビビの毒（マジュツ）の影響である……ビビの毒（マジュツ）は、いうなればビビの分身、彼女そのものである。それが、猛毒を良薬へと還元しているのである……良薬と言う名の、麻薬だが……それによって、高町なのははその猛毒の魔力を如何なく使えるのである

「（だが、それは……言い換えてみれば、“ビビ・スティンになる”と言う事と同じ）」

今現在、高町なのははビビ・スティンの魔力を使っている。言いかえれば、なのははビビと“一体化”しているという状態。ならば今、彼女本来の魔力はどこにあるのか？……なのはがビビから彼女の魔力をそのまま供給され、使用している。であれば、彼女本来の魔力は、消失してしまったのか？……

答えは、否。現在、高町なのはの本来の魔力は、“ビビ・スティン”の所へと向かっている。そこでビビは、なのはの魔力と共に、彼女の“身体に掛かる負担”と“負傷による痛み”の諸々を、ビビが受けとめていた。そして、受け取った魔力は己の魔力に変換させ、

それをなのはに送っているのである

リュマは、高町なのはとビビ・スティンを繋ぐ何かを感じていた。
故に、それを理解出来た……理解して、更に吐き気を覚えた

「（そこまでして、高町なのはとの……いや、彼女達との繋がりが欲しいのか……あの妹は……）」

もはや、嫌悪から怒りを通り越し、憤怒すらも突き抜けて……もはや、呆れしか湧かなくなってきたのである

「“ディバイィーン……バスタァァァー”ッ！！！！」
［ゴオォォォォォォォォォォォォッッッ！！！！！！！！！！！！！！］

そうして思考を続けるリュマに対し、なのはの攻撃は続いており、先ほどから３０発以上の砲撃魔法を放っていた。しかし、それでも彼女は疲労の色を見せず、平然としているのである

「（ですが……これは主のご命令。あの人の命令ならば、それを叶えるのが）」

守護騎士の、務め……例え、過去は闇の欠片であっても、今のその気持ちだけは、守護騎士としての、主への忠義を全うしているのである

「（だが……このままでは……）」

無理だ。その主の命令を、遂行できない

「“アクセル・シューター”ッ！！！！　シュートッ！！！！」
［バババババババババババッ！！！！！］

そして、牽制の為の追尾式射撃魔法が、数十発、それがリュマに向かって放たれる

「ッ！！！」
［ダシュンッ！！！！］［ジッ！！！］
「グッ！！？」

なんとか回避しようと身体を動かしたが、結局全てを回避する事は出来ず、一発だけかすってしまい、少し体勢を崩してしまった

［チャキッ］
「“ディバイィーン……」
「ッ！！！？」

しかし、戦闘において多少の隙は、命取りに繋がる……

「バスタァァァー”ッ！！！！」
［ゴオォォォォォォォォォォォォォォォォォッッッ！！！！！

！！」

避けられる事も出来ず、防御も間に合わず……真白の砲撃が、リュマに直撃した

「ッッ……（ダメ、ですね……どうやら、身体が動かなくなってしまいましたようです）」

そのダメージは、“非殺傷設定”にはなっているモノの、痛いモノは痛い。それも、ビビの魔力で放たれたモノなので、その威力は、本来のなのはの“ディバイン・バスター”よりも強力無比。威力がけた違いに跳ね上がっているのである

……もはや動かなくなってしまった身体は、トレーニングルームの床へと、叩きつけられるのだと感じ……自分は、敗北するのだと感じた

「……ッ！！！（このままでは、私は命令を全うできない！！！）」

それは……それだけは、絶対に認められない。否、認めたくなかった

「（主の……あの方の命令だけは、なんとしてでも、果たしたいッ！！！）」

自分達を……己が最も嫌がる、幻想（ファンタジー）な存在である自分達を、外見や、本音でも嫌そうにしていながらも……世話をしてくれて、生きる事を与えてくれた人

確かに、変な力によって、あの人に魅了させられているのは聞いている。だがそれでも、“闇の書”の復活しか頭に無かった自分達が、今こうして、全く違った目的で生きている。その事に、リュマはある種の喜びを感じており、他の皆も、まんざらではないと行った風に言っていた

「（だから、私はあの方の為に……ご主人様のご命令を、何でも聞くと誓った！！！）」

だが今、それが叶わぬ事が起きた……それも、自身の仕える主の妹で、自分達が最も嫌う存在によって、自身が歩まんとする道が、崩れ去ろうとしていた

「（嫌だ……そのようなことは、絶対に嫌だ！！！）」

初めて湧きあがる感情。認めたくない事実への、嫌悪……

それが、リュマの頭の中を駆け巡り、咆哮へと変わる

「ッ！！！……ウアアアアアアアアアアアアアアアッッッ！！！！！！！！！！！」

――――もう、天使でも悪魔でも構いません……なんでも、誰でもいいです――――

「（“力”が……“力”が欲しいッ！！！！）」

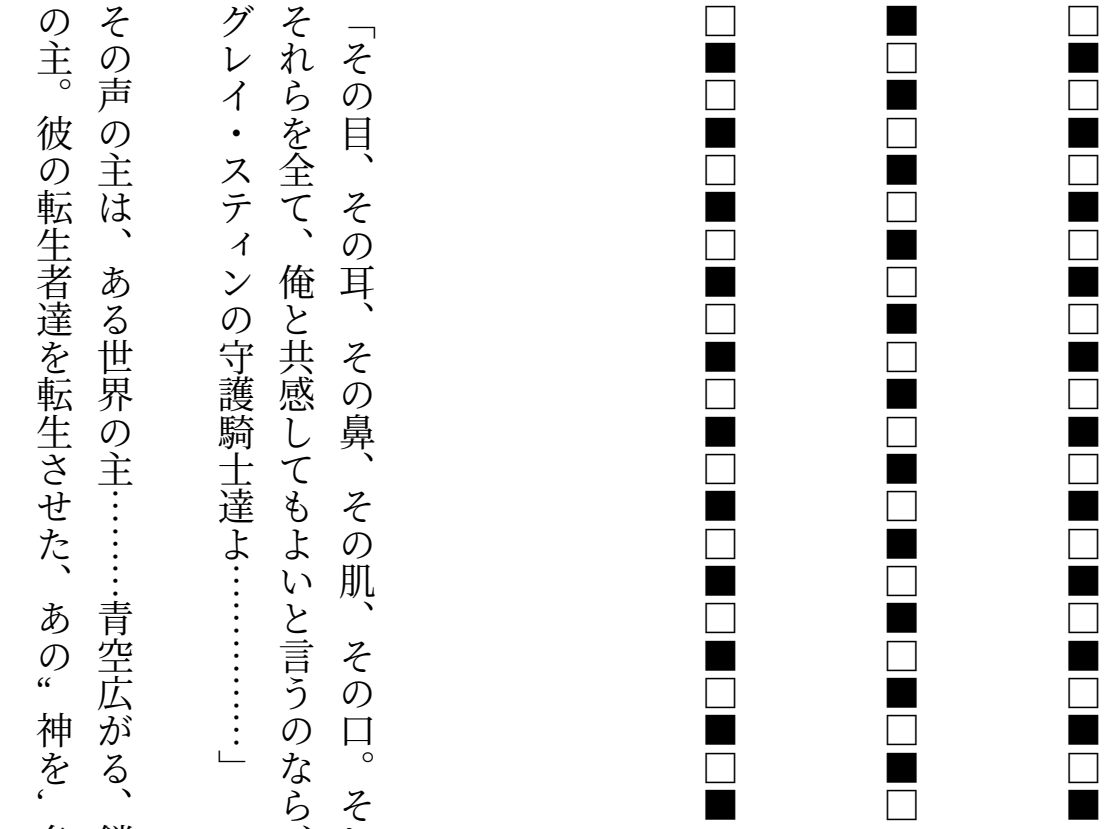
――――どうか、力を……私に、ご主人様への忠義を果たす為の、力をッ！！！！――――――

「ッッッ……！！！！！！！！！！！！！」

――――私に、力をッッ！！！！！！！！！――――――

――――――――――ならば……――――――――――――――

それに答えたのは、天使でも悪魔でも、“神”でもない……それらとは、全く次元の異なる存在が、彼女の願いを聞いたのだった



「その目、その耳、その鼻、その肌、その口。そして、その意思。それらを全て、俺と共感してもよいと言うのなら、与えてやろう。グレイ・スティンの守護騎士達よ……」

その声の主は、ある世界の主……青空広がる、鎖に蝕まれた荒野の主。彼の転生者達を転生させた、あの“神を‘名乗る’男”だった

「“リュマ・シュテル”、またの名を“星光の殲滅者”……起源は“憂鬱”、宿星は“太白明星”。なるほど、普段の塞ぎ切った感情の中では、主への忠義心に満ちており、今その感情が弾け飛んだと……」

目を細め、口許を釣り上がらせる。彼は、甘く、穏やかに、柔らかな物腰で、そのように、彼女に言った

「では……お前に与えるのは、コレでよかろう」

彼の目の前に浮かびあがる、“九つの鎖の欠片”。その内の一つを指差し、それをその指で軽くはじいた

「その魂、“神格級”に引き上げ、我が意に連なる“神”の資格を与えよう、“明星の爆撃神（ルシフェリオン）”……」

まるで指揮棒（タクト）を振るかのごとく、未だにこの物語の裏方は自分であるというのを示すように……男は、彼女に“荒ぶる神々”の力を与える

――――Ｖｏｌｏｎｔ？ｄ'ａｐｐｒｅｎｄｒｅ《喜んで学べ》――――

それは、ある奇跡を、生み出した……

＃６６　なのはＶＳリュマ。果てされぬ運命を（後書き）

次回も、転生物語を掲載予定です。お楽しみに

#67　不屈の星、堕ちる（前書き）

どうも、ご無沙汰しております。パソコンの死亡と復活で、しばらく鬱モードになっていた、リィーンです

なんとかモチベーションを高めようと、暫くの間ニコ動ばかり眺めてました

そんなこんなで、コツコツと作ってきた今話、どうぞごゆっくりご観覧していってください

ムーギネーター様、緋水様、なめ猫様、鳴神　ソラ様、真王様、斬空様、けびん様、装甲轟鬼様。ご感想、ありがとうございます！！！

#67　不屈の星、堕ちる

――――――そして、とある兄妹（しまい）の兄（あね）の部下達は、主の為に、新たな力を受け入れる……――――――

本局、空戦用トレーニングルーム。今現在、リュマ・シュテルと、高町なのはが戦っている場所である

「――――――ッ……！！？」

ビビ・スティンの持つ魔力を供給されているなのはの全力の“ディバイン・バスター”の直撃を喰らい、意識を持って行かれ……リュマは、敗北した

はず、だった……

「グウウウゥゥゥゥゥッ……」

「な……」

しかし、彼女はすぐに目を覚まし、その目の前の光景を見た

「え？　な、何あれ？」

その遥か上には、高町なのはがいた……おそらく、自分と同じで、訳が分からないといった表情をしているだろうと、そう思えた、

だが、自分は理解出来た……この目の前の光景が、何を意味しているのかを

「……“クアドリガ”」

「グオオォォォ

「（もしや……あの声は、幻聴ではない？）」

自分が落ちる前に、聞こえた声……おそらく、その主から送られたプレゼントなのだろうと、瞬時に理解できた

「りゅ、リュマちゃん。それ……なに？」

「……」

その怪物……“クアドリガ”というその怪物の下から出てきて、立ち上がったリュマに、なのはが質問をしてきた。無論、そんな質問には答えてやる訳もなく、リュマは地面を蹴り上げ跳躍し、クアドリガの頭部にある円盤の上に立って……

「切り札です」

［チャキッ］

そうとだけ言って、自分のデバイスの“ルシフェリオン”の先端をなのはに向けた

「では、続けましょうか……これでようやく、対等となったのですから」

「ッ！！！」

リュマの言葉の冷たさ……それはなのはの心を一気に鋭利な刃のようにさせ、本気にさせた

「さぁ、参りましょう。クアドリガ」

「グオオォォォ

騎乗者（リュマ）の言葉を聞いて、鋼鉄（クアドリガ）の馬車は雄叫びでそれに応えた

□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■

そして、場所は変わり……次元航行飛空挺、“フッケバイン”。その船の中に設けられた応接室

そこでは、集められた転生者達……“上谷仁哉”、“竜ヶ崎虎太郎”、“ハジメ・クレバヤシ”、“出雲天音”、そして“寿夢乃”……その五人と、このフッケバインの主にして、彼らよりも先にこの“魔法少女リリカルなのは”のような世界に転生した兄妹の兄（あね）、“グレイ・スティン”が、己の身の上を話し合っていた

初めに、グレイが自分と自分の妹のことを話し、その後に新たに来た五人が、自分たちの事を話し始めた

「……で、つまりお前達も、あのクソ神によって転生されたと」

「えぇ、そうです」

「そうッスよ、先輩」

グレイの問いに答えたのは、彼らの中でも比較的話が通じる者であ

る、虎太郎であり、次に続いたのは、仁哉という、見た目からして不真面目で、馬鹿が無理してヤンキーをしているような恰好な男だ

「なんか、すっごく馬鹿にされた気がするんだが……」
「いつものことじゃん、バカヤ」
「バカヤって言うな！！！」
「……はぁ」

なにやら、変な喧嘩が始まったようで、その様子に、深い溜息を付くグレイだった

「……あの、一ついいですか？」
「何よ？」

今まで黙っていた男……五人の中で、唯一見た目が袴姿という場違いな恰好の男であるハジメが、グレイに問いかけ、彼は“女声”でそれを返した。因みに、彼は見た目は女性だが、転生をする前は“男”であり、今だに精神は男のままなのである。ゆえに、男声もだせるのだが……ある能力のせいで、それを結果的に封じられているのである。あと、彼らには自分が転生前男であることは伏せてある

「ここ、船の中、なんですよね……空を飛んでいる……」
「あぁ、そうだ」
「……落ちないのですか？」
「……」

その一言を聞いた直後、グレイはもう知らんといった顔で、座っていた応接用の椅子に深くもたれ掛った

「あ、あの～」
「はぁ、今度は何？」

キッと、自分に語りかけてきた少女……夢乃を、鬱陶しそな声と共に睨み付け、黙らせようとした。が、それに彼女は動じることなく、ある方向を向いてきた

「天音ちゃんを、そろそろ解放してもいいんじゃないでしょうか……」
「……」
「……断る」

そういう夢乃の視線の先には……死体袋のようなものが、芋虫のごとく動いていた……因みに、この中にいるのは、もう一人の女性の転生者である天音である。さらに、この死体袋の中で天音は、ガムテープで口を防がれ、手足は鎖や縄で縛りあげられ、もう身動きが出来ない状態なのである

「とにかく、そいつはお前らと一緒に本局に放り出すまでは、そのまま放置だ……また襲われる訳にはいかんし、だからと言って殺すわけにもいかん……」
「ッ……」

なぜ、天音がそういう状況になったことには……彼らがこの部屋に集結した瞬間だった。そのとき、彼女はいきなりグレイに抱き着こうとしたのだ。だがその瞬間に、彼らの守護騎士達によって取り押さえられ、とにかくバインドや鎖で拘束をした。その次に言ったのは……

――――――「あの！！　あなたが好きです！！！　大好きになりま

した！！！　お名前を教えてください！！！　そしてお姉さまと呼ばせて愛してくださいッ！！！！！」――――――

……なぜか、いきなり告白されたのである。なんで惚れたのか、そこにいる仁哉が聞いたところによると……

――――「あなたの、あいつを殺した時のあの時の表情！！　あの身が震えるような双眸！！！　そこになぜか惹かれて、惚れてしまいました！！！　だから、付き合ってくださいッ！！！！！」――――

などと、言ったのである……それから、グレイは怖気を覚え、このような葉巻にするといった処置を施したのである

「（あぁん……ほ、放置プレイですか？　グレイお姉さまぁ？）」

「――――――」

なにやら、ガムテープで塞いであるはずの口が開き、そのような声が聞こえた気がしてしまい……グレイは、怖気のほかに寒気、そして自身が初めて感じる恐怖に見舞われた

「……おい、ウィアク。ディアに連絡しろ、早く本局に向かえと」

「了解です、ご主人様」

「はぁ……まぁとにかく……お前たちを時空管理局の本局に連れて行く。それでいいんだな」

「おう！！（早く原作キャラたちに会いたいしな♪　な、竜虎）」

「はい、それでお願いします（あぁ。それに、色々と良くしてくれそうだし、なんとかなりそうだな）」

「（だなw）」

「じゃぁ、そういうことで《おい主！！！》……どうした、フリュイ」

話を終え、自室に戻ろうと解散しようとした時に、彼の守護騎士（かのじょ）の一人、シャマルのマテリアル、“烈風の魔騎”である“フリュイ・ゼフィラース”から通信が入った。その声からして、どこか焦っているような感じがある……

「どうした」

《クソ妹の野郎が変なことになってんだッ！！！　ったく、こんなんになってんなら、早く連絡しやがれ！！！　このバカとボケがッ！！！》

《僕はバカじゃない！！！　暴れているだけだと思ったんだ！！！　悪いか！！！》

《悪いわ！！！　ったく、おいヴィエーガ！！！　テメェ分かってたんなら、連絡ぐらいしやがれッ！！！》

《……面倒だった》

通信の先で、“クェーサ”……“フェイト・テスタロッサ”のマテリアルが何やら言っているようで、もう一人の“シグナム”のマテリアルの“ヴィエーガ”は、やる気のなさそうな声でフリュイの暴言を聞いていた。だが、グレイはそんなことは気にせず、このフッケバインの医師であるフリュイに声をかける

「フリュイ、どうせ本局まで連れて行くんだ。そいつの事はあっちの連中に任せて、今は鎮静剤などを打っておとなしくさせろ」

《それでいいのか？》

「あぁ、かまわん……それでおとなしく出来なかったら、手段を問わん。とにかく、おとなしくさせろ」
《リョーカイ、好きな方法で良いんだな》（ニヤリ）
音声越しからでもわかるような、嬉々とした表情で、フリュイは主の言葉を欲した……なんでもしてもいいという、許可を
「あぁ。ただし、船が落ちるようなことはするな。加減はしっかり考えろ」
《あいよー。おいバカとボケッ！！！　お前らも手伝えッ！！！！》
《おうッ！！！》
《……嫌だ》
そういって、あちらとの通信は切れた。そして一つ、グレイは大きな溜息を出して、その場にいる五人のほうへ向きなおった
「あれ……フリュイさんって、確かシャマルさんモドキ、いやマテリアルか……そうだったよな、仁哉」
「あ、あぁ。そうだよな、虎太郎……性格、モロ正反対じゃねぇかよ……」
あんなヤンキーなシャマルのマテリアルを見て、呆然としている二人を余所に、グレイはその五人に告げた
「とにかく、本局まで行く間、お前たちはここでおとなしくしてもらう……何か用があるなら、コイツに言いなさい……それじゃ頼むぞ、シェアク」
「は、はひ！！！　ま、任せてください！！！」
グレイの後ろで、ビクビクと怯えながら待機していたシェアク……

…“アリサ・バニングス”のマテリアルである“シェアク・フランベィ”にあとを任せ、グレイは、その部屋から退出していく

「あぁそれと、そいつは絶対にそこから出すな。出した奴は船から締め出すからな、そいつ諸共」

「「「「……は、はい」」」」

と、ウネウネ動く死体袋を指さしながら……

□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■

フッケバイン、廊下

「……はぁ、ったく、女声は疲れる」

「クスクス。ですが、しゃべり方は男のままでしたよ、ご主人様」

彼と共に、その鉄などの金属で出来た道を歩いているのは、“ウィアク・プラーネルト”、“月村すずか”のマテリアルである

「どうでもいいだろ、気にするな」

「はい、気にしません、ご主人様」

「……」

そう言いながら、彼達（かのじょ）は廊下を歩いてゆく

「……しかし、あのド腐れ妹は、なぜいきなり暴れだしたのでしょうか……？」

「さぁな……だが、どうでもいいだろう」

「クスクス……そういった、家族であるはずの妹に対するその無関心な態度……惚れ惚れします。さすが、闇のかけらから生まれた我々のご主人様です」

「……家族、か……」

グレイはそうぽつりと、その言葉を口にして……

「（“そんなもん、どうでもいいし”……親なんて、どっちもただ綺麗事を言ってるだけの無能で……あいつは……）はぁ」

そう思いつつ、何度目かの溜息を吐きながら、廊下を歩いて行った……

《主よ、もうまもなく本局に到着する》

「分かった。シェアクとガーナに伝えろ。あいつらを、本局に連れて置いていけとな。あと、フリュイとクェーサ、ヴィエーガの三人にも、妹を本局に放り出す準備をしておけと」

《心得たぞ……ようやくあの塵芥共とゲス妹が、我の船から居なくなるのか……清々するぞ》

「シアリーフ。船とあいつらの受け入れの手続きは済んだのか」

《はい。その点は抜かりありませんわ、ご主人様》

「そうか……ならば、本局にいるリュマを回収後、本局から直ぐに離れ、“ミッドチルダ”に移動する。いいな」

《《御意》》

この船の操舵手……“八神はやて”のマテリアルであり、マテリアル達の王、“闇総べる王”、“ディア・G（ガイウス）・R（ライゼン）・ロードアウス”からの通信を受け、その補佐をしているシアリーフ……“リインフォース”のマテリアルに、応接室にいるシェアクと、別室で待機させていた“ヴィータ”のマテリアル……“ガーナ・エンホウイン”の二人に、五人の事を任せ……妹のビビの事は、その近くにいる三人に任せた

「……やっと、あの連中が居なくなるのか」

これで何もかもが、一段落するといった気持ちを抱き、彼（かのじょ）はその道を歩んでいった

その先にあるのは、陰だった……

□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■

本局、空戦用トレーニングルーム

そこは、先ほどとは全く異なる激しさで、埋め尽くされていた

「行け！！　クアドリガッ！！！」
「グオオオォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォッ！！！！！」
［［バババババババババババババッ！！！！！］］

リュマの使い魔（？）、異形の生命戦車の“クアドリガ”の背中にあるミサイルポッドが開き、そこに詰め込まれているようにある肉塊から、幾発の“ミサイル”が放たれる。それらは全て、なのはへと向かっていく……所謂、ホーミングミサイルだ

「にゃぁぁぁぁぁぁぁッ！！！？　ちょ、ちょっとリュマちゃん！！！　それ、“質量兵器”だよ！！！！？」

その弾雨の中を只管によけ続けるなのは……確かに、彼女の言うとおり、これはどこからどう見ても、“質量兵器”、管理局が禁止している兵器なのである。その問いに対して、リュマは

「これは魔力で作ったミサイル。見た目が質量兵器なのは、仕様です」
「なんだかすっごい屁理屈に聞こえるのぉ～ッ！！！！」
「いえ、れっきとした理屈です」

などとぶーたれた事を言うなのはに対し、リュマとクアドリガは、ミサイルや砲撃・射撃魔法を放ちながら答え、なのははなのはで、その攻撃を全てよけ続けていた……完全に、数分前とは立場が逆転し、リュマが優勢となっていた

確かに、このクアドリガが放つミサイルは、無限のように放たれていた。その小さな……少し大きめの旅行バッグ並みのサイズであるミサイルポッドからは、考えられない弾数のミサイルが放たれている。そんなことを、理屈などで証明しようというのなら、それは

魔法だからとしか説明が出来ないのだ

「（それにしても、この力は凄い。負ける気が全くしなくなるほどに、強大な何かを感じる。勝てることしか、思いつかない。いったい誰が与えたものなのでしょうか……いえ、今はそんな事はどうでもいい。今は、この力を使い、彼女に勝利し……いえ、彼女に己の身を知らしめさせねばなりません）」

高町なのはの体は、本来ならばボロボロで、もう魔法すら碌に使えないほど負担がのしかかっており、その負担の全ては、今はあのビビ・スティンにフィードバックされて、彼女がその苦しみを背負っているのだと……

「クアドリガッ！！！」

「グオオォォォ

「ッ！！！（あのミサイル、速度が遅い！！）」

なのはも思った通り、そのトマホークは遅かった。いくらホーミング機能がついていたとしても、急な動きにはついていけない筈。そう考え、少しひきつけてからの回避を試みる

「“パイロ・シューター”ッ！！！」
［ババババババババシュッ！！！！］
「ッ！！！」

しかし、それはクアドリガとタイマンをしているときのみ。その攻撃を当てるために、リュマが援護射撃として、誘導型の射撃魔法を複数放ち、それを操作しつつ、なのはの動きを完全に封じようとした

「ッ！！！　“アクセル・シューター”ッ！　シュートッ！！！」
［ババババババババシュッ！！！！］

しかし、そうは問屋が卸さず……なのはも、同じ射撃魔法で応戦し、それを素早く相殺しようとし、逃げ場を作っていく

「甘いです！！　クアドリガ！！！」
「グオオォォォォォォォォォォォォォォォォォォッ！！！！」
［［ババババババババババババッ！！！！］］

しかし、そこへ再び……前面装甲を閉ざし、ミサイルポッドからの射撃を再開したクアドリガの弾幕によって、なのはが放ったシューターを次々と落としていく

「ッ！！！」

［ダシュンッ！！！］

もはやシューターでは捌ききれないと判断し、今だにトマホークを引き付けられていないにも拘らず、空中でステップしてからその場を離れた。だが

「無駄です。あのミサイルのホーミング率は、相当なものですから」

リュマの言葉通り、なのはを追うトマホークミサイルは、執拗になのはを追っていた

「くッ！！！　シュートッ！！！」

［ババババババババシュッ！！！！］

空中を飛行中に、シューターを何発か放ち、トマホークミサイル事態を無効にしようと考え、実行する

「させませんよ！！」

［ババババババババシュッ！！！！］

「グオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオッ！！！！」

［［ババババババババババッ！！！！］］

そこへ、リュマといクアドリガが妨害を仕掛け、なのはが放ったシューターを打ち落とし

「ッ！！？」

シューターの誘導によって、なのはの進退を防いだ

［ゴオオォォォォォォォォォォォォォォォォォォッ！！！！！！］

「！！！？」『“プロテクション・パワード”』
［キィィィンッ！！！！］［ズドオオオォォォ

ガガッ！！！」
「ッ！！　クアドリガッ！！！？」

その砲撃に対して、クアドリガは己の頭部の円盤を盾にし、背中に乗せているリュマを守った

「ッ……なるほど、それは盾にもなる。というわけですね……ありがとうございます、クアドリガ」
「グウゥゥゥゥッ……」

自分を守ってくれた使い魔（クアドリガ）に対し、礼を言うリュマ。そして、向ける視線の先を、先ほど砲撃が放たれた爆煙……今はもう晴れかけているそれの方へとやる

「ッ……今の、絶対当たるって思ったんだけどなぁ……」

その晴れた煙の中から現れたのは、まったくの無傷なままの、戦いになる直前の高町なのはだった。その体には、爆発の衝撃の痕すらなく、煤すらついていなかった

「……やはり、と言いますか。まぁわかりきってはいましたが……」

今、高町なのはは、ビビ・スティンによって守られている。ならば、今の彼女には、いかなる攻撃も通用せず、無意味となる……ならば、その無敵ともいえる状態を崩すには、どうするべきか……

「（やはりこれは、直接彼女に言い付けるべきですね……ですが）」

たとえ、今リュマが何を言おうとも、彼女は聞きもしないだろう。
なぜなら、彼女はそれに気づいていないからだ。先ほどから撃っている砲撃や射撃の色が、障壁を張る際の魔力光の色が……今、己のリンカーコアに溜まっている魔力が……それが、どんなものなのかを、彼女は分かっていない。もし、気づいているのならば、なんらかのアクションは起こす。だが、それに気付いている様子はなく、ただ自分の魔力だと勘違いをしている。おそらく、それもあのゲス妹（ビビ）の所業なのだろう

そんな中で、たとえ真相を言ったとして、信じて貰えるのだろうか……

「（否、ですね……）」

ならば、どうすれば良いのか……どうすれば、高町なのはに、分かってもらえるのだろうか……今の、己の現状を……

――――……フッ。なら、こうしてみてはいかがかな……

――――

「ッ……？」

と、急に頭にノイズのような何かが起き……しかしそれはすぐに収まって……

「……なるほど、そういう手があるのですか」

途端に、どうすれいいのかが、頭の中に浮かび上がった

「ならば、二対一より、あの状態の方がよさそうですね」

［チャキッ……］［キィィンッ］

「え？」

そういうと、彼女はルシフェリオンを握る力を弱め……あろうことか、デバイスを待機モードにした

「（な、なんで？　もしかして、降参？……じゃ、ないよね）」

何かの罠？　とも考えたが、どうもそんな様子でもなく……リュマはただ、その待機状態のルシフェリオンを見つめていた。だが、なのははこう考えていた……何か仕掛けてくる。と……

「……」

そんなリュマは、待機状態のルシフェリオンを見つめながら、その紫色の宝石を……

「では……行きますよ、クアドリガ」

［キィンッ］

「グゥゥゥッ！！！」［バグンッ！！！］

「え？」

クアドリガの口の中に、放り込んだのであった

「さて、参りましょうか……」

「グオオォォォ

リュマが何かを言うと、クアドリガの身が光り輝き、その後小さな光の球体となって、リュマの中へと入っていった

「ッ！！？（これって……）」

その動作に、なのはは見覚えがあった……ビビとリインフォースが行った、あの力

「（“ユニゾン・イン”……？）」

つまり、あのクアドリガという巨大な怪物は、“ユニゾンデバイス”だったということなのか？　しかし、単騎でのあの戦闘力に、あの形状……融合騎とは到底考えられないモノが、ユニゾンした……なら、ユニゾン後は、いったいどんなことになるのか……？

「ッ……うあああぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁァァァァアアア

その直後、リュマの背中、腕、足……そこから一気にゲル状の物体が体から溢れ出てくるように現れた。さらに、そのゲル状の物体は何かの形へと変貌していく……その様子は、まるで約二年前の冬に見た“闇の書の闇”の再生を彷彿させていた

［バチンッッ！！！！！！］

そして、その躍動が止まり、ゲル状の物体が色を持ち……リュマの姿を、まるで怪物のようにした

それは、まるでリュマがクアドリガを取り込んだ……いや、実際そうなのだが……そんな姿だった。背中からは、まるで翼のように排熱器官が生え、その下には、クアドリガのミサイルポッドが二つ……足には、クアドリガの前足であるキャタピラが……右腕には、クアドリガの頭部にあった円盤状のパーツが盾のように……左腕には、クアドリガの頭部を模ったモノ、どことなく銃口のようなそれを連想するモノ……完全に、リュマとクアドリガが融合を果たしたかのような姿となった

「……ふぅ……ん。驚いておりますか？　高町なのは」

「ふえ？　え、えっと、その……」

なんと、言えばいいのか……？　ユニゾンデバイスの事は、あまりよく知らないが、どう見ても、今のリュマの姿は、明らかに異端としか思えない

「あぁ、これですか……ご心配なく。このような姿となっても、融合事故のようなものは起きておりません。なんらかの力の干渉によって、制御されていますから……そう、今のあなたのように」

「？」

どういうことなのだろうか……“今のあなたのように”、という言葉は……変なことを言うリュマは、融合したその感触を確かめるように、手を握ったり開いたりを繰り返し、自分の姿を確認するかのように、体をくまなく見ていた

「……問題無し。では、再開と行きましょうか、高町なのは」

［ジャギッ］

左腕の怪物の頭部……やはり、銃口のようなそれを、なのはの方へと向け……

［グジョンッ！！！］

「ッ！！！！」

「はあァァァァッ！！！！！」

［バシュゥゥゥッッ！！！！！！］

その大きさからは、到底思えないほどの巨大なミサイル……先ほどなのはに当てたトマホークミサイルと同型のそれが、ありえないところから抜き出て、放たれた

「まだまだッ！！！」

［バシュゥゥゥッッ！！！！！！！］［バシュゥゥゥッッ！！！！！！！］［バシュゥゥゥッッ！！！！！！！］［バシュゥゥゥッッ！！！！！！！］

それも、連発で六発も

「ふえぇーッ！！！？」

［ダシュンッ！！！！］

さすがのなのはも、そのような連発で放たれるとは思わず、即回避行動をとった

「無駄ですよッ！！！」

［［［［［［バンッッ！！！！！！］］］］］］［［［［［［バババババババババババババババババッッッ！！！！！！！！！！！！］］］］］］

「え？」

つい、その光景に素っ頓狂な声を上げてしまった……トマホークミサイルがいきなり破裂し、そこから何発もの魔力弾が放たれた

『プロテクション・パワード』［ヴンッ］

「ズドドド

［［［バシュゥゥゥッッ！！！！！！］］］［［［バシュゥゥゥッッ！！！！！！］］］［［［バシュゥゥゥッッ！！！！！！］］］

手を休めるつもりはないリュマは、そのまま腰の後ろから生えているミサイルポッドからも、同じ形状のトマホークミサイルを六発ずつ……計１８発ものミサイルを放った

［［［［［［バンッッ！！！！！！］］］］］］［［［［［［バババババババババババババババババババッッッ！！！！！！！！！！！！］］］］］］［［［［［［バンッッ！！！！！！］］］］］］［［［［［［バババババババババババババババババババッッッ！！！！！！！！！！！！］］］］］］［［［［［［バンッッ！！！！！！］］］］］］［［［［［［バババババババババババババババババババッッッ！！！！！！！！！！！！］］］］］］

そうして、それら１８発のミサイルは、全て魔力弾。それも、誘導型のシューターへと変わり、その全てが、なのはへと怒涛の勢いで向かっていく

その様子は、まるで爆撃機が放つミサイルのようであり、殲滅を目的とした行為……まさに、“爆撃の神”の如き様相である

「ッ！！！」

［ダシュンッ！！！！］

その怒涛の魔力弾の雨からギリギリで回避を行うなのは……なんとか回避をし続けているが、外れた魔力弾は大きく旋回し、逆にそれが退路を防がんとする

「ッ……“アクセルシューター”ッ！！！！」
［［［［［［［［ウォウォウォウォウォウォンッ……！！］］］］］］］］
「シュートッ！！！」
［［［［［［［［バババババババババシュッ！！！！］］］］］］］］
［ズドドド

なのはへと向けている左腕の銃口、そこから彼女のデバイスである“ルシフェリオン”の先端……それも、レイジング・ハートでの“エクセリオンモード”に該当する“ディザスターヘッド”の状態で……それが肉が裂けるような生々しい音と共に、“生えてきた”

「さて……高町なのはッ！！」

「ッ！！　な、なに？」

「これで決着を付けましょう。お互いの全力全開、それを以て、この戦いを終わらせましょう……あなたが得意とする、収束砲撃で」

［キイイイ

だった

収束砲撃をチャージしている間、なのはに流れているビビの魔力は、全てレイジングハートの先端……集められている魔力の塊の方へと向かっていく。その間、なのはへと行く魔力の量は少ない……つまり、その間はビビのなのはへの干渉が弱まるということ。その間に、なのは自身の事を見つめさせ、気付かせるしかないのだ

「（もっとも、結構博打のようなものですがね……ある意味、勘頼みですし）」

リュマは、そのことを勘で感じていた……なぜか、ビビの干渉が弱まる条件を知っていたのだ……なぜかは分からないが、確証があったわけでもなく……この直感は、間違いないのだと、なぜか思えてたのだ。だから、それを実行した

「（ですが、どうやらその勘は正解のようですし）」

自分ですら感じる……今、ビビのなのはへの干渉は弱まっていると

「（これなら、行けますね）……高町なのはッ！！！」

「？　な、なに？」

自身もチャージしつつ、高町なのはへと声を投げる

「あなた、今の自分を見て、おかしいとは思わないのですか？」

「お、おかしい？　どういうこと？」

「よく見てください、今のあなたの魔力光……それは、本当にあなたの魔力ですか！！！？」

「魔力、光？……ッ！！！？」

その時、彼女はようやく気付いた……今、自分の下に展開している魔法陣と収束している魔力の色を、己が今まで放ってきた、魔力の光を

「なに、これ……ど、どうなってるの……？」

「（どうやら、直感で感じた事は正解のようですね……意外と、直感で物事を決めるというのも、悪くないかもしれませんね……）」

自身の勘が正しかったことに、少し驚いているリュマ。だが、それ以上に驚き、困惑しているなのはは……

「ど、どうして……？　なんで、こんなことになってるの……？」

今、自分の中から溢れ出ている魔力……自分の友達の一人、八神はやてと同じ白……いや、これはその白よりも、もっと白い……この世のものとは思えないほど、まるで異次元への穴のようにも感じる真白の魔力……

「それは、“ビビ・スティン”の魔力です」

「え……ビビちゃん、の？」

「はい……今のあなたの体には、様々な負担があります……僅か幼い年齢にして、大した訓練もせず、ただ才能頼みの魔法を酷使し続け……そして、魔法の中でも負担が大きい魔力収束砲撃……それだけのことで、あなたの肉体はもう限界に近いのです」

自分の基礎だから、知っていること……もはやあの事件の時点で、なのはの肉体はもうとうに限界に近かったのだ。それでも、あの後

も魔法を使用し続けていた……もはや限界なんて、とっくに超えているだろう

「本来なら、今は魔法を碌に扱えない体になっていてもおかしくはないのです。そういった専門の方に、前々から聞かれなかったのですか？」

「ッ……で、でも！！！　今はちゃんと問題なく使っているよ！！！」

「ですから、それがビビ・スティンのせいなのです」

「？　どういうことなの！！？」

あまりにもわからないことだらけで、なのはは声を荒げてその答えを要求してきた。いまだにビビの干渉がないので、リュマはさらに彼女の現状を述べる……彼女にとって、痛烈な一撃を与えかねない、一撃必殺級の言葉を

「彼女によって、あなたの負担はかなり抑えられている……いや、“負担を消しているのですよ。自分に、その負担を移し替えることによって”」

「ッッッ！！！！！！！！！！！！！？？？」

「お分かりいただけましたか？　高町なのは……今のあなたが、魔法を使えば使うほど、その負担はビビ・スティンへとフィードバックしていくのです。その負担で、ビビ・スティンが苦しんでいるのですよッ！！！！」

「――――――――――――」

そのリュマの言葉で、なのはは完全に打ちのめされた……目の焦点が合っていない事が目にわかるほど目が移ろいでいて、レイジングハートを握る手が震えだし、なおかつ収束していく魔力が乱れ……

［キイイイ

［バシィィッ！！！！］
［ッ！！！？］

そして、そこへ今の今までとっておいたバインドでなのはを拘束し、確実に落すための布石とする……リュマは完膚なきまでに、なのはを落とす気なのだ

「集え、荒ぶる明星。爆熱の焔となりて、驟雨の如く降り注げ……ッ！！！！！」

「キイイイ

――――え……？　なのは、ちゃん……？――――

だが、そのビビの抱擁を、なのはは拒絶した……それによって、ビビの魔力によって張られていた強固な壁も、バインドを解こうとしていた力も、一気に消え失せた……それでか、今なのはの下に張られている魔法陣の色が、真白から元の桜色に戻っていた

「（今だ）“ルシフェリオンブレイカー・ザンシェンバースト”……」

［キイイインッッッ！！！！！！！！！！］

「ブレイク……シュウウウウーーーットッッッ！！！！！！！！！！！！！」

［ゴオオオ

オオオオ

＃６７　不屈の星、堕ちる（後書き）

【軽い捕捉】

今回出た、リュマの使い魔（？）であるクアドリガは、“ＧＯＤＥＡＴＥＲ”に出てくる“アラガミ”の“クアドリガ”です。あの説明で全体像が分からない方は、公式サイトを見ると、分かるかと思います

次回も、転生物語を更新予定です。あと二話程は続くと思います。お楽しみに

＃６８　目覚める純白。そして、少年は希望を絶たれる（前書き）

どうも、リィーンです

やっと、やっと書けた……今の今まで、もうパソコンの前にいるだけで、脱力感に苛まれて、一向に筆が進まなかった（おそらく、パソコンブレイクの件が、トラウマ的な感じで残っていて、パソコン恐怖症（↑なにそれ？）に陥っていたのかもしれません……）

とにかく、もうそういった状態で書いたので、出来はいまいちかもしれませんが、どうぞゆっくりご覧ください

鳴神　ソラ様、ムーギネーター様、緋水様、なめ猫様、あんぎゃーす様、真王様、斬空様、けびん様、装甲轟鬼様。ご感想、ありがとうございます！！！

#６８　目覚める純白。そして、少年は希望を絶たれる

――――――そして、とある兄妹（しまい）の妹と不屈の星は、己の過ちと互いを思う気持ちを改める。だが、それを見た少年は失意の底に落ちる……

……あの青空広がる荒野……あの男が座する、鎖の世界。いつもの岩の上……岩石の玉座ともいえる岩場の上に、彼は一人、居座っていた。その隣には、誰もいない……今は、彼一人だった

「……ほほう。よもや、こんな展開になってしまうとは……まぁ、ある程度予想の範囲内だったが……」

自身が、あの星の陰に与えた能力……それは、あの転生者達に与えたものと同格の力を秘めた代物。そんな力と、自身が転生させた者が他者に与えた力。その力の純度は、桁が違うどころの話ではない……だから、あの“余興にも何にもならない無意味な戦い”の結末など、予測可能というモノ

「はぁ。無駄な手間をすることになったな」

しかしなぜ、この男は彼女にそんな力を与えたのだろうか……それは、単純明快。そう、全ては、あの計画の為。

「まぁ、致し方無い。あいつらに関わるなと言われてるし……だが、“あいつら以外との存在と関わってはいけない”とは言われてないしな」

屁理屈な考え。言われてないから、やってもいい。彼はそのような考えで、“闇の欠片達”に力を与えた。今は、星の陰にしかその力は現れていないが……近いうちに、他の彼女たちにも、同じような力が現出する。そのとき、彼女たちは彼の“戦奴”となり、転生した兄妹の兄と、彼を結ぶ鎖となる

「アイツは起源を受け入れ、認めた……だがしかし、それだけではダメだ。それどころか、これでようやく準備が整い、出発……“スタート”を切ったというモノ。あいつには、それよりも更なる上……“遥かな高み”を目指してもらわねばならない」

そのために、必要なプロセスは何か……アイツがもっと上に行くには、どのような事象が必要なのか、どのような言葉が必要なのか……どのような、“希望”と“絶望”が必要なのか……

「……」

考える。彼は思考の海へと己を溺れさせ、不可欠な点を線で結んでゆく……熟考し、記憶を掘り起し、それらをまとめる……

――――――「間違っているッッッ！！！！！！！！！！！！！！！」――――――

「ッ……」

ふと、過去を思い出していくうちに、前回の戦いの事を、思い出した……

彼の友にして反存在……あの蒼き創生者が発した言葉を……己を否定された、あの言葉を

「……ふざけんなよ、ったく……」

どうして、あぁいうことを言ったのか……自分は、そんなにも間違っていたのか……？　あいつらに、自分が掲げる信念とは全く正反対なことへと導いたからか？　それとも……

「（確かに、俺らしくないよな……）」

“者と者、物と物、そして者（もの）と物（モノ）、その間に必ず存在している契り”。それを何よりも尊び、敬い、そして今の自分そのものと言ってもいい理……そうである信念とは真逆の事を、この男は他人に押し付けたのだ

「……何をやってんだろな」

どうしようもないほどの虚脱感を感じながら、彼は、彼がいつも居座る岩の上で寝転ぶ……後ろには背もたれはなく、それどころか岩であるために、体が上体に反った形となった

「……」

そんな苦しい筈の状態でありながら、彼は表情一つ変えず、目を閉じる……瞑想、のつもりなのだろう……そして、ふと体を一気に起こし、そのまま跳ね上がって、地面に着地。その、岩石の玉座から降りた

「はぁ、しょうがねぇ……少し、ぶらつくとするか」

そしてそのまま、その果てなき蒼空の荒野を、一人歩き出した……

……

□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■

■□■□■□

子供みたいにはしゃぐ仁哉と、仁哉ほどではないが、興奮した表情をしている虎太郎の男二人

「……うるさい……」

「はぁ、なんともやかましい方々ですわね……」

「全くです」

そんな二人と一緒に転送してきたグレイとシアリーフとウィアクの三人……そして、その後ろには他の転生者である夢乃とハジメの二人が、あたりをキョロキョロと見渡していた

「すご～い……なんだか、映画の世界に迷い込んだ感じ」

「すたぁ、うおーず？　ですすたぁ？　えいが？　な、なんなんだい？　それ……」

相変わらず、今だにこの状況に順応しきれていないハジメは、仁哉と虎太郎、夢乃の言っている単語の意味が理解出来ておらず、そしてあまりにも前世と何もかもが違う風景に圧倒されていた

「（あぁ……いつまで焦らしているのですかぁ？　お姉さまぁ……そう恥ずかしがることもないのにぃ？）」

「――――」

全員の一番後ろにある物体……怪しく動く死体袋から放たれる悍ましい気配で、寒気を覚えるグレイは、早くこの場から離れようと思い、隣に立つシアリーフとシェアクに命じる

「お前ら、こいつらを次元漂流者保護課に案内しろ。お……私は、リュマを拾っていく。あとは任せた」

「了解致しましたわ、ご主人様」

「個人的には、あの天音とかいう奴を解放したくはないのですけれど……」

ウィアクが露骨に嫌そうな目で、天音が容れられている袋を睨む…
……無理もない。彼女たちにとって、天音という存在は、主人を脅かす存在として認識しているのだから

［ヴゥゥンッ……パシュンッ！！］

そしてその後ろから、鎮静剤を打たれたからか、ふら付きながらも立っているビビと、それを支えるヴィエーガ、そしてその後ろには、フリュイとクェーサの二人が、付き添うように同時に転送されてきた

「よう、主。ったく、このクソメスがぁ、メンドウな事しか起こさねぇし」
「だよなぁ。ったく、なんでこんなやつがマスターの妹なんだよ」

一緒に出てきたフリュイとクェーサの二人は、同じような悪態をつきつつ、ビビをここまで運んできた……いや、実際にはヴィエーガが支えているだけで、この二人はただ後を追ってきただけだが……

「ハァ……ハァ、ハァ……ハァ……」

そうして、支えられてここまで来たビビはというと、呼吸が乱れており、心ここに非ずといった表情でいた……そんな時だった

「ハァ、ハァ……なのは、ちゃん……なのはちゃん！！」
［バッ！！］
「ッ？」

突如、何かを感じたかのように、その場から走り出していった

「あ！！　おいコラっ！！！　どこに行くんだッ！！！」
「放っておけ、クェーサ……ヴィエーガ、クェーサを連れて戻れ。フリュイ、行くぞ」
「お、おう」

そういうと、先ほどビビが走って行った方向へと、同じ方向を向き、歩いて行った

「……おい、竜虎」
「なんだい？　バカヤ」
「だからバカヤ言うなッ！！！　って、そんなことはいいんだよ」

少し声を荒げて、いつもの如くツッコミをしてしまったが、すぐに話題を切り替えた

「さっきアイツ、“なのはちゃん”って言ってなかったか？」
「あぁ」
「つまり、あいつが向かった先に……」
「……行くか」
「モチモチのロンロンッ！！！！」
「［ダッ！！！］」

そしてその後を、仁哉と虎太郎のコンビが追っていった

「あ！！？　ちょっと、お待ちなさいッ！！！　そこの馬鹿阿保コンビッ！！！！」
「略して“バホコン”ね、クスクスッ」

シアリーフの静止の声を聴くことなく、二人は走って行った。そんな二人を、ウィアクは嫌味満載の笑みで嗤っていた

□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■

リュマとなのはが模擬選を行っていたトレーニングルーム。その壁と床には、激闘の跡が生々しく残っており、ボロボロになってしまっている……

［ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴッ……］

［……スタッ］

「ふぅ……やっと、終わりましたね……」

未だ爆炎と硝煙が舞うトレーニングルームの中、その床に倒れているなのはの近くに、リュマは下り立った。そして、なのはを見下ろす……もはや虫の息で、呼吸が荒く、全身から少しではあるが血が流れ出している……暫くは、安静にしておかねばならぬほどの重傷だった

「（やり過ぎてしまいましたか……いえ、主からはとことんやれと言われておりますし、これぐらいがちょうどいいでしょう。それ

に、本来なら瀕死の重傷を負うらしいので、まぁそれに比べれば、軽いものですね）」

なのはを様子を見つつ、そのように言うリュマ……その様子から、相手を労わるといった様子は全くなく、まるで弾圧されている人を見下し、それに喜悦する人間のような表情を浮かべる……

［……ウィーン］「？」

「ッッッ！！！！！！！？？？　なのはちゃんッッ！！！！！！！」

［ダッダッダッダッダッダッダッ！！！！］

突如、このトレーニングルームに誰かが入ってきて、一目散に高町なのはの所へと向かっていった……“ビビ・スティン”だった。彼女は、入ってきてすぐになのはの場所へと走り出した。煙で周りは何も見えない筈なのに、まるで磁石のように、彼女の所へと……

……

「なのはちゃんッ！！！！」

「ッ……ビビ、ちゃん……？」

「大丈夫！！？　凄い怪我……ッ、今治してあげるから！！！」

そう言いながら、ビビはなのはに向けて手をかざし、回復の魔法をかけようとする……が

［きゅっ］「？　なのはちゃん？」

「ビビ、ちゃん……いいよ」

「え……？」

「いいよ……もう、無理しなくても……」

「ッ！！？」

その行為を、なのははビビの服の裾を掴み、優しく……どこまでも優しく、拒絶した

「……リュマちゃんから、聞いたよ……ビビちゃんが、今まで私の代わりに、傷付いていたって事……」

「っ……」

なぜ、リュマがそのようなことを知っていたのか。ということを気にすることなく、気に掛けることもなく……ビビは、なのはが言った、“私の代わりに傷ついた”ということだけに、反応した

「……ごめん、なさい」

「え？」

そして、なぜか謝ったのだ。ビビは、謝らなければならないと思って、今にも泣きだしそうな目で、倒れているなのはを抱えながら、謝ったのだ

「ごめんね……なのはちゃん、そういうのが嫌なの、知っていたのに、私……」

前世でも……原作を見ていて、知っていたはずの事……他人が傷つくこと嫌い、そのためなら自分が傷ついてもいいという、自己犠牲の精神……それを無視してビビは、ただ自分の欲の為に、彼女を……“高町なのはを犯し続けていた”

「ごめん……ごめんね……ごめん、なさい……」

「ツゥ……」

「ッ……ビビ、ちゃん……」

愛したいと願う少女の意志を、思いをふみじった事への罪悪感。それらがビビの心を支配していく……嗚咽が混じる口から、ただ懺悔の言葉が紡がれ、瞳からは涙が零れだし、頬をつたい、抱えているなのはの顔に落ちた……

「……」

［スッ］

「ッ！？　なのは、ちゃん……？」

そんなビビの頬に、なのはは優しく手を伸ばして、涙を拭いた。まるで、女神（てんし）のよおうな、微笑みと共に

「泣かないで、ビビちゃん……」

「なのはちゃん……」

「ビビちゃんの気持ち、痛いほど、わかっちゃったから……」

「あ……」

今、ビビとなのはの間には、深い、どこまでも深いパスが繋がっている。そのパスから、なのははビビの心の深奥に秘められている想いを、感じたのだ。そう、ビビの心は、なのは、そしてはやてやフェイト、シグナム、ヴィータ、シャマル、リインフォース、アリサ、すずか……この九人に対して、完全に開放されている状態なのである

だから……なのはは、今のビビの気持ちを、心の奥底まで、理解したのだった

「……ありがとう、ビビちゃん。私の事を、守ってくれてて」

「ッ……なのはちゃん……」

言葉など、不要。ビビとなのはの関係は、言葉通り、心で通じ合う仲なのだ。だから……

「「……ん」」

［チュッ］

ビビにとっては、謝罪の意味がこもった……なのはにとっては、感謝の意志を込めた……そのキスで、二人の会話は終わった

「っ……立てる？」

「ちょっと、無理、かも……」

「じゃぁ、医務室まで送ってあげる」

「……うん、お願い、ビビちゃん」

「うん、任せて♪」

ビビはなのはの体を、俗に言う“お姫様だっこ”の体制で抱えて、その場から歩き出した

「うぅ、は、恥ずかしいよ、これ……」

「いいの。意外とこれの方が、運びやすいの」

でも、下心は少しぐらいあった。だが、それすらも、なのはには筒抜けである

「ウソツキだね、ビビちゃんは」

「あはは♪」

今の今まで、気が狂っていたはずの少女は、別人のように、笑っていた

しかしその後、ビビはそのトレーニングルームの被害に対して、大量の始末書を書く羽目になったとか……それはまた、別の話である

その頃、リュマのいる方は……

「……タッ、タッ、タッ」
「？……！！？　ご主人様！！？」
「……」

少しずつ晴れていく煙の中から、リュマの場所へと正確に向かっていき、そしてリュマの近くへと、長身の黒い長髪の女性……グレイが現れた。その隣では、フリュイが付き添うように立っていた

「……やったのか」
「はい。高町なのはに、己の身体の悲惨な現状、そして、それを酷使していたということ……ビビ・スティンによって、その体が守られていたということ……全て、思い知らせました」
「そうか……ご苦労だったな」
「ッ……ありがたきお言葉」

忠義を貫く臣下のように、己の主の前で、膝をついて頭を下げるリュマ……その姿は、まさに騎士そのもの。グレイの守護騎士としての役目を果たしたことに、そして労いの言葉をかけて貰えたことに、いつもの冷静な口調から、歓喜に打ち震えているかのような感情が感じられた

「お疲れさん、リュマ。怪我してんなら、あとでアタイの部屋に来いよ」

「えぇ、そうさせていただきます」

同じ守護騎士であるフリュイも、リュマに対して言葉をかけてやり、治療が必要なら来いといった

「……リュマ」

「はい。なんでしょうか、ご主人様」

「あとで、“その姿”について話してもらうぞ」

「はい、かしこまりました」

今のリュマの姿……あの“クアドリガ”と融合しているその姿について、その場で言及することなく、グレイはその場から立ち去りだした。その後に続くように、リュマとフリュイも続く……

「……ん？」

「……」「――――」

ふと、出口のところで固まっている二人……特に一人は、魂と心が抜かれたかのように、絶望的な表情を浮かべ、立ち尽くしていた

「……フリュイ、こいつらをシアリーフの所に連れて行け。こんな場所にいられたら、問題になりかねん」

「えぇ～！！？　おい主ぃ、ここ最近アタイをこき使う率高くねぇか！！？」

「リュマ、怪我の治療は後回しに、フッケバインに戻ったら、それの話をしてもらうぞ」

「了解です、ご主人様……フリュイ、主のご命令は絶対ですよ」

「ぐぅ……わぁったよ」

そういうと、二人に自分のデバイス……オリジナルのシャマルのデバイス、“クラール・ヴィント”と同型のデバイス、“”から伸びる魔力糸で、二人を縛り、そのまま引きずって行った

それを見送ったグレイとリュマは、フッケバインへと、戻って行った

□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■

時間を、少し遡って……

［［ダッダッダッダッダッ！！！］］

「おい！！　あの扉を入って行ったぞ！！！」

「あっこか！！！　あっこに、俺の女神様がッ！！！！」

あの後、ビビがなのはの名を呼んで走って行ったとき、“なのは”という言葉に反応し、その後を追いかけだした仁哉と虎太郎が、なのはとリュマが模擬選を行っていたトレーニングルームの前に到着した

［ダッ！！！！］

「着いた！！！（さぁ、どこにいるんだ？　なのはちゃんは！！！？）」

そういって、キョロキョロとあたりを見渡す……しかし、モクモクと爆煙が立ち込めていて、肉眼で探しても見つけられないでいた

「（クソ、見えねぇなぁ……早く晴れろよ！！！）」

イライラしながら、その煙が晴れるのを待っている仁哉。虎太郎も、なのはの姿を見たさに、そわそわしながら、トレーニングルームの中をのぞいていた

［スゥ……ッ］

「「おぉ……」」

だんだんと晴れていく爆煙。そして、そのトレーニングルームの中のすべてが、見渡せるようになって、なのはの姿が見えてきた

「お！！！（見っけた！！！　あれが、生なのはちゃ）」

――――――［チュッ］――――――

「「ッッッッッッ！！！

目の前で起きている、理解不能な事……それを見ていた仁哉は、先ほどまでの感情の高ぶりを忘れて……ただ、二人の口づけを、見ていた……

「……」

虎太郎も、仁哉ほどのショックは受けてないが、女同士がキスし合っている姿を見て、唖然としていた

そして、ビビがなのはをお姫様だっこして、自分たちがいる出入り口とは別の出入り口に向かって歩いていった。その時、二人の笑い合っている表情が、見えていた

「――――」

そうして、仁哉のなのはに対する片思いは、無残にも、壊れ果ててしまった

その後、フリュイに縛られてつれされられたが、そのことに気づく事もなく、ただずっと……

「（……嘘だ……嘘だ……嘘、だ……）」

心の中で、二人のキスしている姿を、否定し続けていた

#６８　目覚める純白。そして、少年は希望を絶たれる（後書き）

次回も、転生物語を更新予定です。内容は、Ａ、ｓエピローグのような、彼らのその後的な感じなので、そんなに期間は空くとは思いません。おそらく、土日くらいには投稿できると思いますので、お楽しみに

#６９　あれから、彼らは……（前書き）

どうも、リィーンです

久方ぶりの早い更新。こういったものはほんと早くに書けてしまう。なぜ？

内容的には、Ａ、ｓエピローグを意識しています。なので、会話文よりも文章が長い、といった感じです

緋水様、ムーギネーター様、鳴神　ソラ様、なめ猫様、真王様、斬空様、あんぎゃーす様、さちこ様、けびん様。ご感想、ありがとうございます！！！

#69　あれから、彼らは……

――――そして、とある兄妹（しまい）と五人の転生者達、そして彼らと関わる人達は、あれから……

……時は、２０１０年。あの転生者の兄妹（しまい）が、この世界に転生してから、四年という年月が過ぎた時……

各々、それぞれの日々を過ごしながら、その時を迎えることとなった

――――高町なのは

彼女は原作の通り、己の体の事を知ったが故に、あの事件の後は、しばらく安静に過ごしていた。そして、完全に体の調子が戻ると、その後は以前までの無理をすることなく、その実力を高め……戦技教導官としての道を、歩んでいた

――――フェイト・Ｔ・ハラオウン

彼女もまた、原作同様、時空管理局執務官として、管理局員として生きていた。原作と違う点と言えば、なのはが撃墜されるということがなくなった為、二度落ちたはずの試験を、一発で合格できた。という点だけだろう

――――八神はやて

上記の二人と同様、原作と同じく、特別捜査官として、管理局に従事している。守護騎士達と共に、今はミッドチルダにあるクラナガンに移り住む準備をしている。今はまだ、海鳴市に住んでおり、ビビとも未だ同棲中である

――――アリサ・バニングス

魔法という存在と出会い、力を得た彼女は、魔導士としての日々を過ごしている。今は、１３２１航空隊に所属しており、武装魔導士としての実力を身に着けつつ、様々な世界の空を駆け巡っている…

……因みに、目標はなのは打倒で、戦績は１２勝３７敗２５引き分けらしい……

――――月村すずか

彼女もまた、アリサと同じく、魔導という力に目覚め、管理局の一員としての生活の中で生きている。そんなすずかは、なんと査察官としての才能を開花させ、今は“ヴェロッサ・アコース”の指導を受けながら、その才能を成長させている

――――シグナム、ヴィータ、シャマル、リインフォース

彼女たち、守護騎士達は、原作と変わらず、はやてと共に行動している。リインフォースも、はやてたちと共に行動することが多いが、ユニゾン出来ることもあってか、ビビと一緒にいることの方が多い……また、ヴィータは１３２１航空隊に所属しており、アリサとよく一緒に任務に当たることが多く、なのは打倒という同じ志を持つもの同士気が合い、抜群のコンビネーションを見せていたりとか……

――――クロノ・ハラオウン

原作同様、彼は“時空管理局提督”兼、“艦船アースラ艦長”。身長も伸び、声変わりをして男らしくなった。しかし、グレイの身長に未だ越えられないことに、少し憤りを感じているとか（超えるとか、無理がある）……また、そのグレイから貰った広範囲殲滅魔法“ラグナレク・ビッグ・バン”を使用するためのデバイス、“ギャラルホルン”を未だに所持し続けている

――――――ユーノ・スクライア

管理局本局にあるデータベース、“無限書庫”の司書として、本局に勤めている。また、学者としても実績を積み重ねつつ、日々を過ごしている

「スクライア司書長、γ－５７エリアの整理、終わりました」
「ご苦労様です。では、α－９７エリアのデータから、この情報を抜き出してきてください。今日中に必要なデータなので、最優先でお願いします」
「分かりました」

司書としての仕事ぶりが板に着いてきて、それもかなり優秀な働きを見せるため、局内ではわりと有名になっている……本人は、そんなことは気にしていないが……彼は、司書としての仕事に、やりがいを感じつつ、暮らしている

「……ふぅ」
「お、お疲れ様です、ユーノ、さん……」
「あぁ、“朔望”君。どうしたんですか？」
「あ、あの～……“収集”がかけられましたので、すぐに」
「……分かりました。すぐに向かうと、“あの人”に連絡しておいてください」
「は、はい……」

……そう、“原作通りに”……

――――ハジメ・クレバヤシ

彼はあの後、そのまま本局の嘱託魔導士として、本局に在籍した。
そして二年の歳月を経て、正式の局員として、新たな日々を歩み始める

「本日付で、第１０８陸士隊に配属になりました、ハジメ・クレバヤシ三等陸士です。これからよろしくお願い致します、“ゲンヤ・ナカジマ”陸上三佐殿」
「あぁ、よろしく頼むぞ……お前の活躍は、常々噂で聞いてる。

だが、それでもしっかり働いてもらうぞ」
「はいッ！！！」

後に、あの“ギンガ・ナカジマ”が配属されるあの部隊……そこに、彼は配属となった。彼の力は空戦寄りだが、地上で戦いたいという彼のエゴから、陸士として武装隊に所属している……そんな中で、生きていた

「にしても、お前さんみたいな、ＡＡＡランクの魔導士が、こんな部隊に所属とはねぇ……」
「？　何か、問題でもありましたか？」
「あいや。お上にしては、ずいぶんと気の利いた事だと思ってな」
「は、はぁ……そうなんですか」

原作の内容すらも知らず、ある意味世間知らずだからか、ゲンヤのこの言葉に理解できてないハジメであった。だが、そうだからか、彼は今の人生を真面目に生きていた

「とにかく、頑張りますので、よろしくお願いします」
「おう。仕事熱心な奴は好きだぜ」

そうして、ハジメは新たな世界での暮らしに、順応していった……
……

――――――出雲天音

「……っと、ふぅ。今日はこんなモンかなぁ」
「お疲れ、天音さん」
「あ、お疲れ様です、“ミラ”さん」

彼女は今、“自然保護隊”の一人として、管理局に所属していた……だが、実際はいろいろな部隊を飛び回っている“嘱託魔導士”のままであり、今は人員が足りないという理由で、この隊に所属されていた

「（はぁ、いつになったら、愛しのグレイお姉さまと同じ部隊に配属されるのかしら……！！！）」

彼女が未だに嘱託で、正式に配属されていない理由は一つ……グレイの姿を探して、様々な部隊を渡り歩いているからだ

「（人事部の連中に聞いても、黙秘の一辺倒……はぁ、いったい今、どこにおられるのですか……お姉さまぁ～）」

聞いても答えてくれないのなら、自力で探すのみ！！！　という理由で、彼女は様々な世界に点在する部隊を、虱潰しに回っているのだ。無論、そんなことが認められているはずがない。故に、能力とかを使って特別措置を認めさせ、そのような蛮行を可能としていた

「待っていてください、グレイお姉さま……この出雲天音、必ずお姉さまを見つけ出してみせますッ！！！！　それまで、この逆る性欲を耐えてみせますッッ！！！！！！」
「あ、天音さん……？」

変態の道を究めつつある、天音だった……

――――寿夢乃

彼女もまた、管理局に所属していた。自分が授かったこの力を、誰かの役に立てたいという思いで、あの日から直ぐに、管理局員としての道を目指していた

「“魔神剣・双牙”ッ！！！」
［ザザンッ！！！！！］
「ぐあぁッ！！？」
［バッ！！！！！］
「そこまで！！！　勝者、寿夢乃」
「「「「「おおおぉッ！！？」」」」」

そんな彼女は、上手な戦い方もこの世界の事も、何も知らない。だから、一からそういったことを学ぶため、陸士訓練校に入校。現在、訓練生の中でダントツのトップを走っている

「ふぅ」
「やったね、ユメノ」
「さすが総合一位。相方の私も、鼻が高いってもんだよ♪」
「もう～、なにそれ～」

相部屋の人とも仲良くやっており、この生活にもなれて……この第二の人生を、楽しく過ごしていた

「っていうかぁ、ユメノのあの“マジンケン”、だっけ？　どうや

ってあんな衝撃波飛ばしてるの？」
「っていうか、カッコいいよねアレ……“マジンケン”ッ！！！　なんつって♪」
「だ、だからそれは秘密だって！！！　っていうか、そう言われると恥ずかしいから止めて～っ！！！」

――――竜ヶ崎虎太郎

彼もまた、管理局員として働きだしていた。最初はフェイト目的だった彼であったが、ビビとフェイト、そしてはやてを含む彼女達との関係を知ってしまったがために、諦めてしまったのだ……が、それでも彼は、仁哉みたくショックを受けることなく、今の新しい日々……夢見たファンタジーな世界での生活を、満喫していた……

「グっ……はぁ、今日も疲れたなぁ……」
「お疲れ、虎太郎くん」
「あ、“ティーダ先輩”」

そんな、失恋に似たショックから立ち直れた原因は、彼にあった……“ティーダ・ランスター”。ＳｔｒｉｋｅｒＳでのメインキャラである、“ティアナ・ランスター”の兄。彼との出会いによって、虎太郎の精神は保たれていた

「先輩こそ、お疲れ様です」
「いやいや……今回は、本当に君に助けられたよ。ありがとう」

「いいえ、僕はただ、任務をこなしただけですよ」
「あっははは。そうだ、今度またうちに来ないか？　“ティア”の奴、君にすっかりなついたらしくてねぇ」
「そ、そうなんですか……？」

彼を通じて、今は幼いティアナと親しくなっていた。別に下心があって近づいたわけではないが、何かの運命のイタズラなのか、彼はＳｔｒｉｋｅｒＳ本編が始まるより先に、彼女と出会い、こうして何度も会う機会があった

「（まさか、フラグでも立てたのかなぁ？　いや、そんな覚えは全くないし……でも）」

そんな虎太郎は、ある使命感を感じて、ティアナと関わってきた……そう、あのビビの蛮行を、防ぐために……

「（あの女、なのはちゃんだけでなく、俺の嫁のフェイト……あまつさえ、はやてにシグナムにリインフォース、そんでアリサやすずかにも手をだしたんだ。なら、ティアナやスバルにも手を出す可能性は少なくない。いや、大だ！！！）」

だからか、これ以上あの女なんかに原作のキャラ達を穢させないために、彼はその守護者となると誓ったのだった

「（バカヤがまだあんなままだし、僕がしっかりしないと）」

未だに、失恋のショックから立ち直れていない友人の事を思いながら、彼はその使命を全うしてゆく

「で、くるかい？」

「あ、はい。お邪魔します」
「分かった。じゃぁ、そう伝えておくよ」
そうして、彼も彼なりの日常を、過ごしていく……

――――――上谷仁哉
あの日……管理局本局に行って、なのはとビビのキスを目撃してから、彼からあのハイテンションが失われていた
「……はぁ」
そんな彼は、ミッドチルダの首都クラナガン郊外にあるボロアパート（と言っても、その見た目は彼が知る一般的なアパート並みのモノだが）で暮らしていた
「何やってんだろな、俺……」
転生という非常識にあこがれ、それをしたという喜びもつかの間、転生した時の一番の楽しみであったアニメキャラとの絡み合い、そして恋愛というものを、彼は真っ先に失った。それなら、転生した意味ねぇじゃんと思い、彼は管理局に入らず、このクラナガンの郊外で、フリーターのような生活を送っていた
「……」

特に何もするようなこともなく、したいこともなく、ただ惰性に、
その生活の中にいた……今は、その無駄にある能力を持て余して
いるだけだった

「……はぁ」

転生してから、溜息しかしていないように感じるほど、数えきれな
い回数の溜息を吐いた後、壁に掛けられている時計を見て、そろそ
ろバイトの時間だと考え、ソファの上から体を起こして、立ち上が
る。そして、バイトに行くとき用の外出着に着替え、部屋から出て
行った

「……」

ふと、未来都市を連想するクラナガンの都心部を眺めるその眼には、
かつての熱血的な輝きは、消え失せていた

――――ビビ・スティン

そして、この世界に転生してきた兄妹（しまい）の妹であるビビは……今、
本局のある一室にいた

「……ん？」

「あ、こちらに居られましたか、“提督”」

そこに現れた女性……管理局の局員の制服を纏った人から、“提督”と呼ばれた。そう、ビビは、そのたゆまぬ努力と持ち前のチート級の力を利用して、わずか１６歳という年齢で、“提督”という地位にまで上り詰めていたのであった

「どうかしたの？」

「はい。例の、この部隊設立案に関しての件で、予算が出たので、その報告を」

「ん、ありがと。データはこっちのデバイスに転送しておいて、もう下がっていいよ」

「はい！　失礼致します！」

そう言って、その女性はその部屋から退出していった。因みにこの部屋は、ビビ専用の部屋で、相応のシステムが施されている、提督の特別な事務室である

「ふぅ……よし。これだけの予算があれば、“機動六課”設立の時に、かなり有利になりそうだね」

そんな彼女が所属しているのは、“航空武装隊”。その一個師団の師団長であり、数十万の軍勢を統率する立場となっていたのである。だが、戦場では自ら前線に立ち、戦いながらも指揮を出す姿は、“戦女神”とも称させていた。しかし、その戦闘の残忍さやスタイルから、“魔女”とも称され……いつしか、“魔天のビビ”などと呼ばれるようになり、管理局の反抗勢力や、局内からでも、そう恐れられている存在となった

「あとは……陸の動きかなぁ。空に関しては、ある程度権限を掌握できたけど、陸に関してはまだ根を張ってないし、コレが一番の

悩みどころかも……」

提督という立場もあって、管理局内におけるビビの発言力は絶大なものがある。が、それはこの本局のみであって、地上本部ではその力は強くはない

「空と陸のミゾが、こんなにも深いとは思いもしなかったし。おかげで、地上での動きは、結構厳しいかも（・ω・；）　あぁ、あのレジアスとか脳みそ共、どうやって対処しよっかなぁ……」

地上本部の長であり、自分よりも地位が高いレジアス・ゲイズ中将と、管理局最高評議会、この二つが、六課の大きな壁となりえる。ゆえにそれを対処するために、ビビは今、色々と策を練っていた

「まぁ、実際はみんなが対処するけど、せめて、その度合いぐらいは、軽くしてあげたいし」

そのために、今の今まで頑張ってきたのである。彼女たちの為に、今のこの地位まで一気に上り詰めたといえよう

「それに……私の願いも、これで難なく叶うというもの」

自分とはやて、そしてなのはやフェイト、アリサ、すずか、シグナム、ヴィータ、シャマル、リインフォース……彼女たちと一緒にいられる時を増やすため……自分達だけの特殊独立少数部隊、“真白き戦乙女（ヴァイス・ヴァルキュリア）”の設立の為……

「今はまだ、みんながやりたい事に全力を向けているから、まだ設立出来ないけど……でも、いつか必ず、成し遂げてみせる」

だから……それまでは、地位の更なる向上と、地上への根回し……そして、ＳｔＳでの敵、“ジェイル・スカリエッティ”に関する調査をし続けていく。それが、今のビビの目標となっていた

「……そう言えば……」

ふと、あることを思い出した

「お兄ちゃん、今どこにいるんだろう……？」

この地位になっても、消息が掴められない自分の兄（あね）、グレイ・スティンの事を、思い始めた……

――――――グレイ・スティン、マテリアルズ

「……ここか」

その頃、グレイ・スティンとその守護騎士たち……あのマテリアルズは、ある世界にいた。彼（かのじょ）は、公式では“嘱託魔導士”として、管理局に籍を置いている

［タッ、タッ、タッ］

「ん？　なんだ貴様は。ここは関係者以外、立ち入り禁止だぞ」

「……ここ、第８７トルバ研究所か？」

「あぁ、そうだが」
「そう……」
［ズシュッ！！！］
「――――ガハッッッ！！！！！！！！！？？？」
「ありがとう」
［ドササッ……］

“表面上”では、だが……

「……行くぞ、お前ら」
「「「はい、ご主人様」」」
「「了解、マスター」」
「「「あぁ、主よ」」」」

グレイとその守護騎士……あのマテリアル達。彼達（かのじょ）は、管理局の“暗部”として……抵抗勢力や、内部の反乱分子。そして管理局の上層部にとって、不必要とされた存在、その悉くを殲滅するための部隊として、動いていたのであった

「……任務は、ここの研究所の関係者、全員の抹殺。誰も生かすな、女子供だろうが関係なく……殺せ」
「フッフッフッフッ。塵芥共の掃討か……管理局の上層部も、なかなか酷なことを命ずるな」
「ハッハッハッ！！！　なんだか燃えてくるぜ！！！　おいヴィエーガ！！　どっちが多く殺すか、勝負だ！！！」
「……」［コクッ］
「あ♪　ガーナもやるヤる殺る～♪」
「アタイも参加すっぜ。久しぶりに、体動かしてぇしな」
「あら、なら私も負けられないわね、クスクス。ねぇ、シェアク」
「え？　あ、う……うん……ま、負けられない、よね……

…」

「全く、野蛮な連中ですわね……まぁ、任務とあらば、致し方ありませんわね」

「同感です。では、参りましょう、ご主人様」

なぜ、そのような部隊として動いているのか……それは、彼女たち守護騎士達と、彼達（かのじょ）の移動拠点、“次元航行艦フッケバイン”が理由なのである

即戦力クラスの戦力を持つマテリアル達。彼女たちの戸籍や、彼女たちをグレイの傍にいさせる為や、その他もろもろの手続き、それを問題なく行うために……そして、フッケバインを所持し使っていくための許可を認めさせるために……グレイは、上層部からこの仕事を請け負うことを条件にしたのである

「……」

そして今回、上層部からの任務として、この研究所の破壊を命じられ、それを実行に移していた。今現在、彼はここの警備の人間を殺し、中へと入っていく

［［［［［［［［［ダッッッ！！！！！！！！！］］］］］］］］］

それと同時に、彼（かのじょ）の周りにいた守護騎士たちは、その場から散開していき、目に映った人間という人間、その全てを……殺していく

「……」

もはや、グレイにとってそんな光景は見慣れたもので、別に気にかけることなく、研究所の奥へと向かう……邪魔となる人間を、殺

しながら……

「……ふん」

［ザンッ！！！！］

守護騎士達も、グレイも、ただ無表情に……ある者は、愉悦すら感じるほど……人を、殺していく……それが、今の彼ら(かのじょ)の日常。グレイ達が過ごす、日々だった……

「……まぁ、悪くはないか」

皆が皆、それぞれの人生を歩んでいた……

新たな物語へと、向かうために……

今、その舞台の一つは終わり……

物語は、次なる段階（ネクステンファーゼ）へと、進んでいく……

“魔法少女リリカルなのは　～とある兄妹の転生物語～”　第二章、完

#６９　あれから、彼らは……（後書き）

次回も、転生物語を更新予定です。内容が、ＩＳの介入物語。そしてまた新しく作るまど☆マギの小説、その全てに繋がる話の予定です。お楽しみに

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6381l/

魔法少女リリカルなのは　～とある兄妹の転生物語～

2011年9月24日10時24分発行